
勇者以上魔王以上

コロコロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者以上魔王以上

【Nコード】

N7837C

【作者名】

ココココ

【あらすじ】

ある所に勇者と魔王がいました。二人はそれぞれの仲間と共に戦っていました。しかし、何故かいきなり異世界に飛ばされました。そこで一人の青年に出会いました。そして何だかんだゴチャゴチャになって結局この世界で定住する羽目に……。このお話は、勇者と魔王が自分達以上に強すぎるラーメン好きな青年に振り回されるお話です。「そうりゃあああああ！」「ほ、ホントに振り回さないでくださああああああい！！！！」……………因みに振り回されているのは勇者です。【只今、第一の話から少し本文を修正して

いつているところですよ。時間がある時にしかしませんので、どうか
【お許しを】

第一の話 大騒動スタート前（前書き）

新しい小説書いちゃいました

第一の話 大騒動スタート前

「どうした？その程度か。」
「クツ…！」

辺りが闇に支配されている城。その城の玉座の間で、勇者一行と魔王とが、世界の存亡を賭けて戦っていた。

ある世界。科学が全く発達しておらず、代わりに魔法が栄えている世界に、全てを破壊する事ができ、魔族を従え、全てを支配しようとしている『魔王』がいた。魔王の力は測り知れず、その世界に住む人間達はどうすることも出来ず、只滅び行くのを待っているようなものだった。

そんな中、四人の若者達が立ち上がる。

一人はあらゆる魔法を知り尽くした『魔道士』。

一人は力のみにより、重い一撃を与える『戦士』。

一人は小柄ながらも仲間達をサポートする『妖精』。

そして一人はあらゆる困難に立ち向かい、闇を切り裂く剣を持つ『勇者』。

彼らは若いながらも、ここまで来るのに数多くの受難を乗り越え、巨大な魔物さえも打ち倒す程の実力を持った。そして今、魔王とその側近達と最後の決戦を挑んでいる。

だがやはり魔王の魔力は計り知れない程強く、今まさに疲労困憊の状態の勇者達。かろうじて側近でもある双子の悪魔は倒れたが、今の勇者達の体力と魔力はほとんど無いに等しい。身に着けている鎧や服はキズだらけである。それに比べて、魔王の体は傷一つ入っておらず、今魔法を放たれたら勇者達は全滅してしまうだろう。

「くそ！…このままだと…。」

女性の戦士が手に持った大きな戦斧を杖の代わりにしてかろうじて立っていた。破壊力抜群な斧も、今では単なる棒切れに等しい。

「あきらめて…たまるか！」

目の前にいる敵を睨みつけつつ、白い法衣を纏った男性の魔道士も手に持った杖を魔王に突き出すように構える。

「まだ…やるといふのか？」

魔王は嘲笑を浮かべた。

「貴様がいる限り、ボク達は絶対に負けるわけにはいかない！！」

中性的な顔立ちをした勇者が、光を放つ剣を魔王に向ける。体中傷だらけだが、その瞳からは揺るぎ無い決意が秘められている。

「よかろう…ならば！その勇氣に免じて楽に死なせてくれる！！」

「！いけない！」

すると突然、勇者の鎧の間から光が漏れ、やがて小さな光が飛び出してきた。そして光は勇者達と魔王の中間地点に浮かんだ。

『次元よ、歪めー!!』

光から声が響き、辺りに反響した。すると光が強くなっていき、魔王どころか、勇者達までも巻き込んだ。

「くっ！これは…時空魔法!？」

「ま、眩しい！」

「くう…！制御…できない！」

やがて光は広い玉座の間を包み込んでいった…。

時は平成…。

「よーモンチッチ。」

「いきなり何て呼び方しやがるこのスカポントン。」

洗濯日和というくらい快晴な天気の中、二人の青年がそれぞれ肩にショルダーバッグを担ぎながら歩いていた。一人は白いタンクトップの上に黒のパーカーを羽織り、少し薄い色彩のGパンを履いている。そして特徴的なのは整っていない少し長めの黒い髪と首に掛か

ったグレーのヘッドフォン。全体的にだらしなく着込んでいる。そしてもう一人はグレーのポロシャツを着、そしてそれよりも濃い同色のズボンを履いている。髪は茶色で、瞳も茶色。服装、髪型、両方において黒髪の青年より整っている。

黒髪の青年の名は荒木 龍二。茶髪の青年は楠田 雅。

二人とも18歳で同じ高校生3年である。龍二の目つきはどことなくのんびりした感じで、対する雅はクールガイのごとく鋭い目つき。

「やーれやれ、にしても休み明けってキツツイよな。」

龍二が空を見上げながらダルそうに言う。

「しゃーねえって。俺だってサボりたいのは山々なんだが、いろいろ厳しいだろ？教師がよ。」

雅もダルそうだが、龍二ほどではない。どっちかというとな龍二は面倒くさがり屋で、雅は几帳面。この二人、れっきとした親友同士なのだが、何でそうなったのかは後に明らかになる。

「あゝあ、ラーメン食いてえ。」

「いきなりだなオイ。」

そしてツツコミは雅の役目。冷静タイプのツツコミはキレがあると高校では評判らしい。本人にとってはどうでもいいことらしいが。

「あ、ところでさあ、昨日発売された『週刊ラーメン命』読んだか？」

「おお読んだ読んだ。特に注目すべきなのは渋谷の104近くに最

近オープンした店だろ？行ってみてえよなあ。」

まあ二人の会話を聞いていればわかるが、この二人は大のラーメン好きなのである。もちろん学食もしょっちゅうラーメンである。つまりラーメンが二人の友情を紡いでいるということ。

「でさ、俺としてはその「やつほー！ー！」……。」
「……。」

龍一と雅はため息を吐いた。二人の後ろから大きな声がしたかと思つと、急に地を蹴る音がした。

「リュウちゃああああん！！」

「あらよ。」

「あうっ！」

後ろから襲い掛かってきた（？）誰かが飛びつく前に咄嗟にしゃがんだ。勢いが強すぎたため、その人物は顔から地面にダイブした。

「でさあ、俺としては……。」

そして地面に倒れ伏す人物を踏みつけて歩き出す龍一。「むぎゃー！！」という声を上げる足元の人間。

「いきなり踏まないでください！」

「いきなり飛び掛ってこないでくださいコンチクショー。」

「最後のは余計だろ。」

踏みつけられた人物は齊藤 香苗^{かなえ}。白のカッターシャツにチェックのスカート。特徴的なのは流れるような長い黒髪。パツチリとした

な龍二！！」

「奇襲攻撃たあい度胸じゃんよ。このまま砕くぞ？」

「だあああああああ！！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！もうしません！もうしませんから踏みにじるのだけは勘弁してくださいああああい！！！」

「許す。」

そう言つて足をどける龍二。つーよりあれは奇襲攻撃と言えるのだろうか？因みに踏んづけていた人物の名前は立花・久美・アンドリユー。アメリカ人と日本人のハーフだから金髪らしい。でも瞳は父親譲りの黒。

「いたたたた：キミねえ、あたしは女なんだからもうちょっと加減してくれ。」

「加減したらテメエら調子乗るだが。第一今の世の中男女平等だ。しかもお前を女と認識した覚えはない。」

「そこで使つか男女平等。」

ツッコむ雅。

「ってさりげなくものすごく傷つくこと言つなあああ！！！」

叫ぶ久美。

「うちの従弟なんてな、居候してる女の子に面白半分でパイ投げつ
けんだぞ。」

「「「ひど。」」」

「まあな。」

「認めんな。」

こんなやり取りがほとんど毎日行われている。そしたらいつの間にか高校へ到着しちゃっているという展開。

「リュウちゃん」

いきなり香苗が龍二の右腕に自分の腕を絡めてきた。

「んだよ暑苦しい。」

「腕組も」

「会話になつとらんぞ。」

ツッコむ雅。

「あ、あたしだつて負けん！」

「何にだよ。」

そう言つてガツシと龍二の左腕に久美がしがみついた（雅のツッコミはスルー）。

「暑いつつってんだろが。」

「気にするな。いつものことだろ？」

「それもそうか。」

「納得するんかい。」

ツッコむ雅パートツー。

龍二達が通っている『天和湾屋高校（てんやわんや高校）』は名前はもちろんだが辺りが自然で溢れかえっていることと私服で登校可能なことで有名。その割に偏差値は高くなく、自然がお目当てな人や他の高校に行けなかった人等がほとんどで、学生も多い。しかし

不良などはほとんどおらず、毎日が平和なのである。が、一つ大きな問題が…。

「あ、香苗さんと久美さんだ!」

「あ、あ、あの野郎、荒木の奴。」

「また二人と腕組んでやがる…ちくしょうが!」

「ムカつく…ぶっ潰してえ…。」

と、まあこんな感じ。香苗と久美は高校の中ではかなり美人な部類に入っており、高校美女ランキングでも栄光のベスト10に入っており、久美が一位で、香苗が二位。しかも香苗の天真爛漫+穏やかな性格と、久美の明るく活発な性格かつ運動神経抜群であるため、男女問わず人気がある。そのため、校内では二人のファンクラブや親衛隊とやらが存在しており、とんでもないことにこの学校の6割がそれらに所属している。そんな二人が何故龍二らと行動を共にしているかというと、時は高校に入りたての頃まで遡る…。

~~~~~

香苗の場合。

それは香苗が高校に行く途中の事。

『ちよ、何なんですかあなた達!』

『いいじゃんか、俺らと付き合えよ。』

『仲良くしようぜえ〜?きひひひ。』

『いや!放して!』

何かよくいる不良に絡まれている香苗。そこに…。



『はあっ!!!』

久美は今でも所属している空手部の部員と一緒に道場で試合をしていた。対戦相手の男部員を打ちのめした久美は、一息入れる。

『あ!』

一人の部員が入り口の方を指差して声を上げる。久美が入り口の方を見ると、そこには見慣れない男子が二人がいた。

『やだ、楠田くんよ。かつこいい〜。』

『あのクールな外見がいいのよね。』

『隣にいる人誰?』

『楠田くんの友達じゃない? ちょっとかつこいいよね。』

『でも楠田くんの方がかつこいいよ。』

まあ二人の女性部員の話でわかると思うけど、もう一人の方は龍二だ。龍二もそれなりにまあまあいい外見をしていて、中学時代はそれなりにモテていたが、雅と並ぶと平凡さが目立つ。本人にとってはどーでもいいらしいが。

『何の話してるのかな?』

『入り口から動かないみたいだけど…。』

確かに二人揃って入り口から動かないでいる。訝しげに思った久美は、二人に歩み寄る。

『何してるんだ?』

『あ、スマンな。こいつが腹ごなしにここで運動したいってもんで

来たんだが、どこも空いてるとこなくて探してたんだ。』

説明したのは雅である。当の本人（龍二）は今にも眠りそうだった。立ったまま。

『……………』

心中（何か最近部員しかしてないからいい暇つぶしになるかも…。）

心の中はさりげなく黒い久美。

『じゃああたしと一戦交えるか？』

『え？アンタとコイツが？やめとけて。』

その時の久美は雅が龍二の安否を気遣つてのセリフだと思っていた。

（コイツ相手が誰であろうと徹底的にやっちまうからなあ…。）

しかし雅は久美の安否を心配していたのだった。

結果一戦交えた龍二と久美。

久美、惨敗。



もう一瞬で終わった。すごい速さで終わった。もう説明したくない  
つてくらいの早さで終わった。

『く、くそ！』

大の字になりつつも悔しそうに呻く久美。

『ああいい運動になったあ。』

逆に清々しい雰囲気満点な龍二。

『も、もう一戦だ！まだ負けたわけでは…。』

呻きつつも起き上がろうと努力する久美。

『やめとけて。どの道もう無理だろそんなんで。』

そしてそれを制す龍二。

『な、なにを…。』

『まあ、まだやりたいってんならいつでも来いよ。また相手してや  
る。』

『…本当だな？』

『本気と書いてホンキだ。』

『まんまじゃん。』

雅のツッコミはこの時も冴えていた。

それからというものの、龍二は毎日のように久美に勝負を挑まれ、あしらつかのように勝っていった。それが数ヶ月に渡る今でも続いているため、高校では名物となった。そして戦っているうちに久美にも恋心というのが芽生えた。らしい。

~~~~~

てな感じでこの四人の登下校の風景は学校中でも有名なんだそう。そりゃ高校一美人な二人と、他の女子にモテモテな雅、久美より強いということでも有名な龍二がいれば嫌でも目立つ。

「あの、私の回想だけなんか久美ちゃん比べたら短い気がするんですけど…。」

「作者の気分だそうだ。」

「ガーン！！」

口で表現するのがクセな香苗。

「つーか作者ってなんだ？そして口で表現せんでもいい。」

ご丁寧に二人にツッコミを入れるのを忘れない雅。

「ふっ、あたしの方が回想が長かった分有利だな…。」

「何か言ったか？」

「い、いや何も？」

小声で言った為、久美の言った事がわからなかった龍二。

しかし、香苗はちゃっかり聞いてたり。

「うー！久美ちゃん、勝負！！」

「ええ！？な、何故に！？」

「問答無用っつー！！」

騒ぎ出した二人をポイしてさっさと歩き出す龍二と雅。

余談だけど、龍二は過去に何回か告白を受けたらしいが、その全てを断った。とゆうーより意味を理解できなかった。例えば

『私と付き合ってください！』

と言われたら

『何に？』

と返す。確信犯的な感じがしないでもないが、本人には悪気は一切ないのは確かである。そして中学からのあだ名が『世界の男の敵』
『女の仇』と、大変物騒なあだ名が付いていたという。まあ早い話が龍二は超が付くくらい鈍感朴念仁なのだ。
ついでに雅は何百回という告白を受けたらしい。まあ龍二より鈍感では無かったので、断り方もやんわりとした感じだったため、憎まれる事も無かったそう。

まあ何が言いたいのかというと…今の現状。

「？何だ？」

そう、只今龍二と雅は数人の男達に囲まれているのだった。しかも堂々と廊下のと真ん中で。しいて言えば龍二と雅の前後を挟んだ形となっている。

「何だじゃねえんだよこのクソが。」

リーダー格っぽい人間が龍二と雅の前に進み出た。そのいきなりの暴言にさすがの龍二と雅もキレた。

「俺は (トイレでするアレ) じゃねえぞ?」

「鵜呑みにすな。」

訂正、キレてないっすよ(長州小力)。

「どっちでもいいんだよんな事。それより、テメエ調子乗ってんじやねえの?」

「何が?」

「とぼけんな。毎朝毎朝俺らの香苗さんと久美さんとイチヤつきながら登校しやがって。俺らのあてつけかコラ?」

雅はこの時理解した。こいつらは二人のファンクラブの会員達と親衛隊の隊員達であり、それぞれが団結して龍二を始末しようという腹だろう。ただ、今いるのは全員一年ばかり。おそらく上級生すなわちファンクラブの先輩連中に使いつぱしりにされているのだろう。上の奴らは全員龍二の恐ろしさを知ってるし。

龍二は当然の如く理解できていない。

「そんだけ?」

「!?!」

龍二の一言で全員キレた。

「なんだと!?!」

「だってさ、俺別にイチャついてるわけじゃねえし。ダチだから一緒に来てるだけであって、別に恨み買うような事してねえんだけど。つーかあてつけてそれアンタらが勝手にそう解釈したただけだろ? 八丈迷惑な誤解だなオイ。てゆうかあてつけて何だ?」

次から次へと周りの連中に毒を浴びせる龍二。別にキレてるわけじゃないのは確かだが、無意識のうちに相手を怒らせるというのは龍二の悪い癖でもある。

だがそれが逆にこいつの良い所だと雅は思っている。

「テ…テメエツ!!!」

リーダーみたいな奴龍二の胸倉を掴み上げた。身長で言えば相手の方が大きい。龍二も174と高校生では普通の身長ではあるが、それを遙かに上回るほどの巨漢であり、見た感じでは龍二が圧倒的に不利である。

「あんさあ、服伸びるからやめてくんね? アイロンがけ大変なんだぞ?」

「コノ野郎、ふざけやがって…覚悟できてんだろうな!?!」

リーダーみたいな奴(もうメンディから以下リーダー)が怒りの形相で拳を振り上げる。

危機的状況にも関わらず、口の端を吊り上げて僅かに笑う龍二。

「…放せつてのがわからんのか？このゲス野郎。」

ゆっくりと胸倉を掴んだ手を右手で握る龍二。

「ああ？【ゴギリ！】！？ぎゃああああ！！！」

いきなり絶叫を上げたかと思うと、リーダーは手を放した。見ると掴んだ腕がプラインとたれ下がってる。

そしてギロリ、とリーダーとその他を睨む龍二。

「服…伸ばしてみるか？」

「どんな脅しだよ。」

この後、廊下にはファンクラブ会員と親衛隊隊員の屍（死んでません by 雅）が辺りに散らばることになる。

夕方

「つてな事があつたわけよ。」

いきなり放課後。授業風景とかつて書くの苦手だから、作者。

「それ言っちゃダメじゃん。」

作者にまでツッコミいれる雅。

「うー！ファンクラブの人達、リュウちゃんにそんな事までしてたなんてえ！」

「くそ！あたしがその場にいれば龍二を危ない目に合わせずに済んだのに！」

「俺は？」

二人にとって雅はどうでもいらしい。場所は学校帰りの定番ともいえる川原道（定番？）。かの有名な3年B組の先生が主役のドラマでよく出てた川原みたいな感じ。四人はそこを通って帰路についている。

「つーかよ、んな話を今するか？」

「そうよ、朝の出来事なんだから学校にいる時に話せれたじゃない

の。」

「……。」

「龍二？」

「あそつか。」

「」「忘れとつたんかい。」「」

トリプルツッコミ発・動！

「まあにしても大変だな、お前ら。あんな奴らに付き纏われて大変だろ？」

雅が微笑を浮かべつつ言う。

「うん、毎日あの人達が隠れて私の写真撮るから毎日まいっちゃうの。」

「あたしなんか最近道着のにおい嗅いでるところ目撃しちゃったし。」

「ストーカーな上に変質者じゃねえか。警察行け警察。」

作者も同感である。

「道着なんて嗅いだってくせえだけじゃねえか。」

わかってない奴一名。

「あ、でも私リュウちゃんになら撮られてもオツケーかな」

「あ、あたしだったら自分の道着を、その・・・。」

ニツコリと笑う香苗と恥ずかしそうに言う久美。大抵の男ならこれらでイチコロ、というくらいの威力だが、龍二と雅はまったく反応を示さない。雅は彼女らのこういう仕草には慣れているし、龍二は龍二でそーゆーのは単なる表現としてしか捉えてないから照れることなんて一切無い。

「ってお前ら危ない橋渡るつもりか。」

遅れツッコミの雅。因みにこのツッコミ法は作者が考えた。

彼らは、まだ出会わない。

第一の話 大騒動スタート前（後書き）

まあはじめましてってやつだな。俺は荒木 龍二。どこにでもいそ
うな名前かもしれないねえけどよろしく。さて、今回新しく掲載された
この小説だが、作者の奴、二つ小説載せてるくせに両方終わらして
ねえんだよな。要領悪いっつーかなんとゆーか。
ま、こんな作者だが、生暖かい目で見守っといってくれ。
あ、おっちゃんお冷ちょうだい。

（*現在地 行き着けのラーメン屋）

第二の話 そろそろ騒動が始まる・・・。(前書き)

作者、すでに入試前^{おい}。

第二の話 そろそろ騒動が始まる……

「ふいゝ食った食った。」

夜の十時。辺りはすっかり真つ暗になってしまった。こんな夜中になるまでラーメン食ってた龍二は寄り道せずにさつさと我が家へと帰る事にした。

因みに食べ始めたのが夕方の六時。超大盛りどんぶりに入ったラーメンを三十分以内に食べた人は無料というサービスにかつてでた龍二は、余裕しゃくしゃくで完食。時間たったの五分。もちろん大盛りラーメンは無料になったが、その店のラーメンを500杯と、衝撃的な食欲をその店の人間全員に知らしめた。

当然、奢ることになっていた雅の財布はスツカラカン。本人は何か滝のごとく涙を流していたそう。ゴチ。

で、その後皆別々の帰り道なため、今は龍二一人。誰もいなくなつた夜のグラウンドの周辺を歩いている。

「さて、帰って枝豆食いながらドラマ見るか……」

【チカッ】

つておりよ?」

ふと一瞬何か光り、龍二は足を止めた。

「…何だ今の?」

光った場所に目を凝らし、暗闇に目を向ける。

「…あ、また光った。」

今度は確実に捕捉した。

「……花火かね?季節的に外れじゃね?」

呑気に憶測を建てる龍二。

しかしふと、嫌な予感がよぎる。

(あ、まさか…火事か?)

「ここは…一体…。」

魔王城での光で目が眩んだ後、気絶した勇者は目を覚ますと立ち上がって辺りを見回した。辺りは真っ暗だが、少し遠い所から明かりがポツポツ見える。おかげで足元もそう暗くなく、混乱も少なかつ

た。

(ここは外？さっきまで城の中にいたはず…まさかあの時の時空魔法で？……………!?)

「ステイル！リリアン！ファイファイ！」

一緒にいたはずの仲間達を探す。しかし返事はなく、暗闇と静寂が辺りを包んだまま。

「皆…どこに…。」

「残念ながら貴様の仲間はこちらにはいない。」

「!?!」

背後からの声に勢い良く振り返る勇者。そこには辺りの闇に溶け込むかのような漆黒の鎧とマントを羽織った人物がいた。この人物を、勇者は知っている。そいつは、決して許してはならない者…。

「魔王…。」

「まさか貴様が我と一緒にとはな…。」

魔法はククツと笑った。ただ、黒いフードを深く被り、顔は見えない。

「ふむ…どうやら私の従者達もいないようだな。」

「…じゃあ今ここで決着をつけようか。」

勇者は足元に落ちていた光の剣を拾い上げ、構えた。すると淡く発光し、辺りを照らした。

「それが貴様の力か…先ほどの戦いで力を消耗したようだな。」
「チツ！」

思った以上に力が出ず、忌々しげに舌打ちをする勇者。対する魔王は、右手を高く掲げると、その掌の先から紅蓮の炎が生まれた。

「さあ…勇者よ。」

死ぬがよい！！」

【グオツ！】

魔王の手から燃え盛る火炎弾が放たれ、勇者はとつさに横へと転がった。火炎弾は勇者の後方へと飛んでいき、爆発した。その場が勢い良く燃え上がる。それから次から次へと火炎弾が発射され、それをからくもかわしていく勇者。

「なるほど、まだ避けられる体力はあつたか…だが！」

魔王は両手を合わせ、少しずつ広げていった。するとその手の中からゆっくりと火炎弾が大きくなっていく。

「これはどうだ！！」

魔王の叫びと共に、巨大な火炎弾は勇者目掛けて飛んでいく。それを咄嗟に避けようとする勇者。

「!?!?くう…!」

しかし、先程の戦いで負傷した足が痛み、思わずよろけた。

【ゴオオツ!】

「ああああっ!」

完全に避けきれず、右腕の上腕に火炎弾が掠り、煙を上げる。火炎弾は大きな爆発を起こし、燃え上がった。

「フツ、どうやらここまでのようだな。」

魔王が嘲笑を浮かべる。勇者は膝を着きながら傷ついた右腕を押さえ、苦しそうに呻く。魔王はゆっくりと手を勇者に向ける。

「終わりだ…勇者!」

手から火炎弾が膨らんでいくかのように現れる。

(クツ…皆…ゴメン。)

勇者は心の中でここにはいない仲間達に謝罪し、目を閉じた…。

【バツシャン!!】

「な…っ!?!」

「……?え?」

魔王の驚愕の声で目を開けると、そこには全身ずぶ濡れになった魔王が水を滴らせながら硬直していた。何故か足元には水色のバケツが転がっている。

「い、一体「くおるらあああ!!!!!!」!!!!?」

ふと勇者の背後から雄叫びが聞こえ、振り返ると、炎の逆光で暗くて分からないが誰かが突進してきた。そして…

「火で…」

地を蹴って飛び上がり…

「遊ぶなああああ!!!!!!」

風を切るような音を出し…

「うふうっ!？」

誰かが勇者の頭上を通り越したかと思うと、魔王が苦しそうな声を上げた。見ると、魔王の腹に足がめり込んでいる…。

言わずもがな、飛び蹴りを放ったのは荒木 龍二本人である。

「ぐはぁ!！」

蹴りの衝撃に耐え切れなかった魔王はそのまま吹っ飛ぶ。そして龍二はその場に華麗に着地。魔王は少しスライディングして止まった。

「うふう……。」

しかし立ち上がれない。そりゃ先程の蹴りは“めり込む”というより“突き刺さって”いたような感じであったから当然と言えば当然かもしれない。

そんな魔王に龍二は魔王の近くまでズンズンと歩み寄り、魔王の胸倉を掴んで引っ張り起こす。

「テンメエ、こんな所で火遊びしやがって。もし火事になったらどうすんだ、あぁ!？」

「き、貴様何を…。」

「何が貴様だコラ！つーか初対面に向かってその言い方は何だ！ピ
ンタかますぞこの【ピーーーーーー】野郎が…！」

「！？ひ、ひいいいい！！？？」

自分の事は棚に上げといて怒鳴り散らす龍二。ついでに最後の言葉
はあえて伏せておきます。精神衛生上のため。

だって魔王、半泣きだし…魔王なのに。

「…………。」

そしてそれを見て絶句する勇者。最初に魔王を蹴り飛ばした事もさ
ることながら、あの世界中の生き物全てが恐れる魔王をあそこまで
怯えさせるとは…いや、もうハッキリ言ってアンタ人間？とツツコ
ミたい所な勇者。

「す、すみませんすみませんすみません！もう火撃つのはやめます
から許してえ…！」

遂に魔王が可愛らしい声で平謝りした。

「よし、わかりやいいんだわかりや。つたく、小っちゃい女の子が
こんな夜中に火遊びなんてするから…。」

「う、うるちやい…！あ、噛んだ。」

「バアカ。」

「うえええええん…！」

…………。

泣き止むとキョトンとした風に聞く魔王(?)。

「いやいやいやいやいよ!だ、だってさっきまで、ホラ、あれあれあれあれ!」

「あれって何だ?」

「あ…この体のこと?」

魔王?が自分の体を指差すとコクコクと頷く勇者…赤べこみたい。

「えと、これが元の私の姿。今までののは雰囲気作りの為の幻影。」

ここに雅がいたら『雰囲気作りかよ。』とツッコミをいれていたであろう。

「……………」

言葉もでない勇者。

「ふあ〜〜……………」

何かわかんない展開になって欠伸をする龍二。

「…ま、とにかくこの火消すかな。」

一人そう呟いて、「よっこらせ。」っと言いながら龍二は立ち上が

った。

「おら、お前らも立って火い消すの手伝え。」

「へ？私も？」

「当たり前だ張本人。引つ叩くぞコラ。」

「……………消させていただきます。」

睨まれてしまい、大人しく従う魔王（？）。いまだに呆然としている勇者のもとへと歩き出す龍二。

「ホラ、おめえさんも手伝え。」

「へ？ボ、ボクも？」

「当然。つてなわけでさっさと立て“少年”。」

しかしこの言葉にカチンとくる勇者。

「だ、誰が少年だ！ボクは女だ！！」

「……………」

「…へ？」

魔王？が変な声を上げた。

「え…あなた…女？」

一応再確認。

「そうだって…あ。」

『しまった！』みたいな感じで口に手を当てる勇者。

(まずい…ずっと隠してきたのに…。)

と思っても後の祭り。

だが……

「ああ、はいはい。お前が女だったのはわかったからさっさと立て。」

心の底からどーでもいいらしい龍一。

「へ？いや、あの「立て。」は、はいい！…！」

睨まれてビビりながらも立ち上がる勇者。お前ホンマに勇者か？と思う。

後、火の明かりでわかった事だが、勇者の服装は銀色の鎧に焦げた青いマントを羽織っている。髪の毛は翡翠色の整ったショートヘア。顔立ちは活発な少年のような感じ。傍から見たら美少年。でも中身は実は女の子っつーわけで美少女。見た目15才。そんな事がわかってても何の欲情もしない思春期真っ只中のはずの龍一。言っておくけどホモではない。どーでもいいけど。

その後、勇者と魔王を手伝わせながら消火を行う龍一。近所からの通報で警察の人達が来たけど、龍一がとりあえず警官達の鳩尾殴っ

て無かった事に……（注：犯罪です）。

「よし終わった。」

「は、はあ……。」「」

消火を終え、手をパンパンとはたく龍二。そして龍二の足元に意識のない変わった服装（警官の服のこと。勇者達の世界に警察はない）を着た人間が二人転がっているのを畏怖の眼差しで見つめる勇者と魔王。

「ところ、で。」

グルウリと振り返る龍二。二人は縮こまる。

「お前らこんな所で何してた？」

「「う……………」。」「」

いきなりの質問に口ごもる二人。

「つーか何で火遊びしてたんだ？何でマントボロボロなんだ？何で鎧着てんだ？何でブカブカなんだ？何で刃物（剣）持ってんだ？何で血い出てるんだ？何で髪の毛緑色なんだ？染めたのか？どこから来たんだ？何で空は青いんだ？何で世の中の若者は明日に向かって羽ばたこうとしないんだ？何で作者は納豆が嫌いなんだ？」

怒涛の質問に追い詰められていく感覚に見舞われる二人。しかし後半は意味が全く理解できない。因みに今宵は曇りである。そして作者は納豆が嫌いである(マジ)。

「え、えつと…(ど、どうしよう。魔王と決闘していたなんて言ったら何言われるかわからない…何かこの人魔王より強いしなあ…)」

すでに勇者は勇者らしからぬ事を考えている。ヘタレ。

「そ、その…(まずいって、この人冗談抜きで恐いって。勇者を殺そうとしました。なんて言った日には何されるかわかんないし…それに…何だろう、この気持ち…)/ / / / /」

対する魔王も魔王としての尊厳さえも失われる可能性大な事を考えていた。つーか姿的にもう威厳なんてないし。そして何かいらんことまで考えてるし。顔若干赤いし。

『つて、何やってんのよアルスう!!』

「!!???」

「?」

突然聞こえた声に驚く二人。龍二は首を傾げただけ。突然、勇者の鎧の胸当てと胸との隙間から何か白く光る物が飛び出してきた。

「ファイ、ファイファイ!？」
「あ、ハエ。」

【パアン!!!】
「えみゆ!？」

「……。」
「……。」
「……?」

「ニャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!」
「猫?」

飛び出してきた勇者の相棒でもある妖精は、ハエと勘違いした龍二に叩き落とされて一生を終えた。

めでたしめでたし。

「め……めでたくない……（怒）。」

かなりのご立腹な状態で地面にヒラヒラと落ちていったはずの妖精が龍二の眼前まで浮かんできた。

服装は妖精つてな感じで緑色の何かやたら露出度高い服、胸だけ隠した布とボロ切れを加工したかのようなミニスカート。顔立ちは魔王？より若干幼い感じで、腰まである長い髪は綺麗な銀。パツチリとした瞳は右ピンクと左水色のオッドアイ。そして小さな耳は微妙にとんがっている。そしてご丁寧に虫のような透明感のある四枚の羽が背中に付いている。それがピョピョピョ動いていて見た者を癒す。

でも今はめっちゃくちちゃキレているので癒すどころの騒ぎじゃない。

「アンタァ……よくも〜……。」

「……………」

「もぉー！ー我慢できない！殺す！ー！」

殺す発言すると赤く輝く妖精。

「ち、ちよつとフィフィ落ち着いて……！！」
勇者が止めに入ろうとするが…

「はいキンチョール発射。」

【プッシュー】

「はごー！！」

龍二による殺虫剤攻撃喰らってフラフラと落ちていった妖精であった。

く完く

「だ……だから、死んで、ないって、ば……グフウ。」

くちゅぱ続く〜

第二の話 そろそろ騒動が始まる・・・。(後書き)

赤べこ 会津若松の郷土玩具。赤く塗った張り子の首振り牛。赤牛。
(広辞苑参照)

第三の話 騒動起しじりぞじり・・・ (前書き)

受験前です

第三の話 騒動起りりそう・・・。

「勇者と魔王だあ？」

とりあえず龍二の家。龍二の家はごく普通の一軒家で変わっているといえはソーラー電池を利用したEcoなハウス。基本一人暮らし。何故基本なのかはおいおい話すとする。

無駄話はこのくらいにして（オイ）。とりあえず龍二はこんな所でなんだし、とりあえず家に来て話を聞こうと言い出し、魔王？と勇者も仕方なく龍二の家にお邪魔することになった。

当然、彼女らの世界には龍二の家みたいなのは無いから全てが珍しい為、とても落ち着かない。因みに魔王はここに来て（それまで鎧ガチャガチャ鳴らしながら歩いてきた）そっこう鎧を脱いで今じゃチンチクリンな女の子になってしまっている。勇者も鎧を脱ぎ、身軽な服装となっている。とりあえず自分達の事は話した。

「アホか。んなRPGみたいな職業、今の世の中ないっちゅーねん。」

当然と言ったら当然な反応だが、何故か関西弁。しかも職業って割り切っちゃってるし。

「RPG？何ですかソレ？」

「大体、魔王と勇者は職業じゃないよ。」

勇者と魔王？に言われて渋い顔をする龍二。

「てゆうより、アンタ私達の言ってる事信じてないでしょ!」

妖精、再び登場。今度は勇者の髪の毛の中から出てきた。

「今はそんな気分じゃない。」

意味がわからん。

「うぬう〜!こうなったら力づくで信じてもらおうしか「キンチョ〜ル」
ないと思ったけど人ってそれぞれだからしょうがないよね
!」

龍二の懐から取り出された殺虫剤の恐ろしさを知った妖精は慌てて訂正した。

「まあこんなチミっこいのいるしな。嫌々信じてやろう。」

「え、嫌々?」

「チミっこいの言っなー!」

また妖精が出てくる。

「まあチビは置いていて。」

「まだ言っつか!??そして置いてくのか!??」

この妖精はツッコミ気質らしい。

「ではでは、これからどうするか皆で話し合いますよ〜」

「何故に楽しそうに言っ?」

勇者のツッコミ。

「さくんせうい」

「アンタもかい!?!」

魔王は案外ボケ専門らしい。

「さて率直に聞きます。」

龍二は一泊置いた。

「これからどうする?」

「いやだからそれ決めるってさっきから言ってるんですけど?」

勇者の冷ややかなツツコミが炸裂する。

「...じゃお前は どうしたい?」

龍二が勇者に問いかける。

「そりゃ、ボクらははぐれてしまった仲間達を探したいし...。」

「でもここがどこなのかしっかり把握できてないしね。」

マイナスな思考にもっていかせる魔王。さすがに魔王名乗ってない。

「...じゃどうすんのよ?」

妖精がテーブルの端に腰掛けながら言う。

「それを考えるのがテメエらの仕事だ。」

「え、皆で話し合っくんじゃ」

「文句あんの？」

「な、無いです無いです…。」

龍二のすごみに押し負けた勇者。哀れなり。

「あ、私今考えた。」

魔王が手を挙げる。

「何だ？言うてみ。」

「お腹すいた。」

「おい。」

「よし、メシ作ってやるから待ってる。」

「「いいんかい!?!」」

勇者と妖精によるハモリツッコミ。

「おお、そつだ。」

龍二がキッチンに向かう途中振り返って言う。

「お前ら名前なんだ？」

普通最初に聞けよと思う。

「あ、ボクはアリス・フィート。でも今はアルスと名乗っているの
でそう呼んでください。」

「私はフィレイド・フィアラ。フィフィって呼んで。」

「クルル・バステイでえす　クルルでいいよ。」
(え、名前可愛い!?)

勇者と妖精、もといアルスとフィフィは心の中で魔王の以外な名前に驚いた。

「わかった。えっとお前がクルルでお前がフィフィで…アルスだっけ?」

「いやですからアルスだって。」

「お、そうかわりいわりい。気をつけるぜアルス。」

「また間違えてるし!?!」

哀れ勇者。

「じゃこつちが名乗ったんだからそつちも名乗りなさいよ。」

フィフィが挑戦的な口調で言う。

「ん?俺?荒木　龍二。」

「アラキ…リュウジ?ふ〜ん、変な名前」さて殺るか。「じゃなくて素晴らしい名前ですね!?!」

慌てて言い直すフィフィ。冷や汗かきまくり。

「まあこの家で堅苦しくなる必要なんざねえさ。ゆっくり休め。それとアルス。」

「だからアルスですって…何ですか?」

「お前腕と頭ケガしてるだろ?」

「へ?...あ、はい。」

この家に来る途中、魔力を完全に消費してしまったので簡単ながら応急処置を自らの手で施したアルスは、若干気恥ずかしそうに返事をした。

「ちよつと貸せ。」

「は？わ！」

何言ってるのか理解する前にボロ布を包帯代わりに巻いた腕を取る龍一。そして近くにあった救急箱を手繰り寄せる。

「さて、と。」

箱を開けて中から消毒液と包帯とガーゼを取り出す。そしておもむろに腕に巻かれた布をほどいていった。火傷によってひどく爛れてしまっている。

「え、な、何を…」

「決まってるだろ？包帯の取替え。」

戸惑うアルスに対し、さも当たり前のように言う龍一。

「な！？こ、こんな傷なんて自然に治る…」

「ジツとつせえや。」

「…はい。」

ドスの利いた声で言われて仕方なく包帯交換を待つアルス。

「あんなあ、こついう傷はほつといたら後々めんどくさくなるんだから早いとこ治療しといた方が得なんだよ。わかるか？」

「……はい。」

包帯を巻きつつ説明する龍二に、気まずそうに頷くアルス。

その表情からは、自らの醜くなった腕を見られているという抵抗感が見られるが、当の本人、龍二はそんなのまったく気にしていない、もとい興味が無いかのようにさっさと巻いていく。

「はい次頭。」

そして腕が終わると今度は頭に包帯を巻き始める龍二。

「しかしまあ…。」

「？」

ふと、包帯を巻きながらも、アルスのツヤのある髪をソッと撫でる龍二。

そして…

「随分と綺麗な緑の髪だな。」

平然とこんな事を言いました。

「！！！？！？」

一瞬にして顔を赤くするアルス。

「?どしたあ?」

何も気にしている素振りすら見せない龍二。

「い、いやいやいやいや別に何もももも!?!」

落ち着いてるように見せようとしているのがバレバレだ。

「そうか。」

気付けよ。

「よし終わった。」

そうこうしてるうちに包帯を巻き終えた龍二は、軽くポンと包帯を叩いた。

「じゃメシにするな。」

「は、はあ……。」

アルスはキッチンに向かう龍二の背中をボクッと見つめていた。

「……。」

そしてそんなアルスをニヤニヤと見つめるフィィ。

「……むう……。」

何故か複雑な表情のクルル。

「
」

キッチンに立って鼻歌を歌いながら調理する龍二。

傍から見たら『お前ら何があつたん?』と聞きたくなる状況。

「アルス?」

しばらくの沈黙を破ったフィフィがアルスの耳元まで飛んできた。それに気付いて慌てるアルス。

「な、何?」

因みに顔から熱はまだ下がらない。

「顔真つ赤」

「へ?」

フィフィに言われてしばらく呆けていたが、やがてサッと顔を覆った。

「え、いや、あの、その……あうう。」

フィフィに背を向け、膝に顔を埋めてしまったアルス。

「ぶう……。」

そんな様子を見て頬を膨らませるクルル。この顔を見た男性はおそらく一発KOだろう。ある意味。

「ほれ出来たぞ。」

「「早い!？」」

フィフィとクルルによるハモリツッコミ。まだアルスは赤面中でうずくまっております。

「ありよ?アリスどしたあ?」

「ちよ〜つとね〜」

ニヤケ顔を必死に堪えながらフィフィが言う。

「?おい、どしたよ?」

「……。」

龍二が声を掛けても反応がない。

「ふむ……。」

顎に手を添えて考える龍二。

そしておもむろに……。

【ムギユッ】

「いぎゃあああああああああ！……？……？」

耳を引つ張りあげました

「覚醒覚醒」

「そんなんで覚醒させないでください……い（泣）……！」

「無理。」

「即答！？って力入れんなあああああみぎゃあああああ（泣）
！……！」

しばらくアルスの耳で遊んだ後、龍二特製山菜チャーハンを腹いっぱい食べた一行。

「ふ〜、満足……。」「

居間でコロンと横になるクルル。

「コロコロ。風邪引くぞそんなところで寝てたら。」「

皿を洗いつつ注意する龍二。

「わ、スッゴ〜イ！こんなところから水が出てくるんだ〜！」

蛇口から出てくる水を見て龍二の周りを飛びながらはしゃぐフィフイ。

「……………」

そして耳をまだ赤くしながら半分寝かけのアルス。

「？何だアリス眠いんか。」

「だからアルスですって……あう。」

頭がカックンとなつて慌てて元に戻す。

「……………」

龍二が顎に手を添えて考え込む。

(まさがまた耳引き！？)

先ほどの情景を思い出すクルルとフィフィ。

しかし予想とは裏腹に龍二は和室へと向かう。

「予備の布団あつたっけな？」

ブツブツ呟きながらガサゴソと襖の中を漁る。

「お、あつたあつた。」

敷布団から掛け布団、毛布、枕、それらを三つずつ和室に並べる。そして居間に顔を出す。

「布団敷いたから眠い奴は寝ろよ。」
「へ!？」

素っ頓狂な声を上げるアルス。

「布団?何ソレ?」
「寝るってことはベッドみたいなモン?」

対するクルルとフィフィは布団という単語に興味深々。

「ね、寝るって、泊まってけということですか!？」
「足りめえだ。それ以外に何がある。」

さも当然、という風に答える龍二。

「いや、だって!仮にも男の人の家に泊まるなんてこと・・・!!」
「今までだって一応男で通してきたじゃないの。つっても通しきれなかったけど。」

フィフィは泊まる気満々だ。

「…で、でもあなたの親が何て言うか…!」
「…お前、うちの親が世間でなんて言われてつか知ってつか?」
「?」「?」「?」

「『世紀のバカカップル』って呼ばれてんだぞ？うちの親。羽伸ばしてくるーつつつてしばらく帰ってきてねえんだ。今頃海外でイチヤついでるだろうさ。」

はい、これが龍二のある意味一人暮らしの意味。因みに生活費は両親がきつちり送ってくれてる+龍二の貯金が結構溜まってから問題は無い。らしい。

「せ、世紀の…。」

「バカ…。」

「カップル…。」

無理矢理区切んな。

「てなわけで、別に泊まってっても問題ナツシンあるよ。ケガのこともあるし、おまけにこんな時間だし、まあ身寄りがないんならお仲間が見つかるまでここにいればいいよ。」

変な日本語は置いといてやろう。

「でも…ホントにいいの？」

「いいと言ったらいいつつてんだろ。それとも何か？俺の家では寝れんと？」

酔っ払いが言う『俺の酒が飲めんと？』的な感じで言われ、思わず首を振るアルス。

だって龍二の瞳に何か殺気みたいな感じだから。

「ああ眠い…俺も寝よかな。」

時計を見てみると既に十二時前。基本龍二は十一時には寝る体質なため、頭が少しお寝むモードに突入してしまっている。

「わりいが寝巻き全部洗ってて無いから今日はそのまま寝てくれ。」

「はい。」

一人修学旅行に来たみたいなお返事。当然、魔王である。

「……。」

それとは対照的に少し不安気なアルス。

「…リュウジ？」

ファイファイが龍二を睨みつける。

「ん？」

「…襲っちゃダメよ。」

このセリフに、龍二は思わず慌てふためいて赤面

「？そんなことする理由ないぞ？」

しなかった。真顔で返答。ずっとこけるアルスとファイファイ。

「私は別にいいよ。」

セクシーポーズで誘惑しようとしてるクルル。

「何が？」

普通に聞く龍二。ずっとこけるクルル。

「つーか遊んでねえでとつと寝なさい。明日起こすぞ。」

「は、はあ……。」

「うわスゴイ！これ床に敷いて寝るんだあ。」

「えっと、私には大き過ぎるんだけど……。」

腑に落ちない顔をしてるアルスに対し、クルルは布団で泳ぐように
はしゃぎ、フィフィはどうやって寝るのか悩んでいた。

つーか魔王、順応力高すぎ。

〈深夜〉

「……。」

……………眠れない…。

「はぁ…何でこうなったんだろ…。」

大体、どうして勇者であるボクが魔王と一緒に寝てるのかわからない。

とゆうよりここがどこなのかもさっぱりわからない。何かすごく文化が発達してて、火が無いのに部屋が明るくなったりとか水が出てくるとか、全てが初めて見たものばかり。しかもこの人が何だかすごく親切で泊めてもらったのはすごくありがたい。でもいつまでも続けるのは悪いから、皆見つけたら出て行くことにしよう。

……………それにしても…。

「『綺麗な髪』…か。」

そう呟いて髪を撫でてみる。

勇者になる前では髪の色で故郷の村の同い年の人達にからかわれていつも泣いてたっけ。それでこの髪が嫌いになって髪の話とかはいつも避けてきたけど…誉められたのは初めてだった。

だからかな？こんな気持ち。

「……………」

もういいや。また明日考えよ。

この時、ボクは気が付かなかった。この気持ち、今まで抱いたことのない特別な感情だということに。

それより、魔王の寝返りキックを受け続けて眠れないんですけど…。

第三の話 騒動起りりそう・・・。(後書き)

つか小説書いてねえでさつさと勉強しろ作者。

b y 雅

第四の話 あれ、まだ騒動起こんないの？

〔龍二視点〕

.....

.....ふあ？あ.....朝かあ。

ん、どーも。前は作者視点で話を進めていましたが今回は俺からの視点で物語を進めていこうと思っております龍二だコノヤロー。

前回、魔王とか勇者とか名乗る女っ子二人とちっこい女っ子一人・
・いや、一匹？どっちゃでもいいか。を、我が家に泊めて差し上げ
ております候。ウソウソ

とりあえずベッドから這い出て目覚ましをしてみる。

「.....」

現在時刻、八時半前。

「遅刻か……。」

ま、慣れたし。どーせ朝は数学だ。数学なんてくそ喰らえと思って俺にとっちゃ好都合だし、のんびりと朝飯作るかな。

そう思いつつ昨日と同じ服に着替える。同じ服を二日連続で着ることにより、洗濯による水道代を減らす（汗かいた場合は除く）。そして俺のトレードマークと呼ばれているヘッドフォンを首にかけ、リビングに入るとふと思いついた。

（あ、客居るんだった。）

とりあえず奴らも起こすか〜ってことで、和室へ行ってみる。

「……………」

ふむ……………この状況を説明すると……………

クルルがアルスの腹の上に踵落とし喰らわせた感じになってスヤスヤ眠っている。

アリスが苦しそうに呻きながら『う〜んもう虫は勘弁してください……………』って言いながら寝てる。

フィフィが枕の上で寝てる（小っちゃいからな）。

……………おもしれーけど、とりあえず起こすか。

「あの、リュウジさん…。」
「何だ？」

アルスが聞いてきた。何を言いたいかは予想できた。

「何でこの人ボロボロなんですか？」
「知るか。」

とりあえずあえてスルーしといてと。今日の朝ごはんの献立は洋風にトーストとサラダと牛乳とイチゴジャムだ。それらをテーブルに並べていく。

「ほれ、食べ。」
「……い、いただきます。」

食事の前の定番挨拶をしてメシを食い始める俺ら。

「ん〜、このジャムおいしい〜」
フィフィはジャム塗ったトーストにかじりついてるが、明らかパンの方がでかい。しがみついているみてえだ。それはそれで何か愛敬があるからよしとしよう。

「言っとくが、そのジャムは俺の手製だぞ。」
「え、ホント？」
「嘘つく理由はねえ。」

ま、ジャムなんて作ろう思ったら作れるしな。

「にしてもリユウジって料理上手よねえ。」

いきなりのフィフィの誉め言葉。

「そうか？」

「そうよ。うちの仲間達全員まともな料理作れないしさあ、こついの久しぶりに食べたわあ。」

ふん、そりゃ大変なことって。

「い、いきなり何言つのさー！」

アルスがいきり立つ。

「事実でしょー！」

反論するフィフィ。

「それでも言っていることと悪いことがある！……」

「言っていないでしょが別に！……」

「よくない！……」

「いい！……」

「よくない！……」

「いい！……」

「よくない！……」

「いい！……」

「よくな【バン！……！……】……。」

やかましいから机を叩く。

『黙れ。』
「はい。」

大人しく座る二人。あ、テーブルにヒビが。力加減間違えたか。

……とと、そろそろ行かないとさすがにやばいか。

「じゃ、俺行くわ。」

「え、どこに？」

「どこって……学校だ。」

「ガッコウ？」

学校ぐれえ知つとけ。

「とにかく留守番頼むぞ。出掛ける場合は一人か二人家にいとけ。いいな？」

「え、ちよっ……」

「じゃ行つてきまゝす。」

ショルダーバッグを肩に担ぎ、家を出た。あいつらに留守番まかせ
ていいものか、少し抵抗はあったがしょうがないしな。

さて、とりあえず学校へのんびり歩くこと数十分。すでに学校で
は一時間目の授業は終わっている。

あ、そういや二時間目英語だったな……とするとあの先公か。まああ

あ、神楽さんてのはうちの担任だ。本名、神楽 真弓^{まゆみ}。いや、先生にさん付けってどうよ？て思った奴はいるだろうな。気にすんな。髪が茶髪のロングストレートが特徴で、微妙に吊り上がった目と端正な顔立ち。まあ性格はかなり男勝りで、さっきの通り遅刻した奴にはチヨークという罰が待ってる。何かコレ避け切ったのはどうやら俺だけらしい。そんな奴なのになぜか知らんが校内にファンが多いというのは驚きだ。

「ったく。昨日だけか遅刻せずに来れたのは。で？原因は。」

「寝坊に決まってるんだろ。」

「ふ、相変わらず挑戦的だな。」

「コミュニケーションと呼べ。」

「まあいいさ。さっさと座りな。つかもう終わるがな。」

「はいはい。」

会話聞いていると傍からしてみれば何か友達と話してるように見えなくもないかもな。とりあえずいそいそと俺は自分の席に座る。場所は後ろから二番目の窓際。ちょうどいい風が入ってきて俺にとってはめっちゃくちゃいい席だ。さて、教科書でも開

【キーンコーンカーンコーン】

…鳴りやがった。さすが神楽さん、時間正確。

【キーンコーンカーン…コーン…】

『つて鐘かい!!』

クラスの心が一つになるチャイムだった。

「やれやれ、お前は相変わらずだな。」

休憩時間になってのんびりしていると、雅が声を掛けてきた。別名クスタマサ。

「本名カタカナにただけじゃねえか。」

あうち、心の中にまでツツコミを。

「で、何が相変わらず?」

「相手が神楽先生で堂々と遅刻なんてできねえぜ普通?」

「へっ、あの人の攻撃はワンパターンなんだよ。大体、チヨークを投げ続けりゃいいってもんじゃねえし、何より全ての攻撃が全部ピンポイントで胴体目掛けてほとんど一直線に投げてるから避けんに造作もない。もうちよいばらまくような感じだと・・・。」

「お前どこの世界の人間だ。」

相変わらずツツコミが冴えてんねえ。

おっと、そつだそつだ。

「あのさ、ちとばかり相談したいことがあるんだが。」

「何だ?」

ついでだからアリスの仲間の情報でも集めておいてやるか。

「最近「リュウチャーーン！」沈め。」

背後から飛び掛ってきた香苗に軽く裏拳打ち込む。

「あいや〜！」

まあ何ともチャイナ風な間延びした叫び声だこと。あ、誰かの机吹っ飛ばした。まあそんなのどーでもいいや。

「まったく、いつになったら遅刻癖を直すんだ君は？」

吹っ飛んだ机を避けて久美が俺に歩み寄ってきた。大半の、つかクラス男子全員が何か俺にすごい目力光線ぶつけてきてんだが、鬱陶しいから軽く睨みつけて視線を反らさせた。

「いいだろ別に。いろいろあんだよ。」

「いやあ相変わらずモテモテだなあお二人さん。」

あ、これ俺らじゃなくて別の奴。まあ声でわかったさ。

声の主は佐久間 恭田^{きょうた}。大柄で、いつつもカジユアルツーカー派手な格好、いわゆるパンク野郎みたいな、しかもジャラジャラといるんなモンをくつつけてる奴。染めた金髪が特徴？的だと本人は言う。しかも無類の女好き。趣味はナンパだよ。まあ顔はいいでしょう。だが性格がなあ…鬱陶しいというか何と言うか…とりあえず一生結婚できねえだろなあ…あゝ残念。

「ハハ：何とも切ない紹介をありがとう…。」

「って何も言ってるねえじゃん俺。あ、座り込んで床にのの字書き出した。いじけたなこりゃ。」

「ところで昨日のニュースを見たか？」

久美がいじけてた恭田を無視して話題を振った。

「ニュース？」

「そついや昨日はいろいろあってテレビなんて見てなかったなあ。あ、あ見たかったドラマ録画しときゃよかった。」

「昨晚、近所のグラウンドで火事が起こって駆けつけた警官が何者かによって失神していた、という暴力事件があったらしい。犯人は逃走中だそうだ。」

「それ俺やん。」

「ええ、それって怖いよ。」

復活した香苗も参加した。頭から少し血が流れてるのは「愛嬌」。

「それで犯人の特徴ってわかったのか？」

雅が聞く。

「いや、それが昏倒させられた時に記憶が吹っ飛んだらしい。ましてや夜中だったからな。」

あ、記憶飛んだんだアレで。

「暴力事件かあ、おっそろしいな。」

「しかも放火だろ？世の中物騒だよなあ。」

あ、恭田復活したんだ。よかったなあ。そのままくたばってりゃよかったのに。

「…？どうした龍二？さっきから黙り込んで。」

久美が俺の顔を覗き込む。

「ん……………」

……言ってもいいだろうか？言ったらこいつらに何言われるかわからんが…でもこいつらの反応見てみてえしなあ…。

「実は俺、犯人知ってるんだよな。」

「ま、マジか!？」

おお、恭田が食いついた。

「ああ、モロマジ。」

「モロマジで何だ。」

雅のツッコミ。

「で？誰なの犯人。」

「そつだ、もったいぶらないで教えて。」

「俺。」

もう何かいろいろメンドイのであっさりと言いました

『……………』

無言……………。

「ま、まあたまた〜！」

「そんなの冗談だろ〜？お前らしいぜ。」

「そつだぞ。バレバレだ。」

「お前も嘘下手になつたなあ。」

あつはつは、と笑う皆様。

「いや今回は大マジ。」

『……………』

まだ無言……………。

『……………マジっ？』

ハモんな。

「とゆーよりまさか放火もお前の仕業なのか!？」

「あ、それは違う。でも犯人は知ってるが言わんぞ。」

「何でだ!？」

「ノリだ。」

『ノリかああああああああい!?!』

「……………」

【スチャ】

『ヘッドフォンで耳を塞ぐなああああああ!?!』

「黙れ。」

『申し訳ございませんでした。』

いちいちいちハモるんじゃねえよ鬱陶しい……。

ま、こんな話はどうだっていい。

「まあ話が変わるがお前らにちと聞きたい事がある。」

「何だ?逃走用の車を……。」

言う前にぶん殴った。恭田のバカを。

「さて、バカはほつといて。」

そして改めて……。

「お前ら、少し変わった服装した奴らを見なかったか?」

「少し変わった服装?」

ん……説明不足か……………

あ。

「考えてみりゃどんな服装かわからん。」

『じゃダメじゃん。』

ごもつとも。

「ん〜…じゃ俺の想像という事で。」

「いいんかいそれで。」

俺がいいと思つたらいい。

「じゃ多分今時刃物の武器持つてて鎧着てて魔道士みたいな格好した頭の構造がおかしくて可哀想だなあって思わず呟いちゃいそうな人達見た事あるか？」

「ひつでえなあ。」

「……。」

「……。」

「……。」

あれ、恭田を除く三人が黙っちまったぞ。とくに雅なんかツッコミ入れると思つて期待してたつてのに。

「……龍二？」

「何だ雅。」

「いや、あのさ……。」

一拍置いて、

「俺、すっげえ心当たりがあるんだけど…。」

「私も…。」

「あたしもだ…。」

「……。」

次回、衝撃の展開が幕を開ける！！

「大袈裟だろ。」

ツッコミエスパイ雅。

第四の話 あれ、まだ騒動起こんないの？（後書き）

もう入試がやばいって親に言われてるんでしばらく休みます
でもやめる訳じゃないんで入試のどたばたが終わったらまた書きはじ
めたいと思っておりますんでよろしく

一方その頃・・・。(前書き)

短っ！

一方その頃……。

「……。」

「……。」

「……。」

「……リュウジさん遅いね。」

「そだね。」

「そうね。」

「……。」

「……。」

「……。」

「暇だね。」

「だね。」

「よね。」

「……。」

「……。」

「……。」

『はぁ……。』

アルスです。ボクらは今、リュウジさんの帰りを昨晚寝ていたワシツという部屋で座って（魔王は寝っ転がって）待っています。今気付いたんだけど、この部屋の床は不思議な香りがしていて心地いい。植物を編んだだけのような物みたいだけど、どうゆう素材なんだろう？ 今度リュウジさんに聞いてみよう。

・・・一人頭の中で誰に話してんだろう、ボク。

まあ、とにかく暇なんだなあ・・・皆を探しに出掛けたいけど、出掛けたらリュウジさんが心配するだろうし・・・（ホントは勝手な行動したら怒られるかもしれないと思うっていうのが本心なんだけど。だって怖いもん、あの人）。

「何しよっかな・・・。」

「下手に周りの物触ると何起こるかわかんないから触らない方がいいわよ。」

「むっ・・・。」

ふくれっつらになる魔王。見た目は可愛いけど、ボクはまだこの人の事認めてません。ボクらの世界を征服しようとした張本人だし・・・寝てる時何度も蹴られたし（怒）。

「でもさあ、ここすごいよねえ。」

「何が？」

フィフィの言葉に？を浮かべるボク。

「だって捻るだけで水が出たり魔法使わないで火を出せたりできるし、何より天井には火を使わないで周りを明るくできたりするし、こんなの私達の知ってる世界には無いのばっかでしょ？便利よね。」

「

あ、それは一理あるなあ。魔法を使わずにそんな事が出来るなんてボくらにとってはものすごい非常識だ。仕組みが全くわかんないや。

「ああ・・・そんなのどうでもいいけど外に出たいなあ・・・。」

魔王が転がりながら言う。てゆうかどーでもいいんだ。でも出たらリュウジさんに何言われるかわかんないから出られない。窓の外に広がるのはこの庭に植えられた草花。木も立ってる。太陽光がさんと窓から降り注いでいて、そして光が綺麗なツヤのある葉っぱに反射していて見ていて和む。でも大きな生垣がそれより向こうの視界を遮っていて、外ではどんな光景が広がっているのかはわからない。二階にある窓から覗くこともできるけど、窓って言ったらり

ユウジさんの部屋にしか無いだろうから・・・勝手に入る訳にもい
かないし・・・。

「でも外出れないしなあ・・・。」

魔王、ブツクサうるさいなあ。あ、いきなり起き上がった。

「よし、決闘しよう!!!」

「何故!?!?!」

いや、ホントに何故!?

「だって暇だし!!!」

「暇だからって生死を分ける戦いしようとしないで!!!」

「おんもしろい! 返り打ちよ!!!」

「ちよ、ファイファイまで!?!」

「覚悟しろ妖精ええええええ!!!」

「死ね魔王おおおおお!!!」

ああ・・・もはや炎を出してる両者を止める人は誰もいない・・・。

リュウジさんに・・・怒られる・・・。

【ピーー メッセージヲ受信シマス。】

「は?」

いきなりどこからか無機質な声が・・・。

『・・・あゝ、龍二だが、出掛ける前に言う事があったんだが言う
の忘れてたからメッセージを送るぞ。もし暴れたり物壊したりした
ら・・・どうなるかな?』

【ピーー メッセージ終了シマス。】

『。。。』

ボクらはそのままの体勢で固まってしまった。。。。

一方その頃・・・。(後書き)

とりあえず短くしてみました。ノリで。

第五の話 雅の家にて

サブタイトルの通りだ。今俺らは学校が終わって雅の家の前にいる。何故ここにいるのかというと、それはあの時の雅、久美、香苗の言葉が原因だった。

「実はさ・・・俺の家に一人、そういうのがいるんだよ。何か魔道士みたいな男。」

「あたしの家には何かものすごく大きい斧を持った女の人がいるんだが、昨日満身創痕の状態で倒れてたんだ。今でも寝てると思う。」

「わ、私なんか変な格好した双子の男の子が倒れてたから家に寝かせてあるけど・・・何か二人とも可愛くて」

俺以外「オイ。」

つてな感じだ。で、とりあえずアリス達に合わせる前に俺が確認とつとこうと思つて一人で雅の家に来たわけさ。電話であいつらに知らせてここに来させるという方法もあるが、電話の使い方がわかってねえし。さっきメッセージ送った用法使えばいいと思うんだが、ここまで来させるのにあいつら地理ダメだし、何かあいつら格好目立つし。そんなら俺が迎えに行きゃいいじゃんと思うだろうが、あいつら連れて歩くのが何か恥ずかしいし。

ま、ぶつちゃけ理由は俺がメンドイだけなだけだな。

だってメンドイもん。こつから俺ん家まで行ってまた戻ってくんのでメンドイもん。理由説明すんのもメンドイもん。だから再会させんのはまた後日つーことで。因みにあいつら連れて歩くってい

うのは別に恥ずかしくも何ともありませんたんなる言い訳ですハイ。
「何ぶつくさ言ってるんだ？」

あ、声出てたのか。わーはずかしー。

「棒読みだぞ。」

うっせー今のは頭ん中で言ったんだ心読んでんじゃねーよバーカバ
ーカ。

「・・・それは純粹に落ち込むぞ。」

「ありよ。ごめん。」

さて、コントしてねえでさっさと入るとするか。しかしいつ見ても
でかい。何回かこの家にお邪魔したことはあるが、とにかくでかい。
豪邸っていう奴かコレが。うっん、ブルジョワ。

「まあ、上がれよ。」

「お邪魔します。」

あ、言い忘れてたが、今回は俺一人で来た。雅の客人は元気らしい
けど、久美と香苗んこの客人は今だに眠っておるようで。まあ目
覚めた時慌てるかもしれないな、傍にいてやるほうが妥当だろう。
つーわけで今は雅と俺だけだ。

「あら龍ちゃんいらっしやい。」

玄関に上がると水色エプロン付けた女性が出迎えてくれた。この人
は昔っからちよくちよくお世話になってる楠田 涼子さん。まあこ
の展開だったら母親だと思う奴も多々おるだろうが実は・・・。

「姉さんただいま。」

「おかえり雅。」

とゆーこった。この人は雅の姉貴だ。雅と同じ茶髪でセミロング。
ちよつと垂れ目な所は雅と違うが、他はよく似ている。しかも性格
も温和だ。そして天然だ。そしてドジだ。なのに何故か知らんがか
なりモテモテだ。何でも胸が香苗よりでかい所と、ドジな所が周り
からしたら『モエる』らしい。モエるってどう書くんだ？わかんね。
まあいい性格してるからモテてんだらう。そう思うな俺は。

「で？肝心のお客はどこだ？」

「俺の部屋だ。ところで姉さん、あの人の様子は？」

「ええ、大分落ち着いてるわよ。」

「？何のこつちゃ？」

「いや、実はな。久美達と同じくあの人も気絶していて俺の部屋で寝かせてただけけど・・・朝起きたらものすごい警戒心丸出しでさ、杖から火の玉撃ち出しやがったんだよ。」

「おお、ファンタジーだ。でも火の玉って・・・なんかデジャヴ感じる・・・。」

「そりやすげえな。」

「で、部屋が燃えそうになる前に消火して、姉さんが・・・。」

「一発殴つといたのよ。」

「まあ、楽しそうに言ってますね涼子さん。隣で雅が何か微妙に暗くなってるぞ。あ、言い忘れてたが涼子さんはめっちゃくちゃ強いつて評判だ。絡んできた数人のチンピラどもを一人残らずボッコボコにしちゃったこともあるんだとよ。」

「でも龍ちゃんには一回も勝ったことないんだよね。」

「どうやら楠田家は人の心を読めるという術があるらしい。うん、そういう事にしよう。」

「じゃ二階上がらせてもらいま〜す。」

「姉さん、後でジューズ頼む。」

「はいは〜い、じゃ龍ちゃんだけ大ジヨッキね。」

そして何故か俺はいつも涼子さんに特別扱いされるが如くの振る舞いをつける。こないだなんてシュークリームを雅が二つに対して俺には八個（十個入り）だったし、何かあんのかね？ま、どーでもいいやシュークリームうまかったし。口の中ものすごく甘くなったからたまらず家でラーメン食いまくったけど。

「ここだ。」

「いや、わかってるけどね指差さなくても。因みにここは二階にある雅の部屋。あ、言い忘れてたが家の床全部にレッドカーペットが敷いてある。金持ちの特権だね。ああ羨ましい羨ましい。」

「あゝ……ただいま。」

うつわゝ、めちやくちゃ満身創痍な状態じゃねーか。いつからこの状態だこの人。

「で……そちらの人は……。」

「ああ、俺の友達だ。」

「荒木 龍二だ。よろしく。」

「はい……よろしく……。」
暗え……。

「なあ、解いてやろうや。これじゃ話もできねえよ。」

「そうしてやりてえんだが……姉さんに何言われるか。」

「ヒッ！」

『姉さん』という単語に小っちゃく悲鳴を上げる鎖男（鎖で縛られてるから）。相当ひどい目に合ったなこりゃ。

「大丈夫だつて、涼子さんには俺が何とか言つてやるから。」

「ん……しゃーねえか。」

あ、今思つたんだが俺のセリフは普通弟である雅が言つべきセリフなのでは……まあいいや。

「助かりました。もう苦しくて苦しくて……。」

「いやいや。」

俺は手をヒラヒラと振つた。にしてもこの人の服装……あれだな。まあ魔道士つていうのかRPGで言うところの。ヒラヒラの白いローブ着てるし。見た目は俺らと同じ年ぐらい、そして金髪、金眼その上シャープな顔付きでいわゆるイケメン。でも少しやつれて見えるのは俺だけだろうか？

「あ、申し遅れました。私の名前はステイル・グライアです。」

頭を軽く下げて挨拶。うん、社交的だ。

「よろしく。」

さて、本題に入るか。

「で、お前この人に何の用なんだ？」

「だあそれ言おうとしてたんだっつーの。」

「私に用……ですか？」

「おうよ。」

「とりあえず一泊置く。」

「アンタ、アルスとフィフィって奴知ってるか？」

「……！」

「あ、目見開いた。めちゃくちや驚いてるな。」

「ア、アルスとフィフィを知ってるんですか!？」

「うん、家にいるぞ。」

「お前ん家にもか？」

「雅が聞く。」

「ああ、何か仲間探してたぞ。つーかアンタらの名前聞くの忘れてたけどな。」

「普通聞くだろ。」

「忘れちった。」

「ちってたって何だ。」

「うん、いいツツコミテンポだ。」

「じゃあ……リアンも？」

「へ？誰だそれ。アンタの仲間？」

「ええ、そうですが……でもとりあえずよかった、二人とも無事で。」

「あ、クルルもいるぞ。」

「え、クルルって……誰ですか？」

「魔王（本人曰く）。」

「……！」

「おお、さつきよりビッククらしいてら。」

「ま、魔王!？魔王もここに!？」

「まあな。とりあえず、あいつらの事は確かに伝えといたぞ。」

「でもあの驚きよう……やっぱ魔王って好かれてねえのか。でも昨

日は結構仲良く見えたけどな。

龍二は二人の死闘見てなかったからそう思っているのである by
作者

今何か聞こえたか？

「にしてもあと仲間は一人名。」

「あ、もしかしたら香苗か久美んとここにいるかもな。」

「だな。じゃ俺そっち行ってみつか。用も済んだし。」

とりあえずおいとましようかね。

「お待たせ〜ってあれ？もう帰るの龍ちゃん。」

あ、そついや涼子さんがジュース持ってきてくれるっていうの忘れてたな。

「ああ、もうおいとまするけど、とりあえずジュースは飲んでこっかね。」

「え〜、もうちょっとゆっくりしてけばいいのに〜。」

上目遣いで言ってくる涼子さん。

「まあまた来るからさ。」

スティルの様子見に。

「む〜、わかつたわよ。」

「どーも。」

ジュースの大ジョッキを手にとつて一気に飲み干す。ん、こりゃ青汁だな。まずい！もう一杯！いらねえけど。

「はい、雅。」

「サンキュ、姉さん。」

そう言つてグイと飲む雅。

【ぶ—————】

おお、吹いた。

「じゃ、お邪魔しました。」

「また来てね。」

涼子さんの声と同時に部屋を出る。出る直前に目に入ったのは、苦しそうにむせている雅と涼子さんを見て震えているステイル。何か見えて哀れに思う。

さてと。ケータイケータイ。

「・・・あ、久美か？今からそっち行くから。うん、じゃ後でな。」
切ってポケットにケータイを仕舞う。まああらかじめ学校で三人の家に行く約束していたけどな、行く前に電話しとくってのは礼儀つてもんだろつ。

あ、何か二階から悲鳴が聞こえるな・・・多分ステイルのだな。ま、頑張れ。色々。

第五の話 雅の家にて（後書き）

とりあえずリラックスするために更新更新・・・受験って辛いです
（泣）。

第六の話 久美の家にて

前回に引き続き、サブタイトルの通りに久美の家の前まで来た俺。あいつの家はマンションで、セキュリティが充実していて周りには木々が生えていてなかなかいい環境に恵まれている。雅ほどじゃないが、あいつも結構金持ちだなあ。

・・・踏んだろ（オイ）。

とりあえず玄関ホールにあるセキュリティロックを解除してもらわんと・・・えつとあいつんとこのナンバーは・・・っと。

【ピッピッピッピ（ナンバー入力音） ピンポーン】

「はい？」

「よう久美。」

「り、龍二！？もう来たのか！？」

「？何だ時間関係あんのか？」

「い、いや無いがちょっと待ってくれ！今片付けるから！」

「いや、とりあえず中に入れてくんね？お前んとこの部屋の前で待つとくからよ。」

「あ、ああ。済まない。今開ける。」

ガチャリという音がして扉が開く。自動扉というのは素晴らしい。理由は推して知るべし（知らなくてもいい）。にしてもここに来るのは久しぶりだな。何日ぶりだろかね？とりあえずあいつんところは五階だから階段でさっさと上がっていく。エレベーターもあるんだが、健康にいいから、ってな理由で。とゆーかたかが五階くれえでエレベーター使う必要もない気がする。

……ん？そう思うのはお前だけだと？

……。

マジで！？

どこかの電波を受信して軽いショックを受けつつ、久美の部屋の前まで来た俺は扉の横にあるインターホンを押す。

【ピンポーン】

「……。」

出ねえな……。

【バタバタバタバタバタバタバタドガンガシャン！！】

「……。」

扉が開いた。

「い、いらっしやい龍二。」

明るい笑顔で俺を出迎えてくれた久美。でもさ、右手でドアノブ持つて何気に左手でケツさすってんのバレバレなんだからさ、無理に誤魔化そうとすんのはやめとこうや。さっきのお前がこけたの

バレバレだ。

「ん、お邪魔します。」

まあこけた件については忘れておいてやろう。まあ、にしてもこいつんところは廊下から落ち着いた雰囲気が出てるな。下駄箱の上に置いてある熱帯魚入りの水槽がこの家で一番の俺のお気に入りだ。最近気付いたんだがこいつぁグッピーだな。凶鑑を見た。因みにこいつの愛称もグッピーだ。理由、久美もこいつの名称を知らないで、グッピーってかわいいんじゃないかねえかとかいう理由でつけたんだが、最近になってグッピーってーのが愛称じゃなくて名称だと気付いたらしい。いやいや無知とは恐ろしいな。この超おバカ。

「？何か私の悪口を考えてなかったか？」

「よくわかったな。」

「え、ちよつとそこは否定しないのか？普通はするものだろう？ねえ？」

「るせえなあ、本当のことなんだから否定するわきゃねえだろうが。」

「うう・・・龍二、最近毒舌のレベルが上がってきたな・・・。」

「で？例の人は起きたのか？」

「スルーされた・・・（小声）。」

「あ？」

「い、いや、もう起きているぞ？だからそんな睨まないのでしょくく恐いから・・・。」

おつといけない俺としたことが。思わずガンきかせちまってたか。久美もなんか縮こまってるし。

「じゃあちよつと会わせてみ。」

「いいけど・・・気を付ける。彼女、斧持ってるぞ。」

猟奇殺人事件の犯人に立ち向かう人に言いそうなセリフだな。つーか斧はあぶねえな斧は。

「あら～！龍二くんじゃないの！」

パタパタとスリッパの音をたてながら出迎えてくれたこの人は、雅

の家でのパターンとは違い、久美のお袋さんで、名前は立花・エリザ・アンドリユー。根っからのアメリカ人で、プラチナブロンドのロングヘアーが眩しい。アメリカ人らしく気さくで陽気だが、食い物はこつてりしたのじゃなくあつさりとした和風の食い物が大好きという日本大好きな人。久美の金髪はこの人譲りだそうだ。まあ顔も似てるしな。

「久しぶりだなおばさん。元気してた？」

「もおバリバリよ。龍二くんこそ元気そうね。」

「俺に病気という言葉はないからな。」

ビバ・健康体

「母さん、とりあえずジューズを……。」

久美が不機嫌そうに言う。何故？

「わかつてるわよ。もお久美ちゃんたらやきもち焼き屋さん。」

「か、母さん！」

鼻歌歌いながら久美の怒鳴り声をスルーしておくおばさん。にしてもやきもち焼き屋さん……やきもちをさらに焼く店……おもち焦げっ焦げ。うん、まずそうだ。

「で？部屋に入っただいいか？」

「あ、ああ……汚い所ですが。」

いきなり丁寧口調かよ。訳わからん。

「入ります。」

そう言っただけ扉を開ける。全体的に白を基調とした部屋の中は家と同じくらい清潔で家具なども派手な物も無く、壁には竹刀とか道着とかが掛かっている。まあかわいい部分はと言うとベッドの枕元にある結構大きい熊のぬいぐるみ。ご丁寧に首に青いリボンなんか結びつけちゃってるよ。

で、問題の奴が部屋の中央にいた。

髪は俺と同じ黒髪。それをポニーテールにしてる。顔は世間一般で

いうところ綺麗な部類って奴か？瞳はスカイブルーで、何か切れ上がってる。気が強そうだ。で、全身赤でサイズフィットしてるタンクトップと短パン。まあ、素材が革製に見えるが、そこら辺は何の変哲もない。

でもよ、椅子に腰掛けて腕組んでこつち睨みつけてる上に、右の肘置き部分にはでっかい斧がギンギラギンに光りつつ立て掛けてあって、さらに左の足元にはごっつい鎧が置いてあるってーのは普通じゃねーよな？

「よ。初めましてだな。」

とりあえず片手挙げて挨拶する。

「。。。。。」

無反応。

「。。。。。」

ならば。。。。。

「やあ。初めまして。」

爽やかボーイバージョン挨拶。ついでに髪も上に掻き上げる仕草もしておく。

「。。。。。」

これまた無反応。

「。。。。。」

さて。。。。。

「飽きた。」

「遊んでたのか!？」

久美がツッコミ入れた。

「とゆーより挨拶二つしただけじゃないか!」

「だっつてさあ、無反応なんだもんよ。」

「。。。。。」

まだ無言かよ？

「とにかく！いい加減にしゃべったらどうだ!？」
久美が詰め寄る。それでも微動だにしないこの女。

「……できる(?)。」

「まあ落ち着きなって。」

「だが……。」

「人なんてしゃべりたくない事もあるもんさ。まあまかせとけて。」

「聞きたいことがあるし。とりあえず相手の前に腰を下ろす。」

「あー……とりあえず名前。」

「……。」

「……じゃここまでの経緯。」

「……。」

「……他に知り合いは？」

「……。」

「……何で黙ってんの？」

「……。」

「……聞いてるか？」

「……。」

「……おっい。」

「……。」

「……。」

イラ。

「！」

ありゃ、殺気出したのバレたみたいだよ。ありゃりゃ、斧手に取ったよ。ありゃりゃりゃ、振りかぶったよ。

「龍二！！！！」

久美が庇おうとする。

でも……。

ピシ。

「！？」

親指と人差し指で抓つまむように斧の刃をキャッチ。楽勝

「とりあえず落ち着け。な？」

出来る限り落ち着いた声でなだめる俺。内心はキレかけてます。

「……。」

大人しく座りなおす女性。斧も脇に置いた。

「さあて、とりあえずお互い黙ってちゃ話になんねえから俺から話させてもらうか。」

そのうち喋るだろうし。

「さて、第一に。お前は他に仲間がいるな？」

「……。」

「第二に。仲間は他に三人だな？」

「……。」

「第三に。三人はそれぞれ勇者っぽい奴、魔道士っぽい奴、妖精っぽい……いや、妖精の格好してるな（あれを妖精と言わずに何と言う）？」

「……。」

「第四に……名前はアリス、スティル、ファイって奴だな？」

「……！」

「第五に。作者はゲーム雑誌と間違えて大人の本【グアン！！】オウチツ！！」

何故か上からタライが降ってきた。ついでにタライの裏側に『天罰』と書いてあった。何のこっちゃ。

「り、龍二？大丈夫か？」

「うん、かなり痛い。でももう平気。」

回復力なら誰にも負けんよ。

「で？どうなんだ？」

とりあえず聞く。

「……。」

やっぱり無反応……。

「……そう。」

「！」

あ、喋った（久美がびっくりした）。

「皆……無事なの？」

「ああ、アリスとファイファイなら俺ん家にいるし、スティルも俺のダチの家で世話になってるぜ。」

「……良かった。」

うつわ、喋るようにはなったが随分と寡黙な人で……まあ警戒心解けてるし、よしとしよう。

「で、アンタ名前は？」

「……リリアン。リリアン・ヴェルバー。」

リリアン・ヴェルバー、リリアン・ヴェルバー、リリアン・ヴェルバー……。

「よし、覚えたぞリリアン……リリアン……。」
あれ？何だっけ？

「よし、覚えたぞリリアン！」

「……。」

冷たい目線を送ってくる二人……。

「……。」

それを返す俺。

「……………」

一瞬固まった後慌てて目を逸らす二人。

勝った。

「あ、紹介遅れたな。俺は荒木 龍二ってんだ。よろしく。」

「……………よろしく。」

手を差し出して握手する。ん、背後（久美）から鋭い視線が……
まあいいか。

「入るわよ。」

あ、おばさんがジューズ持って入ってきた。

「か、母さん！ノックぐらいしてよ！」

「まあまあそう怒りなさんな久美よ。」

「そうよ、何も三人のお話邪魔するわけじゃないし。」

「うう……………」

俺とおばさんのタッグは最強だ。

「とにかくハイ、ジューズ。」

「お、サンキュ。」

「You are welcome」

ナイス発音。さすがアメリカン。お、ミックスジューズか。うまい。
い。

「んじゃまあ、そろそろ行くかな。」

「え、もう行くのか？」

久美が残念そうに言う。

「何だ？俺が言ったら何かまずいと？」

「い、いやそんなことは……………」

じゃ何故に口ごもる？

「まあ俺も用事があるしな。また今度来た時にゆっくりしてくさ。」
スタイルと同様、リアンの様子見に。

「じゃ、おばさん。ジュースごつそーさんでした。」

「ふふ、また来なさい。今度は新しいレシピ持ってきてね」
「オツケー。まかしとき。」

あ、言い忘れてたが俺とおばさんは時々互いにレシピを交換し合っている。おばさんは主に故郷の料理、まあ西洋料理で、俺は和風料理。つってもラーメンのレシピがほとんどだ。ホントはラーメンは中華そばっつーんだが、おばさんはラーメンを日本料理と信じて疑わない。しかもラーメンが大好物ランキングにinしているというおばさん最高。おばさん大好き。ラーメン同志として。

「じゃなりリアン。大人しくしとけよ。」

「・・・この人達には恩があるから・・・努力する。」

「努力しないとダメなのか!？」

久美、ツッコミがうまくなってきたな。

「じゃ。」

「あ、ああ。また来てくれ・・・。」

だあ何で残念そうに言うかな? 罪悪感感じちゃうよ俺。そう思いながらもマンションを出た。

「さ、次々。」

香苗に電話つと・・・ってあれ? そういやアリスの仲間はステイル曰くアリスとリリアンとフィフィだけってな感じな事言っただけなかつたか? じゃ香苗の家にいる双子の男の子ってのは誰だ?

「ま、行きゃわかるか。」

とりあえず香苗に電話した。

あ、久美の足踏むの忘れてた・・・今度踏も

第六の話 久美の家にて（後書き）

てな感じで、第六話です。えと、龍二が言いそうになったセリフは・
・ええ、お察しの通りです、ハイ。だってそれビニールかかって
たんだもん。それがゲーム雑誌置いてあるところにあっただんだもん。
名前がゲームマガジンみたいな名前だったんだもん。で、家に帰っ
て開けてみたらアラびっくり、何か露出度高い人があーだこーだで・
・次の日処分しました（恥）。

第七の話 香苗の家にて

はい、もう説明いらねえと思いますけど、香苗の家の前です。サブタイトル通りです。

・・・正直もうめんどくなくなってきた・・・。

「帰りてえ・・・。」

とは言うものの、もう既に本人の家の前に来てるしなあ・・・こいつん家はまあ、どっちかってーと普通だ。俺の家と同じくらいの大きさで、木造住宅。まあ一般的な家だな。普通普通。シンプル・イズ・ベスト。

「ま、約束しちまったしなあ。」

約束破るのは後ろめたいしな。とは思いつつもめんどくさいオーラ全開な俺はインターホンを押す。

【ピンポーン】

『はい。』

「よ、香苗。」

『あ、リュウちゃん！ちょっと待ってね。』

そう言うやいなやガチャリと受話器を置く音が聞こえた。

「ふっ・・・。」

とりあえず待つことにする。

「あ、リュウお兄ちゃんだあ！」

「ん？」

背後から聞こえる声を聞いて振り返ってみると、駆け寄ってくる小さい女の子二人が見えた。香苗の双子の妹の美紀と美香だ。八歳だから、小学校三年生。二人揃ってそっくりそのまんま。まさに双子の違いがわかるころといやあ、美紀がツインテールで、美香が三つ編み。そして美紀が活発で明るい性格に対し、美香が物静かで大人

しい性格。香苗とこの子らの似てる部分は、やっぱり顔だな。香苗を幼くした感じ。んでもって小動物みたいにひつつくところは双子ともども同じだ。うん、可愛い。

「えい！」

「……。」

とまあ可愛らしい声（美紀の声）で俺の腕にそれぞれしがみつく二人。

「よお、元気してたか二人とも？」

「うん！」

「……（コクリ）。」

「そうかそうか。まあお前らに元気が無いっていうのはありえない話だろうがな。」

言うつと、照れくさそうに「えへへ。」と笑う美紀と、相変わらず黙りながらもはにかむ美香。美香の性格……何か久美ん所のリリアンに似てらあ……ま、いいべ。にしても、こいつらはなかなかおもしろい。この家にお邪魔すると決まって俺に引っ付いてきては遊びをせがむが、こいつらは軽いから多少振り回しても支障はないし、何より俺も楽しませてもらってっからここでの楽しみの一つとなっている。一時香苗が参加するーとか言っつて俺の腕にしがみついた時はブンブン振り回したけどな。マツハで。

【ガチャ】

「やつほーリユウちゃん」

「おつと。」

いきなり扉が開くと同時に、俺に抱きつく香苗。両腕が塞がってなかつたら巴投げかましてたんだがなあ。

「あ〜！お姉ちゃん正面から抱きつくなんてずるい〜！」

「姉さん……ずるい。」

あ、美香喋った。

「あらら、二人とも帰ってたの？でもこの抱擁はお二人さんにはまだ早いから別に何言っつてもいいよ〜だ」

「むゃ〜!ずるいずるい〜!」

「ずるい……。」

「……。」

えっとさあ……この状況どう説明しようか?

まずさあ、小さいのが二人俺の両腕塞いでるし〜……そんなでもって真正面から香苗の奴が抱きついてるし〜……当の本人達が何か口喧嘩してるし〜……。

ハッキリ言おうか?

動けない上に暑苦しい……特に正面。

「よしわかった。とりあえずお前らどけ。」

「えゝもうちよつとだけいいでしよゝ？」

香苗が何か甘えた声で言う。

「……。」

『どけ。』

「……は、はいいつ!!」「」「」

ちよつと怒気を滲ませた声で言うと言つと慌てて離れる三人。

「やれやれ……で？例の双子つっーのは？」

「うん、二人なら居間にいるよ。」

「ああそうか。じゃお邪魔するぞ。」

そう言つて家ん中に入る。つーか双子があ……アリスの仲間じゃないとしたら、こつちの側の奴せかいか、あるいはクルルの……でも本人からそんな話聞いてねえしな？

「あ、用事済んだらすぐ帰るからな。」

「……えゝ?」「」

三人揃つて綺麗に口揃えての不満。さすが姉妹。

「何だ？」

「もうちよつといてもいいんじゃないのゝ？」

「またこないだの続きやろうと思つたのにゝ。」

「……帰るのダメ。」

美紀の言うこないだの続きつっーのはゲームのことだ。46戦23

勝23敗で引き分け状態。うん、やりすぎた。

「まあ今夕方だから。また今度遊びにきてやるよ。」

俺このセリフ何回言った？あ、三回か。約束多いな。

「ホント!？」

「絶対だよ!？」

「……。」

「はいはい。」

香苗には顔を近づけられ、美紀には至近距離から見上げられ、美香には俺の服の裾をぎゅっと掴んで見上げられ……。どーゆー状況だこりゃ？

「どーでもいいが、居間に通せ。」

「あ、ごめん。」

言い忘れてたが、いまだに玄関でこんなやり取りしてました。さっさと中にいれろっつーの。

「とりあえず二人とも上に上がったといってくれる？」

「え〜!」

「……む。」

香苗が美紀と美香に上にかかるよう促すと明らかに不満の声が。

「……行きなさい。」

ちよつと声を低くして言う香苗。

「……はい。」

「……。」

ビビったのか、渋々二階へと階段を上がっていく二人。まあ二人にはちとわからん話かもしれんしな。

「そんで?どーゆー状況？」

「うん、居間で大人しくしてるよ。」

「ほう、別に警戒してる訳じゃないのか。」

「そーともいえないんだよねえ。」
「？」

「実はね……起きてから一言も喋ってないの。」

「……じゃっば警戒中か。」

「そみたいね。」

にしてもまあ、随分警戒心が強い奴らだな。向こうの世界はどんなんだ？やっぱ物騒なのか？そうなんだな？まあ知らんがな。

「ま、とりあえず適当に話すっべ。」
俺は居間の扉を開けた。

【ブルン】

「！！！」

「……。」

いきなり包丁が飛んできた。

指二本で挟んで受け止めたけどね

「で？何のまねだ。」

目の前にいる少年に向けて穏やかに話かける。

「……。」

無言……よく見てみると……ああ、こりや香苗が言うのも無理ねえわ。かつこいいというより可愛い。小動物みたいな子顔（小動物大好き）。んで短い銀髪。そして真っ黒な革製……レザー ज्याケットっていうのか？みたいな服着て……きめてるみたいだけど、うん、かつこいいより可愛いの方に入るな。女装させりや美紀と美香と並ぶんじゃないかねえの？

……ん？

「おい、香苗。確かこいつら双子……。」

「り、リュウちゃん……。」

あ……。

「見事に人質……だなあ。」

うん、いきなりだね君達。え、只今、双子の片割れ……あ、そ

つくりよ、銀髪で黒い服着ててさ・・・で、その片割れどこ行ったんかなあ、て思つてたら何や知らんが香苗の首に包丁当ててはったんやなこれが。いやあ一本取られましたわ。失敗失敗
「り、リュウちゃん・・・恥ずかしそうに頭かいてないで助けて・・・」
おっと、関西弁が頭の中で響いちまった。とりあえず状況打破だ。
「あゝ・・・大人しく武器を捨てて投降しなさい。」
警察官が立て籠りの犯人に告げるような感じで言ってみた。
「断る。」

さいですか。

「いやさ、何でこんなことしてんのか気になるとこなんだが。つーか今お前が包丁突きつけてる奴つてお前らの恩人っしょ？いいんかそんなことして？」

あ、言い忘れてたが、俺の背後でナイフ突きつけてるのんもいるぞ。顔に似合わず凶暴だなこやつら。

「・・・目的は？」

「・・・は？」

「僕らを助けた目的は何だ。」
いきなり何言い出すん？

「も、目的つて、倒れてたから助けなきゃって・・・。」

「嘘を言うな。」

香苗の言うこと即否定かよ。

「だ、だって・・・。」

「まあまあ香苗。それ以上言つたつてダメだつて。」

ヒラヒラと手を振る俺。

「・・・お前、何故そこまで落ち着いている？今の状況がわかつてるのか？」

ちよつと顔色を変えた俺の背後の坊主。

「いや、まあここは慌てた方が負けってことで。」

「……………」

無言ですか。そうですか。

「さて、人質ごっこも飽きたところで……………」

「人質ごっこ!？」

香苗のツツコミはスルー。

それでは……………」

「武力行使、スタート」

【バビュン!】

素早く香苗に近づき、突きつけられていた包丁を叩き落とし、相手が動揺する前にそのほっそ腕を引っつかみ、ブンと背後に投げつける。

【ゴン】

見事に頭と頭がごつつんこ。二人仲良く気絶した。因みに俺が動き出して三秒も経っておりませんハイ。

「はい終わり。」

「……………」

香苗が一瞬何が起きたかわからないかのような顔している。

「さて、お茶もらおうかな。」

「は、はい…」

香苗、何故にそんな慌てる？あ、考えてみりゃこいつら寝ちまってる（気絶の間違い）から話できんな・・・待つか。

熱いお茶を啜りながら待つこと十分・・・。

「うう・・・。」

「いたた・・・。」

俺と香苗が『叩いて被ってジャンケンポン』してたら呻き声が聞こえてきて双子が起き上がった。因みに香苗は俺に47回殴られて頭フラフラ状態になっている。

「！お、お前・・・！」

「はいはい、いいからさっさと座れ。」

とりあえずテーブルの反対側に座らせるよう促す。

「な、何を・・・。」

「まあ座れって。何もせんから。」

「信じられるか！」

「座れって。」

「断る！」

「座れ・・・。」

「いやだ！」

「すわ・・・。」

「「しつこいぞー!」「」

・・・。

カッチーン。

【ドーン……！】

「「「！！！？」「」

。 怒ったからテーブルの上に包丁を突きたてた（中ほどまで刺さった）

「「「「「」」」」」」

冷や汗を流す双子と香苗。あ、復活したのか香苗。

『座れや。』

「「「「「はい」」」」」

脅し口調で言うと大人しく座った双子くん達。とりあえず気分を落ち着けるためにお茶をズズッと啜る。うむ、やはりほうじ茶はうめえな。

「さて・・・今回俺がこの家に来た理由はだな。」

「「「「「」」」」」

「あ、言っとくがな。」

「「「（ビクリ）」」」

「途中から口挟むなよ。早く帰りたいんだからな俺は。疲れた。」
マジで。

「「「「「はい」」」」」

うむ、いい子じゃ（誰だお前は。by作者）。

「で、話つてのは・・・お前ら魔王知ってる？」

「「「「「」」」」」

お、手応えアリ。

「魔王って小っこい女の子だな？」

「「「「「」」」」」

また手応えアリ。

「名前はクルルだな？」

「「「「「」」」」」

またまたアリ。

「あいつ実はバカ？」

「……。」

手応え……。

「はい。」

あつた。

「あ、やっぱバカかあいつは。」

「ええっと……言いくいんですがそんなんです。」

「魔王としての素質は十分なんですがね……。」

「で？どこがどうバカなんだ？」

「計算ができないんです。」

「それと方向音痴。」

「なるほど。そういやこないだ、家に来るのに鎧取ればしんどい思

いせんでも済んだのに、家に着いてから鎧取って『やっぱ鎧は嫌い』

とか言ってたな（第三の話参照）。」

「ああ、いつつも一人でいる時は下着で過ごして……あ。」

「……。」

双子の片割れ、思わず失言……。

「え、いやあの……。」

「サイテー。」

香苗ともう片方が同時に言う。

「そんなの覗いて何の得がある。」

「ツッコむべき所はそこではないでしょう。」

香苗に言われた。

「とゆーより、何故おま・・・あなたが魔王様を知ってるんですか！？」

あ、言うの忘れてた。

「家で保護してるから。」

あつさり言う俺。

「ほ、保護って・・・人間であるおま・・・あなたが？」

「そ。」

「え、リュウちゃんともそうなの？」

「そ。」

「そ。の一言で済まそうとしないでよ。」

うっせーもう何かめんどいんだよほっとけ。

ああ、にしてもクルルの奴、自分にも仲間がいたなら言えっただよ全く。

「さて、クルルの事は伝えたい俺はもう行くぞ。」

立ち上がる俺。

「え、もう行くの？」

「ああ、また今度な。」

あ・・・。

「聞くの忘れてた。お前ら名前は？」

めんどくさいの方が優先させられてたから名前聞くの忘れてた。

「あ、はい！カルマ・ロウです。」

「僕がケルマ・ロウ。」

やっぱ見た目も似てたら名前も似てるな。

「あ、それと・・・。」

「「？」」

「香苗に謝っとけよ。」

「へ？」

突然名前出してびっくりしたのか、素っ頓狂な声を上げる香苗。

「助けてもらったのに、包丁投げつけた上に包丁突きつけたんだからな。警戒してたとはいえ、恩を仇で返したことに変わりねえ。謝るのが道理だが。」

「……。」

「じゃ、後は任したぞ香苗。」

「あ、うん……帰りは気をつけてね。」

何に気をつけろってんだ？まあ口に出して言うことでもないだろうから適当に手え振って香苗の家を出た。

「やれやれ、日が沈みかけてんな。」

遠いお空で日が消えかけ、周りは今は薄暗い。随分遅くまでかかった。

「さて、帰ってあいつらに報告せにゃあな。」
腹もすかしてるだろうし。

第七の話 香苗の家にて（後書き）

龍 更新遅かったな。

作 まあ受験シーズンだからな。更新は気分転換つつーことで。

龍 さいで。

作 おうよ。

第八の話 やあっと騒動始まるよ・・・やれやれ<前>(前書き)

更新遅れてすんませんでした。

第八の話 やあつと騒動始まるよ・・・やれやれ<前>

『・・・・・・』

ん、こりやちよつとまずいなあ・・・今の状況。

説明。現在地は我が家のリビング。そして我が家には俺、久美、雅、香苗、涼子さん、エリザさん、美香、美紀、アルス、クルル、ファイ、ステイル、リリアン、ロウ兄弟がおります。まさに全員集合。位置はまず俺の左右にはアルス、クルルが挟んだように座り、当の俺は長方形テーブルで言うと特等席（どう言えばいいんかわからん）に座っている。そしてアルスのいる右側にはステイルとリリアンがおり、対してクルルのいる左側にはロウ兄弟が座っている。ついでにファイは俺の肩に乗っている。テーブルからものっそい殺気が立ち上っている。ついでに雅達は和室へと退散してこちらの様子を見守っている。興味津々なご様子。で、俺は代表（？）としてテーブルに残ってこいつらの様子を見守っているわけだが・・・。

え？どしてこーなったか説明してない？

・・・

あ、忘れてた ってなわけで説明させてもらうんで。

「ただいま。」
すっかり暗くなった時間帯に俺は我が家へと帰宅。うん、疲れた。
「リュウジさん。」

いきなりクルルが俺に抱きついてきた。

「おい、何だよ。」

「り、リュウジさん・・・おかえりなさい・・・。」

アリスがリビングから顔を覗かせた・・・ボロボロ状態で。

「って、何だよその顔。ボロボロじゃん。」

「うう・・・魔王がお腹すいたーって言うて・・・。」

ああ、なるほど・・・空腹で暴れだしたか。

「ああスマンスマン。ちよつと用事でな。」

「うう・・・ものすごくお腹すいた上に外にも出られなかったから
暇で暇で死にそうだったよ。」

暇で死ぬってそりゃ恥ずかしい死に方だな。

「でも外に出たかったら誰か一人残して出ればよかったのに。」

「だって迷うもん。」

あそつか。

「そりゃ盲点だったな。」

「うう・・・。」

にしてもまあ・・・ちよつと可哀想だな。腹減らした上に退屈させ
ちまったし。

「とりあえずどきな。メシ作ってやつから。」

「はぁーい。」

さつきとは打って変わって嬉しそうに返事するクルル。

「。。。。」

そして何故かちょっと不満そうな顔をしたアリス。

「おい、どうしたアリス？不満そうに。」

「別に・・・とゆーよりアルスだってば。」

「はいはい。」

素っ気なく言うアリス・・・もといアルスの抗議を適当に流してリ
ビングへと入る俺。

「あ、後で治療してやっからな。」

「あ・・・はい。」

アルスに言うと少し嬉しそうに返事をした。

「。。。。」

今度はクルルがムツスー・・・。

「何か文句あんのか？」

「別に。。。。」

こいつも素っ気ねえ。

「？」

全く訳がわからんな。

「そっぴやファイファイはどした？」

晩飯の焼き魚定食を食べながら聞く俺。

「ングング・・・何か枕の上で昼寝してから起きないよ？」

「ほお、昼寝ねえ。」

「うん。ムグムグ。」

「・・・物を食いながら喋るな行儀悪い。」

「え〜？」

「え〜じゃありません。」

「はあ〜い。」

魔王ってそーゆー教育してねえの？

「……。」

「あ？どーしたアル……アリス。」

「いえ、ちよつと……つーか今確実に言い換えたでしょう!？」

「いやいやそーんなわきゃない。」

「棒読みで言っても説得力のかけらも無いですよ!」

「で、どしたん？」

(流された!?)

軽くシヨックを受けたような顔になったアルス。こいつはおもしろい。表情豊か。因みにほつぺと鼻に絆創膏を貼り付けているのはあしからず。

「えつと……やっぱり……仲間の事が気になってしまつて……。」

あ、そんなことが。

「心配すんな。皆元気だったぞ。」

「え、あ、そうですね。よかった。」

「なぐんだ、元気だったんだ。よかったね。」

「つーかクルル。お前の仲間もいたぞ。双子の。」

「ええ!？カルマとケルマもこつち来てたの!？」

「気付こうぜ、魔王さんよ。」

「へへ」

「いやそこ照れるとこじゃないつて。」

「同感だ。はっはっは。」

「あはは」

「……つて、ちよつとストップ。」

「「？」

「何でリュウジさん……皆が無事なの知ってるの？」

「……あ。」

「まあとりあえず皆いたからよかったじゃないの。」

「はい……。」

頭にコブを付けたアルスとクルルは小さな返事をした。何故頭にコブ付けてるかというと、俺が殴ったから。大声で八モられたらうるせえし。夜だし。近所迷惑だし。

「で？やっぱ会いたいだろ？」

「そ、そりゃもちろん！」

「じゃ連絡しといてやるよ。今は夜だし、ダチんところにいるから大丈夫だろう。」

「あ、ありがとうございます。」

いや、まあにしてもホント運がいいとしか思えねえよな。皆して俺のダチな訳だし。

「さ〜とと、電話電話……。」

連絡するべく、電話を取ろうと立ち上がったと同時に……。

【ピンポーン】

誰か来るんだよなこれが。

「ん、誰だこんな時間に。」

電話じゃなくてインターホンの受話器を取る俺。

「あいよ、どち……。」

言いかけて固まる俺。

あ、因みにうちのインターホンは受話器を取るとテレビのように画面が出て誰が来たかわかるっつー奴だ。一般家庭でも普及してるよな？あれ。

でき、画面に出てたのは、雅と、涼子さんと、

スタイルさんが出ててさ。

いきなりビックリよ俺は。

「……様でしょうか？」

『何だ今の中途半端に区切った間は。』

「イエ、ナンデモナイアルヨ？」

『日本語おかしくなつとるぞ。』

「……何しに来たん？」

『いや……スタイルがどーしてもお前ん家にいるアルスとかいう奴に会いたいつて言うから……連絡しようとしたら飛び出すし……』

「……そうか、今開けるぞ。」

画面の横のスイッチを押し、鍵を開けた。客が来たらちゃんとお迎えするってーのが礼儀だから玄関まで行く俺。

「え、誰か来たの？」

呼び止めるクルル。

「ああ、スタイル。」

「ええ!？」

アルス立ちあがった。そりゃそうか。

「ちよつと待つてる。」

そう言つて玄関へと向かう俺。そこにはインターホンの画面に映っていた面子が揃っていた。

「龍二、こんな時間にスマン。」

「夜分にごめんなさい。」

雅と涼子さんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「いや、気にすんなよ。」

「リュウジさん!アルスは、アルスはどこにグブフォオ!？」

飛び掛る勢いで迫ってきたステイルの顔をぶっ飛ばす。

「あ、わり。条件反射だ。」

「「ひど。」」

楠田姉弟Wツッコミ。

「・・・あ。」

確認してみたらステイル気絶してる。やりすぎた。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・まいつか。」

「「いやよくないよくない。」」

で、しゃーねえとゆるわけで・・・。

「おゝい、ステイル連れてきたぞゝ。」
リビングに入る。

「「・・・。」」

「?どしたあ?待望のお仲間だぞ。」

「・・・リュウジさん。」

「?」

「ステイル・・・引きずるのやめませんか?」

「何で?」

「いや、何か見てて痛々しいから【ゴン】・・・。」

あ、やべ。棚の角っこにステイルの頭ぶつけちゃった。痛そゝ。

「んゝ・・・まあ大丈夫だろ。」

「いや大丈夫なわけねえだろ。」

おおっ、雅が後ろから又つと登場。又つと。

「で？その子かお前の言う勇者とかいうのは。」

「え？あ、はい。アルス・フィートといいます。えと、よろしく。」
いきなり言われてドモるアルス。そして俺はステイルをソファの上に寝かす。

「で、私がクルル・バステイっていいまあす。」

クルルも自己紹介。こいつは人見知りしねえな。誰とでも仲良くなれるだろう。いいことだ。

「俺は楠田 雅だ。よろしく。」

「その姉、楠田 涼子です。」

雅の後ろからピヨコンと出てくる涼子さん。

「あ、あの。ボクの仲間であるステイルを助けてくれて、ありがとうございます。」

律儀にもペコリと頭を下げるアルス。ふむ、礼儀正しいやつちゃ。いいことだ。パート2。

「へえ〜、二人とも可愛いわねえ。勇者とかつてもつと猛々しい人かと思っただけど、予想外だったなあ。この子なんてまるで女の子みたい。」

「姉さん、初対面の人に失礼だぜ？」

「あ、ごめん……。」

雅に咎められて素直に謝る涼子さん。純粹なだけに一刀両断すんだもんなあ。ま、俺はどうってことなかったがな。でもこの二人、アルスが男って思ってるようだな。

「あ、あの……。」

「ありえ？アルスは女だよ。立派な。」

あ、アルス言おうとしたのにクルルに先言われた。

「マジかよ？」

「え〜！？私でつきり……ホントごめんね？」

本気で驚愕する二人。つか、そんなビックリすることか？

「あ、いいです別に。もうバレてもしょうがないし……。」

そりゃこつちの世界で素性隠してもねえ……。

「まあ適当に座れ。お茶用意すつから。」

「ああ、すまない。」

「私ミルクティー」

弟のほうは年上っぽいぞ涼子さん。

「あいよ。」

適当に返事をして台所へ向かおうとした。

【ピンポン】

また鳴ったよ……。

「あゝ今度は誰だよ？」

何となくかつたるくなってきたながらもインターホンの受話器を手に取った。

……。

取ったまではいいさ。

『こんばんは龍二くん。』

『こ、こんばんは……。』

『……。』

今度は久美親子+リリアンさんですかい……。

「……今開けるぞ。」

鍵を開けて玄関まで行く俺。後ろでは訝しげな顔をした皆様方がおられます。で、玄関先に行くと久美らが出た。当然か俺が開けたんだし。

「ごめんねえこんな時間に。」

「本当にすまない。迷惑なことはわかっていたんだが……。」

久美とおばさんが頭を下げてるのに対し、リリアンは俺をじゅっと見つめてるだけ。何でやねん。

「いや、いいけどさ別に……理由は？」

まあよかねえけどな。食事中に。

「それが……。」

「……アルスはどこ？」

「つとゆーわけなのよ。」

はい、納得。要はリリアンもスティル同様、アルスが心配で飛び出してきたわけだ。

「はあ。わあつたよ。ま、入れや。スティルもいるぞ。」

「……わかった。」

スティルは別に何の反応も無しなのねん。

「おーい、も一人お仲間が来たぞ〜。」

「え……リリアン！」

「アルス、無事で何より……。」

いつつも無表情だよなあこいつ。嬉しいんかわからんわい。つーかこんな時間に押しかけてくんなや。

「？その娘は？」

クルルに注目するリリアン。

「私？クルル・バステイだよ。」

かわいらしく言わんでよい。

「……よろしく。」

どうでもいいのねん。

「……それより龍二。」

「ん？」

いきなり久美に声を掛けられた。あ、リリアンだと思った人はごめんちゃい 何か謝っちゃったけどなんでだろうなあ？

「君……もしかしてこの二人を家に置いているのか？」

「？いきなり何言い出すんだオメエは？」

「いいから答える！」

おつとお、いきなり顔を近づけるから思わず仰け反っちゃったよ。

それにさあ、大声上げるから周りの連中黙っちゃったじゃん。

「ああそつだが何か？」

「……。」

じーっと睨んでくる久美。あはは、睨まれるような事した覚えはないんだがなコンチキショウ

「……とりあえずどいてくんねえか？」

背中痛いし。顔超近いし。息かかってるし。

「……。」

「おゝい、どいて。」

「……。」

「もしも〜し？」

「……。」

「おゝい。」

「……。」

「……。」

「……。」

『どけつつつてんだろーがやっやっどどげぞ。』

【ズビュン！】

「す、すまない！」

すぐに離れて頭を下げる久美。全く、言いたいことあんなら俺みたくにハッキリ言えよ。でもさ、俺言いたいこと言っただけなのに何で皆してビビったように縮こまっちゃってんの？少しシヨックよ俺？傷ついちゃったよ俺？俺のハートは繊細なんだぞ？ダイヤモンドのようなハートなんだぞ？

「いやダイヤは硬いだろーが。」

また雅に思考読まれた！！

「声に出てたっつーの。」

あらん、マジ？

「まいいや。で？何でそんな怒ってんの？」

「だ、だって・・・一人暮らしの男性の家に女の子二人置いておくっていうのはどうかと・・・。」

・・・

「お前・・・。」

「？」

「よくアルスが女だってわかったな。」

『そこかい。』

全員ツツコミ。一人ボケな俺。疎外感。ああ寂しい。

「大丈夫なんじゃないのか？少なくともこいつはそんなこと寝てる奴にしないし、とゆーか頭の片隅にも置いてないだろう。」

「そ、そうか・・・ごめん、怒鳴ったりして。」

雅のフォロー？を聞いて謝る久美。つーかそんなことって何だ？あれか？寝てる時に顔に落書き、略してラク顔って奴か？

・・・。

やってみたいから今度やったるか。どっちかに。

「油性ペンでいいかね？」

「へ？」

久美にキョトンとされた。そりやそうか。

「もう久美ちゃんたら嫉妬しちゃってねえ」

「ホント、口調は男勝りだけど可愛いわよねえ」

「か、母さん！涼子さんまで！！」

何かエリザさんと涼子さんからかわれてるけど何の話だ？よくわからん。

「まあ何はともあれ全員集合でよかったじゃないか。」

雅、お前いいまとめ役になれるよ。

「そうそ！助けてくれた人達が皆いい人達でよかったじゃん！」

クルル、もつともなことを言う。ところがリリアンが思案顔になって・・・。

「・・・ところでファイファイは？」

「あ。」

忘れてたな・・・。

「ま、いいじゃん。」

「よくない！！とゆーか私もさっさと起こせ！！」

おお、和室から飛び出してきた。お目覚めですかい。そして口悪いぞデメエ。そんな子には・・・。

「ひっ!？」

ささつとアルスの髪に隠れる妖精。キンチョール出そうとしてたのが見えたか。

「ファイファイ……。」

「あ、リリアン! ってあれ? スティルは?」

「そこで寝てる。」

「あ、ならいいや。」

スティルってこいつらの中ではどーゆーポジションなんだ? 大体わかるがな。あえて言わん。

「ふ、二人ともいくら何でも放置っていうのはどうかなあつと……。」

お前が抑え役かアルスよ。大変だなあ勇者も。いろんな意味で。

「え? 寝てるだけでしょ? じゃ大丈夫だつて!」

「スティル……意味は鋼。打たれ強い。だから平気。」

「英語かよ。しかも正しくはSteilスティールだろ。」

さすが優等生の雅。ツツコミにも知識が入っている。まあ『名は体を表す』ともいうな。

「あら、妖精って大人でも見えるのね?」

「ネバーランドね。」

エリザさんと涼子さんは何ともFantasticな話してる。ネバーランドでピーターン住んでるとこだっけ? いいよねあのアニメ。

「よ、妖精って……本物?」

久美よ、今更驚くことでもあるまいに。

「って、皆は驚かないのか?」

「別に? 虫と勘違いしたつてことぐらいで。」

「こーゆーのがいても変じゃないし。」

「いいじゃないの妖精」

「可愛いし」

「……これはあたしがおかしいのか? そうなのか?」

そうなんだろうな。

「君今頭の中で失礼なこと考えてなかったか!？」

「はい?何のこっちゃ?」

「うう・・・龍二がいじめる・・・。」

蹲ってしくしくと泣いてるおバカさんはほっておこう。

「それにしてもまあこんな時間に全員集合とは・・・。」

「・・・ん?ちと待てよ?アルスの仲間全員いるよな?そんでそいつらは俺のダチところで世話になったんだよな?で、クルルの場合合は部下?の双子がいて、そいつも俺のダチが世話してっから・・・。」

【ピンポーン】

・・・やっぱな。

「おい、龍二。誰か来たぞ?」

「受話器取らんでもわかるわい。」

「?」

雅がキョトンとした顔になった。それを尻目に玄関まで行く俺。もう誰が来たかはわかりきってたんだよ。

「・・・。」

ドアスコープから覗いてみると・・・。

「やっぱな。」

予感的中。

【ガチャッ】

「よお。」

「あ、リュウちゃん。」

「こんばんはー!」

「……。」

「……。」

「夜分遅くにすいません。」

あゝ、一番上は俺だから二番目から紹介。

香苗

美紀

美香

カルマ？

ケルマ？

・・・美紀と美香なら付き合い長いから検討はつくが、ケルマとカルマだけはわからん。

「やっぱな。まあ入れや。」

「あれ？私達がこんな時間に来たのに疑問ないの？」

「先客がおりますからなあ。」

「……？」

姉妹そろって首を傾げる。変なところで息があつとるのがスゲエな。

「あ、ちよつと待つてろよ？」

とりあえず玄関に立たせてリビングへと戻る。

「どうしたんだ龍二？」

「スマンスマン。香苗が来たからさあ。」

「あ、香苗ちゃんも来たの？」

エリザさんが涼子さんとお話の途中でこっちに振り返った。そういや仲よかつたつけこの二人。

「そうなんだが・・・ケルル？」

小声でケルルに呼びかける。

「？何？」

「お前が魔王っていうのはアルス以外にはバレてねえんでな（ステ

イル以外)。」

「うん。」

「そんでな、今玄関にカルマとケルマがいるんだがな。」

「うん。」

「お前が魔王つていうのはステイル起きるまででいいから少しの間黙つてもらえないか？今の時間に問題増やされたらたまんねえからな。」

「うん。」

「・・・まあ返事するだけマシだな。」

「へへっ」

何故か照れた。

「よし、んじゃ頼む「魔王様あ！！！！」・・・。」

はい、計画台無し

「あ、カルマにケルマ。元気してた？」

「元気してたじゃないですよお！！」

「おい、抱きつこうとすなこのバカ。」

突然入ってきたカルマとケルマ（やつぱどつちかわからん）がケルルと再会を喜び合つて・・・んのかわかんねえ。まあ一応喜び合つてる間に、香苗達がリビングに入ってきた。

「ちよつとカルマくん、ケルマくん！」

「あ、香苗。」

雅がいち早く気付く。

「あ、雅くん。久美ちゃんも来てたんだ。」

「来たのか、香苗。」

久美、いつの間にか復活。

「久しぶりね、香苗ちゃん。」

「一ヶ月ぶりかしら？」

ちやっかりテーブルを囲んでリリアンとお話をしている涼子さん達。

馴染んでるねえリリアン。

「涼子さんもエリザさんもお久しぶりですね」

「こんばんは」

「・・・どうも。」

「あら〜美香ちゃんと美紀ちゃんも来たの〜？」

そっぴい美香と美紀は涼子さんとエリザさんのお気に入りだとか。マスコットみたいな感じだしな。

「あれ？またお客さん？」

「きゃー！この子可愛い！！」

「つて、にゃああああ！？」

「ファイファイ！？」

あ、アルスの肩に乗ってたファイファイが香苗に捕まった。言うの忘れてたな。香苗が可愛いのが好きだったというの。

「すごい！妖精さんだあ！！」

「・・・きれい。」

「ちよちよちよ、何あんた達！？く、苦しい、苦しいって！！」

美紀と美香を交えた頬すり合戦に、俺はただただ見てるだけ〜

「つてリユウジ！見てないで助けてよ！」

「んにゃ、楽しいから見とく。」

「裏切り者　　！！（泣）」

あ、泣いた。

「・・・ちよつと。」

「？」

リリアンが肩を叩く。

ついでに顔がすごい。怒ってんのかねこりゃ。

「何だ？」

「・・・あの子。」

指差した先には・・・ケルマ？カルマ？どっちだったけ？顔似すぎ。

「へ？僕？」
「。。。。」

「今。。。『魔王様』って言った。」

『あ。』

イエイ、結構重要なこと忘れてた・ぜ

「ま、魔王!？」

うおう!？ステイルが起き上がった!ビックリ!!

「あっちゃんバレちゃった。」

「ケルマ。。。。」

「す、すいません!!」

あ、あれがケルマか。ややこしい。

「く!魔王め、今ここで成敗ギャブツ!？」

杖を振りかざそうとしたステイルの肩間に『新明解国語辞典』を投げつけて黙らせた。「ゴスツ!」といい音がした。確実に角っこに当たったね。確信犯ですけど俺。

『。。。。』

「何だ？」

『何でもありません。』

俺と気絶したステイルを除く全員がビシッと敬礼した。うちは軍隊か。

「何気にステイルとリリアンよりリュウジさんのがひどい。。。。」
「アルスが何か言ってるが、気のせいだ。」

あゝあ、問題増えちゃったよ。ねみ〜。

第八の話 やあっと騒動始まるよ・・・やれやれ<前>(後書き)

ってな感じで、後半に続く!

あ、初挑戦の短編小説『嫉妬したがり屋』もよろしくお願いします。珍しく普通の主人公です。多分。

第九の話 やあつと騒動始まるよ・・・やれやれ<後>

さて、その後はリリアンとカルマとケルマが放つ怒気を龍二が適当に収めつつ、一旦話し合いをしようというわけで、とりあえず龍二が仲介役に買って出て、勇者側と魔王側で話し合おうじゃないかというわけで雅達には和室へと移動させてもらった。ステイルが目覚めたのは三十分後つつーわけで、前編の冒頭に至る。因みに龍二は緊張はしてません。ぶっちゃけ。

「さて・・・。」

龍二が沈黙の中喋りだす。

「まずは俺から言いたいことがあるんだが。」

『?』

「テメエら時間考えろや。」

因みに、今は十時半。もうよい子はおねんねの時間である。

「う・・・そ、それは・・・。」

「アルス・・・心配だったから・・・すぐに飛び出してきた。ステイルを遮って言うリリアン。哀れだなあステイル。」

「じゃ何故に俺がお前と別れた後に来なかった?あ?」

ちよつと怒気を含めて言う。実を言うと、龍二はこんな時間に押しかけてきたステイル達に対して怒っていた。そりゃ夜遅くに来られたら怒るが、急用でどうしてもという事+いきなり来て申し訳ないとか礼儀というのがあれば別だ。現に、雅達はその事を肝に銘じているから怒る理由はない。

ところがどっこい、今日の前にいるステイルとリリアンとカルマとケルマは、いきなり来たのにすいませんの一言も言っていない。しかも自分達の用事なのに雅達が謝るといふのは理不尽である。

ま、それよりも龍二にとって大事なのは……。

「テメエらのせいで今日見たかった番組見れなかったじゃんよ。どうすんのよオイ？」

自らの平和な時間を邪魔されたことだった……。

「ば、番組って何ですか「黙らっしやい。」……ハイ。」
睨まれたステイルは押し黙った。

「……邪魔したことに關しては……ごめんなさい。」
無表情ながらも頭を下げるリリアン。

「謝ってすんだら警察いらん……と言いたいところだが、まあ心配する気持ちもわからんでもないからな。大目に見てやるう。」

「おお！リュウジさん太つ腹「ただし。」？」「
フィフィの言葉を遮る龍二。

「次同じようなことしたら……『消す』。」

【ゾクッ（）（）（；）（）（）（）】

『消す』という部分に殺気が込められ、思わず全員身震いした。和室にいる方々も殺気が届いていたのか一瞬で縮こまった。おまけにあえて『消す』という単語を使った為にリアリティが増した気がした。

『……ホントすみませんでした。』

テーブルに座っている面々は揃って頭を下げた。何故か龍二の家に最初からいたアルスとクルルとファイファイまで下げてるし。

「ふう・・・で？お前らは一体どういった関係なん？」

龍二が一息つくと、低姿勢だった面子にまた殺気が蘇った。

「貴様ら・・・ここまで来るとはしつこい連中とはな。おまけに魔王は少女に化けていると見た。」

ステイルがいつもよりドスを効かせた声で言う。

「い、いやでもあれは私達が偶然巻き込まれたわけで・・・第一、これは私の元の姿なわけで・・・。」

魔王、お前微妙に低姿勢だぞ。

「でも・・・手間が省けた・・・。」

そしてゆっくりと斧を持ち上げるリリアン。

「ここで・・・殺す。」

「え、ち、ちよつと!？」

「おい待て。」

クルルが慌てる。おいおい。

「魔王様、ここは我々が。」

「この間の怨み、晴らさせてもらっぞ!」

「お前らも待て。」

カルマとケルマがそれぞれレイピアのような剣を異次元から引き抜き、立ち上がる。

「ちよ、ちよつとリリアン!？」

「上等だ・・・ここでケジメをつけさせてもらっぞ!」

「おい、落ち着けつて。」

ステイルも杖を取り出して構える。

「よっしやー! 返り討ちよー!」

「待てつて。」

そして赤く光るファイファイ。

「つて、ステイル!? ファイファイまで!？」

「おい・・・。」

龍二が怒鳴って静まり返ること三分（全員そのままの姿勢で硬直）
・
・
・

『スワレ。』

『ひ、ひゃい……。』

あまりの龍二のキレっぷりに怯えながらも座りなおす一同。ついでに今の龍二のセリフも無機質なものだった。

「よし、とりあえずお前らがお互い敵同士だったのはわかったが・

・アルス、クルル。」

「は、はいー!!」

すぐさま姿勢をピシッと直す二人。

「お前ら敵同士なのに仲いいよな？何で？」

「……………」

龍二よ、それはお前が気が付かないだけで最初なんて本気で殺し合
いしてたんだぞ？

「そうなんか？」

作者に聞いちゃいかん。

「あ、そう。」

だから返事すなっつーの。

「リュウジさん、誰に話しかけてんの？」

「天の声。」

「????？」

クルルが聞くが、当然理解できなかった。

「ま、別にどうだっていいや。」

『いいんかい。』

そして一同、龍二のどうでもいいや発言にツッコミ。じゃ聞くなよと言いたい。

「でもまあ、始終そうやって喧嘩されたらたまらんな……。」

腕を組んで考える龍二。やがて何か思いついたかのように手を叩いた。

「そだ。ええこと思いついた。」

何故に中途半端に関西弁？

「はい、和室にいる方々。全員集合。」

楽しそうに言いながら和室に向けて手招きする龍二。

「何だよ？」

雅が最初に出てきた。

「まあいいからいいから。」

適当に流す龍二。やがて全員出てきて、頭の上に？を浮かべた。

「さてと……。」

「じゃ第一回、『どいつの家で居候すっか今決めちまいましたよ』せ

「？」

「だからって何故に居候なんだ？」

「雅が最もなことを聞く。さすが常識人。」

「社会勉強だ。」

「なるほど、って納得しかけたけどやっぱおかしくね？」

「細かいこたあ気にすんな。」

「む・・・しょうがねえな。」

おい、常識人。

「それによ、帰る方法はあるんか？見た感じ無さそうなんだがな？」

「か、帰る方法なら・・・あ。」

勇者チームと魔王チームは一斉に龍二の肩を見る。そこには、チヨ

コンと座っているファイファイが。

「そういえば、私達がここに飛ばされた原因は、ファイファイが時空魔法使ったからなんですよね？」

「そういえば・・・そう。」

「じゃもっかいファイファイが時空魔法唱えれば・・・。」

「ボクらも帰れるってことですよね？」

「そうなるな。」

「で？どうなのさファイファイ？」

全員がファイファイに注目する。

「・・・。」

それに対し、顔がだんだん青くなってゆくファイファイ。

・・・。

これはあれだね。“やっべー”って顔だね。

「え、え〜つと・・・。」

言いよどむファイファイ。それをじ〜つと見つめる一同。

「じ、実は・・・。」

「時空魔法って……“一回こっきり”しか使えないのよね……」

『……………』

やはり沈黙。

「えっとそれはつまり？」

微妙に棒読みなアルスが聞く。

「つまりはね……帰れませ〜ん」

テヘッと可愛らしく舌を出すフィィィさん。

『……………』

『ぶざっけんな—————!!!!!!』

「ぴええ!?!」

【ビュン!】

物凄い速さで龍二の背後に隠れるフィィィ。隠れられた本人はいたって平然と鼻くそほじっていた(オイ)

「帰れないってどうゆうことファイ！？」byアルス
「それって永久にここにいろってこと！？」byクルル
「まだやるべきことがたくさんあるのに！？」byステイル
「ファイ・・・責任取る・・・」byリリアン
「とゆーか舌出してごまかそうとすな！」byカルマ&ケルマ
「あううう。」byファイファイ

もう何が何だか。

「まあとにかく落ち着きやがれテメエら。」
龍二に言われ、立ち上がっていたアルス達は渋々席に座った。純粹に龍二を怒らせるのが恐いから、という意味も含めて。

「まあ、どっちにせよ帰れなくなっちゃった。ってことだな。」

『・・・』

龍二に言われて無言になる一同。

「じゃ、それぞれ居候決定！ つーことで。」

「や、やっぱりちよっと待ってよ。」

アルスが手で制する。

「何だ？」

「いや、だって・・・居候だよな？ってことは一つ屋根の下で暮らせっていう意味ですよな？」

「そうに決まってるんじゃない？」

「それなら、皆さんの意見も聞かないといけないじゃないですか。いきなりそんなこと勝手に言われたら皆さん困るでしょうし・・・」

「
アルスのその遠慮しがちなセリフに、龍二はため息を吐く。

「なんだそんな事か。俺はいつでもバツチコイだぜ？今両親共々不在だし。」

「俺の家も別に・・・なあ姉さん？」

「私の家なら誰だって大歓迎よ。」

「あたしの家だつて大丈夫だ。」
「そうね 新しい家族が増えたと思えば。」
「私達だつて基本何でもオツケーよね。」
「ね。」
「・・・別にいい。」

何ともおおつぴらな性格な人々である。

「は、はあ・・・。」

そんな彼らに啞然とするアルス。

「ま、そんなこんなで誰がどの家に居座るのか、適当に決めちまうへ。」

さつさと寝たい龍二は何かどことなく投げやりな感じになってきた。

「じゃまず雅の家にはスタイルな。」

「何でだ？」

「最初に出会つたのが雅だが。妥当だろ？」

「あ、なるほど・・・うう。」

適当という割には理になつてんじゃん。でもスタイルが何か涙こらえてるが何でなのか作者は知らん。

「それで久美の家にはリリアンな。」

「まかせろ。責任もつて世話するぞ。」

「私・・・犬じゃない。」

「い、いやそーゆー意味で言つたわけでは・・・。」

さつそくりリアンに遊ばれる久美。

「で、カルマとケルマは香苗の家。」

「わ、わかりました・・・。」

「まあ、行くあてもないし。」

「じゃ、今日からこの子達の遊び相手ね。」

「よろしく。」

「よろしく・・・。」

「……………」

美紀と美香の眩しい笑顔に顔を赤らめるロウ兄弟。

「で。俺ん家には……………」

「……………ファイファイとボクと？」

「私？」

「そ。」

それを聞いて若干渋い顔をする久美と香苗姉妹。

「これで異論はねえな？」

龍二が全員に聞く。

「別にないな。」

「ステイルくんなら慣れてるから大丈夫ね。」

「よ……………よろしくお願いします……………」

意気消沈気味なステイルだが異議はない。

「まあ……………龍二に限ってそれはないしな。」

「よろしくねりリアンちゃん」

「よろしく……………」

別の件で異議がある久美だが、居候オツケー。

「リュウちゃんが言うなら……………」

「む……………」

「……………」

「あ、あの……………」

「ま、まあ異論はないからな。」

メチャクチャ不満たつぷりな顔をしている香苗と双子の姉妹だが、

まあ異論なし。

「……………わかりました。」

「グスン……………」

「まあ……………嫌じゃないしね（いよっしや—————！！！！）。」

「じゃ決まりだ。」

複雑な顔を見せるアルスと皆に怒られてまだ泣いてるファイファイと冷静を装っていて内心めちゃくちゃ喜んでるクルルも賛成。

「・・・ファイファイ、まだ泣いてんの？」

「ううっ・・・クスン。」

龍二の服の袖を掴みながらグズグズと鼻を吸いながら泣く妖精。見て可愛らしいが、泣かした人達にとっては罪悪感を感じずにはいられない。無論アルス達。

「あゝあゝもう泣くなよ。問題は解決したんだからさあ。」

「うううう・・・。」

「ふう・・・しゃあねえなあ。」

ため息を吐きつつも袖にしがみついているファイファイに右の掌を差し出す。

「ほら、乗れ。」

「・・・。」

ファイファイがおずおずと掌に乗ると、もう片方の手でファイファイの小さな背中を撫で始めた龍二。

『！』

それを見て固まるアルス、クルル、リリアン、久美、香苗、美紀、美香、涼子。

「よしよし。いい子いい子。」

子猫を撫でるかのような感じで擦る。

「・・・。」

効いたのか少しずつ泣き顔から眠そうな表情へと変わっていくファイファイ。

「よしよし。」

なでなで。

「よしよし。」

なでなで。

「よしよし・・・。」

なでなで。

「よし・・・よし。」

なで・・・なで。

「よし……。」

なで……。

「よ……。」

……。

「……ゲウ。」

ファイファイより先にダウンした龍二。

『つて寝るんかい!!!』

またもやハモリツツコミ(大多数Ver)が発動した。

「り、龍二!くれぐれも変な気を起こすな!!」

「何がだ?」

「ほらほら、妬いてないで帰るわよ久美ちゃん。」

「か、母さんしつこい!!」

「……早く行く。」

「じゃ俺らも。」

「龍ちゃん、今度私の頭も撫でて」

「帰るぞバカ姉さん。ステイルも。」

「は、はい……。」

「いいなあファイファイちゃんだけ……。」

「私達撫でられたよー」

「……イエーイ。」

「な、何でもボクらも……。」

「まあ、嫌ではなかったな……。」

「玄関でギャーギャー騒いでないではよ帰らんかい。」

「「「はい。」」」
「「はい……。」」

そんなこんなで、皆はそれぞれの家に帰っていった。もちろんボクの仲間と魔王の双子の部下をそれぞれ連れて。

その後、リュウジさんに撫でられてるフィフィが羨ましくて皆して頭撫でてもらおうとして……あまりにもうるさくて怒鳴るのもめんどくさくなってきたらしいリュウジさんは、『また今度してやる』と言って皆を落着かせた。でも子供であるミキちゃんとミカちゃん、魔王の部下二人揃って撫でてもらっていた。理由は子供優先らしい。

それを見ていたボクまで、いいなあ、と思ってしまった。

いやそれより前に、フィフィが撫でられてるのを見てた時もそう思ってしまった。

これって……なんて言うのかな……。

「あ〜やつと帰ったぜ……ねむ。」

ふあつと欠伸をするリュウジさん。もう既にフィフィは自分のフトン、もとい枕で眠っている。あのフトンは大きすぎたらしくて急遽枕にしたらしい。

「リュウジさんねむ〜い！」

魔王、居候なのに駄々こねちゃダメだと思う。

「そだなあ、寝るか。」

あ、気にしないんだ。そういえばこんな人だっけ。

そんな日は経ってないのに、この人の性格が少しだけわかってきた気がする……まだ謎は多いけど。

「布団敷くぞ〜。手伝え〜。」

「はい。」

「あ、はい。」

呼ばれたんでフトンを敷くボクとボク。でもいまいち敷き方がわからないな〜。

「はい敷けた。」

「「はやつ!?!?」」

こっち二人でやってんのに敷くの早すぎリユウジさん!!

「じゃ、敷けたらさっさと寝ろよ〜?」

「はい」

「。。。。」

「?どしたアルス。」

「あの・・・また迷惑かけてしまうことになりましたね・・・。」

「そうだな。」

「・・・そこ否定しないんだ・・・。」

「まあ決まっちゃったもんはしゃあねえじゃん?」

「決めたのアナタでしょうが。」

「気ニシナ〜イ。」

「誰!?!?」

そんな言い合いの間に・・・。

「すう・・・。」

魔王・・・寝てるし。

「寝るの早いな。さすが魔王。」

「さすがって何が?」

「気ニシナ〜イ。」

「もういいよそのわかんないモノマネ!」

つ、疲れる。短時間で疲れる。

「さて、消灯するぞ〜。」

「はい。．．．あ、リュウジさん。」

「？」

「えっと．．．明日からよろしくお願いします。」

例え短い期間であってもお世話になる人には礼儀を。常識だ。

「ああ、よろしく。」

二カつと無邪気に笑うリュウジさん。

気のせいか、一瞬ドキつとした．．．。

「じゃな。おやすみ。」

「あ、おやすみなさい。」

電気を消されると同時にボクはフトンに潜り込んだ。

「ふう．．．。」

とりあえず、寝かしつけたな。

「さて、と。」

晩飯食つてる間にいきなり雅達が来たから、洗い物が溜まりまくつちまったぜ。そんでそれらをささつと洗うことにした。全部洗うのに5分しか掛からなかったぜ

「で、と。」

明日のご飯である米をといで、炊飯器に入れてタイマーをセットしておく。これで準備万端だ。その後、チャツチャと歯磨きをして時計を見てみる。

「うえ、もう一時過ぎちまってんじゃねえか。」

夜更かしは体に毒だな。さつさと寝よ。

「にしてもまあ．．．。」

俺は和室を見る。

「．．．食費増えそうだなこれから．．．ま、いいや」

俺は二階の寝室に向かった。

第九の話 やあつと騒動始まるよ・・・やれやれ<後>(後書き)

作 さて、いよいよ明日から勇者と魔王との日常生活が始まります。

龍 また長いことかかったなここまできんのに。

作 ついでに今までの全部プロローグです。

龍 プロローグなげえな。

作 気にしたら負けさ。

龍 そだな。

作 それじゃ、これからも頑張りますんで！

龍 こんな野郎に応援よろしく。

作 何？

龍 やるか？

*この後、この部屋はボロボロになりました。

第十の話 買い物へレッツゴー (前書き)

今日から誰からの視点とか書いてどうかな。

第十の話 買い物へレッツラゴー

（アルス視点）

「おいクルル！そつちだ！もつと右！」

「にゅおおおお！」

【ピポラポパ〜】

「いよつしゃようやったクルル！！！」

「イエーイ！熊さんゲット！！！」

ええつと・・・今、リュウジさんと魔王が一緒に、ユーフォーキャ
ツチャー？という物で一緒に遊んでいます。場所はリュウジさんの
行きつけのシヨウテンガイ（商店街）という所だそうです。ボクは
少し遠くから傍観しています。ベンチに座って。何でもあのでっかい
箱の中にあるたくさんあるぬいぐるみを、上に付いてる変な物体で
うまく取るといふ変わった物です。

それでボクらが何で外にいるのか・・・その理由を今から少し説明
していきます。

（三十分ちよつと前）

「買い物行くぞ買い物！」

「へ？」

朝、朝食を食べる途中でいきなりテンション高いリュウジさんが言い出した。いきなり突拍子ないこと言い出したんでビックリした。因みにこの世界特有のオハシ？という二本の枝のような食器はまだ扱いは難しいのでフォークとスプーンで食べてます。

「お買い物！？行く行く！」

魔王はビックリするどころか行くき満々ですねハイ。

「でも何でいきなり？」

フィフィがおコメを一粒食べながら言った。このおコメっていう穀物はボクらの世界にない物で、とてもおいしい。この程よい甘さが何とも・・・あ、話がずれた。

「ああ、お前らの服装目立つからさ、これから生活してく上で必要なものと服買いにいこうと思って。丁度今日も祝日で学校休みだし、タイミング的にいいっしょ？」

あ、確かにボクらの服装とリュウジさん達の服装は違うもんね。

「でもこのまんま出ても目立つよ？」

「大丈夫だ。俺のお古を着れ。多分サイズ合うと思うし。」

「お古・・・ですか。」

「でも外に出るの楽しみだよね！」

「そうだよ〜！」

そういえば・・・この世界がどんなのか、まだボクら知らなかったな。フィフィと魔王はノリノリだけど・・・もうちょっと不安がつてもいいんじゃないかな？

「まあそういう意味もかねて、な？ほれさっさと食って着替えるぞ。」

「・・・はあい。」

くで、現在

まあ、そんなわけなんです。初めて外に出た時はビックリしたよ。

整った道に、頭上に張り巡らされた黒い縄（電線っていうらしい）、そして見たこともない鉄の箱が馬もないのに走りだしたり、でっかい塔のような建物が立ち並んでいたり・・・改めてここがボクらの世界と全然違うんだなって思った。

ボクは普通に驚いたけど・・・魔王とファイファイが走る鉄の箱にビツクリして魔法使おうとした時はホントに焦ったよ。リュウジさんが飛び蹴り食らわせなかったら大惨事だったね。でも飛び蹴り以外に止める方法なかったのかな？

「アルス？」

ファイファイがボクの髪から出てきた。

「何？」

「遊ばないの？あのユーフォーキャッチャーとかいう奴で。」

「ん、ボクはこうやって傍観させてもらうよ。」

「ふん、おもしろそうなのになあ。」

「じゃファイファイは行かないの？」

「ふん、子供じゃないんだからぬいぐるみなんていらわないわよ。」

・・・

「じゃ昨日散々泣いてリュウジさんに背中擦られて寝ちゃったのは誰？」

「うっ！あ、あれは・・・そう！眠たかったからよ！大体、私があるんなことぐらいで泣くわけじゃないでしょ！！」

「・・・誰のせいで帰れなくなっちゃったんだっけ？」

昨日のことをまだ根に持つてるボクはとことんファイファイをいじめた。

「・・・。」

「あああ！ご、ごめん言い過ぎた！」

ファイファイの泣き顔って何故か物凄く罪悪感を感じてしまう・・・今度からほどほどにしよう。

「おーい、お前ら何してんだ？」

「あ、リュウジさん。」
「ナイスタイミング！な感じで戻ってきたリュウジさんと魔王。それぞれ手にはかわいらしい熊のぬいぐるみや猫のぬいぐるみや犬のぬいぐるみネズミのぬいぐるみ鳥のぬいぐるみ虫のぬいぐるみ……」
「つて多すぎでしょ！？つてか虫のぬいぐるみつて！？」
「いやはや取りすぎた。」
「全部可愛い〜」
「おいおい……」
「……それより服はいつ買ってきてくれるんですか？」
「あ、忘れてた。」
「再びおいおい……」

「つーわけで、服屋に来たぞ。」
「何がつーわけ何ですか？」
「いろいろでしょ？」
「そーゆーこと。」
「何がいろいろ！？」
「気ニシナ〜イ。」
「またそれかい！！！」
「はぁ……疲れます。この急な展開と二人の話に。」
「頑張つてね〜アルス。」
「いやボク一人は疲れるつてば一人で休むな。」
「何リュウジさんの肩に乗っかって傍観してんの。いやそれはまあどーでもいいや。」
「それより目の前にあるお店……上には何かこの世界の語句で“エイゴ”つていうらしく、名前は『Happy Happy』と書かれたでつかくて黒い看板がかかっている。リュウジさん曰く、この大きさが普通なんだと言っけどボクらの世界のお店ではこんな大きな看板は使わない。やっぱり世界は違うんだな〜。」

「ここ、結構いい服取り揃えてるぜ？俺の服もここで買ったのがほとんどだ。」

「へ〜。」

因みに今のボクの服装は、少し大きめの青いＴシャツに裾が微妙に長い灰色の長ズボン。魔王のは魔王らしくという本人の希望によって全身黒のＴシャツと長ズボン。でもボク同様、少し大きすぎる。

「行くぞ。」

「あ、はい。」

リュウジさんに促されるまま、ボクらは服屋に入っていった。

【チリンチリン】

「いらっしゃ〜い、ってあつら〜リュウリュウじゃない！」

「「「！！！！！！」」」

出てきた店員さんらしき人にビックリした。

いや、ビックリしたとかいうレベルじゃないよこれ……。

だって出てきたのは……

派手な女物の服を着たプラチナブロンドのロングヘアの・・・オ
ッサン。

() () で、出たあああああああああああああああああああ
あ!!!???() ()

「よ、ママさん。」

リュウジさああん！何で普通に挨拶してんの！？ってか今ママさ
んって言った！？この人の名前！？それともリュウジさんのママ！
？そうなの！？違うよね！？明らか男だよね！？しかもでかいよこ
の人！？筋肉モリモリだよ！？近くで見ると怖いよ！？それよりど
んな関係なんですかああああ!!!???

「あわわわわ……。」

「で、でかい……。」

ああああ、やっぱり二人も驚き超えてシヨック受けてる……。

「あら〜何なにこの子達〜!? チョーくかわいい〜(かわいい)

「ただけ〜」

「「「ひっ!」「」」

こ、恐っ!しかも『ただけ〜』って何!?

「おいおいおい、あんまビビらせんなよ。アンタみたい人見んの初めてらしいから。」

「あら〜そ〜お?ごめんなさいね〜?」

「「「は、はあ……。」」」

返事も曖昧になるよそりや……。

「リュウジさん……この店ホント大丈夫なの?」

魔王ができるだけ小声で話す。機嫌を損ねられたら何されるかわかんないからかも……わかるよの気持ち。

「大丈夫だっつもの。見た感じはアレだが、中身は超いい人だ。心配すんなや。」

そう言うけど……確かにお店の見た目は落ち着いてていいよ?木造で特に変な物も置いてないし、何か心地いいメロディーがどこから流れてきてるし、周りの服とかも別に派手なものもないし……でも店員さんが……恐いってことぐらいで……。

「あら〜やっぱこのカツコじゃ引いちやうわよね〜?」

う、ボクの考えてたことが当てられた……。

「だ〜いじょうぶよ〜そう簡単に取って食いやしないって〜 ここ

は見ての通り普通のお洋服屋さんだから安心してちよ〜」

『ちよ』って何ですか『ちよ』って。

「それとよ、この店は結構こころへんじゃ有名なんだぞ?店の雰囲気と店員とのギャップが激しくておもしろいとか、ママさんの大っ

ぴらで明るい性格とか、まあ最初に来た人は大抵ビビるだろうが、その人らも常連になってる奴らが多いんだぜ？言う俺も常連だけんな。」

「へ、へえ〜……。」「

有名なんだ、この店……。でも服屋なのに服に関する評価が無いってどうなんだろ？

「で、こいつらの服を探してんだがいいのあるか？」
「やっとな話が進んだ。」

「あら〜そんならいいのあるわよ〜」

この人の口癖はおそらく『あら〜』なんだろうな、絶対。

「え〜つとお……。これなんてとお？」

見せてくれたのは、横に紫色の縞が入った長袖シャツの上に、真っ黒な袖なしの上着（この世界で言うジャケット）だった。そしてその下には黒のミニスカート。

「あ、それ可愛い〜！」

「じゃこれにする？」

「する〜！」

これは魔王が着ることになりました。決めの早。

「じゃそのアナタのわ〜……。」「

今度はボクの服を探してくれている。リュウジさんの言う通り、この人いい人だ。

「そうねえ、これかしらん？」

ボクに見せてくれたのは……。

「……。」「

「……。」「

「……。」「

「……。」「

「……。あの……。」「

「?」「

「ボク・・・そんなフリフリしたの毎日着なきゃいけないんですか？」

ボクのは全身黒のミニスカワンピースに、袖とスカートの中に白いフリフリが付いてる奴だった・・・明らかにおかしいでしょこれ？
派手派手。

「ママさん、それって何て服だっけ？」

「ゴシックロリータ、略してゴスロリよ」結構人気あるのよこれ？」

「そうか、でも恐らくそいつ着ねえぞソレ。メチャクチャ嫌そうな顔してるし。」

「や〜ね〜ジョークよジョーク」

お茶目でおもしろいけど・・・一瞬ママさんの目がマジだった気がするのは気のせい？気のせいだよね？

「ホントはこっちよ〜ん」

今度のは水色の長袖の上着と赤いTシャツ、それとベージュ色の膝まである短パンだった。これはまともだ。

「うん、これがいいな。」

「じゃこれにするわ。」

「毎度あり〜」

ふう・・・一瞬焦った・・・。

「ねえリュウジ、私の服は？」

あ、ファイイ忘れてた。

「ああ・・・おめえサイズのはねえよなあ。」

「あら〜さすがにそこまで小さいのはないわねえ。サイズのSS

Sね。トリプルエスね。」

「またはスリーエスサイズ。」

「かっこいいい！」

「何の話!?!?」

ボクとファイファイは置いてかれた気分になった……。

結局、ファイファイの服は今度カナエさんの妹であるミカちゃんもミキちゃんのお人形セットの服をもらいに行くことになった。ついでに他にも服を買ってもらった。これでまあ着る物は問題ないよね？でも何だかいろいろ買ってもらって悪いような気がするんだよね……そのことをリュウジさんに話したら、「俺が買ってやろうと言ったから買ったまでだ。気にすることあねえさ。」って言われた。それでも腑に落ちないけど、これ以上言ったら怒られそうなので言わないでおいた。さつき魔法使おうとした魔王みたいに飛び蹴りくらいたくないし……。

でもあの店の人、ママさんだっけ？見かけによらずとてもいい人だったな。おまけだと言ったただでTシャツ一枚もらったし、いろいろお話して仲良くなっちゃったよ。

「おっと、もうこんな時間か。」

リュウジさんが手首に付けてるブレスレットみたいな物を見ながら言った。

「よし、昼飯食いに行こう。」

「やったあ」

ピョンピョン跳ねる魔王。ボクと魔王はさつき買った服をさつきを着ている。これ、着心地いいなあ。いつも着てる革の服なんかと全然違う。

「ところで、何食べるの？」

そういえば、この世界で食べた物といえば、リュウジさんの作った料理しかない。はつきり言って不安……あ、でもリュウジさんの料理全部おいしかったから別に大丈夫かも。でも作る人によるけどなあ……。

「ふ、決まっておる。」

。。。。

何で口調変わるの？

「行くぞ。」

「って早!?!」

さっさと歩き出したリュウジさんの後を慌ててついていくボクラ。

↳龍二視点↳

ここからの視点は俺こと龍二です。さて、さっき腕時計を見たところ、もう12時前なのでとりあえずメシ食いに行くことになりました。どこ行くかってか？オメエらわかってねえなあ。決まってんだろ。

「1111、1111。」

当然、ラーメン屋

「?何ですここ?」

「入るぞ〜。」

「無視!?!」

アルスのツツコミをスルーして店に入る俺ら。ここは俺の行きつけのラーメン屋で、名前は『ラーメンメン』。ネーミングに若干違和感を感じる店名だが、昔ながらのこじんまりとした広さで落ち着いた感じがあつて、味はもう最高。つーか最強。行列ができるってくらいじゃねえが、繁盛してる。

「へいらっしやい!って龍二じゃねえか。」

「お客に向かって何さそのいいようは。」

「ふはは、お前さんの場合常連客というよりも息子が帰ってきた感じがしてなあ。」

「オッサンの息子かあ。ホントにいたら毛深いんだろーなあ。」
「グフツ！て、テメエ俺が気にしてることを……。」

で、俺とコントを繰り広げているこのオッサンは、この店の店主の松高 源さん。大工じゃないよ、ラーメン屋だよ？あれ、聞いてない？まあこのネタがわからん奴は大工の源さんと検索すればわかるさ。で、源さんの第一印象。

毛深い。

この一言に尽きるね。髭も濃けりや腕の毛も濃い。おそらく腹もギヤランドウーなんだろなあ。おまけに顔がいかつい強面のおっちゃんだ。しっかし、中身は優しく誰とでも気軽に話せられる性格だから結構好きだな俺は。

「ん？そっちのお嬢ちゃん達はなんだ？」

ああ、アルスらのことな。

「わけありで海外から来たうちのダチだ。」

「へえ、ダチねえ。」

海外からつてのは嘘だけど、対して変わんないもんねー。

「え、海外つて自己紹介しろお前ら。」あう……。」

先手を取られたアルスが呻く。真実話したら後がメンドイんだよ後が。いろいろ。

「えと、アルス・フィートです。」

「クルル・バステイです。」

「私はフィレあぶつ。」

自分の頭から出てこようとしたフィフィを押さえつけるアルス。それがいいな、うん。

「ん？今もう一人声がしなかったか？」

「オッサン、頭ボケた？」

「ひ、ひどい……。」

あ〜、言い過ぎだったかなあ。拗ねちまった。じゃこは一つ慰めの言葉を。

「オッサン、醤油ラーメン三つ。」

あ？これ慰めの言葉じゃないだろってか？いいんだよこれで。

「あいよ！」

ほれ見る。オッサンにとって注文は慰めなんだよ。伊達に常連やってねえぞ。

「え、何ですかソレ？勝手に決めましたけど……。」

「食べばわかる食べば。」

アルスとクルルがそろって頭に疑問符。

「ねえ、君ら外国から来たんだよね？」

「へ？」

あ、話しかけてきたのはこの店の常連さんのオッサン。

「どっから来たんだい？」

「え、えつと……。」

「アメリカだよな？」

「うん、アメリカ！」

アルスが何言うか迷ってる間に俺とクルルが答える。考えるより言え、アルスよ。

「へえ、日本語うまいねえ。」

「向こうで習ったんだとよ。」

「なるほどお〜。」

うん、このオッサン天然だ。

「っーか龍ちゃんが女の子連れてくるとは。」

「意外だよなあ。」

「しかも外国美人。」

「あの鈍感少年がねえ。」

「っー、お父ちゃんは嬉しいぞ。」

次々と常連さんが話に参加してくる。っーか誰だ今お父ちゃんて言

った奴。

「あ、あうあう……。」

お〜い、アルス大丈夫か〜？

「にははははー!!」

お〜、クルルすっかり馴染んじまってるよ。さすが魔王。順応性高いねえ。周り曰く俺も順応性高いらしいが。

「あいよ、醤油お待ち!!」

「お、さすが早いね。」

この店のウリは、味もさることながら注文して出るのが早いのだ。それでも麵はちょうどいいゆで具合だし、文句なしだな。

「さ、食つぞ。」

「……。」

「……。」

あれ？何で手つけないの？

「……オハシってどう使っんですか？」

「……。」

（アルス視点）

「どだ？うまかったろ。」

「おいしかった〜!!」

「ど、同感……。」

「おいしかったけど大きすぎた……。ウェツプ。」

ホントにおいしかった醤油ラーメン。あんなのボクらの世界じゃ絶対に食べれない……。あ、あとファイファイ。フラフラになるまで食べなきゃよかったのに……。あ、ついでにボクらはオハシ使えないから子供が使うような小さいフォークをもらった。あのおじさんいい人だったなあ。お店の人もお客さん達も何だか親切だし、気兼ねなく話せれたし……。もつともほとんど話してたのは魔王とリュウジさんだけだったんだけど。

「さて、今度は買い出しに行くぞ。」

「何の？」

「晩飯に決まってるじゃん。」

あ、納得。

「そんじゃさつさと行くぞ。」

ホントにさつさと歩き出すリュウジさん。ボクらはその後を歩く。

「いや〜にしてもすごいねこの世界。」

フィフィが話題を振ってきた。

「うん、すごいよね。」

同感だった。何もかも見る物は初めての物ばかりで、ずっと驚きっぱなし。そしてそれよりも・・・周りを見ても、争いはなかった。

店の前で店員さんと談笑してるお母さん、

道端で追いかけっこをして遊ぶ子供、

空では小鳥がさえざりながら飛び回ってる。

おまけにここに住む人達も優しい人ばかり。

ボクの世界、少なくともボクが生まれた村では、こんな光景なかった。そう思うと・・・少し羨ましくなった。

「おい、どした？顔が変だぞ。」

「え、変ってどんな風に？」

「元々。」

「ひ、ひどー!!」

元々は無いでしょ、元々は・・・。

「はい、とうちゃ〜く。」

着いた先は、たくさんの野菜が所狭しと目の前に並べてある店だった。

「ここは八百屋だ。野菜だけしか売ってない店。」

へえ〜。。。

「いや、正論なんだがよ、もうちょっと言い方ってもんが・・・何か品揃え悪く聞こえるしよ。。。」

お店のおじさん、商売する前に何か暗くなってるよ。。。

「商人魂はどこ行つた？」

「へいらっしやい！何にするかい！？今日はお連れの子が可愛いからサービスするよ！」

うわ、リュウジさんの一言で復活した！どれだけ単純なのさこの人達？

「え〜と。。。」

目の前にある野菜のうち、真っ白な野菜・・・えつと確かダイコンだっけ？を手にもって品定めし始めたリュウジさん。傍から見たら立派な主婦だ。。。

「う〜む。。。」

リュウジさんは唸る程真剣だけど・・・この世界の野菜とかよくわかんないボクらは暇だなあ。。。

「おい。」

？

「はい？」

いきなり誰かから聞かれて思わず返事してしまったけど、考えてみればこの世界でまともな知り合いといえれば、リュウジさんの友達のマサさん達だけだよな？何で返事すんだろボク？

「。。。」

そして振り返ってみれば・・・男の人が結構な人数でボクらを囲んでいた。

え、ホント何でボク返事したのこんな人達に？

「貴様、荒木 龍二だな？」

「ん。」

リュウジさん、せめて「そうだ。」とか言ってあげようよ。

「我々は……。」

「前回散々やられた……。」

『久美様、香苗様ファンクラブ直属親衛隊である……!』

は？し、親衛隊？しかもクミさま、カナエさまって……。

「ん……。」

だからちゃんと返事しましょうってリュウジさん!

「今日こそ、貴様の毒牙から久美様、香苗様を救い出してやる!」

「ここは学校外だ!ここなら貴様を思う存分成敗できる……!」

「そうだ!今日が貴様の命日だ!」

「それと前回の恨みを晴らしてくれるわ!」

な、何かいろいろ言ってるよこの人達……見れば魔王までビク
リしてるし、フィフィもあまりの迫力にボクの髪に隠れてるし……。

そしてリュウジさんは平然とダイコンを吟味してるし……もしか
して今までの返事と思われるセリフはダイコン選ぶのに唸ってただ
け?じゃこの人達華麗に無視?

「貴様あ!無視とはいいい度胸だ!」

「本当に殺してやる……!」

う、うわぁ……完璧にキレてるよこの人達……。

『荒木 龍二、覚悟……!』

って、全員で飛び掛ってきた……!?!???

「あ、あいよ……。」
そして新たなダイコンを手にとって会計を済ますリュウジさん……。
その背後にはダイコンによって制裁された人達……。
「よし、帰るぞ。」
『い、イエツサー!!』

ボクが今日感じたこと。

この世界の人達は、ボクの見たり限りでは何だか個性的な人が多い。
これからもああいう人達が増えていくんだろうか……。

あと、絶対にリュウジさんは怒らせないようにしよう……。

第十の話 買い物へレッツラゴー (後書き)

第一回

〜これが俺の中のラーメン！〜

1. 醤油ラーメン

まずメニューを見てみると、左端にあるのは大抵ラーメンか、醤油ラーメン。うっすらと黒く澄んだスープの中に、様々なダシの旨みを閉じ込めた、オーソドックスなラーメン。その味はあっさりしてながら、しっかりとコクがあり、飽きを感じさせない。初めて行ったラーメン屋なら、まず最初にスープの旨みを感じられる醤油ラーメンがオススメ！

はい、書いてみました〜これが俺の中のラーメン！〜シリーズ。一度書いてみたかったんですよこーゆーの。まあ、あくまで私視点からのラーメンですから、味はその店によって違うでしょう。でも私の中ではこれが一番理想、とゆーのを書いてみました。題名通り。

第十一の話 バッグの中はつらいよ・・・(前書き)

前回の話と矛盾してるなーと思ったら教えてください。お願いします。

第十一の話 バッグの中はつらいよ・・・

（ファイファイ視点）

ふぁ・・・よく寝た・・・。

「スー・・・スー・・・。」

「クー・・・クー・・・。」

二人まだ寝てる・・・。

・・・。

「もっかい寝よ」

二度寝よ二度寝

それじゃおやすみなさうい・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

「グツモーニイイイング!!!!!!!!!!!!」

「「みぎゃあああああああああああ!!!????????」

いきなり何ですかー!!!!!!い!?!?!!???

「ふう……つーわけで、おはよう。いい朝だな。」

「アンタのおかげで最悪な朝よ……。」

何かと思ったらリュウジのバカでかい大声だった。てか耳元で叫ばないでよ……。

「み、耳が痛い……。」

「そうか、朝飯できてっから早く来な。」

「え、ボクの訴えスルー?」

何気にひどいねリュウジ……。

「クー……クー……。」

まだ寝てんのクルル!?

「あれ、まだ寝てんのかクルルは?」

リュウジ、思ったことそのまんま言っちゃってるね。

「……。」

何か考える仕草をした後、寝てるクルルの横に立った。

「クー……クー……。」

それを知らずにまだ寝てるクルル。

で……。

「あ、よいしょー。」 棒読み

【ズゴン！】

「ふぐおおー!?」

……。

ぜ、全体重をかけての肘打ち……。

「早く起きろよー。」

そう言い残してとつと寝室から出て行くリュウジ。

そしてまだ身悶えてるクルル……。

「……。」

次から二度寝は控えよつと。

「さて、学校行くか。」

朝食を食べ終えて、赤いバッグを肩に担いだリュウジが言った。

「ねえ、ガッコウって何?」

うん、私も気になった。

「いろいろする場所。」

ごめん、説明不十分です。

「あ、やべ。トイレ行きたくなくなってきた。」

そう言うなり、リュウジはカバンを置いてトイレへと駆け出した。

「・・・じゃ、私寝よつと」

また寝るんかいクルル。

「ボクは・・・どうしよつかな。」

「フトンでも片付けてたら？」

そのほうが私も手伝わないで済むし。

「あ、じゃそれにしよ。」

アルスって素直で純粹なんだけど、流されやすいってのが玉にキズなのよねえ・・・。

「さてつと・・・。」

私はどうしよつかなあ・・・。

あ。

「いいこと思いついちゃった」

「じゃ行ってくるんや。」

「いつていつてしやー。」

「むじや・・・。」

「アルス、そのバカ起こしとけ。」

ふふん、侵入成功

こっそりリュウジのバッグの中に潜り込んでやったわ。これでリュウジのいうガッコウとやらがどんなところか偵察できる……。

偵察つつつても私が知りたいだけなんだけどね

で、バッグの入り口が少し開いてるからそこから外を見てみた。バッグを背負ってるから後ろの方しか見えないけど、外の風景が後ろへと流れていって、これはこれで何かいいな。

「よ、マツサーチン。」

マツサーチン？

「朝のその変なネーミング何とかならねえ？」

「無理だ。」

「即答かよ。」

あ、この声はリュウジの友達のマサか。前見た時は結構かつこいいって思ったのよね。

「ところでどうだ？ スティルとの生活は？」

マサの家ではスティルがお世話になってたっけ。

「まあ、いいとこかな？ 本人も初日と違って大分落ち着いてるし、後は今の環境に慣れてもらわねえと。」

「そうか。まああいつらにとつては全部見慣れない物ばっかだ。俺らがフォローしてかねえとな。」

「そうだな。」

ず、随分まじめな話してるなあ。

「まあ、それよりも・・・。」
「？」

「ステイルが・・・姉さんの料理に耐えていけるかどうかの問題なんだよ。」
「????」

「あ、なるほどな。」

「あいつ・・・死なねえよな？」

「大丈夫だろ、何かあいつ仲間の中でもいじられ役だし、丈夫だと思っ。」

「そんなもんなのか？」

「・・・すっごい深刻そうな話してるようだけど、傍から聞いてみればまじめな話と思えない。あ、でもステイルが仲間の中ではないじられ役っていうのはあってるな。」

「で？お前んところはどなんだ？アルスとクルルとフィフィだっけ？」

「ああ、あいつらか。うん、俺にとっていいイジリ役だな。」

「うおい！！」

「相変わらずお前恐い性格してんな。」

「失礼な。」

「いやお前のせいで肉体的にも精神的にもボロボロになった奴が大勢いるからな。」

「あ、そうだっけ？」

「同居人は大事にしるよ？」

「はいはい。」

「・・・」

え、ちよと待って今の会話でおかしい点あったよね？何？肉体的に

も精神的にもボロボロになったって。え？ちよつとホントにリュウジが恐くなってきたんだけど？

「まあ見てて楽しいからな。廃人にならない程度にいじっていきさ。」

「結局いじるんかい。」

「はっはっは、ジョークだジョーク。」

「お前が言つとジョークに聞こえないっての。」

「気ニシナイ。」

「またそれかよ。」

すでに私の頭の中ではリュウジはクルルを蹴落として魔王の座に君臨していた。

「リュウチャーーーーーん!!!」

つてあれ？何か向こうからスゴイ勢いで駆け寄ってくる人がいるんだけど……。

あ、カナエだった。

「あ、どっこいしょー。」

【バゴン!】

「むぎゃあ!」

「ん？今声が二重に聞こえなかったか？」

「？気のせいだろ？」

ば、バッグで殴るなあああ!!!メチャクチャ痛かったわよ!!!

?急にドモリでした。

「何だ。」

「だ、だからえっと……。」

……。

なるほど。クミもリュウジのことが好きなのね。で、勝ったら告白と……何だかありがちな展開ね。

「そんで?お前らんとこはどうよ?リリアンとロウ兄妹。」

あゝあ、クミの言いたいこと遮っちゃったよリュウジ。この鈍感野郎。

「あ、ああ。随分と落ち着いているぞ。家の手伝いもしてくれるし。」

「私も最初は警戒心剥き出しだったけど、今じゃ美紀と美香のいい遊び相手になってくれるよ。」

「なるへそ。あいつら順応力高いな。」

「お前には負けるだろうな。」

「そうか?」

「……イエス。」

皆が認める龍二の順応力の高さって一体……。

「それにしても今日お前早いな。いつも普通に授業がある日は遅刻ばっかしてんのに。」

「偶然早く起きすぎたさ、暇つぶしにアルスらを起こそっかな。」

「じゃ私らあのまんま寝ててもよかったじゃん。」

……。

……。

・・・んや？気絶してどんくらい経ったの？

「であるからして現在の日本経済は・・・で・・・して・・・から・・・。」

め、目覚めの一発で難しすぎる話って・・・全然ついていけない。あ、バッグが全開になってる。中に入ってた本が影になっててリュウジにはバレなかったみたいね。ちよつと覗いてみよ。

んしょつと・・・。

えつと、広い部屋にリュウジと同年代の人達がたくさんいて、一番前に何かハゲたオッサンがいて・・・さつきから訳のわかんないことをツラツラと喋っていた。ニホンケイザイって何なのよ？つーかその前にある白い字で書かれたでかい板は何？

『ンガア・・・。』

つてリュウジ寝てるし・・・。

「おい荒木。何をしている。」

つていきなりハゲのおじさんが来たー！隠れよ隠れよ。

「んむ・・・寝てまんねん。」

「どこの方弁使つてんだお前は。」

今のセリフは隣にいたマサね。リュウジに対して随分冷静ね。私達なんて驚愕しっぱなしでそんな言い方できないわよ。私達

「俺の授業で寝るとはいいい度胸してるなあ？」

うつわあ、この人ネチネチした喋り方してる・・・何か嫌い。

「んむ・・・ええ度胸・・・ムニヤムニヤ。」

寝言の意味がわかりません。

「ちつ・・・起きろこら。」

【パソコン】

「オウチ。」

何オウチって？

「何すんだよ〜昨日ギャンブルで大負けしたくせに〜。」

「！お、お前何でそれを・・・！？あ。」

『…………』

へ、部屋の温度が一気に下がった気がする……。

「……先生。」

うわ、近くの人の声めちゃくちゃ低。

「な、何だ？」

「先生は賭け事をしてはいけないという校則があるのを知ってますか？」

「校則は生徒だけにあるんじゃないという事をご存知ですか？」

「生徒だけ校則守ってりゃいいとか思ってますん？」

「つーか校則は常に守れと言い続けてたのは先生ですよね？」

「教職員がそんなんでいいんですか？」

「いつも厳しすぎると批評を受けてる先生がギャンブルですか？」

「いくらほど賭けたんですか？」

「つーか何したんですか？」

「パチンコ？競艇？競馬？それともカジノですか？」

「どうなんですか先生？」

『どうなんですか？』

「この人達怖いよー！ー！ー！ー！！！！」

「……。」

『……。』

「……すいませんでしたあああああ……！！！！（泣）
うわぁ……おじさん泣きながら出てっちゃったよ……。」

『グー……。』

ってアンタは寝るんかい！！

……まあ、その後は……まさに地獄だった。

【ガッン】

「あ、すまん龍」。

【バシヤ】

「やべ、カバンに水かけちまった。」

【ゴッソ】

「おっと、筆箱が。」

【ビシビシビシ！】

「てめえ！私のチョークをカバンでガードすな！」

「使える物は徹底的に使えというだが。」

し・・・死ぬ・・・誰かの足がバッグに当るわ、リュウジが水こぼしたり筆箱私の頭に落としたりするわ、あげく朝の悲劇（連続チョークカバン受け）が蘇るわ・・・生きた心地がしない・・・。

そしてやっとリュウジが家に帰る時間になって私は開放感に浸った。

でもその帰り道・・・。

「リュウちゃん！今日は私と愛の逃避行」訳わからんから逝け。」

【バゴン！】

「龍二！それなら私と愛」お前も逝け。」

【ズガン！】

「荒木 龍二！今日こそ貴様「地獄に落ちる。」

【ズドバゴグシャ！！！！】

せ・・・迫るカナエとクミと昨日襲い掛かってきた連中を撃退するの
にバッグを振り回すリュウジ・・・は、早く・・・家に・・・グ
ハア。

くそしてその晩く

「ファイファイ！どこ行ってたのさ！？」

「そうよ！心配してたんだからね！」

リビングでアルスとクルルがファイファイに問い詰めるが・・・

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいもう勝手なことしませんから許してくださいバッグはもういや……。」

泣きながら呪詛のように呟きつつ何度も手を合わせて懇願するファイを見て訳もわからずに慌てたアルスとクルルなのでした。

〈余談〉

「へ？ファイファイの様子が変？」

「うん、何か物凄く取り乱してて……。」

「……。」

「……（ボソツ）やり過ぎたか……」 小声

「へ？」

「ん？いや、何でもねえさ。」

やっぱり龍一は確信犯でした。

第十一の話 バッグの中はつらいよ……（後書き）

作 さて、十一話に来た訳だが……さすがにやり過ぎじゃねえか？

龍 まあ確かにな。

作 つかどの辺で気付いた？

龍 あゝ、登校してる時に香苗ぶっ飛ばした時。

作 初っ端からかい。

龍 まあ過去の話は気ニシナ〜イ。

作 ……まあいいや。

第十二の話 名前を覚えよう<野菜編>

〔龍二視点〕

「ただいまー。」

「……おかえりー。」

学校から帰ってきた俺。今日もいろいろあつて疲れたぜでも帰ってきたら返事が三つ。やっぱり慣れてねえと少し戸惑っちゃうな。

「お？何見てんだ？」

三人揃つてリビングで仲良くテレビを観賞中ですか。昨日はテレビ見て『ぎゃあああ！箱ん中に人が入ってるー！ー！ー！ー！ー！』とか言つてめちゃくちゃ慌ててた奴らが。そして『救出作戦開始！』とか抜かしてて掌に炎集めるバカ（無論クルル）がいたから思わず俺のお玉クラッシュを受けた奴らが。やっぱり順応力高いなこいつら。「ニュースというのを見てるんですよ。」

「この世界の情勢を知つとかないとねという訳で。」なるほどな。勉強熱心なこつて。

『え〜次のニュースです。先日女子高生にわいせつ行為をいった疑いで逮捕された賄わいせつお節夫容疑者が犯行を行った瞬間のビデオを特捜部が入手しました。』

へえ、そりゃすごいな。

『ではご覧ください……。』

〜ビデオ鑑賞中〜

【Hey! そのかわい子ちゃん! ミーとお茶しないかい?】

龍(初っ端からすごい出てきたな。)

ア(テンション高いですね。。。)

【ああ!? テメエ何汚い手であたしの肩触れてんだよ!?】

龍(うえ、こいつ手え洗ってねえの?)

ア(え、女性の口の悪さに注目しないの!?)

【H A H A H A! ミーの手はゴツドハンドだからたとえ汚れてもす
ぐに綺麗になるサ!】

龍(スゲエなゴツドハンド。)

ア(いやどう考えても嘘でしょ!?! それよりこの喋り方鬱陶しいで
す。)

【うざってえんだよその右頬のホクロ!】

ア(えそつち!?)

龍(細かいところに気が付くなこいつ。)

【A H A H A H A! ミーのこのホクロはミーのチャームポイントな
のサ!】

龍(目立ってねえけどな。)

ア(まあ確かに目立ちませんが。。。)

【死ねこのエセDJ!!】

ア（エセDJ!?!）

【ボガン!!】

【アウチ!!いてえええ!】

龍（そりや脛だからね。）

【でもチヨー気持ちE!!】

龍（ああ、こいつMか。）

ア（Mって何ですか!?!?つーか殴られたのに気持ちいいって!?!）

【な!?!私の必殺のスーパーローキックが効かない!?!】

【ひゃひゃひゃ!?!そのようなヘナチヨコキックでやられる我ではないわ!!】

ア（何か口調変わってません!?!）

龍（いや、明らか変わってるね。）

【そこまでだ悪党!】

【ケヒツ!?!誰だ!?!】

【ヴァサ!】 マント翻した音

【貴様の数々の悪行……この正義の味方仮面が許さん!】

ア（何この展開!?!）

龍（正義の味方仮面でまんまだな。ハッハッハ。）

電話かけようとした時にクルルに呼び止められた。

「ニューズ見てて思ったんだけど、わいせつこついつて何？あとビデオって？」

ああ、わからん単語があるのか。

「わいせつ行為ってのは、女性に対していやがらせするとかそういうのだ。で、ビデオってのはテレビの画像とかを保存するのに使うもんだ。」

「ふ〜ん。」

俺間違つてないよな？

「でもいまいちよくわかんないなあ。」

「そりゃ世界が違うからね。」

ごもつともだフィフィ。

でもこの世界の事を知つとかなないと後々めんどいな・・・。

よし。

「つー訳で、第一回物を覚えようぜベイベー大会〜！！」

【ドンドンパフパフ〜！】

「イエイー！！」

「む〜、めんどくさいな〜。」

「テンション高いですね二人とも・・・。」

はい、てなわけで周りからしてみれば完璧な世間知らずである三人

娘に物の名前を覚えていただく大会を開かせてもらいました。主催はもちろん俺、荒木 龍二がお送りいたします。ゲストはテンション高いクルルとめんどくさそうなフィフィと何か呆れるので適当に殴っておこうかなと思わせているアルスです。皆でテーブルを囲んで座っております。

じゃ早速……。

【パコーン】

「みぎゃー!!」

アルスをぶつ叩いておきましょう

「じゃ始めます。」

「な、何でボク殴られたの!? ねえ何で!?!」
はい無視。

「じゃまずは野菜から覚えていこうか。」

そう言つて学校帰りに寄つた八百屋の野菜が入つた買い物袋を漁る。

「まずこれは?」

第一号は大根。まだ不満そうながらもアルスが拳手。

「ダイコンでしょ?」

「そ。」

まあこれはわかるわな。こないだ教えてやったばっかだし。

「これは?」

トメイトウ(トマト)を取り出す。

「えつと確か……。」

「あ、わかつた。」

クルルが拳手。

「何だ?」

「又メア。」

。。。。

「何スカそれ？」

「え？違うの？ヌメアに似てるけど。」

そりやお前らの世界の野菜だろが。何よそのヌメリのありそうな野菜は。

「答えはトマトです。」

「おお、逆さから読んでもトマト。」

どーでもいいや。

「次。」

これはわかるかな？カボチャ。

「あ、わかった！」

ファイファイが拳手。

「何だ？」

「ポポルの実！」

可愛い名前じゃねーかチクシヨー！

「ハズレ。カボチャです。」

「え〜？変な名前。」

「ポポルも独特な感じがすんだがな。」

「あれ？てゆーかポポルの実なんてボクらの世界にあった？」

「ううん、私が考えた。」

空想かい。もういいや次だ、次。

「じゃこれは？」

ドン、と置く俺。

「。。。。。」

「。。。。。」

「。。。。。」

「。。。。。」

ヒント。瓜科の植物。全体的にブツブツなのが特徴。

読者の皆様も考えてみましょう

「「「わかりません。「「「

はい全滅。

「何なんですかそのブツブツ？」

「見た目気持ち悪い・・・。」

「ってかそれ野菜？」

うーむ、批評が相次いでますなあ・・・。

では答え。

「これ、《ゴーヤ》。」

「「「ゴーヤ？」「「「

ゴーヤでした。

あ、通称【にがうり苦瓜】と呼ばれています。沖縄語でゴーヤ。豆知識。

「今度食わしてやるよ。」

「「「え〜？」「「「

「好き嫌いですなや。」

「「「はい。「「「

精神は子供。

「じゃ次々〜」

で、その後も続いていった。

レタス

キュウリ

キャベツ

茄子^{なすび}

ニンジン

ジャガイモ

タマネギ

さつまいも

ホウレン草

チンゲン菜

スイカ（スイカも野菜の一つです）

セロリ

アスパラ

水菜

ゴボウ e t c . . .

「はい、じゃ今日はここまで。」

計四十種類の野菜を紹介し終えた。

「お、終わった。」「」

皆してぐたぐたなりました。ついでにこんなにたくさんの野菜どこで仕入れたとかいうツツコミは無しよ

「じゃ、野菜は一通りは覚えたな？」

「うん、何とか。」

「独特なのが多かったけどね。」

「ふへへ。」「」

おいおい、クルル大丈夫かよ？

「じゃまた今度するぞ。」

「えへまた？」「」

「黙らっしゃい。」

「はい。」「」

さて、今晚はどの野菜を使おうかなと。 . . .

あ、そうだ。

【ピポパポ . . . プルルル . . . プルルル . . . ガチャ】

「ちゃんとニユースを伝えなさいコンチクショー 続き気になるじゃ

ねえか今度続き見せるよなー。」

【ガチャ】

フウ、さっきのニュースのテレビ局に苦情言っただ。つーか要望か？どつちやでもいいか。

さてと、今日はゴボウを使ってキンピラゴボウでも作るか

第十二の話 名前を覚えようく野菜編く(後書き)

評価、感想お待ちしております

第十三の話 勇者の苦勞と龍二の生活（前書き）

今回から文章構成を変えてみました。前よりかは読みやすくなっていると思います。逆だったらすいません・・・。

第十三の話 勇者の苦勞と龍二の生活

「ガツコウ行ってみたい。」

「へ？」

朝一、魔王がボクらと一緒にフトンを片付けてるとこんな事を言い出した。

「い、いきなり何さ？」

「だってえ、毎朝毎朝お留守番なんて暇で暇でしょうがないんだもん。」

「まあ、わかるけどさ……。」

「でしょ？」

「でもね、そんな事リュウジさんが許してくれると思う？」

「思う！」

「どっから来るのその自信!？」

でもまあ確かに毎朝暇だけども、まだこの世界のことよくわかってないボクらが下手に行動したら何が起こるかかわかないし……リュウジさん、いろんな意味で律儀だもんなあ。まだ数日しか経ってないけど、何かよくわかる。

「おう、片付け済んだか？」

なんて考えてるとリュウジさんが和室に入ってきた。

「リュウジ〜！私もガツコもが。」

慌てて魔王の口を塞ぐ。

「？何さ？」

「い、いえいえ何でもありませんよ？」

「？・・・まいいか。朝飯できたから来いよ。」

納得した感じでリュウジさんは和室から出てった。

「ふう・・・。」

「ん〜ん〜!!」

「あ、ごめん。」

鼻まで塞いでた。

「む〜！何で言っっちゃダメなの!？」

「だってボクらはこの世界に来てまだ日が経ってないじゃないか。まだわからないことが多いのに下手に動いたら変な誤解されるでしょ？」

「でもお買い物行ったじゃないの。」

「あれはリュウジさんが連れて行ってくれただけであって、ガツコウでいつもリュウジさんの傍にいるのは無理だし、変な誤解を受けて困るのはボクらだけじゃなくてリュウジさんも困るんだよ？」

「む〜・・・。」

不満顔の魔王。ボクの言ってることは多分合ってると思うんだけどな。

とは言ってみただけど・・・正直ガツコウってどんなところなのかわからない・・・。

「おい、朝飯冷めるぞ！早く食え！」

「は、はい!~!」

因みにフィフィはすでに席についていた。いつの間に……。

【パクパクパクパク……】

「……。」

「うまうま」

「ふう〜……。」

えっと……この状況なんだろう？

まずボクと魔王は黙ったまま朝食のゴハンを食べ、

フィフィは幸せそうな表情で魚の塩焼きに文字通り齧り付き、

リュウジさんはすでに食べ終えて食後にお茶を飲んで一服している。

リュウジさんとフィフィはともかく、ボクと魔王は明らかかかしいよね？さっきだってフィフィとリュウジさんが楽しそうにお話してる時だっけと黙りっぱなしだったし……。

楽しそうにお話してる時……。

楽しそうにお話……。

楽しそうに……。

。。。。

もの凄くフィフィが羨ましく感じるのは何でなんだろう？

「おい、さっきから黙りこくってどうしたよ？」

わ、びっくりした！

「は、え？えっとその。。。。」

「ねえねえリユウジ〜。ガッコウ。。。。」

あああ何言おうとしてんのおおー！

「。。。。ってどんなことしてるといなの？」

【ガクン】

思わずイスから転げ落ちた。。。。

「っておいアルス。何しとん？」

「い、いえ。。。。」

ま、紛らわしい。

って何ほくそ笑んでるの魔王？もしかして意図的？計画的犯行？

。。。。

「こうゆう時だけ魔王の性格出すんかい。心の中で言った。」

「で？何でんなこと聞くよ？」

「んぐ、だって私リユウジのこともっと知りたいんだもん」

ね、猫なで声……。

「あ、そう。」

そして一言で片付けるリユウジさん……。

「だがまあ、知りたいんなら教えてやるよ。俺の知識範囲の中だけな。」

「やった」

「……。」

あれ？ファイファイが黙り込んでしまった。

「……ガツコウ、怖い……。」

「「「は？」」「」」

いきなり震えだしたファイファイ……何があつたの？

「……ま、いいや。」

いやよくないよくない。

「で、学校ってのはな……。」

ほ、ホントにファイファイのことスルーにした……。

（説明中）

「……フーのが学校だ。」

うん、大体理解はできたね。

つまりリュウジさん達のような世代の人達が、世の中で生きていくような知識を大人の人達から学び、また同年代の人達と一緒に過ごすことによって仲間意識というのを深めていくというのがガッコウの主な役割、というより存在意義とのこと。またリュウジさんのガッコウにある食堂（学食）の食事は全国でもトップクラスの味らしい。因みにお気に入りはラーメンとのこと。

……。

い、行ってみたくなってきた……ガッコウ。

「で、何だお前ら？学校行きたいのか？」

「うん行きた【ドボス！】ふぐお。」

「い、いえそんなんでも聞いたんじゃないんです。」

魔王の鳩尾に肘を叩き込んでおいた。

「違っのか？じゃ何で聞いた？」

な、何か尋問みたいだなあ……。

「いや、いつもリュウジさんが行っているとこ行ってどんなところなのかなあって。」

適当に言い訳を試してみた。

「あ、そんなことか。」

あっさり信じてくれた……。

「おお、こんな時間か。じゃ行ってくんぞ。」

「あ、行ってらっしゃい。」

若干慌て気味になりつつもバッグを肩に担いで家を出て行った。

「……ふう。」

にしても……やっぱり興味があるなあガッコウ……リュウジさんも毎日行ってるし……。

!?

な、何考えてんのボク!? 行きたい理由にリュウジさん関係ないじゃない! おかしいよボク!?

もうこの話終わり終わり！

「し、死ぬかと思った……。」

「あ、ご、ごめん。」

あ、そういえば魔王に鳩尾食らわせてたっけ……さすがにやりすぎたかな。

「よし！」

いきなり元気になった!?

「こうなったら奥の手を使おう！」

「奥の手？」

あ、ファイファイ復活した。

「そ、奥の手。」

……。

「……まさかこっさり行くとか言っんじゃないよね？」

【ギクッ】

今何か明らか怪しい効果音聞こえた。

「……。」

「……。」

「……。」

「・・・ダメ？」

「ダメ。」

「ダメ？」

「ダメ。」

「ダメ？」

「ダメ。」

「ダメ？」

「ダメ。」

「・・・これじゃ無限ループだよ。」

「・・・ちえ。わかったわよ・・・。」

あ、引き下がった。でもボクとしてはありがたいな。あのままだったら無限ループだったろうし。

「あ、ちょっとトイレに・・・。」

小走りでリビングを出て行く魔王。

「ふう・・・。」

にしても・・・やっぱり暇だなあ・・・。

「・・・アルス？」

「？何ファイファイ？」

ファイファイがボクの目の前まで浮かんできた。

「いいの？クルルをトイレに行かせて？」

「何で？トイレくらいいいじゃない。」

「だってトイレの場所って……。」

……。

ん？

考えてみたらトイレって玄関に続く廊下にあるんだよね？

……。

「……まさか。」

嫌な予感がして……。

【バン！】

慌てて廊下に出てみたら……。

「「「あ。」」」

玄関のドアノブに手をかけている魔王の姿が。

「・・・何してんの？」
「・・・と、トイレ？」
「そこトイレ違う。」
「・・・。」
「・・・。」

時間停止・・・。

「・・・。」
「・・・。」
「・・・脱出!!」
「させるか!!」『壁よ、遮れ!!』

ドアを開けようとした魔王より先に呪文を唱える。

【バシィ!!】

「いたっ！」

結界の呪文によってドアから先の進路を塞ぐ。

「むっ！何すんのよアルス！」

顔膨らませて怒る魔王。でも全く恐くないし、むしろ可愛い・・・

ってそんなこと思ってる場合じゃない。

「何すんのじゃないよ！ガツコウには行っちゃダメってあれほど言
ったじゃないの！」

「か、勝手に行き先ガツコウって決め付けないでよ！」

「じゃどこ行こうとしたのさ？」

「ガツコウ。」

「あっさり認めるな！！！」

後から思ったけど、まったく意味のない会話だよねこれ。

「ぬぬぬぬぬ……。」

「むむむむむ……。」

「みみみみみ……。」

睨み合うボクと魔王とフィフィ。フィフィが変な唸り声を上げてい
たのはこの際もう無視しよ。

「こっとなったら……。」

魔王が手をかざすと、そこから真っ黒な穴が現れた。そして穴に手
を突っ込むと、そこから漆黒の大剣が現れる。

「……。」

ボクも負けじと剣を構える。和室に置いてあったのを持ち出してき
た。

「「決着つけてくれるわあああああああ！！！！！！」」

「……これって急な展開って呼ぶのよね？」

フイフイ、それ言っちゃダメ。by作者

さて、じゃ龍二の方を覗いてみますか。by作者

〈龍二視点〉

「おつす。」

「荒木いいい!!」

はい、どうも荒木 龍二です、じゃなかつたな。あゝあ、いきなり近藤さんかよ・・・説明。近藤さんはキリリと締まった筋肉と、シャープな顔のラインと切れ上がった目。まあようはイケメンって奴だ。この人の女子のファンは多いな。噂だけど。担当は数学。いやな時間に来ちまった・・・ついでに女子バレー部の顧問でもあって、ベタに熱血先生で不正は嫌い。イケメンな上に指導も上手い、おまけに人格者とのことだ。当然、俺の遅刻も不正に含まれるわけだして・・・。

「今日こそは貴様の不正を正してくれるわあああ!!」

はい、突っ込んできましたね。猛牛のごとく。でもこれじゃ体罰になりかねないよな。俺も痛いし、近藤さんは俺の中ではお気に入りキャラだから、むざむざクビにさせるわけにはいかん。しかし俺が

手を出したらいろいろメンドイしな……。

つーわけで……。

【ビュン！】

一瞬にして近藤さんの耳元に手を当て……。

「近藤さん……実は」

（ピー）【なんだろ？」

早口で耳元で囁いた。

みるみる近藤さんの顔が真っ青に……。

「な……は……へ？」

「……。」

「……。」

「もう……席についていいぞ……グスン。」

平和的に解決しました

「……龍二。一体何言った。」

席につくと隣の雅が聞いてきた。

「国家機密だ。」

「嘘が大げさ過ぎだ。」

はっはっは、雅は相変わらずツッコミが冴えてるねえ。

なあに、軽く近藤さんの弱みを耳元で囁いてやっただけさ。

とゆーのは黙っておこう。

「で……この図形は……うう。」

近藤さん、泣きたいのはわかった。わかったが授業が進まんのでお早めに。

「泣かせた本人が言うな。」

「出たなエスパ―雅め！」

「いつ俺が超能力者になった!？」

「エスパー伊藤がカラシシュークリームを五個食って吹き出した時から。」

「何だその変なタイミング汚な!！」

ギヤーギヤーと騒ぐ俺ら。

「り、龍二!今は授業中!黙っとけ。」・・・はい。」

久美が注意してきたがガンきかせて黙らせた。

で・・・。

キーンコーンカーンコーン・・・。

キーン【】とつもろこし【カーン】とつもろこし【】・・・。

『そこだけ日本語かよ!!!』

このクラスはチャイムに対してのツッコミの時は心が一つになるらしい。

そして俺と雅の口論のおかげで、近藤さんの授業は丸つぶれとなった。

無論、近藤さんは教室の隅で泣いていた。

ついでにこの教室にいた近藤さんのファンの女子達に何かいるろな意味（おそらく怒りもしくは侮蔑）を込めた目で見られたのだが、ムカついたんでシャーペンを連続で投げつけた（その後泣きながら謝ってきた）。

「ふう、やっぱりラーメンは最高だな。」

只今学食でランチタイム ついでに言うと、俺が登校してきたのは何と四時限目。大遅刻だが、まあよくあることさ いやでも、この学食さすがうまいと評判だけある。学生達でこった返しとるわ。

俺は当然、醤油ラーメン

お向かいの雅は俺とは違う塩ラーメンを食っている。俺と雅とは好みが違う。

「君らホントラーメンが好きなんだな……。」

何か久美に呆れられた風に言われた。ついでに俺の右隣。メシは野菜炒め定食。

「まさにラーメン命！よね。」

何故か楽しそうに言う香苗。俺の左隣に座ってから揚げ定食をパク
ついている。

「……どつでもいいがな。」

「「？」」

「おめえら密着し過ぎじゃね？」

うん、二人が両方からくつついていて食いくい。

「いいじゃないのたまには」

「か、香苗には負けられないからな。」

たまにはじゃねえよいつもじゃねえか。そして何に負けられんのだ？

にしても……女子に挟まれた男子か……これことわざで言つと
なんてつたっけ？

確か植物に関係あつたよなあ……

え〜と……

両手に……

両手に……

野菜？

両手に野菜・・・ニンジンとタマネギとか？トマトとバジル？

・・・。

今晚はカレーにしようかそれともピザにしようかどっちにしようかね？

まあとりあえず。

「とりあえず離れる。ラーメンが食べない。」

あと口には出さんが正直鬱陶しい。以前口に出したらスゴイ落ち込んでいろいろメンドクさかったから今回は言わんでおこつ。それが優しさというものだ。

「あ、ああすまない。」

「う、ごめん。」

む、随分潔いな。

「そりゃ前回あんだだけ毒吐かれたらな。」

雅が言うが、前回？ああ、鬱陶しいって言ったことか。教訓って奴？

「うう・・・何故、何故に龍二ばかり・・・。」

そして俺の右斜め前にいる恭田はうどんを啜りながらぼやいている。俺ばかり何だ？何が言いたいんよ？

「ところで龍二、君のところの二人は何か変わった所は無いか？」

久美が聞いてきたが、性格に三人・・・いや、二人と一匹？だ。まあ気にしないでやろう。

「まあ特にはねえよ。」

・・・あ、そう言えば。

「なあ、ちよつと相談が・・・。」

「「「？」」「」」

まああいつらをいろいろ束縛させるのは何か嫌だしな。

「なあ、お前ら俺を差し置いて何話してんだ？」
「」「」「別に？」「」「」

恭田を忘れてた俺達でした。

*場所は戻って龍二邸・・・。

（アルス視点）

「ふう・・・ふう・・・」
「はぁ・・・はぁ・・・」
「・・・」

戦い始めて一時間半・・・ボクと魔王はボロボロになっていた。

「や・・・やるじゃない・・・」
「そっちこそ・・・」
「・・・」

ボクだって伊達に勇者やってない。

「でも次で終わらせる。」

「それはこっちのセリフ。」
「……。」

そしていざ剣を振り上げようとした時。

「……ねえ二人とも。」

……ずっと無言だったフィフィが突然呼び止めた。

「……何？」

ボクと魔王が一緒になってフィフィを睨む。戦闘中に気を削ぐようなことをされたら、いやでも睨みたくもなる。

「ふえ!？」

殺気を感じたのか変な声を上げるフィフィ。

「あ……あのね……。」

「だから何？」

早く始めさせて欲しい。

「……」の部屋どうすんの?」

「?」「?」

言ってる意味がよくわからないんだけど……?

・
・
・

「「あ。」

ボクらが暴れたせいで・・・家の中ぐちゃぐちゃ。

もう誰もが見ただけで思い切り引くと思う。

今頃気付いたよ・・・ボクら。

「あ、ありゃりゃ・・・。」

「やりすぎ……ちやったね。」
「うん。」

いやホントすごい。こんなリュウジさんに見せたら大変……。

あ……。

～想像中～

リュウジさん』うわぁ、部署めちやくちやじゃねえかあ ーじやど

うしようもねえなあ あははははあ

シネ。』

ボクラ』いやあああああああああああああ！……！！』

く想像終了く

うん、想像しただけで殺気を感じるね。しかも顔が悪魔よりスゴイことなつてたし。想像しなきゃよかった あはは

・・・。

「「「こ、殺される・・・。」」」

同じこと想像していたボクらは、冷や汗を流しながら震えつつ、リュウジさんが帰ってくる前に大急ぎで片付けることにした・・・死ぬ気で。

夕方

「ただいま。」

「「「お、おかえりなさい・・・。」」」

「?どつたあ?しんどそうだぞ?」

「「「な、何でもありません!!」」」

「?まあ、そんならいいや。」

な、何とか間に合った・・・時計を見ると、掃除を始めて三時間。時々魔法を使っていくことで、暴れた形跡を跡形もなく消した。壊した物はファイファイの魔法で何とか復元。どうにかリュウジさんに

ギクツ！

「晩飯何がいい？」

ガクツ！

「そ、そっちですか……。」

「そっちですかて、他にあんのか？」

「いえ無いです!!」「」

「あ、そう。」

ふう……心臓に悪い……。

「あ、それよりリュウジ。」

「？」

フィフィがリュウジさんの肩まで飛んで行ってチョココンと座った。

「ガツコウのことなんだけど。」

「フィフィちよつとストロップ!!」「」

何を言い出すか君はあ!？

「むぎゅ〜！痛い痛い！痛いってばアルスう！」

思わずフィフィを思い切り握っていた。

「あ、ごめん!……な、何言ってるのさ?」「」

謝ってから小声で話すボクら。もちろんリュウジさんから距離を置

いている。

「だって二人ともそれが原因で喧嘩になっちゃったんでしょ？」

「え、ええ、まあ。」

「確かに……。」

原因は合ってるけど……自分で何だけど喧嘩のレベル超えてたと思う。

「だったら手っ取り早く原因除去する方法って言ったら聞いてみる
ことしか無いでしょ？」

「うーん……。」

まあそうなんだけどなあ……。

「大体、アルスだってガツコウ行ってみたくせに。」

「え？そうなの？」

「う……。」

あ、相変わらず痛いところを……。

「で、その理由ってゆーのがリュウズ」「わあああ！」「むぎゅー！」

ま、また思い切り握っちゃった……。

「おーい。」

「！は、はい！？」

思わず大声上げたから物凄く訝しげな視線をよこしてきたリュウジさん。

「リ、リュウジく……。」

ボクの掌からフラフラと出てきたフィフィは、何とか自力でテーブルの上に降り立って這い蹲った。咄嗟のこととは言っても強く握り過ぎちゃったなあ……。

「で、聞きたいことって何だ？」

フィフィを掌に乗せて目の高さまで持つてくるリュウジさん。フィフィの話の内容はもちろん、ガッコウのことだろうなあ……まあ断られたら懇願してみよっかな。もしかしたら行けるかもしれないし。

「あ、あのね……アルスとクルルなんだけど。」
「うん？」

【ゴクリ……】

思わずボクらは唾を飲む……。

「二人をガツコウに行かせてあげてくれないかな？」
「あぁいいぞ。」 アツサリ

・
・
・

か
・
・
・

第十三の話 勇者の苦勞と龍二の生活（後書き）

龍「ま、何やかんやで次回からは学校が舞台になってくるぜ。」

作「まあ学園物だしね、一応。」

龍「にしてもまあ、小説書くの下手だよなオメエ。」

作「え？そうか？」

龍「ああ、時々漢字ミスはまあいいさ。でもさ、時々おかしいところがあるじゃねえか。」

作「ああ、そういうところはまた読み直して修正してくんだよ。」

龍「じゃ見逃したところは？」

作「読者の皆様、この小説の誤字、脱字がありましたら是非、教えてください。お願いします。」

龍「読者頼みかよ。」

作「うっせー、読者の皆様は神様だ。」

龍「はいはい。ま、こんな小説だが。」

作「一つよろしくお願いします。ああ、後最後に。」

龍「？何だ？」

作「そろそろこのあとがきにゲストでも呼ぶかな。」

龍「ほう？いいんじゃないねえのそれ？」

作「だろ？じゃ次回出すってことで。誰が出るかは楽しみに。」

龍「ついでにラーメンでも作ってもてなそうや。」

作「おめえはただラーメン食いてえだけだろが。」

第十四の話 学校へG O G O G O O ! ! マッハで（嘘）

（クルル視点）

あゝ緊張するなあ・・・。

・・・。

あれ？これ私視点？うそー！？初めてだよこんなのお！

よおし！張り切っていくよー！

「・・・何呟いてんの？」

「ありえ？」

あ、口に出してた？

「はい。」

即答されたよ・・・。

あ、只今私達はリュウジのガツコウに來ています。昨日はあまりにも返事が軽かったから思わず絶叫しちゃったけど（その後殴られた）、その後はウキウキワクワク。で、現在地がリュウジのいる部屋、一般的に言つと教室つてとこの扉の前に來ています。中からザワザワと話し声が聞こえてきます。

敬語でお送りしました

「・・・それにしても・・・さっきはすごかったよね。」
「ああ、あれ？・・・確かにすごいを通り越してひどいような気がする・・・。」

そう、それは私達がここに来るまで・・・。

〈回想〉

『で、これからこのえらい人物と会うわけなんだが・・・。』

朝、私達はリュウジに連れられてちょっと立派な扉の前に来ていた。

『まずその人とお前らを対面させて、入学許可をもらうように頼むぞ。』

『は、はい！』

『はい。』

アルスは緊張してたけど、私は内心ワクワクしていた。元々未知の体験とか大好きだし。

『じゃ、まず俺が手本を見せてやる。』

リュウジの手本・・・かあ・・・。

不安・・・。

『まずは礼儀正しくノックして。』

【コンコン】

扉を叩くリュウジ。

『どござ。』

中から女性の声が出て……。

『うらあ！！』

【バガアン！！】

リュウジが扉を蹴破って……ってオイ！

『な、ななな何いいいい！！??？』

やっぱり中の人驚いてる……。

『はよつす、校長。』

『あ、ああああ荒木君！！きき、君はまたああ！！』

『気ニシナイ。』

『気にするわ！！』

こ、校長って人メチャクチャ怒ってるし……しかもまたって、前回もしたの？同じこと。

『はあ……それで？今日は何の用なんですか？』

もう諦めましたってな感じな顔をする校長さん。とゆうか校長さん
凄く美人。腰まである長い黒髪と凜々しい顔つき・・・女性が憧れ
そうな人。かくゆう私も憧れる。だって一目見て美人だって思った
もん。

『ん。こいつら今日入学させて。』

『ぶっ!!』

【ガッン!】

思いつきりに頭にぶつけた校長さん。痛そー。

『何か?』

『何か?じゃない!そーゆうのはもつと事前に言いなさい!』

え、そうなの?

『いいじゃん。』

『よかない!手順というものを知れ!』

『知るか!』

『即答すな!!』

何このやりとり?てゆうよりこの流れだと私達ガッコウ行けないっ
ぽい?

『とーにかーく!入学させたいなら後日試験を受けさせます!と
にかく今日はダメ!』

そ、そんなぁ・・・試験なんて無理だよ・・・とゆうよりめんど
くさい・・・。

『そ、それとこれとは話が』今日の昼食時の話題は校長先生の趣味についてにし』喜んで入学してもらいます。』

・・・。

『あ、入学手続きとかは昼休みに。』

『はい、お待ちしております・・・グスン。』

『さ、行くぞ。』

・・・。

こ、恐ろしく・・・。

く回想終了く

あの後、リュウジにいろいろ聞きたいことがあったけど恐くて聞けませんでした。

最後の方、何かちょっとニヤリって笑ってたし・・・。

そんでその後、担任ってゆー人、名前は神楽さんってゆー人のところに行つて私達の紹介をした。校長さんのような展開になるかなあつて思ってたたら、

『おう、よろしく。』

軽い感じに挨拶されて拍子抜けした。しかもこれまた美人な人が男勝りな口調で話すのにも驚いた。綺麗ってゆーよりかっこいい部類の人だった。

・・・え？この部分省略し過ぎ？

いや、それは文字の都合というものなんだってさ。リュウジが言った。

「まあ無事ガツコウ来れて結果オーライって奴よ。ね？」

「・・・何ですか？結果オーライって。」

「こないだリュウジに教えてもらった。」

意味は知らないけどね。

しばらくすると、中から神楽さんの声が聞こえてくる。

『つーわけで、今からドッキリイベント始めっぞ。』

『お—————！！！』

「「！？」」

な、何かいきなり中から雄叫びが・・・つかドッキリイベントって何？

『よし、じゃ入ってこい。』

・・・。

「・・・ボクらのことかな？」

「・・・多分。」

な、何か入りづらいような・・・。

じじじじ。。。。

。。。。

「。。。。ええい！なるようになれ！」

ヤケクソ気味に扉を開ける！

扉を開ける。

扉を・・・。

「・・・」

あ、開かね～・・・。

押してみてもダメ、引いてもダメ・・・。

どうやって開けるの？

【ガラリー】

「「！」「」

び、ビクった！いきなりカグラさん出てきた。

「なぐにしてんだお前ら。」

・・・しかも横にスライドするドアだった。 (引き戸)

「「ぶ、文化の違い・・・。」

私とアルスのダブル眩き。

「はあ？・・・まあいいや。さっさと入りな。」

改めて聞くと男らしい口調だなあ。

「アルス、見習っとけば？」

今まで男の子として通してきた女の子として。

「・・・うん。」

あ、否定しないんだ。普通なら「何言ってるの？」って返すのに。同じ考えだったわけね。うん。

「「し、失礼します。」

そして部屋に入ってみた私達……。

まず第一印象。

広い。

長方形のような形の部屋に、十単位のリュウジと同一年ぐらいの人達が座ってる……。

ビックリして大声上げそうになった。

でもリュウジがなるべく冷静に、って言ってたから持ちこたえた。
冷静冷静。

そして私達は大勢の人の真正面に並んで立った。さつきとは違って静かになって皆して私達を見てる。ついでにリュウジは後ろ側の窓際の席に座っている。よく見ればマサにクミ、カナエもリュウジの近くの席に座っていた。

……。

うわ、すっごい緊張してきた……隣見てみればアルスもさつきより緊張してる……心なしか顔が少し青いような。

「ほれ、自己紹介しろお前ら。」

「は、はい！ああああアルス・フィートです。よ、よろよ、よろしくお願ひしますー！」

よろよって何よ？

「クルル・バステイです！よろしく」

私のモットーは、いつも元気に、明るく！

『。。。』

『か。。。』

「「？」」

思わずアルス引き攣り笑い……。

あれ？何かさつきより暑くなってきたような……？

「はいよ〜皆黙れ〜。」

カグラさんが手をパンパンと叩くと皆押し黙った。すっご。

「まず簡単な質問タイムといくぞ〜。聞きたい奴あ手え上げる。」

『はい！〜！』

いや、皆して上げなくても。

「ん、じゃまずはお前……えと……名前何だっけ？」

「勝原です！いい加減覚えといてください！！」

「あ？勝原？名前忘れるくらい印象ないお前の場合は普通に負原まけはらだる？」

「勝手に苗字を変えないでください！！」

哀れ、名前を覚えられてない男子の精一杯の抗議。

「あ〜もついいや。で？質問は？」

（俺的にはよくないんですけど！？） 小声

「えっと、二人はどこから来たの？」

うっ！いきなり来たか！大丈夫、落ち着いて。朝リュウジと話して質問の時にどう答えたらいいかあらかじめ考えておいたんだもんね。

「ふ、二人揃ってアメリカです！」

「アメリカのどこ？」

「ニューヨークです！」

アメリカとかニューヨークって何なのか全然わかんないけど。

「へへアメリカ人の割に日本語上手」「はいそこまで。」「えへ！！！」

遮られたね。

「長い質問の上に面白くない。次。」

あれ？そんな理由？

「はい。」

次は女の子だった。

「はいよ池川。」

あ、今度は名前覚えてたんだ。

「あの、私池波です……。」

「あ。」

結局間違えてるし。

「……まあいいや。ホレ言ってみ。」

「あ、はい。えっと二人は今どこに住んでるの？」

【グオツ！】

いきなり皆して（てゆーか全員男子）身を乗り出してきた。

し、しかも暑い！さっきより暑くなってきたよ何か！？

「えっと……。」

あゝアルス悩んでるね。

でも私は言います。

「はい、ただ今リュウジの家でイソウロウ中です！」

これはリュウジの承諾の上で言ってる。リュウジ曰く「どうせいつかバレんだから、最初っからバラしてもいいぞ。隠すのめんどいし。」とのこと。

【ビシッ】

？何かヒビが入ったような音が？

【ギギギギギギ……】　ぎこちない動き

「……ん？」

皆してリュウジの方に顔を向ける……いやいやいや、皆顔恐い目
恐い。

しかも今度は何故か寒い……。

「……龍二？」

「？」

「お、お前……マジ？」

「何がだ。」

きままずい雰囲気の中平然としてるリュウジ……さすが。

「い、居候って……おい。」

「ああ、そいつらうちの爺ちゃんのアメリカ人の友達の子でな。い
るいろ訳あつて家で預かつてるんだよ。」

さも当然とゆるい風に言つリュウジ。まったく慌てる様子なし。

さすが

「まあ留学つっわけだ。うちの爺ちゃんが日本語話してんのを小
さい頃から聞いてたから一応の受け答えはできっぞ？だから問題は
ナッシン。」

『……』

それでも不穏な空気は無くならない。しかもまた寒くなってきた。

「あゝ・・・その、何だ。まあとりあえず席決めるから。」

カグラさんの助け舟により、この不穏な空気は消えて・・・

【ガタガタガタ！】

・・・一斉に男子が姿勢を正した・・・すごい切り替えの早さ。しかも気温が急激に上昇した・・・気がする。

「じゃどこの席座りたい？自由に決める。」

「当然！リュウジの近く！」

即答してやったわ！

『……………』

ってあれ？何かまた気温が下がったような・・・。

「んじゃあ、二人は・・・うん、じゃ龍二の前後の席に座ってくれ。」

「はい。」

やったあ リュウジの近くリュウジの近く

「じゃあこれにてビックリイベント終了〜。」

『お……………』

うわ、最初に比べて覇気が無い……。

キンコンカコンコン……

「！？」

ひゃ！？ビックリした！

キンコンカコンコン~~~~~
~~~~~ン……

『……って長っ！！』

！またビックリした！！

「うむ、相変わらずこの瞬間はクラスが一つになれるな。」

リュウジが呟くけど、こんなんで皆が一つになれると思つと悲しくなる気がするよ……。

とりあえず、ガツコウってゆー所は気温が上がったり下がったり大変だなぁって思った。



後ろから何やら楽しそうな鼻歌聞こえてきた。無論クルルだな。

「おい、そんなに嬉しいか？」

「うん！何か居てるだけで楽しい！」

そりやすげえな。居てるだけで楽しいか学校。でもそのうち飽きるぞ。

いやしかし、こんなにまで楽しそうな顔してると何だかこっちまで気持ち嬉しくなってきたじゃねえか。これが子煩悩って奴か？

・・・。

俺はいつからこいつの親父になった？あ、父親気分か。こいつ何か子供っぽいもん。ホンマ魔王か？まあどうでもいいなこの際。魔王とかそんなの。

「・・・。」

「？おいアルス？」

前に座ってるアルスからエネルギーが感じねえ。

「つ・・・。」

「？」

「疲れ・・・ました。」

いきなり体力の限界かよ。

「おいおい、まだこれからだぞ？」

「ふえ？」

んな変な声上げんでも。

まあ転校生とかつーのは何かと苦労するよな……。

「ねえねえ！」

ほれ来た。

「え、何？」

まずアルス。

「あのさ、いろいろ聞きたいんだけど……。」

「あ、私も〜！」

「私も聞きたい。」

「え？え？」

ほら見る。転校生の定番、質問攻め。俺も過去に転校したことあったからこーゆーのはすでに経験済みだ。

で、後ろを見てみると……。

「で？リュウジとどーゆー関係？」

「どう思ってるの？」

「どこか怪我不い？」

やっぱ数名の女子に囲まれての質問攻め……っておい、何故俺の話題が出てくる。しかも何だ最後の。失礼な。

「えつとお、リュウジと私は……言っちゃったらすっごく恥ずかしいような関係です」

『ぎゃー！』

女子よ、歓喜の音がうるっさいぞ。っーか何よその変な関係？

『……………』

……クラスの男子からの冷たい目力光線を感じる……その中でも特に冷たい奴が三つ。

「何だ？」

何か知らんが香苗と久美と恭田が俺を周りの連中よりも強く睨んでいた。

「……リュウちゃん、クルルちゃんとの関係って何なの？」

「俺が聞きてえわ。」

「一体夜中に何をした？」

「寝てた。」

「何であんな可愛い子らをオメエの家に置いてんだ？」

「神の策略だ。」

淡々と答えてく俺。すべて事実だ文句あつか。ついでに質問してきた奴が誰か言い当ててみましょう。



「大体私は、あの二人が学校に来るのは反対だったのに・・・（ブツブツ）。」

愚痴が丸聞こえだ。

「じゃ何で昨日賛成したよ？異論無しだったじゃん。」

「どうせ君のことだから反対しても連れてくるだろう。」

「ごもつとも。」

「まあ大目に見てやれや。二人とも学校楽しみにしてたんだってさ。」

「むゝ・・・そーゆー話じゃないのに・・・。」

「？何だ？」

「「「・・・もういいです・・・。」」」

カチーンときたぞちよつと。

つと、前後ろを見てみればほとんどの女子が二人に群がってる。

あゝクルル楽しそうに話してる。アルスすっげえ必死になってる。

うゝん真逆。

「さゝて・・・。」

二人は周りの女子どもにまかせて、俺は今週の『週刊ラーメン命』を読むとするか。

お？今週は東京のオススメラーメン店ピックアップ特集か……。

（り、リュウジさん……。）

ふむふむ、渋谷にあのラーメン店のチェーン店がオープンか……。

（助けて……。）

ほお、あの店の味噌ラーメンが……。

（ちよ、聞こえてますか？）

何と、学生は割引？こりゃ行かないと……。

（あの、ボクの声が……。）

おお？世にも珍しいラーメン店？行ってみたいとわからんな……。

（も、もしも……。）

ん？この店アメリカ人の人が店長してんの？世の中は広いね……。

（……グスン。）

……さつきから何かやけに頭に響くもんがあるんだが？

（聞こえてるじゃないですかああ……！）

よく聞きゃアルスの声じゃねえか。どしたあ？

(・・・ボクが頭の中に語りかけてるのはスルーですか？)

どうでもいいっての。どうせ魔法か何かだろ？

(・・・この世界って魔法ありますか？)

いや、ねえな。

(じゃ何で冷静なんですかあなたは？)

だあってそーゆー性分だし。

(・・・もいいですよ。)

あ、そ。ああそれからさあ。

(はい？)

今度勝手にそんなテレパシーみたいな奴使って心覗くようなことしたら・・・殺すよ

(ひっ！・・・は、ハイ。)

顔青いぞ。

(誰のせいだと思ってんですか・・・いや、それよりもこの状況何とかしてくださいよ。)

ん？何が？

（この人達の話のタネが尽き無いんですよ。もう限界ですから助けて〜・・・。）

あ〜・・・なるほどねえ・・・うわ、よく見りやお前に話かけてんのこの学校ーよく喋るっつーので有名な女子グループじゃねえの。こいつあ確かに大変だ。

（え〜！？じゃどうすんですかあ！？）

まあ待て・・・う〜む・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

よじ。

ま頑張れ。

(え?それどーゆーってちよつと何席はずそうとしてんですか何部屋から出ようとしてんですか待つてく下さい待つてれば薄情者おおおおおおおおおおおお!!!!)

何やら頭の中で悲痛な叫びが聞こえてきたか多分幻聴だ。ヘッドフォンしてるから何も聞こえないぞ俺は。つーわけでさらばだアルスよ。俺は次の授業サボって屋上で暇潰しとくから。

俺が出てく瞬間のアルスの絶望的な顔はものすごく印象的だったな。

「あははは!すごく楽しかったよ〜!」

「そうかそうか。そりゃ来させたかいがあったってもんだ。」

「.....」

さて、授業も終わり、ただ今帰路についている俺ら。今日は香苗は生徒会で会議があり、久美は部活と一緒に帰れなくなり、雅も涼子さんと買い物行くとか行つて先に帰つていった。つーわけで、現在は俺とアルスとクルルの三人だ。久美の奴、最近は部活より勉強に専念したいつて言つてサボリ（ちよつと失礼か）がちだったが、久しぶりに体を動かせとエリザおばさんに言われたつーわけなんだが・・・何故ゆえか俺と別れる時に子犬が飼い主と別れるかのような表情してマジかわえゝつて思った。普段のあいつからは魅力は感じないが、小動物好きの俺としちやいっつもああだといいのに思うね。あゝもつたいね。あ、ついでに香苗は生徒会長な。

・・・あれ？言つてなかつたか？つーかあいつが生徒会の人間だつてのも初耳？

あゝ言い忘れてたっけ？でもどうでもいいだろこんな話。

まあ普段あいつは生徒会長としての仕事サボつて俺らと帰るのがほとんどだからな。

で、今日は半ばつーか完璧強制的に生徒会役員の連中に連れてかれちゃつたつてわけ。

そんな時に香苗が俺に助けを求めてきたがスルーした。ドンマイ。

「・・・ボクはホントに辛かつたよ・・・。」

頭ん中でいろいろ考えてたらアルスがものつそい気だるげな感じで呟いた。まあ俺が教室に戻るとほとんど死人みたいな感じで机の上に出っ伏してたからなあ。見捨てたこと思いつきり咎められるくらい元気はあつたらしいが。

「?どうしてだ?」

「だってさ・・・朝からずっつとボク質問攻めされてすんごく疲れたよ・・・。」

あゝ、あいつらね、うん。言い忘れてたが、連中のあだ名は『戦場を飛び交う弾丸』だそうだ。理由は推して知れ。勘がいい奴ならわかると思うぞ多分。

「まあ、今日は何かすつげえ疲れた顔してたから学校案内とかは明日にでもらったけどよお。初日から大丈夫かお前?あ、クルルは聞かないけどな。」

「ええ!?何で何で!?私にも労わりの言葉無いの!?!」

「オメあんだだけ打ち解けといて労わりの言葉もクソもあるかつつの。」

「そ、そんなことないよ!私だってスツゴイ疲れてさあゝほら、肩コリが痛い痛いので・・・。」

うるさいから聞き流す。

「聞いてよ!リュウくん!」

「・・・は?」

何がリュウくんか。いつからそんなフレンドリーになった。つかそれ以前から俺のこと呼び捨てだったけどな。

「え、ダメだった?皆曰く呼び捨てでもいいけど愛称付けた方が高感度アップだって言ってたから・・・。」

・・・もう影響与えられたかこいつ。まあリュウくんかあ・・・ち

とくすぐつたいけど・・・。

「えっと・・・ダメ？」

「別にいいぞ？苦じゃないし。」

「やったあ」

ぴよんぴよん跳ねるなまったく。いくつだよオメエはよ。

「・・・。」

「？今度は何だ？」

またアルスが押し黙る・・・。

「り、リュウ！！」

つと、いきなり大声出すな。それとジが抜けてるぞ。

「・・・。」

「・・・？」

また沈黙・・・。

「・・・リュウ・・・ジさん・・・／／／」

・・・。

「何したいんだお前？」

「え、ええ！？いや何でもないですよハイ！！」

こいつらよくわかんねえな考えてること。



で、家に帰ってみれば・・・。

「グスン・・・皆して私のこと忘れて・・・。」

「「「・・・。」」」

薄暗い部屋で一人メソメソ泣いてる妖精がいました・・・確かに忘れてた。

第十四の話 学校へG O G O G O！マツハで（嘘）（後書き）

作 はあ、やっと更新できたよ。

龍 お疲れ〜。【ズルズル】

作 ラーメン食いながら言われても何も嬉しくねえよ。

龍 さいで。

作 さて、と。じゃあとがきトーク始めますか。

龍 そんな名前だったのかこのあとがきの会話。まんまだな。

作 まったくだ。さて、前回ゲストを呼ぼうとゆる〜わけで、呼ばせてもらいました。アリス・フィートことアルスです〜！

【ドンドンパフパフ〜】

ア あ、ど、どうも……。

龍 いきなり消極的じゃねえか。どしたあ？

ア だ、だってボクなんか呼ばれていいの？他の人もいたかもしれないし……。

作 まあいたな。出たいつつってた奴なら結構。

ア ほら〜！

龍 まあまあ、そう言っつな。

作 そうぞ。つーかお前さんを選んだのにも訳がある。

ア ？何ですか？

作 ほれ。

【紙を渡す】

ア ？……………。

作 小説感想・評価欄のところに書いてあったコメントで、お前さんがいたく気に入っちゃった人がいてさ。それで。

龍 いやあよかったな。可愛いつて書いてあったぞ確か。

作 そだな。俺としても自分のキャラが気に入ってくれた人がいるってのは嬉しい限り……ってどうしたアルス？

ア ……



## 第十五の話 真っ黒い遊び

〽龍二視点〽

「~~~~~」

さあ今日はいい天気だし、洗濯物干すぞ〜っと。いやあ日の光がポカポカしてて気持ちいいぜ。思わず鼻歌まで出ちまうよ。

【パンパン】 洗濯物振って皺伸ばしてるとこ。

「リュウくん〜ん！」

居間からクルルが呼ぶ。先日、俺の愛称がリュウくんとなったことにより、前よりフレンドリーになった気がする。嫌じゃないがな。

「何だ〜？」

物干し竿に服を通しながら答える俺。よっと。

「暇だよ〜！」

「あ、そう。」

【パンパン】

「え、そんだけ!？」

「うん、そんだけ。」

よいしょっと。

「もっと何か反応返してよ〜!」  
「あれ以外になんて返せと?」

【パンパン】

「だって暇なんだも〜ん!」  
「だからどうしたんだっつーの。」

よいせつと。

「暇で暇で死にそうだよ〜!」  
「じゃ死んどけ。」

【パンパン】

「遊んでよ〜!!」  
「やだね。」

おらせつと。

「遊んで遊んで〜!」  
「断る。」

【パンパン】

「……リュウくん?」  
「ん〜?」

せいやつと。

「遊ぼ？」

「そんな首傾げたってダメ。」

【パンパン】

「むく！じゃどうしたら遊んでくれるの？」

「今忙しいんだよ。アルスらと遊んどけ。」

あらよつと。

「だって今アルスとフィフィ寝てるもん。」

「じゃ自分で考えな。」

【パンパン】

「・・・わかった！」

「？」

そらよつと。

・・・何がわかったんだ？

・・・

ま、いいや。うるさいのがなくなったからな。

さて、洗濯物も一通り終わったし、昼飯まで一服するかな。

とりあえず居間でお茶でも飲むか。うん、緑茶issベスト。玉露最

高。昼飯前だが茶菓子は大福つと。俺にとってメシと甘いモンは別腹だ。

「【ズズズ】・・・うめ。和むわ〜。」

う〜ん、日本の心。

「ニヤあああああああああ！！！！！？？？？」

ふと背後の和室から悲鳴が聞こえてきた。おそらくアルスだ。

つーか何なんだその猫のような悲鳴は？

「魔王おおお！！何してくれてんのさ一体いい！！！」

「あははは、変な顔〜！」

「うわ〜ん何これ〜！取れないよ〜！」

「あははははは！！！」

ふむ、どうやら寝ているアルスに何かイタズラをしたようだなクルルの奴。

「ちよつと〜うるさいよ二人とも〜。」

ファイフィ、起床。

「・・・。」

「・・・。」

「・・・？」

・・・？

急に静かになった・・・。

「「ぶ—————！！！！」」

「！？」

いきなり吹き出す音が。

「あははははは！！！！フィ、フィフィ顔が！顔が！！」

「う・・・プクク。」

「え、ちょ、え？何？何なの？」

顔？

「・・・いやああああああああ！！！！」

何か重大なことに気が付いたようだ。何が重大なんかはわかんねえな。見えねえもん。

「な、何じゃこりゃああああああ！！！！」

・・・どこかで聞いたセリフだな。

「あははははは！ひくお腹痛い！」

「・・・これやったの誰？」

「ボクの顔見たらわかるでしょ？」

お？何か起こりそうな予感。



「あはははは・・・はは・・・ちよつと二人とも？目が恐いんです  
けどっーかちよつとその手に持つてるのってさっき使ったっー覚悟  
おおおおお！！！」「きゃあああああ！！！！」

やっば逆襲されたか。うん、当然だ。っーか何したんだ一体？

「はわわわ！た、助けてリユウくん！」

つて俺んとこ来んのかい。ったく人が和んでる時に・・・。

「待てえいクルル！」

「逃がさない！」

ほら〜何かまたうるさいのが増え・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ぶっ！？」  
「！！？」

思わず茶を吹いた。



あ水性だから落とすのはそんな苦労しねえだろう。あいつらが絶叫したのはおそらく和室にあった鏡台を見たからだな。

「うわあああん！顔真っ黒〜！」

「同じことボクらにだってしてたでしょ！」

「当然の報いです！」

まあまあ仲がよろしいことで。

さて、昼飯の準備にでも取り掛かるか。

昼食時、クルルの顔がアルスとフィフィ以上に真っ黒になったのは言うまでもない。

第十五の話 真っ黒い遊び（後書き）

作 どうも～作者の कोरोコロ です。

龍 で、いちおうあとがきでちよくちよく登場する龍二だ。で、前回照れに照れまくってたおかげで何にも喋れなかったゲストのアルスだ。

ア ど、どうも。前はすみませんでした。

龍 まったくたげ。

作 何であそこまで照れるかね～？

ア あ、あの何か二人の気に障るようなことしたかな？

龍 いや、別に。

作 いいイジられ役が来たからラッキーとか思っただけよ？

ア ……ボク帰っていいですか？

龍&作 ダメ。

ア 即答！？

作 さ、イジられ役はほつといて。

ア まだ言う！？

龍 さて、このあとがきではとりあえず適当にトークをして終わるつっコーナーで、まあ特に意味は無くやっただけ無駄な気がする。

ア 何かサラリと否定してません！？

作 まあ同感だな。

ア 作者であるあなたまでそんなん言っちゃダメでしょ！？じゃ何でこんな話してんですか！？

龍 ん～…まあ…なあ？

作 あ～、その何だ。

龍&作 ノリで。

ア 言いよどむ程のことじゃない!!

龍 そんなじゃ皆様。

作 またいつか。

ア え、ちよつとこんなグダグダ感丸出しで終わるんですか!?!  
じや何でボク呼ばれたの!?!やっぱイジられ役だけ!?!えちよつと待  
つてまだ言いたいことがあるからって待ってってばああああああ  
あああ。。。。。

第十六の話 迷惑な秘密（前書き）

あゝ勉強して死にそう。死にはしないけどね  
（じゃ言つなよ）

## 第十六の話 迷惑な秘密

（龍二視点）

・・・ん？

あゝ朝か。ねみい。

「もうちつとだけ寝てえな〜・・・。」

今日は休日だし〜。つっても平日でも普通に寝るから別に関係はないけどな。ほら休日だと気分が違っただろ？あれだあれ。

まあとりあえずねみいな〜・・・。

「でも起きんと・・・。」

下で寝てる連中の朝飯だけは作ってやんねえとな。さっさと作ってもっかい寝ちまおう。

「ふぐお〜・・・!」

ベッドから起き上がって体をぐい〜と伸ばす。朝一はこれが一番気持ちいいんだよなあ〜と。一通り伸ばしてからベッドから降りて一階のキッチンへ行く。朝は適当に、かつ栄養価が高いモンがベスト。

「ふむ、やっぱりトーストとハムエッグとサラダが妥当か？」

一般家庭でよく見られる朝の献立。これに牛乳付けたら完璧だ。とりあえずパンをトースターに突っ込んで数種類の野菜を水洗いしてから和室で寝てる仲良し娘どもを起こしにかかる。

「お〜い、朝だぞ起き……。」

襖を開けて言いかけて黙る。二人といつぴ……。何かかわいそうだから三人にしたげよう。三人ともめちゃくちゃ気持ちよさそうに寝てる。寝顔があどけなくて、何か母性本能くすぐられる。俺男だけど。

まあアルスがクルルから離れて寝てるってのはツツコまないでおこう。おそらく寝てる時に蹴られるからだろうな。現にクルル布団がらめちゃくちゃ足出して寝てるし。

「……も少しだけ寝かせてやろうかな。」

ここまで気持ちよさそうに寝られたら起こすの躊躇っちゃう。

しかし何か負けた気(?)がすんな……。

「……。」

ニヤリ。



さて、トーストが焼けて、ハムエッグを人数分焼き終え、サラダの盛り付けも終わった頃……。

「んっ……おはよう。」

「おはよう……。」

「おはようございます……。」

三人とも起床したようだ。

「……。」

「……ぶっ……！！！！」

「あははははははは！！何二人ともその顔……！！」

「きゃはははははは！！二人とも顔おかし……！！」

「はははははははは！！何て顔してんの二人とも……！！」

「……はい……」

お？異常に気付いたか？



今頃気付いたか。

「お、やっと起きたかオメエら。」

「はい。じゃない! 『これ』したのリユウジさんでしょ! 何この猫の髭みたいな三本線!？」

「何で鼻先黒くすんのお!？」

「つか私だけ何だかわかんなくない!？」

アルスの言う『これ』とは。ズバリ、ラク顔である。

アルスは口の横にそれぞれ三本の髭+オプションで額にデデンと『猫』という漢字を。

クルルには口の周りに斑点を付けまくって鼻黒くして額にドドンと『犬』という漢字を。

ファイはちっこいので・・・まあ適当に落書きしたら何かわかんなくなつたからとりあえず額にチヨンと『肉』という漢字を。正直、『虫』にしようと思つたけど悩んだ末これにした。

これぞバカ丸出し三姉妹。森 中に次ぐ新たなトリオの誕生である。まあ前々からしたかつたしなラク顔。ついでに水性。

「おう。何かものっそい気持ちよさげに寝てたからな。とりあえずムカついたからイタズラした。」

「何でムカつくのそこで!？」

「知らん。」

「知らないなら言うなああああああ!!--!!」

アルスよ、朝っぱらからツッコミも疲れやしねえか？

「ぜえ、ぜえ……。」

ほらあ、息荒いぞ。

「とりあえずとつと顔洗ってこい。洗えば落ちるだろそれ。」

（（か、加害者なのにその言い様って……。）（（

三人揃って何か言いたげな顔してたが、渋々といった感じで洗面所へと歩いていった。何が言いたかったんだ？ 大方文句だろうけど。

で、三人が顔洗ってきた後の朝の食卓。

「おいしー！」

まあ、見事な勢いでトーストパクつきなさってクルルさん。いい食いつぶりですぜ。

「おかわり！」

まあ、今度はおかわりですか。朝から食欲旺盛なこつて。

「今から焼いてやつから待ってる。」

「よく食つわね〜アンタ。」

半ば呆れた感じで言うフィィ。それに関しては俺も同感だ。

「ん、何か今日は異様に食欲湧くんだよね。」

ほお、食費が高張りそんな発言だな。

「はいよ。」

まあそんなこと思いながらもトーストを渡す俺。

「あんがとーアムアム。」

ってもう食ってるし。

「おかわり!」

そんではえーし。

「太らない?そんなに食べて。」

ハムエッグの白身部分をフォークで切り取りながらアルスが言う。

「大丈夫大丈夫!太ってたら魔王やってないし。」

デブと魔王は関係ないと思うぞ。いや、でも何かイメージ崩れるか。あだ名はブタ魔王だな。どっかの芸人が「このブタ野郎!」とか言ってるのを思い出してしまうのは俺だけか?

「おかわり!」

だあらはえーつつの。

で……。

「おかわり!」

「もうねえよバカ。」

食パン二十枚あったのに全部無いよ

「え〜!何でもっと買っとかなかったの〜!」

「……逝くか?」

「すいませんごめんなさい調子乗ってました。」

「つたく、この朝っぱらから大飯喰らいめ。」

「にしてもホントすごい食欲だなお前。どうしたよ一体?」

「う〜ん……。」

腕組んで考えるクルル。

「……よくわかんないけど、多分魔力に関係あるんじゃないかな?」

「ほお?」

いきなりファンタジーな単語が出てきたぞ。

「あのね、こっちの世界来た時から何か体から魔力が流れ出てく感

じがしてたの。私魔族だからさ、魔力無くなると生きてけないわけ。  
」  
命に関わる重大発言。しかもこいつ魔族だったんか。知っても知らなくても得になりやしねえけどな。つーかえらいめんどくさい体だなあおい。

「?じゃ何でボクと戦ってる時火炎弾撃てたの?」

アルスが横から口を出す。すでにアルスとファイファイはテーブルから離れてテレビを眺めてた。

「あん時はまだ十分力があつたから。でも今じゃ火炎弾も強力な奴は撃てないよ。」

どっちにしる撃つたら大惨事だけどな。俺は責任取らん。

「それで多分、体が無意識のうちに魔力の補給を求めているんだと思うの。それで妙にお腹すくんじやないかな?」

「なる。つまり、食い物の栄養は全部魔力へと還元されるっつーわけだ。」

「ん・・・そゆことかな?」

納得できたが、そりやつまり食費がドーンと減るわけだ。

ああ、悲しきかな我が家の財布。迷惑だな魔族の体。責任者出て来い。

「まあ、そんな体だとしょーがない、が。」

一つ区切る。

「だからつつつてバカ喰いはすんな。おかわりは食事一回につき俺が許す範囲まで。それ以上は許さん。」

「え〜!」

「文句あつか(怒)。」

「無いっす!」

とりあえず魔力が無くならないようにすりゃいいんだ。食費の件もあるし、かと言ってこいつの体のことはおろそかにはできねえからな。

それと気になったことがもう一つ。

「ところでお前らは大丈夫なんか?」

「ボク達?」

そ。

「う〜ん、ボクは普通に魔法使えるから異常ないよ。第一ボくら人間の魔力は食べて回復するんじゃなくて休ませて回復していく方だから。それに魔力無くても生きていけるしね。」

「私も異常ないわ。まあ妖精族って体の内から魔力が生成されるから大丈夫よ。」

じゃこいつらは大丈夫か。

「よし、わかったなクルル。」

「は〜い。」





## 第十六の話 迷惑な秘密（後書き）

ども、作者です。今回で十六の話まで行きました。ここまで頑張れたのは読者の皆様のお陰です。とにかくこれからドンドンと書いていきますので、よろしくお願いします。

第十七の話 魔法ってそう簡単に使えるもんじゃない・・・よね？（前書き）

ちよっと（文章） 苦しいかも・・・今回の話。

第十七の話 魔法ってそう簡単に使えるもんじゃない・・・よね？

（クルル視点）

「ん、みゃ〜・・・。」

ねみゅ〜・・・あ、どもクルルです。さっき起きて布団片付けたばかりです。あ、さっきのセリフ私の欠伸ね。まだ眠くてね。それとこのもお腹にもものすごい激痛が走るって何か変な夢見たから眠れなかったの。おまけにまだ痛いし。寝返り打ってどっか打ったのかな？あと欠伸が猫みたいだななんて言わないで。

「魔王、その猫みたい欠伸何なんですか。」

・・・言わないでって言ったのにこおんのツッコミ主義勇者め〜。

「ん〜！よく寝た〜。」

あ、フィフィ今頃起きた。

ついでに言うと、私達の今の服装、この世界ではパジャマっていつて、寝る時はこれに着替えるんだとか。何でも寝心地よくなるらしくって、これ着て寝るのが一般的だって。私寝る時は鎧脱いでそのまま寝たけどなあ。で、アルスのは緑の縦縞で、私の色は黒の縦縞。両方とも私達がリクエストした奴。因みにフィフィのサイズのパジャマとか売ってないからカナエからもらったパジャマ（人形用）のを着てた。

「・・・あれ？今何時？」

「えっと・・・一時。」  
「ウソ!？」

いやウソじゃないですよ壁にかけてある時計の針ちゃんと一時ピッタシ指してますから。

「何で起こしてくんなかったのよー!」

「ボクらだってさつき起きたばっかだよ。」

起きたの大体十二時時五十五分だったしね。

「大体、リュウジは何してんのよ!いつつも起こしにくんのに!」

「こないだは起こさずにラクガキされたけどね。」

今回は無かったけど。

「あゝ何か休日損した気分!それもこれも全部起こしに来なかったリュウジが悪い!私の休日返せ〜!」

何かすごい言いがかり言ってるし。

「おゝい、起きたか〜?」

襖が開いてリュウくんが出てきた。あゝ今日もかっこいいなあ

「起きたか〜じゃないわよ!もっと早く起こしなさいよ!せっかくの休日台無ししません調子乗ってましたごめんなさい。」

リュウくんの手いつものまにか『きんちょーる』っていう本人にとっては最凶の兵器が握られてて文句からすぐに謝罪モードへと変え

るファイファイ。あまりの変わりように私とアルスは苦笑い……。

「ったく……早く起こせつつたつて、俺は十時に起こしにきたんだぞ？それでも起きねえからもうほつといたんだ。」

「……い？そうなの？」

ファイファイ、『い？』って何よ？

「ああ。」

「「「「……。」」」」

「？何や？」

いやだつてねえ……リュウくんが何もせずに放っておくっていうのは前回の件で……ねえ？

「……その顔、俺が何もせずに放っておくわけねえとか思ってるか？」

あ、バレた？

「……そう思われんのつて軽くムカつくんだが？」

「「「ごめんなさい！……」」」

すぐさま土下座。だつて怖いもん。リュウくん怖いもん。軽くとは言っても“ムカつく”の単語聞くだけで怖いもん。クスン。

「……まあいい。こないだの件（ラク顔）もあるしな。」

ほ……。

「まもつとも、起こそうとしても起きないからムカついて腹思いきり踏んでやったんだけどな。」

「「「オイ。「「「

サラリと自白してるし！

。。。

あ！だからお腹痛かったんだ！

「とりあえず朝飯もとい昼飯できてっから着替えるよ。」

・・・お腹の激痛がわかつたっていうのに、その有無を言わせないような迫力に押されて恐くて怒れない・・・惨め。

「あ、そうそうアルス？」

「は、はい？」

いきなり話を振られて若干困惑気味のアルス。

「どーでもいいけどさ、胸隠せば？」

「は？。。。。。。。。。。。」

何言われてるのかわからないって言った感じの表情の後、自分の胸に視線を向けると・・・

パジャマの真ん中のボタンが取れて見事にピンク色の下着が見えたり。

「!?!? キャッ!」

慌てて隠して顔真っ赤に染めるアルス……うわぁ今の声と仕草力ワイイ……。

で、真っ赤にしなから激しく困惑した表情をリュウくんに向ける。

「み、みみみみ見ました!?!」

「何を?」

「むむむ胸!?!」

「いや見たから言っつてやったんじゃん。隠すもんだる普通?」

いや、リュウくん?いくら何でも滅多に見れない神聖な光景(大袈裟過ぎ?)見たんだからさ、もちつと動揺してもいいんじゃないの?

「ほらほら、さっさと着替える。メシ冷めるぞ。」

どーでもよさそうな感じで言いながら、髪をかき上げつつ部屋から出て行くリュウくん。

「」「」「」

ちよつと沈黙……。

「……ねえファイファイ?」

「な、何?」



何となく声が沈んでる気がする……。

「ボクってさ……魅力感じないくらい小さいのかな？」

「……………」

何とも言えなかった。

だって事実……小さいもん。って言ったら多分すごい落ち込むだろうから黙っと」。

「ごちそーさまあ。」

「あいよ。」

さっさと着替えた後、お昼にリュウくんが作った大盛りのオムライスっていう卵料理をリュウくんが指定した回数で三杯おかわりして席を立った。大盛りだったから十分オツケー

「ご、ごちそうさま……………」

「あいよ。」

アルスも席を立ったけど……顔まだ真っ赤つか。リュウくんに見線合わそうとしない……相当恥ずかしかったんだろうなあ。

「・・・」ちそうさま。」

「あいよ。」

ファイも席・・・というより飛び立ったけど、何かすっごい怒ってるように見える・・・。

「さうで、洗いもんするか。」

ファイの態度を気にすることなく台所に立って皿洗いを始めたりユウくん。おまけに鼻歌まで歌い始めたし。

「フフフーン フーン」

・・・何の曲なんだろう・・・。

「フフフフーン フフーン フーン シュビドゥビバン フフ  
ン」

今確實セリフ入ってたよね？

「あ、ところでさあ。」

いきなり話しかけられた。

「なあに？」

てゆーかもう皿洗い終わったんだ。はや。

「前々から思ってたんだけどよ。」

「うん。」

「はあ……。」  
「何？」

上からリュウくん、私、アルス、クルル。私はともかく、二人は何か返事が曖昧。

「魔法つてさあ、お前ら使えるよな。」

「うん。」

うわ、綺麗に揃った。

「でよ、その魔法とやらは誰でも使えるもんなんか？」

あ、そゆことか。

「ん、まあ実を言うと誰でもっていうより素質っていうのかなあ？」

「素質？」

「うん。」

現に、私達の世界では魔法をえるような人間はハッキリ言って多くはない。それというのは、やっぱり生まれながらにして素質、つまり魔力を持った人間じゃないと使えないらしい。でも魔法が普及された世の中で魔法が使えないっていうのはやっぱりきつい。それで開発されたのが、魔力を持たない人間でも魔法をえるような武器なんだけど、正確にはその武具の中に魔力を込めて、それで使えるようになったっていう物。当然、使えば使うほどその中の魔力は消耗する。でもこないだアルスが言ったように、魔力を持った人間が魔力を回復させるには寝るのが一番と同じように、それらも一晩置いとけば魔力は完全回復される。

つていうのを、延々とリュウくんにアルスは説明した。上の文は私が自分なりに解釈してみました

「ほほお、奥が深いな。」

「はい。でもやっぱりそういった道具を使うにはそれなりの訓練が必要で、それを持つには免許が必要なんです。」

「へ〜。」

心底感心したような感じで呟くりュウくん。瞳が何だか生き生きとしている。

ああ・・・そんな瞳も魅力的

「？何見てんだ？」

「あ、ううん別に？」

【ヒューヒュー】

口笛吹いて誤魔化そうとする私。

「いや吹けてないから。」

フィフィにツッコまれた。

「っーかよ、お前そういう武器持ってねえのか？」

「あ、持ってますよ？見ます？」

「おうよ。」

アルスが和室に入って行って、しばらくした後には杖みたいな物を持

って出てきた。

「これか？」

「はい。」

杖を渡されて隅々まで眺めるリュウくん。それは何か、白い金属の長い棒の先端に純白の天使のような彫刻が施されて、かなり神聖な印象を受けた。少なくとも私のお城には到底縁がないと思うくらい。

「やっぱRPGだな。」

「はい？」

「んにゃ、何でもねえや。で？どうゆう風に使っよこれ？」

あ、危ない危ないブンブン振り回さない。

「ど、どうゆう風にって言われても。」

「あのねえ、さっきアルス言ってたでしょ？それ使うのには免許がいるって。だからアンタ達みたいな魔法も知らないド素人が使えるわけないじゃないの。」

結構痛いところくファイファイだけど、それは私も同感。やっぱいくらリュウくんでも魔法なんて知らないし、使えなくて当然だと思う。

「ちえ。じゃお前らどうゆう感じで魔法使っよ？」

「うーん、じゃ簡単な奴見せてあげる。」

ファイファイが両手を突き出して目を閉じる。すると体がちょっと青く輝いて……。

『水よ、降り注げ!』

【バシヤア!】

「きゃう!?!」

あ……いきなり水が出てきてアルスに……あゝあ。

「うわお。」

さすがのリユウくんも魔法にビックリ。

「うわゝん、いきなり何すんのさあファイファイ!」

「ご、ごめんアルス!」

魔法の犠牲になったアルスは、全身ずぶ濡れ。そして慌てて謝るフイファイ。

「なる。そゆ感じかあ。」

一人うんうん頷くりユウくん。

そして……。

「え〜とごうか。」



「あ。」

あちゃ〜ってな感じで呟くりユウくん。

「あつう〜・・・。」

アルスどころか、ビチャビチャになっちゃった居間。

「あ・・・あれ・・・？」

かなり困惑してるフィフィ。

「「「・・・。」」」

沈黙。

「やっべ、居間水浸しじゃねえか。」  
「「「「それどころじゃないでシヨおおおおおおお……!」」」」



思わず三人揃ってツッコんだ。

その後、アルスは着替えて、濡れた床を全員で拭いていった。

「いやあビックリしたぜえ。まさかマジで水出るとは思わなかった  
しなあ」

相変わらず軽いリュウくん。

「「「……。」」」

そんな彼を少し畏怖の目で見つめる私達。

「……何で……免許も無いのに……。」

「使えたわけ？」

ボソリと呟いたアルスとファイフイ。それ同感。

「?ん……………」

頭を捻って考えるリュウくん。

「……まあ使えたからいんじゃないかね?」

大して疑問に思っていないリュウくんの軽い一言で、今日の出来事は幕を閉じた……。

ついでに。

「あ、あの、リュウジさん？」

「あ？」

「や、やっぱり・・・ボクって・・・小さい？」

「背が？」

「あ、い、いえ・・・やっぱりいいです。」

「???？」

多分、アルスの心境は物凄く複雑なんだなあって思う。

第十七の話 魔法ってそう簡単に使えるもんじゃない・・・よね？（後書き）

作 いやあ今年最後の更新となりましたなあ。

龍 そだな。遅い更新だけど。

作 ……まあ事実だしな。

龍 いんじゃねえの？自分なりのやり方で進めてけば。

作 お前ってマイペースだもんな。

龍 お前もじゃねえの？

作 ごもつとも。

龍 そういやこの小説、季節感とか出てねえな？

作 あゝ・・・そういやそうだな。

龍 だろ？

作 それもちよつとまずいかもな・・・じゃまたいつか季節感出すつーわけで。

龍 今は？

作 考え中。

龍 あそうかい。

作 おうよ。

龍 まあ今年もあとちょつとで終わるし、気長に考えればいんじゃね？

作 ああ、今年も無事年越せそうだしな。

龍 じゃ俺は年越しラーメンでも作るか。

作 ソバちゃうんかい。

龍 おゝいえゝ【ズルズル】

作 今食うんかい。ったく・・・まあとにかく、この小説を読んでくださる読者の皆さん及び、俺と同じく他小説の作者の皆さん、来年もよいお年を！これからもよろしくおねがいます！

龍 よろしく〜【ズルズル】



第十八の話 魔王という肩書き(前書き)

若干シリアスになっています。後半。

## 第十八の話 魔王という肩書き

（アルス視点）

「ここだ。」

「ほわぁ、おつき。」

「すごいね。」

「う・・・うん。」

現在、ボクらはリュウジさんの友達で、ステイルを置いてもらっているマサさんの家の前に来ています。リュウジさんが今日、遊ぶついでにステイルの様子見に行こうと言い出して、ここまで来ました。ステイルがどんな生活してるのか気になるし、外にも出たいなって思ってたし、丁度よかったです。

でもここまで家が大きいなんて想像してなかった。

もしかしてマサさんて、貴族の人間じゃ・・・。

【ピンポーン】

「つてちよつとおおー!!」

「んあ?」

いきなり呼び鈴（?）鳴らすなああああ!!

「何だ?問題でもあつか?」

「まだ心の準備できてないよボク!」

「私大丈夫だよ?」

「私も。」

そりゃ魔王は魔王だしさ！お城住んでるしさ！フィフィは妖精族じゃ・・・あ、これは秘密だって言われてた。

でもボクは普通の庶民の出で、こんなお屋敷なんて慣れてないよ！？

「何アルス？アンタ一度こういってお屋敷入ったことあつたじゃない。」

まあ確かに一回はあつたよ？その屋敷の主の娘さんを夜盗から守つて欲しいっていう頼みを引き受けた時に。理由は勇者だからだつて。

その時した失敗が、未だにトラウマになってるんだつて・・・それが一番の理由・・・。

「おーい、どしたあ黙りこくつて。」

「！い、いえ、何でも・・・。」

・・・あんまりリュウジさんに心配はかけたくないし、我慢しよ・・・。

『・・・どうでもいいけど、俺はいつ話しかけたらいいんだ？』

「「「！？」」「」

え？どこから・・・。

「おお、ごんちは雅。」

『挨拶遅すぎだ。』

よ、呼び鈴から声が・・・すごい。

「とりあえず入れろ。」  
『それ頼む態度か……まあいいや。入れよ。』

【ガチャリ】

黒い門から鍵が開く音がした。

「行くぞ。」

ギィツと軋む音をたてながら門を開けるリュウジさん。ボクらはその後が続く。

【ガチャリ】

「よう、龍二。」

「おっす、まごむね雅胸。」

「響きはカツコいいけど漢字が違う。」

扉を開けたマサさんとリュウジさんの会話。何のことなのかよくわからないけど。

「「「こんにちわー。」」」

「いらっしやい。学校の時以来だな二人とも。」

……。

「……あの、ボクらガッコウで会いましたっけ？」

「私覚えてないけど……。」

「……。」



い、いやな沈黙・・・もしかして失礼なこと言った？

「アルス、クルル。」

リュウジさんがボクらの肩に手を置いて耳元で囁いた。

「そのことについては黙っとしてやれ。」

「「「「???」」」」

何のことかな？

「・・・まあ、とりあえずどうぞ。」

ま、マサさん？心なしか生気が感じられないんですけど・・・。

「気にすんなよ。後半お前の名前出てたじゃねえか（第十四の話参照）。」

「・・・俺自身出てなかっただろが。」

二人が小声で話してたけどあまり詮索しないほうがいいなと思ったんで聞こえないふりすることにしました。

「いらっしやい。」

広い玄関に入ると、マサさんの姉さんである、確かリョウコさんっていう女の人が出てきた。改めて見るとこの人も校長さんとカグラさんに負けず劣らず美人な人だなあ。

「こんにちは涼子さん。お邪魔するぞ。」

「もー私が龍ちゃんのこと邪魔だなんて思う筈ないじゃないの。」  
「多分そーゆー意味で言ったんじゃないと思うぞ姉さん。」

復活したマサさん、冷静だなあ。

「で？ステイルは？」

「今俺の部屋にいるぞ。呼んでこようか？」

「ああ、頼む。」

マサさんはさつさと二階への階段を上がっていき、ボクらはリョウコさんの案内で玄関から向かって右側の扉へと入っていった。うわ、高そうなのツボ。いくらすんのかな？

「あら、それに興味あるの？」

「あ、はい。」

前を歩いてたりリョウコさんが振り返って聞いてきた。

「それ、お爺ちゃんが何か魅力感じたって言ってついつい買ったやつだ。もう死んじゃったけどね、お爺ちゃん。」

・・・。

「・・・あの、すいませんでした。」

「？何が？」

「いえ・・・そんな話をさせて・・・。」

「フフ、謝ることないじゃないの。私が勝手に喋ったんだから。」

とは言ってもなあ・・・。

「おら暗い顔すんなアルス。」

【バシン！】

「！いつ！」

り、リュウジさん、強く叩き過ぎ……。

「あ、わり。」

悪びれてないでしょ……。

「もく相変わらず責任感じやすいんだからあ。」

「……ほつといてよ。」

フィフィに言われて思わず膨れっ面になるボク。むっすー！

「……。」

「？リヨウコさん？」

「どつたあ？」

？

「……か。」

「……か？」

「かわい〜!」

「ってみやあああああ!?!?!?!」

いきなり抱きつかれましたああああ!?

「も〜かわい〜!このブク〜ってなった感じの膨れっ面かわい〜!」  
「ぐ、ぐるじ……。」

く、空気!空気〜!!

「ア、アルス〜!!」

「アルス顔真つ赤んなっておもしろ〜い!」

「よし、どこまでトマトになれるか測ってみよう。」

(リュウジさんとクルルの)悪魔ああああ!!!

「姉さん!アルス死にかけてるって!」

「?あ!ご、ごめんなさい。」

ぜはあ、ぜはあ……。

「あ、アルス大丈夫!？」

「う、うん。」

「危うく窒息ね。あはは」

「愉快な顔だったぞ。ははは。」

「愉快なっって何なんですか!?!そして笑うな!!!」

こっちは死にかけてるっていうのにこの人達は〜!

「ほ、ホントにごめんね。」

「姉さん、抱きしめる時は気を付けないと。ただでさえ力あるのに。」

「は〜い……。」

いつの間にか来てたマサさんに叱られてしゅんとなるリョウウコさん。マサさん、ありがとう。そして助けずにただ見てただけの上に乗しんでたりユウジさんと魔王、恨みますよ。

「あ、アルス……。」

「？」

あ、スタイルいた。

「……何ですかその『あ、いたの』みたいな顔して……。」

「ご、ごめん、ホント気が付かなかった。」

「……泣いていいですか？」

「ごめん！ホントごめん！」

反射的に謝った。泣かれても困るよ。

「お、来たかスタイル（イジられキャラ）。」

「はい……って何か今違和感が……。」

「幻聴だ。」

ごめん、ボクははっきり聞こえたけど言わないでおくよ。

「こんにちは〜！こないだはどうも。」

「……。」

元気よく挨拶する魔王に対してプイッと顔を逸らすスタイル。やっぱり魔王が嫌いみたい……。

「あ、あの……。」

「……。」

「……。」

い、一気に気まづくなっちゃった……。

「〜」

ってよくこの雰囲気ですごい鼻歌歌えますねリュウジさん。尊敬できるよある意味。

「はい到着。」

やっと目的の部屋へ来てボクらは気まづい空間から脱出できて安堵した。いやそれより長すぎませんでした？あ、途中でリョウコさんがボクに絡みついてきたから時間ロスしたからか。

「ちょっと待っててね。今何か飲み物探してくるから。」

そう言ってる間に、リュウジさん堂々とイスに座ってるし。遠慮って物を知らないんですか。

「お前座んの早すぎ。」

「気ニシナイ。」

「……もうええわ。」

呆れたように席に着くマサさん、ご苦労様です。

そういえばこの部屋は・・・ダイニングですね。白を基調としてすごく清楚な雰囲気が出てます。テーブルからも何かいい香りがする。

「おつきい家だね。」

「うん、そうだね。」

ボクも席に着いてフィフィと話す（フィフィはテーブルの端にチョコンと座った形に）。

「でも私の家より大きいよ？」

君の場合家っていうよりお城でしょうが魔王。

「そうだな。でかいよな。」

「・・・リュウジ、お前心なしか怒ってないか？」

「いやいや、んなわきゃない。」

チラッと血管浮き出るほどリュウジさんが拳握り締めてるの見た。恐いから言えません。

「まあ確かにでかいけど、セキュリティは久美のところのマンションの方がいいよな。」

「……？」

マサさんからまた聞きなれない単語を聞いた。せきゆりてい？まんしょん？

「すまん雅、その話はもうちょっとこいつらが物覚えてから。」

「あ、そうかゴメン。」

「あ、いえそんな……。」

謝られても……。

「まあ、また今度覚えさせてやるけどな。こないだみたいに。」

「」「！」「」

ま、また！？（第十二の話参照）

「えゝまたすんのお？あれ覚えんのしんどいよゝ！」

露骨に嫌な顔をする魔王。

その魔王にスタイルは一瞬だけ冷たい目線を送った……気がする。

「ほほお嫌か。それならその無知を大いに活用して生活に苦しんで誰にも助けられずに頭パーのレットルを貼られて路上で野垂れ死ぬがいいさ。」

「是非やらせてください！」

あ、ある意味脅迫だ……。

「とりあえずそれは置いていて。」



リュウジさんが物を右から左へ置くような仕草をする。

「で？どうよスタイル。」

「へ？」

放置・・・はひどいな・・・話についていけなかったスタイルはいきなり話題振られてビックリしたのか慌てて姿勢を直す。

「な、何がですか？」

「生活だよ生活。」

「・・・ぶつちやけ何度か死にかけました。」

ス、スタイル？

「あははは！スタイルも形無しだね！」

「ファイファイは黙ってて！」

「・・・。」

ほらまたスタイル落ち込んだし・・・。

「まあ・・・あの件については悪い。」

え？あの件って何ですか一体？て聞こうとしたら・・・。

「お待たせ。特製ミックスジュース持ってきたわよ。」

リョウコさんがお盆を持ってキッチンから出てきた。お盆の上にはいくつかのガラスのコップが乗ってる。

「はい、ドーン。」

そして置かれてゆくコップ。

さらにそれを顔を歪ませてながら見つめるマサさんとスティル。

正直言います。怖い。

「……………」

「?どうした二人とも。えらい難しい顔してよ。」

すでにゴクゴク飲んでるリュウジさんが聞く。って早いよ飲むの。

そんなに嫌なのかなこれ?見た目淡い黄色でおいしそうだけど……  
リュウジさんも普通に飲んでるし。

「どしたのお?飲まないの?」

「い、いただきます……………」

あ、あれ?何で二人とも(マサさんとスティル)顔真っ青なの?

「いただきます」

「どれ……………」

魔王とフィフィも口に付けたんでボクも飲んでみることにした。

【ゴクゴク……………】

『……………』

【ブーーーーー！！！！！！！！】

ブツハアツ！！！

「ぴゃあああああ！！！！」

「な、何じゃこりゃあああああ！！！！」

「グホツ！」

「ガハツ！」

な、ななな何これえええ！！！？？辛いのと甘いのと酸っぱいのと苦いのが一緒になったようなこの味！舌にねっとり纏わり付くこの感じ！さらには喉に下るまでのこの激痛！まずい！まずすぎる！！

く全員が落ち着くまでしばらくお待ちくださいく

はあ、はあ・・・お、落ち着いた。

「あ、あれれえ？」

いやリョウコさんそんな何が起こったの？みたいな顔しないでください。

「じっ子さん。」

ドン、と空になったコップを置くリョウコさん。

っつておっい……。

「よ……よく飲めましたねそれ……。」

「ん、まあな……でもまずい。」

やっぱりですか……なのにそこまで平然とできるのはすごいですよ。あなた人間じゃないでしょ。

「……失礼なこと考えてねえかオメエ（怒）」

「い、いいえ……。」

何でそこだけ勘が鋭いの……。

「おつかしいな。ちゃんとした材料入れたはずなのに……。」

リョウコさんが首を傾げる。

「……姉さんの“ちゃんと”は絶対にあてにならないってわかったる……。」

「し……死ぬ……。」

「……。」

意気消沈気味のマサさんとステイルを見て思わず沈黙してしまうボ  
クラでした……。

マサさんの言った“あの件”っていうのは……二つゆづのなん  
だなあ……。

く夕方

「悪いね、お土産もらっちゃまって。」

「いやいや、別にいいさ。」

「皆で食べてね。」

時間が経つのは早くて、ボクらは帰ることになった。現在は玄関で  
マサさん達にお見送りしてもらってる。地獄のジューズ事件の後、  
皆で適当に他愛ない話をして盛り上がった。主に学校生活とか、リ  
ユウジさんの家での生活とか、ステイルの惨劇……じゃなかった  
生活とか。一つわかったのは、この家ではマサさんとステイルが料  
理を担当して、リョウコさんは他の家事担当ってこと。そりゃねえ、  
あんなすごい毎日作らされたらたまらないもんね……。でも時々  
リョウコさんがお菓子作りとかに挑戦することもあって……。その  
犠牲者がマサさんと新しく加わったステイル……。哀れ。

「ステイル、頑張っつてね。」

「ああ、ありがとうフィフィ。アルスも」

「う、うん。」

若干寂しそうな表情でボクらを見るステイル……それと。

「……。」

ステイルを見て切ない表情を向ける魔王……。

「じゃあね、クルルちゃん。」

「じゃあな。」

「あ……はい。」

げ、元気ない……。

「ほら、ステイルもちゃんと挨拶して。」

「……。」

リョウコさんに言われてもステイルは魔王と目を合わせようともしない。今日一日の間、ステイルから魔王に話しかけることは一度もなかったし……。

「あ、いいですよ。さっきじゃあねって言いましたし。」

笑いながら言う魔王。でも作り笑いってというのはボクでもわかる。

「さ、帰るぞ。」

「あ、うん。」

そんなステイルと魔王の様子に気付くことなく、扉を開けて外へ出るリュウジさん。

「おっと、その前に……。」

「？」

一旦立ち止まってリュウジさんは振り返った。

「ステイル。」

「？」

「どんな事があつたかは知らんが、話し合えばわかることだってあるんだぜ？」

「え……。。」

「じゃあな。お邪魔しました。」

……。何事もなかったかのように家を出るリュウジさん……。

「……。。」

「え、えつと、お邪魔しました……。。」

ボクらはこの変な空気に耐え切れずリュウジさんの後を追った。

「さして、帰ったら夕飯の準備しねえとな。」

夕焼けで辺りがオレンジ色に染まった道をボクらはのんびりと歩く。リュウジさんは両腕を上げて体を伸ばしながら呟き、ボクらはその

後ろを無言で歩いていった。

「」「」「」

「……オメエら何か暗いぞ？どうした？あのジュースにあたったか？」

冗談めいてるけど、本気でそう思ってるように聞こえるのは何故だろう？

「……。」

やっぱり何だか……喋れる雰囲気じゃないよ。

「……あのさ。」

「？」

魔王が沈黙を破った。ボクらは思わず立ち止まる。

「やっぱり……魔王って悪者で……認められない存在なんだよね。」

「……。」

「今までだってね、リュウくん達と話してて、自然と馴染んで……私だって普通に人と接することが出来るんだって、思ってたけど……今日スタイルに会ってわかった。」

肩を震わせながら、言葉を紡ごうとしている魔王。だけど。

「やっぱり……魔王は魔王じゃなきゃダメなんだって。」

その声はどこか覇気が無くて……消え入りそうな声。



確かに、魔王はボクらの世界では悪だっというのが常識で、最も忌むべき存在。それは大人から子供に伝えられて、誰もそのことを疑わない。現に、多くの人間が魔王の配下である魔物に命を奪われている。疑わないのがおかしい。誰でも、その元凶である人物を恨まないわけがない。

その元凶が、ボクの目の前にいる。

ボクは勇者だ。だから魔王は殺さなきゃいけない。

最初だって、お互い殺す気でかかっていた。

その魔王は、今は同じ屋根の下で暮らしている。何の違和感もなしに。

魔王という立場に苦しみ、泣き出しそうになるのを自分の服を握り締めることによって懸命に堪えてる今のその姿は。

恐怖の象徴で、最強の魔族じゃなくて。

ボクらからしてみれば・・・ただの少女だった。

なのに、ボクは何の声もかけてあげられない。

ボクは勇者で、彼女は魔王で・・・お互い、敵同士に変わりなんてなくて・・・。

そんな彼女の気持ちに、ボクは何も言えない。何もわからなかった。

「じゃ魔王でいいじゃん。」

「・・・へ？」

でも。

「どうせ魔王なんて単なる肩書きだろ？」

この人は。

「肩書きなんて飾りだ、か・ざ・り。飾りなんざで惑わされてんじやねえよ。」

勇者でも、ましてや魔王じゃないけど。

「大体、お前にはちゃんとかとクルル・バステイっていう名前あるじやねえか。」

単なる人間だけだ。

「大事なのは、魔王っていう肩書きなんかじゃねえよ。」

ボクよりも強くて。

「大事なのは自分自身だ。周りがどう言おうが、お前はお前に違いないんだからな。」

誰にも屈そうとしない。

「それでも魔王っていう立場が悪い印象しか与えられねえんならなあ。」

そして何より。

「お前がその常識をぶち壊してけばいいんだよ。」

気持ちが・・・心が強い人。

「常識を・・・壊す。」

「そ。ぶつ壊せそんな腐れた常識。お前が思い描くような魔王目指せばいい。悪い印象しか与えられねえ奴じゃなくて、自他共に認められるような奴にな。」

「・・・。」

「ま、簡単じゃねえけど・・・。」

【クシャ】

「少なくとも俺らは応援してくぜ？」

リュウジさんは優しい笑みを浮かべながら魔王の頭をクシャクシャと撫で回した。

「・・・。」

「ほれ、いつまで暗い顔してたオメエら。つーか顔おかしいぞ。元々だけど。」

「って元々って何よ!？」

「事実である。」

「事実なの!？」

「おう、いえゝす。」

「誰の真似ですか!？」

「「「「「・・・。」」」」」



「きゃー！ー！ー！アルスが照れながら怒った！ー！ー！ー！」  
「照れながらって言っちなあああああ！ー！」

沈んでゆく夕日が、はしゃぎ回るボクらを照らし続けていた。

第十八の話 魔王という肩書き（後書き）

作 皆さん！遅くなりましたが明けましておめでとうございます！

龍 ズズズズ・・・

作 去年は多くの感想、評価を書いてくださって及び、本作をお読みくださってありがとうございます！

龍 モグモグ・・・

作 今年もビシビシ頑張っていけますので！

龍 ズズズズ・・・

作 勇者以上魔王以上、これからもよろしく願います！

龍 モグモグ・・・

作 ……おい。

龍 ズズズズ？

作 ラーメン食いながら返事すな。

龍 【ゴクン】何だ？

作 いやお前も新年の挨拶しろよ。ラーメン食ってばっかでねえで。

龍 え、俺も？

作 当り前だ！！

龍 へいへい。え〜、今年も暴れますんでよろしく。

作 適当じゃね？

龍 ズズズズ・・・

作 また食うんかい。

龍 モグモグ・・・

作 と、とにかく、今年も一年よろしく願います！

龍 もごむぐ〜（よろしく〜）

作 物食いながら言うのやめい。

## 第十九の話 屋上で親鳥「じっ」?

（龍二視点）

さて、今日は学校だ。つてなわけで今日は弁当な気分なので弁当を作るために、早く起きて只今台所にいます。ねみ。

一人分ならまだしも、居候の二人にも弁当を持たせなきゃいけないわけだから大変だよな。

「さて、と。」

とりあえず弁当の調理開始。

まずは炊き立てご飯を弁当の容器三つによそい、カウンターのの上に置いて冷ましとく。

フライパンに油引いて切り込みを入れたウィンナー数個を放り込んで炒めていく。しばらくしてタコさんウィンナーの出来上がり。

溶き卵にこないだ安く売ってたダシ汁を加え、少し塩を加えて味を濃くする。ホントならダシ汁は手作りがうまいんだが、時間が時間なのでこの際妥協せざるを得ない。熱した卵焼き機に卵を流しいれ、丁寧に巻いていく。皿に出せば、ダシ巻き卵の出来上がり。

昨日のうちに作っておいた蒸かし芋をボールに入れ、塩コショウを入れ、潰していく。程よい感じに潰れてきたら、マヨネーズとキュウリと茹でたニンジンをぶち込んで和えていく。小さなビニールの弁当用の器に入れて、パセリを振りかけたらポテトサラダ完成。



最後に、昨日の夕飯の残りである肉野菜炒めをちょっと改良して濃いめにしておく。

それらのおかずを弁当に詰め込んでいき、余白の部分にはプチトマト二個入れれば。

「ほい完成。」

俺オ리지ナルの弁当の出来上がり。

味噌汁と弁当の残りをおかずにして朝飯の準備も万端。

最後に……。

「目覚まし装置スタンバイ。」

上から垂れてきた紐を握り、

「発射！」

勢いよく引き降ろす。

【ズガバシャー————ン!!!!!!】



ついでに何か「ブギユ」っていうわけわかんねえ声上げてたが知らん振りした。

ファイフはまだお眠な（気絶してる）ようなのでかつて障子だった物〓残骸を避けてそのちっこいホツペをムニユ〜ンとしてからパツチンしてやつたら起きた。その後泣いた。ゴミン。

〜で、学校〜

「あ〜朝っぱらからねみい〜だりい〜。」

「文句言わないでください。」

ピシヤリと言われた。お袋か。貴様は俺のお袋か。

え〜、現在地校舎の廊下。周りには人っ子一人いない。耳障りな程不気味な静寂が辺りを支配していた。向こうまで伸びた廊下からゴウ、と生暖かい風が吹いてきており、俺達の肌を撫で、おぞましい感覚に襲われ・・・

「こ、恐いよその説明・・・。」

「貴様俺に読心術使いやがったな、あ？」

「い、ごめんなさい。」

いきなり新たな発覚、アルスだけじゃなくクルルまでもテレパシーもとい読心術が使えることが判明。こいつあうかつにいろいる考えられねえや。今度読まれたら消すしかねえなふはははは。

「ホントーにすいませんでした!!!」

・・・何故に謝られた？

「・・・。」

「おいファイファイ。いつまでも震えてんじゃねえよ。」

ついでに言うと俺のジャケットの胸ポケットにはファイファイがヒョッコリと顔だけ出していた。ついでに震えていた。

「だ、だって・・・ガッコウ怖い。」

「ビビり過ぎ。」

「・・・でも何でガッコウ怖いのか？ファイファイ来たことないんでしょ？」

「まああんなことがありゃなあ。」

「は？」

「うんにゃ、何でもねえ。」

詳しく知りたくば第十一の話読め。

そっぴや今の時間は朝のHRだったな。

・・・。

「・・・お前ら、扉開けたら気をつけろよ。」

「へ？何が？」

教室の扉の前で俺は二人に忠告しておく。当然疑問符を浮かべる二人。

「まあ見りゃわかる。」

「「?」?」

俺は・・・この後に後悔することとなる。

【ガ拉里】

「はよーっス「死ねえ！必殺『ナイトメア・クラッシュ』！！」

【ビシュビシュ！！】

真っ直ぐ頭部目掛けて高速で飛んでくる二本の白いチョークを俺は天井スレスレまでジャンプして避ける。今の技はおそらく、チョークに回転を加えることによって威力と速度を倍増させるといって、攻撃力重視のものだろう。連続で投げるより、こういった風に単体で投げる方が威力が上がる。

「な!?!」

だが攻撃力が高い分、隙もでかいのだ。俺はそこをつく。

「おらあ！『龍閃弾』！！」

『まさかの必殺技!?!』 クラス全員ツッコミ

空中宙返りの後、拳に氣を集めて一気に振り下ろす。修行すればこんなことだって可

「おわあ!?!」

【バゴオン!!】

咄嗟に飛びのいた神楽さんがいた場所にめちゃんこ大きな穴が開いた。衝撃で教卓壊れちゃってるし。避けなかったら神楽さん死んでたね。確実に。まあはずすつもりだったからどの道死にはしねえか。

「こ、殺す気かあ！」

「いや、半分冗談だ。」

「じゃ半分本気かい!!！」

そっちこそ最初に『死ねえ!』て叫んでたくせに。

「まったく・・・遅刻した上に教卓と床壊しやがって・・・どうするつもりだよこれ？」

呆れ半分、怒り半分。その表情は『テメエ何てことしてくれやがったこれじゃ私まで怒られちまうじゃねえか』と言っている。つか確実そう思ってる。

「フッフ、甘いね神楽さん。このような問題はすぐに解決できるのだよ。」

「ほお、そりゃスゲエじゃねえか。で?どうすんだ?」

俺は神楽さんの肩に手を置いた。

「アンタの給料を修理代に回せばいいだけの話さ。」

「ほほお、なるほど。確かにそうすりゃ簡単に解決できるなって待てや。」

ノリッシッ!!!。

「ふざけんな。何でお前が壊したのに私が責任取らなきゃならねえんだ。」

「あ、そこは安心してくれ。そんなときや俺が三十円貸してやつから。」

「そいつあ助かるなってアホかボケ！んなはした金額なんざ意味ねえつつーの！」

ノリツツコミにアホとボケのコラボレーション。つつーか何三十円バカにしてんだアンタは。三十円ありや駄菓子屋行けるぞ。三十円なめんな。

「まあ避けた神楽さんにも責任ありつつーことで納得してくれや。」

「何屁理屈こねてやがる！とにかくお前が弁償しろ！」

「えゝ今月ピンチなのによゝ。」

「私だつてピンチなんだよ！！！」

「いいじゃん。」

「ダメだ！」

「いいじゃん。」

「ダメだつつの！」

「いいじゃん。」

「ダメつつつてんだろ！！！」

『払え神楽。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ。」

肩に置いた手に力入れる＋殺気込みの脅しで難なく責任転嫁に成功。遅刻した時の恒例＋（床と教卓の破壊）が終わり、俺はとつとこ自分の席へと向かっていった。

「いつからこの小説はバトルアクション物のジャンルになった。」

雅が小声でツッコミ入れたが無視した。その他教室がしばらく静まり返っていた（のと全員冷や汗ダッラダラだった）のは何故だろうか？

「「きゅ〜……。」「」

忘れてたが、扉の前には額にチョークの直撃を食らって伸びているアルスとクルルがぶっ倒れていた。

・・・もう少し詳しく説明してやるべきだったな。

後悔中

〜お昼休み〜

「も〜ホントひどい目に合ったよね。」

「・・・あれは痛かった・・・。」

「わりい。もちつと説明してやるべきだった。」

只今お昼休みというわけで、俺とアルス、クルルはもちろん、いつ



ものメンバー雅、久美、香苗とおまけで恭田といった組み合わせで屋上への階段を上がっていつています。学園物としては屋上で青春満喫するという設定ははずせない。俺は何を言ってるんだ。

ついでに朝の件のことでまだプリプリ怒つとる二人にはとりあえず適当に謝罪してます。俺的にはもはや過ぎたことなのでどうでもいいけんな。

「つーかおまけって何なんだよ！」

ま、まさか恭田も読心術を……！

「いや声に出してるから。」

……あらいやん。雅早く言ってくれ。

「屋上か」。この時期寒いもんね。防寒着持ってくればよかった。

「じゃ一人でメシ食うか？」

「冗談！リュウちゃんと一緒なら例え火の中水の中硫酸の中だつて！」

「じゃ俺はお前を背後からそこに突き落としてやるよ。」  
「え……それはちよつと……つて一緒じゃないの？」

「何故に俺がお前なんぞの死出の旅路へ道連れにされにゃならんだ。一人で勝手に逝け。」

「うえ〜んリュウちゃんが私の純粋なハートを傷付ける。」

メソメソと泣き出した巨乳バカこと香苗はもう放置しといた。つーか自分で純粹って言っちゃったよ。

「大丈夫さ香苗ちゃん。俺がいるよ。」



「いや大袈裟だろ。」

ふむ、適当にからかってみただけだが何故か効果は抜群のようだ。

ってかマジ顔赤いな。クルルの言うとおり火事になるかもしれん。

【ガチャン】

「とつちやくく。」

まあそんなこんなで屋上に到着。ちよつと重たい扉を開けば爽やかな風が吹き込んでくると同時に開放感抜群の広場が目の前に広がっていた。ここ基本的に立ち入り禁止なんだけどな。高一の頃に扉の鍵錆びついて脆かったから普通に蹴ったら開いたし。立ち入り禁止の意味がなくなつちまつてるよな。でもここお気に入りだし、今じゃ俺のベストスポットとなっている。

校長に見つかったときは正直焦ったが、どうにかある方法を使って切り抜けた。そんな時の校長の絶望に打ちひしがれたような表情は実に印象的だった。H A H A H A。

「わはー！風が気持ちいい！！」

「うわあ・・・高いなあ。」

「びえ！？」

クルルがそこら辺をはしゃぎ回り、アルスはフェンス越しから下界を見下ろして呟き、ファイファイは俺のポケットから風に吹かれて流され

ってオイ。

「キャッチ。」

【パシ】

頭上を越えた所をつまいこと受け止める俺。ナイス。

「こ、恐かったぁ……。」

「オメ軽すぎ。」

掴んだ手から震えが伝わってくる。お前はあれか？風が吹いて飛ばされて慌てて持ち主である少女に追われるというよくあるシーンのつばのでかい帽子か？

「微妙にわかりにくいだろその例え。」

「あ、また言ってたか？」

「うん。」

さいで。

「うお！？龍二、何だソイツは！？」

あ、そういや恭田は初対面だったな。

「何だ、フィフィも連れてきたのか。」

おお、いつの間にか復活してたか久美。長いことご苦労さん。

「ん、こないだ家帰って見たらメソメソ泣いてたからな。」

「な、泣いてなんか「カワイ〜！」むぎゅ。」

言う途中で抱きつかれてやんの。つーかサイズ差ありすぎ。

「香苗香苗。マジで潰れるからそんなくらいにしといてやれや。」

「あ、ごめん。」

「ぶゆ〜・・・。」

世にも珍しい声を上げつつ目を回すフィフィ。何かかわいいじゃねえかコンニャロー。

【ピュー】

「きゃあ!？」

そしてまた風に流された妖精さんなのでした（もっかいキャッチした）

「さて、弁当食うか。」

いろいろありましたが、とりあえず場所を確保。つーか確保せんでも俺ら以外だーれもおらなんだから貸切状態なんだし、場所なんてドドーンと屋上のご真ん中にシート広げりゃ済む話だ。

「つつふふ〜 リユウくんのおべんと〜」

鼻歌歌いながら弁当を取り出すクルル。実に楽しそうだ。

「え！？それリュウちゃんの手作り弁当！？」

「な、何！？」

「マジか！？」

いきなり身乗り出す香苗、久美、恭太。何だ悪いか。

「うん」

「・・・／／／」

あゝ、クルルの返事はわかるさ。しかしよアルスさん。何故顔を微妙に赤らめる。

「「いいな」・・・。」

「・・・普通女が作るもんじゃねえのか？」

羨望の眼差しを二人の弁当に向ける女二人と首を傾げるバカ一匹。

「バカな上に単位が匹！？」

まあた声出てたか・・・この癖直さないとなあ。

「何ならちよつと食うか？」

「「はい！！」」

返事良すぎ。しかしここまで俺の弁当が食いたいとは・・・作った身としちゃ嬉しいじゃねえか。

「ウフフ 何入ってんのかな」

フフフ、実はクルルとアルスの弁当には俺のメッセージが入ってい

るのだ。

そりゃもう、空けてビックリ仰天するようなメッセージがな。

【パカ】

クルルが蓋を開ける。

さて、そのメッセージとは？

『龍』 達筆

『すご!?!?』

俺を除く全員が仰天。ふふん、海苔でこの達筆を彷彿とさせる漢字作るのにどれだけ苦労したか。

「・・・つーか意味あんのか?」

「ねえよ。」

「そうか。」

うん、何つーかメッセージとゆーよりただ単に漢字をデデンと書いてみたくなっただけなんだよね。とゆーわけで意味はない。さっきの雅との会話も意味はない。

ついでに俺のにも書いてある。

【パカ】



『魂』 達筆

『これまたすごい!?!?』

もっかい言っけど意味はありません。何かかつちょいいいじゃん？

「えっと、じゃボクのは……。」

アルスが内心（多分）ワクワクしながら空ける。

【パカ】

『ピューと吹く！ ヤガー』 丸文字

『漢字じゃない!!!?!?』

「でもある意味すごい!?!?」

遅れてツッコミいれるアルス。

まさに著作権侵害してるようなしてないようなメッセージだ。 付  
けなきゃ 確実やばいね。

「じゃいただきます。」

ツッコミいれてる連中を置いてさっさと弁当にありつく俺。

「あ、いただきます」

『いただきます。』

「・・・いただきます・・・？」

気付いたように遅れて言うクルルに続いてハモって言うその他、それプラスまだメッセージについて疑問に思ってるアルスもメシにありつくことに。

「もくもく・・・んま！んまい！！」

ポテトサラダを頬張ったクルルがしゃべるっつーか口物入れたまんま喋らないの。

「はあい。」

返事はよし。

「もぐ・・・おいし・・・。」

・・・お前はホント幸せそうに食べるよなあアルスよ。

じゃ俺も卵焼きをパクリと・・・うむ、ダシがいい味を出していてうまい。

「リュウちゃん、おかず一個ちょうだい」

「あ、あたしも欲しい。」

「ん？おういいぞ。」

弁当箱を女子二人に差し出す。

が。

「「あーん。」」

・・・。

「・・・何してん？」

いやいや口開けられてもねえ。

「「あーん。」」

・・・これはあれか？俺が食わせると？

お前らいくつだ。雛か。雛の方が可愛いぞ。つーか手使えよ。メン  
ドくつせ。

「「あーん!」」

強調すなつーの。

まったく・・・世話の焼ける。

「ほら食べ中身チビっ子どもが。」

二人の口に卵焼きとポテトサラダを突っ込んでやる。

「むぐむぐむぐ・・・おいち」

「何故に赤ちゃん言葉？」

バカだからさ雅。

「んぐんぐ・・・おいしい・・・。」

大したリアクションもない久美。ああおもしろくね。

「・・・お、おいちー？」

「聞くな喋るな気色悪い。」

何か一気にブルーになったがもう無視。

「か・・・可愛い〜」

わあ、口もきゅもきゅさせた香苗見てバカ（恭太）が鼻血出してるよ

「・・・。」

【ジー】

「・・・。」

【ジー】

・・・じっと見つめてくんな勇者と魔王よ。何がしてえんだオメエらばよ。

「食べさせて欲しいんじゃないの？」

耳元で語りかけてくるフィフィ。こいつは俺の肩に乗っかって自分より大きいウインナーを抱えながらパクっている。ついでに飛ばないように糸括りつけといてやった。

「つーか親鳥か俺は。」

「ふう・・・ほれ、口開けるオメエら。」

まあ何だかんだ言ってこーゆーのには甘い俺も。

「わーい 【パクリ】」

「じ、じゃあ・・・ 【パクリ】」

・・・つーか同じ弁当だよなお前ら？

「うーん、リュウくんを食べさせてもらつと一味違う」

「・・・おいし／＼／＼／」

何がどう一味違うのやら・・・そして顔赤いつつのアルスよ。ゆでだこか。

その後、俺らはそれぞれメシを食ったり食わせたりして楽しんだ。恭田が何か香苗と久美に俺がしたようにメシ食わせようとしたら二人からダブルパンチ食らったのはアウトオブ眼中。

第十九の話 屋上で親鳥じっじ？（後書き）

作 ……。

龍 ?どうしたあ?元気ねえじゃん。

作 いや、まあ……。

龍 ?

作 ……最近、小説評価、感想のコメント入れるとさあ……いろいろヤバイんだよ。

龍 どうやばいんだよ。

作 いや何かさあ……主に刀で切ったり切られたり銃撃たれたり……。

龍 スンゲエ感想だな。疲れるんなら書かなきゃいいじゃん。

作 ふ……素晴らしいと思った作品には評価を入れるというのが俺のポリシーなんでね。

龍 さいで。

作 おう。

龍 それより今回出てきたネタだが。

作 ああ。えつと今回『ピューと吹く! ヤガー』という言葉が出ましたが、ちょっとマイナーかなあと思いつつも出しちゃいました。詳しくは少年ジャンプとかいう奴で。

龍 ついでにこいつはそのコミックのファンじゃなくてただ知ってたから使っただけだからそこんとこご了承。

作 すんません……。

龍 じゃ、作者が何か暗いので。じゃ。

第二十の話 名前を覚えよじく物編 (前書き)

短めです。



## 第二十の話 名前を覚えよう〈物編〉

〈龍二視点〉

〈時間はお昼前〉

「はいまたやってまいりました第二回物を覚えようぜポケナス大会  
」！！」

「・・・あれ？こないだのと何か違いますか？」

「気のせいや！」

「怒られた!？」

怒り方が結構メジャーな漫才師みたいだとは言っな。

え、今日も今日とてやってきました世間知らずな三人娘の為に企画したこの大会って言うていいのかわかんねえけどとりあえず大会  
つつーことで。会場は我が家のリビングのテーブル。ついでに第二  
回目。

「今回は物について覚えてもらっぞ。」

「物・・・ですか？」

「そ。物。」

自信なさそうだな勇者様よ。

「私自信ある〜！」

「私だつてちよつとは知ってるわよ!！」

ほほお、なかなか頼もしい返事をどうも魔王様と妖精さんよ。

・・・勇者と魔王が様付けに対して妖精がさん付けってなあ・・・  
マジでどうでもいいけどね。

「それじゃ今からいろんな物の絵が描かれたボードを出していくから覚えておいてください。」

「はい。」

「はい。」

「はいはい。」

“はい”は一回だフィフィ。

「いくぞ。」

そして次々とボードを出していく俺。それらを真剣な表情で記憶していく三人。凜々しいぜ（嘘だけだな）

「はい終わり。」

そして全部出し終えた。早いとか言うの無しよ

「しっかり記憶できたな？」

「まあ一応。」

「ば、バッチリよ!!」

「いつでも来なさい。」

アルスは自信無さ気、クルルは誤魔化そうとし、フィフィは自信たっぷり。

三人の表情がそれぞれ違うのが何かおもしろえ。

「はいこれは？」

【ドン】

まず第一問目は……。

「じ、自転車？」

「辞典者！」

「自動車！」

因みに三人同時。

「はいアルス正解。」

「え、ええ！？何で！？私も同じの言ったじゃん！」

クルルよ、発音が全く違うぞ。何よ辞典者で。つーか何者やねん。

「はい次々。」

抗議するクルルはほっというて次々

「これ！」

【ドン】

「トランクケース。」

「と、戸乱苦ケース？」

「トランプケース！」

「はいまたアルス正解。」

「何でえ！？？」

同じミスしてるからだ。何よその戸がパニくって苦しいとかいう訳のわからんケースはよ？自分でも何言ってるの？

「次。」

【ドン】

「電卓！」

「でんたく田拓！！！」

「げんた元田くん！」

誰だ。

「またまたアルス正解。」

「うわああん！ヒイキだ〜！」

「だあら発音おかしいっつーの。」

そして無理矢理感丸出しだ。

「さ、次々。」

何かやる気無くなってきた。

【ドン】

「た、ダンス！」

「ダンス短巢！！！」

「ダンス！！！」

シャルウィーダンス？

「・・・もうアルス正解。」

「投げ遣りになってきましたね。」

だって俺がおもしろくねえもん。ボケれない。

「むきいいいい!!」

サル化したクルルはもう放置。

「フーかフィフィ。お前明らか惜しい解答ばっかじゃねえかよ。全部一文字違いじゃん。」

「ふう〜・・・。」

自信あるつつつてたのになあ。

でも元田くんは無いよなあ。

「・・・ああもういいやヤメヤメ。またもうちょっと簡単に覚えれる方法考えといてやるよ。」

「ま、またあ？リュウジの考えってるくなの無いじゃん。」

ムカ。失礼な

「そうかそうか。お前はそんなにやりたいか。オツケーお前には特別に血反吐を吐き頭から煙が出る程難しい問題を用意しておいてやるわ。」

「ごめんなさい許してください勘弁してください。」

テーブルの上で土下座して謝罪するフィフィ。大きかったら普通に

容赦なく『行儀悪い』の一言で投げ飛ばしてるね。

「あ、もうお昼か。」

「お腹減った〜！」

育ち盛りだなクルルよ。

「さて、昼飯作るのメンドイし、ラーメン食いに行くか。」

「食べたいだけなんじゃないですか？」

「何か言ったか。」

「い、いえ何も。」

じゃ口答えしない。

待っててね〜醤油ラーメン 今食べにいくぞ〜！

第二十の話 名前を覚えようく物編く(後書き)

今日は短くしてみました。たまにはこんなのもいいかなあとおもってもみたり。

第二十一の話 ～思い出～ (前書き)

今回は前回と違って長いデース。



## 第二十一の話　〜思い出〜

『なあなあ。』

『。。。』

『なあつてば!』

『。。。何よ?』

『何一人で不貞腐れてんの?遊ばないの?』

『。。。いいでしょ別に。アタシが何しよう。』

『。。。』

『。。。』

『。。。』

『。。。あーもお!何よアンタ!じ〜つと見つめて気持ち悪い!』

『。。。あのさ。』

『何?』

『もしかして。。。遊ぶ相手いらないだけ?』

『!。。。そ、そんなんじゃないわよ。』

『うつそだ。間が長いもん。』

『。。。じゃ何?アタシをからかいに来たの?』

『うつん?そんなんじゃないよ。』

『じゃ何よ?』

『いやね、ドッジボールのメンバー足りないなって思っ。』

『だから?』

『だからさあ、一緒にやろうよドッジ。楽しいよ?』

『。。。他誘いなさいよ。アタシ今そんな気分じゃないし。』

『じゃずっと俺達のこと見てたのは何で?』

『。。。』

『やりたいからじゃないの?』

『うつさい!あっち行け!』

『いいじゃん。ほら行こう。』

『ちよ、引つ張らないでよ！訴えるわよ！』  
『小学生がそんな言葉使う普通？』

『・・・ごめんなさい。』  
『？何？』

『だって・・・アンタまでいじめられるなんて・・・思ってたなくて。』

『あゝそのことね。まさか君がいじめられてたなんて思ってもみなかったよ。返り討ちにしような感じなのにね。』

『ふ、ふん！あんなの、やらせるだけやらせときゃいいのよ。人を見下して、バツカじゃないのあいつら！』

『あれ？反撃はしないんだ結局？』

『そ、そうよ。悪い？』

『悪いよ。』

『キツパリ言いやがったわね・・・根拠は？』

『だってやられたまんま耐えてるのってさ、もの凄く悔しくない？』

『そ、そんなこと・・・。』

『思ってるよね？』

『・・・。』

『別にね、耐えちゃダメだって言ってる訳じゃないんだよ？ただね、ず〜っと耐えてるだけだったら痛いし、悔しいし、みじめにならない？』

『・・・。』

『最初のうちは耐えるんだよ。耐えて耐えて耐えて。耐え抜いて。それでも相手がやめないんなら・・・反撃しなきゃ。俺はやるときやるんだぞっていう気持ちで。もちろん、やり過ぎちゃダメなん

だ。ただ相手に一泡吹かせるだけの気持ちを見せつけなきゃ。』

『耐えてもいい。とゆーか最初は耐えなくちゃダメ。力の暴力でも言葉の暴力でも同じなんだ。それで相手が凶に乗った時、相手があつと驚くくらいの反撃をしなきゃいけないんだよ。じゃなきゃ君に対するいじめは無くならない。』

『一緒にガンバロ。一緒に耐えて、耐えまくって。それから一緒に連中に反撃してやろう!』

『・・・うん・・・アリガト。』

『え?』

『な、何でもないわよ。』

『やったね 』!』

『うん!あ、痛っ。』

『大丈夫?』

『え、えへへ。ちょっと膝擦り剥いちゃった。大丈夫よ。それよりアタタの膝、アタシよりひどいじゃん。』

『久々の大喧嘩だったからねえ。膝だけじゃなくて体中ボロボロだよ。』

『お互いね。』

『あはは・・・あたた、やっぱ結構きついねこれ。』

『家帰ったらお母さんに怒られちゃうね。』

『そんなの覚悟の上だよ。』

『まあ、そうなんだけどね・・・いつつ。』

『歩けない?』

『だ、大丈夫だって。これくらい・・・いて!』

『しょうがないなあ。はい。』  
『へ?』

『おんぶだよ。ほら。』  
『そ、そんなの恥ずかしくて出来るわけないじゃん!』

『だーい丈夫だって。ほら。』

『・・・わかったわよ。』

『よいしょ・・・あ。』

『何?』

『いや・・・ちよつとね。』

『・・・重たい、って言うんじゃないでしょっね?』

『そ、そんなんじゃないって!』

『じゃ何?』

『・・・何でもないです。』

『よろしい』

『・・・。』

『・・・。』

『ぶっ。』

『あはは』

『・・・それホント?』

『・・・うん。』

『何で?・・・どうして?』

『・・・。』

『前に約束したじゃない!中学校でも仲良くしようねって!』

『・・・仕方ないじゃないか・・・父さんの仕事の都合なんだから・

・・・。』

『そんな・・・そんなの！・・・。』  
『・・・ゴメン。』

『・・・。』  
『・・・。』  
『・・・いつなの？』

『・・・今日・・・帰ったらスグ。』

『そう・・・。』

『・・・うん。』

『・・・。』

『・・・。』

『・・・あ。』

『？』

『なら・・・これ。』

『え・・・これって・・・。』

『あげるわよ。』

『でもこれってかなり高い奴なんじゃ・・・。』

『いいわよ別に。どっちみちアンタにあげる予定だったし、第一ず

いぶん前に欲しいって言ってたじゃん。』

『で、でも・・・。』

『男なんだからうだうだ言わない！アタシが全財産使って買ったん

だからもらっときなさいよ！』

『う・・・うん・・・。』

『つたく・・・最初っから素直にしてなさいよ。』

『うん・・・ごめん・・・。』

『・・・ねえ。』

『ん？』

『また会える・・・よね？』

『・・・わかんないよ。』

『・・・。』

『・・・じゃあね。』

『え?』

『約束しよ。大きくなったら絶対にまた会うって。』

『・・・大きくなったらって・・・随分適当ね。』

『これが普通だろ?』

『まあそう言えばそうだけど・・・さ。』

『ね?』

『・・・わかった。絶対会お。』

『うん!』

『

!』

『あ、母さん。』

『そろそろ行くわよ!』

『はい!・・・じゃ、行くね。』

『・・・うん。』

『約束したよ。』

『うん・・・。』

『・・・それじゃ。』

『

!』

『?』

『あ、あのね・・・アタシ・・・。』

『?』

『?・・・。。。。』

『・・・それ、大切にしなさいよ。』

『・・・うん。大切にする。』

『・・・い、言いたいことはそれだけだから。呼び止めてゴメン。』

『ううん。』

『・・・は、早く行きなさいよ。』

『うん・・・バイバイ!　　ちゃん!』

『グス・・・バイバイ。

。』

~~~~~

く？視点

『次は、てんぶんちょう天分町、天分町、お降りの際、お忘れ物ないよう・・・

』
「・・・あ。」

つい寝ちゃってたか・・・まあいいや。丁度着いたとこだし。

何より、昔懐かしい夢見たし・・・。

でもあの時・・・言えなかったな。ホントの気持ち。

せめて最後くらい、素直になってもよかったんじゃないかな。

【プシュー】

感慨耽つてる間に電車の扉が開いた。

「あ、降りなきや。」

荷物を持って慌てて電車から降りる。改札口を出て、周りを見回した。来る前に一応雑誌とかで調べておいたけど、ここまでのどかな雰囲気なんて・・・。

「なんかのんびりしてていいなあ・・・。」

思わず呟く。東京からここまでそんな離れてないのに、自然が多い山なんて駅からでもはつきり見える。でも完全な田舎じゃなくて、都会でも見かけるビル（小さいけど）もちろほら見かける。それでも、どつちかと言うと自然の方が目立つ。

「・・・こんな町、まだあつたんだ。」

完全な都会じゃなくて、かと言って田舎でもない。今の日本人が住みたい町トップ10に入る気持ちもわかる。

「えつと・・・ここから徒歩で十五分・・・ね。」

母さんからもらった地図を頼りに、私は目的地へと歩き出す。

これからお世話になる新居に。

「それじゃ、ありがとございました。」

「お疲れ様でした。」

新居に着いた時には、もうすでに一通りの家具を引っ越し業者の人が運び終えていた。手伝いたかったんだけど、ほとんど終わりがけてたからしょうがないよね。

「・・・さて、と。」

これからお世話になるご近所さんに挨拶しに行かないと。挨拶ついでに定番のタオルも用意してつと。

「ここね。」

右隣にある家の前に立つ。屋根が太陽電池になってるから、E C Oハウスね・・・いいなあ。憧れる。

「えつと苗字は・・・。」

『荒木』

「…………え。」

荒木？…………まさか……………。

「…………。」

恐る恐るインターホンを押した。

【ピンポン。】

「…………。」

間……………。

【ガチャ】

『はい。』

あ、やっと返事が…………あれ？女の子の声…………。

「あ、あのお、隣に引っ越してきた者なんですけど。」

『あ、はい。ちょっと待っててください。』

【ガチャン】

・・・。

【ガチャン】

「はい。」

出てきたのは・・・髪が緑色の男子・・・あ、でも女の子に見える・・・声も高いし、女の子かな？

「初めまして。アタシ今日から隣に住むことになった高橋って言います。」

「あ、は、初めまして。ボク、アルスって言います。」

あれ？“ボク”？

「あの・・・あなた男子・・・？」

「あ・・・違います。ボク女です。」

あ・・・そうなんだ。

「ごめん、てつきり・・・。」

「あ、いえ。気にしてません。もう慣れました。」

「大変ね。」

「ええ、まあ。」

「ところで、ここ一人暮らしなの？」

「いえ、ボクはイソウロウの身でして・・・家主の人が・・・。」

「？どうしたの？」

「・・・寝てて・・・。」

「・・・へ？」

「寝てるんです。今。」

「・・・起こさないの？」

「……前に起こそうとしたら寝ぼけて『マンジガタメ』っていう技をかけられました……。」

『正固め』って……どっだけ凶暴なのよ家主。

「他には？」

話を逸らすことにした。

「あ、他には二人(?)ほど。」

(?)って何？

「すみません！後日また挨拶に伺いますから。」

「い、いいよ別に。またアタシから声かけるから。あ、それとこれ。挨拶の印に。」

「ど、どうも……すみませんでした。」

タオル渡すとさらに恐縮になってしまったアルスちゃん。

いや、見た目年下だから……レディに年聞くのって失礼でしょ？
同じレディだからわかる。

「じ、じゃあまた……。」

「うん。それじゃあね。」

【パタン】

「ふう……あ。」

考えてみれば最初敬語だったのにいつの間にか私語話してた・・・
まいつか。

それにしても・・・。

「荒木・・・。」

家主って・・・あいつなの？

・・・。

「・・・んな訳ないか。」

あの変なところで根性なしが女の子を家に居候させるわけないし。第
一あいつが女の子に囲固めなんてかけられるはずないし。

さてと。挨拶周りの続きに行こつと。

（アルス視点）

お隣さんかぁ・・・すっごい美人な人だったなあ。

「おう、」苦勞さん。」

。。。。

「起きてたんならボクの代わりに出てくださいよ。」

「さつき起きたばっかだし。」

家の主である人がイソウロウに訪問客を出迎わせますか普通。

「もう・・・ところで何してるんですか？」

「ん？音楽聞いてんだよ。」

「え、もしかしてそれから？」

「おう。」

ソファで悠々と座りながらいつも首にかけてる“へつどぶおん”っていう物を耳にあてながら答えるリュウジさん。あれから音楽が流れてくるなんて・・・世界は違うんだなあ。今更だけど。

あ、そういえば。

「ところでリュウジさん。」

「？何だ？」

わざわざへつどぶおんをはずして耳を傾けるリュウジさん。

「それっていつつも首にかけてますけど、何か深い意味でもあるんですか？」

「お？お前にしちやいい質問じゃねえか。」

“お前にしちや”って・・・一言余計です。

「これはな、かなりレアもんなんだぜ？音楽はクリア、コードは巻き取り型、完全防音、さらには超頑丈な上に完全防水加工がなされてるっつー今時じゃ手に入らないくらい高価なもんなだ。」

「へ、へえー。」

何かよくわかんないけど、ようはかなり貴重な物なんだっていうのはわかった。

「そりゃ思い入れが違いますよね。高かったんでしょ？」

「ん〜・・・まあな。」

？今何か考え込んでたみたいだけど・・・。

「これな。買ったんじゃないんだ。」

「へ？」

「もらったんだよ。ガキンちよの頃。幼馴染にな。」

「幼馴染？」

「そ。」

「へ〜。リュウジさんに幼馴染の人がいたんだあ。初耳ですよ。」

「まあ言つてなかつたしな。」

「それで？その人今何してるんですか？」

「あゝ・・・知らん。」

「は？」

リュウジさんはへつどふおんを手でいじくりながら答えた。

「いやね、これもらった日に俺引越してね。それから手紙でやり取りしてたんだがなあ。しばらくして俺また引越してな、この町に来たわけよ。そこから音信不通だ。」

「そう・・・なんですか・・・。」

「そ。でも約束は覚えてんだよねえ。」

「約束？」

「ああ。大きくなつたらまた会おうつていう約束だ。」

「け、結構ありふれた約束ですね。」

「何だ？俺らの約束にケチつけんのか？」

「い、いいいいえー！」

「ならいい。」

何気なくすごまないでくださいよ・・・。

「さてと。思い出話はこれくらいにしてまだ昼寝してる奴ら起こして昼飯作らんな。」

当然、魔王とフィフィのことです。

「ああ、それとすまねえがテーブル拭いといてくれねえか？」

「あ、はい。」

ナプキンを渡してからリュウジさんは和室へと入っていった。

「・・・幼馴染、かあ・・・。」

性別聞くの忘れてたな・・・。

でももしその人が女の人だったら・・・

お互い意識し合ってたら・・・

そう思うとなんだか・・・切ないな・・・。

「必殺！ダイナマイトクラッシュ！！！」

【ドゴーン！】

「「みぎゃあああああ！！??」」

「・・・。」

考えるのはやめて一心不乱にボクはテーブルを拭きまくった。

悲鳴とか何も聞こえないように拭きまくったらテーブルがすっごくピカピカになっちゃったのはごく愛嬌。

第二十一の話 く思い出く（後書き）

作 はい二十一話め！

龍 おお、いきなりの新キャラの予感？

作 次回出ます。

龍 いやぁにしてもまさかあ

作 それ以上言ったらネタばれになるからストップ！

龍 あ、そう。

作 あぶねえあぶねえ。まったく・・・そんじゃまた次回会いましょ。

龍 じゃ。

第二十二の話 再会は突然に（前書き）

今回の話で、龍二がちょっといろいろやばいです。龍二ファンの皆様、ごめんなさい。

でも最後は結局いつもの龍二なんで、はい。暖かく見守ってやってください。あと新キャラです。

第二十二の話 再会は突然に

（アルス視点）

「テンコウセイ？」

「ああ。さつき噂好きの奴が職員室でそいつを見たつてよ。」

「・・・えっと、転校生つて何ですか？」

「あ、そっちの説明？」

ガッコウでマサさん達とそんな話をしてるとテンコウセイという単語が出てきました。

「転校生つてのはな・・・まあお前らみたいなものだ。」

「ボクら？」

「よその学校から色々な事情で引越して別の学校に入る奴のことだ。とは言ってもお前らは学校とかじゃなくて一種の留学みたいな物だからちよつと違うかもな。」

「へ・・・あ、じゃリュウジさんも？」

「あゝ、龍二は中学の頃だな。この町に来たのは。」

「へ〜。」

この世界つてホント色々あるんだなあ。

「お前らの世界にはそういうのが無いのか？」

「はい。そもそもガッコウという施設さえも存在してませんし。」

「なるほどな〜。」

だから勉強とかは家でやることになってるんだよね。

家で・・・か。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「アルス？」

「へ？何？」

ちよつと昔の事を思い出してたらフィフィに呼ばれて現実に引き戻された。

「どしたの？急にマジメな顔して。」

「ううん。何でもない。」

もう過去のことだしね。

【ガラリー】

「おゝい、お前ら席付けよ。」

【ガタガタ・・・】

カグラさんが教室に入ってくると皆一齐に元の席につく。ボクらも立ってマサさんと話してたからそそくさと席に戻った。

「よし、そんじゃ今からってその前に龍二はどこ行った。」

「さつき隣の幼稚園で子供達と一緒にゴーゴードダンス踊ってるのを見ました。」

「よしわかった。あいつ死刑な。」

さっき『トイレ行ってくる』っていうのは嘘だったんですねリュウジさん……。

「まああいつはいい。今から重大発表だ。」

「一つ咳払いをして間を空けるカグラさん。何かオジサンみたいですよ。……とゆーよりリュウジさんはどうでもいいんだ。」

「あー。こないだアルスとクルルが来たにも関わらず、今日また転校生がうちに入ることになった。」

ザワザワと騒ぎ出す教室。そんなに珍しいことなの？

「そんなもって……野郎ども喜べ。今回も女だ。」

『うおおおおおおおおおお！！！』

びび、ビツクリした！？

「せ、先生！そ、その子は美人ですか！？可愛いですか！？」

「んーまあ両方あるって感じだな。それも超高レベル。」

『うおおおおおおおおおお！！！』

低い咆哮は教室を揺るがす……こわ。

……あ、あれ？女性の皆さん物凄く冷めた目つきしてますけど……何で？

「そんじゃさっそく入ってもらっぞ〜。」

『うおおおおおおおおおお！！！』

いい加減うるさいです。

「おい、入れ。」

カグラさんが一歩左へ寄った。

【ガラリ】

その人が教室に入ってきた瞬間・・・さっきのような熱気が消えた。

「か、カワイイ・・・。」

「きれいじゃ・・・。」

「お、俺惚れた・・・。」

「俺なんて感動しちまったよ・・・。」

「・・・(鼻血ブー)。」

どっちかというとか何か部屋中ピンクになったって言う方がしっくりくると思う。

入ってきたその人の見た目は、ホントにすごかった。

後ろで一本に束ねた(ポニーテイルっていうらしい)ツヤのある黒髪
端整に整った顔に少しつり上がった目

黒いスカートから伸びた細い足

肌も白くてキレイ

カグラさんの言うとおり、可愛らしさとキレイさを兼ね添えた人・・・

でもこの人って……。

「あ……。」

あっちもボクと目が合った。最初は驚いた顔してたけど、すぐにニコリと笑いかけた。

テンコウセイって……隣に引越してきたタカハシさんだったんだあ……。

……それよりボクに笑いかけたのに他の男の人達がさっきよりも恍惚とした表情になってるのは何でだろう？

黒板の前に来ると、タカハシさんは自分の名前を大きく書いてまたボクらの方を向いた。

「初めまして。高橋 花鈴かりんっていいいます。これから先、よろしくお願ひします。」

凜とした声で自己紹介してから少し頭を下げた。

() (さ、最高じゃあああああ！) () ()

？一瞬何か男の人達の声が聞こえた気が……。

「うーし。そんじゃお前ら。こいつと仲良くやってくれよ。」

『は……い……！』

女子の人達より、男の人達の方が声が大きかった。

「んじゃあ席決めてもらうか。」

【ゴウツ！！】

い、いつかの熱気再びいいい！！？？

「・・・アルス、やっぱガツコウって怖いね。」

「大丈夫・・・多分。」

フィフィの言葉に物凄く不安を覚えてしまうボク。

「あゝそうだなあ・・・。」

辺りをグルリと見回すカグラさん。

緊張した面持ちでカグラさんを睨むように見つめる男の人達（マサさんを除く）。

そして男の人達をじとーっと冷たい視線で見つめている女の人達。

ボクこのクラスでやっていけるのかな・・・（泣

「うん、じゃあ花鈴は・・・。」

カグラさんが席を指定しようとした・・・。

「・・・って。」

ピタッと動きを止めたカグラさん。その目線の先は……。

「……………テメエいつからそこにいた？」

「……………」

教室の後ろに腕組みして俯きながら立っているリュウジさんだった。

ってボクらも全然いるのに気付かなかったんですけど!?

「ってかお前さり気なく気配消して教室入ってくんじゃねえっつの

!?!」

「……………」

「無視かい!?!」

さつきから悠然とした姿勢を崩さないリュウジさんに無視されて怒り狂うカグラさん。そしてリュウジさんに殺意（テメエ何緊張のー瞬邪魔してくれやがんだこのヤロウ）を込めた視線を向ける男の人達。それらを見て明らかに戸惑いの表情を浮かべるカリンさん……。

「……………りゅじ……………じ……………?」

『へ？』

思わず声に出てしまいましたボク達全員。

「……………」

呼ばれたのに未だに俯いたまま何も言わないリュウジさん。」

「そのヘッドフォン……龍二だよね……？」

へっどふぁん？……………あ。

『これな買ったんじゃねえんだ。』

『え？』

『もらったんだよ。ガキンちよの頃。幼馴染にな。』

。 . . . もしかしてリュウジさんが昨日話してた幼馴染の人って . . .

「 . . . 。

「 . . . 。

『 . . . 。

な、何だろうこの沈黙 . . . カリンさんは戸惑いの表情で、カグラさんは頭に？マークを浮かべていて . . . 近くにいるクルルとファイとマサさんとカナエさんとクミさんとその他の女の人は明らか何が起こってるのかわからないって言った感じに混乱していて . . . 男の人は . . . 何かその . . . 絶望とか失望とか羨望とか嫉妬とか憤怒とか憎しみとか困惑とか . . . 何かそれらの感情こった煮にしたような表情していて . . . 。

なのに . . . 。

「……………」

ずっと黙っているリュウジさん。

「……ねえ、ちょっと何か言いなさ」黙れ。「……え？」

へ？

「貴様……よくも俺の前に姿を現せたな。」

「り……龍二？」

「その名を軽々しく口にするな。」

「！」

いきなりの事でカリンさんは困惑した。

かくいうボクらも、かなり困惑している。だって……こんな冷たい言葉を投げかけるリュウジさん……初めて見た……。

「聞く……何故また俺のもとに来た？」

「な、何故って……。」

「答える。一体何しに来た？」

有無を言わさない口調に、ボクらは一瞬震え上がった。

「あ、アタシはただ、この町に引っ越して……。」

「……はっ。くだらない。」

リュウジさんはカリンさんの言葉を鼻で笑つと共に一蹴した。

「所詮貴様はその程度でしか行動できない、小物なんだな。」

「り……龍二……?どうして……。」

「失せる。二度と俺の目の前に現れるな。」

「……………!!!!」

その一言で……カリンさんは一瞬にして泣きそうな顔になって……しばらく俯いて震えた後、勢いよく教室を飛び出していった。

「な……。」

ボクらはその後ろ姿を啞然とした表情で見つめるしかなかった……。

「……フツ。弱者が。」

!!

「……龍二!!」

クミさんが勢いよく立ち上がってリュウジさんの近くに歩み寄ってその胸倉を掴みあげた。

「龍二・・・何でいきなりあんなことを言った!？」

「そつだよ!いくら何でもひどすぎるよ!!!」

「見損なつたわ!」

「何でリュウちゃん!？」

「おい龍二。」

クミさんから始まって、魔王、フィフィ、カナエさん、マサさんまでもがリュウジさんに詰め寄る。

ボクも迷わず立ち上がってリュウジさんを睨みつけた。

「どうして・・・どうしてですか?」

思わず声が震えそうになる。でも・・・言わずにはいられない。

「どうして!? 昨日ボクに話してくれたじゃないですか! あの人はあなたの幼馴染なんでしょう!?! 大きくなつたらまた会おうって約束した人でしょ!?! なのに何で・・・何で!?!」

『・・・』

ボクは言いたいことを全て言った。教室の皆も・・・リュウジさんの言葉を待っている。

けど・・・。

「・・・ククッ。」

『!?!?』

その口から漏れたのは、嘲笑と言ってもいい笑い声。

「龍二!?!」

クミさんがリュウジさんを殴りつけようと拳を握りしめる。

「・・・やはり貴様にとって俺は邪魔な存在らしいな。」

『?!?!?!?』

は？

「ならば・・・受けてみるがいい・・・絶体絶命、超必殺技、サン
シャイーーーーンファイアーーーーーー・・・
グウ・・・ムニヤムニヤ。」

・・・。

『寝言おおおおおおお！！！？？？？？？』

思わず叫ばずにいられなああああ！！

（龍二視点）

「ふあゝあ・・・むにゃ？」

んむう、うるさくて目が覚めちまった。

うゝん、いいとこだったんだけどな。冷酷でクールな正義のダークヒーロー、サンシャインブラックの目の前にずっと昔に付き纏っていた悪の怪人兼永遠のライバルであるストーカームーンが現れて、冷酷な言葉を次々と投げかけた後、逆上したストーカームーンに最後の特技、サンシャインファイアを撃とうとしたところで目が覚めちまうとはな。

やっぱり深夜番組だな。あんな言葉、今の子供達が使わねにもいかないしなあ。ブラックかつちょいいいし、真似したくなるよな。うん。つか隣の幼稚園の子供達と遊んで眠気吹っ飛ばそうとしたのが仇になっちまうとはな。疲れて余計眠くなっちまった。気配消して教

室の後ろまで来たのはいいんだけど、まさかその途中で立ったまま
ダウンとはなあ。はっはっは、失敗失敗

「……っーか何故に皆して俺見てんの？そんな目立つか俺？あ、目
立つか。」

「あゝ……神楽さゝん。俺一応朝来てから外出たんで今回はオマ
ケっつーわけで。」
「……。」

あれ？神楽さんまで呆然と……俺何かした？ここで立って寝てる
のがそんな珍しかったか？

「り……リユウジ……さん？」
「ん？何だアルス？」
「えっと……。」

あ、今気づいたら久美が俺の胸倉掴み上げて……て待てや。

「おい久美。服伸びる。」
「あ、ああ……。」

？久美まで何なんだ？

「龍二……君さっき何の夢見てた？」
「へ？今聞くことか？」

『はい。』

うお、全員即答。

「あゝ、そうだな。サンシャインブラックがストーカームーンに暴言浴びせて最後に超必殺技くらわそうとしたところで目が覚めた。」
『……………』

だから何でそんな微妙な顔するかね？

あ。

「もしかして俺、さっきの言葉寝言で言ってたか？」
『……………はい。』

オウマイゴツド。

「あゝ、そりゃ不快に思った奴はホントすまなかつたなあ。ごめんごめん。」

うゝん、こりゃちょっとどころかかなり恥ずかしいな。

「ま、まあ…………寝言ならしょうがない…………な？」

久美の言葉と共に一斉に頷く皆様方。やさしいですね。

「……………」

「？」

ん？アルス？

「ボクらより一番謝らないといけない人がいるじゃないですか。」

「え、マジか。」

一体誰だ？と言いかけたところで黒板が目に入った。黒板には大きな文字で『高橋 花鈴』と書かれている。

？

高橋？花鈴？

高橋 花鈴

高橋 花鈴

花鈴

花鈴

花鈴

・・・。

今日も雅のツッコミ無視！

「な、なななな何ですか!?!」

「あいつはどこ行った!?!」

「え、えええと教室から飛び出した後どこかへ走り出して……」

何てこつたい……マジメにショック。

「うおおおおお!! 俺はバカかああああああ!!」
「!!」

絶叫しながら俺は脚にパワーを込めて走り出す。

【バゴオン!!】

あ、ドア壊しちゃった。

でも気にしてられまっせえええん!

「うおおおおお!! 花梨どこだあああああ!!」

ええい! 手当たりしだい探し出してやるわああああ!!

〈花鈴視点〉

「……ウウ……グス……」

せつかく・・・せつかく会えたのに・・・。

「グス・・・アタシ・・・何か悪いことしたのかなあ？」

だったら謝るしかないよね・・・でも・・・あんなこと言われて・・・。

『消える。』

「・・・。」

やっぱり行けないよ・・・またあんなこと言われたらもう・・・耐えられそうもない。

「・・・。」

もうあいつの中に・・・アタシはいないのかな・・・。

「・・・もう生きてるのが嫌になった・・・。」

思わず呟いて・・・後悔したけど・・・。

どの道、もうあいつはアタシのこと気にしないだろうし・・・もういっかな。

それにまたあいつの顔見れてすごく嬉しかったし。それだけで十分。

そうとなったらいざ・・・。

「つてこいどい？」

気付けば薄暗くて埃っぽい部屋にアタシはいた。椅子と机が乱雑に置かれていて、中にはぼろぼろの奴も……。

「……。」

やば……学校案内とかまだしてもらってなかった……（汗

どうしよう……暗くて足元見えないし、電気点けようにもスイッチがどこにあるのかもわからないし……カーテンを開けて光を入れるっていう手もあるけど、カーテン開けようにも机が邪魔で行けそうもない。

何でよりによってこんな所に迷い込んだんじゃったんだろうなあ……。

「ど、どうしよ……。」

……とにかく出なきゃ。

アタシは一步足を前に出して……。

【ガゴンー！】 机に乗った椅子が落ちた音

「きゃああああー!!」

や、やっぱり無理!無理無理無理!!

「だ、誰かああ・・・助けて・・・グスン。」

うう・・・龍一い・・・怖いよ・・・。

「呼んだ?」

!?!??

「きゃああああー!!」

「やかましい。」

【ベチン】

「あじう〜・・・」

い、痛い……。

「まったくよ。助け呼んどいて叫ぶたあ失礼な奴め。」

頭を抑えながら見上げれば、暗くてうつすらとしかわからないけど・

ほんのり、昔と変わらない顔が見えた。

「……龍二ッ!!」

【ガバツ!】

「うおっと。」

不安が一気に消え去って思わず抱きついた。

「おゝい、いきなり何だあ?」

「うええええん!龍二いいい!!」

「あゝもゝホントやかましい。とにかく離れんかいバカたね。犬が
デメエは。」

「……え、じゃさっきのあれって……。」

「そ。寝言。」

暗い部屋（使われなくなった古い教室）から出て、歩きながらさっきの冷たい言葉を吐いた理由を龍一の口から聞いた。ってーか寝言って……。

「……何であんなタイミングで最悪な寝言言うのかなあ？」

「あゝ……ホント悪かったな。相当傷つけたみたいで。」

「え、い、いいわよ別に。悪気はなかったんだし。」

「ふう。そう言ってもらえると楽になる。」

「バカ。」

ちよつと笑いながら言っただけ。

「……でもよくアタシの居場所わかったわね？」

ここって結構奥まった所にあるし、そう簡単に見つけられないと思っただけ。

「ん？簡単なこつた。昔っからそうだし。」

「え？」

「お前よくいじめられたりつらい時とかあったらかならずどっか暗いところに潜り込んでそのうち泣き喚きながら助けもとめてたからな。もしかしたら……って思っただけよ。」

あ、あゝ……なるほど。アタシってそうだったっけ。

「っーかわわんねえなあお前。もうちつと成長しろ。」

「う、うっさいわね！アンタよりは成長してるわよ！」

「どこが？どっ？どのようにして成長してるの？理由を五百字以内に述べてみよ。」

「!.....」

い、言い負かされた・・・屈辱。

「やっぱり変わんねえじゃん。」

「.....うっさい!死ね!」

「生きる!」

「何その切り替えし!?!」

はっはっはって笑う龍二。うっわ、ムカつく.....。

「ま、とりあえず無事解決っと。」

「.....」

あ、そうだ

「ねえ龍二。」

「あ?」

「アタシねえ、さっきのまだすごく傷ついてんだけど?」

「ふんふん。」

「そんでねえ、やっぱり謝る気があるなら誠意って物見せて欲しいんだけどなあ?」

「?誠意?」

「つ・ま・りい・・・今度何か奢りなさい」

ふふん、やっぱりここは何か奢ってもらって全て解決っていう方向で行かなきゃね 定番よ、定番

「あゝなるほど。いいぞ。そんならいのことならどってことねえし。」

「

・・・。

お、思った以上に軽い・・・。

「普通もつところ・・・何か反抗してからアタシが最後に脅しかけて結局奢らされるっていう形がいいんだけど・・・。」

「何ブツブツ言ってるんだ。奢るのやめるか？」

「え！？そ、そんなわけないじゃない！」

「あれ？さっき奢ってくれて頼んどいたクセにご不満があるのかのようにブツブツ文句言ってるのに？」

「あ、あれはねえ！その、ねえ！？」

「聞くなバカ。」

「うぐうっ！」

「で？どうすんだ？俺が奢るのか？それともやめるか？つーかお前が奢るか？」

「・・・奢ってください。お願いします。」

「はいよろしい」

あゝも〜！定番から大幅にズレてんじゃないの！！

「あ、そついや言っただけだったな。」

「？何？」

【ポン】

「・・・へ？」

いきなりアタシの頭に手を乗せて・・・龍二は優しく笑った。

「またよろしくな。花鈴」

「////////////////.....ば、バカ!!」

思いつきり手を払いのけてズカズカとアタシは歩き出した。

その笑顔にときめいて顔真っ赤にしているのを隠しながら。

第二十二の話 再会は突然に（後書き）

作 ふう。第二十二話更新完了。

龍 お疲れ。

作 いやあ今回はちょっとやばかったなあ。

龍 何が？

作 いや、お前のキャラが何かスゲエひどくってさ。こづいづの書くと何か抵抗があつてよ。

龍 苦手なものに初挑戦つてか？バカか。

作 ……せめて誉めろよ。

龍 無理

作 笑顔で言うか？

龍 さあて、新キャラの花梨も出てきたことだし、次回は仲直りできた後つつーことで。

作 スルーかよ。

龍 じゃあな。

第二十三の話 昔はヘタレ？で今は暴君

〔花鈴視点〕

「へーそんなマンガチックな展開が……。」

「まんががちくくって何ですか？」

「ありえなさそうになって事だな。」

「あんま使わないだろうけどね。」

「でもよく信じられるな。あたしだって最初は戸惑ったぞ。」

「そりゃこんだけ可愛い妖精見せられたら信じたくもなるでしょ？」

「か、可愛いって言うなあ！」

「可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い……。」

「うっさいバカリユウジ！」

「うっせえ虫。」

「む、虫……!?!」

こんな和やか(?)な会話のちよつと前に遡ると……。

~~~~~

教室に帰ってきてきてまず皆の反応がすごかった。香苗ちゃん(さつき)名前教えてもらった(？)が思いつきり龍二に抱きついて……。

『リュウちゃん！さつきはひどいこと言っただけゴメン！』

『龍二……さつきはその、すまな……ごめんなさい。』

『リュウくん、謝るから許して！』

『失望したなんてもう言わないから……。』

『さつきメチャクチャ失礼な事言っただけごめんなさあああ！?!』

『何なんだ一体……。』

龍二に抱きついたのにも驚いたけど、何より驚いたのは頭を思いつきり下げたアルスの肩に羽の生えた小さい人……。俗に言う妖精がとまっていたことだった。一瞬目を疑ったわ。

にしても、龍二アタシが出て行った後皆にボロクソ言われたんだろ  
うなあ……。確かに寝言だとはいえひどかったけど……。

『……。……。ん？……。……。』

……。

『……。……。別にいいぞ。気にしてねえし（っ）か知らねえし（）。』

絶対何言われたか覚えてないだけでしょうがアンタ。

『り、リュウちゃん！！（泣）』

『暑苦しいつつのバ香苗。』

香苗ちゃん、けっこう胸大きいのに……。

何故ゆえに龍二は無反応なの？おかしくない？周りの男子生徒からの視線が龍二を射殺すかのように集めてるにも関わらずに？むしろ罵倒してるよこの人。

~~~~~

で、その後龍二がいつもつるんでるメンバーの人達と会話してかなり驚くべきことが発覚。

まさか龍二が・・・女の子二人・・・あ、三人も同棲させてるだなんて。

おまけにお隣さんだったなんて（やっぱり荒木っていうのは間違いなかったんだ）。

しかも相手が異世界からの勇者とか魔王とか妖精って。

アルスがその勇者だったなんて。

まあ最初は電波かなんかかなあって思ったけど・・・

『信じてくださいお願いしますこのとおり・・・!』

・・・アルスに涙目をお願いされちゃあねえ・・・しかも目の前に妖精いるし。

「でもあの龍二が女の子と同棲ってあんま信じられないなあ。」

「?あの龍二って、昔はこうじゃなかったのか?」

「うん。アタシの知ってる龍二は意外とヘタレだったのよ?」

これは紛れもない事実。幼稚園の頃に仲良くなって一緒に遊ぶようになってからはよくアタシがこいつにパシリとかやらせてたのを覚えてる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

？缶ジュース？あ、そんな時もあったっけ。

「あん時は金が無くてさあ。こっそり花鈴の財布の金使って誤魔化してたなあ。」

・・・は？

「そんでもって週一回、ジュースに下剤混ぜて飲ましたな。」
ちよつと待て。

「給食のおかずをバレないようにこっそりパンだけで作ったおかずにしり替えたし。」

待て待て待て。

「あ、幼稚園の頃なんて弁当の苺取ったな。」

「あれアンタだったんかい！！」

思わず叫ぶ。忘れもしない、人が楽しみに取っておいた苺がちよつと目を離れた隙に無くなっていたのは！

「っーか影でそんなことしてたんかいアンタ！」

「H A H A H A H A H A、気付かれないようにイタズラするのはスリル満点極まりない。」

「こっちは迷惑千万よ！おかしいと思ったわよ！週に一回、ジュース飲んだらかならずトイレ行きたくなっただし！」

「何でえい、気付いてたのかよ。」

「アンタだったとは思わなかったわ！！」

「気ニシナイ。」

「気にしなさいよ!！」

こ、コイツめ〜!昔っから性格悪かったんか〜!

「まあ過去のことは全て水つつーか洋式便所に流そうや。」

「汚っ!?何であえて言い換えるわけ!?!」

「和式便所じゃなかっただけありがたく思え。」

「どっちにしる変わらないじゃない!?!」

つーか何この不毛な争い?

「くっ……さすが幼馴染というだけある。見事なコミュニケーションだ。」

「うう〜。手強いなあ。」

「ぬぬぬ〜!」

「……(軽く睨んでる)」

ってこっちはこっちで何かコソコソ話合ってるし女子群の方々……あと久美ちゃん?これを見事なコミュニケーションって言えるの?

「ヒソヒソ(うわ〜えげつね。)」

「ヒソヒソ(だよなあ〜?ジュース中に下剤だぜ?)」

「ヒソヒソ(龍二最低だな。)」

「ヒソヒソ(ああ、最低の中の最低だ。)」

「ヒソヒソ(よし、この陰口を叩けば読者に対する奴の好感度ダウンだな。)」

「ヒソヒソ(ヒヒヒ、俺らのアイドルを独り占めしたお返しじゃいい。)」

・・・何かすごい周りの男子からヒソヒソ話が聞こえてくんだけど・・・しかも全部龍二に向けて悪意を飛ばしてるし。

「……………」

あれ？龍二無言……………。

「必殺『龍閃弾』。」

【ズゴオオオオオオン！！】

『ぎゃあああああああああ！！？！？？』

……………。

『…………陰口なら外でやれクスどもが。燃やすぞ。』

【ゴオオオオオオ・・・】 殺気放出中

『・・・ごめんなさい。』

こ、恐・・・。

「・・・人って変わるのね・・・。」

「いや、多分アンタがパシリにした時からこうだと思っぞ俺は・・・。」

「・・・かもね。」

あ、何か目頭熱いや あはは・・・。

↓放課後の帰り道↓

「今日もいろいろ楽しかったなあ。」

「そ、そうね。アタシもおもしろいクラスに来てよかったわ。」

満足気な顔の龍二と、苦笑するアタシ。今帰り道で土手を歩いていく。

普段ならアルス達と一緒に帰るらしいけど・・・。

「・・・ねえ、ホントに三人とも置いてきてよかったの？」

帰ろうとしたら番苗ちゃんがアルスとフィフィちゃんとクルルに『かわい〜!』とか言いながら思い切り抱きついてきて身動き取れなくなつた隙にさつさと龍二が帰りだしたのを見てアタシもついてきたけど……。

「ん？大丈夫だろあいつらなら。俺放任主義だし。」

おいおい……。

「でもさ、アンタホントに変わったよね。」

「？そうか？俺は昔から子供の心を忘れない男だぞ？」

「忘れなさ過ぎて逆に純粹に怖いわ。」

へっぴり腰だと思つてたらあんなイタズラしてたとは知らなかつたけどさあ……。

「そういうお前は全然変わつてねえじゃん。朝言つたけどさあ。」

「そ、そんなわけないじゃない！背だつて伸びたし！」

「中身の話だバカタレ。」

「うっ……!」

冗談で言つたのに普通にバカにされた。ムカつく……。

「まあ人間変わらないのが一番だ。」

「アンタが言うとすっごい違和感覚えるのは何で？」

「気ニシナ〜イ。」

「それ誰のモノマネよ？」

もういいや……。

「あ、それより。」
「ん？」

ふと、アタシは龍二の首元を指差した。

「それ。」
「これ？」

龍二の首に掛かったヘッドフォン。昔アタシが全財産をはたいて買った、ホントは誕生日プレゼントにする予定だった物。龍二の好みに合わせてこっそりアタシがカスタマイズした、つまりは世界に一つだけしかないヘッドフォン。

「それってさ……もしかして、ずっと付けてたの？」
「おう。」

何の躊躇いもなく返答した。

「……いつから？」
「お前がくれた日から。俺の唯一の宝物だ。」
「……え。」
「何だ？」
「な、何でもないわよ！／＼／＼／＼／」
「そうか。」

な、何でそう恥ずかしいことスラスラと言えるかなあ？

「ところで一つ提案があるんだが。」
「な、何？」

いきなり話かけられて若干どもった。

「どうだ？今日俺ん家で再会祝いつてなわけでパーっと一発？」

「え、アンタん家で？」

「どうせ家近いし、いいんじゃないよ。」

・・・ま、まあとなりだし、いいよね？

「・・・そうね。パーっといきますか？」

「じゃラーメンだな。」

「へ？何でラーメン？」

「好きだからに決まってるだろーが。文句あつか。」

「い、いや無いけどさあ。」

「じゃ決まりで。」

「ご、強引・・・。」

「よしじゃ早く帰って仕込みだ仕込み！」

「何いきなりテンション上げてんのよ!？」

「上げたいから。」

「意味わかんない!！」

よくいるよね。テンション上がったたり下がったり忙しい人。いやこいつに忙しいって文字似合わなさそうだけどさ!

「ほらほらさっさと行くぞバカ。」

「バカって言うなってち、ちよつと!？」

「あ?」

「な、何手握ってるのよアンタ!？」

「何だ持ったら悪いか。」

「いや悪くはないけどさあ、ってそうじゃなくて!」

「うっさい黙っとけ走るから。」

「え、いやだからってきやあ!？」

いきなり走り出した・・・アタシの手引っ張りながら。

ホントこいつは・・・昔はアタシに引っ張っられてたくせに。

バカとかよくアタシに言われてたくせに。

背負うことは出来るのに手は繋げなかつたくせに。

今じゃ全部真逆になっちゃって・・・恥ずかしいことは平気で言うわ普通に頭叩くわ手とか何の躊躇いなく掴むわ俺様みたいな性格になっちゃってるわ・・・

でもまあ・・・ヘッドフォンが宝物って言ってくれた時は嬉しかったし・・・

変なところで優しいとことか変わってないし・・・

こいつの事、もっと知りたいと思うアタシもいるし・・・

性格がガラリと変わっても・・・やっぱりアタシ、

「おい、何走りながら嬉しそうな顔してんだ？」
「え、何でもないけど！？／／／／／／」
「????？」

こいつのこと、大好きだわ。

くおまけく

「リュウジさん……。」

「お腹減った」
「キユ」

ラーメンが出来た頃、ボロボロになりながら帰宅してきた三人娘が
いましたとさ

第二十三の話 昔はヘタレ？で今は暴君（後書き）

作 ……。

龍 おゝいしよっぱなからテンション低いぞ。

作 誰のせいだと思ってんだ。

龍 誰だ？

作 テメエだテメエ！こないだの感想コメントは何だ！怒らしちま
ったじゃねえか！

龍 そうか？

作 見りゃわかるだろ！どうすんだ社会的に終わらせるとか宣言し
てたぞオイ！

龍 あゝ大丈夫大丈夫。終わらせられる前に終わらせるから

作 余計心配になるわ！えと、こないだはマジメにごめんなさいで
す。

龍 いや、その人見てるのかこれ？

作 ……見てくださってることを祈るばかりだ。

龍 ふん、そ。

第二十四の話 勇者の底力（前書き）

これはまあ、感想コメントとかでえらい目に合わされたアルス救済物語だと思ってください。

いや〜んな沈黙が辺りを包み込む。

「……えっと……どうゆう意味ですか？」

「そのまんまの意味だが？」

「いえいえ、意味がよく……。」

「うん、まあ平たく言えば勇者らしくないってこと。」

ストレートに投げました龍二の問題発言！アルスはどう反応するかあ！？

「……えっと……それは……その……。」

バッターアウトー！いやぁ見事なストレートでしたねえ。アルス選手反応できないくらいでしたねえ（野球中継風にお送りいたしました）。

「そ……そんなこと無いです！絶対に！」

ムキになったアルスは思わず座った状態から身を乗り出す。

「いやでもさ、現実って厳しいぜ？」

「？どついう意味ですか？」

「まあそれはこれから出てくる奴が話すさ。」

「へ？誰？」

疑問符を出すファイファイ。ついでに言うテーブルの上で饅頭抱えたような感じで食ってます。微笑ましいですね。

「つーわけであ……お〜い。」

【ピシャン】 襖開けた音（先日修理しました）

呼んだ？

「「誰!？」」

三人娘が同時に叫ぶ。そりゃそうだよな。いきなり顔見たことない奴が和室から出てくれば軽くっつーかかなり不法侵入だよな。

「・・・あれ？あなたもしかして「世界の法則!！」はい？」

【ガシヤアアアン!!】

「いったあああああ!？」

アルスの頭からタライを落とす。因みに金属製。

「よう。まあとりあえず座れよ。」

お、サンキョ。

「ち、ちよっとリュウジ？誰よこいつ？」

「か、完璧黒い・・・。」

あ、俺の見た目はまあ黒子みたいって言えばわかるかな？

「紹介する。こいつは・・・まあ仮に『ライター』っていじつとじよ
う。」

よろしく。

「?ライター？」

復活したアルスが聞く。

「あ、ついでにこいつ神な。」

「え、紙？」

世界の法則!!

【ガシヤアアアン!!】

「みぎや あああ!？」

クルル、古典的なボケは命取りだぞ。

「神様の方だ。」

龍一、お前はよくわかってる。

「まあ紙みたいに薄っぺらいけどな色々。」

・・・やっぱわかってねえだろオメエ。

「え、ええっと・・・あの、もしかしてあなた作「世界の法則!!」
また!？」

【ガシヤアアアン!!】

「ピギユツ!？」

ペンギンかテメエ。

「いたたた・・・そ、それでライターさんがどうしてここに？」

まあ、こいつとは会ったことあるしな。いろんなとこで。

「おお、お前さんの事で話があるってよ。」

「ボク？」

イエス。

え、今日の感想・評価でのコメントにてありましたとあるお方の感想欄にて。

「は、はあ。」

・・・お前勇者だって向こうわかってたのに爆弾的な物食らったろ。

「・・・。」

そんでその後返信コメントでお前龍二に踏まれてたよな？

「え、ええ・・・まあ。」

そんで別の感想とかあったけどよ・・・そこに出てきた人、すごいぞ？勇者で不死身だぞ？そんでもって世界滅ぼしたことあるらしいぞ？

「・・・。」

まあ世界滅ぼすのはよくないけどさ・・・お前って勇者としての特徴何もない気がすると思うんだよね俺としては。

「あの、ひどくないですか？」

まあ一部の人からは人気はあるようなんだけどなあ。

「・・・慰めになってるようななってないような・・・。」

「ね、ねえリユウジ？何の話かまったくわかんないんだけど？」

「まあお前らもそのうちわかる。」

正論だ龍一。

「・・・ちよつと泣きたいです。」

・・・で、だ。今回は感想・評価二十件突破特別企画っつーことで！

「はい？」

アルスはホントに強いが、確かめよう！

「え？あの、え？」

「何？感想・評価って？」

「二十件突破？」

「気ニシナイ。」

状況が飲み込めてない三人娘はほっといて、いざレッツラゴー！

「まあとりあえず付いてこつちや。」

「は、はあ・・・。」

「でも何かおもしろそ〜」

「・・・変な問題増えないよね？」

増えへん増えへん

〜で、場所変わってグラウンド〜

小説の特権を利用してさっさと移動を完了させました

「それ言ったらダメなんじゃ・・・。」

「大丈夫だって。皆やってら。」

「皆？」

「小説って何のこと？」

だから気にするな。そのうちわかる。

さて、アルスこれを持って。

「あれ、これ・・・。」

そ。最近出番が無かったお前の剣。

「・・・何で持ってたんですか。」

家から出る時持ってきた。

「い、いつの間に・・・。」

まあ細かいことは気にするな。

さて、これからお前はちょっとした試験をやらせてもらう。

「試験？」

簡単簡単。これから俺はモンスターを出す。それをお前が普通に倒せばいい。そんだけ。

「どんだけ〜。」

黙っとけ龍二。

さて、と。早速だが、準備はいいか？

「え、えっと・・・よくわかりませんが、ハイ。」

よし、じゃ早速・・・。

はいドロンプ。

「何その呪文!？」

アルス、ツッコミのスキルは段々高くなってきてるけどなあ。

【ボオン!!】

グラウンドの中央に煙が湧き上がる。徐々に煙が晴れていき・・・

『グウルルルルルル・・・』

「「「「・・・」」」」

何と、出てきたのは体がダンプカー並にでかい真っ赤っかなドラゴン

「「「「・・・」」」」

あまりのこととでその一言しか発せない三人娘。

龍一は鼻をほじりながらドラゴンを眺めている。おい。

『グウルアアアアアアアアアア！！！！！！！！！』

おお。さすがドラゴン、ナイスな咆哮

「え・・・っと。」

「あれって・・・。」

「うん・・・ファイアドラゴン？」

はい説明します。

ファイアドラゴン。アルス達の世界に生息するドラゴン種の中でも中級のレベル。中級とは言え、RPGで言うとラスボスがいるダンジョンの序盤辺りに巢食うくらいのレベルっつー感じで、まあぶっちゃけかなり強いのだ。因みにドラゴン種は全モンスターの中では知性が高く最強と謳われている。まあ性格は名は体を現すって言った感じで凶暴。火属性の体を持っている。当然弱いのは水。あ、ドラゴン特有のどっかい翼があるのもお忘れなく。

はい説明終わり。

「軽くないですか!？」

うん、軽いよ？

「あっさり言わないでください!これボク一人で!？」

簡単だろ?魔王城まで辿り着いたくらいのレベルなんだから。

「ま、まあそうですね・・・いくらなんでもドラゴンってきゃああああ!?!?!」

【ゴオオオオオ!!】

いきなり火を吹いてきたドラゴン。とっさに避ける俺達。アルスは横へと側転して避ける。

っわけで、レディ!ゴー!!

「え、ちよつと!?!」

『ゴアアアアアアアア!?!』

「!~~~~~わかりました!やりますよ!?!」

【シャリン】

幾分かムキになりつつも鞘から剣を抜いて構えるアルス。何だ結構ま様になってるじゃん。

あ、実況俺ことライターでよろしくお願いします。

『ゴアアア!?!』

「はっ!」

ドラゴンから繰り出される前足の鉤爪攻撃を剣で弾くアルス。続けて左からの第二波も弾き、カウンターで突きを繰り出す。ドラゴンの弱点はやわらかい腹。背中とかは鱗でビッシリと覆われているため、傷つけられません。

【シュ!】

『!?!?ゴアアア!?!』

ドラゴンにとっては運よく掠った程度で済んだが、それでもキズついたに変わりはない。痛みで思わず咆哮を上げた。

「よっ!」

【ズドン!】

反撃を恐れて、バック転をしながら大きく距離をとるアルス。間一髪、先ほどいた場所がドラゴンの後ろ足による踏み付け攻撃によつ

て大きく窪んだ。すかさず体勢を直し、剣の刃を横向きにして仁王立ちする。

『氷よ、かの者を貫け!』

【ヒイン シュシュシュシュ!】

ドラゴンの周囲に鋭いツララが数個発生し、ドラゴン目掛けて飛んでゆく。氷属性の魔法は火属性には効果が薄いはずなただけど?

【ジュウウウウウ ザバアアア!】

『グギヤアアアアア!?!』

あ、なるほどね。ファイアドラゴンって怒った時に体の周囲に膨大な熱を短時間発生させるんだっけ。ツララは直接ドラゴンに向かわず、その頭上目掛けて飛んでったわけで、当然氷は解けて火に強い水になり、雨の如くドラゴンに降り注ぐ。知能が高いドラゴンは、自分に効果が薄い魔法だと思って高を括ってたらしいが、それが急に水になるもんだから無防備だったわけよ。うーん、そこまで考えてたんだなアルスは。

『グルアアアア!?!』

【ドン!ドン!ドン!】

怒ったドラゴンは今度は口から三つの火球を飛ばす。一つ目はしゃがんで回避し、二つ目は前転回避。

「はあ!」

【ザン!】

三つ目は膝をついたまま気合と共に薙ぎ払う。そのまま素早くドラ

ゴンの懐に潜り込む。

「せい！」

【ドガ！】

「せや！」

【バキ！】

「ていりやあああー！」

【ズガン！】

不意を突いた隙に、ドラゴンの急所、つまり腹に素早いかつ、強烈な右アッパーから左ストレート、最後に飛び上がりながらの蹴りを繰り出す。剣よりも格闘技を使うのに最適な距離だったための判断だが、効果はあったようで蹴りを食らって大きくよろめくドラゴン。見た感じ苦しそうだ。

『グルルルルル！』

「すううう……はあああ……。」

呻くドラゴンに対し、剣を構えて大きく息を吸って大きく吐くアルス。これで気合を高める。

「か、かつこい〜！アルスかつこい〜！」

「行け〜！アルス〜！」

「頑張れよ〜。」

危険じゃない範囲まで離れた傍観者達はそれぞれ声援を送る。え？俺の位置？それはご想像で。

『グガアアアアアアア！！』

「そりゃあああああー！！」

剣を振り上げて駆け出すアルス。迎え撃つため、息を吸うドラゴンのだが、ドラゴンが火を吹く前にアルスは高く跳躍。アルスの真下に火が通り過ぎる。

「はあああー!!」

気合と共に剣を振り下ろすアルス。先ほども述べた通り、ドラゴンの鱗は硬いが……。

【ザシュ!】

『!?!?ガアアアアア!?!!』

それを無視するかのようにはドラゴンの背中に深く突き刺さるアルスの剣。

説明しておく、アルスの剣は俗に言う伝説の剣であり、ドラゴンの鱗ですら単なる紙つぺらのようになってしまう。

「てりゃあああ!?!」

【ザシュウウウ!?!】

そして勢い良く振り上げるように剣を引き抜くアルス。当然、相手にとってはかなりの痛手。

『ゲギヤアアアアアアア!?!』

痛みで激しく暴れるドラゴン。剣を引き抜くと同時に高くジャンプして地面へと華麗に降り立つアルス。

体の至る所を傷つけられ、満身創痍な状態のドラゴン。対するアルスは鉤爪攻撃による頬の掠りキズだけである。

息も絶え絶えなドラゴン。アルスはおもむろに剣を眼前に掲げ、目を閉じる。

『我が聖剣ライトプリンガーに宿りし神々の力よ。今その力を解き放ち、邪なる者を討つための聖なる加護の力を我に与え給え……』

小さな声で呪文らしきものを唱えると、剣改めライトプリンガーが淡く輝き出す。

『リステイル・オム（光よ）！！！！』

大きく叫び、剣を高く天に向けて突き上げる。すると剣が眩い光を放ち、ドラゴン並の長さを持つ巨大な光り輝く剣へと姿を変えた。

その光は、まさに神々による光の加護の如く強大な物。

そして刃を返し、大きく振りかぶる。

「でいやああああああああああああああ！！！！！！」
今までで一番大きな声と共に、巨大化したライトプリンガーをドラゴンに向けて叩きつける！

【ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！】
『ゲゲアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

巨大な閃光が目をくらまし、耳をつんざかんとばかりのドラゴンの咆哮と爆風が辺りを覆う。

「きゃあ!?!」

「ぴえ!?!」

「おっと。」

クルルは眩しさのあまり腕で顔を抑え、フィフィが爆風で飛ばされそうになり、それをうまくキャッチする龍二。

やがて光が止み、爆風も収まった頃。

視界が今度は砂煙で遮られ、辺りがよく見えない。

さらに時間が経つと、剣を鞘に収めようとしてるアルスがグラウンドの中央で視認できた。因みに剣は元のサイズに戻っている。

【チン】

剣を収め、ゆっくりと龍二達の方へ振り向くアルス。フィフィとアルスは呆然とし、龍二は【ヒュー】と口笛を吹く。

「・・・倒しました。」

そしてその少年のような綺麗な顔が微笑むと、フィフィは龍二の手から離れて一直線にアルスの元へと向かった。

「アルスー!」

そしてアルスの眼前に来て止まると、親指を突き立ててニカッと笑った。

「やったね！」

「へへ……。」

照れくさそうに頭をかくアルス。やがて駆け寄ってきたクルルもアルスに抱きつく。

「アルス〜！すっごくかつこよかったよ〜！」

「う、うわぁ！ちよっと!?!」

顔を赤くしながら慌てるアルス。

「よ〜。かなりかつこよかったじゃねえの？」

「り、リュウジさんまで……。」

龍二に言われて、さらに顔を真っ赤に染めたまま視線を逸らすかのように俯くアルス。先ほどまで戦場だったグラウンドは、和やかな空気に包まれた……。

あ、そうだ。ここにスロービデオがあるからその瞬間をちょっと見てみよう。

く再生く

俺らが今にも踏み潰されようとしている。

っと、ここで龍二が画面に入ってきた。因みに俺達もうギリギリ。

一瞬にしてドラゴンの腹に蹴り上げを打ち込む龍二。

【ズド！！】 一個目の効果音

衝撃で吹っ飛ぶドラゴン。

宙高く浮いたドラゴンを追うように飛び上がる龍二。

そしてドラゴンに追いつくと、体を前方に宙返りさせる。

【ゴス！！】 二個目の効果音

・・・。

「?どしたあ?」

いえ・・・何でもないです。

「・・・。」

【ゴーン・・・・・・・・・・】

「!?!?きゃあ!アルスう!?!」

「く、暗い!暗いよアルス!?!」

うおお!?!アルスの周りだけ何か黒いぞオイ!?!

「あ?アルスがどしたよ?」

いや、見りゃわかるだろ!?!

「?・・・あゝこりゃ黒いな。」

いやせめて何かマシなこと言えよ!?!?

「じゃ真っ黒?」

余計悪いわあああああああ!?!?!?!

倒した『ドラゴンの肉』使って『鍋』ってあんた……。

「じゃ、アタシも食べちゃおっと」

「おう、食べ食べ。いっぱいあるから。」

お隣さんの花鈴も誘って世にも珍しい鍋料理をパクつく龍二……。

やっぱり勇者以上魔王以上だわこいつ。タイトル通り。

そして夜は更けていく……。

第二十四の話 勇者の底力（後書き）

作 い、いやあ結局アルス龍二に負けたね。

ア・・・やっぱりタイトル通りなんでしょうか。

作 で、でもかつこよかったぞお前！メシの後ファイファイとクルルからも賞賛されたる？

ア・・・そうですね・・・やっぱりリュウジさん・・・ハア・・・

作 で、ではまたこの辺で！強いアルスに愛の手を！！

第二十五の話 サクランボと恥ずかしがり屋（前書き）

今回は短め＋久々にあの人出ます。

第二十五の話 サクランボと恥ずかしがり屋

（龍二視点）

「いや、大根が安くてよかつたぜ」

「これで晩御飯困らないね」

龍二ですつと。只今買い物中つーわけで購入物袋引っさげて商店街をのんびり歩いてます。ついでに俺の頭にはフィフィがとまっております。アルスとクルルはのんびり留守番中だ。

ついでにさつき八百屋のオツチャンに安くてうまい大根を勧められた。色、ツヤ、匂い、農薬の問題無し。これが安いなんて素晴らしい。あれほどいい八百屋が他にあるだろうか？ いやない。

「じゃ今日は機嫌がいいからサクランボでも買ってやるよ。」

「え！ サクランボ！？ やった！」

「ただし、二人にはナイショな。」

「はあい」

最近発覚したんだが、こいつサクランボ好きなんだとよ。サクランボつつつたらあれだよな。某アイドル歌手が歌ってるメジャーな曲。歌詞？ 何だつけ？ お前と俺がどうのこうの。

忘れた。まあいいかつーことで、脳内から削除した。

「？つてあれ？ あそこにいるのって…」

「んにゃ？」

と、ファイファイが前方を指差した。その先には見知った顔の奴がいた。

「なんだ、リリアンじゃねえか」

はいせつかくなのでお忘れになった皆さんに説明します。本名リリアン・ヴェルバー。アルスの仲間で、一番力がある女性戦士。斧を得物としております。危険人物じゃねえからそこんところよろしく。で、現在久美の家でお世話になります。

「あ…リユウジにファイファイ」

あちらさんも気付いたようで、俺達の方へ振り向いた。

にしてもあれだな。最初は気が強いついていうイメージだったが、今じゃ髪は下ろしてストレートの黒髪にしてるし、切れ上がったような目は今じゃ半開きののんびりした表情なってるし。服装も落ち着いたピンクのカーディガンに白のロングスカート。

まあそんなだから結構目え引くわな。道行く男が皆して振り向いてるし。確かに美人っちゃ美人なんだが、別に振り向く程じゃねえだろうと俺は思う。と言っても俺の美的感覚から判断してだから、世間からしたら振り向く程なんだろうな。んなこたあどうでもいいが。

「よう、久しぶりだな。元気してた？」

「…久美達には、よくしてもらっている」

「そかそか。ところでそれ、久美の服か？ あいつには似合いそうもねえな」

「久美…結構身軽な服着てるから…これお古」

「ああお古ね。なるへそ」

「…リユウジはどしてここに…？」

「そりゃ商店街なんだから買い物に決まってんじゃん」

「それもそうね…」

「だろ？ つーかお前もか？ お使い？」

「そう」

「馴染んでるなあお前も。」

「アルス達には負ける…」

「はっはっは、言えてる言えてる。バカみてえに馴染んでんだもんな」

「誰がバカよ！」

「大丈夫…間違っていないから」

「リリアンもうっさい！」

傍から見たら世間話してるように見える会話。内容はよく聞くのかわからないのかわからんもんだ。

「ところで…魔王は何をしてる？」

「ん？ クルルか？」

「ええ」

そっぴやこいつも最初の頃にクルル達に襲いかかるうとしてたっけなあ。あん時は目がマジだったから、止めなかったら俺の家めっちゃくちやになるところだった。そうなたら全員半殺しにしてどっかの谷底に紐無しバンジーさせてただらうけど。

ん？ 待てよ。じゃスタイルと同じ対応すんのか？ いつぞやの雅ん家行った時に。

「それ知ってどうすんだ？」

「別に…聞いただけ」

「あ、そ」

「軽っ!？」

いやだつて聞いただけならいいじゃんそれで。別に殺しに行ったら
ー！ みたいな殺伐とした感じじゃないし。俺難しい話嫌いなもの。

「ただ伝えておいて欲しいことがあつて」

「伝言か。何だ？」

やっぱ殺すーつてか？ そいつぁ勘弁願いたいとこだがねえ。

「私は…別にあなたのこと恨んでいるわけじゃないから…」

「…ほお？」

だが、俺の予想とは180°違った伝言だった。

「うーん、まあ一応伝えといてやるが、それ本人に直接言えばいい
んじゃないかねえか」

俺としちゃそれでいいけど、そういうのは直接伝えた方が気持ち
伝わるっていうじゃねえか。何？ お前が言うな？ やかましわい。

「わかつてる…でも今はまだ…」

「まだ？」

「何かあるの？」

まだなんかしこりみたいなもんがあるのか？

「…恥ずかしい。」

「うら」

「あゝわかるわかる」

「納得すんな！」

と思っただけど、別にそんなことなかったぜ。

「じゃ…私、これから頼まれたの買いに行くから」

「ああ、そうか。ところで何頼まれたんだ？」

「…いべりこ豚という肉を」

「久美に伝えとけ。今度会ったら豚の骨でぶん殴ると」

「…了解」

「何故に!？」

あんのブルジョワ家族め…だが雅んどこよりマシか。

「じゃ…また」

「おう。また遊びに来いよ」

「是非、そうさせてもらおう…」

「バイバ〜イ」

リリアンに手を振るとあつちも振り返し、人ごみに紛れていった。
う〜ん、やっぱりあいつも馴染むの早えわ。

「今思っただけど…リリアンって結構謎よね〜」

リリアンが行って少しして、フィフィが俺の頭の上で肘つきながら
ぼんやり呟いた。

「そうか？ 親しみやすいいい奴だぞ？ 初めて会った時と違って」

「まあねえ。あの人って初対面の相手に対しては結構警戒するから」
「犬みたいだな」

「それ失礼だからやめときなさいよ」

可愛いだろつが犬。犬舐めんな。

「ま、次会ったらゆっくり話すとすっかな」

あんま口数多くないようだが、結構話すと楽しいって改めて気付いたし。斧はマジ勘弁して欲しいがな。

「そんじゃあ、サクランボ買いに行くぞ」

「わーい！ サクランボサクランボ」

何はともあれ、約束どおりのサクランボを買いに行くとするか。頭の上の虫も待ち遠しそうだし。

「虫じゃない！！！！」

「思考読んでんじゃねえよ」

「アウチツ！？」

ツッコミ入れたフィフィを叩いた。ペチンと。なんか本当に虫叩いた気分になった。

くで、久美の家

「ただいま」

「おお、おかえりリリアン」

「あ、久美。リュウジから伝言が…」

「龍二から？ 途中で会ったのか」

「ええ………今度会ったら豚の骨で殴り殺してやるから覚悟しろって」

「え、ええええ!?!」

若干物騒に捏造された伝言に衝撃を隠せない久美なのでした。

第二十五の話 サクランボと恥ずかしがり屋（後書き）

作 まあ今回は出番が少ない人にピックアップしてみました。
龍 一人だけな。

作 この小説はアルスとクルルとフィフィと龍二の交流が中心なので、自然と出番が少なくなってしまうのが難点なんだよなあ。

龍 素直に偏りすぎちまうって言うちまえばいいのに。
作 ……うっせえ。

第二十六の話 いい一日？

〔花鈴視点〕

…あ、あれは…。

「龍二」

「んあ？」

文房具屋でペンを買った帰り道、のんびりと前の道を歩いていた龍二にアタシは声をかけると、龍二は気だるげに振り返った。

なんとなーく、運命を感じた………気もするけど、そんなこと言っただってこいつは何にも思わなさそうだから言わない。とゆうか思われなくても言わない恥ずかしすぎる。

「何してたのよ一人でブラブラと？」

「お前は何してんだ」

質問を質問で返されました。

「い、いいでしょ別にアタシのことは！」

「ああ、確かに心底どうでもいいな」

「…すぐ肯定するのやめてくださいお願いですから」

「へいへい」

おまけに“心底”まで付けますかホンットどーでもいいんですかそうですか。

「で？本当に何してたの？」

「散歩してただけだ。今日はいい天気だし、公園で光合成でもしようかなと…悪いか？」

「いや悪くはないけど、さ…」

光合成ってアンタ植物か。素直に日向ぼっこって言うときなさいよ。

「あゝ、じゃ暇ってことね」

「どこをどう取ったらそうなるのか知らねえけど、まあそうだな」

どこをどうってのんびりしに行くって言うてるようなもんだから暇ってことでしょうが。

「そんじゃ、さ…ちょっとアタシと付き合いなさい」

「何をだよ？」

ぐ…鬱陶しそうな言い方。でも我慢よ我慢。

「だ、だからあ…あああれよあれ！こないだ奢ってって言ったでしょー！」

「……………あ、そうだったけ？」

「今すぐい思い出すのに時間かけてたでしょ？」

「気ニシナイ」

「もうええわそれ！」

…て、コントしてる場合じゃなかった！

「そ、それに町とか案内してもらおうと思ってたところだし」

「ああ、まだだったかそれ。じゃ奢るついでに案内してやるよ」

やった、交渉成立

「そんなじゃ早速行くわよ！ 甘い物奢ってもらうんだから」
「へいへい」

ダルそうな龍二を引つ張りながらアタシは元気よく出発した。

…傍から見たら、カップル、かな？ こういつの………へへ。

「ニヤニヤすんな気持ちわりい」

…女の子に向かって気持ち悪いはないでしょうが。

数分後、町に到着したアタシ達…。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」
「お疲れ」

あ…今息荒くしてんのアタシね。

えっと、最初の方はアタシの方が元気あったんだけど…。

途中から形勢逆転しまして…。

「おいおい、誘った本人が死にかけてどうすんだ」

うっさいわね加害者…って言いたかったんだけど言う元気ありません…すでに満身創痍ですアタシ。

「ん…じゃあここで休憩するか。」

「？ ここ…？」

龍二が指差した場所は…

『CAFE・TAIYAKI』

……………。

TAIYAKI？

「ほらほら来た来た。甘いもん食いたいんだろ？」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ！」

半ば強引にカフェへと引つ張り込まれ、抵抗する間も無くアタシは店に入ってしまった。

…べ、別にやらしい意味じゃないわよ。カフェだからね、カ・フェ！

「いらつしやいませ！」

「おつつ」

「あ、龍二さん。今日も来ましたか」

「おお。いつもの二つよろしく」

「かしこまりました。こちらへお掛けください」

「サンキョ」

店に入るとすぐに若い店員さんが出迎えてくれて、龍二と慣れ親しんだ感じで会話した後、席へと案内してくれたんでアタシと龍二はお互い丸い木製のテーブルに向かい合った状態で、テーブルと同じ素材のイスに座った。

「にしても随分慣れた感じだったわね？」

「ここの常連だからな。慣れて当然」

「ふん。」

店の雰囲気は、全体的に白と水色が基調となっていて色合いが何だか落ち着く。天井では木製の扇風機がゆったりと回っていて、ごく一般的な喫茶店といった感じ。お客さんも少なくなくて、人気はある様子。

「…で？気分はどうよ？」

「あゝ、大分マシになったかな？」

そういえば、なんだか仄かにいい香りがする。心が落ち着くような、そんな香り。

それと、ここの雰囲気もいいおかげで、すっかり気分がよくなった。

「周りの空気にハーブの香りふつてあるからな」

「へ？そうなの？」

「そ」

あくだからね。どつりでどつかで嗅いだことのある香りだと思ったら…雰囲気よしでサービスよし。いいお店じゃないのここ。

「ところで龍二、さっきのいつもの奴って？」

「まあそのうちわかる」

まあそうだけど…。

「お待ちせしました」

「お、来たか」

噂もすれば何とやら、ね。結構早いじゃない。

そう感心するアタシと龍二の前に、龍二が注文した品が乗った皿が置かれた。

……。

「…ねえ龍二？」

「ん？」

「これ…何？」

「見りゃわかるだろ。そんなんもわかんねえのかお前は」

いや、だって…さ。

洋風な喫茶店にタイヤキってどうよ？

「何でタイヤキ？」

「カフェ・タイヤキだから」

あ、確かに…いやだから由来がわかんないって。店の雰囲気からしてケーキとかならわかるけどさ。

「やあ、こんにちは龍二くん」

「お、マスター」

なんか納得できないアタシと龍二の席ににこやかな笑顔で歩み寄ってきたのは、見た目がまだ若々しい男性だった。店員と同じ黒いエプロンをつけてる。

「お？ そっちの可愛らしい子は彼女？」

「か、彼女！？ 違いますよ！？」

「ああ、こいつは最近隣に引っ越してきた幼馴染で花鈴ってんだ」

…せめて照れて慌てるか否定の言葉投げかけなさいよ。マスターのセリフ無視するって…一人赤面して否定してむなししい…。

「あゝ、幼馴染ね」

「奢れって言われてな」

「そ、それよりちょっと聞きたいことが」

これ以上いろいろ言われてたまるかっていうわけで話題を変えるアタシ。

「ん？何だい？」

「えっと、ここってお店の雰囲気洋風なのに何で和風のタイヤキって名前が…」

「ああ、そのことね。よく初めて来たお客さんにも聞かれるよ」

やっぱりアタシは間違ってたな！

「実はね、ボクは昔から大のタイヤキ好きでね。けど実家が実は洋食レストランなんだ。それでお店は洋風でメニューは和風っていう喫茶店が作りたいうって思ってたこの店を始めたんだ」

「へえ〜」

なるほど、それなら納得できる。確かに奇抜なアイデアだし、お店も悪くないから人気出そう。

「そんでもって美味しいなタイヤキ。特にこしあんが甘い甘さを出してんな」

「ははは、煽ってたってオマケにはしないよ」

「チツ、狙ってたんだがな」

「お見通しって奴だよ、龍二くん」

すごい和やかな龍二とマスター。かなり通ってるんだろなあ…。

…なんとなくーく、羨ましい気がする。

「ま、とりあえず食ってみろ。味は保障すつぞ。口に合わんかったら知らん」

「おいおい、店長の前でそれはないだろ？」

「気ニシナーイ」

言葉に割に気分を害した様子もなく笑う店長の前で、龍二はこんがり狐色に焼きあがったタイヤキの頭を一口齧った。

その瞬間、龍二の顔が僅かに緩む。それはパツと見ではよくわからない変化だったけれど、目尻の辺りが下がったのがアタシには見えた。

だからアタシは、その龍二のその様子に少しだけ戸惑う。

「…あ？ 何見てんだ」

「べ、別に？」

気付いてたらじっと見つめていたらしくて、龍二が訝しげな目でアタシを見て慌てて目を逸らす。ちよつと顔が赤くなってるかもしれない…不意打ちとは卑怯な…！

とゆーわけで、恥ずかしさを紛らわすためにアタシも一口。龍二とは逆に尻尾からパクリと。

……。

！！

「おいし…」

香ばしい皮のサクサクとした食感と、中にぎっしり詰まったこしあんの控えめな甘さが丁度いい。しかもその二つが組み合わさって絶妙な味を醸し出してる…。

こりゃ確かにおいしいわ…。

「な、うまいだろ？」

「うん、おいしい…」

「いやいや、まだまだですよ。これからもっと精進していきます」

小さく笑う龍二と、朗らかに笑うマスター。アタシはさっき雰囲気とタイヤキが合わないって言っていたことを心の中で詫びた。

うん、マスターいい人だし、今度から通いつめちゃお。

「さて、と。満足したか？」

「うん、かなり」

値段も安かったし。いや奢ってもらった身で言うのもなんだけど。

「んで？ どうするよ。」

「あ…じゃ他にアンタがよく行く場所教えてよ」

「ん、お安い御用っ」と

のんびりした口調じゃなきゃ頼りがいのあるセリフなんだけどなあ…とゆーか、女性エスコートするのにめんどくさがるのって男としてどうなのよ？ まあそこら辺も龍二らしいっちゃ龍二らしいけど。って思ってたら…。

「あ、リュウジ…」

「龍二、花鈴！」

不意に声をかけられて振り返ると、久美ちゃんと…誰かわかんない女性が走り寄ってきた。

アタシ達と同じ黒髪だけど、蒼い目と顔立ちからして外国人？

「あ、久美ちゃん」

「こんなところで奇遇d【パツコーーーーーン】あいたああああ！！！？？」

いきなり久美ちゃんの頭を何かで殴った龍二。

って、へ？ 何で？

「いつつ…い、いきなり何をするんだ龍二！」

「黙らっしやいブルジョワ」

「ブルジョワ！？ ってか何それ骨！？ 何で骨！？」

「因みに豚骨」

手に持ってたのは大きな豚骨…うわ、痛そう。節があってまるで棍棒みたいになってるじゃない。

「久美…こないだの伝言…」

「あ、それ！？ でも何でいきなり殴られたのかわかんないんだけど！？」

「さあもう一発逝ってみよー！」

「何だかわからないがごめんなさい！」

骨を振りかぶった龍二に対してすかさず土下座する久美ちゃん。早
つ。2秒も経ってないし。

つーか今漢字がおかしくなかった？ “逝く”ってアンタ。

「…この人誰？」

と、蒼い目をした女の人があたしに顔を向けて龍二に問いかけた。
顔立ちからしてあたし達より年上に見えるけど………なんだろう、
このどこか守ってあげたくなるオーラ？

「お、リリアン初めてだっけ？こいつ俺の幼馴染の高橋花鈴」

「あ、えつと花鈴です。よろしく」

「…リリアン・ヴェルバー。アルスの仲間。よろしく」

あ、この人がアルスの言ってた仲間なんだ。なるほど、道理で顔立
ちが外国人寄りなのね。

「……………」

つてあれ？ 何で顔逸らすの？

「おい、どした？」

「具合でも悪いのか？」

あ、久美ちゃん復活した。コブ治ってないけど。

「……………し、初対面の人……………恥ずかしい」

って恥ずかしいんかい。

「あゝなるへそ」

「それは仕方ないな」

何が納得してるしアタシ以外!?

「つかお前って初対面の奴には警戒心丸出しにするんじゃないんかったか?」

「…龍二の知り合いなら…別に警戒する必要ない…」

へ? それどゆこと?

「なるほどな」

「…そこ納得するの!?!?」

久美ちゃんとアタシのハモリツッコミ! よっしゃあツッコミ増えたあ!

「あ、何ならこれから一緒に行動すつか?」

え?

「そうだな。あたし達も暇でここに来ただけだし」

ちよ…。

「賛成」

ま…。

「花鈴もそれでいいよな？」

「……………べ、別に、いいけど……………」

な、何提案してんのよ〜！ せつかく二人きり…じゃなくって、えつと、その、そ、そう！ ゆったり歩こうと思ってたのに、これじゃどうにもならないじゃないの！ 空気読みなさいよ！ このバカ！ 朴念仁！

「あ、今なんか無償に花鈴どつき回したくなった」

「すみません！！」

エスパーですかアンタは。心の中で悪態つくことすらままならないとか…。

「ヒューー！君達可愛いね〜」

「？」

ちよっとブルーな気持ちになったアタシの背後から、アタシ達とはまた別の声。振り返ってみれば、何か派手派手な三人の男の人がアタシに近寄ってきた。

うわ、またこの展開？ 引越す前でも嫌ってほど経験したっていうのに。

「なあなあ、俺達とさ、一緒に遊ばない？」

「こおんな貧弱そうな奴と一緒にいないでさ？」

「そうそう。俺らの方が何倍もいいし！」

ううわ〜チャライ上にナルシストこいつら？ 大して顔よくないクセに。っーか顔よくても行きたくないしこんな連中。

「…あいにくだが、あたし達はお前達みたいな奴らと一緒に行く気はない。」

「興味ない…」

「同感。さっさと消えて」

アタシと同じ考えだった久美ちゃんとリリアンさんに便乗して挑発する。そもそも龍二のこと貧弱そうとか言うバカについていく義理なんてこれっぽっちもないし。

「え〜？ つれないなあ。いいじゃん、一緒に行こうよ。」

「な？ 行こう行こう」

拒否してるのに、このバカ男どもは引きもせず一人がアタシの腕を掴み上げた。

「ちよ、離しなさいよこのっ！」

アタシは、腕を掴まれた反対側の腕を振り上げる。この町に来る前に、こういった連中を相手にするために通信教育で習った空手の技を繰り出そうとした。

【バシッ!】

「いつ!?!」

あ、その前に龍二が先に男の手叩き落とした。

「て、テメエ!」

「邪魔すんのか、ああ!?!」

叩かれた男が龍二に掴みかかった。

でも、

「うっせんだよカスども」

「「「!?!?!?!?!」」」

龍二が放つ暴言と殺気で、思わず固まる男三人。かくいうアタシ達も固まる。こっから顔見えないけど、多分凄い顔してる…と思う。

「必殺…」

『双龍弾』！！！！！！

【ズドゴオオオオオオオン！！！！】

「「「ぎゅぶえっ！！！！？」」」

…。

…えーと、いきなり技の名前叫んだと思ったら男三人がアスファルトにできたクレーターの中央で倒れ伏してたんですけど…で、龍二がいきなりグワシッと男三人を掴んでズーリズーリと路地裏まで引きずっていくんですけど…てか、何か引きずった後に血が…。

〈10分後〉

「ただいま」

「「「……………」」」

手を叩きながら爽やかな笑顔で路地裏から出てきた龍二。それを啞然としながら見るアタシ達女子三人。

で、顔にさつきまで付いてなかった赤い物は一体何ですか？

「り、龍二…一応聞くけど何してきたの一体？」

こ、恐いけど好奇心が勝ってしまっ…。

「あ？ “社会どころか裏社会でも生きていけないような事” してきただけだ」

「」「」……………」

あ、心なしかなんか風が冷たい…というかちょっと血の臭いする。

「さ、どうする？」どっかのクズどものせいで0.1秒さえももつたないくらいクソくだらないことで費やした分遊ぶ』か、家帰るか？」

「」「」家に帰ってまた別に日に遊びましょう」「」

うん、一言も間違えずにキレイに言葉揃えたねアタシ達。見事。

「ふうん、そうか。まあ無理に遊ぶこともないしな。」

ええ、凄まじく家帰って寝たいです。

「それじゃ……」

「またな龍二、花鈴」

「バイバイ」

「バイナラ」

結局、あのまま帰るという案が通って、帰り道の分かれ道で久美ちやんとリリアンさんと別れ、アタシ達は一緒に帰路につく。

「今日はタイヤキ美味かったな」

「え、ええそうね」

それ以外はホント最悪だったけど。結局街案内してもらえなかったし。

でも一緒にタイヤキ食べただけでも報酬かな？ うん、おいしかったし。別に龍二と一緒に食べれたからってわけじゃない。そうじゃないっいたらそうじゃない。うん。

「ふう。早く帰って三人にメシ作ってやらねえと」

「それ主婦が呟くようなセリフなんですけど？」

さつきまで修羅場繰り広げてた人物が呟くセリフとは到底思えない。

「まあな。俺主夫だし」

「あ、主夫ね」

“ふ”が違つ。

「どうする？ お前も一緒に食つ？」

「ん〜……………ありがたい申し出だけど、今日はいいわ。たまには一人で食べるのも悪くないし」

本当は羨ましいけれど、今日はアルス達と一緒にさせてあげるっていうのも一つだけどあえて言わないでおこ。

「そうか。まあまた来いよ」

「遠慮せずに行かせてもらうわよ」

「そうか、遠慮してくれたらお前に出す飯はしけたポテチにならなかったんだがな」

「すみません自重します」

あ、相変わらず容赦ないわねこいつ…。

あ、でも……………うん、今日はホントいろいろと疲れたけど…

その分、何かいろいろ充実した日だった。

「あ、ところであの不良三人組に何言っただか知りたいか？」

「勘弁してください」

最後まで綺麗に締めてよ。

第二十六の話 いい一日？（後書き）

作 今回は結構人気が出てきたリリアンを呼んでみました。

リ ……。

作 ?おいどした?

リ ……恥ずかしい。

作 あ…お前結構恥ずかしがり屋だっけ?

リ ……【コクン】

作 つーか寡黙なキャラって人気あるんだなあ。自分でもビックリ。

リ 私…そんな寡黙じゃない。

作 ……まあハッキリ言ってどんなだるな寡黙なキャラって。

リ ……とりあえず、応援ありがとう…頑張ります。

作 え、あ、先言われましたけど、これからも頑張ります!

リ ……頑張って。

作 いやお前らもな。

第二十七の話 まさかテレビで・・・!?(前書き)

うん・・・今回のネタ微妙かな？

第二十七の話 まさかテレビで・・・!?

（アルス視点）

「「いただきます。」」

「いただきます。」

今日はリュウジさんがどこかへブラブラしに行ってくるって言ったので、お昼はリュウジさんを除いたメンバーで食べることになりました。今日はリュウジさんがあらかじめ作っておいてくれたコロッケっていう食べ物です。

「ん〜 サクサク」

コロッケを頬張る魔王。物凄く幸せそうに食べてます。でもホントおいし。

「むぐむぐ・・・ところでリュウジはどこ行ったの?」

コロッケを抱えたままのフィフィが小首を傾げる。

「もぐもぐ・・・わかんないよ。適当にブラブラしてくる〜って言うって出て行っちゃったんだし。」

ホントあの人の行動原理がよくわからない・・・でも何事にも囚われない性格って言えば格好よく映るかな?悪く言えば自己中心的・・・かなあ?ちよつと違うか。

「「ちよつとちよつと」」

笑うしかないよね？

「・・・だ、大丈夫！何とかなる！」

「根拠は？」

「・・・ありません・・・（泣）。」

だよね・・・ハハハ。 苦笑

「・・・も、もうこうなったら誤魔化すしかない！」

高らかに宣言したけど何する気？

「えい！」

【ドオオオオオン！】

「「「「「「「「「「」」」」」」」」

あ・・・あららっ・・・。

「..!」

よし！じゃなあああい！

「何してんのおおおおお..!」

「大丈夫！言い訳すれば！」

言い訳って……

スイハンキ爆破させといて何言ってるんのおおおお！！！？？

「アンタ……これ絶対殺されるわよ。」

「大丈夫だってば！完璧な言い訳考えてるし。」

……大丈夫なのかなあ……。

「そんじゃ、暇だしテレビでも見ようつと」

すっかりこの生活に馴染んじゃったね魔王……ってホントにスイハンキの事ほつといていいのかなあ……。

【プツン】

魔王が居間に座りながらテレビのリモコンのボタンを押す。最初は物凄く不思議な箱だと思ってたけど、慣れたらいい暇つぶしになる物だと理解してもう驚かなくなった。

・・・順応力が大切です。こういう見慣れない生活するには。

↳テレビ画面↳

『パーピプーペポー！今日こそはこの町を火の海に変えてやるわ！』

ク（きゃー！いきなり悪役登場！）

フ（確かこれ“アニメ”っていう奴だっけ？）

ア（うん・・・とゆーより一番最初のセリフおかしい・・・。）

『まず手始めに・・・あの家からだ！』

【ゴオオオオオオオ！！】

『ナーツハツハツハ！燃えてしまえええええ！』

ク（むっ！悪い奴だ！）

フ（・・・何か魔王に言われる悪役って・・・。）

ア（不憫・・・。）

『た、助けてー！コッペパンマンー！』

ク（コッペ？）

フ（あれ？何か違和感感じるの何で？）

ア（・・・気にしたら負けだと思つよ？）

『よーし！今行くぞ！』

ク（わ！顔変に長い！・・・って顔パン！？）

フ（わ！空飛んでる！。斬新。）

ア（パンって喋るの？・・・あ、気にしたら負け負け。）

『！来たな！コッペパンマン！』

『サイキン細菌マン！今日という今日は許さないぞ！』

ク（サイキン？）

フ（何それ？）

ア（さあ・・・？）

『ぎゃはは、ほざいてろ！食らえ！ファイアー！...！』

【ゴオオオオオオ！】

『よつとー！』

ク（おお！速い！）

フ（ぬぬ！パンのくせに！）

ア（何対抗意識燃やしてんのさ？）

『おのれー！このー！このー！このー！』

【ゴオオオオオ！ゴオオオオオ！ゴオオオオオ！】

『えい！やー！とー！』

ク(あ、危ない!避けて!ああ!)
フ(当たれ!当たれ!避けるな!)
ア(何この両極端!?)

『くそお!何で当たらないんだ!』
『当たり前さ。悪は絶対に滅びるんだから!』

ク(うあ!かつこいい〜!)
フ(ふん!かつこつけちゃってさ!)
ア(だから何この両極端!?)

『くらえ!コッペパーーーーンチ!!!!』

【ズドーーーーン!!】

『なああああ!!サイサイキ~~~~ン.....』

【キラン】

ク(やった〜!コッペパンマン!)
フ(あーーーーもーーーーパンチ一つで情けない!)
ア(.....もうツツコミたくない。)

『また悪いことしたら同じ目に合わせるからね!』

ク(うんうん!) 頷く
フ(ふんだ!) そっぽ向く
ア(はあ.....) うなだれる

『なーっはっはっはっは！甘いぞコッペパンマンー！』
『！？な、何！？』

ク（え、ええ！？まだ動けたの！？）

フ（・・・っーかフラフラしながら戻ってきてんじゃん。）

ア（それと結構飛ばされたはずだよね？）

『ふふふ、今日の俺様は一味違うのだ！』

『どつゆっ意味だ！』

ク（ま、まさか巨大化！？）

フ（え、マジ！？）

ア（いや多分ありえない。）

『今日はなんと！俺様の部下を連れてきたのだ！』

ク（・・・なら何で部下を先に出さなかったの？）

フ（あんたボスなら倒すの最後でしょ？）

ア（計画性が無かったっていうことにしときましょっゆっ・・・。）

『さあ！いでよ我が最強の部下ー！』

ク（どんなん出てくんのかなあ？）

フ（どーせしょぼい奴でしょ？）

ア（決めつけてるし・・・。）

『超人間、アラツキー!!』
『へいへいっと。』

ア(・・・) (

ク・フ・ア((はああっ!?) ((

ク(え、うそ・・・リュウくん?)

フ(な、何でテレビなんかに出てんの?これアニメだし。)

ア(い、いや。もしかしたらただ単に似てる人ってことも・・・) (

『で?報酬わかってんな?』

『わ、わかってる。醤油ラーメン奢るから。』

『へっ、わかってんじゃん。』

ク・フ・ア((完っっつ壁リュウ(くん)ジ(さん)決定。 (((

『くっ!しょうがない、勝負『龍閃弾!!』!?!?』

【ズドガアアアアアン!!!】

『う、うわあああ!?!』

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!』

【ズドドドドドドドドドドドドドド!!!】 高速連打

『はあああああ! 双龍弾!!!』

【ズドバガアアアアアアアアアア!!!】

『ぎゃあああああ!!!?!』

ク(.....)

フ(.....)

ア(.....)

『おい、こんなもんでいいか?』

『あ、ああ.....よし。』

ク・フ・ア(あ、あまりのひどさに味方も啞然.....)

『じゃあそんなわけでラーメン奢れよ。』

『.....はい。』

ア(いつの間にか立場逆転!?)

『こつして、コッペパンマンは一人の最強の暴君によって倒され、

世界はラーメンで覆いつくされてしまいましたとさ。
たしめでたし。』 ナレーター

めで

〈完〉

〈番組終了〉

「・・・。」
「・・・。」
「・・・。」

・・・あ、呆れてボクラ三人揃って物も言えない・・・。

【ガチャン】

「おい、ただいま。」

「「「お、おかえりなさい・・・。」」」

そんなこんなでリュウジさんが帰ってきました・・・。

「ん？何だお前ら元気ねえぞ？」

「「「いえ何でもございません！」」」

・・・今回のことは黙ってよ・・・。

「ふん、そ・・・お？」

あ……。

「……………」

「……なあ。」

！

「炊飯器……どこいった？」

え、ええと……。

「つーか何か炊飯器あった場所が不自然に黒いんだが？これ焦げてるじゃねえの？」

う……やばいかも……。

「え、ええとねえ……。」

魔王……すっかり言い訳してよ……ボクら知らないよ……。

「……それアルス達がやりました!!」

「「うおい!!」」

罪着せられた!?

(だ、だって恐いんだもん!!!)

何か魔王から思念飛んできたしいいいい!?

「ほお……。」

ああああわわわわ・・・リュウジさんが何か怒ってる気配が・・・。

「・・・クルル？」

「へ？」

「犯人お前だろ。」

は？

「え、ええ！？で、でも」

「最初に他人のせいにする奴ってのは大抵犯人なんじゃああああああああい！！！！！！（怒）」

【ズドオオオオオオオオオオオオ！！！！】 火山噴火（のイメージ）

「ひ、ひええええええええええええ！！！！（泣）」

あ、悪魔の顔おおおお!!!

「お前しばらくの間朝・昼・晩スライスチーズのみ!!!反省しろ!!!」(怒)

「そ、そんなあああ!!!それじゃ生きていけねえですぜ旦那あああ!!!」

誰の真似それ!?

「当然の報いだろがあああああああああ!!!」(怒)
「ご、ゴメンなさあああああああ!!!」(泣)

こ、恐すぎるつてえええ。。。

「・・・アルス・・・私、しばらく眠れないかも。」
「うん・・・ボクも・・・。」

その晩、魔王はリュウジさんに延々とこっぴどく叱られました。

まあ、ボクらのせいになろうとした罰だよ魔王。せめてテレビの中のパン人間みたいにならなかつただけありがたく思おうよ。。。

だからそんな助けて光線出さないで・・・今回ばかりはもう無理ホント。。。

第二十七の話 まさかテレビで・・・!? (後書き)

このテレビネタを知ってる人は知っている

知らない人は覚えてね？

いや、どうやってって聞かれても知りませんが・・・。

第二十八の話 クルルのお使い（前書き）

今回はクルルにスポットを！

第二十八の話 クルルのお使い

（クルル視点）

「あ・・・やべえ。ナスビがねえな・・・クルル？」

「？なあにい？」

縁側で足をブラブラさせて鳥さん達を眺めてたら、リュウくんがキツチンで私を呼んだ。

「わりい、俺の代わりに八百屋でお使い頼まれてくんねえか？今手が離せねえんだ。」

「りよ〜かい！」

リュウくんの頼みだったら何でも聞きま〜す！

「あれ？そついえばアルスは？」

「風呂そつじ。」

そついや朝コップ割っちゃったからね〜。

「ファイファイ、迷子にならないよう付いてってやれ。」

「え〜私も〜？」

新聞を読んだファイファイがブーブー文句言う。ブーブーって何か可愛

「文句あんのか。」

「無いです、行きたいです。」

無表情でそんなこと言われると怖い」とこの上ないです……。

「あ、お釣りで何か食ってもいいから。」

「やったあ」

わーいお菓子お菓子

「ああ、それと……（中略）……わかったな？」

「はい！」

何言われたかは秘密

「じゃ気を付けてな。」

「はい行ってきまーす」

「行ってきまーす。」

リュウくんから買い物袋とメモとお金を手に、そして肩にフィフィを乗せながらいざ出発！

……。

えっと……どっち行くんだったけ？

「早速迷ってんの！？」

「う……。」

言い返せない……。

「あゝも……まず家出て右行きなさい。」

「あ、はいはい。」

「で、次の突き当たりを左ね。」

「はい。」

フィフィの誘導で歩く私……フィフィがいてよかった……。

「リュウジ……こうなることを予測してたとは……さすが。」

フィフィも何か言ってるし。

「あ、ストップ！」

【グイ！】

「いつ!?!」

思いつきり髪の毛引つ張られて思わず立ち止まった。

「ちよ、痛いよフィフィ。」

「あ、ありゃゴメン。強すぎた。」

も……、一体何……

【ブオオオオン！】

【ゴオオオオオオ！】

【プップー！】

「……………」

あ、ここオウダンホドウ（横断歩道）だったんだ・・・危ない危ない・・・。

「アンタだったら普通に渡ってたでしょ。」

「・・・い、いいえ？」

意地を張ってみた。

「嘘言わない！」

「・・・。」

怒られました・・・テヘ

（商店街）

「ふう。無事到着。」

途中で車に轢かれそうになったりしたけど、どうにか到着しました。いつ来てもここ賑やかだな。

「ヤオヤだったわね・・・あ、あそこね。」

フィフィ、見つけるの早い。

「お、いらつしゃい！って誰かと思えばいつかの嬢ちゃんじゃねえか！」 第十の話参照

「こんにちは！いつかの名も無きおじさん！」

「な、名も無き……………」

あれ？これが名前じゃないのかな？

「お、おじさん？…………傷つけたならごめんなさい。」

「いや、いいさ。嫁にも言われなれてるし…………第一龍二君の入れ知恵だろうし。」

「え、何で知ってるの？」

「やっぱね！」

うん、リュウくんいろんな人に違った印象与えてるな。

あ、そうだ。元気付けるなら…………。

「商売魂は？」

「へいらっしやいらっしやい！今日は何にするんでい！？」

うん、元気になった。えっと、メモによれば…………。

「え〜とね…………ナスビ！」

「あいよ！」

「レンコン！」

「あいよ！」

「ダイコン！」

「あいよ！」

「ファミコン！」

「あいよ！」

「…………え、ファミコン？」

後から聞いたならリュウウくんのイタズラでした。

とゆーよりフマミコンって何？

「毎度あり！また来いよ！」

「ありがとうー！」

おまけにダイコンもらっちゃった

「にしてもリュウウジ・・・しょーもないこと考えるわね。」

「お茶目よね」

「そう言ったらいい方に捉えられるのは何で？」

だってリュウウくんだもん

あ、そっだお菓子！

「何買っの？」

フフーン、当然・・・！

「ありがとうございます。」

「どいたまして。」

ふっふっん

「はぁ・・・なるほどね。チョコレートですか。」

「うん」

こないだオヤツの時に食べた時から忘れられない

「それ、家で食べなさいよ？また怒られるから。」

「はい。」

ううん、リュウくんと同じこと言うな、フィフィは。お母さんみたい。

・・・。

「ダメよフィフィ！リュウくんの奥さんは私よ！！」

「何いきなりキレてんの!？」

は！私としたことが・・・うん、落ち着こう。

「ま、まあとにかく帰ろつか。」

「わ、わかつてるけど・・・何でキレた？」

「気ニシナイ！」

「リュウジの真似すんな！」

だってあれ好きなんだもーん。

「・・・あのねクルル。言いくいんだけど・・・。」

「?何？」

「・・・早く帰ったほうがいいよ。」

「へ?何で？」

「・・・周り。」

「?」

周り?・・・。。。

「特に何も無いけど？」

「もー鈍いなあ！いろんな男の人がアンタ見てんのよ！」

「そうなの？」

「そう！早く帰らないと何言われるか・・・。」

「ねえ、お嬢ちゃん一人？」

「「・・・。」」

ありゃりゃ・・・何か派手な人に話かけられちゃった。

「なあに？」

(ば、バカ！返事しちゃダメでしょ！)

だって話かけられたら・・・ねえ？答えるのが普通でしょ？

あ、フィフィは姿見られたらまずいから髪の毛の中に隠れてます。

「僕ね、君のお母さんの知り合いなんだけど。」

・・・。

「それでね、お母さんが今病気なんだって。だから今から病院に」
えい！」「ぐほっ！」

えっと・・・思い切り急所を蹴り上げました。

「ぬうお~~~~」

あ、悶絶してる・・・そういえばリュウくん言ってたな・・・。

『いいかクルル？知らない奴とか怪しい奴に声かけられたら急所を蹴り上げて・・・。』

「っすりゃー！」

「ぐへー!？」

『姿勢を低くした隙について顔面に膝蹴り食らわして・・・。』

「ていりゃあああ!!--」

「ぎゃびiiiiiiii!--!--」

『で、仰向けに倒れたら“男の勲章”踏め。』

・・・よしオツケー

「く・・・クルル・・・?」

「え、何?」

「アンタ・・・何気にひどいね。」

「え、だってリュウくんがそうしるって。」

「やっぱあいつの入れ知恵かい!」

何が恐かったのかな?」

それと周りから何か変な（畏怖）目線送られてる気がするんだけど・・・気のせい?」

く帰宅く

「ただいま〜！」

「おかえり〜。お疲れ様。」

買い物袋をリュウくんに渡して、今日の私の仕事終わり！

「あ、聞いて聞いて聞いてリュウくん！今日ね、リュウくんの言う通りに変な人倒したの！」

「おお、ナイスファイトだクルル。」

「とんでもないこと教えてんじゃないわよ……。」

何かフィフィ呆れてるけど何でかな？

「で？お釣りで何買った？」

「板チョコ買った！」

「ほお、いい仕事してるねえ。」

「それどっかで聞いたことある気がするのはどうして？」

フィフィが疑問符浮かべてる間に居間へ行く。

あ、アルステールに突っ伏してる。お風呂そうじ終わったんだ。

「ふや〜……疲れましたあ……。」

お疲れ〜……あ、そうだ。

【パキン】

「じゃこれ少しあげる。疲れたんでしょ？」

「はえ？」

アルスにチヨコの欠片を渡す。確かリュウくん曰く疲れた時は甘いのがいいって。

「あ……ありがとう……。」

おずおずと受け取るアルス。うん、いいことした。

「あ、リュウくんにもあげる。あ〜んして」

居間に来たリュウくんのお口に向けてチヨコを差し出した。

「お、サンキュ。」

【パクリ】

「あ……。」

ち、ちよっと口が……手に……。

「どした。」

「な、何でもな〜い……。きゅ。」

やった〜 偶然でもうれし〜!

あ．．．アルスに睨まれちゃった．．．。

．．．。

まいつか

第二十八の話　クルルのお使い（後書き）

作　いやぁ今回はいろいろやばいね。

ク　そう？

作　つか急所はやばいって・・・龍二も何教えてんだか。

ク　でも効果あったからいいじゃん

作　・・・現代社会もこんな子供が溢れてんのかなぁ・・・。

ク　へ？

作　何でもありません。

第二十九の話 元気なガキ軍

（龍二視点）

只今、俺は近くの公園にいる。ここ結構広くて、よく子供とかが遊びに来る。ついでにお年寄りの皆さんもよくゲートボールとかしてるな。

そしてここは、俺のお気に入りのベストスポットでもある。

あゝにしてもいい天気だ。公園でのんびり日向ぼっこ、そしてお気に入りのベンチ、さらにはラーメン……。

最高のシチュエーションじゃねえか。

今度アルス達誘って遊びに来るかな。

あゝやべ、ラーメン食ってねみくなってきたによ……。

「リュウお兄ちゃん！」

ん？……あ、美紀の声か。

はいまたまた説明。駆け寄ってきたのは香苗んとこの双子の姉妹の美紀と美香。小学校三年生。明るいのが美紀で、大人しいのが美香。うゝん例えるなら美紀はクルルを小さくした感じ、美香はリリアン

をちっこくした感じつつたたらわかるか？ま、二人揃って香苗そつくりなわけよ。登場した話は第七の話と第八、第九の話に少々。俺は誰に何を説明してるんだ。あ、読者か。 自問自答

「ん〜、久しぶりだなお前ら。」

軽く手を振る。すまない、今は眠気が強い。

「む〜！半分寝かけた状態で挨拶するのは失礼じゃないの〜？」

「……【コクリ】。」

む〜……眠い。

「あ〜……そういや保護者はどした。香苗とか。今の世の中危ないじゃん。」

つつても連れ去ろうとした奴はあの世でもこの世でも後悔させてやるがな。

「うっん、今日は生徒会で何かあるらしくて来れないって。」

「……代わりにカルマとケルマ……。」

あ、あいつらか双子の兄弟。香苗んとこで預かってたな。

「で？どこにいるよそいつら。」

「あそこ。」

え〜と……

「……楽しそうだな。」

「でしょ？」

「【コクリ】」

何十人の子供に追いかけてらんだあの双子。

「で？何で追いかけてらんだ？」

「鬼ごっこする？って私が提案したら……。」

「……皆でロウ兄弟を捕まえようって。」

あ、納得。

「少し観察してるか。」

「助けないの？」

「……？」

うん、美香よ。小首を傾げたところで何聞きたいのかわからんぞ。

俺はわかるけどよ。

「俺が見てて楽しいよつなことをあえて止めると思っつか？」

「「ううん。」」

「だろ？」

よく鬼畜だとかさだとか言われるが、俺は褒め言葉として受け取っている。

「じゃ傍観しとくか。」

ベンチの背もたれにもたれながらのんびりと観察しとくことにした。
両脇に美紀と美香も座り込み、一緒に傍観。

（観察中）

いやあ見た目熱いですねえ、小さな子供達（以下ガキ軍）vs 少年上の双子の兄弟（以下ロウ兄弟）。鬼ごっこでしようか、ロウ兄弟めちやくちや慌ててます。鬼気迫る勢いで走ってます。まさに鬼ごっこ。つーか鬼ごっこって一人の鬼が他の奴ら追う遊びなのに大多数が鬼で二人が逃げる側っていつからルールが変わったんだ。

おおっと？ロウ兄弟が速度を上げた。速い、速いです。でもガキ軍も速いです。見た目デブからガリ勉タイプの子供があんな速さを生み出すとは。子供というのは素晴らしいです。

お？次はブランコへと向かっていきます。何をするのか、っと何とロウ兄弟が同時に二つのブランコを勢い良く押し出した！これは危ない！ガキ軍がケガしたらどうするっという心配はご無用。ガキ軍数名はブランコをヒョイと避けたり飛んできたのを飛び越えたりして誰にもダメージを与えられなかった。

どうするロウ兄弟っとおっとお？今度はシーソーです、シーソーへと向かいます。しかしロウ兄弟はシーソーが何なのかよくわからなかった様子、無視して通り過ぎた。おっと？ガキ軍の中で一番軽そうなのがシーソーの手前側に座った。そして次が一番重そうなのがそれとは向かい側の浮いてるシーソーの上へと・・・勢い良く飛び乗ったあ！衝撃で最初に座ってた子がこれまた勢い良く吹っ飛んでいく〜！！そしてロウ兄弟のちょうど前へと着地！二人に立ちはだかる！あぁと、見事に着地したのはよかったがあまりのことで驚いたロウ兄弟は止まらずその子に体当たり、吹っ飛ぶくらい軽い子供はそのまま砂場へと飛んでいってしまったー！

まさに飛んだハブニングだったが、すぐに逃げ出すロウ兄弟。ガキ軍は、戦友の亡骸を泣く泣く踏み越えてそれを追う。いや死んでねーけど。

お次は・・・ジャングルジム！ロウ兄弟は地面を軽く蹴ってジャングルジムの上へと飛び乗った！ジャングルジムへガキ軍が登ってる間に飛び降りて少しでも距離を稼ぐという魂胆なのでしょう。しかしこのジャングルジムは普通のと違って結構高い！ガキ軍が登るのに時間がかかりそうだっっておおっと！ガキ軍が走りながら重そうな奴が肩車、それに登ってさらに肩車、また肩車と、どんどん合体していく！そして何とちよūdジャングルジムの高さまで到達！そのまま突進していく！まさかの合体技に驚きつつもジャングルジムから飛び降りるロウ兄弟！危機一髪、ジャングルジムへと合体突進攻撃が炸裂したあ！すかさず合体を解き追いかけるガキ軍。因みに合体解くのに三秒もかかってねえ。

他に何か役に立つ物はないか探すロウ兄弟。滑り台は左右から挟まれる恐れがあると考えたため却下、登り棒でもアウト。

もはや役立ちそうな遊具はない、逃げるしかないと悟ったのか駆け出すロウ兄弟。

しかし、この戦いは呆気なく終止符を迎える。

地面からバツと飛び出したガキ軍精鋭部隊。土と同じ色のシートを被っていたため見た目での判断がつきにくい。焦っていたロウ兄弟は、その気配を感じられずにいた。つーか忍者かって話だ。

そしてロウ兄弟は精鋭部隊に取り押さえられ、追いついたガキ軍がロウ兄弟に次々と覆い被さっていった。

その時のロウ兄弟の顔が世界の終わりを悟ったかのような表情をしていた。

〈観察終了〉

「うっわ……。」
「……。」

いやあ呆気に取られるね。いや取ってねえけど俺。でも姉妹啞然としてるし。

あ、何か悲鳴聞こえる。そろそろ助けてやっか。

ベンチから腰を上げ、群がるガキ軍へと歩み寄って行く俺。その後をトコトコついてくる姉妹。

「おっす。」

とりあえず軽く手を上げて挨拶。

「あ、龍二兄ちゃん！」

「龍二さん！」

「兄貴！」

「師匠！」

多種多様な呼び名で呼ばれながら今度は俺の周りに群がってくるガキ軍。うん、子供好きな俺にとって悪い気はしねえ。

「あゝわりいけどちっとどいてくれよ?」

素直にどくガキ軍。

で、見事にボロボロのロウ兄弟。

「おゝい、二人とも?」

「.....」

「.....」

「おゝい?」

「.....」

「.....」

返事はない、ただの屍のようだ。

「「死んでません!」」

【ガバツ!】

あ、復活した。顔ラクガキされてるし。

「ぶはは、変な顔だ。」

「「言わないでください!」」

いや、言う。

「あゝお疲れ様つと。子供達の相手は疲れたる？」

ポンと笑顔で二人の肩を叩く俺。対してガクリとうなだれたロウ兄弟。

「し、死にかけた・・・。」

「に、人間はここまで進化するのかと実感しました・・・。」

うゝん、いい体験(?)をしたようだ。

「まあよかったじゃん。楽しければ。」

「だから死にかけたつてば。」

ハモりん。

「龍二兄ちゃん！」

「ねゝ龍二さん遊ぼう！」

「また特訓してよ兄貴〜！」

「師匠！お願いします！」

あゝあゝもゝ服を掴まないの。

「わあつたわあつた。またさつきみたいなの教えてやる。」

「アインタの仕業だったんかい!!」「」

いやダブルでツッコまれましてもねゝ? あんくらいやんちゃじゃないとおもしろくないだろ?

「じゃ鬼ごっこするぞ〜。」

『は〜い!〜!』

「「も、もういやだあああああ!〜!」

もちろん、ロウ兄弟の悲痛な叫びは無視。

第二十九の話 元気なガキ軍（後書き）

作 はい第二十九の話更新！

カルマ&ケルマ ポクらこれだけですか！？

作 イエス

カ&ケ おい！

作 そいじゃね〜。

第三十の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（前編）（前書き）

こゝ、今回の話はマジメにいろいろやばいです・・・。

第三十の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（前編）

（雅視点）

あゝ、今日はいい天気だ……。

？何故だ？俺が言った筈ではないのにもう一度言った気分になったのは？

まあいいか。今日は姉さんがステイル連れて買い物へ行ったし、龍二の家へ行くか。

そんなわけで、今俺は道を歩いているんだけど……。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ。」

「ひい、ひい、ひい、ひい、ひい。」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ。」

うん、まさにそんな感じの荒い息を吐きながら、花鈴とアルスとクルルが必死になって走ってきた。何なんだ一体？

「おい。」

「あ、ま、雅！？」

花鈴はここに来てまだ浅くて女子には“ちゃん”を付けるが、男子に対しては呼び捨てだ。

「はあはあはあ……。」

「ひいひいひいひい……。」

「ぜえぜえぜえぜえ……。」

「ふうふうふうふう……。」

と、とにかく逃げ切れたか？

「……うん、なんとか撒いた……かな？」

ファイファイがフワフワと飛びながら状況報告。現在地は町のとある薄暗い路地裏。ここなら目立たないし、格好の隠れ場所になる。

「と、とりあえず助かった……。」

クルルが襟をパタパタさせながら言った。いや、そのさ、そんな大きくパタパタさせられたら……って今は切羽詰った状況だから仕方ないな。

「い、今までで一番危なかった……。」

アルス、今までって今まで何されてきた。

「こ、こわ……。」

花鈴があまりの恐怖にガクガクブルブル震えている。

「……それより理由を聞かせてもらおうか。何でこうなった。」

まず最初に思うことはこれだろう。普段のあいつはあそこまでキレない。とは言ってもあれを見たのは最初じゃないが、それこそ一回

こっつきり、それも中学の頃に、だ。よほどの理由が無い限りありえない。

「え、えっと……ね？」

「聞くな。」

こっちは命かかっているんだ。

「あ……あれは……。」

〈花鈴の回想〉

『おう、花鈴じゃねえか。』

『やつほー龍二。』

あれはお昼が終わって一時間経ってからだった。龍二が散歩に行っていて留守の間に遊びに来たアタシをアルス達が入れてくれたんで家の中で待ってたんだよね。

『何しにきた？』

『ん？遊びに……。』

まあここまではいつもと変わらないよね？

でもね、問題はその後……。

『さて・・・と。ラーメン食うか。』

『あ、龍二？』

『あ？』

【パカ】

返事をしながらキッチンにある普段乾物とかの食べ物も置いてある扉を開けた龍二なんだけど・・・。

『・・・・・・・・おい。』

『？』

『ラーメン・・・どこいったか知らないか？』

『あああれ？アタシ“達”が食べちゃった。』

『ご、ごめんなさいリュウジさん。』

うん、アルスはペコリと謝ったよ？

『しめん・・・だと？』

『へ？』

『・・・しめん・・・とな？』

『あ、あの、龍二？』

くはい回想終了く

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

し、しよーもね〜理由・・・まずそう思った。

「ま、まさかあそこまでキレるとは・・・ね？」

「た、確かにボクらに責任はありますけど・・・。」

「でもリユウくんがあそこまで怒るなんて・・・。」

「何でだろ〜ね〜？」

「・・・・・・・・。」

ん？まさか・・・。

「花鈴？」

「何？」

「あのよ、そのラーメンの名前覚えてるか？」

「え？え〜つと確か・・・・・・・・・・あ！喜多方ラーメンだったわね。」

「・・・パッケージの色は？」

「えつと確か黄色と赤だったわ。」

「何人前？」

「え〜つと、アタシとアルスとクルルで三人前。」

「ファイファイはボクのを少し食べてたから。」

「・・・・・・・・。」

「？それがどうしたのよ？」

やっぱな・・・謎は全て解けた。

「・・・まあ言わなかった龍二も龍二だが、勝手に食ったお前らも悪い。」

「な！？たかがラーメンでしょ！？」

「ラーメン好きの人にとっては宣戦布告とも言える発言だな。」

かくいう俺もラーメン好きだけど。

「あんな、それ食べ物入れのどこにあった？」

「え？奥だけど？」

「・・・确实だな。」

「」「」「へ？」「」「」

「それな、限定品でそうそう簡単には手に入らない超貴重なラーメンだったんだよ。おそらくお昼に皆で食おうとしたのを、お前らが全部勝手に食べてしまったからあいつはキレたんだ。今まで食うのを我慢するために封印的な意味で奥に隠していたんだろっな。」

ポンと花鈴の肩を叩く。

「……謝罪しろ。そして潔く死」

「無理！無理です！！ホント無理！！！」

腕にしがみついてブンブン首を振る。いや痛い痛い痛いって力強い
つて。

「ちょ、お願いだからホント助けて雅！あいつの親友でしょ！？」

「な、何で俺が……。」

「お願いです雅さん！ボクらだけじゃどうにも……！」

「リュウくん止め方教えてよ！」

「お願い！」

う……！そ、そんなキラキラ光線飛ばされると……
クツ、四人とも美形だから余計に……！！

「わ、わかった……手伝う。」

「……やったあ！！」「」「」

そこまで言われるのか……？

「で……どうやって止めるの？」

え……と確か……。

「……前は……俺が……いや何でもない。」

「」「」「？」

この話はよそう。

「前は自然に止まった。場所は教室の中で被害は少なかつたし、狙った連中は全滅したからな。」

「……で?」「……」

「今回も恐らく同じだろう。全ターゲットを殲滅しない限り、あいつは止まらない。」

「……えつと全ターゲットってというのは……。」

「……お前らだろうな……多分一緒に逃げ出した俺もその内の一人に入ってるだろう。」

今思うとあいつ猛獣か。いやそれ以上だな今のあいつは。

「じゃあ……助かる見込みは……。」

「いや、一つだけある。」

「……?」「……」

多分……試したことはないが……。

「あいつのキレた原因はラーメンだ。ならラーメンをやれば落ち着くはず。」

「まさか……あの限定ラーメン?」

「そうだ……でもあれは抽選でしか得られない貴重品だし……俺も応募したがダメだったし……。」

「……?」「……?」「……?」「……?」

打つ手ないじゃん。

「・・・役立たず。」

グハツ！か、花鈴、その一言はキツイ・・・。

「と・・・とにかく何とかしてリュウジさんを止めないと・・・。」

あ・・・そうだった。

「確かに止めないと。今のあいつの行動範囲は教室どころか町全体が範囲だから・・・。」

「え、それって・・・。」

「ああ・・・被害が拡大する。」

これ聞くだけだとかっこいいけど、原因と暴れてる奴を考えると迷惑極まりない話だな。

「でもボクらだけで？」

「何とかするしかない。」

クソ！こうなったらヤケクソだ。

「で？まずどうする？」

「とりあえずここから出よう。「こじじゃ何もできない。」

「うん、臭うし。」

それは否定しない。

いや冗談抜きで！

「大丈夫！私魔王だもん！」

少し振り返って微笑を浮かべつつ、右手を何も無い空間へと突き出す。

【ブウン】

すると手の先から黒い穴が出現し、そこから真っ黒な剣を引き抜く。それを構え、龍二を見据えた。

「行くよ！『ナイトメア』！！！」

剣の名前なのか、叫ぶと同時に大きく振りかぶる。

「えい！」

【ブオン！】

剣を振ると、切っ先から黒い球弾が勢いよく飛び出し、龍二へと向かっていく。

『ふん！』

【ガイン！バゴオン！】

しかし腕を振ってそれを弾く。玉は横の塀にぶつかると、塀はただの石ころとなった。つまり崩れた。

「まだまだあ！！ていやあああ！！！！！」

【ブオン！ブオン！ブオン！】

次々と黒い玉を射出していくクルル。さすがにあの数は……。

『はんっ！龍閃弾！』

【ドゴオオオオン！！】

……い、一発で全部かき消しやがった……。

「むっ！なら……『氷よ、凍てつけ！』」

【ビキビキビキビキ……】

魔法らしき呪文を唱えると、龍二の足元が徐々に凍っていく。

『炎よ、飛べ！』

【ドオオオオン！】

続いて火球がクルルの掌から飛び出す。直撃を受け、爆発する龍二。

『闇よ、集え！』

続いて剣を掲げると、黒い雲みたいなのが剣に集まっていき、やがて身の丈程の大きさがある漆黒の鎌となった。

「す、すごい……三度連続詠唱……。」

「さすがね。」

何かよくわからないが、アルスとフィフィが感心してるなら確かにすごいんだろうな。

「……リュウくんのおかげで魔力は満タンなんだけど……。」

……やっぱ傷つけるのは怖いか……。

「……ごめん、リュウくん！後で治してあげるから！」

悲痛な表情で鎌を振りかぶり、龍二がいるであろう煙が立ち込める場所目掛けて駆け出すクルル。

そして鎌を勢いよく振り下ろす……。

【ガキン！】

「「「「「！！！！？？？？」」」」」

な!?

『ククク……。』

煙が晴れると、そこには掌で鎌の刃を受け止めている龍二が……
し、しかも無傷!?

『……防御技、龍鉄風。』

何か新技っぽいこと呟いてるし!?

『………。DIE。』

訳 【くたばりやがれコンチクショウ】

『龍閃弾脚!!!!』

【バコオオオオオオン!!!!】

「みぎゃあああああああああ!!!!」
「く、クルル〜!!!!」

何か青く光った回し蹴りをモロにくらったクルルはこっち目掛けて
吹っ飛んできた。

つてっおあ!?! 衝撃波がこっちにまで!?!

【ボスッ!】

「ぐは!」

「みぎゅ!」

お、思いっきりクルルが俺の腹にストライク……。

つて俺まで吹き飛ばされそう!?

「くくふんぬう!」「くく」

【ズザアアアアア!!!】

はあ、はあ……三人（アルスとフィフィと花鈴）が後ろから抑えてくれて助かった。

「だ、大丈夫!?!」

「みゅ……」

ああ、こりゃダメだ……目え回してる。

『……【ニヤリ】。』

ゾクッ……!!!

「く、くそ!逃げるぞ!」

『逃がしまへんえ』

再び逃走を開始した俺達に、何故か京都弁を呟きながら追いかける龍二。やばい、気分はターネーターかクロツタワーの逃げる側だ。

そりゃもちろん・・・。

「止めるに決まってるだろ！」

この悪夢をな！！

。・・・自分で言ってるけど、ホント迷惑極まりないなこの話・・・

第三十の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（前編）（後書き）

ここまでで龍二の技紹介

・龍閃弾 拳に氣を集め、相手に向けてパンチを繰り出す技。最大威力は鉄板五枚重ねを軽々と打ち抜く。

・双龍弾 両手に氣を集め、押し出す感じで相手の腹目掛けて叩き込む技。その威力は龍閃弾の二倍。

・龍鉄風 大気中の氣を周りに集め、鋼鉄よりも硬い防御壁で自らをコーティングする防御技。ミサイルなんかも弾き返す。

・龍閃弾脚 氣を足に集めて回し蹴りを放つ。威力はもちろん、同時に飛ばす衝撃波も鉄筋の家一つを軽々と消し飛ばす。

自分で書いててなんだけど、龍二が一番ファンタジーなんじゃないかなるか・・・後ついでに今回の話、自分が一番恐がってたり・・・。

この超迷惑な戦いに終わりは来るのか！？次回、衝撃の展開が！？言ってみた！

第三十一の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（後編）（前書き）

後編です！

第三十一の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（後編）

（雅視点）

とにかく俺達は、近くのグラウンドへと来ていた。十分な広さのあるここなら、被害も少ないだろう。

代わりに俺らの被害が多くなりそうだけだな・・・（泣）

「ど・・・どうすんの・・・？」

「どうするもこうするもねえよ・・・。」

ハッキリ言っただけ状況は絶望的。アイツの数々の功績を考えればさらにテンションが下がる。

その中でも代表的事件を上げるとすれば・・・

軽くて全国暴走族グループ完全壊滅・・・

国会で消費税下げよう交渉（完璧脅迫）ついでに自衛隊&SAT相手に大立ち回り・・・

ある国の内部紛争一人で武力解決（一部脅迫有り）・・・

・・・。

得に最後のなんてやばくねえか？嘘みたいな話だけどマジだし・・・。

まあとにかく・・・アイツみたいな力なんて少なくとも俺と花鈴にはない。

クルルも戦える状況じゃない。

となると・・・。

「アルス、悪い。俺達じゃ・・・。」

「わかってます・・・今度はボクが。」

「私もやるよ！はいアルス！」

「うん！」

フィィイがどこからか剣を取り出し、それをアルスに渡す。この際だからツツコミはなしだ。

・・・にしても・・・嫌に静かだな・・・追ってきてないのか？

【ドオオオオオオオオオオン！！！！】

「「「「！！！！？？」」「」」」

じ、地面が・・・！！？

『フハハハハハハハハハハ！！！！』

砂煙から龍二が高笑いしながら登場……………お前どこのラスボスだ。

「くっ……………行くよファイファイ！！」

「あいさー！」

剣を構えて駆け出すアルス。それを追うファイファイ。俺達はクルルを診ながら傍観する。

「えいやああ！！」

剣を大きく振りかぶるアルス。繰り出された袈裟切りをちよつと体をずらしてかわす龍二。今度はすばやい逆袈裟切り。それも普通にヒラリとかわす。

さらに軌道を変えたりして延々と連続切りを続けていくが、どれも掠りもしない。しかもあいつの体は今『龍鉄風』とかいう防御技で鋼で出来てるから普通に刃を受け流したりもしている。生身だったら普通に切れてるな。

「くのー！」

体を回転させて剣で薙ぎ払う。しかしそれもヒョイと体を屈めてかわす。

【ビシッ！】

「くはっ！？」

隙について繰り出された攻撃をモロにくらったアルスはそのまま吹

っ飛ぶ。

【ズザザザッ！】

何とか持ち堪えて転倒には至らなかったが……。

「く……強い……。」

……まあ普通強い攻撃くらうだけでもそう思うわな……でもさ、
考えてみるよ。

パンチでもキックでもなく、普通の片手だけのデコピンで吹き飛ばす奴が他にいるか？

「……鍛えててよかった……。」

さすが勇者だつていうのは伊達じゃないらしく、額が赤く腫れる程度だった。でもあれ常人が食らったら普通に脳味噌飛び出してたろうな。いや想像はするな。

『くはははは。』

かなり連続切りが続いたつていうのに、一切息切れしていない龍二。

もう俺こいつのこと人間として見れないかもしれない……。

『炎よ、渦巻け!!!』

【ボオオオオオオオオン!!!】

「!?!?」

いきなり上空から声が聞こえたかと思うと、急に龍二の周りを炎の渦が巻き始めた。渦は空高くまで昇り、完全に龍二を見えなくしてしまった。

「どっしょー!」

上空からファイファイがピュ〜と俺らのところへと飛んでくる。あれはお前の仕業かい。

「おい……あれは……。」

「大丈夫大丈夫!死なない程度の火力だから!」

いや、死なない程度ならこっちまでものっそい熱い熱風くるとは思わないんだけど……。

「まあこれでせいぜい十分は持つ『渴ツツツ!!!!!!』!」

【ドオオオオオオオオオン!!!!!!】

「」

炎の渦が……気合で弾けとんだ……。

「やっぱ・・・リュウジ相手だとそうするしかないよね・・・。」
ホント何する気だ？

『キシヤアアアア！！！』

あいつもう自我ないのかああああ！？

「二人とも！お願いだからアルス守つといて！」

そう言いながら上空へと飛んでいくフィフィ。

いや、つーか守れって・・・どうすんだよ。

『水よ、降り注げ！！』

【ドバアアアアアアアア！！】

突然雨雲が発生し、ものすごい雨が俺らに降りかかる。もう超土砂降りだ。

『水よ、かの者を刻め！！』

フィフィの音が響くと、周りの水が鎌のような形となり、龍二に襲い掛かる。

『・・・・・・・・』

避けようともせず、受けようともせずにそれを黙って見る龍二。

クルルが花鈴に支えられた状態で呟く。

「大丈夫なのか？」

「うん、どうにか。」

まだ体力は万全じゃないらしく、一人じゃ立てないらしい。

「で、龍二は？」

「煙でよく見えないけど……。」

雨が止んで、呪文を唱える前の天気に戻ったが、雷で煙が立ち込めている。つーかマジメに大丈夫か？

『クククククク……』

……うん、大丈夫のようだ。

つーか傷一つ入ってないね。あの『龍鉄風』ってどんだけの防御力があるんだ？周りの地面なんて真っ黒焦げに対して全然焦げてもないよなあいつ。

「うわぁ……全然応えてない……。」

さすがにフィフィも驚き通り越して冷静に呟く。

「……よし！」

「アルス？」

いきなり声を上げたアルスに驚く俺。いや後ろにいるから驚かないのが無理な話だ。

「皆さん……ボクから離れてください。」

「？何を……。」

「ほら離れた離れた！」

ファイイが俺らを念力のような力でアルスから遠ざける。お前警備員か何か？

「さつきまではあくまで時間稼ぎ。本命はこっちなんだから。」

？本命？

『我が聖剣ライトプリンガーに宿りし神々の力よ。今その力を解き放ち、邪なる者を討つための聖なる加護の力を我に与え給え……』

は？

『リステイル・オム！！！！』

【ゴオオオオオオオオオ！！】

「うお！？」

「きゃあ！」

だってよ、あんなだけの攻撃をよ……

人指し指と中指の間だけで悠々と受け止めてる奴を見たら驚かない
わけないだろう!?

「……わめー!?!」

【グウン！】

驚きを隠せず、呆然とするアルス。その隙をついて、指だけで光剣を持ち上げる龍一。同時にアルスも剣から手を放せず宙に浮く。

『はあああああああああ！！！！！！！』

【ドゴオオオオオオン！！！！】

「かはっ！」

思い切り振り下ろされ、地面に叩きつけられるアルス。おまけに剣も元の大きさへと戻った。

「アルス！！！」

地面に穴が開くほど叩きつけられて気絶してしまったアルスへと駆け寄る俺達。

「う、うう……。」

呻いているのを見て安心したが……

『はあああああ……』

何か……気合を溜めるような声を出して仁王立ちになる龍一。

俺の直感がこう告げる。何かやばい。

『一の奥義……』

“奥義”って単語に何だかすごい危機感を覚えるんだけど……。

「ま、雅……どうしよう……。」

言うのがやっとの状態の花鈴。アルスは気絶していて戦えないし、クルルも体がボロボロ、フィフィの魔法だけじゃ何にもならない……。

おいおいおいおい……万事休すじゃねえか。

『……龍天殺りゅうてんざつ!!!!!!!!!!!!』

今までで一番でかい声が響き、両の拳から赤い光が漏れてきている。

あ、やばい……死ぬ……ごめん姉さん、ステイル。今日の晩飯頑張って二人で作ってくれ。

俺は確実な死に備えて目を閉じた。

【ヒュー・・・】

その時・・・

【パサリ】

俺達に神風(?)が吹いた

『・・・・・・・・・・。』

いつまで経ってもこない攻撃を不審に思って恐る恐る目を開けると・
・

顔面に紙が張り付いた状態の龍二がそこにいた・・・。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

何なんだ一体？

【バサッ！】

いきなり紙を掴んで取った後、俺達に向かってズンズンと歩いてきた。

物凄い形相で。

く、口を開こうにも開けねえ…………。

【バッ！】

そして俺らの眼前に勢い良く突き出される紙。

そこには……。

『皆様に愛されて二十周年記念大サービス！夕顔ラーメンにて今日一日限り食べ放題！是非起こしてください！！』

と書かれていた……。

これはあれか……？まさかと思うが……。

『……おい【ニヤリ】。』

「「……す……す……」

やっと出た言葉が……これだ……。

その後、龍二の家にて

「リュウジさん……今日はホントごめんなさい。」

「元はと言えば私達が勝手に食べたのがいけないだし……。」

「うん……反省してる。」

「あゝ、いいっていいって俺だっていくら何でもあれはやり過ぎたし。んなことよりもお前らに重傷負わせるところだったからな。悪い。」

「でも……。」

「もういいだろがこの話は。たかがラーメン、また食いに行けばいいし。」

「り、リュウくん……。」

「リュウジ……。」

「じゃこうするか。今度皆で罰ってことで家の中掃除するっていうの。」

「はー。」

「リュウくん！」

「ほ、ほえ〜……。」 脱力

「……………」

その晩、正気に戻った龍二はアルス達に包帯を巻いて手当てし、お互いの罪を許して事は収まった。

これでさらに四人の絆は深まったとか言うけど……………俺と花鈴の財布の中身が、もうスツカラカンになるまでラーメン食われたっていうのは黙っておこうか。

今思えば、ラーメンに救われた俺達の命って一体……………まあ助かったし、よしとするか。

後ついでに、今度からは絶対に龍二を怒らせるような真似はやめようとして固く決意した俺達だった……………。

あれ？俺って考えてみれば関係あったか？

第三十一の話 龍二の怨念！恐怖の大王以上！？（後編）（後書き）

龍二の技紹介

・デコピン ただのデコピンだが、思い切り力を込めたデコピンは常人だとただでは済まない。おまけに氣は込めてません。

・龍天殺 今回、不発に終わった必殺技。

でもこれタメ無しで撃ったら山一つ消し飛ばす程の威力だとか。タメ満タン状態で撃ったら・・・・・・・・想像したくね・・・・・・・・。

まあ何だかんだで元の龍二に戻りました。お騒がせしました。

後ついでに・・・雅って何かよくいる主人公に見えてきたと思うのは俺だけでしょうか？

第三十二の話 風呂場パニック！（前書き）

すこし短め？

第三十二の話 風呂場パニック！

（アルス視点）

「「「ふや〜・・・。」」」

気持ち〜・・・。

「やっぱりお風呂最高」

えっと・・・今お風呂に入ってます。魔王とファイファイと一緒に。

お風呂っていう文化（？）は、ボクらの世界には貴族や王族以外無かった物。基本的にはボクみたいな庶民の出は外にある池や川とかで水浴びをして汚れを落とす。

で、貴族とか王族がお風呂に入る理由は、体の汚れを落とすのが目的じゃなく、地位の高い者としての威厳と誇りをいつまでも保つようについていうおまじないみたいな物。

・・・そんなとんでもなく貴重な時間を、今ボクは味わっている・・・あ、何もこの世界に来て今日初めてお風呂に入ったっていうわけじゃないですよ？ちゃんと入ってましたから。まあ最初は物凄く抵抗あったし緊張したけど今は平気。

「ふあ〜・・・ぬくぬく」

かくいう魔王は・・・地位的には王族クラスだったからいつも風呂に入ってたみたいなんだけど・・・。

「・・・ねえ魔王。」

「ふにゅ〜?」

ちゃんと返事しようよ。

「元の世界でもそんなゆったりした感じにお風呂入ってたの?」

「ぜんぜん。」

うわ、即答。

「あっちのお風呂なんて堅っ苦しくてゆったりできなかったものじゃなかったな〜。いつもメイドさんが私の体にお湯かけてさ、姿勢は正さないといけないとかさ、自由なんて全然なかったよ。」

「へ〜、アンタんともそうなんだ〜。」

「ファイファイも?」

あ、ファイファイは洗面器にお湯入れて入ってます。

「うん。昔からお風呂は神聖な儀式の一つだって子供の頃から習ってたし。」

「・・・あれ?ファイファイって王族だったの?」

「!そ、そんなわけないじゃん!ただ習っただけ。」

今ので多分バレたと思うけど・・・。

「あ、そうなんだ。」

バレませんでした。

「あ〜でもこの世界のお風呂最高〜 気持ちいいし、ゆったりしても構わないし、一人で体洗えるし、こつやって気兼ねなく話せるし

」

「そついやアルスは水浴びで体洗ってたよね。それと比べてどう？」

「う〜ん、やっぱり冬は物凄くキツイからこつちがいいかな？」

夏は快適なただけどなあ。

「あ、そつだ。」

「？何？」

魔王のことだから何かよからぬこと考えそつだけど……。

「えい！」

【バシヤ！】

「はぶ！？」

いきなりお湯かけられた。

「な、何を……。」

「あはは！誰かと一緒に水のかけあいしてみたかつたんだ〜」

したみたかつたんだ〜って……しかもこれ水じゃなくてお湯だし……。

「えい！えい！」

【バシヤバシヤ！】

た、耐えるボク・・・ここでかまつと魔王の思つツボ・・・。

「てい！てい！」

【バシャバシャバシャ！】

が、我慢我慢・・・。

「そりゃそりゃ！」

【バシャバシャバシャバシャ！】

・・・。

「うりうりうり！」

【バシャバシャバシャバシャバシャバシャ！】

・・・。

「・・・。」

「・・・。」

『水よ、飛べ。』

【ズゴン！】

「はぎよ!?!」

い、いきなり後頭部に衝撃が……。。

「あつはつはつは! ナイスリアクション」

「ま、魔法を使うな〜!」

い、痛い……。水球飛ばしたよこの人。

「む〜! お返し! 『水よ、降り注げ!』!」

【バシヤアアアン!】

「みぎやつ!」

上からの水圧に耐え切れずにお湯に顔面を突っ込む魔王。あ〜スツキリした

「プハツ! く〜の〜! 『水よ、弾ける!』!」

「何の! 『水よ、かの者を襲え!』!」

【ドガアアアン!】

【バシヤアアアン!】

「うりゃあああ!」

「やああああ!」

【ズバシヤアアアアン!】

【バツシヤアアアアン!】

こうなったら・・・最後の力を!!

「ていりゃあああああああああ!!!!!!!!」

行けえええええ!!

「じゃかあしんじゃワレコラアアアアアアアアア!!!!!!」

【*訳*うるさいよ君達!】

!?!?!

「あ、ヤバ・・・。」

・・・あ、暴れすぎた・・・かな・・・?

「風呂場で暴れるなんぞどーゆー神経しとんじゃこらあああああ！
！」

ひびーだ、脱衣所から怒鳴られてるのに物凄く怖い・・・！

「とーーーーーにーーーーかーーーーくーーーー！さっさとこの片付け
て風呂から出るおおおおおおおおおおお！……！」

「……は、はいいいいいい！……！」

【バンツツ！！！！】 脱衣所の扉閉めた音+ちよつとガラスにヒビ
入った

「……」

え……………つ……………

しばしの沈黙の後、とりあえずボクらはいそいそと風呂場の片付け
を始めた……。

くで、風呂上がり

「まったく・・・理由はどうあれ、次からは風呂場での魔法は禁止、それと入浴時間は最低三十分、最高四十分までオーケーとする。いいいな？」

「・・・はい・・・。」

お風呂から上がってパジャマに着替えてすぐさまリュウジさんの前に三人揃って正座して少し説教を受けた後に風呂場での魔法禁止条例及び入浴時間指定を言い渡されたボクラ。もっと説教されるかなって思ってたけどそんなにガミガミ言われなかったのが救いだっただ。

「まあ遊ぶのはいいけどな、程々にしろよ？」

「・・・はい。」

完璧一家の大黒柱ですリュウジさん・・・。

「ん、よろしい。」

満足そうに言った後、座っていたイスから立ち上がった。

「じゃ俺風呂入ってくるわ。」

「あ、はい。」

「「「ゆっく〜。」」」

首に手を当ててコキ、コキと音を鳴らしながらお風呂場へと消えていくリュウジさん・・・。

うん、今度からゆったり入ろう。

第三十二の話 風呂場パニック！（後書き）

自分でもちょっとやり過ぎたかな？って思ったんで変更しました。
さすがにね？

第三十三の話 そんな一日(前書き)

謎かけのつもりなんですけど・・・バレバレですよね？

第三十三の話 そんな一日

（龍二視点）

「あゝ気持ちえ〜〜〜……………」

たまんね〜な〜、この縁側でポカポカと日向ぼっこ。公園のベンチで遊んでいる子供達を眺めて和みながらのんびんだらりすんのも最高だが、ここの庭に生えている草や木や小鳥のさえずりとか見たり聞いたりしながら暖かい日差しを浴びて和む春うらら……………あゝ幸せ。最近はアルス達も公園で遊ぶという楽しみも増えてこようやって家で一人で過ごす時間も少し多くなってきたし。近頃は外へ散歩しに行く日が多かったが、こようやって家で一人のんびりするっつーのもまたいとをかし。まああいつらも学校行くだけが外出する理由っつーのも健康に悪いし。

「【ズズズズ……………】ああ〜やっぱお茶は玉露に限るぜ〜。」

ホントいい天気だな〜。

『すいませ〜ん。』
「ん？」

何か今声が……………。

『下です〜。』

「下？」

縁側の下を覗いてみれば・・・

「いましたました、何かえらい可愛らしいのが。小さいけど大人だな。」

「何してんだ？」

『ちよつと休憩。』

どっからか迷い込んできたんだなきつと。

「.....」

【チチチ・・・】 よく猫を誘う時に舌を使うあれ

『バカにされてる感じなのに自然と近寄りたくなるのは何ででしょう？』

お、来た来た・・・多少警戒してるみたいだが。

「よつと。」

優しく抱き上げ、膝に乗せて顔を合わせる。

「お前、どつから入り込んできた？ん？」
『道に迷ってました。』
「あ、やっぱり？つーかオメエこころ辺のじゃないのか。」
『ええ、ちよつと散歩のつもりが・・・遠くまで。』
「親は？」
『前まではいました。今は孤独の身です・・・。』
「大変だな。」
『はい・・・。』
「・・・。」
「・・・で？名前はあんのか？」
『まだ無いです。』
「昔の有名な作家が書いた小説の主人公みたいだな。」
『あ、でも昔の名前なら。』
「何だ？」
『ポチヨムキンという名前が』
「よし今からお前は珠だ。」
『普通過ぎません？』
「シンプル伊豆ベスト。」
『イズが何かおかしいです。』
「気ニシナイ。」
『じゃ気にしません。』
「そんな返し方をしたのはお前が初めてだ。人じゃないのに。」
『周りでもえらいって言われてました。』
「そうか。」
『はい。』
「ところでお前オス？メス？」
『どつちだと思えます？』
「オス。」

『残念。メスです。』
「ただでさえ主要キャラの多くが女性なのにテメエまで女かい。」
『主要キャラって何です?』
「うんにゃ、こっちの話。」
『そうですか。』
「そつだ。」
『ところで何か食べ物あります?』
「図々しいとは思わないぞ俺は。」
『なら言葉に出さないでください。』
「あいよ。」
『で?あります?』
「市販の牛乳なら。」
『私達に普通の牛乳ってダメなんじゃなかったですか?』
「そつだな。」
『確信犯?』
「オウイエ〜。」
『でも?』
「気ニシナ〜イ。」
『やっぱり。』
「おつよ。」
『会って間もないのにすっかりお互いのパターンが読めるようになってしまったね。』
「いい事だと思おつぜ?」
『そうですね。何事もポジティブに。』
「だな。」
『ですね。』
「ニボシ食つか?」
『いただきます。』
「召し上がれ。」

そんなこんなで時間は過ぎていく……………。

「リュウくんただいま〜！」

「ただいま〜！」

「今帰りました。」

お？皆帰ってきたみたいだな。

「あ〜疲れた〜ってあれ？リュウくん何それ？」

「動物ですよ？初めて見ます。」

「ん〜？俺の友人。」

「わ、私よりでかい……………」

まあさつき知り合ったばっかだけだな。

「可愛いね〜。何ていう名前なの？」

「珠。」

『みゃ〜。』

とりあえず“猫”改め“珠”^{タマ}は今日から俺の友人となりました。

あ？何か疑問に思うことでもあんのか？

……………。

『ニヤッ。』
『ニヤッ。』

第三十三の話 そんな一日（後書き）

- 今日は何かのんびりした感じに書きたかったんで書いてみました。
あゝ・・・龍二が猫語話してたのかそれとも脳内で話してたのか・
・

自分でも謎です（おい

第三十四の話 真“著”勝負！

（アルス視点）

『ニュースをお伝えします。今日未明、母親と口論した挙句に暴力を振るうなどで散々暴れ回った十七歳の少年が、近所の人に取り押さえられ逮捕されました。口論の原因について警察は詳しく調べて行くつもりです。』

「家で口論の上に暴力か〜。」

「怖いね〜。」

【バシッバシッバシッ】

「……………」

「最近キレやすい連中が増えてきてっからな〜。」

「だね〜。もう少し我慢すればいいのに。」

【バシバシインチャキチャキッ】

「……………」

「まあ我慢できない理由があつたとしても同情はしねえな。」

「そうだね〜。」

【ビシイ！バシイン！ズビシ！】

「……………」

「まあ我が家ではそういうことないよう、気を付けていかないとな。」
「だね！」

【ズバァン！バシユウン！シユピイン！】

「……………」

【バシバシバシバシバシ！！ピシィー！！】

「……………」

「……………」

「とりあえずそう思うんならお互いおかずの取り合いやめませんか？」
「無理」
「即答」
「……………」

……………大分お箸の使い方が慣れたから、今ではお箸を使って今夕食

をとってるんだけど・・・

今、最後の一個のカラアゲを取ろうと魔王とリュウジさんがお互いお箸で攻防戦を繰り広げている・・・まるで切り結んでいるかのよう・・・。

【シュピインシュピイン!!】

「やるじゃねえか・・・クルル。」

【バシインバシイン!!】

「リュウくんこそ・・・。」

【ガキイイイイイン!!】

「ふん!!」

「んみみみみ!!」

【ギリギリギリギリ・・・】 “鰐” 迫り合いならぬ “箸” 迫り合い

「・・・。」

当然、ボクとフィフィは傍観しています。とつくに夕食も食べ終えています。

でもリュウジさん・・・こないだ箸で遊ぶなって魔王に注意したんじゃないかったっけ？あ、でも言ったら言ったで『この際そのルール

無視！』て言われそうだな。・・・。

【シャリン！】 離れた音

「はっ！」

「てい！」

【バシビシピシィー！バシン！】

お箸で激しい切り合い。受けては攻撃、攻撃しては受け。

「そうりゃー！」

「なんのー！」

【ズビシィー！】

リュウジさんの強そうな斬撃。それを魔王は防ぐ。

「お返し！」

「無駄だ！」

【ビシシシィー！】

目にも止まらない百列突きを魔王が放つ。それさえも素早く受けていくリュウジさん。

「もらったあー！」

「あー！」

【パシィッー！】

あ、リュウジさんがカラアゲ奪った。

「させない！」風よ、我の元に！」

【ビュウ！】

「チィ！」

【バシッ！】

魔王が魔法を放ってカラアゲを自分の方へと飛ばす。それを捉える魔王。

「魔法か・・・だが！」

【ヒュッ！】

「あ！」

「GETS!!！」

いつの間にかカラアゲが龍二さんのお箸に・・・今のは見えなかった・・・。

「何のお!!！」

【ズバシ！】

すかさずカラアゲをお皿の上に落とす魔王。

「はあ、はあ、やるな、クルル。」

「ふう、ふう、リュウくん、こそぞ。」

軽く笑って肩で息を整える両者。ボクには二人が勇猛な戦士に見えた。

。。。

ごめんなさい、もう何がなんだかわかりません。

「さあ、いくぞクルル！」

「覚悟してよりユウくん！」

ああ・・・また始まった・・・。

「これ・・・どう収容つけるの？」

「ごめん、ボクに聞かないで・・・。」

ボクとフィフィはもう完全に目に入ってないでしょう。二人には。

【ガチャ】

「やつほぐ。」

「あ、カリンさん。」

リビングにいきなりカリンさんが・・・あれ？

「どうやって入ってきたんですか？」

「えへへ。合鍵」

そう言つてチャリンと鍵を出すカリンさん。用意周到で何よりです。

「つてあれ？何してんの二人とも？」

「すみません、ボクの方が聞きたいです。」

こんな会話をしてる間にも二人は激しくお箸で切り結んでいる……
剣じゃないだけマシだけどさ。

「ふうん……あ、カラアゲ。」

「今日の夕飯ですよ。」

「一応教えておく。」

「へえ、じゃ悪いけど一個“もらう”わね。」

「………へ？」

もらう？

【ヒョイ、パク】

「」「」「あ。」

……。

「 ヤルゾ。
ラジャ。」

その後、カリンさんがどうなったかご想像にお任せします・・・。

第三十四の話 真“箸”勝負！（後書き）

お箸で切り合いは行儀悪いからよい子は真似しちゃダメだぞ！悪い子は超オツケー！（おい

第三十五の話 思わずシッコロニ役

〈龍二視点〉

「~~~~」

思わず鼻歌が出る程気分がいい。ついでにスキップだ。

「物凄く機嫌いいですねリュウジさん。」

「まあな。」

まあ何でこんな機嫌がいいのかというただな、こないだ予約しといたRPGゲームの発売日だからだ。しかもプレミアムBox付きで設定資料とオリジナルサントラが入ったスペシャルバージョンでだ。

つてな訳で、俺は今予約しといたゲームショップへとアルスをお供に赴いているのだ。待ちに待ったこの日を逃してなるかっての。

「でも何でボクまで？」

「ノリで。」

「ノリで連れてこられたんですかボク!？」

「いいだろがどうせ暇だったんだろ？」

「ま、まあそうですね・・・。」

「それにお前はそーゆーキャラだからな。」

「最後余計です!..!」

「気ニシナイ。」

「またそれですか!？」

「々つるさいのお。 爺さん口調

「あ……ところで前々から気になってたんですけど……。」
「んあ？」

「何でリュウジさんて一人暮らしなんですか？」

「突然だな。」

「はあ……すみません。」

「前に言つたる？両親は海外で仕事中。」

「仕事……ですか。」

「ああ。」

つつても何か出て行く前に『羽伸ばしてくる』とかのたまつてたけどな。

「……。」

「どした？」

何かアルスが少し言いづらそうにしている。

「寂しく……ありません？」

「んにや、全然。」

「そこも少し間あけるところなのでは……。」

「だって寂しくねえし。」

「そ……そうですね……。」

何か納得いかない顔してるが何故だ？

「じゃあご両親はどんな人達だったんですか？」

「そんなん聞いてどうすんだ？」

「あ、いえ・・・ちよつと興味が・・・。」

まあ、普段いるはずの人間がいないと興味湧くわな。

「まあ教えてやるけどよ・・・お前らが家に来た時俺言ったよな？」

「え？」

「うちの両親、ご近所では『世紀のバカップル』ってあだ名が付いてるってよ。」

「・・・あ、そういえば・・・でも何でそんな・・・？」

「言葉通りだつっの。見てて何か暑苦しい。」

「あ、暑苦しい・・・。」

「親父がお袋突っつけばお袋も突っつき返したりするのはまあいいけどな。」

「突っつき返す・・・ですか。」

「おうよ。」

夏なんて見てるだけで汗が出てくる程くっついてるし。二人曰くあれはイチャイチャしていると言ってるが、何のこっちゃ。

「でも突っつき返すくらいならまだいいんじゃない・・・。」

「まあそれだけならマシだな。」

「それだけなら？」

「そ。」

本当に暑苦しいのはここから・・・。

「聞くけどよ、お前男のケンカって見たことあるか？」

「え？ええ、生まれ故郷の村で。」

「どんなだった？」

「子供同士のケンカでしたけど、お互い血が流れてました。」

「まあケンカってそうだな。」

「それが？」

「じゃもっかい聞くけど。」

「はい。」

「夫婦が“仲良くケンカしてるシーン”って思いつくか？」

「・・・は？」

まあ当然頭に“？”だわな。

「えつと・・・どういう意味ですか？」

「そのまんまだ。目の前で大乱闘の如くお互い殴ったり蹴ったり、果ては物投げたり相手投げたり。もうメチャクチャだ。」

「え・・・それ単なる夫婦喧嘩っていうんじゃない？」

他で夫婦喧嘩の時に柔道みたいに相手投げつける奴がいたら見てみたいわ。

「夫婦喧嘩でどんなセリフ思いつく？」

「ええつと、テレビでは『何で浮気したのよー！』とか、『いつも私に教育押し付けて！』とか、『仕事なんだからしょうがないだろ！』とか・・・ですかね？」

「昼ドラ見すぎだなお前ら。もっと他の見る。悪影響だ。」

特に影響されやすいクルルとか。

「まあ、それに対して我が家のバカ親のセリフはこうだ。」

「あなた！私にあなたの逞しい腕から繰り出される愛のボディブローを！」

「オーケーハニー！なら君はボクにその綺麗な鹿のような足で素敵なおドロップキックを！」

「ああ！いつも素敵な攻撃だわ〜マイダーリン！！！」

「ははは！ボクも同じだよマイハニー！！！」

「うふふふふ！」

「あはははは！」

「黙れボケナス夫婦。永眠してる。」

「……てな感じで。」

あ、因みに最後俺のセリフね。

「……………」

あつはつは、いい感じにアルス目が点。

「え……………つと……………何それ？」

“それ”扱いだよマイペアレンツ（両親）

「ついでにセリフはあだが、効果音はえげつねえぞ？聞くか？」

特に俺のセリフの後なんか

「ええええ遠慮しておきます。」

かなりうるたえてますな。

「つか我が両親ながら呆れるね・・・あんなことしなければ普通に見えるのにもつたいない。」

「まあお前らもいずれ生で見る羽目になるからな。一応の覚悟はしておけ。」

「な、何かすつごく嫌です・・・。」

「我慢我慢。」

まあいつ帰ってくるかわからんがな。

「あ、そうそうアルス。」

「はい？」

「てい。」

【バキッ！】

「はぐっ！？」

【ズゴン！！】

近くのブロック塀にめり込みましたアルス。

「な……何を……。」

「ああ、犬の糞踏みそうになったから突き飛ばした。」

後一步踏み出してたら確実踏んでたね。

「なら……もうちょっと加減してください……。」

「あ、わり。」

完璧埋まってるからすんごく喋りにくそうだね。

まあ結構重傷なアルス引きずりながらゲームショップへとレッツラ
ゴーした俺でした。

……にしても……はあ、親ねえ……。

第三十五の話 思わずツッコミ役（後書き）

えっと、龍二の親の話が出ましたが、出るのはまだ先です。まあこんな親だったんだ、と思ってください。

後自分で書いといてなんですが何だこいつら。

第三十六の話 学校名物“寝顔”

（アルス視点）

ボクらは今、学校の廊下を歩いています。今日は登校日です。

でも……。

「ふあ……。」

「リュウジさん……口開き過ぎですよ。」

「気ニシナフア……。」

「いつもの口癖が訳わからなくなってます……。」

は……学校来るとこれだもんリュウジさん。

「リュウくん昨日何時に寝たの？」

「あ……三時くらい。」

「遅っ！？何で？」

「ゲームやり過ぎた……ねみい。」

昨日買ったゲーむっていう奴ですか……見てておもしろそうでしたけど……。

「うっ眠い……。」

あ、危ない危ない倒れる倒れる。

「おおっ」と……

リュウジさんの頭の天辺にしがみついているフィフィが一瞬落ちそうになって慌ててしがみつく。

「あ、危ないなあも〜。」

「んむ……。」

うわ〜……歩いたまま寝そう……。

「とりあえず教室入ったら即夢の世界へレッツラゴーだ……。」

「堂々と寝る発言しないでください。」

色々大丈夫なのかなこの人……。

あ、もう教室に……。

【ガラリ】

「はいちこー……く……！」

【バシユシユシユシユ！！！】

案の定飛んできました多くのチョーク。

「はっ！」

軽く屈んで避けるボクと咄嗟に教室から逃げて扉を盾にする魔王。

【バシシシシシシシ！！！】

……で、普通にカバンで全部打ち落としていくリュウジさん……す。」

「えへへ それはもう少ししてからのお楽しみ」

お楽しみ……？

「……あ、あのさ……。」

「？」

頭の中で考えてるとカリンさんが話しかけてきた。

「何だか周りの女子達の様子が……。」

そう言うから周りを見てみると……何だか大半の女子の人達がソワソワして落ち着きが無い。

しかも何かリユウジさん見てるし……当の本人寝そうだし……。

「何なんでしょうね……？」

「さあ……。」

ボクらはここに来て大分経ったけど、こういうのは初めてだよ。

「……んむ……。」

【カクン】

あ、頭が……。

「……んぬ……。」

【ムク】

あ、元に戻った……。

「お願い……こっち向いて！」

「今日こそは……かならず……。」

『お願いします！』

……な、何で皆して小声でお願いしてるの？

「な、何か怖い……。」

「うん……。」

「何なのよ？」

「????？」

ボクと魔王とフィフィとカリンさん（以下新米組）は揃って頭に“？”を浮かべる。

「……んあ……。」

【カクン】

あ、また……。

『来い！……！』

うわ、皆して小声……。

「………んみ……。」

【コテン】

あゝあ、突っ伏しちゃ

『キターーーーーー!!!!!!』

!!!???

「へ・・・何が来た・・・って・・・。」

ボクら新米組はクラスの熱狂ぶりに押されてキョトンとした・・・。

「ほらほらアルス達もよく見て！」

「滅多に見れないから！」

カナエさんとクミさんに引っ張られてリュウジさんの顔の前に来た。

いえ、寝てる人を見て何だって言っんですか・・・。

「くー・・・。」
w () 。。;

何だって言っんですか・・・。

「んみゆ．．．ムニヤムニヤ。」
(。＝＝)。

何．．。

「じゆー．．．」
(。＝W＝)。

何だって．．。

「くぢー．．．」
(。＝W＝)。

「写メ、写メ撮つとかないと！」

「こないだみたいなのミスはしないわ！」

「あ・・・やば、鼻血が・・・。」

「はぐあ！【バタツ】」

「きゃあああ！？明子、明子おおおお！！！」

一瞬にして教室は大混乱・・・そんなにすごいのか？いや確かにすごいけど・・・。

「やっぱり初めてだから動揺するな？」

クミさんがボクに問いかけてきた。それでも目はリュウジさんの寝顔に釘付け・・・。

「リュウジは基本的に屋上まで行ってサボって寝るという習慣があるんだけど、時々睡魔に負けてその場で寝てしまうことがある。それでも反対側は窓だからこちらに向かない限り寝顔は見れない・・・だからある意味この寝顔は学校の名物の一つにまでなっている。」

「め、名物・・・ですか？」

「そう・・・あたしは以前に見る前に寝返りをうたれて見損ねたんだ・・・。」

「なるほどね・・・だからこの熱狂ぶり・・・。」

「はわわ〜」

「くっ・・・寝顔が眩しい。」

名物かあ・・・

口の辺りなんてまるで小動物のような形になってるし・・・

閉じられた瞼がやわらかそうだし・・・

時々聞こえる声が何だか・・・その・・・

とにかくホント名物にしたくなるのがわかるくらい可愛い・・・。

「でもリュウくんのかな寝顔見たことないな。」

「あゝ・・・いつも私達が先に寝てから寝るもんねリュウジ。昼寝の時とかも。」

「それにつつ伏せで寝るし・・・。」

そう思うとさらに可愛く思えるのは何で？

「あの・・・ホッペ触ってみても・・・。」

「あ、ダメダメ。」

呟くカリンさんの腕をすぐさま掴むカナエさん。

「え、何で？」

「・・・リュウちゃんは安眠の妨げになる物は片っ端から吹っ飛ばす習性があるから・・・。」

「ああ、前に触ろうとした女子生徒が吹っ飛ばされたし。」

い、意外と危ない・・・まるで猛獣です。

「だから、見てるだけ。」

「見るだけでもレアなんだから光栄に思っておいた方がいい。」

「ちえ・・・。」

「まあそう言うな。いつか触れるから。」

「・・・ってカグラさん!？」

いつの間にかカグラさんまで・・・。

「フッフ、今回ばかりは自習だ・・・レアもんだしなこれ」

い、いいんでしょうか・・・。

「くあゝ・・・。」

（。＝〇＝）。；； 欠伸

・・・
ま、まあいいんでしょうね／／／／／／

『カワイ〜・・・』

ボクらはリュウジさんが目覚めるまでその寝顔を眺め続けていた・
・。

〜おまけ〜

「ふあ〜あ・・・。」

【ガタタタタ!!】

「・・・んみゃ？お前ら何してた？」

『い、いいえ何も!!???』

「あ、そう。」

目覚めると同時に元の席へと戻るボクらと皆。

何でもリュウジさんは寝てるのをじっと見られるのがあんまり好き
じゃないとか・・・。

・
・
・
。

ボクらも気を付けよう・・・これから。

後、男子全員（マサさんは除く）が物凄い憎しみを込めた視線をリ
ユウジさんに送ってたような気がする・・・。

第三十六の話 学校名物“寝顔”（後書き）

えと、今回は龍二の意外な一面を書いてみたいなって思って書いてみました。

・・・大袈裟過ぎたかな？でも小動物の寝顔って癒されますよね？

第三十七の話 “アレ”イコール？（前書き）

うん、そろそろきついな。いろいろ。

第三十七の話 “アレ”イコール？

（龍二視点）

一日学校での授業が終わり、さあ帰ろうとしたが……。

「あ、そういえば……。」

我家の“アレ”がもう切れてるんだった。

「どうかしました？」

アルスが荷物持ちながら聞いてきた。ついでにフィフィがその頭に乗っかってる。

「あ〜わりい、花鈴達と一緒に先帰っててくれねえか？」

「どうして？」

「ちよっとな。」

“アレ”買いに。

「すぐ帰るから。」

「……わかりました。先帰るときますね。」

「あんまり待たせないですよ。」

物分りがいい奴らで助かる。

「え〜！リュウくん一緒に帰らないの〜!？」

「な、何故だ龍二!？」
「理由を述べなさい!！」

わかってねえバカが三人いたな（クルルと久美と花鈴）。

あ、香苗は今日生徒会だからいねえぞ。

「一緒に帰れないくらいで喚くんじゃねえよ。それに男だったら雅がいるだろが。」

「「「あれは論外。」」」

「あれ扱い・・・かよ。」

あ、雅いたんだ。ドンマイあれ扱い。何か暗いぞお前。

「じゃ恭田は？」

「「「さらに論外。」」」

「俺その上!？」

よかつたな雅。お前より上がいたぞ。そしていつの間にもいたんだ恭田。

「すぐ済む買い物だからな。俺一人でいい。」

「じゃ私も行く」

「来んなボケナス生徒会長。」

つか生徒会はどうしたバ香苗。いつの間にもいたんだお前もよ。

「ボケナス・・・。」

そして凹むなバカ。

【バン！】

「会長！」

「また逃げ出して！」

あ、何か見知らぬ生徒二人が教室入ってきた。

「あ、やば・・・じゃあね！！」

【ビュン】

まあまるで風のように逃げてったね。速い速い。

「あ、待ちなさい会長！！」

生徒会の奴らだな。そのまま追いかけてもどうにもならんだろう。

「おいお前ら。」

「？何ですか？我々は今忙しいんです。」

呼び止めたら怒られた。どうでもいいが。

「ちょっと待ってな。」

とりあえずポケットからある物を取り出す。

「それは・・・メガホン？」

そう、ある物とはメガホンだ。

だからどうしたそれであいつ普通に呼ぶだけってわけじゃねえだろ
うな、とか言う目が俺を睨む。一人は女でもう片方のは男。睨んで
るのが女。迫力ゼロ。

俺はメガホンを口に当てて息を吸って……

「香苗。」

呼んでみた。

【ガラガラ】 扉開く音

「なあにリュウちゃん？」

「そら捕まえる。」

「へ？みぎゃあああああ！！！！」

普通に教室入ってきたバカ女こと香苗。あつという間に捕らえられ
ました。

「じゃ次は気をつけるよ。」

「は、はあ……ご協力どうも。」

「ほら会長行くわよ！」

「いやだあああ〜！」

ズリズリと生徒会の連中に引き摺られていく香苗なのでした。見て
て愉快。

「いらつしゃいませ。」

あ、そうそう。ここ地元じゃ他のコンビニなんかよりも愛想がいいつっーことで有名だとさ。って誰に何を説明してんだ俺？あ、読者か。前にもあつたなこういうの

「え〜つとアレはつと・・・。」

どこにあんのかな〜・・・。

「菓子売り場か？」

どこかな〜・・・？

「え〜つと・・・。」

う〜ん・・・。

「どこだ〜？」

レジ前か〜？

【ガー】

「いらつしゃいま」

「おらぁ！金出せええー！！」

ん？何かそれらしき物が・・・。

「ひ、ひいー！」

「おいこいつが見えねえのか！？さっさと金出せつっつてんだよ！」

【ドオン！】

「ひええええ！！」

あ、あつたあ

「ち、ちよつと待つてくださいますから殺さないでください……。」

「なら早くしろや！！」

どれにすつかな……ここは無難にいつもの……。

「早くしろつってんだろが！何モタモタしてやがる！！」

「ひいっ！！」

あ、あいつらも食つかなこれ。じゃ今回はいつもより多めに買っておくか。

後はレジに持つてただけだな。

「すみません、これお願いします。」

買う物をレジの上にドドンと出す。

「ああ！？テメエ何なんだよ！」

「ん？」

何かいきなり隣で真つ黒な野郎が怒鳴った。あ、こないだのライタ
ーじゃねえよ？

「何だ？割り込みは反則だぞ。」

「テメ！ふざけてんじゃねえぞコラ！」

「ふざけてんのはアンタじゃねえの？つーかその真っ黒いヘルメツト店ん中では取れバカ。」

「こ、こ、この野郎・・・殺す！！」

【チャキ、ズガン！！】 銃撃ってきた

【バシツ】 普通に弾いた

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「デッコピーン。」

【ズビシィー！！】

【ガシャーーーーーン！！】

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「おゝい。」

「へ？あ、はい！？」

「だからこれ頼むって。」

「は、はいい！ー！」

？何そんなビビる必要があんだ店員さんよ。

手際よくレジ打って行ってビニールに包んでもらって金払ってお釣りもらって・・・と。

「あ、ありがとうございます！！」

わざわざレジから出て頭下げてるし。何なん一体？

あゝそれとさっきの真っ黒野郎だけど、コンビニのガラス突き破っ

て駐車場で大の字に倒れて完全に気絶していた。ヘルメットもきれいに真っ二つに割れてるし。

顔がオッサンだったってというのはどうでもいいか。

く帰宅く

「ただいま。」

「リュウくん！」

「チエストー。」

【バキッ！】

「ふびゅ！」

香苗の如く飛びついてきたクルルを普通に叩き落してフローリングと口付けさせてやる。

「あ、リュウジさんおかえりなさい。」

「おかえりー。」

「おう。」

アルスとフィフィが和室から顔を出す。

「で？何買ってきたんですか？」

「これ。」

「ヨイとお目当ての物を出す。」

「？何ですかそれ？」

「食いモン。」

袋を破って口に含んで舐める。あゝ甘えつめえ。

「ほら、お前らの分もあるから食べ。」

「あ、はい。」

「いただきます。」

「う、重い……。」

いつのまに復活してたんだクルル。

「……あ、甘い。」

「うみゃー」

「な、なめにくい……。」

そりゃフィフィと同じくらいの大きさだからな。

「これいつも舐めてるんですか？」

「おお。何かむしように甘いモン食いたくなった時とか。」

「ふん。」

俺にとってラーメンの次に好きな奴だし。

あゝにしてもウメエなゝ・・・・・・・・

“ チュツ チャップ ストロベリー味 ” ペロペロ。

第三十七の話 “アレ”イコール？（後書き）

あれおいしいですよ。俺ラムネとストロベリーとグリーンアップル好き。

第三十八の話 生意気な後輩ども

（龍二視点）

「だから！ここは俺らが使っつて言っつてんだろが！！」

「いいえ！私達は前々からここを使っつて決めてました！だからここを使うのは私達よ！！」

「・・・あれ何してるんですか？」

「さあな。」

久しぶりに久美が部活見に来てくれつて言うから、あいつの晴れ姿でも拝んでやろうと思つてアルスを連れて（クルルとフィフィは香苗に捕まっている）体育館まで足を運んだんだが・・・なんじゃこの有様は。

「あ、龍二！来てくれたのか。」

「ん。ありや何だ？」

とりあえず駆け寄つてきた道着姿の久美に質問。一年の男子数名と同じく女子数名が何か対立してるな。つつてもそれぞれリーダーっぽい奴が言い争つてるようなもんだけど。しかもよく見てみれば女子の方は全員久美と同じ空手部の連中じゃねえの。道着見たただけけど。

「ああ、実はな。あの一年の男子達はバスケット部の子達なんだが・・・プレイをするのに空いたコートが無くてな。それであたし達が来る前に空いていたこっちのコートを使つていたわけで・・・。」

もん勝ちでしょ!!」

あゝ……すつげえ言い争い。そのうち暴動起きるんじゃない?

「っーか見てておもしろい……いやいや、久美に治めるって言ってしまった以上、止めないとな。」

「おいお前ら。」

「何だよアンタ!!」

「邪魔しないで!!」

うわゝお、思いつきりタメ口だゝい。

「とりあえず落ち着けや。あと一応俺先輩だから。」

前々から思ってたけど先輩だからって敬意を払う必要無いよな?とか考えてたけど今回はかりはこれを活用させてもらおっかな。

「ああそうですか。でもこれは俺達の問題ですから先輩は口出ししないでください!」

「そうです!部外者は引っ込んでいてください!」

最近の後輩は反抗期だね。

「部外者とかそんなの関係ねえじゃん。お前らのせいで他の部の連中が迷惑してんだからやめれば?」

「周りなんて関係ありません!」

「バスケット部がこつちにコートを譲れば済む話です!」

「何を!?そつちこそ譲れよ!」

「バカ言わないでよ!久美先輩が練習できないでしょ!」

あゝ、この女子達やつぱ久美崇拝者か。よくいるよな〜こついうの。

「じゃ久美練習させたいなら別の場所で言い争いしてくんね?。」

邪魔だから、とはあえて言わない。言ったら言ったでまた突っかかってきて時間余計に消費する。そんなのめんどっちーし。

つてあり?何か急に俺に対する目付き変わったね連中。

「あなた、久美先輩の何なんですか!あなたみたいな人が下の名前で呼ぶなんて失礼にも程があります!」

根拠のない事言われた。

「別に失礼じゃないよな?久美。」

「え?あ、ああ。」

突然話振られたから一瞬ビクつたらしい久美。

「!また呼び捨てにして!いい加減にしてください!」

いや何言ってるのアンタ久美がいつつたんだから別にいいじゃんよ。

「あゝも〜わかったよとりあえずその件は置いてだなあ。」

「何が置いといてなんですか!私達にとっては重要問題なんです!」

「つーかそれよりコートのはどうなんだよ!?俺らが使ってもいいのか!」

「そんなのダメに決まってるでしょう!」

これって俗に言う泥沼って言うんかなあ。

「も〜！とにかくあなたは邪魔ですから帰ってください！！！」

「そっだ帰れ！アンタがいたらややこしくなるんだよ！！！」

遂に帰れ宣言ですか・・・まったく、キレやすい若造達だ。

「じゃあもう言い争うのは」

「だから帰ってくださいって言ってるでしょう！！！」

「日本語理解しろバカ！！！」

『さっさと帰れ！！！！！！』

・・・。

【只今大変えげつない効果音&残酷な描写が流れています。しばらくの間だけ頭の中で広大なお花畑に佇む木製の風車を思い浮かべてお楽しみください】

（三十分後・・・）

「わあっ たな？ 半分はバスケット部が使ってもう半分は久美達空手部が使うんだぞ。」

『ひ、ひゃい・・・。』

しばらく暴れまわった後、頭から血を流している奴数名、顔大きく腫らした奴数名、そして他の奴より何か重傷のリーダー格の男女二人、立ってる俺の前で全員正座させてお説教タイム。

何で全員満身創痍なのは聞くな。地獄を見るぞ多分。

「まったく・・・最初っから久美の提案に賛成してりゃいいものだよ。バカかテメェら。このボケ。」

「そ、そんな言い方……。」

【ギロリ】

「ひっ！」

不満漏らした女子を軽く(?)睨みつけて黙らせる。

「とにかく、これからは言い争うようなこと無いように。」

『わ、わかりました……。』

返事はいいんだがなあ。

「ああ、それと……おいそこの脳なし。お前。」

「え、わ、私？」

あ、脳なしってリーダー格の女子のことね。久美崇拜者。

「久美に憧れるのはいいが、俺が久美の奴を呼び捨てにしようがしまいが俺の勝手だ。テメエがやいやい言う筋合いなんざねえんだよバカ。わかったかああ？」

「ひっ！……わかりました……。」

「で、そこの無礼者。」

「え、俺？」

無礼者＝男子のリーダー格な。

「テメエの方が日本語理解しろこのバカ。日本海に沈めるぞボケ。」
「……ひ、ひゃい……。」

よく見れば全員顔真っ青。血が足りないようだな。うん、そういう風に解釈しよう。

「ほらさつさと立て。お前らのせいで無駄な時間食っちゃまったんだから残った時間でせいぜい頑張れや。」

『は、はいいい！！！！！！』

慌てて立ってそれぞれ指定されたコートへと散って行く空手部の女子とバスケット部の男子。やっと終わったぜ・・・やれやれ。

「おい久美。終わったぞ。」

「あ、ああ・・・ありがとう。」

何だその若干引き腰は。

「・・・あ、あの・・・リュウジさん？」

「何だアルス？」

そつえばこいつもいたの忘れてた。

「えと・・・言いくいんですけど・・・。」

？何だ？

「・・・話し合いで解決するんじゃないかなかったですか？」

「・・・。」

あ。

「……」
「……」
「……」

「ま、いいべ。」
「いいんかい!?!」

ハモリツッコミ炸裂。

まあ今回の件はしょーがねえというわけで。つーかあれでキレるな
というのが無理

第三十八の話 生意気な後輩ども（後書き）

?? おい・・・。

作者 あれ？誰？

恭田 俺だよ俺！恭田！！

作者 あ、忘れてた。

恭田 忘れるな！つーか俺の扱い誰よりもひどくないか！？こないだなんて感想欄見てみれば俺のこと知らない人いたし！

作者 まあ俺でも忘れるくらいの存在だからねえ。

恭田 おい！

作者 あ、でもロウ兄弟はいつかまた出す予定。

恭田 俺は！？

作者 さあ？

恭田 えええ！？

作者 所詮脇役の中の脇役だからなお前は。

恭田 ひ、ひどい！！

作者 読者の皆様、こいつ誰だっけって思う方はまた読み返してみてください。チラホラいるかもしれません。

恭田 チラホラって何なんだよおおおおお！！！！

作者 それでは

恭田 うおい！！！！

第三十九の話 今夜だけの夕チ（前書き）

若干シリアスです・・・シリアスかな？

第三十九の話 今夜だけの夕チ

く龍二視点く

あゝ買い過ぎたな。タイムセールスだからって調子乗り過ぎたか？つーか気付けば日い暮れちまってるし。

「あいつら怒ってんだろーな。」

特に腹減り魔王が。

まあそんな一人ごとを呟きつつも買い物袋掲げながら街灯の下をとつと歩いてたんだが……。

『……』

「……ん？」

何か聞こえた？……気のせいか。

あゝ夜は冷えるな。

『……』

ん？……気のせいか。

『……』

今朝?・・・気のせいか。

『た・け・・・さい。』

竹菜?・・・気のせいか。

『助けてください・・・。』

助けてください?・・・気のせいか。

『・・・え、いやあの・・・気付いてるんでしょう?』

「気付いてません。」

『あ、そうですか?・・・。いえいえいえ!?返事するなら聞こえてるんでしょう!?!?』

「ノー。アイドンスピークジャパニーズH A H A H A。」

『思いつきしエセ外人丸出しじゃないですか!?!』

「ワタシニホンゴヨクワカラナイ。」

『片言で日本語喋ってるじゃないですか!?!』

「だって日本人だし。」

『いきなり開き直り!?!?』

うつせーなーこいつ。フワフワ浮かんでるんじゃないやねえよ。

「・・・つーかアンタ何?体透けてね?」

『そ、そりゃ私幽霊ですもん。』

衝撃告白!?!?!!

.....。

「でもぶつちやけどうでもいいけんな。」
『え、ええええ!!!??ふ、普通幽霊見たら驚くとか逃げるとか腰抜かすとかあるじゃないですか!』
「幽霊よりも結構すごい超常現象目の当たりにしてるからな。」
『幽霊よりもすごい見たって何なんですか一体!?!』
「つーかそれ以前に迫力ゼロの幽霊に言われてもね〜。」
『はぐあ!?!』

リアクション豊富な幽霊だなおい。つーか俺は幽霊とかで驚かない。あ、説明してなかったけどこの幽霊女な。長い髪とワンピース着るのが特徴。後はご想像で。

「そんでえ?何をどう助けて欲しいわけ?」
『へ?聞いてくださるのですか!?!』
「うんいや聞いただけ。内容によっては帰る。」
『ひ〜ん!(泣き)』
「泣くなバカ鬱陶しい。」
『ひ、ひどい……。』

あ、何か落ち込んだ。

「とりあえずさっさと用件言えや。」
『は、はい!え、えっと実はですね……。』
「はいはい。」
『あの……。ですね……。』
「はよ言えや。」

ドスを効かせてみました。

『ひいひい！ゆ、幽霊よりも恐いです！！』

「失礼な。つーかさっさと用件言えつつってんだろーが御被いすつぞ。」

『は、はい！じ、実は……。』

「場所は変わって川原」

「ここか？」

『はい……。』

結構離れた場所にあつたんだなあおい。最初に幽霊にあつた場所から歩いて三十分もかかっちゃったよ。

「で？どこにあるんだお前さんの言う物は。」

『えっと……。あそこだったと……。』

あそこってのは川につかるギリギリの所か。

え〜と……。

「暗いな……。ケータイ。」

【パカ】

ケータイの明かりはそんな強くは無いが、無いよりマシだな。

だがなあ………あんなモン一目見ただけじゃわかんねえぞ。

「ホントにこの辺か？」

『ええ、間違い無いです……多分。』

「多分かよ………ってあれ？」

『ありました!?!』

「いや。」

お目当てのモンじゃないが……。

「……。」

『あ………これですか?』

俺の目の前には血で黒く染まった大きめの石とその傍らに置かれた数々の花束があった。

「ここでアンタ死んだのか。」

『ええ………不覚にも足を滑らせて……。』

悲しげな表情で俯く幽霊。あ、名前は聞いてないから幽霊で。

「ふうん・・・お？」
『え？』

【キラン】

・・・一瞬草むらが光ったな・・・あれか？

「え〜っと・・・」

ブンゴ。

「あつたぞ。」

『ほ、ホントですか!?!』

幽霊に向けてお目当ての物を差し出した。

『ああ・・・やっと見つかった・・・』

お目当ての物、『イヤリング』を見つめて涙声で呟く幽霊。

そ。これがこの幽霊が俺に頼んできた内容。何でも死んだ拍子に川

原に大切なイヤリングを落として無くしちまったらしく、あれが無
いと死んでも死に切れないというわけで自縛霊みたいになっちまっ
たんだとよ。

で、自分は昼にしか出てこれないもんだし、オマケに目が何か相当
悪いっつーこと（聞いた瞬間帰ろうとしたら泣きつかれた）で夜道
を歩く人片っ端から頼んでたらしい。でも皆して気付かないか、靈
感ある奴はビビって逃げ出すっつーわけで。

本人が言うには、家族全員靈感が強いから見えるはずなんだけどな
ゝゝゝどっか引っ越しちまったらしいからなあ。

で、この付近の連中にはあらかた頼んでみたがダメだったらしく・
・仕方なく俺らが住む地区まで来たっついで俺に会ったっつーこ
とだ。

そっついや今思い出したけど学校で夜道に幽霊が出るぞっつて誰か言
ってたな。

っーかこんな恐くも何ともない幽霊なんぞに皆して何ビビってんだ
か。

『…………ウツ…………』

っつてあゝこりゃマジ泣きだなゝ。

「まあ何はともあれよかつたな幽霊。」

『はい…………本当にありがとございました…………』

「気ニシナゝイ。」

やれやれだぜホント。

「…………で？それで満足？」

『あ、はい…………』

「ふゝん…………未練、もう無いんだな？」

『・・・はい。』

「成仏すんの？」

『・・・はい。』

やっぱな。幽霊つて未練無くなると成仏するもんなんだな。

『あ・・・。』

「??おお?」

ありやりや、何か体光つてやがらあ。

光る。成仏つてか?何かありがちな。

「じゃマジでお別れだな。」

『そう・・・ですね。』

つたく、最後の最後まで切なさそうな顔すんなや。

「まあホント短い時間だけだったが、お前さんなかなか面白かったぜ。からかい甲斐があつて。」

『それどういう意味ですか!??』

「そのまんまの意味。」

『ぐう・・・言い返せません・・・。』

やっぱリアクションおもしろいわコイツ。

『・・・あの・・・。』

「あ？」

『最後に・・・お名前は？』

そついやお互い名前言ってなかったな。

「荒木 龍二だ。」

『荒木・・・さん。』

「“さん”いらねえよ。普通に荒木か龍二でいいし。」

『・・・じゃあ龍二くん。』

“くん”かい。まあ“さん”より堅っ苦しなくていいか。

「で？アンタは？」

『ワタシは・・・川野 夏美です。』

「夏美、な。覚えておこう。」

『うん・・・それと。』

幽霊もとい、夏美の体がさっきより強く光りだした。

『ワタシ・・・』

最後にあなたみたいな人に・・・龍二くんに会えて・・・よかった・・・。

夏美が俺に手を差し伸べてきた。

それに応えて、俺も手を伸ばしてその手に触れる。

幽霊だから実体は無いはずなんだが……。

手を放した途端、夏美の体がさっきより強く光りだした。

そして……

『ありがとう。』

少し微笑んだかと思うと

夏美は消えた。

今度は無くしていたイヤリングをしっかりと耳に付けて。

く帰宅く

「リュウくん遅い!!」

「何してたのよも〜!お腹減り過ぎて気持ち悪かったんだから!」

「あ〜わりいわりい。すぐ支度すつからよ。」

案の定、家に帰ったらクソやかまし腹減り星人二人がギャイギャイ騒ぎ立ててお出迎え。

「・・・あれ?リュウジさんそれ何ですか?」

「ん?これか?」

俺は手に握っていたのをアルスに見せる。

「今夜だけの新しいダチからもらった」

俺の手には、金色に輝くイヤリングがあった。

第三十九の話 今夜だけの夕チ（後書き）

どうでした？ちょっと書いてみたいな〜って思ってた書いてみました。

第四十の話 和解 その1 (前書き)

ちよつと長編。前々から書きたいと思っていたお話です。

第四十の話 和解 その1

（龍二視点）

「さて、買う物買ったし、帰るか。」
「うん！」

あくただいま商店街。俺はクルル連れて買い物中。で、今終わったとこだ。本来ならアルス達も連れて来ればよかったんだが、どうもアルスが腹が痛いとのことで。ファイファイは付き添い。

「にしてもアルスの奴、何か変なもんにも当たったかあ？普段健康体なのに。」

「うーん・・・何でだろうね？」

そう言う俺だが、何か心当たりが無いわけじゃないんよ。

昨日の晩飯、賞味期限切れた食い物を三人の内ランダムに入れてやったからな。遊び半分で。

え、俺？あえてトラ五匹いる穴まで丸腰で入っていくか？

あ、俺が行けるなら他の奴らも行けるか。無理ですby作者

？最低？・・・サンキュ。それ一応俺にとっての褒め言葉。

「とりあえず腹いたの薬買ったから大丈夫だろ。」

「そだね〜。」

効くかどうかは知らん。

「で？今日の晩飯どうする？……………？どした？」
「……………」

？何だ急に立ち止まった上に押し黙って。

「ん〜？……………お。」

あそこにおわすのは……………。

「お〜い久美よ〜。」

「あ、龍二。」
「……………」

俺のと色違いの買い物袋を引っさげた久美とその隣にいるリリアンがスーパーから出てきたとこだった。リリアン相変わらず無表情。

お、今日はクマのプさんの顔がプリントされたTシャツかいリリアンよ。

「龍二も買い物か？」

「オウイエ〜……………っておいこらクルル。」
「……………」

何俺の後ろに隠れてんだ。何俺の服引つつかんで震えてんだ。小動物かテメエ。小動物かわいいよなあ特にハムスターとかウサギとかもう最高って何考えてんだ俺。

「・・・あのなあ、そろそろ何か話せよ。」
「だ、だって・・・何話せばいいか・・・。」
「・・・。」

答えるクルルに対して、リリアンまだ無表情。

「おいリリアン。とりあえず黙ってねえで何か話せ。」
「・・・。」
「？何か話せない理由があるのか？」

あ、久美復活した。

「・・・それが・・・。」
「うん。」

「・・・恥ずかしい。」
「マテヤ。」

まあ俺は大体予想はしてたさそんなこつたるおとな。

「恥ずかしかったから黙ってたただけだったのか・・・。」
「・・・何から話せばいいかわからなくなった・・・。」

ダメじゃん。

「とりあえずお前がこないと言ったことそのまま伝えればいいんじゃないかね?」

「……【コクリ】」

少し間を置いてから頷いた。

「……魔王……。」

「は、はい……?」

「私は……別にあなたのこと恨んでいるわけじゃないから……。」

お、言えたね。

「……確かにリュウくんからそれは聞いたけど……。」

「……それに私は……。」

「?」

「私は、一族の掟にただ従っていただけだから……。」

「え?」

一族だあ?

「……私の一族は……昔から魔族に対する敵対心が強くて……
“魔族は我々人間の肉を食らう、最も忌むべき種族”と呼ばれるくらい、深い憎悪を持っている……。」

あ、ようは偏見ね……ちょっと違うか?

「私の家族も・・・例外じゃ無かった・・・その上、全ての魔族はこの世から抹消するべきと一番主張していた・・・。」

「暗いね。」

「相手が魔王だったらなおさら・・・一族の、そして家族の人間達に後押しされて私はあなたに刃を向けた・・・でも。」

「？」

「・・・私は・・・全ての魔族が邪悪とは思わない・・・それにそんな憎悪に囚われた者達の操り人形にはなりたくない・・・だから・・・私を信じて欲しい。」

「・・・。」
「それに・・・一族の人間達の言うことがホントなら・・・すでにあなたは人間である龍二を殺しているはず・・・。」

「まあもしそうなる前に塵に返すけどな。」

「あなたは・・・龍二のこと、殺したいと思う・・・？」

「そ、そんなの思ってない！」

「なら・・・大丈夫・・・。」

「・・・つかクルルがそんなことするとは到底思えねえしな。」

「まあリリアンがこう言うなら信じてやってもいいんじゃないの？」

「・・・うん・・・。」

「イマイチ腑に落ちない・・・って表情だな。」

ま、これからのんびり仲良くやってけばいいさ。

「じゃありリアンはクルルのこと認めてやるんだな？」

「【コクリ】」

「にしてもまあよくいろいろ喋ったなあオメエ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／」

急に顔真っ赤に染めながら逸らすな。さっきまでカッチョいいと思つたのによ。

「おーしとりあえずリリアンとは和解したな・・・・・・・・後ほ。」

「「「「？」「」」」

そ。リリアンは元からクルルのこと悪く思ってたからこそ簡単に和解できたが・・・・。

「問題は・・・・あの頑固野郎。」

「・・・・・・・・ステイル？」

「しえいかい（正解）。」

前見た時のクルルに対する憎しみのこもった目線はホント尋常じゃなかったからな。

「・・・・・・・・あの人は何故魔王を憎んでいるのかは、私も知らない・・・・・・・・。」

「聞かなかったのか？」

「聞いてみても・・・・・・・・悲しい顔しながらはぐらかせてたから・・・・・・・・。」

「

やっぱり一筋縄じゃいきそうにねえな。

「……………」

「クルル……………」

あん時のこと思い出して泣きそうな顔をするクルルを慰める久美。
こいつはこういう所がいいんだよな。

「ま、それはまた家帰って考えるべ。」

リリアンにはわかってもらえただけでもよしとしよう。今んところはな。

「そうだな。ここで考えてたつてどうにもならない。」

「【コクリ】」

「じゃ今日んところはもう帰るか。クルルも腹減っただろ。」

「……………うん……………」

……………元気ねえな……………しゃあねえか。

「じゃあ、俺ら行くから。」

「ああ、また。」

「バイバイ……………二人とも。」

「うん、バイバイ。」

リリアンに手を振り返すクルル。顔は笑ってるが、無理してんな。

久美達とは逆方向の道を二人並んで歩く俺達・・・あゝ・・・何つかねゝ・・・。

「なあ、とりあえず元気出ねえか？」

「え？私元気だよ？」

だから無理して笑うなって・・・まあしゃあねえかとは思ったが・・・

いつものテンションじゃねえと何か気が抜けるっつかねゝ。

「あんま思い悩むなよ？」

「だ、大丈夫だよ！・・・大丈夫・・・だから。」

いやだから大丈夫に見えねっつの。

・・・そう言いたいが、今のクルルの状態を見て言う気が失せた。

はあゝあ、マジメにどうすっつかねえ・・・。

第四十の話

和解

その1

(後書き)

続きますよ。

『でもこうも暗いとな〜・・・。』

昨日の晩のうちに、アルスとフィフィに詳細を説明してやったから何でクルルが暗いのか理解している。

あ、ちなみにさっき喋って会話したんじゃねえよ？俺らの間では可能なアイ・コンタクト。

しばらく生活してたらこんなんでできるようになっちゃいました

・・・無理して明るくしようとしたら失敗したな。今画面の向こうで引いた奴出て来い、龍閃弾食らわしたる。

「・・・・・・・・。」

今現在、クルルは縁側で庭に置いてあるうちのジジイが送りつけてきた盆栽をぼんやりと眺めている。その後ろ姿は何つーか、ものっそい憂いを感じずにはられない。

「・・・・・・・・。」

思わずため息が出てます。ため息つくときと幸せ逃げるって言われるが、すでに何かもう幸せ逃げちまってるっつーのって感じだね。

「・・・・・・・・。」

にしてもまあ・・・・・・・・見てていたたまれねえなあ・・・・・・・・。

「魔王・・・・・・・・。」

アルスも俺と同じ気持ちらしい。顔がそんな感じだし。

「何か・・・いつものクルルらしくなくてしっくり来ないな。」

それさつき俺も思ったぞファイファイ。

しかしあれだな・・・そこまでして思い悩んでたなんてな。ステイルとの一件は、本人にとっては精神的ダメージがでかかったらしい。でもいくら何でもこのままだとクルルそのうちマジで寝込んでしまうな。

「・・・しゃあねえなあ。」

「リュウジさん？」

首を傾げるアルスをよそに俺は立ち上がって、

「よつと。」

クルルの隣に腰掛けた。

「・・・。」

チラッと目だけ俺を見たが、すぐに視線を正面に戻す。足をブラブラさせてながら無表情でボケくっとしてるのは一見黄昏てるみたいに見える。

「・・・。」

「・・・。」

とりあえず無言・・・まず何から話そうか・・・。

「・・・おいクルルよ。」

「・・・。」

返事なし・・・当然か。

「いつまで塞ぎ込んでんだ？お前らしくねえ。」

「・・・。」

・・・。

「・・・なあ、前々から思ってたんだがよ。」

「・・・？」

あ、ちょっと反応した。

「魔王つてよ、世界征服が目的なのか？」

「・・・。」

「まあ無理に返事なくていい。」

あんまり本人にとって酷なことは聞きたくないんだが、今回ばかりはしゃあねえし。

「・・・うん・・・。」

小さいが、返事はしてくれた。

「・・・じゃいきなり聞くけどよ・・・」

お前、ホントは魔王やりたくなかったんじゃないか？」

さっきの無表情から驚きへと表情を変えた。

ピンポン・・・だな。

一緒に生活していると、こいつの性格がわかってくる。

一時、こいつから魔王ってのは何なのか聞いたことがある。魔王ってのは魔族の中で一番魔力がでかい奴がなり、そして人間やその他の種族が住む世界を支配し、生き物を虫けら同然に扱う、逆らう者は誰であろうと苦痛を与えながら殺していく・・・よくゲームとかに出てくる典型的悪役っつーわけだ。

魔王が何であるか、こいつも深く理解はしている・・・っーかして
るつもりなんだろうと思う。

だがそんな残忍で冷酷で無慈悲な者が魔王としての理想像に対して、こいつはどうだ？

純粹で無邪気で明るくて優しく、誰かと一緒にいなければ寂しがつて、いつつも遊ぼう遊ぼうとせがんだり、珍しい物には素直に驚いて、丸分かりな嘘だって信じ込んで、俺がどっかから帰ってきたら飛びついたりして喜んで・・・今は人に毛嫌いされてるのが物凄く辛くて悲しんでる。

メチャクチャ魔王の理想像からかけ離れてんじゃねえか。そんな奴が魔王になって世界征服して、他の連中から恨み買うような真似したいとか本気で思うか？

否、ありえない。俺はそう思う。

「・・・。」

「お前見てみればわかるぞ。ホントは魔王になんてなりたくなかったんだろ？」

クルルの家系は、先祖代々から魔王としての地位が決まっていた為に、クルルも強制的に魔王となることが決まってたってわけ。本人から聞いた。

自分の進む道が周囲の人間や家族に決められていく・・・完っ壁俺の大嫌いな生活だ。

「・・・お前、ホントに人から恨まれるようなことしたか？」

「・・・。」

押し黙る・・・それを肯定として受け止めるべきか、否定として受け止めるべきか・・・

・・・

・・・ダメだな、勝手な憶測はこいつを傷つける。

「・・・しゃあない、か。」

質問を取りやめ、素直に引き下がるとするかな・・・。

「・・・リュウくん。」

「?」

お、話かけてきたか。

「何だ?」

「・・・あのね・・・。」

うんうん。

「リュウくんの話してるじゃ・・・ほとんど合ってるの。」

「ほとんど?」

「うん・・・。」

じゃちよっつと噂っつてていいか。

「私ね……」

魔王になりたいって……自分から言ったの。」

「……。」

「もちろん、周囲からの期待もあったし、小さい頃から魔王になるべき子だって言われ続けてきたよ？……それ聞いて、ホントにやだっただんだ。」

「……。」

それで？とうながしてやりたいが……

黙っておじろ。

「でもね……今の私にとって、魔王っていう地位は必要だったんだ。」

「必要……ねえ……。」

「うん……。」

……。

「……その必要だったっていう意味、教えてくれるか？俺に。」

「……。」

理由によつたら、こいつに対する周りの偏見が無くなるかもしれん。それに俺に話すことで少しでも気が楽になれんならそれでオツケーって形で。

「……ホントは今まで一部の人にしか話さなかったけど……リ

ユウくんなら。」

「サンキユ。」

・・・それによ・・・

こいつらが・・・アルスもフィフィも含めてツライ顔してんの見るの、何か嫌なんだよな俺。

第四十一の話 真相 その1 (後書き)

多分、このお話は四話まで続きます。読んでくださる方々には大感謝です。

第四十二の話 真相 その2 (前書き)

じっくり考えてたら更新が遅れてしまいました。ごめんなさい。

第四十二の話 真相 その2

（龍二視点）

「ホントに大丈夫なんでしょうか・・・？」

「さあな、俺らは基本的には裏方だ。大丈夫なのかどうかはクルルにかかってんだ。」

「・・・。」

「クルル・・・。」

え、只今俺らは雅の家へと向かってます。

何故か？そりゃ決まってるだろ。クルルに対するステイルの偏見を無くすためだ。

でも憎しみとかは完全には消えねえだろうな。簡単に許せるんなら全世界の人間仲良しこよしだ。

あくまで、ステイルが抱くクルルに対する敵対心を消すため。その為には本人とクルルが対談しなけりゃならん。

これは俺らが提案したんじゃない、クルル本人から言い出したことだ。昨日の話の後に申し出たってわけ。

しかしまあ、本人にしては相当な覚悟を要しただろうな・・・。

「……。」

「クルル、ホントに無理しなくていいよ?」

「だ、大丈夫だから……ありがと、フィフィ。」

そうは言っても顔色が優れねえぞ。

「……。」

昨日の話……あれを聞いてから、こいつに対する印象は微妙に変わった。

いや、これからだってこいつの扱い方は変える気ゼロだけんな。

だがその話を実現させるには……やっぱりスティルとは仲良くしたいんだろう。それにずっと睨まれっぱなしってのも気分悪いしな。

「……ん?」

考え込んでたらいつの間にか雅の家まで来たが……門の前にいるのは……

「久美、香苗、リリアン、カルマにケルマ。」

「あ、リュウちゃん。」

「龍二!」

「龍二、アルス、フィフィ……。」

「魔王さま!」

双子だけにハモってるね。息ピッタシ。

「もう来てたか。」

「うん、今来たところ……それよりクルルちゃん、ホントに大丈夫なの？」

「それさっきアルスも言ってたが、それはクルルしただい。」

ああ、こいつらが来てる理由はだな。昨日の晩に電話で久美と香苗に事情を説明してから皆も連れて来い伝えといたからだ。

俺に昨日話してた内容を知っているのはロウ兄弟とかその他の城の一部の連中だけらしいからな。内容を知ってる奴も来ていた方がもしかしたら役立つかもしれないねえ。

それにステイルもアルス達の仲間なんだから、皆で立ち会うべきだとアルスが言い出したし。

無論、雅にも連絡はしてある。

「魔王様……。」

「カルマ、ケルマ……久しぶりだね。」

そういやここしばらくこいつら会ってなかったんだよな。俺はこないだロウ兄弟に会ったけど。悲惨な状況で（第二十九の話参照）。

「じゃ行くぞ。」

「う、うん……。」

緊張した面持ちで返事をするクルル。

それをちょっと見てから、俺はインターホンを迷わず押した。

【ピンポン】

【ガチャ】

『あ、龍二か。待ってたぞ。』

「よう雅。」

今回はいつものやり取りは無しだ。クルルにとっては重要な話だからな。

【ガチャン】

門の鍵が開く音がし、俺らは門を開けて敷地内に入った。

【ガチャ】

「入ってくれ。」

「おう。邪魔するぜ。」

「……。」

雅が扉を開けて出迎えてくれて俺らはゾロゾロと家の中へと入っていった。

いつもなら皆で談笑とかすんだが……今回の件が終わるまでそれも無しだ。

「あ、皆いらっしやい。」

涼子さんがお出迎え。いつもならニコニコしてんだが今日は曇った表情をしている。

「スタイルは？」

「リビングにいるわ……でもすごい機嫌が悪そう……。」

だろっな〜・・・。

「……………」

「ほらクルル、しっかりしろ。」

「う、うん・・・ごめんねリュウくん。」

機嫌が悪いつていうのがわかって緊張感アップすんのはわかる。だがこっなることは覚悟してたはずだし。

「魔王様、お気を付けて・・・。」

「もしも場合は、ボクらが駆けつけます。」

「うん、ありがとう二人とも。」

二人を連れてきたのはそんな時のために備えるっていう意味でもある。

あ、とりあえず内容はこうだ。クルルとスタイルが一对一で話をする。これだけ。

?大雑把過ぎだあ?これ以上どうしろってんだ。

まあ確かにいきなり一对一で話をつけるっていうのは急いそすぎだ、という意見もあるだろう。でもこれはクルル本人が一对一で話したいっていう要望だね。

ま、早い話が俺らがその場にいれば話が余計こじれる可能性大ってわけよ。いざとなったら飛び出すけどな。

・・・今思ったけど今日の俺ってえらい饒舌だよな。

「じゃあ、頑張つて魔王。」

「落ち着いてね。」

「大丈夫・・・わかってもらえる。」

「お気をつけて。」

アルス、フィフィ、リリアン、ロウ兄弟の順で声をかけていく。

「・・・うん・・・。」

皆の言葉を受けて、スティルがいる部屋へと入っていくこうとするクルル。

「・・・クルル。」

「？」

と、俺も言いたいことがあるから呼び止めた。

「・・・お前が言いたいこと、ありのままに伝える。目を背けるな。」

「リュウくん・・・。」

「・・・これくらいしか言つことねえしな。」

「・・・行きな。」

「……うん！」

力強く頷くと、リビングへの扉を開けた。

〈ライター視点〉

ここからは俺が話すでしょうか。龍二達もないし、ステイルもクルルも頭が色々一杯一杯らしいから。

広いリビングへと足を踏み入れたクルル……。

「あ……。」

「……。」

部屋の中央の長テーブルの向かい側に、ステイルが座っていた。

クルルが部屋に入ってきた瞬間、キツと鋭い目つきでクルルを睨む。

「!……。」

一瞬怯んだクルルだが、その視線から目を逸らさずにステイルの反対側の席に座った。

「……。」

「……。」

しばらく無言・・・嫌な沈黙が辺りを包む。

「・・・あの。」

「・・・。」

クルルが声をかけるが、ステイルは一切反応無し。

「・・・あの、私の話・・・聞いてくれませんか？」

「・・・。」

侮蔑を込めた目でクルルを見るステイル・・・それに気付きつつも、クルルは臆することなく言葉を紡ぐ。

「・・・あなたが私のことを怨んでいるのはわかってる。今までだつて、散々苦しめてきたから・・・。」

「・・・。」

「だから絶対に許してくれるわけがないって思ってるの・・・でも言わなきゃって・・・。」

「・・・。」

「・・・ごめんなさい・・・。」

ただ一言、小さな声で言った。ステイルから初めて目線はずし、深く頭を下げながら。

「・・・。」

「・・・ごめんなさい!!!」

イスから降りてフローリングの上で土下座をするクルル。

クルル本人も謝って許されるはずが無いと自覚していた。

でもどうしても謝りたかった。怨まれる心当たりは腐るほどある。魔王という立場上、かならず怨まれる。それが自分達の世界の常識だった。

「……………」

「…………ごめん…………なさい……………」

土下座の姿勢を崩さないまま、小さな声でポツリと呟くクルル。その声はすでに涙声だった。

次に何を言われるかを恐れながら。

「…………言いたいことはそれだけか。」

「……………」

やっと喋ったステイルから出た言葉は、冷たく、明らかに侮蔑が込められていた。

「ふん…………それだけが言いたくて私の前に来た、というのか…………バカらしい。」

「……………」

「…………謝っただけで、自らが犯した罪が許されると思うか？」

しだいに、ステイルは肩を震わせていった。

「貴様が…………貴様が私の…………俺の家族を、村の人間を…………殺したんだ。」

冷たかった声が、熱が込められた怒鳴り声へと変わった。

「六年前！俺がいつも通り村はずれの畑から戻ってみれば、貴様の手下であるモンスターどもが、村を襲撃したせいで！父も母も、妹も！！村の皆も！！全員慈悲など最初から無いかのごとく皆殺しにした！！！！」

「……………」

「その時の俺の屈辱！皆の無念！！それが貴様にわかるというのか！！？？わからないだろうな！！！！貴様は所詮、人間など虫けら以下にしか思つてない魔王なのだからな！！！！」

「ちが……………」

「何が違う！！！！現に、俺達の村以外の人里も襲っているだろう！！！！」

「……………うつ……………」

「謝つて許されると思つてるとはいいご身分だなあ！！！！？？だが言つておくぞ！！俺は、家族を、村の皆を殺した貴様を絶対に許さない！！！！許すわけにいかないんだ！！！！！！」

「……………」

「はあ……………はあ……………はあ……………」

散々怒鳴り散らし、いつの間にか立ち上がっていたステイルは力なくイスに座り込んだ。額には汗を流し、目からも涙が溢れている。

「……………もういい……………俺の……………私の前から消える……………」

「……………」

「本当は今すぐでも殺してやりたいけど……………ここでは分が悪すぎる……………」

「……………」

「……………早く消えろと言っている！！！！」

【ガン！】

立ち上がる際に隣のイスを蹴飛ばすスタイル。一瞬怯んだかのよう
に震えるクルルだが、頭は上げようとしない。ずっと同じ姿勢のま
まだった。

「……………ごめん……………なさい……………ヒッ
ク。」

「…………チツ！」

もはや何を言っても無駄だと判断したのか、泣いているクルルに目
もくれずに脇を通り過ぎ、リビングから出て行くとした。

【ガチャ】

「はいちよつとストップ。」

「!？」

その行く手を遮るかのように扉が開いて、龍二が中に入ってきた。

「な、何ですか……。」
「急に敬語かよ。ま、そんなことあどっだっでいいけどな。」

後ろ手で扉を閉め、龍二はため息を吐く。

「とりあえずまあ席戻れ。俺からも話がある。」

「……嫌です。いくらあなたでもこればかりは……。」

「拒否権なし。座れ。」

「だ、だから……。」

「座れ。」

「……わかりました。」

有無を言わさぬ迫力に押され、渋々元の席に戻るステイル。

「クルル。」

「……うえ……ひつく……。」

龍二が呼びかけても、ずっと泣いたまま立ち上がるうとしないクルル。仕方なく、龍二はクルルの背中を擦りながら微妙に顔を上げ、ステイルを見据えた。

「なあ、ステイルよ……。」

「……何ですか……。」

不機嫌丸出しのステイルに対し、龍二は平然と話しを進める。

「……今から俺が話すこと、全部ホントのことだから信じて欲しいんだが……いいか？」

「……はい。」

長い間を置いて、ステイルは頷いた。

「……いいよな？あの事話して。」

「……………」

背中をポンポンと優しく叩きながらクルルに問いかける龍二。それに対してクルルは、ホントに小さく、小さく頷いた。

それを龍二は見逃さなかった。

「……………じゃ話すぞ。」

第四十二の話 真相 その2 (後書き)

次は長編最終回です。最後まで読んでくださるなら感激です！

第四十三の話 和解 その2 (前書き)

長編最終回です・・・。

第四十三の話 和解 その2

（龍二視点）

ドアの向こうから話を聞いてみれば・・・スティルが切れるのもわかるな。

だが、一つ間違つてるところがある。今のクルルじゃそれを説明できそうもないし、説明できたとしてもスティルは聞く耳持たないだろう。そこで俺登場だ。

「スティル、お前の家族と村の連中を殺したのは、多分クルルの手下のモンスター達で間違いはないだろうな・・・でもよ。」

「・・・？」
「そいつらはクルルの命令で襲つたんじゃねえ。」
「な・・・！」

「そいつらはな、クルルの配下であつた魔族が解き放つたモンスターどもだ。つまり、犯人はそいつら。」

これは昨日クルルから聞いた話だ。嘘じゃないと思う・・・理由は推して知れ。」

「・・・。」
「まあ結局そいつらはクルルの怒りを買って投獄されたいけどな。立派な反逆行為だったし。」

「・・・だ、だが！それは明らか魔王が自分の配下の行動を見落としたのが原因だろう！？原因は魔王にだって・・・！それにそのよくな行為をすること自体が魔王の望みなのではないのか！？」

「大間違い。」

「な!？」

確かに見落としたのは責任あるかもしれないが、一部大間違い通り越して超が付くくらい間違ってる。

「クルルはな、

表では魔王ぶってるが、裏では全種族の共存のための活動していたわけよ。」

「え……。」

これが昨日クルルから聞いた話だ。

「この話はな、一部の奴、ロウ兄弟とかその他の部下にしか知られてない、クルルにとっては超重要な話だったんだよ。荒れ果てた大地を目立たないように密かに植林したり、戦争とかで難民になった種族とかに炊き出しとかしたり。自分から進んで参加して、少しずつでも共存のための道を歩んでいきたかったんだと。」

それを目指すには、自分が一番偉くならないとダメだ、つーことに気付いたクルルは、周りから強制させられていた魔王という地位に自分から飛びついた。それが昨日クルルが言っていた魔王という地位が必要だったっていう本当の意味だ。

だがまあ、当然問題もあるわけで・・・。

「当然、そんなことを他の魔族の連中が許すはずもない。そのことが一部の連中にバレちまって、瞬く間に噂は広がっていき、拳句クルルに反発する奴らが後を絶たなかった。で、一部のクルルの配下の奴らが反乱を起こし、モンスターを使ってステイルの村とかを襲っていったってわけだ。クルルの思惑とは裏腹の行為をしていくことで、魔族以外の種族に反感を買わせるという意味で。」

「・・・。」

ついでに聞いたんだが、クルルの夢は『全種族が憎しみ合うような世界じゃなくて、皆が笑い合えるような、偏見も差別も戦争も無い世界を作っていききたい』とのこと。

今までの魔王とかは絶対に思いつかないだろう理想。

当然、ハードルは果てしなく高いだろうな。

「まあ、これを聞いてお前さんが納得するとは思わねえ。嘘とも取れる。それに家族を失った気持ちはわからなくもない。俺の親戚にそついうのが一人いるからな。だから今回の話で俺はクルルをこれつきり庇うつつもりはない。」

でもな、クルルは、他人を辛い目に合わせるような事をするのが大嫌いな奴だっただけは信じて欲しい。」

「……………」

「クルル。」

「ひぐ…………グスツ…………。」

背中を撫でながら、クルルの顔を上げる。涙で顔がひどい有様だったから、持っていたハンカチで拭いてやる。

「…………後はお前の仕事だ…………いいな？」

「グスツ…………うん…………。」

泣きじゃくる子供をあやすように言つと小さく返事した。そんなクルルの頭を撫でてやった。

「…………じゃ俺は退却すつかな。」

すつと立ち上がってリビングを出る…………。

「あ、そうそう。」

危うく言い忘れるところだった。

「お前もあんま仮面を被るなよ？素が一番だ。」

「……………」

スタイルに言いたいことを言つて、今度こそ俺は退出した。

（リビングの外の廊下にて）

「ただいま。」

「あ、龍二……どうだった？」

「まだ話し合い中。」

「そうか……。」

皆がいる場所まで戻ってくると、久美が声をかけたんで普通に返した。

にしても、皆も皆で空気が重い……全員さっきの話を聞いてたからな。

そりゃ空気も重くなるか……。

『……………』

うん、マジで重い。10トンある岩の上にデブ百人乗ったくらい重い。例えがわからん自分でも。

『……………』

「……………重い。」

『?』

あ、声出ちまった。

「重いぞお前ら。少し軽くしろ。つーか痩せる特に最近体重増えた香苗。」

「……………!? な、何で知ってんの!?!?」

「俺の情報網をなめるな。」

何故俺がこんなしょーもないこと知ってるのかは神（作者）のみぞ知る。

「まあそんなこたあどうだっていい。」

（私的にはどうでもよくない・・・。）

「何か言ったか？」

「い、いいえ！」

香苗が小声で呟いた気がするが無視無視。

「リュウジさん・・・魔王大丈夫なんでしょうか？」

「・・・。」

こいつも心配症だな・・・全く。

【クシヤ】

不安そうな顔をしたアルスの頭を軽く撫でてやる。

「心配ご無用。今のあいつなら大丈夫だろう。スティルだってわかっ
つてくれらあ。」

根拠は無いが、あいつはそこまで堅物じゃないと俺は思うし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

まあ、さっきのは俺が軽く手助けしてやっただけだが、後の話は全部あいつが解決しなけりゃなんねえ。俺らが一々出てくりゃ意味が無いからな。

〜一時間後〜

【チク・タク・チク・タク……】

『……………』

……大分時間経ったな……さっきから時計の針の音が喧しくてしょうがねえ。

「……………ねみい。」

うん、ぶつちやけ眠い。時計の針やかましいとか思ったけど、それがだんだんと子守唄になっていき、しだいに俺の意識を異次元に飛ばそうと睡魔が意識を鷲づかみにしてそれに対抗しようと必死に踏ん張りつつ睡魔という悪魔に打ち勝つために聖剣“理性”を振りかざしそのまま切っ先を俺は何を考えてるんだしっかりしろ。

【ガチャ】

『……』

おお、終わったらしい。

「……………」

「クルル……どうだった？」

「ステイル？」

「魔王様……。」

「……。」

アルス達が声をかけるが、二人は無表情のまま……。

「……。」

ステイルが一瞬、クルルの顔をチラリと見た後に、廊下の向こうへと歩いていった。

「ステイル……。」

雅が声をかけるが……止まらずそのまま階段へ。

「ダメ……だったの？」

「……。」

首を軽く横に振ったクルル。

「え、じゃあ……？」

「……。」

……。

「……あ、この話はまた落ち着いてからってことにしねえか？
疲れたろ？」

今聞かなくてもまた聞けばいい。

「そうだな・・・今はそつとしいてやるべきだろう。」
「・・・今日はステイルがすまなかつたな。」
「いや、ステイルもクルルも悪くねえさ。」

悪いのはステイルの村を襲い、クルルを悪役に仕立て上げた苦痛を味合わせるべき連中だからな。もし会えたら生き地獄より残酷な目に合わしたる・・・あ、今は関係ねえか。

「じゃあ、今日のところは。」
「ああ、また連絡するよ。」
「帰り道気をつけてね。」
「お邪魔しました。」
「ステイルのことよろしく。」
「よろしく・・・。」

雅と涼子さんに見送られながら家を出る。

「・・・じゃあ、私達は。」
「ああ、とりあえずまた今度連絡する。」
「・・・それじゃまた明日。」
「バイバイ・・・。」
「魔王様、お元気で。」
「・・・うん。」

別方向の道へと歩いていった香苗達に対し、俺らも自分達の家へと帰ることにした。すでに太陽も真っ赤に染まっている。

帰り道を歩いている間、ずっと沈黙が続いていた・・・。

（深夜）

「……。」

……

「……眠れん。」

クソ、あん時はうつらうつらしてたのに……目が冴えちまってる。
おまけに微妙にさみい。

「……はあ……。」

今回のこと、ちょっと俺出しゃばり過ぎたかな……と珍しく後悔中。

クルルも自分の気持ち、言えたかどうか……あゝ気になる……。

……。

「ま、知るのクルルとスティルのみ、ってか……。」

何でもかんでも首を突っ込みたくなる癖、直さねえとな・・・本人達のためにならん。

「・・・。」

とりあえず眠れんのにには変わらないし、ホットミルクでも作って体あつためつかな。

つーわけで、一階のキッチンへとGO。

「・・・？」

ふと台所へ入る前、視界に影が移った。

？泥棒か？・・・まあどうでもいいけどな。

チラッと台所から顔を出してみれば・・・

「・・・クルル？」

庭へと出る戸を開け放し、縁側にクルルがパジャマ姿で座っていた。微妙に寒いなあと思ったのはこれか。

にしてもこんな時間に・・・。

とりあえず考えてもしょうがないっつーわけで、クルルに近づく俺。

「よう。」

「……あ、リュウくん……。」

隣に立つた俺を見上げるクルル。

「眠れねえのか？」

「うん……リュウくんも？」

「おうよ。」

どっくらせつと……そんな言葉が出る感じに、隣に座る俺。

「……。」

「……。」

……これ昨日の昼間と同じ展開じゃね？

あゝ今日は満月か……キレイだな……。

「……リュウくん。」

「ん？」

かる〜く意識飛ばしてた俺だが、クルルが声をかけてきて帰還。

「……あのね……私、今日スタイルと色々話したんだけど。」

「うんうん。」

「……やっぱりまだ許せないって。」

「……そうか。」

「うん．．．。」

．．．何か後味ワリイな．．．。

「．．．あ、でもね。」

「？」

「まだ許せないけど．．．もしかしたら、いつか許せる日が来るかもしれないって．．．。」

「ほお。」

「．．．これって．．．私の気持ち、伝わったってことでいいのかな．．．？」

．．．。

「．．．お前の気持ちってどんなんだ？　言ってみ。」

「うん．．．。」

少し一拍置いた。

「．．．謝ったって村の人達が戻ってこないのは自覚してる。そうなったのは私のせいだから．．．でも、少しでも許される可能性があるなら．．．私は、罪を一生かけて償ってでも、許されるその日まで耐え続けていく．．．．．だから、今は憎んでくれていい。でも、いつか私のこと、許してくれますか．．．って。」

．．．。

「．．．我ながら自分勝手だよな．．．私が罪を償ったって死んだ人が帰ってくるはずなのにね．．．。」

「．．．。」

・・・まったく・・・。

【ポン】

「リュウくん・・・？」

俺はクルルの頭に手を置いた。

「お前、許して欲しかったんだろ？今すぐじゃないけど、許される日が来るかもしれないなら、許さないって言われるより遙かにマシだ・・・それはそれでお前の気持ちが伝わったってことでいいじゃないか。」

「・・・うん。」

「それに死んだ人間はどうやったって生き返らねえよ。もうそれは仕方がないことだ。これからは、ステイルに伝えた気持ち通りに行動していけばいいさ。」

「・・・。」

「・・・それにお前はよく頑張った。えらかったぞ。」

頭に手を乗せたままワシワシと金髪を撫で回した。少しだが、照れくさそうに笑った。

「・・・それとね、リュウくん。」

「ん？」

「あの時・・・来てくれてありがとう。」

「？・・・ああ、あの時な。」

首突っ込んでしまったあれか。

「・・・あれな、本当はお前が言うべき言葉だったんだぜ？あのま

まだと結局お前とステイルはわだかまりが解けないまま終わってた
だろうしな。」

「・・・うん・・・。」

「まあ今回はしゃあなしとして・・・次は頑張れよ？あ、後な。」
「？」

「お前一人で何でもかんでも抱えようとするなよ？悩みがあるなら
俺らに相談しろ。」

ホントにこいつは・・・悩みがあれば自分の胸の中にしまって周囲
に迷惑をかけまいとする・・・一人で全部解決しようとするタイプ
だな。

「・・・う、うん・・・。」

？月明かりでよく見えないが・・・微妙に顔赤くねえか？

「お前顔赤いぞ。熱っぽいのか？」

「ち、違うよ！」

「あ、そうかい。」

熱じゃないならいい。

「・・・鈍感。」 超小声

「あ？」

「・・・何でもない。」

わっつけわかんねえ奴。

「・・・私、今回のことだっただけ・・・。」

「？」

「・・・ホントに私、魔王でいいのかな・・・魔王じゃなくても、もっと他に別の道があったんじゃないかなって・・・。」

「・・・。」

「あ、ごめん・・・リュウくんに言ってもしょうがないよね・・・。」

「

「・・・まあな。」

「・・・。」

「・・・でもなクルル。」

「え？」

「俺前にも言ったよな？お前は、お前が目指す魔王になればいいって。」

「・・・うん。」

「ならその通りやってみる。周りの連中が作り出した腐った常識なんざお前がぶっ壊していけ。」

それがお前が選んだ道なら信じてみる。お前はお前だ。」

「・・・。。。。。。うん！」

クルルが話していた夢・・・

『全種族が憎しみ合うような世界じゃなくて、皆が笑い合えるような、偏見も差別も戦争も無い世界を作っていきたい』

・・・ホントにハードルは高い。魔王になっただとしても、実現するには相当な努力がいるだろうな。

だが実現不可能じゃない、むしろ実現できると思う。

理想はどんだけでかくてもいい。実現するには、何事も理想は必要不可欠だからな……。

なら、俺はその理想実現の手伝いでもしてやっかな……あくまで手伝いだけ。

「……で？まだ眠くないのか？」

「……うん。」

「まあかく言う俺もだけど。」

「……。」

【ギョ】

「？どした？」

「……リュウくん、あつたかい。」

何か腕にもたれかかってきたが……ま、苦じゃねえし、いいか。

「今晚は冷えるな。」

「うん……えへへ。」

いつものイタズラっ子の如く笑うクルルを見て、俺はどこかで安心していた……。

うん、月がヌジできれいだ・・・こんな夜もたまにはいい。

第四十三の話 和解 その2（後書き）

長編、終わりました。

・・・納得できないと思われる方もいらっしゃると思います。それは謝ります、ごめんなさい。

ただ、和解まであと少しといった感じでしょう。その後のクルルに対するステイルの反応はまたオイオイ考えていきます。でも今回のような反応じゃないことは確かです。それだけでも大きな進歩といえます。

一つ言えるのは、クルルはきつと報われるということ・・・ですからどうか、彼女を暖かく見守ってやってください。

長編を読んでくださった皆様、ありがとうございました！これからも勇者以上魔王以上、よろしくお願いします！！

第四十四の話 近状報告（前書き）

前回の長編のその後の話ですが、龍二と花鈴しか出てません。

第四十四の話 近状報告

（龍二視点）

「へえ・・・そんなことがあったんだ・・・。」

「おう。色々大変だったんだぜ？」

ただいま花鈴を連れてCAFÉ・TAIYAKIに来ています。昨日の一騒動の時、こいつはちよつと部活の合宿へ行っていたらしくいなかった為、いない間の近状報告をしているっつーわけよ。

「アタシも出来ればそっちに行きたかったんだけど・・・で？クルルはどうなのその後。」

「ああ、今じゃ元の性格に戻ってるぞ。」

朝飯どんくらい食ったと思ってるやがる。

「そう・・・よかった・・・あ、でも龍二？」

「ん？」

ほっとしたと見せかけて疑問ってか？

「アンタ、いくらなんでも首突っ込みすぎじゃない？スタイルに『アンタに俺の気持ちわかってたまるか』って言われなかった？」

「ああ、そんな目線は食らった。」

口では言わなかったが、多分、いや確実にそう思っただろうな。

「それで余計こじれなかったの？」

「こじれなかった。」

うん、マジで。

「・・・嫌にアツサリしてるわね。」

「こじれなかったもんはこじれなかったし。」

「・・・でも何で？」

「さあな。」

何であそこでスタイルが何も言わなかったのか・・・それはよくわからん。

でもまあ、最終的には何か光明を見出せたからよしとしようか。

「終わりよければ全てよし。それでいいだろ？」

「・・・アンタって昔っからそうよね。」

「あ？」

「ん〜何て言うのかな・・・他人の問題にも時々首突っ込んだりして、最終的には結局仲直りとかさせたりして・・・。」

「そうか？」

「そうよ・・・でも何で一々そういうのに首突っ込むの？アンタには関係ない話ばかりだし。」

「今回は俺にも関係あるだろ。クルルは俺ん家に住んでんだから始終あんな暗い顔されてたらこっちの身もたねえよ。」

「あ・・・そうだっけ・・・。」

「そ・・・っーかよ、自分でも自覚はしてんだけどな。」

「え？」

「ほら、一々首突っ込むって話。これ癖みたいなもんなんだが、直さないかんとは思ってたがね……。」

まあ癖ってのは直そうと思ってもなかなか直らないものなんだよね。とくに意識していると尚更だ。

「でもな……今回ばかりはどうも複雑なんだよな。」

「?どういう意味？」

「あゝ何っーのかね……自分でも何か焦ってたみたいだ。」

「焦ってた？」

自分の中では焦ってたっていう感じだったと言えばいいか？

「俺さあ、何か嫌なんだよな。明るい奴が辛い顔してんの見ると。」

だから今回無意識のうちに出しゃばっちゃまったのは、早く元の明るい性格のクルルに戻って欲しかったっていうのが本音かもしれん。」

「……。」

「ま、早い話が俺は自分の為に行動したって感じかね？」

内心、どうなのかさっぱりわからんがな。それが自分の為なのか、それともクルル達の為なのか。それに今回はよかったとしても他から見れば俺は余計なことに首を突っ込み過ぎたかもしれんし。

「……。」

「?おいどうした？」

花鈴がキョトンとしとる……何か知らんが失礼な。

「いや、その……アンタがしおらしくなるなんて珍しいなあって。」

「

「ま、そういつ考え方もありかもな。」
「でしょ?」

いい方に捉えてる、とも思われるかもしれないが、それはそれ。他とかは関係ない、自分がいいと思った行動を取るまでだ。

「お前に俺が説かれるなんてな。見直したぜ。」

「え?そ、そう?・・・へへへ。」

「おう。じゃそんなわけでお前この代金払えよ。」

「・・・は?」

「は?じゃねえ。わざわざ近状報告してやったんだからそれくらい当然だ。」

「な、何言ってるのよ!?ここは普通男であるアンタが払うべきでしょ!?!」

「俺が言ってるのは近状報告してやったんだから払うべきって言うてんだ。男とか女とか関係ねえ。」

「うぐ・・・。」

「それに俺今日金持ってきてねえし。」

「はあ!?!」

「お前に払わせ、お前が払うと思ってな。」

「今払わせようって言おうとしたでしょ!?!」

「気ニシナイ。」

「うっさい!第一、アタシだって今日お金持ってきてないs」

「財布の中に五千円札入ってる奴が何を言うか。」

「・・・何で知ってるの!?!」

「さっき見たから。」

「いつの間に!?!」

「で?どうすんだ。払うのか払わねえのか。返答しだいではお前の

寿命が縮む羽目になるが？」

「……………払います。払わせてください。」

「最初からそう言え。」

「……………グスン……………」

あ、言っていないけどこいつに説かれて何かムカつくって思ったから奢らせようと思ったのも理由の一つだっていうのは黙っておく。

にしても……………やれやれ、俺が人の気持ちを探するにはまだまだ修行が足りねえな。

第四十四の話 近状報告（後書き）

独善的っていう言葉がありますが、世間一般では悪口と捉えられません。でもあれはあれでいいんじゃないでしょうか？結局何が正しいなんて、わかってるつもりでもホントは誰にもわからないんですから。

その人にとって何をしたらいいか、自分に何が出来るか、大切なのはその行動をした結果だと思います。

それで嫌われるかもしれないけれど・・・何もせずにただ傍観してるだけで嫌われるのも嫌ですよ？

だったら行動してみないとわからないんです。つまり何事も行動、行動、です。

っていうのが俺の考え方なんですけど・・・ダメですかね？つーか偉そうなこと言ってますいません。

第四十五の話 ハイテンションでGO!! (前書き)

今日は久しぶりにコメディです!

第四十五の話 ハイテンションでGO!!

〔花鈴視点〕

「・・・で？何でカリンさんまで付いてきてるんですか？」
「いいじゃないの。たまには私だって買い物に付いて行っただって。」
「・・・じゃとにかく龍二さんの腕を掴むのやめてくれませんか？」

「何で」

「楽しそうに聞かないでください!!絶対確信犯でしょ!?!」
「もーそんなに怒ってたら将来はげるよアルス？」

「魔王は黙っててください!!」

「自分だけ腕掴めないからってヤキモチしない方が・・・。」
「フィフィもうっさいです!!」

「はげるぞ。」

「ストレートに言わないでください龍二さん!」

「はげる。」

「命令形!?!」

ただいま、私こと花鈴は龍二達の買い物に同行しております 何故か？そこに龍二がいるからに決まってるでしょ!

・・・今何かどこから冷光線発射されたような気がする・・・。

「・・・つーか歩きにくいんだが。」

「たまにはいいでしょ!?!うーいっの」

「そうそう」

今のアタシ達の体勢。龍二の腕にしがみついています。この通りはあまり人が通らないからオールオツケーよ！

「お前らがよくても俺がよくねえ。とりあえずどいてくれ。」

「え〜いいじゃ〜ん！」

「リュウくんのおケチ〜！」

『どけ。』

「「はい!」」

声が変わったので慌ててどいた・・・うん、一瞬冷や汗出た。

「・・・怒られて当然です・・・。」 超小声

・・・今アルスからなんか非難のお言葉が飛んできたような・・・？

「ところでお昼どうするの〜?」

「ラーメン屋行くぞ。」

「結局それかい・・・あれ?」

そんな会話をしていると・・・

「OH! コレナンテスンバラスイー形ノ石ナノデシヨー!!」

・・・道端に落ちてる変な形の石ころを指差して叫ぶ筋肉ムキムキの黒人さんが・・・。

「・・・あれ何？」

「・・・さ、さあ？」

うん、戸惑うのわかるよ二人とも。

私だっていきなりのもので戸惑ってるから。

「コレ二名前付ケルトシタラ・・・“ジヨニー”デース!!」

根拠は!?

・・・それよりあんなことしてたら龍二が『通行の邪魔だ』って切れるんじゃない・・・

「HEY。」

「!?!OH!龍二!!」

・・・は？

「相変わらずオメエいろんなのに名前付けてんのかあ。」

「OHイエー!!コレボクノイキガーイ!!」

「シヨモネー。」

「HAHAHA!痛いトコツカレター!!」

「え!?!の、NONO!花鈴!」

「カビン?」

「花鈴!」

「キャビン?」

「花鈴!」

「カビ?」

「花鈴!」

「アリ?」

「花鈴!」

「キャリー?」

「花鈴!」

「カリン?」

「花鈴!」

つ、疲れた。...

「で、こっちが。」

「あ、あの、アルス・フィートです。よろし」

「OH!メツチャビユーティフォー!」

「みぎゆ!」

あ、アルス抱きつかれた。この人胸板厚そう。...

「WOW!グリーンボーイッテイウノハマジデイトンデースネー!

」

「ぐ、ぐるじ...」

うわぁ...ある意味拷問...ってボーイじゃなくてガールなん
けど...

「ミツチエルミツチエル。死ぬ死ぬ。」

「OH!? アイムソーリー。ツイイツモノスキンシップヲ……。」
「は、はぁ……うえっぷ……。」

あ、こっそり口抑えてる……うん、分かる。

「で、こいつが……おいクルル？」

「……。」

クルル、龍二の背中でガクガクブルブルしています。

「OH! コツチハキンパツ美少女デースカー!!!」

「ひっ!」

ビクッて震えて完全に龍二の背中に隠れるクルル……怖いんだね
この人が。

「こいつはクルル・バステイ。見た通り何故かビビってるが一応よ
ろしく。」

「夜露死苦!!!」

何故にあて字!?

「よ……夜露死苦……。」

あて字で返さなくていいよクルル……。

「でこっちの虫が……。」

「虫って何よ!？」

「ブエリイイイイイワンダホー……!!!」

「お願いだからそつから先は言わないでホントお願い!!!!」

何だかわかんないけどどこかの誰か、ごめんなさい!!!!!!

「龍二! ショツピングカ〜イ!?!」

「Ohイエー。」

「両手ニ花ダネー!!!」

「花なんか持つてねえぞ?」

「H A H A H A H A! コイツア一杯食ワサレタZE!」

どこら辺が笑えるの?

「ところで息子のマイケル元気?」

「イエア!!! メツサ元気ヨー!!!」

え、家庭持ち!?!

「龍二八元気ナノカーイ!?!」

「ブルアポー。」

「!?! ソノ発音、ナイス! トツテモナイスヨー!!!!!!」

「アンタがオカマに見えてきた。」

「H A H A H A H A H A! 気ニシナイ!!!」

・・・あれ?

「それ、龍二の口癖・・・。」

「おう。昔ミツチエルが叫びまくってたのがおもしろそうだったから俺も便乗して言いまくってたらしいの間にか口癖になった。」

そ、そんな由来が・・・。

「ソンジャ、ミーハコレカラワイフト楽シイシヨッピンGOO!!
ヘレッツラGO!!ナノデ失礼シマス!!」
「そうか。くれぐれも名づけるのに夢中になり過ぎてこないだみた
いに車に撥ねられるなよ。」

あぶな!?

「H A H A H A!アン時八世界記録更新スルグライ吹ツ飛ンダネ!
!」

更新するぐらい!?!どんだけ吹つ飛んだのよ!?

「んでその後生死の境を行ったり来たりでしかも全治五ヶ月の大怪
我負ったんだよな。」

「アレクライデ死ニマセン!!」

「そのうち死ぬぞ。」

「気ニシナイ!!」

「じゃ俺も気ニシナイ。」

.....

「ソレジャグッバイサヨナラマタ会ウ日マデ!!」

「じゃあな。」

「デユワ!」

【ズビュン!!】

ものっそい速さで遙か向こうへと駆けて行ったミツチェルさんなの
でした.....

いやごめん、ホント急な展開でついていけませんでした……。

「で？印象的にどどっよっ？」

「……えっと……。」

「何て言うのかな……。」

「うん……。」

「……。」

うん、この一言に尽きるね。

「」「」「超強烈。」「」「」

……あ、他三人も同じ気持ちだったんだ。

「へえ、俺はてっきりお調子者って答えるかと思ったぞ？」

「いやあれ行き過ぎ。」

お調子者というレベルを凌駕してるわよ……。

「……そういうアンタの第一印象は何だったの？」

「最高におもしろい。」

「アンタの頭どんな構造してんのよ……。」

「気ニシナイ。」

「……はあ……。」

思わずため息出た……。

「さ、んなことより買い物買い物。」
「「「「はい……。」」」」」

あれですっごい体力消耗したアタシ達は超元気な龍二の後ろをヨロヨロと付いて行った……。

その日、アタシは龍二とあの黒人さんが一緒になってつるんでる時は絶対に関わらないようにしようと思つて固く決意した。

第四十五の話 ハイテンションでGO!! (後書き)

うん、読みにく!って自分で思いました。

・・・それと摩璃藻先生、一部分だけだけどごめんなさい。

第四十六の話 リリアンの奮闘（前書き）

今日は意外と人気があるリリアンにスポットを。

第四十六の話 リリアンの奮闘

くリリアン視点く

【ガチャ】

「リリちゃん。」

「はい。」

朝、久美の部屋で本を読んでいたら久美ママがひよっこり顔出した。
。。。

「悪いんだけど、学校までこのお弁当届けてくれないかしら？あの
子ったら思い切り忘れちゃって。」

そつえば朝、遅刻するとか言って慌ててた。。。

「。。。。了解。」

お世話になってるのだから断る訳がない。。。。

「ごめんね。今日私今日仕事だから。」

「。。。。気ニシナイ。」

この間久美に町を案内してもらったから道はわかる。。。。

「じゃよろしくね。」

「【コクリ】」

いや、ここは焦っていけない・・・戦闘でも冷静を欠いたら・・・
危ない・・・

あ、そういえば・・・。

「確かいつか読んだ本では・・・。「迷ったら左の法則」・・・」

ならばずっと左へ行けばいい・・・

左・・・

左・・・

左・・・

・・・。

（正門前）

「・・・着いた・・・。」

ホントに着いてしまった・・・学校。

「・・・左の法則・・・ナイス。」

グツ！と親指を立てた。

「・・・とりあえず突入。」

でなければ話が進まない・・・当たり前だけど。

「・・・でも・・・どこへ行けばいい？」

そういえば・・・久美ママから具体的な場所を聞いてなかった。不覚・・・。

「・・・。。。」

どうしよう・・・。。。

・・・。。。

「……とりあえず突入。」

さっき言った。

〈警備員室〉

……。

「君聞いているの？一体どこの学校の子なのかと聞いているんだけど？」

……変な帽子被って変な服きた中年の男にさっきから尋問されます……。

普通に門から入ったのに……いきなりこの部屋に連れてこられた。何で？

「あゝも〜！とにかく教えなければ警察に連絡させてもらつよ！」

ケイサツ……確か私達の世界では騎士団に位置する組織……

ちよつとまずい……。

「えい。」

【ゴスツ】

「あごっ！？」

【パタリ】

「……ごめんなさい……。」

思わず首に手刀をしてしまったけど……

とりあえず進もう……。

～廊下～

……。

「……どの部屋？」

全然わからない……部屋が多すぎる……。

「……。」

適當。

〈教室〉

「で、このXを【ガラリピシャン!】!?!」

次、12個目……今度こそ……。

「へ、だ、誰？」

「リリアン!？」

「あれ?リリアン?」

「あ、久美発見……ついでにアルス。」

「ボクついで!？」

この部屋で合ってたみたい……安心。

とりあえず久美の前まで行く。

「な、何でここに……。」

「弁当届けに……。」

右手に持つてる花柄のナプキンに包まれた弁当箱を差し出す……。

「あれ?あたし忘れてた？」

「【コクリ】」

「そ、そうか。わざわざありがとう。」

「気ニシナイ。」

「リリアン、リュウジさんの真似はやめて……。」

ポンと久美の手に乗せた。ついでにアルスからツッコまれた。

でもここまで来るのに結構時間かった……。

(な、なあ、あの人メチャクチャ美人じゃね!?)

(や、やばい……ストライク。)

(髪の毛綺麗だ……。)

(ブツ!)

(また鼻血かよ!?)

?……さつきから妙にうるさい気がする……特に男子。

「……そういえば龍二は?……違う部屋?」

「いや、龍二なら多分屋上だと……。」

屋上……。

「……ちよつと行って来る。」

「何故に!?!」

「せっかく来たのだから龍二の顔は見ておかないと……。」

弁当箱も大切だけど、龍二の顔見るのも大切……私にとって。

(な、何iiiiiiii!?!?!?)

(こ、この人までもが龍二を……!)

(おのれええええ!?!?!?)

(に、憎い！奴が憎い！いいいいいいいい！！！)

(うああああああ！！！)

．．．．．明らかに龍二に対する殺意．．．．．

早めに消しておこう．．．．

あ、でも．．．また久美に叱られるから．．．今はやめておこう。

「いいなあ．．．アタシも行きたいなあ．．．。」

「花鈴は授業があるからダメだ。ここはリリアンを居候させている身としてあたしが。」

「久美ちゃんだって授業あるしそんなの関係ねえ、でしょ！ここは生徒会長として私が！」

「お前ら全員ダメだろ。」

．．．龍二、人気ある．．．。

「リリアン、あんま龍二に変なことしないでよ。」

「へ、変なことって何？ファイファイ。」

「変なことってというのは、」

「クルルは黙っときなさい！」

．．．アルス、純粹．．．。

「大丈夫．．．変なことしたくても出来ないから。」

したら殺されるし．．．。

「あ、ああ．．．なるほど．．．。」

「じゃ。」

まだやいやい騒ぐ久美達を尻目に、私は部屋から出た・・・

視界の端にさつき難しいこと喋ってた男性が蹲って泣いていたけど何だったの・・・？

【無論、泣いてたのは数学教師の近藤さんです b y 作者】

く屋上へ

「・・・ここね。」

散々迷ったあげくようやく屋上へと続く階段を見つけてやっと扉の前に着・・・

だっですごい入り組んでるから・・・。

「・・・開くかしら？」

。見た目錆びついててボロボロ、取っ手が取れるのかどうか心配・・・

「・・・。」

でもやってみなければわからない……。

取っ手に手を添えて力を入れて……

【ガチャ】

……開いた。

「……見た目より頑丈……。」

【ギイ】

若干重い扉を完全に開くと、涼しい風が体を擦る……。

「……わぁ……。」

一瞬空が近く見えた……。

「……あ。」

入り口から大分離れた場所に……龍二が寝そべっていた。

「……。」

授業というのを受けるべき時間だと思っけど……こんなところで寝てていいの？

「……。」

でも……あんなところで寝てたら風邪引く……

起すぞ。

「……………」

テクテクと近づいていく……………屋上ってちょっと広いから龍二のとこまで結構距離がある……………。

「龍二……………」

そして顔が確認できるくらいまで近づいた……………

「スピー。」

(W) ……」

……………。

「スピー。」

(W) ……」

……………。

「スピー。」

(W) ……」

「……………// // // // // // // // // //」

……無理……。

「……………// // // // // // // // // //」

【ダッ！】

可愛すぎて理性がダメになってしまつ前に逃げ出してしまった……。

く久美の家く

く久美視点く

「ただいま……あれ？母さん何をしている。」

家に帰ってみたら母さんがあたしの部屋の中をコッソリ覗き込んでいた……怪しい。

「あ、久美ちゃん……リリちゃん学校で何かあったの？」

「?いや、弁当を届けてくれてその後龍二に会いに行くって言っ
てから会って無いけど……。」

「そう……リリちゃん、学校から帰ってきてから変なのよ。」
「変?」

首を傾げつつ、母さんと一緒に部屋を覗いてみると……。

「……………はぁ……………」

こっちに背中を向けてるけどため息がハッキリと聞こえた。

「……………リリちゃん、どうしたのかしら?」

「さ、さぁ?」

こんなリリアン見たことないけど……。

「声かけてみた?」

「それが全然反応が無いのよ。久美ちゃんなら大丈夫だと思うけど。」

「なら……………」

とりあえず部屋に入った。

「リリアン。」

「……………久美、おかえり……………」

こゝ、声が何か……何というか……

い、色っぽい……………。

第四十六の話 リリアンの奮闘（後書き）

リリアンのキャラが壊れていないか心配です・・・（汗

後最近、日頃の疲れを癒そうとして遊びまくってたらタンスの角の小指ぶつけて痛がって転がってたらテーブルの足に顔ぶつけて痛みで立ち上がるうとしたらテーブルに頭ぶつけて一瞬死んだハムスターが川の向こうで手を振っていました（臨死体験以外マジ話）。

第四十七の話 両親からの贈り物

（龍二視点）

さて、今日の昼飯は手作りハンバーグつつーわけでただいま挽肉とその他もろもろの材料をコネコネしております。こねこね。

【ピンポーン】

？誰か来たか？

「おいアルス。悪いがちょっと出てくれねえか？」

「あ、はい。」

アルス達がリビングでかの有名なサングラスのオッサンが出てくるお昼の番組『いいも』を見てたんで暇と見なし一番物分りがいいアルスにインターフォンを取らせる。

「はい。・・・あ、はいわかりました。」

【ガチャ】

「リュウジさん。宅配便だそうですよ？」

「あ、そうか？じゃ判子持って出てくれ。下駄箱の上にあるから。」
「はいはい。」

大分慣れてんなアルス。

「リュウジさん、こんなの届きましたよ。」

しばらくしてから、大きめの箱を抱えたアルスが帰ってきた。

「誰から？」

「さあ……この言葉はボクにはちょっと。」

「私も無理。」

「私も。」

「やれやれ。」

しゃあねえから手についた肉を洗い落として三人のところへ。

「えっと……。」

英語か……ある程度の読解力を持つてるから差出人くらいわかる。

日本語に訳すと……

『差出人 荒木 省吾・荒木 真帆』

……。

バカ親からだった。

「誰からですか？」

「あゝ・・・うちのバカ親どもだ。」

「え！？それじゃお義父さんとお義母さん！？」

「何故に！？」

つーかクルル、お前の親父とお袋じゃねえっつの。

「とりあえず開けてみようよ。」

「そうだな。」

贈り物とは珍しいし。

箱の蓋に付いているテープを剥がして・・・

【パカ】

開いた。

「どれ・・・。」

中身を覗きこんでみる・・・。

「・・・。」

「リュウジさん、何が入ってたんですか？」
「見せて見せて〜！」
「私も〜。」

三人も中身を覗きこんだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………何ですかこれ？」

「ガラクタ。」

「一言で片付いちゃったね。」

「見たまんま……………」

しゃーねえじゃん。ガラクタなんだからよ。何よなんこのお土産みたいな使い道のわからん奴の数々は。

うーん親に対しては俺ツツコミに回りそうだな〜。

「……………お？手紙が。」

ついでに手紙も同封されていた。ちゃんと親父とお袋の名前も書いてある。

え〜つと……………？

「・・・ホントすごいですねお二人とも・・・。」
「まあな。」

俺でも認めるくらいだからよっぽどだ。

「つか親父は予知能力でもあんのか？破り捨てようと思ったし焼き捨てようと思ったし粉々にしようと思ったし、全部当ってんじゃん。やるね親父。」

「・・・それといつか帰ってくんのかあいつら・・・まあいいけどな俺とっくの昔に慣れてるし。でもこいつらが・・・大丈夫かね？」

「あ！リュウくん見て見てー！」

「・・・ま、今更心配してもしかあないな。」

「何だクルル？」

「これ可愛い〜！」

差し出された手を見てみれば・・・。

「お？マトリョーシカじゃねえか。」

「まとりよーしか？」

首を傾げるクルル。そうか、こいつらの世界には無いんだな。まあ予想ついてたけど。

「ちよっと貸してみな。」

クルルからマトリョーシカを受け取って頭の部分を引っ張ってやる。

【パカ】

「あ！小さいの出てきた！」

「まだ出てくるぞ。」

でもっかいパカっと。

「すごーい！！可愛いー！！！」

そこまで言われたら親父達も報われるだろうな・・・俺どう反応したらいいかわからんが。

「・・・・・・・・・・。」

「ん？どしたアルス？」

マトリョーシカで遊んでいるクルルに対し、アルスはある物を凝視していた。

「・・・・・・・・こ、これは・・・・。」

「？」

アルスが取り出したのは・・・

「ああ、パンダのぬいぐるみか。」

「ぱ、パンダ・・・ですか・・・・。」

多分中国のだろう。いや、可愛いもんだ。

「・・・あ、あの・・・。」

「あ？」

「これ・・・も、もらっても・・・？」

「ああいいぞ。」

「あ、ありがとうございます・・・。。。。。。やった」

今すつげえ嬉しそうな声で呟いたろ。

「ホントいろいろあるね」。まあ私には興味無いのばかりだけど。

「

「ほお？じゃお前がさつきさり気なく箱から引っ張り出してその上楽しそうに乗っかっているそれは何だ。」

「ぴえ！？あ、いやそのお・・・。。。。。。べ、別に何だっていいでしょ！！」

逆ギレすんなイタリア製クッションに乗った贅沢妖精が。

にしても・・・まったくうちの親どもは・・・。

。。。。。

「・・・ま、こいつらが喜んでるからいいか。」

さて、そろそろハンバーグ焼くかな。

・・・あの二人が帰ってきたらこいつらどんな反応すっかね？

第四十七の話 両親からの贈り物（後書き）

まだ両親は出ませんが、そのうち出します。ただ今ネタ考え中ですので。

ついでにマトリョーシカというのはロシアの人形です。卵みたいな形してて中から次々と小さい同じ人形が出てきます。小さい頃はまってました。

あ、そうだ。最後に一つ小話をうちの親父のセリフ

「サンドゥバッグに」

あ、これ明日のジョーのテーマね。

「立て！立つんだ、ジャー………！！！！」

ジャーって何よ？

第四十八の話 ？お礼言われるようなことしたか？<前編>（前書き）

今回は短いですが前編、後編に別れています。

第四十八の話 ？お礼言われるようなことしたか？<前編>

（?????視点）

本当に後悔した・・・何で暗い夜道を、しかも一人で通ったのか・

さつきまでずっと友人と一緒にだったのに・・・こんなことならさつき、

『大丈夫だよ、家そんなに遠くないし。それにいざとなったら大声で叫ぶし、全力で逃げるから。』

・・・って言うって一緒に帰る提案を蹴らなきゃよかった。

「こーんな夜道を一人でなんて、危ないな。」

「まあいいじゃねえの。これから俺らが楽しませてあげるんだからさ？」

「フヒヒ・・・。」

・・・まさか、いきなりこんな数の男の人達に囲まれるなんて思ってもなかった・・・。

「おつとお、逃げようつたって無駄だからねえ？」

なるべく気付かれないように逃げようとしたけど、すぐに逃げ道を塞がれた・・・さつきから大声出そうとしても恐くて・・・叫べな

いよお。。。。。

「へへ。。。。それじゃ楽しもうぜ。」
「い、いや。。。。。」

後ろから羽交い絞めにされて。。。。動けない。。。。

「じゃまずは俺からいこうか。。。。。」
「!」

や、やだ。。。。来ないでよお。。。。。

「何してんの〜?」

『!?!?!?』

え。。。。。

「あんだテメエ?」

「見て分らんか?人間。」

暗くてよくわからないけど。。。。誰?

「テメ、ぶざけてんのか?」

「いや、いたってマジメ。」

「何だこいつ・・・死にたくなかったらさっさと消えな。」

「？それは殺す発言ですかい？あっはっは、バカかテメエら。そんなベタな脅し通用するわけがねえじゃん。」

「あんだとお!？」

「とゆーよりさ、テメエらみたいなゴミクズにやられるほど俺もヤワじゃねえけんどもな。」

す、すっごい挑発してる・・・。

「んだとテメエ!？」

私を羽交い絞めにしてる男以外の連中が一斉に乱入してきた人に襲い掛かっていった。

「調子乗りやがって・・・死ね!!！」

あ、危な・・・!

「ん。」

【ヒョイ】 避ける

「うお!？」

「龍閃弾。」

【ズゴオオン!!】

「ぐぶえあ!?!」

【ズゴン!】 壁にめり込む

.....。

「な、何」

【バゴン!】 腹に直蹴り

「ぐげえ!?!」

【バキ!】 鼻にエルボー

「ぎゃあ!?!」

【ボキリ】 軽く腕の骨を捻って折る

「がああああ!?!」

【グシヤ】 形容できません

「ぎゃああああ!?!」

【キーン】 音で判断してください

「おおおお!?!?!?!」

あ、最後の人が一番ダメージ大きそう・・・

と、とゆうより始まって三十秒も経ってない・・・。

「な、な、何なんだよテメエ・・・。」

「いやだから人間。」

「人間がそんな動きできるわけねえだろ!?!」

一理あり・・・。

「いやできてるんだけどなあ・・・まいいや。とりあえずアンタもどっか負傷してくれね?」

「な!?!よ、寄るな!こいつがどうなってもいいのか!?!」

「ひ！」

わ、私人質にされても……（泣

「あいよ。」

【ブゴシャー！】 顔面に飛び膝蹴り

「ふっふっふっ！……!?」

……

「はいチェックメイト。」

早い……あっという間に……

「まったくゴミクスが俺を本気にさせようなんだ5325年早い。」

ち、中途半端だ……

でも……助かったあ……

「さ、帰るか。」

「え、あの……」

お礼が……

「あ、そうだ。」

？

さっき倒した男の近くまで行って……

「てい。」

【キーン】 大事な部分蹴り上げ

「ぎゃぴい!?!」

.....。

「今回はまあ早く帰りたいからこれで済ましてやるけどよ、次妙な真似したら.....」

肉体から神経まで崩壊させてやるよ」

ゾッ!

「ひ、ひい.....」

【ガク】 気絶

こ、こわ.....」

「あ、あの……。」

「そんじゃ家までダッシュ。」

【タタタタ……】

あ……行っちゃった……。

結局、お礼言いそびれちゃったな……名前もわからなかったし……。

「……。」

でも街灯のおかげで顔は確認できたから……また会ったらお礼言おうかな。

ヘッドフォン……付けた人……。

〈帰宅〉

〈龍二視点〉

「ただいま。」
「リュウくん！」

飛びついてきたバカ（クルル）をひよいとかわしてリビングへ。後ろで何か「むぎゅっ。」ってな感じで潰れたような音が聞こえたが幻聴だ。

「リュウジさんおかえりなさい。」

「遅かったね〜リュウジ。」

「ああ、ちよつとな。」

まさか立ち読みしてたらこんな時間になるなんて思わなかったぜ。おまけに自分の力もわかっちゃいねえバカどもの相手もしちまったし。今度から事前に家に連絡入れておこうかね。

「リュウくん！」

「おっと。」

いきなり腰に抱きつきやがったよこいつ。

「リュウくん、お腹すいた〜！」

「あ〜わあつたわあつた。メシ作ってやつから待ってる。」

まあ遅くなったし、今回だけ抱きつきは許可してやつかな。

？そついや何かさっきチンピラの他にも誰かいたよつな・・・

・・・

ま、
いいえ。

第四十八の話 ？お礼言われるようなことしたか？<前編>（後書き）

後半へ続く。 ちびまる子ちゃんのアレーター風に言ってみた。

第四十九の話 ？お礼言われるよつなことしたか？<後編>（前書き）

前回の続きです。

第四十九の話 ？お礼言われるようなことしたか？〈後編〉

〈?????視点〉

〈次の日〉

「はあ……。」

「……絵里^{えり}、さつきからため息吐きすぎ……。」

「吐かずにはられないのよ明^{あき}ちゃん。」

「はあ、そうですかい……。」

学校での昼食……私こと滝川絵里は、友人の三田明ちゃんと一緒にお弁当をつつついています。

でも……はあ……。

「朝からずっとその調子だけど……一体どうしたっていつのよ？」

「え？べ、別に？」

「ベタに誤魔化そうとしないで。」

う、バレてる……。

「……まさか……絵里アンタ……。」

「え？」

「……恋わずらい!？」

ブッ!!

「ちょ！声が大きい上に違うよ！！」
「だってず〜っと上の空だからさあ。」

楽しそうに言わないで……。

「違うつてば！昨日……あ。」

「昨日？」

あっちや〜……。

「ねえ、昨日どうしたのよ？」

「え、え、な、何も？」

「だからベタに動揺し過ぎだつてば。何なのよ？そんな秘密にしなきゃいけないこと？」

「……はあ。わかったよ全部言います。でもあまり他言しないでね？」

「わかつてるつて！アンタと私の仲じゃない！」

あなた裏で何て呼ばれてるか知つてて言ってる？

「実はね……。」

〜説明中〜

「……つてことなの。」

「省略した感が丸見えだけど、よくわかったわ……。」

それは言わないで。

「でも大丈夫だった？他に何かされてない？」

「うん、間髪だった。」

あの人があの場合にいなかったら・・・ゾっとする。

「ところで明ちゃん、その人に心当たりある？お礼言わなきゃ。」

「ふむ、ヘッドフォンをかけた人ねえ・・・」

あ。

!?

「思い出した!？」

「・・・該当する人物が一人いた。」

呟いてすぐに懐からメモ帳を取り出す明ちゃん。

・・・明ちゃんって影では『一流情報屋』って呼ばれてるんだよね・・・だから彼女を敵に回すなって中学の頃から囁かれてたんだっけ。

「・・・」

「へ？」

「アンタが探してる人、わかったよ。」

「ほ、ホント!？」

さすが情報屋って言われてるだけある！

「で？何ていう人？どこにいるの？」

「まあまあ待ちなさいって。慌てなくてもいつでも会えるし。」

へ？

「その人の名前は、『荒木 龍二』。トレードマークは首にかかったグレーのヘッドフォン。天和湾屋てんやわんや高校三年生。」

「え！？それって……。」

「私らの先輩にあたる人ね。」

昨日の人も同じグレーのヘッドフォンだったし、その上同じ高校だったなんて……。

「まあ会おうとすれば会えるわね。」

「そうだね！授業終わったら早速会いに行かなきゃ！」

「あゝ……難しいと思うよ？」

「え？」

「帰るの物凄く早いから。」

「？それが？急いで行けば間に合うかもしれないじゃない？」

「それが出来てりゃ皆やってるって。」

？どういふことかな？

「足の速さなんて、陸上部の連中が全速力で走ってもあの人だったら小走り程度で軽く追い抜いちやうし、全速力で走ったら新幹線なんて軽く追い抜くって言われてるわよ？」

「へ……？？」

し、新幹線以上の速さ？

「……他の情報、知りたい？」

「……。」

・・・し、知りたい・・・興味湧いてきた・・・。

「・・・う、うん・・・お願い。」

「はいよ。まあ私達ってまだこの高校入学したばかりでよく知られてないけどさあ、二年、三年の間では相当名前が知られていて、一年生だって数日経ったら全クラスに知れ渡るくらい有名なしいよ？そついやこないだ、一年のバスケットと空手部が体育館のコートを取り合いしてた時に荒木先輩が仲裁に入ったんだけど、両方から暴言を受けて、切れて全員ボコボコにして正座させて説教したんだって。」

「す、すごいね・・・。」

「いや、ボコボコにするくらいでもマシでしょう。何てったってあの人がちよつと本気を出せば・・・あ、これマジな話だから笑わないですよ？」

「う、うん。」

「あの人がちよつと本気を出せば・・・山三つくらい軽く消せるらしいわよ？」

「・・・は？」

「下手したら大陸一つ消せるかもしれないし。」

お、大袈裟過ぎじゃ・・・？

「その顔・・・信じてないでしょ？」

「う・・・うん。イマイチ実感わかないし・・・。」

「まあそつだよねえ。そんなのサヤ人ぐらいじゃないと無理だよね。」

サヤ人？

「で、あの人の強さは、何か気功術っていうのにあるらしいよ？」
「気功・・・術？」

「詳しくわかんないけど、体を強化させたりできるらしいんだけど・・・それしなくても体力測定の際に握力測定器握り潰したり、デコピンで岩を粉々にしたりできるんだって。」

す、すご・・・。

「で、彼の武勇伝を上げていくとしたらパンチ一発で三つの暴走族を吹っ飛ばしたとか、ヤクザの組織五つを三分もかけずに壊滅させちゃったこととか・・・あと公にされてないんだけど、国会乗り込んで首相脅したとかあるらしいよ？」

「しゅ、首相！？何で!？」

「動機はわかんないんだけど・・・世間ではある意味救世主って呼ばれてたんだって。」

「へ、へえ・・・何でだろうね？」

「さあ？あ、もう一つ。これが一番世間で知られてないね。」

「？」

「・・・ある国の内部紛争を一人で武力解決、終戦に導いたって。」

「え、えええ!？」

「まああくまで噂だからね。事実かどうかはわかんないけど。」

す、すごい・・・。

「ただ普通に人一人殺せるくらいの力を持つてるんだけど、死人が一人もいないんだよね。まあ攻撃くらった人は大抵怪我して病院行きか幻覚見るほど精神に異常をきたしたり廃人になったりして精神病院行きかどつちかだけだね。」

「・・・。」

「絵里を襲った不良達も運がよかったみたいだけど・・・その後ど

うなつたのやら。」

こわ……。

「まあそんな人だから、いろんな通り名で呼ばれてんだけどね。」
「ど、どんなの?」

「え〜と、『最強の暴君』、『Sの帝王』、『悪魔も泣き出す男』、『恐怖の大王』、『ブラックドラゴン』、『現実のサヤ人』、『毒舌魔人』、『世界中の男の敵』、『女の仇』、『鈍感大王』……数え上げたらキリがないわ。」

「へ〜……ん? ちよつと待って最後の三つがよくわかんないんだけど?」

「あ〜『世界中の男の敵』と『女の仇』と『鈍感大王』のこと?」
「うん。」

「あのね、荒木先輩の周りには誰がいるか知ってる?」
「え、知らないけど。」

「この学校で一番人気のある人が、空手部主将の“立花久美・アンドリュウ”っていう人と、生徒会長をやっている“斉藤香苗”っていう人。ミス天高ランキングで一位、二位を争うトツプクラスの美人なんだって。今じゃ立花先輩が一位だけど、去年は斉藤先輩が一位だったのよ。この二人は荒木先輩と仲がいいらしいよ?」

「ふ〜ん……。」
「さらにこないだどこかの海外からの留学生で、“クルル・バステイ”って人と“アルス・フィート”って人もいるんだけど、この二人についての詳細はよくわかってないの。でも立花先輩と斉藤先輩以上に荒木先輩と一緒にいることが多いのよ。」

「へ〜……。」
「で、この四人なんだけど……荒木先輩に結構アプローチかけてるの。特に斉藤先輩が。」

「……へ?」

「つまり、皆揃って荒木先輩に惚れてるってこと。」

え、ええええ!!???

「だからこの高校の男子達は皆して荒木先輩を目の敵にして、『世界中の男の敵』って呼んでるんだってさ。で、『女の仇』と『鈍感大王』っていうのは両方とも同じ時期に付けられたらしくて、その名の通り、荒木先輩って信じられないほど鈍感なのよ。今までだって告白してきた女子を無意識のうちに振った回数数知れず。」

「あ、なるほど・・・とゆーことは四人の気持ちは・・・。」

「まだ届いてないのよね。」

・・・何だろう、ちょっと安心したような・・・。

「あ、でも・・・やっぱり何回か告白されたことがあるなら荒木先輩のファンクラブとかも?」

前の中学の時だってそういうのがあったし。

「あゝ・・・まああるにはあるんだけど・・・。」

?

「立花先輩と斉藤先輩、それで荒木先輩の親友の楠田先輩のファンクラブ、最近作られたクルル先輩とアルス先輩のファンクラブなら皆知ってるんだけど・・・。」

「だけど?」

「・・・あれはファンクラブというより・・・宗教かなあ?」

・・・は?

「あの人の強さに心酔してて、どこかの誰かが裏で建てたらしいんだけど・・・知ってるのは私も含めてごく一握りの人だけ。それもただ存在してるっていうことぐらいしか知らないから、どんな活動してるのかもさっぱりわからない。だから詳しくは私でも語れないのよ。」

あ、明ちゃんできえ語れないなんて・・・。

「でも名前は知ってるわ。確か・・・『龍二教団』。」

「そのまんまだね・・・。」

「エンブレムに龍が彫られてるのが特徴だとか・・・ここまで知るのはすごい苦労したわ。」

そこまで苦労するほどのものかしら？

「ま、私が知ってるのはこれくらいかな？」

「うん、いろいろわかった・・・でも何でそこまで荒木先輩のこと・・・。」

「別に他意は無いよ？この学校で名のある人達を一通り調べてただけだから。」

「それ意味ある？」

「あの人達のファンとかにいろいろ情報売ったりしてるの。結構お金になるのよこれ あ、アンタからはお代は取らないよ。友達のようにみって奴で。」

「あ、ありがとう・・・。」

「あゝ、でも荒木先輩って弱味が全然無いのよね。」

結局弱味ですか・・・。

「で？結局どうすんの？」

「な、何が？」

「何がじゃないわよ。お礼言いにいきたいんでしょ？その荒木先輩に。」

「あ……うん。」

な、何か恐くなってきたけど……お礼は言いに行かなきゃ。

「じゃ今から行ったら？放課後じゃ絶対間に合わないし。」

「うん……あ、でももう少してお昼休み終わっちゃうしな……」

いつの間にかお弁当も食べ終えてたし。

「あ、そっか。じゃ次の五限目の授業終わったら言いに行くっか。私も付いてってやるからさ。」

「あ、ありがとう明ちゃん。」

「いいっていいって」

荒木先輩、か……。。。

〈五限目終了時間〉

【キーンコーンカーンイエーイ！！！！！！】

え！？

「な、何今の・・・？」

「さあ・・・。」

変にテンションが高かったチャイムに思わず明ちゃんと私、二人揃って目が点・・・

「・・・ま、まあとりあえず早く行こうよ。」

「そ、そうだね。」

若干疑問に残るチャイムは置いていて、すぐさま三階にある三年生の教室へ。一年の教室は一階にあるから、階段を使えばいいんだよね。当然だけど・・・。

「は、は、は！」

【タンタンタン！】

「ちょ、ちょっと待ってよ絵里！！！」

「あ、ごめん！」

あんまりにも急いでたから明ちゃん置いてくところだった・・・。

「ぜえ、ぜえ・・・も、アンタ急ぎ過ぎ。私はアンタほど体力無
いんだからさ。」

「ごめんってば。」
「まあいいや・・・その勢いも荒木先輩を見たいが為に！でしょど
うせ。」
「！？ち、違うよ！早くお礼言いたいから・・・！」
「ほらほら早くしないと時間無くなるよ。」
「も、も〜！明ちゃんの意地悪！」

く三階く

っ、着いた。

「えっと、荒木先輩の教室は・・・あ、あそこね。」

さすが明ちゃん、そこまで把握してるんだ・・・。

「すいませ〜ん。」

「って明ちゃん!？」

すでに教室の中の人に声かけてるし！行動速過ぎだよ〜！

「ちよつと明ちゃん！」

「わわ！な、何よ絵里〜！」

思わず明ちゃんの腕を引っ張った。

「ま、まだ心の準備が・・・。」

「だからって時間無いんだからそんなの必要無いでしょ？」
「あつう〜……………」

で、でもお…………。

「？誰だお前ら？」

「へ？」

な、何か聞きなれた声が背後から…………。

「……………あ。」

「ん？」

振り返れば…………グレーのヘッドフォンが。

「あ、荒木先輩ですよね？」

「ああ、そうだが？」

や、やっぱりいいー！

「どうも！私達一年生です！私の名前は三田明って言いますー！この

子は滝川絵里です!」

「あ、あうあう……。。」

明ちゃん、喋るの早いよ〜!

「ん、そうか。まあお前らの名前知ってもどないせえっちゅーのが本音なんだがな。」

い、一刀両断された……。。

「まあいいか。で?お前ら俺に何か用か?」

「はい!って言うても私じゃなくてこの子の方が用があるんですけどね。」

ズイツと前に出されました……。。

「は、はえ!?え、えええええつと……。。」

「?」

お、お礼お礼お礼……。。

「あ、あの!」

「あ?」

よ、よし!」

「き、昨日は助けてくれて、あ、ありがとっございました!」

【バツ!】

い、言えた!……。頭も下げれた!

思い出してくれた〜！

「ん〜、俺あん時お前さんの存在にすら気付いてなかったし、通行の邪魔だから蹴散らしたただけだし。」

き、気付いてなかったんですか・・・それはそれでショックです・・・。

「・・・ま、助かったんならそれはそれでいいか。次は気を付ける。」

「は、はい!」

「さ、お前らさっさと教室帰れ。欠席扱いされっぞ。」

「へ?」

まだ、チャイム鳴ってないんですけど・・・ってあれ?周りの人誰もいない・・・。

「今度はチャイム囁きバージョンだからな。時計つとかねえと聞こえないぞ。もう遅いかな。」

「え、ええええ!!???」

そんなのありいい!!???

「あ、あの、失礼しました!」

「それじゃ!」

「ん、またな。」

頭下げて全速力で教室へと帰る私達。一瞬視界の端で荒木先輩が小さく手を振ってたのが見えた。

一年教室前 廊下

「思ったよりいい人だったね。」
「ね。」

えっと・・・結局あの後欠席扱いの上、ベタにバケツ持って廊下に立たされています。

いつの時代の罰なんですか・・・とはツツコミません。

「やっぱり情報だけだと人の人格ってわかんないもんなんだな。」
のんびりした感じだったし、あれで学校最強だなんてあんま信じられないし。」

「うん・・・そだね。」

「あれあれ？もしかして・・・絵里、やっぱり惚れちゃった？」

「え！？そ、そんなことないよ！」

「照れるな照れるな！」

「あ、明ちゃん！」

「こらあ！うるさいぞお前達！」

「ごめんなさい！！」「ごめんなさい！！」

先生に怒られた・・・はあ。

「・・・でも、また荒木先輩に会いたいなあ・・・って思う自分がいました・・・。」

（龍二視点）

「リュウちゃん、さっきの子達誰？」

「一年だよ。昨日の礼だとさ。」

席に着いたら香苗が声かけてきた。今は授業中だが、相手の先生は超ヨボヨボの爺ちゃん先生、耳が超遠い、おかげで大声で喋り放題のこと。年寄りには丁寧にいたわりましょう。つか何で教師勤めてるのかある意味学校の七不思議。

「お礼、ですか？」

「そ。」

「何かしたの？リュウくん。」

アルスとクルルも会話に参加。

「あゝ、何か昨日通行の邪魔してたチンピラども打ちのめした時に偶然助けたらしくてな、その礼だとよ。」

「・・・偶然助けたって、気付かなかったの？その子に。」

「オウイエー。」

「・・・まあ、そういうのリュウジさんらしいですけどね・・・。」

どーゆーこったアルス。

・・・つーかあいつら・・・名前・・・

・・・ヤベ、忘れた。また会ったら聞いておこう。

「こりゃー！そこ話してにゃーで授業聞кинしゃいー！」
「「「「はーい。「「「「

迫力ゼロ。

第五十の話　くおまけく　過去のバレンタイン（前書き）

今回は龍二達が高校二年生の頃のお話。主題はバレンタインです。

・・・ってバレンタインすでに終わってるんですけどね。

まあ五十話までいった記念及びバレンタインを主題としたものも書きたいな〜って思ってたところですし。

それではどうぞ。

第五十の話　くおまけく　過去のバレンタイン

く去年、龍二達が二年生の頃く

く龍二視点く

「メシくメシく。」

やっと昼飯食えるぜ。

「雅、一緒にメシ食おうや。」

「おう。」

俺らは学食でラーメン食うことのほづが多いが、今回は弁当だ。たまには教室でっていうのもいい。

「おうお前らく。」

「？何だ恭田。」

そっついやこいつ忘れてた。

「今俺のこと忘れてたって思っただろ!？」

「よくお分かりで。」

「ひでえ!!--!」

ひどいも何も忘れてたんだからしゃあねえだろ。

「それより！今日が何の日か知ってるか！？」

「いや知らん。」

「あゝ・・・あ、そうか。」

雅にはわかったか。俺にはわからん。

「そう！今日はバレンタインデー！！女子が男子に思いのこもった
チョコレートをプレゼンツする聖なる日だ！！」

「・・・バレンタインデー？」

「お前いつつも忘れてるだろ。」

意味すら知らん。

「おいおい、普通バレンタインを忘れる奴がいるか？」

「ここに。」

「自分を指差すな。」

だあって知らんもんは知らん。

「・・・お前は一般常識を覚えようとする気力があるのか無いのか。」

「

無い。」

「即答すな。」

「で？そのバレンタインデーとやらが何だ。」

「決まっている！俺は、今日こそは愛しいあの子からチョコをもら
う！・・・」

「どの子？」

「え、いや、その・・・だ、誰でもいい!!」
「おいおい。」

ふむ・・・どうやらバレンタインというのは女子が男子にチョコやるっていう日か。何でそんなヘンチクリンな日が出来たのやら。

「お前さ、バレンタインデーっていう意味を何度教えたらわかるんだ。どう考えてもわざとしか思われねえぞ。」
「んなこと言われてもね。」

どうも興味がない知識とかは頭に入らないようだな俺の脳味噌。

「にしてもバレンタインデーかぁ・・・確かに男子にとっては楽しみではあるな。」

「そうだな。タダチョコ食えるしな。」
「うん、お前の場合負け惜しみとかじゃなくて純粋な気持ちを言ってるんだろうな。」

はじゃ？

「あ、あの・・・。」
「「「「？」」」」

急に呼ばれたんで振り返ってみれば、何か見慣れない女子が教室前に。

「あの、荒木先輩っています？」

「俺だが？」

「な、何い！？龍二だとお！？」

うっせえぞ恭田。呼ばれたぐらいで何驚く。

「わり、ちと行ってくらあ。」

「おう。」

雅に言っておいて呼んだ女子の下へ。まったく食事中に……。

「何だ。」

「あ、あの……。」

妙にもじもじしとんな。

「……こ、これを！」

「？」

？何か紙包み渡された。

「何これ？」

「え、えつとその……。」

……あ、チョコか。バレンタインだもんな。

じゃせめて時間考える。昼休み始まったばかりの時間に来られてもな。

「……こ、これを……。」

「あ？」

「これ、楠田先輩に渡してくれませんか!？」

「却下。」

「ええ!？」

0・2秒で断ってやった。

「んなもん本人に直接渡せ。いるじゃんあそこに。」

「で、でも……。」

「チヨコ渡すぐれえで何言つとる。こっちはメシ中だつっの。」

まったく俺の憩いの時間をそんなしよーもねーことで……中途半端に邪魔されるの大嫌いなんだよ俺。

「う、う……。」

「……しゃあねえな。めんどっちいけど渡しといてやるよ。」

泣き出したんでとりあえずチヨコの箱を受け取った。ま、渡せば済む話だしな。

「あ、ありがとうございます!」

「ん、じゃもう帰れ。」

早くメシ食いたいんだよ俺は。

お礼言われてすぐに背を向けて雅達のとこへ帰る俺。

「……何かあんま穏やかな雰囲気じゃなかったよ。うな気がするん

「だけど・・・？」

「ああ、お前にだって。」

「？俺か？」

ヒヨイとチヨコの箱を渡す。

「え、じゃお前渡してくれって頼まれただけ？」

「そ。」

「あ・・・ドンマイ」

ポンと俺の肩に嬉しそうな顔しながら手を置く恭田・・・何がドンマイ？

「まっつたくしよーもねー時間くつたぜ。」

ドツカとイスに腰を下ろす俺。すぐさま弁当にありつく。うまうま。

「そっついや雅つてよ・・・去年もめちゃくちや女子からチヨコもらつてたよな。」

「ま、まあ・・・な。」

「？そだっけ？」

「それすら覚えてねえのかよ。」

ん、どーでもいいからな。

「で？今日でいくつもらつたんだよオメエはよ。」

おい恭田。不機嫌丸出し。

「えつと・・・143個。」

「もらいすぎだろ!？」

「お、いいね。それだけありゃメシの後のおやつ困らねえな。」
「うおい!？」

うむ、節約節約。

「あのな龍二。バレンタインチョコってのはな、もらった奴しか食べねえんだよわかる？」

「知らん。チョコはチョコだろ？」

「・・・お前が言っと何か説得力あるのは何でだ？」

「はにゃ？」

?何を言ってる恭田?

「ああ、いいよ別に。こんだけの量一人じゃ食いきれないし。」

「サンキョ。」

「遠慮知らねえよなお前って。」

もらえるもんはもらえってのが我が家の家訓の一つだ。

あくにしても弁当つめえなあ。我ながらナイスな味付けだ。

「すいませくん。」

「？」

今度は何よ？

「あ、いたいた リユウちゃくん!」

「・・・ふう。」

こんな時に香苗かよ。

「リュウちゃんリュウちゃんリュウちゃん！」

「うっさい黙れバ香苗今の状況考える。」

メシの間はうっさい話禁止。

「え〜つれないな〜。せつかく持ってきたのに〜。」

「?何を?」

「決まってるでしょ?フフ〜ン」

?何かカバンあさり始めた。

「ジャーン!」

【バツ!】

変な効果音付で現れたのは・・・。

「・・・あ〜チヨコね。」

「ピンポーン!」

何かえらい可愛らしい紙で包んだなあチヨコ。

『な、なにいいいいいい!!?!?!?!?!』

?男子うるせえな。

「はいリュウちゃんに本命プレゼント!」

「?本命?」

何じゃそりゃ?

『ほ、ほ、ほ、本命だとおおおおおおお!?!?!?!?!』

だあらうるせえっつーの男子ども。

【バガアアアン!!】

「龍二いいいい!!!!」

『!?!?!?!?!?!?!?!?!』

ありゃりゃ、ドアが。

「テンションたけくな久美。」

「い、いつも通りだろう!?!」

「じゃ訂正してやる。鬱陶しいな久美。」

「ひ、ひどい!?!」

正直なこと言ったのに何を言うか。

「で?俺に何か用か?今日は手合わせの日じゃねえぞ?」

こいつとの手合わせの日程決めてるんだよなあらかじめ。知らない奴に言うておく。

「い、いや今日はその。。。。」

「?」

「い、言っておくけどお前が憐れだから情けでやるんだ、ありがとう
く思え！」

「ん、サンキユ。」

何が憐れなのかは聞かない。知らんしどうでもいい。

「あれ〜？久美ちゃんそれこないだ私の家で四苦八苦して作った奴
」

「ああああちちち違っ違っ違っこれは駅前スーパーで買った奴だ！」

？なあにを慌てる必要がある？

「り……………龍二……………」

「んにゃ？」

何か恭田がすごい声発してるな。

『テメエ……………』

「おお？」

見ればクラスの男子女子関わらず全員目が血走っとなるな。

……………

ここで暴れるのはさすがにまずいか。

「じゃ、俺ちよつと野暮用片付けてくるわ。」

「あ、リュウちゃ」

「はいこれ。」

差し出されたのは・・・“見覚え”のある紙でラッピングされた箱。

「これは・・・。」

「あ、これは義理だからね。市販の奴だから。」

なるほど、駅前で売ってた奴だから見覚えがあったのか。

・・・まあ文句は言えないな。

「ああ、ならあたしからも。」

「お前も？」

「これ“も”義理だ。」

「も、”は”でしょ久美ちゃん。」

「ち、違う！龍二のは本命じゃなくて・・・！」

言い争う二人を尻目に、俺は久美からの義理チョコを眺めつつ思った。

・・・バレンタイン如きではこいつらの気持ちに気付かないだろうな龍二の奴、と。

三分後、龍二が清々しい顔して戻ってきたのは言うまでもない……。

ついでに放課後、学校から十分ほど離れたグラウンドに龍二を追いかけてたケダモノ集団もというちのクラス全員が死屍累々のごとく倒れていたのはまた別のお話……。

第五十の話　くおまけ　過去のバレンタイン（後書き）

龍二はバレンタインデーという名前はおろか内容さえ知りません。本人にとってはどうでもいい知識だそうです。

ただ一つわかったことと言えば・・・“タダチヨコ食べる日”ということ。うん、合ってるように間違えてるね確実に。

第五十一の話 『第三回、血まみれの雪合戦 死ぬのは誰だ大会』 <前編> (前

雪は見てるだけで楽しいです、もちろん遊ぶのはもっと楽しいです。

〈龍二視点〉

「リュウくん見て見て〜！」

「ん？・・・おお、雪か〜。」

朝、えらい寒いな〜って思ってたら雪が降ってる上に積もってた。春も近いのによく降るぜ雪。ご苦労さん。

「すごい！雪って初めて見た〜！」

「？初めてなのか？」

「うん、本でしか見たことないの。私が住んでるお城の周辺は暑いし、そこから外に出るなんて全然無かつたし・・・。」

これはいわゆる箱入り娘って奴？

「さ、さささささ寒いです・・・。」

「寒いよ〜。」

で、こっちは布団入り娘×2。

「おいおい、芋虫みたいだぞお前ら。起きろ。」
「だだ、だつて〜・・・寒いのが苦手なんです。」
「雪は妖精族にとっては大敵なのよ〜。」

ファイファイはともかく何を抜かすか勇者。

「まったく・・・出ない限り飯は食えんぞ。」

「い、いりません。布団から出たくないです。」

「同じく。」

「そ。じゃ俺らはコタツでぬくぬくとあったか〜いコーンポタージュでも食ってるか。」

「わーい」

「「ちよつとお!?!?」「」

布団入り娘も動かす飯の魔力。最強。

〜朝食後〜

「「ごっそさん。暖まったか?」

「ぬくぬく〜」

それは返事として受け取ろう。

「・・・やっぱり寒い日はコタツですね。」
「あったか〜い」

いや〜どてら着て近くにストーブ、体はコタツの中とは見事な寒がりの理想像出来上がってるね〜アルスこの引きこもりが。

あ、こいつらえらいコタツに馴染んでるけど最初の頃は大はしゃぎだったんだぜ？とくにクルル。『わはー！コタツLOVE！』が感想。じゃ将来コタツと結婚しろ。

「ねえねえリュウくん！せっかく雪降ってるんだからお外行こうよ！」

スー普のカップを片付けてたらクルルから提案を受けた。

「ふむ……。」

雪ね〜・・・俺ももう十八、雪ぐらいで騒ぐなんて大人げねえしな。今は外で遊ぶより家の中でコタツ入りながらゲームしたいし。

「よっしゃ行くぞ！」

「おー！！！」

な〜んてつまらんこと考えると思うか？ガキの頃から雪降ってうれしくてにそこら辺転がりまわったこの俺が。スキー場で積もった雪にシロップかけてカキ氷の如く食ったこの俺が。

「え……じゃボク留守番してる。」

「私も。」

「おら行くぞお前ら。」

「ええ！？」「」

コタツに潜り込んだ寒がりどもを引っ張り出す。

「い、いやですよー！死にます！寒いです！二人だけで行ってきてくださいー！」「」

「ホント死ぬってー！」「」

「拒否権なし！」「」

「ほらほら行くよー！」「」

「いやだあああああ！」「」

「ふははははははは！」「」

抵抗空しくズ〜リズ〜リと引きずられていくアルス達でした

〜近くのグラウンド〜

〜アルス視点〜

【プュー】

「「ちぶつつつー！」「」

ちよつと風吹いただけで凍りそう……。

「ほれ、これが雪だるまだ。」

「かわいく！ねね！作り方教えて！」

「おうよ。」

……なのに何で元気なんですかあの二人……

魔王は全体的にピンク色で袖と襟にモコモコの毛皮みたいなコートを羽織っていて、その上同じくピンク色の手袋してるから防寒バツチリなのはわかるよ？かく言うボクも同じような服装で、違つといえはコートの色が白ってことぐらい。

……なのに、リュウジさん。あなたは何で防寒着らしい物一つも付けずにいつも通りの薄めの黒いジャケットにYシャツなんですか……見てるだけで寒いです……。

「やっぱりリュウジって……化け物？」

「フイフイ、それ失礼……いづくち！」

うゝ、クシヤミ出た……。

「ううゝ、やっぱりこの服だけだと寒い……。」

そりゃファイファイの服はカナエさんの家からもらった着せ替え人形用の服だもんね……。

「……………火よ、我に集え」。

「あ！魔法！？」

ちやつかり魔法使って掌の上に火球作ったよこの子！

「ふふ〜ん、あつたか〜い」

「ずるい！ボク火属性魔法使えないのに！」

「そんなの知らな〜い」

「うわあああ！ムカつく〜！」

こんなことになるなら火属性練習しとけばよかつた〜！

「おーいお前ら何してんだ。ボサっとしてねえで手伝えー。」

「へ？」

ふと気付けば何かスコップ持って雪を積み上げていくリュウジさんと魔王。

「何してんですか？」

「ちよつとなー。ほれクルル、あつちも。」

「はい。」

見ればあちこちに壁みたいな物が……………って作るの早っ！？

〜軽く五分後〜

「ん、完成。」

・・・。

「・・・何ですかこれ？」
「フィールド。」

フィールドって・・・辺り一面雪の壁だらけ。

「さて、これで連中が来ればオツケー。」

「？連中？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

まさか・・・。

〜三分後〜

「おい。」

・・・やっぱり。

「お、来たかモンジローズ。」

「誰だ。」

「・・・え？私も入ってるんですか？」

来たのは黒い防寒着を着込んだマサさんと同じ服を着たスティル・
。

「お、おはよう。」

「ああ・・・おはよう。」

・・・魔王とスティルはあの一件以来、お互い挨拶を交わせるよう
になりました。

「リュウちゃん！」

「リュウ兄ちゃん！」

「・・・寒い・・・。」

続いて来たのは、赤い防寒着を来たカナエさん姉妹と魔王の部下の
双子さん。

・・・同時に呟いたのはミカちゃんとロウ兄弟です。同感。

「龍二いいいいい！！」

「・・・。。。」

今度はクミさんとリリアン。二人ともリュウジさんほどではないけ
ど全体的に薄着。

・・・神経大丈夫ですか？と聞きたい・・・。

「はい全員集合ってことで。」
『は〜い……。』

・・・？何かすごいやる気ないような声ですね皆さん。

「声小さいぞー。大きな声出せー。」

「だ、だってリュウちゃん……。』」

「さささささ寒い。」

カナエさんとクミさんが抗議した……。ってクミさん結局寒いなら何か着て来てください。

「で、全員に集まってもらったのは他でもない。」

うわースルーしましたよこの人……。

「こんだけ雪が降ってるってのに世間では家でコタツに入ってぬくぬく過ごそうと考えている不届き者が多い中、外で遊ばないというのは誠にもつたいない。」

うん、家で過ごそうと考える人達の気持ちも考えてあげましょうよリュウジさん。寒いのが苦手な人達なんですから。

「つーわけで、この貸切状態のグラウンドにて。」

『第三回、血まみれの雪合戦 死ぬのは誰だ大会』開催します。」

.....。

「「「「「やっぱりいいいいい!!??」」」」

ボクとファイファイ、ステイル、リリアン、魔王とロウ兄弟とミキちゃんミカちゃん以外の人達が声を上げた。

「.....いやそれより雪合戦って何ですか?てか血まみれって死ぬのは誰って!?!」

「ゆ、雪合戦!?!」

「またするのかよ!?!」

「冗談抜きで!?!」

「イエス。」

「「「「うあああああああ!?!?!」」」」

え、一体何なの?

「先言っておくが拒否権なし。ついでに拒否した時点で.....。」

「「「「!?!」」」」

?

「お前らが“つね日頃隠し通してきている秘密”を世間にバラす
」「」「喜んで参加させてください(泣)」「」「」

.....

よ、弱味掌握して脅しですか・・・。

「じゃチーム分けすっぞー。ほらほらボサっとしなない。」

「」「はい.....。」「」

『はい。』

何気に嘆いているマサさん、カナエさん、クミさんとボクらは、
テ
キパキと動くリュウジさんにただただ動かされるままだった.....。

.....

え！？これ続くんですか！？

うん。

第五十二の話 『第三回、血まみれの雪合戦 死ぬのは誰だ大会』 <中編> (前

前編の続きです。

くアルス視点く

『前回のあらすじ

雪やこんこんあられやこんこん、食っては食っては腹減り止まぬ、でもそんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！はい、オツパツピーの如く寒い雪空の下で雪合戦を提案した龍二。しかしそれに対して雅、香苗、久美はとてつもなく嫌な顔どころか世界に絶望したような複雑な表情を見せる。そんな彼らに対し、龍二は“参加せねばお前らの秘密をバラす”と脅し、泣く泣く参加させられる羽目に。雅達は何故雪合戦ごときであるような顔をしたのか！？龍二の企みとは！？

次回、乞うご期待！！』

「・・・いや次回じゃダメでしょ！？それに何なんですかこのあらすじ！？特に前半！」

『いいじゃんか別に。』

「よくないです！とにかく帰ってください！」

『ちえー。』

ヒュッと消える黒装束の人。

何でこんなところに作・・・ライターさんがいるんですか・・・。

「アルスー。早く早くー。」

「あ、ごめん。」

魔王に呼ばれたんで皆が集まってるところへ行く。

さつきマサさんから聞いた話だと、雪合戦というのはそれぞれ二つのチームに分かれて、お互い雪玉を作ってそれを相手にぶつける。当たった人は退場。そして敵陣の中にある旗を取ればそのチームの勝ち。

ルールは単純。でもなんだかおもしろそう・・・。

「ん。じゃさつき引いたクジに従ってチームに分かれる。」

リュウジさんに言われて皆それぞれ別々に分かれた。

赤チーム

・リュウジさん

・クミさん

・ミキちゃん、ミカちゃん（二人で一人だそうです）

・リリアン

・ステイル

青チーム

・マサさん

- ・カナエさん
- ・ロウ兄弟（ミキちゃん、ミカちゃん同様）
- ・ボクとフィフィ（同じく）
- ・魔王

・・・まあクジだからこうなるのも不思議じゃないですけどね。

「り、龍二が敵・・・か。」

「そ、そんなにや・・・。」

く、暗い・・・マサさんとカナエさんが暗いです・・・。

「え〜！リュウくんと一緒にいいのに〜！」

「魔王様、ボクがいます！」

「いや！」

「ガアアアアアン！！！」

「ケルマ、どんまい。」

こっちはこっちで何だか大変だなあ・・・。

「私達も一セットね。」

「そうだね。」

まあフィフィは小さいからしょうがないよね・・・。

「ではルール説明します。」

遠くからリュウジさんの声が聞こえる。当然、敵だから向こうから声かけるしかないですし。

「ルールは普通の雪合戦同様、当たたら退場。で、相手陣地の旗を奪えばそのチームの勝利。」

ボクらの旗は青チームだけに青旗です。

「で、これが一番重要。」

作戦時間なし。殺す気で逃げ。」

.....。

『は？』

ボクら仲間と魔王とロウ兄弟が同時に叫ぶ。

「じゃ始めー。」

『いきなり！？』

ホントいきなり！

「・・・こそ、結局こうなるのか・・・。」
「？マサさん？」

今何か呟いたようだけどよく聞き取れなかった。

「ま、雅くんどうしよ・・・。」
「仕方ない、隙を見てあっちの陣地に入らないと。」

物凄くまじめな顔でマサさんとカナエさんが話している。

「・・・でも雪を投げてぶつけるくらいで殺す気だって言われてもど
うすればいいのk

【ボゴオオオオオオン！！！！】
『！！！！？？？』

・・・そ、傍の壁が・・・。

「へ、な、何？」

「やべえ・・・お前ら伏せろおおお！！！！」

え、ええええ！？

【……………】

ににゃああああー!!???

「な、何!?何何い!?!」
「いやあああああー!!」

〈数分後〉

「はあ、はあ、はあ……。」

お、収まった……。

「な、何なのよ一体い……。」
「わ、わかんないよ……。」

えと、さっきの状況説明。

まず最初。傍にあった雪の壁が吹き飛びました。確かかなり硬かつたよな……。

そしてその後、雨のように雪玉が降ってきました。おかげで周りはさつきより雪で一杯になりました・・・ついでに地面に無数の穴も開きました。

「くそ・・・やっぱり相手が龍二だと・・・。」

え？

「・・・それどういう意味ですかマサさん・・・。」

「ああ。」

さつきの全部龍二だ。」

・・・・・・あう。

「あいつの投げる雪玉は全部常識はずれだ。最初の攻撃なんてコンクリートの壁を軽く破壊できる。」

・・・で、神速の速さで雪玉を精製して全部で投げつける・・・それがさつきの雨あられの雪玉だ。」

・・・うん、そうですね。あいてはりゅうじさんなんですからそんなことだってふかのうじゃないですね。あのひとならそれくらいかるいですよねーあはははは

「あ、アルスアルス！ちよっと意識飛んでるって！」

「・・・はっ！」「ごめん。」

思わず現実逃避してしまいました・・・。

「・・・でもどうするんですか・・・正面から行ったら死ににいくようなものですよ?」

「それでも何とかするしかない・・・。」

何とかたって・・・

【ズゴン!!】

!?また壁が・・・!

「おい。隠れてはっかならこっちから行くぞー。」

・・・いつものものんびりとした口調が悪魔の声に匹敵するくらいに感じられました・・・。

「ちっ!・・・仕方ない、男性陣は龍二を足止めするぞ!」

「は、はい!!」「」

マサさんとロウ兄弟が壁を越えていった。

「ふふふん Come on(来いや)」

壁から頭を出して覗いてみれば、リュウジさんが左手をジャケットのポケットに突っ込んだまま棒立ち状態で、右手でマサさん達を手招きして挑発していた。

「散開！」

【シュバツ！】

マサさんの号令と共にロウ兄弟が消える・・・速い。

「とっ。」

声に覇気がないけど、それとは違ってかわって物凄い速さの雪玉がマサさん目掛けて飛んでいく。

「くっ！」

【ズゴオオン！！】

・・・咄嗟に避けたからよかったけど、あれくらっただけじゃすまないだろなあ・・・。

「ふむ、なかなかやるな。」

「伊達にお前と親友やってねえから、な！」

お返しとばかりに雪玉を投げつけるマサさん。リュウジさん程じゃないけど、その玉は意外にも速い。

「よ。」

【パシィ！】

ゆ、指先だけで弾いた。

「まだだ！」

こっそり作ってたのか、懐から雪玉を次々と投げつける。

「ほほほいっと。」

【ユユユユユユユユ】

って避けんの速っ!??

「くっ!」

「? 終わりか?」

唇を噛みしめるように呻いたマサさんに対して、両手を広げて余裕の意思表示を見せるリュウジさん。

。。。

ふ、不覚にもかっこいいって思っちゃった。。。

「。。。。ふ、甘いな龍二。伊達に俺らは前回と前々回ボコボコにされちゃいねえのさ。」

前回と前々回って。。。あ、そっか。第三回って言ってたから。

「カルマ、ケルマ!」

「「はい!」」

「?」

【バツ!!!】

「……さぁリュウちゃん、来い！」

「あゝもうちょっと待って〜。」

全っ然余裕ですなぁリュウジさん！！

く赤チーム陣地く

こうして、何とかリュウジさんにバレずに敵陣地へと侵入できたボ
クラ。

……正直言います。物凄くスリルありすぎて恐いです。

「ホント、ここまで緊張しながら進んだのは闇の森の洞窟以来よ。」

フィフィ、それ結構前の話だよな？

とにかく、後は赤チームの旗を取ればこっちの勝ち

「アルス！」

「!?!」

殺気！

【バス！】

咄嗟に飛び退いたところに雪玉が……。

「……おいしい。」

声ができる方を見上げてみれば、雪の壁の上で堂々と立っているリリアンの姿が……

あ、そっか……リリアン達も敵チームだった。

「リリアン……本気ですか……？」

「【コクリ】」

ほとんど即答に近い早さで頷いたね。

「……昨日の敵は……今日の友。」

「「いや逆逆。」」

「……あ……// // // // // // // //」

間違えたからって恥らわないの。

「き……昨日の友は……今日の敵……// // // // // //」

顔逸らしながら言い直されても……。

「・・・アルス、覚悟。」
「くっ！」

しょうがない・・・やっぱりやるしかないよね。

「アルス、手伝うよ！」

「！魔王、後ろ！」

「へ？」

【バスッ！】

叫ぶと同時に飛び退いた魔王のいた場所に雪玉が直撃した。

「魔王、お前の相手は私だ。」

「ステイル・・・。」

そういえばステイルもいたんだっただ・・・忘れてた。

「・・・今私のこと忘れてませんでした？」

「うん。」 「ファイ、リリアン、魔王

「ごめん・・・。」 ボク

「・・・。。。」

ステイル一気に暗くなっちゃった・・・。

「・・・とにかく・・・覚悟。」

「・・・リリアン・・・勝負！！」

この戦い、負けられない！

く一方その頃く

「ほら、雪だるま。」

「すごい久美姉ちゃん！」

「・・・可愛い。」

出番が無い方々は雪だるまで遊んでたそうなの。

第五十二の話 『第三回、血まみれの雪合戦 死ぬのは誰だ大会』 <中編> (後

また続きます。前編、中編、後編に分かれた話書くの多いなあと思
う今日この頃。

第五十三の話 『第三回、血まみれの雪合戦 死ぬのは誰だ大会』 <後編> (前)

後編です。

（アルス視点）

「はっ！」

「てい。」

【ドシュバス！】

ただいまリアンとボクとの雪玉による攻防戦が続いている。隠れたり、反撃したりの繰り返しです。

正直どれだけ時間が経ったのかさっぱりわからない。

「うりやりやりやりやりやりやあああ！！！！」

「そらそらそらそらそらそらそらあああ！！！！」

【ドシュシュシュシュシュシュシュシュシュ！！！！！！】

・・・魔王とステイルは攻防戦というよりも“防”の字さえ無いくらいの激しい投げ合いをしている。

お互い当たらないのは・・・多分雪玉が途中でぶつかり合って砕けるからだと思う。

うん、間違いない。

「アルス右！」

「！はあっ！！」

【バシユ！】

「……はずした。」

あ、危なかった……。

「ファイ、ファイありがとう。」

「ボーっとしてたらやられるわよ。」

気を付けます。

「……さすがアルス……伊達に私達のリーダーやってない……」

「まあね。仲間の行動パターンも把握してないようじゃまとめ役なんてできないよ。」

「……お化け……苦手なくせに……。」

「／／／／／／／／／／／／……そ、それは関係ないよ！！！」

「隙あり。」

「なあ！？」

反論した途端に攻撃って……。

「……おしい。」

「……（怒）」

・・・もう怒った！

「こうなったら手加減しないよりリアン！『気よ、我に集え！！』」

魔力を体の周りに集めて、同時に周囲の雪も収集していく。

・・・ちよつとずるいと思うけど、リュウジさんなら多分許してくれるだろうし・・・。

「行け！スノーリング！！」

【ビュオン！！】

魔力で作ったリング状の雪を回転させながらリアンに向けて飛ばす！

「！？」

【バツ！ドゴオオオオオン！！】

くっ！後ちよつとだったのに避けられた。

「・・・魔法なんて・・・あり？」

「ありだと思う！」

「アルス、断言できてるようできてないわよ。」

・・・フィフィにツッコまれた。

「……そう……ならこっちだって……。」

【チャキッ】

……つてへ？斧？

「……『アトミック・ブレイク』。」

【ドゴオオオオオオン！！！！】

力いっぱい振り下ろした斧の衝撃波で雪が津波のように……

「……って嘘おおおお！！！！？？」

そんな使い方ありいいいい！！！！？？

「か、『壁よ、遮れ！！！！』」

【カキン！】

咄嗟にボクらの目の前に透明の壁を張る。

【ドゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオ！！！！！！】

………あ、危なかった……。

・・・あ・・・。

「・・・み・・・見事だ・・・魔王・・・。」
「フフフ・・・そっちこ・・・そ。」

【パタリ】

・・・あ、相打ち・・・。

「ステイルとクルル・・・脱落。」
「うん。」

リリアンの言葉にボクとフィフィは頷いた。

「・・・じゃあ・・・こっちも・・・。」
「そうだね・・・終わらせよう！」
「覚悟してよねえリリアン！」

さっきよりか弱めの魔力を集めてもう一度スノーリングを作り出す。

対してリリアンは・・・かなり大きい雪玉、というより雪岩を持ち上げていた。

大きさは大体ボクぐらいの大きさ・・・さすが仲間一の力を持っている女戦士。

「行け・・・。」
「これで・・・。」

「「スノーリング!!!!!!」」
「終わり。」

ボクのスノーリングが真っ直ぐリリアンへ、

リリアンの雪岩が放物線を描いてボクらへと向かってくる。

【ドオオオオオン!!!!!!】

.....
.....

「.....」
「.....」

【バタツ】

「……さすが……アル……ス……。」

【ガクツ】

「……か、勝った……。」

間一髪、スノーリングが雪岩を砕いた……。

「……何で雪合戦でこんな真剣勝負しなきゃいけないのよ。」

「……。」

フィフィ、それ言ったらさっきの喜びが半減するからやめて。

「よし、後は旗を取れば……。」

【グラリ……】

あ、あれ……？

【パタリ】

「！ち、ちよつとアルス！？どうしたの！？」

「……ごめん……力、使いすぎたみたい……。」

さすがに慣れない魔法は使うものじゃないなあ……たはは。

あ……眠い……。

「ちょ、ここで寝たらまずいでしょアルス……」
「

……

(……ろ。)

……。

(お……ろバ……)

……ん……。

「起きろ、このバカ。」

「・・・はえ？」

あれ・・・？どこどこ？

「も〜！いきなり寝ないでよねアルス！」

「あ、ファイファイ・・・ここは？」

起き上がってみれば・・・皆寄り集まって火を囲んでいた。

「や〜っと起きたわね。」

「あれ？カリンさん？」

厚手の赤い服を着たカリンさんが目の前にいた。

「何でここに？」

「何でじゃないわよ・・・こっちはさっき部活終わったところだから帰ろうとしたら・・・。」

あ、だからリュウジさん、あえてカリンさん呼ばなかったんだ。

「・・・龍二が・・・。」

「？」

「今すぐ来い。でなければあのことをバラす”って電話で脅してきて・・・。」

・・・。

「……大変ですね。」

「……うん。」

“あのこと”っていうのが気になるけど触れないでおこう。

「で、アルスが倒れたから急遽手先が器用なカリンにこのかまくら作らせたって訳だ。」

「カマクラ？」

「周り見てみる。」

周り？……よく見ればボクらがいる場所はドーム状になっていて、ボクら全員が悠々と入れるくらいの広さがある。出入り口は小さめの穴があった。

あと、壁が全部雪で出来ていた。

「え、これ全部雪ですか？」

「そ。」

「……大丈夫なんですか？火なんて炊いて。」

「大丈夫だ。かまくら舐めんな。」

……確かに、周りは雪なのに、中はあったかい……。

「あ、そうそう。雪合戦だが俺らのチームが勝ったぞ。」

「……まあ、そうですね。」

ボクと魔王、最終的に気絶しちゃったし。

「ついでに旗取ったのはお前らが行ってすぐだ。」

「え、えええ!？」

じゃ・・・ボクら戦い損!？」

「まあ勝ったーってことだし、戦線離脱して久美達と一緒に雪だるま作って遊んでたんだがな。」

「ねー」

「【コクリ】」

「ああ、楽しかったぞ。」

わあ・・・可愛い雪だるま抱きかかえて嬉しそうですねミキちゃん
ミカちゃんクミさん・・・。

ボク、すっごい憂鬱です・・・。

「ごめんね、追い詰められたから思わず降参しちゃって・・・。」

カナエさんが手を合わせて謝罪の意を示した。

・・・ボクって謝られると弱くなるんだよね・・・。

「いえ、大丈夫です。気にしないでください・・・それより・・・。」

一番心配なのは・・・。

「・・・マサさん、大丈夫でした？」

「ああ、問題ない。」

問題ない割に頭に包帯巻いてますけど・・・？

「・・・こんなの前回に比べれば大したことはないぞ。」
「は、はぁ・・・。」

前回どんな目に合ったんですか。

「い、痛かった・・・。」
「・・・後恐ろしかった・・・。」

同じく頭に包帯を巻いたロウ兄弟・・・顔真っ青。寒さのせいじゃないでしょう多分。

「でも楽しかったねスタイル！」
「ま、まぁ・・・な。」

嬉しそうに言う魔王に対して、若干目を逸らして苦笑いするステイル。

でも、顔がまんざらでもなさそう。

「いい勝負だったわ・・・アルス。」
「うん、死にかけたし。」
「もうあれだけは勘弁して欲しいわ・・・。」

フィフィに激しく同感するよ・・・。

「はぁ・・・アタシもしたかったな〜雪合戦。」
『いえ、多分来れなくて幸せですよあなたは。』
「へ?」「

ボクとファイファイ、魔王にロウ兄弟とステイル、マサさんカナエさんクミさんが一言も間違えずに綺麗に声をそろえてカリンさんに言った。

「まあ今回はある程度手加減したし、程よく楽しめたる?」

「「「「ええええええ!!??」「」「」」

あれで手加減したんですかあああ!!??」

「?何を叫ぶ必要がある。」

「「「「いえ、何でもないです。」「」「」」

。・・・因みに叫んだのはボクとファイファイと魔王とステイルです・・・

「?・・・お?」

「?」

リュウジさんが何か見つけたような顔した。

「・・・お前ら、ちょっと外出てみる。」

外?

「・・・わぁ・・・。」

・ 外に出たら、長いこと気絶してたせいで周りはもう真っ暗だった・・・

でも・・・おかげですごく綺麗なものが見れた・・・。

「キレイ・・・。」

「うん・・・。」

「スゴイ・・・。」

雪が静かに降ってきている中、うつすらと雲の中に浮かぶ月から発せられた青い光が、雪に反射してキラキラ光っている・・・。

幻想的な光景に、ボクらはただただ眩くしかなかった・・・。

「へえ、こいつあ大したもんだ。」

「あんま見れないよね。こんな光景。」

「そうね。東京じゃなかなか見れないわよ。」

「だな。」

「すごいすごい！」

「・・・うん。」

「・・・キレイ。」

「・・・。」

他の人達もただただこの光景に魅入るばかりだった。

「・・・いつくち！」

「あ、アルス大丈夫？」

「うん・・・平気。」

・・・せっかくのムードが台無しだよ・・・。

でも・・・寒い・・・。

「ん。」

【ペト】

「え？」

何か頬に・・・・・・・・あ、あつたかい。

「ココア、入れてやったぞ。」

「あ、リュウジさん・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・。」

リュウジさんが差し出してきたカップを受け取ってみると、ほんのりあつたかい温度が手袋越しから伝わってきた。

「【ズズズ】・・・いいな。たまにはこういうのも。」

「・・・そうですね・・・【ズズズ】」

リュウジさんの隣で雪を眺めながらカップを啜ると、甘いココアが体をあつたためてくれた。

・・・でも・・・。

「おいアルス。顔真っ赤だぞ？」

「！な、何でもありません・・・・・・・・・・・・・・・・」

ただこうしてるだけで、十分あったかった……。

「あゝ！アルスだけずる〜い！」

「私もココア欲しい〜！ってリュウちゃんといい雰囲気になるな〜！」

「そうよ！勝手に熱々な雰囲気になってんじゃない！」

「アルス、抜け駆けは反則だぞ！」

「……アルス、ずるい……。」

……。

「はいはい、お前らの分のココアも入れてやつから待ってる。」

……はぁ……ま、今回はいいか。

冬って・・・思ったより悪くないかもしれない・・・。

「じゃ来年も第四回、開催すつぞー。」
『ホント勘弁してください！！！！！！』

・・・やっぱり怖いです(泣

結局最後はこういうオチです

いやはや、自分で書いて結構楽しめました

「最後の最後でアタシ登場したけど、ね!!!」

・・・まだ根に持ってたの花鈴？

「当然!!!」

・・・すみませんでした。

「ふん!」

・・・今度龍二と二人だけのストーリー書きますから。

「許す!!!」

はやっ!?

「おい作者。」

?どしたあ龍二?

「さつき雪道歩いてたら誰か埋まってたぞ。」

・・・誰が?

「顔から察するにこいつは・・・ああ、カナタだ。」

おい!!!別作品の人を出すな勝手に!!!

「家で解凍してやるか。」

つて聞け!その上引きずっていくなああああ!!!

・・・で、ではこれからよろしくお願いします!

待て龍二!人様のキャラクターは大切に扱えええええええ!!!

!

第五十四の話 こんな一日(前書き)

猫との会話再び

第五十四の話 こんな一日

（龍二視点）

「いい天気だな。」

「そうですね。」

雪がすっかり溶けてしまい、名残惜しいなあと思いつつも縁側でのんびりまったりくつろぎ中。ちゃっかり膝の上にはお久しぶりの三毛猫の珠が丸まって乗っかっている。

ついでにアルス達はカリンの家に遊びに行っているから今は留守だ。

「……こう、お前さんとのんびりするのも久しぶりだな。」

「……ですね。」

あゝ空が青いぜ。

「で？最近までどこ行ってたんだ？」

「ちよつと近くまで。」

「近くとは？」

「北海道まで。」

「全然近くもなんともないな。」

「それほどでも。」

「今のを褒め言葉として受け取るお前はナイスだ。」

「失礼な。」

「今のを侮辱と受け取るお前はグッドだ。」

『まあ冗談はさておき。』
「知ってた。」
『さいですか。』
「おう。」
『話は戻して、最近隣町まで行ってたんです。』
「ノリか？」
『違います。』
「そうか。」
『ちゃんと理由があります。』
「どんな？」
『かつこいいオス猫を追っかけて』
「しょーもな。」
『私にとってはしょーもなくはないです。』
「俺からしてみればしょーもな。」
『今ムカつとききました。』
「気ニシナイ。」
『・・・じゃ私も気ニシナイ。』
「パクったな。親父にもパクられたことないのに。」
『あなたのそのセリフもパクってます。』
「バレバレか。」
『はい。』
「まあいいや。それで？」
『強引に話戻しましたね。で、オス猫追っかけてたら。』
「追っかけてたら？」
『迷子ならぬ迷猫になっちゃいました。』
「バカ猫。」
『それ純粹に傷つきますからやめて。』
「へいへい。」
『で、しょうがないので人様の家でお世話になってました。』
「いい人だったんだな。」

『ええ、テーブルの上に焼き魚を置いててくれましたし。』
「ふむ。」

『鬼ごっこもしてくれましたし。』
「ふんふん。」

『まあ追いかけられながら罵言暴言吐かれましたけど。』
「ほお、罵言暴言吐かれたか。」

『ええ、『この盗人めー！』とか『殺してやるー！』とか。』
「そりゃリアルな鬼ごっこだな。」
『でしょー？』

「ははははは。」

『あはははは。』

「ははははは。」

『・・・ツツコミは？』

「は？遊んでもらったのに何故ツツコミいれなければならんのだ。」
『うーん、あなたにツツコミを求めた私は間違っていたようです。』
「それ俺のこと侮辱してる？」

『ええ、一心。』

「今晚は猫料理に初体験。」

『ごめんなさいお許してください。』

「ん、許す。」

『寛大なお心をお持ちで。』

「まあな。」

『否定はしないんですね。』

「さて、そろそろうちの奴らが帰ってくる頃だしっつと、お前も一緒に昼飯食うか？」

『あ、じゃいただいちゃいますー。』

「あいよ。」

じゃ今日の献立は焼き魚定食だな。味噌汁付けたらバッチグー。

「リュウくん！」

【バキッ！】

「帰ってきた時のセリフは？」

「・・・た、ただいま。」

「オーケー。」

クルルの気配を感じたんで名前呼ばれると同時に裏拳かまして撃沈、そのままK・O。

「リュウジさんただいま〜ってあ、その子は・・・。」

「おう、珠だ。」

『ミヤ〜。』

「こんちわ〜ってええええ！？アンタ猫飼ってたの！？」

「いんや、こいつが時々遊びにくるだけだ。」

「猫！！！」

『みゃ〜ん』

「ファイファイ、変な対抗してどうすんのさ・・・。」

花鈴も増えて騒々しくなっちまったな。まあ別に気ニシナイんだけど。

「で？花鈴も当然食ってくんだろ？」

「あつたりまえでしょ！」

「んなこつたるおと思って余分を買つといてよかつたぜ。」

『みゃ〜。』

しっかし・・・魚六人前（一名“匹”）焼くつーのは結構メンドイんだよなあ。

『せ』

ま
い
い
か

。

第五十四の話 こんな一日(後書き)

今回は最近の(雪合戦の時)と違って全部ほのぼのしてみました。

猫と会話してえ〜。

第五十五の話 デパートでデート？（前書き）

多分龍二はデートだなんて微塵も思っぢやいない。つーかデートと
いう単語さえも知らない。

第五十五の話 デパートでデート？

〔花鈴視点〕

「アム レイジー！」

「い、いきなり何！？」

「いや、言ってみた。」

・・・何だかわからないけどごめんなさい。

えつと気を取り直して・・・今、アタシは龍二を連れて近場のデパートに来ています！で、現在地は女性物の服屋さん。ふふん、今日は二人つきりなのよ。何かデートみたい

「何鼻歌歌ってんだ似合ってねえし。」

「別にいいでしょって一言余計！」

さり気なくムカつくこと言うな。相変わらず・・・。

「で？当然わかってんだろーな。」

「わ、わかってるわよ。」

？何のことか？あ、説明してなかったわね。

じゃちょっと回想。

〔回想中〕

『龍二、久しぶりに二人つきりで出掛けない?』
『あ?何でだ?』
『ほらあ、アタシ最近部活で忙しかったから息抜きにいいかな?』
『て。』
『他誘えよ。俺そんな気分じゃねえし。』
『いいじゃん、どうせ暇でしょ?』
『ぶっ飛ばすぞ。』
『嘘です、ごめんなさい、あなた様はいつも多忙な身であります』
『わかりやいい。』
『・・・ねえ、ホントダメ?』
『今日はそんなノリじゃねえ。』
『・・・じゃラーメン奢るから。』
『何をチンタラしてやがるさっさと行くぞ。』
『切り替え早っ!?!?』

く 回想終わりく

・・・はあ・・・何で奢るとか言っちゃったんだろっとなあ・・・。
『今日はラーメンデイだからな。ちようどいい。』
『・・・ってちよっと待ちなさいよ!アンタ今アタシの思考読んだでしょ!?!?』
『おう読んだ。』
『あっさりと自由すな!』
『事実はあるのままだに伝えましょう。』
『いきなりマジメになるな!』

「お客様、店内ではお静かにお願いします。」

「あ、す、すいません……。」

店員さんに怒られた……。

「おいおい。」

「う、うっさい！元はといえばアンタのせいでしょ！」

さっきより小声になってます。

「で？買うもんあったのか？」

「ああ、うん。」

とりあえずこの話題は置いて（納得したくないけど）、服を買うことに。

「あ、このチエックのスカートかわいい。」

「ほほお、なるへそ。女性はそういうのが好きなのか。」

何か納得してるし。

「……どれ、家の連中にも一着買ってってやっかな。」

「アルス達に？」

「おう。あいつらも年頃とかいう奴だ。」

ふん、やっぱり女の子と一つ屋根の下で暮らしてればそういう知識も頭に入るみたいね。

「ならアタシにまかせて！女物の服だったら何でもこいよ！」

「おお、そいつぁ助かる。」

ぶっっちゃけ龍二に選ばせたらえげつない物ばっか買うかもしれないし。

「あ、言っておくが買い過ぎるな。その場合お前が払えよ？」
「大丈夫だって」

アタシの金銭感覚はアンタよりいいし

「じゃさっそく・・・あ、このワンピースなんてどう？アルスに似合いそう。」

「軽そうだな。」

「あ、このスカートとかクルルに。」

「ふむふむ。」

「で、これなんて・・・。」

く・・・で〜

「合計で二万三千円になります。」

「・・・。」

「・・・あ、あはは・・・。」

普通に買い過ぎちゃった・・・

「……………」

「……………あ。でもさ、買い過ぎるなって言っただって金額とかアンタ指定してなかったじゃん。だからさ、今回のことはしょうがないってことだ」「払えば花鈴。」「……………はい(泣)。」

多分、逆らった先にあるのは恐らく鉄拳制裁……………払うしかないでしょ……………アタシの財産で(泣)。

〈デパート内〉

「にしてもまあ、買ったなあ。」

「……………そうね。」

財布、ちよつと軽くなつちやつた〜アハハハ

「で？お前次どこ行くか決めてんの？」

「……………あ、いや決めてないけど。」

ついでにさっき買った服は全部籠二が片手で持っています。

普通の人なら両手で持つくらい量の紙袋を“片手”で。

「ふむ、決めてないか・・・じゃちょっと付き合え。俺行きたいところから。」

「え？いいけど。」

行きたいところ？

く・・・だっ

【トントンントン】

「ほいほいほいっど。」

「・・・。。。」

え、現所在地。デパートにあるアミューズメント広場。つまりゲーセン。

・・・ゲーセン・・・ですかい・・・。

.....。

「・・・アンタこのゲームやり込んでる?」

「うんにゃ、今日が初めてだ。」

初心者が1P2Pの奴同時に持って二丁拳銃、その上映画俳優ばりに銃交差させながら撃つたりクールにきめたりしますか普通?

.....まあかつこよかったから別にいいけど.....////
////

「名前を決めるか・・・どうする?」

ああ、ランキング表に載せる名前か・・・。

「うーん、わかんないから龍二決めて。」

「あいよ。」

【ドン、ドン、ドン!】

銃を撃ってアルファベットを入力していく龍二。

で、決まった名前は・・・

『BAK』

「つてこら！無視するなつて勝手に行かない！」

足速いって！

（喫茶店内）

「ケーキセットとミルクティー、お待たせしました。」

「あ、どうも。」

「そちらのお客様はフルーツパフェでございますね？」

「おう、サンキュ。」

「ゆっくりどうぞ。」

・・・結局喫茶店に入ってしまった・・・はあ。

「あむ、あむ、あむ、あむ、あむ、あむ、あむ。」

「・・・おいしそうにパフェ食べるわねえアンタって・・・。」

「うまいんだからしょうがない。」

「ああ、そ。」

「それに何か甘系食いたくてここ入ったんだし。」

「・・・ああ・・・そ。」

はあ・・・。

「おい何ため息吐いてやがる。」

「アンタのペースに付いていけないのよ……。」

「そいつあよかった。」

「どこをどう取ったらそうなるの？」

ホントこいつの思考回路がわかんないわ……。

「あくにしてもデパートは楽しいな。」

「……まあそうね。」

デパートって結構娯楽もあるし欲しい物とかも多いし、気持ちはわかるわね。

「でも食料品とかは商店街の方がいいなやっぱ。」

「?そう?」

「当たり前。あっちのんが新鮮。」

さいですか……。

「……だがま、充実した一日だったな。」

「まだ終わってないけどね。」

「気ニシナイ。」

「……まあいいけど。」

……何かこいつと話してるだけで疲れ飛んでっちゃったわ。不思議と。

「たまにはいいな二人だけで買い物っていうのも。」

「そ、そうね。」

「また来るか二人でデパート。」

「……え？」

「?どした？」

「!?べ、別に!」

「ああ？」

顔、赤くなってないわよね?ないわよね自分!?

「ま、まあアンタが今度誘ってくれるんなら、行ってやってもいいけど?」

「おおそうか。じゃ次頼むわ。」

「……え、ええ……。」

躊躇いゼロだったわね……。

「……それに今回は色々来てるみたいだし。」 超小声

?今何か龍二が呟いたような……?

「で?この後どうする?」

「あ、え〜っとじゃ今度は本屋行きたいんだけど?」

「本か。じゃ俺も料理本とか買うかな。」

「主夫ねえアンタ。」

「あつたりまえ。」

まあこいつらしいっちゃこいつらしい、かな?

「さあて、じゃ本屋行ったら……。」

「?」

「ラーメン、奢れよ。」
「……………」

忘れてた（泣

この日、泣いたり笑ったりで、色々あったけど楽しかった一日でした。

……どれだけの損害だったかは聞かないでね？

第五十五の話 デパートでデート？（後書き）

途中で龍二が何か呟きましたが・・・その意味はまた後日

第五十六の話 デパートでデート？裏の話（前書き）

前回の話の裏です。

第五十六の話 デパートでデート？裏の話

くクルル視点

どうも、クルルです・・・これ小声ね。

今日は・・・カリンちゃんとリュウくんが何と！でぱーとでデート
だっていうんです！

・・・デートって何？おいしいの？

まあよくわかんないけど・・・ただ一つわかること！

リュウちゃんとカリンちゃんが、何だか二人つきりになっちゃって
っていうのがおもしろくない！

なので、今日は二人を追跡しに来ました！

「やっぱり二人は仲いいよね・・・（怒）。」

「やはり・・・幼馴染だからか・・・？」

「・・・ん。」

「リュウジはモテるね〜！」

「・・・はぁ・・・やっぱりリュウジさん・・・。」

「何故に俺まで・・・？」

「しかも私まで・・・。」

・・・えっと、上からカナエちゃん、クミちゃん、リリアン、ファイ、アルス、マサさん、ステイルっていう順番。

どこから情報仕入れたのか、皆して付いて来ちゃいました（マサさんとステイルは多分無理矢理連れてこられたんだと思う）。

・・・ついでにこのメンバーの中で怖い顔してるのはカナエちゃん、クミちゃん、リリアン、私・・・あ、アルスは複雑な顔してるよ。

・・・？どこから見てるのか？柱の影から二人の様子を窺ってます。でばーとは広いから遠くから見てもバレない。バッチシ！

ついでに皆変装のつもりでサングラスをかけてます。バレバレ？

「あ、服屋に入った！」

「追っぞー！」

「了解・・・。」

「うん！」

私とクミちゃんカナエちゃんリリアンはやる気マンマン。ステイルとマサさんはやる気ゼロ。

「ちょ、皆速いって！置いてかないでください！」

それはあなたが躊躇ってる＋足が遅いからだよアルス？

〈服屋内〉

「あ、このチエックのスカートかわいい。」

「ほほお、なるへそ。女性はそういうのが好きなのか。」

「いたいた

「ただいま服を物色中……。」

「了解、そのまま様子を見る。」

「はい。」

二人からちよつと離れた場所にある服に隠れて偵察中。気分は潜入スパイって奴ね。テレビで見た。

「……ボクらは何でこんなこと……大体リュウジさんにバレたら……それに二人つきりなのに何か悪いし……あ、でも何だかそれも許せないし……。」

「アルス、さつきから何ブツブツ言ってるの？」

「!?!い、いや別に何も。」

「何かアルスとフィフィがコソコソ話してるみたいだけど……気ニシナーイ

「……どれ、家の連中にも一着買ってってやつかな。」

「アルス達に？」

「おう。あいつらも年頃とかいう奴だ。」

え、ホント!? やったー!

「「「・・・。」」」
「・・・すいません。」

一人こつそりはしゃいでたらクミちゃんカナエちゃんリリアンに睨まれました。こあい・・・。

「あ、言っておくが買い過ぎるな。その場合お前が払えよ？」
「大丈夫だって」

ああ、服はカリンちゃんが選んでくれるんだ。

「じゃさっそく・・・あ、このワンピースなんてどう？アルスに似合いそう。」

「軽そうだな。」

「あ、このスカートとかクルルに。」

「ふむふむ。」

「で、これなんて・・・。」

うわ〜結構買っな〜・・・。

〜・・・で〜

「合計で二万三千円になります。」

「……………」

「……………あ、あは……………」

か、買いすぎ……………すっごい量……………」

「う、うわぁ……………あれ全部ボクらの？」

「一部は花鈴のだろうけど……………多いなぁ……………」

「うん……………」

皆で呆気にとられました。

「……………」

「……………あ。でもさ、買い過ぎるなって言ったって金額とかアンタ指定してなかったじゃん。だからさ、今回のことはしょうがないってことd「払えば花鈴。……………はい(泣)……………」

……………り、リュウくん怖い……………」

「はい、ちよつといただきます……………ありがとうございます……………
た。」

「ん、行くぞ。」

「はい……………」

うわぁ、カリンちゃんの背中からすっごい暗いオーラ出てる……………」

「ターゲット移動開始しました。」

「追跡開始。」

カナエちゃんとクミちゃんのノリノリな演技と共に店から出たリュウくん達の追跡続行。

うん、にしてもでぱーとって改めて見回してみると、ホントおっ
きいな。人も多いし、皆から離れないで付いていかないと迷子に
なるかも……。

「クルルちゃん、離れたら迷子になるからちゃんと付いてきて。」
「あ、ごめん。」

思った傍から怒られちゃった

「何か話してるみたいね。」

「そうだな……あ、エスカレーターに乗ったぞ。」

「追っ……。」

えすかれーたー？

……あ！すごい！階段が勝手に動いてるー！きゃー！……

「ちょ、クルルちゃん何してんの！？」

「逆走っ！」

「するなー！迷惑だろー！」

だってこういうのって楽しいんだもん

「アルス、クルル抑えて！」

「魔王、何してんの！？」

「ちょっと！人が楽しんでるのに何で抑えるのよー！」

「ファイファイも手伝って！」

「クルルストッパー！」

「・・・何なんだこのグダグダは・・・。」

「・・・さあ？」

「・・・で」

「わかりましたか？もうエスカレーターの逆走はしないでください
ね。」

「・・・ごめんなさい。」

でばーとの警備員さんに怒られた・・・クスン。

「な・・・何でボクまで・・・。」

「・・・ドンマイ。」

ついでにアルスも巻き込んだじゃいました。

「自業自得だ。」

「同感・・・。」

うう・・・クミちゃんとリリアン、さり気なく怒ってる・・・。

「・・・魔王、遊びに来たんじゃないんだから・・・。」

ここで遊ばないと損だからね！

「アルス、UFOキャッチャーしよUFOキャッチャー！」

「ぼ、ボクはいいです！」

「拒否権なし！」

「リュウジさんですかアンタ!？」

〜で、一時間後〜

「取れた取れた〜」

「・・・。」

今私の手には大きなクマさんのぬいぐるみが。可愛い〜

「・・・欲しかった・・・ぬいぐるみ・・・。」

あ・・・アルス、どんまい。

「あ、二人とも。」

入り口付近で皆集合してた。

「やほー！楽しかった！」

「・・・しゅん・・・。」

「あ、アルス・・・どうした？」

ぬいぐるみ取れなかったんだよね・・・アハハ。苦笑

「！？クルルストップ！」

「むぎゅっ！？」

え、襟引つ張るにゃ〜！

「む〜！カナエちゃん何s」

「シッ！・・・あれ。」

？

あ、リュウちゃんとカリンちゃん・・・何してんのかな？

「シューティングゲームか・・・龍二ああいうの好きだったな。」

「そうなのマサさん？」

ってかしゅーていんぐげーむって何？

ま、いいや。とりあえず偵察偵察

「花鈴、お前の銃貸せ。」

「は？」

？何か話してる？

「お前の方がやかましいわい。」

あ……ビックリした。気付かれたのかと……。

「よし、じゃ行くぞ。」

「つてちよつと待つてよ！」

「！ターゲット移動開始！」

「追跡続行！」

「ラジャー！」

まあとりあえずもっかい追跡開始！

（喫茶店内）

「オレンジジュース四つ、コーラ三つお待たせしました。」

喫茶店に侵入成功……。あ、オレンジジュースは私とアルスとカナエちゃんとリリアンで。コーラっていうのを頼んだのはマサさん、ステイル、クミちゃん。フィフィはアルスのを共有して飲むことに。

場所は当然、二人から結構離れた位置に。

「ここならバレないわね。」

「姿もこつちから確認できるし向こうも気付いた気配がない……大丈夫。」

うん、本格的だなあカナエちゃんにクミちゃん。

【ジュ〜〜〜〜】・・・あ〜甘くておいし〜

「ンクンク・・・ところで二人何話してるか聞こえるの?」

ファイがストローから口放して聞いた。あ、アルスのジュースにはストローが二本付いてます。

「大丈夫だ。これでバッチリ。」

そう言つてクミちゃんが見せてくれた物は・・・

「?何それ?」

「盗聴器。」

とうちよつき?

「何でそんなもん持つてんだお前。犯罪だろ。」

犯罪なのマサさん?

「だ、大丈夫だ!本人に気付かれなければそれでいい!」

いいのかなあ?よくわからないけど。

「とにかく、これで二人の話が聞こえる。」

「へ〜。」

「とりあえず聞かせてよ。」

「わかった。」

【カチリ】

・・・・・・・・・・・・・・・・

『おい何ため息吐いてやがる。』

『アンタのペースに付いていけないのよ……。』

『そいつあよかった。』

『どこをどう取ったらそうなるの?』

おおー!すごいすごい、ホントに聞こえる!

『あゝにしてもデパートは楽しいな。』

『……まあそうね。』

『でも食料品とかは商店街の方がいいなやっぱ。』

『?そう?』

『当たり前。あっちのんが新鮮。』

『……龍二って結構もつともなこと言うよな。』

『主夫だね。』

マサさんとカナエちゃんが何か話してるけどあんま聞いてない。

『……だがま、充実した一日だったな。』

『まだ終わってないけどな。』

『気ニシナイ。』

『……まあいいけど。』

うーん、確かに今日は充実した一日だったな。

「たまにはいいな二人だけで買い物っていうのも。」

「そ、そうね。」

「また来るか二人でデパート。」

！?ええええええ!?

「……ええ?」

「?どした?」

「!?べ、別に!」

「ああ?」

ま、また二人だけで出かけるの?」

「ま、まあアンタが今度誘ってくれるんなら、行ってやってもいいけど?」

「おおそうか。じゃ次頼むわ。」

「……え、ええ……。」

「……リュウちゃん、躊躇いゼロだったわね……。」

「そうだな……。」

「……。」

「……。」

「む〜!」

「お前らちよっと顔怖いって……。」

「お、落ち着きなさいよ。」

「……(怯)」

フィィを除く女性陣全員が恐い顔してた……多分私も。

あ、カリンちゃんが何か質問した。

『アンタさ、アルス達と一緒に暮らして結構長いの？』

『ん〜まあ結構経つんじゃない？』

・・・そういえば、リュウちゃんと暮らし始めて結構経つよね。

『最近どう思う？三人のこと？』

『どつって？』

？

『だからさ、結構大変だな〜って思ったこととか。ある？』

『ん、ありまくり。』

そ、即答された・・・。

『ふ〜ん・・・じゃ三人がいないから聞くけど・・・』

辛いつて思ったこととかは？』

あ・・・。

『うん全然無い。』

・・・超即答！？

『ま、大変だなあとか思うことは多々あるぞ当然。でもそれで辛いつてかと思ったこととかは一片たりとも無い。寧ろ一人の時より楽しんでる。』

リュウくん……………。

『……………よかった。』

『あ？』

『いや、ただアンタが辛かったら三人も肩身が狭い思いするだろうなって。』

カリンちゃん……………。

『？それどういうことじゃ？』

『……………アンタってつくづく鈍感ね。』

『はにゃ？』

『まいいわ。それじゃ本屋行こっか。』

『そだね。』

……………。

「……………ねえ、もう帰ろっか。」

「え？いいのクルルちゃん？」

「これから本屋まで追跡しようと思ってたのに。」

「うん……………まあ今日くらいは一人きりにしてあげようよ。ね？」

「そうです……………ね。」

「そだね。」

アルスもファイファイも私と同じこと考えてたみたい。

「……………まあ、しょうがないな。」

「うん、そだね。帰ろう。」

「【コクリ】」

「はあやつと帰れるぜ・・・。」
「ふう。」

元からノリ気じゃなかったんだねマサさんとステイル。

「じゃ、ここの代金雅が払ってくれ。」

「ああわかったってふざけんな。」

ノリツッコミって奴？

「いいだろう？一番お金を持っているのは雅なんだし。」

「なーんで俺が払わないといけな」払え。」……………はい。」

リュウくんいないこのメンバーで一番強いのはクミちゃんみたい……………。

夕方

「ただいま〜っと。」

あ、リュウくん帰ってきた。

喫茶店から出てすぐに家に帰ってきてからずっと家で待ってた私達。リュウくん達はこっちに見向きもしなかったし、私達がでぱーとにいた、なんてことは絶対にバレてない。よかったよかった

「リュウくんおかえり〜！」

「リュウジさんおかえりなさい。」

「おっかえり〜！」

「おう、今日は楽しかったか？」

「うん！すごい楽しかった！」

「追跡した気分は？」

「スパイになつた感じだった！」

「ふ〜ん。で？ゲーセンでどんな遊びした？」

「UFOキャッチャーでつかいクマさん取れたー！」

「そかそか。そんで？喫茶店で盗聴した気分は？」

「何か新鮮だったー！」

「そうかそうかハッハッハッハッハ」

「あははははは」

.....

「お前らちょっと正座」

「……はい。」

全部バレてました……。

第五十六の話 デパートでデート？裏の話（後書き）

龍二はいつからアルス達に気付いたか・・・勘のいい方ならお分かりでしょう。

ハナっから気付いてました

第五十七の話 後輩の策略（前書き）

急な展開とはまさにこのこと！..

第五十七の話 後輩の策略

（絵里視点）

「絵里、私決めたわ。」

「へ？な、何突然？」

お昼休み、お弁当食べた後にいきなり何か宣言した明ちゃんに戸惑ってます私。

「私は・・・荒木先輩に・・・。」

「・・・せ、先輩に・・・？」

ま、まさか・・・

こ、告・・・

「弟子入りする！！」

「え、ええええ！？」

何かある意味告・・・よりすごいこと宣言した！！

「な、何で明ちゃん！？まさか荒木先輩みたいに力持ちになるの！？」

「いや、あの人の場合力持ちっていうレベル超えてるけどね・・・
そうじゃないのよ。」

あ、違うんだ・・・。

「絵里、私の仇名は何か知ってる？」

え？

「決まってるでしょ。“一流情報屋”。」

「裏では何て囁かれてる？」

「・・・“絶対に敵に回してはいけない女”・・・。」
「そう！」

自覚してるんだ・・・。

「興味深い情報のためなら例え火の中水の中駆けずり回り、果ては
人の弱味を握ってそれをネタに脅したり大勢の手下を作ってきたこ
の一流情報屋と呼ばれた私・・・しかあし！」

いきなりダンツ！と立ち上がった明ちゃん・・・イス倒れたよ？

「私はまだまだ未熟だと自覚した！！」

「み、未熟？」

「そう！」

いや、未熟って・・・。

「明ちゃんは未熟とは思えないけど・・・。」

「いいえ未熟よ。荒木先輩に比べたら。」

へ？

「いい？荒木先輩はただ単にそんじゃそこらの強い主人公とかじゃないのよ？」

な、何の話？主人公？

「荒木先輩はねえ・・・毒舌な上に裏社会でも生きていけないようにする程精神崩壊を引き起こしたりして、口論でもかならず一枚上手をいくの。」

「は、はあ・・・。」

「しかも！それだけじゃなく、ある情報にはとにかく詳しいのよ！」

「？そ、それが？」

「アンタ今ファクションとか世間の政治とかそういう情報思い浮かべたでしょ？」

ず、凶星・・・。

「荒木先輩はファクションとかそういうの全く意識してないし、しかも世間の政治とか頭の片隅にも置いてなんかいない！」

「はあ・・・。」

「あの人詳しい情報、それはズバリ！・・・“他人の弱味”。」

「・・・へ？」

「フーマリー、荒木先輩は人の一番の弱味とかそういう情報をどこかで集めてきて、その人を脅したりしてんのよ。」

「お、脅す！？」

「つつてもカツアゲとかそういうのじゃなくて・・・まあ例えば、

『ラーメン奢って〜』

とか

『遊ぶメンバーお前が集めて〜』
とか

『そいつ放さないとあのことバラすぞ〜』
ってな感じ。」

「・・・最後の、何？」

「不良とかが誰かをカツアゲしてた時、不良の弱味とかをその場で大々的に暴露したりすんのよ。」

「ひ、ひど・・・。」

「おかげで『暗黒の救世主』、『逆らえば奈落に直行させられる男』、『情報王』っていう通り名がラインナップに増えて・・・。」

うわぁ・・・。

「で、私はこの事を知ってからさらに上を目指せるよう、あの人の下で修行をすることをここに宣言します！」

「あ、明ちゃん・・・。」

周りの人達皆私達見てるって・・・ああ何故か言えない・・・。

「そこで！アンタに頼みがあるの！」

「へ？頼み？」

な、何を頼まれるのかなぁ・・・？

「まずあの人の弟子になるには、それなりの交流が必要だと私は思うの！」

「はい・・・。」

「で・・・。」

アンタからあの人のメールアドレス聞いてきて」

「ま、まあそうだけど・・・それとこれとは」

「よしじゃあさっそく聞きに行きまっしよい!」

「え、ええええ!?!?!」

「ほらほら何してんのさっさと行くよ!時間無くなるから!」

「ちょ、ちよっと明ちゃん!待ってっばあああああ!」

引きずっちゃダメだってええええええ!!

（・・・で現在地三年生教室前）

はあ・・・結局来ちゃったよ・・・。

「絵里、緊張しない。」

「だ、だってえ・・・。」

「だってえじゃない。そんな返事してると変な男に言い寄られちゃうでしょ。」

「で、でも。」

「でもない!たかがメルアド聞く程度、すぐ終わるから。」

「えうく・・・。」

そんなこと言われても・・・き、緊張する・・・。

「・・・アンタ、荒木先輩といい仲になりたいんじゃないの?」

「!?!?な、なななな何言って・・・!?!?」

「なりたいでしょ?だったら頑張りなさいな。」

「う、うう……。」

そんな……別にいい仲とかって……大体“いい仲”って何……？

「！ほら、来たよ。」

「！」

「ふあゝあ……。」

荒木先輩が欠伸びながら教室から出てきた……あ、やばい。ちょっと可愛いつて思った……。

「ほらレツツラ・ゴー！」

【ドン！】

「ひゃう！？」

後ろから押さないで！

「？」

「！？」

き、気付いた……！

「お？オメエは……。」

「え、えええええとお、おお、お久しぶりですしえん輩！」

！？か、噛んだ！

「……しえん？」

く、首傾げないで……（泣）

「……まあいい。で？俺に何の用だ？」

「え、え〜つと……。」

あ、あど、アドレス……。

「あ、あど……。」

「？」

「あ、アドレ」「リュウちゃん」「……。」

つてへ？生徒会長……？

「……。」

「ダー……」――「イブ……！」「あらよ。」

【ズゴン……！】

「はびゅっ。」

う、うわあ……めり込んだ……。

「やれやれ……で？」

「は、はい……？」

・・・やばい、言うタイミング見失っちゃった・・・。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・ごめんなさい、用件を忘れてしまいました・・・(泣)」「
(おバカーーーーーー!ーーーー!ーーーー!ーーーー!) 明ちゃん、心の声

「ご、ごめん明ちゃん・・・もう無理だよ・・・。」

「ん、忘れちゃったか。」

「ご、ごめんなさい!思い出したらまた来ますんで!ご、ご迷惑じやなかつたら!」

我ながらなんて下手な言い訳・・・(泣)。

「ふん・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・本当にごめんなさい・・・。」

はあ・・・私、嫌われちゃったなあ・・・。

「・・・・・・・・ん、また会いに来んのもメンドイだろうし・・・。」
「?」

「ん、オツケー。」

「は、はい！」

「じゃ、またな。」

「はい！！それでは！！！」

「ん。」

や、やったあ……。

【クィンクォンクア〜ンクォン】

………何これ？チャイム？

………。

！！！？？

「じ、授業始まつちやう……。」

「絵里、急いで撤退！！！」

「あ、明ちゃん！待ってよ〜！」

とゆーよりあの気の抜けるチャイムは何なの〜！？？

（一年生教室廊下）

「……結局また立たされちゃったね。」

「……うん。」

水入りバケツ、重い……。

「……てゆうかさあ、絵里アンタねえ……用件くらいちゃんと伝えなさいよ。」

「だ、だって……いきなりのこと頭混乱しちゃって……。」

生徒会長が飛び掛ってきたのはホントビックリした……。

「まあしょうがないけどね……でもま、アドレスはゲットしたんでしょ？」

「う、うん……。」

荒木先輩からの提案だったんだけどね……結果的には成功、かな？

「とりあえず、これでアンタと先輩の距離は急・接・近ね。」

「あ、明ちゃん！」

「照れるな照れるなアツハツハ！」

「照れてない〜！」

「あなた達！今は授業中です！」

「は、はい！！」「」

……この展開、前にもあったような……。

まあ、いいか・・・エへへ

（龍二視点）

「……………」

しまった、あいつらの名前聞くの忘れてた・・・

・・・。

しゃーねえ。メール来たら適当に名前聞いとくか。

【結局いろんな意味で報われない後輩達なのでした】

第五十七の話 後輩の策略（後書き）

はいとゆーわけで後輩達のお話でした。

第五十八の話 フィフィによる寝相観察記（前書き）

今回は短めです、Z E !

第五十八の話 フィフィによる寝相観察記

くフィフィ視点く

「……………んゆ……………」

ん……………目が覚めちゃった……………。

えっと今は夜中の……………五時かぁ。どつりでまだ暗いと思
った……………。

「す……………す……………」

「く……………く……………」

隣を見ればアルスとクルルが若干離れた位置でグッスリ眠ってる・
・まあ若干つて言っただって腕一本伸ばせば余裕で届く距離だけど。

クルルつてそういえば寝相悪かったつけ……………最初の頃とかよく蹴
られてたしな〜アルス。

「……………ん……………」

【ゴロリ】

あ、クルル寝返り……………

【ドボス】

「んぎゅ……………」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

クルルの蹴りがアルスのお腹にクリティカルヒット……。

これは起きるかな？……？

「……………すー……………」

あ、寝てる。やっぱり鍛え方が違うからかな。

「……………む……………」

【ズリ、ズリ……………ギユ】

……………。

クルルがアルスに何かしがみついた……………抱き枕みたいな感じで。

「……………ん……………」

あ、アルス寝心地悪そう……………顔嫌がつてるし。対してクルルスっごい幸せそうな顔してるし。

「ふみゆ……………リュウくん……………」

クルル何の夢見てんのよ？

「えへへ……………」

えへへ〜てアンタ・・・あ〜あ〜あどけない顔しちゃって・・・。

「……………んむ……………」

あ〜……………起きないアルスも結構図太いわね……………。

「ん……………リユウジさん……………」

ありゃ……………やっぱアルスもクルルみたいなリユウジの夢でも見

「ごめんなさい……………ホントすいません……………今度から勝手にラーメン食べたりしませんから……………クスン。」

……………ごめん、夢の中まで慰めてあげることとはできない……………。

にしても……………すっごい両極端ね〜。幸せそうに眠るクルルと、泣きながら眠るアルス……………。

「ん……………!」

【コロン】

あ、アルス逃げるように寝返りうつた。

【ゴン】

「えうう……………」

……………傍らに置いてた聖剣に頭打った。

ごめん、一瞬プって笑っちゃった……。

「ぎゅ〜……。」

「んむ〜……。」

相変わらずクルルはアルスに引ッ付いてるし……アルスは額赤くしながら寝ながら険しい顔してるし……。

……

あ、何か見てておもしろいって思ってきた……。

「……む〜！」

うわ、ちょっとアルス勢いつけて寝返りうつたら……

【ゴチーン】

「「「むぎゅ〜……。」」」

「あう〜・・・。」

「おはーっっておいどうした?」

・・・二人とも頭抑えてて呻いてた。

「り、リュウジさ〜ん・・・頭が何か痛いです・・・。」

「う〜ん・・・痛い・・・。」

「そかそか。そのままへたばってる。」

「「えうう〜・・・。」」

うっわ〜リュウジ結構ひど・・・。

で、結局二人は朝食食べ終えるまで頭痛に悩んだのでした

もちろん、二人の頭痛の原因を知っているのは私だけ。

第五十八の話 フィフィによる寝相観察記（後書き）

よくありますよね、お隣同士で寝てたらゴッソソコって・・・無
いですか？俺小さいころよくありましたけど・・・姉貴とゴッソソ
ソ。

第五十九の話 龍二のお出かけ 某RPG風(前書き)

かの有名なRPGのような感じで進めてみました。

第五十九の話 龍二のお出かけ 某RPG風

（ライター視点）

荒木龍二

職業 主夫

レベル ????

装備 ヘッドフォン

所持金 1000円

龍二はキッチンにはいった

「さ〜てっと。晩のおかずは何すっかな〜っと」

【ガチャ】

龍二はれいぞうこの扉を開けた

「……ありま。」

しかし何も無かった・・・

「まいったな・・・。」

晩のおかずが無くなった！どうする？

攻撃

防御

呪文

買い物

「・・・しゃーねえ。買いに行くか。」

龍二は買い物に行くことになった！

「え〜っと・・・買い物カゴどこやったっけな〜？」

「？リュウジさん、何してるんですか？」

「お？」

アルスが現れた！

はなす
聞く

「アルス、買い物カゴどこか知らねえか？」

「買い物カゴですか？・・・それならさっき魔王が頭に被せて遊んでましたけど？」

「・・・。」

龍二は和室に入った

「？リュウくんどしたの？」

買い物カゴを被ったクルルが現れた！

攻撃
呪文
防御
作戦

龍二の攻撃！

【パソコン！】

「うわあああん！リュウくんがぶったー！！」
「当たり前だバカタレ。買い物カゴで遊ぶな。」

クルルを倒した！買い物カゴを手に入れた！

「じゃ俺買い物行つてくつからー。」

「クスン・・・はい。」

「行つてらっしゃーい。」

龍二は家を出た

【テクテクテクテク・・・】

「・・・。」

龍二はただ歩いてるだけでは何だかな？と思いつい何かすることにした

ヘッドフォンで音楽を聴きながら歩く

ケータイをイジリながら歩く

鼻歌を歌いながら歩く

「
〵〵〵〵〵〵
」

龍一は鼻歌を歌った

「飽きた。」

しかし効果はなかった……

【テクテクテクテクテク……】

「おい、聞いてんのか？金出せってさっきから言ってるじゃん？」

「え、でも……。」

「つれないな。貸してくれるだけでいいのに。」

「し、しかし……。」

「さっきからゴチャゴチャうっせえぞ？さっさと金出せよ！」

道を歩いていたら中学生が不良にカツアゲされているのを目撃した
！どうする？

攻撃

防御

呪文

龍二は商店街へと入った

「おう龍二くん！買い物かい？」

「お、八百屋の名無しのおっちゃん。」

「な、名無し……。」

八百屋の名無しのおっちゃんに486のダメージ！

「ほれ商売魂商売魂。」

「へいらっしやい！何しましょ！！！」

八百屋の名無しのおっちゃんは回復した！

「あゝ……レタスとナスびとピーマンをくれ。」

「あいよ！合計で548円ね！」

「ほい。」

龍二は548円払った

残金が452円となった

「あいよ！また来てくれよ！」
「ノリでな。」

龍二はレタスとナスビとピーマンを手に入れた！

龍二は商店街を出た

【テクテクテクテクテク・・・】

「なあなあ、ちょっといいか？」
「？」

龍二は派手な兄ちゃんどもに囲まれた

「今さ、俺ら貧乏なんだよな。」
「でさあ、わりいんだけどお金くんない？」
「金出さなかったらどうなるか・・・わかるよな？」

龍二はカツアゲされた！どうする？

攻撃

防 御
呪 文
作 戦

【ズキューン！】

龍二は黒い笑みを浮かべながら【ズキューン！】を唱えた！

『!!!!!!!!!!!!!!!!????????????』

不良どもは凍りついた！

「……………すいませんでした
もうしませんごめんなさいゆるしてください。」

全員土下座した

龍二は不良どもを倒した！

10000円を差し出された

残金が1452円となった

龍二は不良達を尻目にさつさと歩き出した

【テクテクテクテクテク・・・】

龍二は家に入った

「ただいま。」

「リュウくんおかえり〜！」

クルルが駆け寄ってきた！

「とぉ
「とぉ！」

ついでに飛び掛ってきた！

叩き落とす

叩き落とす

叩き落とす

叩き落とす

龍二の攻撃！

【ペチン！ベシヤー！】
「むぎゅ。」

クルルは床と口付けした

クルルを倒した

【チャラチャラツチャツチャーン】

龍二はレベルが上がった！

力が1000上がった

気功術が500上がった

毒舌が500上がった

S度が500上がった

知性が4上がった

龍二は新しい技を編み出した！

「何寝てんだ、さつさと起きろ。」

「ふぁ〜い。」

龍二はクルルを起こした

「……………なァライターよォ。疲れねえか？」

！？……………

り、龍二は妄言を口走った

『龍閃弾』 どこかへ向けて

【チユドオオオオオオン！！】

ちよぼべねば！！！！？？

第五十九の話 龍二のお出かけ 某RPG風(後書き)

うん、ものごつつ難しかったです。

では次回、いよいよ……ご期待ください！

第六十の話

存在意義（前書き）

クルルに続いて第二弾！アルスが主題の長編です！

前々からあつためてました。とりあえずご覧ください。

第六十の話

存在意義

（アルス視点）

「……………」

「……ファイファイ……ごめん……」

本当に……迂闊だった……。

（ちょっと時間は二分前に遡る）

【パキン】

「……………え？」

和室から出ようと襖を開けた途端、何かを踏んだ感触が……。

……しかも何か今割れたような……。

「…………？」

足をどけてみたら、ホントに小さい木製の腕輪が粉々になっていた。

？小さな腕輪？

「・・・あ。」

もしかして、これってフィフィの・・・？

「アルス〜。」

「!?!?」

ま、まず・・・!

「?どしたのよ慌てて?」

「う、ううん?何も?」

「?ま、いいか。それより私の腕輪知らない?」

「う、腕輪?」

「うん。木製の奴。ここに落としたかも。」

・・・
（汗）

「?アルスさっきからどうしたの?」

「え、えっと・・・。」

どうしよう・・・。

「・・・アンタ、私に何か隠してない?」

「・・・。」

・・・フィフィって仲間の中では一番鋭いんだよね・・・

どうしよう・・・嘘つくのも嫌だし・・・

・・・。。。

うん、もう正直に話そう。

「・・・フィ、フィフィ？」

「？」

「その・・・ゴメン。」

「?・・・!!!!」

。 掌に乗せた腕輪の残骸を見せると、フィフィの表情は一変した・・・

くそして話は冒頭へく

「・・・。。。」

「・・・フィフィ？」

正直に話したのはいいんだけど・・・腕輪の破片を見つめながら呆然としてるフィィィを見てたら、今まで以上に罪悪感が湧いてきた。

「・・・・・・・・・・カ。」

「？」

え？

「ア・・・のバ・・・。」

???

「アルスのバカあああ！！！！」

「!?!」

ええ!?

「え、フィィィ・・・。」

「バカ！バカ！こんななったらもう元に戻せなくなるじゃないの
お！！！！」

泣きはらした顔で怒鳴り散らすフィィィに、ボクはただただ圧倒されるだけだった。

ボクはただ、フィフィに言われた言葉に正直戸惑っていた。

“アルスなんか勇者やめちやえ！！”

・・・。

『お前はいつつも役立たずだな・・・そんなだから村の連中にバカにされるのだ。』

『弱虫ー！弱虫アリスー！ギャハハハハ！』

『まったく相変わらず薄汚いガキだ・・・ほら、あっち行け。』

『こらそつちじゃないって何回言わせるんだい！？全く役立たずだねえホント。』

『立たんか！そんなことではベビーウルフでさえ倒せんぞ！』

『お前なんかが戦士になんてなれるはずないだろ？調子に乗ってんじゃねえよ。』

.....。

『勇者様、村をお救いください!』

『どうかあなた様の手で、魔王を討ち取ってください!』

『神の申し子であるあなた様さえいれば.....。』

『ありがとうございます、勇者様!』

.....。

「アルス、おいつて。」

「.....へ?」

いつの間にかリュウジさんがボクの顔を覗き込んでいた。

「何ぼくつとしてんだ？」

「……な、何でもないです……何でも……。」
「？」

……。

ボクは……

昔は……子供の頃から、村の人達から役立たずとか、弱虫とか言われて軽蔑されてきて、父さんからは村の恥さらしと罵られた……

村に安住できる場所なんて無かった。

誰にも頼ることができなかつた。

なのに……王都から使いの人達が来て、ボクが神の申し子であり、魔王を討ち取るべき存在の勇者だということ宣言されてから、村の人達からの扱いはガラリと変わった。

ボクのことを弱虫と呼んでいた子供達は、ボクに深く頭を下げて、

役立たずと罵った大人達からは、恭しく礼をされて、

父さんからは、自慢の子だと村中の人達に自慢していた。

ただ、唯一納得できなかったのはボク自身だった。

皆してボクを見ていない、見ているのは勇者であるボク・・・つねにそうだった。

現に、昼間は頭を下げていた子供達が、夜にはボクのことについて悪態をつけていたのを耳にした。

結局、誰も認めてくれなかった。

だったら・・・

だったら皆が認めてくれるよう、努力するしかないと思った。

そうしなければ、ボク自身が変わらないと思っただから・・・。

魔王討伐の旅に出ると同時に、ボクは本名アリス・フィートから、男の名前を取ってアルス・フィートと呼ぶことになった。ついでに、一人称も“ボク”になった。

決意の表れのつもりで改名した。

ただ、昔から見た目は男の子だって言われてきたのがコンプレックスになっていて、少年と言われると思わず反論してしまう癖は直らなかった。

それから・・・ステイル、リリアン、フィフィといった仲間達に出会って、魔王城までの道のりの途中で立ち寄った村や街で人々を悩ませている元凶、魔物を退治していった、気が付けばボクらの名前は世界中に知らしめた。

ボクは慢心は無かった。ただ人々のために役に立てるならと思った。

大切な仲間を守る力さえあれば、それでいいと思った。

それでも・・・仲間達以外の人達は、やっぱりボク自身のことを見てくれなかった。

だから、もうボクは半分自暴自棄となっていた。

結局、勇者という立場がボクにとっての唯一の誇りになっていた。ただ、この誇りさえあれば・・・守れる力さえあれば、何でもよかった。

けれど・・・。

「リュウくん、ファイブどうしちゃったんだろうね？」
「さあな。ま、そのうち帰ってくっだろ。」
「・・・だといけど・・・。」

今、魔王は目の前にいる。

その魔王と、ボクは一緒に暮らしている。

勇者の存在意義は、ただ魔王を倒し、世界に平和をもたらすこと。

ただそれだけ。

・・・なら今のボクはどうすればいいの？魔王は残虐で、人に苦痛を与えることしか考えていないと教えられてきたのに、本物の魔王は無邪気で、人の為に尽くそうと努力している、ボクと同じ年ぐらいの女の子で・・・。

殺せるはずがない・・・それに例え殺したとしても、それで勇者の役目は終わり、後はお払い箱。結局ボクは元の役立たずのまま人生を終えることになる。

フィフィの言う通りに勇者をやめてしまったら・・・ボクは、

誰にも必要とされないまま生きていくことになるの・・・？

くファイファイ視点く

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

気が付いたら、いつの間にか近くの川原まで来ていた。鬱蒼と葉っぱが生い茂っていて、その中で一番背が高い葉っぱの上に私は座っている。

ここまで来てずっと泣いてて、その後ボくっとしてたから辺りは薄暗くなってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

“アルスなんか勇者やめちやえ!!!”

・・・自分でも何であんなこと言っちゃったんだろーなーって後悔し始めた。

でも・・・・・・・・。。。

『フィアラ、これやるよ。』

『わぁ・・・可愛い!』

『へへっ、作るの結構苦労したんだぜ?大切にしろよ?』

『うん!ありがとう、兄さん!』

・・・

「・・・壊れた物は、元には戻らないしね・・・。」

「・・・そう考えたら・・・でも、アルスだって悪気があってやったわけじゃないし・・・。」

「・・・。」

ホント、咄嗟のこととは言ってもひどいこと言っちゃったなあ……私。

アルスにとって、あの言葉がどれだけ傷つくか……今になって考えてみれば……。

「……………」

……よし。

「……………帰る。」

そんでアルスに謝ろう……“ひどいこと言っでごめん”って。

やっぱり、アルスと私って仲間だし……パートナーだし。

いつまでも引きずってちゃダメだしね。

【スッ】

「？」

あれ？何かいきなり暗く・・・

【ズボッ！】

「！！！？？」

第六十の話

存在意義（後書き）

それでは続きます。

第六十一の話 事件発生（前書き）

急展開！長編第二部です。

第六十一の話 事件発生

（アルス視点）

「……………」

【シュー…………】

「アルス……大丈夫？」

「……魔王……………」

襖が開いて魔王が和室に入ってきた。

……いつの間にか日が暮れてたんだ……魔王が来るまで全然気が付かなかった。

「大丈夫？ずっと塞ぎ込んでるみたいだけど……………」

「……うん、大丈夫。心配しないで。」

ただ、今だけは一人になりたい……………」

「そう……………」

「……………」

「……………あのね、アルス。」

「……………？」

「えっと……………あのね……………」

「……………何？」

若干イライラがこもった声で言った。

「……あのね、アルスってファイファイと仲直り……したいの？」

「……どうしてそんなこと聞くんですか？」

「え、いやその……ただね……」

ただずっとケンカしたまんまだとお互い辛くないかな？って……。

「

……。

「……ごめんね。余計なお節介だったよね。」

「……。」

ちょっとだけ首を横に振った。

「……じゃあ、私リビングにいるから……。」

「……。」

【シュー……パタン】

……。

仲直り……。

『ちよつとアルス！それ私のおかず！』

『え！？先言つてよ。』

『言つてたでしょう！？ああもうホントアルスってばいつつもポケ
くつとしてるから。』

『なっ！？そ、それは関係ないでしょう！？』

『大有りよ大有り！だからモンスターに背後取られても気付かない
のよ！』

『おかずとモンスター一緒にしてどうすんの！？』

『似たようなもんでしょ！？』

『全っ然違う！！』

『あゝも〜いいわよ！アルスのバカ！』

『こつちこそ！ファイフィのバカ！』

・・・。

『・・・。。』

『・・・。。』

『・・・ファイフィ？』

『・・・何よ？』

『えつと・・・その、さっきはごめん。』

『・・・。。。。』

『だからその・・・ちよつと言い過ぎた・・・。。』

『・・・それ逆でしょ？』

『え？』

『私の方が言い過ぎたわ・・・アンタっていざって時にやる人だからね。』

『ファイファイ・・・。』

『ま、ポケ〜つとしてるとこは否定しないけど。』

『・・・そこは否定して欲しかった。』

『事実でしょ』

『楽しそうに言わないでよ。』

『あはは・・・うん、ホントさつきはごめんね。』

『・・・うん。こっちこそごめん。』

『・・・。』

『・・・。』

『・・・えへへ』

『・・・ふふっ』

『じゃ、これでお互い仲直りっつと。』

『・・・そうだね。』

『あ、そうだ。一つ提案があるんだけど。』

『？』

『これから先、ケンカしてもお互い絶対に許しあえるようにしよ。』

『え・・・それはまた急な・・・。』

『いいじゃん どちらかが謝ってきたりしてきたら許すっただけだから。』

『・・・大丈夫かなあ？』

『大丈夫だって！私ら仲間でしょ？ずっとケンカしたまんまだとお互い辛いじゃない。』

『まあ、そう・・・だよね・・・。』

『そ！だからさ、どんな事でもまずお互い謝罪、納得できなかったら話し合いたいっ！』

『・・・うん。』

『ほらあ、もっと元気よくっ！』

『……っん』

……。

『ずっとケンカしたまんまだとお互い辛くないかな？って……。』

……。

「お互い絶対許しあえるようにしよう……仲間だから……か。」

（クルル視点）

「……。」

「どうだ？アルスの様子。」

【カチャカチャ】

「ダメ。さつきからずっと塞ぎ込んでる。」

「やっぱな〜。。。」

【カチャカチャ】

もうすぐ真つ暗になる時間・・・フィフィも帰ってこないし・・・。

「何でケンカしちゃったんだろ？」

「ん・・・まあ大体察しはついてるんだがな。」

【カチャカチャ】

「？そうなの？」

「おう。理由は推して知れ。」

【カチャカチャ】

「え〜？」

「え〜じゃない。」

【カチャカチャ】

・・・・・・・・。。。

「・・・リュウくん、さつきから何してるの？」

「ん・・・ジグソーパズルみたいなもの。」

ば、パズルって・・・こんな時に。

「これと・・・これを・・・よっしゃ。」

「・・・すんごい集中してるね。」

「まあな。こつこつ結構好きだし。」

・・・マイペースだなあリュウくん。

「ま、とにかくアルスのことは今はそっとしておこうぜ。仲直りするにはちと時間がかかりそうだし、後は時間が何とかしてくれるさ。」

「うん・・・。」

まあ・・・下手なこと言つと余計塞ぎ込む可能性もあるしね。

【ピシヤーン！】

「！？」

び、びっくりした！！

「おうアルス。どったあ？」

うわ、相変わらずリュウくん驚いた様子もなく普通に話してる・・・。

「・・・あの、リュウジさん。」

「ん？」

「ちょっと出かけたんですけど・・・いいですか？」

！アルス・・・。

「ん・・・ま、とりあえず七時の晩飯までには帰ってこいよ。」

「は、はい！」

「あ、それと。」

「？」

すぐさまリビングから出ようとしたアルスをリュウくんが呼び止めた。

「ちゃんと言つてこいよ。」

「はい！」

【ガチャ！バタン！】

今度こそ、アルスは出て行った。

「・・・やれやれ、仲直りまで時間がかかると思ってたが、こりや想像以上に早く元どおりになりそうだな。」

「だね」

うん、何かこっちまで嬉しくなっちゃった

「さあて、そんじゃ休憩がてらメシの支度すつか。」

さっきまでずっと作業していたパズル(?)をしまつて、リュウくんはキッチンへと入ったいった。

〈アルス視点〉

「は、は、は、は、は……。」

辺りはもうすっかり暗くなったけど、今のボクには関係ない。

ただファイファイに謝りたい、仲直りしたい……これだけだった。

「えつと……こつち。」

次の十字路を右だね……妖精族はつねに独特の魔力を発しているから、魔法の熟練者ならこれを探知することができる。

スタイルほどじゃないけど、これくらいならボクだって。

「はあ、はあ、次は……左。」

この道を真っ直ぐ行けば……

「は、はあ、はあ……んく。」

全力疾走したから息が荒くなったけど、まだ大丈夫。

「……ここは……。」

確か……前に来たことがある川原。

ここにフィフィが……

【ゾワッ】

!?

「……。」

……今何だか変な違和感が……。

「……魔力が乱れてる？」

さっきまでずっと探知していた魔力が、変に歪んでいた。

おかしい……この魔力は、滅多なことじゃ変化するはずがないの

に……。

「……。」

何だろう……胸騒ぎがする……。

……調べてみよう。

『時よ、我に見せよ!』

時空魔法の初級版……そこで起こった数時間前の過去の出来事を
脳に映し出す魔法。

これで……。

~~~~~

『……』

フィフィ……やっぱりここにいたんだ。

『……』

……何を考えてるのかな？

【ザッ・・・ザッ・・・【

? 誰か来た・・・。。。

『・・・帰る。』

フィフィが葉っぱの上から立ち上がって・・・

いきなり誰かが袋をフィフィの真上に

・・・え？

『？』

【ズボツ！】

『！！！？？』

！ファイファイ！？

『へへへ、珍しいもんゲ〜ツツ。』

『も、もが！もが！』

『お〜いどうした〜？』

『おお！見てくれよこれ。』

『あん？・・・おいおいおい、何だこれ。』

『どう見ても妖精じゃねえか。』

『だろ？』

『もが！もがもが！！』

『元気いいな〜。しっかしまさかリアルにファンタジー目撃しちまうとはな。』

『・・・なあ、これ希少動物として高く売れるんじゃないやねえか？』

『お！それ俺も考えたんだよね〜。』

『そりゃこんだけ珍しいの、世界のどこにもいねえぜ？マニアもビツクリだ。』

『もがー！ー！ー！』

『うわ！この、暴れるなってテメー！』

【ガッ!】

ファイ・・・!!!

『!?!?・・・。。。。』

『ふう、やあつと大人しくなつたぜえ。』

『おいおい、もっと丁寧な扱えよ。売るんだろ?』

『大丈夫だつての。これくらいで死ぬんじゃ単なる虫だろ?』

『じゃさつさとシマに帰ろうぜ。これからのこと、リーダーに報告

しねえとな。』

『そうだな。』

『へへへ、大金ガツポリだぜ。』

『違いねえ。ギャツハツハツハツハ!』

~~~~~

「・・・・・・・・。。。」

そんな・・・ファイ!!!

「ど、どつちだに!」

・・・・・・・・。。。。

よかった、まだ魔力は探知できる！

「……追わなきゃ。」

じゃないとファイファイが……。

『ちや〜んと話つけてこいよ。』

……。

リュウジさんに……助けを……

……。

「……大丈夫……ボクだってやれる。」

いつだって……リュウジさんに頼ったりできない。

ボクは……勇者だから。大切な人を守らないとならないから。

「ファイファイ……待ってて。」

今行く。

第六十一の話 事件発生（後書き）

次回に続きます。

第六十二の話 煙の畏と人質（前書き）

第三部です。

第六十二の話 煙の罫と人質

くファイファイ視点く

.....

.....じゅう.....。

「.....?」

.....ど.....じ.....?

「!?!」

そうだった.....確かあの時私、いきなり.....。

「ほい上がり〜!」

「!テメ、さっきから連勝じゃねえか!」

「イカサマしてんじゃないやねえだろうな!？」
「んだとおく？」

？

あ、だんだん視界がハッキリしてきた・・・。

場所は・・・・・・・・全く見覚えのない、何かゴチャゴチャした・
・倉庫？

少し離れた位置で机を囲んで何か言い争っている男が数十人・・・

ホントどこよこじ？

「おく？お目覚めかあ妖精さんよお？」

へ？

「。。。。」

声が出した方を見上げれば、何かいかつい顔した金髪の男が、下卑た
笑みを浮かべながらこっち見てた。

正直に言います、気持ち悪。

「・・・アンタ、誰？」

「おお、日本語話せんじゃねえか。どこのアニメとは違うな。」

・・・質問答えてない・・・。

「話聞きなさいよ。アンタは誰よ？そんでここはどこのよ？」

「・・・チツ。」

舌打ちされる意味がわかんない・・・。

「テメエさあ、この状況わかってんの？」

「この状況？・・・!!」

・・・

はあ、何で全然気が付かなかったかなあ・・・

思いつきり檻に入れられてるし。ご丁寧に鍵付き。

「お前はな、これから売りに出されんだよ。希少動物としてな。」

「売る？」

「ああ。だからって調子乗ってると、痛い目見るからな。大人しくしとけよ？」

・・・

まったく・・・どっちが調子乗ってるんだか・・・。

大体何？売る？私を？

フン、冗談じゃないわ。何が希少動物として売りに出されるよ。欲に満ちた奴ってホント考えることが愚かね。どこの世界でも一緒ってどこ？

こっちはねえ・・・一族の中じゃ一番高い魔力を持つてる妖精族なんだから。

【シュボツ】

「・・・にしても、こいつ売るのはちよつともったいねえな・・・見世物にしても売れるんじゃないかねえか・・・？」

・・・金髪がこっちから目を離してる今がチャンスね。

私に恥かかせたこと、後悔させたげるわ。

「炎よ、飛

．．．！？ゴホツゴホツ！」

くはっ！．．．．．な、何？息が．．．苦し．．．。

「？おい、テメエ何してんだ？」

くっ．．．．！

こんな．．．こんなこと、今まで一度も無かったのに．．．

げ、原因は．．．何なの！？

「．．．ははぁん、さてはテメエ．．．

タバコの煙が苦手なのかな？」

た、タバコ・・・？この男が口に啜えてる奴・・・？

「キヒヒヒ、妖精さんは意外な弱点をお持ちで・・・プハア。」

グツ・・・！カハツ！・・・はぁ、はぁ・・・

「ふ・・・不覚・・・ね・・・。」

この煙の毒・・・私の魔力を打ち消してる。

ハハツ・・・油断・・・してたわ・・・。

「おい、一つ提案なんだが、こいつを売るのもいいが見世物にするってのもいいんじゃないかねえか？」

「お？そういうのもありですね。」

「リーダー、頭が回るぜ。」

「はっ、これくらい誰でも思いつくっての。」

見世物・・・って・・・くっ！

「だ．．．誰がアンタ達の言いなりになんかなりますか．．．。」
「あ？」

．．．ふん、そんな睨み．．．リュウジに比べたら屁でもないわ．．．

．．．．．。

．．．．．なのに、何で．．．？

「テメエ、リーダーの前で調子乗ってんじゃねえよ。」
「．．．。」
「おい、何とか言えよテメエ！」
「やめとけ。大事な商品に傷がつく。」

暴れようとしてる下っ端をさっきの男が抑えた。

「じゃ、これからのことについて話していかねえとなあ。」
「へへっ、大金ガツポリ儲けてやるぜえ。」

.....。

恐くない・・・こんな奴らモンスターに比べたら恐くない・・・

なのに・・・

何で震えてんのよ・・・私。

.....。

「.....ひっく.....」

.....こんなことなら.....あの時怒って出て行かなきゃよかった

なあ・・・

・・・アルスう・・・。

【ガシャン!!】

「ファイファイーーーー!!」

・・・?

（アルス視点）

「はあ、はあ、はあ……。」

結局川原から魔力を辿っていった結果、街から離れた古い倉庫街の一角まで来てしまった……遠かった……。

「おい、何だテメエは。」

「ガキ……？」

……派手な服装をした男の人が数十人、一番奥にも一人……

「！ファイファイ！」

その隣に、鳥籠の中に閉じ込められているファイファイがいた。

「……アルス……？」

よかった……意識はあるんだ。

「んだよこいつの知り合いか？」

「さしずめ緑色だからピーターンってところか？ヒヤヒヤヒヤ！」

……。

「悪いんだけどさあ、こいつの今の所有権、俺らなんだわ。」

「そういうことだから、ガキはさっさと帰りな。」

「それともネバーランドにでも飛んで帰るか？」

「がつ!?」

一番手前にいた男の腹に剣を叩き込む。ただ殺したら元も子もないから鞘付き、それでも十分威力はある。

「テメ!」

「!」

【ガキン!】

迫ってきた鉄棒を剣で受け止める。

「でやあ!」

【ゴスツ!】

「ぐえ!」

すかさず腹に蹴りを入れて距離を取った。

人数が多いけど、実力はない・・・いける!

「死ね!」

「!くつ!」

【ガゴン!】

背後から・・・。

「はあ!」

【バキイ!】

「おごっ!」

剣を振り上げて顎を砕く。

でも……実力は無いけど……数が……。

「はぁ……はぁ……。」

……さっき走り過ぎて……体力も無くなってきたる。

……。

でも……。

「負けない!」

【ズゴツ!】

「ぐええ!?!」

正面から襲ってきた男の腹に一突き。

よし、これで活路は……!

「止まれ。」
「!?!」

な……!?!

「……お前、こいつがよほど大切らしいなあ?」
「……づう……。」

くっ……!

「ひ……卑怯な……。」
「おい、そんな口叩いていいのかあ?」
「!?!」

「……こいつ、刺すぞ?」
「や、やめろ!」

リーダー格の男が、フィフィにさらにナイフを突きつけた。

「ア……ルス……。」
「……。」

．．．くっ．．．！

【ガシャン！】

「アルス．．．！？」

「へへっ、物分りいいじゃねえか。」

剣を捨てたら．．．周りにさつき打ちのめした男達が集まってきた。

「さつきはよくもやってくれたよなあ、ああ？」

「あゝあゝ、メチャクチャ痛かつたんだぜえ？．．．覚悟しろよこのガキ。」

．．．．．。

「・・・ごめん、ファイファイ・・・。」

【ガストゥー!!】

第六十二の話 煙の罫と人質（後書き）

・・・自分で書いてて敵がすごいムカつきました・・・

あ、すみません。続きます。

第六十三の話 守りたい(前書き)

第四部ですけど・・・今回ちょっといろいろハードです。

第六十三の話 守りたい

（龍二視点）

【ボーン ボーン ボーン】 時計の音

ありま、もうこんな時間かあ。

「・・・。」
「・・・。」
「・・・。」
「・・・。」
「・・・アルス達、遅いねえ。」
「そだな。」

・・・七時には帰ってこいっつったのに・・・もう八時過ぎちまっ
たじゃねえか。

まったく・・・せつかくあいつらの好きな物作ってやったってのに。

「あいつにもケータイ持たせとくべきだったかね？」

「ケータイ？」

「ん、こつちの話。」

「・・・。」
「・・・。」

・・・にしてもホントおっせー・・・。

「・・・二人とも、何かあったのかなあ？」

「さあな。何とも言えん。」

「・・・心配じゃないの？」

・・・
・・・。

「・・・いや、大して。」

「今の間何？」

「気ニシナイ。」

「すっごく気に入る。」

「・・・。」

「・・・。」

・・・はあ、まったく。

「・・・心配なら探しに行ったらどうだ？」

「・・・。」

うーん・・・沈黙。

「・・・ダメだよ。」

「んにゃ？」

「二人がちゃんと仲直りしたらすぐにもお祝いしてあげたいって

思ってるのに、私が出てる間に帰ってきちゃったら嫌だもん。だからここで待ってるの。」

「……。」

「それに、アルスなら大丈夫だと思う……きっと。」

「……ふくん、そ。」

こいつなりに考えてんだなあ……ああしみじみ。

「まあ、俺らが行かなくても他の奴らが探してくれてるぞ。」

「??どうして?」

「さっき連絡しといた。俺の知人友人含めて全員に。」

「全員に!?!?……いいの?その人達に迷惑じゃない?」

「気ニシナイってことで。」

あいつらも何かと心配性だしな。

「……ところでリュウくんは行かないの?さっきからずっとパズルしてるけど。」

「メンドイからパス。」

「……それだけ?」

「おっ。」

……

「……よし。」

後少しだ。

「……リュウくん……。」

「?」

くファイファイ視点く

「おらよつと！」

【ガスッ！ドサッ】

「ぐうっ！」

あ、アル……！

「おいおいおいおい、さっきの威勢はどこいったんだあオラァ！」

【ガス、ガス！】

「かはっ！」

………！！

「くはっ！……はあ……はあ……。」

「何だよもう終わりかぁ？」

「俺らまだまだ遊び足りないんだけどぉ？」

「ギャハハハハ！」

……アルス……

「……くっ……！」

「お？まだ立ってるんだあ。」

「へへ、じゃもっと痛めつけてやってもいいんだなあ？」

!

「アルス……ダメ……！」

ぐう……うぐ、声が……。

【ガシッ！】

「あぐ……。」

「じゃ俺から行きまーす。」

「おう、やれやれー！」

アルスが……羽交い絞めに……

「せーのー！っしょーいー！」

【ガッ！】

！！？

「ぐうっ！」

「しょーいー！」

【バキッ！】

「しょーいー！」

【バキッ！】

「そおらっしょーいー！」

【ズガン！ドサッ】

「か……はあ……」

何で？

「おらおらおら、まだ終わんねえぞ。」

「さっきボロボロにやられたからなあ。これは当然の報いなんだぜえ？」

何でアルスが……？

「おいオメエら、殺さない程度にしとけよ？後々メンドっちいからな。」

『ういーす。』

……。

許さない……

アルスは……何にもしてないのに……

なのに……

こいつら……絶対に……

許さない!!!!!!

『風よ、切り裂け!!』

【バキイイイン!!】

「!? な、何だ!？」

「アルス……!!」

（アルス視点）

フィフィの……声……？

「フィ……フィ……。」

く……目が霞んで……

【ガシッ！】

「ぐわ！何しやがるやめろ！」

「このおおおおお……！」

……フィフィが目の前の男の顔に……。

「離れろ！離れろつつつてんだろーが！」

「んぎいいいいい……！」

くっ……体が……

フィフィ……！

「この……ハエが……！」

【ベシッ！】

「かはっ！」

!!!

「ファイファイ……!」

「あ……う……。」

ファイファイが……目の前で……

「この野朗……凶に乗ってんじゃねえぞ!」

「!?!」

【ガッ!】

「!ぐう!」

ファイファイは……絶対に踏み潰させはしない!

「ちい……邪魔だオラア!」

【ガッ!ガッ!ゴッ!】

「……!」

く・・・あ・・・!!

「おい、やめとけ。死ぬぞそのガキ。」

「だ、だってよリーダー・・・。」

はあ・・・はあ・・・はあ・・・。

「・・・おいガキ、一ついい提案があるんだけど。」

・・・・・・？

「それをよお、ああオメエが今抱えてる妖精のことな。それをこっちに素直に寄越してくれねえか？そうすりゃこれ以上痛い目見ずに済むんだけどなあ？ああ、もちろんタダとは言わねえぜ？」

金をやるよ。それ相応のな。どうだ？いい話だろ？」

！・・・。。。。。。。

「こおんない話ねえぜ？お前は助かるし、金は手に入る。一石二鳥じゃねえか。」

.....。

「.....ふざけるな.....。」

「あ？」

「フイフイは.....ボクの仲間だから.....お金なんかで.....絶
対に買えない.....仲間だから.....」

残された体力で、何とか立ち上がる.....。

「アナタ達のような人間には、絶対に.....」

例えボクが死んだとしても・・・渡さない!!」

足はふらつくし、体中の節々が痛い。おまけに頭からは血が出て、口も切れ、目が霞む。

それでもボクは・・・ファイファイを守りたい。

謝って・・・もう一度、元の仲に戻りたい・・・!

「あんだあんだ？ガキのくせにカッコつけやがってよお。」
「・・・チツ。なら。」

【ドン！ドサツ】

「ぐう・・・!」

蹴り倒されて、体に激痛が走る。

それでも・・・絶対にフィフィは離さない！

「望み通り、殺してやるよ。」

「いいのかよリーダー？」

「はん！どうせこんなガキ一人、どっか別の場所に捨てちまえばバシやしねえよ。」

「それもそうっすねえ。ギャハハハ！」

ああ・・・く・・・

もう・・・意識が・・・

「フィフィ・・・。」

薄れゆく意識の中・・・ボクは呟いた。

「守ってあげなくて……じめんね。」

「おらめ！」

鉄棒が振り下ろされるのを最後に……

ボクの視界は……暗闇に閉ざされた。

第六十三の話 守りたい（後書き）

もうこんなハードな話はいやだーという方、次の話でこんな暴力沙汰な話終わります。見捨てないで（泣

あ、ごめんなさい。続きます。

第六十四の話 勇者じゃなくても(前書き)

今回で、やあああつと鉄槌をおおおお!!!

第六十四の話 勇者じゃなくても

（ライター視点）

【バキズガアアアン！！】

「！！？」

【ズゴン！】

「！！？な、何だ！！？」

いきなりのもので不良どもはうるたえた。

それもそのはず。今まさにアルス達にとどめをさそうと鉄棒を振り上げていた仲間が何の前触れもなく吹き飛ばされたのだから。

見れば、入り口が破壊され、重い鉄の扉が粉々に。

そして先ほど吹き飛ばされた不良がいた場所に、黒い服を着た青年が膝を地に着けながら座っていた。

「な、何だこいつ!？」

「知るか!とにかくやっちまえ!！」

戸惑いから一転、臨戦態勢へと入り、飛び掛ろうとする不良達。

『…………』

それに対し、青年は動かない。ずっと黙ったままだった。

『…………龍波』

【ゴオオオオオオ…………】

『紅蓮蹴』

【ズゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!!】

『ギャああああああああああ!!!!????』

突然、青年の右足が燃え上がったかと思うと、青年はその足で回し蹴りを周囲に放つ。

その衝撃はすさまじく、少年の近くにいた不良達を吹き飛ばしたの

みならず、遠くにいた不良達の服も燃え上がった。

「ぎゃああああ！熱い、熱い！いいいいいい！！！」

「た、助けてくれ！助けて……！」

「水、水はどこだあああ！！！」

「し、死にたくねえ！死にたくねえよおおお！！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

先ほどの威勢はすでに無く、全員がパニック状態へと陥ってしまい、口々に叫びながら逃げ惑った。

そんな中、青年はただゆっくりと正面に向かって歩き出した。

【バキィ！】

「ぐぎゃあ！？」

【ズゴス！】

「あぎっ！！」

【グシャ！】

「ぎゃあああ！？」

歩いている途中で近くまで来た不良達には、容赦なく殴り、蹴り、弾き飛ばした。

「な……何なんだよおい……。」

その様子を見て、リーダーの男は腰が引けた状態で少しずつ後ろへと下がっていった。

青年はそんなリーダーの男の状態なんてどうでもいいかのごとく、ゆっくりと接近していく。

「な……く、来るな！来るんじゃないやねえ！」

最後の抵抗のつもりか、ナイフを青年に向ける。それでもなお、青年は前進をやめない。

「来るなって！来るな！た、頼む来ないでくれ！」

脅しが通用しないと見たのか、ナイフを投げ捨てて降参の意を示す。

『……』

「な、なあ頼むよ！見逃してくれ！な？この通り！許してくれ！」

『許せだ？』

【ガッ！】

「ひい！？」

『……アルスを……』

【ズガッ！】

「ぐえ！」

『ファイファイを・・・』

【ゴスッ！】

「ぎっ！」

『心身ともども痛めつけた貴様らを・・・』

【ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスガスガスガス！】

「ぐげげえ！！！」

『許せだあ？』

【バキィ！！ズドオオオオオン！！】

青年はリーダーを掴んだ後、殴って蹴って殴って蹴ってボコボコにした後、最後の一発を顔面に与えて吹き飛ばした。

（龍二視点）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつぶね・・・・・・・・。」

ギリギリセーフ・・・危うく街吹き飛ばすところだったぜ・・・。

「・・・・・・・・ふう、どうにか理性は抑えられたか。」

ジジイの教えその五十二、例え激情が己を支配したとしても自我を失うことなかれってな。

矛盾してるようだけど、あの教えが役立つとはねえ・・・意外や意外。

にしてもどうすっかな・・・ここら辺は人は住んじやいねえからいいが、まるで爆心地後みたいになっちまった・・・

「……しゃあねえ。」

氣を伸ばした両手に集中させてっと。

『りゅうすいせん
龍水泉』

【イン……】

淡い光がアルス達を包み込む。すると二人の傷はみるみる回復していった。

気功術つてのはいいねえ。まあ、回復系の技は俺向きじゃないけど。

「よし、と。」

とりあえず傷がある程度癒えたところで、帰るとすつか。

「よいせ。」

今だ寝てるアルスを背負う。ん、ちょっと体重増えたか？

フイフイはまあ……とりあえず俺のジャケットの胸ポケットに。

「さて……。」

・・・そういや・・・

周りをグルリと見てみる。

「・・・。」

さっきの爆発で、見事に真っ黒こげとなったポケナスどもがそこから辺に転がっていた。

まあ死にはしないよう抑えたし、大丈夫だろ。

だがちよつとな〜・・・。

「・・・。」

【ニヤリ】

『龍幻殺』
りゅうげんころし

【シュー・・・】

氣を媒介とした霧を発生させ、周りを包む。

すこーしだけ・・・いい夢でも見させてやっかなあ

さて、さっさと帰るか。音がすごかったろうし、人が集まるのも時間の問題だしな。

（アルス視点）

.....。

(・・・)

・・・・・・・・・・・・・・?

(ア・・・)

・・・・・・・・・・・・・・う・・・。

「アルス。」

「・・・・・・・・?」

目を開ければ・・・すっかり見慣れた天井・・・

そしてボクにとって特別な存在の人の顔がそこにあった。

「リュ・・・ジさん・・・?」

「起きたか。」

どうして……？

「……！ファイファイ……！」

あ、つう……。

「無理すんな、傷は癒えたが、中身はまだ回復できちゃいねえ。」
「は、はい……すいません。」

布団から起き上がるうとしたら体に激痛が走った……ちょっと頭に触れてみたら、包帯が巻いてある……。

「あの……ファイファイは……。」

「……ん。」

ゆっくりボクを寝かせてから、リュウジさんが顎でしゃくった。

「……はあ……。」

そこには、枕の上でボクみたいに頭に小さな包帯を巻いたファイファイが寝息をたてていて、思わず安堵のため息をついた。

「治療しといたからな。もう大丈夫だ。」

「よかった……ところで……。」

「？何だ？」

「・・・何でボクは・・・ここに・・・。」

あの後、ボクはあそこで気絶したのをハッキリ覚えている。それにここからあそこまでかなり距離があるし、奥まった場所にあったから見つけるには困難なはず・・・。

「決まってる。俺がここまで運んだ。」

「リュウジさん・・・が？」

「そ。まったくあのゲスどもが、アルスのケガさえなけりゃあの場でもっと苦痛味合わせれたのに。」

そ、それはちょっと想像したくない、というかできない・・・。

「・・・リュウジさんが助けてくれたんですよ？」

「まあな。お前気絶してたけど。」

「・・・ありがとうございます。」

「ああ、礼なら後輩・・・にも言っっちゃってくれ。」

「？」

後輩・・・？

「あいつがいろんなとこで情報集めて、お前がああ街外れの倉庫街方面へ向かったって目撃情報入手したってことで、俺がそれ聞いて全速力で向かったわけよ。」

「そうなん・・・ですか・・・。」

「それと、明日お前らそいつ以外にもいろんな奴らに礼言わなきゃならねえぜ？」

え？

「お前らの帰りが遅いっつーわけで、皆して街中駆けずり回ってく
れたんだぞ。」

あ……。

「で、そいつら今はリビングでグッタリしながら眠ってる。」

「……心配、かけちゃったみたいですね……。」

「そだな。」

「……。」

「……ちよつと起きれっか？」

「？ええ……いつつ。」

うう……体中痛い……。

「しゃーねえ奴だなオイ……よつと。」

結局、リュウジさんに手伝ってもらって、上半身だけ起こせた。

「ん、とりあえずこれ飲め。」

「？」

突然、リュウジさんがボクにカップを差し出してきた。ほのかに湯
気がたつてる。

「コンソメスープ生卵入り。うまいしあつたまっぞ？」

「あ、ありがとうございます……。」

カップを受け取って、一口啜ってみた……

「……おいし。」

「お前家出てから何も食ってなかったからなあ。何でも美味しいだろ。」

「……何て言ったらいいんだろ……優しい味がする……」

卵もそのまま飲み込んで、あっという間に飲み干した。

「おかわり、いるか？」

「……いえ。」

「ん、そか。」

カップを返し、視線を組んだ手に向けた。

「……。」

「……。」

「……今、何時ですか？」

「あ……もう一時だなあ。おっそ。」

「……そうですか。」

「ん。」

「……。」

「……。」

……

沈黙が、この場を支配した。

「・・・リュウジさん・・・。」
「？」

最初に沈黙を破ったのはボクだった。

「ボク、勇者だつて言いましたよね？」

「ああそうだったな。とりあえず覚えてた。」

・・・。

「・・・ボク、ホントは役立たずなんです。」

「？」

「小さい頃から・・・住んでた村では失敗ばかりして、いつつも弱虫、役立たず、家の恥さらし・・・子供から大人、父までボクのことをそう呼んでました。」

「・・・。」

「でも・・・勇者だつて教えられた途端、周りの人達が急にボクに対して礼儀正しくなって・・・村だけじゃなく、いろんな街でもそうでした。」

「・・・。」

「・・・勇者つていう立場は嫌じゃないんです。むしろ人を助けることができて誇りに思ってます・・・ただ・・・ただ、あんな目で見られるのが苦痛でした。」

「・・・。」

「誰もボク自身を見ようとしないんです・・・見てるのは、勇者としてのボクだけ・・・それが苦痛で仕方なかった。」

「・・・。」

「だから、周りに認められるように努力してきたけど、もうどうでもよくなってきたんです。それからというもの、人を救えることができる勇者つていう立場だけがボクの支えでした。」

「……………」

「……………今日フィフィに言われて……………正直ショックでした。勇者としての立場が無くなったら、ボクは一生役立たずのまま暮らしていかなきゃいけないのかって思うと……………」

「……………」

「それに……………今日痛感しました。大切な仲間一人守れないで、勇者なんてできないって。」

「……………」

「フィフィを人質に取られた上に、傷つけ、悲しませて……………守りきれなかった……………大切な仲間を守りきれなかったんです。」

「……………」

「……………結局ボクは、勇者っていう立場にいても役立たずなんですよ……………」

「……………」

「……………すみません、突然こんな話をして。」

「ん、別に？」

……………どうして話したんだろう……………今頃になって後悔し始めた。

リュウジさんに言ったって、何にもならないのに……………リュウジさんが困るだけなのに。

ただ……………ずっと胸につかえていた物が、スツと取れたような感じはした。

「……………」

「……………」

「……………はあ。」

「……………？」

「・・・勇者つてさあ、絶対必要なのか？」

「・・・???」

どういう意味・・・？

「お前さ、人助けんのに立場なんていると思うか？いらんだろ。」

「・・・。」

「大体なんださつきから。役立たずだの、守りきれなかっただの・・・
言ってることとやったこと反対じゃんよ。」

「？」

「お前はな、守りきったんだっつ。フィフィを。」

「え・・・そんなこと・・・。」

「無いか？よく思い出してみれ。」

「・・・。。。」

・・・

あの時・・・フィフィが床に叩きつけられた時・・・

咄嗟に、ボクがフィフィを庇った。

.....

「.....」

「で？どうよ？」

「.....【コクリ】」

「だろうが。第一、お前さんがフィフィの場所を突き止めなかったら今頃どうなってたかわかったもんじゃねえんだ。」

.....

「そんな奴が役立たずって呼ばれるか？否、違うね。」

「.....でも.....ボクはただやられて.....」

「だーかーらー、それはフィフィを助けたいって思ってたことだが。何も間違っちゃいねえ。」

.....

「後な、人ってのはホントに守りたいもんは何でも守ろうとすんだよ。」

子供にしる、家庭にしる、ダチにしる、恋人にしる。

地位にしる、金にしる、何にしる。

いろんな方法で守ろうとすんだよ。」

.....

「まあ金とかどうかと思うがな・・・だがな、さつき例を挙げた人達はみーんな勇者じゃねえ。ただの一般人とかお偉いさんとかだ。」

・・・。

「守りたい者は守りたい、全力で守りたい、・・・てのは皆共通してんだよ。お前は勇者って立場に囚われてるようだが、結局は人なんだよ勇者も。つまり勇者は単なる肩書き。肩書き無くても人は助けられっただろ？」

・・・。

「まあ、勇者やめるとは言わないけどよ、

お前が勇者じゃなくなっただって、少なくとも俺達は絶対にお前を見捨てたりはしねえぞ？俺達が一番よく知ってるのは勇者アルスじゃなくて、いっつも笑ってるアルスだからな。」

！

「ま、これはあくまで十八歳の戯言だ。ざれごと 適当に聞き流したっていいぜ？」

「リュウジ・・・さん・・・。」

「ああ、後。」

「・・・？」

「仲間はただ単に守られるだけじゃねえぞ。お互い助け合って一緒にいて、辛いこととか楽しいこととか、簡単にブチまけるような奴が仲間。」

・・・

助け・・・合って・・・。

「で、結局何が言いたいかってーとな、

一人で何でもかんでも背負い込もうとすんじゃねえよ。誰かを傷つけたくない、守りたい、でも一人じゃどうにもって思うんなら仲間に頼れ。それが結局守るってのに繋がる。つまり仲間＝俺達だ。」

「・・・。」

「・・・はあ、こつこつ複雑で長い話嫌いなんだよなあ俺・・・結局話しちまったけど。」

・・・。

「じゃそろそろ遅いし、寝るかな。」

・・・。

【ギョッ】

「？」

咄嗟に・・・ボクはリュウジさんの服を握り締めていた。

「・・・一つ、わがまま言ってもいいですか？」
「？」

ただ・・・

「今だけ・・・隣にいて欲しいんです・・・。」

ボクが村で生まれてから、一度だって言ったことがない・・・わが
まま・・・

勇者になってからも、ずっと言ったことがない、わがまま。

「・・・しゃーねえか。」
「・・・。。。」

それと・・・

「……う……」
「？」

小さい頃に……村の子供達にいじめられて以来

「……う……ぢゅ……」
「……。」

全然出なかった物が

「……う……」
「……はあ。」

その時とは違った感情が……胸の中で湧き上がってきた。

「……う……」
「……ひっく……ひっく……」

【スッ】

「はいはい、気が済むまで泣きなさい。」
「……うう……うあああああああああ……！」

リュウジさんの胸の中で……頭を撫でられながら……

ボクは……色々な物を洗い流すかのように

泣いた。

第六十四の話 勇者じゃなくても（後書き）

次で一応アルスの長編は終わりです。

第六十五の話 身近にいた仲間（前書き）

今回は暴力沙汰は無いぜー……！！！！

第六十五の話 身近にいた仲間

（アルス視点）

【チチチチ・・・】 小鳥のさえずり

「・・・ん・・・。」

あ・・・朝・・・。

「・・・。」

・・・そういえば・・・夜中に・・・

ボクが泣き出して・・・リュウジさんが・・・

・・・

【ガバツ！】 起きた

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／／／／／」

あ、あわわわわわわ・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／／／／／

「ちょっと、何顔真つ赤にさせて震えてんのよ。」

「だ、だって・・・・・・・・・・・・・・・・?」

あれ?

「・・・・・・・・ってファイファイ?」

「私以外誰がいんの?」

いや・・・・・・・・まあ、そうだけどさ・・・・・・・・

「・・・・・・・・出来れば人の胸の上に座らないで欲しいんだけど。」

「いいじゃん、無いから」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・怒

「・・・・・・・・本気で怒るよ?」

「あはは、冗談よ冗談」

冗談には聞こえません。

「もう、ケガ治った途端にこれなんだから。」

「まあね、妖精族は回復力が速いから。」

かくいうボクもすっかり回復できたけど。

「まあ、とりあえずお互い無事でよかったよね……。」
「うん、そうだね……。」

……。

「……ファイファイ？」

「……何？」

「……その……腕輪……壊しちゃってごめん……。」
「……ううん、もういいの。たかが腕輪だし。」

……。

「……それに、私だって謝らないと……私のせいで、アルス傷つけちゃった……」

「ごめんね。」

……。

「……そのことなんだけどファイファイ。」

「？」

「ボクは……」

勇者でも、勇者じゃなくてもボクはボクだから。」

村の皆が役立たずと罵っても

周りの人達がボクのことを勇者だと囃し立てても

結局、ボクはボクに違いないよね。

「……だから、もう大丈夫。」
「……………」

……？何、その目。

「……ふん……。」

「な、何？」

「……さては昨日、リュウジと何かあった？」

「！！！？？」

え、え、ええええええ！？

「し、ししし、知ってたの！？とゆーか聞いてたの！？」

「ありゃ、凶星？適当に言ったのが当っちゃった？」

「・・・クルル、アルス顔真つ青・・・。」
「?・・・!ご、ごめん!」

ぷはぁ・・・く、空気がおいしい・・・。

「アルス・・・お疲れ・・・。」

「え・・・リリアン・・・?」

何で・・・。

「アルス、ファイファイ、大丈夫でしたか?」

「・・・。」

「ステイル・・・カルマにケルマも。」

「・・・まあ、僕らはただ魔王様がどうしてもといつから・・・。」
「同じく。」

?何のこと・・・?

「あれえ?私二人に頼んだっけ?」

「頼みました!!」

「ふ、二人同時に即答しなくても・・・。」

【バタバタバタバタ!】

「アルス!ファイファイ!大丈夫!?!」

「もう痛いところはないのか!?!」

「アルスちゃん!ファイファイちゃん!」

「大丈夫ー!?!」

「……。」

「いやお前らちょっと落ち着けて。」

!?

「か、カリンさん……クミさん、カナエさん、ミキちゃんにミカちゃん、マサさんも……。」

「はあ……もう大丈夫みたいね。」

「まったく、龍二が傷だらけのお前を背負って帰ってきた時はどうなるかと思っただぞ。」

「もー死んじゃうんじゃないかって……うう。」

「よかつたよーアルス姉ちゃん無事で……。」

【コクリ】

「大袈裟過ぎだろ。」

……まだ死ねませんって。

「俺ー！俺ー！俺もいるぞー！！」

「……えっと、キョウタさん？」

「何で俺だけ疑問系なんだよ！？しかも思い出すのに時間かかってるし！」

「……そーゆーキャラだから。」

「そこ四人（花鈴、久美、香苗、雅）八モるな！！」

だってその……あんまり面識が……。

「……ごめんなさい。」

「謝るな、惨めになる……（泣）」

どうすればいいんですか……。

『アルス、無事だったかああああ!!???』

『みゃー?』

「!?!ら、ライターさん!? 珠ちゃんも……。」

頭の上に猫を乗せた全身黒尽くめが視界に入ってきた時、魔王が入ってきた以上にビツクリした。

『もお心配してたんだぞ俺は? いろんな人がお前のこと心配してくれたけど、書いてた俺さえも』

「そこから先言ったら危なくないですか?」

『ご名答。』

『にゃ。』

「ご名答ですか……。」

「先輩、無事でした?」

「ちよ、明ちゃん。」

「え……。」

マサさん達の後ろから、三つ編みの女の子と髪を団子状にした（通称シニヨン）女の子が出てきた。

……えつと、今度は誰?

「ほら私達初対面だから……。」

「あ、そつか。ええっと初めまして。私、同じ高校の一年生で三田明って言います。でこっちは滝川絵里ちゃんです。」

「ど、どうも。」

「あ、こちらこそ……。」

頭を下げられたからこっちも頭を下げる。え〜っと三つ編みの子がエリさんでお団子の髪型の子がアキさん……だよな？

「えっと……皆してどうしてここに……？」

ファイファイがキョトンとした感じで言った。うん、ボクも気になった。

「わかんねえかあ？普通わかんと思うんだがな。」

「リュウジさん？」

ヒョッコリと皆の後ろから出てきたリュウジさん。

「夜中に言っただろ？街中駆けずり回ってお前ら探してたんだぜこいつら。」

「あ……。」

そうだったんだ……。

「……じゃありユウジさんに連絡してくれた後輩って……。」

「はーい！私私ー！」

元気よく手を上げたのはアキさんだった。

「うむ、お前の情報収集はなかなかのもんだったぞ。」

それは・・・ボクが壊したはずのフィフィの腕輪だった。

最初の頃より確かに形が変わってるけど、面影は十分残ってた。

「・・・リュウジ・・・。」

「おらお前ら。蹴られたくなけりゃ騒ぐなやかましい。」

フィフィが何か言う前にリュウジさんはさっさと皆のところへ・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「フィフィ・・・。」

フィフィは腕輪を・・・愛おしそうにギュッと抱きしめてた。

やっぱり、たかが腕輪、の一言では済まないほど大切だったんだ・・・。

「ウオツホン！話戻すよ？」

「あ、ごめん。」

魔王、咳払いしても似合わないです・・・。

「リュウくんが家を出なかったのはね、フィフィの腕輪のこともあるんだよ？ルーペっていう眼鏡みたいな奴とピンセットですーっと集中して修復してたんだから。」

「そう……なんですか……。」

「後ねえ……リュウくん、二人が帰ってくるってずっと信じてたんだと思うよ？」

「……？」

「だって、しきりに時間気にしてたし、二人のゴハン五分おきに暖めてたし、全然落ち着きなかったんだもん。」

……。

「それにね、アキちゃんから電話かかってきてからすぐに家飛び出してっただの。あまりの速さにもう私びっくりしたんだから。」

「クルル何話してんだ？」

「へ？いやいや何も？」

「はにゃ？」

……。

……リュウジさん……皆……

「……あのー！」

『？』

“一人で何でもかんでも背負い込もうとすんじゃねえよ。誰かを傷つけたくない、守りたい、でも一人じゃどうにもって思うんなら仲間を頼れ。それが結局守るってのに繋がる。つまり仲間〓俺達だ”

「……心配かけさせて……ごめんなさい……！」
「……私も、ごめんなさい……！」

……何で……全然気が付かなかったんだろっなあ……。

「……ふう。それでは皆いくぞー」

せーの……。

『気ニシナイ！』 全員大合唱

「気ニシナイ！」

【ズゴン！】 花鈴のエルボーが恭田の鳩尾にクリティカル

「ぶぎよぼー!?」

「アンタ何一人だけはずれてんよ恭田！」

「台無しじゃないか！」

「いいシーンだったのに！」

「感動的だったのにー！」

【コクリ】（怒）

「シーンって何だシーンて。」

「な、何だよお！俺だけ打ち合わせしてなかったんだからしょうがねえだろお！？」

「朝の打ち合わせに出ずじっと眠りこけてたテメエが悪いんだろがこの影薄恭田。」

「影薄言っつなつての籠二！」

「仇名オリゴ糖にすつぞ。」

「何で!？」

『あ、それとも山田にすつか？』

「しなくていい上に脈略ねえ!？つてかアンタ誰だよホント!？」

「ま、まあまあ。」

「皆・・・落ち着く・・・。」

『みゃーみゃ。』

「リュウくと一緒に気ニシナイ言えたー」

「僕も魔王様と一緒に言えたよカルマ！」

「はいはいよかったなケルマ。」

「絵里・・・いいねこのセリフ！」

「う、うん・・・そだね／＼／＼／」

ボクが知らないうちに仲間が増えてたなんて・・・。

「……もお……皆バカばつか……。」

「……フィフィにアルス……泣いてる……？」

「え、ウソ……!?!」

「泣くなよこんくれえで。」

「な、泣いてなんかないわよバカ龍!!」

……。

「……アハッ」

「!あ、アルスまで笑うなあああ!!」

皆が……仲間がいるこの空間で、

ボクは心の底から笑顔になれた。

第六十五の話 身近にいた仲間（後書き）

ほのぼの、かつ若干シリアスに・・・なってるでしょうか？

一応アルスの長編はこれで終わり。次回はちょっとおまけ話です。

長編を読んでくれた皆様方、ありがとうございました！これからも連載の方、よろしくお願いします！！

第六十六の話 仲直りの後（前書き）

前回の後書きで言っていたおまけ話です。

おまけ、というより後日談ですかね？

第六十六の話 仲直りの後

「アルス〜。」

「？何、ファイファイ？」

「ほらこれ見てよ。珍しい花でしょ？」

「あ・・・ホントだ可愛い・・・。」

「これ何の花かなあ・・・リュウジ〜？」

「んあ？」

「ねね、これ何の花？」

「？・・・俺じゃわからんな。花鈴とこ持ってっってみる。」

「え〜？使えない「久しぶりにキンチョール〜」「はい、ありがた

きアドバイスありがとうございませう！行くわよアルス！（汗）」

「あ、待つてよファイファイ！」

まったく・・・。

「・・・ホント仲直りできてよかったね〜二人とも。」

「まあな。」

『にゃ〜』

まあ一日も経てば仲直りするだろな〜っとは思ってたけんな。

あ、現在俺とクルルは昼飯食った後のテーブル囲んでのんびりタイム。ちゃっかり珠も俺の頭の上に乗っかっています。

「【ズズズ】・・・あ〜うめえ。」

「だね。」

俺緑茶だけとお前ジュースだろーが。

「・・・ねえリュウくん。」

「?何だ?」

「アルス達がいた場所にはどうやって辿り着いたの?」

?

「今聞くか?」

「うん、ちよっと気になって。」

「あゝ・・・。。。。。。うん、そうだな。」

勘。
「

「・・・。。。。。。へ?勘?」

「そ。」

「・・・でも、昨日アキちゃんから聞いた話だと、ここからあそこまでかなり入り組んでるって言うてたけど?」

「甘いなあ相変わらず。俺は人生ほとんど勘で生きてんだよ。」

「はあ・・・それってすごいね。」

「そうか?大したことねえけど。」

『にゃ。』

高校の入学試験だって全部勘だったし、勉強の“べ”の字もしてねえし、テストだって全部勘でやってったら学年五位以内に入ってたし。嘘のようでマジな話。

?どっからか冷視線ビームが送られてきたような・・・ま、気ニシナイ。

「あ、それとリュウくん。アルス達探してた人達ってマサさん達だけなの？」

「うんにゃ、まだいたぞ。」

「え、いたの？」

「おうよ。神楽さんに近藤さんに校長にクラスの奴ら全員にミツチエル夫妻に球の仲間達に。」

「う、うわぁ・・・考えてみたらすごい数だね。」

「まあな。知人友人全員に連絡したし。」

「ホントに全員に連絡したんだぁ・・・。」

「今度お礼に茶菓子でも送つといてやつかな。」

クラスの奴らの一部の奴らは半分脅して搜索させたがな。弱音握ってるのって素晴らしい。球の仲間達には球から伝えるよう頼んだからなあ。クルルそこツツコミ入れねえんだな。

神楽さんとはもかく、近藤さんて誰や？という奴は第十三の話に詳しく説明されてっから見れ。

「・・・でもリュウくんも探しに行きたかったでしょ？」

「そりゃな。」

「否定しないんだ。」

「俺は別に意地っ張りでもねえしな。事実マジで外に出たかった。」

体も落ち着かなかつたし。

「・・・えへへ」

「？何だよ気色悪い。」

「別に？ただやつぱリュウくんだなあって」

「？」

不浄8「あああああ虫が服の中にあいやあああああ!!!」

不況9「おびよべばびばぶべ!!!?」

不幸10(リーダー)「!+#*\$&{}()\$%~#?#%\$%\$~

<O&!?!?!?!」

徳永「ひ、ひいいい!?!何言ってるのかわかりませんよおお!

?」

「.....失礼しました。新たな情報が入り次第お伝えします。次のニュースです。」

「.....」
「.....」
「.....」
「.....」
「.....」

「.....平和だなあ。」

「.....そだねえ。」

「うにゃ〜」

ズズズ〜とお互いの飲んでる奴を音たてながら囁る俺達。

にしてもいい天気だなあ今日は。布団干すかな。

第六十六の話 仲直りの後（後書き）

コメディです。シリアスゼロ。

てなわけでここで龍二の技おさらい

・龍波紅蓮蹴 氣と酸素を媒介とし、足に紅蓮の炎を纏わせて蹴りを放つ。当然、足は焦げない。

・龍爆陣 体内に氣を溜め込み、一気に開放する広範囲技。最大威力は龍二達の街を軽々と消し去る。今回は抑えたから倉庫街だけで被害は済んだ。

・龍水泉 唯一無二の回復技。対象の傷に氣を注ぎ込み、人間が持つ治癒速度を速める。

・龍幻殺 氣を媒介とし、周囲に霧を発生させる。その霧に包まれた物は、例え眠っていなかったとしても悪夢を見る羽目になる。軽くて永遠のトラウマ、最悪狂い死に。なのでこの技は禁断技として扱われている。

ここでお分かりになった方々お見事。龍二は去り際に不良達に悪夢を見せるように霧を放出したってわけです。あれであの不良どもは永遠に悪夢にうなされるでしょう。ククク・・・おっと黒い笑みが・・・。

長編は終わりです。次回からほのぼのコメディー一直線！

それとアルスの応援をしてくださった皆様、ありがとうございます
た！

それではまた！応援よろしく願いします！

第六十七の話 普通にスポンを買おう（前書き）

今回は普通に買い物してきました。

後ついでに大幅に本文修正しました。見てた人はごめんなさい。

第六十七の話 普通にズボンを買おう

（龍二視点）

「イエア！」

「な、何ですか!？」

「いやテンション上げてえな〜つて。」

「・・・はあ。」

うむう、何だアルスそのため息はコラ。

「ところで今日は何を買いに来たんですか？」

「ズボン。」

一言で終わりました。

こないだこいつの服結構買ったんだけどなあ（第五十五の話参照）
・あいにく、こいつはスカートよりも動きやすいズボンの方がいいと駄々こねて・・・

「駄々こねてません！頼んだんです！」

「思考読むなっつったよなあ？」

「はう!・・・す、すみません。」

一睨みで黙らせた。

まあこないだ服買ったんだけど、その中にズボンが一つしか無かつ

たんだよね。だから買いに来たってわけ。

場所はもちろん決まっている。つーかもう店の目の前に来た。

『Happy Happy』

大体の服はここで買うんだよねあ（第十の話参照）。

「・・・やっぱここですか。」

「？何だ悪いか？」

「いえ、そういうんじゃないくて・・・えっと・・・。」

なあにウダウダ考えてんだか。

「さっさと行くぞ。」

「あ、待ってくださいよ。」

テテテと後を追ってくるアルス。

・・・。

「“テテテ”って何か可愛いよな。」

「へ？」

「気ニシナイ。」

まあこんな戯言どうでもいいとしてっと。

【チリンチリン】 ドアベルの音

「いらっしゃい リユウリユウお久々！アルちゃんもお久々！」

「あ、アルちゃんて……。」

「忘れた奴もいるだろうと思うが、この店主オカマのオッサン。派手な服装が眩しいピチピチの四十過ぎ。言って何か後悔した気分になった。」

「久しぶりだなママさんよ。」

「も〜最近来てくれなかったから寂しい〜!」

「相変わらず気持ち悪い〜と。」

「ひっど〜い!」

「……。」

アルス、付いていけねえ〜って顔すんな。

「おろ?とところでママさん顔焼けたか?」

「わかるう〜?実はハワイ行ってたのよ〜」

「なる。そのまま焦げちまえばよかったのに。」

「相変わらずどんだけ〜」

「気ニシナイ。」

「……リュウジさん、ズボン買いに来たんでしょ。」

「疲れた顔すんなバカアルス。」

「あつら〜久しぶりの再会に水差しちゃうの〜アルちゃん?」

「え!?!い、いえそんなつもりは……。」

「変なところで律儀になんなや。」

「あ、あつら〜……。」

「ま、とりあえずさっさとズボン買うか。」

「で？お前の要望は？半ズボンか長ズボンか？」

「あ、はい・・・え〜つと。」

ワゴンに乗ってるズボンを品定めしていくアルス。

「え〜つと・・・。」

腕を組んで眉間に若干皺を寄せるアルス・・・そこまで深く悩むものか？

「アルちゃん、ズボンをお求め？」

「え？はい。」

ママさんが近づいて聞く。店員さんでよくいるな。何かお探しですか〜つとが。

「じゃあ、私が選んであげよっか〜？」

「いいんですか？」

「とうぜ〜ん だってアルちゃんは私のお・気・に・入・り・だから」

「は、はあ・・・どうも。」

スツゲエ複雑な顔してるアルス。感謝していいのかわからんらしい。

「え〜つと・・・。」

傍にあるズボン売り場からどのズボンがいいか探すママさん。

「・・・これなんてどう？」

で、バツと広げて見せたものは。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………勘弁してください。」

「あらま。」

うぐん、そんなところどころに宝石みたいなのくっつけたズボンは珍しい。キラキラしてるし。

「ざんねん。それじゃあ……………」

また探し始めたママさん。アルス、何か一瞬にして不安な表情に。

「これは？」

「やめてください。」

即答した。

まるでウェットスーツのような黒くてピッチリしすぎたズボン。足の細さが目立つだろうが、それどっちかってーとパンストだろ。

「うぐん、じゃあ……………」

「……………」

もう何か諦めてねえかアルス？

「これ」却下。「……………」

まだ途中までしか言ってねえのに遮った。短いズボン、まあ短パンともいうよな。

でもさ、丈短すぎて完璧普通のパンツみたいに見えるのは俺だけか？

「・・・すみません、やっぱり自分で選びます。」

「そ〜お？お役に立てなくてごめんね〜？」

「いえ・・・。」

とうとう自分の力で探すことになったアルス。おそらく何でも人に頼ったりしてはいけないと自覚したんだろう。

大人の階段の〜ぼる〜 っと。

「ちて・・・と。」

じゃ俺はアルスが悩んでる間に・・・。

「ママさん、ジャケットあるか？」

「いいのがあるわよ〜。」

とりあえずジャケット売り場にも行って新しいジャケットでも買っつかね。

ほお・・・このジャケットは手触りが何とも・・・

「リュウジさん。」

「？何だ？」

「こっちの茶色のズボンとこっちの青いズボン、どっちがいいと思いますす〜？」

そう言っつて二つのズボンを掲げて見せた。

茶色いのは百パーセント綿のブカブカの半ズボンで、青いのはぴっちりしたデニムの長ズボンな。

「ん〜・・・茶色のブカブカの方がおもしろいんじゃない？」

「じゃこっちの青いのにします。」

「デコピンで顔粉々にされたいか。」

「ごめんなさい嘘です冗談です。」

似合う、似合わないかじゃなくてもおもしろさを追求した俺も悪いけどな。

「まあ金はちよつとあるし、二つぐらいなら買ってやるぞ。」

「あ、そうですね？ありがとうございます。」

「気ニシナイ。」

ホント律儀だなあこいつ。

で、また悩み始めたアルスはほつといてつと。

「・・・ん、これにすつか。」

ちよつと袖に通してみたらなかなかの着心地。肌触りもいい。何より全体的に黒くて袖んとこに白いラインが引いてあるのがいい。

んでもってこれ一番重要。安い。

「買った。」

まあ俺は一着でいいかな。

「アルスー。決まったかあ？」

ジャケット持ってズボン売り場に行く……ってあれ？いない。

「あら、アルちゃんなら試着してるわよ？」

「あ、そうかい。」

まあ服とか買うのに重要なのはまず試着だしな。

「で？どんくらい前に入ったんだ？」

「さっき二つとも試着したからそろそろ出てくると思うけど？」

もう履いたんかい。速えな。

【シャツ】

店の奥の方でカーテンが開いた音がしたってことは出てきたようだな。

「リュウジさん、お待たせしました。」

「おう。決まったか？」

「はい。」

で、差し出されたのはさつきと同じ綿百パーの茶色い半ズボンと同じくデニムの長ズボン。悩んだ末これにしたってか。

「ん、じゃ会計済みますか。」

ズボンを受け取ってジャケットと一緒にレジへ。

「はいはい、毎度おおきに」

ママさんはおそらく関西出身だ。多分。

【ピッピッピッ】 レジの音

「え〜つと・・・三点で二千九百円になりまーす」

「あいよ。」

「あ、そうそう。」

「？」

ポンと手を打つママさん。何だ？

「今日は再会の印として、と・く・べ・つ・に アルちゃんに新作の服を一着サービスしちゃうわあ」

「え、ボクに？」

ほお、そいつぁありがたい。

「サンキューママさん。あ、それもちろんタダだよな？」

「当然」

紙に包まれた新作とやらをさっき買った服が入った紙袋の中に入れるママさん。

「とじろでえ・・・」

「ところで、ママさんがくれた新作の服って何でしょうね？」
「さあな。見てみるとわからん。」

とゆーわけで、さっそく拝見。紙に包まれた服を取り出してみることに。

さて、どんな服なのか・・・

【ガサガサ・・・】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クルル復活

「・・・・・・・・何だこりゃ？」
「え・・・・・・・・つと・・・・・・・・」
「う、うわぁ・・・・・・・・」
「何だろね・・・・・・・・これ。」

これどっかで見たなあ・・・・・・・・えつと確か何とか喫茶つてので・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ねえ・・・・・・・・この形どっかで・・・・・・・・」
「えつと私のお城にいた人達が着てる奴より短いけどこの服は・・・・・・・・」

「「あ。」

・・・？

「「メイド服。」

「「こんなのヤだ—————!!!!」

・・・本人嫌がってるし、クローゼットの奥にでも置いとくか。

第六十七の話 普通にスポンを買おう(後書き)

・・・メイドとかよくわかんないんですけどね。

アルスが買ったスポンは後日また履きます。

第六十八の話 キャッチボールをしよう

くクルル視点く

「ねえねえリュウくん。」

「何だ。」

「暇だから遊ぼう。」

「今無理。」

「え〜いいじゃ〜ん。」

「ダメだ。」

「ねえねえ。」

「ダメ。」

「ちよつとだけ〜。」

「却下。」

「ぶ〜！」

「ほっぺた膨らませたってダメ。」

さつきから私ことクルル・バステイは、アルス達が今お昼寝中に対して目が冴えちゃってるのでただいま洗濯物を畳んでいるリュウくんの首に抱きついておねだり中。おねだりおねだり

「おケチ〜。」

「ケチだから。」

「・・・リュウくんがその気なら、こつちだつて考えがあるんだから。」

「？」

ふふ〜ん、カリンちゃんから聞いたもんね〜。

「……あのこと言っちゃっよ？」
「あのこと？」

そう！人は大抵弱味を握られると絶対に服従してしまうというシンの
リ的弱点が！

「私がこないだお風呂入ってた時に気付いたんだけど。」
「ふんふん。」

「……リュウくん、私が使ってたボディソープ使ったでしょー！
だからどうした。」

「……。」
「……。」
「……じ、じゃあさあ。昨日散歩してる時に風が吹いてきて……
私のスカートがフワって浮いたの見たでしょー！」

「正面にいたからなお前。それがどうした？」

「……。」
「……。」
「……な、ならば！リュウくんが小学生の頃に女子更衣室に入っ
たでしょー！」

「部屋間違えたからなあん時は。変態とか勘違いしてほざきやがっ
た女子の連中に鉄拳制裁加えて土下座させたっけなあ。」

「……。」
「……。」
「……じゃあオネシヨ」

「幼稚園からしてねえなそういえば。」

「……。」
「……。」

ゴメンナサイ、この人の弱味というのが見当たりません。とゆうより弱味と思ってないですこの人。

小学生の女子更衣室事件はカリンちゃんから得た情報だけど全然効果ないし。

「で？今忙しいんだが。」

「・・・じゃあさあ。」

「今度は何だ。」

「・・・お昼ラーメン行こうよ。」

「洗濯物畳み終えたら遊びに行くぞ。」

「わーい！」

教訓。リュウくんはラーメンにつられることが多いです。

〈川原〉

「そんじゃ遊ぶぞー。」

「はーい！」

場所は変わって近所の川原。お年寄りの人や子供とかがよく遊びに来るところだつて。リュウくん曰く。

うん、植物が生い茂ってるし、広いし皆集まるのも無理ないよね！

「で？何して遊ぶよ？」
「これ！」

懐から取り出したのは・・・

白いソフトボール！

「キャッチボールしよリュウくん！」

「・・・おもしろいかね？それ。」

「すっごくおもしろいと思う！」

「そうか。じゃやるぞ。」

リュウくんって結構単純なんだなあ。

「いくよー！えい！」

キレイな放物線を描いてボールをリュウくんに！

【パスッ】

「よっど。」

それを軽々と受け止めるリュウくん。

「あいよ。」

ポーンと緩やかに飛んでくるボール。

【パシッ】

で、普通に受け止める私。

「うーん・・・あんまおもしろくねえっーか退屈だな。」

「これからおもしろくなっていくんだよ。」

「そうか、じゃもうちょっと続けてみつか。」

単純なリュウくんに感謝。

・・・これ見てて何かおもしろくないな〜って思う人もいるだろうけど・・・

実は前々からやってみたかったんだよねえキャッチボール テレビの中で親子が笑い合いながらボール投げあいしてるの見て楽しいのかな〜って思ってた。

「えい！」

【パシ】

「ほい。」

【パス】

「うりゃ！」

【パシ】

「よっ。」

【パス】

・・・うーん・・・何か違う・・・

やっぱりただの投げ合いだとおもしろくないな〜・・・

・・・。

あ、そうだ！

「ほい。」

【パス】

リュウくんからのボールを受け取って・・・

「いつくよー！『ダークネスショット』！！！」

【ズギユウウン！！】

ボールに魔力を込めてみました！！

「むっ。」

【ズゴオオオオン！！！！】

！！

「・・・やるなクルル。」

・・・うーん、さすがリュウくん。片手で受け止められた。

「じゃお返した。『龍閃球』」

【ドオオオオオオン！！】

！速い！？

【ズドオン！！】

「んぬうう！！！」

【ズガガガガガガ！！】

お、押される～！

【ガガガガガガ・・・】

ふ～・・・止まった。

「どうした？もう終わりか。」

「ま、まだまだあ～！！」

うにゃ ああああああ～！！燃えてきたあああああああ～！！！！

～一時間後～

～ライター視点～

何か地面とか抉れちゃってるし。

で、騒ぎに乗じて結局野次馬集まってきちゃいましたっというわけです。

「それえええええ!!」

「よっと。」

【バゴオオオン!!】

「みぎゅ!!」

戦況は、クルルが劣勢、龍二が優勢、といった感じ。クルルの攻撃を魔力のこもったボールを普通に受け、倍返しにして返す龍二。それを受けて吹き飛ぶクルル。お互い、ちゃんとボールを使用したフエアなバトルとなっている為、理論上はキャッチボールということになっている。

うん、これをキャッチボールと分類した俺は一体何なんだ。

「うう……。」

「まだまだだなあクルルよ。」

膝を着いて呻くクルルに対し、ポケットに手を突っ込んで平然としている龍二。

今回は普通にキャッチボールして終わろうと思ったのに、何なんだこのどこかでありがちなバトルシーンは。

「……こうなったら……最後の手段!」

足元に転がるボールを手に取り、立ち上がるクルル。にしてもよくボール割れてないな。傷が目立つけど。

「リュウくん、覚悟!!!」ナイトメアクラッシュ!!!」

まあたすんごい技名。

真つ黒な闇がボールを覆っていき、そして少しずつ膨れ上がっていく。

「はあああああああ!!!」

そして膨れ上がり、通常のボールの二倍の大きさとなったボールを振りかぶるクルル。

「てあああああああ!!!」

【ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!】

クルルが力いっぱい投げつけると、凄まじい風が闇のボールと共に龍二に押し寄せてくる。しかし龍二はそれを先ほどと変わらない平坦とした表情で見つめていた。

「・・・ふん、甘い。」

そして右手の人差し指を突き出すと・・・

【ピシィー!!!】

「!?!?」

「あ。」

.....

偶然クルルの遙か“後ろ”にいた“恭田らしき”人物にボールが“
当って爆発”して“吹っ飛んだ”。

『.....』

突然のことで龍二とクルルのみならず他の野次馬全員が黙り込んだ。

川原に漂う沈黙・・・大きく開いたクレーターから立ち上る煙以外、
確かに時間が停止していた。

本当に静かに停止していたのだった・・・。

しばらくし、その中で沈黙を破った者がいた。

「さ、疲れたしアルス達呼んでラーメン食いに行くぞ。」

「賛成」

龍二の言葉に嬉しそうに笑うクルル。そしてそのまま川原の土手を登っていった。

「……さ、帰るか。」

「買い物行かないといけないし。」

「母さん、お腹すいたー。」

「はいはい。」

野次馬達も口々に言い合って帰路に着いたのだった。

……じゃ俺も帰ってカレーでも食おっかな

翌日、龍二達が学校へ行くと恭田が緊急入院したという報告を受けるのはまた別のお話。

第六十八の話 キャッチボールをしよう（後書き）

うーん戦闘描写というのは難しいですね。

え？恭田はどうなったか？恭田って誰ですか？アハハハハ

第六十九の話 龍二の昔話（前書き）

感想に龍二が何故氣を使えるのかという意見がありましたから、それについて今回はお話をさせてもらいます。納得できる話だったらいいんですけど……。

第六十九の話 龍二の昔話

く龍二視点く

「んみゆく。」

「はうく。」

「ほえく。」

「むく。」

あゝいい天気だく……とろけそう……上のセリフは誰が言ったか適当に言い当ててくれ。

「リュウくくん……。」

「んだあクルル？」

「……溶けそうく。」

「魔王恐いですそれ。」

「溶けないでよ？」

「溶けたら廃棄処分な。」

「ふえく。」

……あ、状況説明だ状況説明。

あゝ……今俺らはリビングで陽光が差し込む部分に寝転がっておりま。

最初は俺が寝転んでたんだが、クルルがいつの間にか横にいて、さ

らにアルスとフィファイまで来てこうなった。以上。

・・・説明不十分？知るか。今超気持ちいんだよ。

「ふあ〜・・・ねみ。」

ヤベ、寝そう・・・。

「・・・リュウくん。」

「？」

今度は何だあ？

「・・・あのさあ、今回こんな感じで終わっちゃうの〜？」

「かもな〜。」

「え、何の話ですか？」

「終わりって何よ？」

話についていけないアルスとフィファイ。終わるって意味わかった
けよな。

「それだとさあ、今回の話短すぎてちょっとまずいんじゃないの〜
？」

「そうかあ？」

「いやだから何の話してるんですかって。」

「アルス、あえて付いて行こうとしない方が楽よ。」

どういうことだったそこの二人。

「だってこのままずっとこのんびりしたまま終わりました〜ちゃん
ちゃん だと苦情来ちゃうよ?」

「それはそれでいいんじゃないか?」

「苦情って……。」

「アルス、黙ってこらうって。」

アルスとフィフィやかましい。

「そういうわけなんでリュウくん、何かお話して。」

「お話?」

「そ。リュウくんが知ってる話。」

俺が知ってる話、とな?

「話ねえ……。」

う〜む。

……

「……よし、じゃ俺の昔話をしてやろう。」

いい暇つぶしになるといいが。

「」「昔話!?!」「」

何で勢いよく起き上がるアルスルルフィィ。

「そつえばリュウジの過去話って聞いたことないわよね〜。」

「聞きたい!リュウくんの子供の頃のお話聞きたい!」

「……き、聞きたいです。」

ここまで食いつくもんか？俺の過去って。

「……言っておくが、記憶が曖昧だからところどころしか話せんぞ？それでもいいか？」

「……いいです！」

ハモリ即答ってか？

「ふう……しゃーねえ。話すとすつか。」

ま、別に苦じゃねえしな。

（回想）

あれは俺がまだ五歳の時……親父とお袋と一緒に住んでた時だ。

そんな時の俺は実に平凡な奴でさあ、五人のヤクザを一捻りする程度しか力が無かったんだわ。

（（いえ、十分平凡じゃないです。））

ハモんな黙って聞け。

まあそんなこたあいいとしてだな。ある日夏休みを利用してジジイの家、つまり祖父だな。のそこに行つたんだよ。遊びに。

俺はジジイのことが大好きだったし、その家に住んでた従弟ともよく遊んでたなあ。ああ懐かしい。

で、そのジジイなんだがなあ・・・まあただもんじゃなかったわけよ。

昔、中国拳法から日本武道、剣術、さらには気功術を活用した技をジジイの師匠とやらから教わつたんだよな。

自分用の稽古場もあるし、道場開いたらとかいう提案があつたらしいが、何か孫以外の人間に教えとうないとか駄々こねたんだと。

で、遊びに行つた時の俺の一言で大騒ぎになった。

『じじー。俺じじーみたいな技使えるようになりたい。』

『なぬ！？ならば今すぐ鍛錬してやろう！住み込みじゃ住み込み！』

『ー』

住み込みの何が悪かったのか親父もお袋も何か必死で止めてたし。それでもジジイはしばらく住まわせるの一点張り。

で、とうとう親父達は根負けして、俺はジジイの家しばらくお世話になることになった。

で、初日。

場所は鍛錬場。よくある木製の板で出来た道場の中、俺はジジーと二人で真ん中に立っていた。

『よいか龍二。最初に言っておくが、武道というのはつねに礼に始まって礼に終わる、と言われておる。ワシとて例外じゃないぞ。まずは礼からじゃ。』

『オーケージジー!』

『うむ、では手始めにワシのことをお爺ちゃんと呼んでみる!』

『ジジーのことを?』

『いやじゃからな、ジジイじゃなくてお爺ちゃんと呼ぶのじゃ。』

『何で?ジジーはジジーでしょ?』

『まあそうじゃけどな、まず礼をしようにも目上の者には礼儀というが無ければ始まらんのだ。』

『おー。』

『わかったな?では言ってみる。』

『お爺ちゃん!』

『おおおおおおお・・・もっかいプリーズ。』

『お爺ちゃん!』

『もっかい。』

『お爺ちゃん!』

『もっかい!!』

『お爺ちゃん!』

『ラストーーーー!!』

『やめんしゃいアンタ!!』

婆ちゃんに止められた。

まあメシの時には呼び名がジジイに戻ってたけどな。

で、二日目。

二日目は道着を着てジジイと従弟と一緒に鍛錬場に行った。

『二人とも、今回はワシの武道を教える。』

『はいじじい！』

『うむ、よい返事じゃ。お爺ちゃんと言ってくれば尚よいがしよ
うがない。』

何故かジジイは俺らにそう呼んで欲しいと思ってたようだな。

『じゃまずは・・・そうじゃな、乱取りをしてみせい。』

『じじい。乱取りって何？』

『乱取りっちゅうのはな、お互いが自由に技を出し合って練習する
ことじゃ。』

『でもじじい、俺らまだ技教えてもらってねえぞ？』

『確かにそうじゃが、まあまずはウォーミングアップ程度じゃ。』

『ウォーミングアップって何？おいしいの？』

『うまくないぞ。さあそんな可愛らしい質問は置いといて、とにかく
突きでも蹴りでもいいから相手を攻撃してみせい！』

『はい！』

三分後

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『えいやー！』

【ズドオオオンー！】

『ちよりやー！』

【バゴオオオンー！】

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

まあね、伊達にお互いジジイの孫やってねえからな。あつという間に鍛錬場はボロボロになっちまったってわけよ。乱取りで。そこから辺穴だらけ。

『えーい！』

『何のー！』

【バギイイイインー！】 お互い上段蹴り交差

【ドゴオオオオンー！】 衝撃波発生

『・・・・・・・・お主らもうやめやめい！』

『・・・・・・・・』

そのまんまの姿勢で首を傾げた俺達。その時のジジイの泣きそうな顔が印象的だったな。

『』どしたじじー？』』

『』……まあ、今回は二人のカワイさに免じて許してやるつ。』

『』？？？』

何のこっちゃよくわからなかった。

で、晩飯の時に婆ちゃんに説教食らってたなジジイ。

それから一週間ほど格闘技を練習してたんだが、休みが終わるってことで家に帰ることになった。ジジイものっそ泣きそうな顔してたな。

ただ、それからも小学生の夏休みではずっとジジイの家に行って従弟と格闘技の練習を重ねてったのは今でもいい思い出。おかげでその頃になつてヤクザからレベル上がって象二匹を普通に片手で持ち上げれるようになったし（三人娘顔真っ青）。

で、時は巡って中学生時代最初の夏休み。毎年同じ通りにジジイの家で修行することになった。

来て早々鍛錬場へと向かった俺ら。あ、従弟は遊びに行っていていなかったな。

『龍二よ、お主は格闘技はもう達人の域じゃな。もう達人超えて超人じゃね。』

『おうジジイ。』

『うむ、龍二相変わらず礼儀わかってないね。』

『まあな。』

『威張るでない。』

こんなやり取りしよっちゆうよ？

『さて、今日は格闘技とは違う、気功術の極意を教えてやるつ。』

『？何だそりゃ？』

『まずはあれを試してみるがいい。』

で、指差した方を見てみれば鍛錬場の庭にあつたでかい石が。

『石がどうしたジジイ？まさか生き別れの兄弟？』

『うん、どこをどうとつたらあれがワシの生き別れた兄弟に見えるか不思議でしゃーないんじゃないか？』

『まあ細かいことは気ニシナイ。』

『ツッコミどころ多すぎてしゃーないんじゃないか？まあよい、とにかく見ておれ。』

体の向きを石に向けて目を閉じて微動だにせずじくっとしてた。

俺はその間婆ちゃんが入れてくれたリンゴジュース飲んでくつろいでたな。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「カアッ！……！！！」

【ズゴオオン！！！！】

『おー。』

まあいきなりだったね。ジジイが叫んだと同時に突然石が爆発した。

『……どつじや龍二よ。』

『ジジイすげえ！』

『そつじやるそつじやる！』

すげえって言っただけなのにジジイの目が生き生きしてたのは忘れられん。

『今どんな手品したんだジジイ？』

『手品ではない、氣を破裂させたんじや。』

『氣を？』

最初は意味がわからなかった。

『龍二よ、氣について知っておるか？』

『うつん？』

『氣というのはな、人間の体の中を巡っておるのじや。』

『血じやねえの？』

『確かに血も同じように巡っておる。しかし氣は常人の目には見えん。空氣と同じじゃ。』

そしてその空氣、すなわち大氣中にも氣は流れておる。植物にも石にもじゃ。その氣を利用した治療法が氣功術・・・そしてワシはその氣功術を応用した技を使える。』

『おー。』

何のこつちゃ訳分からんかった。

『・・・龍二、お主には氣功術を自由自在に扱える素質を持つておる。ワシ以上にじゃ。』

『そうなのか?』

『ワシにはわかる・・・お主の体に巡っておる氣の力は、並のものじゃない。お主はワシを、ワシの師匠をも超える存在じゃと確信しておるのじゃ。』

『ふん、そ。』

『・・・いや、ワシ結構かつちよいいこと言ったんじゃけど反応なし?』

『俺は日常生活で普通に過ごせるぐらい力が付けばそれでいいからな。』

『・・・お主には向上心というのが無いのか・・・まあそれもお主の魅力なんじゃろつが。』

『?』

『まあともかく、じゃ。今日から氣功術を扱えるよう特訓していく。敵しいぞ?』

『おつ、やるやるー。やってさっきのジジーの生き別れの兄弟粉々にするぞ。』

『え、まだそれ続いたの?』

それから三ヶ月の間、座禅から滝に打たれ、精神統一を中心とした修行が続けられた。

最初こそ何か辛かったが、慣れたら大したことなくなってきたね。

『龍二よ、最初の頃に比べより引き締まった顔となったな。』

『おうよジジー。』

『口は変わってないのねん。』

まあそんなある日、ジジーから鍛錬場へ来るように言われてお互い向き合って座った。

『今のお主なら、氣を操れるかもしれんな……。』

『そうか？』

『信じるのじゃ、己自身を。』

『おし、じゃ信じてみるか。』

『えらい軽いな……。まあよい。それでは最後の試練じゃ。』

ジジーは最初にジジーが破壊した石より遙か遠くにある石を指差した。

『あそこにある石を粉碎してみせい。』

『結構遠いな。』

『大丈夫じゃ。今のお主になら。』

『出来るってか？・・・・・・・・ま、やってみっべ。』

最初にジジイが見せてくれたように体を石の向きにして座禅を組み、集中。

石に集中のみならず、自分の体の中と大気中にある氣を感じ取る。

少しずつだが、氣の流れがハッキリしてきた。

まあどんな風にって言われれば、目を閉じた状態から周囲に青い何かが風の如くうねって渦巻いてる感じかね？

つまり、青いのが氣・・・それから体の底から何か湧き上がってくる感じがした。

で、

『・・・・・・・・滅ッ！！！』

何かえらい古臭い巻物もらった。

『ワシが今まで書き綴ってきた荒木流気功術の指南書じゃ。後はお主が鍛錬を積んでいき、己を磨くのじゃ。』

『ふくん……じゃもらつとく。』

『……龍二よ、これはあ奴にも言った言葉なんじゃが、よく聞けよ。』

あ奴つてのは従弟のことだ。

『この世で許してはならん者がおる。偏見、差別、そして大事な者を平気で傷つける人間じゃ。こ奴らは何があつても許してはならん。』

『おつ。』

『そしてお主に教えてきた数々のこと……その力を使う時はしっかり考えるのじゃ。』

『おつよ。』

『お前さんは、まだまだ強くなる。じゃが決して自惚れるな。その時点でお主はあらゆる意味で負けじゃ。いいな?』

『オツケー。』

『……そして最後に。決して人は殺してはならん。わかつたか。』
『イエー!』

『うむ……ワシが教えることはもはや無い。後はお主が自分で答えを見つけてゆくのじゃ。』

『ジジー?』

『ワシはいずれ旅に出る……来年の今頃はもういないじゃろつ。』
『旅?何でだ?』

『お主のようにワシを超える人間はまだまだおる……ワシはもう一度初心に帰って放浪してくるよ。』

『ジジー……。』

『じゃがワシの中にはつねにお前さんらがある・・・お前さんらがいる限り、ワシは死なんぞ!!』
『?俺らはジジイの旅に付いていく気はねえぞ?』
『いや比喩じゃよ比喩。何も付いてこいとは言っておらんが付いてきたければ付いて』
『行かねー。』
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

それから、俺がジジイの家に行くことは無かった。

～回想終了～

「ま、それからは指南書の通りに特訓してって今の状態ってなわけよ。」
「ほえ・・・・・・・・すげーい。」
「へえ・・・・・・・・。」
「・・・・・・・・。」
ジジイの教えもすっかりノートに綴ってあるし、指南書もちゃーんと保管してあるし。中には禁断技ってのもあったが、まあ一応覚えてはおいた。

指南書に書いてあったのは龍閃弾とか龍鉄風とか基本的な技だが、他多くは俺のアレンジ技だ。

「リュウくんのお爺ちゃんっておもしろいね。」

「まあな。」

「おもしろいですか・・・ね？」

「お茶目って感じ？」

そんな可愛いもんか？

「お爺ちゃん、まだ放浪の旅してるの？」

「ああ、時々手紙よこしてきたりしてる。」

今じゃ多すぎて物置に封印中。

「今でも修行はしてるの？」

「座禅組んだりして精神統一とかは毎日の日課だ。」

寝る前とかにするとよく眠れるんだよね。

「・・・リュウジさんの強さはそこにあるんですね。」

「まあ子供の頃から大人を一捻りで倒しちゃうんだから当然ね。」

そうかね？

「・・・ところで、従弟の人は今何してるの？」

「ああ、ジジイの家から離れて同年代の奴数人と一緒に暮らしてるぜ。行方不明だけど。」

「行方不明？」

「ちよっと前に連絡が途絶えちまったんだよ。それからあいつが何

してるのかわかんねえんだ。」

「ふうん……でも何でお爺ちゃんの家に住んでたの？家族は？」

「物心つく前に事故で亡くなったんだと。それで。」

「そう……なんだ。」

あゝ一気に暗い雰囲気になっちまったな……。

「まあ今どうしてっかわかんねえが、元気だろう。俺と互角なんだし。」

「「「」、互角……。「」「」

？絶句するかそこぞ？

「……でも、ホント元気にしてるといいですね。」

「だなあ。今頃どうしてっかな。」

一時手紙のやり取りしてたんだが、ある日プツツリ途絶えちまったし……。

「そついえば従弟さんの名前って何ですか？」

「ああ、あいつの名前は……。」

~~~~~

「ふえつくしよい！ちきしよい！！」  
「ちよ！いきなり驚かさないでよ。」  
「ああワリワリ。」

鼻水が出たんでズズ〜と吸い上げた。

「風邪・・・ですか？」  
「いや、俺に限ってそれはねえさ。」  
「ならばこの俺特製風邪薬を！！」

【シュピン！ガチャーン！】

「Noooooooooooo！！！！？？俺の、俺の発明品がああああ！！！！！！！！」

「黙つとけ自称天才バカ。」

いきなり突き出してきた変な薬品を瓶ごと居合い斬りで叩き割った。

・・・まあ風邪じゃないだろうが・・・誰か噂してんのかねえ？

.....。

「ソウジロウさん、ちょっと探し物あるんですけど。」  
「.....おつよ。ちょっと待ってるリリース。」

ん、  
まあ  
いい  
か。



## 第六十九の話 龍二の昔話（後書き）

気付いた人もいるでしょうが、実は他小説と何気にリンクしています。

まあ今回のお話はあくまで龍二の強さの由来。いつかそれ中心の番外編書こうかなと思って思っております。構成まだ出来てないですけど。。。

それでは！

第七十の話 登場人物紹介&特別企画開催!! (前書き)

今回は本編とは関係ありません。サブタイ通り登場人物紹介と特別企画の公表です。

第七十の話 登場人物紹介&特別企画開催！！

コ「ライターこと作者の कोरोコロ です！読者の皆様のおかげで第七十話へと行きました！ありがとうございます！！」

龍「主人公荒木龍二。サンキューな。」

ア「アルス・フィートです。どうもありがとうございます。」

コ「今回は休憩がてら、大分キャラクターが多くなってきた人物紹介をしていきたいと思っております！」

龍「単に前々から書きたかっただけだろ。」

コ「・・・はい。」

ア「そ、それくらいで落ち込むことないと思いますけど・・・。」

コ「さてそれでは！！」

ア「復活早っ！？」

コ「まあちょっと読みにくいかもしれませんが、人物紹介どうぞ！！」

荒木 龍二（18）

性別 男

外見 黒目ボサボサ黒髪 顔は中の上（寝顔は上の上）

性格 マイペース

好物 醤油ラーメン

備考

毎日をのんびりと過ごすこの小説の主人公。見た目は普通、中身は最強力も最強やること最強といったら彼の名前が出てくるだろう。その強さは、ファンクラブではなく宗教が建つくらい。気功術を得意としている。色々な女性から好意を寄せられているが、本人はまったく気付いていない。そんな彼女らを振り回すというラブコメの主人公としてありえない行動を繰り返す。現在はアルスとクルルとファイファイを家に住まわせている。ラーメンのことになったら周囲が見えなくなる。トレードマークはヘッドフォン。口癖は『気ニシナイ』。趣味は散歩と優越感に浸ってるバカを無理矢理地べたに引き摺り下ろし精神的にボコボコにすること。

一言『ラーメンを考えた人物は偉大だな。』

アルス・フィート（アリス・フィート）（16）

性別 女

外見 緑目ショート緑髪 顔は上の上（見た目美少年）

性格 温厚

好物 ココア

備考

異世界で勇者と崇められていた少女。幼い頃から村の人々に罵られ

てきたのがトラウマとなっており、引つ込み思案な部分がある。しかし、剣の腕前は確かである。龍二に好意を寄せており、何とか気持ち伝えたいと思うが、後一步のところで立ち止まってしまう。十六歳にして龍二と同じ学年だが、龍二が裏工作したという噂もある。現在は龍二の家で居候の身。密かにファンクラブあり。

一言『え、えつと・・・これからもよろしくお願いします。』

クルル・バスティ（人間年齢15歳 魔族年齢はそのうち明らかに）

性別 女

外見 赤目ロング金髪 顔は上の上

性格 天真爛漫

好物 チョコレート

備考

異世界で魔王として君臨していた少女。しかし魔王としてあるまじき善良な行動を取っていた為、部下の策略により全種族の敵となる。暗黒魔法において右に出る者はいない。龍二を恋い慕っており、つねに抱きつこうとしていくが、軽くあしらわれている。アルスと同じく高学年。理由はアルスと同じ。現在は龍二の家で居候中。明るい性格のおかげでファンクラブの支持は厚い。

一言『リュウくん大好きー！』

ファイレイド・フィアラ（ファイフィ）（見た目14 妖精族年齢はいずれまた）

性別 女

外見 右目ピンク左目水色ロング銀髪 顔は上の上

性格 若干勝ち気

好物 サクランポ

備考

異世界でアルス達と共に旅をしていた妖精族の少女。妖精族の中でも一番地位が高いらしいが、詳しくは語らない。全ての魔法を得意としており、超上級魔法も使えるらしい。アルスが龍二に対して好意を抱いているのに気付き、応援しているが未だ報われていない。体が小さいおかげでよく龍二のポケットに忍び込む。現在は龍二の家に居候している。風で飛ばされるのがコンプレックス。

一言『言っておくけど、私虫じゃないわよ!!』

エルフィアン（人間の頃は23）

性別 女

外見（剣） 細身の長剣 全体的に若干青い

外見（人） 青目ロング青髪 顔は上の上

性格 気高

好物 不明

備考

アルス達とは違う異世界から来た知能ある剣。人格は冷たい印象が強い女性だが、時には冷静にその場の判断を下すという理知的な性格も備えている。ただ、戦闘となると熱くなって周囲が見えなくなる。とくに人間の頃から雷を操ることができ、敵を雷で黒焦げにするのが大好き。俗に言う（？）放火魔ならぬ放雷魔。しかし、龍二

に拾われてからというものの、包丁にされたりイジリ相手にされたりと、散々な目に合うかわいそうな生活を送っている。滅多に口にしないが、実は結構寂しがり屋。時々眠れない夜なんかは、龍二の夢の中に特殊能力を使って入ってきてたりする。

一言『私は包丁ではなあああああい!!!』

楠田 雅（18）

性別 男

外見 茶目ショート茶髪 顔は上の上

性格 冷静

好物 塩ラーメン

備考

龍二の中学時代からの親友かつラーメン仲間で、彼のツツコミ役を務める。ケンカは弱くはないが強くもないといった感じだが、頭の回転は速い。過去に辛い出来事があったらしいが、今となってはどうでもいいらしい。よく龍二、久美、香苗、恭田の五人でつるんでいる。現在は姉の涼子と、魔法使いのスタイルを居候としているために豪邸で三人暮らしをしている。顔はモデル並でファンクラブ会員の数が多い。

一言『誰かあいつ（龍二）のツツコミ代わってくれ。』

スタイル・グライア（19）

性別 男

外見 金目シヨート金髪 顔は上の上

性格 温和

好物 ミルクティー

備考

異世界でアルス達と行動を共にしていた魔法使いの青年。普段は温厚だが、キレたら一人称が“私”から“オレ”になる。昔、魔物に村を滅ぼされてからクルルに憎悪の念を抱くが、最近少しずつ緩和されていつている。仲間の中では年長者らしい振る舞いをするが、雅の家に居候することになってから雅の姉、涼子の料理の実験台をさせられているため精神的にやばいらしい。結構イジられ役。

一言『涼子さん・・・せめて食べれる物作ってください・・・。』

斉藤 香苗（18）

性別 女

外見 黒目ロング黒髪 顔は上の上

性格 明るい

好物 アップルパイ

備考

学校で生徒会長を務めている龍二の友人。才色兼備、文武両道、大和撫子といったまさにパーフェクト少女。中学時代ではおしとやかな女性を演じていたらしいが、龍二との出会いをきっかけに元の積極的で明るい性格に戻った。龍二に好意を寄せており、何かとアタックしていくが軽く踏まれて終わっている。おまけに生徒会サボって龍二と帰りたがるし。因みにスリーサイズボンツキュッボン（古）



。ロウ兄弟を居候として家に置いている。ファンクラブあり。可愛いのに目がない。

一言『リュウちゃんのハートは私がゲッチュ!!』

カルマ&ケルマ・ロウ（見た目14 魔族年齢はいずれ）

性別 W男

外見 W赤目ショート銀髪 顔はW上の上

性格 カルマ冷静 ケルマおっちょこちよい

好物 Wで肉

備考

クルルに仕えている双子の魔族。つねに1セットで行動している。世間で言うところ容姿はWで可愛いということ、よく香苗の双子の姉妹、美紀と美香にイジられている。香苗にもよく抱きつかれるし。よく同時に喋ったりしている。クルルに好意(?)を抱いているのがケルマで、よく彼にツッコミをいれるのがカルマ。多分というか絶対にケルマの気持ちはクルルには届かないだろう。作者的に

一言『届かないってどういうことですか!?!』byケルマ

『そのまんまだろ』byカルマ

立花 久美・アンドリュー（18）

性別 女

外見 黒目ショート金髪 顔は上の上

性格 男勝り

好物 イチゴショートケーキ

備考

アメリカ人の母と日本人の父を持つ龍二の友人。父は単身赴任で家にはいない。空手部に所属しており、全国大会で優勝した経験もある。その為、男子女子から高い人気を誇っており、ファンクラブには女子も入っている。過去、龍二に敗北したのがキツカケでよく勝負を挑んでいるが、あることを境に彼に好意を寄せていくようになっていく。龍二に勝った時に告白しようと考えている模様。しかし彼女が彼に勝つ日はおそらく永遠に來ない。因みにアルス達の仲間であるリリアンを居候させている。

一言『絶対龍二に勝つ！そして勝った暁には……き、聞くな！！』

リリアン・ヴェルバー（19）

性別 女

外見 青目ロング黒髪 顔は上の上

性格 寡黙

好物 スイートポテト

備考

アルス達の仲間で、主に切り込み隊長的存在。大きな斧を得物としている女戦士。旅の間はつねに鋭い視線で髪はポニーテールにしていたが、久美の家でお世話になってから髪はといて目は半開きとなつてのんびりした印象を与えるようになった。寡黙な性格だが、実は結構恥ずかしがり屋。初対面の人間に会うと顔が真っ赤になる。ある事がキツカケで龍二の好意を抱くようになる。

一言『……………／／／／／／／／／／／／／／／／』  
／  
』

高橋 花鈴（18）

性別 女

外見 黒目ポニー黒髪 顔は上の上

性格 負けん気強い

好物 ブドウ

備考

龍二の幼馴染で、家庭の都合で一人だけ龍二達の街に転校してきた。顔は美人な部類に入るため、転校初日でファンクラブが建つくらい。特に何も習っていないのに強く、今までだって言い寄ってきた男どもをぶん殴って昏倒させてきた。幼い頃から龍二のことが大好きだったらしいが、素直になれずについつつけんどんな態度を取ってしまつこともしばしば。それに対し龍二は普通に左へ受け流すうゝ

一言『言っておくけど、私はツンデレじゃないからね!』

佐久間 恭田（18）

性別 男

外見 黒目トンガリ金髪（黒髪染めてる） 顔は上の下

性格 お調子者

好物 虫（待てえい!?!）ウソ、バナナ

備考

龍二達の友人・・・とゆるーかイジられ役。本作で一番影が薄い。これ以上ないくらい薄い。作者も忘れてしまっくらい薄い。趣味はナンパ。成功率ゼロ。ことあるごとに龍二の技を食らうこともしばしば。いい奴だけれど、影薄いせいでそうだった印象が皆に伝わっていない。こないだある事件のせいで入院してるが、何故か入院してる間に隔離病棟へと移行。容態は悪化したとか何とか？

一言『俺の紹介かなりひどくね!!??』

コ「はい今回はここまで！第二回辺りで他の人達紹介していきます  
!」

龍「書くの大変だったからだろ。」

コ「い、一々言うな!」

ア「・・・そういえば、ハッキリしていない部分がありますね？マサさんの過去に辛い出来事があったとか、クミさんのあることがキツカケでとか・・・。」

コ「ああ、それはいずれストーリーになる予定だから。ここで言う  
とネタバレになっちゃうし。」

ア「な、なるほど。」

龍「ふん。」

コ「さて、これで終わり……と行くところですが……。」

龍「まだあんのか？」

コ「そう、今回から……。」

『勇魔以上人気キャラ投票』開催しちゃいまー……す!!  
「！」

龍「ふん。」

コ「……いやそこもうちよい反応してくれても……。」

龍「気ニシナイ。」

ア「で、具体的にどういう……？」

コ「あそうそう。」

読者の皆様が『こいつが好きだ!』と思ったキャラクターを一人  
まで、感想で送ってください。なんならメッセージでも可です。」

龍「どしてまたこんな企画？」



ア「な、な、何言おうとしてんですかあああ！！？？」

コ「だから質問の例。」

ア「何でボクの体型を例にしてんですか！？」

コ「いや、いいのが無くてさあ。」

因みにアルスのスリーサイズは……。」

ア「今言いますか！？あ、ちょっとストップ」

コ「【】です」

ア「………うああああああん！！！！！！」

【ズドン！】

コ「うお、あぶねえ！？ってちよつとアルス！？」

ア「うわあああん！作者さんのバカあああああ！！！！！」

コ「どわああああ！俺が悪かった！だから剣しまっつけてくれええええええ！！！」

龍「……行っちまったな。」

ん、まあとりあえず、人気投票とやらを開くんできよろしく。

キャラは二名まで、締め切りは程よいくらい集まってきたから作者が決めるとよ。大雑把な奴。

そんじゃー、票待ってまーすつと。さ、ラーメンラーメン」



第七十の話 登場人物紹介&特別企画開催!! (後書き)

とりあえずお待ちしております!

そして!ここまで来れたのは読者の皆様のおかげです!ありがとうございます!!  
ごぞいます!!

第七十一の話 五大天使親衛隊現る！（前書き）

大層なサブタイの割に内容はそんな大したことないですよ？

## 第七十一の話 五大天使親衛隊現る！

（龍二視点）

「【ズズズズズズ】お代わりレッツラゴー。」

「リュウジさん、もうそれで何杯目ですか……。」  
「軽く百は超えたわね……。」

ただ今食堂にて昼飯のラーメンを食っておりま。授業終わってすぐに食堂へと駆けつけたから普通に席に座れちゃってるぜ

……そっぴや朝のHR中に恭田が何か退院長引いたとか神楽さん言ってたな。面会謝絶だっけ言ってたし。何故だ？

「はいお待ちどう様龍二くん。」

「サンキュ。」

……まあ気ニシナイってことで、ラーメンをおばちゃんから受け取った。何故か並んでいた奴ら皆して俺に道を譲ってくれた。親切な奴らだ。

「ただいま〜っと。」

「よく食うなお前。」

席に戻ったら雅に言われた。

現在、共にメシを食っているのは俺、雅、久実、香苗、花鈴、アル

ス、クルルのメンバー。フィフィは俺の胸ポケットに。つーか俺以外全員食い終えてるし。

「そんなに食べて太らないの？」

竜田揚げ定食を食ってたお前に言われたくはない香苗。

「まあ俺は基礎代謝はいいって言われてるかな？」

「それを女性であるあたし達の前で言うか？」

「言う。」

「即答!？」

女性だからなんだ久実。

「・・・つーかアンタよくそんな金があるわね。」

「大丈夫だ。一部はお前の金だ花鈴。」

「そ。なら安心ねってふざけんなあああああ!?!?!?!」

ガタン!つと音をたてて立ち上がる花鈴。最近ノリツツコミがブームなんだろうか？

「あ、あ、アンタ何してくれてんのおおおおお!?!?!?!」

「気ニシナイ。」

「果てしなく気にしろおおおお!?!?!?!」

「か、カリンさん落ち着いて!」

「もち付いて!?!」

「クルルうまい。」

「え、そお?・・・エへ」

「和むなおもんじゃないわああああ!?!?!」

「こらー!食堂で暴れるなんて生徒会長として許さないわよー!」

「黙つとけサボリ会長。」

「うえーんリユウちゃんがいじめるー！」

「泣くな香苗！」

「何だこのグダグダは……。」

食堂は一気にほんわかした（！？）（雰囲気となった）。

ただそんな中で、周りの連中の一部の奴らから刺すような視線が送られてる気がしたんだが気のせい？

く屋上く

さて、メシも食ったし、アルス達は香苗に捕まってるしつと。

「寝よ。」

【ゴロン】

ん〜……屋上で大の字に寝っ転がるのは最高じゃ〜。

しかも今日はちゃっかりMY枕を持参。ゆったり寝ようそうしよう。  
この静かな、そして風が森の香りを運んでくるこの平和な空間で……

俺詩的なこと言わなかったか？気のせいか。

「……んみゅ……。」

あゝ眠……。

【ズガアアアン!!!】

『荒木龍二iiiiiiii!!!』

……ん？

何かでかい音&呼ばれた気がして薄目で扉の方を見てみたら、何か結構な人数の男子がゾロゾロと屋上へと入ってきた。

「我々は……。」

「我が学園の天使達を貴様の魔の手から救い出す為に誕生した……。」

『こだいてんし 五大天使親衛隊！！！！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

「フッフ、怯えて声も出ないか。」

「無理もないだろう。何せ我々は斉藤様、立花様、高橋様、アルス様、クルル様五大天使のファンクラブ直属親衛隊連合軍なのだから！！！」

「今まで姿を隠していたのは、チャンスを窺っていたからなのだ！！！」

「今日こそは貴様の手からあの方々を救い出してみせる！！！」

「この数にはさすがの貴様を驚いただろう！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まあ待てお前ら。ここは一応こいつに最後の言葉ぐらいは言わせてやるのではないか・・・さあ、荒木龍一よ。今土下座して詫びるなら楽に消してやるわ。それとも何か言い残すことはないか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・





あゝよう寝た・・・変な連中が飛び掛ってくる夢見ちまったぜ。せめて見るならラーメン伝説の夢見せろってんだ。

つておりよ？何か床に血みたいなのが広がってんな。

・・・・・・？

「・・・まあいいか。」

さて、そろそろ昼休みも終わるし、教室戻るか。

一瞬フェンスが変な風に凹んでいたのが見えたが気ニシナイ。

〈教室〉

「ただいまー。」

「おっかえりー！」

【ベシヤ】

家じゃねえっつーのに飛び掛ってきたクルルをいつも通り叩き落とす。

「リュウジさんおかえりなさい。」

「おかえりー。」

「お前また昼寝してきたのか？」

「おうよ。」

「飽きないわね。」

「まあリュウちゃんらしいって言ったたらリュウちゃんらしいよね。」

「だな。」

『あはははははは』

・・・笑い合いながらふと思った。

寝ながら何か殴ったような気がするんだけどなあ・・・

気のせいかな。

夜、ニュースで天高の男子生徒数十名が何故かお台場で重傷の状態  
で発見されたというのを龍二達は知ることとなる。

ま、知ったところでどないせえっちゆうんじやって感じだったが。

byライター

第七十一の話 五大天使親衛隊現る！（後書き）

言い忘れてましたが、香苗、久美、花鈴、アルス、クルルの五名は学校の中で五大天使と呼称されています。

雅はまあ・・・プリンスってとこですかね？

第七十二の話 VS 主夫ライター (前書き)

今回は俺も出てみました

## 第七十二の話 VS 主夫ライター

（龍二視点）

「急げお前ら！間に合わんようになるぞ！」

「だ、だって……そんな全速力で走られたら……。」

「リ、リュウくん……ちよつと……。」

「ちよ！？クルルこけないでよ！？」

あーもー遅いなーおい！

「体に鞭打て！足ダメになってもいいから走れ！！」

「だ、だからぁ……。」

「リュウくん……。」

「「あなたの足が速すぎるんですよおおおおおお！！！」（泣）

」

んなこと同時に言われてもねえ……これでも遅い方だぜ？せいぜい車抜かす程度だぞ？

つーか何で俺らがこんな急いでいるのかは・・・

「お前らアホか！？タイムセールスだぞタイムセールス！もう時間ねえんだよ！それというのも昼間の太陽光線が家の中に差し込んできて俺の体をまったりゆったりたりモードへと誘ったばかりに俺は睡魔と闘った拳句睡魔の子守唄攻撃をモロに食らって意識は闇の中へ、そして目覚めて最初に目に飛び込んできたのは床に落ちていたチラシに書いてあった鳥モモ肉1パック20円にジャガイモ1袋50円といった破格の値段だったんだぞコンチクショウがボケええええ！！」  
「さ、最後・・・いきなり怒鳴られても・・・。」  
「とゆーより・・・結局はリュウくんが悪いんじゃ・・・。」  
「しかも説明口調な上に走りながらよくそんな喋れるわね。」

むう、俺としたことがあの時間に寝ちまうとは迂闊だったな。

「とーにーかーくー走れー！！！」

「ひいーん！！（泣）」

つーわけで街道走っております。あ、ファイファイはクルルの髪の中に紛れ込んでるから疲れねえんだと。対して二人はもう息も絶え絶え。でもそんなの関係ねえ。

〈商店街〉

よし、目的地のスーパーはこの商店街を抜けた先に・・・！

「おう龍二、どうした？」  
「急いでるからじゃな。」

途中でクラスメートに会ったが手を上げただけで挨拶した。

「すみませんが、道を……。」

「そこ真っ直ぐ行って次の角左曲がればすぐだからそれじゃ。」

こんな急いでるのに誰かが道聞いてきたんで丁寧に教えてやった。  
早口で。場所は知らん。

「リュウちゃん」

「あいさ。」

【ボゴツ】

バカ（香苗）がいきなり飛びついてきたんで蹴り飛ばした。いい感じに吹っ飛んでいった。

「クレイジー!!」

「ドンマイ。」

誰か知らんがそんなん言ってきたので適当に流した。顔どっかで見  
た気がするが気のせいだ。

「よし、ラストスパートだお前ら！」

【ズギューン!】



「え、ちょ、リュウジさーん!!?」  
「待ってよー!!」

目的地まで後少しというところでちょっと本気を出してスピードを出す。最後の最後で油断はできんからな。

よしこのままスーパーへ・・・

【.....】

「ん?」

何か横に黒い影が.....って。

「ライターじゃん。」  
『おう龍!!』

何でか知らんが俺と同じ速度で横に並んで走っていた黒装束。相変わらず顔が見えん。

「何してんだお前?」  
『見りゃわかるだろ!!』

わからん。

『わかんねえか！？スーパーまで急いでんだ！！』

「テメエもか。」

『おうよ！最近家誰もいねえから節約料理とか考えてっからな！（  
実話）』

大変だなこいつも。

『そーゆーテメエもか！？』

「当たり前だ。主夫なめんな。」

『。。。』

？急に黙り込んだな。

『。。。ダークネスクラウド！』

「？」

【ズガン！！】

いきなり掌を向けてきたと思うと黒い電撃放ってきやがった。軽く避けたけど。

「。。。何のつもりだ？」

一旦立ち止まる。

『フフフ、一人でも敵を減らしておかねえとならねえからな。』

ライターも立ち止まって不敵に笑う・・・つっても顔は見えない。

「ふうん・・・つまるところ少しでもセールスでの獲得率を上げた  
いってわけだ。」

『主夫としては当然だ、ろー！』

お、また黒い電撃撃ってきやがったな。

【バシバシィ！】

ま、当つても効かねえけどな。龍鉄風なめるな。

『チィ！』

「・・・つーかこんな街中で戦つても大丈夫なのか？」

商店街だぞここ？

『フツ、作者特権舐めるな。』

「作者で言つたらまずいんじゃない？」

『・・・・・・とにかく大丈夫だ！ここは閉鎖空間だから俺達の姿は見えないし被害もない。おまけに時間も進んでいない。』

話流した上にいつの間になんか都合主義な空間作りだしたよ。つかそれ作者特権って言うのかね？

『とゆーわけで死ねい！』『デモニック・ブラッド』！！』

ライターが両手を左右に薙ぎ払うと真っ赤な衝撃波が俺に迫ってき

た。

「……『龍閃炎』。』」  
りゅうせんえん

【ボオオオオオオオオン!!!】

こっちは龍閃弾の炎バージョンを放って衝撃波を相殺させてやった。

『ならば次! 『デモンズランス』!!!』

おおう、バカでかい槍が空中に……

『飛べやああああ!!!』

【ビュン!】

「……『龍螺旋昇雲』。』」  
りゅうらせんのぼりぐも

【ズゴオオオオオオオオオ!!!】

飛んできた真つ黒い槍を踏み込みアツパーと共に放った渦巻状の衝撃波で粉々に粉碎させる。

『ちつ……。』

「……つーかお前何でそんな黒い技ばっか出すんだよ。」

『見た目も中身も黒いから。』

「あ、そ。」

確かに見た目黒いけどさ。そついやこいつSだっけ。



無数の赤ん坊の頭ぐらゐの炎の玉が周囲に降り注いだ。

（閉鎖空間の中だけの時間で言うと五分後）

・・・・・・・・・・。

『・・・・・・・・・・。』

周囲が真っ黒焦げな中、俺の目の前には無残にもよりいつそう真っ黒くなったライターがぶっ倒れていた。

「・・・・・・・・。」

『・・・・・・・・。』

「・・・・・・・・言っておくけど、あれで三千分の一だからな。」

『・・・・・・・・あ、あれで・・・・・・・・かい・・・・・・・・ガク。』

ツッコミは忘れないのねん。

つーかあの技本気出したらサハラ砂漠でさえも燃え尽きるっつーの。

「さて、さっさと行くか。」

ライターが形成した閉鎖空間から出るべく、ライターの懐から取り出した銅製の鍵をポイと空中に投げ出す。

【ブウン】

すると何かこれまた真っ黒で十分通れるくらいの大きさの穴が出現した。

「じゃあなライター。今から掃除頑張れよ。（実話）」

俺はそう言い残して穴を潜った。

夕方

「いや〜買った買った。」

「買いましたね〜リュウジさん。」

「ふい〜・・・。」

閉鎖空間から出た後はもうスーパーへ一直線。そこでオバチャマ達と戦争繰り広げてお目当ての物をレジに持ってって無事勝利を収めた。

そんな時外でグツタリしてたアルス達がいたのは気ニシナイ。

・・・まあお疲れの様子だったからコッソリチョコとココアとサクランボ買っついてやったのは秘密だ。

「今日は疲れたなあ。早く帰って休むか。」

「はい。」

「そうしたいです・・・。」

「あゝ疲れた〜。」

「あなたずっと魔王の頭にしがみついていただけですけどね。」  
「う、うっさい。」

そんな感じで夕焼けで赤く染まった商店街を歩きとは違ってのんびりと歩いていった俺達なのでした。

・・・そついやライターどつなっただんたるな・・・まあ別にどつだつていいけど。



第七十二の話 VS主夫ライター（後書き）

・・・正直言ってオバちゃん達強すぎます。

伊達に修羅場繰り広げているだけじゃないって学習しました。死ぬ・  
。。。

あ、またいつかタイムセールスの話書こうかな。



「これは何か起きるな。」

大体コメディーってのはジャンルにほのぼのが加わっていたとしてもこんな『一日のんびり散歩しましたチャンチャン』な感じで話が終わるはずがない。絶対何かしょーもないことが起きるはずだ。

「あ、リュウちゃん！」

「。。。。。」

ほれ見ろ。

「ジャンプ!!」

「ん。」

【ズゴン!】

「はぶっ!」

何か背後から飛び掛ってきたバ香苗を後ろ回し蹴りで撃退。キリモ  
ミ回転しながら地面に激突した。サーカス団行け。

「んむうゝ、相変わらずリュウちゃん素直じゃないな。」

ムクリと起き上がった香苗の顔はちょっと泥で汚れていた。顔洗え  
バカ。

「んしょっと。」

立ち上がってパンパンと体の汚れを払って顔をタオルで拭き取って  
いく香苗。でそれをとりあえず鼻ほじりながら待ってる俺。

「やつほーリュウちゃん！」

「おつす香苗。じゃ。」

回れ右して歩きだす。

「・・・つてちよつとちよつと!？私出てきて蹴り飛ばされただけ  
じゃない！」

「なんなら星になるか？」

「もつと嫌です！」

わがままな奴だ。

「でえ？何か用？」

「ああ、うん・・・・・・・・ちよつと待って。」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・よし！」

周囲見回して何がしたいんだこいつ？

「ねえリュウちゃん。ちよつと付き合っただけいんだけど・・・。」

「？何に？」

「お買い物。」

「一人で行けばいいじゃん。」

「ちよつとだけ。リュウちゃんに聞きたいこととかあるし。」

聞きたいこと？

「ね？いいでしょ？」

「・・・ふむ。」

聞きたいこと、ねえ・・・。

「・・・今すぐ聞くことじゃないのか？」

「うん、ちよつと買い物に関しての相談。」

なるる・・・まあ散歩なら晴れの日ならいつでもできるし、別に忙しくもねえからな。

「・・・しゃーねえか。」

「やったあ！じゃ行こう！今すぐ行こう！」

「はいはい。」

ぐいぐいと俺の腕を引っ張っていく香苗。

・・・

あ、これ何か自分の力で歩かなくていいから楽だな

くデパート内く

ところ変わって近場のデパート。こないだ花鈴と一緒に来たところ・  
・正式にはアルス達“も”だけど。

まあ休日だけに人が多いな。子連れとか。

「リュウちゃん、ちょっと来てー。」

「ほにゃ?」

何か呼ばれた。

あそうそう。俺らの現在地はデパートの中にあるアクセサリーショップ。女用だけじゃなく男用もあるんだってよ。で、俺は商品査定定め中の香苗から離れた場所で待機中。

「つかこんなところで何がしたいんだ香苗の奴?こいつ特にアクセサリーとかにこだわる奴じゃないはずなんだが。」

「どしたあ?」

「ね、ちょっと見て。」

差し出されてきたのは・・・金メッキを施された派手なダイヤ型のイヤリングに、同じダイヤの形だが全体的に黒くてシンプルなイヤリング。それが香苗の両の掌に乗っかっていた。

「これがどうした?」

「どつちがいいと思う?」

「うにゃ?」

・・・こいつイヤリングなんかするっけ?

「……あ、実はね……まあリュウちゃんは詳しくは知らないだろうけど、カルマとケルマ、最近ホント家の中で助けてもらってるのよ。だから日頃の感謝のつもりに……。」

……

「なるへそ、ね。」

そういやあこいつは高一の頃からこんな性格だったなあ。一見ふざけてるが、ホントは周囲の奴の方を最優先に考えられる奴なんだよなあこいつ。

「……ふむ、あいつらの好みは知らんし、両方買ったらどうだ？」

「うん……そうしよっかな。余分にお金持ってきたし。」

「そうしろそうしろ。」

下手な鉄砲数撃ちや当る……ん？何か違うか。

「……」

にしても……

感謝、ねえ。

……

「お待たせリュウちゃんってあれ？どしたの？」

「……んにゃ、何でもねえさ。」

ま、いいか別に。過去のことだ。

く外く

「リュウちゃん、今日はありがとね！」

「大して何にもしとらんがな。」

歩きながら帰路に着く俺達。今香苗の手にはアクセサリーの入った袋が握られている。俺ただ両方買えば？って言ったただけだべ？来た意味あつたんか？

「だってリュウちゃんがいなかったら私今でも悩んでたと思うの。」

「ふん、そ。」

「だからありがと！」

「はいはい。」

……何かこいつがクルルに見えてきた。

「……ねえリュウちゃん。」

「？」

いきなり立ち止まったかと思うとしんみりした顔になったな……



何だ？

「リュウちゃんってさぁ・・・二人のこと、どう思ってる？」

二人・・・？

「・・・ああ、アルスとクルルのことか？」

「うん、どう思ってる？」

いや、そんな真剣な顔でどうと言われてもねえ・・・ふむ・・・。

「家族だな。妹できたみたいだと思ってる。」

これは紛れもない事実であるつと。

「・・・それだけ？」

「ああ、それだけ。」

それ以外に何も無い。

「・・・そっか・・・・・・・・・・・・・・・・よかった」

「ほによ？」

何がよかったんだ？

「今日はホントありがと！バイバイリュウちゃん！」

疑問を言う前に香苗は走り出した。

「・・・何なんだ？」

途中、香苗が満面の笑顔で振り返って手を振ったんで、まあこの疑問はいいかと思いつつ手を振り返した。

（帰宅）

「ただいまー。」

「リュウくん！」

【シュバツ！ズゴン！】

例によって例の如くクルルが飛びついてきたんで勢いを利用して巴投げしてやった。見事に玄関の扉に激突した。

。。。

「・・・お前ホント香苗みたいだな。」

「ふみゅ〜・・・。」

頭の上に何かヒヨコみたいなの数匹回しながら（想像だけど）気絶してるクルルに言ってやった。聞こえてないだろうがな。

さて、リビング行っておやつ食つか

第七十三の話 買い物付き合い？（後書き）

今回は香苗にスポットを。自分で書いてて香苗とクルルって似てるなあって思った俺でした。

まあこれはこれでいつかあ

第七十四の話 新キャラ?いいえ、新剣です。 <前編> (前書き)

新キャラ・・・ですかね?一応。

第七十四の話 新キャラ？いいえ、新剣です。 <前編>

〔龍二視点〕

〔夜12時〕

【ジャーキーキュッ】

ふう…洗い物終わりっと。いやいや、テレビ見てたらこんな時間だぜ。あゝねみ。

「ふぁ……………」

さ、あいつらもさっさと寝ちまったし、俺も寝るかな。

【……………オオオ】

……………ってありゃ？何か音が……………

【オオオオオオオオオオオオ】

……予想外の轟音だった。

「？ 外か？」

庭のガラス戸を開けて夜空をしてみる。

【オオオオオオオオオオ】

……何か彗星が飛んできた。

【オオオオオオオオオオオオオオ……】

あ、見えなくなった。

【……ドーン】

あ、光った……つーか落ちた？

「……あつちか。」

確かあの方角は学校の近くの小山。この家からなら大して遠くはねえな。

「……」。

フッフ、好奇心が沸き立つぜ。

「さ、準備準備。」

パジャマからいつもの服装に着替える。ヘッドフォンも忘れない。

あ、アルス達どうすっかなあ？

「……………」

【スッ】

ちよこつと襖を開けて和室の中を覗き込む。

「スピー……………」

「スー……………」

「うう……………グス……………メイド服いや……………ムニャ。」

……………。

「よし行くか。」

とくにアルスは起こさない方がいいだろう。うん。

く山道く

「ふ〜……今夜は冷えるな。」

確か今晚の最高気温は零度つつてたな……春も近いってのにまったく。

にしてもさっきの彗星……何だったのやら………もしやマジで隕石？ そうなら でも鑑定団に持ってってみつか。生活費生活費

……あ、それともエイリアンか？よし、襲ってきたら気分転換にサンドバッグにしてやろう。

「よっど。」

山道の階段を上りきり、山の頂上に辿り着いた。

「おお？」

で、目の前に広がっていた光景は見事なクレーター。周りの木々も雑ぎ倒されてるし。しかもまだ煙が立ち昇ってるし。

こんだけでかけりゃ音もすごいだろうに………何で皆起きないんだ？ おもしろいもん見れたのに。

そうそう、それよりお目当てのもんは………あ、あった。



……いや、あるにはあったが……。

「……剣？」

クレーターの真ん中に何か剣刺さってた。

いや、こういうのは大体隕石ってのが決まりじゃね？ なのにうっわあファンタジー。ファンタジーなのは勇者と魔王と妖精だけで十分だっつーの。

……ま、いいか。

「よっど。」

とりあえずクレーターに飛び込んでみる。結構深いな……。

「……。」

剣の傍まで行ってみて、よく観察してみた。

まず全体的に若干青い……んでもって細身。鏢の部分はX字型の装

飾で、真ん中が丸い銀色のパーツが付いている。柄は何か日本刀と  
かで見られる紐をグルグル巻きにした感じ。柄頭には青い宝石が付  
いている。

まず一言。古臭い。

「……まあ売れるっちゃ売れるか？」

とにかく引っこ抜いてみつか……。

「そらよつと。」

柄を握って軽く持ち上げたら、スポンと軽々と抜けた。思ったより  
軽い。

刃渡り2センチ弱ってどこか？ 刃の付け根部分が細く、真っ直ぐ  
鋭い刃が伸びている。突いても切っても効果的って奴だな。

「……うん……。」

……これ売れるのか？

「……………」

……ふむ。

「まあ生活費の足しにはなるか」  
「なるか。」

.....。

「？んにゃ？誰だ？」

今どっかから凜とした声が……気のせいか。

『前だ前。貴様の目の前だ。』

「？」

目の前……木、木、木、木……。

『……わからんか？手元をしてみる。』

「はにゃ？」

左手をしてみる……。

「……何も無いが。」

『いつまでとぼける気だ。右手だ右手。』

「？」

剣持ってる方の手か？

『……これでもわからないと言うのか……』

今、貴様の持つてる剣だ。』

「……………」

剣？

『まったく……………ようやく気付いたか。』

「……………」

【ザックザックザック】

『おい何地面を掘っている。何で私を穴の中に入れて待つて待つて土被せるなウブツ！？』

えっさほいさえっさほいさと土をどんどん被せていってど。

「ふう。」

これでよし……………さ、帰って寝よ

『待つて！置いて行くな！っーかせめて私をここから出せ！』

背後から何か聞こえるが、おそらく風に揺れた葉っぱがこすれた音だろつ。無視だ無視。

『いやだから待つてっー！出せ！出してくれー！いやっーか出してくださいお願いしますー一生のお願い何でも言うこと聞きますからホント





『……まあ話せば長いからここでは……。』

「長い話は嫌いだからテメエなりに手短かに話せよさもなければ折る。」

『努力します。』

即答だった。

「ま、今眠いし明日の朝にでも話せや。」

『わ、わかった……。』

とりあえず山下りるか。

ふう……にしても変なのに会っちゃまったなあ。

帰ったらアルスが寝返りうったクルルの踵落としを顔面に食らっていた。

第七十四の話 新キャラ?いいえ、新剣です。 <前編> (後書き)

因みにモチーフにしたのは何かわかる人??



第七十五の話 新キャラ?いいえ、新剣です。 <後編> (前書き)

ところで、エルフィアンのモデルがいろいろ上がってますが・・・  
リリドジョントー!

TODに出てくるソーディアンで間違いありません。

答えはあとがきに

第七十五の話 新キャラ?いいえ、新剣です。 <後編>

〈龍二視点〉

まあとりあえず迎えました朝。いやあ陽光が気持ちいい

ま、それはさておき……。

「リュウくんご飯……。」

「ふあ……。」

「……。」

眠たそうな目を擦ったクルル、欠伸してるフィフィ、で、何かすげえ疲れた顔したアルスが三人揃って和室から出てきた。アルスに関しては夢の中で何があったのかは想像に留めてやろう。

「おはよーお前ら。席つけよー。」

「……はい。」

朝飯をテーブルに並べて行く俺。そんな中そそくさとテーブルに座って行く三人娘。今日はオープンサンドときた。

ま、これは毎朝のことだからどうってこたあない。しかし問題はここから。

「なあお前らちょっと食いながらでもいいか?」

「はみゆ？」

「クルル、口物入れたまま喋るのはやめなさい。」

「はみゆ」

モゴモゴと口を動かすクルル。小動物みたいで可愛いじゃねえか何か。

「さてと・・・お前らに紹介したい奴がいる。」

俺はクルルの口の中が無くなったのを見計らって言った。

「？紹介したい人？」

「こんな朝早くに？」

「？」

正確には会わせたい“物”なんだけどな。

「これ。」

【チャキ】

三人の前に差し出したのは・・・

「「「剣？」「」「」

当然、三人揃って頭に？だ。

「・・・この剣がどうしたのリュウくん？」

「これ結構古いわね・・・まあ刃こぼれとか錆ついてたりはしてないようだけど。」

「年代物ですね。」

クルルはいいとして、お前ら二人は鑑定団か。

「うむ・・・ま、ただの剣じゃねえんだがな。」

「「「？」」「」」

・・・まあ見せた方が信じてくれるか。

「おい剣。」

『名前を呼ばんか。私にはエルフィアンという名がある。』

「「「！！！！？」」「」」

案の定、三人ともビツクリした顔になった。

「えう！？剣が喋った!?!」

「う、うそ・・・!!」

「・・・。」 放心状態

うっくん面白いリアクションをありがとうとう三人とも

『？何だ小娘ども。剣が喋っては悪いか。』

「「「剣は普通喋りません。」」「」」

「気ニシナイ。」

「「「気にしてください。」」「」」

『・・・とゆーより何故貴様が答える。』

言いたかったから。

「どうしたのよこれ？」

「ああ実はな・・・。」

（説明中）

「とゆーわけよ。」

「・・・思いつきり略したわね。」

「一から説明するのはしんどいからな。」

作者的にも。

「でも空から落ちてくるなんて普通じゃないよね？」

「お前も出会い頭に火炎弾撃つてたから普通じゃねえよな？」

「う・・・。」

まあ今となっては懐かしいけどな。

『・・・まあ、その話は今からしてやろう・・・。』

「手短にな。」

『わ、わかってる・・・私だって折られたくはない。』

わかってらっしゃる。

『うむ、では単刀直入に言う。』



「転送魔法・・・時空魔法と同じって感じね。」

「お前らの世界には転送魔法ってのは無いのか？」

「まあ時空魔法と転送魔法、理論は同じみたいですけど、転送魔法とは呼ばないですね。おそらく別物です。」

「ってことは・・・こいつはアルス達の世界から来たわけじゃない、と。」

「・・・っーか何か疑わしいな・・・これどっかにスピーカーとか付いてて、誰かが喋ってるだけってのも考えられるな。てことはただの剣ってことになる。」

「ねえリュウくん。この剣ホントに喋ってるの？」

「偶然だなクルル。俺もお前と同じこと考えてた。」

「な！？私を疑うというのか！？」

「まあな。」

『認めるの早っ！？』

「ツッコミはおもしろいんだがなあ。」

「うーん・・・リュウジ、この剣ホントに生きてるよ。」

「え？マジ？」

「うん。この剣から見たこともない力が感じられるし・・・私達の世界でも、魔力を工夫することで物質に魂を転換することもできるの。といっても伝説だから確かじゃないけどね。」

「ふーん・・・ファイファイが言つと説得力あるな。」

「ま、そういうことなら信じてやるか。」

『ふん！最初から信じればよいものを』

「一番バッター龍二。いきまーす！」

『わーーーーー待て待て待てすまない調子に乗っていた！』

バット振りかぶったら何かめちゃくちゃ慌てた。

「ふう・・・で？これからどうするよお前。」

『へ？』

「へ？じゃねえ。正直この世界はお前居辛いぞ？武器の所持とか認められてないからな。」

『なっ！？で、では敵が襲ってきたときどうするのだ！？』

「殴る蹴る踏む潰す人生生きていけなくする。」

『エグい！？エグいって！！』

そうやって今まで生きてきたしな。

「つーわけで、俺基本的に剣は使わないしな。こいつらだって剣持ってるし。」

「そ、そうですね。」

「うん。」

「私も剣は使わないしねえ。つーか持てないし。」

『う・・・。』

まあどうするかって言われても剣だからどこにも行けないしな。

『・・・し、しかし私自身で転送魔法を使うことはできないし・・・とは言っても唱えられる人間は限られているし・・・。』

何かブツクサ言ってるな。



「どうすんだ？質屋に持ってってやるのか？」

『う、売るのが私を！？』

「何が悪いよ？金持ちんとこで豪華な家の目立つところに飾られんだぞ？」

『それなら嫌というほど経験した！目立つ場所にあるから誰にも話せない窮屈さ、わかるか貴様らに！？』

剣になったことないからわかりません。

『そ、そんなわけだから売るのは勘弁してくれないか？た、頼む。この通り。』

どの通り？

「・・・じゃどうしたいんだ？」

『あ、いや・・・その・・・で、出来ればここにいたいのだが・・・顔見知りの人間がいれば私だって楽し。』

「いやいや、俺刀とか飾る趣味ねえぞ？飾るより使った方が価値あるし。」

今何かアルス達の顔が真っ青になった気がしたが気ニシナイ。

『な、なら使えば・・・。』

「人は殺さない。敵は生かさず殺さずネチネチと苦しめていくに限る。」

アルス達が何か震えてるように見えたがこれも気ニシナイ。

『・・・では、私はどうしろと？この世界で永遠に放置されてるといふのか？』



お礼言ってるけど剣だからなあ……特に何も変化ない。

「さて、と。」

【チャキ】

とりあえず床からエルフィアンを引き抜く。

「あ、そついやお前さあ。そのエルフィアンとかいうの言いにくいから何か愛称つけていいか？」

『ああ、いいぞ。』

急に口調が勇ましくなったなあおい。

「じゃエルで。」

『エルか……まあいい。』

例の書いたら死ぬとかいうノートの物語に出てくる青年みたいだとか言わないでくれ。

「そんじゃエルよ……さっそくだが仕事だ。」

『し、仕事？』

戸惑った声を上げるエル。

フッフ、俺がこいつをここに置く決心をした理由は……



『何故！あえて！私を使うのだ！？』

ただいま、エルの刀身をナプキンで掴みながら包丁のような感じで  
昼飯のハンバーグに使うタマネギを刻んでいる俺。

これがエルをここに置いた理由。最近包丁のバリエーション増やそ  
つかな〜って思ってたところだし 細さと鋭さもあって、めっちゃ切  
れる切れる

「何でも言うこと聞くんだが。文句言うな。」

『うう………く、屈辱だ……。』

まあ戦闘用の剣だからな。包丁として使われるとは思ってもなかっ  
たよつだ。

「ま、これからもよろしく頼むな。エル」

『……ふん！勝手にしろ。』

おつおつお堅いこつて。お〜切れる切れる

ついでに、我が家に居候(?)が一本追加されましたとさ

第七十五の話 新キャラ？いいえ、新剣です。 <後編> (後書き)

では答え！

外見のモデルはソーディアン“イクティノス”。俺が大好きなソーディアンの中の一本です。もう一本はシャルティエ。

どちらにしようか散々迷い、最終的にはイクティノスとなりました。キャラは・・・デймロスと想っていた方もいるのでは？口調が微妙に似てたと思うし・・・あ、でもはつきり言いません。デймロスではありません。つーかソーディアンの中にはいません。だってソーディアンのキャラ崩したくないですしね。

・・・ソーディアンっていう意味がわからない人は、ネットで検索してみてください。出ます。

それでは、新キャラならぬ、新剣が登場したところで！サヨウナライ！

第七十六の話 新剣、初めての登校（前書き）

うん、最近出かけること多いから更新するの遅れるな。



## 第七十六の話 新剣、初めての登校

（龍二視点）

あゝねみいねみい。寝よさつさと。

つてなわけで（？）、モソモソと布団の中に潜り込もうとする俺。

『・・・リュウジ。』

「あ?」

・・・あ、言い忘れてたがエルは俺の部屋にある机に立て掛けている。まあ邪魔にならんし、別にいいかというわけで。

『貴様、先ほど荷物を漁っていたように見えるが。』

「明日の準備だ準備。学校あるし。」

『ガツコウ・・・とな?』

「おつよ。」

寝る前のチェックは欠かさないぜ。一分で終わらせるけどな。あ？する意味あんのかってか？その場のノリだよノリ。

『・・・ガツコウとは何だ。』

「学び舎。」

『いや、それだけではわからんぞ。』

「勉強するところ、遊ぶところ、（ラーメンを）食つところ。」

『すごい簡潔にまとめ上げたな・・・。』

だって事実だも〜んつと。

「何だ、興味でもあんのか？」

『い、いや別にあるわけでは』

「そういう奴は興味津々なんだよ大抵は。」

『うぐっ……。』

分かりやすい剣だ。

「まあでもねえ……。剣持ってたらそれなりに騒ぎになるだろうな。」

『そ、そうなのか？』

「前に言ったる？武器の所持は世間的に認められてない。」

。。。。。。。

「しかし、ここはあえて法を破ってみようか。」

『何だそのチャレンジは。』

法律ビリビリー！！ってな感じで破ってみたくなってきたから。

『。。。。しかし、下手に騒ぎを起こしたらやはりまずいのでは。。。。？』

「そこは俺に任せとけ。」

策があるし。

『しかし、私とていつもこのまま刃を外にさらけ出しておくわけにもいかんしな……。』

「ああそれなら大丈夫だ。鞘ならもう持ってる。」

『鞘を？・・・何故だ？』

「ちよつとな。」

ここで一つお得(?)情報。こいつの鞘を提供してくれたのはママさん(六十七の話参照)だ。

ママさんの店は基本的に服屋だが、実はあの店にはこっそり真剣が置いてある。ま、知ってるのは俺含めて超ごく僅かの武器マニアのみ、それも口が堅い人間だけ。鞘を作ってもらう場合、剣を店に持たせてサイズを測ってもらってもよし、連絡してその剣のサイズを教えるだけでもよし。即日配達ってな奴で、まさにやってみますのミリですってな。

？何故剣が服屋に置いてあるか？・・・それ知りたいか？ホントに知りたいのか？ホントのホントのマジで知りたいか？そうか。

答えはWebで。

『ウェブって何だ!?!』

「・・・お前も思考を覗けんのかああ?」

『す、凄むなメチャクチャ怖いから……。』





剣にとって鞘って服か？ そうなのか？

「・・・まあ、ボクだって剣携えて旅してきましたし・・・。」

「でも最近剣付けてないからその音懐かしいよね。」

さすが勇者。 つね剣持ってたわけだ。 おまわりさん、ここに銃刀法違反者いますよー。 あ、今じゃ俺のことが。

ついでにファイファイは鞘に収まったエルの柄頭の部分に座ってくつろいでいる。 楽でいいねえ。

「ねえねえエルう。」

「何だ小娘。」

「小娘じゃないよ。 私はクルルって名前があるんだから。」

「む・・・そうか。」

小娘に変わり無いんだがな。

「で？ 何だクルル。」

「エルってさ、元の世界ではどんな風に扱われたの？ 呼び名とかあった？」

あ、それ俺もちょっと気になった。

『ああ、そういえば貴様らにはまだ話していないことがあったな。この際だから目的地に着くまで話しておこう。』

おおおお話せ話せ。

『まず最初に言っておくが、私は確かに剣ではあるが、ただの剣で

はない。まあ人格がある時点で普通ではないが。』

「ほお？」

『元の世界ではブレイダー、または神剣しんけんと呼ばれて奉られていたのだ。』

「しんけん？」

『神の剣と書いて神剣だ。何故神なのかは知らないが、周りの人間がそう呼び出したのだ。』

「ほくん・・・そういやお前ってさ、元から剣なのか？」

『いや、私は遙か昔に自らの魂をこの体に転写したのだ。おおよそ千年前くらいだな。』

ふくん、まさにどっかのゲームみたいだな。

『まあ同時に元の私の肉体は滅びたがな。お陰で今の私は不老不死も同然だ。』

切ないねえ。

『その後私は盗まれたり売られたり飾られたりの繰り返し。拳闘家宝となった私を持ち出した人間と共に旅をし、最終的には今に至るというわけなのだ。』

波乱万丈な生き様だな。

『おつと話が逸れたな・・・元の私は、雷を自由自在に操ることができたのだ。』

「ほお。」

「すごい。」

『その力は剣となった今でも変わらないぞ。お前が修行すれば雷を自由に放出することさえ可能だ。』





「もうすでにトラウマね。」

何か急に走り出した二人をアルストとクルル追いかけるため、俺も走り出した。

〈校門前〉

「リュウジさん急いで！」

「早く早く！」

「はいはい。」

そんな急いだところで結局罰受けるのに変わりないってのに。

「！こらあそこの君！」

「？」

おお、よく見たら警備員のオッチャン。取り締まりとかに超厳しいと有名。

しゃーねえな・・・さっそくだが、切り札使うか。

「学校内にそんなオモチャを、奥さんとの冷戦脱出できたか？」異常なし、通つてよし！」

切り札、弱味。この学校の教師全員の弱味はすでに掌握済みだ。もちろん警備員のオッサンも含まれている。





「お、お前・・・それ何だ。」

「剣。」

「見ればわかる！何でそんなん持ってきてんだお前!？」

エルを指差しながら言う神楽さん。まあ当然聞かれるわなあ。学校に剣ってどんだけ？

『ふん、怒りっぱい女【ズガン!!】はぐ・・・。』

余計なこと口走りそうになったエルを鞘から抜いて黒板に叩きつける。

「え、な、何してんだお前？」

「気ニシナイ。」

あ、黒板キレイに凹んだな。エルの形になつとる。鉄流し込んだら何かレプリカできるぜこれ？

「・・・ま、まあいいか。席座れ。」

「はいはい。」

俺知ってるぞ？『俺のことに關しては細かいことグチグチ言わないこと』という決まりごとがこのクラスにはあることをな。雅から聞いた。

「え、そんなじゃ今から皆に伝えたいことがあるんだけど。」

俺が席ついたら神楽さんが話した。



故か恭田の病室だけ爆破されてさらに重傷、別の病院に搬送されたとか。よく生きてたなあいつ。さすが影薄。

「えー、あいつは明日退院らしいぞ？何でも超凄腕の医師があいつの治療にあたってくれたらしい。」

ほほお、回復力も伊達じゃないってか。

「ま、連絡はそんなくらいだ。それじゃHR終わりー。」

相変わらず適当だな。まあ残った時間自由に過ごせるしいいか別に。

「・・・龍二、それ何？」

「あ？」

花鈴に声かけられた。案の定聞いてきたなエルのこと。

フッフ、俺の見事な口実で乗り切ってみせるぜ。

「ちよつとなー。ノリで持ってきた。」

「・・・アンタ、ノリで剣持ってくるわけ？」

「おう。」

「あつさり肯定すな！しかもそれ本物なんじゃないの？」

「当たり前だのクラッカー。」

「古っ!?!」

このダジャレがわかんない人は家の年配者に聞いてみれ。

「何で持ってきたかってのは昼休みにでも話してやるぞ。」

「・・・まあ、いいけどそれなら。」

渋々といった感じで引き下がり元の席へと戻る花鈴。

今誰だ下手な口実と言った奴。ぶっ飛ばすぞ。

『ふむ、やはり貴様の言う通り、この世界では剣は普及されていないようだな。』

「だろ？」

あ、ちなみにこいつ小声で話しかけてます。

『・・・それより貴様、さっきはよくも私を叩きつけてくれたな。』

「喋ったらいろいろ厄介だからな。後々めんどうちい。」

『では昼休みに話す時には何て説明するのだ。』

「全部話す。」

『・・・貴様言ってること矛盾してはいないか？』

「気ニシナイ。」

『・・・はあ。』

剣がため息はくなバカ。

くひーるーやーすーみーく

「歌うな。」

雅が何かツツコミ入れたが気ニシナイ。

場所は定番、屋上。弁当食ってます。ホントは学食でラーメン食いたかったんだがなあ。アルスとクルルが弁当食いたいと言ってきたからしよーがなく弁当持ってきたんだよな。

まあラーメンの代わりと言っちゃなんだが・・・

「あむあむ・・・リュウくん、このお肉おいしーねー！」  
「だな。」

弁当にチャーシュー突っ込んだった。

「・・・で？龍二。何で剣なんて持ってきてんの？」

「ずっと気になってたんだからな。」

「そうそう。」

「変わった形してるしなそれ。」

上から花鈴、久美、香苗、雅。みぐんなして細かいこと気にしすぎ。

ま、いいか。

「ん・・・ほれエル。自己紹介。」

『言われなくともわかってる。』

「「「「「!?」「」「」



はいビックリ顔ありがとー四人とも。いい表情してるぜ。

『エルフィアンだ。よろしく。』

「「「「「「「「「「「「「「」

無言。

『「……おい、私が名乗ったのだからさっさと返事をせぬか。』

「え、いや、その……。」

「剣……なのか？」

「スピーカー付いてる？」

「……。」

はっはっは、疑いの眼差し。

「状況ついていけてないないようだから俺が紹介していく。右から

花鈴、久美、香苗、アダムフスキーだ。」

「でたため抜かすなアンポンタン。雅だ。」

一足早く復活した雅でした。

「「「よ、よろしく。」「」「」

『ふむ、よろしく。』

遅れて復活した女性陣達。

「……龍二、どっしたのいね？」

「ああ、実はな」

く例によって例の如く、説明中

「てなわけよ。」

「・・・やっぱり略すんですね。」

当然。

「・・・まあ、そういうことなら・・・。」

「つかすでにいろいろいるし、剣が喋ったって不思議じゃねえしな。」

慣れっつていいねえ。

「にしてもアンタも大変ね。よりによって龍二に拾われるなんて。」

どゆことですかい花鈴？

『出会って早々埋められたしな。』

「気ニシナイ。」

『・・・あれはきつかったぞ。』

トラウマ？

「しかしまあ、龍二が剣を・・・。」

「剣かあ・・・。」

「リュウちゃんがねえ・・・。」

「・・・。」

【ゾクッ！】

？何だ？皆して身震いしやがって。

「・・・ところで、龍二って剣の腕あるの？」

「一応。」

伊達にガキの頃に従弟と本格的チャンバラしてねえぞ。

「・・・頼むから人殺すな？」

「殺すわけなからうが。」

生かさず殺さず、精神的にもギタギタのボコボコの【ピー】にする  
つてのが俺のやり方だし。

「だ、大丈夫ですよ。リュウジさんに限ってそんなことするはずな  
い・・・はず。」

自信ないなら言っちなアルス。

「まあリュウくんだって人殺すなんてことしないしね。」【パクリ】

「あゝ！魔王っ！」

「えへへへ」

さり気なくクルルがアルスの弁当のチャーシューを食ったんで追いかけてここが始まった。もう無視。

「まったくあの二人は……。」

『いつもあなののか？』

「そうよ。ま、仲がいい証だと思うけどね。」

『そうだな……フフツ。』

「エル？」

『いや、何でもない。』

何かエルとファイファイ、気が合うみたいだな。

あ、クルル捕まって叩かれて泣いた。

（下校時）

「あゝ今日も疲れたね。」

「だな。」

授業も終わり、只今いつものメンバーで帰路に着いている俺ら。

授業中にエルが存在に気付いた教師はおそらく明日学校に来ないだろう。何か全員顔真つ青だったし。俺に逆らうところなるんだよわあったか。

「で、どうだった初の学校は。」

『うむ、授業中喋れないというのは窮屈だったが、それ以外はなかなか楽しめたぞ。特に私のことをオモチャと愚弄した男のあの顔が愉快だった。』

「そうか。次誰が来るんだろうな科学。」

あの男は新任の科学の教師。嫌味を言うのが特徴でよく生徒から反感を買うという伝説を数日で作り出した男。今日初めて俺らのクラスを担当になったが、多分明日から来ないだろうな。辞表出したし。

何故か？そりゃ聞くだけ野暮つてもんだぜ？ 黒い笑み

「何かリユウちゃんとエルってちよつと似てるね。」

「？そうか？」

『私がこいつと似ている？何をバカなことを。』

「それ俺に対する愚弄と受け取っても？」

『じ、冗談に決まっているだろう。』

こいつ意外と腰低いな。腰ねえけど。

「エル、すっかり馴染んできましたね。」

『まあな。こう見えて私は順応性が高い方だ。』

「何故だ。エルと龍二が一緒にいるのはやばいと警告する俺がいる。」

「それはあたしも同感だ。」

「同じく。」

どゆこつてすか雅と久美と花鈴？

「ところでエルってそんなすごい剣なの？神剣て呼ばれるくらいだし。」

『ああ。』

「じゃ、切れ味は？」

『ふん。私がナマクラと思うか？その気になれば硬い鉱物なども太刀で真つ二つだ。』

「すごい！」

純粹に驚くクルルと得意げに話すエル。

硬い鉱物＝ダイアかね？あれ俺でも指で粉々にできるくらい脆いの  
に何がすごいやら。

・・・だけどこいつの切れ味か・・・何かで試してみたいもんだ  
な。

まあこんな感じでのんびりと談笑してる時、

「おい。」

「？」

何か後ろから声かけられたんで振り返ってみれば・・・

『・・・・・・・・・・。』

雅達が声を失う。

ま、結構な数の他校の制服着た金髪に染めたりしてる見た目完璧不良な奴らがいれば普通に驚く・・・か？俺大して驚きはしねえけど。

「テメエ・・・こないだはよくもやってくれたなあ。」

俺に向かって話しかける一番前にいる男・・・・・・・・こないだ？

「・・・龍二、何かしたのか？」

「いや、知らん。」

久美に聞かれた。だって知らんし。

「ふざけんなテメエ！よくもこないだは邪魔してくれたよなあ？」  
「・・・・・・・・・・。」

あ。

「あーあーあー。」

「ようやく思い出したかこの」

「四丁目のよっちゃん？」

「よっちゃんて誰だよ！？つーか何で四丁目！？」

「あり違った？」

「違うわボケ！！」

ツッコミ上手だなあ。

「俺だよ俺！こないだカツアゲしてたところをテメエが邪魔してくれたおかげで俺ら補導されたんだぞ！！？」

「歩道？」

「漢字が違う！！」

よくわかったな。

「り、リュウジさんコント繰り広げている場合じゃ」

「コントなんか繰り広げてねええええ！！（泣）」

「あう！？」

いきなり泣き出した不良Aにびっくりするアルス。

「・・・とにかく！あの時の仕返し、今させてもらっせ？」

「この人数なら前みたいには行かないだろうしなあ。」



「何なら土下座すつかあ？ぎゃははは！」

下卑た笑い声を上げる不良達<sup>バカ</sup>。

・・・お、そうだ。

「エル、出番だ。」

『・・・承知だ。』

一瞬『出番が来た！』と歓喜の声を上げてたような気がするなコイツ。

「あ？何だそれ？オモチャ腰に付けてんの」

【キーン】

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

目にも止まらぬ抜刀を披露してやった。

「・・・・・・・・よし。」

「何がよしたコラ。芸見せてんじゃねえぞデメエ。」

不良達に異変はない。





『ふむ、見事だリユウジ。私の主として申し分ない。』  
「サンキユ。」

あゝにしても無駄な時間過ごした。早く帰って晩飯の支度せんとな。

「よし、そんじゃ帰るかあ。」

振り返って満面の笑みで言った。

『はい!!!』

すると皆してすっげえ元気のいい返事を返してきた。何故か汗ダクダクで。

くおまけく

「よし、今日は鶏肉を切るぞ。」

『またあ!?!』

結局、晩飯の支度に使われるエルなりました。

第七十六の話 新剣、初めての登校（後書き）

エルフィアンのモデルはイクティノスですが、属性は雷です。属性まで被ってしまったら何かオリジナリティ無くなるかなって。あ、すでに無いかも・・・（汗）

工 結局私は包丁か！？

作 うん。

工 おい！？

作 それでは！

第七十七の話 影薄の底力！無駄な足掻き（前書き）

初！影薄視点！



あ！そだそだ思い出した』

思い出すの時間かけすぎだ！？

『で？何してたんだっけお前？』

何してた、じゃねえよ・・・始まりは龍二とクルルちゃんのキャッチボールというかそれ超えた死合に巻き込まれ、病院に搬送されてから何か変な見舞い品ばっか・・・

盆栽やらニンニクやらマシンガンやら硫酸やら土やらアンパンマンの首にバファ　ンに遺書セット、唯一まともなのはフルーツ盛り合わせだったんだぞ。

『はいはい』

数日後なんてなあ・・・爆弾だぞ爆弾。おかげで入院生活長引いちまったんだ。

『よう生きてたなあおい』

しかもよお・・・マグロ！そう、マグロで臓器破裂したんだぞ！？

『マグロいいじゃん』

クソ重たいの二匹も体に乗ったたら潰れるっつーの！しかもボイスレコーダーにマグナム銃お見舞い品に渡されて・・・もう人生いやになったから死んでやろうとしたら・・・

『不発？』



・・・グスン・・・その後はメンタル面でも異常が発覚して隔離病棟行き、面会謝絶。  
移されてから最初のお見舞い品として花束から何やらいただいたけど、中には嫌がらせしか思えないのも混じってたし。

『失礼なこと言うな』

で、キレイな女の人が写った写真が送られてきて見て一気に回復力が向上したんだよ。

『単純』

・・・で、その後お見舞い品のフルーツ食って生死の境をさ迷う羽目に逆戻り。

『何か品種改良してやばいの混じってるって言ってたしな』

・・・しかもよお・・・見舞い品持ってきた人でまともに名前覚えてくれる人ごく一握りだったんだぞ！？一握りだぞ一握り！！そんなでもって“狂人”とか言われたし！！

『合ってんじやん』

黙れこの野郎！！！！

・・・そんな中、誰かの声が聞こえたんだ。

『聞こえるか恭田！オレはお前の親友だー！！』

と。それで看護婦さんにその声の主に宛てて手紙を書いてもらったんだ・・・指先だけで文字を指定するのはしんどかったぞ。



『エグ』

・・・極めつけがこれだ。

『？新聞？』

“病室爆発！爆破魔の仕業！？”

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

それから俺は別の病院へ搬送された。

『あれまゝ・・・・・・・・』

・・・だが奇跡が起きたのだ！

美人な先生が・・・俺を治してくださったのだ！！

『おお』

おまけに体も強化してくれたぜ！

『へえ』

フッフッフ・・・・・・・・これで・・・・・・・・これで龍二の奴をおおおおおおお  
！！

『ふあゝあ・・・・・・・・』

・・・何で欠伸してんの作者？

『飽きてきた』

ひどくない!？

『飽きたもんは飽きたんだよ。黙っとけ』

・・・グスン。

とにかく・・・様々な応援の言葉を送ってくださった一部の皆様、  
本当に、本当にありがとう!!俺、頑張るよ!

『応援の言葉くれた人って大体お前と同じ立ち位置の人達ばかりかだ  
けどな』

・・・

よおし・・・龍二、あいつはどこに・・・。

『ああ、あいつなら今散歩中だぞ』

どこでだ？

『公園でだよ。ま、せいぜい足掻けや』

・・・俺の扱って一体・・・。

だが、今日こそ奴も終わりだ!次回は俺が主役となるのだあ!!!

『バカ言ってるじゃねえよ。仮にテメエがあいつ倒したとしてもぜ

つてえにお前なんか主役にするわけがないだろが自覚せいやポケナ  
ス」

・・・泣いていい？

『さっさと行けば？』

チキシヨオオオオオオオオオオオオ！！！！

く公園の生垣内く

「くくくくくく」

【ガサガサ】

へへ、いたいた・・・。

『お前明らか不審人物だぞ。生垣から顔だけ出すなバカ』

気にしてらんねえよそんなこと。

『・・・何で俺まで？』

せっかくだから付き合えよ作者。



【ブーンー！】 時速二百キロの速さで飛んでいく石じぶて

【パシィ】 見向きもしないで普通に掌で受け止める龍二

・・・へ？

【ポィ】 軽く投げ返す

【ドゴオオオオンー！！】 恭田の背後の塀破壊

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『はい終わり。ドンマイ』

な、な、な、何だよあれ・・・。

『あ、そうそう。さっきの石の速さを特殊な計測器で測ってみたんだけど』

？

『え〜・・・あいつの投げた石の速度

1200キロ』

・・・  
・・・  
・・・

はあああああああ！！？？

『普通に手首をクイってやって投げ返したただけなんだけどねえ』

いやいやいやいやいや！？それ普通に無理だろ！？どんだけ速いつてんだ！？常識はずれ過ぎ！！

『それがこの小説の特徴だからな』

嘘ん！？

『H A H A H A、1000キロも上回ってんじゃお前に勝ち目ねえ



わな。あ、ついでに言つとあいつは小指と薬指でりんご潰せるぞ」

.....。

『負け認めたら？永遠に勝てねえってお前じゃ』

.....う、う、う、うるせいやああああああああい！

！！！

「龍閃弾。」

【ズゴオオオオオオオン！！！！】

おぎよぶべば！？

（龍二視点）

『リュウジ、いきなりどうしたのだ？』

「いや、何かな。平和な散歩を邪魔するバカがいやがってよ。」

とりあえずエルに説明。さっきから何か生垣の方が騒がしいから龍  
閃弾かましちまったが・・・あゝあ、見事に生垣吹き飛んじまって・  
・

ま、うるさかったし、ちょうどいいか。

「さ、帰るか。」

『そうだな。』

帰って昨日録画したドラマ見ないといけんし。

深夜12時、恭田が全身真っ黒こげの状態で生垣の残骸の中から発見された。

因みに第一発見者はミミズだった（翌日近隣に住む住人に発見されたそう）。

第七十七の話 影薄の底力！無駄な足掻き（後書き）

やっぱり影薄より龍二とかアルスとかの視点の方が楽ですね・・・情  
景描写少ないな。

あ、恭田の苦勞とか詳しく知りたい方は感想をどうぞ

「・・・俺、何でこんな作品に出てるんだろなあ。（泣）」

第七十八の話 ペチペチニョ〜ンホツペの刑 (前書き)

まず最初に・・・

えつと卒業パーティーが昨日ありまして、更新遅れました。すいません。

## 第七十八の話 ペチペチニョ〜ンホツペの刑

（龍二視点）

これを器に移してつと・・・その上にチーズとパン粉を・・・。

さて、後はこれをオーブントースターに・・・・・・・・・・よしこれで夕食はオツケー。

出来上がるまでリビングでのんびり過ごすとするか。

「うゝし、何見るかなゝつと」

『私は先ほど録画した昼ドラが見たいのだが。』

「冗談、昨日録画していたお笑い番組だろ。さっきジャンケンで負けたのはどこのどいつだ。」

『く・・・まあいい。今回は貴様に譲ってやる。』

「おうよ。」

ちやっかり馴染んでいるのかテーブルの上に横たわってるっつーか置かれてるエル（鞘付き）は、どうやら昼ドラが好きなんだと。俺はお笑い。

しっかし剣つてのは不便だねえ・・・“刃物”だからジャンケンでグー出せば勝てるし。

あ？卑怯？ジャンケンは手使ってナンボだろーが。こいつ手無えからずつと刃物だし。

あ、訂正。ジャンケンのみならず勝負は勝ってナンボ。

『・・・ところで、あれ口で言っただけではダメなのか・・・？』  
「ダメ。」

『ならこれからも勝ち目ないではないか！！』

「そこを狙っている。」

『・・・貴様は最低だ・・・。』

エルの周囲だけ暗くなった。

「さ、もうちょいでメシだしあいつら起こすか。」

のんきに昼寝中なんだよなああいつら・・・ま、寝る子は育つって言うけどな。

【シュー】

「おい。」

奴らが寝ている和室の襖を開けた。

「・・・。」

だが・・・そこには何と・・・

.....。

はい説明。

『YO！皆元気かい！？何か龍二がどう言ったらいいのかわかんないそうだから俺が説明する・ZE！おおっと、俺の名前は聞いてちゃいけないYO！気ニシナーイさ！』

さて、龍二が襖を開けるとそこには！！！』

「スー・・・スー・・・。」

「クイー・・・ZZZ。」

「ムニヤ・・・ピー。」

『OH！こりやまいった！上からアルス、クルル、フィフィと三人娘が物凄く気持ちよさそうに眠ってるじゃない・KA！  
何ともまあキレイな寝顔！可愛すぎるぜ！』

しかも！アルスなんてTシャツと半ズボンが少しずれてへソ丸出しだあ！一般男子はK・O間違いなしアルねー！！





「っておいおい、へソ出てるじゃねえか。腹壊すぞ。」

服とズボンを整えてからめくれた毛布をそつと元の位置にかけてやる。

『いやかけてどうする。起こさぬか。』

「あ、そうそう。」

ううむ、いつもの癖が。

『……つーか貴様、服戻すのに躊躇いゼロだったな。』

「?何の話だ?」

『……普通ここは顔を赤くするべきシーンなので……。』

「は?」

『いや、やっぱり……こいつはホントに欲無さ過ぎだ。』

最後のセリフよくわからん。

「アルス。」

【ユサユサ】

揺らしてみた。

「ん〜ん〜……。」

若干顔しかめて寝返りを打つアルス。

「……。」

ムカツ。

「この野郎。」

【ムニヨ】

「む。。。。。」

ホツペタによくん

「そら。」

【ペチン】

「はぶっ！。。。。んむう。」

「。。。。。」

あ、おもしろ。

【ニユ、ペチン】

「うにゅ。」

【ニユ、ペチン】

「あづ。」

【ニユ、ペチン】

「きゅ。」

くしばらく続いた

「……みう……。」

あ、毛布に潜り込んだ。

にしても見事にホツペ真つ赤つか……愉快愉快

『笑みが黒いぞ貴様……。』

うん知ってる。よく言われるから。

さ、次々。クルル行く。

「クー……。」

まあまあ口開けちゃって……ほらほら涎涎。枕濡れてるって。スカートもめくれちゃってはしたない。

「んにゆ……リュ……。」

？

「リュウく〜ん……うにゆ〜」

人の名前呼びながら嬉しそうな顔すな。

「クルル、起きろ。」

アルス同様、揺らしてみる……。

「にゅ〜……リュウくんだつこ〜……。」  
「もうそんな年じゃないだろお前。」

やっぱ起きんなこいつ……しゃーねえ。

「そおね。」

【ニユ〜……】

「つと。」

【ペチン】

「ぴう!……クー。」

やっぱホツペじや効果無しか……

じゃ遠慮なく遊んでやろうかな

「よいしょ。」

【ニユ〜……ペチン】

「おいしょ。」

【ニユ〜……ペチン】

「どっこいしょ。」

【ニユ〜……ペチン】

〜三分後〜

「・・・むゆ・・・。」

さて、こいつもいい感じに真っ赤になったところで。

じゃ次ファイファイ。何かおもしろくなってきたかも

「クピー・・・。」

うむう、世にも奇妙な可愛い寝息たてやがってこいつめ。俺が小動物好きと理解した上での作戦か。だが俺は屈せんぞ。

「ほれファイファイ。」

【プニプニ】

ファイファイは小さいから小指でホッペをつつく。

「ぶう・・・ムニヤ。」

ホッペから空気出た音出したな今。ちっちええ音。

「・・・。」

【ニユ】

「うにゆにゆにゆにゆ・・・。」

おお、こいつも伸びるなホッペ（ちなみに抓んだ感じで引っ張っている）。

【ペチン】

「にゅ!?!」

あ、起きたか？

「・・・・・・・・クピー。」

はい爆睡。

ならば貴様も・・・ペチペチニョーンホッペの刑だ!

【ニユ クリンクリン ビョーンビョーン ペチン】  
「ふぴゅ!?!」

〜三分後〜

「・・・・・・・・クピー・・・・・・・・」

はいサ克蘭ボの出来上がり

『・・・・・・・・タチ悪いな貴様。』

「まあな。」

『認めるな。』

あゝおもろかった

『結局遊んだだけか。』

「おうよ。想像以上に楽しかった。」  
『ホントタチ悪い……。』

【チーン】

あ、メシ出来たみたいだ。テレビ見てねえし。

まあ楽しめたしいつか

「さて、と。」

エルをリビングのテーブルに置いてからキッチンへ行き、オーブントースターから出来上がった料理を取り出す。

今日はグラタンとスパゲッティを合体させたもの、『グラスパ』。表面から香ばしく焼けたチーズの香りを漂わせ、中のホワイトソースが野菜と肉とスパゲッティにうまい具合に絡み合った絶妙な風味が魅力的。サクサクした歯ごたえのある表面と一緒に熱々のうちにどうぞ。

腹すかした奴向けに解説してみた。どっかの真似で。

で、これにコンソメスープ付けて……。はい夕食出来上がり。

「んで最後に……。」

台所に垂れ下がっている紐……。懐かしいねえ（第十九の話参照）。



「・・・発射!!」

【ガン!】

【ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!】

大・爆・発

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エル、沈黙。

【シュー】

「・・・・ケホ。」「」

襖が開いたと思ったら目覚めた三人娘がいい感じに黒くなって出て

きた。ついでに口から煙出てます。

「おう、お前らおはよー。」

「「「「おはよー」」」」

ツッコむ力すらないようだ。

和室で何が起こったかはご自由に想像してみ。

「リュウジさん・・・あれは勘弁してください・・・。」

「あれって何かしらん？」

「・・・・・・・・・・やっぱりもういいです。」

あ、そ。

「ほらメシだメシ。さっさと目え覚まして食べ。」

「「はい・・・・。」」

「はあい」

クルルいち早く復活しました。

「・・・・・・・・ところでリュウジさん。」

「何だ。」

「・・・・・・・・頬が何故か痛いんです。」

「あ、私も。」

「私も〜。痛い。」

ちよつと頬押さえて涙目。あ、まだホッペ真っ赤。

「・・・・・・・・・・・・。」



第七十八の話 ペチペチニョ〜ンホツペの刑 (後書き)

はいとゆーわけで三人の寝顔・・・とゆーか龍二のイタズラの話でした。書いてて恥ずかしいと思つた俺です。

ネタは・・・まあ、近所の子犬が可愛い寝顔をしてたから無償にこんなの書きたくなつちやいました

因みにあのDJ風なナレーションは自分で書いててこう思いました。

『しゅび。』

第七十九の話 大混乱！？（前書き）

卒業パーティーに続いて第二弾・・・おかげで更新遅れました。

これからもバイトとかあるし・・・でも頑張っていけます！！なるべく更新していきます！！はい！！

第七十九の話 大混乱!?

（龍二視点）

「さあて、と。」

確かこの台下に……

【ガチャ】

「……………ありや。」

しまった、醤油がない……買い忘れたか。

「まいったな……………」

あ、ダイコンも無かったんだっけ。鶏肉も。あ、リビングの電球替えようと思ったのに電球も買い忘れてらあ。ってやべ、今日スーパー休みじゃねえか……昨日のうちに済ましてくべきだったか。しかもあのスーパー。スーパーのくせに電球売ってねえんだよな。

まいったなもうちょっとで見たいテレビ始まるし……つい隣町に知ってる電気屋ねえし、隣町から商店街の電気屋行くのもメン  
ドイ……とは言ってもアルすらに頼もうにも本人達もいねえ。

……………。

「・・・しよーがねえか。」

“あれ”はいろいろメンドくさいから使いたくなかったんだがなあ。ま、やむおえんか。

〈アルス視点〉

「楽しかったねー！」

「・・・疲れました。」

「アルスお疲れー。」

たった今、魔王に連れられて公園へと遊びにいったものの・・・

魔王を含めた子供軍団に追い掛け回されました・・・しんどいです。

しかも何なの・・・あの子供達の身体能力。ただ者じゃないですよ。

・・・何故だろう、あの子供達、少なくともリュウジさんと関係ある気がする。

「詳しくは第二十九の話を見てね！」

「・・・何言ってるんですか？」

「気ニシナ〜イ！」

「リュウジさんのモノマネしない！」

まったく・・・魔王も子供達率いてボク追い掛け回したのに全然疲れた気配ないし・・・。

「？あれ？あの後姿って。」

「え？」

ファイフが指差した方向をしてみる。

・・・あ、あれは。

「リュウくん！」

あ、魔王走り出した。

「ん。」

【ベシリ！】

「みぎゅー！」

あ、飛び掛って叩き落された。

「おうお前ら。今帰ってきたのか。」

何事も無かったかのように振舞うリュウジさん。当然、アスファルトの上には魔王がうつ伏せに横たわっている・・・痛ぞ。

「はい。ところでリュウジさんは何を？」

いつもこの時間帯はお昼を作っているはずなのに。



「ああ、メシの材料が切れちまったんだよ。だから買い物。」

そう言つて買い物籠を掲げてみせるリュウジさん。なるほど。

「家の鍵渡しておくから、悪いがそれで開けてくれねえか？」

「あ、はい。わかりました。」

差し出された銀色の鍵を受け取つてボクは頷いた。

「じゃ行つてくるぜ。」

「行つてらっしゃーい。」

「じゃあね。」

軽く手を振つてリュウジさんは家とは反対方向へと行つてしまった。

「むう・・・痛かった。」

「アンタも懲りないわね。」

ムクリと起き上がった魔王に呆れた感じで言うフィフィ。うん、ボクも同感。

「あ、そういえば・・・リュウジさん、エルを腰に付けてなかったなあ。」

「ああ、確かに。」

「いっつも付ける必要ないからじゃないかな？ほら、リュウくんてエル無しでも十分強いし。」

「まあ・・・そうだね。」

でも置いていったらエルがうるさいような・・・まあリュウジさん

なら普通に無視するだろうし。エル動けないし。

なのに・・・何か違和感感じるんだけど・・・？

「ねえ、帰ろう。疲れちゃった。」

「あ、うん。そだね。」

まあ、気のせいかな？

〈同時刻、商店街〉

〈花鈴視点〉

「ふう、買った買った」

あそこのクッキーおいしいのよねえ・・・帰って食べよ。

やっぱりこの商店街って何でも揃ってるわね・・・あ、でも今日スーパー休みだったし・・・今晚どうしよ・・・。

あ、龍二の家にお邪魔しちやおっかな？

いやあでもここってホント賑わってるなあ。休日なんて子連れ多い

し、平日は主婦の人とかが行き交ってるし。まあ今日は休日だから  
平日の倍は賑わってるわね。

あゝにしてもいい天気

「？ありよ？花鈴じゃん。」

「え？」

後ろから声が……。

「あ、龍二。」

「よう。」

振り返ってみれば、龍二が手ぶらの状態でそこに立っていた。

「アンタここで何してんの？」

「買い物以外ここに來ることあるか？」

軽くムカつく。

「まあ、そりゃそつだけどさあ……あ、じゃ何買いに來たの？」

「電球。」

「へえそつ。」

「ああ。」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「  
・  
・  
・  
。」  
「  
・  
・  
・  
。」  
「  
・  
・  
・  
。」

え、終わり？

「  
・  
・  
・  
で？」

「あ、いやだからさあ。」

「もう俺行くぞ。忙しいからな。」

「  
・  
・  
・  
そうさか。」

「じゃあな。」

「うん  
・  
・  
・  
。」

何かすっごいグダグダ感丸出し状態のまま龍二は行ってしまった。  
・  
・

「  
・  
・  
・  
何なのよあいつ。」

何か今日冷めてない？機嫌悪いのかしら。しかも忙しいなら声かけるなっつもの。

「  
・  
・  
・  
。」



『さ、さつきね・・・エグ・・・そこでね、あのね、うんとね、そのね、@%\$#&ね』

「うん、ちよつと落ち着いてくださいお願いします。」

何言っつてんのかさつぱりわかりません後半とか特に。

『・・・スー・・・ハー・・・。。』

「・・・落ち着いた？」

『うん、落ち着いた。』

世話の焼ける生徒会長・・・。

「で？どうしたのよ。」

『えっとね・・・さつきそじで・・・』

リュウちゃんがカツアゲをしていた不良私に向けて殴り飛ばしてきて思いつきり頭打ったの。』

.....。

「・・・そんだけ？」

『うん。』

.....。

「そんだけで大泣きすなああああああああ！！！！！！！」

『えう！？？』

も〜心配して損した！！まあ負傷してるみたいだけど。

「いつつも龍二に同じようなやられ方してんだからそれくらい我慢しなさいよ。」

『だ、だってえ……リュウちゃんからの直接攻撃じゃないと何か嫌だもん。』

M発言!?

「……はあ……まあいいわ。で？用件それだけ？」

『あ、そうだそうだ。も一つ用件が。』

？

『あのね、私今ちょっと用事で隣町にいるんだけど。』

「うん。」

『そんでねえ

……。』

……。

「……忘れたと言ったら怒るよっ。」

『……』

テへ  
『

バカ生徒会長おおおおおおお……！！！！！！





『花鈴ちゃん？』

「・・・ごめん、後で。」

『ええ！？』

【ピッ】

・・・えく・・・つと・・・。

「ひ、一先ず龍二の家に行こうかな？」

〈同時刻、龍二宅前〉

〈アルス視点〉

「あゝ疲れたゝ。」

「お腹減ったゝ。」

ず、随分私欲にまみれた言葉だなあ・・・。

「アルス、家入ったらジュース入れてね。」

「怒るよファイファイ？」

「冗談よ冗談。怒らないですよ。」

冗談に聞こえないよ・・・。

【ガチャ】

「ただいま。」

扉の鍵を開けて帰宅・・・あゝ何だか物凄く疲れた。

「おかえりー。」

リビングに入ってみれば、リュウジさんがテレビの前でくつろいでいた。

「リュウくんただいま。」

「リュウジ、何か飲み物。」

「はいはい。」

「あ、ボクココアで。」

「はいはいはい。」

腰を上げて台所へと向かうリュウジさん。

やっぱり疲れた時にはココアで一服・・・

.....。

「  
「  
「へ？」「  
「  
「？どした？」

・・・あれ？

「え、あれ、何で？」

「は？」

「いや、さつき・・・そこで会いましたよね？リュウジさん。」

「何のことだ？」

「いえ、だから・・・。」

あれ？あれ？あれ？

「人違いかなんかじゃねえの？」

「・・・でも、家の鍵渡しましたよ？」

「工作がうまいとか？」

「工作でどうこうなりますかそれ？」

それに性格も似すぎてましたし服装もそのまんま・・・あれ？

【ボタン！】

「龍二【ゴォン！...】はぶ！...？」

リュウジさんがいきなり入ってきたカリンさんに猫の置物投げつけた。

「いっつった~~~~!!何すんのよアンタ!!」

「入る時はインターホン押せって何回言わせんだバ花鈴。お前の脳味噌飾りかバ花鈴。いっそ死ねバ花鈴。」

うっわあすごい凹んだよカリンさん……。

「……はっ!それどころじゃない!」

あ、復活した。

「龍二!ちよつと聞きたいことあるんだけど!」

「は?」

台所にいるリュウジさんに詰め寄っていくカリンさん。

「アンタ、今まで何してた!」

「ずっとここにいたが何か?」

「じゃ何でアンタが商店街にいたのよ!??さっき香苗ちゃんから電話あってアンタが隣町にいたっていうし、どうなってんの!??」

……へ?

「カリンちゃんもそうなの?」

「……え?じゃクルル達も?」

「はい。」

え、え、ホントどうなってんの?……

頭痛い……。。

【ピンポン】

「お、誰か来たか。」

ボクらが頭を抱えてる間にインターホンが鳴り、さっさと受話器を取るリュウジさん。

「あいよ……。おう、お疲れー。」

【ガチャ】

？誰？

【ガチャ】

……。へ？

「ただいまー。」

「おう、おかえりー。」





・・・ボク何でこんな冷静なんだろう？何で普通に解説してるんだろ？あ、そっかあもう驚愕超えて頭が麻痺しちゃったのかなあ？きつとそうかもアハハハハ

「」「現実逃避するな。」「」

「！？ひゃい！！」

現実に戻された。

だって同じ声三つに言われたらどうしようもないじゃない・・・。

「・・・で？これどういうこと？」

カリンさんが半分怯え半分恐れの混じった顔で言った。

「それ今から説明しようと思ってたんだけどよ。」

・・・そですか。

「まず技名。『龍分身』。読んで字の如く。」

リュウジさんは技名に“龍”という字を入れるのが好きなんですよか？きつとそうに違いない。

「・・・何でそんなことしたの？」

「答えは簡単。」



家出るのメンドかったから。」

「うおおおおおおおい！！！！！！」

カリンさんの猛烈なツッコミが発動しました。

「だあってよお、見たいテレビあんにスーパーは閉まってるし、隣町に知ってる電気屋ないし、商店街の電気屋行くにしても往復せにやならんかったからさあ。死ぬほどメンドくてよ。」

あなたならそれくらい数分で済むだろうなあって思うのボクだけ？

「で、分身したってわけ。」

「……おかげでアタシらは見事に大混乱だけど？」

「……気ニシナイ。」

「やめて！お願いだから三人同時に言うのやめて！何か変だから！」

「じゃ気ニシナイ。」

「気ニシナイ。」

「気ニシナイ。」

「そっちもやめて！！お願いだから！！」

……カリンさん、気持ちはボクも同じです。

「……ところで本物は誰なんです？」

「……こいつ。」

……“二人”のリユウジさんが“もう一人”のリユウジさんを指差した。

「俺が本物。証拠はこれ。」

『さすがに私は分身できぬからな。』

あ、エル・・・そっか。あの時エルを腰に差してなかったのはこういう訳だったんだ。

「はあ〜・・・リュウくんが三人も・・・何か怖いなあ・・・あ、でもこれはこれでいいかも・・・。」

「クルル、下手なこと考えない方がいいわよ。」

同感。

「まったく・・・とりあえず用済んだんだからそっちの二人元に戻しなさいよ。」

そうですね、リュウジさんが増えるっていうのはちょっとボクとしても恐いですし・・・

「」「ああ、無理無理。」「」「」

・・・へ？

「この技、効果時間24時間。」



くその日の晩く

「さて、ゴミ箱片付けないとな。」

「あ、鍋ふいてら。」

「洗濯物畳まないと。」

「こらくルル、ちゃんと片付ける。」

「アルス、食い物残すな。」

「風呂入ってこいファイファイ。」

「米とぐか。」

「テレビに近づきすぎだぞお前ら。」

「誰だ俺の枝豆食ったのは。」

「ベビースターどこやったっけ？」

「あ、お笑い始まる。」

・・・ヘルプミク・・・。

第七十九の話 大混乱！？（後書き）

ちよつと解説

・龍分身 読んで字の如し。どんだけの数になれるかはご想像に  
因みに分身したら力半分になるとかそういうのはなく、全部力変  
わりません

・・・ドッペルゲンガーって怖いですよね・・・。

第八十の話      L e t、s   R o c k ! < 前編 > ( 前書き )

かっちょいいの書いてみたかっ  
たんですよねえ



何の話だよ何の。

『前に言ったはずだ。特訓すれば雷を操れるようになるよ。』

「あ、そだっけ？」

『・・・貴様、頭の片隅にも置いてないではないか。』

「だって興味ねえし。」

『うおー！？』

「タツツコむなつての。」

『・・・貴様、雷を自由に操りたくはないか？』

「ないね。気で十分だ。」

『・・・さらに強くなれるぞ？』

「強いとか弱いとか興味ない。」

『・・・それでいいのか？』

「毎日のんびんだらり過ごせたらそれでいいさ。」

それが俺の生きる道。

『・・・。。。。』

？いきなり無言になった。

『・・・特訓・・・しないのか？』

。。。。。。。



まったく・・・。

「・・・ま、減るもんじゃねえし別にいいか。」

『よし、ならさっそくやるぞー!』

急に元気になった。

要は特訓して欲しいんだろ？何故かは知らんがな。

・・・でも特訓ねえ・・・一人でやるのはおもしろくない・・・  
・・・

よし。

「エル、ちょっと待ってな。」

『?』

とりあえずケータイで、と。ピッピッピってな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、もしもし久美？俺だよ俺。オレオレ詐

欺。うん切ろつとしたら殺す。でさあ、ちょっと頼みがあんだけど・  
・・・(説明中)・・・オーケー？よし、サンキユ。じゃ後で。」

【ピッ】

さて、次はつと・・・

和室へGO。

くで、一時間後 学校のグラウンドく

【ビューウウウウウウウウウウ・・・】

西部劇かつつーのこの風。

はいいきなり来ました学校のグラウンド。急な展開とかそんなのな  
し。大体一々そんなこと説明してたら時間無くなるっちゅーねん。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

で、この場にいるのは・・・

俺、

エル、

アルス、  
クルル、  
ファイファイ、  
久美、  
リリアン、  
香苗、  
ロウ兄弟、  
美紀美香姉妹、  
雅、  
ステイル、  
涼子さん、  
花鈴、  
恭田、

と、こんな面子勢ぞろい。

いやね、一部の奴らっつーか久美とリリアンと香苗とロウ兄弟と雅とステイル呼んだからいるのはわかるよ？

「で？涼子さんと花鈴と双子香苗と安物オマケは何でここにいらんだ？」

この五人呼んでないんだが。

「あらあら、私達来ちゃダメだった？」

「別に？」

「何かおもしろそうだから来ちゃったし。」

「同じくー！」「・・・。」

「っーか誰が安物オマケだコラー！！」

うつせえなあ影薄が。

ま、そんなこたあどうだっていいや。

「じゃ、今回集まってもらったのは……一部の奴らはわかってるよな？」

第一回、何か特訓でもしよつかあ〜ダリイ血まみれ大会開催〜ドンパフ〜。」

『何だそのやる気ないのかエグいのかわからん名前は。』

はいエルのツッコミ無視。

「え……特訓？」

「何何？」

「??？」

あ、アルスらに説明してなかった。

そついや昼寝のところをエルボードロップで起こしてから出かけるぞーって言ったただけだったな。強引に連れ出してやったんだ。

「あ〜、エルがさ、何か特訓してくれーってうるそつて。」「余計なこと言うなバカ。』

はいはい。

「で、ただ剣振るだけじゃおもしろくないからとりあえずバトロワ（バトルロワイヤルの略）的な感じで特訓しようぜーってことだ。そんで皆に集まってもらったオーケー？」

ノリで親指を上へ突き出す。

「え……っと、オ、オーケー？」

戸惑った感じで親指を突き返すアルス。つーか聞くな。

まあ特訓つつつても……………

暇つぶし

「……………で？具体的にどうするんだ？」

雅が聞いてきた……………そりゃ決まってんじゃんよ。

「おうよ。この大会の主役は俺……………つーかエルだ。」

「うん。」

「で、エルの所持者は俺だ。」

「うん。」

「つーわけで、俺対お前らって形に。」

「うん。」

……………は？」

雅、いい感じに目が点。

「・・・マジか？」

「大マジだ。」

「・・・。」

だあかあ、何で目が点になるかなあ雅よ。つーか何だ。久美と香苗まで目が点になってんじゃん。

「り、リュウジさん。それはいくらなんでもちよつと・・・。」

「そうそう！集団いじめみたいなものじゃないの。」

アルスとクルルが抗議するが、そんなこと気にしてたら人生やっていけねっつもの。

つーか何だ。明らか焦った顔してんじゃん。何故だ。

「・・・本当に・・・やるの？」

「もち。」

「・・・。。。」

何かリリアン考え込んだ。

「・・・わかった。」

「ちょ、リリアン!？」

話分かるじゃんリリアン。

「アルス・・・ここは見せ場だから・・・。」

「は？」







「さて……。」

「そんじゃフィールド準備しますかね。」

「……出て来いライター。」

【ブン】

『……何故呼ぶ俺を。』

背後から黒い穴が現れ、そこから黒装束の変態が出てきた。

『変態ちやうわー!!』

「じゃ顔見せる。」

『……それはダメだ……。』

あ、そ。つーか見たないわ。

『……で？何の用だ？』

「悪いけどこないだみたいな結界張ってくんねえか？」

『……マジ？』

「マジだ。」

『え、あれしんどいのに。』

「切るぞ。」

『喜んで張らせてもらいます!!』

弱。

『……てい!!』

ブーン、と音が出ると、学校のグラウンド全体を包み込むように黒

い結果が現れた。

『・・・説明。この結界の中から外には音は出ない。で、この結界の中で死んだ場合、場外といった感じでボンと消える。結界が無くなれば元通りだから、好きだけ暴れても結構。ただし、ダメージはそのまんまだからな。以上。』

うーん、都合のいい結界だ相変わらず。まあコメディーだしな。

「・・・つまり本気でいってもいいってことですね。」

「龍二・・・本気を出さないと勝てない相手・・・。」

あらまあ気合十分ねえアルスリリアン。

「よーっし！絶対勝つよー！」

「頑張りますー！！」「」

クルル達も気合十分。

「・・・何故私まで・・・。」

「ドンマイ。」

スタイルやる気ゼロ。フィフィよくわからん。

「・・・よし、逃げ回ろう。」

すでに臆病風に吹かれている影薄。

「死ぬなよー！」

「頑張ってねー！」

「ファイター！」

「リリアン負けるなー！」

「カルマケルマー！頑張れー！」

「・・・ガンバ。」

「あらあら」

その他外野ども。

『リュウジ、やるからには本気でいけ。』

「へいへい。」

つつても本気はまだ出さないけどな。

『そんじゃ、ルールは時間制限なし、死んだら負け！』

何かちゃっかりライター仕切ってるし。

『では、特訓もとい死合・・・。』

ライター、漢字違うくね？

『・・・開始！・・・！』

【チャキ！】

連中の得物。

アルス、聖剣

クルル、黒剣

ロウ兄弟、素手

リリアン、せんぷ戦斧

ステイル、白い杖

ファイイ、素手

恭田、木の棒

対して・・・

俺、エルファイアン（まだ鞘入り）

うゝむ、人それぞれ。

『リュウジよ、私の使い方はわかるな？』

「ああ、事前に教えてもらったからな。まだやってねえけど。」

ここに来る前、エルからあることを教わった。

こいつの力は雷・・・で、それを自在に操るにはやっぱり氣の力が必要だとか。並大抵の奴じゃ使えないってわけね。

『まずはイメージしろ・・・。』

「はいはい。」

イメージね、イメージ。

.....

・・・お？何か体中から気が湧き上がってくるような。

「いきますよリュウジさん！」

人がイメージしてるところをアルスの奴が突っ込んできた。

で、俺はまだ額に右拳を当てながら棒立ち中・・・エルも腰の鞘に収まっている状態。

ところがどっこい・・・

『・・・来たな。』

エルの銀色の部分から光が漏れ出してきた。

『・・・放て、リュウジ！』

言われなくとも・・・



で、見事に恭田に命中。一際大きく輝いて、そして星となった。

【チチチチ・・・】

光が収まると、そこにはまだ電流を迸らせながら真っ黒こげになった恭田が。

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺、こんなばっか・・・・・・・・ぐふ。」

【パタリ】

あ、死んだ。

【ヒュン】

あ、消えた。

『はい恭田脱落。』

ライター、無機質ななあ声。何の感情もこもってねえよ。

「あ、あぶなかつた・・・・・・・・。」

「・・・龍二・・・新技・・・」

「えう・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

うん、皆して呆然だな。

「さて、と・・・。」

ウォーミングアップ終了ってところで。

【カチャ】

首のヘッドフォンを頭に付け・・・

「・・・いつちよ派手にいくか！」

『いぢー！』

ポケットの中のiポッドのスイッチをいれ、気合入れる時にいつもかけるロックを流した。



『 …… 戦闘描写ってむずいね。』

それはあとがきで言えライター。

第八十の話

L e t、s R o c k！<前編>（後書き）

続きます・・・戦闘描写むずい・・・（二回目）。

第八十一の話 Let's Rock! <中編> (前書き)

ホント難しいです、戦闘描写。

第八十一の話 Let's Rock! <中編>

ライター視点

さて、始まりました特訓とは名ばかりの死命。戦うのは龍二とエルのペア。対してアルス、クルル、フィフィ、スティル、リリアン、ロウ兄弟の実力者勢ぞろいの面子。

あ、因みに約一名は速攻死にました。あっけなさ過ぎてもう説明したくない。

では、戦闘の様子をどうぞ。

「でやあああああああ!!!」

【ガキン!!!】

「む。」

アルスの突進による力が加わった会心の一撃をエル片手で楽々と受け止める龍二。

「まだまだあ!」

【ガキン!ギン!ガキン!キン!キン!】

アルスによる怒涛の連撃。袈裟切り、切り上げ、突き、薙ぎ払い、それらを実数に龍二に叩き込む。

しかし、龍二はそれらを全てさばいてゆく。受け止めているのではなく、全て受け流していく。それも華麗に。

【ギイイーン!!】

そして最後の一撃で鏢迫り合いへと持ち込む。

「やるじゃん。」

「ボクだって・・・勇者ですから。」

まだまだ余裕そうな二人。

「・・・でもリュウジさん、忘れてませんか？」

「？」

アルスは少し口の端を吊り上げるかのように微笑し、

「相手はボク一人じゃないです、よ!!」

【バツ!】

一足飛びで鏢迫り合いから抜け出した。

『木よ、襲え!!』

「お?」

すると龍二の前後から三つの先端の鋭い木の枝が飛んできた。唱えたのはスタイルだ。

「・・・はっ！」

【ドオン！】

龍二の気合と共に周囲から巻き起こる炎。その炎に包まれて、木の針は全て消し炭と化した。

「・・・『龍明壁』。」

氣を周囲に張り巡らせて一気に発火させることで炎の壁を作り出す技。

「ふう。」

少し一息いれる龍二。

「休ませないよりユウくん！」

【ゴウ！】

しかし、今度はドツチボール並の大きさの暗黒球が龍二目掛けて飛んできたためすぐに構えることとなった。

「ほいっと。」

【ザン！】

それをスッパリと薙ぎ払う龍二。暗黒球は二つに分かれた後フツと消滅した。

「まだまだいくよー！『ダークネスショットー！』」

クルルが剣を振り回すと同時に先ほどの暗黒球が連続して龍二に襲い掛かる。

「・・・ふむ。」

【チャキ】

少し考え込んだ後、エルの切っ先を後方へと下げる。日本剣術でいうところの脇構えである。

「おりゃあああああー！！！」

【ザザザザザザザザザザン！！！！】

そこから気合と共に乱れ切りを放つ龍二。暗黒球は全て消滅させられた。

「ふう。」

「・・・まだよ。」

また一息ついた途端に背後から声がし、咄嗟に前方へと転がり込む龍二。

【ドオオオオンー！！】

すると龍二が居た場所に半径三メートルの大きな穴が開いた。

「やるじゃんリリアン。」

「・・・戦士だから。」

戦士だからってそんな破壊力抜群の攻撃できるとは思えないけど・・・。

『時よ、かの者を止める!』

【キーーーーーーン】

「お?」

遠くからフィフィの声がし、同時に耳が痛くなる音がした。

すると、龍二の動きが止まる。

時間停止魔法・・・フィフィしか唱えられない上級魔法だった。

『氷よ、押しつぶせ!』

『風よ、切り刻め!』

今度はカルマとケルマの声がした。カルマからは巨大な氷の塊が、ケルマからは体から風でできた真空刃が発せられる。

それらは全て、迷うことなく龍二へと飛んでいった。

【ドドオオオオン!!】

「あつ。」

何とも気のない声だが、二つの魔法が命中すると共に爆発が起き、龍二は吹き飛んだ。

「アルス。」



「わかってる！」

【シュッ！】

リリアンが斧を突き出し、アルスが駆け寄ってジャンプする。そしてリリアンの斧の腹の部分を踏み、リリアンが斧を大きく振り上げると同時に飛び上がる。アルスの脚力とリリアンの腕力により、高く吹き飛んだ龍二と同じ高度となった。

「はあああああ！」

気合を入れた声を発すると、聖剣が白い光に覆われていく。

そして大きく剣を横へと振りかぶり……

『ホーリーソード!!』

【ドオオオオオオオオオオ!!!!】

技名を叫ぶと同時に薙ぎ払うと、白く発光して爆発した。

「ぐお。」

「まだです!!」

【ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！】

すかさず剣を振りかざし、龍二を先ほどの爆発と連続で起こしながら切り刻んでいくアルス。高度を下げることなく出せるこの技は、

アルスの浮の魔法を使って浮力を起こしているからこそできる。

「はあああああああああああ！」

最後に大きく振りかぶり

「でやああああああ！」

【ドオオオン！！】

渾身の力で爆発を起こし、龍二を地上に叩きつけた。

【ドン！】

「がは。」

背中を強く打ちつけ、一回バウンドする龍二。

『聖なる力よ、かの者を束縛せよ！』

そこを逃さず、ステイルが魔法を唱える。

【ジャキン！】

「おう。」

ステイルの手から白く発光する鎖が飛び出し、龍二の四肢を拘束した。

「アルス、今です！」

今の龍二は、ステイルによって四肢を拘束されており仰向けの状態。



「目が、目があああああ!!!」

「雅、落ち着きなさい。」

【ゴン!】

「うぐ……。」

目を覆うのが遅れた雅は見事に天空の城の敵役の最後のシーンの如くわめき、拳句姉である涼子に拳骨くらって伸びた。ドンマイ雅。

「……。」

そして煙が晴れると……

大きなクレーターがグラウンドの中央にできていた。

「す、すごい……。」

「ほえ……。」

久美と香苗はその光景に啞然とした。そんな中、膝を着いていたアルスはクレーターの中心からゆっくりと立ち上がり、剣を抜いた。龍二は見事に地面に沈んでいる。

結果は明らかにアルス達に軍配が上がっている。

「……。」

だが、アルスは釈然としない表情だった。

「アルス？」

フィフィがアルスの傍まで飛んできて顔を窺う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おかしい。」

「へ？」

ボソリとアルスが呟いた。

「リュウジさんにしては・・・・あっけなさすぎじゃないですか？」

「そ、そう・・・・かな？」

「考えすぎでは・・・・？」

「・・・・・・・・。」

リリアンとフィフィに言われても納得のいかない様子のアルス。

いや、これもう龍二負けでいんじゃないかね？

【ボコッ!】

「ふゝ、泥まみれだぜまったく。」

『!?!?!?!?!?!』

突如クレーターの中心から声がし、全員そちらに振り向いた。

そこには、無傷の龍二が地面から起き上がっていた。うっそん。

「……え……リュウくん?」

「な、何故……さっき確かに……。」

クルルとカルマが呆然と呟く。それに対し、龍二は立ち上がって体中の泥を落とした。

「いや何、軽く新技つーか改良技をな。」

「?」

「『龍鉄風・改』。核ミサイル降ってきててもヘッチャラピー。」

また規模でかいなおい。

「く……やっぱりこう来ましたか……。」

「ただではやられんよ。」

『そうやすやすと倒れはせん。』

龍二の手に握られているエルも余裕綽々といった感じで言った。

ゆったりとした動作でクレーターから上がってきた龍二は、エルの切っ先をアルス達に向けた。

「さ、第二ラウンド的なもん始めますか。」

『……！』

【チャキ】

全員再び武器を構えた。

「さて、まずは……。」

【チャキ】

右手の剣を水平にし、切っ先はアルス達に向けるかのように構える。

「……ステイルとロウ兄弟からな。」

まずは支援係を倒そうという考えだな。

【ユンユン】

『轟波衝斬！』  
いっほしゅうせん

あ、珍しく龍付いてない技だ。

【ゴウウウウー！！】

剣を二回転させた後、神速の速さで振り上げて衝撃波を飛ばす。

「な！？」

当然、衝撃波の速度もかなりのものだった。

【ドオオオオオン！！】

「ぐはあ！！！！」

「スタイル！！」

咄嗟に杖で防御したものの、あまりの衝撃に吹き飛んだ。

「むん！！」

【シュ！！】

「！？」

遠く離れて位置にいたはずなのに、まばたきの間にスタイルに接近した龍一。

縮地法。居合いなどである相手の死角に素早く入り込む移動法であ



る。

『龍閃弾・双牙』

【ドドドドドドーン！！】

「ぐああああああああ！！！！」

吹き飛んでいる最中のスティルに、氣を込めたワンツーパンチを一瞬にして叩き込む龍二。スティルは爆発と同時に吹き飛んでいった。

【ドオオオオオオオオオ！！！！！！】

そして校舎に激突し、大きな穴を開けた。

「……………」

【シュウウウウウウウ……………】

すかさずエルを掲げて目を閉じる龍二。周囲から青い光が出、エルの銀色のパーツに集まっていく。

「切り裂き焼かれる、『ストリームサンダー』！！！！」

【ズバババババババババ！！】

最初に恭田に放った術が連続して大穴へと飛んでいく。

【ドドドドドドドドドドドドドドドドドオオオオオオオオオ！！！！！！】

一際大きな爆発と共に、校舎が吹き飛んだ。

……………終わったな。気配が消える。

『スタイル、脱落。』

俺はスタイルの敗北を宣言した。

「はい次！」

「「!？」」

クルリと向きをロウ兄弟へと変える龍二。咄嗟にロウ兄弟は構えた。

「させない！」

「ん。」

視界の端から、アルスとリリアンが突っ込んでくるのが見えた龍二。

「・・・せい！」

【ドオン！】

「グッ・・・！」

「とう。」

【ギーン!!】

「う・・・。」

アルスを龍閃弾で吹き飛ばし、横薙ぎに払ってリリアンを斧ごと弾き飛ばした。二人は龍二から遠く離れた距離まで飛ばされ、呻いた。

『風よ、切り裂け!』

『氷よ、飛べ!』

【ドキュヒュヒュヒュヒュヒュ!!】



「・・・行くぜ！」

【バツ！】

エルを下げたまま一足飛びし、ロウ兄弟へと接近する龍二。一瞬にして間合いをつめられ、驚く双子。

『りゅうらせんのはりぐも  
龍螺旋昇雲』

【ドオン！】

「「うわあああああああ！！？？」」

アッパーと共に放った渦巻状の気によって頭上に吹き飛ばされる双子たち。

「やるぞ、エル。」

『了解。』

エルを左手に持ち替え、切っ先を地面に向けてある構えをする龍二。

その構えはまるで・・・

「唸れ雷撃・・・」





「そんじゃ、次行くか。」  
『上等だ!』

エルを一振りし、アルス達に突進していった。

第八十一の話 Let's Rock! <中編> (後書き)

また続きます・・・次回どうしょ。戦闘描写IS難しいネー！。



第八十二の話 Let's Rock! <後編>

〈ライター視点〉

またまた登場、ライターです。前回、敗退したのは・・・

ステイル、

ロウ兄弟、

の三人。残存しているのは・・・

アルス、

クルル、

ファイファイ、

リリアン、

で、龍二。

「！ファイファイ！」

「わかつてる！」

頭上へ上昇し、体から赤い光を発するファイファイ。

ファイファイは、それぞれの魔法の属性に対してふさわしい色を魔法を唱える時に発する。因みに赤は・・・

『炎よ、渦巻け!』

火である。

【ボオオオオオオン!!!】

いつか見たような、巨大な渦巻き状の炎が龍二を包み込む。

『龍閃斬りゅうせんざん』

【ズバン!!!】

しかしそれを呆気なく一刀のもとに両断する龍二。炎は二つに分かれてやがて消滅した。

「やるね……でもまだまだ!」

今度は青色に輝き……

『水よ、刃となりてかの者を刻め!!!』

【バシユシユシユシユシユ!!!】

フィフィの周囲から龍二ほどの大きさのある水の刃が襲いかかった。

【ガガガガガガガガガガ！！！】

しかし、それらは全て龍二に当って碎け散った。

そりゃ龍鉄風かかっているもんなあ……。

「かかった！」

ところが、してやったり、といった表情で黄色く輝くファイファイ。

『雷よ、落ちろ！！』

【ゴロゴロゴロゴロ……】

急に空模様が怪しくなったと思うと……

【ズドオオオオオオオオオオオン！！！！】

龍二目掛けて、特大の雷が落ちた。でかすぎて振動ちよつと来たし。

「今よ！」

「はい！」

「いつくよー！！！」

「了解……。」

ファイファイの掛け声で、アルス、クルル、リリアンは、それぞれの得

物を手に湧き上がる煙の中に突撃していった。

「てやあああああ!!」

「はっ!」

そして聖剣が、黒剣が、斧が閃

【ガイイン!!!】

・・・なかった。

「.....」

煙が晴れると、三人の刃をエルを逆さにして受け止める龍二がいた。

「ドンマイ」

楽しそうに言う龍二。

「.....あ、そついえば雷食らっても平気なんだっけ.....リュウ  
ジって。」

あっちゃ〜と呟くフィフィ。第三十一の話で実証済みだろ。

「わて。」

「...まず。」

アルス達が慌てて離れようとした。

が、遅い。

「むん。」

【ズガンー!!】

「くっ！」

正面にいたリリアンの腹を直蹴りで吹き飛ばし、

【バキイ!!】

「うみゅ!?」

右にいたクルルを掌底をかまして吹き飛ばし、

【ギインー!!】

「わあ!?!」

剣を薙ぎ払ってアルスを吹き飛ばした。

こう解説しているが、本当はこの動作に2秒もかかっていない。

「.....」

【シューウウウウウ.....】

エルの切っ先を下に向け、左手をエルの銀色のパーツに添える。光が、エルへと収束していく。

「飛べ、雷の矢。『ライティングアロー』」

【バチィ！】

龍二の掌から雷の矢が飛び出した。

「！フィフィ、避け」

【ズバアアアン！！】

「きゃあああああああ！！！」

アルスがフィフィに注意を促すも空しく、矢はフィフィに直撃した。

【ドオオオオオオオオオン！！】

『・・・フィフィ、脱落。』

「・・・く！」

残ったのは、アルス、クルル、リリアンの三人となった。しかも三人とも傷だらけ。

「じゃ、ラストスパートといくか。」

対して、龍二は一切傷を負っていない。

「・・・そんじゃいくぜー。」

【ビューンー！】

一瞬にして間合いを詰める龍二。

「甘い。」

【ギイン！】

咄嗟に反応したりリアンが龍二の斬撃を受け止めた。

「……く。」

しかし、あまりの衝撃で斧を取り落としそうになる。

「いつくよー！『ダークネスブレイド』！！」

クルルがアルスとは対照的に漆黒の闇に覆われた刃を手に、リアンと鏑迫り合い状態となっている龍二に突っ込む。

「よ。」

【ギイン！】

すかさず離れ、リアンと距離を取ると同時にクルルの攻撃をかわす龍二。

「……覚悟。『アースブレイク』。」

【ドオオオオオオオオン！！！！】

しかしそれを逃さず、地面を渾身の力を込めた斧で叩き割って衝撃波を発生させるリアン。

「む……ジャンプ。」

【バツ！】

とりあえずジャンプして攻撃を凌ぐ龍二。

「甘い!!」  
「お?」

だが、目の前に二つの影……

アルスとクルル、それぞれ二人は、白い光と黒い闇を剣に纏わせつつ龍二に文字通り飛び掛る。

「いきます! 『ホーリースラッシュ』!!」  
「もっかい! 『ダークネスブレイド』!!」

白と黒の剣が同時に龍二に襲い掛かる!

「ふむ……」

『龍双刃』。  
「

【ゴオオオオオオオオ!!!!】

「!!!!??」  
「

だが、二人の剣が当る直前に、突如龍二から熱風が発せられた。

「うああ!!」  
「きゃあ!!」

【ドザアアア!!】



熱風により、地面に叩きつけられ、そのままスライディングしていく二人。だが、二人は受身を取ってそれ以上滑るのを阻止した。

【シュタ】

そして龍二も地面に降り立ち・・・

【ゴオオオオバチバチバチ・・・】

炎と雷に包まれた刃を構えた。

「な・・・。」

あまりの出来事に、全員エルに釘付けとなった。

『ふ、驚いたか。私とリュウジならではの成せる芸当だ。』

「芸じゃないけどな。」

おそらく、龍二が得意とする氣を媒介に炎を放出させる力と、エルが持つ雷を操る力が合わさり、刃に炎と雷が宿ったということだろう。

「じゃいくぞー。」

『覚悟!』

「させない・・・」アトミック・スラッシュ」

【グウオオオオオオオオオオ!!!】

リリアンが斧を大きく振りかぶり、風をも切り裂く凶悪な斬撃をお見舞いする。

「何の。」

【バシィ!!!】

「!?!」

剣で受け止めたのではなく・・・

小指一本で斧を弾いた。

「な・・・。」

「かあつ 渴!!!」

そのまま足を大きく踏み込み、リリアンの腹に氣を込めた掌底を放つ。

【ドオオオン!!!】







二人は一瞬目配せした後、小さく頷いた。

「・・・いきます。」

「いくよ、リユウくん。」

アルスは剣を目の前に掲げ、祈りを捧げるかのように目を閉じた。

対し、クルルは剣を地面に突き刺し、足を肩幅に広げて両手を前に突き出し、重ねた。

「?」

龍二は頭に“?”を浮かべ、首をかしげる。

『我が聖剣ライトプリンガーに宿りし神々の力よ。今その力を解き放ち、邪なる者を討つための聖なる加護の力を我に与え給え・・・』

『

アルスが掲げた剣から、眩い光が漏れ、

『全ての闇よ、我に集え。漆黒の暗闇よ、光を打ち消せ。私の願いよ、悪しき者、善しき者、全てを飲み込む闇となれ・・・』』

クルルの重ねた手から、漆黒の球が形成された。



二つの力によって起きた突風に怯みもせず、平然とその圧倒的な光景を見つめる龍二。

「……じゃこつちも“あれ”、すつかな。」

『……力を貸すぞ、龍二。』

【キーン】

龍二はエルを腰の鞘に収めた。

「……。」

【ザツ】

左足を一步、後ろへ下げ、腰を深く落とし、左手は鞘に、右手はエルの柄へと添える。

「……全ての力を解放する。」

やがて、エルの銀色のパーツから光があふれ出し、炎と電流が鞘から漏れ出してきた。

「……さて、終わらせるか。」

『そつだな。』

あくまで余裕の表情は崩さない……



フツと、龍二は微笑した。

「いきますよリュウジさん!!!」

「いつくよー!!!」

「シヨータムってな。」

『勝負……。』

「でやあああああああああ!!!」

「はあああああああああ!!!」

「十九の奥義……『龍閃斬・刹那』」

アルスが光を纏った剣を振り下ろし、

クルルが闇の渦から巨大な紫色の炎を発射し、

龍二が神速の速さで炎と雷を纏ったエルを抜刀し、





それでもはやグラウンドとは呼べないくらい荒廃してしまった場の中央に、三人はいた。

アルスは剣（すでに通常に戻っている）を振り下ろしたままの状態  
で硬直しており、

クルルは両の掌を前に突き出したまま硬直しており、

龍二はアルス達の背後で片膝を着いてエルを横へ薙ぎ払った状態か  
ら動かない。

三人とも若干俯いており、顔はよく見えなかった。

「……どっちが勝ったの？」

「わからない……。」

花鈴の言葉にそう返すしかわからない様子の雅。俺でさえもどうな  
ったかわからない。

さあ、どっちが勝ったんだ……？

【パタリ】

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』

俺達全員黙り込んだ。

確かに倒れた。倒れたには倒れたけど・・・

龍一、アルス、クルル、三人同時に倒れたのだ。

「……………」

これ、どうなの……?」

「……………」聞くな。」

花鈴に聞かれてもそう言うしかない俺。

で、結果発表……

引き分け。

くで・・・く

く龍二視点く

・・・む・・・？

「龍二、起きたか。」

「リュウちゃんくん。」

「ふう・・・。」

ありや？・・・目が覚めてみれば目の前に雅と香苗と久美と他一名の顔が

「他一名って何よ！？」

「読心術か。」

「・・・いや、何か思わずシツコミいれちゃったけど・・・え、マジでそう思ったの？」

「マジ。」

「ひどー!？」

他一名ならぬ花鈴の顔があった。

「……どっこいせ。」

体を起こしてみれば、辺りはすっかり元通り。地面にあいていたはずの大穴も、崩れていた校舎も、つか焼け野原だったグラウンドも元通りになっていた。因みに俺寝てたのグラウンド端のコンクリの上。

ああなるへそ、結界解いたのか。納得。

「……龍二、おはよう……。」

「おう、おはよう。」

「……何かいやに挨拶が自然なんだけど。」

「はぁ……。」

「し、痺れた……。」

リアン達が全員ペットボトルの水を飲みながら座っていた。結界内では死んだことにならんだっけ？都合いいねえ。

「う……。」

「ふみゆ……。」

隣から声が聞こえた。

「あ、おはよー。」

「……どうも。」

「リュウくんおはよ……。」



まあ何とも気のない返事で起き上がった我が家の勇者と魔王。見てみれば全員傷が無くなっていた。

『ふう・・・なかなか白熱したな。』

「白熱しすぎです・・・。」

エルの呑気な言葉にアルス冷ややかツツコミ。

『いやはや、すごい特訓だったなあ。』

「特訓じゃない!!!!!!!!!!!!!!」

ライターの一言に全員のハモリツツコミが発動した。俺とエル等一部は除く。

「も〜ホントひどい目に合いましたよ・・・もう勘弁して欲しいです。」

「でも楽しかったけど？」

意外とノリ気だったしなお前ら。

「残念・・・せつかく龍二に勝ったらデートでき」

「そつから先言ったらダメリアン!!」

？俺が何だ？

「負けた・・・負けた・・・。」

「はあ・・・。」

何か意気消沈してねスタイルとロウ兄弟。

「ま、まあ何はともあれ龍一と引き分けだったんだし、すごいことだぞお前ら！」

「そうそう！」

で、必死になって三人を励ます雅と香苗。

まあ善戦だったしな。俺も結構危なかった。

「・・・そう、ですか？」

「おう！」

「・・・ですよね！」

「うん！」

スタイルとロウ兄弟も元気を取り戻したし、めでたしめでたしと

『あ、リュウジ。』

「？」

エル？

『またいつか特訓する場合は本気で行くのだぞ？今回のように手加減などするな。』

「ええ？」

『ええではない。』

メンドクせ。

「……………」  
へ？」「

超長い沈黙の後、全員が頭に“？”を浮かべた。

まあ、ねえ？……『龍王雷閃舞』とか、あれ五億分の一の威力だったし……最後のなんてあれ四兆分の一の力で抑えないと境界崩壊してたかもしれんしなあ……

だから今回の特訓は超手加減したんだが……あれ？何か皆白いぞ？

「……………」  
あう……………」

【パタリ】

俺とエルを除く全員が再び仰向けに倒れた。

「・・・何だ？」

『さあ？』

俺とエルは頭に上に“？”を浮かべた。

「・・・俺、誰にも声かけてもらってない。」

あ、恭田いたんだっけ？

第八十二の話 Let's Rock! <後編> (後書き)

え、戦闘描写終わりです・・・題名と中身があんま噛み合っていない  
なあと思っただのは俺だけではないはず・・・

戦闘描写はむずいです。学びました。やっぱりほのぼのですね。

## 第八十三の話 龍二の日記

（アルス視点）

「ふう……。」

いいお湯でしたあ……。

「やほー。気持ちよかった？」

タオルを頭に乗せたまま和室に入ると、ファイファイも魔王もそれぞれパジャマに着替えていた。ついでに魔王、枕に顔乗つけて和んでる。

「うん、もう最高だった。」

「うん、どうでもいいけどね。」

「ファイファイ……？（怒）」

「ごめん……調子乗ってた。」

時々カチンとくるようなこと言う癖、直して欲しいんだけどなあ……。

「んみゅ……眠くなってきちゃった……。」

「え、もうっ？」

まだ八時半なのに……。

「私基本昼型だからあ……。」

「……魔王、ホントこの世界に溶け込んでるね。」

かくいうボクらも言えた義理じゃないけどさ。

「あれ〜？そういえば私のヘアブラシどこいったか知らない？」

「え？鏡台の引き出しの中じゃないの？」

とても小さいヘアブラシだから、無くすのも無理ないよね。

「え〜つと……。」

【シュー】

「……？」

？ファイファイの動きが止まった？

「……何これ？」

「ファイファイ？」

引き出しの中に何かあったみたいで、ボクも鏡台へと近づく。

「……これは……？」

引き出しから取り出したのは……

ノート？

「なあにそれえ？」

魔王も起き上がってボクの肩越しからノートを見つめた。

題名は・・・

『よい子の絵日記』

・・・・・・絵日記？

『名前 荒木龍一 11歳』

龍一さんの！？

「！これリュウくんの日記・・・！」

「・・・てゆーかこれは・・・。」

「・・・うん。」

ノートの表紙には、とても可愛らしい動物の絵柄が描かれてあった。  
・ ・ ・ 明らか子供向けじゃないですか？

「結構古いよねこれ・・・子供の頃の奴？」

「だと思っうよ？だって11歳って書いてあるし。」

でも名前に年齢書きますか普通？

「・・・ねえ。読んでみようよ。」

「ええ！？だ、ダメですよ、人の秘密を覗くなんて。」



魔王の言葉に反論するボク。絵日記っていうのはリュウジさんから聞かされたからどういうのかわかっている。今リュウジさんはお風呂に入っていて近くにいないけど、だからってこついうのはそっとしまっておくのが

「とか言っつて、アルスも興味あるんじゃないの？」

「え……。」

……

「……な、無いですよそんなの。」

「じゃこつち見て言いなさい。それと何その間。」

「……いや、でも……ねえ？」

「じゃ、私とフィフィだけで見よっか？」

「賛成ー。」

「……。」

が、我慢我慢……。

【パカ】

「あ、開いた開いた。」

「……。」



.....。

「……ファイファイ？」

「……何？」

「……これ、絵日記だよね？」

「うん……そうだよね。」

「……これ何？」

「さあ？」

丸と線だけの人と背景が物凄く幼稚というか……何で端っこに『ちえけらー』って言葉書いてあるんですか？これ絵日記というかラクガキでしょ。

「……ま、まあ読んでいきましようか？」

「そうそう、大事なのは内容だからね。」

そうですね……。

とりあえず読んでみることにした……

~~~~~

『2000年 6月14日(晴)』

今日から日記をつけることにした。理由はノリ

(ノリ!?)

まず最初に思ったことを書く。“よい子の絵日記”というどいつの子が限定された題名を考えた奴は死ねばいいと思う。

(いきなり毒!?)

まあ書いてる俺はよい子じゃないけどな。あえて悪い奴が書くとうなるか実験してみた。

(実験つてあなた!?)

でも何にも起こらなかった。しけてやがる。無駄な時間を過ごした。人生の半分を使い切った気持ちになった。

(大袈裟です。。。)

まあ嘘だけだな。

(嘘ですか!?)

今日は終わり。』

(え、これで!?)

~~~~~

。。。

「。。。」

「。。。何ていうか、まあ。。。」

リュウジさん。。。子供の頃から飛ばしてますね色々。。。

「さ、次々。」

パリリとページをめくる魔王。

「。。。あれ？」

「？どしたの魔王？」

「。。。日付が。」

「？」

「。。。2008年ってなってる。」

「。。。」

今日か？明日か？話してはじめておいて超サボって。。。！！？？？

「……日記の意味がないじゃないの……。」

「……だよな。」

「……うん。」

まあ、リュウジさんらしいといえらしいけど……さ？

「……まあ読んでみよ。」

~~~~~

『2008年 1月17日 (ハレ)』

(何でカタカナなの?)

小さい頃書いてた絵日記を見つけたんで、再び書いてみよっかな？
的なノリで開いてみたらアラびっくり、一ページしか書いてねえじ
やねえのぶざけんな昔の俺。

(いや、昔の自分に文句言っても……。)

しよーがないのでいつもの如く勝負を挑んできた久美をフルボッコ
にして鬱憤晴らした。

(ひどー!?)

今日はラーメンデイだ。チャイムが鳴ると同時に学食へと文字通り

突っ込んでいった。

(文字通り・・・?)

その時、大量の生徒が保健室へと運ばれたと聞いたが気ニシナイ。

(原因明らかアナタでしょ!?)

ラーメンをたらふく食って幸せでした。おしまい。』

(・・・何だろう、すごく周囲の人たちが不幸に見える・・・)

~~~~~

「さ、次々。」

「うん・・・。」

【パリリ】

~~~~~

『1月18日(晴れ?)

(いや聞かれても!?)

今日は雅にラーメンを奢ってもらった。

(“奢らせた” って文字を消した跡があるんですけど……。)

さすがに五百杯食ったら店長が俺の如く嬉し涙を流し、俺らを見送った。

(いえそれ多分悲しみの涙ですよ。)

そして帰り道、奇妙な奴らに会った。

(?)

勇者と名乗る娘バカと魔王と名乗る娘ボケだった。

(……なんでだろう、罵られた気分……。)

(うん……私も……。)

しかも何か異世界から来たとか抜かしやがる。こいつらは一度死んで人生やり直した方がいいと思う。

(恐っっ!!??)

でもまあ、珍しい妖精むしもいることだし信じてやるとしよう。

(虫って言うなああああああ!!!!)

(フィフィ、落ち着いて!)

勇者とかいう奴がアルス、魔王がクルル、で、虫がフィフィだとそれぞれ名乗った。

(だから虫って言うなあああああ!!!!)

まあ、仲間探してるっていつい、しばらく置いてやるか。』

~~~~~

「……第一印象、そんなだったんですね。ボク達。」

「……うん……。」

「虫……。」

【パラ】

~~~~~

『1月19日（貼れ）』

（何を！？）

学校で雅達に聞いてみたところ、どうやらアルスとクルルの仲間をそれぞれの家に置いてやっているらしい。クソめんどっちなぁとは思わず、あいつらの家に行ってみた。

（本音駄々漏れですよ……。）

まず雅の家ではスタイルという魔法使いが捕らわれていた。鎖で。

（な、何があつたのスタイル！？）

まあ軽く笑ってやった。

(悪魔……。)

第一印象、哀れ。

(哀れステイル……。)

次は久美の家。リリアンという女戦士がいきなり斧で俺に攻撃してきた。

(ええ!?)

受け止めて事なきを得た。

(すごい……。)

第一印象、寡黙。

(確かにそうですけど……。)

次、香苗。もうメンドイ。代われ。

(命令口調!??ってか誰と!?)

いきなり双子が襲い掛かってきました。ぶっ飛ばしました

(付けられても……。)

第一印象、カルマ、冷静。ケルマ、変態。

(何で!?)

その晩、無礼にも夜中に我が家に押しかけてきたアルスとクルルの仲間達。ドラマ見れなかつたじゃねえか。死ねコンチクショウどもが。

(まあ確かに怒ってましたよね……)

そんでまあホントに異世界から来たつてもんだからしゃーなしにそれぞれの家で居候させることにした。路上で野垂れ死にされても困る。

(の、野垂れ……)

つてなわけで、我が家に勇者と魔王と妖精というアホくさい奴らが居候として我が家に居つくことになりました。出費が大変だと思いが、楽しくなればいっかと思つて気ニシナイことにした。』

(アホくさいって……)

~~~~~

「次は？」

「えつと……」

【パリリ】

~~~~~

『1月25日 (晴れろ)

(命令形!?)

うむ、実に六日ぶりの日記だ。張り切っていていこうと思ったけどやめた。

(紛らわし!?)

アルス達も大分この生活に慣れてきたみたいだ。現にクルルなんておかわり何杯する気だっと思った。そろそろ息の根を止めておくべき……

(((!!!??)))

……とうとうのは「冗談」として、

(((ホッ……)))

こっそり晩飯にカキフライと見せかけてナメクジフライ入れてやった。

(((!!!!!!!!!????????)))

『マジぽ。』

(((!!!!!!!!!!!!!????????????????????)))

追伸：アルスの濡れ姿が愉快だった。』

(最後余計な上に悪魔あああああ!！)

~~~~~

「やっぱりユウくんってすごいね」

「性格も合わせて、ですけど。。。」

「っ、次行ってみよう!」

【パラ】

~~~~~

『2月3日 (あいつの頭の中が晴れ)

(誰の頭の中!?)

道を歩いていたら、不良にカツアゲされた。

(。。。。)

【プーーーーーーー】にした。』

(ちっぴいっぴいっぴいっぴい!?!?!?)


~~~~~

「・・・え、これだけ？」

「短いね。」

【パラ】

~~~~~

『2月4日（瀬の頭の天辺＝晴れ）

（怒られますからやめてくださああああああい！！！！）

今日は実にいい天気だった。そりやもう凄く。ウキウキルンルンだ。

（・・・何だろう、この罪悪感・・・。）

ってなわけで、日向ぼっこすることにした。日光を浴びてエネルギー的な物を養っていく俺。これで消費電力を節約できるわけがねえな。

（何言ってるんですか！？）

日向ぼっこは気持ちよかった。喉が渴いたんでドリンクで体力を補給することにした。が、間違っアアルスのココアを飲んでしまった。

（ああ！？あれリュウジさんが犯人だったんだ！）

飲んでしまつてうあ、やぐと思った。

二秒ほど。

(短っ!?)

文句言つてきたら実力行使で黙らせてやるか。』

(……………)

~~~~~

……文句言おうにも言えなくなつてしまいました……。

「アルス……あれ犯人私だつて決め付けたよね……?」

「……………」

魔王から殺気が上つてきました……。

「…………つ、次行きましょ次!」

「逃げたわね……………」

【パラ】

~~~~~

『2月5日 (春つらび)』

(・・・晴れなのこれは?)

今日は幼稚園児達とゴーゴードダンスを踊った。ハラシヨ!

(は、はらしょー?)

で、帰ってきてみればびっくり、懐かしき幼馴染、花鈴と再会した。

(あ、これあの時の話かあ・・・。)

見た目だけしか変わってなかった。中身は昔と変わってねえ。

(へえ・・・。)

変わってない!!バカ。

(・・・。)

まあ久しぶりだし、ラーメン食わしてやるか。』

~~~~~

「・・・カリンさん・・・昔どんな人だったんですか?」

「・・・ま、まあ気ニシナイってことで次!」

【パラ】

『2月6日 (バカ)

(天気じゃない!?)

もう絵書くのもんどくさいから文章だけにする。

(丸と線だけなのに!?)

つーか日記に絵って何よ?意味あんの?やってらんねえ。

(いきなり愚痴りだした!?)

今日はこんだけ。』

「……………って終わり!?!」

「これまた短っ!」

「……………つ、次つぎ。」

【パラ】

『2月7日（晴れ）

（あ、普通だ。）

書くことはありません。』

（じゃ書かないでください！）

~~~~~

「次いこ。」

「うん。」

【パラ】

~~~~~

『2月8日（半！）

（半！？）

よござんすね？よござんすね？

（何が！？）

丁！！

(だから何丁って!?)

.....目は半です。

(目!?)

はい博打の風景でした」

(何がしたかったんですか!?)

~~~~~

「ホントわけわからない」と書くね、リュウくん。」
「うん.....」

【パラ】

~~~~~

『2月9日 (晴れ)

今日はクルルの奴が元気なかった。どうもリリアンに言われたことが気になるらしい。

(じれって.....)

(.....)

やはりこいつのことだからスタイルと仲良くやりてえんだろっなあ。  
・・・しばらく様子を見てやるっかな。』

~~~~~

「これ、あの時の話だよな？」

「うん・・・。」

【パラ】

~~~~~

『2月10日（晴れ）

スタイルとクルルがお互い話し合った。やはり衝突は避けられなかった。

そんな俺は思わずその場に入って行ってしまった。少し後悔した。あいつ自身が決めることなのに俺が出しゃばってしまった。

（・・・。）

ただ少しだけ、少しだけ力を貸してやるつもりでスタイルにクルルの事情を話してやった。余計なお節介かもしれんが、できるならこの二人は仲良くやってほしい。

（リュウくん・・・。）

結果、クルルから聞いた話ではまだ許す範囲までにはいかなかった  
そうだと。だけど、少しずつ分かり合えるかもしれないとのこと。兆  
しが見えてきたみたいだった。

できることなら、俺もこれから微弱ながら力を貸していつてやろう  
と思う。やっぱり元気なクルルが一番だ。』

~~~~~

「……リュウくん……」

「……あいつなりに結構考えてるんだね。」

「うん……。」

【パラ】

「……あれ？日付が飛んでる。」

「……サボったんですね。」

~~~~~

『2月30日（曇り）』

アルスとフィフィが珍しく喧嘩した。

（……これ……）

理由はアルスがフィフィの小さな腕輪をうっかり踏み潰しちゃった  
んだと。まあ踏んだのも悪いし、ほったらかしにしたのも悪いし、



どっちもどっちだな。

( ..... )

しかしまあ、このままじゃファイファイの奴がかわいそうなんで腕輪を修復してやることにした。ただやってみて思ったこと。

超ムズイ。ジグソーパズルなんざよりも集中力を消費する作業だった。

( リュウジ..... )

晩、アルスがファイファイを探しに行った。まああいつらならほっておいても大丈夫だろう。俺が出来ることといやあ、あいつらの分のメシを作ってやって風呂溜めてすぐ入れるようにしてやるくらいだ。つかそれもあるが、腕輪の修復難しい。

( ..... )

しかし、帰ってくるのが遅い.....たまらず連絡かけられる奴ら全員に搜索を頼んだ。俺も行きたかったが、あいつらが帰ってきた時にメシとかどうすればいい?そう思ったんで留まった。今度あいつらにメシの暖め方教えてやらにゃあならん。

しばらくし、後輩の明から連絡が入った。アルスらしき人物を目撃した情報を得たとのこと。本来なら一安心するべきはずなのに、何か胸騒ぎを覚えたんですぐ飛び出した。

自慢の勘で倉庫街まで来て、許されざる光景を目にした。

ポケドモが、アルスとファイフィをこんなにまで傷つけやがって。許さん許さん許さん許さん許さん。許したくない。

(リュウジ……さん……)

……だけど殺すのはまずい……かろうじて残っていた理性を総動員させて半殺し程度に済ませてやった。幻覚も見せてやった。二人の痛み、思い知れって奴だ。

真夜中、皆が家で待っていた。今日は泊まらせてやった。お疲れ！。アルスが目覚めた時、あいつの心中を知った。勇者としての自分しか見てくれない周囲に、不満を抱いていたとか何とか。

少なくとも、俺らは普段笑っているあいつを見ている。あいつ自身を俺らは知っている。あいつはあいつだ。そう話してやった。まあ所詮人生まだ半分も生きてない若輩者の戯言だけだな。

(……)

朝、どうにかファイフィの腕輪も ロンアルファでくつつけた。あしんど。もうジグソーパズルは見たくねえわ。

だけどまあ、アルスもファイフィも仲直りできてよかったよかった。』

~~~~~

「リュウジさん……。」

「……。」

「……よかったね、二人とも。」

「何が？」

「リュウくん、アルス達のことホントに心配してたっていうのがわかったでしょ？」

「……うん。」

「……へへ」

「じゃ、次いこっか。」

【パラ】

~~~~~

『3月1日（曇り）』

あ、クルルのチョコ食っちゃった。

（）（）いきなりかい！！（）（）

『ま、気ニシナイ。』

（）（）（）（）（）（）

~~~~~

「……。」「せ、せっかくしんみりしてたとなのに……。」

「台無し……。」

「リュウくん・・・怨むよ・・・。」
【パラ】

~~~~~

『3月7日（ラーメン）』

（ここでラーメンきた!?!）

今日は特に何もなかった・・・と思いきや

（?）

空から何か流星みたいなのが降ってきて、一人真夜中山へと向かった。

そこで何か剣拾った。

（まさか。）

生きてる剣だとよ。もうファンタジーは我が家にいる勇者と魔王と妖精で十分だったのに。

（エルのことですね。）

っーわけで、埋めた。

（埋めた!?!）

すぐ掘り出して朝になってから事情を聞いた。何でもこいつ、エルも異世界から来たらしいが、アルス達の世界とはまた別のところらしい。どうでもいいですYO！

(何最後のノリ!?)

まあ売り払ってもよかったんだが、いさせてくれと懇願されたから包丁代わりとして使わせてもらうことにしてやった。ラッキー。

(エル・・・不憫・・・)

さ、寝よ。』

~~~~~

「じゃ次。」

【パラ】

~~~~~

『3月8日 (飴)

(漢字が違うのでは・・・?)

あいつらと特訓した。俺対アルス達多数。

(あ、これこないだのだね。)

超手加減して戦ったが、ここまでやるとはな。うむ、よかよか。

((.....))

ま、新しいお仕置き技じゃなかった雷発射も覚えたし万々歳だ。』

((お仕置き技!?)((

~~~~~

「.....あれで手加減って.....」

「.....むゆ.....」

「.....ま、まあまあ.....次いこっか?」

【パラ】

「.....あれ?これで最後みたい。」

「どれどれ?」

~~~~~

『3月11日 (晴れ)

まあ今日は特に何もなかったなあ。

( 無いんかい！ )

日記もそろそろ疲れたし、これで最終回にしようかね？

( つ、疲れたって・・・ )

最後に言いたいこと。

アルスとクルルとフィフィとエルが来てから毎日楽しくてしょうがねえ。

( え・・・ )

特に三人の寝顔を眺めるのが。

( ...何だろう、この違和感。 )

ま、これからもよろしくってことで。チャオ』



「 ..... 」  
「 ..... 」  
「 ..... 」

【パタン】

読み終えて、ボクらは日記を閉じた。

「……何ていうか、リュウジさんの本音を見た気がする。」

「うん。」

「私もそう思った。」

「……ただ、一つ思うことは……。」

「……リュウジさんって思ったらすぐに行動する人ですね。」

「そだね。」

「うん。」

まあ前々から気付いてましたけど……。

「……でも何かおもしろかったね。」

「だねえ。」

「まあこれリュウくんに見られたら何言われるかわかんないけどね。」

納得。

「何してんだお前ら？」





ボクらは夜中にこっそり説教を受けました・・・クスン。

くおまけく

『・・・私は今回出番無いのか・・・。』

エルは龍二の部屋で一人(一本)さみしく呟いた。

第八十三の話 龍二の日記（後書き）

ところどころあえて日付をずらしました。理由はありません。

それと下弦先生、ごめんなさい。

第八十四の話 彼、敵に回すべからず（前書き）

久々にあの人登場

## 第八十四の話 彼、敵に回すべからず

〔龍二視点〕

「校長が怒ってただ？」

「うん。」

お昼、屋上でいつものメンバーで弁当つついていたら、香苗がそんな話題を出した。んむ、チャーシューうまい。

「別に怒られるようなことはしとらんけどな？」

「私はあると思うな〜。。。。」

「はにゃ？」

何故に？

「龍二・・・アンタわかんないの？」

「？」

「腰よ、こ・し。」

「腰？」

くねってみた。クネクネ、クネクネ、クネクネ・・・

.....

「・・・別に何ともないが？」

「誰が腰振れって言ったのよ。腰に付けてるのがあるでしょ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エル？

「エルがどうしたよ？」

『私は何かした覚えはないぞ。』

「・・・エル、アンタ自分の体自覚してる？」

『当然だ。切れ味なら例えどのような剣でも負けん。』

「うん、性能のこと聞いてるんじゃないよ？第一それこないだ実証したから知ってるよ？」

「おそらく校長先生が言いたいのは・・・明らかこれだろうな。」

久美が一泊置いた。

「学校に剣を持ってくるなということだろう。」

？そうなのか？

「まあねえ。銃刀法違反してるし、わかるっちゃわかるんだけど・・・

。。。」

『そのようなこと、知ったことか。』

「いや・・・アンタがよくても学校側がダメなんだって。」

「うーん、演劇部の道具って言えば通用しそうだけど・・・真剣だとな。」

「いずれバレるということだな。」  
「……………」

ふうむ……やはり法律には逆らえないってことか。

「ならどうするんですかリュウジさん？」

「エルお留守番させとくの？」

『一人はさみし……いや、一人では退屈だぞ？』

今一瞬本音出たぞ。

「それに相手は校長先生だからなあ……どうするよ？」

「黙っとけ影薄。」

「ひどいひどいひどい——————!……!」

うるさいバカはほっておこう。

……………。

ならあの手しかないかな？

「……………ん、じゃちょっとくら行ってくるわ。」

「へ？どこへ？」

「色々」

俺に向かって法律には逆らうな？

無理無理

〈校長視点〉

・・・何ですかこれは？私には名前さえ出ないということなのでし  
ようか？ホント久しぶりの登場だというのに・・・

ふう・・・まあいいわ。にしても、荒木くん・・・また問題持ち込  
んできて・・・

しかも銃刀法違反って・・・理事長に知れたら大変じゃないの・・・  
理事長の耳に入る前に何とかしないと・・・

そう思案にふけながら校長室へ入るためにドアを

【ガチャ】

「お？おかえりー。」

【バタン】

閉じた。

「・・・。」

今誰かいましたよね？明らか。今だけ名前言いたくない人いました



よね？いや、いない。いないいないいないいないいないいない

【ガチャ】

「お？おかえりー。」

・・・いた。

「・・・何をしてるんですか荒木くん・・・。」

「見てわからんか？座っている。」

「机の上には座らないで欲しいんですが？」

てゆうーか普通に胡坐かいて座ってるし。

「・・・で？何の用ですか？」

「これ。」

【チャ】

差し出されたのは・・・

ああ、今問題になってる剣のことですね。

「それがどうかしましたか？もしや、この学校に来てる間だけ預かって欲しいとか？それなら最初から持つてくるのはやめ「持ち込み

許可。「・・・は？」

・・・今、何て？

「これ、持ち込むの許可して欲しいんだけど。」

「・・・な、何を・・・。」

「いやこれただの剣じゃないからさあ。いいじゃん？減るもんじゃなし。」

・・・

・・・頭にきた・・・。

「あなたいい加減にしないで！ただでさえ今までの暴挙もあるのに、法律違反など言語道断ですよ！」

「えゝ、ダメか？」

「ダメですダメ！！大体、武器など何に使うというのですか!?!？」

この人、ホント犯罪者の道歩みそつで恐い！

「ちえゝ。」

・・・ふう、今回は分かってくれたみたいで

「サリオピューランド。」

!!!!!!!!!!!!??????????

「そついやこないだイベントあったよな？」

「・・・何で私にそれを言うんですか？」

「いや、だってねえ・・・」

舞台最前列でキ イーちゃん思いつきり呼んでたからなあアンタ。」

!!!!!!!!!!!!??????????????

「いやね、別にさ、個人の好みって人それぞれだからどうでもいいんだぜ？うん、大して興味もないし。」

でもさあ校長・・・クールでキャリアウーマンっつーか冷静な女性として通しているアンタが、実は超キ イーちゃんファンってことが世間に知られたら皆どんな反応するでしょうかねえ？」

うぐう・・・!!

・・・はっ！





ショックが大きすぎて体が動かなかった。

「……いやぁにしても……今年で二十五歳の女性があそこまで  
歓喜の叫びを上げるとは思わな」

「いやああああああああああああああああ！！！！！！」

……も、もう………無理………。。。

「わ……わかりました……なら、一週間に三回まで持ち込みを  
許可し」

【カチッ】

『んも〜キ イちゃんかわい！一生ランドから離れたくなああああ  
い！！！！！！』

「にゃああああああああああ！！！！！！???」

「じゃ、これ放送室に持ってって」

「いつでもその剣持ってきなさい！！もういくら法律無視しても構  
いませんから！！！！（泣）」

ま……負けた……完敗です……。

「サンキュー！。恩に切るぜ。」

「……はい……（泣）。」

ああ……理事長に何て説明を……

！！

そうか……その手が……！

「あ、そうそう。」

さっき理事長に“頼んで”すでに剣の持ち込み許可してくれたから。

「

……

“頼んだ” “脅し済み” …。

「じゃあな。」

【ボタン】

「……………」

神様神様……どうか荒木くんが地獄に落ちますように……落ち  
ますように……(泣)。



（龍二視点）

『・・・貴様、ホント容赦ないな。』

「まあな。」

まああの校長のことだし、あらかじめ真っ先に電話で理事長に脅し・・・頼んでおいてよかったぜ。

校長、ホントサ リオ好きだよな・・・まあ喋ってあの人の反応見るのも楽しそうだけど、これはこれで使えるし、黙っておいてやるか・・・

まだ、ね・・・【ニヤリ】

『まあ・・・くれぐれも敵を作りすぎないように。』

「へいへい。」

もう遅いだろうがな。

「さ、そろそろチャイム鳴るからいくぞ。」

『ああ。』

〈余談〉

その日から、校長から教職員全員に『荒木龍二の剣について触れるべからず』という連絡が行き渡り、誰もエルのことについて問題視しなくなっただろうな。

ただ一つ、学校中で改めて認識したこと。

それは、

『荒木龍二を絶対に敵に回すな』

とのこと。

第八十四の話 彼、敵に回すべからず（後書き）

えゝ書いてて思いました。

鬼だなゝ龍二・・・。

そうそう、人気投票、まだまだ受け付けてまゝです。ふるってご参加  
ください 詳しくは第七十の話にて

第八十五の話 後輩達の雑談(前書き)

今日は後輩s中心?のお話です。

## 第八十五の話 後輩達の雑談

（絵里視点）

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「あ、じゃ私このショートケーキセットで。」

「私はチョコレートケーキセットでー。」

「かしこまりました。」

・・・あ、どうもです・・・絵里です。お久しぶりです。

今日は学校が短縮授業だったので、帰り道に明ちゃんと行き付けの喫茶店で一緒にスイーツを食べることにしましたんで今こうしています。

「うーん！今日はすいてていいねえ、この開放感！」

「そ、そうだね。」

私達一年生だけ短縮で、それも平日の昼過ぎだから人は数える程度で、ほとんどいない。放課後になると、ここは満席になるくらいの大人気をほこる。

確かに、ここのケーキおいしいしね。

「・・・と、こ、ろ、で、え、・・・絵里？」

「・・・な、何？」

ニヤリと笑った明ちゃん・・・この顔は、絶対何か企んでる顔だ・・・。

「・・・あれからどうよ？」

「へ？な、何が？」

「とぼけない。荒木先輩との関係よ。アルスさんが行方不明になって以来、何か進展あった？」

「・・・あ・・・。」

「・・・。」

「・・・その顔、さては・・・全然進展ないな？」

「・・・うん・・・。」

「・・・たあ〜！」

目に手を当ててイスの背もたれに倒れかかる明ちゃん。そ、そんなオーバーリアクションとらなくても・・・。

「相変わらずアンタって奥手だね〜。恥ずかしがり屋というか。」

「・・・そ、そんなんじゃないもん。」

「じゃなあに？」

「う・・・。」

・・・正直あの日以来、全然荒木先輩と話してないし・・・かと言ってこつちからわざわざ話しかけに行くのも・・・何というか・・・その・・・。

「・・・はい時間切れ。やっぱ恥ずかしいんでしょ。」

「じ、時間切れ！？そんな設定あったの!？」



「はい・・・そんだけ。」

ど、どんだけ？

「どうもあの人は弟子とか取らない主義らしくって・・・。」

「ま、まああの性格じゃあね・・・。」

どこまでも自分の道を通つて走るっていう印象が強いしねあの人・・・。

「あゝでも弟子入りしたかったな。昨日だって校長先生の弱味握つて銃刀法無視しちゃったし。」

「そ、そうなの？」

「知らないの？何でも校長先生、泣きながら学校の全職員に荒木先輩の剣について何も触れるなって言ってたし。」

「へ、へえ・・・。」

「おまけに理事長までも電話で脅しかけたらしいよ？」

・・・ホント何したんだろう、先輩・・・。

「まあ私のことはいいけどさあ、アンタ早く荒木先輩に接近しなさいよ。」

「そ、そんなこと言っても・・・。」

話が戻っちゃった・・・。

「お待たせしました。ショートケーキセットのお客様は・・・。」



あ、ケーキ来た。

「あ、私です。」

「はい。チョコレートケーキセットもお待たせしました。」

「どもです。」

「ごゆっくりどうぞ。」

うん、相変わらずおいしいそうなケーキだなあ

「いただきます」

んむ・・・おいし

「・・・アンタってホントケーキ食べてる時は幸せそうよねえ・・・」

「んむ・・・そう?」

「うん、そう。」

そう言ってチョコレートケーキを一口食べる明ちゃん。

そんなに私、ケーキ食べてる顔幸せそうかなあ?

あゝ・・・でも、ケーキおいし

「あれ、君らは・・・。」

？

「はい？」

声のする方を振り向いてみた。

・・・・・・・・・・。

「よお。あん時以来だな」

そこにいたのは、髪を金髪に染めた男の人が……。

「……明ちゃん、明ちゃん。」

「何？」

できる限り小声で明ちゃんに声をかける。

「この人誰だっけ？」

「……え〜つと……わかんない……誰だっけ？」

「私も知らない……あ、でも思い出せそうなんだけど……。」

「う〜ん……どっかで見覚えが……。」

「え〜つと……。」

・・・・・・・・・・？

「……無理に思い出そうとしなくていいから……ね？」

……あ。

「う、ごめんなさい！つい話し込んで・・・！」  
「・・・グスン・・・。」

あああな、泣かせちゃったよお・・・。

「・・・男のくせにメソメソしないで欲しいんですけど。」

「あ、明ちゃん！」

「うおおおおおおお！！！！俺は、俺はああああああ！！！」

「黙れ影薄。」

【ズゴオオオン！！】

「ハゲラツチヨツツ！！！！？？？？」

【ドロン！！】

へ・・・・・・・・・・・・・・・・？

「まじったく、営業妨害だろーが。」

「あ、あの、いくらなんでも蹴り飛ばすっていつのは・・・。」  
「気ニシナイ。」

あ……。

「荒木先輩じゃないですかあ！お久しぶりです！」

「おう、明に絵里じゃん。」

「覚えててくださって光栄です！」

さつきまで金髪の男性がいた場所に、荒木先輩とアルス先輩、クルル先輩が立っていた。

……って！

「ちょ、先輩！？な、ななな名前……。」

「は？」

「絵里どしたの？」

「だ、だって……下の名前でなんて……。」

そんな親しくもないのに……。

「何だ？名前呼ばれるのがそんないやか？」

「え！？い、いや、そんなわけじゃ……。」

「ならいいだろが。俺の勝手。」

あ、あうう……何か恥ずかしいなあ……／／／／／／

「こんにちはーアキちゃん！」

「せ、先日はどうもありがとうございました。」

「い、いえ、あの、そんな畏まらなくても……。」

アルス先輩って物腰やわらかだなあ……。

「アルスさんとクルルさんも元気そうですね。」

「うん！それが取り柄だから！」

「時々うつといがな。」

「ええ！？」

「嘘。」

……荒木先輩……からかつの好きですね……。

「ん。とりあえず座るか。」

「はい！」

「はい。」

そう言っつて、隣のテーブルに座った荒木先輩達。

「……ところで先輩……あの人は……？」

「誰のことだ？」

「えっと……さっきの……。」

蹴り飛ばされた人って……。

「気ニシナイ。さ、注文とるか。」

え、華麗にスルー！？

「じゃ私チヨコムースっていつのー！」

「えっと……じゃココア。」

「フルパでいくか。」

あ、フルパとはフルーツパフェの略のことですよ……誰に説明してるんだろ、私。

「すんまそーん。」

「はい、ご注文ですか？」

「おうよ。これとこれとこれ、頼むわ。」

「かしこまりました。」

ちゅ、注文早……

つて、さっき吹っ飛ばされた人には無反応ですか店員さん？な、何かある意味度胸が座ってるというか何と……。

「今日は荒木先輩達だけですかあ？」

明ちゃんがチョコレートケーキをフォークで口に運びながら聞いた。

「んむ、他の連中は忙しいようだな。」

「ってなわけで、私達だけ抜け出てきたのー。」

「……何だか罪悪感わくんですけど……。」

………あれ？

「……短縮授業って一年生だけなんじゃ？」

「へ？」

「ああ、そつだが？」

「「えええ!!??」」

アルス先輩とクルル先輩が叫ぶ。

「はっはっは、今さらサボったってどうってこたあねえぞ。」

「・・・今度学校行った時にはもつと強力な壁張らなきゃ・・・。」

「カグラさんのチヨーク・・・恐い・・・。」

サボったんだ・・・荒木先輩・・・ってアルス先輩とクルル先輩は  
知らなかったんですね・・・ってチヨークって何？

「あれく？そういうえばファイフィちゃんは？」

「ああ、あいつならここだ。」

そう言って自分の頭をモシヤモシヤとかく荒木先輩。

「イダイイダイイダイ!？」

あれ、頭から声が・・・

【ブヨーン】

「・・・ちよ!?!何すんのよリュウジ!」

あ、出てきた。

「人の頭の上で寝てる奴が悪い。」

「いいじゃないの。気持ちよかったんだから。」

「涎付けたらキンチョールかますぞ?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……。」

て、テーブルの上で……土下座……。

「あははー、ファイフちゃん可愛いねー。」

「?あれ、アンタ達は……。」

「あ、お久しぶりです。」

つい頭を下げてしまう私。こういう口調の人って頭下げたくなるんだよねあ……小さいけど相手。

「……え、えっと……あ、あん時は……どうも……。」

「ちゃんと言え。」

「ち、ちゃんと言ってるで「キンチョール」。あの時は本当にありがとうございました。」

……さ、殺虫剤突き付けられて冷や汗かく妖精って……。

「まったく相変わらず素直じゃねえのなお前。」

「……うう……。」

「ま、まあまあリュウジさん……。」

……上下関係がはっきりしてるなあこの人達……。

「フルパ、お待たせしました。」

「お、来たか。」

!??て、店員さんまでフルパって……!??





・・・

ホントに親子みたいなんですけど・・・。

「仲いいですね〜四人とも」

「あ、明ちゃん・・・。」

失礼だよ・・・。

「ん、まあな。」

「でしょ」

「・・・／／／／／」

「ガブリ・・・うま」 サクランボかじった

フィフィちゃん、それ返事じゃない。

・・・でもホント仲いいなあ・・・。

「・・・絵里、アンタ負けてるよ？」

「え・・・／／／／／／／／／／／／／／／／」

た、確かに・・・負けてるけど・・・

「パグパグパグパグパグパグ・・・うめ。」

・・・

「……ま、まあ……まだチャンスはあるから……ね？」  
「……そう思うんならそれでいいけどさあ……。」

だってさ……

今だけはこういう荒木先輩見ただけで、何となく幸せだから。

……

あれ？そういえば何か忘れてるような……気のせい？

第八十五の話 後輩達の雑談（後書き）

工「……私が一言も喋ってないのだが……。」

作「そだね。」

工「なぜだ。」

作「後輩達はお前が喋るってこと知らないからな。黙らせておいた。」

工「……しかし、まったく私が出てないというのは……。」

作「そう毎回毎回出番があると思うなよ。」

工「し、しかしだなあ……。」

作「はい話は変わりますけど……人気投票、前回もお話したとおり、まだまだ受け付けております。」

工「読んだら票を入れる。書いて力チつとすればすぐ済む話だ。」

作「失礼なこと言うなボケナス。それでは。」

工「さらばだ……私の出番がありますように……。」

第八十六の話 お風呂へレッツラゴー (前書き)

今回のお話は・・・書いてた俺が赤面しました／＼／

## 第八十六の話 お風呂へレッシュルームー

（アルス視点）

.....

「いやさあ・・・な？俺もさ、あんまりいいことできさ、一々気力使いたくないわけよ？分かる？」

「はい.....」

.....

「でね、俺が言いたいことは一つだけなんだわ。いつか言ったよな？風呂で暴れるなって。」

「で？あの惨劇は何さ？」

.....あう。

「返す言葉もありません。」

「ほお、そうかそうか・・・反省の言葉もなしか。」

.....

事の発端は、数分前・・・

～回想中～

『アルス～。』

『はい?』

夕食後、お風呂を溜めに行くようリュウジさんに言われたのでシャワーで風呂桶を流していると、魔王が戸を開けて入ってきた。

『あのさあ、私のヘアピン知らない?ピンク色の奴。』

『いえ・・・リュウジさんとファイファイには聞いたの?』

『二人とも知らないんだって～。ねえねえ一緒に探してよ～。』

『え～?今忙しいんですけど・・・二人に頼んでよ。』

『だって二人とも自分で何とかしろって言うんだもん。』

頬をプクッと膨らませて不満げに言う魔王。いえ、可愛いんですけど・・・ワガママはよくないです。

『ねえねえアルス～。』

『・・・ダメです。そういうのは一人で解決してください。』

『え～!?!?』

『え～じゃないです!』

まったく・・・ふう。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

えい！』

？

【バシヤ】

『！？きや！』

な、何！？

『えへへへ 反応かわいい』

振り返ってみれば、洗面器を持った魔王がイタズラっ子の如く笑いながら立っていた。

・・・何されたかは一目瞭然です。水かけられました・・・びしょ濡れ。

『・・・魔王？』

『にゅ？』

『水よ、降り注げ！』



【バシャアアアアン!!】  
『ぴぎゃああああああ!!!!』

お返ししてやった。魔法で。

『むゃ〜!やったな〜!』

『おあいこです!』

『ならこっちだって!』

『何の!!!!』

【ビシャバシャブシャアアアアドゴンバゴン!!!!】

〜五分後〜

『ふう、ふう、ふう、ふう』  
『はぁ、はぁ、はぁ、はぁ』

・・・お互いずぶ濡れ。

『じわで』

『...!!!!』

『オイコラナニシテンダテメエラ。  
【ビクウ!!!】』

同時に飛び掛ろうとしたら、ひどく無機質な声で呼ばれてその場で停止。少しの間を空けて、錆びた蝶番のごとくギギギと戸の方を二人同時に振り返った。

顔上半分が暗くなっているリュウジさんが腕組みしながら立っていた。

〜回想終了〜

・・・で、ボクらのせいでお風呂場がいい感じにめちゃくちゃになっ  
てしまい・・・蛇口とか見事に粉碎してたし・・・。

そしてボクらは着替えた後にリビングでリュウジさんに説教・・・  
もとい今拷問を受けている。

何故か？それは正座してますから。

…… “ギザギザの板の上”で……。

「でえ？何か言いたいことあるかなあアホクルルさんよお？」  
「ひっ!？」

今のリュウジさんは怒った顔していません、むしろ笑顔です。ニッコニコの。

ただ、それが余計に+体中から殺気を立ち上らせてる+額の三箇所  
に血管が浮いてるのがとてつもなく……怖い……。

「え……えつと……その……始まりは軽い気持ちっていうか  
……。」

「へえ、軽い気持ちかあ……」

そんな気持ち程度で我が家の風呂を壊すか、なあああ!?!?!」

【ギユウウウウウウ!】

「みつぎゃあああああああああ!?!?!ごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいあああああ!?!?!」





とにかく板から脱出した。あ、あ、足が痛い痛い痛い……。

「めんどくせーんだがなあ……しゃーねえだろ？このまま風呂入らないのは不潔だ。」

「まあ、そうですけど……セントウ？」

「行きやわかる。」

そう言ってさっさと準備し始めたリュウジさん……。

「何してんだ、お前らもさっさと準備しな。」

「は、はい！」

「うん。」

とりあえず準備……あ、足痺れる……（泣）。

〈外〉

外は少しひんやりしていた。未だ痺れる足を引きずりながら、暗い夜道を洗面器を持ちながらリュウジさんと一緒に歩くボクら……足痛い……。

「リュウジ？」

「何だファイファイ？」

ファイファイはちゃっかりリュウジさんの頭の上に乗っている。楽でい

いですねこっちは足痛いのに……。

「エル、どうして置いてきたの？」

「ん、置く場所ないし、邪魔くれになるから。」

「……………」

— “人”、じゃなくて— “本” 寂しく部屋で泣いている剣が想像で  
きた。

「リュウくん。セントウってどんな場所？」

「公共の風呂場。」

「こ、コウキョ……？」

「皆が使ってる風呂。」

頭に疑問符を浮かべる魔王に丁寧に説明するリュウジさん。お疲れ  
様です。

「お、あそこだあそ「リュウちゃん！」「コブラツイスト！」

見えてきた煙突のある大きな建物をリュウジさんが指差した途端、  
聞き覚えのある声が聞こえてきてリュウジさんに誰かが飛び掛った。

うん、言わずもがなカナエさん……。





「・・・仲間だね。」

「・・・仲間ですね。」

「へ？・・・てことは魔王様達も？」

ええ、見事に。

「・・・お仕置きされた？」

「お仕置きというより、説教されました。カナエさんに。」

いいなあ・・・。

「私達なんて・・・ね？」

「・・・うん。」

「え？」

・・・説教＋拷問ですから・・・。

「お〜いお前ら。さっさと銭湯入るぞ。」

「あ、はい・・・あの、カナエさんは？」

「立派な最期を遂げたぞ。」

最期！？

「リュウ兄ちゃん、一緒に入ろう！」

「・・・リュウ兄、入る。」

「またいつかな。」

「え〜!？」

いや、ダメでしょ普通。

「リュウちゃん！何なら私と」

「今声が聞こえたが誰だ？」

「え、だからリュウちゃ」

「幻聴だな。今度耳鼻科行くか。」

「……………グスン。」

さ、さすがリュウジさん……容赦ない。

「行くぞ。」

「あ、はい。」

一人先に布（のれんっていうんだって）をくぐってセントウに入ったりリュウジさんに続いて、ボクらも中に入った。

木造の建物の中は……結構広い。中央に台のような物があった、そこには皺だらけのお婆さんがうつらうつらしながら座っていた。左右の入り口に赤と青の布がかけられている。

「あれ、番台っていうのよ。」

「バンダイ？」

「カタカナにするとどこかの会社みたいね。」

カナエさんが中央の台について説明してくれた。

「おっす、婆ちゃん。」

リュウジさんがお婆さんに話しかけた。

「・・・おや、竜彦さんかい？」

「違う。」

「今日はお仕事で？」

「いや。」

「そういえば冷蔵庫の中が空ですよ？」

「そう？」

「つい最近、山の向こうに大きな岩が。」

「婆ちゃん、それ竜彦爺ちゃん。」

「そうかいそうかい、竜彦さんも立派になったねえ。」

「竜彦爺ちゃん、今年で八十だぞ。」

「何人で？」

「え、つと三人分。」

「じゃ私は五人分で。」

「はいはい。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

え？何今のやりとり？え？え？

「さ、風呂入るぞ。」

「・・・リュウくん、今の何？」

「？何が？」

「え、その・・・。」

・・・・・・・・・・。

「・・・やっぱ何でもない。」

うん、知らない方がいい時もあるよ魔王。

「さ、行くぞ二人とも。」

「あ、はい。」

「ええ！？僕ら魔王様と一緒にではないのですか!？」

「黙れ行くぞケルマ。」

「いやだああああ!!!」

“男！”と書かれた布の向こうへとリュウジさん達男性は消えていった(ケルマはカルマに引きずられながら)。

「・・・じゃ、私達も行くのか?」

「そ、そだね。」

「はい。」

「はい。」

【コクリ】

「・・・あ、そっか私小さすぎて数に入らなかったんだ。」

・・・さっきリュウジさんが“三人”って言ってたの気にしてたんだファイファイ・・・。

そういえば、“男!”でもそうだけど、何でこっちは“女”って書かれてるんだろう・・・普通に“男”とか、“女”でいい気がする・・・。

↳ 男湯内部

↳ 龍二視点

【ザブーン】

「あゝ気持ちええゝ．．．。」

風呂の淵に持たれかかり、清々しい気持ちのままゆったりくつろぐ俺。たまらんなゝこのでかい風呂の開放感がなんとも．．．。

「．．．リュウジ、オッサン臭いですよ。」

「そうか？」

で、隣にはカルマとケルマがいるわけで。

「．．．何で．．．男と女が分かれてるんだ．．．。」

．．．何さつきからブツブツ言ってんだケルマ。

「．．．そっぴや前々から思ってたんだが、お前ら最近どうよ？ カナ工達と暮らしてて。」

「ええ、よくしてもらってます。今じゃ普通に生活できてますよ。」

「まあ．．．置いてもらって結構長いし．．．。」

ふむ、慣れって奴か。

「カナエさんって、料理うまいんですよ。最近では僕らも手伝って  
ます。」

「まあ、伊達に二人の姉妹の面倒見てねえからな。」

「なるほどね・・・ってあれ？そっついえばカナエさんのご両親って・  
。。。」

「・・・それは俺からは言えねえな。ま、いずれ本人が話すのを待  
つとけや。」

「???」

とゆーより、あいつの家庭事情は俺でもよくわかってねえってのが  
本心だ。

「そうそう。そっちこそ魔王様と勇者との生活はどうなんです?」

【ザバツ!】

おおー、ケルマが身を乗り出したぞおい。

「まあ、結構面倒見るのは大変だが、毎日がおもしろくて嫌じゃね  
えな。」

「魔王様と勇者、仲良くやってるんでしょ?」

「ケンカする時もあるが、それなりに。」

「ふん。」

仲が良い証拠だな。

「・・・魔王様・・・ポツ。」

「キシヨイ。」

「ええ!」

おお、俺とカルマの声が八モったな。

「ふう……にしてもたまにはいいな、銭湯も。」

「ホントですね……。」

俺らは心地よい風呂の温度を満喫していた。

「くらくアルス！」

「ぶわっ！やったなー！」

「こらこら暴れないの。」

？……ああ、女湯か。

「魔王様……はしたない。」

「何だ、城でもああか。」

「はあ、僕ら以外誰もいない時とかにはよくイタズラとかしてたものです。」

「周りに部下いる時は威厳を保っていたんですけど……。」

クルルが威厳ねえ……まったくねえな。

「ま、楽しけりゃいいんじゃない？」

「まあ、そうですね。」

ふむ、あいつらのはしゃぐ声を聞きながらのんびりするといつのもまた一興……。

「ねえねえカナエさん。」

「？何、クルルちゃん？」

「あのね、どうやってたらそんな胸大きくできるの？」

「「！！！？？」」

？何か口ウ兄弟が同時に固まったが……。

「えつとねえ……よくわかんないなあ？」

「え〜わかんないの？」

「魔王、そんなこと聞くものじゃ……。」

「そういうアルスだって興味あるんじゃないの？」

「な、ないよ！」

「うっそだ〜こんな小さいくせに〜。」

「ちよ！？触らないでくださいよ！」

「可愛いよね〜アルスの」

「そういうクルル姉ちゃんだって小さいよ〜？」

「……小さい。」

「ひゃあ!？」

「あはは クルルちゃんも美紀も人の胸は触るもんじゃないわよ？」

「ま、触っても感触ないでしょうけど。」

「ファイファイちゃんもある方かな？」

「フフン、当然」

「体小さいから意味ないと思うけどな〜。」

「クルルうっうっうっ!!!それを言うなああああ!!!」



『……………』

あります。ロウ兄弟のみならず周囲のオッサンあんちゃん同時に固まったまま動かないが？

「おい、カルマ〜ケルマ〜？」

「……………」

……………。

「おい？」

「……………」

……………。

返事がない、ただの屍のようだ。

【ザバア】

「……………リュウジ、カルマ、僕ちちょっとトイレ行きたくってきた。

あ、ケルマ立ち上がった。

「そうか、行ってこい。」

「……………」



？何だ？周りの男連中から変な（殺気と嫉妬の）目線が送られてくるんだが。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ま、気ニシナイ あゝ気持ち。銭湯最高だな。

（風呂上り）

「あゝ気持ちよかったぜえ」

「最高でしたね。」

「・・・見たかった。」

何をだケルマ？

たつた今、風呂から上がって着替え終えたところだ。女性陣はまだ着替え中。

「ふう・・・お待たせ三人とも。」

お、出てきたか。

「リュウくん、気持ちよかった」

「・・・ノノノノノノ」

「でもって楽しかったね」

「【コクリ】」

・・・あゝ・・・何でアルス顔真つ赤なんだ？湯当たりか？

「・・・触られた・・・。」 超小声

「は？」

「！！！！？？い、いえ何でも。」

？何なんだ？

お、そつだ。

「ほれお前ら。」

『？』

全員にある物を配った。

「？なあにこれ？」

「牛乳。」

そうそう、銭湯と来たらこれだろ。

「いいか、これの蓋を開けて、腰に手当てて肩幅に足広げて一気に飲むぞ。」

「え？何ですか？」

「ツベコベ言うな。やるつたらやる。」

これをせずに銭湯来たと言えるか？否、言えんよ。

「よおし、やつちやうか」

「・・・分かんないけどボクも。」

「私も」

【コクリ】

「僕らもやるか。」

「そだね。」

「・・・私の分は？」

あ、そだった・・・まあなこつたるおと思って、ファイイの分用意しといたけどな。

「ほれ超ミニサイズ牛乳瓶。」

『あつたんかい！？』

おおお、全員のハモリツツコミ・・・俺の手先なめんなよ。

「そんじゃ行くぞー。」

【パカンパカン】

全員一斉に開け・・・

【ゴツゴツゴツゴツゴ・・・】

『・・・プハア!』

一気に飲み干す。これ!これ最高。

「あゝ最高だねこれ!」

「・・・悪くないかも・・・。」

「いいわねこれ。」

うんうん、アルス達も満足したらしくてよかよか。

「いいね、セントウ!」

「だね!」

「ですね。」

・・・・・。

「考えてみればオメエらが風呂壊さなかったら銭湯来ることもなかったんだよな?」

「「う・・・。」」

・・・。

「「ま、いいか。」」

気持ちよかつたしな。

また来るか。 銭湯。

第八十六の話 お風呂へレッツラゴー (後書き)

こないだ銭湯行きました、それをネタにしてみました。

・・・途中でホント恥ずかしくなりました。



第八十七の話 寝れんからって夢の中に出てくるな（前書き）

今日はあいつの意外な姿の話。

第八十七の話 寝れんからって夢の中に出てくるな

（エル視点）

・・・む、私視点か・・・初めてだな。

「・・・スピー・・・ムニヤ。」

・・・今は深夜一時、すでに家の人間は全員眠っている時間・・・  
現にリュウジは私の目の前でベッドに潜り込んで静かな寝息をたてている。

そういえばガツコウで聞いたが、リュウジの寝顔は名物となっていて  
というらしい・・・見てみたいが、生憎当の本人は壁の方を向いて  
眠っているからまったく顔が見えない。

・・・しかし、眠れん・・・基本私は、暗い部屋だとすぐに眠れる  
体質（？）なのだが・・・っておい、何だ（？）　これは。私は元  
は人間だ。剣が体質と言って何が悪い。

・・・しかし・・・まあ、眠れん。目が冴えてしまっている。いや、  
目なんて今は無いが・・・。

「・・・くゆ・・・。」

・・・

「……きゅん……」

……

「……みゆん……」

……

暇だ、暇すぎる。

……

あ、そうだ。

「……ぴー……」

……こうなったら私の特殊能力を使って少し暇を潰すか。

（龍二視点）

……

「……むにゃ？」

……何だここ？……えらい真つ暗なところなおい。

つーか今の状態何さ。俺逆さま向いてね？上下逆。でも不思議と不快感が無い。まあ浮遊感はあるけど。

……まあ、とにかく俺以外誰もいないし、なぐんにもない。

あ、これ夢か。なるほど。じゃなかったら責任者呼び出して髑り殺しにしてやる。

「……何かなあ……。」

でもまあ……なんちゅーつまんねえ夢だ。せめてラーメン食べ歩きの夢とかにして欲しかった。

「……リュウジ。」

？

「んにゃ？」

体を巧みに動かして方向転換。うん、何か慣れたぞこの浮遊感。

で、振り返ってみれば……まあえらい変わった服装した姉ちゃん

が立っていた。

真っ白くて裾が黒いギザギザ模様が縫いつけられてるコート羽織って、その下にまた真っ白なワンピースを着ているという、シンプル？な出立ち<sup>いでた</sup>。顔はまあ何っーか端整な顔立ちっちゅうんかな？キレイって言った方がいいな。うん。

で、コバルトブルーのロン毛に銀色のヘアピンが付いてる。それくらいしか飾り気ねえな。

・・・まあ、服装と髪と同色の鋭い瞳だけでも十分目立つがな。あ、因みにそれに対して俺パジャマね。青パジャマ。

「・・・やけに落ち着いているな。」

「ん。まあな。慣れた。」

「早っ。」

っーかこんなことぐらいで慌てる奴じゃねえし俺。

「・・・で？何の用だ？」

「・・・貴様、私が誰か聞かないのか？」

「・・・はあ？」

「お前バカか。最初に声聞いただけでももう分かったわい。」

で？何の用だ“エル”」

もうね、声に聞き覚えありすぎてねえ。最初に名前呼ばれた瞬間分かったね。うん。」

でも女だったとはちょっと意外・・・喋り方からして男かなあとは思ってたし。声高かったけど。」

「・・・なるほど、貴様の耳は飾りじゃない、というわけだな。」

「それ侮辱してる？」

「ふ、私がお前を言おうと貴様はどうすることもできんだろう。この空間は私が作り出したのだからな。」

？

「じゃこれ夢じゃないってことか？」

「いや、お前の夢の中で空間を作り出したのだ。だから正式にはお前の夢の中だ。」

??????

「難しい話はようわからん。」

「まあ、そのようなちゃちい脳みそではな。」

む、失礼な。

「だから怒ったところで無駄だと言った。この空間は私が管理しているから貴様は動けな【バキィ！】あべし!？」

龍閃だーん

「……な、なぜ……。」

鼻を抑えながら起き上がる人型エル。さっきいい感じに吹っ飛んだからなあ。

あ、体動くわ。よっしゃよっしゃ。

「あのかなあ、俺にそんな常識通用しねえっつの。」

哲学嫌いなんだよ俺。

「ま、常識求めたお前の負け。」

「くっ……やはり貴様は化け物か……。」

失礼なパート2。

「……で？何で俺の夢の中に出てきたんだ？」

「……。」

あ？何か黙り込んだぞおい。

「……じ、実はな……。」

「おっ。」

「眠れんのだ。」

「死ね。」

「がふ!？」

この愚かもんが。俺の至福の時間の邪魔をしゃがって。

「け、蹴ることないではないか！」

「気ニシナイ。」

「・・・じゃせて顔面は勘弁してくれないか。」

「俺の夢の中干渉してきた理由は？」

「眠れんから暇潰しに」

「ジャツジメント！」

「ぐふ!!」

もっかい顔面キック。あ？女の顔蹴るな？H A H A H A、そんな事俺には関係ナイ気ニシナイ

ム力つく奴は男でも女でも全員蹴る。これ俺の常識。

「いつつ・・・よ、容赦ないな貴様は・・・。」

「今に始まったことじゃねえだろ？」

「まあそうだが・・・女性をいたわるといふ事を知らんのか貴様は。」

「はっ。」

「鼻で笑つかそこ!？」

俺がいたわるのは選ばれた人間だけだ。こう言ったらかつちよいいが、ようは何でそんなことせにゃならんのだというわけで。



「どーでもいいけどさあ、俺の安眠邪魔すんなよな。さっさと寝かせろ。」

「・・・わかった。そろそろ私も寝たくなってきたからな。」

「今さらか。散々ひっかき回しておいて今さらか。」

「いや、私の方がひっかき回されたような気が」

「ジャツジメント!」

「ぐほ!」

顔面キックパート3。

「ぐふ・・・痛い・・・。」

「痛くした。さ、とにかくさっさと戻せ。」

「わ、わかった。」

エルが右手を上げると、俺の体が上昇していった。

「・・・で？エル。お前ホントにただ単に暇つぶしだけで俺の頭ん中に侵入してきたのか？」

何故にあえて人型になって俺の頭の中に入ってきたか、さっぱりだ。それなりの理由ってのがあるんじゃないかねえかね？

「・・・。。。」

？何だ？黙りこくりやがって。

「・・・それは・・・。」

「おっ。」

・  
・  
・  
。

「では、おやすみ。」

「おいコラ待てや。」

そして俺の意識は途絶えた。

〜朝〜

【チュン、チュン、チチチチチ……】

「……む？」

ああ、朝か……ふあゝあ……。

『おお、起きたかリュウジ。』

「……………」

ふと振り向くとそこにはクローゼットに立てかけられている鞆に入ったエルが。

「……………」

特に何も考えず、寝ぼけ眼のまま手近にあった目覚まし時計を思いつくそバカ剣に投げつけてやった。

第八十七の話 寝れんからって夢の中に出てくるな（後書き）

実はエルは女だった！！

・・・って、名前ですでに分かってたって人いるかも・・・。  
今日はただ単にエルの前の姿を書きたかったんで。それだけ。

第八十八の話 激辛スナックは迷惑菓子？

（龍二視点）

「リュウくんリュウくんリュウくん！！」  
「んあ？」

昼食後、縁側でまったりしているとクルルが何か俺の名前を連呼した。一回だけにしろうるせえ。

「どした？」  
「見て見てこれ！」  
「んあ？」

嬉しそうな顔をしながら抱えているダンボールを見せた・・・結構でかいぞ？

「どしたこれ？」  
「カリンちゃんがお裾分けだって！両親から送られたらしいの。」

ほお、意気なことすんなあいつ。

「ん、そんじゃ開けてみつか。」  
「うん！」

ってなわけで、リビングへ。

「？何ですかその箱？」

「でっかいね。」

和室でゴロゴロしていたアルスとフィフィも興味津々の様子でリビングへ。

「じゃ開けるぞー。」

【ビィィィィ・・・】

ダンボールの封をしているテープをカッターで切り裂く。

『・・・私はカッターではない。』

カッター!!エル。

「汎用性高くしてお買い得でっせ?」  
『誰に言っている!?!』

読者の皆様。

まあそれはともかく、だ。中身中身・・・。

【パカ】

「おお。」

開けてビックリ。何とスナック菓子の袋とかが所狭しとダンボール

に敷き詰められている。

「わはぁー！お菓子いっぱいだぁ！」

「・・・多すぎませんか？」

「へえいろいろあるのねこの世界のお菓子って。」

クルル歓喜、アルス苦笑、フィフィ感心、俺はどうでもいい。

「ふうん、こりやまた仰山・・・。」

「つかこういうのって大体その地方の名産品とかが普通じゃね？まあ普通だとあんまおもしろくねえけどさあ。花鈴の親ってどんな神経してんだか。」

あ、そういや一回会ったことあるな。うちの両親よりかは大人しいけどあれはあれでもしろい。

そう考えたらスナック菓子送ってきたのも納得できる。あの二人スナック菓子好きだったからなあ。

「どれ・・・お、これいいな。」

ヒョイと取り出したのはベビースターラーメンのソース味。これ近所の近くのコンビニでも売ってるが、まあただより安いもんじゃないし、ご愛嬌。

「リュウくん、私もいい!？」

「おう、いいぞ。こんだけあんだから食べ食べ。」

「わぁい」

「えつとじゃボクも。」  
「私も。」

さて、三人が品定めしてる間に、俺は縁側でベビースター食うかなあ、どっこいせ。

【ポリポリ・・・】

・・・ん、相変わらずうまいなこれ。さすが。

あくにしても・・・これもまたいいな。スナック菓子を頬張りながらのんびりと日光浴・・・うん、悪くない。

「リュウくううううん!」  
「?」

あ?

「どしたクルル?」  
「からあああい!」

ああ、辛い菓子に挑戦したか。どんなのだ?.....

おいしう。



「これのどこが辛い。」  
「だって辛いもん！」

涙目で駆け寄ってきたくらいだからどんな菓子食ったのかと思っ  
たら……

『暴君ベビネロ』……あ、これ知ってる人は知ってるだろ？最近  
じゃ売られてないけどさ。

まあ確かにピリリとするけどさ、ちょっとよちよちとどこが辛  
いよ。

「オメエの舌って軟弱だな。」

「むう〜！違うもん！ただ舌が拒否しただけだもん！」

拒否した時点でダメじゃね？

「はいはい、水入れて飲んどけ。」

「ぶー！リュウくんの意地悪！」

頬を膨らませつつ、リビングに戻るクルル……世話の焼ける奴。

さて、俺はのんびりとベビースターをポリポリ……んまい。

「リュウグウグウグウグウん!!!!」

・・・またかい。

「今度は何だ？」

「うゝええええええええん!!がらあああああああ!!!!」

号泣するくらい辛いのが食べたのかよ。

どれ?.....

ああ、なるほどね。これは納得できるかも。

『暴君ハバネロ』。あのベビネロの激辛バージョン。人によっては舌が痺れるとか何とか?まあ小さいお子様には食わすなって書いてあったな確か。そんな辛いってことか。

「またどうしてこれ食った？」

「だつで.....だつでえ.....!!」

涙声で訴えるなよ。

「ほらほら水飲んできな。」

「じじじ。。。。」

へビネロで辛いって言うくらいなんだから食わなきゃよかったってのに。。。。。

そっぴやアルスらは何食ってんだ？ちよつと気になったから振り返ってみた。

「【ポリポリ】。。。おいし。」

アルスはココアフレークか。。。まあ幸せそうに食って。

「【モグモグ】。。。ちよつと硬いかな？」

サクランボグミにしがみつきながら食ってるフィフィは滑稽だな。

っーかクルルも甘いの食べばいいのに。。。まったく。

「。。。ま、次は大丈夫だろ。」

再び庭へと目を向ける。お、小鳥。可愛いなあ。





でえ？今度は何？……………

うん、予想通り。

『大魔王ジョロキア』。ハバネロの倍の辛さを持つ唐辛子を使用したスナック菓子。インド北東部、アッサム地方原産の唐辛子で、正式名称『ハフットBhut Jolokia』、現地言葉で『幽霊の唐辛子』と呼ばれている。詳しくは東 トホームページ

その辛さはさすがの辛党もやばいと言っくらいだと呼ばれているが（俺平気だけど）……………こいつまたどうしてこんなもん食うかね？袋見ただけでヤバイってのに。

「はあ……………ほら、ティツシュ。」

「うゝえ……………」

もっかいゴシゴシ拭いてやる。ちょっといい加減にしろよこの野郎という気持ちも込めてるから、強めに擦る感じで。

「……………じだいたい……………」

「“舌痛い”んだな。よしよし。」

頭を撫でてやる。よくわかったなと自分で自分を褒めてあげたい。

「で？また何でそんな激辛スナックばっか食ったよ？」

こいつチョコ好きだったはずだよな？箱に一杯入ってるのに・・・あれか？未知の体験に挑戦ってことか？

「・・・だつて・・・リユウくんがわだじのじだがなんじゃぐだつていうから・・・。」

あゝ、直訳すつと、『だつてリユウくんが私の舌が軟弱だつていうから』な。

・・・つまり、俺の言葉を真に受けてむきになって食ってみたつと・・・ねるへそ。

「・・・まったくお前はそうやってすぐむきになる。」

「あゝう・・・。」

クルルの頭に手を乗せながら立ち上がる俺。ベビースターも食い終わっている。

「じゃーねえ。甘いもんでも飲んだらマシになるだろ。」

「ココア！ー！」

一番反応早かったナルスよ。ココアになったら周りが見えなくなるってか？

「はいはいココアな。ほらクルル。それ寄越しな。」

手に持っていたジョロキアを受け取る。また食って号泣されたらたまったもんじゃねえし。

「もうこつこついうの食うなよ?」

「はい……。」

舌の感覚が戻ってきたみたいだな。

とりあえず、ちょっといつもより甘めに改良した特製ココアを三人に出してやった。飲んだ後すぐに機能が回復したクルルは、素直にチョコ菓子を貪り始めた。

「んまんま……やっぱりチョコレートだね!」

これに懲りて慣れないことしないよう祈っとくか。

で、結局ダンボールの中は一日で空になりましたと。相変わらず三人揃って甘いのがお好きなようで。

余談だが、激辛菓子は全部俺が食ってやった。俺辛いもんとか甘いもんとか全部いけるし。

あ、それとも一つ気付いたことがあったな。



“本物の魔王”であるクルルを泣かせた“超暴君”ハバネロと“大魔王”ジヨロキアの方がラスボスとしてふさわしいと思ったのは俺だけじゃないと思う。

第八十八の話 激辛スナックは迷惑菓子？（後書き）

今回は、俺が暴君ハバネロを一時友達と一緒に食べたことを思い出してネタにしました。さすがにクルルみたいな反応はしませんでしたが、もしかしたらこういう反応する人も少なくないのでは？

第八十九の話 アルスの悲劇（前書き）

最後、アルスにとんでもないことが・・・！



「むっ……！」  
「いつっ……もお。」

どうにか解放、というより振り払った。歯型と涎が……。

とりあえずティッシュ……リビングだったっけ。

立ち上がって和室を出て、ティッシュの箱を見つけて手を拭いてる  
と……

「？何これ？」

テーブルの上に一枚のメモが視界に入ってきた。

『アルスとクルルへ。』

ちよとファイファイ連れて買い物行ってくる、大人しく留守番。まあそんな時間かからん。

サラバ。

by 龍二』

……ず、随分と簡潔な内容だなあ……この文、何か足りない気がするし。

あ、そういえば……エルの姿が見えないけど……

『詳しくは、3月22日の14時55分の感想を見てくださいね』

.....

「.....今どこからライターさんの声が.....気のせいかな？」

「ん〜、どうしょ〜一人は暇だし、魔王は寝てるし.....さっきの本でも読んでおこうかな？」

【ピン、ポーン】

「？」

「あれ？誰か来た？」

「.....リリアン？」

インターホンの画面から見れば、リリアンの顔が。

【ガチャ】

「はい。」

『.....アルス.....こんにちは。』

「どしたの？」

『.....暇だから.....遊びに.....。』

「ああ、暇人同士.....。」

「……うん、いいよ。上がって。」

『【コクリ】』

リュウジさんいないけど、別にいいよね。リリアンなんだし。

【ガチャ】

「……どうも……。」

「いらっしやいリリアン。」

リビングに入ってきたリリアンを迎え入れた。

あ、そういえば……。

「リリアンが一人でこの家来るのって初めてだよね？」

「【コクリ】」

初めて来た時はクミさん達が付いて来たし、ボクが行方不明になった後にここで泊まった時もクミさんがいたし。

「……一人で来るのは……新鮮だった。」

「ふくん……クミさん達は？」

「久美ママと出かけた……よって一人。」

「ああ、そうなんだ。」

「【コクリ】」

……リリアンの喋り方に慣れてない人はイライラするかもしれないけど、慣れたら親しみやすくていいんだけどな。

でも何でゆっくりなんだろ……理由でもあるのかな？

「……リリアンっていつつ喋り方ゆっくりだよね。」  
「……そう？」

え、自覚無いの？

「……これでも……普通のもり……。」  
「そ、そうなんだ……。」  
「【コクリ】」

普通って……じゃ特に理由もなく地なんだ。

「……ところで……龍二いないの？」  
「あ、うん。買い物だった。」  
「……そう。」

？どことなく残念そうな顔になったけど……？

「……残念……。」

ホントに残念がってた。

「……ま、まあリュウジさんならそのうち帰ってくるよ。」  
「……そう……。」

……。

「……ね、ねえリリアン？」



「？」

・・・前々から思ってたんだけど・・・。

「・・・もしかして・・・リリアンってリュウジさんのこと」  
「アルス。」

！！？？？

「そこから先は言っちゃダメ。」

「・・・ごめんなさい。」

に、睨まれた・・・半開きの目の状態から急に目つきが鋭くなった。  
・・・。

「・・・わかったら・・・それでいい。」

・・・さっきハッキリ言えたのにまたいつもの口調に戻っちゃった。  
・・・。

「・・・やっぱり・・・怒るのは苦手・・・／／／／／／／／／／／／／／／／」



「……むゃ〜……んむ。」

「あ、魔王。」

今起きたんだ。

「……クルル、おはよう。」

「あ……リリアン？どしたの？」

若干寝ぼけ眼のままリリアンの傍に膝を着く魔王。

「今日は……遊びに。」

「へえそうなんだあ。じゃ遊ば！」

「【コクリ】」

起きてさっそくって……力有り余ってるね、魔王。

「何して遊ぶ〜？」

「………さあ？」

「う〜ん……あ！じゃシリトリっていうのしよつよシリトリ！」

あ、そういえばこないだ寝る前に魔王とフィフィとボクとでやったなあ。

「シリトリ……初耳……。」

「えとねえ、その言葉の最後についてる文字を繋げていくゲームなんだって！えつと例えば、“リンゴ”なら“ゴリラ”っていう風に。

あ、でも最後に“ん”が付いたら負けだって。」

「……納得。」

「じゃ、やろう！アルスも！」  
「・・・うん、わかった。」

あれ結構白熱したしね。

「そんじゃ行くよー！まずはシリトリの“り”！」

魔王からですか・・・順番決めてないのに。

えっとじゃ次はリリアンかな？

「・・・」

“リリアン”。

【ズゴン！！！！】

ボクと魔王、同時に床に額を打ち付けた。

いきなり負けて・・・しかも自分の名前・・・。

「……り、リリアンの負け……。」

「いえ、誤魔化そうとしないでください。」

強く打ちすぎた……オデコ痛いです……。

「……シリトリ……思ったよりおもしろい……。」  
「どこが!?!」

白熱の“は”の字も無かったよ!?

「えっとお……じゃ次どうしようか?」

「……うん……。」

あ、シリトリ終わったんだ

そういえば……TVゲームっていうのはおもしろかったけど……  
リュウジさんがいないとセッティングのしかたわかんないしな……

「……。」

「……。」

「……。」

「……あ。」

「?……思いついた?クルル。」

「……すっごくおもしろいこと思い付いた」

「……何?」

「リリアン、耳貸して。」

？

「……………」

なるほど、確かにおもしろそう……。」

「でしょ？」

「え、何何？何ですか？」

何でボクだけ聞かされないんだろ？

「……………」

「……………」

「…………？」

え？何？何でこっち見るの？

「…………それでは。」

「…………アルス……………」

「大人しく……………」

へ？へ？へ？

「遊ばれる……………」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「プクク。」

「!?わ、笑われたあああああ!!!」

「きゃっはははははは!ア、アルス何その顔!?!」

「ファイファイそれ言わないでえええええ!!」

「はっはっはっはっは、傑作だなオイその顔」

「あははははは!?!」

「・・・・クスリ。」

「うああああああああああああん!?!?!」

その日一日、ボクの顔から猫髭とか目の周囲の輪とかホツペのグルグルとかが取れることはなかった・・・だってこれ油性だもん・・・



ク  
ス  
ン。

第八十九の話 アルスの悲劇（後書き）

・・・あれって落ちないですよね・・・俺もされましたよ、昔。

外出て笑われるまで気付きませんでした・・・クスン。

第九十の話

勇者対あれ（前書き）

今回はV S あれ。

## 第九十の話

## 勇者対あれ

（アルス視点）

「ん〜！」

いい天気です〜

「気持ちい〜ね〜……。」「  
「だね。」

えっと、今庭に出て背伸びをしていますボクとボクの肩に乗っているフィィ。リュウジさん曰く、天気がいい日に外に出て背伸びするとめちやくちや気持ちいとのことだったから実践してみたら、ホントに気持ちよかった

あ、リュウジさん今散歩に出ていますけど。

「……。リュウジさんの散歩、付いて行ってもよかったかなあ？」  
「ずっと傍にいろから？」  
「そ……。って違う〜！」

あ、あつぶなあ……。油断してた……。／／／／／／

「照れるない」

「う、うるしい〜！」

「……。しい？」

「……。噛んだ。」





何が？

「何が出たのよ？」

「あ、あれが！何か、あれが！あれが！！」

あれあれ言われてもわからないんですけど……。

「と、とにかく落ち着いて……何が出たの？」

「あれが！何か、黒いあれが！あれが！！」

……ダメ、無限ループ。

「クルル、落ち着きなさいってば。」

「だだだだだってええええええ！」

もう、一体何？

「！！！？？」

？あれ？急に動きが止まった？

「……………ひ！」

ゆっくり振り返ってまるで恐れおののいてるかのような表情になる魔王。

一体何なのs

【カササササ】





なんていうか・・・大きさは掌サイズなんですけど・・・

頭の角のような物がウニヨウニヨって動いてて、背中とか何か不気味に光ってて、足は何か変に速くて・・・

えと・・・確かテレビで見たな・・・この生き物は確か・・・

「・・・これが・・・“ゴキブリ”・・・。」

は、初めて見たけど・・・不気味・・・。

【カササササ】

「ひ！あ、アルス何とかしてよ！」

「ちょ、お、押さないでください！ボクだって嫌です！」

「わ、私だって嫌ああ！！！」

魔王が背中をグイグイ押し出す・・・ってゴキブリ何かこっち向いたまま動かないんですけど！？すごい睨まれてるような気がするんですけど！？

うわぁこれ山の中でオーガって魔物のボスに睨まれた時より戦慄覚えるんですけど!?

「こ、恐いって・・・怒ったりユウくんよりかはマシだけど恐いって・・・。」

「マシなら何とかしてください。」

「何とかできるレベルじゃないから無理!」

「と、とにかく何とかしてよぉ・・・。」

な、何とかだったって・・・

あ、そういえば・・・。

「確かテレビで見た時、丸めた紙を使ってゴキブリを退治してたんだっけ。」

「そ、それなら紙取ってこないと・・・。」

・・・とは言ったものの・・・紙といえば、テーブルの上に置いてある新聞紙ぐらいしか目につく物がない・・・でもテーブルまでは結構な距離がある上に、その直線状にはあのゴキブリが待ち構えている・・・

最大の難関ってこういうこと?

「ほら、アルス。レッツゴー。」

「よし・・・って何でボク!?魔王行ってきてよ!」

「無理だよお・・・ファイフゥ・・・。」

「わ、私！？無理無理！」

「小さいから素早く取ってこれるんじゃないの？」

「そ、それでも無理！」

何でえ！？

「ま、魔王。ここは第一発見者として魔王が・・・。」

「い、いやぁ！絶対にいや！」

わ、喚かないで！ゴキブリこっち来そうで恐いって！

「ね、ね、アルスお願い！ホントお願い！」

「だ、だからぁ・・・。」

「ねえアルスゥ！ホントお願い！」

ファイフイまで！？

【キラキラキラキラキラキラキラキラ・・・】

う・・・そ、そんなおねだりする時に出すキラキラ光線を同時に発  
さないでください・・・。

【キラキラキラキラキラキラキラキラ・・・】

・・・  
うう・・・

「・・・わ、わかりましたよ。行けばいいんでしょ行けば。」

「やったあ！」

ついに屈してしまったボクでした・・・。

「・・・じゃあ・・・行きます。」

「気をつけてね。」

「無理しないでね。」

心配してくれるのはありがたいけど、どこか安心したって顔しないでください・・・。

『・・・』

ボクがリビングに入ってきて、ゴキブリはさっきからずっとこつちを見たまま動かない・・・ただただ触角をウニョウニョと不気味に動かしているだけ。それが余計に恐怖心を煽る・・・。

この緊張感は、眠っているドラゴンの脇を潜り抜けるくらいに匹敵するんじゃないかな・・・？

「う・・・動かないでくださいね？」

言っても効果ないと思うけど、言わずにはいられません・・・。

『・・・』

そっと回りこんで、ゴキブリから遠く離れた位置からゆっくりと移



「にゃああああああああああああああああああ!!!!????」  
と、飛んだああああああああ!!!!!!

【注：先ほどの効果音は全てアルスの幻聴です。ゴキブリがジエツト噴射の時と同じ音出すとは限りません（あつてたまるかそんなこと）】

「あ、アルスうううううううううう!!!!!!」

いやああああああああああ!!!!!!

「せ、聖剣召喚!!!!」

【バシユウ!!】

咄嗟に剣を召喚、逆手に持ち替える。正当防衛ですからしょうがありません!

「てやああああ!!!!」

そしてそのまま振りかぶる!

【ビュン!!】

あうう・・・外した。

【ブウウウウウウウ!!】

！しまっ……目の前に……！

『時よ、封じよ！』

【キーン！】

途端、ゴキブリの体を灰色の球体が包み込んだ。

「アルス、今のうちに紙を！」

「は、はい！」

ファイが時間停止魔法でゴキブリを止めてる間に……仕留めないと！

【パシ！ガサガサガサガサガサガサ……】

新聞紙を長く丸めて……

「……できた！」

【バン！】

手製の棒を掌に叩きつけて強度を測る。うん、ちょうどいい！

「よおしー！」

後は退治するだけ





今ボクは背後にテーブル、正面にはゴキ一号、右前にはゴキ二号、左前にはゴキ三号といった状態・・・

に、逃げられない・・・やばいよ・・・。

『『『・・・』』』

【ジャジャジャキン!!】 三匹同時構え

「ひう!?!」

く・・・来る・・・!

「アルスうつうつうつうつ!!」

【バシユシユシユ!!】 三匹同時羽、展開

・・・も、ダメ・・・。

【ギョオオオオオオオオオオオ！】 三匹同時発進！

「やあああああああああ……！」

【ズズズズズズー！】

……

……？あれ……？

「……。」

おそろおそろ庇っていた腕を降ろすと……

足元にゴキ二匹がピクピクと痙攣しながら裏返っていた・・・う、裏側も何だか・・・。

「オメエら何してんの？」

！！

「・・・り、リュウ・・・。」

リュウジさくん・・・（泣）。

【カサササ・・・】

！？ま、まだ・・・！

「ん。」

【グシャ！】

【バキ！】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ。

【カササササササ】

「お、そっちにもいたか。」

【ピンパン！】

・・・・・・・・・・・・・・・・えう。

「さ、てと。ティツシュどこやったっけな？」

・・・・・・・・リユウジさん・・・

「ティツシュ〜ティツシュ。」

ゴキブリ素足で踏み潰すって・・・

「え〜っと・・・あ、あったあった。」

手で叩き潰すって・・・

「ん、便所に流してくるかな。」

デロピン衝撃波だけで真っ二つにするって……。

【ジャーーーーー……】

「はいオッケー。」

……。

「?おいお前ら何してんだ?早く入ってこいよ。」

「……。」

「おい?どしたあ?」

「……」

……ごうして、ボクらの危機(?)は回避されたのです。

後になって、ゴキブリ相手にあそこまで動揺した自分が恥ずかしく

なりました・・・同時に、リュウジさんはあらゆる意味で最強だと  
改めて認識しました・・・永遠に勝てそうもありませんボクらでは・  
・

はあ・・・。

## 第九十の話

勇者対あれ（後書き）

あれ＝ゴキブリでした。

・・・素足でゴキブリ踏み潰せる人手え上げてくはーい

・・・すみません、引かないで。

ええ、そうです、俺は素足で踏み潰します。新聞紙がどこにもない場合の話ですが。

だって、婆ちゃん普通にプチつと足でやりますもん。何か憧れますやん？え？憧れない？そうですか俺だけですかごめんなさい。

第九十一の話 レッククッキング (前書き)

随分前にご要望があったアルスとクルルとフィフィの料理奮闘記！  
だっ たらいいな



## 第九十一の話 レッツクッキング

〔花鈴視点〕

「ふう……ごちそう様。」

うん、今日のお昼もナイスだったわね　いやあここ来る前に料理の特訓した甲斐があったわ。

「さて、と。片付けよ。」

後々溜め込むとメンドくさいからね。

【ピン、ポーン】

「？誰だろ？」

【キュ】

一旦洗い物から手を離してインターホンのテレビ画面から外を確認する……

「……………何してんのあの子？」

クルルが思いつきり脳天を画面に押し付けていた。

「……。」

【ガチャ】

「クルル。」

『あ、カリンちゃん！こんにちわー！』

「うん、こんにちは。何してんのあなた？」

『え〜つと……ウケ狙い？』

「いや聞かれても。」

『ちょ、魔王……こんにちはカリンさん。』

「いらつしゃいアルス。上がる？」

『えつと……お邪魔します。』

【ガチャン】

インターホンからドアロックを解除してアルスとクルルを招き入れる。

【ガチャ】

「こんにちわー！」

「お邪魔します。」

「やつほーカリン。」

あ、ファイファイもいたんだ。

「いらつしゃい。」

「……今アンタ私もいたんだって思った？」

！！！？？

「……ソナコトナイヨ。」

「何その片言！？忘れてたでしょ！」

……。

「ごめん。」

「……いさいいさ、どうせ私は虫みたいな体だから皆無視するんだ……いいもんいいもん……。」

ああああ落ち込んだあ……。

「ご、ごめんってファイファイ！」

「……クスン……。」

「ファイファイ、とりあえず泣き止んでよ……。」

「……うん……。」

さすがアルス、泣き止ませるのに慣れてるってどうか……

いや、でもまだファイファイの顔暗いわよ？

「え〜つと……とりあえず何か飲み物持ってきてあげるわ。」

えつと確かあれが……。

「え、そんな。悪いですよ。」

「冷たいココアでいい？」

「もちろん！！」

早！？遠慮したかと思えばココアで即答ってアンタ！？

まあ、とりあえずお盆に三つのココアが入ったコップを載せてテールへ。

「で？今日はどうしたの？」

コップを二人の前に置きながら聞く。あ、フィフィの分はアルスと共有して飲むから、アタシの合わせて三つでいいの。

「えつとねえ、今日はお願いがあって来たのー。」

「お願い？」

「んくんく・・・はい、そうなんです。」

お願い、ねえ・・・。

「龍二に頼むことじゃないの？」

「うん、ちよっとね・・・。」

???

「えつと、実はね・・・」

何か作ってあげたいの。リュウくんに。」

？何か？

「えと、ほら。ボクらこの世界来て結構経つんですけど、その、料理とかって作ったことないし・・・。」  
「それでね、今日クルルが提案したんだけど、日頃お世話になってるリュウジに何か作ってあげたいな〜って。」

.....

へえ.....。

「..... 粹なことするわねえアンタ達って。」

「「「?」「」」」

なるほどねえ..... それでアタシを頼ってきたってわけね.....。

「..... いいわ。教えてあげる。」

「本当!?!」

「当然よ。そういうことなら任せなさいって!」

まあ、料理の腕なんて龍二に比べたら大したことないだろうけど、それなりにはできるしね。

「あ..... でも今アタシん家の台所、汚いからなあ.....。」

「なら、リュウジさんの家ですか?」

「あれ? いいの?」

「はい。今リュウジさん散歩で留守ですし。」

あいつ相変わらずゴーイングマイウェイねえ.....。

「んじゃ行こっか。」

「あ、待っててくださいせめてココア飲んでから……。」

……龍二に感化されつつあるわねこの子達……。

↳龍二宅・台所↳

「そんじゃ、何作るの?」

えゝ場所は変わって龍二の家の台所……ひとまず私は愛用の花柄エプロンを着た。

「えゝつと……。」

「……。」

「……。」

で、アルスは白、クルルはピンク、フィフィは水色(超ミニサイズ)といった色違いのエプロンを着てる……あ、チェックの柄が何だか可愛い……。

ってそれよりも……まさか……。

「・・・決めてないの？」  
「」「」

はあ・・・まったく・・・。

「うーん・・・じゃラーメンとかは？」

あいつラーメン好きだし。

「・・・よくわかんないです・・・。」

・・・あ・・・そういえば私もラーメンとか作ったことなかったっけ・・・。

じゃこれ却下ってことで・・・。

「・・・ココア？」

「粉に牛乳注いで終わりじゃないの。」

てかさつき作ったし。

「あ！じゃチョコ！」

「カカオがありません。」

それ以前にどやって作るのって話。

「サクランボ！」

「」「」あれは育てる物です。」「」

種まいただけで料理っていうんなら誰だって簡単に出来るって。

ってかそれ全部アンタ達が好きなやつでしょうが。

「」「う〜……………」

……………

あ、これならいけるかも…………。

「じゃさ、クッキーとかどう？あれならどうにかなるかも。」

ここに来る前に、よく一人でクッキー焼いて家族で囲んで食べてたっけなあ…………。

「クッキー…………ですか？」

「いいねえそれ！食べたことあるよ！」

「あれはおいしかったし…………まあいいんじゃない？」

おし！じゃメニューはクッキーに決定！

〜はい調理開始〜

そんじゃまずは…………材料確認。



無塩バター

塩

砂糖

卵黄

薄力粉

水

こんなもんかな？

「材料オツケー？」

「オツケーです。」

そんじやいきますか。

「まずは・・・ボウルに入れたバターをちょっと溶かします。」

「オツケー。」

『炎よ、飛b』 「はいストーーーーーッブ!!!!」。

初っ端からかい!!

「あのねえ、炎出さないでよ・・・自然に柔らかくするの。」

「え、そうなの？」

キョトンとした顔で言わないでよクルル。

はぁ・・・何だか先が思いやられる・・・。

まあ、ともかくバターが少し柔らかくなったところで・・・。

「そんなじゃバターをこのゴムベラで練って。」

「どれくらいですか？」

「えっ・・・大体クリーム状になるまで。」

「はい。」

「ほらクルルも練って。」

「はい。」

まあ、これくらいはできるわね。難なくクリーム状になってきたわ。

「えっそれで次、塩を入れる。」

「しおーがないな。」

「クルル？しよーもないこと言ってるどブツよ？」

「ごめんなさいです・・・。」

「つたく・・・。」

「お塩ですね・・・そお・・・。」

そつそつそつやって塩の袋を大きく振りかぶり

つて!!!!!!?????

「れ!」

「チエストオオオオオオオオ!!」

【バシコオオオオン!!】

振り下ろされる寸前に塩の袋を殴り飛ばした・・・あぶな・・・。

「ななな何してんの!?!」

「え、え、だ、だってリュウジさん味が濃い方が好きかなって・・・」

「限度ありすぎ!!?!つかクッキーはお菓子だから塩辛くしすぎでどうすんの!?!」

それこそ糖分ゼロのソルトクッキー!!

「塩は一つまみよ。」

「は、はい・・・すみません。」

ふう・・・危ない危ない・・・。

「カリンちゃん。」

「?何クルル・・・て!!??」

何でバター溶けてるのよおおおおお!!???

「・・・練り過ぎちゃった」

テへ ってな感じで舌を出さない!

「も・・・時よ、戻れ」。

【キーン!】

うあ、クリーム状に戻った。

「しっかりしてよクルル。この魔法すっごい疲れるんだから。」  
「は〜い!」

うん、ファイファイが補助してくれるから助かるわぁ・・・。

「はい、そんじゃ次は砂糖を三回に分けて加えてください。」

「ほつれすか(こつですか)?」

「・・・それ啜える。」

砂糖が乗っているスプーン啜えてどうしろってんですKA。わざとですKA。



「・・・あれね、黒ゴマクッキー。」

フィフィ、その一言で片付けない・・・。

・・・で・・・まあ、その後っていうか、色々説明していくのも大変なので音声で。

「ちよ、アルス！？卵は黄身だけ入れるんだってば！」

「クルルそれ洗剤！それダメえええ！！」

「ああああだからアルスそれ混ぜすぎだって！まとまるくらいでいいのに！！」

「って生地をつまみ食いすなクルル！！」

「ちよと待って二人揃って何入れてんの！？」

「ちよアルス！？めん棒で伸ばしなさいよ！箒で伸ばさない！！」

「クルルうつつう！！剣で形作ろつとすなあああああ！！」

「フィフィ！魔法使おうとすな！オーブンで焼きなさいオーブンで！！」

「……で」

「「出来たあ！」」

「……疲れた……。」

ま、まあ何とか出来上がりました……。

いい感じに焦げ色が付いてて、形は多種多様。ウサギさんとか星と  
か様々。ただいくつか黒ゴマのせいで黒くなってるけど……「愛  
嬌」。

それらをお皿に盛り付けて完成……なんだけど……

途中でアルスとクルルが……何ていうかまあ……ちょっと目を  
離れた隙にいろいろ混ぜちゃったみたいで……

味見する勇気がありません……正直……。

「じゃ、後はリュウくんにも食べてもらっただけだね！」

「そ、そうだね……。」

自信满满的なクルルに対して、どこか不安げなアルス……うん、分  
かるよその気持ち。食べてもらっのって緊張するよね。

「大丈夫だつて！私がいたじゃん！」

「ファイフ？あなた時間巻き戻す以外に何かした？最後盛大にクッキー燃やそうとしたの誰ですか？」

【ガチャ】

「たっだいま〜つと。」

「「「！お、おかえりなさい！」」

「あ、龍二おかえり〜。」

「おいつす花鈴。いらっしやい。」

エプロンを脱いでると、龍二が丁度帰ってきた。心なしか顔が晴れやかだった。

「いやあ近所で飼ってる犬に子供が生まれたんだとめでてえや」

うつわあすごい眩しい笑顔・・・あ、いや、別に見惚れてなんかいないわよ！？／／／／／／／

「？・・・お前ら何してたんだ？アルスとクルルなんて顔に白いの付いてるぞ？」

「えつと・・・／／／」

「エへへ」

「ふふ〜ん」

モジモジするアルスと、ニコニコ笑うクルルと得意げに笑うファイフ。



「……お？何だそりゃ？」

あ、クッキーに目がいったわね。

「その……実は「リュウくんのために一生懸命作ってみました」  
……。」

あ、アルス先にクルルに言われて落ち込んだ。

「ほお？お前らだけでか？」

「そうよ？アタシはただ監督しただけ。」

「へえそいつあすげえな。」

……ただ、監督したって言うけどアタシの不注意が為にとんでもないことになったってというのは黙っておこ。

「リュウくん、食べてみてよ！」

「まあまずは一口いってみなさい。」

お皿に乗せたクッキーの山を差し出すクルル。その笑顔には若干緊張が含まれてるような気がする……。

「ん、じゃせつかくだしもらうか。」

何の躊躇いも無く、そのクッキーの山の中から一番の上にあった星型をつまむ龍一。

……ごめん、言い忘れてたけど……何だろう、そのクッキーの山から変な邪気っぽいものが漂ってきてる気がする……。

「どれ。」

【パク】

！……ついに食べた。

「「「……」」」

三人はじつと龍二の顔を見つめたまま、その成り行きを見届けた……目が真剣そのもの。

「……。」

【ボリボリボリボリ……】

……。

「……ん……。」

「「「……」」」

「……まあいいんじゃない？悪くねえぞ？」

へ？

「ほ、ホント!？」

「おうよ。」

「よ・・・よかった・・・。」

「やったねアルスクール!」

嬉しそうにはしゃぐ三人。その顔には安堵と嬉しさで溢れていた。

「頑張ったじゃん。えらいえらい。」

【ポンポン】

「へへ」

「あ、あう・・・//>//>//」

「当然」

龍二に頭を撫でられて嬉しそうに笑うクルルと照れるアルスと踏ん返り返るファイファイ・・・あ、何かいいなあ三人とも。羨まし・・・ゲフンゲフン!

にしてもまあ・・・

「よかったね。」

「はい!」

「うん!」

頑張った甲斐があったわ、ホント。いやあよかったよかった

あ、そういうえば・・・

「龍二、一つもらつわね。」

「おう。」

クッキーを一つ取る。さつきは何か邪気が漂ってくるとか思ったけど、龍二は普通に食べてるし、アタシの気のせいだったかな？

どれ・・・

【パクリ】

・・・・・・・・・・・・・・・・

【バタ】

「!?!?か、カリンさん!?!?」

「どしたの！？ねえ！」

「カリン！？」

「おりよりよ？」

その後、花鈴は龍二によるフライングニードロップ荒治療を受けて意識を回復、一命を取り留めたという。

b yライター

第九十一の話 レッツクッキング (後書き)

えゝあの後クッキーは龍二が全て平らげました、が。

皆さん、想像してみてください。そのクッキーの欠片を食べたゴキブリが一瞬にして死んでしまうのを。

まあ、龍二ですからね。そこらへんはご愛嬌

ってなわけで、アルス達の料理風景でしたゝ

第九十二の話 <特別編>必殺技特集part1 (前書き)

今回は特別編！サブタイ通りです！

ついでに・・・ふふふ

第九十二の話 <特別編>必殺技特集 part 1

ライター視点

「ただいま。」

「あ、リュウくんおかえりなさい!」

「はいよいしょ。」

【バキ!】

案の定、クルルが散歩から帰ってきた龍二に飛び掛っていったら叩き落とされた。

「・・・変わらないな、貴様。」

「ありえ?エル帰ってきたの?」

「さっき返してもらった。」

「・・・まあ、向こうではいろいろと、な。」

今では龍二の腰の鞘に収まり、再び龍二の愛剣として舞い戻ってきたエル。向こうではプライドズタズタだったね

「い、言うな!大体私があのような小娘如きに」

「それ以上言ったらホントに溶かすぞ?」

「ごめんなさいすいませんでした。」

弱。

「・・・(泣)。」

「・・・ねえ、エルは誰に話しかけてるの?」



「異次元。」

そういうことにしとけ。

さて、と。

【ヒューン！】

「ひゃ！？」

『……いきなり出てくるな。』

H A H A H A、ライターたる俺を舐めるな。

あ、俺はこの世界ではライターというキャラクターとなっています。  
本名は言ったらアウトなので言いません。

「で？何で出てきた。」

今日はねえ……特別編さ。

「特別編？」

そ。とある読者さんがそろそろ新技期待してるらしくてね。

「ふんふん。」

で、俺も新技結構考え付いたわけよ。でもこの話はあれだろ？コメ  
ディーじゃん。バトルもんじゃないじゃん。技の出る幕ないじゃん。

「こないだバトルもんだっただけだな。」

・・・俺はコメディイに向いてるんだよ。

で、だ。今回はお前の必殺技を出していかせてもらおう。

「俺のか。」

丁度エルも帰ってきたことだし、いいじゃん。

『ふむ・・・思う存分暴れられそうだな。』

そゆこと。

じゃ、さっさと準備準備。

「へいへい。」

「わはー！楽しみー！」

「?どうしたんですか皆さん。廊下で喋って。」

あ、アルスにフィィ。お前らも準備しろー。」

「へ?」

ほらほら急いだ急いだ。

「へ?へ?へ?」

「な、何?何なの?」

（グラウンド）

さてさて、やってまいりましたグラウンド！

「テンション高いな作者。」

『ああ、うざいくらいにな。』

「機嫌いいのかなあ？」

「・・・何で急に・・・。」

「聞いちゃダメよアルス。まともな返答返ってくるわけないから。」

そこ、うるさい。

さてさて、それじゃルール説明。あれを見てみなさい。

「？・・・なんだありゃ？」

俺手製、『DMくん』だ。

「何ですかその何気に危なっかしい名前。」

気ニシナイ。

「・・・あれ、何のポーズ？」

キャーーン。

「古。」

さて、あの木製人形、DMくんに、技をぶつけていきます。指定回数  
の技をぶつければ終了です。簡単っしょ？

「まあ、そだな。」

因みに、ご褒美があります。

「ほお？そりゃいいね。何だ？」

まだ言えませ〜ん

「あ、そ・・・で？ルールそんだけ？」

後、一つだけ特別なことをします。

「？」

ふふ〜ん

俺も参加します

「「「ええ!?!?!」」」

「いいのかよそれ？」

『貴様、仮にもさく』

はいエル黙れ。

『。。。』

いんだよ、俺も結構いろんなところで技出してるし、ここでお披露目しても。

「現実では絶対出せない技ばっかだな。」

気ニシナーイ。

そんじゃ、龍二と俺の必殺技集、開始！

まず記念すべき一回目。

龍二 『りゅうらいえん龍雷炎』

「どーゆー技ですか？」

「見りゃわかる。」

【シュリン】 エルを鞘から引き抜く

「じゃ、行くぞエル。」

『ああ。』

エルを片手に、素早くドMくんを駆け寄る龍一。

「むん!!」

【ドス!】

そして思い切り突き刺し……

「『波あつ!!』」

【ドオン!!】

龍一とエルの湯と共に、ドMくんから雷と炎が迸る。ドMくんは、瞬く間に黒こげとなり、思い切りエルを振られて地面に叩きつけられた。

「はい終わり。」

「……え、何が起こって……?」

「エルの雷の力と、俺の気功術で炎を発生させて、対象を爆発させる技……こんな感じかね?」

で、さっき叩きつけられたドMくんはムクリと起き上がり、黒くこげたはずなのに一瞬で回復した。今度のポーズはアイーン。

「……すい。」

ライター舐めるな。

次、俺な。

ライター 『ダークネスブラッド』

「……名前からしてえぐいわね……。」

じゃ行くぞー。

っと、ややこしくなるから俺のセリフにもカッコ付けていくかな。

「……はぁ……せい!ー!」

【バツ!】

両手をドMくん突き出す。

【グウオオオオオオ……】

すると、ドMくんの足元から血の渦が……。

【ギョオオオオオオオオオオオオオオオ……】

そして瞬く間にドMくんは血の渦に引き込まれていった……。

「これ、即死技。」

「……初っ端から最強じゃないの……。」

H A H A H A、成功確立は低いけどね。

次。

龍一 『龍閃連突』  
りゅうせんれんとつ

「ん、この技か。」

「どんな技？」

「見てな。」

【チャキ】

エルの切っ先をまつすぐドMくんに向け、且つ頭より後方へと下げ、構える。

「……はあ！」

【ドオ！……！】

勢い良く突き出したかと思うと、ドMくんが穴だらけとなり、

【キーン！】

素早く切り抜けると、ドMくんは真横に両断された。



「え……い、今の何ですか？」

「0・1秒で一億回以上の連突を繰り返して切り抜ける技。」

「……いや、人間技じゃないっしょそれ？まあそういう奴だけどさお前は。」

ライター 『まじんのちまつり  
魔人乃血祭』

「じゃ、行きまーす。」

両手から漆黒の闇で刃を形成し、交差するように構える。

「はっ！」

【バツ！ドシュ！】

一瞬にして接近し、ドMくんの腹に右手の刃を突き刺す。

「せいやあああああ！……！」

【ズバババババババババババババババババババババババ！】

そこから両手による乱れ切りでドMくんを切り刻む。

「せい！」

【ズバシュウー！】

とどめに、両手で左右に薙ぎ払って終わり。

「・・・まあ、見たまんまだね。」  
「わ、技名通りですね・・・。」

モチ

龍一 『ほうげきてんじょう崩撃天昇』

お？龍が付いてない技だ。

「いつくぞー。」

エルを構え、瞬時に接近。そして体勢を低くし、足払い。

「しゅー！」

【バシィー！】

脛を砕くほどの強烈な蹴りをくらい、宙に浮くドMくん。

「はっー！」

【ザンツーー！】

そして立ち上がり際に目のも止まらぬ切り上げ。宙に浮いていたドMくんはたまらず斬撃を食らった。

「なるほど、相手の不意をついた技だな。」

「・・・痛そうだねえ・・・。」

「足が？それとも体が？」  
「どつちも。」

ライター 『とこやみのいざない常闇乃誘』

まあこれはあれだ。『ダークネスブラッド』をレベルアップさせた技。

「はあああ……『常闇乃誘』!!!!」

【ブウン】

ドMくんの頭上に小さな暗黒球が現れ……

【ギユオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!】

それは巨大になり、ドMくんを吸い込み……

【ギユウン】

そして小さくなって消えた。

「これはミニブラックホールを発生させると考えたらいいな。」  
「……ライターさんって何でそんな一撃死重視なんですか？」

決まってる。その方が戦闘楽だから RPGにしかり。

え〜っと、かなりたくさんあるんで、ここからはダイレクトに。

龍二 『ライトニング・スピア』

エルによって形成された小型の投げ槍を目標に向けて投げつける。  
相手を貫くと同時に感電死させる。

ライター 『ワンハンドレッド・ダーク』

読んで字の如し、百もの闇の剣を出現させて次々と貫いてゆく。

龍二 『天撃龍閃光』  
てんげきりゅうせんこう

一瞬にして切り抜け、後ろ回し蹴りを放ち、相手を頭上に吹き飛ばした後に追い討ちとしてエルが地面に精製した魔方陣から発生させた雷撃を浴びせる。

ライター 『闇夜乃血桜』  
ちやみよのちくおう

漆黒の真空刃を発生させ、桜の花びらのような幻影と共に対象に向けて飛ばす。相手は一瞬にして切り刻まれ、まさに血桜の如く赤く散る。

龍一 『龍王双波塵』

雷と炎を剣に纏い、勢いよく突き出すことで巨大な衝撃波を発生させる極悪技。塵も残らない。

ライター 『カオススラッシャー』

片腕を振り下ろし、赤い衝撃波を発生させる技。岩でも真つ一二つ。

龍一 『龍牙斬』

単なる袈裟切りかと思いきや、コンマ1の間に無数の斬撃を浴びせる技。あまりの斬撃の多さに、相手は見えなくなるくらい粉々。やりすぎ。

ライター 『悪魔乃羅針盤』

肉体的にダメージを与えるのではなく、精神的に直接負の感情を送

り込み、自滅へと導くある意味最凶の技。

龍一 『グラビティ・サンダー』

エルを使った術技。対象の頭上と足元に小型の魔方陣を展開。上下からの雷撃が対象を襲う。一度捕まるともう逃げられない。

ライター 『ヘル・クラウド』

ダークネス・クラウドのパワーアップバージョン。真っ赤な雷が対象を塵と変える。

龍一 『龍閃弾脚・辻風』  
つしかぜ

前方宙返りをしたかと思うと、手を使わずにその場で足を広げて高速回転。いわゆるカポエラの要領で相手を何度も蹴ると同時にかまいたちを発生させ、切り刻む。

ライター 『デモンズランス』

漆黒の巨大な槍を召喚、相手に投げつけて身も心も焼き尽くす。っ

てそれ有名なあのゲームの技じゃんなんて言わないで。

龍一 『天殺月光撃』  
てんころげいこうげき

相手を高く切り上げ、同時に飛び上がってから流れるように大上段の切り下げへと繋ぎ、相手を地上へと叩きつける。斬る瞬間は闇夜に浮かぶ三日月そのもの。

ライター 『ダークネスジャベリン』

『デモンズランス』より小型の漆黒の薙刀を召喚、高速回転で振り回す。

龍一 『龍波粉碎撃』  
りゅうはぶんさいげき

抜刀と同時に相手を二回突く。その一撃の威力は計り知れない。

ライター 『常闇乃津波』  
とこやみのつなみ

足元から濁流を召喚、自分を中心に濁流の竜巻を発生させて対象を溺れ死にさせる。

龍二 『幻・龍閃斬』

龍閃弾を放ったかのような幻影を一瞬見せ、相手が隙だらけの間に居合い切りを放つ。

ライター 『ブラックサテライト』

周辺に無数の暗黒球を展開、無数の光弾を発射して相手を蜂の巣にする。

龍二 『龍閃昇牙連脚』

龍閃弾脚の連続蹴りバージョン。相手を蹴り上げ、宙に浮いたところをさらに追いかけて蹴る、蹴る、蹴る、蹴りまくり、最後は踵落としで相手を地上に叩き落とす。一つ一つが受けてただでは済まない威力。

ライター 『闇夜乃猫奇』

対象を漆黒の霧で包み込み、無数の攻撃を浴びせる何ていうか卑怯な技。



龍一 『龍閃咆』

体中に氣を溜め込み、雄叫びを上げて周囲に衝撃波を発生させる人間離れした技。って今さら人間離れもクソもない。

ライター 『ブラックエンジェル』

無数の漆黒の羽を周囲に撒き散らし、それらを対象に向けて一斉に飛ばす。突き刺さった瞬間爆発する仕組み。

龍一 『龍王爪』

氣で形成した巨大な鉤爪で相手を二回切り裂き、最後に特大の龍閃弾をぶち込む技。まさに龍王という名に相応しい威力。

ライター 『ダーククロス』

漆黒の十字架を相手の頭上に召喚、そのまま落下させて押しつぶし、爆発させる。

龍一 『龍轟閃脚斬』  
りゅうこうせんきゃくざん

斬り、突き、蹴り、それらを一瞬にして何億発と叩き込み、最後に『龍王爪』の鉤爪で薙ぎ払う。

「おんどりゃあああああああー!!！」

【ズガアアアアアアアン!!!】

最後の技、龍轟閃脚斬を決めると、DMくんは完全消滅した。

「ふう・・・終わりか？」

「おう、一通り。」

「「「ひ、一通り!?!?!」」」

そ、あれで一通り。まあ俺の技はこれから考案してくが、龍一の技は全百以上、しかもまだまだ増え続ける一方。これっぽっちでは終わるわけがない・・・とは言っても全部を紹介する日が来るかどうかもわからない・・・。

「あゝ終わった終わった。さ、ラーメン屋行くぞ。」

「は、はあ・・・。」

お披露目は呆気なく終了した。っと、ご褒美ご褒美!

「龍二、これ。」

「？」

【パシ】

俺が投げた物は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライター、恩にきるぜ。」

「いいってことよ」

「ご褒美である、龍二行きつけのラーメン屋無料券 激レアである。」

「よし、行くぞお前ら。」

「あ、待ってよリュウくん！」

「ちょ！？置いていかないでください！」

「待ちなさいよ〜！」

龍二とクルルとアルスとフィフィは、グラウンドの出口へと駆け出して行った。

って、俺放置ですかい・・・

・・・。

さ、俺も帰るか。

帰ってTODDしよっつと

第九十二の話 <特別編>必殺技特集part1(後書き)

今回の特別編を読んでくださった皆様、ありがとうございました！  
次回から普通の話です。

え？何でライターってあんな黒い技ばっかなのかって？ふふ、それはですね・・・

ライターは黒装束な上に・・・

心も真つ黒ですから ククク

ああ、引かないで・・・。

えっと、またいつか必殺技集やります。ウケなくてもやります。今度はアルスとクルルにしようかな？

あ、それではまた！！

第九十三の話 あいつら登場（前書き）

あいつら＝？？？



「……。」

「はぁ……。」

暇だよ……すっごい暇だよ……和室で大の字に寝転がってるの飽きたよ……。

「むみゅ……。」

「ホント暇ですね……。」

おもしろいこと無いかな？いや、いきなりドカーン的なこと起らないかな……？

【ドカーンカーンカーン……！】

「……！！！！……？……？……？……？」

つていきなりいいいいいいいい！！……？……？

「ちょ！？魔王、何してんの！？」

「ふええ！？私！？」

「違うの！？」



「違う!」

何でもかんでも私の仕業だと思っにゃ!あ、噛んだ。

っつかそれより何が・・・?

「イエーイー!いきなり登場だ!」  
「ウフフフフ!」

.....

何あれ・・・?

「おゝい龍二よゝ!いるかゝ!」

・・・いきなりリビングの扉を破壊して入ってきたのは、変に派手なシャツ(後から聞いたら、アロハシャツだつて)と白い短パンを穿いた男の人と女の人。男の人は何だか無精髭が妙に似合ってるスマートな顔で、女の方は茶色の髪の毛を耳の辺りでクルンとカールにしてて小顔・・・

うん、全然知らない人。

「あら?」

「!?!?!?」

あ、やば・・・見つかつちやった・・・って隠れるのが遅すぎたんだけどね。

「おや、どうしたんだ真帆？」

「えーっと、見慣れない子が二人いるんだけど。」

「!?や、やば・・・。」

「え、えっと・・・。」

「あの・・・。」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

み、見られています・・・すごい見られています・・・。

目線合わせようにも、何だか合わせづらいです・・・どうしよう・・・。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「・・・あ、あの・・・。」

あ、アルス行け行け！誰なのか聞いて！

「えつと・・・その・・・あなた達はだ」「かああああああわ  
いいいいいいいい！！！！」「ってふみやあああああああ  
！！！！?？」

!?猫!??つてみぎゃあああああ!!!

「可愛い〜!何この子達、マスコットみたい」

ぐ、ぐるじ・・・首しまってるってばこれ・・・カナエちゃんとりヨウコさんよりきつい。

「は、ハニー！僕なんかよりもその子達の方がいいのかい!？」

へえ!？

「!？違う、違うわダーリン!」

はあ、はあ・・・やっと離れた・・・。

「何が違うんだ!？」

「この子達は可愛いわ!でもあなたは・・・素敵よ!」

え、何がどう違うの？

「・・・ハニー・・・ごめん、君を信じてあげなくて・・・。」

・・・ありえ?何?すつごいしんみりしたムードに・・・。

「いいのよダーリン・・・私はあなたの物なんだから・・・。」

「ああ、ハニー!何て嬉しいことを言ってくれるんだ!僕は、僕は今、猛烈に感動している!」

「私もよ、ダーリン!」

「例え世界が敵に回ろうと、君を手放したりなんかしない!」

「ダーリーーーン!」

「ハニーーーー!」

【ガシィ!】



「龍閃弾。」

【チユドオンー!!】

「ぐつはあああああー!!!!」

!!????

「黙れバカども他所でやれボケ。」

あ、リュウくん帰ってきたあ……。

「り、リュウくん……。」

「リュウジさん……。」

「よ、ただいま。」

『今帰った。』

「……いや、ただいまなのはいいけどさあ……何今の?」

ファイファイが冷静にツツコミ入れた。

「……やれやれ……何バカみたいに回ってんだ、





「アンタらがいない間に色々あってよ。しゃーねえから家に置いてやってんだ。」

「色々？」

「行くあてもないのにホッポリ出すわけにゃいかんたる。」

「ふむ・・・その色々というのにふか〜い訳がありそうだねえ。こゝんな小さい子もいるし。」

「.....」

あ、小さい子っていうのはフィフィのことね。この世界にはフィフィみたいな人いないもんね〜.....

「それと〜？その剣は何？」

「拾った。」

『ひろつ.....!?!?』

「おお!? 剣が喋ったぞ!?!?」

「すごいじゃない!?!? どういう仕掛け？」

『そ、そこは触るな!?!?』

.....どこ触っても一緒じゃないの？

「お〜い、そゆことは気ニシナイでいいだろ別に。」

「そうね、そういう細かいことは気ニシナイね。」

「そうだね 気ニシナイだね」

「でしょ〜」

「あはは 君と意見が合うなんて、何て幸せ者なんだろう僕は」

「私も同じこと考えていたわ、ダーリン」

「ハニー.....」

「ダーリン.....」





もうこの一言に尽きるよ・・・リュウくん、意外と苦労してるんだね。

「まあ、慣れだ慣れ。気ニシナイってことで。こんくらいのこと  
で苦労してたらどっかのドSみたいにハゲるからな。」

・・・あれ？何だろうこの罪悪感めいたもの？

「こら、ハゲにハゲって言ったら失礼だろう？」

「あなた、それは違うわ。今はハゲてなくとも進行して行って少  
ずつハゲていくのよ。」

「いえ、あなた様も違います。」

「アルス、ツツコミ冴えてるな。」

和室へと飛んでいったご両親が居間へと戻ってきてそうそうすごい  
こと言ってる・・・そんなハゲって連呼してたら怒られるよ・・・

「ま、それはとりあえずドブに落としておいて。」

何であえてドブ？

「とりあえず自己紹介でもしたらどうだ。」

「あ、はい・・・えと、アルス・フィートです。」

「クルル・バステイって言います！」

「フィレイド・フィアラ。フィフィって呼ばれています。」

『エルフィアンだ。エルとでも呼んでくれ。』

「ははは、礼儀正しい子達じゃないか。」

「ふふふ、そうね。可愛いし。」

・・・“可愛い”って言葉がトラウマになりそうです・・・。

「では改めまして、僕が龍二の父親、荒木 省吾。」

「同じく母親、荒木 真帆。」

「二人揃って、ラブラブ夫婦、荒木ンジャー!!」

いや二人揃わなくても!?

「な?バカだろ?」

「・・・うまく言えません。」

リュウくんも呆れるくらいの暴走っぷりだね・・・。

「で?話し変わるが、親父とお袋はいつまでここにいるんだ?」

「そうだな、明日までだな。」

「ありや、えらい短いな。」

「仕事もあるしね、しょうがないわ。」

「そか。ならしょうがねえ。」

・・・リュウくん、寂しくないのかなあ?

「さ、今日の晩飯は豪勢に行ってくれたまえ!久しぶりに思い出話

に華を裂かせようではないか！」

「あなた、漢字が違うわ！“裂かせよう”じゃなくて“割かせよう”よ！」

「それも違うつての。“はかせじゆう博士号”だろ。」

「三人とも違います。特にリュウジさん違います。」

さすがアルス。冷静にツッコミいれてるね。

（夕食時）

「ははははは！いやあ相変わらず龍二は料理がうまいなあ！この麵の固さなんて僕好みだ！」

「うふふふふ！龍ちゃんもお母さんを超えたわね！さすが我が子！」

「麵茹でただけだけどな。ほとんどお袋が作ったようなもんだろ？」

「な！？そうだったのハニー！？」

「そうなのよ。ダーリンに喜んでもらおうかなって」

「ダメじゃないか。火傷してしまっただらどうするんだい？もしそうになったら僕は・・・僕は！！」

「ダーリン・・・嬉しいわ、私なんかの為に・・・。」

「君のためなら、例え火の中水の中・・・。」

「何なら今から火の中水の中に二人仲良く心中してくるかポケナス夫婦？」

「す、すいません・・・。」

「……………えっと、時間は進んで夕食、今日は久しぶりに会ったというわけで、リュウくん一家と一緒にリュウくんの大好物のラーメンを食べてます……スープがおいしいなあこれ……」

「あ、あはは……楽しそうですね……」  
「モチー!」

声揃えて即答しました。

「いやあしかし、何だかいいねえこういうのも。」

「そうね。今までは三人でラーメン食べてたけれど。」

「……あ、そつか……久しぶりに会ったのに、水差しちゃってるもんね私達。」

「……その、すみません何だかボクらのせいで……」

「いやいや、気ニシナイさ!」

「そうよ?気ニシナイよ?」

「……でもなあ……」

「おいおい、そうかしこまるな。」

「……」

「もう、暗いわね……あ、何なら今から思い出話でもしましょうか?龍ちゃんの子供の頃のお話でも。」

「……!」

「リュウくん……?」

「へえ、おもしろそうね。」



第九十三の話 あいつら登場（後書き）

はい、随分前に言っていた龍二の両親です。えっと、思ったこと。

キャラ濃いなあ・・・。

第九十四の話 思い出話（前書き）

うあああああ！！皆さんが気に入ってくれなかったらどうしようー  
――！！！！！！



## 第九十四の話 思い出話

~~~~~回想~~~~~

司会者、八二一

「八二一て何ですか!？」

司会者、真帆

あれは・・・そうね、龍ちゃんが生まれて間もない頃・・・。

その時の龍ちゃんは、ホント可愛かったわ・・・あの子の笑顔や寝顔、いえ、そのままの顔でさえまさに天使も裸足で逃げるくらい・・・。

(今でも寝顔はすごく可愛いですけど・・・。)

その頃の写真は後で見せるわね。

私達夫婦は、生まれたばかりの龍ちゃんをそれはもう目に入れても

痛くないくらい可愛がってたわ。

失明しかけたけど

(ホントに入れたんですか!?)

(こ、言葉のあやね。。。)

そんなある日・・・

『ほーら龍ちゃん、“抱っこ”と見せかけて拷問コブラツイストよ』

【ギギギ・・・】

(ストオオオオオオオオッブ!!!抱っこ見せかけてって何ですか!?)

(普通に抱っこしなさいよ!)

普通に抱っこしたっておもしろくないかな?って?

(・・・よ、幼児虐待・・・)

その時の龍ちゃんは・・・

『キャハハ』

とっても楽しそうに笑ってたわ

（ ）（ ）（何で！！？？）（ ）（ ）

「さあな。」

一通り抱っこし終えて、天気がいいからお散歩行こっかなって思っ
てベビーカーに籠ちゃん乗せて外に出たのよ。

ここまでは今まで通りだったのよ・・・でもね。

（ ）（ ）

横断歩道に差し掛かった時、私達に向かって大型トラックが突っ込
んできたのよ。

（ ）（ ）（ええ！？）（ ）（ ）

不良ぐらいだったら左手一本で倒せる私だけど、さすがにトラック
は無理だったわ。

（ ）（ ）（・・・）（ ）（ ）

ホント、その時は死ぬのを覚悟したわ・・・。

（ ）（ ）？無事だったんですか？（ ）

ええ。

『マイエンジェルがどうしたんだい!?!』

『自ら身を守るためにトラックを吹き飛ばしたわ!?!』

『ほ、ホントかい!?!?』

『ホントよ!?!』

『くっそーこつしちやいられない!今から帰るよ!?!』

『お祝いの準備しておくわ!』

(・・・あの、すつぐくツツコミいたいんですけどいいですか?)

?いいわよ?

(・・・何でトラック吹き飛ばしてお祝い?)

フッフ、それはね、我が家の家訓の一つにあるのよ。

“自分の身を守れたら一人前”

息子が一人前になったらお祝いするのは当然でしょ?

(早過ぎです!!一人前ってまだ赤ちゃんです!!それとトラック吹き飛ばしたリュウジさんはその頃から異常です!!!!)

(いきなり俺に矛先向けられてもねえ。)

話戻すわね?その後、ダーリンが帰ってきて、親戚総出で大宴会よ

(と、トラック吹き飛ばして宴会って・・・。)

(すごいね。。。)

まあその後皆して酔いつぶれたけどね。特にお爺ちゃんが。

(何故か予想できた。。。)

まあホント、その日は大騒ぎだったわ。

親戚のほとんどが全治一週間のケガしてたし

(何したの!?!??)

気ニシナイ

それと、今でも我が家には『トラック吹き飛ばし記念日』があるし

(すごい記念日!?)

あ、そういえばそのトラックの運転手さんはどうなったかは知らないわね。

(。。。)

(いやあの時はホント嬉しかったよ。これで我が息子も一人前かと思つた)

(ですから早過ぎですってば!)

まあ、それよりもっといい思い出があるのよ。

(そ、それよりもって。。。)

やっぱり、我が子となったら初めて喋った言葉が印象的よね？

(まあ、そうですね。)

それは・・・三歳のある日のことだったわ。

『・・・アー・・・。』

『！？あ、あなた、あなた！！』

『何大ハニー！？』

『あなた！“だい”は漢字にしなくてもいいのよ！』

『わかってたさ！それよりどうしたんだい！？』

『アー・・・ウー・・・。』

『！も、もしや！バイ ハザード！？』

『ゾンビ化じゃないわ、喋るのよ多分！』

『な、なぬう！？』

『アー・・・。』

『ほ、ほら、パパとママだよ、言っでござらん！』

『言っで！とりあえず喋っで！』

『アウー・・・。』

『も、もうちよい、もうちよい・・・！』

『頑張っで・・・！』

『・・・りゃーめん』

((ラーメン!?!?!))

『し、喋ったわ!あなた、喋ったわよ!』

『うおおおおお!お祝いだああああ!!--ラーメン屋へ行くぞおおお!!--!』

『イエッサー!--!』

『りゃーめん。』

(・・・その頃から好きだったんですか?ラーメン。)

(聞かれてもそんなん覚えちゃいねえから知らん。)

ホント、感動的だったわあ・・・あの時ボイスレコーダーを準備し忘れてたのをどれだけ後悔したか・・・。

あ、ごめんなさいね。続き続き。

それから月日は流れて、龍ちゃんが四歳になった時・・・あの頃の龍ちゃんは無邪気で可愛かったわ

(!?!?ちよ、鼻血!?)

あ、ごめんなさいね。【ズズズ】

() () () () ()
() () () () ()
() () () () ()
() () () () ()

『ははは、そうかそうか。そんなにすごいか？』
『すごいすごいー！』
『ううん、パパ調子乗っちゃうぞー？』
『わー！』

私はリビングでそんな二人のはしぎ声を聞きながらアフタヌーン
ティーを飲んで楽しんでたわ。

『いつくぞー龍二！昇龍拳！』

【ドカーン！】

『えーい！食らえ父ちゃん！』

【ズドーン！】

『うお、やったな？そりゃー！』

【チュドーン！】

『父ちゃんすごいや！じゃオレもー！』

『ははは、どこからでもかかってきなさいー！』

『てーいー！』

【ゴキゴキゴキー！】

『おおおおおおおおー！！！』

『てーいー！』

(((! ?)))

ってというのがよくあるパターンだけどそんなの無かったわ。

(((あらら。)))

【ドドドド】 コケた

そんな龍二も幼稚園に入ったら、それはもうやんちゃだったらしいわよ？

先生曰く、壁壊しちゃったりしたらしくて。

(((すごー! ?)))

お昼寝してたら、イヌや猫や小鳥とか小動物が周辺に集まってきたり。

(((ええええ!! ? ?)))

とても和やかだったわ。

(((……壁壊したのはとても和やかとは言えません。)

それ以外は問題も無く過ごしてたのよ。

でもねえ……一つだけ問題起こしちゃったのよ。

(ほえ……)

でもね、そんな龍ちゃんでも絶対しなかったことがあるの。

((?))

龍ちゃんは、絶対に友達を見捨てるような真似はしなかったわ。誰かがいじめられたら、全力で駆けつけるし、悩みにだって相談に乗ってあげたりしてたんだから。

((……))

もちろん、今でもそれは変わらないと思うわ。中学を卒業してから一緒に住んでいないけど、龍ちゃんを見たらわかる。

(そうか?)

そうよ。龍ちゃんって結構わかりやすいんだから。

うっかりお友達をケガさせちゃった時とか、私達から目線逸らしてたからね。

(あ、そうだった?)

ええ。お母さんには全てお見通しよ。

(もちろん、父さんもだぞ。)

(はいはい。)

ふふ。それに、小学校卒業間際にお引越す際、花鈴ちゃんからもらったそのヘッドフォン、車の中でずくと抱えたまんまだっ
たわよね？

(まあな。)

龍ちゃんはそういう意外なところで素直なところ、ちっとも変わって
ないわね。

(そっかねえ？)

ええ

~~~~~回想終了~~~~~

くクルル視点

「うん・・・私から話せる一番の思い出話は、これくらいかな。」

「ほえ〜・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

『・・・』

リュウくん、小さい頃からすごかったんだなあ・・・。

「・・・あの、リュウジさんのその強さを見て、異常だって思った



「ことありませんでした?」

「そんなこと思ったこと無いわ。」

「そういえばそうだったね。」

「……………」

「あ、そういえば龍ちゃんが生まれる前に」

「?????」

「ラーメン食べたのが原因かな?」

「どんなラーメンですか!?!」

「あ、それでラーメン好きになったのかなあ?」

「そーゆー問題じゃないです!」

「ま、まあまあアルス……………」

ふふ〜ん、謎(?)は全て解けた〜

……………って言っても最強の秘密はわかんなかったけど。

「ところで龍ちゃんの昔の写真、後で見る?」

「見たーい!」

「見たい……………ですノノノ」

「見たい見たい!」

『見てみたいな。』

「どうでもいいな俺は。」

だって見たいもん。リュウくんの可愛らしい姿見たいもん

「あはは、しかし、こう振り返ってみればホント昔はいろいろあつ

「たなあ」

「そうねえ、あの頃が懐かしいわ」

「じゃ、リュウくとまた一緒にこの家で暮らせばいいんじゃないの？」

「ああ・・・まあ、そうしたいんだけどね。」

「あれ？何か私変なこと言ったかなあ？言いよどんでるし。」

「・・・何か問題でもあるんですか？」

「いや、特に問題はないさ。」

「そうそう。今はちよっと難しいけど、近いうちにこっちに戻ってくるかもしれないしね。」

「ふん・・・。」

「まあ、それはそうと・・・龍ちゃん、私達寝るところある？」

「きつたねえ寝室ならあるけど？」

「ふ、僕達二人の愛にはどんな汚れさえも浄化させてしまうZE」  
「素敵・・・。」

「・・・あ、これはまた二人の世界に入り込んでしまうかも・・・。」

「食器片付けろよ。」

「あ、はい。」

「デザートいるか？」

「チョコー！」

「はいはい。」

リュウくんは相変わらずスルーなんだね！。

さ、チヨコチヨコ

「ダーリン！愛してるわー！！」

「ハニー！！」

リュウくんが「テレビの音が聞こえねえだろーが。」って悪態つきながら二人にキックを放ったのはちょっとしてから。

第九十四の話 思い出話（後書き）

ううううん・・・これは・・・微妙？どうなの？自分ではわかりません・・・。

ちなみに抱っこと見せかけて拷問コブラツイスト、高い高いのようなコークスクリーシザーズは、遙か前に三月さんが感想で言ったことをそのままネタにしました。俺自身がブッと来ましたんで

第九十五の話 親の存在（前書き）

ふ、二人に似つかわしくないシリーズ！

## 第九十五の話 親の存在

（クルル視点）

「はぁ・・・いいお湯だったわぁ・・・。」

「あぁ、ハニー・・・君の湯上り姿はまさに僕の目の前に舞い降りた女神・・・美しい・・・。」

「そういうあなたのその逞しい上半身は、例えどのような攻撃さえも跳ね除けてしまう、まさに鋼鉄の鎧の如し・・・あぁ、眩しい・・・。」

・・・えつと・・・

さつきリュウくんのパパさんとママさんがお風呂から上がってきて、今は二人ともバスタオル一枚だけ。うん、ママさん確かにきれいだよ？お肌なんてピンク色に火照つてて、すっごくきれいだし。パパさんの上半身もほどよく黒く焼けてて、筋肉とか逞しいし。

「あぁ、ダーリン！！！！」

「ハニー！！！！」

【ガシィ！！】

・・・目の前で抱き合わないで欲しいです。切実に。







リュウくんはさつきから洗い物してたから、お風呂は一番最後。

「さあハニー！今宵は頑張るぞ！」

「ふふふ、そうね！夜中のファイティングバトルと行きましようか

！」

「「？」」

夜中の？

「！？ちょ、まさか二人とも……。」

「ファイファイ？」

「ふふふ、そのまさかよ。」

「ははは、そのまさかさ。」

????

「ち、ちょっと待って！アルスとクルルがいるのにそんな……！」

「ねえファイファイ？何の話？」

「よくわからないんですけど。」

「あ、アンタ達にはまだ早いわよ！」

????

「ははは、大丈夫さ！出来るだけ静かにやるからさ」

「うふふ、そうね、近所迷惑にもなるしね」

「そういう問題じゃないわよ！」

むう……わかんない……。

「……えっと、いきなりですけどすいません。」

「?何だいアルスちゃん?」

「あの、その……。」

?……………あ、なるほど。

「……せめてパンツは履いてください。」

「ん?おお、ごめんごめん」

危うく見えるところだった……//>//>//>//>//

「まあ、あなたっいたらうつかり屋さんね」

「あの、あなたも着た方が……。」

「あら、そう?」

はい。

〈数分後〉

「いやいやまさかギリギリだったとは」

「うつかりかり」

「うつかりじゃないわよ……。」

それぞれ青とピンクのパジャマに着替えた二人。柄はハートだった。

「さて、と。」

突然、二人がコタツの前についていうか私達の前に座り込んだ。

「・・・ところで、君達。」

「?はい?」

「なあに?」

「君達は、ここに来てどれくらい経つ?」

?

「えつと・・・数えてないですね・・・でも結構長いですよ?」

「うん。」

「何か慣れちゃったわね。最初は戸惑ってたけど。」

『私はずいこの間来たばかりだがな。』

あ、エルはそうだったけ。

「でもどうしてそんなこと・・・?」

「はは、いや何。聞きたかっただけさ。」

「ふふ。」

????

「・・・しかしまあ、あの子は全く変わらないな。」

「え、リュウジさんのことですか?」

「ああ。あの子は昔っからお人好しだね。」

「ふふ、知らない人でさえも躊躇うことなく助けるのよ。」  
「時々、余計なお節介とも捉えられることもするしね。」

へえ……。

「素性の知らない君達をここに居させたのも、あの子の優しさだと  
思うよ?」

「一時はケガした子犬を家に連れて帰ってきて必死に治療してあげ  
てたわ。」

……。

「……まあ、あの子がここにいたら知った口で言うなって罵倒さ  
れるんだろっけどね。」

へ?

「……それ、どういう意味なんですか?」

「あ、ああ……それは……。」

急に深刻な顔になったパパさんママさん。

「……さ、この話は終わろうか?」

「そうね」

ええ!?

「聞きたいのに!」

「ははは、世の中には話せないこともあるのよ」

「そうよ、クルルちゃん」

むっ！

「ほらほら、後で龍ちゃんの子供の頃の写真見せてあげるから」

「やったあ」

「物で釣られるなクルル！」

だっで見たいもん

「ふぁ・・・何だか眠くなってきましたぁ・・・。」

「んみゅ・・・そっぴや私も。」

今何時かなあ？・・・あぁ、十二時近いなあ。寝ないと。

「うふふ、それじゃ僕らは・・・。」

「ダーリン、もう私我慢できそうにないわ・・・。」

？何が？

「！！！！？？？ちよ、アンタ達どこで！？」

「よし、やるうかハニー！」

「やりましようダーリン！」

へ？へ？へ？

「ちよっとストッププーーーーー！！！！」

「いつくぞーハニー！必殺！愛の右フック！」  
「甘いわダーリン！愛の外受け！」

【バシイー！！】

・・・え？

「え？」

「え？」

『え？』

「んむう！ならばこの腕から繰り出されるスイートメモリーラリアットを受けてみよ！」

【バキィー！】

「ぐは！やるわねダーリン！ならば私のセクシービーム真空飛び膝蹴りを受けてみなさい！」

【バゴオンー！】

「おう！？見事だハニー！お返しにラブラブエルボーを食らえ！」

【ズドンー！】

「はぐ！それじゃあこっちはラブリーサマーソルトキックよ！」

【バシユウー！】

「ぬごぉー！ふふふ、さすがハニー！相変わらずそのキレイな足で繰り出される足技は見惚れるよ！」



「えつと・・・はい。」

「はいはい。」

『口がないから無理だ。』

エルには言っていないよ？

（深夜）

.....

「・・・みゆ。」

んん・・・トイレ行きたい・・・。

「んしょ・・・。」

【ゴソ】

「スー・・・スー・・・。」

「むにゃ・・・。」

。アルスとフィフィを起こさないように、ゆっくりと起き上がる・・・。



「トイレ〜トイレ〜・・・。」

眠い〜・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ありえ？何だろ。リビングから光が漏れてるような・・・。

誰か起きてるのかな？

「・・・・・・・・。」

・・・うう、何だか怖いなあ・・・。

でもトイレ行きたいし・・・どうしよう・・・。

「・・・・・・・・。」

・・・誰がいるのか確認してからトイレ行こうと。

【スッ】

襖をちよこつと開けて、リビングを覗きこんだ。

「ねえあなた、ホントにいいのかしら？」

「・・・仕方ないさ、こつするしか。」

あれえ？パパさんとママさんだ。こんな時間に何してるんだろ？

「あの子のことだ。このことを話したら自分も付いていくと言って聞かないだろう。」

「でも・・・息子に隠し事は・・・。」

「・・・確かに僕だつてきついき。確かにあの子は尋常じゃないほど強い。それでも、子供を危険な目には合わす親なんていないよ。」

「・・・。」

「だから、黙っていよう。」

僕らは旅行じゃなくて、国際ボランティアチームの一員として海外で働いているということとは。」

「・・・？ぼらんていあ？チーム？

「・・・でも、まさかこんなことになるなんてね。」

「ああ・・・最初は小さな紛争だったのに・・・すぐ帰れると思ったのに・・・。」

「・・・爆破テロのせいだ・・・ね。」

？爆破てる？

「・・・今思い出すだけでも腸が煮え練りかえるよ・・・でも、目の前で苦しんでる人達がいるのに、僕らだけがおめおめと帰れるわけがないしな。」

「でも、そのおかげで龍ちゃんは今までずっと・・・。」

「いや、一人じゃないさ。」

「？」

「あの子には、学校に友達が大勢いる。それに、今家にはあの子だけじゃなくて、アルスちゃん達もいる。素性はよくわからないけど、いい子達だからその点は心配いらないよ。」

「・・・そうね。」

「・・・でも、僕らは親としては失格だな。子供の成長を見守るはずの親が、子供をほっぽり出して・・・。」

「あなた・・・。」

「あの子は・・・僕らを怨んでいるのかもな・・・。」

・・・

「・・・それはわからない。けど、思い悩み過ぎたら体に毒よ？」

「でも・・・。」

「・・・だから、今は頑張りましょう。あつちの仕事が片付いたら、すぐここに戻ってこれるように。元の生活に戻るように。」

「真帆・・・。」

「・・・でも、笑っちゃうわね。世界一周旅行と見せかけて、ホントは世界各地の支部での用事のために世界回ってるんだから。」

「ははは、ある意味世界一周だけだね・・・旅行ではないな。」

「・・・まあ、ハワイ旅行の帰りみたいに見えたかしらね？」

「あのアロハシャツは完璧だろう。」

「そうかしら？」

「む、どういう意味だいそれ？」

「気ニシナイよ、あ・な・た」

「・・・ははは・・・それじゃ、そろそろ寝ようか。明日のフラ

イトは早いぞ。」

「そうね。」

・・・

【パタン】

「・・・パパさん・・・ママさん・・・。」

二人が立ち上がったと同時に、襖を閉めた。

“ぼらんでいあ”とか、“てる”とかよくわかんない・・・でも・・・

「やっぱりホントは、一緒に暮らしたいんだ・・・。」

・・・

“親として失格”・・・

「……リュウくん……。」

リュウくんは……ホントに寂しくないの？パパさんとママさんと一緒に暮らしたくないの？二人のこと、怨んでるの？

どうなの？……リュウくん。

（翌朝）

【チュンチュン……チチチチ】

「……ん……。」

……あ、朝だあ……。

【ゴン】

「ん……くあ……。」

布団から上半身を起こして伸びる……っと。

「……………」

……そういえば、あれからそんな寝てない気がするなあ……

「……パパさんとママさん、どうしたんだろ？」

……ちよつと気になってきちゃった。

【スツ】

「お？起きたかクルル。」

「あ……リュウくん。」

襖を開けてまず目に入ってきたのは、ヒヨコのマークが付いたエプロンを着たリュウくんが台所で朝食の準備をしていた。

「珍しいな、オメエが一番たあ。」

「……パパさんとママさんは？」

「ああ、もう出てったぞ。」

え？

「ほら。」

【ピレ】

？メモ？

『龍ちゃんとアルスちゃんとクルルちゃんとフィフィちゃんとエルちゃんへ。』

私達は、朝一のフライトに乗らないといけないからもう出ます。いつ帰ってこれるかわからないけど、それまで元気にしててっちょそれじゃグッバイサヨナラまた会う日まで〜

b y 父さんと母さん  
『』

．．．．．行っちゃったんだ．．．。

「まったく、挨拶もなしかって話だ。」

．．．。

「．．．ねえ、リュウくん?」

「んあ?」

．．．多分、余計なお世話かもしれないけど．．．聞いておきたいな。

「リュウくん、パパさんとママさんと一緒に．．．住みたい?」

「．．．。」

あう．．．怒らせちゃったかなあ．．．?

「……知りたいか？」

「……うん、うん……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

【クシヤ】

「？」

「そりゃ聞くだけ野暮ってもんだ。」

頭を撫でられて誤魔化された。

「……まあ、しょうがねえさ。」

「ふえ？」

「あの二人も、なんだかんだで傷ついた人間放っておける性格じゃないしな。」



・・・・・・・・え・・・・・・・・。

「リュウくん・・・もしかして知って・・・」

「んあ？」

「・・・うん、何でもない。」

「そうか。よし、そんじゃそろそろ連中起こすか。」

・・・・・・・・。。。

「あ、そうそうクルル。」

「え？」

「ひとつ言わせてもらっけどな。」

親父もお袋もお前らもひっくるめて、家族を怨んだことはないぞ？」

！！！！

「さ、起こすぞ。」

「ね、ねえリュウくん！今のもっかい！もっかい言って」

「は？」

「ねえねえ言ってる言ってる！」

「おっ！お前から起きるっ。」

「無視い！？」

第九十五の話 親の存在（後書き）

シリアスです。あの二人がシリアスだと思つと何だかおかしいと思つた方、いるかも・・・？

第九十六の話　こーゆー一日（前書き）

龍一とエルと珠が意外なことに・・・！？

## 第九十六の話　こーゆー一日

（龍二視点）

「ふあゝあ……。」

『……スー……スー……』

ども……ああ眠い……。

現在地、公園の林……木漏れ日が差し込む中、太い木を背もたれにしてまったりお昼寝モード。地面は柔らかい草で覆われていて、めちやくちゃ気持ちがいい……あ、アルス達は花鈴の家で遊んでるだろ。

ついでに言うと、俺のすぐ隣で木に立て掛けてある鞘入りのエルは寝息を真つ先にたてていた。剣のくせに俺より先に寝るなバカ。

いや、しっかしねみゝわこれ……。

『龍二さん。』

「?……おお、珠か。」

向こうからトットトットと走ってくる猫発見。久しぶりの登場だな。

【ポス】

で、いきなりまったりしている俺の腹の上に飛び乗った。こら。

「何故飛び乗る。」

『寝心地がいいからです。』

「あ、なるほど。」

『納得してくれて安心です。』

寝心地がいいと言われて怒るような奴じゃないぞ俺は。

「さて・・・久しぶりだな、珠。」

『そですね。』

「最近何してた？」

『例によって例の如く、放浪しました。』

「どこら辺を？」

『下水道を。』

「どけ。」

『いやですー。』

「汚ねえ。どけ。」

『ひどいですー。』

「さっさとどけ。燃やす。」

『燃やすのだけは勘弁してください。大丈夫です。ちゃんと洗いました。』

「何でだ？」

『水溜りで。』

「猫の串焼きってうまいのか？」

『ごめんなさい嘘ですちゃんと石鹼で洗いましたから。』

「ならよし。」

『まあよその家の石鹼ですけどね。』

「許可は？」

『猫が家の人に許可求めるとびっくりして倒れます。だから無許可。』

「なるほど。」

『簡単に信じてくれてよかったですー。』

「でも勝手に侵入するのは悪い。」

『それもそうですね。』

「まあ過ぎたことなんざどうでもいいけどな。」

『でしょー?』

「だな。」

『そっちは最近どうですか?』

「昨日親父とお袋が家に来ているいろ。」

『いろいろ?』

「おう、いろいろ。」

『いろいろ?』

「いろいろ。」

『いろいろ?』

「いろいろ。」

『いろいろ?』

「いろいろ。」

『いろいろ?』

「いろいろ。」

『いろいろ?』

「りりりろ。」

『やめませんか?無限ループですよ?』

「そだな。さすがにこれは俺でも飽きる。」

『読者の皆様も相当飽きてますよ。』

「だな。」

『にしても、龍二さんのご両親ですかー。見てみたいです。』

「いずれな。帰ってきた時会わせてやる。」

『あれ?もついなんですか?』

「日本から出て行っちゃったよ。」

『そうですかー。残念です。』

「ドンマイ。」

『気ニシニヤーイ。』

「あ、パクった。」

『ずっと前からパクってますよ?』

「ありゃ?そだっけ?」

『はい。』

「そうか。なら仕方ない。」

『度量が広い人ですね。』

「気ニシニヤーイ。」

『それにしても、今日は天気がいいですね。』

「だな。あつたかいぜ。」

『フニヤ〜・・・眠くなってきました・・・。』

「そだなあ・・・俺もそろそろ。」

『うにゃ〜・・・おやすみなさいです〜・・・。』

「おやすみ〜。」

しばらくすると、珠は体を丸めた状態で俺の腹の上で寝息をたてはじめた・・・あつたかいなこいつ。腹巻代わり。

あ〜にしても・・・俺もそろそろZZZZ・・・。



ライター視点

『ふに……』

『スー……スー……』

「くゆ……」

木にもたれながら無防備な状態で眠っている龍二。その腹の上で眠る珠。龍二の隣で立て掛けられたまま寝息をたてるエル。その光景は、とても和やかだった。

しかし、この和やかな雰囲気に変化する……。

『チチチチチ……』

やがて、掌サイズの小鳥が林に舞い降りてきて……

『チチチ……』

そのままエルの宝玉が付いた柄頭にとまった。

『チチチチチチ……』

さらに二匹が珠の背中に乗った。

【ヒラヒラヒラヒラ……】

さらにさらに今度はアゲハチョウが三匹、龍二達のもとへと飛んできて、龍二のヘッドフォンにとまった。

【ガサガサガサ……】

さらにさらにさらに草むらが揺れ……。

【ガサリ】

「わん。」

中からとても小さな子犬が現れた。

【テテテテテテ】

そして小さな足で龍二の脇のどこまで来ると……。

『くう〜ん……。』

丸まって寝始めた。

【TTTTTTTTTTTT】

さらにさらにさらにさらに、今度は龍二達が眠っている木の上からシマリスが……何故公園にいるのかは謎である。

シマリス達は、龍二の髪にポスン、と音をたてて飛び乗り、そのま

ま目を閉じた。

ね？変化したでしょ？・・・いや、レベルアップしたがいいかな？

〽数分後・・・〽

「うーん、困ったなあ・・・。」

一人の冴えない服装をした、グルグルメガネを掛け、今時ベレー帽を被った時代遅れな青年が林の中をスケッチブックを抱えたまま歩いていた。

彼の名前はえが絵画 描来かきたいのすけ鯛乃助。何つーか親のネーミングセンスを疑うかのような名前をした青年だ。趣味は絵画。まさに名前通り。

彼は今年、ある三流美術大学を卒業して画家を目指すために日々奮闘しているが、元々の容姿も原因なのかもしれないけど、貧乏生活を余儀なくされて、アルバイトと親の仕送りでどうにか生活を維持しているほどだった。そんな彼の愛用の道具は、絵の具とスケッチブック一冊だけ。他の道具を買いなんてもつての他。

しかし、彼に逆転のチャンスが訪れる。近々全国レベルの絵画コンテストが開催され、それに自分の絵を出展させようと考えていた。

理由は、最優秀賞には何と一千万。せめて百万にしろとツッコミたい。

そんなわけで、彼は出展するための絵を描きにこうして歩いているわけだが・・・そのモデルがない。

風景画なら大得意だが、コンテストでは人物像を描かなければならないという限定ルールがあった。しかし、生憎と彼は人見知りするタイプであり、モデルを頼もうにも億劫になってしまう。裸婦画は芸術的にもポイントが高いらしいが、そんなものに描けるわけがない。ならどうやって大学卒業できたんだコラとツッコミたい。そしてどうして画家になろうとしたのかツッコミたい。

「誰か・・・自然と一体化になったような人はいないかなあ・・・」

「どなんんやそれ。裸族か。マサイ族か。」

「はあ・・・もうダメかなあ・・・諦めるか・・・」

本日、百回目を越えたため息を吐いた描来鯛乃助。すでに諦めモードだった。

しかし。

「?.....!!!!!!???.?」

彼は見てしまったのだ。

「くー……。」「  
(-、-)

様々な動物達と一緒にになって眠る、自然と一体化したかのような少年を。

「!!!!!!オウ!?ワンダホー!ビューティホー!!トレビアー  
ーーン!!!!!!」

いきなりのことと突然とち狂ったかのようになり何言ってるのかわからないカキタイノスケ(もう漢字書くのめんどくさくなりました by 作者)であった。

「……こ、これだ……これこそ僕が求めていたモデルだ!!!」

彼は素早くスケッチブックを開き、写生を始めた。

↳ 数日後、荒木宅

朝刊にて……

『天才現る!? 全国絵画コンテストで最優秀賞を獲得した新人画家  
! 世界的にも有名な審査員でさえも唸るその絵画は、まさに奇才!  
』?』

「……ふくん、すごい奴だなこいつ。どんな絵描いたんだ?」

「見てみたいね?。」

「世界中でも唸るくらいですよね? 確かに見てみたいですよ……。」

「ふくん、絵かぁ……私絵好きだし、興味あるなぁ。」

『ほお、絵か……どのような物か見てみたいものだ。』

「ミッ。」

龍二達は、その奇才が龍二と珠とエルをモデルにしたというのを知らない……。

その後、エガカキタイノスケはどうなったかというところ。

彼は貧乏生活から脱出し、プロの画家としての人生を歩み始めたという。

第九十六の話　こーゆー一日（後書き）

ほのぼの感を出しまくってた結果、こつなりました。え？何故に動物が寄ってきたか？

それはあれです、龍二だからです



## 第九十七の話 ファミレスで今後の話

くアルス視点く

「私これがい〜！」

「えっと、それじゃボクはこれで。」

「あいよ。」

えっと、どうもです。ボクらは今、夕食を食べるために近場にあつたここ、ファミレスという場所に来ています。こういうところは初めてです・・・ちよつと緊張。

「今日は好きなだけ食つてもいいぞ。」

「ホント!？」

「大嘘。」

「」「嘘ですかい・・・。」「」

相変わらず何言い出すかわからない人・・・。

「じゃ注文取るか。Hey、その姉ちゃん。」

誰の真似ですかそれ？

「はい。」

近くにいた店員ウェイтрレスさんが近づいてきた。



「じゃ言っぞ〜。」  
「無視!?!」

うっわぁ、リュウジさん・・・カリンさん怒らせるのはお手の物だなぁ・・・。

「ラーメンとハンバーグステーキセットと生姜焼き定食な。頼む。」  
「・・・お願いします、は?」  
「リバウンド。」

「はいご注文承りました!少々お待ちくださいね!」

仕返しとばかりに笑みを浮かべたカリンさんはすぐに姿勢を正して厨房へと走り去っていった・・・りばうんど?

「・・・ねえリュウくん。カリンちゃんに何言っただの?」  
「リバウンド。」  
「???」

・・・知らない方がいいのかなぁ?そんな気がする。

『・・・どうでもいいが、どうして私を連れてきた。』

リュウジさんの隣に立て掛けられているエルが言った。確かにここには必要はないよね。

「いや、何となくノリで?」

『聞くな。私は食えんのだから必要ないだろう。』

「出番欲しくないのか?」

『うっ。。。。』

「わざわざ出番作ってやったんだからありがたく思いなさいな。」  
『…………』

押し黙るエルでした。

「…………でもさリュウくん。何で今日外食なの？」

「材料がないとか？」

そういえば、何で今日は外で食べるのか聞いてなかった。まあどうでもいい話だからあえて聞かなかったけど…………。

「ああ、実はな。」

昨日から冷蔵庫の中身の物が全部腐ってたからさあ。」

ふん………………………………

へ？昨日から？

「…………昨日からってことは…………じゃ昨日の晩御飯とかは。」  
「ああ、全部アウト。」

【ブーーーーー！！！！】

ボクらは飲みかけのお水を勢いよく噴出した。ええ、そりゃもう。

「安心しろ。三分の一は冗談だ。」

「じゃ残り全部はホントってことじゃないですか！」

「そうともいう。」

「そうとしか言いません！！！」

こ、この人は〜！！

「はいはい、そう怒るな。全部嘘だ。ホントはたまにはいいかな  
って思ってたんだよ。」

「・・・ホントですか？」

「おうよ。」

「・・・じゃこっち見て話してください。」

「そういえば最近チュツ 食ってねえな。」

「リュウジさあああああん！！！」

若干ニヤつきながら嘘と言われても全然信憑性がないんですけど！？

「・・・リュウくん、も一つ気になったことがあるんだけど？」

「？何だクルル。」

「・・・あのね・・・昨日気付いたんだけど、お庭の隅っこにあっ

たあの三つの頭、なあに？」

.....。

「ん、こないだもらった銅像だ。」

「・・・呻いてなかった？あれ。」

「気のせいだ。呪われてない。」

「・・・一番右端の人、頭がピンクのハートマークで目に針刺さってたけど。」

「ああいう物だ。」

「・・・怖いよ、あれ。」

「慣れの問題。いずれはすすから安心しろ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「？アルス？どうしたの？」

「い、いえ・・・。」

ボクは見えてないです。リュウジさんがこないだあの人達の体埋めて首だけ出しているところなんて見てないです。『観葉植物』と書かれた看板なんて見てないです。『観葉植物』と書かれ

「で、話変わるけどさあ。最近どこにも出かけてねえよな？」

「そうですね。ずっと家にいるか、カリンさんの家に行きますよね。」

「だが、遠出はしたことねえだろお前ら？」

・・・そういえば、遠出なんてしたことないなあ・・・。

「家にずっといるのも体に悪いし、今度の休みどっか行くこうぜ。場所はこちらから決めていくとして。」

「具体的にどっいうところへ？」

「そだな。自然に囲まれたところ。いいだろ？」

「行きたーい！」

自然かあ・・・山とか森とかかな？

「こつちの世界の自然ってあんま触れてないだろうし、ちよつどいい。」

「そうよね。私旅に出る前は自然に囲まれて生活してたし。」

フィフィ達妖精族は自然が大好きだからね。

「じゃ、いずれどっか行くというこトで。」

「やったー！」

魔王、周囲からの視線が痛いからはしゃがないで・・・。

「あゝ・・・お待たせしましたあ。」

「お、待ってました。」

そうこうしてるうちに、カリンさんが注文した料理を乗せたワゴンを押しながらテーブルまで来た。

「はいハンバーグステーキセット。」

「はーい」

「生姜焼き定食。」

「あ、はい。」

「で・・・はい、ラーメン。」

「サンキュ。」

大体誰が何を頼んだかわかりますか？因みにボクは生姜焼き定食っていう物を頼みました。

初挑戦です・・・どんな味なのかなあ？

「以上でお揃いですか？」

「ああ、後でデザート注文する。」

「まだ食うの？・・・太るわよ。」

「二キロ増量。」

「はい後でお伺いします！」

若干慌てた様子でワゴンを押しながら去っていったカリンさん・・・  
二キロ？

「・・・アンタ、容赦ないわね。」

お皿からボクの生姜焼きを一枚取ってかぶりつくフィフィ・・・し  
ようがないよね、ボクと共有してるんだから。

「あれは優しい方だと思うが？」

「うまうま」

キョトンとするリュウジさんに、ハンバーグをおいしそうに食べる  
魔王・・・



あれで優しい？

「【ズズ〜】・・・うん、結構いける。」

・・・。

「いただきます。」

リュウジさんのことは深く追求したら負けだなって思ったんで、生姜焼きを一つパクリ・・・

あ、これおいしい・・・。

第九十七の話 ファミレスで今後の話（後書き）

とりあえず今回はいつか遠出するっていうことで、伏線的な意味合いが強いお話でした。

まだ構成できてませんからちょっとかかりそうですけど・・・。

第九十八の話 苦勞人、雅の戦い（前書き）

こんなことになったらいやだな。ってなお話。

第九十八の話 苦勞人、雅の戦い

〔雅視点〕

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・久しぶりの俺視点なんだけど・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・あ、今の犬の唸り声じゃないぞ？

時間は四時間目・・・・・・・・ちょっと先生がいろいろミスをしてしまい、延長。結果、あと少しで三十分経つ。すでにチャイムも鳴っている。

俺のすぐ近くで唸り声を上げている人物は・・・・・・・・誰か大体わかるか？

「・・・・・・・・」

・・・言わずもがな、龍二。

こいつが唸り声を上げてるおかげで、クラス中がシーンと静まり返っている。いや、授業中なんだから当然だけど・・・さっきまでヒソヒソと小さな声で喋っていた奴や、手紙をこっそり前か後ろの席に回していた奴まで、口を閉じてじっとしている。何気に全員脂汗をかいてるように見えるのは気のせいじゃないだろう。アルストクルルなんて小刻みに揺れてるし。先生なんて声震わしながらよく授業が進めれるな。賞賛に値するよ。

でもこれ・・・授業が終わったらやばいんじゃないか？

・・・。

避難しておこう。

【ゴソゴソ・・・】

先生に気付かれないように、こっそり机の下に潜り込む俺。よく防災訓練とかで、地震が起きた時の対処法でやる奴だ。

・・・何故これをするか？そりやお前、俺の席と龍二の席は結構近いんだぞ？

にしても・・・そろそろ授業終わるな・・・。





でも今回ばかりは止めなければならない・・・俺の財産がかかっている！

「おらおらおらおらおらああああああ！！！！」

「だあらもつと落ち着けてばお前！」

「しゃらくせえ！“あいつ”が俺を待っている！！」

「待ってくれてんならそれでいいだろが！」

「俺が待てん！！」

「即答かよ！？」

ああああ、さつき横目で砂と化した花瓶があった気がするけど見てない、俺は見えてない！

「どっけええええええええええええ！！！！」

「へ？うああああああああ！！！！？？」

「きゃああああああああ！！！！？？」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！？？」

「ちょ！？お前集団のど真ん中で振り回すなあああああ！！！！」

よりもよって同じ目的地へと向かおうとしていた学生達の集団に突っ込んでった龍二。こいつもう周り見えてねえ。もはや歩く核弾頭。

『龍二！！私を振り回すな！！』

突然エルが注意しだした。おうそうだ。もつと言ってやれ。

『電撃を放出して気絶させろ！そっちの方が手っ取り早い！！』





「待てええええい!!!」

「『!?!?』」

ああ！誰かと思えば、今までの登場回数たったの二回（？）だけの熱血教師近藤先生が龍二の前に立ちはだかった！かっこいい、かっこいいよ先生！！アンタ出番増えるよ多分！

「荒木！お前の暴挙もここのまだ「邪魔だ!!!」【バコオオオン!!!】  
バイバイキーーーーーン!!!」

・・・登場して十秒も経ってないのに窓の外に消えていった近藤先生でした・・・。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「!?!?ま、待てええええええええええ!!!」

や、やばい・・・もう少して辿り着いてしまっ!そうなら俺は・・・。

だ、誰か止めてくれ!切にこいつを止めてくれ!!!

「待ちなさい!!」

!!!!こ、校長先生!!さすが学校のトップ……。

「あなたはまて「サンリオ。」どうぞお通り下さいませ。」

校長おおおおおおお!!アンタ何通しちゃってんのおおお  
おおおおお!!

「……クスン……。」

……チラリと横目で見てみれば、校長先生の目から一筋の涙が・

ごめん、逆らえなかったんだな校長先生……。

「突入うううううう!!!!」

「!!!!??し、しまったあああああ!!!!」

と、とつとつ目的地に着いてしまった……。



最近、龍二がラーメンを食いまくるおかげで学校の経費の多くがラーメンの材料費に回ってしまうわけで、親友である俺がこの任務を任されたわけだ。

.....

失敗すれば.....こいつのラーメン代は俺が払うことになっている.....

理由は、そこまでのプレッシャーを与えた方がやる気も起きるだろうとのこと。いらねえよそんなプレッシャー。

.....

.....いやいやちょっと冷静になって考えてみようか。

第一に、あれ止められるくらいの力が俺にあるか？無理無理。

第二に、どんな方法であいつを止める？どうやってこの世で握力を測定できる機械すらないあいつを止める？否、無い。

.....結論〓失敗するに決まってる.....

「おい雅。早く昼飯食うぞ。」  
「ふ〜。いいストレス発散になった」  
「……………ああ。」

暗い影を落としながら、俺は龍二とエルがいるテーブルへと向かった。俺の財布、どこまで持つかなあ？ ははははは（泣）。

【今回の被害、負傷者数百名、重傷者一人（無論、近藤さん）】

〜ついでに〜

龍二は教室を飛び出す前、体に溜め込んでいたイライラエネルギーを周囲に放出。

結果・・・

『きゅん・・・・・・・・。。』

教師を含んだアルス達クラス全員（雅は除く）が色々しつつちやかめ  
つちやかになってしまうた教室で目を回しながら気絶していた。

第九十八の話 苦勞人、雅の戦い（後書き）

意外と人気の高い雅くんの苦勞話でした。



第九十九の話 エルの恥

（龍二視点）

・・・。

【チツチツチツチツチ・・・】

・・・。

【チツチツチツチツチツチツチツチ・・・】

・・・。

【チツチツチツチツチツチツチツチツチツチ・・・】

・・・。

【チツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチ・・・】

【ガバツ】

「・・・眠れん。」

深夜一時・・・ベッドに入った時間が十時。そこから目を閉じても全然睡魔が襲ってこない。しかもさっきから時計の音がものっそり

障りだコンチクショウ。

これは・・・あれか？昼間寝すぎたか？あまりにもポカポカ陽気だったから夕方まで昼寝ぶつこいたせいか？

それとも夜の八時ぐらいににつがいにつがいブラックコーヒー飲んだからか？アルスがココアと間違えて買っちまって、捨てるのももつたないしってな理由で飲んだあれが原因か？

・・・ともかく眠れん。これはまずいな・・・。

『スー・・・スー・・・』

・・・。

で、俺を差し置いて夢の中に突入中の剣が一本、机の上に。

・・・。

『スー・・・スー・・・』

・・・。

『スー・・・スー・・・』

・・・。

(怒)

【ガイン！】

『あぎゅ！？』

何かムカついたんでこいつの心臓部である銀色の部分、通称“コア”を殴りつけた。

『こ、殺す気かああああ！！？？貴様自分の握力考えろ！！！！』  
「できれば永眠してろ。」

『え、マジで！？』

うつせえなこの剣……。

『……何の用だ。』

「眠れん。付き合え。」

『すっごい簡潔に理由と用件を述べたな……。』

それ以外どう説明せえと？

『まったく・・・眠れんからって私を起こすか普通？』

「テメエだつてこないだ同じ理由で夢の中に土足で踏み込んできた  
だろが。」

『う！・・・し、しかしあれは・・・。』

「しかしもおかしもへったくれもねえよバカ。」

ポスンとベッドの淵に座り込む。エルは机の上。

「とりあえず俺が眠くなるまで付き合え。」

『・・・何故に上から目線なんだ？』

「返事は？」

『付き合います。』

掌に氣を集めると即座に承諾した。物分りのいい奴でよかよか。

『で？具体的に何をするのだ？』

「ん、じゃ最近考えた技でも出してや」

『するな。絶対するな。』

むう、したかったのに・・・新技。

「・・・じゃしゃーねえ。しりとりだ。」

『ほお、しりとりか・・・あれは私も好きだ。』

「よし、決まり。」

我ながらなんて素晴らしい暇つぶしを見つけたんだろうなあ・・・  
しりとり考えた人物は、ラーメンを考案した人の次に偉いぜきつと。

「じゃまずはしりとり“り”で。」  
『貴様からか。』  
「おうよ。」

どっちからでもいいけどなホントは。

「行くぞー。リンゴ。」

『ゴム。』

「マサイ族。」

『・・・□。』

「チーカマ。」

『何故あえてチーカマ?・・・饅頭<sup>まんじゅう</sup>。』

「海。」

『ミゾレ。』

「レンタル延長。」

『延長した!?!・・・ウサギ。』

「技系術。」

『ぎ、技系術つて・・・つ、積み木。』

「キンモクセイ。」

『インコ。』

「コアラ。」

『ラツパ。』

「パイパイ 木。」

『何故人名にする・・・ならば、きちがい。』

「お前。」

『貴様に言われたくない。』

「うそうそ。イソップ童話。」

『わんこ。』

「わんこ・・・豆柴、可愛いよなあ・・・//>//>//>////

／／／／／

『……しりとりをしろ、しりとりを。』

「おつとすまん。昆虫。」

『また“う”か……うなぎ。』

「シルバー。」

『？リユウジ、“ぎ”だぞ？』

「“銀”なんて言ったらアウトだから。英語。」

『それは反則だろう！？』

「世の中のルールは俺がぶっ壊す。」

『何だその目標！？』

「ほれお前のお前。」

『……バリア。』

「アンドリユー。」

『誰だ。』

「さあ？」

『……。』

「……。」

『……やめないか？』

「だな。」

飽きてきた。

「ふむ……じゃこれだ。モノマネ。」

『？モノマネ？』

「おう。好きな芸能人の真似をするのがモノマネ。」

『……ほお。』

「興味あつか？」

『……まあ、少しは……どんなものか見てみたいんだが。』

ふむ……手本か。

「……じゃまずは俺から……」

『これにて一件らあくちやく!』

「……どうよ?」

『……何だそれは。』

「遠山のさん。」

『誰だ。』

「何い、金 知らないだとお?」

『伏字の意味が無いぞ!?』

「あ、やべやべ。」

修正修正……ってもう遅いか。

でもなあ、遠山のさんメジャーなのになあ。主にお年寄りに。つてあ、これ考えてみれば歴史上の人物だった……ま、気ニシナーイ。

「ほれ、次お前。」

『う、うむう……いざやれと言われたら恥ずかしいな……。』

「じゃ指名してやろうか?」

『ああ、頼む。』

うむ……こいつには……。

「……よし。」

『小島よ お』やれ。』

『………は？』

『だから、『小島 しお』。』

『………できるかあああああ!!!』

うつせえなあ。近所迷惑だろが。

『何故に私がああ海パン二丁で変てこりんなダンスを踊る男の真似をせねばならんだ!?!』

『説明口調だなおい。つーかよくテレビ見てるなあ。』

『そーゆー問題じゃない!』

『いいじゃんよ、やってみろ。“史上初、小島 しおダンスを踊ったアホ剣”だぞ?ある意味有名になれつぞ?名誉名誉。』

『不名誉だバカ!つーか誰がアホ剣だ!そんなことで有名になりたくないわ!第一手足が無いから踊れるか!』

『いろいろツツコんだが、心の中で踊ればいいじゃないの。口だけでそんなの関係ねえ!』って言えば。』

『だからできるかあああああ!!!』

『ドリアンって知ってるか?』

『?な、何だ急に……』

『あれってすっげえ臭えんだよな。もうそりやすつく。でも臭いの割に中身はすっげえうまいんだよね。あれは忘れられねえなあ。』

『今度切ってみるか?他の包丁で切ったらしばらく臭い取れないからさあ。』

『やります。踊ります。』

物分りのいい剣だな。まあ体にあの臭いが付くのは勘弁と思っ



たんだろつ。でも包丁に臭いが付くかどうかは俺も知らん。作者も知らん。

「じゃぶつづ〜。」

『くつ……で、では行くぞ……。』

おう、やれやれ。

『コホン……えと……み、右の刃より……ういゝ……左の刃の方が……ういゝ……じ、若干キレイだよ……でもそんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！そんなの関係ねえ！はい、オツパツピー！！……ぜえ、ぜえ、ぜえ……』

おう、結構うまいじゃん。“そんなの関係ねえ！”が早口だったけど。

『ま……満足か……？／／／／／』

「もっかい。」

『ええ！？』

「ドリアン。」

『やりますやります……。』

ドリアン、そんないやか。切ったこともねえくせに。

『……雷撃したら停電した、でもそんなの関係ねえ！』

関係あるんじゃない？





「ふあゝあ……。」

んゝ……よく寝たぜ……。

『……』

「おう、おはようエル。」

『……あゝ。』

？ありえ？怒ってる？

「どしたエル？」

『別に！！』

「？」

その日、エルは一日中ほとんどを俺に対する愚痴に費やした。Wh  
y?

## 第九十九の話 エルの恥（後書き）

あれ、結構恥ずかしいですね・・・赤面しました、学校でやって。

さて、次回は百話！まあ何するっていつか・・・とりあえず人気投票の中間発表しまーす！

第百の話

百話目突入！（前書き）

百話目に突入しましたですよー！！

## 第百の話

## 百話目突入！

コ「どうもです！作者のコロコロです！」

龍「龍二だ。」

ア「アルスです。」

ク「クルルだよー！」

フ「ファイファイよ。」

エ『エルフィアンだ。』

コ「今回は・・・ついに！この作品が百話目に突入しましたあああ  
あ！・・・！」

【ドンパフドンパー！！！！】

龍「うっせえテンション。」

コ「・・・ごめん、純粹に傷つく・・・。」

ア「百話目ですか・・・そう考えれば結構長く続いていますね。」

ク「そうだね。」

フ「最初いきなり躓いてたわよね？」

コ「言うなチクシヨウ。」

あ、今回のお話は本編とは関係ありませんのであしからず。」

フ「今言つの？」

コ「気ニシナイ！」

龍「はいはい、それよりさっさと進める。やることあんだろ。」

エ「貴様のうざったいお喋りなどに付き合ってられん。』

コ「ああ、そだな・・・ってうっせえよエル。」

ではまず、前回の登場人物紹介で書かれなかったサブキャラクター紹介を！」

楠田 涼子（21）

性別 女

外見 茶目セミロング茶髪 顔は上の上

性格 天然

好物 グラタン

備考



雅の姉であり、保護者的存在。ほわほわしており、いつも穏やかな顔をしている。が、この小説では一応龍二の次に強い人。龍二が小指で街一つ吹き飛ばせるなら、彼女はビンタで車を吹き飛ばす。しかしそんな彼女のファンは多く、時々ストーカー被害に合うらしい。その時は自分で対処するか、龍二に頼んで【ズキーン】な状態にしてもらったりしてる。特技は料理（自称）。暗殺用の。それで被害を受けるのは雅とスタイルである。因みに龍二がお気に入り。

一言『うふふ、よろしくね』

立花・エリザ・アンドリユー（39）

性別 女

外見 青目ロング金髪 顔は上の中

性格 朗らか

好物 和食

備考

久美の母親で、アメリカ出身の日本大好きママ。いつも朗らかで、フレンドリーな性格をしている。もうすぐ四十路なのに、まだまだ二十代で通る外見を持っている。龍二とは一家を背負う者同士として意気投合しており、レシピを交換し合っている。父親は単身赴任中で今は家にいない。因みに日本に来た理由は和食を食べたいからという理由。そこで知り合った久美の父に求愛され結婚。

一言『ラーメンってあれでしょ？和食でしょ？』

齊藤 美紀&美香（W8）

性別 W女

外見（美紀） 黒目ツインテール黒髪 顔は上の中

外見（美香） 黒目三つ編み黒髪 顔は上の中

性格（美紀） 明るい

性格（美香） 物静か

好物 Wチヨコレートパフェ

備考

小学三年生の双子の姉妹で、香苗の妹達。対照的な性格だが、いつも二人ワンセットで行動している。運動が得意で勉強が苦手な美紀と、勉強が得意で運動が苦手な美香は、それぞれの弱点を互いにサポートしている為、二人の成績はなかなかのものである。友達も多く、大のお姉ちゃんっ子だが、香苗以外の年上の人は二人揃って苦手という意外な部分を持つ。しかし、何故か龍二にはよく懐いている。

一言 美紀『髪といたらどっちがどっちかわかんなくなるよね〜。』

美香『【コクリ】』

コリはい、サブキャラ公開でした〜。』

龍「？少なくねえか？」

コ「全員書いてたらなかなか進まないの、他はまたいずれ！」

エ「・・・どうでもいいが、何故私がない？」

コ「心配ご無用。お前はもうレギュラー入り同然だから前回の登場人物紹介のファイファイの後ろに書かれてある。」

ア「何であえてそっちに？」

コ「ここはサブキャラ紹介だからな。エルは登場回数も結構多い方だし、第一龍二の相棒なんだからサブキャラはちよつとなつてことで。つーわけで、エルの詳細が知りたい方は前回の登場人物紹介へどうぞ。」

フ「ややこしいわね。」

コ「さて、ここですら一段落・・・と思いきや・・・

今回は百回目を記念して、キャラクター人気投票中間発表を行います！

『イエーイ。』 全員棒読み

コ「・・・もうちょい感情込めてよ。」

龍「台本どおりにやったらこうなった。」

コ「・・・台本読んでそうなるの?」

龍「なる。」

コ「断言しやがった・・・。」

ア「あの・・・進めませんか?」

コ「おお、そうだそうだ。」

さて、今回は、第七十の話で公表した人気投票なるものの中間発表を行います。最初はあんまり集まらないだろうな〜って思ってたんですが、意外や意外、多くの方々が投票や質問をしてくださったのでやったかいがあったって思っております。まずはお礼を・・・ありがとうございます。

では、今から中間発表していきまーす。五位から一位まで発表します。あ、投票数は一応伏せておきます。」

龍「おー。やれやれー。」

コ「ではまず、第五位から!

ダラダラダラダラダラダラダラ・・・」

ア「それ口でします?」

フ「アルス、それ気にしちゃダメよ。」

コ「ダラダラダラダラダラダラ……ダダン!!」

……恭田!!」

ア・ク・フ・エ『ええええええええええ!!??』

コ「俺だつて『ええええええええええ!!??』だよ!!?あいつだぞあいつ!!?あの影薄だぞ!!?もう信じられナイ!!!」

龍「うぜい黙れ。」

コ「ぐふ!!あ、相変わらずきつつい……。」

フ「……い、意外と人気あるのねあいつ……。」

コ「まあ、半分以上が情けとかそついう理由だけ。」

ア「……何だか投票数多いのにかわいそうです……。」

コ「さ、ささ次次!続いて第四位!!」

ダラダラダラダラダラダラ……ダダン!!

……アルス!!」

ア「え!？」

フ「やったじゃんアルス！」

ク「すごい！」

コ「とファイファイ!!！」

フ「・・・は？」

コ「とリリアン!!！」

『・・・・・・・・・・』

コ「・・・そんな皆して冷めた視線で俺を見るな・・・。」

フ「・・・どういふこと?それ？」

コ「いや、それがさぁ・・・これまた意外や意外、三人とも同じ投票数だったんだよ。これマジで。」

ア・フ・ク・エ『うそん。』

龍「マジらしいぞ?」

コ「もう集計した結果見て俺もビックリしたよ・・・きれいに三つ

並んだよ。」

ク「……でも私いない……。」

コ「さ、次だ次！続いて第三位！！

ダラダラダラダラダラ……ダダン！！

……クルル！！」

ア・フ「！！！！？」

ク「ええ！？やったあ！！」

コ「これはちょっとバラすけど、アルスとフィフィとリリアンの一票差でクルルが上位に躍り出たわけ。最初のうちはアルスと並んでただけど、こないだの投票でクルルがアルス抜いたんよ。」

ク「わーい」

ア「……何だろう、この敗北感……。」

フ「……あはは……。」

コ「ま、まあまあ落ち込むなって。まだ中間発表なんだからさ。

とりあえず、気を取り直して第二位！！

ダラダラダラダラダラダラ・・・ダダン！！

・・・雅！！」

龍「ほお？」

コ「出番はそんなないけど、意外にも彼の存在を気に入ってくれてる人が多いんだわこれが。主人公の親友っていうポジションが効いたかな？」

龍「イジられ具合がいんじゃないやねえの？」

コ「・・・反論できねえな。」

エ「事実だろう。」

コ「そだな・・・じゃ、いよいよ中間発表の第一位に立った人物は！！！！」

ダラダラダラダラダラダラ・・・ダダン！！

・・・龍！！！！」

龍「お？」

ア「わぁー！リュウジさん、おめでとーっ！おめでとうございますー！」



ク「すっごーい！リュウくん！」

フ「さすが主人公ね。」

エ「まあ一番目立つからな。」

コ「大体予想できてた人もいるかもしれないけど、龍二がダントツでトップ。一部の読者様からは愛が込められた票をもらったそうなの。」

ア・ク「!!!???」

龍「?どした二人とも?」

ア「・・・い、いえ・・・。」

ク「な、何でもないよ?」

龍「?」

コ「ははは・・・あ、でも。」

『.?』

コ「意外にも雅と龍二の票の差、一票差なんだよね。」

ア「ええ!?雅さん、そんな人気あるんですか!?」

コ「ヘタレのくせに生意気な・・・消すか。」

フ「いやダメでしょそれ!？」

コ「超冗談だ。気ニシナイだ。

さて、中間発表は終わりましたが、まだまだ票は受け付けております。当然、質問も承っておりますよ?あ、それともう一つ追加しちゃいます。

キャラクターに何かメッセージ等があれば、それを最終結果発表の時に出すかもしれません。全てのメッセージを出せるかどうかは自信は無いんですけど・・・何か言いたいことがあれば、それを感想・評価欄に書いたり、メッセージを書いて送信したりで送ってください。待つてまゝです」

エ「私はまだ出て間も無いから票がない。とゆーわけで、誰か送れ。」

コ「何だその上から目線。」

エ「・・・ついでに包丁とか言ったら黒焦げにする。」

コ「ついでで脅すな!！」

ア「えっと、ボクなんかに票を入れてもらってありがとうございます。」

【ペコリ】

フ「えらい畏まってるわねアンタ。」

ク「でもアルスらしいからいいんじゃないの？」

龍「そーゆーこつた。」

コ「そして・・・百話までこれたのは俺の力だけど、その力をくれたのは他でもない読者の皆様です。様々な感想や応援メッセージを送ってください、誠にありがとうございます！」

龍「ま、中には酷評も混じってたけどな。」

コ「そ、それはまあ、仕方ないさ。ダメージはでかかったけどおかげで慢心もせずに頑張れる。」

ア「前向きですね・・・。」

コ「これが俺の性格

さてさて、『勇者以上魔王以上』はこれからもまだまだ続きます。俺自身と、何より読者の皆様が楽しめるような作品を作っていただけらなあって思います。ですからこれからも、龍二達のことを生暖かい目で見守ってやってください。」

ア「何で生暖かい目なんですか!？」

龍「気ニシナイ。」

コ「それでは、今回はこれにて・・・っとその前に、しつこいと思

いますけど最後のもう一言。

これからも『勇者以上魔王以上』を、よろしくお願いします!!

龍「よろしくな。」

ア「よろしくお願いします。」

ク「よろしく!」

フ「よろしくね。」

エ『よろしく頼む。』

コ「それでは!これからも頑張ります!」

## 第百の話

## 百話目突入！（後書き）

とゆーわけで、引き続き投票と質問待ってます。

それでは、あとがきでも言います。ありがとうございます……！  
これからよろしくお願いします……！俺、頑張ります……！

## 第百一の話 人生の別れ道！？

（龍二視点）

「……………」

これは…………。

「…………きついで…………いつは…………。」

これが…………究極の選択、というものか…………。

生まれてこのかた、全ての選択肢に俺は迷ったことがなかった。マ  
ークシートはもちろん、金銀剥がし、クイズ番組、パチンコ（コラ）  
、カジノ（オイ）…………

後半は嘘だが（嘘かい！！）。

全ての選択肢を、俺は直勘で当ててきた。それらに間違いはなかつた。強運というものだろうなきつと。

だが、これは…………運だけでは済まされない。まさに人生に一度あるかないかの出来事だった。

咄嗟に、こっちにしようと考えた…………だが、もう一人の頭の中にいる俺がこっちにしろと囁きかける。

迷うというのが、こんなに苦しいものだったとは…………初めて知っ

た。

「リュウジさん……。」

「リュウくん。」

背後では、アルスとクルルが心配そうに俺を見ている。ここは二人に聞いてみてもいいが、それはダメだ。これは俺が選ぶべき道なんだ。

人生の分岐点……一歩間違えれば……その先は闇だ。

くそ、どうすればいい……どうすれば……。

！……そうか……わかったぞ……。

二つの道に迷うなら、示されていないもう一つの道をたどればいい……つまり、第三の答えっていう奴だ。

それは間違っているかもしれない。だが、時に第三の答えは二つの選択肢を大きく上回ることもある。

マークシートでもそうだ。三択の問題のうち、一見答えの可能性が高い二つの答えより、ありえなさそうな答えが正解ということもある。

これは賭けてみる価値はある・・・この判断が吉と出るか、凶と出るか・・・それはまさに、神のみぞ知る。

そろそろ時間だな・・・行くしかない。行くしかないんだ。

これが・・・俺の選んだ道だ!!!

「姉ちゃん、『濃厚ミルクバナラアイス』プリーズ！」

「ひ、ひゃい!!」

勢いよく頼むと、店員の姉ちゃんは慌てて一番右端にあるバナラアイスをよそい始めた。

あゝ、今俺らは今話題の超うまいアイスクリーム屋に来ている。雑誌でも紹介されてるくらいチェーン店とのこと。偶然テレビで駅前にオープンしたって聞いたから、ちょっといいやつで。



いや、しっかし悩んだな・・・定番チーズケーキ味にするか、限定桜味にするか・・・まさに運命の分かれ道。しかも、店に入るのに何時間待ったことか・・・聞いた話じゃ、始終こんな長蛇の列らしいからな。また並ぶなんてゴメンだ。

そんな時にこれだぜ・・・俺チーズケーキ大好きだし、しかも桜味ってここしか無いらしいな。悩むだる普通？

でも金額はちょうどアルス、クルル、俺の分しかないし（ファイフはアルスと共有）、二本いっぺんに買うのは不可能。よってどちらか一つだけ。かと言って二つのうち一つを買ったら、あ、あっちでもよかったかな〜と後悔する羽目となる・・・これを究極の選択と言わずになんという？

でもまあ、初めて来た店だし、ベーシックなミルクバナニラにしとくかなあってことで、ほら、初めて行ったラーメン屋でさ、チャーシューメンとか味噌ラーメンとかじゃなくてスタンダードにラーメン頼んでその店の味を確かめるじゃん。あれと同じだし。

「み、ミルクバナニラお待たせしました・・・。」

「お、センキュ」

コーンの上に乗った白くて丸いアイスを受け取った。ん〜、冷気が立ち昇っていてめっさうまそうやん

「おう、お待たせ了。」

店を出てすぐのところで、アルス達がそれぞれアイス持ったまま待っていた。ついでにアルスはストロベリー味、クルルはチョコレート味とのこと。

「「「」」」

「?どした?」

何だその言いくそうな顔は。

「・・・リュウジさん・・・。」

あ?

「・・・品定めしてる時のリュウジさん・・・すっごい殺気放って  
ましたよ?」

「おかげで立ったまま気絶した人もいるらしいし・・・。」

「顔も超恐かったし・・・。」

「・・・。」

あります。

「・・・ま、気ニシナイってことで」

「「「」」」はあ。」

む、何だその呆れ顔は。

まあそれはさておき、どね。

「【ペレペレ】・・・お、んまい。」

濃厚なのにごこかさっぱりしている、しつこ過ぎない甘み。しつこ  
あクセになりそうだ。

「・・・幸せそうですね・・・。」

「ん、まあな」

「・・・リュウくん、マイペース。」

「元からでしょ？」

「・・・食えん。」

あ、そついやエルいたっけ？腰に。

『・・・リュウジ、感想は？』

「超うめえ。」

『・・・私が人間だったらなあ・・・。』

早く人間になりたい、とか言えば？

「さ、帰るぞ。」

「はいー！」

「はい。」

「はいはい。」

『・・・まあ、いい。仕方ないしな。』

スレスレ・・・あぁうまい。

第百一の話 人生の別れ道！？（後書き）

シリアス！と見せかけてしょーもね！！と思った俺でした。

第二百二の話 恵子？いや、稽古

くファイファイ視点く

「でやあー！」

「よっど。」

【ガインー！】

・・・。。。

「んむうく・・・！」

「ふっふん」

・・・はあ。

「ふやく・・・。」

「あ、クルルおはよう。」

和室から昼寝していたクルルが出てきた。でもまだ寝ぼけ眼。

「ん・・・？ねえファイファイ。アルスとリュウくん何してんの？」

「見りゃわかるでしょ。」

「はあー！」

「そらよっど。」

・・・アルスの剣戟を、全て片手に持ったエルで軽く捌いていくリユウジ。しかも利き腕じゃない方の左手で。

今何してるか？さっきの解説でわかるでしょ？・・・わかんないか。

「・・・特訓？」

「そ。」

クルルの言う通りで、今アルスとリユウジが剣の特訓中。それも庭で。それで私は縁側に腰掛けてサ克蘭ボを食べながら観戦中ってこと。まあこの庭それなりの広さがあるから多少暴れても大丈夫だろうけど・・・。

「・・・何で特訓してるの？」

「ああ・・・それはね。」

ちよつと話は遡って・・・。

〈三分前〉

「ん〜・・・。」

「？アルス？」

私が庭を飛び回って遊んでいたら、アルスが縁側で腕を組んだまま

唸っていた。

「どしたの？」

「……いえ、ちよつと……。」

気になったからアルスの肩まで飛んでつとまった。

「思いつめたような顔してるけど？」

「……そんなことないよ。」

「嘘だあ。アンタっていつも悩み事あるとそつやってどっか座って腕組んで呻いてるもん。」

「こ、細かいね……。」

「まあね」

結構長い付き合いだからそれくらいわかるわよ。

「で？何悩んでたの？」

「……うん……実はね。」

うんうん。

「……ボク、最近剣の腕鈍ってるのかなあって思ってきて……。」

「

「そお？」

知らない人も多いだろうけど、アルスは庭でよく木製人形に打ち込みをしている。その太刀筋と剣捌きはい線いつてるんだけどなあ……。

「いつもは一撃で木製人形を真つ二つにできたのに、昨日は三回や

「つてようやく切れたんだよ？腕が鈍ってる証拠でしょ？」  
「そう・・・かなあ？」

「・・・そういえば、昨日そんなことあったような・・・。」

「でもあれは手が滑ったんじゃないの？それか剣の切れ味が落ちてたとか。」

「あれは手が滑ったんじゃないよ・・・どこを切るべきか、一瞬わからなくなっただ。剣は毎日手入れしてるから鈍ることはないし・・・。」

「・・・ん～・・・何かよくわかんないけど・・・。」

「・・・それに、昨日だけじゃなくてその前の日も剣を振るう腕に何だか違和感感じちゃって・・・。」

「ふ～ん・・・ようは、それで腕が鈍ったと確信したってわけ。」

「うん・・・。」

違和感ねえ・・・それで腕が鈍ったってわかるのかなあ？私剣持ったことないからわかんないや。

「・・・どうしよう・・・はあ～・・・。」

「ため息ばっか吐いてると幸せ逃げるよ？」

これ、リュウジ情報だけど。

「はあ・・・。」

「？おいアルス。どった？」

あ、リュウジ。散歩から帰ってきたんだ。



「リュウジさん……。」

「随分と悩んでるようだが？」

「……まあ、誰から見ても悩んでる風に見えるけどさ、いきなり図星って……。」

「……あ。」

「？」

「リュウジさん、お願いがあるんですけど。」

「？何だ。」

「……あ、もしかして……。」

「あの、お願いです……ボクに稽古をつけてください！」

「恵子？誰だそれ？」

「いえ、人じゃなくてですね……ってマジメに答えてください！」

「????？」

「……アルス、リュウジはふざけてるんじゃないやなくてこれでもマジメなんだと思うよ？」

「だから！ボクに特訓をさせてください！！」

「あ、そっちの稽古か。」

ボン、と掌を叩くリュウジ。ほらね、純粹に稽古と恵子、間違ってたでしょ？

「そうです。こないだみたいない対多じゃなくて、一対一で稽古をつけて欲しいんです。」

「え〜？俺今から“いいも”見たいのに〜。」

「そこを何とか・・・お願いします！」

「でもメンドイしなあ。」

・・・・・・・・。。。

「お願いです、一回だけでいいんです、ホントにお願いします。」

とつとつ縁側から降りて土下座したアルス・・・いいのそれで？

「ん〜・・・・・・・・・・・・・・・・。。。」

顎に手を添えて考えるリュウジ。そんな迷う？

「・・・・・・・・しゃーねえな。今日のいいもはあきらめっか。」

「あ、ありがとうございます！」

顔上げたアルスは、ホントに嬉しそうだった・・・稽古つけてもらう以外に何か考えてるもしかして？

「じゃちよつとエル持ってくるから待ってる。」

「はい！」

・・・・・・・・いいのかなあ？・・・

くで、現在く

「つーわけなのよ。」

「へえ〜。」

うーん、そういえば最近アルス、素振りの回数増えたしな〜。そんなに剣の腕が落ちたのがショックだったのかな？

まあ確かに、元の世界にいた頃のアルスってすごい魔物の数に大立ち回りしたことあったっけなあ。あの時はすごく強かったけど・・・。

あの時の太刀筋を思い出してみれば、確かに最近の剣を振るう腕が重くなつて見えるような気がするなあ。それでもやっぱしそんじやそこらの剣士じゃ相手にならないだろうけど。

でも・・・

「お〜いどしたあ？」

「くうっ！」

一番激しく動いてるのがアルス、まったく慌てるそぶりも見せずにその場から一步も動かず軸足だけを回転させてるリュウジ。庭のあちこちにアルスの足跡が付いてるけど、リュウジの足跡は中央の芝生にしか足跡がついていない。

おまけに、目は閉じたまま・・・完璧手加減してるわねあれ。もしくはおちよくつてるとしか思えない。それでもアルスは、果敢に挑んでいってリュウジに軽くあしらわれていた。

「でも、相変わらずすごいねーリュウくんって。」

「そうね……。」

「……あいつは参考にしようにも強すぎて参考にすらなりそうもないわね。」

「やあああああああ！……！」

「ほらよつと。」

【ガキーン！】

アルスの突進による力を加えた切り下ろしも、リュウジの逆袈裟切りでいとも簡単に弾かれた。

「うわあ！」

衝撃で、アルスの剣がすっぱ抜ける。

【トス】

「はい終わり。」

「……うう……。」

で、尻餅ついたアルスの目の前にエルを突きつけて終わった。アルスの剣は庭にある木の根元に突き刺さった。

にしても、結構本格的だったわねえ……。

「……まいりました。」

「ん、そうか。」

【キーン】

エルを腰の鞘に収めて、稽古(?)は終了した。

「はぁ・・・やっぱりリュウジさんには敵わないや。」  
「そか？」

うん、すつごく余裕だったよねアンタ？

「・・・それでリュウジさん、ボクはどこが悪かったんでしょか・  
・・・？」

「知らん。」

「・・・え。」

・・・。

「いやだから、どこが悪いか知らん。」

「・・・それだと稽古の意味が無いじゃないですかあああああああ  
あ！！！！」

うん、ただ切り結んただけだよな？下手したら死んでたよ？あ、大  
丈夫か。さっきリュウジ、エルとアルスの剣に何か『龍鉄風』りゅうてつふうって  
いう技かけてたし。あれで体に当たっても切れないようになってる。

「ん〜・・・んなこと言ってもねえ・・・。」

頭をポリポリかいて困り顔になるリュウジ。

「・・・じゃとりあえず俺なりに気付いたこと言っけどさあ。」

お前考えすぎ。」

「……………へ？」

???????

「ん、後は自分で悩め。ボーイズビーアンビシャス。」

そう言いながらアルスの頭をクシャクシャと撫で回す。

「ぼ、ボクは女です！」

いや、そこ反論する？

「さあて、と。俺なんか眠いから寝るぞ。」

「あ……………はい……………」

結局、何が言いたいのかさっぱりわからないまんまりユウジは家中に入っていった。

「……………考えすぎ……………」

「どついつ意味だろね？」

「さあ……………」

考えすぎ、ねえ…………

ん……………???

「……。」  
「アルス……。」

俯き加減で黙り込んだアルスに、クルルが心配そうに名前を呼んだ。

あれかな？手加減されてた上に呆気なく負けちゃったのがショックだった？

「……。」

「……あ……ほら、あれよあれ。リュウジ強すぎだから参考にならないでしょ？だか「な……。」??」

へ？

「……撫でられた……／／／／／」

……

「そこかい!!!」

「ああ！アルスずるい!!!」

「ってアンタ言うの遅すぎクルル!!!」

「……／／／／／」

く三人娘が騒いでいる頃、二階の部屋にてく

「あ〜ねみ。」

『……』

「?エル、どつた?」

『ふん……いや、貴様にしてはなかなかいい事を言ったと思つてな。』

「?」

『アルスは相手の太刀筋やどこをつけばいいのかずっと考えながら戦っていたのだらう。それで動きが鈍くなったりしていた。そこに目をつけるとは、さすがだな。』

「はにや?」

『……まさか、貴様適当に言ったのではないだらうな?』

「イエス。」

『……』

「じゃおやすみ〜。」

『ちよ、貴様』

「く〜……。」

【龍二に指導を頼むというのは無理があるそうです。bライター】





第三の話 電話中は静かにしましょう(前書き)

今回、あとがきのお知らせがあります。

第一百三の話 電話中は静かにしましょ

（龍二視点）

「ふーい、休憩休憩」

いやあ洗い物も終わったし、昼はのんびり過ごすかなあ。

・・・誰だ“お前毎日のんびりしてんじゃん”とか言った奴。出て来いや雑巾の如く絞る。

『貴様、毎日のんびりしてるではないか。』

勝手に思考を読んだバカ剣（元）のコアに鉄拳制裁を加えて黙らせた。んでもってとりあえずちやぶ台の足の下敷きにしてやった。足元から何か悲痛な声が聞こえるが、もう知らん。

まあとりあえず、と。今日の午後の休憩タイムは・・・そだな／＼大福と緑茶でいくか。

【プルルルルル プルルルルル・・・】

「あ、電話だ。」

居間のちやぶ台の前に座りかけたところで電話のコール音。メンド

つちいが、しゃーねえから電話がある台所横へと行くことにする。

【ガチャ】

「はいもっしー。」

『よ、俺だ。』

「いくら振り込めばいいんだ？」

『オレオレ詐欺じゃねえよバカ。』

うん、知ってた。

「誰かと思えばモツチリエンダー・ビエーンじゃねえか。」

『誰だその微妙に言い難い複雑な名前は。わかってるだろうが。』

「わあってるって。ヘタレ雅だろ？」

『・・・それ、冗談じゃなくて本気で言ってるか？』

「おう。」

『呪われるこの野郎。』

「呪われようにも呪いの方から逃げてく気がするんだがどうすればいい？」

『わかった。お前を呪おうとした奴はバカだということが今わかった。』

「そうか。」

じゃお前バカ決定な、とはあえて言わない。言ったらツッコミラッシュが激しくなるから。

「で、何の用だ？」

『ああ、ちよつとな。こないだ貸したさあ・・・』

「魔王、待てええええ!!」

「へっへっへん!こっちこっち」

「二人とも暴れちゃダメだって!散らかってるでしょうが!」

「だってファイファイ、魔王が・・・。」

「やっい」

「!!ま、待てえええええ!!」

「もう簡単に怒らないでよアルス!それ以前にクルルも挑発しない  
!」

「・・・。」

後ろの奴らつるせいなオイ。

「おいお前ら静かにしろ。電話中だ。」

「あ・・・はい。」

「ごめんなさい。」

「ごめん。」

一言言っつてやっつたらすぐに静かになった。ふう。

「わりわり。」

『お前も結構大変だな。』

「いや何、慣れたら大したこたあねえよ。それより用件は?」

『ああ、こないだ貸したDVD、お前まだ持ってたっけ?』

「ん。今DVDデッキの中に入れてるぞ。」

『すまねえ、それ明日には返してくれねえか？姉さんがどうしても見たいってうるさくて……』

「……怒られちゃいましたね。」

「そだね。」

「何で私まで……。」

「大体、元はと言えば魔王が……。」

「え〜？騒がしく追い掛け回してたアルスに言われたくないよ。」

「な！？そ、その原因を作り出したのはあなたでしょう！？」

「でも追いかけることないじゃないの！」

「怒るよあれは！」

「何さ！寝てる隙に鼻と口塞いでどれだけ息止めれるか実験しただけなのに！」

「いやだからそれで死ぬとこだったんだってば……！！！」

「それだけで死ぬアルスは貧弱でしょ……！！！」

「何い！？」

「やるの！？」

「だから二人ともやめなさいってば……！！！」

「……。」

後ろの奴らつるせいなパート2。

「おい、だから電話中だつてば。」  
「あ、ご、ごめんなさい！」  
「ごめん……。」  
「う……悪かったわよ。」  
やれやれ。

「再びわりわり。」  
『ホント大変だなお前も。』  
「気ニシナイ。」  
『ああ……そうだな。』  
「で？DVD、明日には返せばいいんだな？」  
『ああ、すまないけど頼むよ。』  
「オッケー。今日見終わったとこだし、ちょうどいい。じゃ明日届けに……。」

「また怒られちゃった……。」  
「あはは」  
「笑うなあ！魔王のせいでしょ!？」  
「そんなことないYO。」  
「下手な片言で言うのやめてください！」  
「だ、って最初に大声上げたのアルスだもん。」  
「その後大声上げてましたよあなた!？」  
「元凶はアルスだもん！」  
「ホントの元凶は魔王でしょ!？」  
「にやにや!？」

「やるの!?!」

「またアンタらはああああ!?!」

「.....」

.....後ろの奴らうるせいなパート3い。

「テメエらしい加減にしろよ?」

「ひう!」「ごめんなさい。」

「あう.....ごめんなさい。」

「!」「ごめんなさい。」

「..」

「三度目のわりわり。」

『.....マジで大変だな。』

「気にしたら負けだ負け。」

『そ、そうか.....』

「まあ、DVDは明日返すとしてさ、今度皆でラーメン食いに行か  
ねえ?」

『おお、いいな。いつにするよ?』

「そだな、そんじゃ.....」





「しつこいようだがわりわり。」

『・・・どうしようもなく大変だな。』

「H A H A H A、何でK i e e i しらないのか自分でも不思議さ」

『何であえて“K i e e i”？』

「気ニシナイ。」

『・・・ま、まあいいか。』

「で？結局いつ食に行くよ？」

『そうだな・・・皆って俺ら家族とお前らんとこか？』

「一応、香苗らと久美らを誘う予定だ。あ、花鈴も。」

『そうか・・・あれ？恭田は？』

「あ？誰それ？」

『・・・お前残酷だな。』

「H A H A H A。」

『・・・まあ、そうだな。後で姉さん達に聞いて・・・』

「うっう・・・恐かったです・・・。」

「うん・・・。」

「べ、別に恐くはなかったわよ。ええ、全然。」

「のわりには涙目じゃないですか・・・。」

「な、泣いてないわよ!」

「強がっちゃダメ」

「う、うっさい!そーゆークルルだって泣いてた!」

「にゃに!？」

「あ、そういえば・・・。」

「あ、アルスだって若干泣いてたよ!」

「!？な、泣いてないです!」

「嘘！泣いてた！」

「泣いてないです！」

「泣いてた！」

「泣いてない！」

「絶対泣いてた！」

「泣いてないですって！」

「ずえったいなーいーてーたー！」

「なーいーてーなーいー！！！」

「素直に認めなさいよ。」

「泣いてないですってばあああああああああ……！！！」

「……。」

プツチーン

くで。く

「じゃあ今度な雅。」

『お、おお……。』

【ガチャン】

受話器を置いて電話を切った。ふう、ちよつと長電話し過ぎちまつたな……。ま、しゃーねえか。

「さ、とと」

台所に入って棚開けて取っておいた苳大福とご対めん 急須にお茶入れてお湯注いで……。おし。

「さ、お楽しみタイム」

フフフ、この苳大福はなかなかうまいと評判だ……。どんな味をかもし出してくれるんだろうな。

「り、リュウジひゃ〜ん……。」

「もつゆるひて〜……。」「

「きゅ〜……。」「

庭から声が聞こえるけど多分気のせいだ。アルスとクルルがフルボツコされた状態で袖から袖へと物干し竿が通っていて磔の如く吊るされてるのも多分幻覚だ。ファイファイは洗濯ばさみに挟まれて逆さ吊りにされてるのも多分気のせいだ。

『・・・痛い・・・。』

ちやぶ台の下からエルの声が聞こえるけどこれも幻聴だろう。うん。

おっと、そろそろ茶を注いでもいいだろうな。

「【ズズズ・・・】あ〜うまい・・・。」

湯のみから湯気を上げてるお茶をちよつと啜り、それから母大福を  
パクリと・・・うっめえこれ。

その日の昼は、許して〜とか助けて〜とかいう幻聴を聞きながらの  
んびりと過ごした。

### 第一百三の話 電話中は静かにしましょう(後書き)

はい、百三話目でした。

龍「久しぶりにあとがきに來たな・・・何のようだ？」

いや、用というか・・・お知らせ。

龍「？」

え、今まで毎日更新をしてきましたが・・・明日から難しくなる  
かもしれません。

龍「ほお？」

理由は、バイトに大学。朝から大学の授業を受けないといけないし、  
帰ってきたらバイトも夜遅くまでしなければいけなくなり・・・。

龍「ありま。」

で、更新は早くて真夜中。それでもネタ出し考えないといけないし、  
更新不定期になるかも・・・。

龍「あゝあゝ。」

・・・ですが、できる限り更新できるよう頑張るつもりです。ただ  
難しくなると言っても、そんな一週間も更新しないってことにはな  
らないと思います。

そんなわけで、この小説を読んでくださってる皆様にお詫びを・・・  
ごめんなさい。

龍「やれやれ。できるだけさっさと書けよ?」

・・・はい。

龍「そんじゃ、すまんだな。」

・・・これからも頑張ります。

## 第百四の話 エルの抗議

（龍二視点）

「テメエは許可なしに人の夢の中に入るのが好きみたいだな。」

「誰が好き好んで貴様の夢の中になど……。」

「夢の中で死んだらどうなるんだ？」

「ごめんなさいホントごめんなさい嘘です冗談です。」

真夜中、ぐっすり気持ちよく眠つてるところをこのバカ剣女ことエルは、またもや俺の夢の中に入り込んできやがった。夢の中ぐらいゆっくりさせるや。

まあ怒ったってしゃーないから、とりあえず付き合ってやることにする。どうやら夢の世界（つってもメルヘンじゃなくて辺り一面黒一色）では俺は空中浮遊ができるから胡坐かいたまま連続宙返りをやってみた。おお、これ結構おもしろい。

「……ところでリュウジ、ちょっと聞きたいことがあるのだが……。」

クルクル〜クルクル〜。

「おう、何だ。」

「……最近、私のコアを殴る回数が増えてないか？」

クルクル〜クルクル〜



「気のせいだろ？」

「明らか気のせいではない気がするのは私だけか？」

クルクル〜クルクル〜。

「人つてのは過去を振り返っては前に進めねえのさ。」

「いい事言ってるっぽい言い訳にしか聞こえないぞ。」

「さいで。」

クルクル〜クルクル〜。

「ともかく、貴様の握力は尋常じゃないんだからやめて欲しいんだが……。」

「へいへい。」

「返事が曖昧すぎやしないか？」

「まあな。」

「認めた!？」

クルクル〜クルクル〜。

「……で、何でさっきからクルクル回転してるのだ貴様は。」

「おもしろいからに決まってるだろ!!」

「そこキれるところか!？」

楽しいことを楽しくなさそうと言われたら怒るぜ普通?え、そうじゃない奴もいるの?あ、そうかいそうですかい。

「で?何の話だっけ?」

回転を止めて、胡坐をかきながら空中浮遊。仙人みたいだ。

「だから私のコアを殴るのはやめて欲しいと言っている。下手したら死ぬぞ私。」

「死ね。」

「え、それ純粹に傷つく……。」

イツツジョーク。ブラックジョーク。

「まあそれは嘘として。」

「それは嘘では済まない世の中なのだぞ……。」

「黙れ。」

「す、すまん……。」

足を振り上げたら顔真っ青にして謝るエル。前の夢の中での後遺症か？

「で？用件それだけ？それなら蹴っ飛ばすぞ。」

「いや、それは二つのうちの一つの理由だ。もう一つ、大切な用件がある。」

よし、蹴るのは後者の話を聞いてからにしよう。

「まあ、私にとっては重要なのだが……。」

ふんふん。

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」



「・・・私の存在って何なのだ？」

「包丁。」

「即答！？どう言ったらいいのか迷ったりせず即答！？」

当たり前。

「そ、それはともかく！貴様が私を包丁として利用しまくるせいで様々な人間から包丁というレッテルが貼られているではないか！」

「だから？」

「だから！私の剣としての存在価値が薄くなってきたと言いたいのだ！」

「安心しろ。薄くなってるんじゃない。無いに等しい。」

「もっとダメだろ！？」

「しゃーねえじゃん利用するところ包丁ぐらいしかねえんだから。」

「だったら別のを考えろ！」

んだようっせくな〜・・・。

・・・。

「じゃあさ。」

「・・・何だ。」

「・・・あるところろに意思のある剣が二本ありました。」

「？」

「一本は持ち主にいつも逆らい、文句を言う生意気な剣。もう一本は持ち主に逆らわず、文句も言わない忠実な剣。二本の持ち主はいつも二本を剣として利用せず、木を切ったり、料理に使ったりしていました。」

生意気な剣はそのことに大変憤慨していました。ですが忠実な剣は素直に従っていました。

ある日、生意気な剣がとうとう剣として利用しない持ち主にキレてしまいました。忠実な剣は横で大人しく生意気な剣が持ち主に向けて発する罵倒を聞いていました。

最初はただ受け流していただけの持ち主でしたが、だんだんと鬱陶しくなり、とうとうブチ切れました。持ち主は生意気な剣を持って裏の畑に行くと、そこにあった肥溜めの古いつつかえ棒を取り外し、代わりに生意気な剣をつつかえ棒の代わりにしました。

『これでつつかえ棒を作らなくて済む』

そう、つつかえ棒は持ち主の手製なのです。ですが日々作るのはめんどくさいので前のつつかえ棒を五年はほったらかしにしています。

以来、生意気な剣は長い年月の間に肥溜めの臭気にあてられ、気が狂いました。そして暴れだしました。蓋落ちました。剣も（中に）落ちました。そして肥溜めの底へと沈んでいきました。

それからというもの、忠実な剣はよりいっそう持ち主に忠実になり、いいように使われていきましたとさ。めでたしめでたし。」

「……………」

もちろん、この話はフィクションです。なのにエル顔真つ青。

「で？これからどうして欲しいお前？包丁以外として。」

「生意気言ってますいませんでしたこれからも包丁として利用してくださっても結構です。」

ならよしだ。

「じゃ、そろそろ寝たいから出てってくれねえか？」

「……ああ……。」

暗いよお前。何か暗いよ。

「あ、その前に。」

「？」

「ジャツジメント！」

「みぎよ！？」

蹴ったった。顔。

「な、何をす「さ、帰るか。「おおおい！！！！？」」

もう無視しよう。

やがて俺の体が上へと昇っていった。

「・・・クスン・・・。」

最後に見たのはエルが肩をがっくり落として落ち込んでる姿だった。

愉快愉快

#### 第百四の話 エルの抗議（後書き）

思ったより大学はきついですね・・・更新難しいです。こうなった  
ら土日頑張るしかない！

とゆーわけで、ちよくちよく頑張ります！

で、次回香苗達出ます。一応報告です。



第百五の話 小テスト（前書き）

やっと更新できた・・・疲れてたから更新するのに時間かかった。

## 第一百五の話 小テスト

（香苗視点）

どうもです！生徒会長やってる斉藤香苗です！

・・・今エセ生徒会長って聞こえた気がするんだけど・・・気のせいだよな？

え、とりあえず本題入ろうかな・・・。

今私達は学校にいます。ここまでは普通なんだよ？でもね、今日は特別な日なの。

今日は・・・何と！朝のHRに小テストがあるのです！それも漢字、日本史、英語単語の三つ！

このテストは、二週間に一回、日頃の成果を試す為にならずやるの。因みに10点満点。

「ふっふっふ・・・今回こそはビリ脱出だ！」

「入学から始まり、今に至るまでビリだった人間が何言ってるんだ。」

「雅・・・お前そういうキャラだっけ・・・？」

「元々だバカ。」

「ヒデエ!？」

「うつさいわよ影薄。黙りなさい。」  
「花鈴ちゃんも!？」

・・・雅くと花鈴ちゃん、リュウちゃんの親友と幼馴染なだけあってSだね。

「にしても・・・皆必死だな。」

「うん、そだね。」

久美ちゃんが声をかけてきた。

クラス中全員が一生懸命小テストの範囲を最終チェックしてる。中には予想問題を作つてそれで模試してる人もいる。しかも皆顔が必死そのもの。

「~~~~」

・・・中にはヘッドフォンを耳に付けて音楽を聴いてる人も(勿論リュウちゃん)。本人曰く“メンドイ”とのこと。

でもたかが小テスト、そこまで皆必死にならなくても・・・と言いたい人も多いと思うの。それについては後で説明するわ。

「~~~~」

「んみみ・・・。」

・・・ふと後ろを見てみれば、アルスちゃんとクルルちゃんも必死になつて単語帳を黙読している。よっぽど嫌なんだね最低点取るの。

まあ、あれは・・・いろいろ悲惨だったしね。

「・・・あたし達もやるか。」

「そうだね。」

私達は一応小テストでは上位に入ってるけど・・・勉強して損はないから頑張ろうかな。

（小テスト1）

まずは漢字テスト。空欄を漢字で埋めていくという問題だけ。それも二十問。

ぱつと見て思ったこと。意外と簡単ね

「じゃ、始めろー。」

神楽先生の言葉と共にシャープンを走らせる私と久美ちゃん。分かる問題はどんどん解いていくつと。

「えつと・・・。」

「ん・・・。」

えつとここは・・・『育毛剤』ね。

・・・あれ？一瞬どこから殺気が来たような・・・気のせいかな？

「うん……………」

「みゆ……………」

アルスちゃんとクルルちゃんも頭を抱えながらペンを走らせていく。  
あ、私カンニングしてないよ？ちらっと見たただけだから。

「へ、楽勝楽勝。」

「ふむ……………」

「ふんふん」

嘲笑するかのように呟く恭田くんは、冷静に問題をといていく雅くんと鼻歌混じりに書いていく花鈴ちゃん。雅くんと花鈴ちゃんとはともなく、恭田くんがここまで余裕を見せるとは・・・意外。

「ポケ……………」

・・・で、窓の外を眺めてぼ…………としてるリュウくん…………。テストは…………予想できるかな？小テスト中はい…………つてもあだし。

まあ、私にかかれば漢字は楽勝ね 問題無し。

〈小テスト2〉

次は日本史ね。漢字と同じで、空欄に人物名とか事件の名称とかを



く小テストく

よし、最後！最後は英語の単語テスト。私、英語が一番得意なんだ

「ふふん」

「ふう。。。」

花鈴ちゃんみたいな鼻歌を歌いながら書く私と、つまらないといった表情の久美ちゃん。そういえば久美ちゃんってハーフなんだっけ。。。

あ、これは。。。えつと英訳すると、『baldness<sup>ハゲ</sup>』ね。

「えつと。。。ちょ、魔王何すんのさ!？」

「ちよつとだけでいいから見せてよ。。。泣」。

「ダメです!」

。。。アルスちゃんとクルルちゃんが何か小声で取っ組み合ってるけど。。。神楽先生、見て小さく笑ってないで止めましょうよ。。。

「ケケケケケ。。。」

「。。。お?」

「うん。。。」

より一層怪しげに笑う恭田くん、閃いた感じの雅くん、さつきと打って変わって考え込む花鈴ちゃん。。。花鈴ちゃんも英語苦手だっけ?

「お、チヨウチヨ。」

・・・全く変化ないねリュウちゃん。

でも目でチヨウチヨを追うリュウちゃん・・・可愛い・・・／／／  
／／／／

・・・テストに集中しなきゃ・・・(汗)。

くテスト終了く

終わったく

「香苗、どうだった？」

「うん、満足 久実ちゃんは？」

「あたしはまあまあかな？」

もしかして、今回満点いくんじゃないかな？

「うう・・・アルスがぶつた・・・クスン。」

「当たり前です。」

プンスカ怒ってるアルスちゃんと頭を抑えながら泣くクルルちゃん。



何でこうなったのかさっきの見て理解できるでしょ？

「ははははは！今回こそは俺の天下だ！！」

「黙っとけ影薄。」

「ウザイわよ影薄。」

で、こちらは立ち上がって大声で笑う恭田くと毒を浴びせる雅くと花鈴ちゃん。あ、恭田くん撃沈して机に突っ伏した。

「あゝねみ。だり。」

……ずっとこのんびりしてたりユウちゃんがそんなセリフ言っとすっごい説得力ないよ？

……小テストの返却は昼休み前の授業、つまり四時間目が始まる前に返される。

まあ、それまでが結構大変で……皆緊張しててピリピリしてるのだから……

「いやあにしても今回のテストは簡単だったなあ！なっはっはっはっはっは」

『黙れ！！！！！！』

【ズゴゴゴゴゴゴコンー！！】

「へげらっちょー！！！！」

・・・こんな風に騒ぐと、クラス中から辞書やraisやら筆箱やらの洗礼(?)を受ける羽目になります。もちろん騒いでいたのは恭田くんです。

皆の点数、大体予測できるんだけど・・・まだ見てないしわかんないよね。

まあ、ともかく結果待ってこ。

〜三時間目終了、テスト返却〜

「はいよ〜テストの答えあってるかちゃんと確認しろよ。間違っても私は知らん。」

『いやダメだろそれ。』

神楽先生にクラス中がツツコミかましました。

さつとと、点数は〜とと・・・。

【クラ】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・まあ、よかったじゃないか香苗！」

「・・・うん。」

そんな・・・自信あったのに・・・。

『斉藤 香苗』

国語、10点

日本史、8点

英語、10点

・・・はあ・・・日本史で二点も落とすなんて・・・ショック。

「・・・そーゆー久美ちゃんは？」

「・・・これだ。」

【ピラ】

『立花・久美 アンドリユー』

国語、9点

日本史、6点

英語、10点

・・・・・・日本史、苦手なんだもんね。

「・・・まあ、最下位ではないけど・・・。」

「・・・い、いいよねそれなら うん。」

ちよっと悔しいけど、最下位じゃなければなんだっていいの。

「ホッ・・・よかった。」

「やったあ！思ったよりよかった！」

ホッと一息つくアルスちゃんと、飛び上がって喜ぶクルルちゃん。  
点数をチラッと見てみると・・・

『アルス・フィート』

国語、8点

日本史、5点

英語、9点

『クルル・バステイ』

国語、5点

日本史、4点

英語、9点

・・・アルスちゃんとはかく、クルルちゃんが真ん中の下ぐらいの点数を取ってたのにはビックリした。日本史は最悪だけど、英語が高得点だったのが救いね。

「・・・魔王、エイゴのテストでボクの答え覗いてたでしょ。」

「ギク！！！！・・・ソナナコトナイヨ。」

「ベタに片言!？」

・・・なるほどね・・・だから高得点・・・でもこれはまあ、確かな証拠もないし、別にいつか。



・・・恭田くん、涙すごい流してる・・・周りの人たち、距離置いてるし。何だか泣いてる本人が不憫・・・。

「何故だああああああ！！この問題は間違いないはずなのにいいいいいい！！」

「間違いは間違いなんだからしょうがないだろ？」

必死に訴える恭田くんに対して、平然と残酷な言葉を投げつける採点係の神楽先生。非常に教師に似つかわしくない口調と態度です。

「つーかよお、この英単語何なんだ？“Joy”を和訳すると“喜び”になるはずなのに、“大豆”ってお前・・・。」

「・・・え、違うの？」

「・・・テレビの見すぎだバカ。」

・・・多分、某大豆で出来た栄養食品のことだと思ってるんだろうなあ恭田くん。

因みに大豆は英語で“Soybean”って言うんだよ？これ、大豆ですから。

「ふあゝあ・・・。」

・・・で、一番気になるのは・・・リュウちゃん。

テストの間中、完璧上の空だったリュウちゃん。もうおおよそ点数

はわかってる。

「リュウちゃん、どうだった？」

「ん。」

ピラッとテスト用紙三枚を私に差し出すリュウちゃん。私はそれに目を通した。

『荒木 龍二』

国語 10点

日本史 10点

英語 10点

.....。

「・・・やっぱり今回“も”満点だったんだね。」

「そみたいだな。適当にやったただけなんだけど。」

うん、わかってたよ？わかってたつもりなんだけど？すっごく悔しいの。

リュウちゃん、問題とか全部適當っていうか勘だけで解きまくってるから。その勘に狂いはなくて、数学以外全教科トップクラスだから毎回小テストはつねに一位をとってるわけで。テスト中ぼつとするのは、真っ先に全部終わらせたからであって、諦めてたんじゃないんだよね。

でも数学に関しては本人曰く、計算はどうも勘だけじゃダメみたい。

じゃ勉強しなさいと言いたい、でも言えない。

「お前は相変わらず勘だけで全問正解か・・・妬みの神でも舞い降りてんのかお前は？」

「何じゃそりゃ？」

雅くんの呆れた言葉にもキョトンとするリュウちゃん。自覚ないのって何だかいいのか悪いのか・・・。

「おら、席つけよお前ら。」

神楽先生が手を叩くと同時に私達はすばやく元の席へと戻る。恭田くんも絶望から脱出して席に戻っていった。

「・・・あく・・・皆もわかってると思うが、最下位の奴は・・・なあ？」

席に戻ってもまだ暗いオーラを漂わせている恭田くんを軽く無視して教卓から私達に笑顔を見せる神楽先生・・・笑みが黒い・・・。

「・・・じゃ発表するぞ。最下位は・・・前回同様、恭田。」

「ウツゾオオオオオオオオオオオン！！！！？」

いえ、皆大方予想できてました。信じてないのはあなただけです。

「で、トップは・・・同じく、龍一。」

「おつよ。」

やっぱしね・・・。



「後は・・・ケアレスミスとかそういうのばつかしだな。」

うっ！・・・まんま私だ。

「つーわけでえ・・・恭田？」

「!?!?!」

「お前、今日放課後三階の便所掃除な 逃げたらチョーク的  
「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

・・・そう、これが私達が必死になって小テストを頑張っていた理由。テスト最下位の方は、放課後この階のトイレ全部を掃除しなければならぬ。因みにこの学校の校舎は三つあって、校舎の各階にそれぞれトイレが二つずつあるわけで。おまけにこの学校のトイレは普通の学校より少し広くて、一人だとそのトイレを掃除し終わるのに一時間以上かかる。

つまり、全校舎の三階トイレ、計六つをきれいに掃除しなければならぬ。それも一人で。さらには男子女子トイレ両方も。これって危なくないですか？今更ながら思うけど・・・唯一の救いは、学校全てのトイレを掃除するんじゃなくて、三階のトイレを掃除するということだけ。

これはうちのクラスだけの制度で、一学期の中頃で定められたんです。決めたのは他ならない神楽先生・・・とリュウちゃん。

理由は、神楽先生曰く『こつこついうペナルティを付けたほうが皆気合を入れるだろ』、とのこと。まあ確かに気合入りまくりですけど・・・

・もつと他の方法でやって欲しかったです。  
それとその時の楽しそうな笑顔が今でも忘れられません。絶対楽しんでますよこの人。

でも神楽先生だけなら何とかなつたかもしれないけど・・・リュウちゃんの『お？いいじゃんそれ。賛成！』、という何とも気だるげな一言で決まっちゃいました。

いやだつてね？リュウちゃんに逆らつたら後が怖いんだよ？三ヶ月前に一人の生徒がリュウくんに反論したんだけど、その日以来からその人来てないの。優等生だつたんだよ？皆勤賞狙つてた子だよ？そんな人が突然不登校だよ？ずくつと。

・・・だから誰もリュウくんに反論はしません。その子と何があったのかさえも聞きません。いえ、聞きたくありません。理由は推して知ってください。

「・・・」

「ま、よろしく頼むわ」

・ケラケラ笑いながら言う神楽先生。そんな感じで言うもんだから・・・

「……いやだああああああああああああああああああああ  
！！！！！！！！（泣）」

ほら泣き出した。

「頑張れ。お前なら全校舎の三階トイレ全てをあっという間に終わらせられるから。」

「夜までかかるっていうのに何があっという間かああああ！！！」

「大丈夫だ。夜になったらトイレの花子が太郎かどっちか出てくるって思いながら掃除すれば自然と早く終わる。」

「怖くてトイレは入れなくなっただろーがああああ！！！」

「うっせーなあ。とにかく放課後やれ。教師命令だ。」

「何その上官命令みたいなありえない命令!？」

……まあ、私達がトイレ掃除しにいかなくてよかったあ……。

「さ、そろそろチャイムなるし授業始めるか。」

「ま、待つてくだせい神楽様ああ!!どうか、どうか助けておくんま素晴らしい!!!!」

「だから決定事項なんだからしようがねえだろ?もともとお前の勉強不足が原因なんだから自業自得だ。諦めろ。」

「いやですううううううううううううううう!!!!」

「……龍二、黙らせろ。」

「オツケー。」

……。

その後、彼がどうなったか知る人はいない（一部除く）・・・。

第百五の話 小テスト（後書き）

うーん、若干グダグダかなあ？・・・まあ、いいかな。

ともかく、大学宿泊オリエンテーションというのは疲れます。もうホントしんどいですね。

でも負けないぞ〜！頑張ります！

第百六の話 ジョギングGOGO！（前書き）

やっとこさ更新できました！…疲れた。

## 第一百六の話 ジョギングGOGO!

（龍二視点）

「リュウくんリュウくん!!」  
「んあ？」

昼過ぎ、俺とアルスとファイファイがリビングで茶を飲んでたら何かクルルがやかましく騒ぎたてながら風呂場から登場。今テレビ見てんだからもうちよい静かにしろよ。

「た、大変だよ〜!」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「まだ何も言っていないよ!?そして棒読みだよ!?」

どうでもいいから。

「ね〜リュウくん!」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「だからまだ何も言っていないってば!」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「むう!ふざけないでよ!」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「だ、だから聞いてって」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「ね、ねえってb」  
「そうかそりゃよかったなうん。」  
「・・・あ」





「うええ!?!」

そうとしか言えないんだからしゃーねえだろが。

「だって体重だよ!?!体重増えたらやばいんだよ!?!」

「何がどうやばい?」

「え、えっと…ほら、あれ!おデブちゃんになっちゃっやうよ!?!そんなのやだ!?!」

デブに“お”を付けるな。

「…別に見た目は変わってないけど…」

ソファの上でココアを飲みながら言うアルス。今頃喋りだしたか。おっそー。

「むー!変わってるよ!ウエストとか!」

ああ、腰周りね。

「でも、少しくらい増えたって別に…」

「少しじゃない!女の子にとっては重要なの!」

「そう…かな?」

「そうなの!」

ふん、女つてのは複雑なんだな。

「てか、アルスはどうなの?体重。」

「ボクは基本的に体重とか気にならないし…」

「あれ?そうなの?」

「うん。」

「ほお、こりゃビックリ。てっきりアルスも体重気にしてんのかと思ってたのに。」

「ふん……。」

「……何？その疑わしそうな目……。」

じつとアルスを流し目で見つめるクルル。アルス、たじたじ。

「……ねえアルス知ってる？」

「はい？」

「体重増えるとねえ……好きな人に嫌われちゃうよ？」

「!？」

アルスが肩をビックリと震わせた。

「……………」

？アルスがチラリと俺を見た……何でやねん。俺なんかしたか。

「……体重、増えてるかも、ボク。」

「増えてるんじゃないの？最近ココア飲みまくってるし。」

「あう……。」

ファイ、とどめの一撃。アルスは粉碎した。チーン。

「粉碎したって何ですか!？」

「ありよ？口に出してた？」

「はい!」

ありゃぺ。

「あはは、やっぱりアルスも純情な乙女でしたか」

「じ、純情な乙女って何なんですか！」

「そのまんまの意味でしょ？」

「フイフイ〜！」

「むみやあああ！頬ひっはるひゃ〜（引っ張るな〜）！」

「こらこら暴れるな二人して。」

「むう、そんな話どうでもいいよ！それよりリュウくん！」

『どうでもよくない！！』と叫んでるアルスは無視か。

…つか次の言葉、なんとなくつか確実に予想できるぞ。

「私、痩せたい！」

「あ、そう。」

案の定、痩せたい＝ダイエットしたいと申し出てきました。

「だからあ、リュウくんも協力して！」

「断る。」

「……。」

「……。」

「……う……グス。」

「……チッ。わあったよ付き合ってたやる。」

「やったあー！」

目の前でマジ泣きされたらやかましいことこの上ねえからな。何だかんだで俺も甘いないろいろ。

「じゃ、準備するか。」

「はあい」

「ボクも行きます。」

「あ、じゃ私も付いてこ〜っと。」

何か神妙な面持ちで立ち上がるアルスと愉快気なフィフィ。何だこの真逆は。

まあ、それはいいけどさあ…。

「ところでクルル？」

「ん？」

「その格好、風邪引くぞ？」

「?……………!!」

言い忘れてたけど、こいつ今バスタオル一枚。風呂上りだから。昼間にシャワー浴びる奴がいるか？あ、いるかも。

「あわわわ…ち、ちよつと待ってて!／＼／＼」

顔真っ赤にさせながら洗面所へ駆け込むクルル。

「…魔王、ボクより若干胸あるんですね…。」

隣でアルスが何か暗い感じで呟いた気がしないでもないが無視しよう。

「近くのグラウンド前」

「よし、頑張るよー！」

「へいへい。」

「…頑張らなきゃ…。」

…結局、外でジョギングをすることになった俺たちは、近くのグラウンドへと来ましたイエーイ…はぁメンドイ。

「で？どこまで走るんだ？」

「グラウンド五十周！」

「ご、五十周！？」

「だって痩せたいんだもん。走れば走るほどいいでしょ？」

「そ、そりゃそうだけど…。」

「じゃ決まり〜」

ここ、一周だけでも五キロあるぞ？どこまで体力が持つかが問題なんだがね。

因みにクルルはピンクの白いラインが入った奴と、アルスは黄緑の白いラインが入ったそれぞれ同じタイプの長袖、長ズボンのジャ―

ジだ。先日、服を買う際に二人にそれぞれ選ばしてやったわけよ。選んだ理由はアルスが『ボクと同じ色』で、クルルが『グツジョブ！』だそうだ。アルスはわかるがクルルは意味わからん。

あ、俺は紺色の赤ラインの同タイプのジャージな。学校でも使うぞ。

「ま、頑張りなさいな」

「一人楽だなお前。」

ファイフが俺の肩に止まりながら愉快そうに言いやがった。こいつだけ私服。

『…何故私まで行かなければならないのだ？』

「いや、何かノリで？」

『ノリ！？』

で、人の腰でやかましく騒ぎ立てるのがバカ剣ことエル。せつかく出番を作ってやったんだからむしろありがたく思っただけだ。欲しいもんだね。

「…リュウジさん、走りにくくないですかエル腰に付けて？」

「普段から腰に付けてるから別に気にはならないぞ。」

「普段から腰に付けてる時点でアンタ危険人物じゃないの？」

「気ニシナイ。」

まあ一回おまわりさんに尋問されかけたけど。俺だってわかった途端に何故か尻尾巻いて逃げ出したからお咎め無しだったんだよね。あれが。H A H A H A。

「さ、ともかくさっさと行くぞ。」

「はい！」  
「はい！」

うん、元気よしだな。

「そんじゃスタート！」

「おー！」

「お、おー！」

クルル、テンション高いね。アルス、付いていけてねえよ。

まあともかく、ノルマは五十周、か。案外きついかもな。

こいつらにとつて。

く走り始めて五分後く

「えっほ、えっほ、えっほ、えっほ。」

「は、は、ふう、は、は、ふう、は、は、ふう。」

後ろを振り返れば、二人は白いタオルを頭に巻きつけたまま真剣な面持ちで走っている。

俺？適当に走ってるぞ。

ちよつと余談だが、ジョギングやマラソンをしてる時の呼吸法は適当じゃなく、アルスみたいな鼻で二回息を吸って三回目で口から息を吐く。これなら無駄に体力を使わずに済むし、スタミナ切れを起こすこともない。変に息を吸ったり吐いたりしていると、すぐに息切れを起こしてしまう。マラソン選手もうまく呼吸しながら走ってたんだぞ。

・・・まあ、今回はジョギングっつーかダイエットの話だし、こんな解説もありかなっつてなわけで。説明させてもらった。

あゝ、今んとこ一周目終わったとこだな。ま、この調子がいつまでも続くわけねえけど。

〜二周目〜

「えっさ、えっさ、えっさ、えっさ。」

「は、は、ふう、は、は、ふう、は、は、ふう。」

今二周目。まだペースは乱れていないな。さすが勇者と魔王やつてるだけある。

つーか二周目で息切れする奴はいねえか。あ、いる？そっか。



く六周目く

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ…。」  
「ひ、ひ、はあ、ひ、ひ、はあ、ひ、ひ、はあ…。」

…呼吸の音が変わってきてるけど、顔色に変化はないな二人とも。

俺か？俺は息切れ一つしてねえぞ？だからこっぴどだけ冷静に解説できんだ。

く十五周目く

「ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ…。」  
「ふ、ふ、はあ、ふ、ふ、はあ、ふ、ふ、はあ、ふ、ふ、はあ…。」

十五周目でも大して息が上がっていかないというのはさすがだな。やっぱりアルスは元の世界でも特訓してたんかねえ？

…問題は、魔王の方だな…息微妙におかしいって。あれか？お前は箱入り娘だからか？それとも悪く言えば二ト？

く二十五周目く

「ひい、ひい、ひい、はひ、ひい、ひい、ひい。」  
「くっ…は、は、はあ、は、は、はあ…くう。」

…さすがに疲れてきたか。クルルなんて息が何か微妙にやばい気がするし、アルスもそれなりに息苦しそうだな。

しかもいつの間にか二人揃って長袖ジャージは取っ払って腰に巻きつけている。

「おいお前ら大丈夫か？」

「だ、大丈夫V…。」

それどこで覚えたクルル。

「み…右に同じ…です。」

アルス、ツツコミ忘れとるぞ。

〈三十五周目〉

いやあにしても一般人だと呼吸がやばくなるくらい走ったなあ

あ？俺？別に？





アルスが謎な答えで返した。そのまま倒れる。

〈四十五周目〉

「ひゅう…ひゅう…」

「はひ…はひ…えう…」

死にかけな二人は頭に巻いたタオルから汗を滴らせていた。結構分厚いタオルなんだが…二人の発汗量を物語つとるなこりや。

「おい、後五周だぞ。頑張れ。」

「はにや、はにやは\$%\*?!#@。」

「は、はひ…はひ…」

返事もままならない二人。つかクルルに関してはさっきのアルスの如く宇宙人語をくっちゃべっている。これで宇宙からお客さんが来た時は安心だな。侵略目的ならぶっ飛ばすけど。

〈四十九周目〉

やっときさ、後少しで五十周目。やれやれ。

「はい、後ちよつと。後ちよつと。」

「ふは、ふひゅ、ふみゅ、ふひよ……。」「

「ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ、ひゅ……。」「

さつきまでズタボロ状態だったが、ちよつと元気出たみたいで顔に活気が戻ってきた。

ともかく、後数メートル。ラストスパート。

「ほおれファイトファイトー。」

「頑張れー!」

『後少しだ。』

俺とファイフィとエルの声援で、俄然力が湧いてきたのかペースを速める二人。その意気だその意気。

よし、後少しだ…後数十歩…数歩…

「ゴール。」

「「いやったあああああああああ……!」「」

俺が宣言すると同時に歓喜の叫びを上げ、そのまま地面にゴロリと仰向けに横たわるアルスとこけてそのままゴロゴロと転がっていくクルル。あ、木に頭ぶつけた。バカだ。

「はあ、はあ…お…終わりました…。」  
「うえ〜んリユウくん！」

肩で息をしながら苦しげに呟くアルス。その顔はどこか爽やかだった。ついでにクルルは頭のコブを抑えて泣き喚きながら戻ってきたので無視した。

「お疲れ〜。」

「一先ず、あらかじめ持つてきたいたタオルを二人に手渡した。」

「あ、ありがとうございます…。」  
「グス…ありがとう。」

汗びっしょりの顔を一生懸命拭く二人。服もビチャビチャで、こりや洗濯しなきゃならねえなあ。

「で？こんだけ走って気は済んだか？」  
「ええ…もう十分です。」  
「走るのってしんどいね〜。」「」

お前途中で浮いてたけどな。さすが魔王、浮遊術はお手の物ってか？つーか提案者が一番楽しんでたってどうよ？

「ほら、いつまでも座ってねえで立ちな。」

へたり込んでるアルスに手を差し出す俺。

「あ…ありがとうございます／＼／＼／」

その手を握って腰を上げるアルス。顔が赤いのは暑いからだろうな。

「ふ〜っと、にしてもいい運動になったなあ。」

「…とか言いながらアンタ汗ちよっとしかかいてないじゃないの。」

フィフィが耳元で言った。何か変な感じ。

「俺にかかれば五十周なんて軽いつての。」

「…アンタってホント人離れしてるわね。」

よく言われるよ。

…っーかもう夕方か？…カラスが何か鳴いておりま。

「ふう…さ、日が沈む前にとつとと帰るぞ。」

「…ふあ〜い…。」

何とも気のない返事をして、体中から力を抜いたかのように歩き出すアルスとクルル。遅っ。

「ほら、ちゃっちゃと歩く。」

「そ、そんなこと言ったって…。」

「もう足が痛くてうまく歩けないよ〜…。」

情けねえなあオイ…仮にも勇者と魔王だろうが。

「うう…こんなことなら五十周って言わなきゃよかった。」

「自業自得ですよ…足痛いです…。」



… ったく… しゃーねえ。

「… じゃ、帰ったら？」

「ふぁい…？」

「ココアとチョコやるぞ。」

「はい！！」

【ダッ！】

うおう、いきなり元気なって走り出しやがった。ってこら待てやさっきまでへろへろだった奴らが急に元気一杯になってんじゃねえよ。

「リュウくん速く〜！」

「帰りましょー！」

「……。」

「……。」

『……。』

ふう… 好物の前では疲れなんて吹っ飛ぶか。

「… はいはい今行くつての。そんな慌てるな。」

「アンタも結構甘いわね。」

『今に始まったことではないだろう。』

っつさいよ妖精と剣。

ま、結局ダイエットは一日しかもたず…風呂上りのチョコとココアの誘惑に負けた二人は、翌日ちょっとだけ体重増えたのは言うまでもねえ。

またいつか走りに行くのかな？…メンドクせ。

第一百六の話 ジョギングGOGO！（後書き）

どうも、コロコロです…はあ。

最近、いろいろあって疲れが溜まってるようでして…体もだるいし、肩こりまくってます。今回の更新が遅れたのも、それが原因です…はあ。

無理はしないって決めたんですけどね…ははは、どうも無意識のうち

ちに無理してしまうみたいです、俺。まあ、ともかく。これからはリラックスしていきながらやっていけたらな〜って思ってます、はい。

それでは皆さん、またお会いしましょう…結局それで終わりかい俺。

第一百七の話 レッツゴー渋谷！での出会い1（前書き）

やっと更新できました〜…って昨日更新する予定だったのに〜！）  
泣）

しかも今回は文章微妙な気がする〜！

## 第百七の話 レッツゴー渋谷！での出会い1

（アルス視点）

「いい天気だねえ」

「晴れてよかったな。」

「何ていうか、暑いくらいね。」

「そうですね。」

天気予報では快晴って言うてましたけど。

…あ、ごめんなさい今何してるか説明してませんでしたよね。

ボクらは今、この町の天分町駅テンブチョウエキつとところの前の広場に来ています。石畳の広場の真ん中に噴水があつて、それを取り囲むようにレンガで出来た色とりどりの花壇が広がっています。それでここは、市民の憩いの場となつているそうです。

…それで今回、ボクらがここにいる理由なんですけど…。

「私、デンシャつて初めてだから楽しみ〜」

「そんなおもしろいもんかね？」

「そりゃアンタにとっては慣れたもんだと思うけどさあ…。」

そう、今回はデンシャという乗り物でお出かけです。

理由は、こないだマサさんとリュウジさんが電話でいろいろお話し  
てて、その時に皆でラーメンを食べに行こうという約束をしたらし

いんです(第百三の話)。行き先はトウキョウ・シブヤってところらしいです。リュウジさん曰く、トウキョウはこの国の首都らしいです…てことはすごく広いってことですよ…正直楽しみです。

ですから、ボクらは集合場所であるここで皆を待ってるんですけど…そろそろ集合時間かな？

えと、今集合してるのはボク、リュウジさん、魔王、フィフィ、カリンさんです。

「…にしても今日は人が多いね。」

「まあ、休日だからかな。」

…確かに広場には子連れやお年寄りの人が多いです、はい。

「ここにアタシ達がいるの、皆わかる？」

「さあな。」

何も考えてないでしょリュウジさん…。

「…しゃーねえなあ。」

？

「…お前ら早くこっちに来ないと例のあれバラすぞ。」  
『待てやあああああああああ！…！』

速っ!?!皆一斉に集まってきた。

「はい全員集まったな。」

「ぜえ、ぜえ…な、何を言い出すかテメエは…。」

「さあ?。」

うわぁ、白々しい…とゆうより例のあれって何ですか一体…。

「とゆうより!普通に呼べばよかったのではないか!?!」

「おもしろければ何でもよしだ。」

「じゃおもしろくなる代価としてあたし達に生き恥を晒せというのか!?!」

「そうなるわな。」

「コロー…ス!!!」

「久美…落ち着く。」

「勝てないって久美ちゃん…。」

悪魔のような形相でリュウジさんに迫ろうとするクミさんと、それを抑えるリリアンとカナエさん。

「で、これで全員か?」

そして華麗にスルーするリュウジさん…。

「え〜と、龍二いる、アルスいる、クルルいる、フィフィいる、雅いる、ステイルいる、久美ちゃんいる、リリアンいる、香苗いる、ロウ兄弟いる、でアタシ…全員ね。」

カリンさんが点呼を取った。

「あれ？美紀ちゃんと美香ちゃんは連れてかないの？」

「二人は今日学校で修学旅行があるからいないわよ。」

「北海道だったっけ？最近の小学校ってのはリッチになったもんだ。」

「お前そのセリフオッサン臭いぞ龍二。」

「そういう雅こそお姉さんいないじゃない。どこよ？」

「姉さんは大学のイベントで急遽来れなくなっちゃまったんだよ。」

「とても残念そうにしてみましたけど…。」

全員来れるってわけじゃなかったんですね。

「ん？リュウジ、エルは連れてないのか？」

「そりゃ剣なんて街中に持ってつたら…。」

「持つてるぞ？」

「マジ！？」

マサさんとクミさんが揃ってツッコんだ。

「ほれ、こじ。」

『…狭いぞ。』

…リュウジさんが肩に担いでいる黒くて細長いスポーツバッグの中で話すエル。持ち運びには便利だろうけど、本人にしてみたらきついみたいです。

「…何でわざわざ持つてくんだ？」

「いや、一人は寂しいだろおなぐって。」



『さ、寂しくなどないわ!』

「じゃここで置いていつてやるうか？」

『いやそれだけは勘弁…。』

相変わらずです。

「ところで、今日の二人の服は余所行きか？」

「あ、はい。」

「えへへ〜 リユウくんを買ってもらったんだ〜」

えっと、どうでもいい話なんですけど…ボクは白いTシャツの上に水色のパーカーで、膝まであるデニムの短パン、頭には白い帽子。

付けてる理由は、この髪が目立つからです。元から目立つのは苦手だから…。

で、魔王が白いワンピースを着て、胸にピンク色のリボン…チャームポイントらしいです。ボクに比べてシンプルだけど、一番目立ちそうだなあ…ワンピースとかスカート系ってボク苦手なんですけど…。

因みにリユウジさんとフィフィはいつもと同じ服装。フィフィの理由は余所行きの服を買ったこと、リユウジさんに関しては…その…服を一々変えるのはめんどくさいと…。

…まあ、リユウジさんらしいかな？

「よし、そんじゃ行くか〜。」

「ってオイコラ!誰か忘れてねえか!？」

あれ、キョウウタさん…いつの間に…。

「お、いたのか影薄。」

「最初はなつからおったわ！」

「えー!?」

…あ、思わず声が…。

「……………グスン。」

「ご、ごめんなさいキョウタさん！えっとその、気が付かなくて……………」

「アルス、それフォローなってないぞ。」

「ドンマイ。」

あうう…何だか罪悪感が…。

「つかさあ、こないだのテスト以来全然お前見かけなかったんだがどこ行ってた？」

「……………」

?キョウタさんの顔が曇った。

「…罰のトイレ掃除の時に、こっそり仲間二人に集まってもらって全員で共同作業に移ったんだけど……………」

仲間？

「…一人でやるべきことを三人でやったもんだから、ペナルティとして学校中のトイレ全部を三人で掃除してたんだ……………」

……………。

「で、筋肉痛でしばらく学校休んでたってわけ。」

…あの学校のトイレ、全部ですか…。

「自業自得。」

「言つべき言葉が無いわね。」

「情けない…。」

「アンタら悪魔っすねえ!？」

「あの…お疲れ様でした。」

「!!あ、アルスちゃん…うおおおおおおおおおん!!」

キョウウタさんがボクの前で泣き出した…せめて誰か慰めてあげましょうよ…。

「じゃとつとと行くぞー。」

『さんせーい。』

「あ、待ってくださいよ!」

「ってやっぱり俺は置いてけぼりですかい…。」

皆が先に行ってしまったので、ボクは慌てて追いかけた。

…キョウウタさんはさらにその後をトボトボと追いかけてきた…すいません。

く電車内く

.....。

「うわあすごいすごい！」

「クルル、あんまはしゃぐな。周りに迷惑だ。」

.....。

「うっひゃく速いわねえデンシヤって。」

「電車にしては普通くらいじゃね？」

「これよりもっと速い電車ならいくらでもあるわよ？」

「ほえく.....。」

.....。

「？アルス...どうしたの？」

「うっん、ちょっと考え事してるだけ。ごめんリリアン。」

「いや...気分悪くなったら言うって。」

「うん、ありがとう。」

リリアンに笑いかけてから、もう一度ボクは窓の外に目を向けた。

デンシヤの中の座席は、お互いが向かい合ったような位置取りになっ  
っていて、それぞれ四人座れる。とゆうわけで、ボクとリュウジさ  
んが向かい合って、隣にリリアンが座っているという形になったわ  
けなんですけど...さっきまで席の取り合いをして（主にカナエさ  
んとクミさんとカリンさんが）、全然収まりそうになかったからリ

ユウジさんが席を指定して事なきを得ました。

…まあ、『今すぐ黙らないと電車の外に放り出す』って言われたら…静かになりますよね。

「すごいねーアルス。デンシヤって。」

「そうですね。」

ファイイがボクの肩から語りかけてきて、ボクは外の後ろへと流れていく木々を見ながら答えた。

…正直言つて、ここまですごいなんて思つてなかつた。最初駅で見ただ時も圧巻だったけど、大きな鉄の箱をいくつか繋げながら走っているのにこの速度の方が驚きだった…リュウジさんからデンシヤのことは聞いたことあるけど、頭の中で思い描いていた物とは全然違っていた。もっとゆっくり動くのかと思つた。

これがボクらの世界にあつたら、わざわざ魔物がうるつく道に出て遠い町に行かなくて済むのになあ…そうすれば皆安心して出かけられるのに…。

「そついや龍二ってやろうと思えば競歩で電車追い抜かせられるんだっけ？」

「マジで…?」

「まあな。」

「あっさり認めるな。」

「…じゃ龍二って…デンシヤに乗るより、徒歩で行った方が速いんじゃない?」

「ま、そうだけどさ。そこはノリだノリ。」

「…お前のノリってさっぱりわかんねえな。」

「気ニシナイだぜ雅。」

「…はあ〜。」

「…やっぱりデンシヤよりもリュウジさんにおんぶしてもらった方が早く着くかな…？」

「ふう…。」

「それにしても…このガタンゴトンっていう揺れ具合が心地いいなあ…ふあ〜…眠い…。」

「…リュウジさ〜ん。後何分で着くんですかあ？」

「んあ？あと十五分ちよいしたら乗り換え。」

「十五分かあ…。」

「…すみません、ちょっと眠いで着いたら起こしてもらっても…。」

「…おおいぞ。」

「…ありがとうございます…。」

「…あ。そういえば昨日魔王が寝返りで蹴ってきたから眠れなかったっけなあ…。」

「…あ、リュウくん見て見て！あの家変な形してるー！」「どねどね？」

…蹴った本人、メチャクチャ元気だし…。

「…おやすみなさい。」

誰も聞いていないことを知りながら呟いて、ボクは窓に頭を寄せた…。

…窓から伝わる振動…気持ちいい…

…スウ…

【コチヨコチヨ】

…。

【コチヨコチヨコチヨ】

…ん…。

【コチヨコチヨコチヨコチヨ】

…？…。

【コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ】

……う……。

【コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ】

……う……。

【コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ】

……うううう……。

【コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコ】

「チヨコって何ですかあああああああああ!!!!」

「きやは 起きた起きた」

あう〜!耳がくすぐつたい〜〜〜!

「うう…魔王何してんですか!?!」

「暇つぶしよ〜ん」

「暇つぶしに寝てる人の耳くすぐるのやめてよ!!」

「だっておもしろいもん。」

「そんな理由で睡眠妨害!?!って何で魔王とリリアン席入れ替わってるんですか!?!」

「…クルルが遊びたいから…交代してって…。」

「しないで!!!!」



「こんの〜…せっかく気持ちよく寝れると思ったのに〜…！」

「ありえ？怒った？（笑）」

「……………」

ムカツ！

「……………あ、魔王何あれ？」

「ほえ？」

隙あり！！

【パッコーン！】

「つぎゆにゃ！！…？？」

余所見してる隙に頭に拳骨落としました。昨晚のこともあって威力はかなりあったと思います。その分スッキリしました

「うみや〜！やったにゃあああああああ！！！！」

「日頃の鬱憤、ここで晴らさせてもらいます！！！！」

「上等！表でろー！！」

「こっちのセリフです！！」

【コトコトン…！】

〜で……〜

『渋谷〜、渋谷〜です。お降りの際、お忘れ物無きようご注意ください。』  
『しゃいあやべ噛んだ。』

「オイこら車掌。」

途中でデンシヤを乗り換えて、ようやく目的地に到着。さっきのはマサさんがどこからともなく発せられた声にツッコミをいれたところです。

にしても…すごい人の数だなあ…。

「そついや君らってこういう人がこつた返してる所に来たのって初めてじゃないか？」

「…こつちの世界では…確かに初めて…。」

…いたた…また頭が…。

「うきゆ〜…。」

「ま、魔王様大丈夫ですか？」

「アルス、しつかり。」

「大丈夫？」

「あ、ありがとうスタイル、ファイ…。」

…結局、魔王とボクのケンカはリュウジさんによって止められた…  
鉄拳制裁という形で。

「いやあ渋谷に来るのは久しぶりだなあ。」

拳骨落とした張本人はボクらに目もくれずに周囲を見回していた…  
うう。

「やっぱり休日だけあって人でごった返してるな。」

「しょうがないよ、休日なんだから。」

「ともかく行くこうぜ？ 駅でじっとしてんのもなんだし。」

そう言うなり、さっさと歩き出したリュウジさん…あの、せめてボ  
クらに一言かけてもらいたいんですけど…さっきからずっと蹲って  
るんですけどボクと魔王。

「おいアルスクルル、置いてくぞ。」

「「はあい…。」」

…もついいですよ…クスン。

「で？ 結局どういこうと行くの？」

「ん、道玄坂に新しくオープンしたラーメン屋。何か坦々麺がうま  
いとかいう情報。」

リュウジさんが懐から取り出したのは、いつも愛読している『ラーメン命』という雑誌。ソファに寝そべりながら読んでるのをよく見ます。

「リュウくん、タンタンメンてなあに？」

「ん？坦々麺つてのはなあ……………」

？急に考え込んだリュウジさん…

…あ、今微かに笑った。明らかよからぬことを考えてる顔だ。

「……………すごい甘口のラーメンだ。」

「へえ……………どう甘いの？」

「チヨコみたいなものだ。」

「ええ！？そうなの!？」

「おうよ。」

「すっごーい!」

……………確かこないだリュウジさんの雑誌チラッと読んだ時に見たタンタンメンって赤くてかなり辛そうだったような……………それに魔王って辛いのが苦手じゃ……………(第八十八の話参照)。

「早く行こ行こ!」

「焦るな、ラーメンは逃げんよ。」

「って言いながら一番早歩きしてんのはお前だが。」

マサさんが容赦なくツッコミを入れた。

「……………クルル、だまされてる……………」

「言つなりリアン。相手は龍二だ。」  
「…そうね。」

…魔王、舌の機能失わないでね。

「！うわぁ、すごい！」  
「やっぱりごった返しとるな。」

いつの間にか出口まで来ていて、魔王とリュウジさんが先に外に出た。すごいって今も人が多くて十分すごいんですけど…。

「皆も早くおいでよ〜！」

魔王が手招きしてるけど、言われなくても行きますって……  
……ば……。

「…すごい。」  
「おっき〜！」  
「……。」  
「……。」

ロウ兄弟とスティルに関しては、驚いて言葉も出てないです。

…ボクも言葉なんて出ませんでしたけど。

そこはホントに広くて…上を見れば巨大な建造物ビルが陽光を受けて輝いてて、前方を見れば所狭しと並んだ建物…多分、高い塔の上から数えても途中でわからなくなりそう。

そして何より一番インパクトがあるのはそこを行き交っている人の数。今ボクらが住んでいる町なんて目じゃないくらいで、目が回りそうだった…これボクらの世界にある王都といい勝負なんじゃないかな？あっちもかなりの人の数だけど、ここの道の広さとか半端ないし…。

「おし、じゃ道玄坂行くぞ。」

「ほらほら、こんなところで棒立ちしていると人にぶつかるぞ？」

「あ、はい。」

やっぱりリュウジさん達はさして驚いた様子もなく、人でこった返している道を進み始めた。まあ、何度も来たことあるなら当然だと思っけど…。

とにかく、これだけの人がいるんだから、迷ったらシャレになりそうもないな…。

「お前らちゃんと付いてこいよ。」

「はい！」

「クルル…一番不安…。」

リリアンに同意です…。

「しっかしまあ…すごいわねえ…」

「ええ…。」

フィフィは今、ボクの髪から頭を覗かせてる。やっぱり目立つからなあフィフィ。

【ドン】

「あ、う、ごめんなさい。」

うっかり他人に肩をぶつけてしまった…気をつけないと。

【ドン】

「あ、すいません。」

【ドン】

「う、ごめんなさい。」

【ドン】

「あう、ごめんなさい。」

【バキ】

「す、すいませんでした！」

…ホントよく当る…最後の人なんてぶつかっただけで吹き飛んだんですけど。どんだけヤワなんですか。

「アルス、気をつけないと。」

「ど、努力はしてるんですけど…。」

だってスペースが狭くて…リュウジさん達の姿を確認できるのがやつのほど。一度でも見失ったらいつかんの終わりだから集中しないと…。

「…！あ、アルスアルス！」  
「いだ！な、何？」

いきなりフィフィが髪の毛を引っ張った。これ結構痛いんですけど…。

「あれ見て、あれ！」  
「あれ？」

あれって………お店？

「あのお店がどうかした？」  
「よく見てよあれ。」

？………ああ。

「あれかあ。」  
「でしょ！？」

フィフィの言うあれってというのは…装飾品屋の前に並べられたアクセサリーの数々。

言っていなかったと思うけど、フィフィは装飾品には結構こだわるタイプなんです。特に腕輪とか。

…でもアナタ、大きめに付けられないじゃないですか。随分前に聞いたところ、『見た目がいいの！』と返されました。

「うう、すごい数の装飾品がある…。」  
「…ダメですよ今行ったら。」



「え〜!?!」

「え〜!?!?じゃないよ。今からリュウジさん達とお昼食べるんだから、その後でいいじゃない?」

「うう〜…わかったわよ。」

…なんだかんだで、年上ぶってるけどフィフィもボクラと変わらな  
いと思う…。

「さ、行こう。」

「はい。」

フィフィをたしなめて、改めてリュウジさん達の後を

……………。

後を……………

……………。

「……………」  
「……………」

「見失ったわね？」  
「……………」

あ、あれ〜……………？

「…なあにしてんのよアンタはああああー！」

「え、えええ！？ボクのせい！？」

「立ち止まったアンタが悪い！」

「よ、呼び止めたのはファイファイなんじゃ」

「うっさあああああいー！」

り、理不尽ですうううー！！（泣）

「…はあ…どうすんのよ。」

「あうう…。」

下手に動き回れないボクらは、駅の近くにある犬の銅像の傍でへたり込んだ…周囲にはたくさんの人達が集まっていて、お喋りしたり休憩したりしてる人が多い。

…今のこの状況では関係ないですけど…はあ。

「連絡取るうにも手段がないんじゃないでしょうか…。」  
「まあねえ…。」

フィフィはというと、ボクの肩の上で体育座り…。

「ねえ、テレパシーとか送れない？」

「こんな人が多いとこじゃ使えないよ…。」

意思伝達魔法は、ことう人が大勢集まる場所じゃ使えない。多くの思念が飛び交ってる中で使ったら、頭が割れそうになるから。

いつけん、この魔法は便利だなんて思うけど、場所を選ぶっていうのが欠点なんだよね…。

「…ホントどうしよう。」

「…待つしかないよ…。」

逆に探しに行ったら、変なところに迷い込んだりしそうだし…。

「……………」  
「……………」

…とりあえずやることも無いから、周囲の人達の話声に耳を傾けてみた。

「ねえ、それブッチじゃない？」

「わかるう〜？昨日買ったばっかなんだ〜。」

『マジ〜?』

『チヨ〜イカスって感じ〜?』

『ねえねえ、今から俺らと遊びに行かない?』

『ええ〜? どうしよっかなあ?』

『いいじゃ〜ん、行こうぜえ?』

『う〜ん…行っちゃおっかあ?』

『そんでさ〜……。』

『うっそマジで!?! ありえねー!』

『ぎゃはははははー!』

『最近出来たばっかのゲーセン行こうぜ!』

『いいねえ!』

『え〜? ちょっと待ってよ来れないってどういことよ〜?』

『え〜マジ〜? どんだけ〜?』

『テメこないだどこの男と一緒に歩いてたんだよ!?!』

『知らないわよそんなの!』

『だ〜れだ?』

『ああ、この声は…お前だなあ〜?』

『青い海のバカやるおおおおお!?!?!?!』

『ここ海じゃないわよおおおおお!?!?!?!』

『ここどこかに埋蔵金が…。』

『兄さん、徳川の埋蔵金探すって言ってなかったっけ?』

『アイ・ラブ・ハゲ!!!!!!』

「……………」  
「……………」

お、落ち着けない… + 何言ってるのかさっぱりわかんない…。

「…やっぱり賑やかな、ここ。」

「…そだね。」

静かな場所って存在してるのかな、ここ…。

「…しゃーないわ。」

「？」

フィフィが肩から立ち上がった。

「私、ちよつくらリユウジ達探してくるわ。」

「え？ダメだよ下手に動いたら…」

「大丈夫だって。高いとこ飛ぶし、そんな遠くまで行かないから。」

「で、でも…」

「そこら辺一通り探したらすぐ戻ってくるからさ。」

……………まあ、連絡手段が無い限り、そうするしかないかなあ……………。

「…ゴメン、ファイファイ。お願い。」  
「オツケー！」

ヒョイと肩から飛び降りると、すぐさま上昇していったファイファイ。速く飛んでいったから、周囲の人達にはバレてない…と思う。

「……………」

あ、考えてみればファイファイいなくなったらボク一人だ…。

「…孤独です……………」

…まあ、しょうがないですけど…。

……………。

あ、そういえば…。

「えっと…【ゴソゴソ】…あった。」

ズボンのポケットから取り出したのは、小さな革袋。ボクが昔から使っていた、愛用の財布だった。こつちの世界では元の世界の通貨は使えないから、今はリュウジさんからもらったお小遣いを入れる。つまりこつちの通貨。

【チャリン】

「ええっと……よし、いける。」

中からわずかなお金を手に出して確認してから立ち上がった。

喉渴いたし、どこかで飲み物買おうと。

「え〜っと……。」

銅像から離れて周囲を見回す……あまりここから離れない方がいいよね。

ん〜……そういえばどこで売ってたっけなあ……えっと、ジドウ……なんとか？

「……どんなでしたっけ……？」

うう……リュウジさんに詳しく聞いておけばよかったなあ……。

「テメエふざけんじゃねえぞ!？」

「!?!？」

へ、へ、へ!?!？

「いいから金出せって言ってんだよ!！」

「早く出せよ!！」

……ああ、ビックリした……ボクじゃなかった……。

ふと声がする方を見てみれば、狭い路地のところで三人の男の人がたむろしていた。そのうちの一人が男の人二人に囲まれていた。

…これって、カツアゲっていうんですたっけ？

「だ、だから言ってるだろ？今金持ってるないって。」

「ああ？渋谷来て無一文なんてことねえだろ？」

「嘘ついてんじゃないやねえよああ？」

「だ、だからあ…。」

明らか二人ムチャクチャ言ってる…

周囲の人もカツアゲに目もくれてないし…多分、恐いからあえて視線外してるんだらうけど…

これは見捨てておけないですよね…そう思ってボクは三人に近づいた。

「あの。」

「「「「？」「」「」」

声をかけたら、全員一斉にボクの方を見た…う、すっごい派手だあ…。

「あんだテメエ？ガキじゃねえかよ。」

「邪魔だよ、あっち行ってる。」

う…ダメダメ、下手に暴力なんてしたら騒ぎになっちゃう。



「そんなの関係ありません。その人困ってるじゃないですか。」

「…なんだこいつ？ガキのくせに正義の味方気取り？」

「やべ、マジ受けるんですけど？ぎゃははは！」

ガ…ガマンガマン。

「ですから！もうやめてあげてください！アナタ達後悔しますよ！？」

「んだとテメエ！？」

あ、怒らせちゃった…うう、ボクのバカア…。

「この野郎…調子乗りやがって！」

「もう許さねえ！」

……“野郎”？

【\* 野郎〃男 アルスの脳内方程式】



足元には、見るも無残な派手な男一人が…や、やり過ぎちゃった…。

「……………」

恐る恐る背後を振り返ってみると、さっきまでの光景を見てた人達が一斉にボクから視線を外して歩き出した…。

……………。

「…はあああああ…。」

…ボクって…ホント大バカだあ…。

「…な、なあ…？」  
「…はい？」

一人座り込んで落ち込んでるところを、誰かが声をかけてきた…。

「その、そんな落ち込むなよ…。」  
「…別に落ち込んでなんかいません…はああああ。」  
「いや誰からどう見ても落ち込んでるだろ。」

声かけてきたのは、さっきカツアゲされてた人だった。



「じゃ、何か飲み物奢る形でいいからさ？」

「喜んで！」

「即答!？」

ココア！

「…ま、まあいいか…。」

…そういえば、リュウジさんが『人の恩は素直に受けるのが吉』って言うてなあ…そんな時間もかからないと思うし…まあ、これくらいならいいかな？

あ、そうだ。

「自己紹介してませんよね。ボクはアルス・フィートです。」

知り合ったらまずは自己紹介、ですよ。

「ああ、俺は天介てんすけっていうんだ。桜田天介。よろしく。」

（一方…）

「あれ？アルスとフィフィは？」

『あ。』

龍二達がアルスがいないことに気付いたのは、龍二が坦々麵を店長が泣き出す程食べた頃だったそうなの…。

## 第七十話 レッツゴー渋谷！での出会い1（後書き）

最近、家に帰ってボタンキョウなことが多いコロコロです。とは言っても時々暇な時間を見つけてはこの小説をチヨコチヨコ書いていたり、最近買ったばかりの狩猟ゲームやったりで、自分なりの方法でリラックスできてます。

感想、メッセージでの応援コメントはすごい励みになりました、皆さんありがとうございます！これからも自分なりのペースで頑張ります！

で、今回の話なんですけど…桜田天介って誰かわかる人、います？

答えは、次回のあとがきにて！ヒントは短編 ヒントじゃねえ！？

第百八の話 レッツゴー渋谷！での出会い2（前書き）

どうにか更新できました…ちよくちよく書き綴ってましたからね。  
でも何だか文章に納得がいかない気がする…。

あ、因みに前回のあとがきの答え！それは、し

<続く!!>



## 第一百八の話 レッツゴー渋谷！での出会い2

（フィフィ視点）

「うっわあ、すごい。。。」

上空から見てみて、改めてこの街のすごさを認識した。道は人で埋め尽くされてて、隙間なんてわずかしかない。おまけに道を走るクルマも相当な数で…この多さ、明らか異常じゃないの？

「…やっぱり異世界って新鮮だなあ…。」

…このセリフちょっとおかしいかな？普通来れないよね異世界って。

…って元々の原因私だけ…。

……………。

「ま、いいか。」

過ぎたこと気にしたってしょうがないしね。

さ、そんなことよりとっととリュウジ達探し出さないとね。アルス



（アルス視点）

「んく…ふう。」

ああ…ココアおいしい…。

「…お前、今すっげえ幸せそうな顔してるな。」

「え、やっぱりそうですか？」

「自覚してたか。」

ココアは大好きですから

えと、今さっきの犬の銅像がある広場に戻ってきたボクとテンスケさん。そこにあつたジドウハンバイキというキカイでココアを買ってもらいました…てかこんな近くにあつたんだ…勉強不足だなあボク。形覚えとかないと。

『ハゲ・イズ・マイライフ！！』

…あの人、まだいたんだ…。

「ふう……ところでアルスってどこから来たんだ？」

ペットボトルから口を外したテンスケさんが話題を持ち出してきた。そういえば今さらですけど、テンスケさんの顔立ちってどこことなく大人びてる気がするなあ…。

「えっと、テンブチヨウってところから来ました。」

「へえ結構田舎だな。」

「え、ええまあ…。」

初めて見た時は田舎だななんて印象、これっぽっちも無かったんですけど…ボクが前に住んでた村に比べて。

「で、そんなところからこの渋谷に来たのはあれか？遊びにか？」

「あゝ…そんなとこなんですけど…。」

「？」

「…えと、皆とはぐれて…。」

「おいおい…渋谷で迷子になったら、見つけ出すのは困難だぞ？」

…覚悟はしてましたけど…。

「連絡つけるのか？ケータイとか。」

「えっと…ケータイ、持ってないんです…。」

そもそも、ケータイなんて物知りませんし…。

「…じゃ公衆電話使えば…。」

「よくわかりません…。」

「…。」

「…。」

「…絶望的だな。」

「…はい。」

使い方、教えてもらっとけばよかった…（泣）。

「…しゃーないな。下手に動いたらまた迷うのがオチだし。」  
「ええ…。」

フィフィが様子を見に行ってるはずなんだけど…まだみたいだね。

「……………」  
「……………」

う、うう…沈黙しちゃった…

何か話題話題…。

「…あ…そ、それで、テンスケさんはどうしてここに？」

ようやく話題を切り出された。

「ん？ああ俺は友達達と遊びに来たんだよ。それで俺が早く来すぎちまってさ…結果、不運に巻き込まれたけど。」

…さっきのカツアゲですね…。

「まあ助かったし、よしとするけどな。」

「あはは…ところで、お友達はどんな人なんですか？」

「ああ…一人は凶暴、一人は謎、一人は変人。」

……………へ？

「…どーゆー意味なんです？」

「そのまんまだよ。三人のうち一人は男で、こいつは俺の親友あくゆうなんだけどさ。スツゲエ変人なんだよ。突然謎なこと言うから。」

…変人って…。

「しかも変人を褒め言葉として受け止めてるし。」

変人…ですね。認めます。

「で、二人目はそいつの彼女なんだけどよお、おっとりしてんのか、ドSなのかさっぱりわかんなくってさ…謎なんだよ。」

「は、はあ…。」

ようは掴み所がない人っていうことなんでしょうか？

「で、最後なんだけど…俺の彼女なんだわ。」

「え！？テンスケさん、恋人いたんですか！？」

「あ、ああ…そこまで驚くか？」

あ…………。

「う、ごめんなさい。知らなかったんで…怒りました？」

「…………い、いや別に怒ってねえよ！？うん！／／／／／／／／」

…慌てたように顔を背けたテンスケさん…何で？

「…こいつ、上目遣いとか反則だろ…【ボソ】。」

「え？」

「い、いやいや何でもねえって！」

????????

「…ま、まあともかくだな…俺の彼女なんだけど、こいつがスツゲエ凶暴でさ。ことあるごとに俺に飛び蹴りかましたり、殴ってきたり、命令したりしてさ。挙句によくケーキ奢らせるんだよ。」

「た、大変ですね…。」

「大変なんてもんじゃねえよ。まあ確かに顔は可愛いさ。でもな？性格が難あるんだよあいつ。何で俺殴られなきゃならねえわけ？ケーキだって全部俺の自腹だぞ？おかげで貯金がヤバイんだよ。」

いきなりグチを言い出したテンスケさん……………あれ？

「大体、もう少し可愛げあってもいいと思うんだけどな俺は。性格変えろとまではいかないけど、殴る蹴るは勘弁して欲しいな。」

「あ、あの…。」





.....。

「いつからいたんだ？」

「ん〜、最初の『大変なんてもんじゃねえさ』の辺りから？」

「ボク気付いてたんですけど……グチを言い出してからず〜っと背後に立ってたのにテンスケさん、声かけても反応しないから……」。

「いやあにしてもねえ？アンタが私のことそおんな風に思ってたなんてね〜？」

「い、いやこれはだな……その、なあ……？」

「“その”……なあに？」

【ニツコリ】

可愛らしい笑みを浮かべる女の人……何気ににじり寄ってるのはボクの気のせいじゃないと思う。

それに対してテンスケさんは冷や汗を流しながら少しずつ後退します。

「え、え〜とお………すいませんでした「死ねえ！！！」ぐぶおおおおお！！！！？」

女の人が放った正拳突きがテンスケさんの鳩尾に見事にヒットした。

「がはっ……」

「……そしてガクリと膝を着いた……痛そうです……」。

「み、鳩尾は…無いんじゃないか…？」

殴られた部分を押さえながら途切れ途切れに言葉を紡ぐテンスケさん。無理しないでください。

「アンタが私の悪口言うのがいけないんでしょ？」

「だ、だからってここまでするこたあねえだろ〜が…。」

「アンタだからいいのよ。」

「どーゆー意味だそれ…。」

「そのまんまの意味よ。」

「…やっぱり性格可愛くない奴…【ボソリ】。」

「あんだって？」

「スイマセンゴメンナサイボクガ悪カッタデス。」

胸倉を掴まれて強引に立たされたら謝りたくなりますよね…。

「…ま、いいわ。それより。」

女の方はテンスケさんの胸倉から手を放してボクの方を見た。

「この子誰よ？」

「ゲホ、ゲホ…はあ…はあ…さ、さっきいろいろあって助けてもらったんだよ。」

テンスケさん、顔色悪いですよ？

「ふうん…外国人？」

「え？えつと…はい、一応。」

ボクらはアメリカかってところから来たことになってるんですけど。

「へえ、日本語上手ね。」

「ど、どうも……。」

「おい美羽。それよりあいつらはどうしたんだ？」

「ああ、二人ならさつきジュース買ってから来るって言ってたからそろそろじゃないかな？」

… あ、テンスケさん合わせて四人でしたっけ。

「おーい！」

「ああ、来たか。」

向こうの通りから髪をオールバックにした長身の男の人と、髪がサラサラしている女の人が駆け寄ってきた。

「OH！マイベストフレンド〜！」

「お待たせ。」

「よし、全員そろったわね。」

… 明らかボク、部外者ですけど…。

「？あれ？天介誰だそいつ？」

男の人がボクに顔を向けてきた。もしかしてこの人がテンスケさんが言っていた変人って人なのかな？

「いろいろあつて助けてもらったんだよ。」

「ほほお、男なのに随分凛々しい顔立ちだな。」

「…ボク女です。」  
「嘘ん!!??」

そこまで驚かなくても…軽くショックです…。

「え、マジで?…男の子だと思ってたのに…。」

「言われて見れば女の子に見えなくないけど…。」

言われてみればって何ですか。

「あゝ…もういいだろ?自己紹介したら?」

「…アルス・フィートです。」

テンスケさんになだめられつつ、少し拗ねた口調で自己紹介しました…。

「あはは、ごめんごめん。拗ねないでよ、ね?」

「…はい…。」

「っと、自己紹介遅れたわね。私は松岡 美羽。」

テンスケさんの恋人がミワさんで…

「私は岡田 京子きょうこです。よろしくねアルスちゃん。」

「あ、はい…。」

えと、テンスケさん曰く謎な人がキョウウコさんで…

「そして俺が天下一の大泥棒、ルンさんせ」

「「違うだろ!」」

【バキ!】

「ぐほおう!!…お、小野寺 拓馬たくまと言いまんねん…。」  
「は、はあ…。」

… テンスケさんとミワさんにツッコミを入れられたのがタクマさん  
… 変人でしたっけ？

「気にしないでねアルス。こいついつつもこんなバカやってるから。」

「は、はい。」

「H A H A H A、掴みはバツチシ！」

「どこかだ。」

… うん、確かに変です…。

「ところで、アルスちゃんは どうしてここに？ 一人で来たの？」

… キョウコさんが小首を傾げて聞いてきた… 何だかキレイな人だなあ  
…。

「いえ、一人じゃないんですけど… 皆とはぐれてしまっ…。」

「え、マジ？ 渋谷で？」

「… はい。」

… うう… 今さらだけど、この歳で迷子なんて恥ずかしいです…。

「で、うろついてても逆効果だからここで待機してるんだと。」

「大変ね。渋谷で迷子だなんて…。」

「あうう…。」

… こう、人が多いところで迷うのはすごく不安になります…。

「ふむ…どこら辺ではくれたかわかるか？」

「えっと……………うう。。。」

「む、無理に思い出そうとしないで、ね？アルスちゃん。」

キョウコさんが肩に手を置いて慰めてくれました…すみません。

「うくん…じゃあさ、アンタの連れがどこ行ったか見当つく？」

「えっとお…。」

確か…リュウジさん曰く…

『ん、  
に新しくオープンしたラーメン屋。何か坦々麺がうまいとかいう情報。』

……………

何で…重要な部分だけ思い出せないんだろう…自分…。

「…ううんとお……………ラーメン屋なのはわかるんですけどお……………」  
「ラーメン屋？」

あう…後ちよつとで全部思い出せそうなのに…肝心の部分が思い

出せない…。

「ラーメン屋……もしかして道玄坂じゃねえか？」

「……そ、そこですそこ……！」

タクマさんの閃きに感謝です……！

「あ〜じゃそこ行けば多分会えるんじゃないかな？」

「は、はい……！」

よかったあ〜……場所さえわかればもう大丈夫

……って、あ……道わかんない……。

「……………」

「……！？ちよ、アルスちゃんまた暗くなってる……！」

……はあ……ぬか喜びした分、事実が発覚した瞬間気分が最悪になるって……  
ていうのは本当だったんですね……。

「……お前まさか……道玄坂に行く道わかんないとか……？」

ギクッ。

「…ち、チガイマスヨ？」

「今さっき“ギクッ”って言ったし変に片言だからバレバレなんだけど。」

「?!、言ってたんですかあ!？」

「…アルスちゃん、可愛いかも…。」

「京子、抱きつこうとしちゃダメよ?」

「わ、わかってるよ…。」

「…これ以上抱きつく人が増えたら大変ですよね…。」

それよりも…どうしよう…。

「うーん……………しよーがないなあ。じゃ俺らが道玄坂まで送ってやってっか?」

「…え?」

「ああ、そうだな。どうせ今忙しくもないし。」

え?え?ええ?

「いや、その…そこまで迷惑かけるのは…。」

「迷惑じゃないって。それにどっちにせよ道わかんないなら一緒に行った方がいいでしょ?」



た、確かにミワさんの言う通りですけど…。

「まあどの道私も今日は遊びに来ただけだし、どこ行ってもいいからね。」

「で、でも…。」

「人の厚意は素直に受け取っておくのが吉よ？」

……。

「………すみません、お願いします。」

…迷惑かもしれないけど、こうまで言ってくれた以上、甘えてもいいよね？

「うーし、そんじゃさっそくこの人肉の森に入るぜ！」

「やめるその生々しい表現。普通に人ごみの中と言え。」

タクマさんにツッコミを入れるテンスケさん。あ、何かリュウジさんとマサさんのやり取りに似てる気がする…。

「にしても今日はホント人多いわねえ。」

「しょうがないよ、休日だもん。」

…休日のシブヤって恐いんですね…いろいろな意味で。

【……………】

？あれ？

「？アルスちゃん？どうしたの？」

「…何か聞こえませんか？」

「いや、周囲がうるさすぎて何も…。」

【……………ザザザ】

「……………あ、私も何か聞こえた。」

「ですよね？」

…何だろ？何か滑ってるような…。

【ザザザザザザザザザ】



『う、うわあああ!?!』  
『何だありゃあああ!?!?!?!』

周りの人たちは一斉にバラバラに散らばって…

!?!?!?

「イヤッホー——————!?!」

.....

.....えっと.....あれは.....

すごい土煙を上げながら、何かに乗った“リュウジさん”が“スノーボード”の如く滑りながらボクに向かって突っ込んできてっつわああああああああああああああああ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?



「おーし、アルス発見〜。」

……。

「………発見〜…じゃないですよ！何してるんですか!?!」  
「息してる。」

「いやわかつてますって!?!そうじゃなくて、どういつ登場の仕方してるんですか!?!」

「ん〜、普通に登場すんのは面白くないかな〜とか思ってた!?!」

「聞かないでください!?!ケガ人が出たらどうするんですか!?!」

「気ニシナイ。」

「気にしてください!?!」

再会できた喜びよりも、何だかいろいろ言いたいことがあったのでそっち優先しました。

「つーかお前はぐれてんじゃねえよ。探したぞ?」

「うう…そ、それはごめんなさい…。」

「まったく、しっかり付いて来いって言ったのに何してんだオメエは。バカか。アホか。アンポンタンか。」

「あううう…。」

…立場逆転してしまいました…。

「」「」「………。」

そんな光景を見ていたテンスケさん達は、ボクとリュウジさんのやり取りを呆然と見つめていました。

くおまけ

「う、う、う…ひどい、ひどいや…。」

……何故か崩れた建物の壁から、全身血だらけのキョウウタさんが這い出してきました…

ってあれ板じゃなかったの!?

第百八の話 レッツゴー渋谷！での出会い2（後書き）

…コホン、前書きで言おうとした答えを今言います。

答え！『桜田 天介』他、『松岡 美羽』、『小野寺 拓馬』、『岡田 京子』は、俺の短編小説『嫉妬したがり屋』のキャラクター達です！

感想でも新キャラといわれてたんですが、彼らはれっきとしたゲストキャラです。

…て彼らの正体に気付いてる方も多いようでしたけど…。

さてさてそれでは、次回に続きます！

あ、『嫉妬したがり屋』の方もよろしくお願いします。おそろしく都合主義満載ですよ（マテ



第百九の話 レッツゴー渋谷！での出会い③（前書き）

これ、昨日投稿しようとしたんですけど、間に合いませんでしたね  
…。

## 第百九の話 レッツゴー渋谷！での出会い3

（アルス視点）

「もーアルスちゃんどこ行ってたのよ？」

「あれから結構探したんだぞ？」

「こんなところで迷子にならないでよねえ。」

「ご、ごめんなさい皆さん。ご迷惑をおかけしました。」

「まあまあ、無事見つかったことだし、よかったじゃねえか。」

「そうですねよ。」

……………。

あれから、リュウジさんに連れられてドウゲンザカにまで来たボクは、そこにあつた小さなオープンカフェで待っていた皆に囲まれて注意されました。主にカリンさんとカナエさんとクミさんに。

「アルス…ドジっ娘。」

「リリアンそれちょっと傷つく…。」

哀れみ込めた目線で言われると余計に。

「…結構大人数だな。」

「そう…ね。」

「…拓馬くん…。」

そして、少し離れた席に座っているテンスケさん達。タクマさんは…その…いや、いるんですけど…ちょっと…。

「…アルス…あのボロ雑巾みたいな人は…？」  
「リリアン、ボロ雑巾っていうのは言いすぎ…。」

…ボロ雑巾、じゃなくてタクマさんは、入り口付近のベンチに横たわってます…生きてます…よね？

「…え、えつと…それよりリュウジさんどこ行ったの？」

話題を切り替えるべく別の話題に。

「…龍二なら…あそこ。」  
「？」

リリアンが指差した方向を見ると、喫茶店から少し離れた場所で誰かと話しこんでいるのが見えた。

相手は金髪のショートヘアの女の人と、メガネをかけた髪がちょっと白い男の人……二人とも目立つと言えば目立つんですけど、どこかで見たような…？

あ、リュウジさん金髪の女の人とハイタッチした。男の人、何だか疲れ気味な気がする。

そしてひとしきり笑い終えた後、『じゃあな』と言って席を外したリュウジさん。二人もそれに応じて手を振った。

…やっぱりどっかで見たことある…。

「いやあまさかあいつがね。」

何だかとても楽しそうに笑いながらボクらの席まで戻ってきたリユウジさん…。

「…リユウジさん？」

「んあ？」

「…あの人達誰なんですか？」

「ん…ダチ？」

いや聞かれましても…。

「ついでに女の方はメルアド交換した。」

「何交流広めてんだお前。」

マサさんがツッコミ入れた。

…でも何だろう、嫌な予感がする…。

「ま、気ニシナイだ。」

……。

「…そうですね。」

「だろ？」

この事は記憶から消しとこつ。

「にしてもお前、よくアルスの居場所わかったな？また自慢の勘  
て奴か？」

「おうよ。つか適当に道玄坂から109（マルキュー）、スペイン  
坂まで駆けずり回った挙句ようやく発見したんだけど。」

「…今に始まったことじゃないけど、お前メチャクチャだな。」

「まあな。」

「威張るな。」

どつかとイスに腰を下ろしてすっかりリラックスモードのリユウジ  
さんとジュースを飲みながらツッコミ入れるマサさん。

「…というより、さっきの広場にあった銅像ってハチコウっていうん  
だ…ちょっと可愛かったな…。」

「…ふと思ったんですけど、リユウジさんの言うことがホントなら  
ボクを見つげ出すまでずっとキョウタさんに乗ってたってことで  
すよ…ね？」

……………。

「…後で回復魔法でもかけてあげようかな。」

「…えと、リユウジさんちょっといいですか？」

「…何だ？」

もう一つ、ずっと気になってたことがあったんですけど…。

「…魔王、どうしたんですか？」

「うきゅ〜……。」「

…隣のテーブルに突っ伏して呻き声しかあげない魔王…チラリと顔見てみたけど、目を回しながら真っ赤な舌出していました。

「ん〜……。……。未知なる冒険をした結果、敗北したって感じ？」

「坦々麵食った結果あんなったんだよ。」「

「あ、ああ…なるほど。」「

リュウジさんの言葉を要訳する感じでマサさんが説明してくれた。ようはリュウジさんのデマカセを信じた結果、死にかけてるって訳なんですわ…。

「うきゅ〜…もうかりゃいのひゃ…。」

『もう辛いのか』って言いたいみたいですけど、呂律が回ってません。

「…賑やかな連中ね、アンタんとこの連れって。」「

「…そう思います。」「

ミワさんに同情されました。

「…つーかそれ以前に龍二。」「



「ノリで変な名前付けるな！つーか私には松岡 美羽って名前があるのよー！」

「あ、そ。」

「……………」

「……………」

…何だろう、あれだけイジっておいて名前言って『あ、そ』の一言で終わってしまったミワさんがすごく不憫に見えてしょうがないです…。

「……………」

【ニィッコロリ】

『！…！？？』

ミワさんが満面の笑みでリュウジさんを見つめた…いえ、何て言うか…その…

笑顔の裏にある殺気らしき物がボクらを凍りつかせた。

「？」

…ってリュウジさんはヘッチャラなんですわ…わかってましたけど。



「…ねえ。」  
「？何だ？」  
「……………いつぺん、死んでみる？」  
「死んだら終わりじゃね？日本語はちゃんとして使いましょう。」

今の言葉と共に、ボクらはリュウジさん達に背中を向けた。

「え、えつと…とりあえず自己紹介な。俺は桜田 天介。」  
「岡田 京子です。そこで暴れてるのが松岡 美羽ちゃん。」  
「で、あそこで死んでるのが小野寺 拓馬っていうんだ。よろしく。」

背後の騒動を無視するかのようには話を進めていくテンスケさん。ボクも無視します。

「あ…じゃ俺らも言うか。俺は楠田 雅。」  
「で、アタシが高橋 花鈴。でそっちが香苗ちゃんと久美ちゃん。」  
「え！？喋らせてくんないの!？」  
「不公平だ!？」

…今どこからか『メンドっちーから』って声が聞こえてきた気がします。

「で、その金髪好青年がスタイル。」  
「き、金髪好青年…。」

「んでそつちの寡黙女がリリアン。」

「…寡黙女…。」

「そいでその銀髪双子がカルマとケルマね。」

「ぎ、銀髪双子って…。」

「まあ合ってるけどさ…。」

次々と簡単に紹介してくカリンさん。時々背後から悲鳴が聞こえま  
すけどボクは知りません。

「えっと、そこで突っ伏してるのがクルルね。」

「きゅ〜…。」

「…大丈夫なの？」

「ええ、多分…。」

キョウコさんが心配そうに言いますが、いつものことですから。

「それと…あれ？もう一人は？」

「…そついやどこ行ったあいつ？」

……………。

「……………。」

「……………。」

「……………気のせいね 最初からいなかったんだわ。」

「ああ、そうだろうな。」

えええ！？

「ちょ、カリンス

「待てやあああああああああ……!!」

「!!??」

び、ビックリした!?

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……。」

…いきなり飛び込んできたのは、キョウウタさんでした…っであれ?

「キョウウタさん、体……。」

さっき思いつきり体削られたはずなのに、傷一つありません。

「…影薄同盟の回復力舐めんなよ。」

どんな同盟ですか。

「っーかアンタ、どこ行ってたのよ。」

「さ、さっきまで自己再生に時間を費やしてた。」

「そんな能力あったんですか!？」

「…最近そんな設定付けられたんだよ…(泣)。」

いきなり泣き出した。

「…な、泣くことないんじゃないですか?すごい能力だし……。」

「自己再生能力が付いたってことは、今まで以上に俺ボロボロにされること必須ってことじゃん……。」

.....。

「...ごめんなさい無責任なこと言いました。」

「うう...そう言ってくれるのはアルスちゃんだけだ、ありがとう...」

「

何だかすっごい気の毒に思えてきました...」

「まあそこにいるのは影薄太郎って名前で。」

「んな不名誉な名前じゃねえよ！佐久間 恭田だ！！」

キヨウタさん、復活早いですね。

「ま、ひとまずこれは置いて。」「

“これ”扱いかよ！？」「

そしてキヨウタさんは見事に無視された...」

「で、後ろで騒いでる男が荒木 龍二って奴ね。」「

後ろで何か折れた音がしましたけど多分幻聴です。

「あ、ああ...そうか。」「

若干テンスケさんが引き気味になってるのは気のせいじゃないと思います。

【ゴキズゴバギイ!!】

.....。

「おいつすー。」

「...あの、リュウジさん？」

「あ？」

「...やっぱなんでもないです。」

戻ってきたリュウジさんの頬に赤い何かが付着してるように見えま  
すけど幻覚ですよね？

「...あ、あの龍二さんでしたっけ？」

「?おう。」

「えと...美羽さんは？」

「そこで血」

「あ、わかりましたすいませんですからそこから先は言わないでく  
ださい。」

棒読み口調で訂正したキョウコさん。心なしか冷や汗をかいてるよ  
うに見えます。

「...あの美羽が...。」

「どした？」

「!?!?な、何でもありません!?!」

テンスケさん、敬礼しながら顔が真っ青です...。

「んむ？……ま、いつか。すんませーん、フルパ（フルーツパフェ）  
一つ。」

「まだ食べるの！？」

「ツツコむな花鈴。坦々麵何百杯食ったってこいつの胃袋は満たさ  
れないさ……。」

ひ、百超えたんですか……。

「……ついでに俺の財布も満たされない……（泣）。」

「……ドンマイ。」

……マサさん……。

「……アンタらも苦労してんだな……。」

「だなあ。」

！！？？？

「！？た、拓馬！？いつの間に復活したんだよお前！？」

「さつき。」

「曖昧だなオイ。」

いつの間にかテンスケさんとキョウウコさんの間にタクマさんが座っ  
てました……もしかしてキョウウタさんみたいな自己再生能力持つて  
るのかなあ？

「大丈夫？拓馬くん。」

「H A H A H A、へっちゃぴーだZ E!」

「よかった…でもあまり無茶しないでね?」

「当然!」

…あ、そっか。キョウコさんてタクマさんの恋人なんだっけ。

…恋人、かあ……………。

「…はあ。」

「?アルス?」

「あ、すいませんちょっと疲れちゃって…。」

思わずため息が…………ええい、この考えやめですやめ!

「まあ何はともあれ、アルス見つかってよかったな。」

「そうだな、渋谷ではぐれたら探すの大変だっただろうし。」

「思い出してよかったぜホント。」

…さっき聞いたんですけど、ボクのこと思い出したのリユウジさんがラーメンひとしきり食べた後だったそうですけど…思い出すの遅くないですか?

…いや、黙っておこう。何か殴られるかもしれないですし…。

「さ、てと。そんじゃこれからどこ行くかね?」

パフェの器を置いてボクらの方を見るリュウジさん。傍らにはパフェの器の山が…。

「あ…そうだな、あたしは109（マルキュー）へ行きたいんだけど…。」

「アタシも。ちょうど服買いたって思ってたし。」

「あ、私も。」

クミさん、カリンさん、カナエさんが拳手した。マルキューって何のことなのかわかんないです…。

「んじゃそこ行くか。」

「お前考えて喋ってる？行き当たりばったりじゃね？」

「黙れ影薄太郎。俺にツッコミ入れようなんざ五千二百三十一億年早いんだよ。」

「だから俺影薄太郎じゃねえって言うてんだろ！？つか何だその中途半端に多い桁!？」

「まあそれよりさ。」

「え、無視ですか！？俺無視ですか!？」

必死にツッコミいれてるキョウタさんでしたけど、やっぱり無視されてます。

「お前らどうすんの?」

今度はテンスケさん達に顔を向けた。

「え？俺ら?」

「おう。ここで知り合ったのも何かの縁と思って付いてくるか、それともここでお別れして別行動取るか、どうする?」



「ああ、じゃ俺らは別こ」もちろん、付いて行きますぜ兄貴！……ってオイコラ待て。」

テンスケさんの言葉を遮って、タクマさんが身を乗り出した。

「何だよお、お前不服なのか？」

「いや、そうじゃなくてな、これ以上この人に関わつたら……。」

「何を言う！龍二さんがいてくれれば、お前も不良にカツアゲされるなんてことないだろう！」

「それを言うな。ま確かにそうだけども、それとこれとは……。」

「ウダウダ言うな！付いて行くぞ！」

「……なあ京子、アンタからも何とか言ってやってくれよ。」

「え？私は別にいいけど。」

「……………」

テンスケさん、明らか劣勢です……。

「……わかったよ、多数決には逆らえねえしな。」

「ん、決まりだな。」

……………。

「……あの、リュウジさん？」

「あ……？」

「ミワさん……どうするんですか？」

あまり意識しないでいたんですけど……やっぱり心配です。

ボロボロになって倒れてるなら尚更…。

「ん？」  
「ん。」  
……………あゝ、あいつね。う

今の今まで忘れてましたよね？思い出すのにすっごい時間かけてましたよね？

「ん、じゃちょっと待ってる。」  
「？」

うつ伏せに倒れてるミワさんの背中をまたいだリュウジさん。何するつもりなのかな？

「ん。」

そしてヒョイと屈みこんで…

「あ、どっかい」

ミワさんの顎辺りを掴んで…

「せ。」  
【ゴキユリ】  
「しゅゆ。」

……そのまま後ろに引いた。今すっごい嫌な音が響きました。

「カハアツ!？」

!？血!？ミワさん血吐いてますよ!？

「み、美羽ちゃん!？」

「美羽あああああああ!?!?!？」

「すっげええええええええええ!?!?!！」

タクマさんアナタ何感動してるんですか!？

い、いやそれよりミワさん、大丈夫なのかな…。

「はいグツモーング。」

「な…なにずんのおおお…。」

よ、よかった…話せることはできるみたいです。

「何って起こしたんだけど？」

「き、キヤメルクラツチすることないじゃないの…。」

「一番手っ取り早い方法がこれくらいしかなくてな。」

「うう…アンタいつか殺す。」

「やれるもんならやってみね。」

「……とりあえずさ、どいてよ。起きれない。」

「お、わりわり。」

ずっつと背中に乗ってましたからねリュウジさん…。

「あいだだだ…背骨が、背骨が痛い…。」

どうにか起き上がったミワさんでしたけど、体中ボロボロです…。

「治してやろうか？」

「え、遠慮しとくわ…。」

手をゴキゴキ鳴らしながら言われたら遠慮したくなりますよリュウジさん…。

「んじゃそろそろ行くこうか。」

「は？何の話よ？」

「いや、お前らも俺らと一緒に行くんだろ？」

「はあ！？」

あ、そっか…ミワさん気絶してたから話聞いてないんだ。

「どついう意味よそれ！？」

「え、俺に聞くのか！？」

「当たり前でしょうが！」

猛然と振り向いてテンスケさんの胸倉を掴み上げるミワさん。顔がとんでもないことになってますって恐いですって…。

「グエ…い、いやだからな、せつかく会ったのも何かの縁だっつてこ  
とで」

「そんな理由かああああ！！」

「グエエエエエ！？」

「ははは、仲がいいなあお前」

「黙れ！！」

【バギイ！】

「いぼばー!?」

ミワさんの後ろ回し蹴りでタクマさんは思い切り吹っ飛んでいった。

「私は大・反・対よ！何でこんな暴力野郎なんかと同行しなきゃならないのよ!？」

「そ、そうなつちまったもんはしゃーねえだろうが!！」

「しゃーねえだろうがじゃないわ!しっかりしなさいよアンタ!！」

「ぢよ、美羽ズトップズトップ首じまるってゲエ。」

テンスケさんは顔を赤くしながらガクリと頭を垂らした…

って!？

「テンスケさん!？」

「…あ、やり過ぎちゃった…。」

『しまった!』っていう感じの表情が丸見えですよミワさん!？

「…と、ともかくねえ！私はアンタなんかと行かないわよ!！」

テンスケさんから手を放したミワさんは、ビシリ!とリュウジさんを指差した。

その間にボクらはテンスケさんをタクマさんが寝ていたベンチの上に寝かせました。目を回してましたから…濡れタオル濡れタオル。

「……ふむ……。」  
「……な……何よ……。」

腕を組んで何か考え込んだリュウジさんに、若干の戸惑いを見せる  
ミワさん。

「……なあなあ。」  
「だから何？」  
「頸動脈つてさ、切ったらホントに勢いよく血い噴き出すのか？」  
「は？アンタ何言つて………つてまさか……。」  
「……」

試しているか？」

「行きます、行きたいです、生かせてください（泣）。」

……ミワさん、最後のセリフの文字が違う気がするんですけどボク……。

「よしじゃ天介とクルル起きたら出発するかあ。」  
「み、美羽ちゃん元気出して、ね？」  
「そ、そうですねミワさん。」  
「頑張れ。」  
「ファイトです……。」  
「……グスツ……。」

元気一杯のリュウジさんに対して、お店の隅っこで体育座りしながら  
暗い影を落としてるミワさんはキョウウコさんとボクとマサさんと  
スタイルに励まされてました……。

……このお話、まだ続きたいです…はあ。

くその頃く

「うえくん！ここどこのよ！皆どこよ！…！」

カラスに連れ去られたフィフィは、どうにかカラス達から逃げ延び、渋谷駅ガードレール下で飛び回っていた…。

【フィフィ、迷子確定】

第百九の話 レッツゴー渋谷！での出会い3（後書き）

はい続きます。フィフィ迷子です。

え、天介達のキャラって本編と比べてこんなだったっけ？と思う俺がいる。

ま、ともかく気を取り直して次回は109です。



第一百十の話 レッツゴー渋谷！での出会い4（前書き）

渋谷編、ラストです。

## 第一百十の話 レッツゴー渋谷！での出会い4

（アルス視点）

.....。

すい...。

「いやあいつ見てもでかいな109は。」

「そりゃ渋谷のシンボルの一つみたいなものだからね。」

現在地、マルキューの正面。マルキューという建物の外見は大きな円柱型で、全体が日の光で輝いています。上の方には、『SHIBUYA109』って書かれています。読めません。

入り口からは、中に入る人や外に出る人で混雑してる。そのほとんどの人が女性なのはビックリでした。

『ねえ見てよ、あの人達...。』

『ちょ、あの茶髪と金髪の子、チョーかっこよすぎなんですけど...？』

『いや、それよりあの銀髪の子達、双子!？』

『やっただ〜可愛い〜!』

『食べた〜い!』

『あの帽子かぶってる子とかもやばくない!？』

『あ、確かにやば〜い！かわい〜！』

………はあ。歩いてる時でもず〜っとボクら見て囁き合ってる声が聞こえてくるんですけど…五人目の人の言葉聞いたとたん、ロウ兄弟震え上がっちゃってるし…。

…というよりボク女なんですけど…はあ。

「…ここどうして女性が多いんですか？」

「ああ、109はレディースの服が主だからよ。」

気分を変えたくて疑問を口にしたら、カナエさんが答えてくれた。

「レディース？」

「女性物の服ってこと。」

「一応メンズもあるけどね。」

…あ、メンズは男性物の服ってことですね。

「ま、俺服なんざ興味の欠片もないし。」

「え、そうなんですか？」

リュウジさんって意外と服とか気を遣うタイプかと思ってたのに。

「大体俺は、手近にあった服を着る。一々選ぶ必要もねえし。」

「うっわぁ夢のない男。」

「うっわぁ頭パーな女。」

「表出る。」  
「表どこ?。」

あああリュウジさん、またミワさんと険悪な雰囲気…。

「お、落ち着けて美羽。」  
「リュウちゃん、喧嘩はダメ!」  
「ちえ。わかったわよ。」  
「ほいほーい。」

テンスケさんとカナエさんに注意されて、不服そうに口を尖らせるミワさんと特に何とも思っていないかのように呑気に返事をするリュウジさん…冷静って言うのか何て言うのか…。

「…こいつ、いつか殺す…!」

…一瞬、ミワさんの背後からゆらりと炎が揺れた気がした。

「…頼むから…やめてくれ。」

…それを止めるのはテンスケさんですよ…苦勞お察しします。

「じゃさっさと行くぞ。」

『おー。』

リュウジさんの掛け声で、皆ゾロゾロと入り口へ向かって歩き始めました。

それにしても…大丈夫なんでしょうかこのメンバーで…。

「多分…大丈夫かも…」

「かなあ？……………あの、リリアン？」

「？」

「何でボクが考えてたことわかったの？」

「……………」

「……………」

「…気ニシナイ。」

「誤魔化さない！」

だんだんリリアンがリュウジさんみたいになつてく気がするよ…。

「アルス…さつさと行く。」

「あ、うん。」

…“さつさと”って言われると何故かちょっと傷つく『ガラスハート』のボクでした…

……………「ごめんなさい、言ってみただけなんです。」

〈109 内部〉

「うわあ…中もすごい人だなあ…。」

リュウジさん達を追って入り口から中の広場に入ると、街中同様、人の数がすごかった。やっぱり女の人が多くて、男の人も少なから

ずいたけど、ほとんど女の人と一緒にってた。恋人同士かな？

「アルスー、こっちだこっち。」

「あ、はい。」

クミさんが皆と一緒に広場にある変わった形をした柱の下で手を振ってたので、ボクもそこへ行く。

「またお前はぐれたりしたらどうなっても知らんぞ。」

「…す、すいません。」

さすがにまた迷ったりしたらかつこ悪いですし…。

『おいおい、あそこの子達、マジ可愛くない？』

『うわやっべ、金髪の子とか俺ストライクなんだけど!？』

『女の子全員可愛くねえか？』

『お、お前誰か一人声かけてこいよ。』

『そ、そんな度胸ねえって俺に。』

………

少数の男の人は女の人と一緒に行動してるわけじゃないみたいで…  
やっぱりカナエさん達って美人だからなあ…スタイルもいいし。

…ボク、生まれ変わったらもっと女の子っぽい顔になりたい…。

「え〜、で?どこ行くよ。」

「んじゃまずは二階行こっか。私欲しい服あるから。」

「じゃ俺ら男性陣は適当にその辺ブラブラしとく。」

「アンタ達も来んのよ。」

テンスケさんの言葉を遮ったミワさん。

「は？何で俺らまで？」

「荷物持ちに決まってるでしょ？」

「…マジで勘弁してくれねえか？こないだなんてお前買った量多すぎて俺ヤバイことになりかけたさ」

「来いや。」

「……………はい。」

…ミワさんとテンスケさんの上下関係を改めて認識しました。

「…改めて思ったけど、何で俺らここに来たんだろうな。」

「マサさん、それはツツコンだらいけないと思われますよ？」

ここ、女性物のが多いからマサさんとスタイルには抵抗があるようです。

「おお！あの人きれいだなあ！」

「マジか!？」

……キョウウタさんとタクマさんは抵抗無いみたいです。離れた場所にいる女性を見てはしゃいでます。

「拓馬くん？」

「!?!?……………すいません…。」

拓馬さんも京子さんには弱いみたいです。っていうより恐いです京子さんの笑顔が何故か…。

「キヤー！あれ可愛いこれ可愛いいいいいいい！！」

「ま、魔王様！こんなところではしゃがれては迷子になってしまいますよ！？」

「ケルマ、紐持ってこい。そしてどっか括りつける。」

さっきまでダウンしてた魔王は、今じゃすっきり元通り。いろんなお店の前に並ぶ商品を見てはしゃぎ回ってます…って今一瞬カルマの隠れた性格がチラリと見えた気がしましたけど…。

「喫茶店はどこだ。」

「アンタまた食うの！？」

「リュウちゃん…勘弁してあげて。」

「……………グスン。」

「久美…しっかりして。」

…因みにさっきの喫茶店で食べまくったフルーツパフェは…ジャンケンで負けたクミさんが払うことになりました。

あの量の金額はすごかったようで、払った後の財布を見てクミさんは若干暗いオーラを漂わせてました…。

「と、とにかく二階行きましょうよ、ね？」

何となくまとまりが無くなってきたような気がしてきたんで、とり



あえず促してみました。

「ああ、そだな。さっさと買うもん買うか。」

一番に動いたのは、リュウジさんでした。何となく“とつとと別の場所行きたい”感みたいな物が漂ってるみたいなのはボクの気のせい…ですよ？

えと…二階へはどうやら、こないだデパートの時に乗ったことがある“えすかれーたー”で行くみたいです（第五十六の話）。

そういえば、その時って魔王がはしゃぎ過ぎた為に思いつきり怒られた後注意されたんですよ。

…止めに入ったボクまでも……クスン。

「？アルスどうした。」

「…何でも…ないです…。」

回想に耽りながら静かに涙を流していたボクの顔を覗き込んできたリュウジさん。ボクってよく皆から遅れとっちゃんだよなあ…反省しよつと。

「ん、じゃともかく上へレッツラ・ゴー。」

そう言ってリュウジさんは“えすかれーたー”の前で高く跳躍してそのまま二階へ。

…つて…

『エスカレーターの存在意義は!!???』

…見事に皆のツツコミが重なった…。

〈二階〉

二階へ来ましたけど、並んでるお店が違っただけで構造的には一階と変わりませんね。人は多いですけど。

「あ、ねえあれあれ！」

「？」

カナエさんがある店を指差した。店の前に服が入ったワゴンと服を着た変な人形マネキンが並んでる。店の中が丸見え状態になってるけど、電気が数個しか点いてなかった。けれど全然暗い印象とか、そんなのは全くない。

でも服が…何というか…胸にでっかいドクロをあしらったシャツと

か、背中にさっぱりわからない文字が書かれたジャケットとかがあつて、センスがわかりません…。

「ふうん、パンク系か。」

「?ぱんく系つて何ですか?」

「自転車や車のタイヤが」

「そのパンクちゃうわ。」

リュウジさんの説明にマサさんがツッコミ入れた。

う〜ん…まあ、ああいう服をパンク系つて言うのかな?そういうところかも。

「私、パンクファッションつていうの前々から興味あつたんだ〜」

カナエさんがああいう服着るつていうのはあんまり想像できないですよ?

「じゃテンスケ、私らもあの店行こうか。」

「あれ?お前パンク系なんて着るっけ?」

「近頃流行つてるでしょ?前々から着てみたいな〜つて思つてたのよ。」

「あ、ミワさんなら何だか違和感なく似合つ気がしますね。」

ふとボクは思ったことを口にした。ミワさんがああいう服を着てる姿が想像できるんです。

「え、そう?」

「そうだな、お前の場合ドクロのTシャツがお似合いじゃね?」

…またリュウジさん、ケンカ売る…。

「…それどういう意味よ？」

「そのまんまの意味でござーい。」

「テメエ殺めたるかコラア！！」

怒ったミワさんはどこから出したのか釘バット（！？）を振り回しだした。そんなミワさんをリュウジさんは近くにあった服を着た人形<sup>キタ</sup>で殴った。ミワさんはいい感じで吹っ飛んでいきました。

…こんなこと言うボクってだんだんリュウジさん化していつてるってことなのかな？

「み、美羽あああ！……………ざまーみる」

悲痛な表情でミワさんが飛んでいった方向へと手を伸ばしたテンスケさんですが、今一瞬本音がチラリ。

…テンスケさん、今までどれだけひどい目に合ってきたんですか。

「ね〜リュウくん、私も服欲しい〜！」

「ああ？こないだ買ってやったばっかだろ？」

「ぶ〜、あれはあれ、これはこれだよ〜。」

「ダメダメ。今金持ってないから。」

「え〜！？」

「え〜じゃありません。」

リュウジさんの袖を引っ張ってねだる魔王。その間にボクは吹き飛んで壁に激突したミワさんを助け起こしてます。

…おねだりって…ボクだってそんなことしたことないんですけど…。

…え！？あ、いや、その、べ、別におねだりしたいってわけじゃないんですよ？我慢してるんですよボクは。自分で言うのもなんですが、魔王に比べるとボクの方が精神的に大人ですし。

「…アルス、精神年齢まだ子供…第一誰に言い訳してるの…？」

「…一々思考読まないでくれます！？」

「…気ニシナイ。」

り、リリアン…恐ろしい人…！

「また今度買ってやるから我慢しな。」

「むすう…ハイ。」

口で“むすう”ってアナタ…。

「？あれ？カナエさん達は？」

「服…品定め中…」

…いつの間に…。

「久美達…服に関しては行動が速い…。」

「そ、そうですか…。」

丁寧に説明してくれたリリアン…もう思考の話は置いておこうかな。

「…それじゃ、私も…。」

「あ、うん。」

リリアンは服を選んでるクミさん達のところへ歩いて行った。

…ボクはまあ、ここでリュウジさんと一緒に待っておこうかな。

「いやあ、にしても女の買い物て長いな。」

「だなあ。」

「？キョウウタさんとタクマさんは行かないんですか？」

ふと隣を見ればキョウウタさんとタクマさんが壁にもたれながら買い物をしているカナエさん達を見た。

「いや、だつてさあ。俺が行つたつてどうすることもできねえし。」

「俺は問答無用で全員に荷物持たされるし。」

「そ、そうですか…。」

不憫です、キョウウタさんが…。

「…あれ？天介は？」

「さっき目覚めたミワさんに連れられてどこか行きましたけど…。」

…そういえばミワさん、何だか怒ってたような…テンスケさん、怯えてたような…。

「…もしかしてミワさん、さっきテンスケさんが呟いたの聞いてたのかな…。」

「え？」

「いえ、なんでもないです…。」

『ざまーみる』と小声で呟いたテンスケさん…気絶する寸前にそれを耳にしたミワさん…。

…テンスケさん、呟くタイミングが悪かったみたいですね。

「ぶう…服欲しいのに…。」

「見てくりやいいじゃん。」

「買えないのに見たら余計欲しくなるもん。」

「はいはい、そうですかい。」

頬を膨らませながら座り込む魔王の頭をポムポムと軽く叩くりユウジさん。

「魔王様、僕が買って差し上げます！」

「お前230円しか持ってないだろケルマ。引っ込んでろ。」

カルマ…意外と毒舌なんだね…。

「？マサ、どこへ…？」

「アクセサリーショップだ。姉さんに土産買ってかないと。」

ボクから離れて少し向こうにある少し派手なお店へと向かってい

ったマサさん。お姉さん思いなんですね。

『いらっしやいませ〜どろろ〜ご覧くださ〜い』

『柳原 奈子がアンタ。』

…店員さんにまでツッコミ入れるんですねマサさん…。

「龍二〜！」

「あ〜？」

お店からカリンさんの声が聞こえてきた。

「何だ〜？」

「香苗ちゃんが呼んでるよ〜。」

「〜？」

訝しげな表情のままお店へと歩いていくリュウジさん。ボクも後を追った。

「香苗ちゃん、龍二来たわよ。」

カリンさんが試着室に向かって言った。カナエさん、試着室の中みたいですね。

「？何の用だ香苗。」

「フフフ〜ン」



いえ、中で笑ってるだけじゃわかんないですってカナエさん…。

「それでは、お披露目タイム!!」

……

は？

【シャー!】

「じゃーん…!」

効果音付きで試着室のカーテンを開けたカナエさん……

うわ……。

「フフフン、どつ、リュウちゃん」

……

おいら、後援中…。

裾の細い鎖がジャラジャラ付いた黒いジャケットの下に胸に大きなドクロがプリントされた深緑色のＴシャツ…それと腰とお尻に二つずつポケットが付いてて、腰にも細い鎖が左右に二本繋がれてるサフアリ模様の膝丈まである短パン…

短パンからは細長くて白い足がスラリと伸びてて、女のボクでも思わず目が入ってしまうくらい。Ｔシャツからは…えと…その…悔しいですけどボクより遥かに大きい…胸…がピツチリと強調されてます。

…ここまで着こなせる人って…ある意味すごいです。

「……………」

…それと、一番気になったのはリュウジさんの反応…これ見てどんな反応するんだろう…？

「…あん、いんじゃないね？」

……………。

「ホント!？」

「おうよ。」

「どの辺がいい!？」

「あ〜……………腰の鎖らへん？」

リュウジさんそれカナエさん自身を誉めてないですよ？

「よしこれに決めた!!！」

え、いいんですかカナエさん!？

「…服の良さってさっぱりわからん」

「リュウジさん、しー!!！」

小声で呟いたリュウジさんにボクは思わず口の前で一指し指立ててしまいました。

幸いカナエさんには聞こえてなかったみたいで、ウキウキしながら脱ぎ終えた服をレジに持っていきました。

……………服かあ……………。

「…あの、リュウジさん？」

「あ?？」

どうしよ…魔王みたいに言ってみようかな…。

あ、でもお世話になってる身なんだし、いくらなんでもおねだりは  
…でも服……………

うう…。

「…何だ？」

「…やっぱり何でもないです。」

「ん、そ。」

…はあ…。

「…何だお前も服欲しいのか？」

「！？え！？そ、そんなわけが…。」

「凶星だろが。」

「……………」

…やっぱりリュウジさんに隠し事ってできないんですね…。

「安心しろ。今度買ってやる。」

「あ……………ありがとうございます。」

「いいってこと。」

頭をポンポンと軽く叩くリュウジさん。

…照れるけど……………何かいいです…／／／／／／

「ところでお前らはお披露目会みたいなもんしないのか？」

「か、帰って見せてやるわよ。それまで我慢なさい。」

「興味ないわ、ハッ。」

「今鼻で笑ったでしょ!？」

「見てなかったか?じゃもっかいハッ。」

「うああああああムカつくうううううううう!?!?!」

地団駄踏むカリンさん。そもそもリュウジさんてそういうの興味無  
さそうですもんね。

「じゃカナエ買ったら行くか。」

「え、もう行くのか?」

「時間。」

腕時計をクミさんに見せるリュウジさん。

「…え、もう五時半!？」

「時間が経つのは早いな。」

……多分、さっきの喫茶店での騒動とボクがはぐれた時に時間を大  
幅に削ったせいだと思います……

あ、何だか罪悪感が…。

「まあお前ら買うもん買ったよな?」

「へへへ、買いまくったわよ。」

よく見たら、皆それぞれ手に紙袋を持ってた。

…皆さん、ちょっと多すぎませんか?それ持つ男性陣の人達ですよ

ね？

「言つとくが、俺は女が買った物は男が全部持つっていうベタな展開はクソメンドっちーから自分で買ったもんは自分で持つて帰れよ。」

「え〜！？普通そこは持つてやるっていうのが紳士でしょ〜？」

「誰が紳士だバアカ何故にテメエらなんぞの荷物を俺がわざわざ持たにやならんだ脳味噌えぐり出して溶かすぞワレコラ。」

『ご、ごめんなさい……。』

早口で毒を吐いたリュウジさんに一斉に頭を下げた女性陣の方々……正直、リュウジさんならそういうことやりかねない……。

「ゴメン、お待たせ〜」

「おお、じゃ行くか。」

カナエさんが来たのを合図に、ボクらは店を出た。

「おお、終わったのか？」

「拓馬くん、持つてくれない？」

「京子のためなら喜んで〜」

「これ全部持つてくれない？影薄雑草太郎。」

「前よりレベル上がってんじゃねえか！？そしてやつぱり持つんかい！？」

…タクマさんは喜んでるからいいけど、キョウウタさんは明らか理不尽な気がします。

「おいクルル、帰るぞ。」

「え〜！？もうちよつといたいのに〜！」

「遅くなったらお前の好きな番組終わるぞ？」

「え！？そ、それはやだ！」

「魔王様、何なら僕が！」

「何をどうしろってんだバカケルマ。頭で考えてからものを言えバカケルマ。」

……カルマあ……。

「マサ、帰りますよ。」

「おお、買うもん買ったしな。」

戻ってきたマサさんが見せたのは、ピンク色の小さな紙袋…可愛い…。

「さ、てと…ってあれ？そっぴや天介と美羽は？」

「ああ…あそこ。」

「？」

タクマさんが若干、躊躇いがちに指差した方向をしてみる。

「な・に・が・“ざまーみる”なのかもつかい言ってみろ…！！！」

【ギギギギギギギギギギ】

「ぐええええええ…ず、ずんまぜんでじだですがゴブライツイストやめでくれえええええ…。」

……。

「…テンスケさん…大丈夫なんでしょうか？」  
「いやダメだろ？」

望みを捨てないでくださいタクマさん。

その後、リュウジさんが両足を揃えての飛び蹴り（ドロップキック）がテンスケさんとミワさんに炸裂、ミワさんの暴走は止まりました………お二人とも気絶しましたけど。

↓渋谷駅 八千公像前↓

「いやあ買った買った！」  
「お、重い〜…。」  
「ドンマイ、恭田。」

109から出て、ボクらは昼間にボクとテンスケさんが出会った場所へと戻ってきた。辺りは夕焼けのオレンジ色の光で照らされて、ボクらを含めた人々の影がそこかしこに伸びていた。

「さ、てと。じゃ疲れたし帰るかあ。」  
「あ〜歩いたわね〜。」  
「基本109と道玄坂ぐらいしか行ってないけどね…。」



「す、すいませんでした…。」  
「アルスのせいじゃないから、ね？」

カナエさんが慰めてくれたけど…喫茶店の騒動、もといボクが迷子にならなければなあ…。

「ところでアンタ達、電車で来たんだっけ？」

「？ああ、そうだけど？」

「そ…じゃここでお別れね。」

…へ？

「どういうことですかミワさん？」

「私らバスだからよ。だから。」

…バス？

「あれだあれ。」

首を傾げたボクの肩を叩いて、リュウジさんは向こう側を指差した。長くて大きいクルマが何台もそこに並んで、大勢の人が乗り込もうとしていた。

あれがバスかあ。

「ま、どの道アンタらとは住む町が違うからね。」  
「そだな。」

……。

「しゃーないな。じゃこころで解散とするか。」

「そうね。」

「兄貴！いつか俺に技教えてくだせい！！」

「断る。」

「早っ！！??」

およそ0.1秒の早さでした…。

「京子ちゃん、拓馬くんとうまくやってっね。」

「幸せにね。」

「まあいろいろ頑張れ。」

「ウフフ、心配しなくても大丈夫よ香苗ちゃんに花鈴ちゃんに久美ちゃん…浮気なんて許さないから」

「…絶対しません。」

「天介、アンタもよ。」

「俺もかよ!?!」

「あ、でもアンタはする度胸なんてないか。」

「…ミワさん、それ俺のこと信じてる？それともけなしてる？」

「両方？」

「聞くんじゃねえ!!」

タクマさんもテンスケさんもホント頭が上がらないんですね。

「ま、それなりに楽しかったぞ美羽。」

「…私は一方的にボコボコにされたけどねアンタに。」

「大丈夫だよ、私達なんてしょっちゅうお仕置きされてるから」

「……それ楽しそうに言うセリフじゃないわよクルル？」

ミワさん、同感です。

「魔王様、ボクが代わりにお仕置きを受けてさしあげま」

「失せるバカケルマ。」

【спан！】

カルマがケルマの頭を叩いていい音を鳴らした。あ、タンゴブできた…。

「テンスケ…ファイト。」

「うん、応援してくれてるのわかるけどさりりアンさん、何だか少し傷つくのはどうしてだろうな俺？」

「…悪い、どう言ったらいいのか俺わかんねえけど頑張ってくれ。」

「と、ともかく頑張ってください。」

「…ありがとう、マサさんにスタイルさん…。」

…マサさんとスタイルとテンスケさん、いつの間にあんな仲良くなつたんだろう？

…それにしてもなあ…お別れって聞くと何だか名残惜しい気がする。

「アルス。」

「？はい？」

ちよつと感慨に耽っていたら、テンスケさんが目の前にいた。

「？何でしょうか？」

「あゝつとだなあ…。」

？何故か言いよんだ。

「…あの、さ。」

「はい。」

「…最初助けてもらってさ、お礼にっここでココア奢ってやったよな？」

「あ、はい。」

「…そのさ、あれだけじゃ何か俺、物足りないというか何というか…。」

??????

「…これ、やるよ。」

「？」

手渡されたのは…小さいな袋？

「何ですかこれ？」

「開けてみる。」

？…言われたままに袋の封を切った。

「…あ。」

中に入ってたのは、可愛らしい子猫のキーホルダー…。

「これって…。」

「109でっっそり買っといたんだよ。」

「…いつの間に買ったんですか？」

「…美羽の奴に連行される直前に…。」

一瞬にして表情に暗い影を落としたテンスケさんでした…。

「…で、でもあの時お礼は受け取ったんですし…。」

「だからさ、あれだけじゃ何となく俺の収まりが効かなかったんだって…頼むから受け取ってくれないか？」

……………。

「…ありがとうございます、大切にします。」

「ああ。」

子猫に繋がってるチェーンが、陽の光を受けてオレンジ色に輝いた。

「…ってなあに純愛っばいことなってんのよアンタらはああああああああああ…！」

【バキィー！】

「ひでぶー!？」

……………いきなりミワさんの飛び蹴りを食らったテンスケさんは見事に吹き飛びました。

「こおんの浮気もーーーーん！さつきすんなったのにいい  
いいいい！！！！」

「ま、まま待て！誤解だ美羽！だから落ち着けて！！」

「うりゃあああああ！！」

「ぎゃああああああ！！！！」

……………。

「…助けないの？」

「…多分、大丈夫だと思います…。」

「ごめんなさい、テンスケさん…。」

【ピンポンパンポーン　　↓数分後、バス停前↓】

「ま、ともかくまた会おうねアルス。」

「元気でねアルスちゃん。」

「いろいろ頑張れよ〜？」

「あ、はい。ありがとうございました皆さん！」

色々あったけど、ついにお別れの時が…。

「……………元気だな。」

「テンスケさんも。」

…一番元気になって欲しいのはボロボロで満身創痕のテンスケさんですよ。

「じゃあね。」

「じゃあな。」

「またね。」

「…いてて…じ、じゃあまたな。」

ミワさん達は手を振りながら目の前のバスに乗り込んでいく…。

「元気でなー。」

「バイバイ！」

「…また会いましょうねー！」

目一杯手を振るボクラ。やがてミワさん達を乗せたバスの扉は閉まって、ゆっくりと動き出した。

窓からでも手を振ってるミワさん達に、ボクラも負けじと手を振り返した。

……………曲がり角を曲がって、バスは見えなくなりました。

「…ふう、なかなかおもしろい奴らだったな。」

「はい……。」

「いやあまさか渋谷に来て友達が出来るとは思わなかったわよ。」

「人生何が起こるかわかんないものね」

「だな。」

…ホント、いい人達に出会えました…。

「ま、楽しかったな今日は。」

「だね！」

「ですね。」

『…私はちつつつとも楽しくなかったぞ……!!』

!!……???

「?……あ。」

「エル……。」

…リュウジさんの肩に担いでるスポーツバッグの中に入ってるエルのこと…忘れてました。

『貴様らだけ散々楽しみおつて……!!』







「う…グス…帰りたいよ…。」

…一人、駅のホームの隅っこで泣いているボロボロの妖精を龍二達が見つけたのは十分後の事だったそうなの。

## 第一百十の話 レッツゴー渋谷！での出会い4（後書き）

やっと渋谷編終わりました！無理矢理終わらしたような感じになっ  
てないかなあ？

渋谷は広いんだからもうちょっと書いてもよかったんじゃない？と  
思う方々もいると思います。でもね、無理なんです。

だって俺、関西人ですから 大暴露

渋谷なんて友達の家行った時に一回こっさりしか行ったことないん  
ですものおおおお！！でも書きたかったんですものおおおおお  
！！！！

え、知識は全部WikiとDSソフトの『素晴らしきこの世界』  
から得ました。ははは、正直難しかったです。

今回のお話で一番かわいそうだったのは、エルとファイフイです。つ  
ーわけで、次回からはこの二人（一本？）の力が大活躍！？

それでは、関西人なのに渋谷のこと知ったかぶったコロコロでした  
)

第百十一の話 恐怖！？少し早めの肝試し！ 1（前書き）

今回は少しジャンルを変えてみました

第百十一の話 恐怖！？少し早めの肝試し！ 1

（アルス視点）

「は？旧校舎？」

お昼休み、屋上でリュウジさんが作ったお弁当を食べながらリュウジさん達の会話を聞いているボク。今日のおかずは昨日のハンバーグです…とってもおいしい。

「そそ。この学校の裏にある雑木林の中に、ひっそりと佇む旧校舎があるのよ。こないだ見たばかりだから確かよ。」

カナエさんが口に卵焼きを放り込みながら言った…旧校舎？

「旧校舎ねえ…そんな聞いたことなかったんだけどな。」

「私もなんだけど…実際にあったのよ。」

「見間違いないじゃないか？第一旧校舎とは限らないし。」

クミさんがサンドイッチを齧りながら言った。

「結構近くで見たから間違いないわ。それにその後図書館で資料を漁った結果、この学校には元々四つの校舎があったっていうのがわかったの。一時学生人口が減少、結果、そのうちの一つの校舎が廃止されたんだって。多分、それがあの旧校舎なんだと思う。」

「そんなら何で今まで取り壊さなかったんだ？」

「うーん…そこまではよくわかんなかったなあ。」

深い事情でもあったんでしょわか？

「…つーか何で近くで見たよお前？」

「何かノリ的に。」

ノリってリュウジさんですかあなた。

「…それで？その旧校舎がどうかしたのか？」

「フッフ、今日はそのことについてお話ししようと思ったのよマサピ  
ン。」

「誰がマサピンだ。龍二が付けた仇名をお前まで言うな。」

それはそれで可愛いと思いますけど…不服なんでしょうね、本人に  
してみれば。

「実はね、あの校舎って一部の人達から噂がたってるんだよね。」

「噂？」

「そ。」

噂…ですか？

「あの校舎、実は大昔の墓場の跡地の上に建設されたんだって。」

「ほほお。」

は、墓場…。

「…すまない、初っ端からオチが読めたぞ俺。」

「今はまだ黙ってて雅くん。でね、昔あの校舎では夜な夜な泣き声  
みたいな音がするとか…。」

な、泣き声……。

「…ヒウ。」

隣を見てみれば、お弁当にお箸を突っ込んだまま小さく悲鳴を上げて動かない魔王が……。

「で、さらにはどこからか何かが軋む音がするとか…。」

「「「……………」」」

それを聞いて、すでにお弁当を食べ終えて顔面蒼白になってしまった恭田さんと花鈴さん、そしてボクの肩で震えるフィフィ……。

「他にもあるらしいけど、わかってるのはそれだけ。しかも今まで全然解明されなかったそうよ?」

「ふん。」

…特に何とも思っていないさそうな感じでお弁当をパクつくリュウジさん……。

「…なあ、さっきも言ったけど、オチが読めたぞ俺は。」

今食べ終えたマサさんが挙手した…顔はどこことなく引き曇っている。

「…もしかして…。」

「フフフ、そうよ。」



私達がその謎を解明しに行くのよ!」

『やっぱりですかああああああああああい!?!?!?』

見事にボクらの声が重なった。

「つーか何でそういう発想にいたる!?!」

「嫌でもいたるわよ。」

へ?

「実はね、生徒会に依頼が来たの。『昨日の夜、部活から帰ろうとしたら雑木林から不気味な声が聞こえてきました。恐くて学校に来るのも嫌になりそうです。お願いします、助けて』だって。」

「……そういうのって生徒会の仕事か?」

「生徒の学生生活を安全で楽しくってというのがモットーだからね……幽霊騒ぎなんて今までの中では異例だけど。」

……そもそも、依頼っていつ時点でおかしいんじゃない?。

「……じゃ生徒会の皆で行けよ。何で俺らなんだよ。」

「いやあ実はね……皆用事があるっていうから。仲いい人達だと何だか心強いし。」

テヘツと舌を出すカナエさん……絶対生徒会の人達、用事があるっていうの嘘ですね、恐いからですね……何故かそう思ってしまう自分。あながち間違っていないかも……。

「とゆーわけで、お願い!私一人じゃ無理だから!」

【パン！】

音をたてて手を合わせて懇願するカナエさん…いえ、でも…。

「えと…アタシパス。そういうのちょっと…」

「お、俺も…」

「あたしもダメ…」

「勘弁してくれ…」

「あ、じゃ俺行くわ。」

「ぼ、ボクもダメです…」

「私も…」

「ま、まあ私は恐くないけど都合がね。」

満場一致でカナエさんの願いは却下され

って、え？

「…お、お前、今何て？」

「だから、俺行くわって言ったんだっつーの。」

皆が断る中、明らか一人だけ承諾した人がいた。

…当然リュウジさん。

「…正気か？」

「いや、だって夜見たい番組ないし暇だから。」

「そんだけの理由で!？」

いえ確かに見たい番組はなかったですけど…。

「エル、お前も行くよな？」

『…ふん、どの道貴様のことだから連れてゆくのだろう？幽霊騒ぎなどバカバカしい。』

…意思を持った剣であるアナタが言うセリフじゃないと思います。

「よかった〜！リュウちゃんがいれば何にも恐くないよ〜！」

「おう、そりゃよかったなとりあえず離れるそして死ぬバ香苗。」

一瞬にしてリュウジさんの手に擦り寄って腕にしがみ付く香苗さん。  
当然叩かれました。

「じ、じゃあ龍二が行くなら大丈夫よね？」

「あ、そうだな。じゃ俺らはお役ごめんとゆうわけだ」

「当然お前らも来いよ？」

『……………はあ!?!?』

また皆と声が重なりました。

「な、何であたし達も!？」

「そりやお前、肝試しは大勢で行った方が楽しいからに決まってる。」

「

「そんな理由かよ!？」

「リュウジさん…今回はかりは勘弁してください。」

「私も…。」

「ここぞとばかりにボクらも抗議。いやだってこれはさすがにボクらも…。」

「…ん…そうかあ…んしゃーないな。」

ホツ…納得してくれたみたいd

「んじゃこつしようか。」

…へ？

〳夜十時 学校正門前〳

「よ、お待ち。」

「遅いよリュウちゃん。」

……。

「ありえ？リリアンとスティルとロウ兄弟も来てたのか。」

「【コクリ】」

「ええ、一応。」

「魔王様が行くところこまでも！」

「バカか。」

……。

「…なあ龍二？」

「？どした久美？」

「…アルス、どうしたんだ？」

……。

「いや、さっきからこの調子だよ。」

「顔色悪いし。」

……。

〈ライター視点〉

はいアルスがちょっとヤバ目なのでここからは俺ことライターの視点とさせていただきます

龍二達は一旦、学校の正門前で待ち合わせをしていた。皆それぞれしっかりと装備（懐中電灯とか）を整えている。

ついでにアルスとクルルを覗いた全員はいたって普通の服装。つまり私服。

アルスは前の世界で着ていた白銀の鎧と聖剣を、クルルは漆黒の鎧と同色の剣を装備しておりしっかり戦闘態勢万端。因みにクルルの鎧は元々ブカブカだった為、魔法をかけて縮小したそう。実に都合のいい話である。

まあ彼女ら以外にも場違いな装備をしている奴と言えば…リアンは戦斧を、ステイルは杖を携えてる。ロウ兄弟とファイファイは元々武器は持たないため、素手。

龍二も一応、剣エドを持ってるけど…。

「いやあにしても夜の学校って何だかワクワクすんなあ」

『貴様は小さな子供か…。』

まったく緊張感の欠片もなかった。

「…何でアンタって人はそう呑気でいられるのよ。」

「花鈴、それがこいつなんだから深く追求はしない方がいい。」

香苗と雅が若干沈んだ感じで言った。同感である。

「ところで、リリアン達も武器持ってるけど…。」

「私は…一応。」

「こづいうのは念には念をって言いますし。」

そう言っつてリリアンは背中に負った斧を、スティルは右手に持った木の杖を持ち上げて見せた。

前の世界では、何が起こるかわからない場所、ダンジョンなどではかならず武器は携行していたという。

まあそんなわけなんだけど…少なくともリリアンもスティルも、そういう時にはレベルの高い防具を身に付けていたが、今は付けてません。

ロウ兄弟は元々、防具に頼った戦い方はしません。

「ところでよおアルスクルル、大丈夫かお前ら？」

「だ、だだだ、大丈夫です！」

「へへへ、へっちらぴー！」

…で、勇者と魔王が完全武装と来ましたか。

「…龍二。」

「ん？どしたリリアン。」

「…アルス…実はこづいう系苦手」

「うわあああああああああ…！違います違いますボクの鎧は悪霊除けの加護がついてますからこれはれっきとしたお守り代わ





クルル達はクルル達で何かコント繰り広げてるし。つーかクルル、お前魔王やるが。魔王が暗闇恐がってどうすんねん。

「ま、まあともかく、旧校舎に行きましょう。ここでじっとしてるのも何だし。」

「そうだな、夜が明けちまう。」

「じゃ夜が明けるまでトランプすっか？」

「お前それ本来の目的と全然違うだろ。つか人の話聞いてた？」

最もだ雅よ。第一なんでわざわざここまで来てトランプするのだ龍二。

一応説明しておく、この学校の裏にある雑木林は、昼間でも鬱蒼と茂っており、暗くて奥まで見えない。生徒はもちろん、教師陣でさえ滅多に近寄らない。近寄ることと言ったら、近くにある焼却炉に燃えるゴミを出しに来る時くらいである。

そんな場所の奥まった所に旧校舎が建ってるのだから、当然誰にも分かるはずがない。唯一知ってる人物は、校長先生か一部の教師陣だけである。それでさえ旧校舎の全貌を知っているのか疑わしいところ。

で、まあ龍二達は普段通っている、今は明かりの消えた校舎を通り裏へと抜ける道に入り…

雑木林の前まで来た。

「うつわぁ…やっぱり昼間だけでも恐いだけに、夜だとより一層恐くなるわねえ…。」

「…俺、帰っていい?」

「帰った時点でお前朝無事に起きれると思つな恭田?」

「…めんなさい。」

…ところで何故、アルス達はあれだけ拒んでいたのに今こうしてここにいるのかと言つと…。

〈回想〉

『そつだな、来なかった奴は全員明日の朝俺のドッキリイベントを開催するというのは』

『絶対行かせてもらいます。』

〈回想終了〉

短い回想…まあそういうこと。

「…やっぱり龍二のドッキリイベントの方が恐いしな…。」

「?何か言つたか久美?」

「!?!い、いや何も。」

すでに経験済みの彼らにとって、龍二のドッキリイベント程恐いものはないらしい。

それにしても、この雑木林はホントに真っ暗である。昼間もだが、夜になるとさらに深みが増し、全く向こう側が見えずに漆黒の闇に覆われている。

「ホントに行くの？」

「行くしか…ないでしょう？」

クルルとアルスはマジで不安な面持ちである。

【ザワザワザワ……】

…少し風が吹き、枝が擦れる音が木々から聞こえてきた。

『……………』

一瞬にして固まる一行…。

「おーい、さっさと行くぞお前ら。」

『アンタすごいっすねえ！！？！？』

すでに雑木林の中に入って行った龍二に全員がツツコミ入れた。

キタヨキタヨ

アタラシイオトモダチガキタヨ

ハヤクオイデオイデ

コンヤハタノシモウヨ

闇はまだ、動かない。

第百十一の話 恐怖!??少し早めの肝試し! 1 (後書き)

二回続けて長編て……

今回は若干ホラー要素混じってます。前からやってみたかったんです

ってなわけで、続きます。

第百十二の話 恐怖！？少し早めの肝試し！ 2（前書き）

今回、いろいろやばいです。いや、何がいろいろって…まあ…いろいろ。

第一百十二の話 恐怖！？少し早めの肝試し！ 2

（ライター視点）

前回に続き、懐中電灯で道を照らしながら雑木林を歩く龍二達。言  
つてなかったが、今の天候ははつきり言つて悪天候。遠くから雷が  
ゴロゴロと鳴っており、今にも降り出しそうだった。ホラー映画と  
かでよくあるワンシーンだ。

そんな中を全く手入れのされてない、鼻毛の如く草ボーボーの細い  
道を進む一行。ときおりフクロウと鈴虫の鳴き声が聞こえてくるが、  
鈴虫の鳴き声は庭で聞いていたら風情があつても今のこの状況では  
恐怖感を煽る効果音と化している。さらにフクロウの鳴き声がもれ  
なくオプショで付いてくるのだから余計であつた。

「……………」

「……………」

「…なあ雅よ。」

「…何だ龍二。」

歩きながら振り返つて後ろを歩いている雅の方を向く龍二。

「…これどうすればいいよ？」

「…どうもできるわけねえだろ。」

現在、アルスとクルルが龍二の左右の腕をそれぞれ掴んでる。二人  
揃つて顔色はよくない。

「…アルス…羨ましい…。」  
「リリアン、同感だそれは。」  
「私、叩かれたのに…！」

香苗、しょうがないよ。お前だもん。

「ま、魔王さま…。」  
「泣き顔キシヨイぞケルマ。」

カルマく！？お前いつからそんなキャラになったんだく！？あ、渋谷編からか！納得！

「…なあ雅。俺らの存在ってなんだろうな…。」  
「耐える恭田。」  
「所詮私達はそういうキャラですから…。」

一行の後ろの方でボソボソと会話する男性陣諸君（龍二除く）。わかってらっしゃるスタイルくん。

「しっかしまあ、何でこんな木々が生い茂るまで放っておいたのやら。」

「単に…面倒だったから…？」  
「お、その案ナイスだリリアン。」  
「アンタ達何でそんな会話できるのよ…。」

真っ暗闇の中、そんな和やかな雰囲気が一行を包む。



だが…

「？…お？もしかこれか。」

龍二が雑木林でカモフラージュされた暗闇に浮かぶ建物を見上げた。

それは、まさに昔ながらの木造建築物。今の校舎と同様、これも三階建てとなっていた。大きさもさほど変わらない。

しかし壁のところどころが腐敗し、カビやらツタやらが生え放題生えまくっている。そして全ての窓ガラスはほとんどが割れており、その向こうは真っ暗闇で何も見えなかった。

かなり老化が進んでおり、今も建っているのが不思議なくらいであった。

「これよ…。」

『……………』

香苗が真剣な面持ちで頷き、一行は押し黙った。

これが旧校舎…全員、想像していた物より遙かに凌駕した迫力だった。周囲の暗闇がそれを強調している。

風が少し吹くたびに、窓がガタガタと揺れる。どこからか【ヒュゴオオオ】という風の唸り声まで聞こえてきた。

全員、湿気で服が肌にまとわり付いてるのにも気にしていない様子…。

「…わり、俺スツゲエ今気分悪い。」  
「アタシも…嘘とかじゃなくて。」

雅と花鈴が不調を訴える。二人だけじゃなく、他の皆も体中から冷や汗を流していた。

「…これ、マジで恐いわね…。」

「そうね…どうする?」

平然を装ってるが、足はすでにガクガクとしている香苗。

この旧校舎からは、体の奥底にある恐怖心を湧かせる何かがある…。

オイデオイデ

アソボウ、アソボウ

「!!????」

バツ!と背後を振り向くアルス。

「きゃ!?!ちよ、どうしたのよアルス!?!」

「…い、今どこから声が…。」

すでに声に覇気はない。

「ちよ…恐いこと言わないでよ…。」

そついつ花鈴の顔もすでに真っ青だった。

「……………どつするっ。」

「どつするったって…。」

このまま帰ろうか？という結論に全員が至ろうとしていた…。

「お邪魔しまーす。」

『って何してんですかああああああああい！！！！！！？？？？』

約一名、K（空気）Y（読まない）野郎、龍二が旧校舎の入り口を開けようとしていた。

【ギギィ〜…】

やがてゆっくりと扉が開き…

【ヒュウウウウ】

……中から生ぬるい風が吹いてきた。

『……………』

「?どしたお前ら?」

『入らないのか?』

きよとんとした表情で振り返る龍一と平然とした口調のエル。鈍感野郎というのは恐怖すら感じないらしい。いやこいつは例外か。

「…行きますか。」

「…だな。ここまで来て後戻りするのも何だし。」

香苗と雅が言うと、全員小さく頷いた。

〈旧校舎 一階〉

……………。

「…暗いわね。」

「懐中電灯でもこのくらいか…。」

一階、校舎入り口。

入ってすぐ出迎えたのは、四つ並んだ風化してボロボロの下駄箱。当然、靴なんてない。いやあったらあったで初っ端から恐怖感MAX。

下駄箱を抜けると、左右に長く伸びた暗い廊下。天井のところどころにクモの巣が張られ、廊下には至るところに埃が積もり、いかに古いかさらに強調されている。

しかも、歩くたびにギシギシと軋む音がするし。

「…こ、怖い…。」

「…あうう…。」

「だあかあらあ、引っ付くなっつーのお前ら。」

ブルブル震えながら龍二にしがみつくとアルスとクルル。龍二は少々困り顔。

「にしても…マジで静か過ぎるな…。」

「当たり前だろ？俺ら以外誰もいないんだから。」

ただ、聞こえるのは外の鈴虫の鳴き声と木々が擦れる音のみ。それ以外は何の音もしない。

校舎は完全な静寂に包まれていた。

「恐いわ…いきなり何か出るんじゃないの？」

花鈴が不安な面持ちで呟く。

「あのなあ…入ってすぐに出てたまるかってんだ」

雅が後ろにいる花鈴に呆れ顔で言おうとした。

【ガタン！】

『！！！？！？』

いきなりどこかで音がした。

【ガタガタガタガタ！！】

「な、何！？何何い！！！？」

「ひいひい！！！？」

完璧ビビって龍二の腰にしがみつくアルスとクルル。それで平然としてる龍二、お前は罪な男だなあおい。

音の発信源はすぐ近くらしく、全員怯えながらも周囲を警戒した。リリアンは斧を構え、ステイルは杖を眼前にかざしている。久美とロウ兄弟は足を肩幅に開き、いつでも動ける体勢にしておく。雅達は適当に構えていた。

で、龍二はといつと…。

「ん……………」

おもむろにポケットから石ころを取り出し…

「ほい。」

それを天井に向けて飛ばし…

【バシイ！】

『ぐはあ！？』

『アゝアゝー！？』

『まずい、逃げるぞー！』

……………何か声した。一部カラスの鳴き声した。

【バタバタバタ……………】

……………やがて天井から走る音がし、遠のいていった。

「だ…誰だったんだ今の…？」

「ハゲと影薄とその創造主カラスだ。」

言うな。それ以上言うな。





龍二のバツクキツク光速二連続が二人の人影の腹に命中、すかさず後ろ回し蹴りがいい感じに炸裂。龍二自慢のキツクコンボによって“く”の字の状態で吹っ飛んでいった。

…ついでに言うと、人影の一人は何か巫女服だった。

『……………』

はい全員沈黙。

「あいつらも来てたのかあ。」

『…あの男と女の持つ剣から何か声が聞こえてきたような…』

「ほお？何て言ってた？」

『いや、そこまでは聞き取れなかった。』

ごく自然に会話する龍二とエル。そして相変わらずその他大勢は茫然としていた。

「?どしたお前ら？」

『いえ、何でもありませんであります。』

「あ、そう。」

何か変な敬語を使いながらピシリ!と姿勢をただす皆様。

…今のは見なかったことにしようかな。



「…後ろ。」  
「後ろ?」

雅のボソリと呟く声に、全員振り返った。

【ウフフフフ……………アハハハハハハ……………。】

一行から少し離れた場所で、青く燃え盛る金髪の少女の生首が高笑いしながらフヨフヨと宙に浮かんでいた。

『……………。』

はい全員顔面蒼白超えて真っ白。ただ龍二だけは訝しげな顔したまんま。





「た、たたた助けてリュウジさあああん!!」

泣き喚くクルルと怯えながら後ろ手を探るアルス…もう魔王と勇者の威厳もクソもあったもんじゃないやね。

【ブニヨ】

「…………え？」

掴んだ手から明らか龍二とは違う妙な感触が伝わってきて、アルスは恐る恐る後ろを見た……………

「はあ、はあ、はあ…。」

何か頭に蠟燭立てたメタボなおッサンがパンツ一丁で立っていた。



「た、た、助けてええええ……。」

足腰立たないアルスは、すっかり半泣き状態になってるし。

「ぎゃーっはははははー！」

…オッサン、笑ってるし。

「コラ。」

【スパン！】

あ……………。

「お仕置き。」

【スパンスパンスパン！！】

……………。

「お前もだ。」

【スッパーン！】



.....。

「ったく、ここまで来てイタズラすんなっつーの。」

「アイムクレイジー！」

「はいはいドンマイ。また遊びに行くから今はとにかく帰れ。」

.....

は？

「じゃあな。車(?)に気をつけて帰るんだぞ。」

【ヒュン】

.....

状況説明。いきなり籠二がオッサンと這い回る手と上半身血まみれ灰女と燃える生首となぜか暗闇をハリセンで叩いてその後何も無い空間に穴が開いてオッサン達は全員その中に入って消えていった。

『.....。』

「つかよ、出ていいのかあいつら？」

『さあな。叱られるのは創造主（作者）だ。』

「ごもつともですエルさん…。」

「……………リュウジ…さん？」

「あ？」

呆然としたメンバー（龍二とエル除く）の中で、勇気を振り絞って口を開いたのはアルスだ。

「い…今のは…。」

「たんなるどっかの誰かさん達のイタズラだ。気ニシナイ。」

俺は気にする。怒られるかもしれないから。

「い…いだい…いだい…。」

…一番ボコボコにやられた奴は誰もいなかった。

「いやいたよ！？俺やられたよ！？髪の毛引っこ抜かれたよ！？何か爆発したし！？」

「うっせえよお前自己再生能力付いてんだから大丈夫だろうが。」

「いやいやいやいや！？それでも痛かったって…！？」

「…キヨウタさん、誰に話しかけてるんですか？」

「脳味噌やられたらしいぜ？」

「ちつがああああああああああつ…！！」

HAHAHA、ナレーターに話しかけるからだ。

「ドチクシヨオオオオオオ!!!」

「…もう放っておこう。」

「だな。」

全員に見放された影薄雑草太郎でした

…つかさつき恭田と一緒に何かクルルと似たような雰囲気を持った女の子が吹っ飛ばされたような気がする…。

「…つかさあ、さっきの全部イタズラだったの？」

「そうだな。いろんなところから特別出演ってな形だけ。」

「あ。それなら今までの幽霊騒動はつじつま合うわよね？」

「ま、まあ恐くなかったけどね！」

「その割にはさつきからずっとアルスのポケットに入ったまま出てこないじゃんファイファイ？」

「う、うるさああい!!!」

さっきの騒動で毒気を抜かれた一行は、すっかりこの暗闇に慣れてしまった。

「そ、そうか！じゃもう解決したも同然なんだから帰ろうぜ！」

「…そうね。ここあんま長居したくないわ。」

「誰だつて長居はしたくないよ。」

「…うっさいわよ雅。」

和やかに会話する一行。

「ところろで、今何時？」  
「あ、ちよっと待って。」

花鈴に時間を聞かれ、香苗は腕時計を見るために左腕の袖をまくった。

「え〜っと…うわ、もうちよっとで12時よ？」

「マジかよ!？」

「意外と長くいたみたいね。」

あれから二時間も経ってるなんて速すぎだろっていつツッコミは「愛嬌」。

「じゃもうホント帰ろうか？」

「だな。」

「…賛成。」

満場一致で旧校舎を出ることになった一同でした。

こうして、幽霊騒動(?)は幕を閉じたのだった。

「…ん？」

突然、龍二が足を止めた。

『？リュウジ？どうしたのだ？』

「……………」

皆が先へ行く中、龍二はその場から動かなかった。

そして…

【カチツ                    ボーン    ボーン    ボーン    ボーン】

『！！？』

突如、旧校舎中に鳴り響いた柱時計の音に全員が立ち止まった。

【ボーン ボーン ボーン ボーン】

「え！？な、何！？」

「時計……？」

皆がうつろたえる中、戦闘メンバー（リリアン、スティル、久美、ロウ兄弟）は冷静に構えて周囲を警戒した。

【ボーン ボーン ボーン ボーン………】

「……止まった。」

そしてまた静寂が訪れた。

「……今、十二回鳴ったわよね？」

「ああ……っーことはもう十二時か。」

「………ねえ、ちよっとおかしくない？」

香苗が訝しげな表情をして、皆に呼びかけた。

「この旧校舎に、何で柱時計の音が鳴り響くの？」  
「…確かに…誰も使われてないはずなのに…。」

第一、旧校舎全体に時計の音が鳴り響くというのがおかしい話である。古いとは言え、この校舎は広くて大きい。何台も校舎中に時計を配置しないかぎりここまで響くというのは無理な話だった。

しかも、先程の音はすぐ近くから聞こえてきたようだった。近くに部屋はなく、明らか不自然である。

「…これ、やばくない？」

「ああ…多分やばいと思う。」

一同は嫌な予感がしてきて、真剣な面持ちとなった。

「…早く脱出した方がよさそうだな。」

「は、はい。」

「……。」

「？クルル？どうした？」

さっきから落ち着きがないクルルに声をかける久美。

「…ねえ、皆。」

「？」

「リュウくんは？」  
「……………え？」

【ピシャアン!!】

雷が旧校舎の外で鳴り響いた。

フッフ、カエサナイヨ

イッパイ、アソボウヨ

ボクたちトイッショニ

闇が、動き出す



第百十二の話 恐怖!?!少し早めの肝試し! 2 (後書き)

…下弦さん出ました、コニさん出ました、摩璃藻さん出ました、イ  
又教官さん出ました、飛焰さん出ました…

まとめてごめんなさい、クロスオーバーがここまで難しいとは…ジ  
ヤンピング中途半端(?) 土下座。

次回からは本格的にホラーやっぺいこうかな?

第百十三の話 闇の存在1 (前書き)

サブタイ、変わりましたが長編に変わりないです。

## 第百十三の話 闇の存在1

（ライター視点）

『……………』

全員、外の雷の音などほとんどどうでもよかった。

ただ、クルルから聞いた言葉…龍二がこの場にいない、という事に動揺を通り越して硬直してしまったのだった。

「…え？」

最初に沈黙を破ったのはアルス。その顔に覇気はなく、いまだに信じていないようであった。

「り…リュウジ…さんが…。」

「いない…ですって？」

花鈴が言葉を紡ぐかのように言う。

「……………」

「……………」

「……………！そ、そうだケータイ！」

【カチャ】

花鈴がポケットからケータイを取り出し、アドレス帳から龍二の電

話番号を探り当てて通話ボタンを押した。

『……………こちらは、留守番電話サービスセンターです。おかけになった電話は、電波の届かない場所にいらっしゃるか、電源が入って』

「……………」

「…どうなんだ？花鈴？」

雅の問いに、静かにケータイを下ろして首を振る花鈴。

「……………」

「……………」

「嘘…だろ、オイ？」

誰も動こうとしなかった。いや、動けなかった。

龍二が消えた、というショックが大きいついでもあつた、同時に恐怖が全員の体を蝕んでいた。

「…ぼ…ボク、リュウジさん探してきます!!」

「私も！」

ついに耐え切れなくなったアルストクルルは、不安と恐怖に駆られながらその場から足を一步踏み出す。

が…

【ガシ】

「二人とも、ダメ…。」

「！？リリアン！？」

リリアンがアルスとクルルの肩を掴んで動きを止めた。

「今…動いたら…あなた達まで行方がわからなくなる…。」

「そうですね、今は下手に動かない方がいい。」

「で、でも！」

スティルも冷静を保とうとしているのが丸分かりな声色でアルス達を論ずる。

「魔王様、堪えて！」

「いやああああ！！」

駆け出そうと暴れだしたクルルを、ロウ兄弟が押さえつける。

「アルスクルル、今は落ち着けて。」

「あなた達まで消えちゃうわよ！？」

雅達も二人を止めるよう説得をするが、アルス達は暴れるのをやめようとはしなかった。

「放してください！リュウジさんが！リュウジさんが！！」

「皆行かないなら私とアルスだけでも行くー！！！！」

「だからはぐれたらどうすることもできないんですってば！」

「落ち着く……。」

「いやあああああああ……！」

「お前らしい加減にしろ……！」

突然、雅がアルスの言葉を遮るかのように大声で叫んだ。

「今バラバラに行動しちまったら元も子もないだろ！？そんなことしたらいつか全員消えちまう……！」

「で……でも……。」

悲痛な表情でアルス達に怒鳴りつける雅。普段は見られない雅の顔を見て、全員押し黙った。

「……………俺達だって……………ホントはお前ら同様、駆け出したい気持ちで一杯なんだよ……………。」

一息つき、静かに話す雅。

その拳は、握りすぎて真っ白になっていた。



その間にも、外からは雨が降りしきる音が聞こえてくる。

「………とりあえずどうする？」

しばらくの沈黙の後、花鈴が問いかける。すでに顔色は悪く、息も微妙に荒い。体の奥底からくる恐怖からか、それとも龍二の身を案じるあまり緊張しているのか、どちらとも言えない。

「……この雨だ、外に出るのは危険過ぎる。」

「それに龍二を放つてはおけないし……。」

雅と香苗が言うが、この校舎は前回述べた通り広くて大きい。どこをどう探せばいいのかさっぱりわからないのである。

「……でも二手に分かれるのも危険だと思うわ。人数を減らすのはリスクが大きくなる。」

「そうだな……大人数だと効率悪いけど、少人数で行動するより心強いはずだ。」

どうにか一同は冷静さを取り戻してきたのか、これからの方針を固めていった。

「……ともかく、中を調べてみるか……。」

「そ……そう、ね……。」

全員、表情には恐怖の色が浮かんでいるのが明らかだった。ただ、動かなければどうにもならない……一同の思いは一緒だった。



く一階 廊下

【ギシ…ギシ…】

「…やっぱり床が軋むな…。」  
「抜けないでしょうね…これ？」  
「抜けないことを祈るばかりだ。」

慎重に歩きながら話す雅と花鈴と久美。一歩歩くごとに床がへこむかのような妙な感触に見舞われるこの廊下は、遙か向こうにある暗闇まで伸びている。床にところどころ穴が開いていたり、湿気で腐っている部分がある限り、足元が抜けないという保証はない。

「…さつきと何だか微妙に雰囲気が違う気がするんだけど…。」  
「か、カナエさん…そういうことは言わない方がいいですよ。」

余計不安を煽りそうな香苗の言葉に、ステイルがおずおずと申し立てる。

「…。」  
「…。」  
「…アルス、大丈夫？」  
「魔王様…。」  
「…あ、ごめん。大丈夫だから。」

「うん…ありがとケルマ。」

さつきから落ち着きがなく、焦りの表情を出しているアルスとケルル。ファイファイとケルマが声をかけるが、二人とも声が若干上ずっている。

二人が何を考えてるのか、容易に想像できた。

「リュウちゃん…大丈夫だよね？」

「大丈夫に決まっている。何せ龍一だからな。」

心配そうに呟く香苗に、力強く断言する久美。しかし表情は若干暗い。

「…ところで花鈴。外との連絡はついたのか？」

「ダメ、全然。圏外じゃないのに、出る気配もなし。」

ボタン、とケータイを閉じて首を振る花鈴。先程からずっと連絡を取ろうとしてるが、進展は全くなしだった。

「おかしいな…さつきまでは通じてたはずなのに。」

「どうなってんだよ…。」

「もぉ！泣きそつな声出さないでよバカ恭田！」

「わ、わりい…。」

花鈴に言われ、縮こまる恭田だった。

「…おかしいのはデンワだけじゃないわよ。」

「ファイファイ…？」

フィフィがアルスのポケットから飛び出し、アルスの肩にとまる。

「…皆に言っただけで、さっきから何か変なのよ。」  
「変…？」

フィフィの言葉に全員が立ち止まった。

「変って…何が？」

「さっき、時計の音が鳴り響いたでしょ？」

「？うん。」

「その後から、何だか妙なよ。周辺から…何ていうのかな……得体の知れない力みたいなのが流れてるの。」

「得体の知れない…力？」

アルスが首をかしげた。

「クルルとカルマとケルマも何か感じない？」

「…確かに、先程から感じたことのない冷気みたいなものを察知できますが…。」

「うん、私も。」

「僕もです。」

「…ねえフィフィ、どういふことなの？」

じよじよに嫌な予感が一同に過ぎる。

「…つまりね…」

【ガタン！】

『！！！？？』

フィフィが何か言いかけた瞬間、何かが落ちる音がした。

「また！？？」

「……いや、また誰かのイタズラじゃ……」

「！！！？皆黙って。」

フィフィが何かに気付いたようだった。

「？フィフィ？どうしたの？」

「シッ！」

アルスの問いかけにフィフィは静かにするよう合図を送る。

「……………。」

静寂する廊下……全員、その場から動かない。

「……これは……………」

ようやくフィフィが口を開いた。

「な、何？」

「……………」

再び黙り込むと、フィフィは前方の暗闇をじっと見据えた。

「…皆、武器構えて。」

「…え？」

「何か…来る。」

「な…何かって

『オオオオ……………』

「!？」

アルスが言いかけた途端、前方の暗闇から何かの呻き声らしき音が聞こえてきて全員硬直した。

「…敵？」

「少なくともリュウジではありませんね…。」

リリアンは斧を構え、スティルは杖を前方に突き出した。

「な、何…?」

「何だよ今の…。」

「皆、下がっててください!」

非戦闘員、つまり雅達は、カルマに従って後ろに下がる。

「魔王様!」

「う…うん。」

【ブウン】

クルルも怯えながら黒剣を異次元から引き抜き、構えた。

「アルス、構えて。」

「は、はい!」

フィフィに言われ、自らを鼓舞しようとして力強く返事しながらアルスは剣を構える。

やがてまた静寂が訪れ、何が起こるのか皆固唾を呑んで見守った。ただ感じるのは背筋を走る悪寒のみ。

.....

…遙か向こうから、僅かながら何か聞こえてきた。

…………… 八八 ……………

やがて声が聞こえてきた。まだハッキリ聞こえてきたわけではないが、こちらに接近しているのは明白だろう。

「…な、何の声だ…？」

「わからない…。」

恭田と雅が疑問を言うが、全員正体が全くわからないため誰も答えなかった。

「…来る。」

フィフィは真剣な表情でアルスの肩から前方を見据えた。





「魔王様！？」

得体の知れない存在に恐怖し、顔面蒼白にさせて体を震わしているアルスとクルルに必死にうったえるフィフィ達。

アハハハハ！アソボウ！アソボウ！

笑い声から子供の声へと変わった。言っていることは無邪気な物だったが、声色からして邪気を感じられた。

「アルスしっかりして！固まってちゃダメ！」

フィフィがアルスの頬を叩く。

「う。。。」

キヤハハハハハハハハハ！

「~~~~！ああもう！！いつまでも幽霊にびびってんじゃないわよ！！リュウジ助けたいんでしょアンタ達！！？」

「……！！」

痺れを切らしたフィフィの言葉にビクリと体を震わせて反応するアルスとクルル。





【ズバン！】

泣き叫びながらも剣で薙ぎ払い、霊を撃退するクルル。

「魔王様、ナイスです！」

「はあ、はあ、はあ……。」

ケルマが賞賛するも、いつもなら得意げに笑うクルルだが、今では恐怖からか顔を青くして肩で息をしていた。返事ができる状態ではない。

「確か……あと一体のはず。」

フィフィが周囲を見回し、敵を探す。アルス達も警戒しながら構えた。

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

「……あれ？」

「……？フィフィ？」

突然、フィフィが素っ頓狂な声を上げた。

「…どこにも…いない…」

キョロキョロと周囲を見回すフィフィ。

「いない？…どうして…」

「…でも絶対どこかにいる…さっきから悪寒が収まらない…」

リリアンが斧を構えたまま目だけを動かして周囲を探る。

緊迫した空気が辺りを包んだ。

「！？いやあああああああ！！！？？」

「か、花鈴！？」

「！？？」

突如、アルス達の背後から花鈴の悲鳴と雅の声が聞こえてきた。

アハハハハハハハハハハ！！

「あ、が……！！！」

雅達がいる場所で、花鈴が足を宙に浮かせながら暴れていた。顔は上を向いていて、まるで誰かに首を掴まれているかのよう。

否、事実掴まれていた。

「か、カリンちゃん!?!」

「カリンさん!?!」

「しまった、あいつ足元から!」

各自、剣を手に雅達の所へ駆け寄るアルス達。

アハハハハハ!

アソボウアソボウ!

イツシヨニアソボウ!

「!?!?また!」

フィファイが足元から出現した霊を確認した。

カエサナイヨカエサナイヨ

キミタチモボクラノナカマ

ズーッとイッショ  
イッショイッショイッショイッショイッショイッショイッシ  
ヨイッショ

「つてますます増えてる……。」

壁から、天井から、さらに霊が現れて戸惑うフィフィ。アルス達はそれらを視認できないが、フィフィの慌てようから相当まずいと判断し、足を止めざるをえなかった。

「この！花鈴から離れろ！」

「花鈴ちゃん!!」

「ああ……が……。」

その間にも花鈴の顔色はますます青くなっている。雅達も必死になつて花鈴を救おうとするが、相手は見えない敵。どうすればよいかわからなかった。

「ステイル！カルマケルマ！魔法！」

「そ、それが…魔法を使おうにも魔法が出ないんです！」

「ボクらもダメです！」

「そんな!？」

「アルス余所見しちやダメ！前方の敵を切りまくって!!」

何とかして活路を開かなければ、花鈴の身が持たない。その場合、最悪は……。

「……あ……。」

「！？花鈴！？すっかりしろ！」

宙に浮いた花鈴はやがて大人しくなっていき、目を見開いて口をパクパクさせるだけだった。

「花鈴ちゃん！！」

「……………」

やがて、花鈴の腕が力なく垂れ下がった。

「！？カリンさん！！！！」

「カリイイイイイイイン！！！！」

「その者ども！退け！！！！」

突如聞こえてきた声と共に、アルス達の背後から白い紙のような物が飛んできた。





「花鈴！しつかりしろ！」  
「花鈴ちゃん！」

久美が花鈴を抱き起こし、揺らす。香苗も耳元で悲痛な表情で叫ぶ。

「……………」

それでも花鈴は生気がない顔で目を開かず、ぐったりとしていた。

「おい…嘘だろ？」

「カリンさん…。」

「……………」

…最悪の事を予想してしまい、雅は顔面蒼白になり、アルスは思わず涙声になった。

動かない花鈴を囲み、重い空気が一行を包んだ…。

「…いや、その者はまだ死んでおらんぞ？」

『…？』

一行の背後から、先程の音が聞こえてきて全員振り返る。

「あ、あなた。」

香苗がボソリと呟いた。

そこにいたのは、巫女服で身を包んだ少女だった。

第百十三の話 闇の存在1 (後書き)

正直恐くないかも…次回、新キャラ登場。龍二はまだ出てきません。

## 第百十四の話 闇の存在2（前書き）

早く投稿しよう、投稿しようとしてはや一週間…すいませんでした。  
え、まだホラーは続きますけど、今回はギャグも入ってますんでは  
い…。

## 第百十四の話 闇の存在2

（ライター視点）

「…あ、あなた…。」

「ぬ？…お主もしや、生徒会長か？」

香苗の言葉に、訝しげな顔で質問を返す巫女服の少女。左手には金色の錫杖が握られている。

顔は丸みを帯びた小顔、髪は肩まで切りそろえたショートで、雪の如く白い。ついでに肌も真っ白だった。ただ目だけは漆黒の黒。

「え、えと…誰だ？」

「あ、この人は隣のクラスの人で、名前は…」

「日暮 亜沙子じゃ。」

久美の質問に香苗が答えようとしたところで、少女もとい日暮 亜沙子が遮るかのように答えた。

「隣って…いたかそんな人？」

「今はそれよりその娘じゃろう。」

恭田の問いを無視するかのように日暮が花鈴を指差した。

「そ、そうです！カリンさんは！？」

「安心せい。さっきも言ったが死んではおらん。気絶してるだけじゃ。」

それを聞いた途端、空気は一気に和らいだ。

「よ……よかった。」

アルスは思わずその場でへたり込み、安堵のため息をついた。

ただ、一人は首をかしげた。

「……あれ？でもどうしてわかったんだ？脈は測ってないのに……。」

雅が疑問を口にする。事実、日暮は花鈴から少し離れた距離にいた。当然ながら、脈は離れて測れるものではない。

「簡単なことじゃ。その娘からはまだ生気が出ておるからな。生きてるというのは明確じゃ。」

しかし、日暮は何の臆面もなく言った。

「……は？」

「じゃから、その娘から生気が出てるから生きとるのは明確じゃと言ったんじゃ。」

……………。

「……ちょっと待て。生気とかそんなの、アンタ見えるのか？」

「見えてるから言っておるんじゃ。それとも何か？見えてないとも言おうか？」

「いや、あえて言いなおす必要はないんだけど…。」

古臭い口調からか、雅は気後れしてしまった。

「…日暮さん…あなたは一体…。」

香苗が花鈴の額に持つてきていた冷えた水入りペットボトルをあてがいながら言った。

それに対し、日暮は苦笑した。

「むう…面倒事が増えるからあまりバラしたくはなかったんじゃが…状況が状況じゃからのお。」

そして一泊置き…

「ワシは陰陽師じゃ。」

『……………』

案の定、全員沈黙した。

「…ほれ見い。明らか疑つとるじゃろ。」

「え、いや、疑ってるというか何というか…。」



「じゃ何じゃその目は？」

「あいや、その…。」

まんまと日暮のペースに乗せられた雅はますます恐縮していった。

「…あの、クミちゃん？“オンミヨウジ”てなあに？」

「ああ…この世界で昔、占いをしたり霊を払ったりするのを職業としていた人達…って言えばいいか？まあそういう人達のことだ。」

「まあそんなものじゃな。一々説明するのも大変なんじゃよ。」

クルルに袖を引かれながら質問され、曖昧な感じで答える久美。若干苦笑しながら日暮は言った。

「…いわゆる…ステイルのような人達…？」

「私は占ったりはしません…。」

陰陽師を魔道士と同じようなものと捉えるリリアンとステイル。似てるようで違う。

「まあ、それはともかくじゃな…お主ら。」

「…え？ボクですか？」

「私？」

突然指差されて戸惑うアルスとクルル。

「…何故貴様ら怨霊どもを切れた。その剣、ただの剣ではないな？」

「…!!」「」

言われ、ギクリ、という擬音が出てもおおかしくなくらい動揺する二人。

「そもそも、貴様らから得体の知れない気のような物が発せられてるんじゃないか？」

「……………」

また言われ、目を泳がせる二人…そりゃ勇者と魔王なのだからそういうのが発せられてもおかしくはない。

…いや、別に言ってもいい。いいんだけど、言ったら言ったでどう説明すればいいのかわからないのである。“自分達は勇者と魔王です”…………明らかな非現実なことである。

つか、幽霊とか陰陽師とかいる時点ですでに非現実である。

「…い、いや、その…何のことでしょうっ？」

アルス、案の定誤魔化す。

「…とゆーより…」

何じゃお主の頭におるのは。」

『……………』

頭にいる「ファイファイ…………これは誰も言い返せませんでした。

「…え〜…………と…………」

アルスが何か言い返そうとした。

「…まあそんなことどうでもよいわ。」

聞いてきた本人にアツサリと言われてガクリとこけたアルス達でした。

「ど、どうでもいって……」

【ト】

！？」

音がし、言いかけていた言葉を飲み込んでアルスは周囲を見回す。

今の音は結構近かった為、動けない花鈴を守るかのように囲んで一行は構えた。その視線は、音が聞こえてきた暗闇へと向けられている。

「ほれ、どうでもよいじゃろ？」

軽口を叩きながらも真剣な表情で懐から一枚の細長い紙を取り出す

日暮。

「…アルス。」

「何？」

アルスの髪の中からヒョッコリと顔を出して囁くフィフィ。

「今回の、さっきとは何か違うよ？」

「…何が違うんですか？」

“違う”という意味をわかっているながらあえて確認のため聞くアルス。

「これ…負の力がすごいよ？」

「…つまりさっきの見えない敵より強いってことですね？」

「ん…そゆこと。」

「来なくていいのに…。」

タラリと冷や汗を垂らしながら言うアルスとあくまで冷静を保つフィフィ、そして泣き言を言うクルル。

「…チッ、しつこい連中じゃ。」

日暮で小声で悪態をついた。

瞬間、

『アゝアゝアゝアアアア……。』

暗闇から、明らか人間のものとは思えない低い呻き声が轟く。

「……。」

「アルス、しっかり！」

「…う、うん。」

声を聞いた瞬間、背筋が凍りつく感覚に見舞われるアルス。それはアルスのみならず、全員同じだった。

ただ一人を除いて。

「来おったか。」

日暮は紙を眼前に掲げるかのように構えた。

【ズズ…ズズ…】

やがて、何かを引きずるかのような音が近づいてきて…

『アアアアアアアアアアアアアアアア………………。』

“それ”は現れた。

見た目は人間そのもの…の上半身。腰から下、つまり下半身はなく、まるで引きちぎられたかのような断面から出てる物は骨と赤い肉、そしてドス黒い血。

体の肌は灰色、顔は恐怖におののいたかのような表情で、舌、眼球がなく、その奥に見えるのは漆黒の闇。頭には髪すら生えておらず、見えるのは人間の面影を残す細い血管のみ。

それが三匹、腕を使って這ってくるかのように血の跡を残しながらアルス達に近づいてきた。

「な、何だ…こいつら。」

「き、気持ち悪い…。」

雅とクルルがかろうじて声を上げる。その顔は目の前にいる怪物のおぞましさに恐怖し、引き攣っている。

「まったく…執念深さだけは一級もんじゃな。」

全員が恐怖する中、一人迷惑そうにため息を吐く日暮。その間にも

怪物は這い蹲りながらアルス達に接近してくる。

「…アルス。」

「わ、わかってる……。」「

フィフィの言葉に力強く返事をするアルスだが、体は恐怖で震え、若干腰が引けていた。

「…お主、さっきの威勢はどこ行ったのじゃ？」

「……………」

日暮に呆れられ、若干顔を赤くするアルス。

「やれやれ…見た目で判断するのは愚か者じゃぞ？」

そして一歩前へ出て…

「…むん。」

【ピッ】

手に持っていた紙を怪物目掛けて投げつけ、そして両手を前へ突き出して指を重ねる。

「臨！兵！闘！者！皆！陣！列！在！前！…」

【ゴウー！】

日暮が九字の印を結び、やがて紙から風が渦巻き怪物達を包み込む。

『ギギイイイイイイイイイイイイイイイイ……………！！！！！！』

渦巻く風の中から、この世の物とは思えないおぞましい叫び声が聞こえ、それは風が少しずつ止んでゆくことに小さくなっていった。

完全に風が止むと、そこには先程と同じ静寂が辺りを包んだ。

怪物は完全に消失したが、床には引きずったようにドス黒い血の跡が残されていた。

「す、すつげえ……。」

今の光景を見て、呆然と呟く恭田。

「……ふう。結局は単なるザコか。」

手を叩いて埃を落とすかのような仕草をする日暮。その表情はかなり余裕があった。

「……い、今の……何？」

「……魔法？いや、ちょっと違う……。」

未知の力の前にただただ愕然とするしかないアルス達。

「日暮さん……あなた一体……。」

「じゃからさっき言ったであろうっ？陰陽師じゃと。」



驚きが抜け切らない香苗の言葉に、振り返って答える日暮。

「…まあホントは説明したって信じてもらえんからの。今まで陰キヤラを演じて素性を隠してきたんじゃが…。」  
「…はあ。」

苦笑しながら頭をかく日暮に対し、曖昧に返事するしかない香苗。

「して？お主らこれからどうするんじゃ？もうこの校舎からは出られんぞ？」

「……え？あ、うん………へ！？」

突然質問され、現実世界へと戻ってきた香苗は答えようとした時、素っ頓狂な声を上げた。

「で…出れないって…。」

「うむ、出れん。」

もう一度言つ日暮に、一同はまた違った意味で硬直した。

「…な、何で…？」

雅が呆然と呟く。

「ほれ、さつき柱時計の音が鳴ったじゃろ？」

「あ、ああ…。」

「あの瞬間、この校舎の周囲に結界が張られたのじゃ。それもワシ一人でも解けないくらいに強力な奴。」

あまりにも最悪な展開に一同は一瞬にして真っ白になった（イメージです）。

「まあワシは用事がある限り帰るつもりなど毛頭なかったからの。」  
「…？用事…？」

真っ白な状態から少し脳が回復したりリアンが小首を傾げる。

「ああ。この校舎に結界張った張本人にな。」

「え？人がいるんですか？」

「正確には“元”人間じゃ。」

“元”という言葉に疑問符を浮かべる一同。

「…それはまあ、後で話すとして。それよりさっきの質問なんじやが、お主らはこの閉鎖空間の中どうするんじや？朝には自然に結界が解けるから夜が明けるのを待つか？」

「…あ！そうだヒグラシさん！」

アルスがパっと思いついたという風に顔を上げた。

「？何じゃ？」

「あの、ボクら以外の人に途中で会いませんでした？」

「人…？」

「えと、ボサボサの黒髪をされていて、“へっどふおん”を首にかけてる男の人なただけど…。」

クルルがアルスに代わって身振り手振りで必死になって特徴を言う。

が、

「…すまん、ワシがここで最初に会った人間はお主らが初めてじゃ。」  
「…そう…ですか。」  
「……………」

返ってきた答えに、ガツクリと肩を落とすアルスとクルル。

「ふ、二人とも…。」  
『……………』

何て声をかけたらいいのかわからず、沈黙する一同。

「……………二人とも、落ち込んでる場合じゃない…。」  
「そうよ、よほどのことがない限りあいつは大丈夫だって！ね？」  
「……………」

どうにかかける言葉を見つけたリリアンとフィフィは二人を励ます。

それに対し、小さく頷くアルスとクルルだった。

「……………まあ、役に立てなくて悪かったのお。」  
「…いえ、気にしないでください…。」

申し訳無さそうに頭をかく日暮。それに対して、アルスは落胆の色を隠せなかった。

「…ふむ……………ともかく、お主らもまだ用事があるようじゃな。」  
「用事というより…人探しだけ。」

日暮の言葉を訂正するかのようにな久美が言った。

「……………しょうがないのお。お主ら何だか頼りないしヘタレもいるようじゃし……………」

「いや本人達の目の前で堂々と失礼なこと言っくなよアンタ。第一ヘタレって誰のことだコラ。」

「お？スマンスマン。」

雅のツツコミにまったく悪びれもしていない様子で謝る日暮。

「ま、ともかくお主ら、ワシについてこい。どの道人数は多いに越したことはないの。」

「え、いいの？」

「まあここで会ったのも何かの縁と思えばよいからな……………ホレ、さっさと行くぞ。」

「あ……………はい。」

「……………おい、だからヘタレって誰なんだ……………」

……………もついい。」

さっさと話を進める日暮に何を言っても無駄だと判断した雅は肩を落とした。龍二の親友としてやっていっただけはある。

（一階 廊下）

「ほお……………そんなことが……………」

「はい……………」

「リュウくん…。」

軋む床を日暮を加えた一行が歩く中、アルスは日暮に今までの事情を説明した。日暮が歩くたびに手にしている錫杖から涼やかな音が鳴る。

「…ふむ…ちと危ないかもしれんのお…。」

「え？」

「あ、いや何でもない。それよりじゃ。」

そう言っつて、日暮はアルスの髪を指差した。

「さっき聞きそびれてしもうたが、お主の頭の中における奴何者じゃ？」

「!?!?!」

アルスの髪の中に隠れているのは、当然フィフィである。

「隠れたって無駄じゃぞ？さき程喋ってたからのお。」

「……………」

息を殺してアルスの髪の中で縮こまっていたフィフィは、一瞬ビクリと震えた。

「あ、あのヒグラシさん。フィフィは、その…。」

何だかまた面倒ごとが増える気配がし、アルスは言い訳を頭の中で考えめぐらせる。

が…

「…まあ別にどうだっていいんじゃないかな。」

「…い、いいんですか…。」

「陰陽師をやっておると嫌でもこつこつという類には巡り合うので。もう慣れたのじゃ。」

「は、はあ…。」

言い訳しようとした瞬間にそんなことを言われたものだから、アルスは拍子抜けして曖昧な返事を返すしかできなかった。

「…しかし、お主ら普通の人間とはちと違うのぉ。さすがに怨霊どもを切つたのには驚いたぞ。」

「え？え、ええまあ…ファイファイのおかげで…。」

「ま、まあね。」

もつとも、アルスとクルルの剣は普通の剣とは違って魔力が宿っているために怨霊を切り伏せたのだが、この際どう説明したらいいかわからないため、ファイファイのおかげでということにしておいたアルスであった。

「…服装に関しては何にも言わないんだ…。」

「シツ！魔王様そこは触れてはいけません！」

「説明するの大変ですから。」

ボソリと呟いたクルルに注意をするカルマとケルマ。確かに剣で切れたというのは疑問に思うだろうけど、アルスとクルルの鎧姿に何の反応も示さない日暮はある意味大物か。

「…にしてもさっきはすごかったな…。」

「まさかマジで陰陽師見れるとは思わなかったぜ。」

「……………」

「…リリアン、私を見ないでください…。」

「まあ魔道士と陰陽師って似てるようで違うからね。」

アルス達より少し後ろで話す雅達。未だに目を覚まさない花鈴は、雅が背負っている。

「…それよりも、さっきの怪物何だったんだろっな？」

「い、言うな…あれはいくらなんでも気持ち悪かったぞ…。」

「う、うん…。」

恭田の率直な疑問に顔をしかめる久美と香苗。

「…それはじきにわかるじやろっ。」

「え？」

疑問に答えるかのように呟いた日暮だが、久美はうまく聞き取れなかった。

「…ところでさっきから妙に静かなんですけど…。」

「…確かにそうだけど、返って不気味だな…。」

「安心せよ。ワシが結界を張っておるからザコが寄ってこんだだけじゃ。」

「そ、そうか…さすが陰陽師。」

平然と言つてのけた日暮に苦笑する雅。

「…ねえねえ、私達どこに向かって歩いてるの？」

クルルが日暮の隣まで来て聞いた。

「ああ……邪気が最も集まっておるところじゃ。」  
「？邪気？」  
「……つまり、怨霊どもを束ねておる奴じゃよ。」  
「……え、それって……。」

アルスが何か言いかける直前、日暮は立ち止まった。

「……ここからじゃな。」  
『……………』

一行もある部屋の前で立ち止まり、見上げた。

扉の横にあるボロボロの札に書いてあったのは…『職員室』。

一見すると、何の変哲もない横へスライドして開けるドア。しかし、隙間から冷気とも熱気とも取れない、不気味な感覚に見舞われる気が漏れているのが霊能力がない雅達にもわかった。

「……ここじや。」  
「……お主らはここで待て。ワシが先に行って見てこよう。」

日暮はアルス達から一歩先へ出て、ドアへと手をかける。



「……（何て凄まじい邪気じゃ……今回は大物じゃな）。」

ふとそう思いつつ、頬から汗をポタリと落とす日暮。

そして…

【ガラリ】

…扉を開けた。

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

そこは、昔の名残が残されている古い木の机が多く並べられている広い部屋だった。…教職員が昔、ここで仕事をしたり、談笑したり、生徒を呼び出して説教をしていたであろうこの部屋は、もはや不気味さを残しているだけであった。

「……。」  
「……。」

…しかし、日暮が入ってみても何も起こらず、ただただ静寂が広がるのみ。

「…妙じやな…確かにここであつとるはずじゃが…。」  
もう一度、グルリと周囲を見回す。しかし、敵の親玉らしき人物は  
どこにもいない。

「…隠れておるのか？……………」

……………！！？？」

一瞬、日暮の背筋に悪寒が走り、振り返った。

「！！！！いかん！お主ら伏せろ！！！」  
「え！？」

『滅つ！！！！！！』  
『<sup>かあつ</sup>渴つ！！！！』

アルス達の背後から声がし、同時に日暮が二本の指を眼前に突き立てて叫ぶ。

【ドオン！！！！】

「どおわああ!?!」

「きゃあ!?!」

「いでえ!?!」

突然小爆発が起き、アルス達は前方へ、つまり職員室の中へと突っ込んでいった。

「いっつつつつ……な、何だ何だ!?!」

「お主ら無事か!?!」

「な、何とか……。」

煙が立ち込め、辺りが見えない中、日暮の呼びかけに答えるアルス。

やがて煙が晴れていき、周囲が確認できるようになった。

『ククククク……。』

そして職員室の入り口の前に立ち塞がっていた人物がいた。

「……………え……………」

その人物を見て、呆然とアルスは呟いた。

「か……カナエ……さん？」

第百十四の話 闇の存在2（後書き）

続きます。…余談ですが、最初『日暮』にしようか『日影』にしようか迷ったんですが、『日暮』にしました。因みに俺、陰陽道に詳しくありません。

第百十五の話 闇の存在3（前書き）

まずは…ごめんなさい、お待たせしました。もうバイトとかバイトとかバイトとか…はあ。

とりあえず、本編どうぞ。あ、そうそう。あとがきにお知らせがありますのでそちらもどうぞ。

## 第百十五の話 闇の存在3

〈ライター視点〉

「か…カナエ…さん？」

何が起こったのかわからずに、アルスはただ眩くしかなかった。

「か、香苗…一体どうし」お主ら離れよ。「!？」

久美が言いかけた時、日暮が一步前へと進み出た。

「…貴様、そこにおったのか。」

「…え？」

日暮の言葉に首を傾げたアルスだが…

『クハハ、今頃気付きおったか。』

「!？」

香苗の口から出た言葉に驚愕した。しかも口調どころか声色さえ香苗ではなく、声が低い男性の声となっていた。ただ、若干だが香苗の声も重なってるかのように聞こえる。

「まさか生徒会長に憑いておつたとはな……阿古田 紅左衛門。」  
『フッフ、この女子おんなの真似をするのは実に愉快であつたぞ？』

香苗、もとい紅左衛門はニヤリと笑つた。

「気色の悪い趣味じゃな……ってそんなことどうでもよいわ。貴様、いつから生徒会長に憑いておつたんじゃ。」

『昨日の夜からよお。偶然この女子が雑木林の近くを通りかかつて体を拝借させてもらったまでよ。』

紅左衛門の言葉に苦々しげに顔をしかめる日暮。

「……ワシともあるう者が、お主を見破れぬとはな……未熟じゃつたか。」

『フン。貴様如き駆け出し陰陽師なぞに見破られる程、この紅左衛門、愚かではないわ。』

やがて、紅左衛門の右手が黒く光だす。同時に、部屋の四隅から青白い炎が燃え上がり、暗かつた部屋を青白く照らした。

部屋は明るくなつたが、何故か薄ら寒い空気となつた。

『さて、そんなことなどどうでもよい……それより我がどうしてうぬらをここに誘いこんだか……わかるか？』

目だけをアルスに向け、問いかける紅左衛門。アルスの背筋に悪寒が走る。

「……な、何ですか……？」



『決まっておる……うぬらはなあ、』

生贄よお！！』

【ボオ！！】

「！アルス！？」

「！！！」

久美が叫ぶと同時に紅左衛門の手から漆黒の炎が飛び出し、アルスは咄嗟に腕で顔を覆った。

【キーン！】

「……………え？」

「やはり…今までの事件は貴様の仕業であつたか。」

しかし、アルスに炎が届く前に日暮が立ちはだかり、炎を“切り裂いた”。

手に持っている刀で。

「し、仕込み杖かよ……。」  
「え、シコミツエ?」

ボソリと呟く雅に首を傾げるクルル。

『ち、もう少しのところを……。』

「生憎じゃな、ワシはこう見えて剣術の方も会得しておるのじゃ。  
因みに免許皆伝じゃぞ?」

右手に持った元錫杖の柄、今では刀をヒュンと一振りし、左手に持った元錫杖の本体、今では刀の鞘を前方に突き出すように構えた。

「して?…どうなんじゃ真相は?今までの失踪事件は全て貴様の仕業なのか?」

鋭い目つきで紅左衛門を睨みつける日暮。やがて紅左衛門はユラリと揺れ、再び右手に漆黒の炎を凝縮させた。

『クハハ…その通りよ。』

「失踪…?」

一人、ふと考え込むアルス…。

「…!まさか………お前!」

『ああ?何だ小娘。』

紅左衛門から感じる妖気に足がすくみそうになるも、アルスは懸命に堪える。

「お前…リュウジさんをどこにやった!」

『リュウジ？……ふむ、あの小僧か。』

一瞬考える仕草をし、ニタリと笑う紅左衛門。

『さあてなあ……どこへ行ったのやらな？』

「！こ、この……！」

「くう！！」

「二人とも、落ち着きなさい！」

剣を鞘から抜こうとするアルスとクルルを、フィファイが抑える。

「そうじゃ……冷静を欠いてはならん。」

紅左衛門を睨みつけながら、口だけでアルス達を制する日暮。刀からは明かりとなつている青い炎が映り、ギラギラと輝いている。

『クカカ…冷静を欠こうが欠かまいが、所詮貴様らは単なる人間。我に敵うわけがなからうが。』

「ほほお…えらい自信満々のようじゃなあ…。」

日暮は刀を手首だけで一回転させ…

「ならばその自信、根元から断ち切つてくれる…！」

一足飛びで駆け出す日暮。あっという間に距離を詰めていった。

「はあ！」  
『ふん！』

日暮が放った神速の袈裟切りを横つ飛びで回避する紅左衛門。わずかにできた隙を狙い、右手の炎を日暮に向けて撃ち放つ。

「ちい！」

回避がとれないと悟るや、左手の鞘を炎に叩きつける。炎は息を吹きつけるかのように消え去った。

『なるほど、杖自体に浄化のまじないをかけておるか。』  
「当たり前じゃ。貴様ほどにもなるとこれくらいはせんとな。」

一瞬で間合いを取り、構えて睨み合う両者。紅左衛門は両手に炎を出し、日暮は先程と同じ構えを取る。

『だがまあ…その程度の力ではな。』  
「まだ本気を出してなぞおらんわ。見くびるでない。」  
『小娘が…調子に乗るなよ？』

若干表情を歪ませた紅左衛門は右手に纏った炎を日暮に向ける。

『死ね！』  
「はあ！」

そして再びお互い間合いをつめ、激しい攻防を始めた。

「うわ…すげえ…」

恭田が二人の戦いを見て呆然と呟く。

一行は、なるべく安全圏に避難して戦いを見守っていた。

「…速い…」

「目で追えませんね…」

リリアンとスティルがポツリと呟く。現に、戦っている二人は一瞬姿が見えなくなるなどの光速戦闘を行っている。

日暮の剣戟を避けつつ闇の火炎を撃つ紅左衛門、それをトリッキーな動きで避ける日暮…その繰り返しである。

「…大丈夫なのか？見てて何だか危なっかしい気がする…」

「…でも見た感じ日暮はかなり手馴れだし…油断さえしなければ…まずいでしょ。」「…??？」

久美の言葉を遮るかのようにフィフィが言う。

「？フィフィ？」

「…戦ってる相手がまずすぎるでしょ？」

「え……………」

「……………」



悔しげに唇を噛むアルスと、心配そうに呟くクルルとケルマ。

日暮が紅左衛門を切る、もしくは紅左衛門日暮を倒す……どちらに転んでも最悪な結果は免れない。

「……何とかできないのか？せめて香苗を傷つけずにあいつを外に引っ張り出せたら……」

「無理です。この空間で働く力で魔法は使えないようになってます。」

「そもそも、僕らの魔法は攻撃専門だから下手に使ったりでもした

ら……。」

全員沈黙した……明らか絶望的である。

「……あ。」

「？……ファイファイ？」

ふと何かを思いついたかのようにファイファイが声を上げた。

「……あのさ……もしかしたらだけど、

私ならカナエの中にいるあいつ、引きずり出せるかもしんない。」

「！？ほ、ホント！？」

アルスは思わず身を乗り出した。

「うん…でも確立は低いよ？私でもやったことないから。」  
「そ、それでも可能性があるならやってみる価値はある！」

自信無さ気なフィフィに対し、久美は力強く言う。

「でも、そんな魔法あるんですか？第一、この空間では魔法は…。」  
「私を誰だと思ってるの？妖精族よ妖精族。こんな空間なんかへっ  
ちやらよ。」

ステイルに説明するフィフィ。元々、妖精族は魔力の塊のようなものだから、例えば妖精族の子供でも人間の魔術師では足元にも及ばない程の魔法の量を放つことができるわけ。

つまり、魔法の力の方がこの空間の力より勝っているため、フィフィは魔法を使えることができる。

「…わかった。フィフィを信じよう。」  
「…うん。」

若干不安を拭い切れない感じの雅とクルル。

「…フィフィ、頼む。」  
「お願いします！カナエさんを…。」

ホントは自分達が何とかしたいのに、何もできずに歯痒い気分になりながらもフィフィに懇願するロウ兄弟。

フィフィは小さく頷き、日暮を激戦を繰り広げている紅左衛門をキッと睨みつけつつ、魔法の詠唱に入った。



「ちい！」

ファイファイが詠唱に入ってる間、日暮は飛んでくる炎を避けるのに精一杯だった。

『クハハハハ！もう息切れか！』

「…やかましい。お主は息切れすることないじゃろうが。」

漆黒の炎を背後に揺らめかせ腕組みしながら不敵に笑う紅左衛門に対し、刀を支えのように床に突き刺して睨みつけながら立つ日暮。体に目立った外傷はない。せいぜい服が焼け焦げてくるくらいだ。ただ、やはり人間には体力というものがあり、炎を必死で避け続けるしかない日暮はすでに息が上がっていた。

『やはり、我と対等に渡り合うことはできても所詮は人間…他愛もないわ。』

「やかましいと言っておるじゃろが。一般人を盾にしてるお主に言われる筋合いなどないわ。」

『盾え？我はただこの娘の体を借りているだけだぞ？盾にしてる気などないがなあ？クフフフ…』

「…外道めが…。」

明らか確信犯である紅左衛門により一層目つきを鋭くさせる日暮。

『さて…そろそろ終わりにしてやるうか。』

スッと右手を上げ、炎をその先に収束させる紅左衛門。炎はじょじよに形を作っていく、やがて四散すると漆黒の刀となった。

「…今頃武器か…なめられたものじゃな、ワシは。」

『人間風情に使うのは勿体ないが…楽しませてくれた礼だ。楽に殺して進ぜよう。』

「楽しませる気など毛頭なかったわい。勘違いするでないわ、このクズ幽霊が。」

やはり相手を罵倒する元気はあるらしい日暮。

『…つぬのその減らず口…』

今すぐ閉ざしてくれろ!!』

今の言葉にカチンときたのか、刀を大上段に構えて一瞬にして間合いを詰めた紅左衛門。

「な…!?!?」

【ガキン!】

あまりの速さに対応が遅れてしまい、避けられずに刀で防御に移った日暮。

「ぐう…!」

しかし、力は紅左衛門の方が上らしく、頭上から刀をずんずん押し付けていく。鏝迫り合いから逃れようにも、力が強すぎて動けない。

『これで終わりだ……………死ね!!』

さらに力を込め、日暮を押しつぶさんばかりに全体重を乗せていく紅左衛門。

ただ歯を食い縛って耐え続ける日暮の顔のすぐ前に、漆黒の刃が迫っていく…

「悪しき闇、善しき光の前に屈せよ! 『リビス・フェルエル』!!

!!!

『な……………!?!』

日暮を真っ二つにせんと迫っていた刀が、一瞬にして離れた…否、消えた。

それもそのはず、ファイファイが詠唱の終わりと同時に放った光弾が紅左衛門に炸裂し、吹き飛ばしたからである。その時に紅左衛門が持っていた漆黒の炎で作られた刀を破壊、もとい消したのだった。

【ドンッ!】

「かは!」

派手に吹き飛んでいった紅左衛門は部屋の壁に背中を強かに打ち、苦悶の表情を浮かべた。

「！？か、香苗！？」

「カナエさん！！」

久美とケルマが駆け寄ろうとした。

「…！待って！」

しかし、それをアルスが手で制する。

その手を払いのけようとしたケルマ…

『おのれ…珍妙な小動物風情が…。』

「！？」

しかし、いきなり部屋中に響き渡る声に驚き、手を止めた。

声は、明らか紅左衛門の声…だが、今の紅左衛門…に憑依された香苗は、壁にもたれながらぐったりとしている。

【オオオ……】

…やがて、香苗の体から先程の炎が立ち昇る。しかし、攻撃のものではない。

炎はやがて香苗から離れ、部屋の天井まで昇っていき、

人の形となった。

「…ようやっと正体現しおつたな。」

日暮が体勢を立て直し、刀を構える。

人型の炎…もとい紅左衛門は、人間の体型で言うとスマートな姿ではあるが、顔はメラメラと黒い炎が燃え盛るのみで、まったくわからない。

それが、天井近くで浮いていた。

「ふん。生身の肉体よりも、こちらの方が動きやすい分好都合。」  
「明らか強がりにはか聞こえんな。まあよい。ワシとてそっちの方がやりやすくてしょうがないのでな、むしろこちらの方が好都合じゃ。」

日暮の嘲笑とも言える笑みを見て、より一層炎を燃え上がらせる紅左衛門：相当怒っていると見える。

「香苗！」  
「カナエさん！」

久美とロウ兄弟が、紅左衛門の注意を日暮が引き付けている間にもたれている香苗に駆け寄る。

「アルス！」  
「は、はい！」  
「オツケー！」

ファイファイにうながされ、アルスとクルルはそれぞれ剣を手にして日暮の下へと駆け寄る。

「！？お、お主ら……。」「  
「ボクらもやります！」  
「私もいくよー！」

驚く日暮を挟むかのように立つアルスとクルル。二人は剣を構え、宙を浮かぶ紅左衛門を見据えた。

『チツ…雑魚が何匹集まるつが、我に敵いはせん!!』  
【ゴオッ!!】

右手が燃え上がり、そこから先程の刀が現れる。

「…ふう、しょうがないのお…。」

やれやれ、といった感じで刀を握りなおす日暮。

「お主ら、ワシを援護せい。ワシが何とか隙を作り出す。」

「はい!」

「うん!」

『調子に乗るな!小娘どもがあああああ!!!』

紅左衛門が刀を薙ぎ払うと、そこから漆黒の炎が剣の軌跡と同じ形をしてアルス達に迫る。

「でやあ!『ウィンドスラッシュ』!!」

【ビュン!】

アルスが緑色に輝く剣を振るうと、そこから突風が吹き出して炎を掻き消す。アルスは、ファイファイが髪の中で体に魔力を注ぎ込んでいるため、魔法が使えるようになってい

『116-』

「オンキリキリバザラバジリ、ホラマンドウンハッタ!!」

日暮の声が響くと同時に、紅左衛門は体を拘束させられたかのように硬直する。

『なに!?!』

「そりゃあああああああ!！」

そこをすかさず、跳躍したクルルの剣が紅左衛門に迫る。

『おのれござかしい!!!』

【ボオ!!!】

クルルの攻撃が当る寸前、紅左衛門はパッと燃えた瞬間その場から消える。

「あ、あれ?」

『クハハ!馬鹿め!!』

ナウマク・サマング・バザラダン・カン!』

着地してキョトンとするクルルの背後で真言を唱える紅左衛門。すると、彼の周囲に炎が渦巻き、そしてクルルに向けて疾走していく。

「風は返りて北に吹く、急ぎ律令に従うべし!」

しかし、日暮の声と同時にどこからか風が吹き、炎は紅左衛門へと



押し戻される。

『おおっと。』

しかし、急上昇するかのように浮かび上がり、炎を回避する紅左衛門。

『クハ、呪詛返しときたか…なかなかやりおるわ。』

「言ったであるう？今の貴様の状態だとやりやすくしてしょうがない、と。」

ニヤリと笑う日暮。それに対し、呻くかのような声を上げる紅左衛門。

『…やはり、小娘だと思って甘く見すぎておったか…。』

「女だからって甘く見てたら痛い目に合いますよ？」

『なに？』

紅左衛門の背後から声がし、振り返る。

『ボルトランサー！！』

『水よ、切り裂け！！』

至近距離から左手に形成した光の槍を振り上げるアルスト、青く輝くファイファイ。

『うおー！！』

避けきれずに刀で防御した紅左衛門は、光の槍と水の剣に弾かれて吹き飛ぶ。

「今じゃ！」

春は呼ぶ、夏は言う、秋は哭く、冬は呻く、急ぎ律令に従うべし！」

日暮の手から投げつけられた御幣は、紅左衛門の下へと飛んでいく。

『ちい！』

オン・バザラギニ・ハラチハタヤ・ソワカ！！』

【バチィ！】

受身を取るかのような体勢のまま印を結び、真言を唱える紅左衛門。御幣はそのまま折れ曲がって落ちていった。

『甘い、甘いぞ小娘！式など我には通用せんわ！』

「甘いのはそつちじゃ！」

御幣が落ちる寸前、日暮は一瞬にして間合いを詰めていき、刀を振るう。

【ガギーン！】

『ぐお！…生意気なあ！』

「くう…！」

日暮の刀にかかったまじないの光と、紅左衛門の炎がせめぎ合って激しく火花を散らす。わずかだが、紅左衛門の炎の方が勝っていた。

が、日暮はそんな状況で微笑を浮かべる。

「行つけえアルス…！」

「とやああああ…！」

「てえええええい…！」

紅左衛門が鏢迫り状態なのを見計らって、背後から剣を振りかぶるアルスとクルル。

要は、日暮は囷だった。完全無防備を作りだし、その隙に一斉に叩く、という単純かつ効果抜群な作戦である。

（（（（殺った…！））））

この時、四人は確実に仕留めたと確信した。

『…甘いわあああああああああああああ！！！！！！！！！』

【ズゴオオオオオ！！】

「！？うわあ！？」

「きゃあ！？」

「何！？」

突如、激しく燃え上がる紅左衛門。突然のことで、三人は全く反応できずに吹き飛ばされる。

アルスは壁まで吹き飛び、背中を強かに打って跳ね返るかのように床に叩きつけられた。あまりの衝撃に悲鳴も上げれない。

クルルは机を破壊しながら吹き飛び、机の残骸の中に埋もれ、日暮は部屋の奥まで吹き飛んで数回転がってようやく止まった。

「！？お、お前ら！！」

「アルス！」

「魔王様！！」

「くっ…！！」

戦いの場から離れた位置で、三人を見守っていた雅達は駆け寄り寄ろうとする。

『オン・キリキリ・オン・キリウン・キャクウン。』

「ぐあ!？」

だが、紅左衛門が真言を唱えると、雅達は床に叩きつけられたかのように倒れた。

「な、何だこれ!? 動けねえ…!」

「く…拘束呪文…。」

起き上がるうとする恭田と、悔しげに呻くりリアン。当然の如く、動けない。

「か…:…はあ…:！」

「ちょ、アルス! しっかりして!」

一番ダメージが大きかったのか、口の端から血を流しつつ呻くアルス。ファイファイはアルスの横に立ってアルスの肩を揺らす。

『クカカカカカ…生意気な小娘どもが、調子に乗るからだ…。』

余裕を取り戻し、愉快気に笑う紅左衛門。ただ、やはり顔は見えない。

『さて…と。 散々手間取らせてくれたが…ようやく生贄にありつけるわい。』

刀の峰で左手の掌を叩きながら、一行を品定めするかのように見回す紅左衛門。

『…ふむ…』

まずは、うぬからいただくのでしょうか。』

「…！」

その視線が止まった先には、一番近くで倒れているアルス。

「！あ、アル…ス…！」

リリアンが這ってでも近寄ろうとするが、それでもピッタリと床に張り付いたかのように、全く身動きがとれずにいる。

「…くう…！」

剣を支えに、ゆっくりと起き上がろうとするアルス。

『クハハ、足掻くだけ無駄だ。』

「！？」

いつの間にか目の前に立ち、アルスを見下ろす様に顔を下に向ける紅左衛門。動こうとするアルスだが、剣を支えにして立ち上がるのに精一杯だった。



【ドオオオオンバキィ！】

『！？へぶう！？』

∴ ようとしたが、突然職員室のドアが爆音と共に飛んできて紅左衛門に炸裂した。

「！へ！？」

「∴う∴。」

驚き、入り口へと目を向けるフィフィと、かるうじて目を開くアルス。

そこに立つのは、救世主。全ての闇を切り払い、浄化の炎で焼き尽くす覇者。

大いなる光を湛えながら、その者は威厳溢れる言葉を発するため、口を開く。



「荒木龍二、コメディ引っさげて只今参上……!!」

台無し。

## 第百十五の話 闇の存在3（後書き）

まえがきで言っていたお知らせです。

今回、秘密基地様の方でコニ・タン先生という方がおもしろそうな企画が建てられました。俺も参加します。

どたばたコメディーを書いている皆様、是非覗いてみてください。

URLも一応張つときます。

```
『 http://hp23.0zero.jp/bbs/kiji.  
php?uid=himituki&amp;dir=382  
&amp;num=3&amp;th=&amp;unum=12  
11640598305&amp;mn=0 』
```

それでは、皆様またいずれ！次回、龍二が大暴れ！

第一百十六の話 龍二、久々大暴れ！（前書き）

はい、色々ありました。がホラー編完結です！

今回はコメディー一直線…なんですが…

多分、読めば分かります。

## 第一百十六の話 龍二、久々大暴れ！

（ライター視点）

「リュウジ！？無事だったの！？」

「リュウジ…さん…？」

「おいつつー。つか俺よりお前ら無事じゃないだろ。」

『まったくだな。』

ドアを吹き飛ばし、派手に登場した龍二に、歓喜を含んだ声を上げるアルスとファイファイ。それに対して右手をヒョイと上げる龍二とやれやれという風に言うエル。

「り、龍二…無事だったか…。」

「おうよってありえ？お前ら何で寝てんだ？」

「…これが寝てるように見えるか…？」

「風邪ひくぞ。ちゃんと布団かけて寝ろ。」

「いや聞けよ人の話。」

苦しげにツツコミを入れる雅。どんな状況でもツツコミを忘れない、それが雅。

「ふむう…どうやら、俺がいない間えらい楽しそゲフン！大変なことになったな。」

「テメエ…明らか楽しそうって言いかけただろ…。」

「オウイエー。」

初っ端からターボ全開の龍二。久々の出番からか、いつもより飛ば

してるような気がしないでもない。

「そんで？さっさと起きれば？」

「起きたら…苦勞しねえっつのお…！ゲエ。」

「あれま。」

無理矢理起きようとするとするも、再び床とキスをする羽目になる恭田。

「ま、影薄のことはどうでもいいや。」

「…ひどい。」

うつ伏せになりながら涙声を上げる恭田。しかし今の体勢では滑稽の他ならない。

「そんで？アルス大丈夫か？」

龍二が剣を支えにしているアルスの下へと歩み寄ろうとして足を踏み出す。

「！？リュウジ、ダメ！！」

『かあっつ…！！…！』

【ボオン！！】

ファイファイが叫ぶと同時に、ドアに潰されたと思われていた紅左衛門の音が轟いて押し掛かっていたドアが爆発した。

「およよ?」

飛んできた破片を普通にヒョイと体をわずかに横にずらして避ける龍一。

やがて、部屋の隅まで吹き飛ばされていた紅左衛門が、より炎を燃え上がらせつつユラリと立ち上がった。

『おのれえ…ふざけた真似をしおってからにいい…。』

「?何だこの妙ちくりんな火?」

紅左衛門の姿を見て龍一は首を傾げた。漆黒の炎を見て“妙ちくりんな火”という一言で済ますこいつは大物か。いや、もうすでに色んな意味で大物だ。

「リ…リュウジさん…そいつは…。」

「おいおい、無茶すんなアルス。」

必死になって立ち上がって剣を構えようとするアルスを制する龍一。

「で、でも…。」

「わあってるって、こいつ敵だろ?見りゃわかる。」

どこか投げ槍な感じで言う龍一には、まったく緊張感がない。

「そんでえ?アンタ誰?」

『貴様…我を見て恐怖を抱かぬのか?』

「いやだから聞いてんじゃんか誰って。日本語理解しろよこの全身マッチ棒。」



『なっ!?!?』

あまりの光景に声さえ出せない紅左衛門。

『…ふう、相変わらず化け物じみてるな貴様。』

「それさつきも聞いた。」

驚く紅左衛門に対し、何もなかったかのように悠々と会話する龍二とエル。

『……………き、き、き、き…。』

「木?」

動揺する紅左衛門と、激しく間違っている龍二。

『き、貴様…化け物か!?!?』

「いやだからそれ今エルが言ったから。」

普通にあの炎息だけで消す奴見て化け物って思わない奴は世間一般ではないよ絶対?

「ふむ……………ま、いつか。」

【シャリン】

何に納得したのか、腰からエルを引き抜く龍二。そして切っ先を下に下げる。

「じゃとりあえず、アルス達はポツコポコにされて再起不能なん  
で、



俺が相手してやるか。」

【チヤ】

手首を返し、エルの刃を紅左衛門へと向ける。

『……クククク……そうか……ならば、貴様にはこいつらの相手を  
してもらおうか!』

そして紅左衛門は手にした刀を頭上に掲げる。

『我の下に集え、怨みし悪鬼どもよ!』

紅左衛門が声高に叫び、周囲から漆黒の霧のような物が吹き出してきた。

「!?!? まずい、怨霊どもを呼ぶ気じゃ……!」

起き上がった日暮は、真言を唱えるべく手で印を形作る。しかし、  
明らか紅左衛門の方が速い。

やがて霧の中から怨霊が現れてくる……

はずだった。

「……な、何!?!」

予想外の出来事が起き、さらに驚愕する紅左衛門。

「な、何故だ!?!何故霊どもが集まってこない!?!我の呼びかけに  
応じないはずが…!」

「食った。」

「……は?」

遮るかのように言った龍二に、思わず素っ頓狂な声を上げる紅左衛  
門。

「…え?」

紅左衛門だけでなく、アルス達も目が点。

「だからあ、霊食った。」

「食ったあ!?!?!?」

紅左衛門、キャラを壊すかのように叫ぶ。そりゃ悪霊食つ奴なんて  
前代未聞だしね。つか人間じゃないよね。

「あ、ダイジヨブダイジヨブ。まずかったから。」

「何が大丈夫なのだ一体!?!」

紅左衛門はツツコミキャラと化した。無理ないです。

『つてホントに食ったのか、うぬは…!?!』  
「イエス。」

即答だった。

「ま、いいじゃんそゆことは。さっさと始めようぜ。」  
『…お、おのれ…。』

構えらしい構えを取らず、仁王立ちのままエルを持つ龍二。紅左衛門は悔しげに呟き、炎をさらに燃やす。

『ならば…今宵の最初の生贄は、貴様にしてやぐげ!?!』

言いかけたところを一瞬にして接近した龍二の左フックが紅左衛門の右頬に命中、首を90°に曲げつつ回転かつバウンドしながら吹っ飛んだ。

『ぐ、があ…な、何故我に触れられる…。』  
「俺だから。」

すっげえ理不尽。

「ま、ともかく先手必勝。『崩龍滅碎』。』

そしてすぐさまエルを突き出しつつ突進。同時に地面を衝撃波が走る。

『おのれえ…甘いわあ!?!』

しかし、フッと消えて龍二の攻撃を避ける紅左衛門。攻撃は空を切り、一瞬無防備になる龍二。

『死ね!』

そしてその隙に大上段からの一撃をお見舞いする紅左衛門。

【ガイン!】

『ちい…。』

「ふふん」

しかし、その強烈な攻撃を軽く受けて龍二は罅迫り合いへと持ち込んだ。

『…やはり、我が結界に普通に侵入できただけあふべ!』

言いかけたところを龍二のヤクザキックが綺麗に命中、“く”の字の形をしながら吹っ飛ぶ紅左衛門。

『く、こしゃくな真似をおおおおお!』

そして怒り狂いながらすぐさま空中で体勢を整える。

『オンアビラウンキャンシヤラクはべえ!』

刀印を結ぼうとした紅左衛門に、龍二が蹴り飛ばした机が炸裂。粉々に砕け散る机。きりもみ回転しながらまた吹き飛ぶ。

『手加減しないな、貴様……。』

「これでも加減はしてんだけどなあ。」

呆れるように言うエルと、頭をポリポリかく龍二。

「ま、いいか。そろそろあれ使っべ。」

『あれ、とな？』

【キン】

龍二はエルを鞘に収め、右手の拳を左手の掌にパン、と打ちつける。

『う、ぐおおおお……。』

かなりダメージを食らっているため、起き上がるのに一苦労している紅左衛門。龍二はその間に右手を抱え込むように構え、氣を集中させる。

「そんじゃ行くぞー。作者がお昼にパスタ茹でてる時偶然思いついた技。」

こら、そんなこと暴露すな。

「……龍空弾りゅうくうだん。」

【ドォーンー！】



その場で一回転し、エルで横薙ぎをする。

するとそこから剣閃が生まれ、高速で飛んでゆく二つの衝撃波。この技は、見た目は一回転したかのように見えるが実は光速の速さで二回転し、剣圧を飛ばす技。やはり『いいも』との関連性はゼロ。

『な、にい!?!?』

飛んでくる衝撃波に戸惑いながらも、刀を振るうことで弾き飛ばす紅左衛門。

【ドドオオオオオオン!!!】

…その結果、天井に大穴が開き、そこから雨が降り注ぐ。

因みに、今いる職員室は一階。この校舎は三階建て。

つまり、三階の天井ごと吹き飛ばしたわけとなる。

『こ、この…規格外の化け物め!』

「だから聞いたってそれ。つかそんな体のお前に言われたら世界の破滅じゃね?」

一理あるけど、それ言いすぎじゃね?

『クソ!』

忌々しげに眩き、宙を浮く紅左衛門。そして両の腕の炎を燃え上がらせ、高く掲げる。

『覚悟しろ！この場にいる者全員焼き殺してやべぼ！？』

言いかけたところを、龍二が瞬速で紅左衛門の背後の壁を蹴って飛び上がって背中に飛び蹴り、素敵なエビ反りになりながら吹き飛ばす。

『お、おのれはびよ！？』

体勢を立て直した瞬間、今度は高く飛び上がって天井を蹴って頭から突っ込んできた龍二のロケット頭突きが素晴らしい音を立てながら炸裂、さらに吹き飛んで机やらを破壊する紅左衛門。

頭突きをきめた後、片手を床についてその場で跳躍し、華麗に立ち上がる龍二。息切れなんてまったくしていない。

「オッサン弱いぞー。しつかりしろよ。」

『う…おおおおおお…』

龍二の挑発に、痛みのせいしか呻くだけで全く反応することができない様子…

『……………かあああああ！！』

…ではなく、急に起き上がって刀を投げ飛ばす。



「おっと。」

龍二も負けじと投げ飛ばした。

エルを。

『り、リュウジ貴様あああああああ！！！』

まさか投げ飛ばされるとは思ってなかったエルは悲痛な叫びを上げ…

【ガイイン！！】

『あつっ！』

相手の刀とぶつかり合った。

紅左衛門の刀は砕け散り、エルは空中で回転しながら龍二から離れた位置に突き刺さった。

『クハハハハ！武器を手放したな！素手ならば負けはせんぞ！』

高笑いしながら、新たな刀を生成する紅左衛門。便利な能力である。

「…ん…。」

ふと顎に手を添えて考える龍二。お前素手でも十分戦えるんじゃない？

「……まあ問題はないけどなあ……かと言って普通に肉弾戦行つのはメンドイし……。」

おいおい。

「……………あ。」

何かを思いついたかのように、龍二はパチンと指を鳴らした。

「よし、あれやってみつか。」

そういうなり、合掌するように手を合わせ、足を肩幅まで広げる龍二。また新技？

「……キョウ、悪いけど使わせてもらっぞ。」

?キョウ?……………

!!?????て、それはああああああああ!!?!?!?!

「……『龍気功』。」

龍二の周囲に五つの青く輝く野球ボールサイズの球体が現れる……つてコラああああああ!!?!?!何してんだお前!!!

(いや、いつペンやってみたいくて。) テレパシーです

パクるな!! 謝れ! 鐵 迅渡先生に謝れ!!

(やっちゃったもんはしゃーなんじゃね?) テレパシーです

やかましゃあああああ!!

「さ、行くぜ。」

無視かよ!?

……もうええわ、後で俺が謝っとく。

「『龍氣弾』。」

氣弾の一つを紅左衛門に向けて飛ばす。

【ドオン!】

『クハハ! そんな遅い物当るか!』

しかし急上昇でかわされ、今度はあつちから炎が発射される。

「ほいっと。」

【ゴオオオ!】

それを軽く避け、龍二がいた場所からは黒い炎が燃え上がる。

「もいっちょ。」

さらに氣弾を飛ばす。

『何度も言わせるな！そんな遅い物当るわけはびよー！』

フエイントの氣弾に騙され、龍二のジャンピングアッパーが炸裂、天井にぶち当ってバウンドし、床でもバウンドしてさらに天井でバウンド。

「ほいチャンス『龍閃双脚』！！」

『！？』

一瞬にして間合いを詰め、目にも留まらぬ速さの右足蹴りを繰り出す龍二。それを身を捻って回避する紅左衛門の横で、今度は左足蹴りが通る。

【トトトトン！！！！】

さらに壁に穴が開き、風と共に雨の水が入り込んできた。まあ、ここまででは先程の龍空弾と同じ光景である。

違うのは、開いた穴の淵のところどころに無数の靴跡が付いていることだった。

『…今の、ただの蹴りではない、な…。』

「おう、一応な。」  
『……………』

『龍閃双脚』。これは音速を超える速さで左右それぞれの足から二億発という蹴りを繰り出す技である。

あまりに桁違いの強さを延々見せつけられ、紅左衛門はいい加減まわってきたようすでへたり込む。

『…う…うぬは、ホントに人間か？』

「はいはい、どうせ化け物だよ俺は。」

どこか投げ槍な感じで言う龍二は、頭をポリポリとかく。

「やっつと…

遊ぶのやめてそろそろ消えてもらうか。」

『!?!?な…!?!?』

【ヒュン、パシィ】

龍二は周囲から気功球を消すと、懐から取り出した長いタオルを突き刺さっているエルに向けて投げつけた。するとタオルはエルの柄に巻きつき、勢いよく引つ張ると龍二の手元に戻る。そんなんできたんかお前。

『…貴様、怨むぞ。』

「わりわり。」

さっき投げられたのを根に持つてるのか、恨みがましく言うエル。結構ダメージでかかったようぞ。

『ま、まさかうぬ、今まで本気で来てなかったというか!?!』  
「そりゃそうだろ。俺が本気出したら…あ、やっぱ言うのをやめるわ。言ったら言ったでまた対抗しようとしてくる連中増えるし。」

失礼極まりない。

「まあこれだけは言うけどな。」

軽く一瞬で終わらせるより、手加減してジワジワと精神的にも肉体的にも痛めつけてやる方がいいだろ ム力つく奴には」

ニッコー という擬音が付きそうなくらい晴れやかな笑みを浮かべる龍二。それを見て、体の炎の勢いが弱くなってくる紅左衛門。怯えている、と見ていいだろうと思う。

『な、あ……。』

「それじゃ最期の言葉…は言わせないとして………いくぞ、エル。」

『了解。』

へたり込んでる紅左衛門へ間合いを詰め…

「せい!!--」

【ズガアアーン!!--】

『ぐぶぶう!!--!!--』



やがてエルが一際大きく輝き、轟音と共に辺りを光で覆いつくす。

光が晴れると同時に目に飛び込んできたのは、龍二の頭上にある、白く輝き放電し、紅く燃え盛る炎が周囲を螺旋を描くかのように渦巻いている巨大な槍であった、

「な…何じゃ、これは…。」

目の前のあまりに非現実的かつ神々しいまでの光景の前に、雅達と傍観していた日暮は思わず呟く。雅達に関しては、もはや言葉さえもない。

『あ…あれは一体…何なのだ…』

遙か上空、かなりの高度からでも確認できる程光輝く槍を見て、紅左衛門は硬直した。

その硬直は、紛れもなき恐怖…これから自分の身に何が起こるか、予想できてるからこそ感じるものであった。

…同時に、一つの疑問が生まれる。

気功術、というのは、読んで字の如し、自らの気力を消費してこそ成せる術。人間にとって気力は動力源であり、これがなければ生きる屍と同じ。それゆえ、より強力な技など放てばその分消費する気力は激しいはず。



にも関わらず、龍二は何発も、さらには今のような強力な技を放っているのに全く気力を消費する気配がない。むしろ、さらに増えている気がする。おまけに、先程の『龍閃双脚』は下手すれば足の筋肉がバラバラになることは必須。普通の人間ならばありえないことばかりである。

そう、“普通の人間”ならば、の話。

『!?ま、まさか……うぬは!』

何かを思い出したかのように叫ぶ紅左衛門。

しかし、それは最後まで言えることはなかった。

「そんじゃあ……消えな。」

冷たく言い放ち、エルの刃を返して上空にいる紅左衛門めがけて振り下ろす。



「うわぁ!!!!」

「くぅ!!!!」

遙か上空で爆発し、白く明滅した。その爆風は、地上にまで及んで周囲を揺らす。

雅達は顔を覆って爆風に耐え、龍一は一人、エルを振り下ろした体勢のまま動かない。

【オオオオオオオ………】

やがて風は止み、再び静寂が訪れた。

「……………」

まず最初に腕を降ろしたのは雅。

もはや職員室の面影はなく、とゆーより校舎は半壊していた。天井も消え失せている。

そして、空を覆っていた雨雲は爆風によって綺麗サツパリ消え去り、夜空には星が瞬いていた…。

「…………ま、【ピーーーーーー】分の一ならこんなもんだろ。」

そしてまた敵を作りそうな発言をして構えを解いた龍二であった…。

（校舎外）

【ズ〜ルズ〜ルズ〜ル】

「……………」。

「ふう…こいつらまた体重増えたかな？」

【ズ〜ルズ〜ルズ〜ル】

「……………」。

「?どしたお前ら黙り込んで。」

「リユウジさん…………」

二人はケガ人なんですから丁寧に扱ってあげないとまずいんじゃないか…。

「

「無問題。」  
もつまんだい

「いやダメだろ。」

紅左衛門が消え、結界が解かれた校舎から外に出て龍二達は暗い雑木林のぬかるんだ道を歩いている。

そして龍二の両手には、気絶している香苗と花鈴の襟が握られていた。当然、二人は目覚めない上に泥まみれ。そんな龍二に真冬に食べるカキ氷並(?)に冷ややかなツツコミを入れる雅。

「にしてもよお…俺、今回のこと夢に出そうだ…。」

「まったくだ…もうあたしはこんなことこりごりだ。」

【コクリ】

「はあ…。」

「ふう…。」

上から恭田、久美、リリアン、ステイル、ロウ兄弟。皆揃って疲労の色が見えている。

まあ、術食らって地べたにべったりくっ付いてたから無理もないね。

「…ところでヒグラシ?」

「?何じゃ?」

先頭を歩く日暮に、フィフィが声をかけた。

「あの…ベニザエモンって奴、一体何者だったの?あんた知ってたみたいけど。」

「ああ…あ奴か。」

やられたのを思い出したのか、若干苦笑しながら言う。

「あの者は大昔：まあ平安時代辺りじゃな。名のある陰陽道の一族だったんじゃが、どうも野心が人一倍強い男だったみたいでのお。

不老不死になるために己の体に悪霊を降ろし、結果肉体は失い、拳句はあの校舎が建つ前にあつた墓場に我が先祖によつて魂を封印されておつたんじゃが：校舎が建つて墓場が無くなり、封印の力が弱くなつたみたいでのお。」

「ふ、不老不死…。」

「そ。じゃがまあ、それを維持するために生贄を必要としておつたらしくてな。ワシはそれを調査するためにここに来たつてわけじゃ。」

「

…哀れな男…。」

「自業自得じゃ。」

そんな会話をしながら、雑木林を抜け、龍二達は校門前で立ち止まった。

「さて、と…おお、そうじゃお主らに言つておかねばらんことがある。」

「?」

日暮は龍二達に振り返つた。

「もうあの校舎には近づくとでないぞ？悪霊どもの気配は消えたとはいえ、あそこは負の念が強いからのお。」

「…?」

クルルが首をかしげた。因みに頬に龍二が貼った絆創膏がついてる。

「あの場に留まっておったら、そのうちネガティブでイラつくくらい内向的な性格になるという意味じゃ。わかったか？」

「はい。」

「魔王、授業じゃないんだから……。」

元気一杯なクルルに対し、満身創痍状態のアルス。頭に包帯を巻いているので、一番重傷であった。因みに日暮はちよつと足をすりむいた程度。

「うむ……それと……。」

「？」

そして日暮は、両手に香苗と花鈴の襟を掴んでいる龍二へと目を向ける。

「……お主、龍二じゃったな？」

「おうよ。自己紹介まだしてないのによくわかったな？」

「アルスらがお主の名前を呼んでおったし、第一お主のことをこの学校で知らん者はおらんじゃろうが。」

そりゃそうか。

「……それより……お主は……。」

「あ？」

「……………」

言いかけ、躊躇うかのような表情になる日暮。

「……………いや、やはり何でもない。」

「何じゃそりゃ。」

「…ま、ともかくお主らには色々助けられたからの。礼を言っておくぞ。」

「い、いえ。ボクらもヒグラシさんがいなければどうなるかわかりませんでしたし…こちらこそありがとございました。」

皆を代表するかのようには頭を下げるアルス。他の皆も頭を下げるが、龍二だけは首を傾げた。

「うむ…ではな。またいつか会うじやろう。」

「そりゃ隣のクラスだったらな。」

「…ムードをぶち壊すでないわ…。」

龍二に呆れたようにツッコミを入れる日暮であった。

「…まあよいわ。ではな。」

【シャリン】

踵を返し、錫杖の音を鳴らしながら濡れた暗い夜道を歩いていく日暮。

やがて街灯の明かりの下を通り過ぎ、暗闇にまぎれていった。

「…にしても、隣のクラスに陰陽師やってる人がいるとはなあ…。」

「ああ…可愛いし。」

「関係ないだろ影薄。」



「ひ、ひどいぜ久美…。」

「いやでも、魔王様を脅かしていた輩は全員消え去ったみたいでよかったです。」

「…まあ、僕でもいやだからなああいうのは。」

「…魔族って幽霊苦手なんですか？」

「…さあ…？」

雅達は校舎から出れて緊張がほぐれたのか、先程より和やかに会話する。

そんな中、龍二はまた首を傾げた。

「…つかあいつは何が聞きたかったのやら…？」

『さあ…わからん…。』

「もういいじゃない、終わったことでしょ？」

「…………だな、気ニシナイでおくか。」

フィフィに言われ、やがて日暮が聞きたかったことなど頭から投げ捨てるかのように忘れた龍二とエルであった。

「…ところで…龍二、大丈夫だった…？」

「は？」

リリアンが龍二に声をかけた。

「あ！そうですよリュウジさん！大丈夫でした！？」

「心配したんだよ〜！？あの時計が鳴った後、リュウくんどこにもいないから〜！」

「どこ行ってたのよホントに……。」

皆が問い詰める中、龍二はキョトンとした表情になった。

「ズリッて……」

“便所”行つてたんだよ。」

『……………』

は？。』

長い沈黙の後、全員見事のハモった。

「いやだからあ、便所。行く前に言つたんだが聞いてなかったのか？。」

『いや、多分時計の音と言つたの同時だったから聞こえてなかったと思つぞ？。』

「ありやま、そつなのか？。」

『……………』



よかったけど…。

「……なあ、ものっそ寝にくいから一階で寝ろよお前ら」

「「や。」

「「ありま。」

その晩、龍二は恐がりのアルスとクルルに左右から抱きつかれる形で就寝したそうなの…。

朝には二人ともベッドから蹴落とされたけど。

第一百十六の話 龍二、久々大暴れ！（後書き）

ってなわけで、ホラー編は完結です！

今回の長編を書きたかった理由は…ずばり、あいつの秘密がチラリ！  
“あいつ”って誰のことかわかります？勘の鋭い方々なら分かるはずです。

まあ、ホラーに挑戦してみよっかなあ的なこともありましたけど。

それと…迅渡さん、ごめんなさい。責任とって腹切りをおおおお  
おお！！（殴）

…いやホントすみませんでした。

鐵 迅渡先生の『そんなのって有りですか！？』をよろしく！！

…ちゃっかり宣伝して責任取ります。

えっと気を取り直し…次回からは普通の日常

の、前に番外編です それでは！！

## 第一百七十七の話 ちよいと回想（前書き）

このお話は、長編でアルス達の前から消えてどこで何をしていたか謎だった龍二の回想です。何で消えたかこれで明らかに！！

## 第一百七十七話 ちよいと回想

（龍二視点）

さて、何も無かったわけじゃないけど、それらしいのが無かったっぼいのでとっとと撤退しよっかな。

とか思ってたら……。

「……ん？」

『？リュウジ？どうしたのだ？』

「……………」

ふと足を止める。皆が離れていく中、俺は体の奥底から感じていた。

……………「っ、これ、は……………」。

「……………」

『……はっ？』

やつべ〜マジでやつべ〜来る前に飲んだミルクティーが今効いてきたなあ眠気覚ましに紅茶飲んだつもりだったんだけどまさかこんなところでこんなことになるなんて思ってもなかふおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！

「エル！便所行くぞ！」

『え、ええ！？ちょ、ちよつと！？』

あ、行く前に皆に言っておかねえと！

【カチ】

「わ【ボーン ボーン ボーン ボーン ボーン】！！！」

おしオツケー！！

『いやちよつと待て今時計の音で何言ってるのかわからな』

「Bダツシユ！！！！」

赤帽子かぶった髭の配管工のように！！

『つてこらちよつと待てつてはやああああああああああああああああああああああ！！！？？』

俺は元来た道なるべく加減して走りだす。全力疾走なんてしたらその時に生まれる風で校舎が吹き飛びかねん。

それでも俺は、車を追い越すスピードで走る、目的達成のために風になる！！



『りりりりリユウジいいいい！！貴様どこへ行く気だあああああ  
ああああ！！！？！？』

「だあかあらあ便所おおおおおおおおお！！……！」

(＊お食事中の皆様、ごめんなさい by 作者)

やばいぜやばいぜこれはやばいぜー！！こりゃ限界だぜー！！  
！！

……ただ、問題としてはここに来たのは初めてであって、トイレの  
場所がさっぱりわからん。いやこりゃまいったまいった盲点。

んだがしかー！！し！俺のこの勘がありゃそんなもん！

「よし三階行くぞ三階！！」

『はあ！？何故三階なのだ！？一階のでいいだろう！？』

「いやただ何となく！」

何か一階と二階のトイレより三階のトイレの方がきれいなような気  
がしたから！確証はナッシン！！

つーわけで、直勘で階段の居場所を探り当ててレッツゴー！さっき  
から何か時計の音が鳴り響いておるけど気ニシナイ！！

【バキイ！！】

…あれ？今何か魔王っぽい雰囲気した女蹴っ飛ばしたような気が？

………気のせいかな。

まあともかく、校舎の奥にある上へ続く階段発見、速攻で駆け上がって三階へ！

いやもう駆け上がるのもメンドイし、一階の踊り場からジャンプして三階へ到着。

「え、便所は………。」

グルリと見回して………

あった！階段から離れた場所にあるドアの上に“男子トイレ”と書かれた札！！

「皆の衆！突撃じゃああああああ！！！」

『いやちよと待て皆の衆って私しかないってとゆるかそれより私は女だああああああああ！！！！！！』

エルが何か叫んだけど俺は気ニシナイってな感じでトイレの扉を破壊して突入じゃああああ！！！！！！

【しばらくお待ちください】

「はあ~~~~~めっちゃスッキリ~~~~~」

水道が無いから持ってきていた水筒の水を手にかけて洗い、ハンカチで拭く。今の俺は空を飛べる気分だった。いやマジでリアルに。

いんやあにしてもスツゲエスツキリしたぜもう最高〜

『……………』

…？ってあれま？何かエルからものっそい負の感情が出てきとんな。

『…私は女なのに…何故男のトイレに…いやでも今の私は剣だから性別は…いやいやでも中身は女だし…何なら未知の体験をしたという風に割り切れれば…いやそれでもしかし…』

う〜わ〜何かブツブツ言ってるし〜。捨てて〜こいつ捨てて〜。

「おい、気持ち悪いぞお前。」

『す、すまん…ってそれ傷つくって。』

「あえて傷つけてる。」

『…ひどい。』

うんわかつてる。

さあって、そんじゃ皆んとこ戻るか。いつの間にか時計の音も止ん

でるし。

『…！リュウジ、ちょっと待て。』  
「んあ？」

腰からエルが呼び止める。何でや？

『…感じないか？』  
「何を？」

何かこいついつになく真剣な声色で。

アハハハハハハハハハハ！！  
キヤハハハハハハハハハハ！！

つておよよよ？何か床から壁から白い煙みたいなのが。

『…全く、今頃気付いたか…鈍感め。』  
「むか！失礼な。」  
『…“むか”を口で言うか普通？』  
「これが俺の普通なんよ。」  
『…そ、そうか…。』

つかこんなコント繰り広げてる間に何か白い煙みたいなのドンドン集まってきてせつまいトイレに密集してきてるし。定員オーバーじ

や何人が出て行け。

アソボウ、アソボウ！

コンヤハアソボウ！

「今忙しいからあーとーでー。」

『そんな友達が遊びに来たのを追い返すみたいにな…。』

こいつ最近ツツコミうまくなってきてねえか？剣のくせにテレビ見  
てるからか。目無えけど。

キャハハハハハハハハハハ！！

キヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！！

うーん、こうしてる間にも何かどんどん迫ってきてるし。俺トイレ  
の壁際まで追い詰められてるし。

『…リュウジ、どうするのだ？』

「は？んなの決まってるじゃんよ？」

どうせこいつら香苗が言った幽霊だろ？だったら…。

「ちょっと遊んでやるつか」

『やはりか…。』

当然

つてなわけです…

「ほい。」

【バシユ！】

一番手前にいた幽霊の体を両断するかのように手刀（氣無し）で薙ぎ払うと、声も上げずに四散していった。

？何で触れるのか？そりゃあれだ、俺だからだ。

「ん。」

【シュパァン！】

そしてまた接近してきた三匹の幽霊を回し蹴り（氣無し）で作利出したカマイタチで消し去り、

「よいせ。」

【ビシユウ！ドゴン！！】

正面の幽霊に正拳突き（氣無し）かましてその直線状にいた奴らもろとも拳圧で吹き飛ばす。あ、壁もフツ飛ばしちまった。

よしよし、今ので大分減ってきたな。

『…貴様、今の突きで三十匹は倒したぞ…。』

「あ、そう？数なんて数えてねえからわかんね。」



「いやさ、こつちの方が念仏より簡単じゃん？」

『ね、ネンブツ……？』

「気ニシナイ。」

いや、念仏なんて知らねえし。ナンミヨくホくレンゲくキヨくぐら  
いしか知らねえし。

だったら口撃くちげきの方が楽っしょ？色々。

キヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！

ヒビヒビヒビヒビヒビヒビ！！

あ、何匹か生き残ってんなあ。やっぱもうちょい大きな声で言った  
方がよかったか？

『リュウジ、また来るぞ！』

「……………」

近づいてくる幽霊を見て、ふと思い出した。

こないだ偶然本屋で見つけたホラー小説、タイトルがなかなか興味  
深かったから思わず買っちゃったんだが……………。

「……なあエル？」

『？何だ？』







〜数分後〜

「ゴチでした〜。」

偶然持ってきていた爪楊枝で歯の間を磨く。周囲にいた幽霊は全て片付けた。

う〜ん、にしても無味無臭でまずかったなあ…醤油持ってきてくりゃよかった。

『……………リュウジ。』

「あ?」

腰からエルが話しかける。何かものっそ恐がってる気がしてならない。

『…貴様ホント人間?』

「イエス。一応。」

『一応!?!』

「時々化け物って皆言うから。」

『……………そうか……………。』

それっきり黙りこんでしまったエル。わーけわからんわーけわからん。ま、別にいいや。

「さ、ともかく皆んとこ戻るぞ。アルスらが心配だ。」

『…そう、だな。』

曖昧な返事をするエルはまあいいとして、トイレから廊下に出る俺達。さっさと一階に戻るとするか。

【ヒヨン！】

「??おっと。」

何か横切ったので反射的に身を翻す。

で、いきなし目に飛び込んできたのは…。

「?誰だお前ら?」

「……。」

真つ黒ローブに骸骨の仮面付けて手に何故か真つ赤つかな鎌持った悪趣味野郎が立っていた。俗に言う死神って奴?

で、後ろにはヴァンパイアみたいな格好した奴と悪魔みたいな…悪魔?まいいか。悪魔と雪女と首なっがい女がおった。うゝわゝコスプレ妖怪大戦争?でもこれアルスとクルル見たら間違いなく卒倒するね。本人達いねえけど。

…っつかさ、ちょっと待てや。何でお前ら武器持ってるの?悪魔は長剣持ってるのはまあいいとして、ヴァンパイアよ、お前何で槍持っちゃってるの?そこはサーベルとかだろオイ。首長女は俗に言うガントレットみたいな腕に付けて構えてるし、雪女なんてものごっつでっけえ大剣肩に担いでるし。

よし、この一言で行こう。

「ミスマッチ過ぎだろ。」

『同感だ。』

死神と悪魔だけじゃんまともなもの。他何なん一体？雪女って儂いイメージあんだけど俺？これきっかけにそんなイメージ崩れたね。見事に。

まあそんならどうだっついていいか。

「…そんで？何か俺に用か？」

「……………」

無言、全員それぞれ武器を構えた。

…俺とやろっつてか。何か怨み買った俺って？

「…はあ…めんどいなあオイ。」

頭をポリポリ…まったく。

【ゴウー！】

つと、油断してる間に首長女が間合いを詰めてきた。ガントレット見りゃわかるけど、格闘戦かあ…。

ま、いいや。とりあえず適当にストレートパンチ。

【ビシィー！】

…ってありやいや、受け止められた。うん、適当に放った突きと  
はいえ、見事な受け。こいつはカウンター主体ってわけだ。

しかあゝし……

「甘いわ。」

【ゴキバキィー！】

相手が行動に移る寸前にこっちの腕を絡ませて相手の腕をグキリと  
折ってガントレットを指パッチンで破壊、そしてなっがい首をガシ  
つと掴む。

【ギユルギユルギユルギユル！】

そしてグルグルと…

【ギユウー！】

自分の体に巻きつけて縛ってやった。見た感じ背中から首出てるみ  
たいでおもしろい。

「せい。」

【ボゴォー！】

で、とどめつつーわけで倒れた首長女の顔面を殴りつけて背後に蹴り飛ばしておいた。簀巻き状態のままおもしろい感じに転がっていた。

はいまず一人目っと。

【ブォン！！】

「おっと。」

【ガキーン！！】

今度は雪女かぁ…重い一撃を大上段から繰り出してきたんで、それをエルで受ける。

うーん、筋は悪くないな。将来有望だ。

でもお……

「まだまだだな。」

スっと大剣をつまむように持って…

【バギィ！】

軽くへし折った。

「ほいっと。」

【ゴス！！】

すかさずヤクザキックを放つ。足は腹にめり込んだまま、雪女はくず折れた。これで二人目だな。

つと、今度は悪魔が剣持って突っ込んできたなあ。じゃこいつも軽く…。

【ズバババババ！！】

「っておよよ？」

悪魔の背後から、俺に向かって銀色の雷が迸ってきた。あれか、ヴァンパイアか。

雷は容赦なく、俺に襲い掛かってきて…

悪魔が長剣で突きを繰り出そうとしてきた。ナイスコンビネーション。

【ガキイン！！】

「！？」

「甘い甘い。」





さて、これで残るは…。

「お前か死神。」

「……。」

うっん、喋らないねえこいつ。

【ダッ！】

おっと突っ込んできたか。振りかぶってきた血まみれの鎌をエルで迎いうっ。

【ガイーン！】

ほほお、こりやなかなかの腕力：力に負けた鎌が粉々になっちまった。こりや連中の中で一番の実力者だな。

【ビューン！】

「ほい。」

【バシィー！】

今度は繰り出されてきた右拳を軽く受け流す…ってこの拳、気が込められてんな。気功術の使い手と見た。

それから次々と繰り出される突きやら蹴りやら…何かどころなく俺と似たようなもんが多いなあ。

「よつと。」

【ガァン!!】

一瞬の隙をついて、ジャンプして相手の後頭部を宙返りしながら蹴り飛ばした。

膝を折って着地し、振り返る…ありやべ、平然と立ってこつち振り返ってる。ダメージ全然ないねこりゃ。今の食らったら常人なら弾け飛ぶくらいじゃすまないってのに。

…つか今の感触は人の頭蹴った感じじゃねえな…龍鉄風みたいなもんか。

そしてまた怒涛の連撃を交わしつつ、ちよと考える。

こいつの技、やっぱ俺と似てんな。パクリ…じゃねえな、似てるけどれっきとしたオリジナルか。

まさかここまで似るとはな……………は！まさかこいつ、生き別れの双子の兄弟!？

『いや違つだろ。』

「わかつとるわ思考読むなバカ剣が。」

大体俺に生き別れの双子の兄弟なんざいねえっつーの。

うっん、確かに技似てるけど…大したことないなこいつ。

まあ実力がこんくらいならまだいいけどよお…もしかしてまだ本気出してないとか？まずは様子見の感じで。うん、おそろくそうだろうな。どことなく余裕そうだし。

いやにしても…本来、俺も暇がありゃこいつと戦ってみてもいいんだが…今暇じゃないしな。んでもって、飽きてきた。

それにいつこいつが本気を出して俺に突っ込んでくるかもわからんし。そうなたらまた時間余計に食うだろうしな。

「……………しゃーねえな。」

悪いけど、こいつらにはお引取り願うか。

それに、こいつと俺とでは決定的な違いがある。

「…よつと。」

【パシィ！】

繰り出されてきた拳を受け、相手の腕を引っ掴む。

「そおーれつとー！」

【ブオン！】

そのまま一気に一本背負いの要領で投げつける！

…ま、別に叩きつけるわけじゃないし、こいつ相手にはノーダメージだわな。現に今空中回転しつつ華麗に着地しようとしてるし。

ところがどっこい、狙いはダメージとかじゃないんだなこれが。

そして、こいつと俺との決定的な違いっつーのは…

「はいワープホール展開つと。」

【ヒュン…!】

作者権限を俺が使える、ということ。コメディー限定で。

着地地点にいきなり開いた虹色に輝く穴に、死神はなすすべもなくそのまま落ちていった。

「また暇がある時にな〜。」

手をヒラヒラと振る俺。怨むなよ？

で、最後にそこら辺を転がっている首長女と雪女の襟を掴んで穴に投げ入れ、悪魔とヴァンパイアに関しては蹴り落としてやった。外道？そんなん百も承知。

そしてワープホールを閉じ、その場に静寂が訪れた。

「さ、時間食っちゃった。」

『…結局、あいつらは何者だったのだ？』

「さあな。」

死神は第二の俺、みたいなもんだと考えりゃいいか…変な感じだがな。後は知らん。

まあとによりかくより、一階へと行くために先程通った階段から一気にジャンプ、ショートカットしてすぐ一階へ。

今一瞬、さつき走ってた時に蹴り飛ばしたような気がした魔王みたいな女を担いだ金髪で右耳だけドクロのピアスつけた中途半端に派手な野郎が横切った気がしたけど気ニシナイ。

「にしてもよ、皆大丈夫かね？」

『先程の奴らが、私達だけ襲ってきた奴らだけとはまずありえんだろう。アルス達のところにも出た可能性が高い。』

「悲鳴聞こえなかったし、皆外に出たんじゃね？」

【ゲシ！】

『……いや、何というか、私の勘だと閉じ込められたような気がするのだが……』

「閉じ込められた？」

テクテク歩きながら会話する俺たち。足元にいた上半身だけの変な奴は踏んでおいた。体灰色だったからビタミン剤置いといてやった。しっかり生きるよ（いや死んでるって by 作者）。

「…そついや気配さえしねえな。」  
『ああ。』

あの時計の音が鳴ってからどうも辺りの様子がおかしいんだよなあ…  
…何ツーが変な空気っていうのか何というか…。

『…どうも嫌な予感がする。急いだ方がいいのでは？』  
「うん…。」

アルスらも素人じゃねえから大丈夫だと思っけど…あ、あいつお化けダメだったっけ。一気に不安急上昇。

「…そだな。」

ま、とりあえず目的はアルス達と合流だな…

っつ。

「…っ。」

『…っ？っ？ウジ？』

ふと一つの部屋の前で立ち止まる俺。

部屋の扉の上には、“職員室”と書かれた古めかしい札。

『…びびったのだっ…』

「……………ん……………」

.....。

「…多分、あいつらここにいる。」

『え？何故わかるのだ？』

「勘。」

中から音はしないし、声もしない。

けど何か俺の頭ん中で警報鳴り響いてんだよね。ポーピーポーピーみたいなの？

「ま、入ってみりゃわかつたろ。」

『…あ、ああ。』

スライド式のドアに手をかけて左へとずら

【ガタガタ】

.....。

ドアに手をかけて左へとずら

【ガタガタガタガタ】

.....。

手をかけて左へとずら

【ガタガタガタガタガタガタガタ】

.....。

左へとずら





「つーのがお前らに会うまでの過程ってわけよ。」

「「「「……………」」」」」

茶の間でくつろぎながら、昨日俺にあったことをアルスらに話した。  
あ、花鈴も我が家に泊まったようなもんだから一緒に話を聞いていた。

「はいここまでで質問ある人ー？」

『ここは学校か。』

エル、ツツコミナイス。

「…あの、リュウジさん？」

「はいアルス。」

おずおずと手を挙げたアルス。もっとシヤキつと挙げんかい。

「…ホントに食べちゃったんですか？…お化け。」

「おうよ。」

『私も見た…。』

「…アンタ、化け物街道どこまで突っ走んのよ。」

空の彼方まで。何っつて。

「ま、いいじゃん。無事に会えたってことだし。」

「そ、そうだけど…。」

「……。」

んだよ齒切れ悪いなあクルルにフィフィ。何か不満か？

「あ、そうそうお前らに見せたいもんがあるんだわ。」

「「？」」「」

アルスとクルルの反応が見たくて持ってきたんだけどな。

「え〜つと………お、あつたあつた。」

懐をゴソゴソと漁って出てきたのは…。

「ほね。」

【ピラ】

お目当てのもんをアルスとクルルの前に出す。

「」  
.....

キユウ~~~~~。」「

パタリ。

「!?あ、アルス!？」

「クルルううう!!!」

見事に目え回して気絶した勇者と魔王。

そう、俺が二人に見せた物とは…

俺に襲い掛かってきた、あの死神達の写真(コッソリ撮つといた)だった。ポイントは何気にピースしてるヴァンパイアと悪魔。

第一百七十七話 ちよいと回想（後書き）

…消えた内容、トイレでした（笑

いてててて！誰！？今タンス投げたの！？角当ったよ！？

コホン…

え〜、聖なる写真さん、出ました。何か色々ごめんなさい。

聖なる写真先生の『神様と私』、どうぞよろしく！！

…宣伝して詫びます。

では、次回は日常編へと戻ります！ホラー長かった…。

第一百十八の話 ハイテンションでGOGOGO!! (前書き)

すっごく遅くなりました…理由は筋肉痛です。

ソーラン節を踊りすぎました。痛い…。

まあとによりかくより、今回は久しぶりにあの人を出します。サブ  
タイで想像できる人、あなたはスゲエです。

## 第一百十八の話 ハイテンションでG O G O O ! !

（アルス視点）

「リュウくん、チョコ買ってチョコ！」

「サクランボも！」

「家にストックがあるだろ？あれ無くなってからな。」

「「ええ〜！？」」

「文句あつか。」

「「無いっす。」」

…あ、どうもアルスです。只今商店街で龍二さん達とお買い物中です。ええ、晩御飯のおかずを買いに。因みにエルはお留守番です。リュウジさん曰く邪魔だそうです。エル、ちよつと泣いてました。

「にしても、やっぱり夕方だけに人が多いな。」

「ですね。」

周囲を見渡せば、買い物カゴを持った主婦に子連れのお母さんや家族連れの人達が多く賑わっている。この商店街のいつもの光景です。

「クルル〜？迷子になんないでよ〜？」

「ファイとアルスにだけは言われたくないよ〜。」

「「……………」」

…反論できません。 第一百七〜百十の話参照

「ははは、言うようになったじゃねえかクルル。」  
「え、そう？えへへ」

リュウジさんが頭を撫でると魔王は照れたように笑う……親子ですかあなた方は……

あ、いえ、そんな大して羨ましいとかそんなこと思ってなんかいないですよ？うん、全然……。

「あ、そうだ。晩飯まで時間あるし、最近できたばかりのクレープ屋行ってみつか。」

「はい」

「は、はい。」

「いいねえクレープ」

ここではないけど、一回食べたことがあります。おいしかったなあ、ココアクリームストロベリー……。

「ウフフ、クレープクレープ」

「おい、あんな先行くなよ。」

一人スキップしながら先を歩く魔王が、次の角を曲がろうとした。

「……………」

あれ？止まった。



「……………」

【ザザザザザザザザザザ！！】

そして何故かすぐにリュウジさんの背後にっって速っ！？一瞬だけど  
残像見えましたよ！？

「？おいクルル？」

「あわわわわわあああああ……………」

…すっかり怯えた様子の魔王はリュウジさんの服をギュッと握り締  
めていた。まあ魔王の弱点って結構あるけど、ここまで怯えるって  
いうのはちょっと珍しい。何だろう？

「Oh！ソコニオワスハドラゴン2コト龍ニジャンイデスカ！！」

……………

あう……………。

「およ？ミツチェルじゃん。久しぶり。」

「H A H A H A、ホント久シブリデース！！ソコノ金髪ビューチー

「ガール見夕瞬間モシヤト思ッタYO!」

「……………角から出てきたのは、いつぞやボクらに恐怖心と“超強烈”  
というイメージを与えて去っていったリュウジさんの友人さんでし  
た…。(第四十五の話参照)」

「何してんだこんなところで。」

「Oh!今日ハファミリー引ッ連ッレシヨッピングウゝ、YO!」

「何気に某女芸人のネタ入れたな。」

「H A H A H A、気ニシナイサ!」

「……………」

「いえ、あの、確かに前回はすごいインパクトが強すぎて、ボクらは  
呆気にとられました。」

「……………  
…なんですけど…今回はちょっと違うんです。なぜか…なぜか…  
……………」

「にしてもミッチェル、オメエ上の服どしたんよ?」

「……………上半身……………“裸”なんです……………」

「イヤゝ実ハアメリカへ里帰りシタツイデニジム行ッテサゝ コノ

ナイスボディヲ日本ノ方々ニ見テシンゼヨウト思ウタ所存デゴザツ  
テ。」

「なるほど、だから前よりマッチョになったわけだ。」

えと……一番の違いは、前会った時より筋肉がついてかなり引き締  
まってる体になってます…後なぜか全体的に光ってます…

あ、違った。照かっています……。

「うううううう……。」

……傍らでリュウジさんの服を皺がでるくらい握り怯えてるのは  
魔王呻いてるのも魔王……。

でもここは逃げちゃダメな気がする…失礼だし…と、とにかく何か  
話さなければ！

「え、え〜と…お、お久しぶりです、ミツチエルさん…。」

「Oh!ワンダフルビューチフォーグリーンボーイガール!…!」

ちよと待ってください今“ボーイ”入ってましたよね?ボーイって  
少年ですよね?ガールだけでいいですって。後長すぎです名前。

…というツツコミは徹底的に飲み込みます、はい。

「え、えと…お、お元気でしたか?」

…何故か答えずに無言で謎のポーズをとった。

「あ、あの…お、お元気でしたか？」

また無言で別のポーズをとった。

「で、ですから…お元気でしたか？」

…さらにポーズをとった。無言で…。

「……………」

結局話そうにも話せなくなりました。

そんなボクに対し、ミツチエルさんはさらにポーズをとり続ける。

【ムキ】

……………。

【ムキムキ】

……………。

【ムキムキムキ】





.....  
ミツチエルさんは女の人に光り輝く頭を驚づかみにされて引きずられて行ってしまいました……。

「……た……助かったにや……。」  
「は……ふう……。」

魔王はリュウジさんの背中から離れ、フィフィはいつの間に入っていたのかリュウジさんの髪から出てきた。苦労したのボクだけじゃないですか……逃げればよかったです……。

「相変わらず豪快な嫁さんだな。」

一人冷静に鼻をほじりながら離れていくミツチエルさん達を見つめるリュウジさん……冷静？

「…………！……？……つて！……？……あの女の人ってあの人の奥さんなんですか！……？」

「ん？ああそつだぞ？言つてなかつたっけ？」

初耳です！

「……でもあの人、あの細い腕で大きな体引きずつてたよね？」  
「すごいね……。」

「まあな。一時俺、あの子の師匠やってたし。」

……！？

「し、師匠！？」

「おう。つつても高一の時だけだな。目の前で必死に土下座された。

「

……そりゃ力強いはずですよ……。

「……でもリュウジに気付いてなかったようだけど？」

「ミツチエルしか見てなかったからじゃね？」

……。

「さ、ともかくクレープ屋行くぞ。」

「」「」……。「」「」

……。

「……あの、リュウジさん？」

「んあ？」

「……。

「……。

「……。

「……。

「……いえ、やっぱり何でもないです……。」

「……そうか。」

……

一度リュウジさんに頭を思いっきり叩いてもらって今の記憶を消し



去るつと思いましたけど、リュウジさんの思いっきりって何だか恐  
いのでやめました……

多分、今回の出来事は今晚夢に出るでしょう……あう……。……。

第一百十八の話 ハイテンションでG O G O G O O ! ! (後書き)

ミツチエルさんと奥さんでした。

いやぁ自分で書いてて思いましたよ。あつっ苦し。後力タカナばっかで読みにく!!

つと、そうそう言い忘れてました。人気投票、まゝだまだ受け付けております。詳しくは第七十の話と第百の話をどうぞ!ふるってご参加ください 来なかつたら俺泣きますよ?あ、誰今どうでもいいって言ったのはちょ(強制終了)

## 第一百十九の話 ウンザリ勝負事(でも勝負してやんない)

### 第一百九の話

〔龍二視点〕

最近になって、この町にいたガラの悪い兄ちゃんどもを見なくなつた。いや、見なくなつたつーか、ものっそ見た目変わった奴が多数だ。

例えば、こないだ久しぶりにチュツ 買いに行きつけのコンビニ行ったら、いつもの店員さんではなくて別の野郎がレジうつてた。

よく見てみれば、そいつ随分前に俺にカツアゲしてきた金髪ジャラジャラピアスの兄ちゃんだった(まあ当然、半殺しの目に合わせてやったけど)。でもそんな時とは違って、髪も黒髪に、ピアスも全部外して、今じゃなかなかのイケメンアルバイト店員としてコンビニで働いてるのだそう。これ、ご近所の奥さん情報。

…でもさあ、俺見た瞬間この世の終わりみたいな顔すんのやめてくんねえかね？いや、確かに俺やり過ぎたよ？【ピーーーーーー】だつてしたよ？だからってその顔はねえんじゃね？

と、まあこういふ奴が最近増えてきてんだよねこの町。皆して俺見て頭下げるのは何か不服だけ。

でもさ、おかげでご近所から何故か感謝の気持ちだっって言われて色々おすそ分けしてくれるのは悪くない。何故感謝されたのかはよくわかんねえけど、これで食費浮くし。だから細かいことは気ニシナイ。イ。

ま、俺どつちかってーとのんびり過ごす方が好きだし、チンピラがいなくなっただけ毎日いろんな奴から声かけられずに済むし、万々歳だな。いやあよかったよかった

……っと思ってた矢先によ~~~~~~~~。

「テメエが荒木龍二か!？」

……

散歩の最中、普通に道歩いてたら普通に横道から普通に又々と普通に図体でかい男が普通に出てきたっつーか俺普通って言いすぎ。

「……………そうだけど？」

「…すつげえ間あいた割に正直に答えたな。」

だつてお前、違つつたつたつて『嘘つけ！』つて言うんだろ？  
だつたら正直に話した方がめんどつちくなくていい。

「…ともかく、ホントにテメエが荒木龍二なんだな！？」

「だからそうだつたつてんじゃん。」

二回も繰り返さんでいい。

「そうか……………ならお前、俺のこと誰か知ってるな？」

「知らん。」

「……………え。」

いや何さその『こいつそんなことも知らねーの？』的な顔は？初対  
面だろがアンタ。いきなり失礼な奴だな。

「……………こ、この隣の全学校を仕切る律ヶ丘りつがおか高校番長にして喧嘩最強  
と謳われている、この明坂あけさか三郎さいろうを知らないだと？」

「リツガオカ？どこだそこ？つか隣町にあつたっけ？」

「……………。」

うん、世間一般では俺のこと情報屋つていうことになつてるけど、  
俺正味興味ねえことは全く無知だかね。そこんところよろしく。

「……………。」

「でさ、どうでもいいけど用件言え用件。早く帰りたいんだけど俺  
？」

何か知らんが呆然としてる……あれ？誰だっけ？……まあいいか、二郎？に言つてやった。

つかこいつの服装、長ランに下駄、学生帽……何か古いぞ色々。いつの番長？

「……ま、まあいい……それよりテメエ！」  
「おう。」

早く言え。さっさと言え。

「この俺様と……タイムンはねー！」  
「何貼れって？」  
「いやシップとかの貼れじゃねえよー？タイムンしろって言うてんだー！」

タイムン？……………

ああ。

「饅頭の親戚？」  
「そっ！………ってちやうわ……！」

ノリツッコミしたよこいつ。

「俺とけんかしろっつってんだよ!!!つかタイムンくらい理解しとけ!!!」

「オウ、イエー。」

「……………こいつホントに噂の最強野郎なのか？」

小声丸聞こえ。失礼な。

「ん〜…つかアンタ俺に怨みでもあんのか？覚えainんだけど。」

「んなの決まってる！テメエを倒して、この町の学校も全て仕切ってやるのさ!!」

「いやだから怨みあんのか無いのかどっちだっつってんじゃんよ？」

全然人の話聞いてねえやこいつ。

「つか俺、この町仕切ってねえけど？そーゆーのは町内会の人達にでも言え。」

「え？あ、いや、その……………って話逸らしてんじゃねえ!!!」

いや逸らす気なかつたぞ？真実を言ったままでだけど？つか町内会が町の権限握ってるのかどうかは知らんがな。多分握ってる。

「とにかくだ！テメエを倒さない限り、俺はこの町の全学校を仕切ることができねえ！俺と勝負しろ!!!」

「断る。」

「早っ!?!」

0.2秒の即答。

「そんなに仕切りたきや勝手に仕切りやいいじゃん。俺はパスだパス。勝負なんざめんどくせーよそれに帰ってーし。」

「……つーかまた勝負かって思ったぜホント。過去どんだけ勝負挑まれたか俺。別世界からも挑まれたんだぞオイ？どっからかはあえて言わない。」

まあそんなことが多々あったから、正直勝負なんてもうウンザリザリ。さつさと帰ってラーメン食いたい。

「……く、ククク……。」

「？」

いきなり何か目の前で笑いだした一郎(?)。気持ち悪。

「……まさか最強と謳われた奴が、こおんな腰抜け野郎とはなあ。聞いて呆れるぜ。」

……。

「おおおお、そんなに帰りたきやさつさと帰れや。この腰抜けの負け犬野郎が。大人しく家で親に尻尾振ってなあ？その代わり、この町の学校は全て俺が仕切つてやるぜえ？ククク。」

「そか。そんじゃお言葉に甘えさせてもらって帰る。」

ヒョイと五郎(?)の脇を通り抜ける。なんだよ帰っていいってんならさつさと見えよな。





拳振り上げて突っ込んできたんで、ちよいと小指で突っついたら空の彼方まで吹き飛んでいった。

「…さて、帰るか。」

帰ってあいつらにオヤツ作ってやんねえとな。

……

いやあにしてもさっきのは愉快的な飛び方だったなありや。“く”の字型だぜオイ？お笑い狙えるくらいじゃね？しかもセオリー通り『覚えてろよー！』て叫びながら飛んでったし。

……。

「…お前の名前、しっかり覚えてやったぜ……六助<sup>ろくすけ</sup>。」

お前は将来、立派なコメディアンになるだろうっ……ッッコミ何かつまかったし。

くその晩く

『今日午後六時、アフリカ北東部のサバンナの空から燃え盛る何か  
が降ってきて、地面に巨大な穴を開けました。現地の人達が調べた  
結果、隕石ではなく素っ裸の大男だったもよう。NASAはこの大  
男を未知の異星人として調べる方針です。』

「……ねえリュウくん、ナサってなあに？」

「説明すると長くなるから寝る前に話してやるよ。」

……大男ってワードに心当たりがあるような気配もあったけど、多  
分気のせいだな

つーわけで、再び晩飯のサバの味噌煮に箸を刺しながらニュースが  
流れてるテレビに視線を戻した。

第百十九の話 ウンザリ勝負事(でも勝負してやんない)(後書き)

どうもお久しぶりですコロコロです。

え、更新遅れた理由はですね…ついこないだまでちょっと大風邪ぶっこいてました。ええ、今は大丈夫です。一時入院まで勧められました(マジ)

ふう…でも今回の話、ちょっと微妙かな。タハハハ…はあ。

病み上がりはきついですね…。

第二百十の話 後輩達の作戦（前書き）

久しぶりの後輩sどえーす。

## 第二百二十の話 後輩達の作戦

（絵里視点）

「！？お、お久しぶりです！」

「……いきなり何言ってるの？てか誰に言ってるの？」

「……れ、練習だよ。荒木先輩に挨拶するのに。」

「……そんな練習、いる？」

「いる。」

……それと、多分私達忘れてる人が多数いると思うから。

「……………まあそんなどうでもいいことは置いといて。」

……どうでもいいって…明ちゃん。

「ほら、やるんでしょ今日こそ。」

「……………う、うん。」

さっきのコント（？）から一転、真剣な顔付きになる私達。

そう、今日こそは……………

「今度こそ成功してよ？チャンスは一度きりしかないと思って。」  
「わ、わかつてる……。」

今日こそ、荒木先輩とお昼を一緒に食べるため、先回りして今は食堂にある柱の影に隠れてます。隠れる必要があるのかな？

……。

「……ねえ明ちゃん、ホントに授業抜け出してきたよかったの？」

「大丈夫！問題ナツシングウ〜！」

某女性芸人のモノマネをしながらにこやかに言う明ちゃん。それが何故か不安を煽る。

……えと、はいさつき言った通り、私達は授業抜け出して食堂まで来てます。俗に言うサボリというものです。遅刻や欠席はすでに経験済みだけど、サボリは初めてです。なものなので、食堂にはほとんど人がいません。他にサボっている人がチラホラいるみたいだけど、数人ほどしかいないのです。

……ホントはサボることに抵抗を感じてたんだけど……

『そんな奥手じゃ、先輩に近づけないわよ!!』

……明ちゃんにそう言われると体が勝手に動き出したんです。そういうことにしてくださいお願いします。

「…で、でもいくらなんでも早すぎな気がするんだけど。」

授業終了まで、後三十分はある。つまり授業半分を抜け出てきたわけで。

「だーいじょうぶだって。」

「…ホントに？」

「バケツ頭の上に乗せられるだけで済むはずだから。」

「それ絶対いやー!!」

ただでさえ両手でも重いのに!!

「いいでしょ別に。それが荒木先輩に対する気持ちの重みって思えば。」

う、うまいこと言ってるけど…。

「まあ、今度ばかりは泥水入れられそうだけど。」

「……………」

「う、ごめん冗談、冗談だから…頼むからそんな恨みがましい目で睨まないで。」

冗談言っつていいことと悪いことがあるんだよ明ちゃん？

「…あ。」

「？」



何かに気が付いたように声を上げた明ちゃんの視線の先を追ってみる。

「……………!!」

いた……………荒木先輩……………

…と…誰？あのメガネかけた男の人とすごく美人な女の人はこの学校の人じゃないよね？

…何か談笑してるようだけど、全然聞こえないし…。

あ、先輩と女の人がお互いに拳突き出した。それドラマでよく見るけど、男の人同士が友情の証としますよね？…別段、気にしてないようですけど二人とも。

それと男の人、何だか凄く疲れてるように見える…。

「じゃあなあ。次は家に遊びにきな。」

男の人と女の人が席を立って先輩に手を振りながら食堂から出て行った。男の人、半ば強引に女の人に腕組まれてましたけど…。

「絵里、今がチャンスよ！」

「！で、でも…。」

た、確かにあの二人が出て行ってから、今荒木先輩は一人……いつの間にかラーメンを注文していて、すでに食べ始めていた。

「ほらあ、早くしないと！ご飯なら私が注文しといてあげるから今すぐ隣へGO！」

「！？と、隣！？」

ハードル高いよ……。

……って先輩食べるの速っ！？もう二桁超えた！？ってさっき注文したばかりなのに！？

「……ほ、ほらレッツゴー。」

「明ちゃん、さっきより覇気無くなってない？」

いきなりあの食欲とスピード見せつけられたらビックリするよね……。

「……よしー！」

【パン！】

気合を入れるつもりで、両頬を叩く。

……。

「……い、痛い……。」

「自滅ってアンタ……。」

強く叩きすぎた…。

「ほら気合入ったでしょ？さっさと行く！」

「え、ちよ」

【ドン】

後ろから押されて、柱の影から飛び出してしまった私。

「？」

「あ…。」

同時に、ピッタシ先輩と目が合った。

……ごめんなさい、私の目が異常じゃなければさっきより空の井鉢ごんぶりばちが増えてる気がするんですけど？

「よお、久しぶりじゃねえか。」

「！！へ、返事しないと！」

「あ、え、その、お、おひささりが……！」

(何言ってるのー!?!?!?) (明ちゃん、小声ツッコム)

……ああああああああああ……ぱ、パニックになってわけわかんないことを……。

「ほお、いいなその挨拶。採用。」

……は？

「ってなわけで、もっかい。おひささりぶ。」

「……は、はあ……。」

……何だかよくわかんないけど会話成立した。

「で？俺に何か用か？」

「！は、はい!!！」

(しつかりやんなさいよー絵里?)

小声で呼びかける明ちゃんの声が聞こえてくる。頑張れー私。

「え、えつとその……。」

「おっ。」

うつろ、き、緊張する……

……

……よしー!!

「…お、お昼ご一緒しても…?」  
「いいぞ。」

や、やった!意外にアツサリ!

「ほれ、どこでもいいからさっさと座れば?」  
「は、はい!失礼します…!」

手足を同時に出しながら行進。おかげでイスとかテーブルに足をぶつけてしまいました。すごく痛い…。

「…何に緊張してんだオメエ?」  
「べ、べべ別ににやんでもないです…!」

あ、噛んだ。

「し、失礼します…!」  
「さっき言った。」

先輩の隣の席へ、いざ着席!

【ガッ!】

「~~~~~!!!!」

「……………バカ？」

(バカ絵里iiiiiiiiiiii!!!)

うつかりイスの肘置きにお尻をぶつけてしまいました。同時にバカよばわりされました…二人に。

…うう。

「……………こ、今度こそ失礼します。」

「はいはい。」

悶絶から復活して、今度はちゃんと席に座った。

よ、よし………！

「……………」

「……………」

【ズルズルズルズル】 ラーメン啜る音

「……………」

「……………」

【ズルズルズルズル】 ラーメン啜る音

「……………」

「……………」

【ズルズルズルズル】 しつこいようですがラーメン啜る音

「……………」  
「……………」

【ズルズルズルズル】 どうしようもなくラーメン啜る音

……………か、会話が……………無い……………!

……………ど、ど、ど、ど、ど……………打ち合わせしてなかった……………!

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

話題……………話題話題話題……………話題はああ……………。

……………よ、よし……………ベタだけど、好きな物を聞こう。

「……………せ、先輩?」  
「……………あ?」

「……………えと、先輩の好きなものは……………」

……………そこでふと気が付いた。

………空の丼鉢が長いテーブルの遥か向こうまで続いていることじ。

「……。」

「……？」

「……ラーメン……ですよね？」

「……もちのろんだ。」

微妙に古いネタ出してきた!?

……というよりこれ、何杯目なんですか？三桁どころか四桁いつてるんじゃない……それとラーメンの材料の量が心配なんだけどなあ……。

「あ、おかわり。」

「まだするんですか!？」

「あいよお待ちどうさん。」

「……って速い!？」

食堂のおばちゃん、ラーメン作るの速すぎます……こつこつこの慣れてる手つきでした。

もしかして作り置きしてるんですか？そうなんですか？麺のびてません？後材料ホント大丈夫？

【ズズズズズズ】 再びラーメンを（以下略）

「……。」



……あ、やばい……また会話尽きちゃった……。

……

……よし、なら今度は趣味を！

「あ、あの」「そっぴやさあ。」「！？は、ははははははい！……」

話そうとしたら先輩が話し出したんでドモってしまいました……。

「今本来なら授業中だよな？」

「は、はい。」

「……お前サボり？」

「…………はい。」

……

「……先輩こそサボってるんじゃないですか？」  
「当たり前だ。」

そ、そんなあつけらかなと……私抵抗あるのに……。

「いや、腹減って腹減って授業なんざクソくらえってな感じで勝手に抜け出てきた。」

「……はあ。」

…我が道に行く…っという奴ですか？

「そういうオメエもあれか？腹減って授業抜け出してきたのか？」

「え！？え、えつと…。」

………

『あなたに会いに来ました！』

………なんて言えない…。

「…はい、そうなんです。」

「そうか、お前も俺と同類ってわけだ。」

………先輩の筋金入りの鈍感さは本物ですね。

「そついやお前らんとこの担任ってさ、辻山さんだっけ？」

「あ、はい。よくわかりましたね？」

「うんにゃ適当に言ったら当たった。」

適当に言っで一発で当たる先輩は正直すごいと思います。

「あの人、古臭い上に人望薄いよな？」

「…そうですね。」

…バケツ持たせて廊下に立たされたり、頭ごなしに怒鳴ったりするから、影では『旧式ハゲチャビンスキー』という仇名で呼ばれている辻山先生……“旧式” いららないと思う。

「でも意外といい人だぜあの人？」

「え、そうなんですか？」

「おう、ラーメン奢ってもらった。」

「へ〜……またどうしてですか？」

そういう交流でもあるのかな？

「ああ。」

あの人、夜の繁華街で若い姉ちゃんが描かれたキンキラ光る看板の店に入っていくの見てさあ。」

………は？

「で、それ目撃した俺にラーメン奢ってもらったってわけよ。」

………

口止め料………ってことですか………。

「………それで、先輩はどうして繁華街なんか………」

「辻山さん尾行してたらいつの間にか入っちゃった。」

「何で尾行………」

「趣味の弱味調査。」

「タチ悪いですよ!?!それと周りをよく見てください!補導されかねませんよ!?!」

「うん、された。」

「時すでに遅し!?!」

「でも何故かすぐ釈放された。」

「な、何ですか?」

「さあ?俺見た瞬間顔真っ青にしてたけど。」

「……………」

先輩…………警察の人にまで恐れられてますね、違う意味で…………。

「てなわけで、お前もいざって時はこのネタ使えば?」

「……………はあ。」

多分、私より柱の影でほくそ笑んでる明ちゃんが使いそうですよそれ…………。

「【ズズズ…………】ところでお前、メシどうした?」

「あ、忘れてた。」

……………そういえば、明ちゃんが注文しとくって言ってたけど…………。

「あいお待たせしました。」

「え?あの…………ど、どうも。」

いきなり横から食堂のおばちゃんが私の目の前にお盆を置いた。

…多分、これが明ちゃんが頼んだ物なのかな？

「ほお、きつねうどんか。」

「…ええ、はい。」

……でも何でうどん？

【~~~~~】

「？あ、すみません。」

「おお。」

ケータイから音楽が鳴ったので先輩に背中を向ける私。この音楽はメールの着信音ね。

え〜っど……？

『ごめん、ホントは共通の話題作りの為にラーメン頼むつもりだったんだけど売り切れてたからラーメンに近いうどんにした。m（」

『m（—』

……

チラリと柱を見てみると、こっちに向かって謝罪のポーズ（合掌）  
してる明ちゃんの姿が目に入った。

ここまでしてくれた明ちゃんにはホントに感謝するけど……ラーメ  
ンとうどんって…近いのかなあ？

「おい、早く食わないと伸びるぞ麺。」  
「は、はい。」

……ま、まあいいかってことで、割り箸を割ってうどんを食べるこ  
とにした。

【ズズズズズ…】

「……はあ……おいし。」

やっぱりこの学校の料理っておいしいなあ……。

「隙ありだ!!」

【パシイ!】

「え?……!!ああ!油揚げ!!」

一瞬、先輩が動いたかと思うと、次の瞬間には油揚げが消えていた。

……ってそれ楽しみにとっといたのに!!

「ふはははは、油断していたお前が悪い。」



「アッパーカット。」

【バギイー!】

「ああああ! 龍二、何女の子と一緒にご飯食べてるのよ!？」

「それとあたし達身代わりにするな! おかげで制裁受けたぞ!？」

「カグラさんのチヨーク痛かったよー!ー!ー!ー!」

「ううう……タンコブできそうです……。」

『……グスン。』

「ちょっとリュウジ! エル忘れられたって言って泣いてるんだけど!？」

「っーかお前ら行動早すぎだっっーの。」

「つか俺を引きずっていくなグエエエエエエ首じまるじまる

(締まる締まる)!!!!????」

………チャイム(?)が鳴ると同時にいつも先輩と一緒にいる方々が食堂になだれ込んできました………

………うん、大体こうなることはわかった。アハハハハ(涙)……

………はあ。



第二百二十の話 後輩達の作戦（後書き）

どうもコロコロです。小説を読んで楽しんでくれたのなら幸いです。つかいますかね？

えと、伊藤勇作さんの作品『僕の彼女は極道さん』から特別出演した方々がいましたが、どこにいるか気付いた人々？

…すみませんでした。

さて、重大発表です。第七十の話からずっと続いている人気投票ですが…

百三十の話で締め切ります。そして結果発表します。

んですがあ…まだに忙しく、更新不定期になりがちなため、何日に締め切り、とかそういうのはまだ決まってません。なもんで、期日はまた後日という形でご了承願います。

それでは、若輩者が人気投票なんて生意気な！キー！！という方も是非投票お願いしまーす！

…俺もまだまだ未熟だな。と思う今日この頃…勉強しないと（小説の）。

## 第二百一十一の話 荒木家

（龍二視点）

【キンコーンカーンコンーキーンコンカコーン】

『わかりずら!?!』

「おーし今日はここまでなー。」

ややこしいチャイムにクラスの心が一致団結した証、ハモリツッコミと共に神楽さんの授業はフィニッシュ。ついでに今日の全ての授業がフィニッシュ。つまり家帰れるわーい帰ってラーメン食おー。

「リュウちゃん帰る〜!」

「生徒会どうしたってわかりきってるけどとりあえず死ね。」

【バゴオ!】

はいいつもの如くバカ生徒会長が駆け寄ってきたんで俺はイスに座ったまま蹴り上げ放った。キリモミ回転しながら机をなぎ倒しながら吹き飛ばすその瞬間はまさに愉快。

「うわあ、リュウくん相変わらず容赦ない…。」

「か、カナエさん…。」

「……まあ慣れたけどね。」

アルスらが荷物を整理しながら囁きあうのが丸聞こえ。

あ、ついでに一緒に吹き飛ばした机やらイスやらをそそくさと元の位置に戻してる他のクラスメイトの方々、ご苦労さん。

「おい龍一、帰るぞ。」  
「あいあいさー。」

間の抜けた返事だなんて言うな。

【ガラ】

「龍一？」

「？」

教室の後ろのドアが開きそこから中に入ってきたのは名も無き男子生徒A。

「……いや俺お前と同じクラスなんだけど……。」

「すまん、忘れた。」

「し、しどい……。」

泣くな。そして心読むな。

「で？何か用か？今から帰るとこなんだから用件は手短にな。」

ついでに『早く帰らせるよこの野郎』という意味を込めた眼力を送っておく。

「……………あ、あなた様、にこ、ご用はあるという、方が、いらせられます……。」

たどたどしい喋り方をする男子生徒A。（冷や）汗ダツクダクだ。

暑いよねえ最近、汗かきたくなるよなあわかるわかる。

…つか誰だ？俺にご用？

「失礼するぞ。」

つと、少し思案に耽っていたらその訪問者が教室に入ってきた。

……………つて、おお。

「あ！ヒグラシさん！！」

「旧校舎で会った今時見れないバアサン口調のコスプレ女。」

「それは罵倒していると取ってよいか？」

入ってきたのは、いつぞや巫女服を着て全身マッチ棒にフルボッコされてた髪が白いお隣のクラスの女子だった。あ、でも今は普通にジーパンと真っ黒いTシャツっーラフな格好で。口調の割に現代<sup>いま</sup>風だなあ。

……………。

「…すまん、名前なんだっけ？」

「…いやさっきクルルが言ったであろうっ？」

「俺のセリフと被ったもん。」

「……………」

うん、クルルの声とピッタシ被ったね。タイミングいいのか悪いのか。

「お久しぶりですヒグラシさん。」

「ヒグラシ〜！久しぶりね。」

「お主らも元気そうじゃな。」

まあアルス達は随分と仲良くなられて。

「……？あれ？そついや何でお前最近学校来てなかったんだ？」

「そついや全然姿見てなかったわね。隣だつてのに。」

うむう、花鈴達もどうやら仲がよい様子。これが世に言う835ハミゴ)なるものか。意外な疎外感。

……つかあれ？日暮？ん〜？……どっかで聞いたようなく……？

……ま、いいべ。

「うむ……ちとな。」

「？」

……何とも齒切れの悪い奴だ。

「……それよつかよお、オメエさん俺に何か用でもあったんじゃね？」

「ああ、そつじゃったな。」

ほほお、訪ねてきておいて用件を忘れるたあいい度胸だこの野郎。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………？おい、早く話せよ？」

「……………うむ……………」

…何なんだこいつ？急に訪ねてきたと思ったら言いにくそうに…。

「……………！も、もしや愛の告はk」

「……………「黙れ影薄……………」」

【ズドバキイ！！】

「ぐげふう！！」

あ、恭田が香苗と久美と花鈴に蹴り飛ばされて教室の窓の外に吹っ飛んだ。つかここ三階だけど気ニシナイ。

「……………あ、愛の告白などではないわ！！」

ツッコミ遅いぞ。すでにボケかました影薄は奈落の底へと真つ逆さ「コンクリート」まだぞ。

「ええい、話が進まん……………」

「お前がさつさと用件言わねえからだろが。」

「……………すまぬ。」

うむ、よかよか。

「ほらさつさと言え。いい加減にしねえと手足をもぎ取る。」  
「リアルにエグ！？」

言っておくけどマジでもぎ取るぞ？周囲見回せば俺達以外の生徒皆先帰っちゃって人っ子一人いねえし、さっさと帰りてえんだよ俺もよお。

つつてもここまで待たせておいてしょーもねえ理由だったらどの道もぎ取られる運命なんだけどね〜っと。

「…今お主、ものっそ黒いこと考えておっただろつ。」

「いんや、ものっそ赤いこと考えてた。」

「どんなんだオイ。」

雅が横からツツコミ。読んで字の如しですが何か？そりゃ手足もぎ取られて血い出ねえわけなかるうがウフフフフフフ

「……おい日暮、早く用件言ってくれ。今こいつスツゲエ悪いこと考えてる。」

「…そうじゃな。」

おおっと、つい想像しちゃった。

「で？用件は？」

「しむ……」

すまぬが、今から屋上へ来てくれんか？

……。

「…へ？今から？」

「そうじゃ。」

「…何で？ここで言えばいいんじゃない？」

「ここで言えんから屋上へ来いと言っておる。」

「……明日じゃダメか？」

「今すぐじゃ。確認したいことがあってな。」

屋上でか。屋上で確認ってか。

『……………。』

「？おいどうしたお前ら？」

『！？べ、別に？』

何故だろう、女子どもがものっそ疑わしい目を向けてきた。

…ま、そんなこたあどうでもいいべ。

「そか。じゃ屋上行くか。」

「おお。」

『やれやれ…帰れると思った矢先にこれか。』

腰からエルがぼやく。でもどこかしら嬉しそうなのは気のせいではないと思う。久しぶりに喋れたからか。

「じゃわりいけど先帰つといてくんね？」

『はい』

「……………」

女子達、不自然なくらいいい返事。雅、返事返さず人差し指を眉間に押し当てて俯いた。



……まあそんなこと気ニシナイ。

（屋上）

『アゝー ……アゝー ……』

…屋上に出ると、空はすっかり朱色に染まっていた。遠くを見てみれば沈みかかった夕日をバックに優雅に飛ぶ数羽のガラス。こんな時間に屋上なんて来ねえから結構新鮮な光景だな。

まあそれはいいとして…つと。

「で？何なんだ確認したいことって。」

「ああ…。」

わざわざ屋上まで連れ出してまで確認したいことがあるっていうのはよくわかんねえけど、こいつにとったら結構重大な話なんだろうかね？

で、呼び出した張本人は俺に背を向けて、テクテクと貯水タンクまで歩み寄る。そして、タンクの下の際間の前でしゃがみ込んだ。

「…よつと。」

【シャン】

………？

「何で錫杖？」

「……………」

立ち上がった時に手に持っていたのは、夕日の光を反射して輝く金色の錫杖。一回地面をつくと涼やかな音が鳴るあれだ。

…っつか、おーい聞こえてんの？何で錫杖なんて隠してたんだ？って言おうとした。

『！？リュウジ！！』

【キーン！！】

エルが呼ぶと同時にバック転して後退した。

で、俺がいた位置には刀を抜刀した状態で立っている日暮がいた。

「…何のまねだ？」  
「……………」

あくまで取り乱さず、かつ警戒しながら問う。案の定、相手は無言。

【チャキ】

「…荒木龍一。」

ふと、俺の名を呟きながら刀を構える。

「ワシと…勝負せい。」  
「……………」

俺はこの時、心の中で『何素っ頓狂なこと抜かしてんべこのバカチンがあ』と悪態をついた。

「…お前さ、こついうの急な展開っていうんだぞ？知ってるか？」  
「知っておるわ。この展開についてこれない奴は捨て置けばよい。」

わお、残酷な発言だなある意味。

「…つうか、なーんでまた勝負なんざ？」  
「なあに、試すだけじゃ……………お主をな。」

いやだあら何を何で試すのかわかんねつつってんの。

「四の五の言うでないわ……………ゆくぞー!!」

一瞬、日暮の姿が消え、

俺の至近距離に現れた。

「おおっと。」

【シユ】

咄嗟に足払いをするが、一足飛びで避けられた。うむう、なかなか速いなあ。

「はあ！」

「んん。」

その後、次から次へと俺に襲い掛かる剣戟。俺はそれを紙一重で避け続ける。そして最後に足元からの切り上げをサイドステップでかわし、軽くジャンプして屋上のフェンスの上に飛び乗った。

「へえ、結構やるじゃんアンタ。」

「……何故刀を抜かん？」

一度鞘に刀を納め、こつちを鋭い目で見上げながら構える。

つとと、この構えは……ああ、やっぱね。こりや确实だわ。

「…アンタあれか。『飛燕拔刀流』ひえんばつとつりゅうの使い手か。」

「!?!」

おお、驚いてんなあ。

そりゃそうか。古代から伝わる日暮流陰陽道直属の流派で、その名前は表沙汰にはされずに世間でその名を知ってる奴は一握りだけだかな。その太刀筋は流れるように飛ぶ飛燕の如く華麗に、んでもって常人では絶対目に捉えることはかなわずとか何とか？  
あ、ほんでもって縮地法はかあなありいの速さだっけ聞いたな。まるでワープしたかのようなんだと。さつき実証されたけど。

「…お主…知っておったのか？」

「一応、情報王とも呼ばれてたからな。アンタのその構え方、そんなじゃそこらの流派にある居合いの構えと違って足の開き具合が大きすぎるのと、腰が他と違って若干高いからもしやくって思っただけ。あ、そんでお前さんの苗字、日暮だっけ？それも合わせてピーンときたっけわけよ。」

「……………なるほど、抜かなかったのは観察するため、か…ククッ。」

「…何がおもしろいのか、口の端を若干吊り上げて微笑を浮かべる日暮。何でやねん。」

「…やはり、お主は荒木家の…」

「は？」

「…何でもないわ。」

「では！流派もわかったところで本気でゆくぞ！！！」

【ヒュン】

目にも留まらぬ抜刀で、刀を横薙ぎにする日暮。

【……キイイイ】

「おつとつと。」

いきなり俺の乗っているフェンスが斜めにずり落ちていったんで、ヒョイと屋上の床に着地。

ん〜……まあ、久しぶりにチャンバラすんのも悪くねえわな。

「うし、行くぞエル。」

『任せろ！』

【シュイン】

腰の鞘からエルを引き抜き、切っ先を日暮に向けた。

まあ、俺も居合い得意なんだけどね。でも相手が居合いでこっちも居合いつてのはち〜とやりにくいんだよねえ。

ともかく、それは置いといてえ。

「とぉ。」

『覚悟おー！ー！』

一気に間合いを詰めてエルで薙ぎ払うが、日暮はそれを杖を立てて受け止める。そこから続けざまに連続で切りつけるが、全部見切つてやがるのか避けたり受け流したりでダメージゼロ。さっすが。



卑怯にも、日暮が男の勲章たる股間を思いつきり蹴り上げた。まあ至近距離だからな、しゃーないわな。当然悶絶した。

「ぬあああああああああ！足が！足があああ！！！！」

蹴った本人が。

「バカだなあ、油断大敵だぞ？」

「……な、何故じゃあああああ……お主ホントに男かあああああ……！？」

「当たり前だバアロオが。」

鍛え方が違っただっつーの。甘く見るな。

ああ、ついでに言うておくけどさ、龍鉄風使つてねえぞ？マジで。

「チィ……やはり、フェアに勝負するしかないのお。」

「それさ、最後の最後に使えよな普通。」

いや最後の最後に使つても結果見えてたか。



「…ならば、これを使っしかないの。」

ちよつと負傷した足を無理矢理立たせ（まだ若干痺れてる）、腰だめに構える日暮。

「…『弧月飛剣』。」

【ヒイン】

その構えの状態から、神速の切り上げを放つ。

あ、何か嫌な予感

【スパアン】

「およよ?」

俺の横のコンクリの床が、綺麗に割れた。うん、地割れとかああい  
うギザギザした感じの割れ方じゃなく、まるでチーズ切った感じみ  
たいに。咄嗟に避けて正解だったな。

「ねるへそ、カマイタチってわけだ。」

「…初歩の技じゃ。これでもワシは免許皆伝じゃぞ?」

うん知ってた。

「…じゃこっちも。」

【キン】

エルを収め、同じく腰ために構える。あっちがそういうのなら、こっちだって。

「とお！」

【シュン！】

そして横へと薙ぎ払う。

「ふん！このような技など！」

青い衝撃波を紙一重で避ける日暮。まあ、これなら単なる気斬撃だわな。

ところがどっさり。

【ヒュン！】

「な！？」

立場逆転、今度はこっちから一瞬で間合いを詰める。

で、

【キーン！！】

「ぐう！！」

居合い切りを放つ。

「くはあ！」

至近距離の斬撃を無理矢理受け止めたせいか、思いつきり吹っ飛んでコンクリの壁にぶち当たる日暮。ううん、気分爽快。

「く！……何じゃ、今は。」

「んあ？あ………『幻・龍閃斬』とでも言おうか。」

偽の攻撃を放って相手の目を誤魔化して一気に間合いを詰めて切りつける技。従弟から教えてもらった。

「さ、てと……じゃ早く帰りたいし、とつとと終わらずぞ。」

ま、遊びはこれまで……てことで。

【コト】

「！？」

立ち上がるつと膝をつく日暮に一瞬で接近し、右手で拳を作る。

「これがホントの『翔龍拳』……！！」

【ドオン！】  
「ぐう！！！」

天空に向けて拳を繰り出し、同時に青い氣でできた龍を飛ばす。いや、あの某ゲームの技そのまんま使うのもあれだしな。

で、結構高く吹き飛ばされる日暮。でもそれで終わりじゃない。

「よっど。」

俺も飛び上がり、ちょうど吹っ飛ばされてる日暮と同じ高さにつく。

「『龍牙』……」

【ガッ！！】

「……『月輪脚』……」

【ドゴオン！！】

右足から流れるような蹴り上げから体を回転させて遠心力を利用した踵落として繋げる。

「……！！」

当然、もろに食らった日暮はコンクリの床に叩きつけられた。

うわ、ちょっと血吐いた……さすがにこの技はキツすぎたかな？

「く…………あ…………。」

【スタッ】

「大丈夫？？」

着地し、一応安否を確認。

「……………だ、大丈夫なわけが……………なかるう……………。」  
「さいか。」

の割には結構元気そうだけど？手加減したから大事には至らないだらうけど。

「…ま、いいか。とりあえず、俺の王手な。」  
「……………ちっ。」

舌打ちしつつ、ゆっくりと起き上がる日暮。痛そう。

ま、とりあえずこの勝負、俺の勝ちだな。はっはっは。

「…やはり、お主には敵わんわ…………。」  
「……………。」

さあて…軍配が俺に上がったってところぞと。

「…なあ、聞いてもいいか？」

「……………何じゃ？」

「何で試した？」

「……………」

“何を”じゃなくて“何で”なのかを聞く……………まあ大体見当はつくしな。俺自身、わかってることだし。

「……………」

「今回は沈黙無しだ。」

こっちはちょっとイラってきてんだよ。

「……………」

お主、あの日の夜のこと覚えておるか？」

「？」

あの日？……………ああ。

「肝試しか。」

「まあそうじゃ……………その時戦った紅左衛門が最期に言い放った言葉。」

おお、あの全身マツチ棒のこと？

「……………“荒木家の”……………この言葉を聞いた時、ワシはピンときた。」

……………。

「その後すぐに家に帰り、三日三晩、学校へ行かずに資料を漁っておった。」

……。

「……資料を漁っておるうちに、しだいにワシが知りたいことは明確になってきた。」

“荒木家”……人知れず生き永らえた呪われし家系、とな。」

……。

「じゃが、荒木という名がつく家系ならこの世にはごまんとある。それで今回、確認のために勝負を挑んだわけじゃが……。」

……。

「……荒木……お主ならば知っておるだろう？その家系の秘密を……伝説を。」

……。

……ふう。

「お主は……荒木家の「なあ。」……？」

「もういいじゃん？その話はだ。」  
「……………」

そ。こいつの言ってることは間違いない。

ま、確かにある意味呪われてるっつーか…何というんかねえ？

「も、もういいって…。」

「なあに、とつくの昔にそついうのは覚悟できてるっての。」

まあ、最初のうちはいろいろ悩んだけど。

「……………お主、わかっておるのか？その力。」

「ん？」

「お主のその力と、お主自身の力…その二つがあれば、宇宙の一つや二つ、やろつと思えば赤子の手を捻るかのように簡単に滅ぼせるのだぞ？」

スケールでかいねえ。

「…そのような力を持って、まともに生きていけるとでも」  
「だからさあ。」

若干必死になっている日暮の言葉を遮り、もう一度言う。



「俺はもう、この体で生きていくって覚悟決めたんだよ…昔な。」

“あいつ”のお陰で、な……………とまでは言わない。

「……………その力、今すぐ消せるとしたら？消して、まっとうな人間として生きていけるとしても、お主はその力を手放す気はないと？」  
「おうよ。生まれた時からの体、手放す気は無<sup>ね</sup>え。」

“あいつ”が認めてくれた体だし。

「……………。」

ジーーーーっと俺を睨みつける日暮。それに対し、俺は視線を外さずに見つめ返した。

一分、いや一時間？…まあそんな錯覚が起きるくらい、互いに見つめていた。

「……………ふん、ならいいじゃろ。」

【キン】

最初に視線を外して刀を鞘に収めたのは日暮。ある意味我慢大会。

「お主がその気なら、もうワシはとやかく言わん。好きにせい。」

【バツ】

突然、飛び上がったと思うとフェンスの上に立つ日暮。

「つておお、見上げる形になったから気付いたけど、もう日が沈みかけてんじゃん。星もところどころ出てるし。」

「…じゃが一つ忠告しておいてやるつ。」

その力は、決して使いどころを間違えるでないぞ？そうなたら、世界崩壊どころの騒ぎでないからな。」

…ふーん。」

「…まあ、お主ならば大丈夫じゃろうが…。」

「あ？何か言ったか？」

「…何でもないわい。」

小声で何か呟いた気がしたけど、何だったんだ？

「…ま、いいか。ご忠告サンキューな。」

「…ふん。」

そっぽむく日暮。素直じゃねえの。感謝ぐらい普通に受け取れよ。

「で？この結界、いつ解けるよ？」

「ほほお…結界の存在に気付いておったとはな。」  
「まあな。勘だけど。」

何となく感じただけだけどさ。まあおかげで結界から外まで音漏れてないし、誰も入ってこれないし。用意周到だなあ日暮は。

「安心せい。もうじき解かれるじゃろう。そうなればお主も帰れる。」

「さいで。」

「…では、また会おうぞ。」

「まあ、クラス隣だしな。」

「じゃからムードを壊すなど言うに……ではな。」

呆れた表情のまま、フェンスから向こうへと飛び降りる日暮。

ここ屋上なんだが……っと、おお。屋根から屋根へ飛び乗ってんぞあいつ。運動神経もなかなかのもんだな。

「やれやれ、いきなりなことビックリしたぜ。」

「…そんな素振り、まったく見せてなかったがな貴様。」

【キーン】

エルが腰の鞘に収まると同時にツッコミを入れた。

『…ところで…リュウジ。』

「何だ？」

『…貴様の……。』

……。

『…いや、やはりいい。すまないな。』  
「…変な奴。」

ま、大方『力って何のこと？』とでも聞きたかったんだろっかな。  
聞いてもいいのに、遠慮しやがって。

…まあ、説明すんのもメンドイし、いいか。

「さて、そろそろ結界が解けるはずだが…。」

【ガチャン！】

『なああああああああ！！？！？』

【ドテテテ！】

……………。

「…何してんアンタらっ？」

屋上の出入り口から何か出てきた。無論、いつものメンバーだけ。

「え、あ、いや、その、えっと?」

「あ、あははは……り、リュウちゃんと日暮さん、何の話してんのかな?」

「まあ、聞こえなかったし何故か扉壊れてたのか開かなかったし、ねえ?」

『あはははははは』

「………何で俺まで……。」

………まったく。

「……あれ?ヒグラシさんは?」

「もう帰ったぞ。」

「へ?出て来なかったよ?」

「気ニシナイ。」

「いや気になるって!?!」

………この力の使い方を間違えるな、ねえ?

ま、使う機会はおそらく無いだろうが……

「さっさと、帰るか。」

「ねえちよっと!?!? 日暮と何の話してたのよアンタ!?!?」

「気になるぞ龍二!」

「一生気にしとけ。」

「リュウくんのおケチー!」

少なくとも、こいつらに被害が及ぶようなことはしねえぞ……絶対  
にな。

第二百一十一の話 荒木家 (後書き)

若干シリアスです。伏線だらけです。

まあ、龍二の力はこの小説の最終話近くで明らかに……ってまだまだ最終話にはなりませんけど。

そんじゃまた〜







それもそのはず、今この家には私以外だれもいないんだもん。

リュウくんはフィフィとエル連れてお買い物行っちゃうし、アルスはリリアンのお家に行っちゃうし……あゝあゝ、ついてけばよかった。

……でもしょうがないもん、リュウくんから留守番任せちゃったんだから。リュウくんの為なら留守番だろうがなんだろうがやってやるわー！……って意気込んでたのはいいけど、まさかこんな退屈だなんてな……。

「……………」

誰もいないのに一人頭の中で誰かに喋りかけるのって寂しい……。

「……む……！」

【コロリン】

とりあえず畳みの上で転がってうつ伏せになる。あ、今私和室で寝ています。寝転がっています。

あゝ……でも何だか太陽光線が和室に降り注いできて、すっごく気持ちい……。

「……………」



さっきから耳元でミヤーミヤーと……あ！寝ちゃってた!？

「むっ……誰っ?」

……じっ?

「みゃー!」

……?

「みー?」

……。

「みゃー!」

……。

「みゃー!」

うあああやつちやったー！……って、むみゃ？

「みゃー！」

「ありえ？タマちゃん？」

何故か和室に、リュウちゃんと仲良しのタマちゃんが入ってきてた。  
あ、ベランダの戸開けっ放しだった。

「なあにー？タマちゃんも暇なのー？」

「みー？」

小首を傾げるタマちゃん……あ、やばいすっごく可愛い。

……

あ、そっだ！

「なんならタマちゃん遊ぼうー！」

「みゃ。」

そっそっ、タマちゃんと遊べばいいんだ。これなら退屈せずに済むね。眠気も覚めてイッセキゴチヨウ！！あれ？何か違ったっけ？まあいいか

「よおし、何して遊ぶー？」

「みゃー？」

また首をチヨコンと傾げるタマちゃん。返事になってません可愛い

から許すけど。

「……………」

「？」

「……………」

「…？」

「……………」

「…？みやー？」

あーそういうえはタマちゃん喋れないんだっけー…ネコだからかな？  
当たり前のこと？

「……………」

あーどじやって遊ぼじかなー…。

「…？」

……………ん……………。

「……………」

みやー

【ポム】

「…っ？」

考えすぎて蹲ってたら、頭に何か柔らかい感触が…。

「…タマちゃん…。」

「みー。」

タマちゃんが私の頭に小さな前足をチョンと乗せてた…やーらかい。

「みー、みー」

【ポムポム】

…頭をポコポコ叩いてくるタマちゃん。何がしたいのかわかんないけど、かーいいなあ…。

「みー。」

【バリ】

「いたあああああああ！！！！」

ひ、ひっかいた！この子ひっかいたよ！？

「みー」

「いったく……………」







「いた！いったあああ！」「ごめんなさい！ホントごめんなさい  
！許して！」

「みーーーーー！！！」

く【ピンポンパンポン】 しばらくお待ちください く

「……………きゅ……………」

「みゃみゃん」

頭からプシュッと煙を出しつつ、私ダウン。タマちゃん、私の頭  
の上でふんぞり返ってまゝす アハハハハハ

……………くくやじ……………（泣）。

【ジョン】

「みゃ……あ。」

「じゅう……余計くやじ……………」

わざわざ飛び降りて人の目の前で大あくび……屈辱……………。

「むにゃあ……。」  
「むう……。」

……結局目の前で丸まって寝ちゃった……。

……。

「……私も眠くなっちゃったなあ……。」

むにゅ……でも……留守番しないと……いけない……し……。

〈龍二視点〉

「ただいま〜。」

「ただいま〜!」

『帰ったぞ。』

「ただいま〜……エル、素直にただいまって言いましょ〜。」

うむ、帰りに同じく帰る途中だったアルスと出くわしたおかげで、さっそく夕飯の準備ができるぜ〜。

つとと、その前に…

「クルル〜。ただいま〜。」

今日はあいつ一人だったからなあ。寂しがってんじゃねえかな？

買い物カゴを台所に置き、おそらくクルルがいるであろう和室をヒョイと覗いてみた。

……………。

「？リユウジさん？」

「どしたの〜？」

「シィ〜。」

「「？」」「」

アルスとフィフィに人差し指を使って静かにするよう指示する。そしてその指を和室へと向け、中を見ってみるようすすめてみた。

「クー…クー…。」

「ニャー…。」



.....

まあ、たく気持ちよさそうに寝やがって……どんな夢見てんのやら。

ちょっと笑ってから襖を閉じた。

第二百二十二の話 魔王VSネロ（後書き）

クルルが何の夢を見てるかはお任せしませう。

第二百二十三の話 これぞパニック祭り！<前編>（前書き）

作者も軽く混乱しております。





朝、俺は朝食を作るために台所で鼻歌歌いながらニンジンを切っていた。いいねえ今日は、絶好の昼寝日和だ。あ、もち屋上で寝るぞ？サボって。

『リュウジ、煮物そろそろいいんじゃないか？』

「おお、そうだな。サンキューエル。」

最近、包丁に何の抵抗も無くなってきたのか細かいところにも気を配るエルはまさにホントの万能包丁としての役割を全うしている。一家に一本、置いておきたい包丁として売れるくらいだし。あ、でも売らないぞ？一度貸し出した時もあったけど。

「【ズズズ…】…オツケー、んなもんだろ。」

小皿に少量注いだ味噌汁を啜って味見して、朝飯の準備終わり。

ん〜…もうちょいでアルス達起きてくるかな。

【シュー】

「…おはようございます。」

「おう、おはようさん。」

「…ふあ…。」

最初に襖を開けた寝ぼすけさん第一号はアルス。パジャマが肩からずり落ちてて下着の紐が見えている。正直どうだっていいそんなこ

と。

それより注目するべきなのは、無駄にはねまわった緑色の髪。アホ毛だアホ毛。ピヨコンと飛び出てる感じ。ヤーベマジおもしれーわコレ。ケータイで写真撮つとこ。【カシヤ】

「……………うみゆ？どうしたんれすかあ〜？」

「無理に話そうとせんでええぞ。」

「ふあ〜〜〜い……………」

トコトコとテーブルへと歩いてくアルス。つーか喋りにくそうな上に呂律回ってねえべ。

「ふみあ〜〜〜……………」

「お、クルルおっはー。」

続いて二号はクルル。まあまあまた見事な寝相の悪さだったようで

っておいおい。

「クルル、上の服どうした。」

「ふみゆ……………」

顔が（-w-）こんなになったまま返事になってない返事を返したクルルは、見事に上のパジャマが脱げていて上半身スッポンポン。下着しか付けてない。こんなんで寝てたんかいこいつは。

「風邪引くぞオメエ。」

「…みゆへへ」

何がおもしろいこの寝ぼすけヤロウが。

「ほら、さっさと着替えてこい。ずっとそのまんまだったらさすがに冷えるぞ。」

「ふあゝい……」

酔っ払いの如く千鳥足になりながら和室へと戻っていくクルル。まったく、腹壊すぞあいつ………今度腹巻でも買ってやっかな。

……？何かどつからか久しぶりの冷視線ビーム発射されてる感じがしないでもねえな…ま、いいかね。

「おっはーリユウジ！」

今度はピュゝっと小さな羽をパタつかせながらフィフィが和室から出てきた。

「おっす。随分目覚めいいな？」

「まあね」

昨日早く寝たからかもしれんな

あゝにしてもあれだよな、こつ朝の目覚めのいい奴っていうのは何かと苦労しないよな。



「無理無理。」

「うわあああああああああん！！！！」

安心しろ、お前のそのクセツ毛は忘れねえよ。つかもう脳裏に焼きついて離れねえよ。

『…いや、アルスは髪ではなくさっきの格好のことを言っているのでは…。』

「まあた思考読みやがったなテムエはよ？」

『す、すみません…。』

コアをグリグリと拳を押し付けてやった。つかさっきのアルスの格好なんて正味どうでもいい。

「ほれ、んなこたあどうでもいいから顔さっさと洗ってこい。」

「…はい。」

納得いかないってな表情のままイスから立ち上がるアルス。さて、顔洗ってる間にさっさとメシ並べとくかな。

つと、あ。

【カチヤン】

「ありゃりゃ、いつけねー。」

菜箸落としちまったから腰を屈める。あーあー、洗ったばっかなのに。

「あ、ボク拾いますよ。」

そして同じくヒョイと屈むアルス。

「リュウくん、着替えたよ〜〜……【ガツ】うみゃ？」

ついでに和室から着替え終えた寝ぼすけクルルが襖の仕切りに躓いて倒れこんでくる。

ここでちょっと解説。俺が箸を拾おうと屈み、そしてアルスも同じ目的で屈みこむとちょうど同じタイミングでお互い頭下げるわな？その上、倒れこんでくるクルルもピンポイントで箸の上、すなわち俺とアルスが屈んでるところへ頭を突っ込んでくる。

まあ、何が起るかは…大方予想できる。

【ゴツチー……ン……！】

「「あいたあああああああ！……？？」

「あつち。」

三人揃って、頭と頭がごっつんこ

いやあ見事なまでにぶち当たったね。俺でさえ一瞬目の前白くなっ  
たぞ？

「うあああああああ……。」

「ううううううううう……。」

で、他の二名は見事に頭抑えてK<sub>ノックアウト</sub>O。

「おい、だいじょぶかあお前ら？」

一応、声かけておいた………ん？

あれ？俺ってこんな声高かったっけか？

「いつつ………頭割れそう……。」

「あたたたた………。」

痛そうに頭を抑えながら顔を上げるクルルと、若干涙目になってい  
る俺。

………



？俺？

「……はれ？」

「……へ？」

……。

「……ボク？」

「俺？」

「私？」

俺が俺の体を、俺の体がクルルを、クルルが俺を指差す。

……ん~~~~？

「……。」「」

【ペタ、ペタ、ペタ】

三人同時に顔や髪を触ってみた……この若干丸みを帯びた顔、そしてサラサラした髪……



まあ、そういうわけで、緊急作戦タイム。

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

……は、いいんだが……さっからいやくんな沈黙が辺りを包んでおりますね。

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

やっとこさ口を開いたのはクルル(?)だった。

「……つまり、ボクが魔王に……。」  
「私が……リュウくん……。」  
「で、俺がアルスってわけだ。」

うっん、実に頭がこんがらがっちゃう展開だなこりゃ。

え〜……分かりやすくするとしたら、

・俺 アルス  
・アルス クルル

・クルル 俺

……うん、こんな図かね？

「な……なんでこんなことに……。」

「ん……お互いぶつかって人格が入れ替わるっていう映画が昔あったよ……。」

「そ、そんなことありえるの？」

「今起こってんじゃないよ。現に。」

事実はあるのままだに受け止めましょう……つっても今回はさすがに突拍子すぎてオラびっくりしたぞ。

「ま、原因探るよつかまずはこの状況をどう打破すっかが問題だな。」

「そ、そうよね……。」

「……ホントどうしましょう……。」

『……それよりリュウジ、貴様さつきから落ち着きすぎだ。』

うっせえ teme これでも大パニックだこんチクショウ。

「うん……視点が高いなあ……。」

「……こっちはこっちで何か楽しんでるし……。」

俺の体……中身クルルは立って周囲をウキウキしながら見回している。ファイファイ何か呆れてるし。

ふむ……にしても、俺の体はアルスになっちまってるのかあ……なるほど、勇者名乗ってるだけにそれなりに筋肉つけてるみたいだな。目立たないだろうけど。

「まさかボクが魔王になるなんてなあ……。」

どこが気に入らないのか若干憂鬱そうに呟くクルル……じゃない、アルス。

ああ、もうこれややこしい。誰が誰で誰なんだっつーのこの野郎。作者も軽く混乱してっぞ。

『にしても、これはホントややこしいな。』

「そうね……誰が誰かわかんなくなる。」

おお、共感してくれたか剣エルに妖精ファイ。オメエらはいいいよな入れ替わってなくてさ。

「ん……でもこりやちと不便だなあ。」

マジで不便だぞコレ？アルスの背って俺の体より低いから高い位置の物取るのに苦戦しそうだし……う~~~~~~~~む。

「……………」

「……？どしたアルス？」

「……いえ、目の前で自分が悩んでる仕草してるの見るのって何だか新鮮というか何というか……。」

……まあ、鏡の中の自分が全く違う動きしてるっていう感じだもんな

あ気分的に。

つとと、そんなことより……つと。

「さて、どつするよ？ずとこのまんまっつてわけにもいかんだろうし。」

「うん……そりゃ元の体に戻りたいですけどあ……。」

「……でもどつやって？」

……今さらながら思ったけどさ、クルルが丁寧口調っていうのもあれだな。違和感感じるな。つーか俺が首傾げると何かいろいろおかしいよな。何？いろいろって何だだと？んなもん推して知れ。

「……つーかさ、アルs……じゃなかったリユウジ。アンタホント焦ってるの？」

『さつきからかなり冷静だが……。』

「気ニシナイ。」

「うっわあアルスがそれやってるのつてすっごい違和感。」

今回の話は違和感だらけの違和感祭りだ。

「つーか失礼なこと言うな。俺は俺でスツゲエ混乱中だ。」

「『嘘だあ。』」

「ファイイ、冷凍庫に入れ。エル、焼却炉に突っ込め。」

「『ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。』」

ファイイが土下座してんのはわかるけど、エルは壁に立てかけられたまま口で謝ってるだけにしか見えない。まあいいけどなそんなこ

と。

……でも、解決の糸口が見つからんなこりゃ……どうすつかね？

「……………あ。」

「？どしたアルス？」

見た目クルルだけど。何か少しだけ慣れてきた。

「…リュウジさん、ガッコウ…。」

「？…ああ、今日はちゃんど遅刻せずに行くぞ？それがどうした？」

朝の限定カップ麺の発売日だし。それに雅達と朝の待ち合わせもしてあるしな。たまにはいいかゝってことで。

「……………いえ、違つんです。そういうことではないんです。」

「？」

じゃ何さ？

「このまんまで行くんですかボク達？」

「……………。」

あ。

【後半へ続く】  
ち  
丸子ちゃんのナレーター風



第二百二十四の話 これぞパニック祭り！<後編>（前書き）

ようやく更新できました…レポートしんどかったです。

第二百二十四の話 これぞパニック祭り！<後編>

（アルス（龍二）視点）

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

つておい、この沈黙前回の冒頭とまんま同じじゃねえかよこの使い回し作者。

「……リュウジさん、ホントにどうしましょう……？」  
「知るか。」  
「即答ですか!？」

だって知らんもんは知らんもん。

「……まあ、なるようになるんじゃない？」  
「フイフイ、他人事だと思っ……。」

は~~~~と深いため息吐きながら重い足取りで学校へと向かう  
見た目クルル中身アルス。

あ、そうそう。只今学校登校中、以上。あ？説明不十分だあ？知ら

んもんは知らん。

「お〜〜。歩幅が広い」

一人、アルスとは正反対に俺の体を満喫してるクルル。大股で歩いては距離を取り、小走りをしてはキャツキヤとはしゃいでいる。人の体をオモチャにすんでねえ。

『…アルス…ではなかった、リュウジよ。貴様は別に何とも思っってはおらんのか？』

「別に？フィフィの言う通りなるようになるべ。」

言うておくが、エルは今まで通り俺の腰、つまりクルルが所持している。あっちの方が落ち着くらしいし。俺の腰は部屋じゃねえぞデメエ。

まあ俺は…うん、うまいこと切り抜けてやっかな。

「よお。おはようお前ら。」

つと、歩いてたら前方に雅発見。片手上げて爽やかに挨拶。

「よお、マサコノビッチ。」

「だあら誰なんだっつーのそ……………ね？」

……………んだあ？ツッコミの途中で急に目を点にしやがって。

「……………」

「お〜い？雅〜？雅ぴ〜ん？お〜い？」

未だ呆然としてる雅の目の前で手をヒラヒラ。あれ？反応無し？

「ちょ！？り、リュウジさん！」

「うおっと。」

いきなし背後からアルスにグイッと手を引っ張られた。何すんねん。

「リュウジ！アンタ今どういう状況かわかってんの？」

「は？別にどういっ……っと。」

あ、そうそう。今の俺アルスだった。ははは、そりゃ混乱するわな  
〜。

「……………」

…で、まあだ石像ンなってるよこいつ。

……………

よし、ならここは一発誤魔化すしかねえな。

「…って、リュウジさんが言っていましたよ？」

「『『』』それ誤魔化してるつもり！？』『』『』」

うっせえこれが最良の方法だと思ったんだいコンチクショウ。

「…………え？あ、ああ…そうなのか…？」

あ、覚醒した。

「おう…じゃなかった、はい。」

「……………そ、そうか。」

納得（？）したぜこいつ。意外と天然だな。

んにしても、アルスがこんなこと言い出したらそんなビックリすんのか？そうなのか？

（ちよつとリュウジさん、今のあなたはボクなんですから気をつけてくださいよ？）

（へいへい。）

こっそり耳打ちするアルス。一応気をつけてはいるんだがなあ。

「おっはよ〜龍二」

「リュウちゃん〜ん！」

出たよかしまし娘一号と二号。

「おっすーバ花鈴にバ香苗。」

「……………へ？」

「？あ？」

（リュウジさああああああん！！あなたはまたあああああ  
あー！！！！）

……何だ？俺のこと凝視しやが……

オウチ、しまった。またやっちゃまったぜ。

……しゃーねえ、ここは……

「……ってリュウジさんが言っていました。」

天井で乗り切るぜ！

「……ってだからそれで誤魔化してるつもりなんですか!？」

「当たり前だろ。」

「その自信はどこから!？」

「ちよ、二人とも落ち着いてよ〜!」

花鈴達をほつたらかしにし、言い争いをおつ始めた俺達。中身が入れ替わってもああ言えばこういうよなあアルスは。

「????????」

「え?え?ち、ちよっとアンタ達?」

「んだよ?」

「!?!?!?!」

「ああああ!?!?!ですからリュウジさんもう喋らないでくださいお

願います!!!」

ビックリして引いてる花鈴達の前で俺に懇願するアルス。そして俺は『またやつちった、反省』ってな感じ。

「…ね、ねえ？アルスだいぶキャラ変えた？」

「………いいえ別に？」

「何その間？」

地が出そうだったから必死にセリフ考えてましてん。

「…クルルちゃんってそんなツッコミ役だったっけ？」

「えー！あ、えとそのあとうんと………ち、チャレンジ？」

「ものすつごく動揺してたよね？」

「………／／／／」

おーい顔赤いぞーアルスーバレるやんけー。

「えーと……じ、じゃ龍……。」

「？」

おおっと、花鈴の奴、今度は俺の体になってるクルルに質問する気か。うし、うまく誤魔化せよークルル？

「…アンタ本物の龍……？」

「うん、本物だよー！」

「うん、絶対嘘だ。」

断定しやがったなバ花鈴。そしてクルル、俺はそんなテンション高い返事はせん。

「え！？あ、いや、その……………あ、新しいキャラ作り！」  
「…は？」

うん、難しい言い訳だねクルルや。つか今考えたる。

「……………ま、まあ龍二のことだし……………ね？」

「…そうだな。いっつも何考えてるのかわかんねえし。」

おいコラ雅に花鈴。俺んことそんな風に思ってたのか。

…まあ否定はしねえけど？

「と、とにかくガツコウ行きましょ…じゃなくて行こ！」

あたふたしながら言い直さなくてもいいんじゃないかアルスよ？

…まあ、あれだしな。さつさと事進めないといつボロが出るかわかんねえからだろうな。つーかもうバラしてもいいんじゃないかね？って思っ  
のは俺だけか？

「そ、そだね！じゃさつさと」龍二  
「！！！！」「！！！！？」

…あ、忘れてた。朝っぱらからやつかましい奴。

「今日こそ覚悟おおおおおおおお！！！！」

俺達が来た方向から土煙を上げながら駆け寄ってくる久美に対し、



俺はいつも通り普通にあしらう気でいた。

「てりゃああああ！…！」

そしていつも通り飛び蹴りを放つ久美。

しかしそれは俺には向かってこず…

【ズバキイ！】

「ぴぎゃあ！？」

“俺の体”になってるクルルにぶち当たった。

「…え？」

「「「へ？」「」」

…雅と花鈴と香苗がビックリするのはいいけど、蹴った本人が一番ビックリしてどうするよ？

「いった〜い！」

で、見事に背中を蹴られて吹っ飛んで地面にキスしたクルルは鼻を擦りながら復活。

「むっ……いきなり何すんのくミちゃん!？」

「え、その……え?クミちゃん?ちゃん付け?つか女口調?え?え?」

……………はあ。

「おいクルル。今の俺らの状況をお忘れなく。」

「え?……………つてああ!忘れてた!!!」

「はあああ……もっ……。」

隣では顔を覆いながら呆れたようにため息吐くアルスと、うっかりした!てな顔したクルル。

「「「……………。」」」

そして、もう何が何だかわからずに呆然としてる他三人。これがボロボロというものだ。

「……ふう……なあアルス、ぶっちゃけていいかもっ?隠すのそろそろしんどくなってきたぞ?」

「……朝一でさっそくバレるっていうのもあれですけど……しょうがないですね……。」

やっかいごとをこれ以上増やしたくないアルスとしてはあまり話したくないんだろうけど……しゃーねえわな、いずれバレることだ。

「……あ……俺ら実はさ。」

未だに硬直したまんま動かない雅達に、事情を説明した。

\*\*\*\*\*

「……………にわかには信じられないな。」

「事実だししょうがねえじゃん。」

「……………まあ、確かにアルスがノリでこんな口調になるわけないし…。」

「真実…なんだろうな、うん。」

一通り説明し、まあ一先ず納得してくれた様子。最初は芝居か何かかと思われていたが、いくら何でもアルスがここまで乱暴な口調になるわけがないと思ったとこのことで確証を得たっつーか俺ってそんな乱暴な口調なんかいな？って言ったら何か即答されると予感がするから黙っておこう。

「でもさあ、ぶつかって人格交代したって何かベタじゃない？」

「ベタだな。それは認めよう。」

「…ベタだからどうこうって言ってる場合じゃないのでは…。」

まあそりゃそうだけどさ。

「で？元に戻る方法ってあるの？」

「それが…わからなくて…。」

「もっかい頭ドーン！ってすりゃいんじゃない？そりゃもつまるでトマトの如くつぶれ」

『他の方法を検討しましょう。』

むむ、俺の画期的な案を全員揃って跳ねつけるとは。

「いや頭ぶつけるのはいいとしてトマトの如くっつーのがダメだったんじゃねえか？」

「…あ？そんなんか？つかまた俺声出してた？」

「普通に考えたらダメに決まってるだろ。そして声出てたぞ。」

あれま。

「…でも、もう一度同じことを再現するのは正直…。」

「…怖いよ…。」

「…まあ、あんだだけ盛大に音たてればね。」

ああ、さすがの俺でも目の前一瞬真っ白ってな感じになったからな。よほどの衝撃じゃねえとダメなんだろう。

…すすんでやろうと思う気にはなれねえな。主にこいつらが。

「…まあ、とりあえず元に戻るにはどうするかは置いておこうか。」

「ちよ！？よくないですよ！？」

「そうよ！このまんまだとアンタ達だけじゃなくてアタシ達まで混乱しまくってしょうがないわよ！」

『同感だ。』

いや、だってねえ…。

「…なあ？今何時かわかるか？」

「は？え〜と……………」

雅が左腕を上げて腕時計を見る。





クルル（中身アルス）の足持って振り回して。

「よし、ビクトリー。」

「きゅ〜〜……………」

全弾打ち落とし、膝ついてピース。ついでにまだクルルの足持つてる。クルルもといアルスは死にかけている。

「……………」

…つと、いつもと何か違う神楽さん。そしてクラス全員が沈黙…つてありやれ？

「どした神楽さん？」

「……………あ、アルス？」

……………あ。

「おま……………そんな性格だったか？」

「気のせいです。」

「え？いや、でも」

「気のせいです。」

「いやだから」

「気のせいです。」

「……………その」

「気のせいです。」

「……………」

「……。」

「……だ」

「気のせいです。」

「……。」

「……。」

「……わかった、席つけ。」

「はい。」

「……荒木、そこで死んでる奴ら持っていけ。」

「はい」

「……っってお前まで!?!?」

びつくらする神楽さんを尻目に、チヨーク攻撃を受けて屍と化した雅達を引きずってそれぞれの席に置く。途中で周囲の机やらイスやらにぶち当たってさらに重傷になったのは秘密だ。

「あ、どっこいせつと。」

【トスン】

で、俺らも席について神楽さんの話を聞く体勢に。

「……おいお前ら、席違つぞ。」

「……あ。」

そだそだ、俺はアルスの席に座るべきなんだな。あーややこし。

「……お前ら、ボケた?」

「……まだそんな年じゃねえけど?」



「ボケたつもりなんてないよー?」

「…魔王、ギャグのことじゃないですよ。」

「…ホントに何があったんだお前ら。」

神楽さんが呆気に取られてる表情を見るのはいつも愉快なんだが、今回はつかりは笑えないね。状況が状況だしな。

「おーい神楽さん。それよつかさつさとHR進めようぜ?」

「……!?は、はい。」

俺が呼びかけると、覚醒した神楽さんは慌てて出欠票を開いた。

「……な、なあアルスちゃん?どうしたんだよオイ?」

「あ?んだ影薄雑草太郎。」

「まだそのネタ続いていたのかよ!?つかアルスちゃんそんなこと言う子だっけ!?」

「ノリだ。」

「ノリ!?その口調がノリなのか!?それとも今までのがノリだったのか!?」

「おらあそこ黙れ!!」

「ぐぼおお!!」

話しかけてきた影薄雑草太郎、別名恭田にチヨークによる制裁を加える神楽さん。体罰教師としてレッテル貼られそうではハラハラするぜ。

「き、キヨウウタさん大丈夫!?!」

「ぐおおおお……お、俺もうダメだ…龍二が心配してくれてるなんて明らかおかしい……。」

いやお前大丈夫だろ。自己再生能力ついてんだから。

「いや大袈裟ですよ！？すっかりしてくださいキョウウタさん！」

「あああ…ありがとうクルルちゃん。物腰柔らかなクルルちゃんもまたいとをかし…。」

古語を混ぜるな。

「ぐふ…影薄同盟は…不滅…だ…。」

【ガク】

『恭田あああああああああああ…!!』

クラスが一丸となって力尽きた影薄の名を叫ぶ。

「……はい芝居は終わり。出席取るぞー。」

『はいー。』

神楽さんの声に一瞬にして全員前を向く。シュバ！ってな感じの擬音が付くくらい。サラバ影薄雑草太郎、皆から見放された者よ。

「はいまずは相田ー。」

「はい。」

「次、青田ー。」

「はいー。」

「ほい、井上ー。」

「へい。」

「それ、伊川ー。」

「ほいほーい。」

「はい、宇都宮ー。」

「イエッサー！」

「それ、小田原ー。」

「ちよもらんまー。」

「どんな返事だ。」

このクラスは通称バカクラスと呼ばれてるらしい。うん、わかるけどこれはこれでおもしろいからいいや。あ、ついでに最後の奴、雅のツッコミな。

……っーか人数多いから省略ー。

↳三十分後↳

「……はい、私からの連絡は以上だ。HR終わり。」

うん、省略した感丸出しだな。だってしゃーないじゃん、連絡事項とか説明すんのメンドイんだからよ。

さて、そろそろチャイムが鳴るな…。

【よ、頼子！何をするんだ！！】

【うるさい！あんたが、あんたが全部悪いんだ！】

【頼子さん、やめて！明彦さんを放して！】

【ダメだ麻紀子！近づいたら危ない！】

【いやよ！明彦さんが死んだら、私どうすればいいのか……！】

【うるさいって言うてんだよ！そもそもこうなったのは、あんたが私よりその女を選ぶから！】

【な、何を言うんだ頼子！ボクと麻紀子の仲を認めてくれたんじやなかったのか！？】

【そんなの、覚えてるわけないでしょ！こうなったら……こうなったら、あんたを殺して、私も死ぬうう……！】

【頼子さん、やめて……！】

【や、やめる頼子！】

【うるさい！死んでしまええええええええええ……！】

【明彦さん！明彦さああああああん……！！……！！】

【……以上、演劇部によるチャイムでした】

『長えしそれチャイムじゃねえよ……！！』

もはや名物、クラスツッコミ。あの昼ドラ的展開をチャイムと称しているのかわかんねえが、それより現場に行きたい気持ちで一杯だ。

「じゃあな。授業頑張れよ。」

手をプラプラと振りながら教室から出てく神楽さんは、さながらやる気のないダメ教師みたいだとクラスの奴らは語った。

「……神楽先生、さっきまで落ち着いてたけど最初の方、相当慌て

てたな。」

「無理ないわよ。アルスがこんな口調だし。」

だからさ、俺ってそんな口悪いかい花鈴や？

「…やっぱり混乱しますよねこれ。本人だけじゃなく周りまで…。」

「でも反応見るの楽しいよ？」

「それあなただけです魔王。」

アルスー。ここにも皆の反応見て楽しんでる奴いるぞー。無論俺だけだ。

「はあ…でもどうすんだよホントにお前ら。そのままずーっとだと俺らも精神的にまいるぞ。」

「知るか。」

「そこ即答するべきとこじゃないよな？」

だって知らんもん。

「ま、何はともあれ、このまんま今日一日を乗り切るべ。」

「…明日になつても元に戻らなかつたら？」

「そんな時やそんな時、勝負は時の運。ついでに元に戻らなかつたら俺名前改名してアルリュウにすればいい。」

「そんな時で済ますなそして何の勝負だ何のさらに何だその語呂悪い名前はぜってえ改名させねえぞコンチクショウ。」

「うあ、マサさん早口でツッコミ入れましたね…。」

「さすがリュウくんのツッコミ役！」

「…嬉しくねえ…。」

…つか、体入れ替わっても大して何も変わりがないし、別にいん

じゃねえのこのまんまで？

……って言ったたらアルスが何かうるさいだろっからやめておこっか。  
殴って黙らせりゃいい話だが、生憎今の状態で殴ったら拳痛いんだ  
わこれが。案外ヤワだなこの体。

く数学の授業にてく

……………。

「待てええええ魔王おおおお！！！！」  
「キャハハハ！こっこまーでおいでー」

……………。

「こ、こらクルル、龍二！授業中に暴れるな！」  
「ご、ごめんなさい近藤さん……。」  
「やーい怒られてるー」  
「やっぱり許せなーーーーーい！！！！」  
「お、お前らしい加減にギヤアアアアア……！」

.....。

「...おい、龍二。止めなくていいのか？」

「...止めたいんだが、体痛えんだよ。」

「え、マジか？」

「眠くて。」

「コラ。」

眠いと体重たくなるっしょ?...まあつつても正直な話メンドイから動かないだけなんだが。

..... あー、今の状況？さっきのやり取り聞いてわかつたる大体？クルル（中身アルス）と俺（中身クルル）が教室の中で喧嘩してんだよ。

原因か？そりゃあれだ、授業聞ってるアルスをクルルがおちよくつたから。

普通の俺は、アルスが前、クルルが後ろと、挟まれてるような体系となってるわけで、まあわかりやすく説明すると俺が前、クルルが真ん中、アルスが一番後ろってな形になってんだよ。

さらにわかりやすく解説すると、後ろから

“クルル、俺、アルス”

つてな形から、

“アルス、クルル、俺”

という形になってんだよ。ドゥーユーアンダースタンオーケー？（  
わかりましたか？）

…で、まあクルルは近藤さんの授業すっげー退屈だったんだろーな。  
近藤さんが黒板の方へ向いた時を狙ってアルスの方向いてつついたり  
たり笑わせようとしたりでイタズラしたわけよ。で、アルスはそれを  
徹底的に無視して授業に集中。そして痺れを切らしたクルルは、  
最終手段に出た。

アルスのおでこにシャーペンプスリ

結果、アルス痛みで絶叫、そして怒りのボルテージMAX。で現在。

「やーいやーい」

「うああああああもう絶対許さなあああああい！！！」

【ドカーン！ボカーン！ズドーン！】

……アルス、許さないのはいいけどお前が無闇やたらと放った魔法  
弾のせいで教室の中（俺らいつものメンバーを除く）が悲惨なこと  
になっとなるぞ。一部の連中重傷だし。つーか近藤さん壁にめり込ん  
でるし。出番少ないのにお疲れさんです。



俺ら？俺は普通に防御して雅達は安全圏に避難してますけど何か？

「わはははははははー！どうしたー！もう終わりかー！」

「うううう…全然効いてないです…。」

…あ、そっかー。今のクルルは俺の体だから、魔法弾が効かんのかあ。さつきから全部の攻撃弾き返してノーダメージだし。おかげで周囲は大ダメージだし。

まあ、とによりかくより……

……………。

「…花鈴？」

「？何よ？」

「眠いんだが？」

「この状況で!？」

昨日夜寝るの遅すぎたんだよ、文句あつか。

…あーでもマジねみーな…：…やっぱ体入れ替わっても寝不足っつーのはキャンセルされんのか。

うーし、そうと決まれば寝るとするかな。うん、もう多分っつーか絶対に近藤さん再起不能だし、今日の数学はこれにてしゅーりよー。

それじゃ、おやすみな、さい……………。

【ドカドカドカアアアアアン!!】

「ふはははははははははは！リュウくんの最強の体を手に入れた私に、もはや勝てる者などはいない—————い!!」

「この！このおおおおお!!」

【ドガンバゴンズゴン!!】

……………。

「くらええええええええええ!!リュウクルパー—————ンチ！」

【ドカアアアアアアアン!!】

「みぎゃああああああああ!!」

……………。

「あーっはっはっはっは！勝負あり!!」

「じゅうじゅう……あんな技にやられるなんて……………。」

……………。

「これこそ！私とリュウくんの愛の形よー！！」  
「……！？な！？」  
「んですってクルルー……！！！？？」  
「クルル、その言葉はご法度だぞ！？」  
「そんな愛の形認めない！！」  
「ニヤハハハハハ！！今の私は何言われても大丈夫なのだー！！」  
「………その自信、根本から断ち切ってさしあげます！！！！」  
「応援するわアルス！」  
「アルス、行け！」  
「ファイトー！」

……………。

「魔王！こうなったらこちらも本気でいかせてもらいます！覚悟！」  
「！」  
「おもしろい！最強の力の前に屈するがいいわあああああああ！」  
「！」

「うっせえぞこの【ピ……………】【どもがああああ  
あああああ……………！！！！」



説教が終わった後に片付けをしたんだが、その時に花鈴がポツリと呟いた言葉は、『龍二ほどじゃないけどキレたアルスもこわ〜……』とのことだったそう。

…因みに自分に説教された気分になったアルスは心身ともども衰弱しきっていた。

「…結局、アンタ達そのまんまの体で一日過ごしちゃったわね。」  
「お疲れさん。」

頭にタンコブつけた花鈴が俺の前の席に座る。フィフィは俺の肩にチョココンと止まっていた。

…そうそう、言い忘れていたがアルスとクルルによる被害を受けたクラスの一部の奴らは皆保健室へ運ばれていった。他ほとんどの奴らは無事に今日一日を終えた。さすが回復力は伊達じゃないね。

まあ、近藤さんは並の回復力しか持ってねえから病院に運ばれてっただけ。

「はあ〜……明日もこんな状態で過ごすんでしょうか…？」  
「さあな。まあ俺は別に何とも思っちゃいねえけど。」  
「私、まだリユウくんでいたいな〜」  
「…勘弁してください…。」

さめざめと泣くなアルス。これも人生だ。

「さ、てと。じゃ帰ってメシにすっか。」  
「わーい」

「…食べる気分じゃありませんよ…。」

「まあまあアルス。」

『いいじゃないか。誰かになって生活するというのは貴重な体験だぞ?』

「…はああああ…。」

フィフィとエルに励まされ(?)、ガクリとうなだれましたアルス。  
ドンマイ。

「じゃ帰るとすつかー。」

【ガン】つつとつつと?。」

やべ、机に足引っ掛かっちゃまった。

「!?!?リュウジさん!」

「リュウくん危ない!」

「おっと。」

「受け止めてやるぜ!」

…上からアルス、クルル、雅、かげ……恭田が、俺を支えようと身を屈める。

いや、助けようとしてくれんのはありがたいんだがさあ……

お前ら、そんな同時に頭下げたら

【ゴチーーーーーーン!?!?!】

『ぐっはあああああん!?!?!?』

ほれ見ろー全員頭突きー……ってやべ、これ結構痛い。さすがアルスの体。

「いったーい!?!」

「ああああああああああ……。」

頭抑えて泣き喚くクルルと、同じく頭抑えてうずくまるアルス。いやぁ実に痛そうだ。クルルの場合はタンコブの上から痛みが来たよ  
うなもんだから二重に

「……って、あ。」

「え?……あ。」

「ありえ?」

……。

「「「……。」」」

……自分の手を見してみる……いつもの俺の手。





ツッコミを入れた俺。俺もやればできんじゃない、ツッコミ。

「も、戻ったの三人とも!？」

「は、はい!戻りました!!」

「やったなアルス!!」

「おめでとー!ー!!」

花鈴、久美、香苗も大喜びでアルスと手を繋いで輪になってアハハハと笑いながら回った。こいつらバカじゃね？

で、俺はというと軽くジヤブをする…うん、やっぱりこの体が一番落ち着くぜ。

「いやあよかったじゃないのアルスー」

『いや、まっただ。どうなるかと思ったぞ?』

「ありがとうフィフィ、エル!」

お前ら半ば見捨てるような発言しなかったっけ？

「まあ、何にせよ元通りになってよかったじゃないな？」

「はい!」

「……うん。」

まあだ意気消沈しとんのかお前はクルル。しっかりせんかい。

いやあにしても、よかったよかった。めでたしめでたし。

「……………」

「……？あれ？雅と恭田が無言なんだけど？」

「おい、お前らどうしたよ？嬉しくねえのか？アルスも元通りだぞ？」

特に恭田が喜ぶかなあと思っただが。

「……嬉しくなんかねえ……………」

「はにゃ？」

雅がボソリと呟いた。

「……………何かさあ……………」

「うん？」

「「今度は俺らが入れ替わっちゃってるんですけど!?!」」

……………。

『え？』

……あらま〜……。

「何で…何で俺がこんな奴と…。」

「こ、こんな奴って何だよ！？どついう意味だよチクショウ!?」

「そのまんまだコンチクショウ!!」

「うっせーよ！そんなら言わしてもらっけどなあ、俺だってお前みたいなのツッコミバカの体なんかになりたくなかつたわい!!」

「な、なんだとお！？俺だっけ好きでツッコミになつたわけじゃねえよ!!この影薄!!」

「むがあああああ!!テメエエ、人気あるからって調子乗ってんじゃねえぞコラアアアア!!」

……。

「…なんか、口調似てますよね?」

「どつちかどつち?」

「さあな。」

……

しやーない、かくなる上は…!!

「じゃー帰るか。」

「はい」

「『賛成』」

「あーお腹すいたー。」

『帰って休むか。』

「……………お二人とも、ごめんなさい!」

「え!?!ちよとお前ら帰っちゃうの!?!」

「お、おい待てよ!?!俺らこのまんまかよ!?!」

さて、今晚のおかず何しよっかなあ

「ねえ、マジ!?マジで帰んの!?!ちよつと誰か返事してお願い!」

「っーかこんなオチってあるかああああああああ!?!」

!?!」

その後、彼らを知る者は誰もいなかった。

くお・ま・けく

その日の晩……

「……い、いやあああああああああ……!!」

「?アルスーどったー?」

「……体重測って見たらかなり増えてたらしいよ?」

「……リュウくん、アルスの体でお昼にラーメン山ほど食べてたもんねえ……。」

『……リュウジ……。』

「ありやば。」

うくん盲点だったぜ。

第二百二十四の話 これぞパニック祭り！<後編>（後書き）

……何で前編、中編、後編と分けなかったんだろう……長すぎた……  
……そして疲れました。

第二百二十五の話 アルス、マジでピンチ！（前書き）

今回は前半コメディ、後半ややシリアスで。

第二百二十五の話 アルス、マジでピンチ！

（アルス視点）

「おはようございます。」

「おっはーアルス。」

「アルスちゃんおはよー。」

「おすアルス。」

どうも同じクラスの方々からお返事の挨拶を受けてますアルスです。ただいま朝八時二十分です。

あ、遅刻じゃないですよ？現在地が下駄箱ですから、普通に歩いても教室には間に合います。

……リユウジさんはボクの後ろの方で『おっはー影薄ラー二号！』と叫びながら恭田さんを蹴り飛ばして壁を破壊していました。後で回復でもしてあげよ。

「あ、おはようございます。」

「……お、おはようございます！」

すれ違いざまに女子の人に挨拶を交わす……ってあ、同じクラスの人かと思ったら一つ後輩の人だった。

……今さら思ったけど、ちょっとおかしいかも。考えてみれば学年は



確かにボクの方が上だけど、年齢でいえばボク一年生なんだし……  
まあ、誰も気付いていないようだし、別にいいかな？

…でも何か緊張してたような…。

「ちょ、私アルス先輩に挨拶されちゃった!」

「うつそー!?!」

「マジー!?!」

「ずるーい!」

「ああ…先輩のソプラノ声の挨拶、ちょー綺麗だったなあ…女の人  
みたい…ノノノノノノ」

「……………アンタその耳寄越しなさい。」

「は?」

「寄越せ!……………!」

「ちょ、やめ、いやあああああ!……………!」

……………。

「アンタさあ、ホント女子にまでモテモテよねえ?」

「……………そう……………かな?」

肩に乗ったフィフィが呆れたように言った。

……………何というか……………後輩の人達の中には、ボクのこと男だっと思っ  
てるみたいですが、いい不服なんですけど……………。

この間なんて、後輩の子に握手求められたし、写真もお願いされたし、サインもねだられたし…中には男の人もいたけど、多くは女の人からだった。別にいやってわけじゃない、と言ったら…まあ嘘になりますけど…

それよりも、ほとんどの女性はボクが男だと勘違いしてる方が問題なんです…はあ。

「…ね、アンタ男と見られなくなかったら一人称とか変えたら？」

「…うゝ…一時変えようと努力はしたんだけど…。」

でも何だか…地っていうのかな？次の日になったら“ボク”になってるんだよなあ…。

「…もう一人称は変えるのは諦めたんだ。」

「ふゝん…そう。」

…まあ、原因は地に戻っちゃうっていうのもあるんだけど…

一番の理由は前にリュウジさんの前で“私”って言ったたら…

『キシヨ。』

こんな言われたんですよ！？たったの三文字で感想述べられたんですよ！？すっごくショックだったんですから！！

「あゝ……そんじゃ皆の前で公表したら？ボクは女でーすっつって。

「そんなのする度胸がありません…。」

いえ、恥ずかしいってのもあるんですけど、他に理由があるんです。

「……リュウジ？」

「はい…。」

そうなんです、リュウジさんに言ったら絶対あの人アノ手コノ手で放送室とか校長室とか乗っ取りそうで恐いんです……何だかすごくで、行動理由はボクのため、じゃなくて『おもしろそう』、だと思っ  
うんです……。

「……ま、一々気にしてたらラチあかないからね。気にしちゃダメよ？」

「うん…ありがと。」

…確かに、気にしてたらキリがないもんね……うん、気分入れ替えよ。

そして気持ちを新たに、下駄箱の蓋を開けた。

【パサ】

「？あれ？何か落ちたよ？」

「え？」

フィフィが足元を指差してその方向をしてみる。

……紙？

「ゴミかな？」

「さあ？」

とりあえず拾い上げてみる。紙は小さく四つ折にしてあって、端っこから可愛いキヤラクターの絵が描かれている。単なるゴミじやなくて、手紙みたいだった。

…ボクの下駄箱から落ちたってことは、ボク宛？

「……………」

【カササ】

ともかく中身が気になったから、紙を広げてみる。案の定、紙には字が書かれてあった。

え〜と？……………。

「アルス〜。何書かれてあったの〜？」

……………。

「？アルス？」



「まあ、一番わかりやすい場所だからじゃない？」

「あ、なるほど。」

「それよりも、この内容。実にシンプルじゃない？『好きです、付き合ってください。今日の放課後、体育館裏で待ってます』って。」

「だな。でも手紙が可愛らしいっていうのはどういう意味だ？」

「きつと気を引こうとしてるんだろう？」

…ボクを尻目に手紙についての話題で盛り上がる皆さん……相談しなきゃよかったかなあ？……はああああ。

「アルスったらモテモテだねー」

「ホントホント」

「……魔王、ファイファイ、怨んでいい？」

「サーセン……」

…八つ当たりなんて嫌いですけど、こっちは真剣に悩んでるのに和やかに話す二人に一瞬イラっときました。

「でもさ、アルスの人気度だったらもつと手紙あるはずじゃないの？」

「そうだよな。なんせファンクラブがあるくらいだし。」

前々から思ってたんですけど、ファンクラブって具体的にどんな活動してるんだろう…。

「ああ……その件はね。」

「？香苗、何か知ってるのか？」

「うん……。」

苦笑する香苗さんを見て、何だかろくでもないような理由なんだな

と確信するボクでした。

「……そのファンクラブなんだけど。」

「うん。」

「……ラブレターとか、そういうの徹底的に排除してるらしいわよ」  
「？」

「……は？」

「つまり、下駄箱とかに手紙が入っていたら速攻ポイ、てこと。」

……やっぱり……。

「しかも数人で下駄箱やら何やらを監視するもんだから……。」

「なるほどな……ラブレターの二つや二つ、来ないのも無理ないわけだ。」

「つーか何つー活動してんだあいつら……。」

……とゆうより、何でわざわざ監視する必要があるのかな？

「まあ今回は恐らく、ファンクラブ会員達の目を盗んで下駄箱に入れた、と考えてみてもいいわね。」

「そうだな……にしても、ファンクラブの連中もあくどいことをするな。」

「ラブレターぐらい許してあげてもいいのにね？」

「だよなー？」

……。

「……でも皆さん、ラブレターホントはいららないんでしょ？」

『モチ。』

見事に声が重なった!?

「だって…ね？」

「そりゃあ…。」

「うん。」

「ねー？」

……………。

【ガラリ】

「あ~~~~~めっちゃすつきり~~~~。」

『!?!?!?!?』

!?!?!?!?

「?あ?お前らどした？」

『いえ何でもありません!!』

「?」

ドアが開いてトイレから戻ってきたリュウジさんが中に入ってきたと同時に口を噤むボク達。セーフ。

「…っーかお前ら、何の話してんだ？」

「あ、そうだった。すっかり話題が反れてたな。」

「うん…実はね、アルスちゃんにラブレターが…。」

「?ラブレター？」

「お前ってあれだよな。ワザとじゃなくて純粹に無知っていつのが反感買うよな。」

「興味ねえことは知らん。」



いえ、興味云々じゃなくてこれ一般常識だと思いますよ？

「そんで？そのラブレターってのはどれだ？」

「あ、はい…これです。」

おずおずと手紙をリュウジさんに渡す。正直恥ずかしいですけど…  
／／／／／

「え〜と〜？……………」

おお、果たし状か。」

「何でやねん。」

「おお！？雅の関西弁ツッコミ!？」

「珍し!」

「クツ！ボイスレコーダーに録音するの忘れてたわ…。」

いえそこまで大騒ぎすることですか!？

「いやだってさあ、これ。体育館裏に来てって手紙、俺何回ももらったぞ?」

「そりやお前の場合だろ。これはアルス宛だから果たし状なわけねえだろ。」

「つか今時果たし状ってのも古臭くねえか？」

「聞けよ人の話。」

こ、コント始まっちゃった…。

「…君達、遊んでる場合じゃないだろ。」

「んにゃ？そうなんか？」

「いや俺は遊んでる気は……。」

「雅、龍二と一緒にだとアンタも遊んでるよつにしか見えないのよ。残念だけど。」

「……………そうか……………」

「!?ま、マサさん!? 暗い、暗いです!？」

「…ともかく、どうすればいいと思う…?？」

……………あの、本題に戻ったのはボク的には嬉しいんですけど……………マサさんどうするんですか？

「ん〜、どうするもこうするも、相手がわからないんじゃないかね〜?？」

「だよねえ、う〜ん……………」

……………マサさん、放置確定です……………ごめんなさい。

「……………ふむ。」

皆が悩む中、一人手紙をじ〜っと見つめつつ考えるリュウジさん。手紙に何かあるんでしょうか？

「……………うし。」

【ガタ】

そしておもむろに席を立った。

「?リュウジ?どしたのよ?？」

「ん?いやなに、下見に行くんだよ。」

「え？下見って？」

「相手の顔見に行くってこと。」

ふうん……………

！！！？？

「え、相手わかるんですか！？」

「まあな。大体見当はつく。」

「何で？名前書いてないよ？」

「後で教えてやるさ。」

ボクらの質問を適当に受け流しながら、リュウジさんは教室から出て行った。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

ボ、ボクらも行かなきゃ！

「二階、二年生教室前」

「お、ここだな。」

リュウジさんが辿り着いた場所というのは、ボクらの教室のちょうど下にある教室だった。つまり二階です。

「……ところで龍二、アンタホントに相手誰かわかったの？」

「モチ。」

さも当然といった風に返答するリュウジさん。聞かせてもらいたいです、切実に。

「ほれ、ここの字見てみる。」

「？」

指差された手紙に書いてある一文字を見てみる。そこには『付き合ってください』の真ん中部分、“て”の文字だった。

「……これがどうかしたの？」

花鈴の質問にボクも同意します。別に何の変哲もない文字ですよ？ まあちよつと歪な形してますけど。

「お前の目は節穴かバ花鈴このボケナスが。」

「バ……！？」

……言つてたらボクまで罵倒されるとこでした。

「とりあえず黙つて聞けよ？ちよつとでも喋つたら舌切る。」

花鈴さん、怒鳴りたかつたのに口抑えてたからできませんでした。そりゃそうですよね、エル若干抜いてますもんリュウジさん。

「いいか、説明すつぞ？この“て”だけど、ほれ、この大きく反り返つた部分。ほとんど丸みだいになつてんじゃない？」

…確かに、逸れてるといふより丸いですね。でも“て”に見えなくもない……。

「で、この部分と字を書く時の力加減、そして字の位置。これらを全て合わせて憶測すると、おのずと書いた奴が誰か見えてくる。」

「…何でそんなことでわかんなのよ？」

「最近になつて全校生徒の行動パターンやらなんやらの情報を掌握することに成功したから。」

ちよ、掌握つて！？いつの間にな！？

「……さすがリュウちゃん……。」

「……情報大王……。」

カナエさんとクミさんが啞然として呟く。あれ？クミさん、以前までは通り名の名称“情報王”だったような気がしますが？

「さ、てと。この手紙を書いたのは……。」

手紙を片手に、窓から教室の中を覗いてキョロキョロとお目当ての人物を探すリュウジさん。ボクも手伝いたいけど、誰だかわからないので傍観しています。

「……………お、あいつあいつ。」

「え、どれどれ？」

「見えない〜！」

花鈴さんに遮られた魔王。背低いですもんね。

え〜っと、誰が手紙を……………あれ？

「どこですかリュウジさん？」

「ほれあいつあいつ。」

あいつって……………女子の人達がより固まって談笑してるのしか見えな  
いですよ？

「どこよ？」

「だからあいつだって。」

いえ、ですからあいつって…

「ほれ、あの黄色いリボン付けた三つ編みの女子。」



教室

「はあああああああ……。」

結局、大きなショックを受けただけで自分達の教室へと戻ってきたボクら。特にボクなんて机に突っ伏してしまってます。だってしようがないでしょ？

「…結局、男と間違えられてたわけね。」

「それ言わないでファイファイ……。」

そもそも、こういう展開は生まれて初めてなんですけど……。

「…い、いや、まさか女の子にもらっちゃうなんてね！？」

「大変だなアルス！」

「ドンマイ！」

「……ホントに大変です……。」

「……。」

気分を紛らわせようとしてくれたカナエさんとクミさんとカリンさんでしたが、ボクが本気で困ってるのを見て申し訳なさそうに俯いてしまいました。

「……でもホントどつどつするのよっ。」

「……どつどつ……。」

いえ、別に男の人から手紙もらったとしても悩んでたと思うけど、



それ以上に困った事態になっちゃうなんてなあ……はあ。

「どつするもこつするもねえんじゃないね？」

……へ？

「リュウくん、策あるの？」

「別に策とかいらねえだろこんなん。」

えっと……どつという意味かな？

「放課後、会って話しつけてくりゃいいだろ？」

……。

「……あの、それについて悩んでるんですけど。」

「だあらわかんねえか？自分は女だったのを証明しにいきゃいい。」

……

！あ、そっか！

「普通考えつかねえか？んな簡単なもんを。」

「……すいません、混乱してて気付きました。」

そつ……そつだよね！相手はボクのこと何か勘違いしてるんだから話

せばわかるはずだし！

ああ…何で気が付かなかつたんだらうな…。

「…ところで、手紙に書いてあったが何に付き合えってんだこれ？  
買い物」

「いい加減理解しろよお前。」

あ、マサさん復活してたんだ。

と、ともかくこれで何とか乗り切れそう…。

「…ところでアルス。」

「？はい？」

クミさんが神妙な面持ちで声をかけてきた。

「このラブレター…なんだけど…もし、相手が男性からだったら君、  
どんな返事をしていた？」

「…！？え、ええ！？な、何でそんなこと！？」

「いや、気になってたから…で？どうなんだ？」

「あ、それアタシも気になる。」

「私もー！」

え、え、ええ！？そんな！？

「…何の話なのやら。」

「龍二は黙っててよ。」

「花鈴にはもれなくエルで真っ黒に。」



……リュウジさんが気付かなかったのに怒ってしまったただけなんですから……。

↳放課後↳

「……ふう。」

じ、時間が経つのがすごく早い気がする……。

時刻は五時半、放課後。手紙の通りに体育館裏に来てる。相手の方は来てないみたいで。

「……………」

当然、ボク以外誰もいない。皆曰く、こういうのは第三者が首突っ込むべきじゃないとか……いえ、わかるんですけど、正直心細いです。ファイファイも先に帰ってしまったし……。

……言い間違えた。心細いんじゃないかと緊張します。こういうのは初めてだし……。

「……な、何て言おうかなあ？」

そつだ、練習しないと……え〜と……。

「……無理です、ごめんなさい。」

無難にこれだけでいいかなあ？……あ、ダメか。男じゃないって言うのが目的なのに普通に断ってるだけだし。

「えと……ボクは女です、ごめんなさい。」

……ちよつとシンプルすぎたかな？

「……あなたはボクのことを男性だと思い込んでるみたいですけど、ボクは生物学上、女性なんです。外見だけで判断してはダメですよ？第一印象のみで決め付けてしまう人というのは、大抵嫌われてしまいます。それは人間の心理的な問題であり、そもそも……」

話がインテリっぽいに小難しい上に自分でも何言ってるのかよくわからない。

「……じ……実はボク、女の子なんです キヤハ」

キヤピ という擬音がつきそうなくらい無邪気に言ってみた……  
……激しく自己嫌悪に陥りました。

ああ、風がヒュ〜って吹いてます……惨めです……。

「……とゆーよりウケを狙ってるわけじゃないのにボク何やってる

「んだろっ……。」

ガクリと肩を落とす……だんだんとリュウジさんみたいになって  
るボクがいるような気がしないでもないんですが……。

…と、とにかく口上考えないと……。

「あの……。」

「……。」

びびっくりした！気配無かった！

「は、ははははい！？」

「……。」

振り返ってみれば……朝、覗き込んだ教室の中にいた子だった。

「え、えと……あなたが手紙くれた人？」

一応、確認のために聞いてみる。

「は、はい……三下良子といいます……！」

「……そ、そうですか……。」

……リュウジさん、あなたはすごいです。今さらなんですけど。

「……そ、それで話というのは……？」

「……………」

自分で聞いててなんですけど、呼び出した理由は手紙ですでに把握しています。頭の中では断り方を脳内イメージで練習中。

「実は！」

「！」

って早い！心の準備できてないですよ！？

「実は！…前々から…」

「は、はい…」

……………つわぁ、何だかこつこつってドキドキする……………。

「…私、先輩のことが好きでした！！」

い、言った……………！じゃなくて言われた……………！

「それで……………付き合ってくれませんか！？」

……………よし！

「え、え〜っと……………ですね……………」

……………お願いです、そんな純粋な眼差しでボクを見つめないでください断りにくくなりますから！

「…あ、あの。勘違いしてるよじですけど…」  
「？」

よ、よし行け自分！

「…ボク女ですよ？」

や、やった！言い切ったあ！！

「…ですから、ボクとあなたとは付き合えな  
「知ってますよ？」  
「ですよね？ですから……………」。

……………へ？

「い、今なんて？」  
「ですから私、先輩が女なの知ってますよ？」  
「……………」。

よ、予想GUYです！！！？？

【あまりのことでアルスはキャラが壊れております】



「え、え!?!じゃ何で!?!」

「だって私……女の子にしか興味ないんですもの。」

ふ、What!?!??

【あまりのことでアルスはキャラがかなり壊れております】

「ずーーーーーーーーっと前に、初めて先輩見た瞬間から惚れてました。」

「……………」。

こ、コケコッコー?

【あまりのことでアルスはキャラがどうしようもなく壊れております】

「つまり、先輩は私からハートを奪っちゃったんですよ?」

「……………」。

「ですからあゝ……………」

責任、とってくださいね 「









「…操取られかけたんですよ？ホントに恐かったですから。」

「操？何それ？」

「…もついいですよ…。」

リュウジさんて黒いのか純粹なのかさっぱりわかりません…。

「操とかどうとか知らんけど、何の力も持っていない女子に迫られて泣く勇者ってどうよ？」

「う…！」

い、痛いところ突かれた…。

「…あ、あの…できればこのことは内密に…とくに魔王とかには…。」

「

「はいはい、（一応）黙っておいてやるよ…。」

「今小声で一応って言いましたよね！？」

「気ニシナイ。」

「気にします…！」

楽しんでる！この人絶対楽しんでる…！

「まあんなことは置いておくとしよう。」

「置かないでください。」

「で？結局の話、お前さんが女だったことはわかってもらえたのか？」

「……………」

いえ、わかってもらえた…という以前に、相手はボクが女だということを知った上で告白をしてきたわけですから…え〜と…。

「……まあ、わかってもらえた……ということになったような何ていうか？」

「んだよその曖昧な表現はよ。」

「うう……べ、別に、いいじゃないですか……。」

「そこで膨れっ面になる意味がわからんのだが？……まあ確かにどうでもいいか。」

リュウジさんは基本深く追求はしない人なんですよね……。

「さ、ともかく帰るとするかっつと。」

言つと同時に、片手で気絶しているミシタさんを担ぎ上げるリュウジさん。ミシタさんの体格上、重そうに見えないですけど、一人人を小枝の如く持ち上げるリュウジさんはやっぱりすごいと思います

……

…岩小指で持ち上げる方がもっとすごかったけど。

「？何してんだ？行くぞ。」

「あ、はい……。」

……。

「…あの、リュウジさん。」

「んあ？」

歩きながら、ふと疑問に思ったことがあったから口にした。

「何でここに来たんですか？先帰ったはずじゃあ……。」

ボクがここに来る前、リュウジさんは晩御飯のしたくをすると行って魔王達と一緒に先に帰ったはず……。

「んだよそんなことか。」

疑問に思うボクとは違って、当たり前のような感じで言うリュウジさん。

「決まってんじゃない。」

何か心配だったから。」

……ふえ？

「……心配？」

「お前あれじゃん？何かあがり症だし、もしもの場合とか考えたら何か不安になっちまってさあ。」

「……はあ。」

「つーわけで、一人とつと戻ってきたってわけよ。でバッテリーお前が叫んでるのを聞いて覗いてみればあの状態だ。」

……。

「……心配……してくれましたか？」

「何だ悪い？」



「い、いえ……その……。」

「？」

「……あ、ありがとうございます。」

「どいたまして。」

心配されて嬉しい反面、恥ずかしさから少し俯き加減でお礼を言うボクに、リュウジさんは別に何とも思っていない風に返した。

……ホント、この人って信じられないくらい鈍感で……それでいて遠回しに優しく……恥ずかしいと思うようなことを平然と言っているのけしてしまう。

そんな彼に、ボクはいつか……この気持ちを伝えれるかな？

今まで感じたことのない、暖かくて、でも、どこか切ない……この気持ちを……。

「さ、とりあえずこいつを家の前にほっぴり出してから帰るぞ。」

「……いえほっぴり出したらダメですよ!？」

「気ニシナイ。」

「いえですから気にしてくださいって!？」

……でも少なくとも今は……このままでいいかな？

「ところでこれ、捨てていい？邪魔んなってきた。」  
「だからダメえー!!」

だって今が……何だか心地いいから。

↳翌朝、登校時↳

「良子！オッハー！」  
「……………」  
「？良子？どしたの？」  
「……………」  
「どちら様ですか？」  
「…は？」

「……………」  
「リュウジさん。」  
「んあ？」

「……あの時、彼女のどこ叩いたんですか？」

「脳天。」

「……………」

ボクは彼女に、リュウジさんの代わりに心の中で謝罪しました。

第二百二十五の話 アルス、マジでピンチ！（後書き）

…最近、ラブコメ感が無いな〜ってことでちょっと頑張ってみたつもりなんですけど…軽くガツクシ。

第二百二十六の話 散歩でマンボ！

（龍二視点）

「は！せい！」

【ドツ！ゴス！】

「リュウくん！！！」

「ああ？何だ？」

【ドツ！ドツ！ドツ！】

「遊ぼー！」

「あーちよつと待ってな。」

【ズゴ！ボスボス！】

「む！今じゃなきゃだ！」

「無理だつーの。あともうちよい。」

【バキバキバキバキ！グシヤア！】

「……あ、あのリュウジさん？」

「あ？何だよアルス？」

「……さつきから何殴ってるんですか？」

「サンドバッグだが何か？」

庭の木の枝に吊るした揺れるサンドバッグを止める。今日は何か気分的にボクサーの真似事をしてみたかったから、ちよつどもらったサンドバッグを有効に活用していたのだ。

「……サンドバッグ？」

「んだよお前らサンドバッグも知らねえのかよ？ いいか？ こいつはな」

「いえ知ってます。」

「どーん！」

「びぎやあ！？」

「アルスー！！」

俺のありがたき説明を遮り、あまつさえ知っていると断言したムカつき小娘の頬をビンタならず回し蹴りを食らわして庭の端まで吹き飛ばしたら塀が壊れた。へー。

「あ、アンタいくらなんでもあれは容赦なさ過ぎ」

「ああん？」

「サーセンでした！」

反論してきたフィフィを軽く威圧、フィフィたまらず土下座。コンマ一秒もかかってない素早さだった。さすが。

「……い、いだいです……。」

「クルル、これ当ててやれ。」

「あ、うん。」

いろんなところがボロボロのアルスを取りに行っていたクルルに氷水の入った袋を差し出す。何故持つてるか？ あれだあれ。コメデイーは不可能なことさえも無視すんだよ。

「ふう……ま、いいか。」

とりあえずボロボロになったサンドバッグを地面に降ろす。

「俺今から散歩行くけど、暇なら一緒に行くか？」

「行くー!!!」

クルル即答。えらい早いなオイ。

「私もー。」

「……ボクも行きますけど……。」

『当然、今回は私も行くぞ。』

満場一致で全員で散歩しに行くに決定。

「うし、じゃ準備すつか。」

「……あの、リュウジさんその前に……。」

んあ？

「……そのサンドバッグなんですけど、血が滲み出てませんか？」

「気のせいだろ？」

「それにサンドバッグにはあるまじき打撃音が……。」

「それも気のせい。」

「後何か袋の端から金髪みたいなのが……。」

「そういうサンドバッグだからな。」

「……何か袋の穴から手が出て地面に血で『タスケテ』って書いてありますけど……。」

「気ニシナイ。」

これはとある友人から借りた死神みたいな奴で、名前はあえて言わない。殴っていいと言ったから遠慮なく気分転換の道具にしてやったが、もうダメだなこれは。後で捨てるか。

「じゃ行くぞー。」

「イエーイ」

「オツケー。」

『承知した。』

「え！？ちょ、サンド……これホントに放置！？」

イエス。

〈自宅前〉

さて、自宅前に出たところでっ…。

「リュウくん。どこ行くの？」

「適当にブラブラ。」

「え…何の理由もなしにですか？」

「アホオ。何の理由も無しにブラブラするから散歩なんだろうが。途中で何か新しい発見があっかもしんねえだろ？」

「な、なるほど…。」

『妙に説得力があるな…。』



散歩愛好者をなめんな。

「よおし、じゃどこらへんブラブラしに行くか言ってみる。」

「…じゃボク公園へ」

「却下。」

「早っ!?!とゆうか何ですか!?!」

「今日は別のルートへ行きたい気分だ。」

「……それじゃあ、」

「うし、商店街行くぞ。」

「『『聞いた意味ない!?!?!?!?!』』」

こいつら日に日にチームワーク（主にツッコミ）上がってってるな。

因みにサンドバッグは庭に放置してきた。

\*\*\*\*\*

さて、商店街に到着したところで……早すぎやしねえか?とかいうツッコミはなーしょ。

「あ、見て見てリユウくん！可愛いクマさん！」

おー、テディベアが並んどるな。確かに可愛い。

「あ、これも可愛い〜！」

ほほお、ぬいぐるみショップに立ち並ぶぬいぐるみ達が。イヌやらネコやら、よりどりみどり。

「きゃー！これもかーわいー！」

おー、相変わらず立派な髭してんなあカー　ル・サ　ダース。アホクルルめ。

「わあ！このお人形さんなんて生きてるみたいーい！」

「うー？」

「あの、生きてるみたいって私の息子なんですけど……。」

すみませんねえ身も知らない赤ん坊連れの奥さん。

まあいい。適当にクルルはポイしておいた。

「あ、待ってよりユウくん！」

待たん。

「？アルス？何してんだ？」

「……………」

何かの店の前で見上げながらじゅっとなんかを真剣に見つめているア  
ルス。何なんだ？

……………ほお？

「ツバメの巣か。」

「ツバメ…ですか？」

そうか、こいつらの世界にはツバメがないのか。

「…可愛いです…。」

まあ、確かに可愛いな。雛がピーチクパーチク鳴きながら母親から  
メシもらってるのを見てるのは何か和む。

「…あ。」

おっと、母親飛び出してっか…子供らの為にも頑張れよー。

「……………ツバメって可愛い…………。」

「……………」

キラーン (よからぬ考え思いついた時の音)

「…アルス？」

「?はい?」

「ツバメ

脊椎動物門 鳥綱 スズメ目 ツバメ科に属する鳥の一種。

北極と南極を除いたほぼ世界中に分布し、約八十種が知られている。日本ではツバメ、コシアカツバメ、シユウドウツバメ、リュウキユウツバメ、イワツバメの五種が知られている。ツバメの長さは10〜12センチ、背中は大体黒青色、腹面は白色、頸部は褐色である。白い翼と流線形の体は長距離の飛行に適している。尾は二つに分かれ、長い。害虫を捕食とする益鳥。餌は飛んでいる昆虫を飛行しながら捉える。

はいここまでで質問は?」

「……………え?」

長い説明についてこれなかったのか、目が点になっております。

「何?もっかい説明して欲しいか?ツバメは、」

「いえ、そうじゃないんですけど……………害虫?」

「ん。」

「……………昆虫?」

「イエス。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ツバメって可愛いと同時にすごいんですね……………」  
「……」  
「……」

はいアルスの中からツバメのイメージがガラリと変わりました！。

「……と、ところでツバメが食べる虫ってどついつのなんですか？」

「ああ、例えば……。」

「きゃー！ー！助けてー！ー！！」

「あれ。」

「あ、あれか………つてフィィィィィィィ！……？……？……？」

そしてさっきのお母さんツバメは虫(?)を捕らえて戻ってきた。

「私は虫じゃないわよおおおおおおお！……！」

「じゃ無視。」

「無視もしないでってきゃああああああああああ！……！食われる食われる殺されるつうつうつうつうつうつうつう！……！」

「フィィィィィ落ち着いて！魔法撃とうとしないで……！」

こらこら、何の罪もないツバメの家族を殺しちゃいけないよ？

「ちよ、ホント、マジで助けて！助けてっ！いた！あいた！つつつくなああああ……！」

……やべ、見てておもしろい。

「り、リュウジさん見てないで助けてくださいよ……！」

「お前がやれば？」

「……っ、ツバメさんを傷つけることなんてできません……！」



「はい。」

即答だった。

「何だよわかんなかったのかよ。」

ツバメの親にフィフィ返してくれるよう頼んだだけだ。」

「その頼むってというのがわかんないんですけど!？」

「鳥語喋ったからに決まってるだろーが。」

「あつさり自白!？とゆうーより喋れるんですか!？」

「おう。」

『因みに私もだ。』

「アンタも!？」

「つーか何か知らんけど俺とエルって動物と会話できんだぞ?知って  
たろ?珠で実証済み。」

因みに、さっきの三点リーダーだらけのセリフんどこ、あれが俺とツバメの会話。分かりやすいように補足しといた。どんな会話したかはご想像に。

「もういいか?行くぞ。」

「……はい。」

何かイマイチ納得してない表情だけど気ニシナイ。

「……今度ボクも動物語習おうかなあ……。」

「無理だと思っけどなあ……。」

後ろでブツクサ言ってるのも気ニシナイ。

「……ところで魔王は？」

「あ、そっいゃ……。」

さっきほったらかしにしといたっけなあ……………

ふむ。

「多分こつちだ。」

「た、多分って……。」

俺の勘がそう言っている。

「え〜〜〜……………あ、いたいた。」

そう離れてないところにあるスーパーの前で、人だかりができていた。さっきから何か賑やかだなあと思ってたらこれか。

「む〜！見 えーなーいー！ー！」

で、その最後尾んとこで必死にピョンピョン飛び跳ねているバカがいた。

「おいクルル。」



「あ！リュウくん！」

こっちに気がつき、人だからから離れて駆け寄ってきた。

「何してんだお前？」

「何か人が一杯集まつてるから、何してるのかな〜って思って。」

「……でも見れてないんですね？」

「だって皆身長高すぎるんだもん！」

お前がチビなだけなんだもん。

「……あの、それより人だから全員女性っていうのはどういうこと  
なんでしよう？」

「んあ？」

……確かにアルスの言うように、人だかりは主に女性で構成されている。ドラマのロケとかで大物俳優がこの商店街に来たんかね？  
何かキヤーキヤー言ってるし。

「……気になるな。」

「でしよ？」

ふむ、だがこの人だかりの中掻き分けつつ全身するのは苦勞するぞ。  
完全密集してるしな。

「ふうむ……………」

お？」

ふと目に留まった物があった。電柱だ。

「…おし、ちよいと待ってる。」

アルス達をその場に残し、電柱に向かって軽くジャンプ。

「ほいっと。」

よし、いっちゃん上に着いたぞ。あ？電柱くらい軽くジャンプするくらいで頂上いけるだろ？

どれどれ、人だかりができる程のもんだからどれほどの大物だ？

『すいませんいい加減離れてくれませんか？』

『帰れないんですけど！？』

『も〜少しくらいいいでしょ〜？』

『お姉さん達といいことしようよ〜』

『うわぁ！？ちよ、カルマ助けて！この人達目がホント恐いって！』

『大丈夫だ。いざって時にはお前を身代わりに』

『何恐ろしいこと言ってるの！？』

『も〜可愛いわね〜 食べちゃいたい』

『いや食べるのは勘弁してくださいマジで！？』

.....。

『…リュウジ、確かあれは…。』  
「ロウ兄弟だな。」

あいつら何してんだか…あ、ケルマさり気なくケツ触られてビビってる。カルマうまいことかわしてる。

…ま、どうやら困ってるみたいだし、しゃーねえ。

「とっ。」

電柱から飛び降り…

「『龍閃弾』!!」

【ドコオオオオオオン!!】

『きゃあああああああああ!!??』

急降下龍閃弾を人だかりの一部めがけて食らわしたった。あ、大丈夫大丈夫。超超最大限にリミッターかけといたから死にはしないだろう。

多分食らった奴らは全員病院行きだけだ。

「とっ。」

【スタン】

地面に突き刺さった拳を抜いて少し跳躍、華麗に着地した。あ、やべ。スーパードの入リロボロボロな上に地面にでっけえクレーター作っちゃった……まあいい。責任は適当に他の誰かに擦り付けちまうか。

「よおお前ら。」

「ーり、リュウジ！」

「……。」

あつれー？ケルマはわかるが、カルマが何か冷たい視線送ってきてんな。せつかく助けてやったのに。

「……リュウジ、やりすぎじゃないですか？」

「え、そう？」

「皆ロボロボロじゃないですか……。」

「気ニシナイ。」

「そうだぞカルマ！せつかく助かったんだから！」

「うんお前黙れケルマ。」

「ええ！？」

毒舌レベルアップしてんなカルマの奴。

「……この人達どうするんですか。」

「そのうち復活すつたら？」

「……ならいいか。」

「いいの！？」

いんだよケルマ。

「ありえ？カルマにケルマじゃん。」  
「！？ま、魔王様！？」

クルルの声で若干カルマの口撃で沈んでいたケルマ復活、クルルに駆け寄ってつた。

「魔王さまあああああああああ！！！！」  
「『岩よ、押しつぶせ』。」

【ズドン！】

いきなりクルルにとびついたケルマをカルマは上空に召喚した人の頭程度の大きさの岩で押しつぶした。

「魔王様、お久しぶりです。」  
「やほーカルマ！」

そして何事も無かったかのように話を進めるカルマとクルル。ま確かに俺も内心いつものことだからなあって思ってたからどうでもいい。

「……………死ぬ。」  
「ちょ！？ケルマ頭から血出てますよ！？」  
「いんじゃないの別に？」  
「いやよくないでしょファイファイ！？」

唯一心配してんのはアルスだけだった。

「つーかお前ら何してたんだ？」  
「…僕だって正直何でこうなったのかわからないですよ。」

さよか。

「……ただいつも通りにカナエさんからお使いを頼まれて、それで今日はいつものスーパーが休みだったからこちらのスーパーに来たんですけど……。」

あ、ごめん先読めた。

「……一人が声かけると二人、三人と増えていって最終的にはあれだけの集団に……。」

ドンマイイ。

「ホント、何でこうなっちゃったんだろーね？」

「……ケルマ、お前いつの間に復活してたんだ？」

「しっちゃ悪いかー!!」

「悪い通り越して最悪最低だ。むしろ死んで欲しかった。」

「ねえカルマ。僕達双子だよな？同じ血を分かち合った兄弟だよな？」

「最近お前と血縁関係になったことを心の底から後悔し始めてきたんだけど。」

「リュウジ~~~~~!!」

「何故に俺に泣きつくよ？」

多分カルマがこんな素晴らしい性格になるのはケルマに対してだけなんじゃなかるか？

「まあ、二人とも顔綺麗だから取り囲まれるのも無理ないよね。」

「……それ言わないでください魔王様……気にしてるんですから。」

「え？顔綺麗なのっていいじゃないですか。」  
「顔綺麗だからこういうことが起きるんだよ。」  
「……………」

アルス、反論できず。

「……まあ、その、頑張ってください。」  
「……………ありがとう。」

よかったなロウ兄弟。慰めてくれる奴アルスがいて。

「と、ところで魔王様達も買い物物ですか？」  
「ううん、リュウくんとお散歩」  
「そーゆーこった。」

……あ、何かケルマ瞳が一瞬キラーンて光った。

「……カルマ、僕ちよつと用事が。」  
「どうせ魔王様と一緒に散歩したいんだろ。」  
「ギクツ。」

今時口でギクツって言う奴も珍しい。

「……そ、そんなわきゃねえだ。」  
「どこの方言だ。いいからさっさと帰るぞ。お使いの途中だろうが。」

「ま、待って！せめてもう少し魔王様のお顔を！」  
「キモイ。」

「え、それ純粹に傷つくって待ってってばあああああ……！」  
「では皆さん、僕らはこれにて。魔王様、またいつか。」

「ああ、またな。」  
「バイバーイ！」

暴れるケルマの襟を掴んで引きずりながら去っていったカルマなのでした。

あ、やべ。俺あいつらおもしろいから好きだわ。

「……両極端な双子ですね。」  
「そうね。……。」

にしても、まあケルマの奴叫んでるよ結構向こうまで行ったのに。

「……そんじゃ、そろそろお昼だしラーメン食って帰ろうか。」  
「わーい」  
「はあ、お腹すきました。」  
「私も。」  
『食えん。』

さー周囲に散らばってる女性群は無視してラーメンラーメン

……いつかクルル連れて香苗ん家行ってみつか（ロウ兄弟のコント  
見に）。



くで。く

「……………何スカこれ。」

後日、かほつす恭田の家に商店街の通路とスーパーの損害賠償三百万の請求書が届いたそうなの。

第二百二十六の話 散歩でマンボ！（後書き）

サブタイのマンボ！と本編は関係ありません。  
よ！？

それ前書きで言え

第二百二十七の話 逆立ちハンデ（前書き）

更新遅れました、ごめんなさい。

あ、でも理由はちゃんとあります。あとがきで言いますので。

## 第二百二十七の話 逆立ちハンデ

（アルス視点）

「あ、くうううん……………っと！」

朝、爽快な気分状態で起きて思いつきり体を伸ばす。

……………すみません、さっきの声に関してはツッコミ無しでお願いします。

「やてと。」

布団から起き上がって窓のカーテンを開ければ…

【シャ】

「……………ん……………」

心地いいお日様の光が降り注いできて気持ちいいんです。こう、体の奥底から力が湧き上がってくるっていうのか、何というのか……………まあそんな感じですよ。

「……………え〜と今の時間は……………」

目覚まし時計をチェックしてみると、時刻は六時半を指し示していた……………いつもより早く起きすぎちゃったな。

うん、二度寝するわけにもいかないし、かといって魔王もフィフイもまだ寝てるし……………。

「……………朝の稽古でもしよつかな。」

まあ暇だし、リュウジさんが朝食を作り起きてくるまで打ち込みでもしよう。

ともかく、顔を洗うために洗面所へ行くために襖を開けて

【スツ】

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………リュウジさん？」

「おうおはようアルス。」

「あ、はい……………じゃなくてですね。」

「んあ？」

「……………何してるんですか？」

「見てわからんか？」

「全くわからないから聞いてるんですけど。」

「言うねえお前。」

「いえこれくらい言いますよボクだって。」

「さいか。」

「……………で、何をしてる……………んじゃなくて何でテーブルの上で頭だけで逆立ちを？」

「ノリ？」

「即答！？後聞かないくださいよ!？」

「ノリでテーブルの上に乗ってるだけに。」

「乗り……………って何言わせてるんですか!？」

「お前が勝手に乗っただけじゃんよブアゝカ。」

「……………もういいです。」

最後の“ブアゝカ”という言葉にもすごい悪意が込められていたので泣きそうになりました。

……………それにしても、いきなり襖を開けたらテーブルの上に布巾をしてさらにその上に頭のみで逆立ちしてる人見たら……………驚きますよね？

最近、リュウジさんの行動が突拍子なく行われるので若干恐いです。こないだ一緒に歩いてる時なんて前を歩いていた派手なメイクと大胆な服装をした女性の人達三人に何の前触れもなく飛び蹴りかまして吹っ飛ばして後日アマゾン……………だっけ？というところその人達が発見されたというニュースが流れたんですけど……………いえ、ホントにいきなりの出来事だったんですけど……………。

因みに飛び蹴りをした理由は『俺の第六勳がとりあえず何かを蹴り飛ばせと告げた』とのこと。そんな適当な理由で他人を不幸にしないでください。

「で？今朝はえらい早起きだな。」

「はい、昨日は早く寝ましたからね。」

「そうか。」

……………昨日の昼に魔王が公園の子供達と団結してボクに襲い掛かっ

てきたのを相手にしてたからすごく疲れたのが最大の理由でしょうけど。

「で、目覚めがいいから朝の訓練でもするってか？」

「はい。よくわかりましたね？」

「勘。」

あ、相変わらず鋭い…。

「まあ適当にやってる。呼んでやるから。」

「はい。」

「じゃ俺は今からヘッドスピン型テーブル磨きをやるから。」

……あえてツツコまないでおこう。

ひとまず、洗面所へ赴いて蛇口を捻り、出た冷たい水で顔を洗い、未だに寝ぼけていた頭を覚醒させる。そして顔を濡らしたまま鏡台の前に置いてあるチューブに入ったねりわさびを手にとって

「ってあぶなああああ！！？？」

【バシン！】

いきおいよくねりわさびを背後の壁に投げつけた。

「おお、ナイス反応だアルス。」

「やっぱ犯人あなたですか！！」





「

目が！目が目が目が目が目が目がああああああああああ  
ああああああ

「【ピンポンパンポン】アルス混乱中につき、しばらくお待ち  
ください」

「……………」

「おい、まだ怒ってんのか？」

「怒ってないです！！」

「お〜恐い恐い」

様々な意味で覚醒したボクは、庭で愛剣（鞘付）を手に取り木製人形に向かって構える。朝日がボクがいる庭に降り注いでキラキラ光っていて落ち着く空間の中、全然落ち着けないボク。

そしてリビングのテーブルの上で胡坐をかくような姿勢で頭だけで逆立ちしながら回転してテーブルを磨いているリュウジさん。もうわけがわかりません。

「……………はあ。」

もういいや…気を取り直して特訓しよ。

「……………えい！」

【ドン！】

木製人形に一瞬で駆け寄り、腹の部分に横薙ぎを叩きつける。剣は鞘に入れたままなので、鈍い音しかない。

「はあ！」

【バス！】

「せい！」

【ドス！】

「そいやあー！」

【ドシュー！】

そこから渾身の突き、切り上げへと繋げ、最後に右上段足刀蹴りで人形を吹き飛ばす……この連続攻撃が一番使い勝手いいかな。相手と距離を離せるし。

「……よししょつと。」

吹き飛んだ人形を拾って元の位置へと戻し、もう一度構える。体にしっかりと動きを覚えさせないと。

「おーいアルスー。」

「？はい？」

いざ切りかかろうとしたらリュウジさんが家の中から呼んだ………  
つて！？

「さっきより回転スピード上がってません！？」

「イエーイ。」



ベランダから庭へと頭から着地した。

……あの、ホント何がしたいんですか？

「あんよ、俺さつきからテーブル磨きまくってたんだけどさ。」

「……はい。」

そりゃあんだだけ回転してたら綺麗にもなりますよ……テーブル、いつも以上にすごい光沢放ってるし。

「で、磨くの飽きたわけ。」

「……はあ。」

……確かに飽きると思います。

「てなわけで、暇つぶしに俺と特訓もといタイムン張るぞ。」

「……。」

「?どした?何か不満でもあんのか?」

「い、いえ!不満とかじゃなくて!……。」

まさか、とは思っただけど……。

「……その姿勢でやるんですか?」

「当然。」

即答でした。

「……あの、逆立ちしたままの状態というのは無理がありすぎるのでは……。」

「いやさ、何かこういう格好で動き回るのって新鮮じゃん？」

いろんな意味で新鮮ですよね……。

「だーいじょうぶだって。それなりに動けるし。」

「……まあ、リュウジさん自身がそうならボクもとやかくは言いませんけど……。」

……あ、考えてみれば……これってすごいハンデですよ？不安定な姿勢からだと行動も制限されるし、腕も使えないし……

これは……逆転のチャンスかも……。

「じゃ、さっそくやるか。」

「は、はい……！」

ボクは剣を構え……リュウジさんは頭だけで逆立ちして胡坐をかきポーズをとる。それ構えですか、とはツッコみません。

「……。」

「……。」

互いにジリジリと距離を取り、間合いを測る。互いとは言っても、ボクはリュウジさんの周囲を回る感じに足を動かし、リュウジさんはその場で頭のみで回転してボクを見続ける……あの、恐いんですけど？

「……。」  
「……。」

……よし！

「でりゃあああああああ！……！」

剣を横に振りかぶりながら一足飛びで接近する。

狙うは……支えとなっている頭！

「ほいっと。」

【ピョン】

！？え、うそ！？そのまま跳んで避けた！？

「とっつ。」

【バキィー！】

「はう！」

「そりゃ。」

【ドゴー！】

「ふぎゅー！」

【バゴー！】

「あきゅー！」

【ズゴスー！】



「よし。」

【シュ】

…伏せた顔を少し上げてみれば、リュウジさんが逆立ちの状態から飛び上がって普通に立ち上がってるのが見えた。

「逆立ち飽きた。」

「……………あ、飽きたって……………」

今さらですか…。

「うむ、十分暇つぶしてきたし、そろそろ朝飯にすつぞ。」

「……………あい。」

うう……………ボクってやっぱりまだまだ修行が足りませんね……………

でもいつか……………いつか絶対にリュウジさんよりも……………！

「あ、アルスそのままじっとしてる。死ぬぞ。」  
「へっ？」

【ドン……………】



「……………」。

ちよつと目の前に空高く宙を舞っていたボクの剣が突き刺さった。  
ちよつと鼻との距離紙一枚分……前髪が少し切れました。

「な？」

「……………」。

やっぱりこの人に勝つのは無理かも……………。

## 第二百二十七の話 逆立ちハンデ（後書き）

ただいまー！

？何のことかと？ああ、言ってなかったですね、ごめんなさい。実は昨日までデンマークに行ってたんですよ。旅行とかじゃなくて、ある世界大会に参加してたために更新遅れたんです。

で、さっそく帰って他の小説が更新されたかどうか確認したり、感想とかも見てみたら……うわぁびっくり、多くの方が感想評価を送ってくださいって、狂喜乱舞の如く転がりました！ありがとうございます！！

………あの、少し時差ボケで疲れてるんで返信はもう少し………すいません。

第二百二十八の話 新技は世のため人のため……

〔花鈴視点〕

「おっすー。」

「あ、カリンさんいらっしやいませ。」

アルスに店員みたいに迎えられたアタシこと花鈴は、龍二の家に遊びに来ました。暇で暇でしゃーないんだもん。だから。

…とゆーかアルスの格好…。

「？アルス何してんの？」

「……えっと……。」

…頭に花柄の頭巾被ってヒヨコマークがプリントされたピンクのエプロン着てるアルスの姿は、そりゃすんごく可愛いけど……あ、ハタキ持つてる。てことは……。

「掃除してんの？」

「……はい。」

「へえ？手伝い？」

相変わらずアルスって律儀ねえ。

「……いえ、その……。」

？

「……………ババ抜きで負けて罰ゲームとして。」

……………。

「……………なるほど。」

「100戦中100敗でした。」

「全敗じゃん。」

「…クスン。」

「…つか100戦ってやりすぎ。そしてアルス弱すぎ。」

「…まあいいか。で？龍二どこ？」

「あ、リュウジさんならリビングにいますよ？でも…。」

「…でも何？」

「……………あの通りです。」

リビングに通されたアタシが目にしたものは……………

「……………あいつ何してんの？」

「それがずっとあのままでして…。」

ベランダの淵で外を見ながら胡坐をかいて座っている龍二だった。

「あ、カリンちゃんいらっしやーい！」

「やほ。」

「やほ……ねえ、あれ何してんの？」

和室から出てきたフィフィとクルルに小声で聞く。

「ん……わかんない。」

「右に同じね。」

「あれ？フィフィ私左側に立ってるよ？」

「お黙り。」

うわ、フィフィツッコミキツ。

「……………」

……………で、相変わらずあいつは無言……………。

「軽く一時間前からずっとあのまんまなのよ。」

「ふ〜ん……精神統一かしら？」

「それが声かけても無言で……………」

……………何か気になるわね……………。

「……………龍二〜？」

「……………」

試しにアタシも声をかけてみる……………うあ、やっぱり無視。

「ねえ、アンタ何してんのよ？」

近づいて上から顔を覗き込む。

……いつもののんびりしたような顔じゃなくて、おだやかに眠っているかのように目は閉じられてピクリともしない。両手はへソの前で重なるように組まれていて、やっぱり微動だにしない。

……完璧座禅じゃないの。

「……………」

……………」

【ミヨーン】

……………」

【ペチン】

……………」

「…反応無し、か。」

ホッペタつねってみても動かない……すごい集中力。

てか何でいきなり座禅？今までだってこんな姿見たことないのに。

「……………」

「……………龍一？」

耳元で小声で呼んでみる……………。

「……………やっぱり反応無しね」「何だ?」「ってうわああああお!?!?」

いきなり目開いた!?!マジびっくりした!!

「んだよいきなり叫びやがってただでさえうるせえのにお前。」

「し、しょうがないでしよずっと黙ってたんだからアンタ!つかちよっと待って何か今すっごい聞き捨てならないこと聞いた気がする。」

「気ニシナイ。」

「いや気になりまくり。」

……………相変わらず腹立つわねこいつ。

「で?何か用か?」

「べ、別に?暇だったから……………そーゆーアンタは何してたの?座禅?」

「いんや。」

?..違うの?

「……………新技開発のために体内に氣を溜め込んでたところ。」

……………は?

「新技?」

「そ。」

.....。

「…どんなの？新技って？」

「今から見せてやるさ。」

そう言つて、人差し指を前方の外へと向けた。

「見えるか？」

「？何が？」

.....。

「…あ、蚊のこと？」

「ピンポン。」

うわ、小ささ。よく目を凝らさないと見えないわねあれ。

「で？あれがどうかしたの？」

「まあ見とけて。」

そして龍二は人差し指を蚊に向けたまま再び瞼を閉じた。

……当然、蚊だつてジつとしてるわけもないから、外をブンブン飛び回っている。すでに人差し指の軌道上から外れていた。

……つかホント何がしたいのこいつ？

「.....。」

「.....ねえ、リュウくんどうしたの？」



「クルル、ちょっと黙つといた方がいいわよ。殴られるから。」

フィフィ、アンタ経験済み？

「……。」

……沈黙……。

「はっ  
「はっ」

【ビッ！…！】

……

はえ？

「……うし、完成。」

……あ……

いきなり目を開いたかと思うと、指先から青くて細い“レーザー”が飛び出し、ちょうど射線に入った蚊と向かい側の塀を貫いた。”

当然、蚊はポトリと落ちた。

.....。

「.....え、何？何ですか今の？」

「新技。」

「.....嘘ん。」

.....。

「名づけて『龍糸貫』りゅうしつかん。」

.....あれですか？さながらレーザーガンってこと？

「いやあく長時間胡坐かいてたせいで足疲れたぜ.....花鈴、足もんで。」

「あ、は〜い.....って何でやねん!！」

ピシーっと右手の甲でベタなツツコ!!!。

「え〜いいじゃんよ足もむくらい〜。」

「あのね、アタシはアンタなんかにかき使われるような人間じゃないの。甘く見ないでよね!！」

つたく、誰でも利用しようとするんだからこいつは.....。

「.....花鈴？」

「何よ？」

「発射。」

【チユーン！】

.....。

「悪いけどもんでくれね？」

「.....はい。」

仕方なくズボンの上から両足のふくらはぎをもむことに。いやだつてね？振り向いた途端に頬切れたんですよ？背後の壁五ミリくらいの小さな穴開いたんですよ？つーか発射してんの見えなかつたんですよ？額貫かれるよりもんだ方がマシでしょ？

.....ええそうですよ、どうせアタシは龍二にこき使われる運命なんですよ！悪い！？悪いですか！？ええそうですね悪いですね！！

「.....カリンさん、怒ってません？」

「.....いいえ？ぜんっぜん？」

アルスにニッコリと笑いかける。自然ともむ手にも力が入った気がするけど多分気のせいでしょう。

「あゝもうちょい強めに。」

「.....。」

.....チツ、やっぱり痛がらないか。

「あ~~~~~気持ちいいの~~~~~.....。」

「お爺ちゃんかアンタ。」

「何て言うか、頭から血が出るくらい気持ちいいの.....。」

「……それ気持ちいいとは言わないわよ？」

むしろ痛そう通り越してヤバイ……とゆーか例え自体がヤバイ。

「あ~~~~でもマジメに気持ちいいな~~~~」

「そ、そう？」

「俺も孫が出来たら肩もんでもらうか。」

アンタまだ18でしょうが。

「……おう、サンキュな。」

「ええ。」

もみ終わると、龍二は足をプラプラ揺らした。やれやれ。

「……。」

「……。」

「……何？二人とも？」

「別に。」

ぶぶつきらぼう……アルスとクルルが妙にぶつきらぼう……。

「何アンタ達？ジェラシー。」

「！？ち、違います！！！！！！！！」

「？何それ？」

フィフィの言葉に顔真っ赤なアルスと話にならないクルル。両極端。

「……どうでもいいけど、新技なんて考えてどうすんの？」

これ以上強くなったらこっちが困る。色々。

「ん、ああ。最近、龍閃弾が強くなり過ぎちまったんですよ。」

……………はい？

「……………それどゆこと？」

「直接相手に弱龍閃弾ぶち込んだら気絶じゃ済まなくなっちゃまったってこと。」

弱ですか、弱なんですかい。弱ぶち込んだらどうなるんですか。いやあえて聞かない方が身のためかも。

「つーわけで、龍閃弾に代わる新しい技を考えてたんよ。」

「……………それがさっきの？」

「イエス。」

……………。

「……………あのさ、龍閃弾に代わる技って言ったよね？」

「ああ。」

「……………つまりさ、それって純粹に……………」

お仕置き技？

「イエス。」

「……………！！！？？？」

【ズサア！】

あ、アルス達一斉に後方へ避難した。

「……いや、あのさ、それお仕置き技にするよりさあ。」

「ん？」

「あゝ……………！そ、そう！世の中のために使いなさいよ！」

アルス達のためにもって意味合いも含めて。

「？例えば？」

「た、例えばさあ……………「きゃー！ひったくりよー！！」……………」

……………いい例があった。

「ほお、ひったくりか。」

「……………そうね。」

かなり近くから声がしたわね。

「……よつと。」

で、龍二は庭の塀をよじ登ったんで、アタシもつられてよじ登って塀の向こうを見てみる。

……………あゝ、黒いフードパーカーを着込んだ男が、スーツの女性の持つてるハンドバッグを無理矢理奪おうと引っ張ってるといふ典型的な図がそこにあった。

「……………随分タイミングかつ都合いい展開ね。」

「作者はこういうのが好きなんじゃね？」

いや、ただ単純にこういう展開にした方が楽なんだと思う。まあ確かにここ人通り少ないけどさ。

「にしても、あの女バッグ放しやいいのに。」

「……重要なもんでも入ってるんじゃないの？判子とか。」

「なるへそ、んじゃ放すわけにやいかねえよな。」

「そうよねえ……あ、とゆーかあのバッグ、『ヘルメス』のバッグじゃないの？高級ブランドの。」

「ほう、詳しいな。」

「当たり前でしょ。ああいうのチェックしてんだから。」

「ふーん、そういうのよくわからんが、高級ブランドのバッグは手放したくはねえだろな。」

「そりゃそうよ。アタシだってあれ手放すくらいだったら財布上げるわよ。」

「それマジで言ってるのか？」

「……まあ、第一持ってないけど。ヘルメスなんて。」

「じゃダメじゃん。」

「あゝ欲しいな〜バッグ……。」

「って！和やかに会話してる場合じゃないでしょう!？」

「同感。」

いつの間にかアタシの隣までよじ登ってきたアルスとフィフィのツッコミにアタシ達は現実世界に引き戻された。

「あ、そうだったわね……じゃ龍一。ドカーンとやっちゃって！」

「龍閃弾？」

「いや違う違う違う！新技！」





.....。

「ほね。」

【パイ】

「うごめおおおー！...??？」

.....。

「とどめに四発目。」

【ドーン！】

「ぐげふ！？」

.....。

「応用技、完成。」

「.....。」

二発目は右肩を貫いて、三発目は左足のふくらはぎ、四発目は拳大の青い気功球が指先から飛び出して男の急所に命中、男は気絶した。

「.....リュウジ。アンタやりすぎ。」

「そうか？」

「.....あの、さっき編み出したばかりなのにもう応用技ですか？」

「なんとなくやってみたらできた。」

「.....。」

規格外ってこついうのかな？

「……………」

「で？世の中のためってのは「どういつのか？」

「……まあ、その……はい。」

正直なところ何とも言えません。

「そかそか。」

龍一は何を納得したのか、頷きながら塀から降りた。

…アタシとアルスもいつまでも塀の上で身を乗り出したところでも何にもないから、降りることにした。

「うむ、じゃ軽くお茶にするか。」

「……さ、賛成。」

……ま、まあ役に立ったってことでいいかな。

「よし、そんじゃさっそく……アルス？」

「？はい？」

「わりいんだけどお茶菓子切らしてっから買ってきてくれね？何でもいいからよ。」

「え……ボク掃除中なんですけど。」

「今からレッツゴー。」

「……あの、正直外暑いので魔王に」

「照準よし。」

「い、行ってきます……！」

人差し指を向けられたアルスはエプロンを慌てて脱ぎ捨ててリビングから出てった。つーか頭巾取り忘れてるわよ。

「あ、クルルー。和室散らかしっぱなしだから片付けるよお前。」

「え〜？今乗り気じゃない。」

「右目に風穴。」

「びええ！片付け開始！！」

ボソリと呟いた龍二の言葉に慌てたクルルは和室へGO。

……………。

「……………世の中のために使うんじゃないの？新技。」

「いやあこれ脅しに使えるな〜って。」

「……………この鬼。」

「結構。」

……………さいですか。

こうして、新技は世の中のためとアルス達お仕置き用として利用されることとなりました。ドンマイ。

第二百二十八の話 新技は世のため人のため……（後書き）

最近、時差ボケ抜けたはずなのに寝不足です……。

第三百二十九の話 自業自得だ雅（前書き）

サブタイトルの意味は読めばわかりますよ。

第二百二十九の話 自業自得だ雅

（雅視点）

「ふう……宿題終わり。」

カタン、と自室で机の上にシャーペンを置いたのは俺こと、雅だ。やっと宿題が終わったとこでリラックスしようとしてるとこ。

……でも英語の問題、一応見直しておくか。え〜っと、第一文型は……。

【コンコン】

「？はい？」

ノックの音がし、勉強を一旦中断させた。

【ガチャ】

「マサ？」

入ってきたのはスタイルだった。

「？何だスタイル？」

「そろそろ休憩したらどうです？一時間半経ってますよ。」

「え、もうそんなに？」

「はい。」

言われて時計を見てみると、時計の針が午前中の十時半から午後  
十二時半を指していた。

……集中し過ぎたな。

「わりい、今から昼飯用意するよ。」

「……………それなんです……………」

？

「何だ？言いづらそうに。」

「……………実は「雅」……………」

ステイルが言おうとしてるのを遮るかのように部屋に入ってきたの  
は、我が姉である涼子姉さん。何かえらいご機嫌だけど？

「姉さん、何かあったのか？随分機嫌いいな？」

「ウフフ」

……………

あれ？何だろう？この嫌々な胸騒ぎは？

「まあ降りてきなさいな」

「……………ああ。」

鼻歌歌いながら部屋から出て行く姉さん。対し、未だに顔真っ青に

してるステイル。

……まさか。

「……ステイル？」

「……はい。」

たったこれだけでステイルが何を言おうとしてるのかわかった。俺とステイルのみ使える意思疎通だ。

……同じ被害者同士、だからかな？何か泣けてくる……。

「……逝くか。」

「ええ……。」

上の俺の言葉は誤字じゃない。それだけは言っておこう。

忘れてる奴も多いだろうけど、俺とステイルは二階で隣同士の部屋を使っている。ステイルの部屋はかつて俺の爺ちゃんが使っていた部屋で、今はもういないから使っているというわけだ。結構古臭いのが置いてあると思われるがちんだけど、洋風の部屋で壁紙は白いという落ち着きがある部屋だ。唯一爺ちゃんの名残があるとすれば、ベッドの脇に置いてある古臭いツボくらいだ。

まあ俺の部屋は……大した物はないから言わないでおこう。いや深く追求するなよ？決してバレたらまずいもんとか置いてねえからな。

さて、誰に説明したのかわかんねえけど、一先ず一階へ降りてダイ



ニングへ。

そこには……………。

「……………やっぱか。」

「……………。」

『どうか姉さんの機嫌のよさが久々の登場で舞い上がっていたせい  
でありますように』……………という俺達の願いはことごとく打ち砕かれ  
たのを通り越して木っ端微塵にされた。

テーブルの上に置いてあるのは、料理と形容していいのかわからな  
い茶色い物体Zが複数、深皿の中には同じく何かスライムみたいな  
ゲル状の黄緑色の物体Xが四個、そして極めつけは中央にドドンと  
置かれてある七面鳥ぐらいの大きさの漆黒の物体（オメガ）が一  
つ……………しかも異臭がすごい。

この世とも思えない光景が、俺達の目の前に広がっていた。

「フフ、どう？私の自信作」

姉さんが嬉しそうに笑う。その笑みで多くの男性を虜にしてきたと  
か言われるけど、今の俺にはどっからどうみても死神が背後で笑っ  
てるようにしか見えない。

そう…姉さんの言う自信作とは、これらの謎の物体s。ご想像通り、  
姉さんは料理が壊滅的……………いや、消滅（？）的に下手なんだ。そり  
やもう材料や味付けは当然、焼くのも煮るのも、何故か電子レンジ

でさえ姉さんにかかれば殺人兵器生産装置に早変わり。

大体、料理に目覚めたのが十歳の時。俺は当時七歳で、その頃からトラウマを植えつけられた。よって、これからは姉さんに料理をさせるのは絶対にやめようと幼いながらも心に固く誓った。

……おかげで、今では俺が料理担当……龍二ほどじゃねえけど、一般家庭で作れる料理なら簡単に作れる。

でも今回のように、何の前触れも無く姉さんが勝手に料理を作ることもある……本人の前では言わないけど、超ありがた迷惑。

「……姉さん、何で？」

「うん、ずっと雅にだけご飯作らせるのは悪いかなって思ってね？」

悪いかなって思うんならいつそやめてください余計なことしないでくださいっーかすんな。

「……もしかして……迷惑だった？」

「……!?!?!」

「い、いや全然!?!むしろ超ありがたいさ!?!な? スティル。」

「え、ええええええええ!?!」

「そう? ……よかったあ」

……上目遣い+涙目からパアッと明るい笑顔になった姉さん。いくら血の繋がった兄弟だからってあれはダメだ、反則気味に可愛い……

しかも悪意なんてなくて純粹だから尚更だ。

「さ、早く座って座って。ご飯冷めちゃうよ?」

「…はい。」

テーブルから離れている入り口まで熱気がくるんだから冷めるなんてまずありえない、なんて言えない……。

とりあえず席に座る俺達。さらに異臭が強くなり、例えるとアンモニアの中にガソリンと腐った牛乳と腐敗した肉、とどめにクサヤを長年放置しておいた物をぶち込んだような物の中に入れられた気分だ。テーブルの上でピクピク痙攣してる羽虫がめちゃくちゃ多いように見えるは幻覚だと信じたい。つか信じる俺の脳。

「さ、どうぞ。」

「……………」

姉さんの輝かしい笑顔が向けられる中、俺とステイルは一瞬目を合わせてアイコンタクトを取った。

(ど、どうしますマサさん!?)

(落ち着け。まだ策が尽きたわけじゃない。)

(他にどうしろと!?)

(大丈夫だ……一番古典的だけど、腹が痛いと言ってこの場を離脱しよう!)

(そ、そうですね!)

「あ、そういえば二人ともこないだお腹痛いって言ってたから体の

調子を整える食材をたくさん入れたから安心してね」

(……………。)

(……………。)

(……………どうするんですか。)

(……………仕方ない……………あれをやるぞ！)

(！……………あれ、ですね？)

(そう、あれだ……………。)

(……………覚悟を決めなければいけませんね。)

(ああ……………いくぞスタイル！)

(はい……………！)

「い、いただきます。」

あれ＝降参。万策尽きた場合に用いられる作戦……………作戦とも呼べねえよコンチクショウ。

ともかく、テーブルのど真ん中に居座っている料理もといモンスター  
の表面にナイフで切り込みを入れ、一部分を剥がす……………この黒、  
絶対コゲとかそんな生易しいもんじゃない。コゲには発癌性物質が  
含まれているとか聞くけど、これ食ったら一瞬にして昇天すんじゃない  
ねえか？

……………うん、何だかこの物体の煙の中から地獄のような場所がつつす  
らと見える気がする。

「……マサさん。」  
「……ステイル。」

俺達は小声で囁きあう。逃げるための算段なんかしない。だって目の前にニコニコ顔の姉さんがいるんだから。

「生きてたらまた会いましょう。」  
「ああ……。」

これは決して大袈裟なことなんかじゃない。今回は今までの比じゃないからな。

そして俺達は口を開いて……

「……いざ行かん！」

星になった。

\*\*\*\*\*

「……。」

……。

「……………ん。」

……………ん。

「ま……………ん。」

……………ん？

「雅、雅。」

「……………ん。」

あれ？ここは……………。

「天国？」

「リビングよ。」

……………我ながら何とも笑えないボケかましちまった。

つーか今の、姉さんの声？……………何だこの後頭部のやわらかいの……………？

「大丈夫？」

また姉さんの声がし、ずっと閉じていた瞼を開けた。

至近距離に姉さんの顔があった。

「……つてうおい!!??」

すんげえ慌てて起き上がる。危うくお互い頭をぶつけるとこだったが、姉さんがヒョイと避けたおかげでぶつからずに済んだ。

いやそれよりも!?

「な、ななな何やってんだ姉さん!？」

「何って……膝枕？」

いや聞くなよつかわかつとるわ聞いているのは何でしてんだってこと。

……現在地はさっき姉さんが言った通り、リビング。そこにあるソファの上で俺は姉さんのやわらかい足で膝枕されてた俺。唐突過ぎだろコレ。

「……何で俺ここに？」

「えとね、料理食べた瞬間に二人同時にイスから転げ落ちたの。」

……。

「……じゃ俺死んだ？」

「死んでないよ？足あるでしょちゃんと？」

いやあるけどさ。よく気絶だけで済んだな俺。

「それで起きるまでずっと待ってたの。」

「……どれくらい寝てた？」

「えーっと、二時間半くらい。」

「……膝枕でか？」

「……いけなかった？」

だからその潤んだ瞳やめい！

「……いやいいけどさ、何ていうか、まあ……。」

「……恥ずかしかった、とか？」

ぐっ……。

「……そ、そっだよ。悪いか？」

「うっん？何か可愛いな〜って」

うっせえよ。

「あれ？そっいやスタイルは？起きたのか？」

「うっん、ずっと呻いてるから部屋に連れてったの。多分まだ寝てる。」

……頑張れ魔法使い。

「あ、それとね……さっきのご飯なんだけど……。」

「……!?!?!」

な、何だ!?!まさか冷めちゃったから電子レンジでチンして食べてね  
みたいなこと言っくんじゃねえだろうな!?!?



「…さっき龍ちゃんが遊びに来て…」

？

「お腹すいたって言うから全部食べて帰っちゃったの。」  
「……………」

龍二、俺お前の化け物っぷりに一生感謝するぞ。

「だからもう一回作り直し」ダメだ！…！！…？？」

思わず叫んで姉さんビクついた。いや、これはしょうがない。だって命に関わるし！

「ダメだ姉さん！今後一切、料理すんな！…」

「……………」  
ぐ！……また目をウルウルと！……だが！

「そんな目してもダメ！…」

俺は理性を総動員させて一喝する。よし、これでもう俺は姉さんの

純粹ウルウル攻撃に屈することはない

「……………雅。」

！！

「もしかして……………料理……………まずかったの……………？」

う……………。

「……………自信あったのになあ……………」

う……………。

「……………いつつも雅にばかり任せっぱなしだったから今回は頑張ったんだけど……………」

う……………。

「……………私って……………料理下手なんだね……………」

う……………。

「ダメだなあ……………私って……………」

う……………。

「……………ヒック……………」



「だから祝い事とかそういう時に作ってくれねえか？」  
「……雅……。」

……。

「……うん！ありがと、雅。」  
「……どいたまして。」

この日から、祝い事は恐怖の一日と化したのは言うまでもない。

「それじゃ、今度の雅の誕生日は期待しててね！私頑張っちゃうから！」

「……わーい、待ち遠しいな。」

誕生日過ぎるのが。

「じゃ俺ちよつと部屋でもつかい昼寝してくるよ……。」  
「うん。おやすみー」  
「ああ……。」

超こ機嫌な姉さんを置いて、俺はリビングから出た。

「……………」



## 第二百二十九の話 自業自得だ雅（後書き）

ね？自業自得でしょ？まあ雅はいわゆるシスコンですね。あゝあ、ヘタレ。

さてさて……第七十の話から続いている人気投票ですが、そろそろ締め切ろうかと思えます。そうですねえ……

締め切りは明日の夜十二時にします。

それまでは投票オツケーです。集計したら結果発表しまーす。あ、二人までオーケーなんで。

それでは、これにて……投票、待ってまーす。まあ来なかったら来なかったで……泣きます（オイ

では！

第三百三十の話 人気投票結果発表！(前書き)

ようやく集計が完了しました！

第三百三十の話 人気投票結果発表！

コ「うーややー！！ココロです！！なんだかんだで第三百三十の話です！すげえなげえ！もういつそ四桁いつとく？いやいやそこまで精神もたないかもしんじゃないじゃんバカ言ってるじゃねえよこの野郎！！」

ア「な、何でボクに向かって！？」

コ「なーんとなくー。」

ア「なんとなくー！？」

コ「さてさて、今回は第七十の話で人気投票を生意気にも開催し、これまで数多くの方からありがたき投票をいただいたので、そろそろ頃合かな？と思ったので、結果発表をしたいと思いまーす！」

ア「……………」

コ「……おい、テンション上げる。」

ア「！？ぼ、ボク一人で！？」

コ「お前以外誰がいる！他全員控え室にいんだよ！」

ア「……そもそも何でボクだけ」

コ「焼くぞ？」



ア「す、すいません、すいませんですからその手に集めた黒い電撃は放たないでください。」

コ「わかればよし。」

ア「……はあ。」

コ「よし、それではまずはサブキャラ紹介!!」

ア「……い、行ってみよう……。」

滝川 絵里（16）

性別 女

外見 黒目二本三つ編み黒髪 顔は上の中

性格 大人しい

好物 ハンバーグ

備考

龍二の通う高校の一年生。大人しく自ら自立とうとしない性格だが、親友兼相棒である明に振り回され、いやでも目立つ存在に。ただ、運動神経に関しては本人の方が上であり、バドミントン部に所属している。なのにドジっ娘気質。ある日の晩に数人の暴漢に襲われそうになり、偶然通りかかった龍二が連中をフルボッコにしたのを境に好意とも憧れとも言える感情を抱くようになる。当然、相手は全然気付いていないばかりか、時々忘れる。

一言『時々忘れ去られる存在の私って……クスン。』

三田 明(16)

性別 女

外見 黒目シニヨン黒髪 顔は上の下

性格 お転婆

好物 他人の弱m……フルーツタルト

備考

絵里と同じく高校一年生。つねに絵里とワンセットで行動してると言ってもおかしくない程二人は仲がいい。ただトラブルメーカーと  
いうのを絵に描いたかのようなお転婆ぶりで絵里を困らせる。運動  
神経は低く、部活はコンピューター部と案外地味ではあるが、他人  
の弱味等の情報を探るのが大好きで、一年生のうちに『怒らせては  
いけない人間』の仲間入りとされた。その為、情報収集の時は普段  
の体力よりも遥かにレベルが上がる。また、一時龍二に弟子入りを  
断られたがまだ諦めてない様子。

一言『情報収集なら任せてください(主に弱味)！』

神楽 真弓(21)

性別 女

外見 黒目ロング黒髪 顔は上の上

性格 大雑把

好物 寿司

備考

龍二達のクラスの担任教師。吊りあがった目がポイントで、見た目通り気が強く、そしてそこら辺の男より男らしい女性であり、多くの生徒の憧れの的……他のクラス限定で。性格は大雑把とあるが、意外にも遅刻には厳しく、当然のように遅刻する龍二にはチヨークを使った数々の必殺技を浴びせるが、今まで勝ったことはない。そのため、打倒龍二に執念を燃やす。ただ、ここまで厳しくする理由は、給料アップが目当てだとか。アルス達の転入に何の疑問も持たずにフレンドリーに接するという気さく(?)な部分もある。

一言『いつか龍二の額にチヨークめり込ませてやる……。』

珠(?)

性別 女メス

外見 三毛 とってもラブリー(?)

性格 お茶目

好物 焼き魚

備考

龍二邸に時々出入りしている三毛猫。普段はそこら辺をうろついたり、他の仲間達と一緒に行動したりしている。何してるかは謎。イタズラ好きであり、よく勝手に他人の家に忍び込んで何か盗んだりしてる。今では何故か会話できる龍二と世間話(という名の漫談)したり、クルルをおちよくったり、時には龍二の頼みで猫同士のネットワークを通して情報交換を行っている。余談だが、珠というのは龍二が名づけたもので、前の名前はポチヨムキンだった。

一言『ミ〜(こう見えて最近社会学に興味あるんですよ?官僚制の特徴と欠点とか)。』

日暮 亜沙子（18）

性別 女

外見 黒目ショート白髪 顔は上の上

性格 まじめ

好物 サバの煮付け

備考

古くから伝わる陰陽道を携わっている少女。普段は根暗な性格としてクラスの中に溶け込んでいるが、それは自らの正体を暴かれないためであり、本来はまじめで冷静な性格である。ただ毒舌。仕込み錫杖を持ち歩いており、いざという時は杖のまままで撃退、物の怪と対峙した時は『飛燕抜刀流』免許皆伝の腕を見せ付ける。アルス達とは旧校舎の調査中に出会い、また龍二の中にある秘密を見破った数少ない人物。

一言『決して己の力に奢れるな。待つのは破滅のみじゃぞ?』

コ「はいサブキャラ紹介でした。」

ア「……あの、タマちゃんの言ってた社会学って?」

コ「気ニシナイだアルス。あれは苦勞するぞ?」

ア「え、それどういう」

コ「はいはいさっさと撤退せい!!」

ア「ちょ!?!」

コ「はいアルスは控え室に帰らせましたので……」

それでは始まります! 『勇魔以上人気キャラ投票』 結果発表!!」

【パッパッパーヤッパッパーパッパッパーヤー!】

コ「うん、このリズム文字にすると結構難しい……」

さてさて、第七十の話から第百の話の中間発表をえて、第百三十の話である今回、多くの方から投票をもらい、誠に感謝しており、この作者コロコロ、皆様方に感謝の意を評したいと思う所でござい  
m【カーン!】いてえ!?!な、何だこの空き缶?……手紙?」

『長つたらしい上に堅っ 苦しい挨拶なんかいらねえんだよ燃やすぞ  
コラ by 龍二』

コ「……………え、ではなるべく短く……」

投票してくださった多くの方々、ホントにありがとうございますとございました

！来なければ泣く予定でした！（オイ

さて、それでは結果発表に行く前に一つ注意点がございます。

それは、投票したキャラがランクインされてないことを不快に思わないでいただきたいこと。こればかりは作者である俺ではどうにもできないので、どうかお許しを。

ではさっそく六位からいかせていただきます！何故六位からなのかはツッコミなしでお願いします！あ、言い忘れてましたが、ランクインしたキャラクターに来てもらってますので喋らせません。

ではでは………六位はこいつだあ！！！！」

【バツ！】 上から丸まっていた掛け軸が降りてくる。

コ「………佐久間 恭田！！」

恭「うおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！いいいい  
やったあああああああああああああああああああああああ  
！！！！！！！！！！ありがとうおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

コ「うつせえウゼエ黙れ死ね消える塵と化せポケナスが太平洋のサ  
メに食われる。」

恭「ねえひどくね！？ランクインしたのにその言い草ひどくね！？」

コ「今まで影薄、影薄太郎、影薄雑草太郎 e t c という愛称を付けられ続け、さらには自己再生能力という人外の力を手に入れてますますフルボッコにされてきた本作一哀れな愛すべきキャラクターが、堂々の第六位に選ばれました！」

恭「無視かよ！？んでもってそれ愛称とは言わねえよ！？それと人外って言うな！！てか哀れなのか愛すべきなのかどっちなんだよ才イ！？」

コ「また、感想欄で多くの方からのされたり爆弾送られたりで、皆様からの彼に対する愛情を感じました！」

恭「感じるかあああああ！！！」

コ「さて、そんなクソ野郎に。」

恭「まだ言うか！？」

コ「キャラクターに対するメッセージも募集した結果、多くの方から応援メッセージをいただいたぞ。」

恭「ま、マジ！？おおおお！俺ってやつぱイケてんじゃないね？」

コ「え〜、影の薄さに笑いました。」「くたばれ影薄！！」「影が薄くてもやれることはある。」「やられっぷりに笑いました。」「同情で入れてあげる。」「これからもいじられ続ける。」「死んで。」「どうでもいい。」「誰だっけ？」 e t c ……」

恭「待て待て待て待て待て待て！？前半ひでえし後半なんてすでに

応援でもメツセージでも何でもねえよ!？」

コ「安心しろつて。『頑張ってください。』とか、『影薄代表として頑張れ!』とか、『狂人』とかあるから」

恭「狂人て何だよ!？」

コ「さて、そんなじゃ次。」

恭「おいまた無視!？」

コ「え〜、恭田さんに質問がございます。

『龍二と恭田はどうして友達になったのか?』

という質問だけど?」

恭「あ?あ、あ〜……………それが。」

コ「歯切れ悪いなあ?」

恭「……………俺こつ見えて結構悪だったんだ。」

コ「知つてた。」

恭「……………そんでまあ、いろいろゴチャゴチャになってさ……………隣の連中にリンチされてたんだよ。」



コ「ほお？」

恭「そこに龍二が現れてさ、連中病院送り。」

コ「うわお。」

恭「……それから俺はあいつとつるむようになって、悪いこともやめた。」

コ「タバコ吸うこととか？」

恭「ああ。」

コ「ふむ……いつかサイドストーリーとして書くか。」

恭「おい！？」

コ「さて最後に！最近付けられたキャラクターの設定を発表します！」

恭「え、そんなんあのか？つか俺のは不死身って奴じゃ？」

コ「それとは違う奴。では、恭田に付けられた設定は……これです！……」

『一話攻撃されると、その回の間ずっとアフロ。』

恭「……………は？」

コ「では、第六位でした」

恭「ちよと待てこれ意味がわからな」

コ「うつせえ帰れ『ダークネスクラウド』!」

恭「ぎやばら!!??」

コ「さて、次々行きます!第五位はあ……こいつだ!」

【バツ!】

コ「……ファイレイド・フィアラこと、ファイファイ!」

フ「いやった!」

コ「多くの方が同じ意見で、『可愛い』とのこと。羽をパタパタさせるのがポイントの妖精ファイファイが、第五位!」

フ「ま、当然よね」

コ「そんな彼女にメッセージ!お姉さんぶってるのが可愛い。『マスコットみたい。』『寝姿かわえ〜。』『一家に一匹欲しい。』『味どんなかな?』等等。」

フ「ふんふん……!?!ちよ、待ちなさいよ!最後の何!?味って

!？」

コ「さあね？じゃ次は質問。」

フ「……深く追求しない方が身のためかしら。」

コ「え、彼女に対する質問はこれです。」

『ファイの体のサイズは？後生活用品はどうしてるんですか？』

とのこと。」

フ「あ……体の大きさはトップシークレットだから言えな」

コ「彼女の体長は15・6センチ。掌サイズです。」

フ「ちょっとおおおおお!!??？」

コ「ほら生活用品言え。」

フ「……いつか殺す!……え、生活用品はね、カナエの家にある  
ドールハウスっていう人間のオモチャにある物をリュウジが改造し  
てくれて使ってるの。ヘアブラシとか歯ブラシとか。」

コ「ほおほお、龍二にかかりやそんなのお手の物ってか？」

フ「小さいから結構苦労してたわよ？」

コ「なるへそ。質問の答えありがとうございました。さて次は最近付けられた設定発表！」

フ「ワクワク……！」

コ「……これだあ……！」

『踏まれても死なない。』

フ「………は？」

コ「それでは第四位GO！」

フ「ちょっと待ちなさいよおおおおおお………」

【ファイファイ、突風により退場】

コ「ではでは第四位！………なのですが、実は四人います。スロットだと大フィーバーです。

ともかく、第四位は………こいつらだ……！」

【バツ！】

コ「………クルル・バステイ……！」

ク「わーい！ありがとうー！」

コ「リリアン・ヴェルバーー！！」

リ「……………」

コ「そして、エルフィアン！！」

エ「ふん。」

コ「いやぁ見事に出揃いましたねー」

エ「まっただな。」

ク「皆仲良しー」

リ「……………」

コ「さて、彼女らが選ばれたのは、やっぱり可愛いとのこと。クルルは魔王という設定からかけ離れた無邪気さにより、票を入れてくれた方が多く、リリアンはその無口ながら恥ずかしがり屋、でもちよっとお茶目という性格がツボを刺激された方が続出したらしく、このような結果になりました！そしてエルは！」

エ「……………」

コ「……………何か哀れだから、とのことだ。」

エ「……………票入れた奴、そんなに私の雷撃を食らいたいのか？」



コ「あ、ランクインしたこと?」

リ「【コクリ】／／／／／／／／／／／／／／／」

コ「はいはい、顔真つ赤にしない。

さあて、そんでほうちよ……エルメッセージは。」

エ「貴様今包丁と言いかけたらう。」

コ「気ニシナイ。え、エルのメッセージ。『エルサイコー!!』  
『包丁としてもがんばれ。』『哀れでした。』『包丁は包丁らしく  
してる。』『エルは立派な包丁だからどんだけ気にしても包丁だ。  
』  
だぞ。」

エ「そいつら全員殺す!!」

コ「までい!!せつかくメッセージもらったんだから無礼なこと言  
うな!!それにもう一つのメッセージには、『愛してます、エル。  
え?どれくらい?そうですね、地獄と天国の差くらいありますよ。  
それでもわからない?ええつとですねー、龍二の戦闘力くらいあり  
ます。やっぱりわかりませんね。じゃあエルが包丁と呼ばれる確立  
ぐらいにしてください。』ってあるんだぞ!!」

エ「長いわ!んで結局は包丁か!!」

コ「いいじゃん!褒めてくださったんだからさあ!!」

エ「チツ!……まあよい。だいぶ包丁の扱いにも慣れてきたことだ。

』

コ「さいで……あ、それと。」

エ「？」

コ「お前、女だよな。」

エ「？何を今さら。当たり前だ。」

コ「……実はさ、俺の知り合いのほとんどが……お前のこと、オッサンだと思ってたらしいぞ？」

エ「ガーーーーン！！！？？」

コ「さ、次は新設定発表！まずクルル！」

ク「何かな何かなあ？」

コ「……これだー！！」

『レベル、珠以下。』

ク「にゃ、にゃんじゃこりゃああああー！！！？？」

コ「声までネコかよ。ま、いいか。エル。お前の設定。」

エ「私か……。』



コ「これだー!!」

『エルは切れ味が+1された!』

エ「……おい、何だこの地味な設定は。何の面白みもないではないか。しかも+1つて」

コ「はい次リリアンね。」

エ「おい!?!」

リ「……私?」

エ「……どうせろくな設定ではないのだろうか?」

コ「……これだー!!」

『リリアンのバストUP!』

ク「い、いいな~~~~~!!!!」

リ「……ブイ。」

エ「……い、今のところ一番いい設定ではないか?」

コ「あ、それと。」

いつかまた龍二とのデート話書く予定。」

ク「……!?!?!?!にゃにゃにゃにゃにゃんですとおおおおおお!!?!?!?!」

リ「……ブイブイ。」

エ「ダブルピース!?!」

ク「うわあああん!?!ずるい……!!?!」

コ「はっはっは、まだ土台も出来てないけどおもしろくなりそうだし」

エ「まったく……?!?!?!?!?!?そういえば作者よ。」

コ「?」

エ「もう一人、四位がいるのではないか?私達合わせて三人しかないぞ?」

リ「……そういえば。」

ク「そうなの?」

コ「あ……いや、その……。」

エ「??!何だ?」

コ「……実はもう一人は……。」

ク・リ・エ「うん。」

コ「……ライター。」

ク・リ・エ「……。」

コ「でもでも！ライターって言ったって俺のことじゃないぞ！  
？あくまで登場人物の一人としてのキャラクターのライターに皆さ  
ん投票してくださって……」

リ「……」  
「これからも頑張ってください。」  
「ライターさんに一票。  
理由はいつも楽しい話を書いてくださるから。」  
「……というメッセ  
ージがあるけど……？」

コ「だあああああ！！勝手に原稿を読むな！！」

エ「やっぱり貴様ではないk」

コ「世界の法則！！」

【ガシャーン！！】

エ「ぐはあ！？」

コ「さ、さあ続いて三位行こうー！！」

コ「コホン…では、第三位はあ……こいつだ!」

【バツ!】

コ「……アルス・フィート!」

ア「ど……どうも……。」

コ「んだよお何おずおずと出てきてんだよ?」

ア「だ、だって…ボクなんか三位って…いいんですか?」

コ「いんだよ、お前を選んでくださったのは他でもない、読者の皆様だぞ?自信持ちなさい。」

ア「は、はあ。」

コ「さて、龍二の家で居候してる中で一番苦労してる勇者少女アルスさん、本名アリス。その大人しい性格と見た目は中性的で中身は可愛い女の子な一面により、堂々の三位。やっぱり皆さん曰く、可愛いとのこと。一部萌えるとのこと。」

ア「あの、褒めてるんですかそれ?」

コ「で、メッセージの方は……」  
『アルス可愛い。』  
『アルスサイコー!』  
『アルスちゃん頑張れ。』  
『まあほどほどに頑張れ。』  
『アルスみたいな娘には頑張つて欲しいものです。』  
『勇者よ、君は身』

近に感じて仕方ない。頑張ってくれと言っておこづ。』 e t c ……  
一杯あります！」

ア「……ほとんどが頑張ってくれと言ってる気がします……。」

コ「じゃ頑張れや。では、質問が二つあります。」

ア「え、ボクに？

コ「え」とまず一つ目。

『アルスとクルルの最強技発動時のセリフについて。』

これは外国語を使ってるのか、造語かってことだね。これは俺が答えよ。

アルス達のは、ズバリ造語です。マイワードです。どうという言葉かはアルス本人から伝えます。はいアルス。」

【マイク渡す】

ア「え！？え、え」と……ば、ボクの最終奥義の『リスタイル・オム』はその、古来より神々が使っていたとされる最強の力が込められているボクの愛剣を完全開放させて、相手を一刀両断する技なんです。で、言葉自体は古くから伝わる古代語で、使えるのはボクを含めた一握りの人達だけなんです。でもファイファイ達妖精族は子供の頃から古代語を教わるらしいです。ボクは……まあ、その、勇者になつた時にある人から付きっ切りで教わったんで、はい。」

コ「はい長い説明ありがとうー。」

ア「…き、緊張しました。」

コ「あ、それとクルルの使ってる『ガレス・シエバンツァ』は俺が解説します。

あれもアルスと同じ古代語です。クルルの使ってる剣もアルス同様、神の力が宿っています。まあクルルのは暗黒神ですけど。で、これを開放させて異界の扉を開き、その穴から発射される紅蓮の業火が魂もろとも焼き尽くすわけです。因みにアルスの『リステイル・オム』の意味は『光』、クルルの『ガレス・シエバンツァ』は『闇』という意味で、対をなす存在なんです。

…こんなもんかな？」

ア「……ボクより作者さんが説明した方が早かったんじゃない？」

コ「はい無視しても一つ質問。」

『アルスがクルルのことを魔王と呼んでるのは、まだわだかまりがあるからなんですか？』

という質問です。で？結局どうなんよアルス？」

ア「……え〜と……その。」

コ「うんうん。」

ア「……正直に言つと、何とも思つてないんです。」

コ「……は？」

ア「えと、今まで一緒に暮らしてきたせいか魔王には何の感情も抱いていないし……でも口で名前を言つてもまた魔王つて言つて戻つてしまふんですよ……つまり、もう魔王というのは呼称になつてしまつてるわけでした……。」

コ「……ん〜……つまり、一種の仇名みたいな感じかあ……じゃあさ、例えば今が朝として起こす時にクルルのこと、魔王、じゃなくちゃんと名前で呼びながら起こす真似してみてよ。」

ア「あ、はい。」

……クルル、もう朝ですよ。」

コ「……。」

ア「……。」

コ「……違和感ありまくりな上に、旦那起こす嫁みたいだな。」

ア「……はい。」

コ「じゃ次行こう！」

最近アルスに付けられた設定は……！」

ア「……嫌な予感がします。」

コ「ね、ネガティブ……コホン……これだ!!」

『最近髪伸びた。』

ア「普通じゃないですかあああ!!」

コ「ははは、嘘嘘。ちゃんとした設定があるって。

コホン……では再び……これだ!!」

『若干剣の腕を取り戻してきた。』

ア「……少し嬉しいです。」

コ「さいですか。」

では、三位のアルスでしたー!」

ア「え、えっとありがとうございましたボクなんかに。」

コ「それでは、いよいよ二位の発表です!……こいつだあ!!」



【バツ！】

コ「……楠田 雅！」

雅「お、俺か？……ありがとう。」

コ「この小説の中では第二の主人公と言っても過言ではない雅。その主人公の親友兼ツッコミ役というポジションとイケメンヘタレ野郎という称号により、見事名誉ある第二位を勝ち取りました！」

雅「…スマン、明らか罵倒みたいな言葉が混じっていた気がするんだけど？」

コ「そしてメッセージには『雅かっこいい！』『やる時はやる男だ雅は！』『雅くんLOVE』『ヘタレー』『こ愁傷様です。』『ツッコミがおもしろい。』『さすがツッコミ役』という名誉あるメッセージが。」

雅「名誉のかけらもない気がする。」

コ「さて、そんな雅に質問です。」

『雅と久美は何故お金持ち？』

はい答え。」

雅「あ、ああ……うちの爺ちゃんが名のある資産家だったんだよ。今はもう死んでしまったけど、遺産を全部姉さんに譲ったんだ。元々姉さんはそういうのが大嫌いだったから最初は拒否したんだけど、爺ちゃんに生きていくために必要だし、何より俺達に使って欲しい、って言って聞かなかったから渋々遺産相続したんだよ。」

コ「複雑だ!!」

雅「…親戚とかどれだけ遺産狙ってたか…俺らも当初は肩身の狭い思いもしてきたもんだよ。」

コ「でも今は丸く収まったんだろ？」

雅「ああ。」

コ「あ、そうだ久美の家の事情は……うん、これはまあ、いつか話すとするか。」

雅「…いいのか？」

コ「いいと思う。」

さて、雅に最近付けられた設定は……これだ!!」

雅「…嫌な予感。」

『涼子の料理を食べ過ぎてタフな体に。』

雅「いいのが最悪なのかわかんねえ!？」

コ「いいじゃん。タフなんだよタフ？」

雅「……まさか夏休み中……。」

コ「食わせるよ」

雅「うそおおおおおおお!!???」

コ「はいはいクールキャラが台無しだからさっさと控え室へGOG  
O。」

さあてさてさて………今から一位の発表…の前に、少し意外な人に  
票が入っています。その人を上げてみます。

立花・エリザ・アンドリユー。

……ランクインはしなくとも、まさか出番がないこの人にまで票が  
入っていたのは驚きでした。」

エ「まあ、これもひとえに和食を食べ続けてきたおかげね」

コ「って出てきてるし!?!?コラコラ、勝手に出てきちゃダメですよ  
エリザさん。」



コ「おめでとございます、栄えある第一位です!!」

龍「あ、そ。」

コ「……………いや、あの、い、一位ですよ？第一位？トップですよ？最高ですよ？頂点ですよ？」

龍「別に俺あどつちやでもよかつたからなランキングなんて。」

コ「な、何てKYな奴なんだ……………!!」

龍「？KY？「いごちやあはー」」

コ「何じゃそら。違うわい。」

龍「あれま。」

コ「コホン……………え、ともかく栄光の第一位を獲得したのは、この小説の主人公、荒木龍二。その主人公にあるまじき傍若無人ぶりと最強っぷりと鬼畜っぷりに多くの方から龍二サイコー！というお言葉をいただきました。またラーメンも数多くいただきました。」

龍「ネットの中だけな。うまかつたぜ。」

コ「現実的なこと言うな。え、それでメッセージなんですけど、『龍二サイコー!』、『龍二は本当にいいキャラしている。』、『勇者と魔王よりも強いなんてすごすぎます。』、『時に強くて、時に優しい龍二が大好きです。』、『龍二がかっこいいです。』、『龍二の戦闘系が好きです。』、『龍二すげえ!!』……………正直数え切れません。」

龍「多いなあおい。」

コ「で、だ。質問も結構あるぞ？まず一つ目。」

『気功術は誰でも使えるんですか？』

だつて。どうなんよ？」

龍「知らん。」

コ「……いや答えてねえし！？ちゃんと答えるよ！？」

龍「あ？？…ん〜、何っーかあれだ。氣を操るには長い年月が必要なんだと。だがまあ、それを短期間の間に可能にするにはやっぱり才能とかそういうのがないとダメなんだとか。これ、ジジイ情報。」

コ「……さいでつか。」

龍「ま、ようは誰でも簡単にゃ使えねえってこと。」

コ「……え〜、次の質問。」

『龍一っていう人物はいるんですか？』

だつて？」

龍「……………」。

コ「？どした？」

龍「え？ああ、わりい。ちとな。」

コ「？」

龍「……さ、次の質問だ。」

コ「はあ？答えてねえじゃん？」

龍「質問だ。」

コ「いやだから答えて」

龍「しつもんだ。」

コ「……………はい。」

『龍二の倒し方及び弱点教えてください。』

……………「こ、これはさすがに……………ねえ？」

龍「あるぞ？俺だって人間だ。」

コ「！…？あ、あるんかい！…！どこだ！…？どどこにあるそれ！…？」

龍「お前が必死になってどうすんだ……まあいいか。

簡単、急所をつけ。」

コ「お前体始終鋼みたいになってっから無理だろ。」

龍「アホか。鋼以上の硬さのある剣とかに貫かれたら死んでまっわ。」

コ「……龍鉄風かけた場合は？」

龍「……………」。

コ「……………」。

龍「…さ、次行くか。」

コ「スルーかクオラ。」

コホン…では、最近龍二に付けられた設定です！」

龍「ふむ、どんなんやら。」

コ「……………これだー！」

『一日ごとに一レベルアップ。』

龍「…どういうことだ？」



コ「他小説さまのキャラとお前の強さが被らないようにした結果がこれなわけ。一日ごとに全てのパラメータが少しずつアップしてってるんだよ。」

龍「ほほお？最大は？」

コ「……一年でレベル365くらい。さらに一年でレベル365上乘せされるわけだから……そのうち宇宙征服なんて小指で出来んじゃないね？」

龍「んなこと言ったらまあ俺に対抗しようとしてくる奴ら増えんじゃないねえか？」

コ「あ、大丈夫大丈夫。力のコントロールならお前大得意だろ？」

龍「まあな。」

コ「じゃ大丈夫だ。力さえコントロールできれば一般人の中に溶け込めるだろ。」

龍「…そうだな。」

コ「（深く追求しない奴で助かった…）ま、ともかく龍一。第一位になっただから最後に何か言ってけよ？」

龍「はいはい。あー……」

こんな奴に付き合ってくれた奴ら全員に伝える。サンキューな。」

コ「こんな奴は余計だバアロオが!!」

龍「じゃ俺今からラーメン食いに行ってくつから。」

コ「あ、こらおい!!……ちっ、マイペースな奴め……まいつか。

さて、これで人気投票は終了しましたが……またいつか第二部やりたいな……まああくまで願望ですけどね。今んとこ予定ないですけど。

そうそう、答えられなかった質問等は、いずれストーリーで明らかになりますのでご安心を。

にしても、ホント投票ありがとございました……別の意味で泣きそうです(オイ

さて、そろそろお開きに……の前に、ちょっと次回の宣伝。

次回、またもや大長編!それも……ほぼ、シリアス!!

……シリアスも大変だなあ……でも時々書きたくなっちゃう俺です。

とゆーわけで、今後とも、長編含めてこの小説をよろしく願ひし



**第三十の話 人気投票結果発表！（後書き）**

ホント、票を入れてくださった皆様方、ありがとうございました！  
またこれからも読んでくれれば幸いです！

では次回、長編で！

第三百三十一の話 光りし者と呪われし者1 (前書き)

大長編、ストーリーート!!!

第三百三十一の話 光りし者と呪われし者1

く?????視点)

憎い。

あいつが憎い。

何で僕じゃない？

何であいつなんだ。

何であいつが選ばれたんだ。

何で全てにおいて勝っている僕じゃないんだ。

おかしい。

全て間違ってる。

何もかも。

腹が立つ。

ムシヤクシヤする。

だから気晴らしに、一時あいつの目の前で皆殺しにしたことがある。

そう、老若男女関係なく、見境無く、血の雨を降らせた。

その時のあいつの顔と言ったら……。

またあの顔が見たい。

あいつが今の僕のように憎しみを込めた目で睨んでくる姿が見たい。

そして虐殺したい。

あの恐怖に逃げ惑う愚かな奴らの顔が忘れられない。

だから僕はあいつを追ってきた。

そう……僕らの世界とは異なる、僕らにとって未知に溢れたこの世界に。

ああ、楽しみだ。

すごく楽しみだ。

あなたに会えるんだから。

そしてあなたの前で殺戮が行えるんだから。

そしてあなたを殺せるんだから。

だから……待っててね？

僕の愛おしい……たった一人の……。

（アルス視点）

【サアアア……】

……雨、か。

「むむむむむ……。」

「さあクルル？早く取りなさい。」

「……只今……十分経過。」

「十分間悩むものか？」

「こいつにとってはそんなの普通なんだっての、久美。」

ふと窓から視線を逸らし、横をしてみる。クミさんとリリアンが遊びに来ていて、魔王とファイフィとリリアンでこの間ボクが全敗したババ抜きで盛り上がっている。一方、クミさんはテーブルの席につきながらクツキーを食べ、リュウジさんも同じく向かい合わせに座ってお茶を飲んでいる。

ボクは……もう一度、右腕の肘を組んだ足に乗せたまま、ベランダ



の窓から空を見上げる。今日はあいにくの雨で、空は灰色の雲に覆われていた。大雨とも言えないけど、小雨とも言えない。雨はポツポツと水音をたてながら地面を濡らしていた。

……ただ、この雨はあの頃を思い出す……決していいとは言えない、最悪のあの頃を……

寂しさと悲しみに満ちた、あの頃を。

「とりゃあああああ!!」

「はいババ取ったー!私の勝ちー」

「うみやあああああああ!!??」

「……クルル、負け。」

「うえええええええええん!!」

「……とゆーより、リリアン強すぎではないか?」

「そりゃな、基本無表情だもんなこいつ。」

「……ポーカーフェイス。」

「まさにそれね。」

「うう……グス。」

……。

「……ねえアルス。」

「……?え、何ファイファイ?」

一人、感傷に浸っているとファイファイが飛んできてボクの肩にとまっ  
た。

「一人でなあにポケ〜つとしてんの？」

「…な、何でもないよ。」

「またまたあ〜 アルスらしくないよ？」

……………。

「…ボクだったたまには感傷に浸りたい時だってあります。」

「？感傷って？……………あ。」

何のことが気付いたらしく、慌ててボクの肩から離れる。

「…ごめん、アルス。」

「…いえ、別に……………」

「？何の話だ？」

……………そっか、リュウジさん達は知らないんだ……………でも……………。

「いえ、何でもないんです。」

「……………ただ、昔……………」

「ちょ、リリアン！？」

「……………昔……………楽しみに置いてあったパンから……………カビがボンって生えた事件があったから。」

ちよつとこけた。

「……………バカ？」

「……………あの、その哀れみの込められた目で見るのやめてくれません

「？」

悲しさ倍増しますから…違う意味で。

「む〜！こつなったらリベンジ！ねばねばーぎぶあっぶー！」「ねばー一個いらぬい。」

魔王、懲りてないみたいです。

「…あれ？リュウくんクッキーは？」

「あ、やべ。全部食っちゃったか。」

「えええ〜！！！！？？楽しみに置いておいたのに〜！！！」

「すまんつて。代わりにせんべいやるから。」

「やだやだー！クッキーがいい〜！」

泣きながら駄々こねる魔王。わがまま言わない。

「…はあ、しゃーねえな。駅前で買ってくるか。」

「あ…龍二、私が行く…。」

リリアンが名乗り出て立ち上がった。

「？リリアンがか？そりゃ悪いぜ。」

「いい…ちょうど雨にうたれたかったから。」

「し、詩的なこと言っただなりリアンつて。」

「どういたしまして…久美。」

……。

「リュウジさん、ボクも行きます。」

「あん？お前までか？何でまた。」

「リアンと同じ理由です。」

「似合わね。」

「うわぁ即答です！？」

軽く傷ついたボクでした…。

「…んじゃそう言うなら悪いけど買ってきてくれねえか？」

「…モチ。」

「はい。」

リュウジさんからお金を受け取り、愛用の革袋に入れる。

「じゃ行ってきますね。」

「…すぐ帰る。」

「滑るなよ？」

「行ってらっしゃーい　おいしいのねー」

リビングから出て行く間際に見たのは、リュウジさんが魔王を蹴り飛ばしてる瞬間だった。

\*\*\*\*\*

【サアアアアア………】

「……。」  
「……。」

静かに降りしきる雨の中、ボクとリリアンは互いに無言のまま雨で濡れた道を傘をさしながら歩く。時々草か何かから水が跳ねる音がしたり、水が流れる音がしたりする。

その音が、ボクの気持ちをさらに沈めた。

「……。」  
「……。」  
「アルス。」  
「？」

最初に無言を破ったのはリリアンだった。

「何？リリアン。」  
「……。」

ボクの方を向かず、前方を向きながら歩き続けるリリアン。ボクはリリアンの次の言葉を待っていた。

「……。」  
「……。」  
「リリアン？」

「……まだ……“あのこと”について気に病んでる？」  
「……！」

…気づかれてたんだ…。

ボクは思わず立ち止まると、リリアンはボクより数歩先を歩いてから立ち止まってから振り向いた。

「…そうなの？」

「……。」

……。

「…もしそうなら…その気持ちをいつまでも抱え込んでいてはいけない……。」

「……。」

「…忘れる、とまでは言わない…けど、あなたは間違ったことはしていない…ああでもしなければ、あなたは死んでいた。」

……わかってる。

「…私だって…未だにあの感触が忘れられない…今までどれだけ多くの魔物を切ってきた中で…あれほどつらいのは無かった…。」

そんなこと……。

「…だけど…わかってる…!…!…!……。」

……。



リリアンは軽く、ほんの少し首を振った。

「……行こう。リュウジ達が待ってる。」

「……うん。」

「へえ、随分この世界に馴染んでるみたいだね？」

「……!????」

「……」の、声……。」

「……。」

リリアンでさえ動揺する、この声……。

「あれね？随分驚いてるみたいだねあ？」

……



忘れもしない……いや、忘れることなんかできない……「の、声……！」

「……どこにいる……。」

傘を捨てて、ボク達は身構える。かなり……近くにいます。

「どこ？君達もうボケたの？上だよ上。」

「……？」「」

上……電柱の天辺！

「やあ、久しぶり」

「……あ……ああ……。」

灰色の空が視界を覆いつくす中……黒い影が、高い位置からボク達を見下ろしていた。

血のように赤い髪、闇よりも深い黒い目、そして鼻を通した真一文字の長い傷……。

「……お前、は……。」

リリアンが横で小さく呟く。でもボクは全く声が出ない。あまりのことで声を出す力さえなくなっていた。

間違いない。あの顔の傷は……。

「ア……。」

よじやく……よじやく搾り出せたのは……

「アラン……!!」

「やあ……アルス」

大切に……忌々しい、そいつの名前だった。

## 第三百三十二の話

### 光りし者と呪われし者2

（アルス視点）

そいつ……アランは、ニヤリと笑った。その笑みは、誰もが躊躇するくらい醜い笑み……思わず背筋に悪寒が走るほどの嫌悪感を感じた。

「いや……アリス、と呼ばうかな？そっちの方が僕としても呼び慣れてるしね。」

「ど……どうして……。」

ありえない……こんな、ことなんて……。

「あれあれ？やっぱ僕がいるのはそんなに驚くことなの？ま、無理もないよね？ケケケ」

違う……ボク達が驚くべきところはそんなことじゃない！

「何で……。」

「ん？」

「何で、ボク達の世界で死んだあなたがここにいる！？」

そう…この男は、ボク達の世界で死んだ。なのに…何で!?

「…あ…そのことかあ。」

まるでとぼけるかのような口調で言うアラン。それがますます、ボクらの怒りの炎に油を注ぐ。

「…まあ、成り行き…というより、幸運にも来れたって感じかなあ？アヒヤヒヤ。」

「……ふざけるな！降りてきて話をしろ!！」

剣を召喚し、構える。リリアンは斧をリュウジさんの家に置いてきたらしく、素手で構えをとった。

「ん…しょうがないなあ」

【シュ】

「!?!?…。」

そんな…消えた!?

「後ろだよ?」

「!?!?!??!?」

背後から声がして、慌てて振り返る。そこには電柱の上にはいたはずのアランが何事もなかったかのように立っていた。

「へへへ、驚いた？ねえ、驚いた？」  
「……………」

無邪気に笑うアラン…………でもその笑顔からは悪意を感じ取れる。

「……………答える…何故貴様がここにいる。」

リリアンの、戦闘の時にのみ見られる鋭い目でアランを睨む。大抵の魔物の場合、その一睨みですくみ上がってしまう。

「えへへ、知りたいんだ？」

…対し、アランは平然と、それでいて楽しそうに言った。

「…これ、わかる？」

「「？」」

そう言って、着込んでいた黒いマントの左腕部分を持ち上げる。

【ドクン…ドクン…】

！？な……………これは……………。

「ビビ、これはさすがに驚いたろうっ？」

いやらしく笑うアランの言葉なんかどうでもいい。

ボクらの目の前に現れたのは、紫色に変色した細い左腕……ところどころから赤紫色の細い血管が不気味に脈打っていた。

「そんな……左腕はあの時私が確かに……それにその腕……。」

「そうだね、この左腕は君が奪ったんだっけね？」

驚愕するリリアンを尻目に、アランはマントを元の位置に戻す。それでも、腕から聞こえる脈打ちは、いつまでも不快に耳の中に残る。

「でもね、僕は見つけたんだよ……」

最強の、勇者でさえ超えられる力っていう奴を……。」

【ジャキン！！】

「！！！」

醜く変化した左腕から、同色の剣が飛び出してきた。刃の根元辺りに赤紫色の血管が集結しているのがわかる。

「それでね……この力は、どんなことでも出来るんだよ？……こんなことだって！！！」

【ブォーン！】

アランがボクに向けて左腕の剣を一振りすると漆黒の球が現れる。

「……しま……。」

「『ザベ・ゲラウ』!!」

アランの音が響くと同時に、球がボク目掛けて真っ直ぐ飛んでくる……避けられない……!

【ドォ!】

「!!?!?あ、あああああああ!!?!?!」

「!?!リリアン!?!」

咄嗟に、ボクの前に躍り出たリリアンが悲痛な叫び声を上げた。

「あつれ〜?ミスっちゃったな〜。」

「アラン……!!」

怒りがボクの中を支配しようとする……でも、今はケタケタ笑うアランよりリリアンの方が先……!!?!??

「か……ああ……。」

「な……!!?!?これは……。」

苦しそうに息をしながら膝をつくりリアンの左胸が黒く光っている





「ま、いいか これも策のうちだよ」

.....。

「うらあああああああ！...！」  
「おっと。」

一瞬にして接近し、その忌々しい顔を叩き切るつもりとしたら避けられた。

でも.....そんなの、そんなこと関係ない！...！

「アラああああああん！...！...！」  
「アヒヤヒヤヒヤ！怖いね〜怖い怖い」

高いブロック塀の上に飛び乗って、アランは嘲るように笑う。でも、絶対に逃がしはしない...！

「うーん、かなりやる気だねえ君。」

でも、今はやらないよ？」

なっ...！？

「ふざけるな...！ここでお前を倒す...！」  
「ダメダメ、それだと僕が楽しくないもん。もっとふさわしい場所、

用意してあげるからさ」

この……!!

「そ・れ・に お友達が大変だよ？」

「!?!?!」

そっだ…リリアン!

「じゃあ、またねアリス」

「!?!ま、待て!?!」

ボクの叫びも虚しく、アランはかき消すかのように消え去った。

『アハハハハハ！またいつかその顔見せてよ 今度は……その顔のまま切り刻んであげるよ』

…… 周囲から響き渡るアランの声を最後に…… 気配が消えた。

「……………クソ……!!」

【ガシャン!!】

チクシヨウ……

チクシヨウ……！

「チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

悔しい……悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい！！！！

また傷つけられた！守れなかった！大切な人を、仲間を！！

……チクシヨウ……チクシヨウ……！

「……………」

……泣いてばかりも……いられない……。

とにかく、リュウジさん達のところへ戻るべく、立ち上がって叩きつけた剣を拾い上げ、倒れたリリアンをおぶった。

「く……はあ……はあ……！」

「リリアン……。」

……。

胸の中の苛立ちを隠せないまま、ボクは急いで帰路についた。

〈龍二視点〉

「……。」

「……。」

「……二人とも遅いねー。」

「そっぴゃそっぴゃね……。」

『かれこれ一時間はかかってるな。』

クルル達の言う通り、あいつらが出て行ってからだいぶ時間が経っている。駅前ったって歩いて五分程度の場所……クッキー買っただけ

でここまで時間が経つなんてことありえん。

それというのも、アルスはこういうお使いとかで道草くう奴じゃない。一緒に行動してる時もちゃんと俺の許可を得てから単独行動に出る。おまけにリアンだ。あいつも久美曰くお使いで寄り道したことは一度もないという。

まあ時には例外ってこともあるが……何か、変な胸騒ぎがする。

俺の勘つてのはよく当たると評判なんだが、こういう嫌な予感とかがする時は自分の勘のよさを怨みたくなることがしばしばある。

「……二人とも、大丈夫だろうか？」

「何とも言えんな。」

久美の不安げな呟きに俺は素っ気なく返した。勘がいいたって何が起こったのかはさっぱりわからない。俺は全知全能じゃねえから当たり前だ。

……まさか、どっかですっこけた？……いや、あいつらならずっこけた程度、屁の河童だろう。

……… けっ、バカバカしい。勝手な憶測はもうやめだ。

「……一度探しに行った方がよいのではないか？」

「まあもうちよい待って。多分そのうち帰ってくらあ。」

「いや、でも……心配だし。」

「私も……。」

…たくこいつらは心配症だな。

「あいつらだってたまには寄り道したいとことかあんじゃない？  
それに今夢中になってるとかさ。」

「……そう……か？」

「そう。……とゆーかそう思いたいんだがな。」

「え？」

「いや、何でもない。」

最後の弦きは久美にはよく聞こえなかったらしい。

……つーかさ、何だかんだ言ったところで俺も結局は心配症じゃねえか。

【ザアアアアアア……】

『……雨、強くなってきたな。』

「……………」

エルがポツリと言い、ふと窓の外をしてみる。風に変化はないが、  
雨の量が大きくなってるのは確かだ。現に視界が水しぶきで若干白  
い。

……タオル二人分用意してやらねえとな。後ホットココア入れてやるか。

「…よつと。」

二人が帰ってきた時に備えて準備しようとして俺は立ち上がった。

【バン！！】

「リュウジさん！！！」

……噂もすればってか？

「ふう…：やっと帰ってきたか…。」

「アルスー」

俺よりも先にリビングから出てったクルル。犬かお前。

あ、ついでにクルルにアルス達にタオル渡すよう言っておくかな。  
そう言おうとして、

「…！！？リリアン…！！？」

クルルの叫び声がして、やめた。

「クルルどうしたの!?!」  
「クルル?」

クルルの普段とは違った困惑した声にフィフィと久美も立ち上がり、俺も台所からすっ飛んで玄関へ。

って、おいおいおい。

「はぁ……はぁ……はぁ……。」  
「か……ぁぁ……。」

目の前にいたのは、肩で大きく息をしているずぶ濡れのアルス、そして同じくずぶ濡れでアルスに背負われたままぐったりしているリリアンだった。

「ア、アルス!?!どうしたのよ一体!?!」  
「リリアン!?!」

遅れて来たフィフィと久美の顔が蒼白になる。

ってこんなことしてる場合じゃねえ。



「久美！」

「!？」

「和室行って布団敷いてこい！グズグズすんな!!」

「わ、わかった！」

「クルルはタオル持ってこい！大きいの二枚大至急!!」

「うん!!」

「フィフィ、お前は救急箱を！エルはフィフィに救急箱の場所を教えろ!!」

「オツケー!!」

『わかった!!』

「アルス、リリアンをこっちへ！」

「……………」

俺は無言のままリリアンを背負ったアルスを連れて和室へと急いだ。

第三百三十三の話 光りし者と呪われし者

（龍二視点）

「く……はあ……ああ……。」  
「……………」

一先ず、久美がリリアンにアルスのパジャマを着せて敷いた布団に寝かせ、額に濡れタオルを置いて一段落ついた。

だがリリアン自身の熱は全く下がらない……汗も止まらず、枕はすでにびしょびしょだ。濡れタオルもさつき置いたばっかだったのに、すでに熱いお絞りみたいになっちまってる。おまけに顔には血の気が全くないかのように白い。

こりゃ重体だ。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

俺達は全員、無言でリリアンの布団の傍らに座っていた。

時間が分からない…一分経ったのか、一時間経ったのか。そこだけが時間停止したかのように、重苦しい空気が包む。

「……………」

「……………久美。」

「……………何だ。」

一番初めに沈黙を破ったのは、俺。久美はリリアンの枕元で息苦しそうに眠っているリリアンの頬を冷たいタオルで優しく撫でている。

「リリアン、近頃の様子はどうだった？」

「……………どういう意味だ？」

「こうなる前に体調の不良を訴えてきたか、それとも時々フラフラしたりしてなかったかかってことだ。」

フラフラしていたなら単なる風邪か貧血かもしれない。もしそうならまだ対処のしようがある。一番近くにいた久美なら知ってるはずだ。

「……………別にこれといっては……………体調の不良なんて全く無かったし、むしろ元気過ぎて困るくらいの方が多かった。それに貧血を起こすほど頑張り過ぎもせず、重労働の時だって適度に休憩もとっていたし……………」

「……………そうか。」

「…」ことは、風邪でもなければ貧血、過労でもない。別の病気ってことになる。

「……………インフルエンザか……………はたまた食中毒か……………後者はあり得ないっぽい……………」

…一度病院に診てもらった方がいいかもしれん…俺は医者じゃないし、こつこつするのは専門家に任せておくか。

「……リュウくん、リュウくん？」

「??どうした？」

俺がそう決めた時、クルルが俺の服の裾を引っ張った。

「あのね……リリアンなんだけど……。」

「ああ。」

…いつに無く真剣な顔…何か知っているとみた。

「……あのね、

リリアンの左胸から、嫌な感じがするの。」

……？

「嫌な感じ？」

「うん……時々気持ち悪くなるような、不快になるような……そんな感じ。」

ふむ……左胸から？

「……。」

【スッ】

「？龍一？」

「……………」

リアンの布団を下にずらし、左胸に手を置いてみる。

【ドク…………ドク…………】

…手から独特のリズムが伝わってくる…これは心臓の音だな。

【ドク…………ドク…………】

…………いや、待て。

【ドク…………ドク…………】

…………おかしい。

【ドク…………ドク…………】

…………心臓の鼓動が、こんなゆっくり大きく揺れるほど強いはずが

ない。

「!?!り、龍二!?!何を…!?!」

俺がリリアンのパジャマのボタンを外していくと、久美が驚いて叫ぶ。だが今はそんなこと気にしてられない。

【バツ!】

ボタンを全部外し、胸元を広げる。

「!?!な……………何!?!」

「ひっ……………」

「これは……………」

「……………な……………」

「……………」

全員がその光景に驚き、恐れ、戸惑う。まあ、無理もない。俺だって正直混乱するくらいだ。

左胸の、ちょうど心臓らへんが紫色に変色してるんだからな。

「これ………一体何なの？」  
「………わから、ない………」  
『……………』

あまりに異様な光景に、俺達は言葉が見つからなかった。これは癌とか、心臓病の類じゃねえ。

理由は二つ。一つは、円形に広がった紫が心臓の音と一緒に脈打つてるため。まるでこの部分だけが別の生物として生きているかのようであらう。明らかな異質だ。

そして二つ目だが、クルルの言う不快な気分を感じるのを見た目じゃない。ここから何か、妙な気が発生しているのが一番の原因だ。それも毒々しい、邪悪な気……。

「……………これって………まさか……………」  
「クルル、知ってるの!？」  
「……………ほんの、ちよつと……………」  
「何!？何なんだこれは!？何でリアンの胸がこんな!？」  
「……………」

皆必死の形相でクルルに詰め寄る。とくに久美は若干ヒステリック気味だ。

かくいう、俺も問い詰めたくてしょうがない気分だ。

「……………禁術。」

「……………え？」

ポツリ、とクルルが呟くように言う。でもしっかり聞き取れた。

「禁術？」

「……うん……小さい頃、よくカルマが持つてる本をコッソリ読んで知ったの。ただ、私にわかるのは魔族でさえも恐れて禁じられた術だっってことぐらいで……詳しくは……。」

……………なるほどな。

「……………ようは、リリアンはこの状態に“なった”んじゃないか……………“された”わけだ。」

「……………。」

禁術、とは言っても術だから、当然唱える奴がいる。つまり、そいつがリリアンをこんな状態にさせたっつーことだ。

「……………でも、一体誰が？」

「そうよ……………そんなんでもないのを唱える奴なんて……………それもこの世界に。」

……………まあ、ファイフィと久美の言うことももつともだ。だが、今はそれよりもしなけりゃならんことがある。



「……クルル、その禁術のことが記述されてた本、今もカルマの奴は持ってんのか？」

「え……う、うん。大切な物だからって言って勝手に読んでは怒られてたから。」

「……わかった。」

俺はリアンのパジャマのボタンを元の位置へと閉じた後、懐からケータイを取り出しアドレス帳を開く。

「香苗達を呼ぼう。禁術について何かわかるかもしれんし、事情も説明しねえと。」

「そ……そうだな。」

久美は少し落ち着いてきたみたいだが、それでもまだ冷静にはなれてはいない。

「後、雅達もだ。」

「？何でマサ達も？」

「あいつんとこに居候してるステイルは魔法専門だ。こつこつこの対処法がわかりそうな奴は一人でも多い方がいい。」

『なるほどな……。』

「……………」

……さつきから気になってんだが……アルスはいつものパジャマに着替えてから、俺達から離れて足組んでずつとリビングの戸の方に顔を向けたまま一言も話さず、動かなかった。

話に参加させようとしたが……何故か、今のアルスには何も話しかけてはいけない気がした。

（アルス視点）

……リュウジさんが皆をデンワで連絡して集めようとしてる中、ボクはただ窓の外をボーッと眺めてるだけだった。

当然、リリアンのことはどうでもよくなってる、むしろボクだつてリリアンを見てると苦しくなる。

……でも……それと同じくらい、腹が立っていた。

あの時、自分が動かなかつたせいでリリアンはこんな目に合わせてしまった……自分の不甲斐なさに。

リリアンを苦しめ、嘲笑っていた……アランの顔に。

……でも、それ以上に……

また憎しみに身を委ねた自分を、殺してやりたかった。

憎しみに身を任せた後、待っているのは何？……勇者が、憎しみを抱えたまま戦うなんてありえない。

……憎しみは、後悔と不幸を生むだけ……そう肝に命じて生きてきたのに……。

「……………くっ！」

ドン、と畳みを叩く。音は小さく、周りの人たちには聞こえなかった。

それでも、ボクの気持ちは晴れない。畳みに八つ当たりしたって、晴れるわけではない。

そう……何をしたって、晴れるわけがない……永遠に、この気持ちは……。

【コン】

「……………？」

？……………何か窓に当たった？

「……………何？」

そつと戸を開けてみる……………何も無い？

…いや、あった。雨で濡れた地面に落ちていた。

「？何だろっ…？」

部屋から手を伸ばし、地面に落ちていたのを拾い上げて見てみた。

「……………手紙？」

雨でふやけ、文字が若干染みのようになってるけど、読めないわけじゃない。

「……………。」

差出人は……………あいつから。

「……………。」

あいつは……………何がしたい？どうしてこんなことを……………。

思わず握り締めた紙から、搾り出された水が滴り落ちて畳みに染みを作る。

「……………」

行かなきゃ……………」

手紙をポケットに入れて、立ち上がろうとする。

……………」。

「……………」リュウジさん……………」

連絡を終えて雅さん達を迎え入れる準備をするため、和室を出ていくリュウジさんを見て……………」思う。

いつもリュウジさんは、ボクらが危ない時に駆けつけてくれる……………」  
どんな状況でも、必死に、何をしてでも。それがボクにはすごく嬉しかった。

……………」でも……………」

「……………」ごめんなさい。」

今回は……………」ボク一人の問題ですから。

それにリュウジさんに、ボクのこの抱えている忌々しい気持ちを知られたくない……もし知られてもしたら、嫌われる……そうなりたくなかったから。

ボクは一人、パジャマから着替え始めた。

〈龍二視点〉

「マジ、か……？」

「マジだ。」

「……………」

しばらくして雅達が我が家に集まり、リビングで事情を説明した。ただ、人口増えてものっそ蒸し暑くなっただってというのはこの際無視だ。今はそれどころじゃねえ。

……………だがなあ。

「それより、花鈴はいいとして影薄がいるのは何でだ？」

「お前俺に狙いをさだめんじゃねえよ!？」

「雅達が慌ててアンタんとこに駆け込んだのを見て、ついてき

たのよアタシ達。」

なるる……まあ、また説明する手間が省けたからよしとしよう。

「リリアン……。」

「ああ……うく……。」

歯を食い縛って苦しみに耐えてるリリアンの姿を見て痛々しく思っているのか、ステイルが不安を隠せない表情で呟く。さっきより発汗が激しくなっている。

「クルル、水。」

「はい！」

クルルにリリアンの上体を少し上げさせ、近くに置いてある盆に乗せてあるコップに入った水を少しずつ飲ませる。禁術だろうが、脱水症状に陥っちまったら元も子もない。

「それでカルマ、禁術について話してくれねえか？」

「……………」

カルマは本とにらめっこをしたまま、一向に動こうとしない……。

「……………いいですけど……………話したとしてもそれに対する対処法が……………」

「……………」  
「どんな状態なのかも知らないで対処法もあるか。とにかく知っている限りのことでもいいから話せ。」

時間がもつたいねえんだよ。

「……………」

リリアンにかかっているのは、まちがいなく禁術の一つです。」

……………これから話すカルマの言葉を、俺は脳に刻みつけていった。

「そもそも、禁術というのはその魔法属性と同じで、攻撃魔法があったり、回復魔法があったり、呪術魔法があったりします。ただ、禁術と呼ばれる理由は、その魔法の内容があまりに強力すぎて術者もろともその身を滅ぼすゆえ、忌み嫌われてきました。

その力は魔力で構成されているという妖精族でさえも耐え切れないとされるほど……………ゆえに、魔族が手を出すなんてことはもつての他。ただ、禁術を生み出した魔族が頭のやわらかい人だったのが唯一の救いでしょう。その人物は禁術を恐れるあまり、人知れず闇の中に葬った、とされています。

それで、リリアンにかかっているこの術なんです……………禁術でも最高位の呪術魔法であり、解く方法はまったくわかってません。どこかの文献にも載ってませんでした。」

……………長い説明だったわりには打つ手なしか……………チツ。

「……………カルマ……………この術の……………特徴は？」

「……………。」

香苗の震えた声に、カルマは無言になった。

そこで無言になるな。皆の不安を煽る。



「……この術にかかったものは、心臓が瘴気によって紫色にはれ上がり……」

二十八時間後に、魂もろとも消滅する。」

『!!!???』

魂もろとも消滅……イコール、“死”だ。

何てこった……

「何て中途半端な時間だ。」

「そこじゃねえ。マジメに考えろ。」

俺はいつでもマジメだバカ雅。

「消滅……つまりは、死つてことか!?!」

「そ、そんな……。」

「リリアン……。」

「……………」

俺は首を和室で寝てるリリアンへと向ける。当の本人は息の荒さがひどく、見てていたたまれない。

……クソが……。

「……何か手は無いのか？」

「……さっきも言った通り、どこの文献にも載ってませんでした……  
…打つ手が、ありません。」

重苦しいを通り越し、気分が悪くなるくらい暗い空気が辺りを支配する。

誰も、何も言おうとしない……。

「……術者。」

『？』

だが、あきらめるわけにゃあいかねんだよ。

「術者が誰かわかれば、そいつに聞けばいいんじゃないか？」

「おま………何言ってるんだよ。」

「そうですね………リアンをこんな目に合わせた奴が、そんなおいそれと」

「だったら教えてもらえるまで丁寧に聞き出してやるだけだ。」

その言葉がどういう意味か……勘が鋭い奴らなら、お分かりのはず  
だろ？

「……やっぱり、そういうことするというのが君らしいな。」

「ま、アタシだってそう言うと思ったわよ。てかそうしたい。」

「だね。」

「まあ大体面倒ごとに巻き込まれるに決まってるけどな。」

「……そこは同意見だ。」

やっぱり長い付き合いしてつとわかるもんなんだなあこいつらは。

「うーし、そんで後はあ……。」

「あ……でも待ってください。」

これからの行動方針が決まったところで、ケルマが拳手した。

「何だ？」

「……一体誰がそんな術を使えたんですか？それもこの世界で。」

ああ……ファイファイが言ってたことが。

『……確かに、そんな強力な術を操れる奴が何でこの世界に……』

「この世界の人間とも……考えにくいし。」

「第一どこにいるよそいつ？」

……………ふむ。

「……襲われた本人に直接聞いてみつか。」  
「え？……あ！そっか！」

フィフィは気付いたようで、拳をポンと叩く。

「え？襲われた本人って……あ、なるほど！」  
「そーゆーこつた久美。」

……まあ、今話しかけるのはあんま気が進まんのだがな。

「おーい、アルスー。」

ヒョイっと和室に顔だけ出して覗いてみる。

……って、おりよりよ？

「……あれ？」

「リュウジ？どしたの……！？」

フィフィも一緒に覗きこんで、驚愕する。

「……アルス……は？」

「知らん。」

あいつが、いなくなっていた。

## 第三百三十四の話 光りし者と呪われし者4

（龍二視点）

俺としたことが、全く気付かなかったとはな。アルスがさっきまで座っていた窓際には、あいつが脱ぎ捨てていったであろうパジャマが無造作に置いてあった。

…一応、わかっていることも確認することは確認しておく。

「……やっぱか。」

ベランダへ出る戸の鍵が開いている。あいつはこっから外に出たとして間違いない。

つーか玄関から行くにはリビングを通ることになるから、俺らに気付かれないなんて無理だろ。

「……！？リュウジ、これ！」

「？」

フィフィに呼ばれ、振り向く。

フィフィの前には、若干開いたクローゼットがあった。あの中には、アルスとクルルの鎧が置いてあったはず。

…まさか…。

「アルスの鎧が……無い。」  
「……………」

…あんにやる、一人でどうするつもりだったんだ？

「クルル！さつきリリアンに水飲ませた時に気付かなかったの！？」

「だ、だって……水飲ませるだけでも必死で……それにアルス、微動だにしなかったから気配なかったんだもん。」

フィフィが怒鳴ってクルルは恐縮する。

「フィフィ、クルル責めたってしょうがねえだろ。」

「……………」

でも、じゃねえよ……………」

「……………まずいな、こいつは。」  
「ああ……………最悪だ。」

雅の呟きに俺も同意する。何がやばいってそりゃやばいだろ。唯一の目撃者っつーか遭遇者がいなくなっちゃったんだから。

おまけに、今一人で行動させるのはまずい……そんな気がしてならねえ。

「…探しに行くぞ。」  
「さ、探すったって…どこ探しゃいんだよ？」  
「とによりかくよりもまず行動。」

俺は行動派なんだよ。あれ？今それ関係ない？んなもん知らねえ。

「ま、待ってくださいリユウジ！」

「どこ行ったのかもわからないのに行動しても！」

「だったら町全体を駆け回るのみだ。」

「リユウちゃん落ち着いてよ！」

「とゆーかアンタまで行ったら…！」

「お、おいお前ら大変だ！」

皆が俺を押さえつける中、恭田が叫ぶ。

「んだよ影薄雑草太郎。」

「だから恭田だっつーの！ってボケかましてる場合か！…空を見て  
みるよ！…！」

？空だあ？

「……………え。」

全員一斉に窓から空を見上げ、啞然とする。



空が………血のように赤黒い雲によって覆われていた。

（日暮視点）

「……こりやまずいのお……。」

嫌な氣を感じ取って我が家を飛び出し、巫女服姿のまま他人の一軒屋の屋根の上に立って空を見上げる。今の時間はもうじき暗くなるであろう時間……じゃが、この何とも禍々しい雲によって明るく感じてしまう。

おまけに、信じられない量の妖氣に似た力が雲から地上に雨となつて降り注いでおる……何故こんなことになっておるのか疑問は尽きんが、事態は深刻ということは確かじゃな。

「まあ、幸い今のところ人体に影響はないようじゃが……。」

現に、何の免疫もない者の多くが何事かと外に出てきており、空を眺めておる。その様子に異常は感じられない。

ただ、今のところ、の話じゃが…時間が経つとどうなるのかわかりもしない。

「……あ奴のとこへ行ってみるかのお。」

…交流は少ないが、嫌な気配が充満する今、頼れる奴には頼っておいた方が得じゃからな。

「さて……む？」

ふと、ある方角に目が止まる……あそこが一番、邪気に満ちておる。

しかし、この方角は……。

「……学校の方か？」

……確かあそこには……ふうむ……気になるのお。

「……あ奴のとこへ行く前に、確認しておくべきか。」

そう一人ごち、ワシは屋根から屋根へと飛び移っていった。

（龍二視点）

「なんだ……この空……。」

「レッドスカイ現象？」

「そのまんまの名前じゃねえか。つかそんな現象聞いたことねえよ。」

こんな状況でもツツコミは忘れねえんだな雅。

「……！ケルマ、テレビを！」

「は、はい！」

何を思ったのか、カルマがケルマに我が家のテレビのスイッチを入  
れさせた。

「……マジ？」

「……。」

…テレビにはどこかの商店街とそこでたむろしている大勢いる野次  
馬と女性レポーター、

そしてその上には、今外で広がっている真っ赤な空が映し出されて

いた。

『ご覧ください！この不気味に広がる赤い空を！先程までは今までと変わらない雲だったはずなのに、急に一転してこのような光景になってしまい、近隣に住む住人達から不安の声が上がっています！先程入りました情報によりますと、この空はこの地域だけでなく、今や全国にまで広がりつつあるといえます！一体、日本の空はどうなっているのでしょうか！？現地の専門家の方々にも調査を行ってもらっていますが、原因は未だ不明であり……！』

女性レポーターがテレビの向こうで、鬼気迫る勢いで状況を説明する。俺らはそれを食い入るように見つめていた。

……かなり、大事になってきたなこりゃ。

「……これも、まさか……。」

「……その術者の仕業かもな。」

「間違いありません……。」

「……かそれしかねえんじゃねえか原因？」

「……！？リュウくん！リュウくん！！」

「どしたクルル？」

リリアンの傍にいたクルルが焦っているながらも俺を呼ぶ。

「リリアンが……何か言ってる！」  
【シューン！】

一瞬にして俺はリリアンが寝ている傍らへと移動した。

「リリアン、どうした？」  
「リリアン！？」

俺に続き、リビングにいた皆も和室に入ってきた。定員オーバーだ  
つつの。狭い狭い。

「あ……う……ああ……。」

リリアンは汗を滝のように流し、息苦しそうにしながらも必死に何  
かを伝えようと口を動かす。

「……じ……。」  
「じ……。」

「……じ……じ……じ……は……ア……ラン……。」  
「……？……？」

……アラン？

「ちょ……アランって……？」

「そんなバカな!？」

「?おいアランって誰だよ?」

ファイフィとステイルが揃って顔を青くし、驚愕する中俺たちはチンプラカンプラだった。

「ア……………ランが……………はあ……………はあ……………この、世界に……………来て……………」

「リリアン、もう喋るな…!」

なおも伝えようとするリリアンに、久美は泣きそうになりながらも止めようとする。

でも、リリアンは止めようとしなかった。

「アルス……………あいつ、を……………止めに……………出て……………」

……………アルスが?

「今の……………アルス……………ダメ……………会わせ、ちゃ……………くう!……………」

「!?!リリアン!?!」

最後、一際大きく呻いてリリアンは静かになった。

「リリアン!リリアン!?!」

「落ち着け久美、寝てるだけだつて。」

リリアンを揺さぶる久美を強引に引っぺがす。確かに呼吸も弱々しいけどちゃんとしてるし、少しは落ち着いたようだ。

…でも時間は無い……が、術者がわかりやこつちのもん。

「ファイファイ、今の時間は？」

「えっと、今八時ちよつと前。」

時間経つの早えなオイ。

「うし、タイマーセット！」

【カチッ】

左腕に付けてるGショックにタイマーをセットさせる。これでオツケー。

「……行くぞ、お前ら。」

「！？い、行くてどこへだよ……。」

……アホかこいつ。わかって言ってるだろ。

「決まってるんだろ影薄。その……アランとかいうクソつたれんところだ。」

アランという名を聞いてビクっとなるファイファイとスティル。何故そ

んな反応するかは気ニシナイだ。今は。

「ば、バカ言うなよ！？リリアンをこんな状態にする奴だぞ！？勝ち目ねえって！」

「……ふう。」

… ったく、初っ端から諦めモードかよ…。

「…じゃ行きたくない奴はここにいる。もう迷ってる時間なんてねえんだ。」

「ちよ！？」

こーゆーので揉めてる場合じゃねんだよ今は。

「……リユウくん、私行く！」

『当然、剣である私が行かない道理などない。』

「…何でアランがいるか知らないけど。」

「放つてはおけませんね…アルスも含めて。」

「魔王様が行くなら僕も！」

「当然だ。」

クルル達異世界組は全員参加。そりゃ実戦経験ある奴らばっかだしな。

「……しゃーないわね。何が出来るかわかんないけど、アタシ達も行きますか。」

「リユウくとカルマ達が行くなら私も行くよー！」

「…しょうがないか。」



やる気まんまんな女性陣に、やる気ナツシンな雅。しっかりせい。

「龍二！あたしも連れて行ってくれ！」

「あ、お前は却下。」

「え、即答！？何で！？」

いや何でって……理由一つしかないし。

「バカか。今リリアンの傍にいるべき奴はお前しかいねえだろ。」

「で、でも……」

当然、久美だつてこんな状況下の中、一人だと心細いだろうが……。

「……第一、不安抱えたまんまの奴が戦闘に参加したつて邪魔なだけだ。」

「……」

本心から言いたかねえが、これは正論だ。今のこいつはリリアンで一杯一杯のはずだ。それで気が散っちゃったらどうなるかわからんし。

「とりあえずここで待ってる。何かあったらケータイに連絡してくれ。」

「……でも、龍二」

「待ってる。」

「……」。

顔をズイと近づけて念を押す。つか、だあくもくんな目で見てくん

なっつーの。

「……………わかった……………待ってる。」

よし、わかりやいい……………あ、そうだ念のため……………。

「影薄、一応お前ここで久美と一緒にいる。」

「了解!！」

即答な上にハッキリ言い、ビシィ!と敬礼する影薄。そんな嫌か外  
出るの。

まあ、いい……………とりあえず。

「行くぞ。」

『おー!』

さっさとそのクソ野郎に会わないとな。

第三百三十五の話 光りし者と呪われし者5

（龍二視点）

【チヨイ】

「……………ふむ。」

……………。

「あつちだ。」

「よくわかるなそれで……………」

指にツバをちよいと付け、そよ風に当てて探知。十字路の右側を走ることにした。

因みにこの行為に意味はない。百パー勘。

「ふう……………この町がこんな入り組んでるとは知らなかったな。」

雅が疲れたように言った。

それについては反論はない。現にここまで来るのに右行ったり左行ったりまっすぐ行ったり、上行ったり下行ったり、飛んだり跳ねたり回ったり、とどめにバビヨンでウピヨンの場所でアパラパーな事になったりで結構複雑で、カモメに乗ってスカースカ。あ、最後の嘘。

「……前半わかるけど他なんなんだ。」  
「つーか…龍二の行動に…ついてける…アタシ達って…。」  
「で、でも…もうバテバテ…。」

雅がいつもの如く俺の思考に冷静にツッコミ、何か花鈴がシヨックみたいな受けてるけど気ニシナイ。んで香苗何かボロボロだけどここれも気ニシナイ。

「文句たれんな急ぐぞ。」

「ま、待つてよ…リュウちゃん…はあ、ひい。」

「か、カナエさんファイトー！」

「……体力ないなあ……。」

香苗、さらに体力ボロクソン。一瞬、連れてきて後悔しそうになったが今さら帰すのもなんなので時々ペースを落としてやったりしている……ああもう、時間がもったいねえ。

つーか何なんだこの雨？赤い雲から降ってくる時点で単なる雨とは思っちゃいないが、マジ鬱んなりそうな雨だ。変に気分わりい。

…さて、それよっかさっからアルスとアランとか言うの探して駆けずり回ってんだが……一つだけ、どうしても気になることがあった。

「…ファイファイ？」

「！？な、何？」

呼んだだけなのに一瞬激しく動揺した。

俺が一旦立ち止まると、俺の後ろから付いてきていた他全員も立ち

止まった。

「一つ、お前とスティルに聞きたいことがあるんだけど。」

「……。」

後ろを振り返ってみれば、俯き、顔を逸らしている二人…俺が何を聞こうかわかっているようだった。

「あんさあ、ぶっちゃけ聞いわ。」

アランて誰さ？」

この名前を聞いた瞬間のファイファイとスティルの明らかな動揺…どう考えてもこいつらと無関係じゃないことは確か。

「つか、異世界の住人であるこいつらの知り合いつてんなら、アランって奴も異世界から来たことになる。だが、こんな事態をそいつが引き起こしたってんなら、事故とかでこっちに来たんじゃなくて意図的にこっちに来たと考えられる。」

…何かを狙ってきた。そう思うな俺は。

そんでアランって名前、んでもってアルスのあの状態からして、あいつとは深い関わりがあると見える…何から何までもれなく謎だらけだコンチクショウ。

とゆーわけで、謎は少しでも解決するに限る。時間も貴重だが、憂いは取り除いておくことにしよう。

「……。」

なのにこの二人がこのまんまじゃねえ…。

「…ステイル？」

「……。」

雅が声をかけるにも関わらず、無言。アランって奴、こいつら無言にさせるたあどついう奴だ？

「……。」

「…おいフィフィ。」

空中で羽をパタつかせながら浮くフィフィに、若干イライラしてきた俺は少し口調を強くする。

【ヒタ】

「……。」

「今回は黙っててもいいってわけにもいかねえぞ？」

【ヒタ】

「お前らが何で話したくないのかは知らねえかな？」

【ヒタ】

「リリアンとアルスのためにも、俺達は事実を知っとく必要がある。」

【ヒタ】

「だから……」

「……？？？り、龍二！？」

『ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！……！』

【ドシューウー！】

さっから湿った足音たてて奇声発しながら背後から襲い掛かってきた何かを後ろ回し蹴りで蹴り飛ばす。

「後で全部話せー!!」

右前中段構え

少林寺拳法の構えの一つ

を取り、前方を

見据える。

さっき襲い掛かってきた奴……まるででかい蛙に錆びた鎧を着せたような化け物が、数匹俺らにジリジリと迫ってきていた。何か深緑色に黒い斑模様の皮膚が妙に毒々しいんですけど？

「こ、こいつらは……グルゲロツグ!?」

「僕達の世界のモンスター達が……何で!?!」

……ふむ、やつぱりや大事だな。異世界のモンスターがこの場に  
いるし。

「!?!か、蛙!?!」

「いやあああああ!?!?!?気持ちわる!?!」

「か、カナエさんカリンさん落ち着いて!?!」

あ、二人とも蛙苦手だったっけ?しょーもねえとこでビビりな奴ら。

まあいい。二人なだめるのはケルマに任せて今は状況打破、状況打  
破。



『ガギエエエエエエエエエエエエエエエエエ！』

蛙とは思えない気色悪い奇声を発しながら、水掻き付きの手を振りかぶってくるいっちゃん先頭の化け物。一瞬キラッと手が光った…爪か。

「よつと。」

頭上めがけて振り下ろされた爪攻撃を手刀を形作った手で受け流し、隙を作る。

「どーん！」

【グシャ！】

顔面にグーパンチをかます。嫌な音をたてながら顔面が陥没し、後方へと吹っ飛ぶ。

『ガアアアアアアアアアア！』

吹っ飛んできた仲間を飛んでさけ、三匹一度に俺に飛び掛ってきた。

「エル！」

『ああ！』

エルを引き抜き、一匹目の飛び掛り攻撃を避け、

「はっ！」



捻った体を元に戻す勢いを利用し、左手から拳大の氣弾をガトリングの如く連続発射し、化け物どものどてっ腹のみならず、体全体にぶち込んでいく。モロに食らった化け物どもは全員残らず吹っ飛んでいった。

「…フィニッシュ。」

『楽勝だ。』

【キーン】

エルを鞘に戻し、鞘鳴りで戦闘の終わりを告げた。

「うへ……前にも増してスゲエ……。」

「はわあ〜……すごい……。」

…で、さっから傍観していた他数名。戦えよテメエら。主に異世界組。

『ガ……ギイ……。』

?……あ、化け物のうちの一匹がまだ生きてたか

『……ギイ……。』

小さく呻くと、かろつじて上げていた頭を再び地面に打ちつけた…  
…逝ったか。

【バサア】

『!?!』

うおう、ビビった。いきなり体が震えたかと思うとまるで砂のように粉々になっちまった。

「な……砂!?!」

「バカな……。」

ファイフィとステイルが半ば啞然とする。何だ、全てのモンスターが死んだら砂になるわけじゃねえの？

「……! 思い出した!」

「? 何がだ? カルマ?」

隣で、カルマが掌を拳で打つ。

「あの禁術……別の本に書いてあったんですけど、砂を媒介として魔物を造りだし、術者はそれを使役することが出来るって……。」

……あれか? 気分はもはやシャーマン キグってか?

「そんな……まさかアランの奴……。」

「……いや、ファイフィ。まだアランの仕業だと決まったわけでは……。」

「

……。」



どうぞやら話してくれるみたいだな。

「……今から、全てを話すわ。」

「ああ。」

俺はこの時まで、知らなかった。

「あいつは……アランは。」

アルスが、

「……アランは……。」

あいつが、ずっと深い闇を隠していたことを。

「アルスの……実の弟よ。」

〈アラン視点〉

「……………」

木の上から、空を見上げる。空は僕の魔力により、美しい赤に染まっていた。

ああ……綺麗だ……どんな花よりも、人よりも、この空の色に勝るものなんてない。

あ、いや……一つだけあるか、この空に勝る物が。

それは血……どんな荒れた大地だって、人間から溢れ出るたくさんの血によって、美しい大地に蘇る。

そう、一面に広がる花畑よりも、緑よりも、何よりも……。

「……………フフ。」

想像すると笑みが出る。空から視線を外して、眼下に広がる町を眺めた。

いつか見た、この光景……いや、これそっくりじゃないけど、似たような光景が前にもあった。

でも、今では別の気持ちの方が数倍大きい。

「……………この町が血に染まるなんて……………」

想像するだけで……………体が火照ってきちゃうよ。

まるで、あの時のように……………。

「……………あの時？」

あの時っていつだ？いつ、僕は何をしたんだっけ？



……ああそうか……あの時か。

思い出したよ…。

あの時……あなたが村を立つた次の日……。

村中から一人だけ晒し者となり、役立たずと近所の人達から言われたあの日。

稽古をしている時、父が僕に向かって吐いた言葉。

『姉は立派なのに、お前は どうして そんなクズなんだ？』

…… 思えば、あの時から僕は僕でなくなった。

僕の中で、何か音がたてて切れたんだ。

まずは目の前にいた父…そして今まで散々罵ってきた村のおじさん、おばさん、同年代の子供達。

皆の血で、村は赤く染まった。

でもね、全然後悔してないよ？

だって、一つたりともいい思い出なんてなかったんだよ？あの村には？

後悔なんてするはずないじゃないか。

それに…

それに……

皆から嘖き出し、流れ出る血がとっても綺麗に見えたんだ。

村人全員を殺した後、僕はふと思いついた。

もしかして、勇者の血を浴びれば僕は勇者になれるかな？

何だろう、その時、僕の頭の中で誰か囁いたんだ。そうしろって。

きつとあれは、神様のお告げなんだよ。僕にはわかるもん。

その為には、犠牲はつきもの……邪魔だと思った物は、全て殺していかなきゃいけない。

震え上がったよ……歓喜に。

勇者になれるかもしれないという願望もあつたけど。

また殺戮ができるって思うと、たまらなく嬉しいんだ。



さあ、始めようか。

血で彩られた狂気のダンスパーティーを。

第三百三十六の話 光りし者と呪われし者6 (前書き)

今回は短めです。

## 第三百三十六の話 光りし者と呪われし者6

（龍二視点）

『お、弟お！！？？』

全員見事にハモった。俺は黙ってたけど、正味オラマジでびっくらぶっこいただ。

「ちょ…私、アルスからそんな話聞いてないよお！？」

「…龍二、アンタは？」

「いや、初耳だ。」

…つーかあいつの家族構成なんて正直興味なかったし。だから聞かなかったが…聞いたなら聞いたでビックリだ。あ、ビックリしたって二回言った。これで三回目。もうわけわかんねえ。

「……。」

「……ん〜……でも何で黙ってたよ？」

いや、黙ってたのにはそれなりの理由があるからなんだろうけど…まあ何だ。一応聞いてみたってな感じで。

「……………これは…前半部分はアルス本人から聞いた話だけ……………」

……………ゆっくりとだけ……………語り始めた。

あれは、アルスがまだ、アリスと名乗っていた頃の話……

アルスとアランは、ホントは仲がいい兄弟だったの。

でも、村の人達はアルス達を皆よってたかっていじめていた。

とくにアルスは……アランよりひどい扱いを受けてたみたいで……  
対してアランは、ケンカが強くて、よくアルスを泣かしてた奴を返  
り討ちにしてたわ。

でも、時々負けては泣いて……ケガして……そんな時は、アルスが  
ずっと慰めてた。

境遇はひどかったけど、二人はいつつも互いを信頼し合っていて、助  
け合ってたらしいの。

ずっとずっと、こんな関係が続くと思っていた……

……そんなある日…アルスの下に王宮から神官が現れて、アルスが神の勇者の生まれ変わりだと大々的に告げた。

『彼女こそ、この世界を暗黒から救い出し、我々を光溢れる真の平和な世界へと導いてくれる存在だ』と。

その時から、周囲からのアルスに対する対応が一転して変わったってことはアルス本人から聞いたわよね？

……それを見て、一人快く思わない人物がいた。

それがアラン……姉だけが皆からチヤホヤされるのを見て、妬ましく思ってたらしいわ。

その日から、アランはアルスに対してつつけんどんな態度を取り続けて……結局、アルスの仲直りしたい、という願いも虚しく、アルスは勇者として村から旅立っていった。

それからアランに何があったのかは、アルス自身も、当然私達も知らないわ。

ただ、私達でもわかること。それは……あいつは、敵になったとい



う」と。

ここからは、私達も実際に体験した話。

旅の道中、私達が立ち寄った村で夜中に盗賊団が奇襲をかけてきた。当然、私達も宿から出て応戦したわ。

数も減ってきたというところで……アルスは、見てしまったの。

盗賊団に紛れて、村人の首をはね飛ばしているアランの姿を。

あいつの顔は壮絶だったわ。村人を切った時の返り血を浴びて血まみれの顔のまま、恍惚とした表情で私達に向かって笑いかけていた。

そしてアルスに向かって言ったわ。『僕が邪魔だと思っ奴は、例え誰であろうと……例えアンタだろうと、全部切り殺していくよ。それに……殺すのってサイコーだからね。』って……。

その時のアルスの表情は、私達は忘れてない……あれは、もう弟に向けるような表情じゃなく、まるで何かに取り憑かれたかのような……怖い顔してた……。

その時は、一通り村人を笑いながら殺して、アルスに今回だけは特

別に見逃してあげるって言って村から去ったけど……その日からアルスは、アランを探す為に世界中を駆けずり回った。

会って話し合っつんじゃない……殺すために。

そして……雨が降る中、その日は来た。

魔王城に一番近い森で、アルスはアランと対峙した……私達も加勢したわ。

ただ、昔から力の方はアランの方が強くて……剣の腕も、あっちの方が数段上に見えた。

けど、激しい斬り合いの末にどうにかアランの剣を叩き落したアルスは、とどめをさそうと剣を振り上げた。

『アラン！これで終わらせてやる！！』

『チィ……………！』

……でも、あいつは……

『……姉さん。』

『！？』

『……なあってね』

卑怯にも、かろうじてアルスの中に残っていた弟に対する思いを利用した……。

『！し、しまった……！』

『バイバイ……バカなアリス』



暗い、深い谷底に……突き落とした。

『……………』  
「これが、私達が知ってる限りの……真実よ。」

……………まあ、何と云うか……………

「マジかよ。」  
「……………」

うん、この一言に尽きるわ。

「……でも、谷底に突き落としたまではよかったんだけど……。」  
「……………死んで、なかったってわけね。」

雅と花鈴が代弁し、また沈黙。

「……弟…… たった一人の弟…… あいつがどんな思いで弟のことを見ていたのか。」

あいつは人一倍優しい。よって、何の罪もない人間を目の前で笑いながら殺した弟をどう見ていたのか…… 本当のところはよくわからんし、あいつ自身からの口から聞かない限り知らん。

ただ、わかることと言えば……。

「……アルスは、決着をつけるべく俺の家から出て行ったってことか……。」

「……あの、バカが。」

「……おい、もうこうなったら是非もなしだ。手分けしてアルス探すぞ。」

「え……皆で行動した方が安全じゃ……。」

「固まったら行動が制限される。それに天分町は広い。アランがどこにいるかもわからん。危険度は増すが、今はアルスを探すのが最優先だ。」

『今の……アルス……ダメ……会わせ、ちゃ……』

……リリアンの忠告が、俺の頭の中で反響する。

俺も直勘でわかる……今のあいつは、アランに会ったらダメだ。

「ともかく、ステイルとロウ兄弟と雅と香苗が一チーム、俺とクルルとファイフィと花鈴が二チームという風に分かれる。文句は受け付けない。」

もう時間も無い。このパーティ編成で行く。

「ステイル、カルマケルマ、雅達絶対守りぬけ。」

「は、はい！」

「魔王様と行けないのは不服だけど……仕方ない！」  
「……今回はツッコミなしだ。」

わかってんじゃんカルマ。

「行くぞ。」

「オッケー！」

「はい！」

「よ、よし。」

俺は丁字路の左を、雅達は右への道に行く。

…今の俺は、アルスを心配する気持ちと同時に何故かメチャクチャ腹が立っていた。

その……アランって野郎に。

（アルス視点）

「……………」

【ザアアアアア……………】

赤い雲から雨が降り注ぐ…雨は地面を濡らし、草木を濡らし、ボクの髪を濡らし、鎧に水滴を作った。

この雨からは、魔力が感じられた。魔王が使う闇魔法なんて比じゃないかのような…禍々しい魔力。本来なら草木を潤し、人々に恵みを与える雨が、人に害をなす存在と化している。今はまだ効果的には微々たる物だけど、時間が経てば何かが起こる……そんな気がする。



「やっぱり来てくれたね……アリス」

…そして、この事態を引き起こした忌むべき張本人がボクの目の前にいた。

「…あれ？一人で来たの？大変だったでしょうここまで来るの。」  
「お前が知るべきことじゃない。」

自分でも内心驚くほど冷徹な声……でも今は気にしてられない。

「うわ、冷たいなあアリスは。昔は優しかったのになあ。」

「……その名前を口に出すな。」  
「いやだね 僕はこの名前が気に入ってるんだ ……イライラしてる君の顔が見れるし」

【シャリン】

「……黙れ。」

しっかと睨みつけつつ、剣を抜いて切っ先を向ける。ただ、今アランはある建物の屋根の上にいるから、地面からだとは切っ先は届かない。

…でも、ボクには関係ない。

「やれやれ、熱いな。アリスは。」

「……」つ聞く。あの紙に書いてあったことは事実なの？

「？あの紙？」

「……。」

「ああごめんごめん。おどけたつもりだったんだよ。ちゃんど覚えてるよ。だからそんな睨まないでよ。」

もちろん、今は僕は町には手を出さないよ。約束する。」

……つまりは、もう少ししたら町を襲う、ということになる。

そんなこと……させない！

「……ねえアリス。」

「……。」

ボクは返事をしない。ただ無言のまま射殺すつもりで睨みつけているだけ。

「……」ここ懐かしいと思わない？」

「……？」

……何を言ってる……？

「この、草木に覆われ、眼下には村が広がってる……いや、ここからは町だな……この光景、懐かしいと思わない？」

「……………」

チラリと背後を振り返った。

……確かに、周囲は木々で覆われていて、草も生えて、高い位置にあるからここからでも町を一望できる……いつか見た光景に……似ていた。

「ふと、あの頃を思い出すよ……ホント何でだろうね？」

「……………」

「ただ僕の中にあるのは、純粋な殺意と快感……一番好きな風景は、血の海だというのに……………」

「……………」

……アラン……………」

「……全く……わけわかんないよ。ねえ、アリス？」

「……ボクにお前の気持ちなんかわかるわけない。」

「そんなことないさ。」

「!?!?」

……どういう……意味？

「君は僕と大して変わらないよ？」

憎しみで僕を殺そうとしてるところが

……………」

「……アラン……！」  
「はいちよつと待ったー。」

剣を構えた瞬間、アランが両手で制す。

「悪いんだけど……僕と戦う前に、ウォーミングアップしてくれない？  
じゃないと僕、満足に戦えないよ。」

「……ふざけるな！今すぐ降りてこい！」  
「だからあ、ダメだって。ちゃんと戦いたいもん。」

それじゃ……『我、創造する者なり！アベラスト・セフィ』……！！  
【ザザアアア……】

「！？」

周囲の泥が盛り上がり、中から出てきたのはボクらの世界の中級モンスター、ゲルゲロツグ……何故！？

「それじゃ、ウォーミングアップスタート　こんなザコい奴らなんかで死なないでね。」

屋根の上で寝そべりながら、お気楽に言うアラン……。

「……。」

……許せない。

『ギキキキキキ……。』

命を……。

『…………ゲガアアアアアアア！』

弄ぶなんて……！

「…許せない…！」

【ザン！】

横から飛び掛ってきたグルゲロツグを剣で叩き落す。

【バサア】

…絶命したグルゲロツグは、砂となって土へと帰っていった。

「…………アラン！」

『ゲガアアアアアアアアア！』

絶対に……許せない！！

第三百三十七の話 避難勧告発令<スタイル>(前書き)

たまには彼にもいいカッコさせないとね。

第三百三十七の話 避難勧告発令<ステイル>

〈ステイル視点〉

……初めて私の視点ですね……こんな時に限って。

「さあ、こつちです！」

「あ、ありがとうございます！」

リュウジさん達と別れた後、私達は非戦闘員である一般市民を先導していた。

どうやら、近隣の住民は避難勧告というものが発令されたく、全員近くの小学校の体育館へと避難しているようですね……当然のことです、あんな化け物がうろついている中、家でじっとしてられませんからね。

そして、マサさんとカナエさんは逃げ遅れた住民を小学校の経路へと導き、避難させていた。私とロウ兄弟は戦えるので、彼らの護衛です。

「香苗、そつちはどうだ！」

「こつちも避難できたわ！」

……それにしても、気になるのはアランです……何故あいつが生きている…？



それに禁術……あまり詳しくは知らないけど、カルマ曰く魔族でさえ恐れるという術を奴が使っているというが……本当に奴なのか？……ダメだ、証拠が少なすぎて何とも言えない。

ただ、アルスがいなくなったということは……あいつはアルスの弟だし、間違いないかもしれない。

「！？ステイル、危ない！！」  
「！」

『ガギャアアアアアアアア！！』

チツ！上からグルゲロツグ……！

「『豪炎よ』！！』

【ボオン！】

『ギイイイイイイイイイイ！！！！？？？？』

右手を突き出し、魔法を唱える。グルゲロツグは後少しで私に掴みかけられるという距離で超高温の炎に包まれ、一瞬にして灰となった。

「マサ、ありがとうございます。」

「あ、ああ……ってまた来たあ！？」

マサが私の背後を指差す……今度は集団ですか。

……まったく……

「……くだらないですね。」

私は振り返りつつ冷徹に吐き捨てた。グルゲロツグは中級の中でもザコ…それも砂で出来た出来損ない。

そんな奴らが……、

「『豪炎、猛火、焦がせ情熱の炎……フレアセレナーデ』。」

オレに勝てると思うな。

【ドオオオオオオン!!!】  
『ギッ!!!!!!』

灼熱がグルゲロツグ達を包み込み、先程襲い掛かってきた奴と同様、一瞬にして灰へと化す。

『ガアアアアアアアアアア!!!』  
『ギギギギギギギギギ!!!』

しかし、後続と左右の家の屋根から増援……はっ、間抜けどもが。

「『氷結、砕氷、死へと誘う氷……フリーズレクイエム』。」

【バギーン!!】

右側の部隊全員の体の周囲をマイナス以下まで下げ、氷漬けにて次の瞬間に砕く。

「『落雷、迅雷、踊りだせ雷……ボルトラプソディ』。」

【バチィ!!】

リング状の雷が左側の部隊を囲み、高速回転しつつ雷を内側にいる部隊に向けて大放させて身も心も消し炭へと変える。

「『地震、地割れ、眠れ深き地の底に……アースララバイ』。」

【ドオオオオオン!!】

轟音と共に、前方部隊の足元のアスファルトがバツクリと割れて暗い奈落の底へと断末魔の叫びを上げながら落ちていく……地割れは地響きと共に閉じていった。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

…さらなる増援のグルゲログどもがオレ目掛けて走り出し、牙をむき出す。

「……ザコどもが。」

貴様らの居場所なんてなあ、この世界どころか、元の世界にもないんだよ……。

(それに、貴様らは……)

「……………『我に集え、四つの力』。」

オレの周囲に赤、青、黄、緑の光球が地面から浮き上がり、回りだす。

「『炎よ、氷よ、雷よ、大地よ』。」

光球がさらに回転を速める。

「『踊りだせ、幻想の舞を。歌いだせ、魅惑の歌を。』。」

光球の回転により、一つの虹色の輪になる。

「『『我の命めいに従え、四つの力。』』。」



邪悪な闇に終わりなき苦痛を与え続ける、聖なる光の楽団<sup>はしび</sup>達。

「…………ふう。」

戦いが終わり、一息つく。後に残されたのはグルゲログ達<sup>グ</sup>の灰のみ。血で道を汚して迷惑をかけるわけにもいかないという私<sup>わ</sup>なりの配慮のつもりだったのですが……

私としたことが、また我を忘れてキレてしまった……。

あ、しかも連中砂だから血は出なかったんだ……まあ、いいでしょう。

「…………す、ステイル…………。」

「あ、マサさんカナエさん。住民の避難、もう終えました？」

「…………はい。」

ふう、どうにか一段落ついたようですね……。

「…………ステイルって…………。」

「？はい？」

「改めて思うけど…………強いんだな。」

「え…………あ、いや、その…大したことないですよ。」

…………正直、アルスとリュウジさんに比べるとまだまだ……。

「いや、でも十分戦力になってるってお前。」

「そうそう！おかげで避難もスムーズに行えたし！」

「……あ、ありがとうございます。」

……正直、私がこの世界で活躍したのってこれが初めてなので照れます……。

……とゆーより照れている場合じゃない、急がないと……何故か胸騒ぎがします。

「うにゃあああああああ！！？？」

「！？ケルマ！？」

……そう思った矢先に……はあ……。

叫び声がし、カナエさんが驚く……え？あれケルマの声ですか？ケルマとケルマって声質が瓜二つのはずなんです……正直、わかりません。

「チツ！……この、バカケルマ！」

「うええええん！だつてえ〜！」







【トッ】

「ふむ……これで全てかの？」

呆然とする私達の目の前に、一人の人間が降り立つ。

……て、この独特の服装……そして口調……まさか。

「ひ、日暮！？何でここに！？」

「何じゃ？ワシがおっいたらおかしいか？」

「あ、いや……。」

私が言うより早く、マサが先に言ったが急に勢いが無くなった。

「大体、それはこっちのセリフじゃ。何故一般人であるお主らがここにおる？」

「！あ、それは」

「お主には聞いておらんはヘタレ。生徒会長、どうなんじゃ？」

「え？えつと……。」

……ヒグラシさんにバツサリ切り捨てられたマサは俯いて白くなっ  
た。

「……そ、それよりさっきの技……。」

あ、カナエさん話逸らしましたね？

「む？……あの技がどうかしたか？」

「……す、すごい技だね……。」

「大したことなどない。あれで初級じゃ。」

どうでもよさげですね……それに初級って……

…あれ？敗北感が……何故でしょう？

「た、大したことないわけないよ、現に敵も一瞬で……あ。」  
「？」

ふと何かに気が付いたカナエさん。

…あれ？そついえば……

【バサア】

「げほ！ごほがは！……か、間一髪だった……。」  
「ひ、ひどい……。」

……あ、ロウ兄弟忘れてました！！

「……カルマ！ケルマ！……あれ？ケルマの方がひどくない？」  
「気のせいですよ。」

グルゲロツグ達の燃えカスの中から出てきたカルマは若干頬が焦げていた程度で、大事には至らなかつたらしく、対してケルマはその、形容し難い姿で這い出てきました。

…絶対カルマ、ケルマを盾にしましたね。生きてただけでもすごいですよ。

「ほお？ワシの攻撃に耐えられるとはな。」

「伊達に鍛えてませんから。」

「あの……カルマ何かした……？僕の襟掴んでなかつた……？」

……………哀れです。

「……！そ、そつだ日暮！」

「何じゃヘタレよ。」

「………つてわざわざ気分をブルーにさすな！！！」

見事な切り返しにマサは一瞬暗くなりつつも見事なツッコミを入れた。

「そうじゃなくて！…日暮、アルス見なかったか？」

「アルス……？」

「そつ…今行方がわからないんだ。」

……………確かに、日暮さんなら何か知ってそつですけど……………。

「………！そうじゃ、荒木の奴に知らせようと思っておったんじゃ。」

「！アルスのことか！？」

「左様じゃ。」

…本当に知っていた。

「アルスなんじゃが、ワシが屋根から飛び移っている時にあ奴らしき姿がチラリと目の端に写ったのじゃが……急いでいたから確認できなかつたが、もしやと思つてな。」

「…もしかして、白銀の鎧を着てましたか？」

「いかにも。」

……アルスだ。間違いない。

「そ、それでどつちに!？」

「………荒木の奴めはおらんのか？」

「え?あ、ああ。今別行動している…なんでだ？」

「……アルスの向かった先なのじゃが……。」

いつになく、ヒグラシさんの顔は深刻そうだった。

「あ奴は……。」

第三百三十八の話 避難勧告発令<クルル>

（クルル視点）

「えーい！」

『ギガアアアアアアアアアア！！』

バサアつと胴体を薙ぎ払われたグルゲロツグは、私の目の前で灰と  
なって消えた。

公園のグラウンドで大量のグルゲロツグに囲まれてから十匹以上や  
つつけた……でも魔王である私にとってはこのくらい、ヘツチャラ  
ピー！

「クルル、油断しないで！」

「わかつてるよーだ！」

肩に乗ったファイフィに一喝されて、もっかい構えなおして周囲を囲  
んでるグルゲロツグ達を見据える。普段はアルスの肩に乗ってるフ  
イフィだけど、今回はアルスがいないので私に！

『ガアアアアアアアア！！』

「ふふん、甘い！」

『闇の刃、クレダ』！！』

私の声が響き渡ると、迫ってきた三匹のグルゲロツグの足元から漆  
黒の刃が飛び出して、真っ二つにする。代々魔王一族である者しか

使えない闇魔法

…でも、複製された魔物とは言っても……殺すの、なんかいやだなあ……。

「ちょ、クルルぼーっとしないの!」

「え?あ、ごめ」

『グオオオオオオオオオオオ!』

!?あ、しま…

【ドオオン!!】

うひゃあ!?

「余所見すんなクルル。」

「あ、ありがと…リュウくん。」

咄嗟にリュウくんが放った足刀蹴りが、飛び掛ってきたグルゲロツグを吹き飛ばしつつ砂にした……あの蹴り、すごい……。

『ガアアアアアアア!』

「チッ……テメエら、叫び方がワンパターンなんだ、よ!!」

変なところにツッコミ入れたリュウくんは、迫ってきた一体のグルゲロツグの顎にアッパーを決めて浮かした。

【ガッ!】

「せめてええ……『アツパラパー！』とか叫んでみるやあああああ  
あああ！！」

【ドオオオオオオオオオオオオオオ！！】

そして浮いたグルゲログの足を素早く掴んで無茶な要求をしつつ、  
思いつきりハンマーの如く振り落とした。直撃を食らったのとハン  
マーにされたのはもちろん、叩きつけた時にできた衝撃波で周囲の  
敵も粉々になって砂になった。

「はっ！おらあ！」

さらにリュウくんは素早い動きで突きや蹴りを繰り返して次々と残  
った敵を撃破していつて、最後にエルを抜き打ちで前方にいた三匹  
を薙ぎ払って吹き飛ばした。

「『龍破特攻弾』！！」

『ガアアツ！！』

腕を十字に交差させながら地を蹴ってグルゲログ達に突撃してい  
くと、体に纏った蒼い衝撃波で進路上にいた全ての敵を上空や左右  
へ吹き飛ばす。

「チヨイ。」

【ピーー】

体当たりから膝をついてブレーキをかけて低い姿勢から一指し指を  
前方に向けると、指先から細くて青い閃光、『龍糸貫』が飛び出し  
てグルゲログを貫く。

「チヨイチヨイチヨイ。」



さらに三発撃って、射線上にいた敵を大量に貫く。

「あそおれも一つ。」

今度は身を捻って両手から龍糸貫を撃って、さらに数を減らしていく。

「最後にい……『五頭龍糸貫』！」

その姿勢のまま右手の掌を広げて指先を向けると、五本の指から龍糸貫が飛び出してグルゲロググ達をさつきより多く貫いて砂にした。

……ここまでするのに、一分もかかってない……リュウくん、すごい！

「ん……フィニッシュか？」

『！まだだリュウジ！上だ！』

『ギゲエエエエエエエエエエ！……！』

リュウくんが一息いれた時、物陰から跳躍したグルゲロググ達が、上空からリュウくん目掛けて口を開きながら急降下してきた。

でもあれくらいならリュウくんでも軽く避け

【ガッ！】

「！？り、リュウくん！？」

なかった！？噛まれた！

「……………」

『グガアアアアア！！』

『ギギギギギギギ！！』

さらに続いてグルゲロググ達は身動きとれないリュウくん、の肩、足、腰、頭に食らいついて……………」

「ちょ、アンタ何やってのよ！？抵抗しなさいよバカア！！」

「リュウく……………」

助けないと……………」

「『龍鉄風・牙』」

【……………」

……………」

「……………」

リュウくんに食らいついていたグルゲロググ達が一瞬でバラバラになって砂へと化した。

「……わりいが、俺に触れるとケガするぜ？」

『これがホントの言葉のアヤ……だな。まあケガどころの騒ぎではないが。』

……すごい…… ホントにすごいよリュウくん……。

「……？おいクルル。ボーっとしてないでさっさと急ぐぞ。」

「……ごめん。」

別世界から復活して、歩き出したリュウくんを慌てて追っつ。

「……！クルル下がれ！」

「はえ？」

【ドオン！】

！？



いきなりのごとで頭が真っ白になってたところを、ファイの呼びかけで復活して慌てて横へ飛びのく……ゴーレムの拳が、グラウンドの地面に大きなクレーターを作った。

あ、あんなの食らったらいくら私でも木っ端微塵だよお!?

「ほお?随分と力が強いな。」

「感心してる場合じゃないでしょリュウジ!」

リュウくんが顎に手を添えて頷いてると、ゴーレムの一体がリュウくんに向かって……。

「……リュウくん危ない!」

【ドオン!】

リュウくんはゴーレムの攻撃を軽く後ろへバック転して避けた。

「クルル。そいつ頼む。」

「あ、はい……ってうええ!?!」

いつものノリで返事しちゃった!い、いやだよ!ゴーレムって上級モンスターの中でもトップクラスの硬さなんだよ!?

『ゴアアアアアアアアア!』

「……ええい!もうやっちゃる!」

一瞬ゴーレムの咆哮にビクリして固まっちゃったのは秘密だよ!

「……」

一瞬で駆け寄って、高く跳躍。そのままゴーレムの逞しい右肩の上に飛び乗った。

「てりやああ!!」

高く振り上げた剣をゴーレムの筋肉の溝辺り目掛けて振り下ろす!

【ドシュ!】

『グオオオオオオオオオオオ!!』

「わわ!?!よつと!」

剣を突き刺すと、痛みで暴れだして危うく振り落とされそうになるけどその前に自分から飛び降りた。落ちても平気だけど、痛いのだもん。

「もつかい!!」

でも懲りずにもう一度飛び上がって今度は右足の膝めがけて剣を振るう。間接の隙間辺りが大きく抉れて、深い傷を作ったけど血は一切出でない。代わりに傷口から砂がサラサラ溢れてきた。

「てりやたあ!」

残像を残しつつ、素早く左足まで移動して同じように切りつける。気合の声にツツコミ入れたらダメよ

よし、続いては…左肩!

「とぉー!」

【バツ】

切りつけた左足の膝を台にして、そこからジャンプ。そして左肩目掛けてええ……

「そりゃあー!!」

深く突き刺す!

『グオオオオ!!』

よおし、最後は頭!!

「ちょ、クルル上!!」

「ほあ?」

【ドン!】

「みぎゆうー!!」

「クルル!」

まるでハエを叩き落すかのように右の掌が迫ってきた瞬間に防御しただけ……地面に叩きつけられた衝撃で……いつつ!

「クルル、大丈夫!？」

「だ、大丈夫……じゃにゃい。」

「そこは強気で行くつよ!?」

だつて痛いもん……みゆう……。

『ゴオオオオオ……!』

「!ちよ、来るよ!?!」

「!」

ゴーレムが両手の拳を合わせて、思い切り振り落とそうとしているのが霞んだ目からおぼろげに見えた……あ、ちよっとまずいかも。

「クルル避けて!早くー!ー!ー!」

「……………にぎい!」

【ドオオオオオオン!】

横に転がって破壊力抜群のハンマーナックルを回避して、転がる勢いを利用して立ち上がる。

痛がつてる場合じゃない……反撃しないと!

「うりゃあああああ!」

気を取り直してもつかいジャンプして、大きく剣を振り上げる!

「でえい!」

【ドオ!】

『ゴガガアアアアアアアア!』

今度は成功!額に大きな切り傷ができた。



【タッ】

「よおし、準備オツケー！」

そしてゴーレムから距離を取って、真正面になる形で私は剣を掲げた。

「……………お願い、効いて……………！」

さっき五箇所を傷つけたけど、あの程度じゃゴーレムの動きは止まらない。相手にとってはかすり傷程度のダメージ。私の剣だから相手を傷つけられたけど、普通の剣だと肌を切る前に剣の方が先に折れちゃう。

だから、今ゴーレムは傷つけられて痛がってるけど、すぐに立ち直って私に攻撃してくるはず。

……………でも、私がただ普通に攻撃しただけと思う？私を誰だと思ってるの？

四代目魔王、クルル・バステイだよ？

『漆黑……』

まず右肩の傷から黒い炎が燃え上がり、

『暗黒…』

今度は右足の膝の傷から同様の炎が吹き出る。

『常闇…』

さらに左足の膝の傷からも炎が噴出し、

『暗闇…』

そして左肩の傷も燃え出す。

『闇夜…』

最後に額の傷から炎が出る。

『五つの闇、我が意思に集え。その闇で全てを食らい尽くし、焼き尽くし、消滅させよ。』

魔力で出来た炎が噴出したことによって身動きが取れなくなったゴ

ーレムから、炎で紡ぐかのように複雑な装飾が施された紫色の巨大な魔方陣が浮き出してきた。

『全ては無に帰<sup>き</sup>し、無から生まれる。我、今こそ終焉<sup>き</sup>への扉へと導かん。』

魔方陣が高速回転して、黒い稲妻を発する。必死に抜け出そうとしてもがくゴーレムだけど、もう絶対に抜け出せないし…間に合わない。

これは報い……この世界の人達を傷つけようとした、あなた達の報い……

そして、

『開け、全ての始まりと終わりの扉。』

ヘウン・オブエント  
終焉乃楽園……!……!……!』

私の友達がいる場所まで行かせまいとした、罪……!



ト、ほとんど運任せの技。それに最強クラスだけあって、魔力の消費が激しい。

魔力が無いと生きてけない魔族である私にとっては、結構辛い技だった。これが勝利の代償っていう奴なのかな……？

「で、でも大丈夫……だいじょうブツ！」

「吐血してんじゃないのおおおお!!???」

はあ、はあ……やば、結構瀕死……。

「ち、ちょっと待ってて今リュウジ呼んで」

「ま……待って……」

「アンタが待って言ってる場合じゃないでしょ!??」

こ、こうなったら……。

「これしか……ない!!」

「は?」

懐をゴソゴソと漁って、シャキーン!と取り出したのはああああ!

!!

「ハグハグハグハグハグ!!」

板チョコ(明 ミルクチョコレート)!!

「って食ってる場合かあああああ!!」

ファイがツッコんでるけど、気ニシナイ!今は食べることに集中!

「ハグ!……【ゴクン】……………」

復活!!!」

「何その単純体質!？」

チョコを丸ごと一気食いして、失われていた魔力が全回復!!うによおおおおお!!燃えてきたどー!!

「フフフ…こんなこともあるかと、昨日のうちに家にあったチョコレートに私の魔力をたっぷり注ぎ込んでおいたんだあ」

「あ……なるほど、だからね。」

いつ魔力が無くなるかわからない私にとって、これは重要な非常食です。まさかこんなところで使うことになるとは思わなかったのだ!

……テンション上げてる場合じゃないよね、うん。

「ふう…次はあんな技使わないでよ？」

「えへへ、ごめんね」

チロリと舌を出して謝罪した私。

……ホントは、あそこまで強力な技を使う必要なんてなかったと思う。確かにゴーレムは上級モンスターで、魔族の戦士でも苦戦を強いられることもしばしば……でも私にかかれば、ゴーレムなんて若干手こずる程度のモンスターと同等の力にしか見えない。

じゃ何で最強クラスの技を使ったのか……何て言うのかな？

凄く、頭にきたの。

何で関係ないこの世界にまで、あんな凶暴なモンスターが……あつてはならないことなのに。

それに…あのゴーレムは、私達の足止めをした。一刻も早くアルスのところへ行きたいのに……

友達のとこへ……急ぎたいのに……

でも……それだけで私………

「クルル？」

「………！あ、ご、ごめんねフィィ。急がないとね。」

フィィの呼びかけで思考するのをやめた。とにかく今は目の前のことに集中しよう。

「………あれ？ところでリュウジは？」

「ほあ？」

見回してみると………あれ？リュウくんいない？そういえばゴーレムも………。

「おー、終わったかあ。」

「二人とも無事ー！？」

「あ、リュウジにカリン！」

ホッ………よかったあ、ちょっと心配しちゃったよ。

「リュウくん！」

グラウンドの入り口から走ってきたリュウくん達の下へと私は駆け寄っていった。



「よ。平気そうだな。」

「まあね。」

無事、リュウくん達と合流……よかった、カリンちゃんもケガないみたい。

「それよりリュウジ、アンタどこ行ってたのよ？」

「ん？ああ、とりあえずあのデカ物倒したからこっちはお前らに任せて、住民の避難をしてる花鈴の援護してたわけよ。」

「途中でのキモガエルが襲い掛かってきて……危うくだったわ。」

「へえ………って、え？ゴレム先倒しちゃったの!？」

「当たり前だろ。」

……。

「……いつ頃に倒したの？」

「え〜っと……最初に『クルル、そいつ頼む。』つつつてお前が返事した後一刀両断。」

「それ瞬殺じゃない!?じゃこっち手伝いなさいよ!？」

「お前ら頑張ってたから大丈夫だと思つてよ。」

……戦闘に気を配りすぎて気付かなかったにや……。

「ともかく、これで近隣の住民の避難は完了したし、周辺のザコも一掃できたし、とつとアルス探すぞ。」

「は、はい!……」

改めてリュウくんに畏怖を抱きつつも、走り出したリュウくんの後を追って私達も走り出した。

……何だろっ、さっきからの雨、嫌な感じが増してきているような……。

## 第三百三十九の話 龍の牙1

（アルス視点）

『ガアアアアア！！』

「くう！」

アランが召喚した魔物を倒し続けて、どれくらい時間が経ったか……正直、何体倒したかもわからない。

わかるのは、最初にグルゲログを数十体倒して……さらに獰猛な狼のようなモンスター、ワーファング数十体に、巨大なゴーレム数体………場所が広いだけに、多すぎる。

「『光よ、傷を癒せ』！」

【キーン】

時々傷ついては、自分の胸に手を当てて回復魔法をかける。回復量は微量だけど、傷を多く受けすぎて倒れるよりは遥かにマシだった。

「はあ！」

『ゴオ！？』

一閃……ゴーレムの逞しい胸板を切り裂き、大きな傷を作る。剣に光の力を宿しているから、ゴーレムのような頑丈な体でさえも切りつけることができる。

『グガア!』

「ちい!」

ゴーレムの股の間から、グルゲロッグが這い蹲ったままボク目掛けて突進してきた。

「このお!」

【ガッ!】

咄嗟にグルゲロッグの顎目掛けて足を振り上げて、強引に浮かばせる。

「はあ!」

『グゲオ!』

間髪いれず、がら空きになった腹に剣を突き刺す。即死みたいで、すぐに砂となって消えた。

『グオオオオオオオオ!』

「まだまだあああ!」

拳を振り下ろしてきたゴーレムの腕に飛び移り、そのまま駆け上がって首を切り落とす。ボクを追って飛び上がってきて爪を振り上げた三匹のグルゲロッグを横薙ぎで返り討ちにして吹き飛ばした。

「『雷よ、降り注げ』!」

落下しつつ魔法を唱え、周辺にいる敵目掛けて数百の稲妻を落とし、一掃する。

「この！」

『グギ！？』

着地と同時に正面から飛び掛ってきたグルゲロツグに剣を突き刺す。

「でりゃあああああああー！」

そのまま勢いよく剣を振り上げて後方に投げつける。刺さっていたグルゲロツグは剣から抜け、背後からも迫ってきたグルゲロツグ二匹にぶつかって吹き飛んだ。

そして次の目標目掛けて走り出そうとし……

【バシィ！】

「うあー！」

急に足元をすくわれる感覚に襲われ、たまらず転倒した。

『グゲゲゲゲゲー！』

「クソ……！」

上半身を起こして背後を見てみれば、グルゲロツグの長く伸びた舌がボクの右足に巻きついていていた。

そして今がチャンス、とばかりに大勢のグルゲロツグがボク目掛けて走り寄ってくる。

「このぉ……！」

右足に巻きついた舌に右手を置いて、魔力を集中させる。

「『雷よ、いかすち進ね』!!」

手が電流を放ち、そのまま導火線のように巻きついている舌を伝って本体のグルゲログ目掛けて近づいていく。

【ドゴオオオオン!!】

『ガギゲ!!?』

電流は本体のグルゲログまで辿り着くと、大爆発を起こして周辺の連中も巻き込んで吹き飛ばした。

既に黒こげとなった舌を強引に引っぺがして立ち上がって息を整える……でも、激しく動きすぎて、息がしづらい……心臓も暴れまわっているかのようにバクバクいつてる……。

「はあ……はあ……うぐ……!!」

思わず片膝を着いてしまう……

でも……まだ!

「まだいける!!」

『ギギイ!!……』

周囲から迫ってきたグルゲロッグに対し、体を回転させつつ全方位を剣で薙ぎ払う。胴体が真っ二つに分かれたグルゲロッグ達は、そのまま砂になって土へと帰っていった。

『グオオオオオ！！』

「！？チィ！」

グルゲロッグだった砂を掻き分けるかのように、漆黒の狼に似たモンスター、ワーファングがボク目掛けて飛び掛ってきた。

咄嗟に回避しようとしたけど、間に合わない……。

【ドッ！】

「きゃー！」

そのまま押し倒され、組み付かれた……クツ、動けない……！

『グルルルルル……。』

「くっっ！……このー！」

ワーファングを蹴り飛ばそうと、胴体をかろうじて動かせる右足で思い切り蹴りつける！

『グオオオオオ……！』

「！？くう……。」

……ダメ、ビクともしない……こうしてる間にも、赤い目をギラつかせたワーファングが剥き出しにした牙から涎を垂らしつつ、今にも

噛み付かんとしている。

(何か……何か手は……。)

若干パニックになりつつも、何とかこの状況を打破するべく冷静に頭を整理する……。

『グルル……。』

！来る！

『ガアアアアア！』

「くっ！」

【ガッ！】

必死に身をよじったおかげで、何とか左手だけは抜け出すことに成功。その左手で迫ってきた牙を咄嗟に押さえつけて、何とか防御した。

『グオオオオオオオ！！』

「うぐ……ああ……！」

でもワーファングの牙はナイフのように恐ろしく鋭い……抑えている手から血が滲み出てきて激痛が走った。

(このままだと……やられる……！)



必死に押し返そうとする中、ふと右の方を見る。

『グゲエエエエエエ！！』

(クソ！こんな時に……！)

グルゲロツグが舌を垂れさせたまま、爪を振り上げて走り寄ってくる……完全に無防備な今の状況で、あの攻撃を防ぐ手は……

！そつだ！

『グガアアアアアア！！』

ワーフアングの牙を押さえつけてる間にもかかわらず、グルゲロツグは爪を思い切り振り下ろしてきた。

でも腕が使えないなら……この状況を使えばいい。

「はあ！～！」

【ガッ！】

『キャイン！？』

上に押していたの牙を逆に引くことで、頭にくるはずだったグルゲ

ロググの爪攻撃は覆いかぶさったワーファングの首筋に命中した。

「このお！」

【ガッツ！ドス！】

『ギイ！？』

すでに死体となって力を失ったワーファングを蹴り飛ばし、起き上がり様にグルゲロググの心臓を突く。

「くう！……『光よ、癒せ』。」

何とか窮地を脱して立ち上がり、激痛が走る左手に回復魔法をかける。薄緑色の光が淡く輝くて、ズタズタだった掌の傷が癒えていった。

「うっひゃ〜、前にも増して強くなったねえアリス。」

……屋根の上から見下ろし、感嘆の言葉を投げかけるアラン。周囲のモンスターは、全部砂へと帰した……後は。

「もうお前だけしか残っていない……アラン。」

「ん〜、そみたいだねえ。」

……。

「……はっ！」

【タツ】

その場で高くジャンプし、建物の柱から出た出っ張りに飛び乗り、そこからさらにジャンプして屋根の上へと飛び乗る。

ちょうど、アランとボクが向かい合う形となった。

「……………今度こそ……………終わらせる。」

「……………フフ、恐い恐い」

うすら笑いを浮かべておどけるアラン。でもそれを見たところで、ボクの中で再び怒りが燃え上がることはない。

何故なら…すでに怒りを超えているから。

「じゃ、お望み通りやってあげるよ。」

【バサ】

おどけた表情のまま、右手で体を包んでいたボロマントを脱ぎ捨てる。そこから現れたのは、スラリとした体躯と体にフィットした黒革の服、左の腰に付けた贅沢な装飾が施された長剣。

そして不気味に脈打つ紫色の左腕。

「それでは……………」

【シュイン】

涼やかな音をたてながら、腰に付けた剣を鞘から引き抜く。

「見せてあげるよ……………」

【ブチブチブチ……………】

嫌な音をたてながら左腕が少しずつ不気味な剣へと変化していく。

「僕の身に宿った……。」「

完全に左腕が剣になると、剣を交差させるように腕で顔を覆い隠す。

そして、

「勇者をも超える、悪魔の力を……!!」

【ゴォー!】

両腕を振り下ろすと同時に、アランの背後が燃え上がった。

（龍二視点）

「むん!」

【ザシャアー!】

蛙のバケモンを切り伏せ、道を開く……つーかこれで何体目だ？

「ああもおーアルスの奴どこにいんのよ!？」

「ファイファイ落ち着いてよ。」

「落ち着いてるわよ!！」

落ち着いてまへんがな。

さて、ファイファイがギャーギャー喚いている間に……。

【ピーー】

指で輪を作り、笛の如く鳴らす。

「?龍二、アンタ何してんの?」

花鈴が聞いてきた。そのうちわかる。

「ミィー!」

「?ほえ?タマちゃん?」

屋根の上から飛び降りてきたのは、俺のダチでありサポート役でもある珠。

「珠、情報は?」

「ええ、町の人達は全員無事に体育館へ避難完了。化け物達も周辺

には近づいておらず、今のところ安全です。』

「そうか……で？警察とかは？」

『すでにSATが体育館で待機、警備にあたっています。』

「ふむ、一応は安全か。」

『そうですね……後、アルスさんなんですが。』

「おお、それが一番聞きたい。」

『仲間達にも搜索をお願いしたんですが、どこにもいないそうです。手当たり次第に探しているんですけど。』

「おいおい、ネコのネットワークでも見つかんねえのか？」

『お役に立てなくて申し訳ないです。』

「いや、いい。こつちでも搜索を続ける。お前達も頼む。」

『わかりましたー。』

再び珠は塀を伝って俺らが来た方向へと走り去って行った。

……んむう、家を出る前に珠にも搜索を依頼しておいたんだが……未だに足取り掴めず、か。クソ、時間がもったいなえって時に……。

「……あ、あの龍二さん？」

「んあ？何だ花鈴。」

「……いや、やっぱり何でもナツシンです。」

「はあ？」

わけわからん奴だ。

「……何でネコと会話してんのよ。しかも成立させてるし。」

「は？」

「あ、いや別に何でもない！」

ホントわからん奴だ。

【~~~~~】

「ん？ケータイか。」

ズボンのポケットからメロディが流れるケータイを取り出し、通話ボタンを押した。

相手は……雅か。

「雅、どうした。」

『龍二か。そっちの状況はどうだ。』

「大丈夫だ、町の人達は避難させたし、全員無事だ。そっちは？」

『ああ、こつちも大丈夫だ。それより、商店街の入り口まで来てくれ。日暮が話があるそうだ。』

「？日暮が？……わかった、すぐ行く。」

通話をやめ、再びケータイをポケットに入れる。

「お前ら、商店街まで行くぞ。」

「え？何で？」

「話は後だ。」

時間が貴重な今の状況、話はまた後でいいだろう。ともかく、俺達は商店街への道を通り走った。

第四十の話 龍の牙2

（龍二視点）

「龍二！」

「オッスー雅る。」

「る”いらねえ。」

こんな状況でもツツコミは忘れねえんだな。

ともかく、商店街に辿り着いた時にすでに雅達のチームは到着して  
いて、全員合流できた。

……ここ、普段なら買い物とかで家族や主婦で賑わってるってーの  
に……静かすぎんのも何か変な気がすんな……まあ時間的に今は夜  
だけど。空が真っ赤になってて昼も夜もわかんねえし。

「来たか、荒木。」

「っておりよ？日暮も来てたのか。」

雅達のチームの中で一際目立つ白髪頭がいた。ま、電話ですでに知  
らされていたから別段驚きやしなかったが。

「うむ。このようない大事に、ワシが力なき一般人と共に隠れるわ  
けがなかるう。」

それは体育館に避難した人達に失礼ではなくて？



「つとと、そんなことはどうでもよい。」  
「あ、そうそう。俺に話があるって?」

大体、こいつの口から出るのは重要な話ばかりだし。

「うむ……アルスのことじゃ。」

な?ビンゴ。

「ま、マジで!?!」

「どこにいるの!?!」

「落ちて着けクルル、ファイファイ。話を聞いてからだ。」

正直なところ、俺もさっさと話せコンチクショウと頭の中で思っちやったりしている。にしても、珠達でさえ情報掴めなかったってのにやるな、日暮。

「……ワシが屋根の上を経由しながら移動しておったら、あ奴の姿がチラリと見えたような気がしたんじゃ。」

「ほおほお……で?どの方角へ行ったんだ?」

「……………」

っておい、そこでダンマリか。張っ倒すぞ。

「……………あ奴は……………」

「おじ。」

「裏山の方角へ向かった。」

.....。

「.....え？そんだけ？」

「.....。」

.....んだよ、場所わかる上にここからだ結構近いじゃん。何をダウンロードする必要がある。

「...お主、わからぬか？」

「んあ？何が？」

「.....。」

.....あ、ちょっと待てよ？.....

なるへそ、そゆことか。

「ね、ねえどついう意味？」

「わかりやすく説明しなさいよ。」

花鈴とフィフィが説明を促す。

「.....それは私から言いましょう。」

お、スタイル説明してくれんの？じゃ任せろ。

「この空一面を覆った赤い雲……発生源はどこか、わかりますか？」

「発生源？これってアランが作り出したんじゃないの？」

「そうです。つまり、アランがいる場所から発生してます。」

「……………え、てことはまさか……………」

フィィ、お気づきの様子。

「そうです。」

赤い雲は裏山から発生しています。」

さつきから大気中から氣に似てるけど限りなく近い、でも氣とは別格の変な力が肌を刺すように感じられる。フィィ達は魔力を追って探知できるが、氣を追って探知することは不可能。よって、こいつらは裏山から発生する魔力を感じる事ができなかった……………かと言って、氣に似てるけど違うこの力の根源までは、俺でさえ感知できなかった。よって場所はわからず……………こんなもんかね？勘の鋭い奴なら、魔力とかそういうのには反応するもんなんだが……………特殊な力って奴か。

とりあえずわかったのは、発生源であるアランは裏山にいる……………で、裏山へ向かったアルスも、当然そこにいる。

となれば、二人がすでに接触してる可能性が高い……………チツ、やっぱ遅すぎたか。

「……………で、でも何でアルスが裏山にアランがいるって……………」

「……知らね。」

あいつも魔力しか探知できないハズなんだが、理由はサッパリわからん。だが、まあどこにいるかはわかった。

後は……。

「……なあ、ちょっと待ってくれ。裏山にいるってのはわかったけど、具体的な位置がわかんねえぞ?」

「……まあ、裏山も広いからの。」

あ、確かにあそこは木々が生い茂ってっからなあ。

「頂上じゃないの?」

「あ、それあり得そう!雲発生させるのにちょうどいいし!」

………一理あるが、何か引っ掛かる。

「いや……違うのお。」

「へ?」

って俺が否定する前に日暮が否定しやがった。

「確かに頂上からだと言を発生させるのにつってつけじゃが、あそこからは何の力も感じることができん。」

「何でそんなのわかるの?」

「この大気中に流れる力は、妖力に瓜二つじゃ。じゃから感じる」とができる。」

ああ、氣には近いけどまんま妖力……のような魔力、てか？ああや  
やーじ。

「で、じゃ。ともかく、ワシは裏山へ行って様子を見てきたんじゃ  
よ。」

「それはよ言えや。」

「ものには順序があるんじゃ……ともかく、偵察がてら見てきたん  
じゃが、案の定周辺には妖物どもがウヨウヨとおったわい。」

ふむ……。

「戦わなかったのか？」

「あの数はワシでさえも骨が折れるからのお。それでお主に協力を  
求めようとしたんじゃ。」

「なるへそ……で、肝心の場所特定はできたのか？」

「ああ、バッチシじゃ。連中の目を掻い潜ってまで見てきたぞ。」

おー、それが聞きたかったんだい。

「おそらく、奴らの親玉……アラン、といったか？」

そやつは、山の中腹にある廃墟の寺に居座っておる。」

！！

「？廃墟の……寺だと？」

「え？そんなのあつたっけ？」

……雅と香苗が頭に？を浮かべてるが、俺は違つ。

「……あそこ、か。」

「？リュウちゃん、知ってるの？」

「まあな。あそこは俺の昼寝スポットの一つだ。」

「あ、そうか。この町の各箇所に昼寝スポットがあるって前言ってたわよね？」

「そゆこつた花鈴。（……まあ、それ以外にもあんだがな……）。」

あそこは山の中腹にあつて、石段を上ると開けきつた場所にでかいが古くてボロボロになった寺がある。昔、それなりに信拝者が訪れていたらしいが、何か訳あつて捨てられ、今じゃ廃墟になつちまつて、手入れもされずに草ボーボー状態になつてる。鳥居もボロボロで、寺の名前が記入されてたはずの看板もすでに錆び錆びになつちまつたから名前さえわからん。

まあ、正直誰もそんな薄気味わりいところには行きたがらねえよな？オカルトマニアの連中とか肝試し目的の連中は除いて。

でもな、そこから見える景色が最高なんだよね。よく屋根の上とかに寝そべつてその景色眺めながら寝るんだよな。これは今んとこ俺しかしてない最高の娯楽。

ただ……な。あそこへ続く道つてのが全然わかんねえのが、町の連中が知らない理由だ。

歩道のすぐ脇のところにある上、完璧草木で覆い隠されてつからなそこへ続く道。おまけに小さい上にまるで獣道のように人の手が入っていない。さらには裏山の周辺で一番人通りが少ない場所にある。何で参道への道に手を加えなかったのかは知らんが、そんなこんなで寺には誰一人行く奴はいなかった。ネコでさえそこへ繋がる道がわからんほどかもしれん。珠達がいい例だ。

ま、俺が見つけたのも偶然中の偶然なんだがね……それに俺があそこを知ってる理由は、単なる昼寝スポットなだけじゃねえんだけど。

「ワシもあそこの寺には妖気の調査が目的で行ったことはある。が、しかし何も出なかつたから、何も気に留めてなかつたんじゃ……それがまさかこのような形になるとはな。」

「?どゆこと?」

「…その妖力とアランという奴が発しておる魔力が同調して、あのような雲を形作っておるんじゃよ。」

……ふむ、なるへそ。アランが根城にするのも無理ねえわ。

「…そして、この雨。」

「ん?ああ、この雨か。何なんだこの雨?」

もう慣れちまつたけど、変な感じがすんだよなこの雨。

「うむ。今はまだ何の害もない。」

「今は?」

つーことは、時間が経てば何かが起こるってわけだ……。

「……じゃここにいっまでも留まってるわけにゃいかねえな。」  
「そ、そうだよ！早く行こうよ！」

クルル、焦る気持ちもわかるがな……………

「行くぞらあああああああああ……！！！！！！」

俺だつてめっちゃ行きたい気持ちで一杯一杯なんだよ。何で今まで普通に話せたのかも不思議なくらいだ。

2591

「ちょ！？リュウジ待ちなさいよ！？」  
「速いっつーの！？」  
「……全く、こ奴は。」

俺の足に付いてこれないのか、他の皆はグングン俺から引き離されていった。

「リュウくん、リュウくん！」  
「おおっ、お前速いじゃねえか。」



「だって飛んでるもん。」

横を見てみれば、地面から数センチほど離れたクルルが飛んでいた。つて浮遊術かよ。便利だなあおい。それくれ。

「皆はどうすんの!？」

「後から来るつて。」

それに日暮もいるし、何かと出くわしても何とかなっただろ。それにあいつもあそこには行ったことがあるらしいし、道にも困ることはないだろう。

「……ねえ、リュウくん？」

「何だ。」

前にしか集中してないので、返事は簡略化した。

「あそこ……えっと、テラ、だっけ?あそこに他に何かあるの?」

「……何でそう思う?」

『貴様がカリンと話してる時にふと頭の中に思い浮かんだだろう。』

あ、そつか。エルもクルルも読心術使えたんだっけな。てか今頃喋るかエル。話参加しろよ。

「ん、まあ……あるっちゃあるな。」

「?曖昧だね?」

「まあな。それより今はアルスだろ?」

「う、うん。」

話を逸らした感が否めないが、仕方ない。今はそれどころじゃねえしな。

……今の俺には必要ねえと思って隠しておいたんだが……使うことになるかもしれんな、アレ。

（アルス視点）

「そおれつと!!」

【ギイン!】

「くう!」

頭上から来る斬撃を受け、すぐさま一步後ろへ下がる。

さつきから受けては避け、反撃しようとしても弾かれる……これの繰り返し。まったく隙がない太刀筋に、光のような剣速……

アラン……前戦った時よりも遥かに強くなってる……!

「この!」

「ひゃは!」

それでも、攻撃の手を休めるわけにはいかない……様々な型を駆使し

て、剣を縦横に振るった。

「はああああ!!」

【ガギイ!】

最後に渾身の大上段斬りをアランの脳天目掛けて仕掛けた……けど、剣を交差させることによって受け止められた。

「はは! やっぱ勇者なだけあって強いねえアリス! 一撃一撃に隙がないよ!」

「うるさい!!」

興奮気味に叫ぶアランを蹴り飛ばし、距離をとる。

「『光よ、矢となり貫け!』」

かざした左手から、光の矢が四本連なるように飛んでいく。

この魔法は防御不可能……いける!

「壁、展開。」

え?

【ガガガガ!】

「!?!? な……弾かれ、た……。」

「クケケケ……驚いたあ?」

そんな……あんな言葉だけで、前方に見えない壁を張ることなんて不可能なはずなのに……。

「じゃ今度はこっちい

ブラックランス  
『黒槍』！！！！！』

！？

「はああああ！！！」

【ドオオオオオオオ！！！！】

悪寒がし、咄嗟に屋根から飛び降りる。同時に、アランの頭上に召喚された巨大な漆黒の槍がボクがいた場所目掛けて飛んできて、爆発した。

【ズザア！】

「ぐ、う！」

爆風によって空中でバランスを崩したボクは、着地に失敗して顔から地面に激突してしまった。

「ありやりやあ、無様だねえアリス。」

崩壊した屋根からアランが飛び降りてきて、ボクの前に立つ。





撃は周囲の木々を薙ぎ倒し、建物を吹き飛ばす。

危うく、剣を取り落としそうになる……けれど、腕が痺れて、力が入らない……。

「今まで散々いい思いしてきたんだろうねえ！？ええ、勇者様あ！？」

速く、力強い斬撃がボクに迫る……

「他の国とか回って、いろんな人から尊敬とか憧れの眼差し受けてさあ！？」

何とか、反撃しないと……でない……

「それに比べてその頃の僕はどうしてたと思う！？」

ぐう……腕、が……！

「毎日毎日、標的を僕にだけ定めて罵倒してくる村人達！」

ああ……くうう……！





「おらあー!!」

「カハツ……………」

【ドォ!】

怒涛の連撃に耐え切れず、剣を弾き飛ばされて終いに胸に上段蹴りを食らい、吹き飛ばされて大木に背中をぶつけた…。

「ぐ…………… あああ…………… カハツ!」

激痛が体を襲って、視界が霞む…………… 血が、口から吹き出る。

動きたい…………… でも…動けな、い……………。

「はあ、はあ…………… キヒ、キヒヒヒ…………… 無様だ…………… 無様だ……………」

かるつじて、アランの声を聞くことはできた……………

もう…………… 狂気に捕らわれていて、取り返しがつかなくなってる。

「ああ…………… いつまでもこうして、君の無様な姿を眺めていたい……………  
…でも、もうそろそろ終わりだね。」

…………… くは!…………… 体…………… 動け……………!

「ああ、そんな動いちゃダメだよ。それにもう抵抗したって無駄な

んだから。

もう少しで、何の力も持っていない愚かな町の間達がいるあの世に逝くんだからね、君は。」

.....

.....今.....何て.....？

「な.....ん.....。」  
「ああ、どういう意味か気になるの？そりゃまあ、君は知らないから当然だね。」

すでに、町には僕が作ったモンスターを放っているよ？それも、大群を」

な.....！？

「.....や.....。」

「え？何？」

「.....約束、が.....違う.....！！」

強引に体を立たせると、体中に尋常じゃない痛みが走り、悲鳴を上げる。

でも、そんなの…構ってられない!!!

「え？約束なら守ってるよ？今は僕は町には手を出さないよ？」

でもモンスターは放さない、なんて言っていないよ？僕は手を出さないとは言ったけど」

……………。

「あれ？怒っちゃった？キヒヒ、そんな怒ってばっかだと、そのうち血管切れ」黙れ。」…………へ？」

許せない。

「アラン……………。」

ボクはもう、

「お前を……。」

絶対に、

「あの世に……。」

許すことは

「送る……!!」

できない……!!

「うらあああああああああああ……！！！！！！」  
「ぐあ！？」

背後の木を蹴り飛ばし、その勢いを利用してアランの胴目掛けて突進し、吹き飛ばす。

「チィ！まだ動け」

「『氷よ、凍てつけ』！！」

【ビキビキビキ！】

体勢を立て直そうとしたアランを、氷漬けにして動きを封じこめた。

足だけじゃない。体の全てを氷漬けにして完全に動けなくした。

「アラン……！！」

切っ先を地面に向け、ボクの中に流れる魔力を全て剣に注ぎこむ。

魔力がどンドン体から流れていくたびに、擦り剥いた箇所から血がさらに吹き出て鎧を濡らす……頭が痛い……体が、痛い……！

「お前は……ここで消えろ……！！」

剣を天空に向けて掲げる。魔力を溜め込んだ剣は、神々しく白く輝いていた。

……けど、ここで負けたら……町は破壊される。

ボクを勇者としてじゃなくて、ボクとして見てくれた皆の町……

だから……だから……!!

「『<sup>いにしえ</sup>古の光、闇喰らいて全てを照らさん』」

負けない!!!

「『アシェン・グランダスト』!!!!!!」

（龍二視点）

【ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!】

「おおつとい。」

「ぴゃあ!？」

『くっ!？』

寺へと続く道を見つけた瞬間、山の中腹からめちゃんこ眩しい光が発生し、同時に突風が吹き荒れて俺達に襲い掛かった。ついでに振動すげえ。

咄嗟にクルルの襟を右手で引つ掴み、飛ばされないようにしておく。んでもって鞆に収まったエルがカタカタと腰で揺れるもんだから、左手で抑える。

俺はまあ、これくらい大したことねえから普通に踏ん張ってる。舐めたあかんで。

【ゴゴゴゴゴ……】

「……………収まったな。」

「ぶえ〜…な、何〜？」

『すごい力だったな…何なんだ?』

振動も収まり、風も止んだんで、発生源である山の中腹を見してみる。

「……………何あれ？」

『な…あ…。』

「ほほお?」

クルルとエルは絶句し、俺は感嘆の声を上げる。

山の中腹から、天に向かってバカでかい光の柱が伸びている……間  
近で見ると絶景だなこりゃ。

『何なのだ？……この、神々しいまでの光は……。』

「……………この魔力は……………」

……………いつか、見たことがあるな俺も。

アルスが、剣を巨大化させる時と同じような力をあの柱から感じる  
……………。

……………だが、その中に何か違和感を感じた……………何だ？この感じ？ホン  
トにあいつのか？

「……………行くぞ。」

「う、うん。」

『急ぐぞ。』

まあ、行って確認するっきゃ手はねえわな。

（アルス視点）



「はあ……………はあ……………はあ……………」

光が収まってもなお、剣を掲げたまま荒い息をする……………必死に、呼吸を整えた。

「……………う……………はああ……………」

……………落ち着いた。

「……………。」

剣を下ろして、改めて周囲を見つめる。

ひどい有様になっていた……………木々は薙ぎ倒され、開けた広場はボクを中心にクレーターができ、さらに広くなった。木造の建築物も、もう原型を留めていない……………木っ端微塵になっていて、石造りの土台しかない。

……………アランの気配も、消えていた。

「……………。」

……………終わった。

「……終わったんだ……全部。」

アランが消えた今、この雲も、雨も、そのうち消える……モンスター達も再び砂に帰る。

リリアンも、きっと元に

「！う……。」「

くあ！……はあ……はあ……。

「……やっぱり……この技は……ツライね……。」

……あの技は、リステイル・オムの次に威力の高い全範囲技……魔力のほとんどを消費して出せる、最強の必殺技だった。

……体が、無事ですむはずない、か……。

「……かえ、らないと……。」

足を引きずりながらも、その場から離れる。

血が流れ、鎧も体もボロボロの状態……体力も底を尽きかけた今、途中で倒れるかもしれない。

でも帰らないと……皆、待ってる。

アハハ……帰ったら、リュウジさん怒ってるだろうなあ……叩かれるかも……。

「バーカアリス」  
「……え？」

【ガッ！】

！！！？？？

「あ、ぐっ……！？」

な……何……？

【ボフ】

!?

「ふう、ひどいなあもう。服汚れちゃったじゃないか。」

……そんな

「あ……らん……。」

いきなり地面が盛り上がって……そこから、無傷のアランが出てきた。

左腕を、醜く巨大化させた状態で。

「ヒヤハハ、無理だよ無理 たとえ君が最強の技使ったとこで僕には勝てない」

…不気味に脈打ち、血管が太くなった上にまるで筋肉の塊のような腕につかまれて、ボクの体は宙に浮かぶ……。

「な……ぜ……。」

「ん？何で効いてないのか？当然だよ。」

今の君の力は、負の力しか感じないから」

え……………。

「僕が許せない、僕を殺したい、僕が憎い……………これらの感情、気持ちに支配された今の君は、見た目だけ神々しくて、中身は実は闇のように真つ暗な力しか出せないわけ。そんなんで負の力を使う僕に勝てるわけないじゃない？むしろパワーアップさせちゃってるよ？」

……………そんな……………。

「でも、おかげでこの雨をさらに強化できそうだよ。ありがとね、アリス。」

「……………何？」

「この雨はねえ、僕の力を宿してるんだ。そうだねえ……………うん、ちようど君のお友達のリリアンが死ぬ頃にね、」

「この世界の全生物の魂は消滅して、死滅する。」

！！？？？

「ようはあれだね。リリアンと同じ呪いがかかっているんだよ、この雨。でも世界中にまで雲広げるのに多少時間かかるし、それに力使っちゃったから雨の方にまで力が少ししか回らないんだよ。」

でも君のおかげで、時間は大幅に短縮できたよ。ありがとね」

あ……………ああ……………。

「それじゃあ、今僕の剣で楽にしてあげるよ。」

こんな……………こんなのって……………。

「それじゃあね？お人好しで、愚かで、弱虫な……………」

僕のお姉さん」

……………リュウジ……………さん……………。

【ドス！】

胸に、  
焼けるような激痛が走った……。

第四百十一の話 龍の牙<sub>3</sub> (前書き)

龍二の新たな。



## 第四百四十一の話 龍の牙3

（久美視点）

「……………」

「……………」

龍二達が出て行って、かなり時間が経っている。時計を見てみれば、もう夜中の三時半……………夜明けまでもうすぐ。

「はぁ……………はぁ……………」

……夜が明けたら、リリアンは死ぬ……………その前に何とかしないと……  
でも……。

「リリアン……………」

今あたしにできるのは、苦しんでるリリアンを見守りつつ汗を拭うこと、

そして龍二達の帰りを待っているだけ。

「……………雨、ひどくなってきたな。」

一緒に待っている恭田が、窓の外を眺めながらポツリと呟く。

「……………そうだな。」

…その呟きはただの独り言なのか、それともあたしに向けられたのかわからない……………でも、ただ重苦しい空間に身を置くのはいやだった。

今は少しでも会話が欲しい……………でないと、不安で押しつぶされそうになる。

「……………龍二達、遅いな。」

「……………そう、だな……………」

……………。

「……………大丈夫……………なんだろうか……………？」

「は？」

つい、呟く。

「……………皆……………無事に……………帰ってくる……………のか？」

もし、誰かに危険が迫っていたら……………

もし、龍二達が失敗なんかしたら……………

もし、夜明けまで間に合わなかったら……………

……怖い……。

「……大丈夫だろう。あいつらなら。」

「何でそう言い切れる！？下手な同情なんかいらない！」

「同情なんかじゃねえよ！！！」

思わず、あたしは立ち上がった。

重い空気が辺りを支配し、沈黙が漂う……聞こえるのは窓を打ち付ける雨の音と、リリアンの息遣いのみ。

「……。」

「……。」

「……すまない、気が立ってたみたいだ。」

「いや……。」

……再び、あたしはリリアンの隣に座り込む。

………気まずい………。

「……あんさ。」

「？」

そんな中、恭田が話しかけてきた。

「俺、昔結構荒れててさ……よく仲間とつるんではタバコとかは当たり前だったし、無免許でバイク乗ったりしてたんだ。しまいにゃ親父狩りもして警察に補導されたりもした。」

……初耳だ。

「そんな時一緒にいた奴ら、皆俺についてきてたんだ。俺、そこら辺じゃ結構強い方だったからさ。先輩にも負けなかった。それで、そいつらと一緒に、バカやって、金せびって、気にいらぬ奴とかりんちにしてやった。」

ああ、あたしが中学二年の頃に起こった中学生による暴力事件か……あれ、恭田が主犯だったのか。

まあその頃はまだあたしと恭田は出会ってなかったから面識なかったけど。第一その事件自体には興味がなかった。

……。

「……なんでいきなりそんな話を？」

「まあ最後まで聞けって……でよ、そんな時信じられるのは、自分自身と俺の後ろをついてくる連中だけでさ……大人はもちろん、他の同年代の奴らなんか、まったく信じちゃいなかったんだ。」

……意外だ……いつもナンパばかりしている、この恭田が昔はそんな奴だったなんて……。

「毎日毎日、ケンカに明け暮れて…それだけで満足だったんだ…  
…あの時まででは。」

「あの時?」

「……………中学二年の終わり頃、いつも俺の後をついてきてた奴らが、俺をハメやがって……………隣の連中と一緒に俺をリンチにかけたんだ。」

え……………。

「殴られて蹴られて……………痛かったけど、それより仲間に裏切られたのがショックだったんだ。その時悟ったね。俺もう誰も信じられねえって。」

……………。

「……………でも、そんな時、あいつが…龍二が駆けつけてきて…俺助けるために連中に一人で立ち向かって…ったんだ。」

……………。

「俺、あいつに無理だったって止めたんだよ。相手は数十人、勝ち目なんかねえって。」

でもあいつ…俺に向かってこう言いやがったんだ。

『とりあえず俺のこと信じてみ。』

……………その一言の後、一瞬で連中を建物の壁ごと吹っ飛ばした。」

……すじ……。

「でさ、それからあいつらとつるむようになってから、俺わかったんだよ。本当に、心の底から信用できる友達のことを、信じてみるってさ。」

だから俺、あいつのこと信じてここでジッとしてんだ。」

……恭田……。

「……だ、だからさあ……ああ、つまりだな、お前もあんま不安がってないであいつを信じてみるよ……な？」

……。

「……ありがと、恭田。」

「惚れた？」

「調子に乗るな影薄。」

「……。」

ようやく、いつもの雰囲気に戻った。

……そうだな、不安になったところでしょうがない……第一、あの龍二のことだ。どんな困難だって乗り越えられるだろう……いつだって、そうだった。

だから、信じよう……龍二を。あたしにとって、大切な人のこと

を。

「…皆が戦ってるのに、自分だけ弱気になってる場合じゃないな…  
…リアン。」

そして、今必死に戦ってるリアンの頬をそっと撫でた。

「龍、二……………アル……………ス……………。」

〈龍二視点〉

……………

正直に言うと、これは夢かと思う。そうそう、ここ最近頑張りすぎて疲れてるんだろな俺。やっぱり自分の体のことは自分が一番わかっている、つもりだったんだがな。

相当疲れてるんだろう？な、俺の体……………おい、そう言え。

そうだと……言え……!!

「あ……アル……ス。」  
『バカな……。』

後ろにいるクルルと、腰のエルの絶句した声……。

鳥居を潜り抜けた俺達の目の前には、馬鹿でかい気色の悪い腕でアルスを掴んで持ち上げている真っ赤な髪をした野郎。

そして腕に両腕を拘束され、剣が腹に突き刺さっているまま力なく吊るされたアルスがいた。

「アルス……そんな……あ。」  
『!?クルル!』  
「!」



エルが叫んで、咄嗟に前のめりに倒れこもつとしていたクルルの体を反射的に支える。

「クルル。」

「……………」

……………ダメだ、あまりのショックで氣い失ってる。

……………。

「…エル。」

『…わかつている。』

クルルを鳥居の根元にもたれかけるように座らせると、俺はエルを引き抜いてアルスを掴んで、剣を突き刺したまま動かない野郎……多分、アラン……を見据えた。

こいつは……………絶対許さねえ……………何が、何でも……………。

「……………チッ！やっぱり神々の加護を受けただけはあるね……………」

？何か呟いてるが……………何のことだ？

「……………」

！！！

『リュウジ、アルスは……………！』  
「わかっている！！！」

俺の空耳じゃないことを祈りつつ、一瞬にして駆け出す！

「『ゴールデンストーム  
金色乃嵐』……………」

「！？なっ！？」

俺とエルの声が重なり、突き出した切っ先から無数の金色の雷が暴れ狂うかのように飛び出す。

【ドオオオオオオン！】

「ぐああ！？」

見事、雷撃はアランの腕と体に命中。

「とお……………」

【ガッ！】

で、俺は吹っ飛ばされたアランの一瞬の隙について腕から開放されたアルスを空中でキャッチ、救出っと。

「アルス！」

地面に着地し、その場でアルスを下ろして抱き起こす形にする。当の本人は、体中傷だらけで血まみれな上に汚れまくり……頭もグツタリと垂れていた。

「アルス、起きろ！」

小さく揺さぶるが、全く起きる気配がない……。

……だもあ、まどろっこしい！

「起きろっつってんだろーが……この……」

バカアルス……！！！！」

【バチイ……！】

『って貴様強引すぎ……？』

エルの力を（勝手に）借りて電気SHOCK……！！

「……………」

……………。

「はあ！……………はあ、はあ……………」

……………ホッ。無事覚醒……………。

「起きたか、アルス。」

「……………リ……………ユウジ……………さん……………？」

息も絶え絶えなおかげで、声も超小さい。

それでも、今の俺にとってはそれでも十分安心できるくらいだった。

「……………ボ……………ク……………は……………」

「ああ、大丈夫大丈夫お前死んでないから。鎧に感謝しな。」

そ。こいつが生きている理由……………それはひとえに、こいつが着ている鎧のおかげ。

ファイファイから聞いたが、こいつが着ている鎧とクルルの鎧は神々から授かった最強の武具として、かなり強力な魔法結界が薄く張られている。つまり、ちっとやそっとの攻撃なんざでは破壊できねえつてわけだ。

おかげで、アランの心臓を狙った一突きは結界を破りこそはしたものの、心臓までは届かずに若干胸に傷を付けた程度だったってことだな。“貫かれた”んじゃないくて“突き刺さった”ってのに注目すべきだったな。まあ突き刺さってた時にホントに小さい声で呻いたのを聞いたから生きてるって確信持ってたんだけど。

まあ、とりあえず一安心。よかったよかった

「おのれ……よくも……。」

……って、そついやアラン忘れてた。

『忘れてなかっただろう。しっかり覚えていたくせに。』

「やかましいよお前？」

『サーセン……。』

心読むなやこのクソ剣。

…まあいいか。ともかく。

「よっこらせつと。」

アルスを、俗に言うお姫様抱っこして持ち上げる。

「さて、ボロボロになった奴は一先ず退場だな。」

「……………リュウ……………ジさん……………」  
「あ？」

抱き上げてるから、どんな小声も聞き逃さない。

「……………し……………」  
「??何だ？」

「し……………んぱい……………かけさ……………せて……………じめ……………ん……………な  
さい……………」

「……………。」

……………  
…つたく。

「謝るのは、これ終わってからだ。」  
「……………はい……………」

……………まああえて今言わないが、謝った後に頭ぶん殴る。

「……よいせつと。」

クルルの隣に座らせ、同じように柱にもたれる形をとった。

うし、これでオーケーだ。

「…エル。」

『わかっている。』

【ヒュン】

エルを手で一回転させながら、前へと進み出る。アランは、でかい左腕を小さくさせていき、普通の人間サイズの大きさに戻した……まあそれでも気色わりいけどな。紫色だし。

……やっぱ、アレを使うことになりそうだな、うん。

「…君、誰？」

…案の定、聞いてきた。

「まずは自分から名乗るってのが流儀じゃね？」

「……。」

前に進みながら、俺は挑発のつもりで言った。あらま、何か乗っちやったらしくて顔歪んじやった。

「……君、僕が誰だかわかってんの？」

「すみませんねえ、初対面なものでお前のことなんざ全っ然わかりやせなんだわ。つーか無理あるっしょ初対面の人わかってる奴って矛盾しすぎ。」

うはあ、おもしれえこいつ。ますます歪んでるよ顔。

「……………たかが脆弱な人間風情が……………」

「何か言ったか？」

「……………いいよ、名乗ってあげる。君のような生意気ですぐに死にそうな奴に教えるなんて意味ない気がする」

「いいからはよ名乗れやボケ。」

うーん、案外逆上しやすいねこいつ。

「う、ぐう!!……………僕は、アラン・フィート……………」

お、見事に抑えたな。偉い偉い。

…そんでやつぱは苗字アルスと同じか……………半信半疑だったが、マジだったか。

「さあ、次は君が名乗る番だよ?」

「あ、俺名乗るのメンドイから好きなように呼んでもいいぞ?」

「……………」

『貴様、それはいくらなんでもひどすぎるぞ……………』

何がひどいよ?適当にイジらせといて最後は結局名乗らない、というオチって何かいいだろ?笑えねえ?

「……………ふざけてるの?君?」



「全然？至ってマジメ。」

と、互いに距離を取りつつ円を描くように歩いてたら、元々寺があったはずの…っーかもつ見る影なくて土台だけじゃん…の前まで来ていた。

まあ、ここが俺の目的地なんだがね。

「へえ、そう…たかが人間如きが、この僕にそんな口聞くんだけあ？」

「ん？いけないか？」

「いや、別にいいよ？」

ただ…死に急ぐことになるけどね。」

【ゴォー！】

アランの背後が燃え出すと、紫色の左腕は不気味に変化していき、これまた紫色の剣が生えた。気色わる。

「さあ…って。じゃ君のような奴は八つ裂きよりもむごい目に合ってもらおうかな？」

ニヤリ、と笑いながら、右手の剣の切っ先を俺に向ける。

……っーかよお。

「そうっーお前こそさあ、俺に向かってそんな口聞いてもいいのか

「？」

「……………何？」

アランの顔から笑みが消え、代わりに無表情となる。怒っているのは確かだ。

「確かに、お前の力はすごいな。どんな魔力も属さない、最強の力持ってるし。」

俺はヒョイト、エルを左手に持ち替える。

「ただな、俺が気になる点を上げてみれば……………」

背後の石造りの土台にもたれ、アランを見据える。

「そういうお前だって人間じゃん。普通の。」

「……………はあ？」

目が点になっているアラン。何でやねん。事実やないかい。

「僕が…人間？……………」

クク、クキケケケケケケ……………」

世にも奇妙な笑い声を上げるアラン。ああ何だかム力つくわあこの笑い方。

「わかってないねえ、君……僕はねえ、この力を手に入れてから、人間なんてやめたんだよ。」

今の僕は、勇者よりも…そして魔王よりも最強の力を手に入れた世界で最も強い悪魔、アランだ!!」

両手を広げ、大袈裟に言うアラン。

「つか……恥ずくね? 大声でんなこと叫んでさ。まあ俺にとっちやどろだっけいいけんな。」

「……はあ……ま、お前が人間じゃないって言うんなら悪魔だろうが神だろうが何だっけ名乗ってもいいけどさあ。」

大体覚悟はしていた。こういう奴ほど、物分りの悪い奴って多いんだよなあ。

つか、そんなことあどろだっけいいい。

「…そんなら、」

【ドーン!】

俺は土台の一部を蹴りつけた。

「俺が、」

【ガラガラ…】

蹴った部分が崩れ、しゃがみ込む。

「世界最強と豪語する、」

【ガラ】

瓦礫をのけると、そこから出てきたのは漆しつで塗られ、何重にも鎖で巻かれた長方形の箱。空の光を受け、鈍く輝いている。

「オメエに、」

【バキーン！】

箱を持ち上げ、鎖のうち一本を掴み、思いっきり引きちぎる。これは特殊な鎖で、俺以外の人間には触れることさえできない。

「教えてやる。」

【ヒュ】

箱を天高く投げる。箱はクルクルと空中で回転し、俺の頭上目掛けて落ちてくる。

【キーン!!】

エルで切り上げ、箱を真つ二つにする。若干時間差があり、空中から落下しながら箱に一本の線が入る。

やがて箱が開き、もとい分かれ、中身が露になる……俺はそれを、地面に落下する前に右手で引っ掴む。

「お前にとって何が足りないのかをな。」

【シューイン!!】

右手のそれを振るい、鞘を脇に飛ばす。

姿を現したのは、アレ……俺の体半分くらいの長さ、そして一片も曇のないその研ぎ澄まされた刃……

「行くぞ……………」  
『龍刃』。  
「

『龍神』の名を冠する日本刀を、俺は手にした。

## 第四百十二の話 龍の牙4

（龍二視点）

俺はアランの野郎に対して左手にエルを、そして右手には例のアレ、  
『龍刃』<sup>りゅうじん</sup>を持つ。

『龍刃』……代々荒木家に伝わる、いわゆる家宝。大昔、どっかの  
えらい強い奴が所持していたらしいが、何故か知らんが何やかんや  
で荒木家に渡り、そのまま伝わってったそうだ。

詳細はわからんが、とんでもない強度と切れ味、そしてこの妙に手  
に馴染む感覚……伝承だと、その刃にとまった蝶でさえ真つ二つに  
なったとされるほど。

まあそんな刀なんだけどさあ、親父から譲り受けた時、別に使うこ  
ともないかあってなノリと、しまう場所に困ったからこの誰にも知  
られていない寺に隠して念のために封印を施しておいたんだが……  
こんな形で、握る羽目になるたあな。

ま、ちょうどいいか。こいつにはアルスの分と俺のムカつき度の分、  
倍返しにしてやらにゃあならんし。

「……僕にとって……足りない物……だど？」

左腕もとい剣から禍々しい氣を立ち上らせ、右手には黄金の鳥を模  
した派手な装飾がついた鏢の剣の切っ先を地面に向けるアラン……

かくいう俺も、構えらしい構えは取らず、両手の剣（エルと龍刃）の切っ先を下に向けながら仁王立ちする。

別に油断してるわけじゃねえ、むしろこっちの方が逆に隙がねえんだ。対し、あちらさんも隙がねえように見えるが………ありゃ油断してるな。相手を侮ってやがる。

つかむしろ怒ってる。キヤーこわーい（棒読み）。

「……この僕に……」

足りない物なんて、ない！！！！」

【ドオン！】

おおっとい、アランの背後からどえらい炎が噴出してきやがった。

「お前を……殺す！！」

そう言うなり、フッと姿を消すアラン。いや、正確には一瞬にして移動した……か。

「ヒハハハハハハ！！人間如きが、この動きについてこれるはずがない！！」

消えたまま、高笑いしてバカにするアラン。

っーか……



「ほれ後ろ。」

「な…!?!」

遅いつての。

「むん!」

【バキイ!】

「ぐはっ!」

アランの背後に回りこみ、直蹴りを喰らわせる。背中からモロに喰らったアランは、言い感じに海老反りになって木々を破壊しながら吹っ飛んだ。

ま、これで十分、

「グアアアアアアア!?!?!?!」

…なわきやねえか。

【ギイン!?!】

吹っ飛んだ木々の間から土煙を上げながら猛スピードで突進してきたアランの右手からの斬撃を、エルで防御。鏑迫り合いへと持ち込んだ。

「はー！」  
「おっと。」

すかさず、左腕の剣で切りつけてきて若干体を逸らすことで回避。そこから立て続けに両手からの怒涛の連斬を回避または剣で防御していった。

「おらあー！！」

「よいしょ。」

【ドオンー！】

最後に、大上段からの両手振り下ろしを、エルと龍刃を交差させることで防御した。

さて……と。

「はっ！」

【シュイン】

「うあ！？」

ちよつと身を翻すことで、体重を乗せていたアランの体勢を崩す。いわゆる捌きだ。

「むん！」

「チイ！」

そこから龍刃を振り上げるが、アランは間一髪で回避した……が、脇腹を掠り、浅く切れた。

当然、逃がすつもりはない。

「ほっ！せいや！」

龍刃、エルを交互に振り、アランと切り結ぶ。甲高い金属音が山に響き渡り、火花を散らす。体を回転させつつ剣を振り、時には蹴りを交えて踊り狂うかの如く連撃を繰り返す。

「くっ！ちい！」

うまいこと剣で防御し続けるが、時々腕やら足やらを浅く切り、ところどころから血が出る。さらに時々出る蹴りの回避、防御まで反応できず、もろに腹やら顔やらに喰らう。

致命的ではないが、明らかダメージは受けているなこりや。

「この、クソがああ！！！」

「よっど。」

一歩後ろへ大きく下がってそこから突進力を利用した薙ぎ払いをアランは放つが、俺はその場でジャンプし、横向きで縦回転しながら後ろへ下がる。

「『龍閃斬・二重三日月』ふたえみかつき。」

着地と同時に交差させた腕を横へと振り払い、二重の衝撃波を飛ばす。

「ちい！……なめるなああああ！！！」

舌打ちしつつ、右手の剣で衝撃波を弾き飛ばそうとしたアラン。

【バキイン】

「!? な、何!？」

が、弾き飛ばしたのはいいが、同時に剣も真つ二つに折れてしまい、折れた刃はアランの背後の地面に突き刺さった。あゝあ、高そうな剣だったのに……もったいな。

「さて、これでオメエさんの武器は一本減ったな。」

「……………」

いやいや、そんな恨みがましい目で見られなくても？武器を無効化するってのは戦略の一つだし？第一どんな思い入れがあったか知らんけど、しゃーないじゃん？正当防衛(?)なんだし。

「……………お前、何者だ？」

「?は?わからんか?人間。」

「ウソつけ!!人間が、普通の人間がそんな力出せるわけがないだろう!?!何者なんだお前!?!」

……………んむ。

「……まあ、確かにそうだな。周り曰く、普通の人間には出来ないこと俺やってるし。」

「……なら、お前は一体……。」

「んなの……一つしか答えねえじゃん?」



「『ブラックフレア  
黒炎』！！」

つと、防御した瞬間魔法つばいの唱えやがった。

ならこつちも…

「『ライトニングアロー』。」

エルで。

【ドオオオオン！！】

頭上から黒い炎が降ってきて、それを雷の矢で爆発させる。

「よつと。」

【ドン！】

「ぐほ！」

アランを蹴り飛ばし、距離を取る。

「か……この……。」

若干遠いところで腹押さえてうずくまってるアラン。そりゃどんな奴でも急所入れられたら…ねえ？

「そんじゃ、一発かますか。」

『承知。』

龍刃とエルの刃を重ねるようにし、直立不動で構える。

「閃雷、全てを分かち」

『轟雷、全てを砕く』

俺とエルの声が響くと同時に、二本に送り続けている気によって龍刃とエルが白く輝く。

「二つの雷ここに集い」

『全てを飲み込む光とならん』

白い光は、淡い……が、その刃に込められた力は、想像を絶する量にまで溜まっていた。

ここで……放つ！

「『奥義！』」

俺とエルの声が八モると共に二本の切っ先を地面に向けて振り上げ、

「『龍王天雷剣』！！！！！！」

同時に一気に突き刺す。

「…………『双牙』」

【ドオオオオオオオオオオ！！！！】

最後の言葉と同時に、アラン目掛けて純白の光が地面を走る。

「！う、うおおおおおおおおお！！？？」

白い光は絶叫するアランを飲み込み、爆発するかのように白く発光した。

エルの魔力と、俺の氣の合成技……んでもって龍刃の力が合わさり、威力は超手加減してもあの威力。ホントは範囲攻撃なんだが、さっきみたいに一点に集中させることもできるわけで。

……で、まあおそろく……。

「ぐ、があ……あが……。」

こいつは死にはしねえだろうな。

発光が止み、残ったのは真っ黒で大きな焦げ跡。そして体が痺れたらしく、うずくまるように倒れたアラン。

「クソ、が……。」

「どつちがだ。」

小さく呻いたのを聞き、俺何気に返答。イエイ、言ってやった。









……………ふむ。

【ドオオオオオオオオン！！！！】

巨大な槍が上空から放たれ……………着弾と同時に大爆発を起こした。

爆発は小規模ながら、爆風は強烈で周囲の木々を薙ぎ倒しまくった。

「……………ひ、ひひひひ……………」

トンつとアランが地面に降り立ち、未だに煙が立ち込める中、着弾によってできたクレーターを眺めて狂った笑い声を上げる。

「ひひ……………ひはははは……………勝った……………僕の、勝ちだ！！！！」

空を仰ぎ、口を歪ませながら自らの勝ちを宣言した。

現にクレーターには跡形もなく……………欠片さえもない。





「ただいまー。」

軽く右手を挙げて呑気に言った。

「な……なん、で……。」

衝撃波に吹き飛ばされて尻餅つきながら、絶句するアラン。

「…あのな、この程度で俺を倒せると思うなよ?」

人差し指をアランに向けて言い放つ……これじゃどっちが悪役なんだか。

「こ、この……!……まだまだあああああ……!」

すぐに立ち上がって、また両手に球体……しかも左右二つずつ、計四個同時に作りやがった。はあ、もうメンドイ。

「…『龍糸貫・乱』みだれ。」

指先から龍糸貫を一本飛ばす。それはアランには向かわず、右側の球体を貫く。

「ははは……!そんな攻撃でこの球体は【バリィ!】……え?」

アランがチラリと横見て啞然とした。





（アルス視点）

「……………う……………ううん……………」

「！アルス！」

「大丈夫！？」

……………あれ？……………何でボク……………。

「……………？カ、リンさん？ファイファイ？」

「ええ、ちゃんとわかっているみたいね……………よかった。」

「まあ、心配かけさせないですよ……………！！」

目の前にいるカリンさんはホっとため息をついて、ボクの顔の横でファイファイはすすり泣いた。

……………後頭部から柔らかい感触が伝わってくる……………ボクがカリンさんを見上げる形になっているからして、膝枕をされてるようだった。

ふと、左頬を触ってみた……………血が出てない。ファイファイが回復魔法をかけてくれたみたい。

「まったく、無茶するでない。」

「……………血だらけになっているのを見て、もうダメかと思ったんだぞ？」

「でも、無事でよかった……………ホントに。」

「……………ヒグラシさん……………マサさんにスタイルも……………。」

横を向けば、膝まづいているヒグラシさんとマサさんとスタイルがいた……………。

「クルルちゃん、起きて！ホラ！」

「う……………！？アルスうううううう！！！」

「魔王様ストップ！一応アルスが人ですから抑えて！」

「今回はケルマに同意してやる。」

……………柱にもたれて眠っていた魔王が飛び起きて、ボクに抱きつこうとしたところをケルマとカルマに押さえつけられてた……………いろんな意味で危ないところでした…。

「アルス……………！！死んじやったかと思ったよ……………」

「！！！」

「……………ゴメン……………」

「謝って済むならタナカさんいらないよ……………！！うええええええええええ！！！」

……………誰ですかタナカさんて？

「……………あのねクルル。こんなしんみりしたムードの時にボケかましてる場合じゃ……………」

「しんみりでも無さそうじゃがな？」

……………！！！！

「リュウジさんは！？」

「……………あそこじゃ。」

起き上がってヒグラシさんが指差す方を見た。

「このおおおおおおおおおおお！……！！」  
「ほーれほれ。」

……え。

「……あいつ、アランを完全に弄んでるのよ。」  
「……………」

ボクと戦ってる時と違って、忌々しげにリュウジさんに切りかかっていくアラン……右手の剣は失われている。

対し、左手にエルを、右手に不思議な造形をした片刃の長い剣を持って、アランを子供のようにあしらうリュウジさん。

……今さら、だと思っけど……すい。

「クソおおおおお！……！何で、何で当たらないんだああああああああ……！！……！！」

「下手糞だから。」

「ぐげがああああああああああああああああ……！！……！！」

……何で。

「ほれほれーこっちこっちー。」

「ぶざ、けるなあああああああああああああああ……！！……！！」

……何であなたは、そんなに強いんですか。

「あそおれ足払い。」

「がつ!?!」

どうして……戦えるんですか。

「キーツク!」

「ぐがあ!?!」

何のために……戦えるんですか。

どうして……。

「うがあああああああああ!?!?!何故だあああ!?!最強の、最強の悪魔であるこの僕が!?!お前みたいなのなんかにいいいいいいいい!?!?!?!」

「……なあ、アラン。」

【ガキインツ!】

「ぐあああああああ!?!?!?!」

「……!?!?!?!?!、言わせてもらおう。」



…ファイファイ、から？

「お前は昔、アルスと一緒に暮らしていた頃はケンカ強かったらしいじゃねえか。」

「だからどうした！！」

「……聞くけどさ、

その力は誰のために振るつた？」

……。

「そ…そんなの決まっている！自分のためだ！！」

「違うね。お前はアルスが苛められていたら割り込んでそいつにケンカ吹っかけてたらしいじゃねえか。」

「な……そ、それは！！」

「お前は、姉であるアルスを守るためにケンカ吹っかけた……違うか？」

……。

「昔のお前は、守るべき人間がいた。そいつのために力を振るい、それ以外には力は使わなかった……そうだが。」

「ち、違う！！」

「そうか？少なくとも俺はそう思っただがな？」

……………。

「それがさ、今じゃ姉であるアルスが憎いつつーことで憂さ晴らしに無差別殺人か？そりやお前あれだよな。随分自分が強くなったつもりだったろうな？」

「……………ああそうだ！！僕は強い！強いから、その力を示した！これの何が悪いん、だ！！！！」

「ん。【ガイン！】……………それ自体が間違ってたんだよお前。」

「何、だとおおお！！??？」

「…お前はアルスが憎くてつつけんどんな態度とったのか？」

「当然だ！本来なら力のないアリスが勇者に選ばれて、何で僕が村に留まらなければいけなかったんだと思うと憎くて憎くてしょうがなかったんだ！！」

「……………それ、違うんじゃない？」

お前実は寂しかっただけじゃねえの？」

……………。

「何い！？」

「アルスは勇者として皆から褒め称えられ、そしてお前は蚊帳の外。今のようなお前だったら、間違いなくアルスを殺しにかかっていたんじゃないのかっ！」





「それがわかんねえ奴には………っと！」  
「!?!? な!?!?」

……リユウジさんは、右手の剣を宙に放り投げ、アランの注意を逸らした。

そして……

「とっ。」

【ツツツツツツツツ】

胸の辺りの三箇所を指でついた。

「な………!?!? ゲウ！」

【ドサ】

いきなりアランが苦しんで、前のめりに倒れる。

「ぐ、ああああ………な、何を……した……ああ。」

「ん、なあに。秘孔について体内の氣の流れを変えただけ。」

「ヒ………コウ………?」

「説明メンドイから省くぞ?」

さて………そんなじゃ。」

【パシ】

放り投げた剣が戻ってきて、それをリュウジさんはそれを受け止めた。

「言い残すこと、ないか？」

「！？ぐ、がああああああああー！」

……………。

『ウツ……………ヒック……………』

『姉ちゃん、泣くなよ。』

『だ、だって……………ヒック……………だってえ……………』

『だからさあ、あれはあいつらが勝手に言ってるだけだって。』

『ヒツ……………ヒック……………うえ……………』

『もう……………母さん、言ってる？ホントの姉ちゃんは、スツゲエ強くて優しいんだって。』

『……………ヒック……………』

『ああ…それにさ、僕がケンカに負けた時だって、姉ちゃん今の僕

のように慰めてくれるじゃないか。』

『……。』

『僕が知ってる姉ちゃんは、役立たずの姉ちゃんなんかじゃないよ？ いったも僕の傍にいてくれて、慰めてくれる、優しい姉ちゃんなんだ。』

『……ホント……？』

『そっだよ！ だからさ、元気出して！ 母さん言ってる？ 私は元気なアリスが大好きだって。』

『……うん……。』

『じゃ、そろそろ丘降りようか。』

『アラン…大丈夫？』

『う……い、痛くなんか……ない…。』

『…涙目だよ？』

『！ち、違う！ これは欠伸！』

『あ、頬から血が出る。』

『え？ うそ！？ い、いやだああああ！！ 血いやだ！！』

『…プツ！ 嘘だよ、嘘』

『！？だ、だましたなあああああ！！』

『あはははは！ やっぱり泣いてるう』

『だああああああ！！ い、今の見なかったことにしてよ！ お願いだから！』

『え？？ どうしよつかない？』

『ね、姉ちゃんの意地悪！』

『私、意地悪じゃないもん ただ楽しんでるだけだもん』

『それが意地悪っていうの！うううう、昨日までは僕が姉ちゃんあやしてたのに……』

『え、何？何か言った？』

『いたあああ！？ちよ、頬引っ張るの無し！反則！暴力はんたーい！！』

『ケンカでできたケガで泣いてたクセに暴力反対なんて言葉使わない！』

『う、ごめんなさああああいでででで？』

アラン……………。

「それじゃ……………バイビ」

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……」

「やめて……！」

ボクは……ありったけの力を込めて、叫んだ。

第四百十二の話 龍の牙4（後書き）

次回、長編最終回。

第四百十三の話 朝日照らすは、悲しみの絆（前書き）

今回で長編は最終回です。

しかと見よ！二人の結末を！

第四百十三の話 朝日照らすは、悲しみの絆

（龍二視点）

……アルスが思いつきり叫んだと同時に、俺は龍刃をアランの脳天  
一ミリのところで止めた。ナイス。

「……アルス。」

「……リュウジ……さん。」

チラリ、とアルスを見ている……ふむ。

「ちょ、アルス！？何で止めるのよ！？」

「そうですね！後少しで……。」

ファイとステイルが焦る。そりやまあ、確かに後ちょいでこいつ  
倒せたんだけどな。

「……。」

「……何だよ……僕に……情けでもかける、つもりか？……アリス。」

忌々しそうにアルスを見てるが、秘孔ついてっから苦しそうだ。

「……リュウジさん。」

「何だ？」

「……。」

【チャキ】



アルスは横に置いてあった剣を取って、俺のどこまで歩んできた。

「…あの、お願いがあります。」

「ん？」

「彼を、動けるようにしてください。」

「アルス！？アンタ何言ってるの！？」

…フィフィが叫ぶが、アルスは気ニシナイ様子。

「…お願いします。」

「……………」

……………ふう。

【トン】

アランの背中的一点を人差し指で押して、サッと俺は離れた。

「……………何だよ、アルス……………やっぱり僕に情けをかけるのか？」

「……………」

立ち上がって、血走った目でアルスを睨む。対して、アルスはア  
ンを見つめたまま。

「……アラン。」

「……。」

「ボクと、もう一度勝負しろ。」

「……は？」

……予想通りだった。

ふう……まあこうなるだろうと思ったから、最初ハナっからアランにトド  
メさすつもりなんてなかったしな。まあアルス止めなかったら切っ  
てたけど。問答無用で。

「……何、言ってるの？」

「言った通りだ……早く構えろ。」

アルスは正眼の構えを取り、アランを見据えた。

「……ホント、君って人は……」

相変わらず、お人好しだよねぇ……。」

ニタリと笑って、左腕の剣をアルスに向ける。未だに禍々しい氣を立ち上らせてやがんの。

「ちょ、龍二！止めなくていいの!?!」

「そくだよりユウくん！アルス、ケガしてるんだよ!?!」

「今のまんまだとアルスが!」

「お前ら黙ってる。」

「「「!?!」」」

今回はおふざけ無しで殺気を込めた目で花鈴とクルルとフィフィを睨みつけて黙らした。

大体、これはあいつの戦いだ……俺達は手出し無用。

「……………」  
「……………」

アルスとアランは、互いに睨み合って動かない……ただそこに存在するのは、殺気と闘気。

二つの見えない氣が渦巻き、俺を除いた全員が固まった。

「……………」  
「……………」

【ガァン!!】

一瞬消えたかと思うと、二人は一気に接近して剣で競り合った。

「く!!」

「うおお……!!」

【バツ!】

しばらく鏝迫り合いが続いていたが、二人同時に一步離れてまた接近し、剣を振るう。その太刀筋は、まるで流れるかのようで、見事だった。

ただ、それはアルスの太刀筋であり……

「う、ぐおお!!」

「はぁぁ!!」

当のアランは、俺との戦いで疲れきっていた。

現に、今のアランは息も絶え絶え……このままだと、アルスの勝利だろう。

……だが。

「はぁ……はぁ……はぁ……クソ!!」

「……アラン……それで、終わりなの？」

距離を取り、膝をつくアランに剣を向け、挑発するアルス。

「……立て……それでボクを抜いたつもりか!!」

……この時、俺はアルスの瞳を見た。

あの時……リリアンが呪いにかかって、窓の外をボンヤリ眺めていた時のアルスの瞳には光が無く、暗く淀んだ、何かに取り憑かれたかのような目だった。

それが、今は光っている。澄み切った目えしてる。

「……うううううううう」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!……!!  
!!……!!

アランの体から、再び禍々しい氣が立ち上る。挑発に乗って、氣合が入ったようだ。

「ちょ……アルスの奴、何やってのよ……。」

「あれでは、相手をパワーアップさせただけじゃぞ？」

「まあいいから見とけっつーの。」

ああじゃないと、アルスにとって意味が無いからだろうな……後ついでにお前ら黙ってなさいっての。

「うらあああああああ！！」

「くっ！」

…で、力を取り戻したアランは怒涛の連続攻撃でどんどんアルスを追い詰めていく。あいつの攻撃は力任せの攻撃に見えるが、隙がないのが特徴。おかげでアルスは反撃する暇が見つからず、ただ攻撃を防ぐしかない。

「この！この！！このおおおお！！！」

【ガアアン！！】

「うあ！」

最後の強烈な振り下ろしを防御しきれず、アルスは地面に叩きつけられた。

「あ、アルス！！！」

「……うう。」

結構強かに背中を打ちつけたみたいで、苦しそうに呻く。

……思わず駆け出しちまいそうになったが……何とか踏み止まった。

「……………」

【スツ】

アランが無言のまま左腕の剣でアルスの頬を浅く切ると、アルスの頬から血がスツと流れる。

「……………アリス。」

「……………」

アランが呼びかけても、アルスは目を閉じたまま動かない……………気絶してるわけじゃねえ。ただ無言なだけ。

「……………僕はアンタが憎い。」

「……………何度も…聞いた。」

無言から一転、アルスは口を開く…が、まだ目は閉じたまま。

「……………何で憎いのか、わかる？」

「……………」

「僕はね……………村人達から苛められてた時、どんな気持ちだったと思う？」

僕は、アンタを……………心中で何度もアンタを呼んだ。

そう、何度も、何度も何度も……………」

「……………」

「なのに、アンタは来てくれなかった……それでも、僕は耐え続けた。いつか、アンタが来てくれると、信じていた……なのに……」

（姉ちゃ）……………アンタは……………！」

ん？

「アンタは……僕のことを忘れてたんだあああああああ……！！」

「あ、アルス……！！」

「避ける……！！……！！」

アランの絶叫に近い叫び、フィフィ達の悲鳴……………俺は、その光景がスローモーションに見えた。

アランが剣を振りかぶり……………アルスは横たわって動かず、目を閉じたまま。

やがて、剣は振り下ろされる……………ゆっくり、しかし確実にアルスを死に至らしめる一撃。



そして、剣がアルスの顔まで近づいた……

「はあああああー!!」

【ギインー!!】

「!!」

つとと、間一髪でアルスが眼前に剣を差し出して防御した。

「はっ!」

【ドッ!】

「グッ!」

そして一瞬の間隙をついてアランを蹴り飛ばし……

「やあああああああああああああー!!」

「!!」

すぐに立ち上がり、剣を振りかぶって走るアルス……そしてそれを迎え撃つために剣を大きく横に振って構えるアラン。

やがて二人の距離が縮まっていき……

【キーン！！】

互いに……振りぬいた。

「……………」  
「……………」

……………」。

「…な、何？」

「どつちが……？」

花鈴と雅がつろたえる中、今この空間は静かに停止していた……。



「……………」

【コト】

無言で剣を振り……………アルスは鞘に収めた。

アランは激痛に悶えていた……………あの左腕があつた肩の辺りから血が噴出している。

左腕はアランの肩からずり落ち、傍らの血溜まりの中に落ちていた。…にも関わらず、まあだドクドク脈打ってやがる。

「……………え……………」

「……………これ……………って……………」

クルルとファイファイとその他もろもろ、未だに状況把握できず。

「……………勝った？」

「……………そのよう、ですね……………」

花鈴の問いに、ステイルが答える。

……………まあ、何はともあれ……………。

『いやったあああああああああああああ！……！！……！！……！！』

はい全員の歓喜の大合唱。

「やった！やったねアルス！」

「すごいすごい！！！」

「魔王様、カルマ、やりました！！！」

「お前何もしてないだろケルマ。」

「ま、まあまあ……。」

……。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったわ……。」

「全くだ………ったく。」

「まあ、ワシら大して活躍しとらんけど。」

「それ、言っちゃダメよ日暮さん。」

……。

「……？リユウくんどうなの？」

「まだだ。」

「……へ？」

……まだ、終わってねえ。

「う……………ああ……………」  
「……………アラン……………」

アルスの……………決着は。

「……………あ、く……………」  
「…………………………」

苦しそうに呻くアランの傍で、そつとアルスは膝まづいて抱き上げる。

「！アルス、あぶな」  
「フィフィ、ちよいと黙ってる。」  
「で、でもリユウジ！」  
「……………大丈夫だ。」

もつ……………今のアランからは……………。

「アリス……。」

「……。」

……。

「……とどめ……。」

「……え……。」

……小さい……ホントに小さい、耳を澄ませばかるつじて聞こえる声で、アランは言う。

「はやく……とどめ、を……さして……。」

「アラン……。」

「くっ！……憎い、んだろ？……僕の、こと……。」

「……」

確かに……さっきまでは、憎かった。」

……。

「無意味に人を殺し……あまつさえ、禁術にまで手を染めたアランが、憎かった……この手で、止めなければって、思った……でも……。」

……。

「……ホントは……ホントは、心のどこかで、アランと仲直りした

かった……。」

「……………」

「村を発ったあの日……アランが、最後まで声をかけてこなかったあの時……しばらく歩いてから、泣いて、泣き喚いた……何でもつと一緒にいてあげなかったのになって。忘れたことなんか、一度だつて……無かった。」

……………」

「ホントは……ボクは……」

私は、勇者になんかなりたくなかった……もっと、もっとアランと一緒にいたかった！あんな村でも、ずっと一緒に暮らしていきかけた……！」

……………」

「なのに……なのに、周りの人達……父さんまでもが、皆してアランのことを役立たず呼ばわりして……いつとも一緒にいたのに、前が出るのが恐かった……！」

「……アリス……。」

「……アランを……殺人鬼に変えたのは……他でもない、この私……」

私の……せい……なの……ごめんなさい……。」

……うなだれ、アリスは涙声で……謝罪した。



ホントに、小さな声で…。

「……………」。

対し、アランはアルスの顔を見ながら…

そっと傍に刺さっている折れたアランの剣を引き抜く。

「！！！！アルス！！！」

「！？？」

スティルが叫ぶが、すでにアランは剣を振り上げていた。

「死ね！！！！！」

【ドッ！】

アランの剣は、寸分変わらずアルスの顔……

『ギギ・・・ギイイイ！』

の横にいた物体に突き刺さった。

「……………もう……………騙されない……………」

叫ぶと同時にアランはビュッと剣を引き抜く。

地面に落ちたそれというのは、アルスによって切り落とされたア  
ラの紫色の左腕……………だったもの。

今では手の甲にギョロリと目玉が付き、悪意ムンムンの別の生き物  
になっていた。リアルにエグ。

『リュウジ！』

「わぁってる……………」

アランの攻撃で大ダメージは与えられたが……そのまま芋虫のように這って逃げようとしている。

「『龍糸貫』！」

右手の指先からレーザーが飛び出し、

『ギャギイイイイイイイイイイイイイイイイイ！』

見事、目ん玉貫いた。

【ジュウウウウウウウウ……】

レーザーに貫かれ、パタリと動かなくなった腕、もといキモ生物は、同色の液体へと溶けていき、煙となって消え去った。

「はあ……はあ……。」

「アラン……！」

……キモ生物を突き刺すだけでもしんどいのか、右手をパタリと地面に力なく垂らし、剣を落とした。掴んだ掌がスタスタになって血が流れ出ている。

「……あれが、禁術の……正体……。」

「え……。」

「……僕は……家の、地下室で魔道書を開いた瞬間……あいつに、脳の中から囁かれたんだ……『憎いなら、手を貸してやるう』って……」

思えば、あの時から僕は……もう後戻りできなくなったのかも、しれない……。」「

なるほど……やっぱり操られてたのか。

見れば、アランの目には光がやどり、さっきみたいに濁ってなかった。

「はあ………だから……この、赤い空も、後数分で消えて……雨も、止む………仲間のリリアンにかかった呪いも、同時に消える……。」

………そりゃ吉報だな。

「アラン。」「」

………。

「………ねえ。」「」

「………何？」「」

「………この景色……懐かしいよね……。」

この景色………と………のは、ここから見える麓にある俺達の町のことだろ？。

「……昔、村の近くにあった丘……あそこと、似てるよね。」  
「……うん。ツライこととかあったらそこで慰め合ってたし……あそこが私達にとっての唯一の遊び場だったよね。」  
「……麓の、村を見下ろしたり……周囲の、草木を眺めたり……一緒にパン食べたり……したっけ？」  
「……うん……。」

……。

「……あのね、ホントは妬ましかったんじゃないんだ……アリスが勇者になったこと。」

「？」

「ホントは……僕は、寂しかったんだ……さっき、その黒髪の人に言われた通り……。」

……あ、俺か……。

「僕にとって、勇者とか、そんなのいらなかった……ただ……一人になるのが……嫌だった……。」

「……。」

「だから……子供なりに、考えた結論だと……素っ気無い態度を取り続けてれば、構ってもらえるかも……って……ハハ、明らか逆効果……だったけどね……。」

……。

「……それで……寂しくて、だんだん八つ当たりしたくなって……  
……そんな時に、家の地下室に隠してあった、禁術に触れて……その後、父さんの一言に頭が真っ白になった感覚に襲われて……気が付いたら、皆殺してたんだ……」

そして悟ったんだ……僕、もう取り返しのつかないこと……したんだって。」

「……アラン……。」

「もう……許されること、じゃないよね……僕は、もう生きてたって……しょうがないんだよ……」

どうにも……ならないんだよ……!」

「……。」

……確かに、許されることじゃない。死んだ奴は、後悔したって蘇らない。

だが……。

「……違う。」

「……え?」

「……生きてても……いいんだよアラン。自分の罪を認めて、反省して、償っていけばいいんだよ……生きちゃいけない人間なんて、いないんだよ……。」

……。

「……ねえアラン、この世界でもう一度暮らそう?昔みたいに、一緒に助け合って、慰め合って……私も、アランが罪を償っていくの応援してあげる……だから……!」

……アルス……。

「……やっぱりね……。」

「え？」

「……アルスは、昔と全く変わらない……いつだって優しく、強く……僕は……そんなアルスが、好きだったんだよ？」

「……アラン……。」

……。

「僕も……もう一度、一緒に暮らしたい……また一緒に歩いて行きたい。」

「じゃあ……！」

「でも、もうダメなんだ。」

【ピシ】

「……え。」

……アランの腕に、金色に光る亀裂が入る……空を見上げると、赤い雲が切れていつている。それと同時に、アランの中を巡る気が急速に失われていくのがわかった。

……タイムリミット、か……。

「アラン!？」

「……禁術は、使用者の命を吸収してこそ発揮できる魔法……使用してしばらく置いておけば、自然と力は回復していく。」

けれど、禁術の魔力が宿った左腕が無い今、もう体を維持することはできない……ましてや、さっきの戦いであれだけの力を使ったんだから……こうなることは目に見えていた……。」

話してる間にも、雲は少しずつ切れていき、光が差し込むたびにアランの体にはヒビが入っていく。もう顔の横にまで亀裂が迫っていた。

「アラン！諦めないで、お願い!!！」

「ホントに……ごめんね……僕が、バカなばかりに、一杯傷つけて……。」

「そんなのもういいから！お願いだから逝かないで!!！」

アルスが必死に叫ぶのも虚しく……亀裂は、とうとう顔全体まで覆っていた。

「もう……時間……みたいだね……。」



もう亀裂が入りきらなくらいまで広がり……表情でさえも、わかりにくくなった。

「アラン、ダメ！待ってー！」

『……………あり、がとつ……………』

最後……ヒビでわかりにくいのが、確かにアランは優しく微笑んだ。

『お姉ちゃん。』

「アラ……………ん……………！」

【サアアア……………】



アランが散った直後、赤い雲が消え、皮肉なくらい美しい朝日が昇り……

宙を舞うアランだった砂と、アルスの瞳から溢れる涙をその光で照らし、輝かせた。

〈数分後〉

「リリアン！」

「リリアーン！」

「……皆、お帰り。」

「皆無事だったんだな！」

「はぁ……ヒヤヒヤしたぜ。」

すっかり雨も上がり、赤い雲ならず真っ青な空が俺達の上空に広がり、町を闊歩していた化け物どもも砂へと帰って体育館へ避難していた住民も皆家へと帰り、騒動も治まった。

そして、帰宅した俺達を出迎えてくれたのはずっと留守を任せておいた久美と恭田、んですっかり元気になったリリアンだった。

「リリアン、元気になったみてえだな。」

「……おかげさまで。」

「龍二……………！！！！！！」

「そおらよつとい。」

【ドゴン！】

さっそく飛びついてきた久美に自慢の巴投げをかまし、電柱に情熱的な抱擁をさせてやる。

「龍二……………！！ホントよく帰ってきてくれたな……………！！」

「あゝもう引っ付くなクソ鬱陶しい。後お前回復力跳ね上がったんじゃないよ。」

頭から血いボタボタ垂らしながら抱きつかれたらたまったもんじゃねえな。

「……………俺、結局フラグ無し？」

「？何の話だ？」

「……………なんでもないです……………グス。」

何か恭田と雅が話してるが、気ニシナイ。

「リュウくん、引っ付きすぎ！」

「久美ちゃん、離れな、さいつての！！」

「抜け駆け禁止！！」

「……………久美、反則。」



腰からエルが呟く。あ、ついでにエルの上には寺から持って帰ってきた龍刃が差さっている。こいつも何かと世話になったし、家に置いてやっかな。エルと違って意思ないけど。

「……………でも……………皆無事でよかった……………」

「お前もな。」

「……………私は……………信じてたから……………あなたのこと……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………」

はい先生。何でそこで顔赤くするんですか？それと最後の言葉小さくてよく聞き取れなかったんですけど？つか自分で言ってるってなんだから先生って誰だ。

「……………けど……………」

「？何だ？」

「……………アルスは……………？」

……………。

「……………ん、ああ……………」

『……先に行つててください……一人になりたいので……。』

……つて、さっきアルスが言つてたから山降りてきたが……ふむ。

「……わりい、急用思い出した。」

「……そう。」

身を翻し、元来た道を引き返そうとした。

「……龍一。」

「んあ？」

後ろからリリアンに呼び止められ、首だけ後ろを向いた。

「……アルスに……伝えて……。」

あなたなら、大丈夫だって。」

……。

「……はいはい、わぁってるっての。」

フッと笑って、皆がいる家から俺は離れてった。

〈裏山・中腹〉

「ホ！ホ！ホ！ホ！ホ！ホ！ホ！とお！」

【スタツ】

石段を駆け上り、無事鳥居へ辿りついた。まったく、無駄に長えんだよこの石段。

つとと、それより……。

「いたいた。」

すでに寺は吹き飛び、石で出来た土台だけが残っていて、その上に寺の残骸の木材が散乱していた。敷地も、木々が吹っ飛び以前の面影はない。

で、その土台のちょうど真ん中の縁に………いましました、ア



ルスがチヨコンと座っています。

……………俯いてて全っ然元気の欠片もねえがな。

「……………ふう。」

しゃーねえなあ……………と思いつつ、テクテクと歩み寄ってった。

「よ。アルス。」

「……………リュウジ、さん。」

土台はちよつと高めで、座ってるアルスを若干見上げる形になるんだが……………目は涙で腫れぼったくっており、まだ涙は乾いていない。顔にも憂いがあった。

……………。

「……………あ、よいしょ。」

とりあえず、ちよつとジャンプしてアルスの隣に座ることにした。

あゝ、やっぱりここから見る俺達の町はなかなかいい景色……………こういうのがアルスらの村にあったってか。

……………んにしても……………まあ、見事に破壊されちまったなあ、寺。これで俺の昼寝スポットが一つ減ったわけだ。チエ。

「……………。」

「……………」

……………んむ、無言だな。

「……………」

「……………リアン、元気になったぞ。」

「……………そうですか……………」

「……………礼、言ってたぞ。」

「……………はあ……………」

「……………町の間も被害が無かったそうだ。」

「……………よかったです……………」

「……………」

「……………」

うーわーヤベエ軽くどうしよう。

「……………」

「……………アルス。」

「……………？」

「……………あんよ、何か思い悩むことがあんなら言ってみ？……………大方、アランのことだろうが。」

「……………」

こいつがアランの死について悲しんでるのはわかる……………んだが……………

何か、他のことについても悩んでる気がする。当然アラン関連。

「……………」

……………ボクは……………」

あ、一人称“ボク”に戻ってる。

「……………ボクは……………ホントは、勇者じゃなくてアランの姉でいたかった……………」

「それ、聞いたぞ。」

「……………なのに……………ボクは、結局弱虫で……………臆病で……………アランを苛めてる大人達から……………逃げてました。」

……………んむ……………。

「それから、アランの心は荒んでいって……………禁術にまで手を出し、力のない人達にまで手をかけ、殺人を楽しむ狂人になってしまつて……………」

ボクが、彼を殺したようなものなんです……………。」

……………。

「……………それなのに、ボクはアランのことを憎んで、何度も殺意を抱いて……………本来なら、憎まれるべきなのは、ボクの方です……………それを……………」

…ボクは……。」

……ふむ。

「ボクは……姉、失格ですね……ホント、に……。」

ああああ、また泣き出す……まったく。

「ほれ。」

「……すいま、せん……。」

ハンカチを取り出し、差し出す。それをアルスはおずおずと受け取った。

……ん……。」

「……アルス。」

「……？」

「……いいんじゃないの？憎んだって。」

「……え？」

「人ってのはな、完全に善じゃねえ。かならずどっかに悪がある。」

「……悪……？」

「そ。ネガティブ思考のこと。」

ネガティブ思考＝マイナス思考って感じで。

「誰だって……どんなに優しい奴にだって、感情ってのがあつた。ただ優しいばつかの奴なんて、この世にやいねえ。」

かならず心に闇を抱えて生きてるもんなんだよ、人間は。」

「……………闇。」

「お前の場合、アランのことが憎いつてのが闇な？」

たとえば、どんな人間だろうが感情持つてる限り、ずっとニコニコの奴なんていねえよ。表面上は出来ても、中身は偽れねえ。」

「お前は、憎んでるのが嫌つつたよな？……………まあ、あながち間違つちやいねえけど。」

「……………」

「……でもな？アルス。俺だって憎い奴は憎いぞ？許せない行動してると奴がいれば、そりゃ誰だって憎くもなるし、ひどい時は殺したくもなる。」

憎しみを持つのは、悪くない。大切なのは、その憎しみを乗り越えることだ。」

ジジイから教えてもらった言葉……………

『ムカつくのがいたら、憎め。憎んで憎んで憎みまくつて、そして許せ』

……かあなり矛盾してるし、何のこつちや小さい頃はわからんかったが……最近になって、わかった。

「……超える？」

「そ。人は、闇を乗り越えてこそ本当の意味で強くなる。お前は、最後はアランのことを許した……それでいいじゃねえか？」

お前は、憎しみという闇を乗り越えて、強くなった。心も、体も。」  
「……………」

…闇を乗り越える、というのはそんな簡単なことじゃねえ。そりゃもう、山よりも高い壁乗り越えるようなもんだ。楽にはいかないだろう。

第一、闇は一生付きまとう物……下手すりゃ、闇に飲まれて人の道を外す危険もある。

だが、それを乗り越えてこそ、人は生きる意味がある。本当の意味で、人は強くなれる。

「……お前は闇を乗り越えられるほどの力がある……信じる、自分を。」

「……リュウジさん……。」

「あ、それと。」

「？」

もう一つ、俺が思ったこと話しておくか。

「アランが最後に何を思ってたのか、俺は知らない。大体、人の心なんてもんは誰にもわかんねんだよ。例え、血の繋がった姉弟でも。」

「……………」

……………でも。

「……………でも。」

「？」

「あん時のお前は、俺らから見ても姉ちゃんらしかったぜ？」

「……！」

アルスのあん時の気持ちに、憎しみは一切感じられなかった。弟に向ける、純粹な眼差し……………

そしてアランが最後に見せた微笑み……………ありや悪意も何にもない、同じく純粹に姉に向けた最後の贈りモン……………

だと、俺は思うね。うん、贈りモンとか我ながらくっさいセリフ。

「……ちつとど。」

【トン】

土台から飛び降り、アルスの方を向く。

「そろそろ帰つぞ。メシ作らないといけねえし。」  
「……………」

無言…だが、アルスは静かに土台から降りた。

「そんじゃ行くぞ。」

「…………リュウジさん。」

？んあ？

「何だ？」

「…………あの……………」

……………ありがとう……………いびきました……………」

……………

は……

「何に對して？」





「さあつてと、帰るかあ。」  
「リュウジさん！まだ話終わってないですよ！」  
「じゃもう終わり終わり。」  
「終わってないですってばああああー！」  
「じゃかあしいぞ。」  
「す、すいません……。」  
「ほらさっさと歩けや。」  
「痛っ！？お、お尻蹴るのはやめてくださいよ！？」  
「ほほお、そんなんでやめるとでも？ほれほれ。」  
「痛っ！？いったあ！？ちよ、ホント痛いですって！？」  
「はっはっは、ざまーみい。」  
「あ、悪魔ああああああー！！！」

そんな風に石段を降りる俺達と土台の脇にある木の根元に刺さった  
アランの折れた剣に、優しい朝日の光が降り注ぐ。

うん………いつもの日常に、戻った。

第四百十三の話 朝日照らすは、悲しみの絆（後書き）

長編はこれで終わり……また日常へ戻ります。

……また忙しい一週間が始まる……はあ。

ともかく、長編を読んでくださった皆様方、ありがとうございます！  
た！それと聖なる写真さん、キャラ提供ありがとうございます！！

では、これからも頑張りまーす！！

第四百四十四の話 再び大混乱！？（前書き）

今回は長編のその後。コメディです。後短いです。

## 第四百四十四の話 再び大混乱！？

（龍二視点）

さて、前回化け物騒ぎのせいで住民は皆戸惑っていたが、化け物が全部消えたことによって何とか落ち着いたようだ。んで、結局のところあれは一体何なんだという声が上がって問題になったんだそう。専門家も何が何やらということと頭捻ってるようだが、多分アంతラのかつたい頭じゃわからんだろうよ。まあ我が家にはわかる奴がいるけど。

でもまあ、避難勧告出したタイミングがよかったのとステイル達の活躍のおかげなんだろうな。町の死傷者は奇跡的にゼロ、せいぜい逃げてる途中でこけて膝を擦り剥いたとかそんなもんじゃないか。運いいねえこの町。

……まあそれはいいんだが……やっぱり仕事はあった。

町の復興作業だ。

死傷者はいなかったが、代わりに町に被害が出たんだそう。塀が破壊されてたのは勿論、電柱折れてたり、家一軒吹っ飛んでたり、ビル崩壊してたり……結構でかい。

原因は当然、化け物の仕業。塀は俺が化け物吹っ飛ばした時に破壊され、電柱は俺が化け物もろとも飛び蹴りかました時に吹っ飛び、家一軒は俺が手刀で化け物と一緒に粉みじんにしたり、ビルは俺の正拳突きで衝撃波で化け物もろとも一掃したり、他にも俺が殴ったり俺が蹴ったり俺が切ったり俺が投げたり……

「はい、そこで『原因全部お前やんけ。』とツッコんだ奴。ゴキブリとミミズとムカデを口の中にぶち込まれなくなれば黙れ。」

「おい、龍二。こつち頼む。」

「はいはい。」

まあそんなわけなんで、若い連中は皆復興作業にボランティアとして駆り出されたわけで、当然学生である俺らも手伝ってるわけさ。今は半壊した一軒屋（これは俺が化け物を投げ飛ばしたのが原因）の修復中で、周囲では男性女性が忙しそうに動き回っている。

普通、力仕事は男衆の仕事で女衆は身の回りの手伝いをするのが仕事だと言うが、それなりに力のある女性も力仕事をしている。何故か？そりゃあれだ。『テメエら力あんなら手伝え』と俺が言ったら皆素直に従ってくれた。

反論した奴もいたけど、そいつらは今俺から離れた場所でボロボロの状態で木材を数人で運んでいる。ボロボロなのはあれだ、どっかでこけたからだ（嘘）。今の世の中男女平等。

つかまあ、復興作業つっても生徒とかはさすがに建築とかそういうのには疎いわけだし？簡単な雑用やら力仕事を任されて、家の修復には大工とか専門家が担当している。

「龍二〜！」

「あん？」

若干遠くで花鈴が呼んできた。あ、言い忘れてた。俺以外にもアルスや雅といったお馴染みのメンバーもそれぞれ別々の場所で役割を任されていて、今はバラバラだ。花鈴は偶然、俺と一緒にだけ。

そんな時、クルルとかその他女性陣がすっげえブーイングしてたが、やっかましいのでぶっ飛ばした。

「何だあ？」

…っ！かお前から来いよ。何で俺が行かないといけねえんだ馬鹿花鈴このボケナスが。

「……今すっごい罵倒された気分なんだけど？」

「精神科行ったら？」

「やっぱ罵倒した〜！」

本音が出たけど気ニシナ〜イ

「で？何だ？」

「これ運んで。」

「断る。」





「おうよ。」

どこの誰かわからんオツチャンに言われ、足元にあった木材をせつせと指定された場所へと運ぶ。

「あ、それと悪いけどこれを向こうまで運んでおいてくれないか？」  
「オツケー。」

でっかいダンボール箱を片手でヒョイと目的地まで運ぶ。

「おい、こっちも手伝ってくれー。」  
「ほいほーい。」

数人ででかい木材を持ち上げようとしてるのを手伝って運ぶ。

「あ、悪いこれも。」  
「任せとき。」

ついでに木箱をどっこいしょ。

「おい、茶。」  
「はいはい。」

足組みながらイスに座りコップを差し出したオツサンの頭の上から熱湯を注いであげた。

……ふう。

「……何か飽きたな。」

背後で『ギヤーあちーーーー！！』と騒いでる中、俺は欠伸した。つーか運ぶのつて木材とか鉄筋とか軽い奴ばつかじゃねえか、おもしろくもねえ……第一仕事が単純作業なのばつかだから退屈だ。

「あゝあゝ、さっさと復興作業なんか終わらして〜。」

はい、そこのお前。PCの前で『自業自得だろ』つつったお前。口の中にゴキブリとミミズとムカデの他に耳の中と鼻の穴にナメクジを突っ込まれたいのか？

「……………」

はあ……………にしてもどうしたものか……………後ろでは何かうるせいし、ストレス溜まる。復興作業さえさっさと終わらせればいい話なんだが、これが後数ヶ月続くととなると……………あゝしんど。

「……………」

……………お？

「…いい」と思いついちった。」

そうそう……この手があったか………これなら効率がいい。

うし。そうと決まれば……。

「おい、起きろバ花鈴。」

「……………」

鉄筋を体に乗せて布団代わりにして寝ているバ花鈴（何か血だまりできてる）を軽く小突く。

「おい起きろって。」

「……………」

「オイコラ起きろ。」

「……………」

「おい。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………三キロ。」

「何！？呼んだ！？」

耳元で咳くとシュバッと起きた起きた。因みに何が三キロなのかは推して知れ。

「うし、とりあえず口から血を飛ばすな。そして起きろ。」  
「あ、ごめん……ってこれ原因アンタでしょ！？つか起きれるかあ  
あああああ！……！」

気ニシナイ。

「しゃーねえなあ……ほれ。」

【ドゴン！】

花鈴に乗っかっていた鉄筋を蹴り飛ばす。そしてまだ『熱いー熱いー！』と騒いでいるオッサンの体に鉄筋がブチ当たり何か余計に周囲が騒がしくなった。どうでもいいけどなんなこと。

「ほれ。」

「……あんがと。」

差し出した手に掴まって立ち上がる花鈴。体血だらけなのはご愛嬌。

「……で？何？」

「ああ、実はな……！」

～説明中～

「……とうわけですらしく。」

「……え、マジ？」

「マジ。拒否権なし。拒否して死ぬか大人しく従って生き延びるか  
どっちか選べ。」

「全面的に協力します。」

わかりやいいい。

「……どうでもいいけど、どついつ風になればいいのよっ。」

「適当に考えろ。」

「え……ちよ、マジい!？」

マジだつっーのバカ。

「じゃ、さっそくやるぞ。」

「……はあああああああああああああああああああ……。」

……長いため息だなあオイ。

\*\*\*\*\*

〈花鈴視点〉

……。

「おいそつちよろしくー。」  
「あいよ。あ、お前はその木材あっち運んどいてくれ。」  
「おらよつとー！」  
「おい設計図見せてくれー。」  
「ゲンノウどこやったっけ？」  
「ほいパス。」  
「サンキュ。」  
「じゃ俺ビルの修復行ってくるわー。」  
「三丁目の家、全部修理終わったぞー。」  
「ノコギリあるー？」  
「釘足らないぞー。」  
「うし、溶接完了ー！」  
「おいこつち終わったぞー。」  
「そんじゃ次の家行つといてー。」  
「この木材どこ置いとくよ？」  
「ああ、上に上げといてくんね？」  
「おいそつちに鉄筋投げるぞ。」  
「オツケー。」  
「わりの、工具箱からドライバー取ってくれ。」  
「任せろ。」  
「お茶買ってきてー。」  
「あいよー。」

【ドンドンドンギューーンバリバリギコギコギコ……】

……。

「……な、なあ、こりゃ一体どういうことだ？」  
「す、スゴイけど……え？何で？」

……。

「ね、ねえ高橋さん？あれ一体どういう  
着ぐるみです。」

「……へ？着ぐるみ？」

「そ。」

「……いや、でもあれは」

「選りすぐりの職人が作った着ぐるみです。」

「……と、とゆーより何でそんなことする必要が」

「ノリです。」

「ノリ!?!」

……アタシは、状況が飲み込めないでいる同級生を宥めながら  
その光景を見ている。

……龍二がアタシに頼んだこと、それは……

数十人に分身した龍二を見て混乱している人達に嘘の状況を説明するというもの。

……本人曰くこの修復作業がとんでもなくつまらないらしくて……さっさと終わらせたいがために、分身して町の各場所へと赴いて作業に当たっているんだそう。

いや、そりゃね？誰だってそっくりそのまんまの人間が大勢で家修理したらビックリするどころか心臓弱い人とかは多分ヤバイんじゃないかな？

でもさ、すごいこのよこれが。一日かけて直せるくらい半壊した建物を、五分もかけずに完全修復しちゃうし、数ヶ月かかるくらい派手に壊れた建物なんか、数十分で終わっちゃうのよ？現に今修理に取り掛かっている家なんて三分前は完全崩壊してて見る影もなかったというのに、もう家の形を為してるし。

「おいおい……どうなってんだよこりゃあ……。」  
「ソックリさんボランティアの会の方々です。」

で、アタシはその間何の感情も込もってない声で誤魔化す。正直しんどのいよいよコレ？信じさせるの。



……町はもうすぐ直りそうだけど……また一つ問題起こるわね、  
これ……はあああ。

「おい花鈴。弁当持ってきてー。」

……。

「……行けばいいんでしょ行けば。」

……慣れてきた気がする自分が時々恐くなるアタシでした。

その日、数ヶ月はかかるであろう町の修復作業は龍二そっくりな外  
見を持つ人達によって二時間で終了した。

その場に居合わせた人達は、精神科へ行ったり、眼科へ行ったり、大工の方々は彼らをスカウトしようと躍起になったりで騒ぎになったそうなの。

## 第四百四十四の話 再び大混乱！？（後書き）

更新ペースが落ちかけてる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ふう、クラブは朝練あるし、今からバイトだし、忙しい忙しい。ああ、長編の頃の連続更新が懐かしい……

つとと、せっかくですのでここで少し、龍二の技を。

百烈龍閃弾・読んで字の如し、無数の龍閃弾を放つ。

五頭龍糸貫・五本の指からレーザー光線発射。

龍鉄風・牙・いわゆるカウンター技。発動した瞬間敵はバラバラになる。

龍閃斬・二重三日月・龍閃斬、二刀流バージョン。

龍糸貫・乱・壁やら障害物やらに反射するかのよう飛び回るレーザーを発射。

……こんなもんですかね？詳細はまあ、省きましたが……

さて、バイト行ってきます。

第四百十五の話 包丁交代ならず（前書き）

最近ちょっと訳あって休んでました。あとがきで書いてますので。

第四百四十五の話 包丁交代ならず

（エル視点）

……………。

「……………ふむ、刃こぼれ無し、と。」

……………。

「サビも……………ねえな。うん、以上無しだぞエル。」

『ん、そうか。』

今宵は私の手入れチェックだ。月に何度か、リュウジが磨いたり点検をしたりする。

人間で言うところの、いわゆる身体検査……………まあ、磨くのは風呂に入っているようなものだ。

……………言うておくが、人間だった頃はちゃんと風呂に入っていたのだからな。一応細補足しておく。

「んにしても、こないだは大活躍だったなお前。」

『ああ、まさかあんな化け物どもが出るとは思わなかったからな。』

この町は平和そのものなため、普段家では包丁として扱われている私だが、この間のような騒ぎがあれば私は立派な武器として活躍することができる。まあ、来られたら被害が出る一方、私の出番が増えるからよいが……正直複雑だ。

「ま、これからもああいうのが出てきたらいつちよまた頼むわ包丁<sup>エル</sup>。」

「ストップ。私の聞き間違いであればよいのだが、さりげなく包丁と言わなかったか？」

「気のせい気のせい。」

「……………そうか。」

何かすんごい釈然としないのは何故だ？

「リュウジさあん、出ましたよ。」

「ん？おお、そうか。」

ピンクのパジャマ姿で風呂場から出てきたアルス。風呂上りだから頬がほんのり赤くて、何気に色気が出ている……普通の男が見たら見惚れそうだな。

「おーい、次クルル入れー。」

「はーい。」

リュウジは普通の男じゃないから論外だな、うん。

「ふう……気持ちよかったあ。」

気分よく台所へと向かうアルス。あれだな、風呂上りのココアを一杯……後でちゃんと歯を磨くように。

だが……。

「あ、わりいアルス。ココア切らしてたんだ。」

「！ええ〜！？」

……そこまででかい声出す程驚くか？

「……じゃ今日はココア無しですか……はあ。」

「毎日飲むからだっつーの……まあ、代わりといっちゃ何だが。」

「？何かあるんですか？」

ココアに代わる物……？

「んむ、今日何となく買ってきたコーラがある。それ飲んでもいいぞ？」

「……へ？コーラ？」

「そ。」

「……。」

目が点になったアルス。そりゃまあ、確かにコーラという飲み物はココアと同じ黒い飲み物だが……味はかなり違うだろ。それに色彩も全然違うし。

……だが、アルスのあの表情……何故か恐怖におののいているよ

うに見えるな……。

……。

『……読心術……。』

少し、アルスの思考を覗いてみるか…。

『コーラ 飲む 骨溶ける 体も溶ける どこか  
の誰かさんの母親の如くドロドロになる ゲヘヘ メル  
ヘン…!』

……。

「………すみません、今日は我慢します。」



「そうか？コーラ結構うまいぞ？」

「いえ遠慮します。」

「そうか。」

物凄い速さで返答したアルスは、顔が青いまま和室へとフラフラ入っていった。

……いや、大体溶けるって……そりゃ確かに歯を溶かすとは聞くが、体ドロドロになるまで溶けるわけがないだろう。とゆーより最後の三つは何なんだ……ゲへへとかメルヘンとかって…………いや、考えるのはやめよう。危険だからな色々。まあ首が飛ぶのは作者だからな。

【キーン】

「おし、エル終わり。」

手入れも終わり、鞘に収められた私はテーブルの上に置かれた。ついでにいつもよりピカピカだ。

「じゃ、次はつと。」

そう言っつて足元から拾い上げたのは…。

『ああ、それが……ホント、不思議な形をしているな。』

「この日本独特の製法で作られた剣だからな、日本刀ってのは。」

二ホントウ、とな……私の世界にはこのような形をした剣というのはない。まあ片刃の剣ならあるにはあるが、扱うにはコツがいるらしく、クセが強い武器ばかりだった為にもっぱら両刃の剣を使って

いる騎士がほとんどだった……

しかし、この剣……『龍刃』<sup>リュウジン</sup>だったか？この剣は切っ先が鋭く、切る以外にも突くこともできそうだ……うむ、この世界の武器は実に素晴らしいな。

「……………うん、長い間放置してたにも関わらず汚れ一つねえな。」

……………。

『……………リュウジよ。』

「？んあ？」

ただ、一つだけ疑問に思うところがある。

『貴様、その剣をどうしてあの寺とかいう場所に隠していたのだ？』  
「ん？ああ、置く場所なかったからあそこに。」

そんな理由かい。

『……………。』

「で？何でまたそんなこと聞くよ？」

『あ、いや……………何であえてあんな所に隠したのか気になっただけだ。』

「そうか。」

『……………それにしても、その剣……………ただの剣ではないな。』

「ほお？何でそう思うよ？」

『刀身から放たれている力が物語っておるわ。』

この龍刃<sup>リュウジン</sup>……魔力とも違う不思議な力が溢れ出ている。おそらくは私と互角か……悔しいが、それ以上か。ここまでの力を持った剣は見たことない。

まさかと思うが、寺に隠していた理由はこの力なのではないかと思う……いや、深く考えすぎかもしれないがな。

「へえ、わかるのかお前。さすが包丁<sup>けん</sup>。」

「……もお私はツツコまんぞ。」

「さいでつか。」

いい加減包丁から離れる。

「……まあ、確かにこいつは単なる刀じゃねえな。詳細は知らんけど。」

「古くから伝わる物なのか？」

「そ。大昔にご先祖がこれ手に入れて子々孫々まで伝えてきたんだと。まあいわくつきの刀……とも呼ばれたこともあるんだってさ。」

「ほお……。」

「まあ使えればいわくつきだろうが何だろうがいいけどな。つーかこれとお前以外の剣、俺使えねえし。」

「何故だ？」

「振ったら簡単に壊れるから。」

バカ力ってこういう時には不便だな……。

それにしても、いわくつき、か……それは興味深いな。

「あ、ついでに言つとこれ、お前と同じように意思あるぞ?」  
『……え?いや、でも一言も喋っておらんではないかそれ。』  
「確かに喋りはしねえな。まあ意思があるってのはジジイから聞いた話だからよくわからんが。」

意思がある……とゆーことは、この中に誰かの魂が封じ込められているのか?

……読心術も使えんとなると………確実性は無いが、ありえなくもない、といったところか。ふうむ……つくづく謎な剣だ。

「……考えてみりゃ喋らない分エルより口やかましくなくていいかもしれないな。」

『何か言つたか。』

「べーつにー?」

聞こえた。確実に聞こえた。ある意味失礼なこと言つてた。

「ま、とりあえずこれからは俺、二刀流だな。」

『貴様、そこまで剣の才があるのか?』

「あれ?俺って剣の腕無いか?」

『………すまん、私が今まで会つた中で一番剣の才能がある。とゆーかありすぎて困る。』

「どゆこつちや。」

こないだの戦いで十分過ぎる程わかつた。まったく、どこで剣を習つたのか知らんが……。

あ、そつだ。

『……ならば、私の代わりにそれを包丁にすればよいではないか。切れ味も一級物なのだろう?』

そうなれば、私も包丁生活ともおさらばでき」

「ん?別に包丁交代する気ねえぞ?」

………は?

『………つまり?』

「これからお前が包丁。」

『何でやねん!?!』

「おお、関西弁。」

いやカンサイベンとかよく知らんがどうでもいい!!

『何故だ!?包丁だって新しい方がいいだろう!』

「いや、使い慣れてる奴のが手に馴染んで安全だし、第一周囲の状況とか教えてくれるまさに万能包丁みたいなもんだから鍋吹かす心配ないし。」

『そんな理由か!?ならもう私は喋らんぞ!!』

「そうか、そんな役立たずには単なる鉄くずになって粗大ゴミと化すか質屋へGOだな。」

『すみませんでした!!--』

「わかりやいいんよ。」

お、おのれ……………喋れない剣のことが生まれて初めて羨ましいと思  
ったぞ……………。

「……………うし、終わり。」

【カチャン】

リュウジは磨き終えた龍刃リュウジンを私の上に置いた……………ってコラ、人の上  
に置くな。いや人じゃないが。

「じゃそろそろクルル上がる頃だし、俺風呂入ってくらあ。」

『オイこらちよっと待て。私はこのまま放置か。』

「いいじゃんよ。今のうちに仲良くなっとけ。」

『おい!?!』

止める間もなく、リュウジはさっさとリビングから出ていった。あ  
いつめ……………。

『……………。』

それにしても……………龍刃リュウジン、か……………ホントにこれに意思があるな  
ら、この世界には魔力とは違った別の神秘的な力が存在している、  
ということになるな。

実に、興味深い世界だ……………まったく、転送されて運が悪いのやら良  
いのやら……………。

まあ、とりあえず今考えるべきことは一つだけだな。

喋らない剣とどしつ仲良へしるよ？







第四百四十六の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』 <前編> (前書き)

どうも、お久しぶりですコロコロです。今回はちょっと違ったお話です。サブタイ見ればわかりますよね？

第四百十六の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』 <前編>

むか〜しむか〜し、そのまたむか〜しむかしむかしむかしむかしむかしむかし………つてオイ、どんだけ昔なんだよこれ。え、細かいことは気ニシナイ？…初っ端からふざけんなチクシヨウ。

まあいいか………とりあえず、山に囲まれた小さな村にある一軒屋に、お爺さんとお婆さんが仲良く暮らしていました。

「はいお爺さん、ご飯ですよ」

「……あの、涼k………お婆さん、これ何？」

「？何って味噌汁とご飯ですよ？」

「味噌汁は緑色じゃありませんし、ご飯は青くありません。」

「アラアラ、細かいですねお爺さん」

「うん、細かい細かい関係ないでしょこれ。」

……いや今さらなんだけどさ。この二人お爺さんとお婆さんっていう年じゃねえよ。何でお婆さん俺の姉さんでお爺さん影薄なんだよ。

「誰が影薄だ！！」

ちよ、おま、ナレーションに話しかけるんじゃないやねえよ。

「アラアラ、雅ったら細かいのね」

姉さんも話しかけない！っーか名前言うな！………何でこんな始まっ

て間もない場面で疲れねえといけなんだよ。はあ……。

「ホラホラ、話し進めないと。」

ああ、ゴメン……ああそれと、テメエ影薄。姉さんにちよっかい出すんじゃないぞコラ。

「お前だって登場人物に話しかけるな!!」

……ある日のこと。

「無視かよ!?!」

黙れ。ええ、ある日のことでした。

お爺さんはシバかれに、お婆さんは川へ洗濯をしにいきました。

「……おい、シバかれて何だよ。」

……台本にそう書いてあんだよ。いいから行けよ。

「……………」

コホン……納得しない顔のままのお爺さんを見送った後、お婆さんは洗濯物を持って近くを流れる川へといきました。

「よいしょつど。」

お婆さんは川の傍にしゃがみ込むと、お爺さんのジーパン……………じ

やなくて股引きを川の水につけて洗い始めました。

「うーん、やっぱり洗剤欲しいなあ。」

環境に悪いからやめろ。

とにかく、必死にゴシゴシと洗濯物を洗っていました。

しばらくし、洗濯物も後一枚というところでした。

「……アラ？」

お婆さんは川の上流を見やりました。するとどうでしょう。川から大きな桃が、ドンブラコ〜ドンブラコ〜と流れてきたではありませんか。

お婆さんは、その桃を見て驚きました。

「まあ。ドンブラコ〜なんて珍しい音ですこと。」

そこかい。

「……それにしても大きいわね。どんな木になってたのかしら？」

……お婆さん、お婆さん。

「アラ、私はお姉さんよ？いつから雅は私の孫になったの？」

ちげえよりアルを持ち出すな！とにかく桃流れてきてんだから拾い上げろっつーの！

「ええ〜？私今日のオヤツは桃じゃなくてアップルパイがいいのに〜。」

そこでもリアルかよ！？また今度買ってきてあげるからとにかく桃拾ってくれ！

「はい…。」

口を尖らせつつ、お婆さんは桃が目の前まで流れてきたのを見計らって川から掬い上げま

「ねえ、桃が川の真ん中を流れてるから取れないんだけど。」

……………泳いで取ってきたら？

「え〜？私泳げないの知ってるでしょ？」

あ、そだったな……………ここで意外な事実バラすな。

「エへ」

エへ じゃねえよ……………つたく、しょうがない。

はい、桃がお婆さんの近くまで流れてきました……………これでいいか？

「よしよし さすが私の弟」

……………語り手って何でもありなんだな……………。

ともかく、お婆さんは流れてきた桃を拾い上げました。

「あら、意外と軽いのね」

……………因みに大きさは人間の子供サイズです。

「それじゃ、さっそく帰ってお爺さんに切ってもらいませよ」

……………お婆さんは桃を右手でヒョイと掲げ、左脇に洗濯物の入った桶を挟んで帰路へとつきました。

……………スゲエカ。

「お爺さん、ただいま」

「……………おかえり……………お婆さん……………」

嬉々として我が家に帰ってきたお婆さんを出迎えたのは、顔が見事に變形して血がダラダラと流れ出ている影う……………お爺さんでした。

「アラアラ、整形でもしてきたんですか？」

「……………そういうことにしといてください。」

……………何があったかは言わないでおこう。

「あ、それとお爺さん、見てくださいなコレ」

「おお、これはでかい桃じやのう。」

お爺さんは今さら役に成りきりました。

「今さらって何だよ!？」

…そう書いてあんだよ、台本に。いいから話進めてくれ。

「……………コイツめ。」

さて、お爺さんが一人でブツブツ言ってる間に、お婆さんは桃の前で腕を組みながら考え込みました。

「……………ピーチパイなんてどうかしら?でも桃のタルトっていうのも何だかおいしそうだなあ……………あ、いつそオーブンを使って焼き桃っていうのしてみようかな?おいしいかも。それともこのまま齧り付くのもありね。新鮮な果肉からみずみずしい果汁が溢れ出す……………ん、おいしそ。考えてみればこんなに大きいんだし、何作ってもどう食べても当分困らないわよね……………」

……………もしもーし、お婆さん?そろそろ話進めてくれませんか?

「アラ、ごめんなさい」

「……………えくと包丁はつと……………」

で、お婆さんが悩んでる間にお爺さんはいそいそと台所で包丁を探していました。

「あ、あったあった。」

そして包丁を片手に、桃の前に座りました。

「よし切るぞー。」

「あ、待ってお爺さん。」

「？何ですか涼……お婆さん。」

「こんな大きな桃にそんな小さな包丁で大変でしょう？これ使ってくださいな。」

「あ、ありがと……………あの、何でこんなもんが置いてあんすか？」

「玄関脇に置いてありましたよ？」

「……………」

で、何か流れに身を任せた感満載のお爺さんは、お婆さんが差し出した青龍刀を受け取りました。たつていうかなんか刃に赤い模様みたいなのが付いてる気がしないでもないけど気のせいだろ絶対うん。

「…と、とりあえず切りましょうか。」

「ええ、どうぞ。」

内心、子供がオヤツを待ってるかのように笑顔でお爺さんが桃を切るのを待つお婆さん。お爺さんはその顔を見て

「……………いい……………」

シネお爺さん。

「……………すみません。」

ええからさっさと切れやボケ。



「……なあ雅？お前涼子さんのことになるよキャラ変わるんだな。」

切レツツテンダローガコラ

「は、はいい！……！」

……ようやく目の前でデデンと置かれた桃と向き合つお爺さん。

「そ、そんじゃ切るぞー……。」

そして刀を振り上げ、

「そりゃあー！」

振り下ろしました。

【パカ】

「……。」  
「……。」  
「……。」  
「……。」

「……お、オギヤー？」  
「いや聞かれても。」







「!!」

「カリンさん、レギュラーとか言ってはダメだと思いましたが…第一脇役は脇役でもちゃんとこなさないと…」

「うっさい黙ってなさいバカヘタレスティル!!」

「へ、ヘタレ…………レ…………。」

何ということでしょう。村人Bが一番気にしていることをAに思い切り言われ、ダークなオーラを放ち始めました。へたり込んでます。つかお前バカヘタレは言いすぎだろ。

「アンタは大人しくナレーションに務めときなさいよヘタレ。燃やすわよ。」

……………はい。

「…カリンお姉ちゃん、怖い…………。」

「…………。」

「あ、ちょ、ごめんね美紀ちゃん美香ちゃん！脅かすつもりなかったの！ヘタレに向かって言ったただだから！ね？お願い泣かないで！」

……………そりゃお前が一番鬼にふさわしい顔さつきしてたもんな…………。

「……………………。」

すんませんすんません睨まないで。

「…じ、じゃあねえ……………そだ！アタシ人質になってあげるから、行く途中でアイス買ったげるよ。」

「…ホント!?!」



「な、何を言っている！危険だ！」

「そうよ、うちにはそんなお金ありません。」

待たんかい婆さん。

「…あの、旅行じゃないんですお婆さん。」

「あら違うの？じゃ日帰り？」

「遊びに行くのではありません！！」

…頼む、話を先に進めてください。

「……………と、ともかく、そんな危険な場所にお前を行かせるわけにはいかん！」

気を取り直したお爺さんが、断固として反対しました。

「でもお爺さん…。」

「あら、私は別にいいわよ？」

「ええ！？」

何と、お婆さんは許してくれました。

「いいじゃない、この子が行きたいって言ってるのだから。」

「で、でもこれは…。」

「…お爺さん、この子は弱くないのよ？それにこの子は一度言い出したら聞かないもの…この子の決意を無駄にしないであげて？」

「…むう。」

お婆さんのもつともらしい言葉に、お爺さんは唸り声を上げました。

「それに、この子にはいい社会勉強にもなるわ。ね？」

「お爺さん……。」

「……………」

お爺さんは考え込みました。

やがて……

「……………わかった、行ってきなさい。でもかならず無事に帰ってくるのだぞ。」

「は、はい……！」

こうして、桃太郎は鬼退治に出発することになりました。

「うふふ、やったわね桃太郎。」

「ありがとうございます、お婆さん……！」

「ええ、その代わり……。」

「わかってます……かならず無事に」

「途中で立ち寄った村でお土産買ってきてね？」

「はい！……はい？」

「……………」

「そうそう、確か道中にお蕎麦がおいしいって評判の村があったわね。あそこでお蕎麦を買い取る分だけ買ってきて。あ、でもその村の一つ手前にお饅頭がウリの村もあるわね……うん、どっちがいいかなあ……………」

「……………」



……オイコラババア。

「あらあら、私はまだババアじゃないわよ?」

ちげーっつーの!! 台本無視すんじゃないわねえ!!! そしていいシーン  
台無しだ!!!!!!

「いいじゃない、アドリブよアドリブ」

それはアドリブとは言わねえんだよおおおおおおおおお  
お!!!!!!

【ナレーターが落ち着くまでしばらくお待ちください】

……そして翌朝、桃太郎の旅立ち時がやってきました……もう  
どうにでもなれや（投げ遣り）。

「桃太郎、気をつけて行ってくるんだぞ?」

「頑張つてね?」

「はい……かならず無事に戻ってきます。」

「お土産もね」

「……はい。」

家の前で、『桃太郎』という刺繍が入った旗を背中に差した桃太郎

が、見送りのお爺さんとお婆さんの前で決意を新たにした。最後のはどうでもいいとして。

「それでは、そろそろ……。」

「あ、待つて桃太郎。」

「？何でしょうか？」

お婆さんに呼び止められた桃太郎。そしてお婆さんは、一つの白い袋を差し出しました。袋には、大きな桃が縫いつけられていました。

「これを持っていきなさい。」

「これは……何ですか？」

「旅先でお腹すかすと大変でしょ？だから、キビダンゴを作ったのよ。」

「……………え……。」

感謝するべきはずなのに、何故か青ざめる桃太郎。今じゃもう青太郎です。

「……………これ、お婆さんが？」

「うーん、作りたかったんだけど、お爺さんがどうしても自分が作りたいって言うから。」

おい、お爺さんがお婆さんの役取ってどうすんだ。

「だって死ぬだろ。」

……………そんな真顔で即答されたらどうも言えねえだろが。

「お、お爺さん……………ありがとう（命を救ってくれて）。」

「桃太郎……頑張れよ（俺も頑張るから、色々）。」

桃太郎はお爺さんを見つめ、お爺さんも桃太郎を見つめ返しました。そして心も一つになりました。いろんな意味でアホかと思う。

「それでは、行ってきます！」

「気をつけてな！」

「お土産よろしくね。」

そして、桃太郎はついに旅立ちました……背後からお爺さんとお婆さんの声援（？）を受けながら。

ここから、桃太郎の冒険が幕を開けます……

……オイ、これもしかして続くのか？

【ハイ】

……



第四百四十六の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』 <前編>（後書き）

どうも、先日まで大スランプに陥っていたコロコロです。どうにか抜け出せそうです。

そこで我が家に新しい家族であるワンコが来ました。めっさ可愛いんです。子犬です。柴犬です。俺みたいにコロコロ転がります。愛らしいです。親ばかりです。写真貼りたいくらいです。寝方が家族皆にソックリです。

……ええ、お察しの通り、大スランプに陥つていながらワンコと毎日戯れていました。ごめんなさい、返信もしないで……とゆるわけで、今から返信頑張るぞー！……そんな冷たい目で見ないでね

第四百四十七の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』＜中編＞

……… 桃太郎は、お爺さんとお婆さんが暮らす村を後にし、鬼ヶ島へと続く道をテクテクと歩いていました………。

「………あの、何か傷だらけな気がするんですが………」

………なんで俺までボコボコにされにゃならねんだよ………釘バツトはねえだろ。

「はい？」

………スマン、こつちの話だ。

ともかく、桃太郎は野を超え、山を超え………時には山賊っぽい連中にも襲われましたが、返り討ちにしました。

そんなこんなで、旅は順調に進んでいました………と、そこへ。

【ガサ】

茂みから犬が飛び出してきました。犬は桃太郎の前に座り込み、言いました。

「ミャー。」

「………。」

……犬は座り込み、言いました。

「ミーン。」

「……………」

……犬は座り込み

「ミーン？」

「……………」

……い、犬……は……

「ミヤン」

「……………」

……………

「……………」から……………見ても猫ねこやんけ。

「ミヤーンミヤミヤミヤミヤン、ミヤミヤミヤミヤミヤン。ミヤミヤ

ミヤミヤミヤミヤミヤンミヤンミヤミヤミヤミヤミヤン、ミヤミヤミヤン

ミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤミヤ

「……………え、えつと……………その……………な、何で連続で鳴き声を？」

……………訳すと、『もーもたるさん、ももたるさん。お腰に付けた  
キビダンゴ、一つ私にくださいな』って言ってるみたいだ。

「わかるんですか……？」





「…………ミヤ（訳 お礼にお供します）」  
「は、はい。お願いします。」

何て下手な桃太郎だ……。

ついか誰だこいつに犬やらせたの。明らか人選ミスならぬ生物ミス  
だろこれ。

こうして、犬（？）を仲間にした桃太郎は旅を続けます。時々犬（  
？）は道に迷った時、他の仲間を呼び出して道を尋ね、桃太郎をサ  
ポートしましたって犬は猫呼ばねえよ。

さて、旅も中盤に入ろうとした中、二人はある林の中へと入ってい  
きました。

「う…………薄暗くて不気味です。」  
「ミヤ。」

桃太郎、お前ビビリすぎ。そして犬（？）、堂々としすぎ。

ビクビクしている桃太郎と平然とした犬（？）が林の中を歩いてい  
る時でした。

「おい。」

「「？」

ふと、横を見ると…そこには切り株の上に座り込んだ猿がいました

「断る!!!!」

「はい!!??」

ええええええええええええええええええええええええ!!!!??

「あ、あのまだ何も…」

「つせーよバカ。どうせ仲間んなれとか言っただろが。」

ちよと待てやああああああ!!!!

「……まあ、なつてやつてもいいが条件がある。」

「じよ、条件?」

「そ。」

「……あの、お腹すいてるならキビダンゴが」

「ドーン!!!!」

【バゴオン!】

「ひい!?!」

猿は傍にあった大木を遙か彼方へと殴り飛ばしましたってオイ。

「んなもんいらん。仲間になつてほしかったらラーメン持ってこい。」

「え、そ、そんなあ!?! ラーメンなんて持ってないですよ!?!」

「そんじや仲間んなつてやんね。」

「ええええええ!?!」

……あーちよつとすいません、中断してください中断。

…………… オイこら龍一。何やってんだテメエ。

「何って交渉。」

アホか。ラーメン要求する猿なんて聞いたことねえぞコラ。

「今ここにいる。」

黙れや。

「つーかよお、何で俺猿なわけ？ このデカ耳鬱陶しいんだが？」

あああ耳を取ろうとすんな。とにかくこのまんまだと話になんねえからさっさとキビダンゴもらって仲間んなってくれよ。

「だからラーメンよこせつつってんじゃん。」

…………… 後でラーメン好きだけ奢ってやるから。

「…………… ホントだな？」

…………… はい。

「よおしいだろう。我慢してやる。」

…………… 。

すみません、進めてください。

「…あー、ワリイが腹減ったんで腰に付けたキビダンゴくれ。」

「あ、はい、どうぞこんな物でよければ……。」

「サンキュ。」

何故か上から目線の猿に言われ、おずおずとキビダンゴを差し出した桃太郎。猿はそれを受け取り、仲間になりました。

……犠牲は大きかったですけど……グスン。

猿を仲間に加えた桃太郎は、猿によって様々な困難を強行突破していきました。途中で関所がありました。それさえも門ごと空の彼方へと吹き飛ばしました。後で弁償します。

そして、いつの間にか猿に主導権を握られた桃太郎達の前に現れたのは……。

【バサバサバサバサ…】

「助けてー。」

そう、畏にかかった鶴……………はいストップストップもっかい中断して。

テメ何やってんだ香苗。

「え、何って……鶴よ?」

桃太郎に鶴なんて出てくるかダアホ。普通キジだろ。

「え!?! そうなの!?!」

どついう教育受けてきたお前。

「だ、だって鶴の恩返しって聞いたから。」

誰から。

「プロデューサーさんから。」

よーしそいつ後で校舎裏来い。

……ともかく、キジの役やってくれよ。話が成り立たねえよ。

「うう、わかつたわよお………えと、カァー、カァー。」

それカラスだバカ。

「わかんないわよキジの鳴き声なんて。」

……『ケーン』、だったと思うけど。

「あ、そうなんだー! 雅物知りー!」

名前出すな！ タブーだから！ いや今さらだけど！

……ともかく、キジが桃太郎達の前に降り立ちました。

「あ、桃太郎さん桃太郎さん、お腰に付けっ」

【ムギユ】

「？ あれ？」

「……………」

……………キジに気が付かなかった猿はキジの後頭部を踏み付けました待てコラ。

「あ、わーりわり。気が付かなかった。」

「……………ひどい……………しくしく。」

……………普通気付けよ。何か地面に顔跡付いてんじゃねえか。

「……………だ、大丈夫ですか？」

「……………うん、平気平気。ポジション持つてるから。」

待てや。キジはそんなもん持たん。

「だって持ってたんだもん。」

……………さいでっか。もうどうでもいいよんなこと。

「あ、あの雅さん？ 怒ってます？」

別に……………さっさと話進めようぜ……………さっさと。



「限定品のビッグサイズだからな。」  
「……………」

猿が差し出したのは、蕎麦で作られた特別なダンゴでした。因みに大きさは拳大です。それが三つ、串に刺さった物が十本はありました。この大きさはじゃ饅頭だろコレ。

「……………あの、残してもいい？」

「残したら踏みにじるぞ？」

「全部食べさせていただきます。」

……………キジは全部食べ終えるまで仲間にしてもらえませんでした。

こうして、桃太郎は犬（という名を語る猫）と猿（という名の暴君）とキジ（腹一杯でフラフラ）を従え、鬼ヶ島を目指します。

やがて鬼ヶ島の前にある漁村に辿り着いた一行の目の前に、鬼ヶ島へ向かうための小さな帆船が一隻、港の棧橋に繋がっていました。これで鬼ヶ島へと向かうのです。

「あ、船頭さん。」

「鬼ヶ島へは行けませんよ？」

桃太郎が交渉しようとしたのですが、アッサリと返されましたってコラ。



「え、ええ！？ な、何ですか！？」  
「当たり前です！ 何で自分からそんな危ない所に突っ込むようなことしなければいけないんですか！？」  
「で、でもこれ使わないと先に進めない」  
「進まなくていいから早く帰りなさい！」  
「そ、そんなあゝ。」

強気に出た船頭さんに押され、桃太郎はすっかり困り顔になってしまいました……あの、校長先生？ 船頭さんが断ったら話が進まないのですが？

「役など関係ありません。生徒に危害が及ぶような真似を校長である私がさせると思いますか？」

こんなところでいい事言った！？

「……でもどうするの？ このままだと行けないわよ？」  
「ど、どうするって言われましても……。」  
「うし、ここは俺に任せとけ。」

コソコソ話し合う桃太郎達をどけるかのように、一步前へ進み出た猿。

「え、でも」  
「まあ見てなつて。」

……一瞬、猿がニヤリと黒い笑みを浮かべた気がしました。

「船頭さん。」

「何ですか？ 早く帰りなさいと何度も」

「いやあ実はそれできねえんだよなー。鬼退治しないといけないし。」

「……ですから危険だと言って」

「あーあー船頭さんって残酷だなー。」

「……な、何がですか？」

「だってさー、鬼退治に行かないと鬼がまた村一つ襲うんだぜ？  
死者多数出るんだぜ？そりゃやばいっしょ？」

「え……。」

……。

「そんでさ、鬼退治できなかった理由は船頭さんが船貸してくれな  
かったからーなんだぜ？ つまりさ、鬼のせいで犠牲者が出たら結  
果的には船頭さんのせいってことになるよなー？ そんで世間では  
残酷船頭になっちゃうんだぞ？」

「う……。」

……。

「まあそれでも貸したくないってんなら泳いでいくしかないけど？  
つーかこっから鬼ヶ島まで船で行くと丸々三日かかるよな？ 俺  
と空飛べるキジはともかく桃太郎とか体力もつかない島まで？そこ  
まで残酷なことするんかい船頭さんよお？」

「ぐ……。」

……。

「あ、そうそう。ついでに言つと……奪われた財宝の中には、  
限定プレミアキティちゃん人形が混じってるといっ噂だ。」

「！！！????」

「俺らが鬼退治してきたら皆平和、アンタもキティちゃんGET。

一石二鳥じゃん？」

「…ゴクリ…。」

……………。

「で、どうするよ船頭さん？ 俺らを送り出すか？ それとも追いつ返すか？ 二つに一つでっせ？ フッフッフ。」

「……………。」

行つてらっしゃいませ。本日は無料サービスでございます。」

「よし、皆乗り込め。」

「……………。」

……………。

「?おいどした?早く乗れよ。」

「は、はい!」

「ミャー!」

……………猿の交渉(?)のおかげで、船を手に入れることができた一行は、次々と乗り込みました。もう俺はこつこつとにはツッコまねえ。

「よし、出港準備できたな?」

「は、はい!」

「ミャー!」

「オッケー!」

桃太郎が船の先に立ち、犬が帆の下、猿が舵取り、キジが帆の上にとまりました。

「そ、それじゃ……………」

出港！！！！」

【バサア！】

桃太郎の声と共に、キジは白い帆を降ろしました。

さあ、いよいよ鬼ヶ島に向けて出港です！

「待ってるワ。ピース！俺は海賊王になる！！」

「いえ違うでしょ！？」

「……………ウエツプ、ダンゴ吐きそう。」

「ええええええ！？ ちよ、袋！袋どこですか！？」

「ンミヤ〜オ……………」 欠伸

……………スнгеエ不安。

第四百十七の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』 <中編> (後書き)

こないだ感想欄で言われた！と？の後にスペースを入れるという方法をやってみたんですがどうでしょう？読みやすいならこれでやっていきます。

第四百十八の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』＜後編＞（前書き）

お待ちせしました！ 昔話後編です！ ……え？別に待ってない？

そ、そんな殺生なああああ………

第四百十八の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』<後編>

さあて、と。やっとこの話も佳境に入ったぞ……長かった……。

さて、ここで鬼ヶ島にいる鬼達の様子を見てみましょう。

「よし、頑張るよー！」

「……。」

「……何であたしは鬼なんだ？」

「いいじゃないの。楽しいわよ？」

「この衣装可愛い」

「魔王様！お守りいたします！命に替えてまでも！マジで！」

「やかましいわ。」

「……久しぶりの人型化なのに、こんな役……。」

「気にするでない。ワシだってこんな役嫌じゃ。」

「……ねえ明ちゃん、私ってこの役似合うのかな？」

「いや、いいと思うよ？多分。」

「ああ、ハニー！君のその姿が眩しすぎて直視できないよ！」

「ダーリン！あなたはどんな格好しても素敵よ！」

「……。／／／／／／／／／／／／」

「リリアン、顔真つ赤よ？……まあ理由は聞かないけど。」

「はいはいお前らちゃんと列作つとけー。」

……えぐつと上から順番に紹介。

鬼A、B、美紀と美香。最初に出てきた鬼だから紹介する必要がないよな。

鬼C、久美。文句言うな。

鬼D、エリザさん。何か張り切ってるように見える。

鬼E、クルル。はしゃぐな。

鬼F、G、ケルマとカルマ。カルマがだんだん恐くなってきた。

鬼H、エル。人型化初めて見たけど、本編とは関係ないから別に問題なし。

鬼I、日暮。何だかんだでやっぱ不満そう。

鬼J、絵里。かなり恥ずかしそう顔。

鬼K、明。やる気ねえ。

鬼L、龍二のお父さん。アホか。

鬼M、龍二のお母さん。上に同じ。

鬼N、リリアン。頼む、そのカッコでモジモジすんな。

鬼O、フィフィ。よくあつたなそのサイズの衣装。

そして鬼P、神楽先生。一応リーダーっぽいつーかここでもしっ  
かり先生してる。

……つか鬼多すぎ。



それとどうでもいいけどなあ……女性陣、着替え直してきてくれねえか？

「え、何で？」

いや、AとBとOは別にいんだけどさ……その、他の女性陣が……。

「何だ、貴様はこんな露出度が高い服が好きなのか？」

「変態じゃな。」

ええい黙れHとE！！俺だってこんな無駄な苦勞する役なんざした  
かなかつたんだよ！

「ま、雅？普段のキャラが壊れてないか？」

……………気にしちゃダメだC……………グス。

「ホラホラ、お前ら遊んでないで戦闘準備しろー。桃太郎が来ちま  
うぞー。」

『イー。』

デメェらシヨッーかコラ。

さて、一方桃太郎達は……。

「……ついに来ましたね……鬼ヶ島。」

桃太郎は鬼ヶ島の正面の入り口の前にある棧橋に船を止めて上陸し、目の前の門を睨みつけました。

「ついに来たな……。」

「そうね……。」

「ミヤ~~~~オ~~~~クー……。」

犬(?)は居眠りし、猿とキジは派手なアロハシャツを着てサングラスをかけ、真剣な面持ちで……

「……つて!?!何なんですかそのカッコ!!」

「何て……アロハ?」

「アロハよ?」

「旅行じゃないですつて!!それに何だか悪者みたいで恐いです!」

「何を言う。ハワイではこれで通勤する人だっっていんだぞ。」

「いわゆるスーツよ。」

「すー、すー……。」

「そーゆー問題じゃなああああああい!!!!!!」

ツッコミ入れる桃太郎に一致団結して反論する猿とキジ、そしてまだ寝てる犬(?)。お前ら全員(マジメな桃太郎以外)死んでくれ。それ以前にここはハワイじゃねえ。

「しばらくお待ちください」

「さあ、行きますよ！」

「「おー。」」

「ミャー！」

気分を入れ替えた桃太郎、着替えなおした猿とキジ、そしてようやく眠気から覚めた犬（？）は、声を高らかに上げていざ、鬼ヶ島の入り口へと歩み始めました。

が、鬼ヶ島へ入るためには、目の前にある見上げるばかりの巨大な門を突破しなければいけません。さあ、桃太郎はどうするのでしょうか？

「え、えつと……ごめんくださいーい。」

何普通に挨拶してんだ。

「じ、じゃあ宅配便です。」

じゃあって何だじゃあって……精一杯ボケようとしてんじゃねえっつもの。

「なら私が。」

するとキジが前に進み出ました。

「おーにさん あーそびーましょー」

バカだろテメエ。

「そんなんで出てくるわけねえだろ？」

そして猿も進み出ました。

「……オルア！！ はよ出てきて借金返さんかい！ いてもうたろうかワレエ！！！」

借金取りじゃねえかそして猿以上に役になりきってんじゃねえよ異様にこええよ。

「……」

……今度は犬(?)が出てきました。

「ンミヤ〜オ、ゴロゴロ」

「『出てきたらいいこととしてあげますよ〜』だよ。」

転がりまわるな犬<sup>ネコ</sup>。そして訳さんでもええわい猿。

「……………」

「……………」

「……………」

「……反応ないですね。」

当たり前だバカども。

「留守じゃね？」

「じゃまた来る？」

「ミヤ。」

何抜かすかボケども。はよ突入せんかい。

「うう、昔はあんな素直だった雅がそんな暴言を吐くとは……。」  
「世知辛い世の中ね……シクシク。」

泣き真似やめい猿とキジ。

「……とりあえずどうしましょう？」

「……よし、俺に任せろ。」

……ようやく話が進んだか……

猿は門の前に立ちました。

「……あ、そつか。門の横の崖をよじ登って中に入って鍵開けるのね。」

「なるほど。」

「ミヤ。」

二人と一匹は猿の思惑に納得し……

「……あ、でも考えてみればリュウちゃんだし……。」  
「……門、普通に吹き飛ばすかも。」  
「ミヤ。」

と思ったら何かこの後の展開を予想したり。俺もどっちかってーと後者だと思っ。

「よし、行くぞー。」

そして門の前に来て腰溜めに構えて……………

(絶対に吹き飛ばす気ね。)

(絶対に吹き飛ばす気ですね。)

(ニヤニヤニヤニヤ。)

絶対に吹き飛ばす気だ。

「あ、どっこい……………」

腰を大きく捻り…………

「しょ！……！」

【ボン！】

勢いよく右拳を突き出して門を吹き飛ば

……………あれ？してない？

「あ、あれ？」

「へ？」

「ミ？」

「うし……よつと。」

【ガチャン！】

……。

「ホラ、開いたぞ。」

「……………」

あゝなるほど。門を壊さずに拳貫通させて腕通して鍵開けたわけね。考えたね。にしても門ってこんなどこにでもあるような家のドア口ツクでいいんかい。え、今回は見逃して？ざけんなコラ。

「……………おい桃。さつさと号令かける。リーダーだろテムエ。」

「……………え！？ あ、す、すいません！！」

何か予想を裏切って呆然としていた桃太郎に猿が叱咤激励（？）し、覚醒させた……………まあいいか、話進むし。

【バァン！】

桃太郎達は勢いよく門を開け、鬼ヶ島の内部へと突入しました。そこには、すでに戦闘準備を整え終えていた鬼達が。

「鬼達、覚悟！ この桃太郎が来たからにはもう逃げられません！

！」

桃太郎は腰の剣を引き抜き、高らかに告げました。

「来たな、龍二！ 今日こそお前の額にチヨークめり込ませてやる！」

「龍二！ 今日こそ君に勝つ！」

「リュウくん」

「リュウジ……普段包丁として使われている苦しみ、存分に味あわせてやる。」

「！？ あ、荒木先輩！？ いやああ！ 見ないでー！ー！ー！」

「いいじゃん、先輩にたつぷり見てもらいなさいっての！」

「やあマイサン！ よく来たね！」

「ウフフ、久しぶりー」

「リュウ兄ちゃんだー！」

「……リュウ兄……。」

待てテメエら本名使いまくってんじゃねえよ。

「………主役なのに……今回ボク主役なのに……クスン。」

「あ、アルスちゃんしっかり！ さっきカツコよかったから！ 自信持って！ ね？」

ほとんどの鬼が桃太郎じゃなくて猿に向けて言ったので座り込んで地面に“の”の字書き始めた桃太郎。すまん、慰めるのはキジに任せる。

「おーい、桃。どうすんだ早く命令しろ。」

「………はい。」



猿に言われて、まだ若干暗くなりつつも立ち上がった桃太郎は、剣を高く掲げました。

「……………皆……………かかれー！ー！！！！」

「「イー！！」」

「ミィー。」

「だあら ヨッカーかつつの。それと犬(?)、お前それ普通に鳴き声だろ。」

「負けるか、こっちも行けー！ー！！！！」

『イー！！』

……………もういいです。

「……………じゃあ龍二、覚悟！」

「待ちなさい久美ちゃん！リュウちゃんと戦うなら、私を倒してからにしないで！」

「香苗……………やめておけ、あたしに勝つなんて百年早い。」

「フッフ、それはどうかしらね？」

「……………どうしてもどかないと言うなら……………容赦はしない！」

「上等！！」

「二人ともガンバレー！」

「……………ガンバ。」

……………キジと鬼Cが互いに接近し、拳をまじえ始めました。鬼AとBは二人を応援してました。お前ら勝手にやってる。

「龍二、覚悟！『ヘル・ステイング』！！」  
「くらえ！『ライトニング・アロー』！！」  
「ゆくぞ！『弧月飛剣』！！」  
「……『アトミック・スラッシュ』。」  
「くつらえー！『炎よ、飛べ』！！」  
「無駄でござーい。」

鬼Pと鬼Hと鬼Iと鬼Nと鬼Oがそれぞれ技を繰り出すのに対してバシバシと弾く猿。今さら言うのもなんだけどお前人間じゃねえだる。

「いた！いた！ちよ、こつち飛んでますって！？あいで！？」  
「大丈夫かケルマ？」  
「人を盾にしてる奴に心配されたくないってブオヘア！！??」  
「いやー！！私一般人なのにー！！」  
「ドンマイ絵里」  
「ファイトよ！」  
「見てないで助けてー！！」

……鬼Gは鬼Fを突き出して飛んできた技の盾にし、鬼Jが逃げ回る中DとKは岩陰に隠れながら傍観してました。薄情者どもめ。

「タマちゃん、リベンジだにゃー！！！！」  
「ミミヤー！！！！」

鬼Eは犬(?)とポコポコと殴り合い……もといじゃれ合い？始めました。バカだこいつら。

そして桃太郎は……

「……え、と……。」

「おや、アルスちゃんが相手かい？」

「そうみたいね」

桃太郎は鬼MとLと向かい合いました。いや実名出すな。

「……あ、あの、お二人と戦うんですかボク？」

「必然的にそうなるね。」

「そうね。」

「……………」

……おい桃太郎、何戸惑ってんだ？

「いえ、あの……………役が鬼でもリュウジさんのお父さんとお母さんを傷つけるなんて……………」

……………ま、まあ気持ちはわからなくもないけどさあ……………戦ってくれないと物語成り立たねえからな？つかお前まで実名出すな。

「で、でも……………」

……頼むから戦ってくれ。話進まないから。

「……………わ、わかりました。」

桃太郎は気を取り直して剣を

「おや？もう話し合いは終わったのかい？」

「んも〜いいところだったのに〜。」

.....

何してんスカ。

「これぞ荒木流……」

「愛のメリーゴーラウンドよ!!」

うん名前聞いてないからっーか抱き合っつてクルクル回るなさっさと始めてください。

「むう、仕方ないな……。」

「しょうがないわね。」

「.....」

桃太郎、頭抱えるな。俺だって我慢してんだ。

「よし、行くぞアルスちゃん!」

「手加減無しよ」

「! は、はい!! 行きます!」

ようやく構えた鬼Mと鬼Lと対峙する桃太郎。だから実名出すなっ  
て。

「.....なるべく手加減しないと……。」

.....桃太郎、その必要はないと思う。

「へ？」

「いくよハニー！」

「ええ、ダーリン！」

「必殺！愛のダブルクラッシュ！！！！！！」

【ドゴオオオオン！！！！】

「にゅわああああ！！！？？」

……夫婦のW踵落としが桃太郎めがけて振り下ろされて、地面に馬鹿でかいクレーターができました。桃太郎は咄嗟に後ろへ飛び退いて無事でした。ってオイ。

「おや、外したねハニー。」

「外したわね、ダーリン。」

んな呑気に言われても……。

「な……え……？」

……桃太郎、桃太郎。

「……？」

お前なあ……あいつの親なんだから、生半可な気持ちで向かってっ  
たって勝てるわけねえだろ。





「ハニーーーーー!!!!!!」  
「ダーーーーー!!!!!!」

鬼MとLは仲良く抱き合ってキリモミ回転しながら吹っ飛んだ。やっぱバカだ。

うわ、つか鬼達全員目掛けて矢飛ばしやがったよ。

「うわーやられたー。」  
「……パタリ……。」

鬼AとBは、まあギリギリのところ当たってはなないけど一応役に成りきっているため大袈裟に倒れましたっつーか棒読みじゃねえか。

「うああああー!や、やられたー!!!」  
「まあ。久美はやられ方がうまいのね。」

鬼Cは何か妙にうまい、対して鬼Dはぎこちなく倒れた。因みに当たってない。

「にゃああああー!!な、なんでーーーーー!!!??」  
「ま、魔王さまああああああ。」  
「……一応倒れとこ。」

鬼EとFは五発ほどまともに食らい、マジで吹っ飛びました。鬼GはFを盾にしたから無事でしたがとりあえずと言った感じに倒れました。カルマ最近お前薄情になってきたな。



「え、えっと……どうすればいいの?」

「うーん、とりあえず適当に倒れちゃおっか?」

鬼JとKには全然掠りもしないってか一本も飛んでこなかった為、とりあえずゆっくりと倒れましたっつーか寝転がりました演技下手だなあオイ。

……で、数分後……。

「……………ど、どうですか?」

……いや、そんな無差別攻撃しろとは言ってないけど…壁とか地面に穴開きまくってるし……まあいいやもうどうでもいいし。 投げ遣り

さて、桃太郎のお供達は……

「あ、危ないよー!」

「ミヤミヤミヤミヤ……!」

「周りをよく見て撃てよな。」

「う……う……ごめんなさい。」

何と猿が犬(?)とキジの前に立って光の矢全部叩き落していたので全員無事でした。

「アダダダダ……クソ、また負けたか……。」  
「……………」  
「ちい…相変わらず容赦せんのおお主は……。」  
「……………痛い……………」  
「キユ……………」

で、猿の傍らには鬼Pは青春映画さながらに大の字に倒れ、鬼Hは顔から地面にめり込み、鬼Iは尻餅つきながらコブできた頭抑えて、鬼Nはうつ伏せのまま呟き、鬼Oは地面にパタリと落ちて目え回していました。お前ら何があつた特に重傷の鬼H。いや聞かなくても何となくわかる。

「よおし、後は人質救出するだけだね！」

「は、はい。」

「あゝもうせんでもいいと思うぞ？」

……………は？何言つてんだ猿？

「お前ら足元見てみ。」

「……………」

？

……………。

「……………何でアタシまで……………」

「わり、さつき巻き添えにしちまった。」

「……怨むわよ、クソ龍二………ガク。」

「………何か他の鬼より一番手酷くやられてねえか？つかこんな救出劇あるか。」

「気ニシナイ。」

「………もういいです。」

まあいろいろありましたが、桃太郎達は鬼達をこらしめて、無事に鬼ヶ島から盗まれた財宝を取り返すことに成功しました。

これで、めでたし、めでたし

「おい桃、この財宝使ってラーメン食いに行こうぜ。」

「だ、ダメですよ！これは村の」

「私さんせー！！」

「ミヤミヤー！！」

「おお、犬(?)は焼き魚定食がいいか。よしよし、そんなじゃさっそく店に直行するぞー。」

「人の話を聞いてくださいー！！」

「無理。」

「ミヤ。」

「誰か、誰か味方はいませんかあああああ！??？」

……でもねえよなあ……

え？これで終わりか？……いや、不服っつーか何て言うか、こんなグダグダ感丸出しで終わっていいのかなーって……え、もっかいやるかって？はははは

……金・輪・際・お断りさせてもらっ

え〜と……そんじゃ最後に、キャスト紹介してくんだったよ。おし、じゃ主役から。

「はあ、はあ……あ、はい……えと、桃太郎役をやらせてもらいましたアルスです。皆さんお疲れ様でした。」

「お婆さん役の楠田 涼子よ 皆見てくれてありがとう」

「……お爺さん役の……佐久間 恭田です……何で俺……無実なのに……見も知らない釘バツト持った女性達にフルボッコされたの……？」

「ミーン（犬役の珠です。今回は重要な役を与えてくれてありがとうございました）」

「猿役の荒木 龍二。まあ無難な役でよかったと思うぞ?」

「キジ役の斉藤 香苗です。一番つらかったのは船に酔ったことです。」

「……船頭役の校長です……何故私は口論で彼に勝てないのでしょうか……後いつ本名出るんですか?」

「村人Aこと人質役の花鈴です!! 出番少ない上にこの仕打ちってないでしょ!?!」

「村人B、スタイルです……ヘタレバカって……。」

「鬼A、斉藤 美紀です! 皆と遊べて楽しかったです!」

「……鬼B、美香です……ちょっと楽しかった……。」

「鬼Cの立花・久美・アンドリユーだ。まあ役的には不満だけどもれなりは楽しめたぞ。」

「鬼Dのエリザよ。日本の昔話の劇をやるなんて夢にも思ってたかったわ ありがとう」

「鬼Eのクルルです……うう、最後はリュウくんの胸の中で倒れたかったあ……結局珠ちゃんにも負けちゃったし……。」

「鬼Fのケルマです……チクショウ、カルマめ……リュウジめえええええええ!!!」

「……あー、鬼Gのカルマです。Fの野郎が鬱陶しいです。」





第四百十八の話 特別編！勇魔以上昔話『桃太郎』 <後編> (後書き)

どうもー、最近忙しくてなかなか更新できてねえコロコロです。昔話、どうだったでしょうか？まあ書いてて楽しかったしいつか別にー

じゃ、次回から普通に……行くかなあ？不安。



第四百十九の話 龍二の秘蔵コレクション(?) (前書き)

どうもー……今回は結構ヤバイです。

前半コメディー、後半シリアスな伏線あり。

あ、そんであとがきに自分的に重大告知あり。

第四百十九の話 龍二の秘蔵コレクション(?)

くファイファイ視点く

やほ、ファイファイよ。ただいま午前ジャスト八時。

「んあ……あ、ファイファイおはよ。」

「おはよ、アルス。」

「んみゃ~~~~……。」「

あ、最後のネコじゃないよ、布団の上で伸びしてるクルルだよ。何かだんだんネコ化してる気がするけどまあ別にいいということぞ。

「なんか今日は珍しいわね、三人同時に起きるなんて。」

「まあ、そうですね。基本ボクがファイファイが早起するし。」

「みみゆ……。」

「クルルは論外だけどね。」

まあだ寝ぼけ眼ですかこの人。

まあいいや、とりあえずリュウジが来る前に布団から出よ。あいつの起こし方荒つばいし、何されるかわかったもんじゃない。

【シュ】

「おっはよーリュウズ」

【ガブリ】

和室を開けてリビングへ

…… “ガブリ”？

「……………」  
「……………」

私とアルスはギギギ、と錆びた蝶番の如く左を向いた。そこには……

『ジエララ。』

クルルが何かに頭噛み付かれてました。

「……………」



「「「……………」」」

「いいか？ 次は食べ物と間違えるなよ？」

『ジエララ〜』

「よしよし、物分りのいい子だ。」

……………リビングにて、正座で目の前の光景を暗い表情のまま見つめる私達。え、何の光景か？

リュウジが何かこと、でつかい口持った食人植物みたいなモンスターなんの頭撫でてる光景。

あの後、クルルが飲み込まれた瞬間にリュウジがトイレから出てきて、咄嗟に「吐き出せ。」って一言命令したらクルルがべ！っと吐き出されてそのまま転がってってベランダの戸から外に頭から落ちた瞬間ブっ！と笑ったのは秘密。ごめん、話逸れた。

まあともかく、私達はリビングに並んで座ってその異様な光景を見せ付けられてるわけよ。因みにクルルは頭にタンコブとおまけにいろんな液体でベトベトだったからさっきシャワー浴びてきた。

「……………あの、リュウジさん？」

「ん？ 何だ？」

「え、と……………」

アルスがチラチラとリュウジの横の食人植物を見る。何を聞こうと  
しているのか丸分かりね。

で、当の植物は何か紫色の長い舌を出して涎を垂らしながらへっへ  
と犬のような呼吸をしている……あんまいい光景とは言えないわね  
……。

「……あの、その気味の悪い植物なあに？」

「……………」

……歯切れの悪いアルスの代わりにクルルが聞いた。

「あちよおおおおおー!!」

【バチーン!】

「ぶぎゅ!?!」

リュウジの瞬速の速さのビンタがクルルの頬を捉えたってうあ、痛  
そ…今鈍い音したし。

「マっちゃんの悪口言う奴あぶつ飛ばっぞ!!!」

いや今思い切り張り飛ばしたよね？未来形じゃなくて過去形で……  
ってツッコんだらおそらく叩かれるから黙っておこう。

「…………ボクが聞かなくてよかったあ…………。」

ホッとため息をつくアルス。よかったね聞かなくて。絶対後ろで転がってるクルルみだいになってたよ。

「…とゆうーより、マっちゃんって…?」

「ん、こいつのこと。」

私が疑問を口にするのと、リュウジが食人植物、もといマっちゃん？の頭にポンと手を乗せる。

「マッ プラ トのマっちゃんだ。」

『ジエ〜ララ〜』

……………。

「…………あの、どこから連れてきたんですか?」

「来たんじゃない。もらったんだ。種。」

「植えたの!?!」

「イエス。おとついに植木鉢に植えてさあ、今朝見てみたらこんなななつてた。」

『ジエララ。』

ああ、確かに植木鉢から生えてるわねソレ……にしても植木鉢小ささ！？ 片手でも持つ上げられるくらいの大きさに対してマっちゃンデカ！？ リュウジの頭一つ分高いじゃないの！ すんごいアンバランスよ！？

「あ、言っとくけどこれでもまだ小さい方な？ ちょっと改造施しておいたからこれ以上伸びはしないぞ。」

「……最大どれくらい伸びるの？」

「そだなあ、二階建ての家は軽く超えると聞いた。」

マジん？

「……とんでもないモンもらったわねアンタ。」

「そうか？ 可愛いぞコイツ。」

「……どこが！？」

あ、クルル復活した。

「そもそも、ここにいて自体がまずいんじゃない？ 【ベロン】 ひゃあ！？」

いきなりアルスが紫色の舌で顔なめられた。

「な、なな何ですかいきなり！？」

『ジエララー。』

「ん？ ……へえ、そうなのか。」

言葉わかるんかいアンタ。

「んむ、どうやらアルスは何かい匂いがするらしいぞ？」



「いい匂いって何ですか一体!? あ、ちょっと待って、そんな舐めちゃダメ、あ、やあ……………」

……………アルスー、そんな顔赤らめながら嫌がってたら何か変な男とか寄って来そうだからやめなさいよ。特に声とか。

「あらら、えらい気に入ってるなマっちゃん。」

「ジエララア」

……………ちつとも反応しないリュウジは男として論外よね。

「だ、誰かあああ……………助けてくださいいいいい……………」

「……………あゝ、マっちゃん、そろそろやめてやね。コイツ本気で泣きそうだから。」

『ジエラ。』

リュウジの命令に素直に従ってマっちゃんは舐めるのをやめた。

で、まあ当然っちゃ当然なんだけど……………

「うええええん……………」

アルス、涎でベトベト。

「アルス……………お疲れー。」

「……………お疲れとかそういうのじゃないですよ……………グス。」

……半泣きじゃないの。とりあえずタオル渡して。」

「あ、そうそう。お前らにもまだ見せてないのがあったな。」

「へ？ 何のこと？」

「俺の秘蔵のフラワーコレクションだ。」

フラワーコレクション……つまり、花集めてるわけね。

へえ、意外……。

「リュウジってそんな趣味あったんだね。」

「へえ……意外ですね。」

「そうか？ まああんま知っても得することねえだろうと思って誰にも言っていないからな。せっかくだし、お前らにも見せてやろう。」

ゴソゴソと自分の背後を漁るリュウジ。私達妖精族って花大好きだから、何だか楽しみ

「じゃまずはコレ。」

【ドン】

「「「……………」」」

…何か、目の前に置かれた植木鉢に生えてる花……………なのコレ？何か赤い毛みたいなのが生えてて光ってるんだけど……。

「『モウセンゴケ』だ。」

「モウセ……何？」

「『モウセンゴケ』。まあまだ花咲いてないけどな。花は白くて小さい奴だ。」

あ、花じゃないんだ……一瞬、これどっか私達の世界以外の植物かと思っただわよ。

「こいつは食虫植物っていうのに分類されててな。」

「シヨクチュウ……？」

「食虫植物。つまり虫を食う植物ってわけ。」

……マジ？

「……どういう風に食べるんですか？」

「飛んできた虫をこのネバネバした粘液で絡めとって肉を溶かして分解させるわけよ。」

「え、えげつないですね……。」

「つーわけで、ファイG.O。」

「何でやねん。」

つーわけの意味がわかんないわよ。

「いやあ、実践してもらおうかと思ったんだが。」

「死んでまっわー!!そんで私は虫じゃないっつっててるでしょ……!!」

「ファイ、だんだんマサさんみたいになってません？」

……なんかマサの苦勞がすんごくわかる気がする……。

「さて、じゃ次。」

ズイッとモウセンゴケを横へズラし、また後ろでゴソゴソし始める  
リュウジ。ごめん、何だかすんごい不安になってきたわ。

「続きましてー……これ。」

【ドン】

……………。

「……何スカコレ。」

「『ハエトリソウ』。」

あっけらかんと答えたのはいいんだけどさあ……何この二枚貝みたいな葉？しかも何かギザギザで牙みたいになってるし……それが五個もある。

「こいつもモウセンゴケみたいに白い花を咲かせるんだけどな。まだ咲く季節じゃねえからな。」

「そ、そうなんですか……。」

「……何だかコレ、怖い……。」

クルル、同感。

「……ひよつとして、これも食虫植物なんですか？」

「ご名答だアルス。こいつは口みたいな葉っぱの中にある小さな棘に獲物が触れると、パツクンと閉じて押しつぶし、消化して栄養とするんよ。」

「うわぁさらにえげつない……。」

「今ならフィフィにだけ無料サービス、突っ込め。」  
「いやです。」

即答。つか何よ無料サービスって。そんで突っ込めって。虫じゃな  
いっつってるのに。

「そんじゃ次行こう。」

そんでまたズイッとハエトリソウを横に押し出して、背後を漁る。  
もう勘弁してください。

「続きましてー……これ。」

【ドン】

さっきとセリフ同じですやん。

って……。

「「「……………」」」

三人同時に沈黙した……。

「……………あ、あの、これもまさか……………」

「そ。食虫だ。」

うん、何かそんな気がした。

何このツボみたいな細長いの……………しかも口の縁がほんのり赤黒くて

唇みたいで気持ち悪いし、何か全体的に緑色に黒い斑模様が付いてるし……。

何より前の二つと決定的に違うのは、伸ばしたツルを植木鉢に生えた植物に絡ませてくっ付いてるみたいに生えてるってとこね。いやそれがまた不気味なんだけど。

「こいつは『ウツボカズラ』だ。」

「ウツボ……？ あれ？ 何だか口辺りからいい香りがしますね？」

「そ、これがウツボカズラの特徴。この甘い香りで虫を誘導して、この振り返って滑りやすい縁を利用して虫を中に溜まった消化液が含まれた水の中に落とさせて、少しずつ消化して分解させていくわけだ。」

「……いわゆる落とし穴って奴ね。」

「ご名答ファイファイ。褒美だ、逝け。」

「褒美じゃないし何か不吉な事言われた気がするんですけど!？」

な、何か怨みでも買ったの私？

「そんじゃ次いこ次。」

まだあんの!？もういいわよ!

「続きましてー……これ。」

【ドン】

ああ、もう今度はどんな不気味な植物なのよ!

「「「つて可愛い……。」「」」

細長い植木鉢に植えられた三本の小さな赤い花びらが四枚ついた花。何故か真ん中に黄色い顔が付いてるけど、この顔がすごく可愛らしくて、ニツコニコ笑いながらピコピコ横に揺れてる。

うわぁ……。可愛い〜

「どっだ？」

「……可愛いです……／＼／＼／＼」

「かーわいー！ 何コレ？ 何コレー！？」

「こいつはミニフラワー、略して『ミニフラ』ってんだ。」

へえ……。名前も可愛いわね。

「こいつは食虫じゃなくて、ちゃんと水と土の養分で成長するぞ。」

「へえ〜……。大きくなるの？」

「なるぞ。こいつは人間でいうところのまだ赤ちゃんだ。」

赤ちゃんかぁ……。ますます可愛い

「ついでに成長したの見るか？」

「え、あるの！？」

「おお。成長するのにめちゃくちゃ歳月がかかるらしいが、特殊ルートで立派に成長した奴を手に入れたんよ。」





たくさん出てる、つか天井付くらいでかい明らか花というよりモンスターだった。

「……………アノ、リュウジサン？」

「何だファイファイ？」

「……………コレナンデスノン？」

思わず片言になってしまふ……………いやだってさ、動揺しない方がおかしいっしょコレ？

「え〜っと、正式名称『マンイーター』。ミニフラがその地に適応した姿になった物。よく通りかかった人や牛や馬を茎についた長いツタで捉えて花の真ん中にある口でパクリと一口でいくんだとよ。」

「……………え、あの小さくて可愛い花が成長した姿がコレ？」

「イエス。」

「……………。」

“その地に適応した姿”って……………一体どういうところに生えてんのよミニフラ。つか水と土の養分からかなり変わってるし。後他にもいろいろツツコミたいとこ一杯あるけど……………

ゴメン、イメージダウン。

「……………えと……………だ、大丈夫……………なの？」

「？ どゆこと？」

「っ、つまり襲ってきたりは……………」

「だーいじょうぶだって。襲わないようしつけしてある。」

「よ、よかつた〜。」「

何か脱力したクルル。

【パクリ】

「あ。」

「……………」

「……………」

「……………」

「ちゃあああああああああああああああ！……！」

「ま、魔王がマンイーターに食べられたあああああああ！……！」

「……！」

「ちよ、リュウジ!?」

「ああワリ。金色のものとかが大好きなんだよなコイツ。クルル金髪だろ?」

「みゃあああああああああああああ！……！」

「ま、魔王が飲み込まれたあああああああ！……！」

「リュウジ、吐き出させて!……！」

「おもしろいからもうちょい。」

く再び收拾がつかなくなりましたのでしばらくお待ちくださいく

「で、どうだった？俺のフラワーコレクション。」

「」「」「」

結局、再びリュウジの『吐き出せ。』の一言でクルルがベツ！と吐き出されてさっきのようにベランダから外へ転がり落ちてそのままブロック塀にぶつかって事なきを得たわけなんだけどさあ……………

「」「」もうホントいろんな意味で勘弁してください。「」「」

「それ感想か？」

そゆことにして。

「……………ま、いいか。とりあえずお前ら風呂入ってこい。」

「はぁい……………うう、ベトベトです。」

「……………今回、私一番ひどくやられた……………クスン。」

二人は満身創痍の状態のままお風呂場へ……因みにクルルに頭には歯跡とタンコブ、さらには体中ベトベトと、もはや最悪の状況だった。ドンマイ。

「…それにしても、アンタ花好きなの？」

「ん、まあ一応。」

紹介した花達を庭の花壇のところへと戻していくリュウジに聞いた。

…正直花と認識してもいいのかわかんないのばっかだったけど。この世界にもこういうモンスターみたいなのがいたのは驚き。マっちゃんは例外だけど。

「…まあ別に俺が花好きなのじゃあねえんだけどな。」

「え？ そうなの？」

「ああ。」

じゃ何で？

「じゃあ、何で集めてるの？」

「ん〜……実はな、中学校の頃にいたダチが好きだったんだよね、こういうの。」

「ダチ？ 友達のこと？」

「そうだ。」

…じゃその人がこういうのが好きだったわけね……世の中って変な人ばかり。

……あれ？ そついえば……。

「好き“だった”って……何で過去形なの？」

そもそも、そんな理由だけでリュウジも花好きになるとは思えないし……あ、感化されたとか？

「それは……。」

……。

「……まあいいじゃねえのそゆことは。」

「……う、うん……。」

のほほんと笑いながら誤魔化された。

「よし、じゃ今からメシ作ってやっか。」

「……。」

リュウジはいつも通り、朝ごはんを作るためにキッチンへと入った……

けれど、一瞬……ほんの一瞬だったけど……

リュウジの、あんな悲しそうな顔……初めて見た。

「リュウジさあ、ベットベット取れないですううう……。」

「助けてえええ……。」

「知らん。」

……………結局こういうオチですかい。

第四百十九の話 龍二の秘蔵コレクション(?) (後書き)

どうも……とゆうわけで、めろん先生。こないだの宣言通りマッドの種、使わせてもらいましたーアハハハハ!

………すみませんでした、誠に勝手ながらアドレス貼っておきます。めろん先生の『学校日和2』をどうぞよろしく!

<http://ncode.syosetu.com/n7269d/>

……で、今回の話の最後。龍二の色々は、まあ後ほどに。

そ、し、て……

こないだコメディークロス企画として、『勇者以上魔王以上 特別編』を執筆しましたが……後編の最後なんて超グダグダ、最悪の出来でした……いえ、自分的に。まだまだ書きたいことが一杯ありましたし、大後悔でした。

かなり納得のいかない作品となつてしまい、頭を抱えました。

とゆうわけなので……まことに勝手なことを言います。

コメディークロス小説、第二弾を企画なしで勝手ながら書いてみたいと思います。

あ、当然許可無くやるわけじゃありません。今からでも使わせてもらう作品を書かれてる作者さん方にメッセージを送って許可を得てから書く予定です。

いやもう、ホント勝手なことをしまくって申し訳ないです。でも何か頭ん中でもうその話の構成出来ちゃって、書きたくて書きたくてしょうがないわけなんですよ、はい。

では、よろしく願います。



第一百五十の話

おコタ（コタツ）の魔力はキャラをも変える（前書き）

久しぶりの本編更新。今回はまったりのんびり冬の出来事。

## 第一百五十の話

おコタ（コタツ）の魔力はキャラをも変える

（龍二視点）

ある日の夜のことである。その日は、冷たい風が吹き、枯れ葉がクルクルと舞っていた。その舞いがどことなく阿波踊りに見えた。うっそーん。

つーわけで、世間一般的に最近寒くなってきたつーことでおコタ（我が家の呼び名でコタツのこと）を出すべく物置を漁る。いざ出す時を考えて、去年は取り易い位置にしまっておいたから、出すのに時間はかからなんだ。

「あ、よいせつと。」

ドン、と和室の真ん中に。和室にはすでにフカフカのマットを敷いているため、ヌクヌク感倍増である。

「これで……うし。」

で、コンセントを差して、スイッチを入れて……オマケに、ミカンがたっぷり入った籠を真ん中に置けば。

よし、おコタの完成。

「ふむ、いつ見ても凛々しい姿だな、おコタよ。」

腰に手を当て、満足気に頷く俺。もうね、おコタは最高だね。その姿のみならず性能までも抜群。

「……おい、お前らー。おコタ出したぞー。」

おコタも出したわけだし、リビングで寒さで震えている三人娘を呼ぶと、

【ドドドドドドドドドドドド！】

「お・コ・タ・スライディイイイイイグ！！！！！」

はい勢いよくおコタに足から滑り込んできたのはバカクルル。変な技名。

「にゃはー！ あったきゃーい」

おコタに全身を入れ、満面の笑みを浮かべながらヌクヌクとおコタを満喫するクルル。見てて何かほんわかするね。

「やあっとおコタ出てきたわね。」

で、遅れながらもスイ〜っとおコタんとこまで飛んできましたのはファイファイ。

「……あれ？ リユウジサクランボは？」

「ねえべ。」

「ええ！？ おコタにはサクランボでしょう！？」

「ミカンっしょ。」

「ちえー。この世界の人間の感覚ってわかんない。」

「文句あるんだったら外で水浴びしてこい。」

「いやーやっぱおコタにはミカンっしょ！」

テーブルの上に座ってテンション上げ上げ状態になりながらフィフイはミカンの皮を一生懸命むき始めた。むきにくそう。でも助けてやんない。

「あれ？ そっぴやアルスはどこ行った？ あいつ寒がりだからこっついのには一番反応するはずなのに。」

「え、さっきまでいたんだけど？」

「じゃトイレかね？ ……………まあいいか。」

「さ、て。じゃ俺も。」

そそくさと、自身の足をおコタに

「むむむ。」

……………。

何か踏んだぞっつーか声したぞ。

「……………」

おコタから出て、布団をめくってみた。

「……………お前何しとん。」

「みゆ。」

おコタン中に緑色アルスいました。背中にクルルの足乗っ取る。

「オメエいつの間に入ってたよ？」

「さっき。」

布団からピヨコンと頭を出したアルスはそう一言で答えた。顔フニヤフニヤんなつとるぞ。

つかさつきねえ……………そういや、クルルが走り寄ってくる前に一瞬足を何かが通ったような気がしたな。あれかい。

「オメエこういうのは速いな。」

「むゆ。」

あーあかんわコレ。何か普段と全然キャラちやうぞ。

「……………まあいいか。」

つーわけで、アルスが入ってる場所から移動してクルルの正面の方へ。

「どっこいせ……………ふはああああ。」

おコタに潜り込めば……あーたまらん。ヌックヌク。

「ふゃ〜……。」「

「みゃ〜……。」「

「んぐんぐ。」「

アルスもクルルもおコタを満喫中。フィフィはミカン抱えて苦戦中。

これさ、上から見たら顔が三つ違った箇所から飛び出してっから滑稽だな。

「ふ〜む、ヌックヌク。」「

ん〜……にしてもやっぱりおコタはサイッコーやね。世間じゃ床暖房つてのがあるが、あれよりこっちだろ日本人はやっぱり。

【プルルルル……プルルルル】

「……リュウくん、お電話ー。」「

「パス。」「

「いやダメでしょ!?!?」「

「居留守だ居留守。居留守使ったれ。」「

「いるすー。」「

もうおコタにはまると、出られません。現にアルスなんて性格がガラリだ。

とゆーわけで、電話なんて無視。むっしぴエール。

【プルルルル……プルルルルル】

……。

【プルルルル……プルルルルル】

……。

【プルルルル……プルルルルルプリン】

……。

【プルルルルプリン……プルルルルルプリン】

……。

【プリンプリンプリン　プリンプリンプリン……ン　】

「って何でプリンなってんのよ!?!?」

「いや、おもしろーかなって。」

「やっぱアンタかい!?!?」

フィフィのツツコミ無視して、受話器へ。鬱陶しいからもうチャッ  
チャと用件だけ聞いておコタに戻ることにする。ったく、今度から  
コードレスにしようかね?

「あいもしもしー?」

『よ。』

.....。

「.....あ、リリアンか。」

『イエス。』

“よ”だけじゃわからんことがある。声で判断したけど。

「よ。元気してる？」

『してるしてる。』

「そりゃよかった。」

『コクリ。』

頷くのに擬音をわざわざ言つそんなお前はステキ。

「んでえ？ 用件は何だ？ 手短に頼むぞ、今忙しいから。」

おコタ満喫中で。

『.....アルス.....お願い。』

「？ アルス？ ああ、わかった。」

一旦受話器置いた。

「おいアルスー。リリアンから電話ー。」

「やー。」

おコタで寝そべっているであろうアルスを呼んだらそんな返答が返ってきたってオーイ。



「何が“やー”だ。早く出る。」

「やー。」

「リリアンがお前に用事なんだぞー？」

「やー。」

「いいから出てやねって。」

「やー。」

「おーい。」

「やー。」

「……。」

「……。」

「お」

「にゃー。」

「それ猫やん。」

ああ、無限ループ。

「……。」

で、軽く頭にきたんで和室へGO。

「おいアルス。」

「んー。」

近くまで行ったら潜り込みやがったよこの野郎。

「しよーがねえ……。」

こうなったら強行手段じゃ！

「コラ、出るっつーの。」  
「やー。」

おコタに手を突っ込んでアルスの腕掴んで引っ張る……が、おコタの足を掴んでいるため、がんとして動かない。いや本気出したらすぐ出せただけどね？ おコタが危ないのよおコタが。下手に力入れすぎたらおコタの足壊れるしアルスの肩外れるし。いやアルスはどうでもいいんだけどね。

「おい、アルス。」

「やー。やー。」

嫌がりながら首振るアルス。こいつ性格変わりすぎだべ。

「……………はあ……………」

……………まったく。

「……………クルル。フィフィ。」

「はーい」

「しゃーないわね。」

呼べば元気に返事するクルルとやれやれといった感じで羽パタつかせて浮かぶフィフィ。そしておコタから出て、リビングへ。

「……………いせ。」

俺はというとクルルが座っていたところへ。アルスは再び潜り込んだ。

で、

「……………それ。」

やったった。

「……………」

!!!!!!!!!!!!!!  
ひゃわあああああああああ!!!!!!!!!!  
???????

おコタの中で飛び上がってゴンという鈍い音をたてたアルス。そしておコタから飛び出して畳の上で転がりだしたアルス。さらに近くにあった鏡台の角っこに小指ぶつけて地味な痛さからさらに悶え始めたのもアルス。

「いつつつ……………わ、わき腹があああ……………」  
「お、覚醒覚醒。」

ようやく元のキャラに戻ったアルスは涙目になりながらわき腹と頭を寝ながら抑えた。うん、大体何したかわかるだろ？

おコタ中でわき腹足でつねったんよ。俺のつねりは聞くぜ？

「ほら、リリアンから電話だ」  
「寒いですー!!」

ビュバ！ という擬音が出るくらい華麗なヘッドスライディングで素早くおコタへ潜り込もうとしたアルスを蹴り飛ばした。

「はよ出れ。」

「……あい。」

顔蹴ったから痛そうに頬を擦りながらリビングへ。クルルとファイフイはいつの間にかおコタに舞い戻ってきた。んじゃ俺ももう一度おコタへゴー。

「もしもし？ 代わったよ?」

おコタのテーブルに俺とクルルが顎を乗せてまったりしていると、アルスの声リビングから聞こえてきた。

「……………え、そうなの? ………………うん……………ホント!? うん、今度そっち行くね。……………いいよそんな、こっちがもらいに行くんだから。じゃあ、楽しんできてね。バイバイ。」

【ガチャン】

受話器を置く音がし、

「じゃむいどすー!」

リビングから素晴らしい勢いで足からスライディングしてきたんで  
タンスで押し潰した。

「ぎゅーぎゅーぎゅー……にゃ、にゃにするんですかああ……。」「  
いや何となく。で？ リリアン何て？」

タンスに潰されて目え回してるアルスに、俺はまったりのんびりミ  
カン剥きながら聞いた。

「ううう……今クミさん達と温泉旅行してて……そのホテルの近く  
にある有名な店のココアの粉末が手に入ったからお土産に欲しい  
かって……。」「

………そういやあいつ、草津温泉行くっつってたよな。つか何で  
そんなところでココア？

………まあいいや。久美は今度会ったらしばき倒すとして。いや何か  
ムカつくし。

「とりあえずお前もおコタ入ったら？」

「………じゃあこの重いタンスどけてくだs」

「断る。」「

そして再びミカンをむきむき。

「………アンタってホント容赦ないよね。」「

「とゆーよりあんな重いタンスよく片手で………まあリュウくんだから  
簡単だよな。」「

横でクルルとフィフィがミカン剥きつつ苦笑を浮かべ、俺はミカンをポイと口の中に。傍ではアルスがタンスの下で呻いていた。

「ううう……ううう……。」

「……………」

でもちよつと可哀想だったからどかしてあげた。

「ちゃむいですー！ー！ー！」

そしてすかさずおコタに潜り込んで昔流行ってたタレパ　　ダみたく  
とろける顔になったんでせっかくだから足置きにした。

あー、ミカンうめえ。も一個ムキムキ。

第五十の話      おコタ（コタツ）の魔力はキャラをも変える（後書き）

おコタ素晴らしいですね、おコタ。因みに我が家の呼び名です。

余談ですが、我が家の愛犬は寒い夜におコタに潜り込むのが大好き。犬が庭駆け回らないでどうすんだ。

第百五十一の話 仲良くクリスマスツリー（前書き）

今日はクリスマス・イヴ。なので、クリスマスのお話で。



## 第五十一話 仲良くクリスマスツリー

（龍二視点）

「リュウくん。」

「あ？」

お昼後、テレビを見ていたクルルが皿洗いをしている俺を呼んだ。

「あのね、さっきテレビでやってたんだけど。」

「そうか。」

「……………まだ何も言ってないよ？」

「今忙しいから後で。」

「むー、今お話できてるんだから忙しくな

「ん？」

「ごめんなさい。」

キラリーンと包丁を向けると即謝罪。素直素直。

……………うし。

「終わった。」

キュッと水を止め、掛けてあるタオルで手を拭く。

「でねでねリュウくん！」

「あーはいはい何だ。」

キッチンから出て早速質問攻め。俺、やれやれって言った感じ。

「あのね、さっきテレビで言ってたんだけど。」

「おう。」

「くるすみす”ってなあに?”」

……………。

「……ん?”」

「だからあ、”くるすみす”。人?”」

外国人っぽいね。

「……………ふむ。」

……………。

「アルス?”」

「はい?”」

ふとテレビを座って見ているアルスを呼んでみた。

「今テレビで何の話題してんだ?”」

「え? えつと……………。」

テレビを見て、画面に映っている文字を読むアルス。

「……“クリスマス”です。」

「あーそれ！ それについて聞きたか」

「えーい。」

「びゅー！」

かるーくチョップ。一瞬だけどいい感じにクルルの頭が凹んだ。

「いったーい！！」

「うん痛くした。で？ クリスマスが何だ。」

クルルの訴えは華麗にスルーした。

「むう……でね、クリスマスってなあに？」

「んあ？ …………… ああ、なるほどな。もうちよいでクリスマスか。」

カレンダーを見てしみじみ思う。そういやこいつら、クリスマス初めてか。うん、疑問に持つことはよいことだし、ここは正直に答えてやるうか。

「クリスマスってのはな、十二月二十五日に生まれたイエス・キリストの誕生日で、皆でそれ祝うんよ。」

「？ 知らない人の誕生日なの？」

「いろいろ偉いんだよキリストは。」

何か信者に怒られそうだが、別にいいや。

「んで、聖夜つてことでクリスマスツリーっつーのを飾ってとりあえずメシ食って寝る。これがクリスマス。因みにその前日二十四日

はクリスマス・イヴって呼ばれてる。」  
「ふん。」

リアクション薄。まあ説明が説明だからな。

「そんで、クリスマスにはサンタクロースってのがいてな。」

「サンタクロース？ 誰それ悪魔？」

「聖なる夜に悪魔来てどうすんよ。サンタだサンタ。サンタは真夜中に子供達のプレゼントをツリーの下に置いたり靴下の中に突っ込んだりする人。」

いや人かどうか知らんがな。

「へー……いい人だねサタンさん！」

「そうだな。」

あえてツッコまない。

「……サンタって、今テレビに出てる人のこと？」

ファイフィがテレビを指差す。そこには何かやたらミニスカで露出度高い赤い服きた姉ちゃんがいた。アホかと思った。

「いやあれ論外。一般的に知られてるのは大きな体に白い髭をたくわえて赤い服を着込んだじいさんのこと。」

「え、そうなんですか？」

アルスがマジで驚いた。そりゃ初めて見たサンタが防寒面積少ない服着た姉ちゃんだったら引くわな。

「私もプレゼント貰えるかなー？」

何かクルルがワクワクといった感じに呟いた。

「……多分無理じゃね？」

「!? な、何で!？」

マジメにショックを受けた。

「サンタはな、いい子にしかプレゼントあげねえんだよ。」

……そういや、そういうので比較するサンタって結構ひどいな。

「……いい子？」

何かクルルがキョトンとした。

「あー、つまりあれだ。優しい奴とか家の手伝いとかしてくれる奴はいい子なんじゃねえの？ 手伝いもろくにしない奴にはサンタなんて来ねえよ。」

適当なことを何気なく言ってみた。

「……優しい子……手伝い……。」

「いい子……。」

……クルル  
アルス金と緑が小声で何かブツブツ言ってる。

「……まあいいや。そんなじゃ俺らもそろそろクリスマスツリー出すとするか。」

「え？ あるんですか？」

「ああ、古いけどな。」

ガキの頃から家にあったツリーだが、めっさ綺麗なのは確かだ。

「とりあえず、手伝ってくれ。」

「はい!!」

「は、はい!!」

「オツケー。」

アルスとクルルが一番元気よく返事した。

「えーつと……あつた。」

物置の中を漁り、中から長いダンボールを引っ張り出した。こん中にツリーと飾りが入っている。

「リュウくん、手伝うよ!」

「いらねえ。これくらいは一人で運べる。」

「え〜!?!」

「何故ゆえそこで不満顔になる。」

ヒョイと箱を担ぎ上げて膨れっ面になったクルルを放置し、リビン  
グへ戻った。

「よいせ。」

ドンと箱をテレビの横に置いた。ここが毎年の定位置になつとる。

「んじゃクルルかアルスどっちでもいいから箱の方持っててくれ。

俺ツリー引つ張り出すから。」

「はい！」

……何かやけに元気がいいな。

「うし……………なあお前ら。」

「「？」」

「箱持つのは一人でいいんだが。」

確かに二人一緒に箱持つたら引つ張り出し易いが、正直な話そこま  
で力入れなくてもいいしこれ。

「……………」

「……………」

……しばし無言。

「……………じゃアルス。私が引つ張るからどいてて。」

「いいえ、ボクがやります。」

「何で？」

「あなただと不安だからです。」

「それどういう意味？」

「そのまんまの意味です。」

「大体何が不安なの！？」

「何かいろいろ壊しそうなんですあなたは！！！」

「そんなことないもん!!」

「今までのことから考えてみたらそんなことあります!!」

「何さ!?!」

「やりますかあ!?!」

「殺るぞ?」

「「「「すいません。」」」

キンキラキンに鋭く光る鉈向けたら即謝罪。

「「「「つーかジャンケンして決める。これくらいのことです時間潰すな。」

「それが妥当でしょ?」

「「「「はい。」」」

「「「「つたく。」

「「「「じゃ、最初は」

「「「「パー!!」」」

「「「「いきなりズル!?! ちよ、それないでしょう!?!」

「「「「勝ちば勝ちだもーん」

「「「「勝ちじゃない! ズルい!! もっかい!!」

「「「「え〜?」

「「「「もっかい!!」」」

「「「「……ちえー。んじゃ、最初はグー。」

「「「「じゃんけん、ポン!!」」」

「「「「……(パー)。」

「「「「……(チヨキ)。」

「「「「……えう。」

「「「「よっし、ボクの勝ち。」



「……も、もっかい!!」

「だ、ダメですよ! 勝ちです!」

「勝ちじゃない! ズルい!! もっかい!!」

「それボクがさっき言ってたじゃないですか!? 第一ズルじゃないです!!」

「ズルい!! ズルいつたらズルい!!」

「ズルくなーい!!」

「ねえリュウくん! アルズルいよね!」

「ズルくないですよねリュウジさん!」

「テメエらがバカやってる間にセッティング終わったわボケ。」

「……。」

役立たずどもが言い争ってる間に一人ツリーのセッティングを終えてた俺。手伝ってもらおうと思ってた俺が愚かだったと気付いた。今さら。

「……。」

「んな捨てられた子犬みたいな顔すんなダブルで。」

「つたつくしよーがねえ奴らだなこいつら。いやいつものことだけど。」

「……ほら、飾りつけしてる。今度は喧嘩すんなよ。」

「……はい。」

ツリーの飾りが入った箱を差し出し、拗ねた顔のまま受け取る二人。飾りつけで喧嘩することはない……こともないかもしれない。

……何やかんやで俺、結構甘いかな。

「じゃ勝手にしといてくれ。俺ちよいと部屋行ってくらあ。」

とりあえず後は二人に任せて二階へ。何だか不安だが。

「やれやれ。何があいつらを動かしてんだか。」

部屋の回転イスにどっかと座ってそう一人ごちた。

『いいではないか。その分貴様の負担も減る。』

「逆に増えてるぞ。」

壁に立てかけたエルが若干愉快そうに言う。へし折ったるかこのクソ剣。

「大体アンタの場合あんなのどうってことないでしょ？」

「そりゃそうだがメンドイんだよ。」

ちやつかり付いてきて俺の肩に座っているフィフィ。

「……まあ、さっきのリユウジの説明聞いたらねえ。」

「？ どゆこった？」

俺の説明って……クリスマスのことか？

「ほら、何だっけ……え〜っと、サンマ？」

「魚の方かお笑い芸人の方かどっちだ？」

『どっちでもないだろう。』

エル、ナイスツッコミ。

「つかサンマじゃなくてサンタな。」

「あ、そうそうそれ。さっきの説明ん時アンタが言った言葉。」

「？……………あ。」

該当するワードを一件発見。

「……いい子じゃないとプレゼント貰えないって話か？」

「そ。」

……………あだからか。だからあんな手伝いたいと……………なるほどねえ。

「……………だからって取り合いすることねえんじゃね？」

「……………同感ね。」

『仕方ないだろう。あの二人はいろんなところで無知だからな。』

「エル、今何気に毒吐いたわね。」

クリスマス初心者だからなあいつら。

「……………ま、まあその分手伝ってくれるからいいじゃないの。」

「だあ逆効果だっつーの……………ふう。」

……………全然信用してないわけじゃないが、あの二人、何かあったら口喧嘩おっ始めるからな。

「……………そろそろ飾りつけ終わったかもな。下りてみつか。」

よっこらせつと立ち上がり、様子を見に部屋を出る。仲良く飾りつけしてっかな？

「ここはやっぱりアルスからどうぞ？」

「いえいえ、魔王からどうぞ。」

「いやいや、最後はアルスでしょ。」

「ううん、魔王でしょ。」

「いやいやいや、アルスが。」

「いえいえいえ、魔王が。」

「いやいやいやいやアルスが。」

「いえいえいえいえ魔王が。」

.....。

「.....何してんのあれ？」

『うむ、おそらく優しくいい子というのを演じたいがために譲り合い、また譲り合って譲り合って結局何の進展もしないままと見える。』

「ナイス憶測だエル。それ多分っつーか百パー正解。」

ツリーの飾りつけ（我が家のはプラスチックのリングとリボン付の

小さなベル、そして周りには金色の小さな球がつながった紐と小さな電球が散りばめられたコードが巻きつけられたシンプルなデザイン（の最後、天辺に付ける大きな星を付けるのはどっちかって話だろうな。ツリーの前で手にした星をアルスに押し付けたり、クルルに押し付けたり。

「いやいやいやいやアルスが。」

「いえいえいえいえ魔王が。」

「アルスが。」

「魔王が。」

「アルス。」

「魔王。」

「アルス！」

「魔王！」

「アルス！！！」

「魔王！！！」

「ア・ル・ス！！！！」

「ま・お・う！！！！」

「むむむむううう！！」

「ううううううう！！」

……飾りつけ、途中まではうまくいったのに最後の最後に喧嘩かい。

「こつなったら決着つけてやるにゃー！！！！！！」  
「望むところですよ……！！！！」

そう言つて互いに魔剣、聖剣を召喚して構え、今まさに部屋をしつちやかめつちやかにしようとしたのですかさず接近、一瞬で二人の剣を取り上げて気付く間もなく柄頭で二人の脳天を殴った。

「うきゆううううううう……………」

「手加減しただけありがたく思えバカ娘コンビが。」

頭を抑えてうづくまつてる二人に向かつてポイと剣を投げ捨てた。ちよつとでも大丈夫だろうと思つてた俺のバカ。

「…………はあ、しょうがねえ奴ら。」

呆れた思わずため息出た。

「よし、点けるぞー。」

「早く早くー！」

「…緊張します。」

「…………何この緊張感？」

『さあな。』

星も取り付け（俺の提案で二人で星持つて一緒に付けた）、三人と一本を少し離れた場所に立たせ、俺はツリーの電球のスイッチを手を持った。

「……ほいスタート。」

カチッとONにすると、電球がチカチカと輝き始め、まるでツリーが光ってるように幻想的な光景を作り出した。

「ほわあ〜…きれい。」

「わあ…。」

「へ〜。」

「ほお。」

生まれて初めてクリスマスツリーを見た三人と一本はその光景に目を奪われてしばし見惚れていた。特にアルスとクルルがやけに目がキラキラと輝いていた。

「どだ。クリスマスツリー。」

「すごい！何かあれだね！魔法みたいだね！」

「普段魔法使ってるお前が言うのも変だが、まあそつだな。」

ツリーから離れて、俺もその出来栄を眺める。

若干飾りに偏りがあるが、別にそんなの気にならない程度。電球もうまい具合に巻きつけていた。

うん、文句なし。

「うむ、よう頑張ったなお前ら。」

「えへへ。」  
「……はい。」

褒めると、照れて頭をかくクルルと照れ隠しに顔を伏せるアルス。  
なんだかんだでこいつら仲いいな。

「ねね！ これでサタンさん来てくれるかな？」  
「そうだなくなるかもな。」  
「え、ちよつと何で棒読みなんですか？」  
「気ニシナイ。」

気にします！ と叫んでるアルスは無視した。

………つか、今思い出したが毎年ツリー出してセッティングから飾りつけまで全部俺がやってたな………。

………。

「………フッ。」  
「？ リユウくん、今笑った？」  
「笑った。」  
「うわぁアッサリしてるわね。」  
『リユウジ、一人で笑うと怪しまれるぞ。』  
「踏み潰し。」  
『ぐえ。』  
「今のは自業自得ですよエル……。」



……今年のクリスマスは、去年より楽しめそうだな。

第百五十一の話 仲良くクリスマスツリー（後書き）

とゆーわけで、クリスマスのお話。皆さん、小さい頃はサンタがいると思ってた人も多いでしょう。

俺なんて、心のどこかで多分いると思ってます。いい大人が。ははは、笑うがいい！！！！ 開き直り

というわけで、明日はクリスマス。できるだけ楽しみましょう。

では、最後に……メリークリスマス

第一百五十二の話 メリクリ（前書き）

かあなり遅いクリスマスの話。

## 第百五十二の話 メリクリ

（ライター視点）

十二月二十五日……それは聖なる夜、クリスマスの日。

子供達はサンタクロースからのプレゼントをベッドの中で楽しみにしていたり、

カップルは互いにプレゼントを交換してさらに仲を深めたり、

そんな夜でも、バイトに精を出す若者がいたり。

そんな光景が町中で見られる日。そして、もちろん彼らも彼らなりのクリスマスの過ごし方でこの日を楽しんでいた。

「寒いねーリュウくん。」

「ああ、寒いな。」

「むゆ……寒いです。」

「寒いわねー。」

『寒い……ことはないが。』

上からクルル、龍二、アルス、フィフィ、エルが順々にコタツに入りながらしみじみと言った（エルはさすがに入れないので龍二の横に立てかけてある）。この日の気温は、最近の地球温暖化にも関わらずにマイナスをいい感じに突破しており、寒がりさんにとってはまさに極寒地獄である。いや言いすぎか。

「ホント、こんな日はずっとおコタに入ってたいわね。」

「さんせー。」

「全く、おコタは冬の主役だな。」

「そういうリユウくんはこのくらいの寒さでもおコタ無くて大丈夫なんじゃないの？」

「そりゃ確かにそうだが、あれじゃん？　せつかくの冬なんだから、おコタ満喫しないと人生大損じゃん？」

『そこまでか。』

「オウイエ。」

「どうかんー。」

アルスもいい感じにキャラが崩壊しており、フニヤっとした顔のままコタツにうつ伏せの状態で潜り込んだ。因みにフィフィはアルスの頭の上で同様な感じでくつろいでいる。

「ま、とりあえずのんびりしますか。」

「「「はい。」」」

「…………おい。」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

「何で家のコタツでまったりしてんだお前ら。」

キョトンとした龍二達に、お玉を手にして白いエプロンを着けた雅が仁王立ちしながら的確なツツコミを入れた。

そう、ここは何を隠そう雅の家。そして龍二達はその家のリビングに置いてあるコタツの中でのんびりまったりちやっかりくつろいでいた。

因みに雅が彼らを迎え入れたわけではなく、雅がキッチンから出てリビングに入ると龍二達が何故かいたという展開に。ぶっちゃけた話不法侵入だ。

「つーか、いつからいた。」

「あゝ…………話すと六時間はかか」

「十秒以内でまとめろ。」

龍二を遮って素早く切り返した。さすが親友。

「んじゃ私が説明するわ。」

ファイファイがコタツから這い出てテーブルの上に立って挙手した。

「えつとね、大体五分ちよつと前かな？ さつき龍二が雅の家の壁を押して」

「わかったもうその時点で大体何したか理解したとりあえず警察行けそして壁直せ。」

フィフィの言葉も遮り、華麗に早口で彼らの罪を咎めた。

「壁直したらこの家の侵入通路無くなるだろ？」

「それが俺らにとって問題なんですがつつーかそんなもん作るな。」

今宵の雅はさらに冴え渡っていた。

「まあいいじゃねえか親友のよしみって奴で。」

「限度があるつつーの。」

雅は何か若干疲れた顔をしていた。

「あら、龍ちゃん来てたの？」

「おお涼子さん。邪魔してんぞ。」

「お邪魔してまーす」

リビングの扉が開き、にこやかな笑顔を浮かべた涼子がごく自然に会話に参加した。

「あれ、フィフィ……アルスは？」

「ああ、ステイル。」

「みゅー。」

「……………あ、アルス？」

続いてスティルもリビングに入ってきて、コタツから体を出してフニヤ顔のままテーブルの上に顎を寄せた普段とキャラが違うアルスを見て当たり前のように絶句した。

「……………まともなのは俺とスティルだけかよ。」

「それが運命。」

「残酷な運命だな。」

龍二がサラリと言い、雅は皮肉を込めて言い返した。

「…んで？ 今日はい体全体何の用なんだ？」

いろいろ諦めたように雅がため息吐いた。

「うむ、用というのは他でもない。」

そんな雅の様子は見なかったことにして、龍二達は懷をゴソゴソ漁った。

【スポ】

「パティるぞ。」

「……………は？」

取り出したのは、頭の上に白いフワフワのボールが付いた赤い帽子。いわゆるサンタの帽子。それを龍二達はほぼ同時に装着した（フィィのは香苗の家にあったドルハウス〜クリスマスセット〜の人



形が付ける奴)。

「……あんだって?」

「パティるぞ。」

聞きなれない単語を二回聞いて、目を点にさせる雅。

「ああ、いいわね。パティりましょう。」

「待てコラ姉さん。」

一人変に理解力のある姉が快く承諾。雅はすかさずツッコんだ。

「あの、パティるって………どういう意味なんですか?」

理解力の無い常識人、ステイル。

「ステイルわからずやー」

「常識ないわね。」

「意気地なし!。」

常識力のある変人、クルルとその一味。

「いやちよつとアルス!? 常識ないのと意気地がないのは関係ないでしょう!?!」

「うゃー。」

コタツに入ってポケキャラへと進化を遂げたアルスに戸惑いと驚きとシヨックが入り混じった声でツッコミ入れた。

「……で、どうでもいいけどパティるって何だ。」

「あれだ。パーティするぞの略だ。」  
「略すんなもん。わかりにくいわ。」

龍二のわかりやすい説明に雅がバツサリ。

「つーかお前、家でやれよ。」

「お前の家がでかいからやりやすいんだよ。」

「だからって……。」

「あらいいじゃない。ちょうどパーティしようとしてたし、三人だけするのは寂しいし。」

「……………わあつたよ。クソ。」

姉がゆつたりと暴露して雅が髪をぐしゃぐしゃとかき回した。

「ふむ、じゃちょうどいいじゃん。やるうぜ。」

「……………でもな、一つ問題があるぞ。」

雅が若干困り顔になった。

「飯なんだけど、俺と姉さん、ステイルの三人分しか作ってねえぞ。お前らが来るなんて知らなかったんだからな。」

「ここに手作り麺と特製スープの入ったポリタンクがあります。」

「テメ普段大雑把なクセにこういう時だけ用意周到だな。そこでこの期に及んでラーメンかよ。」

どっから出したのかデデンと麺入りタツパー十個、ドドンと赤いポリタンク五個を龍二はコタツの横に置いた。

「後ほれ、七面鳥。」

さらに懐からクリスマススの定番を出した。

籠<sup>かご</sup>ごと。

「ってこれ生きてるじゃねえか!? 普通焼いたの持ってこいよ!」

「あえてウケを狙ってみた。」  
「狙うな!」

籠の中でバツバツサと暴れる七面鳥を見て「かわいい」と和んでいる女性陣を尻目に雅が珍しく怒鳴った。

「とゆーわけで……メリークリスマス。」  
「クリスマス……!」

カチン、とコップが軽くぶつかり合う音をたてる。

なんやかんやでコタツから出て、広いテーブルに移動した面々。テーブルの上には雅の手製ビーフシチューとポテトサラダ、さらに籠二手製のクリスマスラーメン（ニンジンなどの赤い野菜やレタスなどの緑色の野菜をトッピングした白いとんこつラーメン）が並んでいる。

そんでもって雰囲気を出すためか、全員サンタ帽子被っている（雅

とスタイルに関しては半ば無理矢理被せられた)。

「んぐんぐ……うん、相変わらずおいしいわね雅」

「マサ、これかなりいけますよ。」

「あ、ああ……。」

ビーフシチューを頬張る姉とスタイルに褒められ、照れて顔を逸らす弟。まんざらでもないようだ。

「おいしいですよマサさん。」

「うん、おいしー！」

「やるじゃん。」

「……ありがとよ。」

ポテトサラダを食べた三人娘から賞賛されて、ますます顔を赤くした。

「味濃いな。」

「黙って食え。」

龍二の辛口な評価は冷たく返す。

「ん、ところでよ。他の連中とか呼ばなかったのか？」

雅がビーフシチューの肉を口に入れつつ尋ねる。

「おお、花鈴はバイト、久美は旅行、香苗は生徒会企画のクリスマスイベント、影薄はどうでもよかった。」

「ああ、ならしうがねえな。」

「え、あの、影薄って……。」

「アルス、そこは黙ってよ？」

アルスはコタツから出たことによって人格が元通りになったため、ツッコミ役が三人に増えた。

そして影薄に関してはノーコメントという雅は案外大物かもしれない。

「ん、にしてもホントおいしいわね。あのマサー人で作ったなんて思えないわ。」

「それどういうこったファイファイ。」

さり気なく毒吐いたファイファイをジロつと睨む雅。

「ん、ホントは私もお手伝いしたかったんだけどね？」

「……………」

涼子がニコニコ顔のまま小首を傾げると、雅とスタイルは顔上半分に影を落として沈黙した。

「？ マサさん？ スタイル？」

「どしたのー？」

そんな二人を見て訝しげに思ったのか、アルスとクルルが二人の顔を覗き見る。クルル、口の周り拭きなさい。

「……………姉さん、俺ら普段から姉さんに世話かけっぱなしだから今回は俺らに全部任せてくれ。」

「せめてもの恩返しというわけで…はい。」

「あらそうなの？ でも悪いわ。」

「いや頼むからじつとしといてくれお願いだから。」  
「お願いします。」  
「ん〜、しょうがないなあ」

何故か半泣きな二人に対して全く気付いていない涼子はクスクス笑った。

「リュウくん、ラーメンおいしい」  
「あ、そう。まだ食うか？」  
「うん！」

で、どこ吹く風という風に龍二はクルルの空っぽの丼にラーメンを追加した。だからクルル口の周り拭きなさい。

「えー……龍ちゃん、私ピーマン嫌いなんだけど……。」  
「ダメ、食べなさい。」  
「え〜？」  
「食べなさい。」  
「食べる姉さん。ピーマンにはビタミンAとCが豊富なんだぞ？」  
「……はい。」

お母さん肌な龍二と、意外と博学な雅に言われて渋々という風にラーメンの上に乗ってるピーマンを口に運び、ニヤンニヤン食べる涼子。行儀悪い。

「……リョウコさんって、精神年齢いくつなんですか？」  
「お前と同じくらい。」  
「えう!?!」  
「ま、つまりバカってことね。」

「……………ファイファイ？」

「ファイファイちゃん？」

「え、ちよ、二人ともちよっと待ってそれ殺虫剤いやあああああ  
あああああ！！！！？？？」

「ファイファイ……！！！！？？」

スタイルが叫ぶ中、静かに怒ったアルスと涼子の手によりファイファイ  
はとんでもないことになりました。

「マサくん、おかわり」

「……………あ、うん。」

全く気にせず、無邪気に笑いながらビーフシチューの空の器をクル  
ルは差し出す。だから口の周り拭け。

「さて、メシも終わったところで。」

平和で楽しい食事も終わり、龍二はクルルの口周りを拭き、食後の  
余韻に浸りつつ切り出した。

「そんじゃそろそろパーティーの目玉といこうか。」

「パーティーな。それだと人の名前だが。」

取り仕切る龍二に爽やかなツツコミを入れ、呆れる雅。

「よし、皆持ってきたもん出せー。」  
「……はい。」  
「？」 何だ？

元気よく返事する三人娘に、雅は疑問符を浮かべた。

「ほら。」

【コト】

「はい。」

【コン】

「よいしょ。」

【ポス】

「そらよ。」

【トン】

上からフィフィ、アルス、クルル、龍二、がそれぞれ色鮮やかな紙に包まれた物を取り出した。一つ一つの重さは音で知るべし。

「……これは……まさか。」

「そ。プレゼント。」

「ああ、プレゼント交換ね。」

「ご名答。」

音楽の中、隣の人に持ってきた奴回して、もう一人隣から渡されて、それも回してまた渡されて、そして最後に音楽が止まったら持つてる物がその人のプレゼントというよくあるゲームである。

「…何でお前ら、俺らがしようとしてたイベント知ってたんだ？」

「気合と根性で。」

「答えになってねえ。」



そこは“勘”とでも言っておけばいいのに。

「まあいいじゃんいいじゃん。お前らもさっさと出せよ。」

「……はいはい。」

もうどうにでもなれという感じに、雅は懐から掌サイズの紙包みを取り出した。

「プレゼントは五百円内だったよね？」

「……あの、それ金額内に入る大きさですか？」

細長い包みを取り出したステイルは、横で体ほどの大きさのある包みをドデンと出した涼子に静かに言った。

「よおし、じゃ回すか。」

「で？ 音楽何にするの？」

「あ、それが。」

フィフィに言われて思い出したように掌を叩いた。

「やっぱりクリスマスっぽい曲でいいんじゃないか？」

「うし、じゃこれだ。」

そう言っつて龍二が取り出したのは、一枚のCD。

「？ 何の曲だ？」

「中島みきの『うらみ・ます』。」

「とりあえず怨まれる。」

雅はごく当たり前のように聞いてごく当たり前のように答えられてごく当たり前のようにツッコんだ。

「何でクリスマスにんなくっらい曲聞かにならねえんだよ。」

「じゃ他に何がある!？」

「そんな『マジで!？』的な顔で言われても俺はお前という人格を疑わざるをえない。」

痛いところ突かれた。

「ん、まあアメリカンジョークはこんくらいにしようか。」

「どの辺がアメリカンジョークなのか五百文字以内で答える。」

「とりあえず『赤鼻のトナカイ』やろうか。」

龍二は雅をごく自然に無視した。

「よし、じゃミュージックスタートよ!」

「リョウコさん、何でそんなテンション高いんですか？」

「いつものことですよ、アルス…。」

意気揚々と涼子がどっから出したのかCDコンポのスイッチを入れるのを、半ば呆れたように見ているアルスとスタイル。

そして鳴り出した音楽。音楽が鳴ると同時に回りだしたプレゼント。グルグル回るプレゼント。龍二は隣の雅から受け取ったプレゼントをアルスに投げつけた。

「いた!？」

さらに回ってきたプレゼント。そして龍二はさらに投げつけた。

「みぎやー!？」

さらにさらに回ってきたプレゼント。龍二はそれをアルスの顔面に叩きつける。

「ぴう!？」

さらにさらにさらに回ってきたプレゼント。龍二は今度はアルスの後頭部をグーパンチ。

「ぎゅ!？」

さらにさらにさらにさらに回ってきたプレゼント。龍二は今度はふんがむんが。

「リュウジさああああああああああああん!!!!!!!!!!

」

「あ、怒った？」

「当たり前だボケ。」

結局、アルスがキレて怒鳴ったところで中断した。

気を取り直して再チャレンジ。アルスは今度は理不尽な攻撃を受け

ないよう涼子と位置を交換した結果、何事もなくプレゼント交換は終了。アルスは「何でボクだけ…。」とブツクサ言っていた。

「よおし、じゃプレゼント開けてみましょう。」

いつの間にか涼子を取り仕切るようになっていたが、そんなことで渋る龍二じゃないのでイソイソと包みを破っていく。

「わーこれかわいいー！」

「あ、私ね。」

「……リヨウコさんらしい。」

クルルがもらったのは身の丈ほどあるでっかいティンベア。それを見て苦笑するスティル。その後、持ち上げてペチャンとぬいぐるみに負けたクルル。

「え、これは…。」

「あ、私のー」

「……あの、龍二さん」

「交換せんで。」

そしてクルルからのプレゼントをもらったアルスは、手にした交通安全のお守りを龍二に差し出して断られた。何故お守りがプレゼントなのか。それは一重にクルルの優しさである（ホントは買う物に悩んでる所を偶然お守りが目に入ったんでそれにしただけ）。

「わ、何これ!?!」

「ああ、私のですね。」

「……………ステイル、何でコレなんだ？」

「いや、心惹かれたというか……………」

「……………」

フィフィに渡ったのはステイルのプレゼント。その正体は先端に丸い鉤爪が付いた子供用のマジックハンド。雅はステイルの感性も疑い始めた。第一フィフィには大きすぎて持てません。

「お、これは何だ？」

「あ、ボクのです……………ど、どうですか？」

「おもしろみも欠片もねえが、これは純粹に嬉しいかもしれん。」

「……………最初の方は余計です……………」

アルスのプレゼントは、商店街にある服屋『Happy Happy』で購入した黒いキャップ。早速龍二は被ってみた。何気に喜んでいた。

「……………これは？」

「あ、それ私の。どうよ？」

「いやどうよって……………これどうしろと？」

フィフィからのプレゼント、ヒマワリの種が詰まった袋を貰ってどうしようか首を傾げるステイルなのであった。ハムスターステイル誕生。

「あら、これはまたシンプルで可愛いわね？」

「…………俺のだ。」

「へえ、ありがと雅」

「……………あ、ああ。」

照れて顔を赤くする雅に、涼子はもらった若葉色のハンカチを手にながらニツコリ笑った。雅はますます赤くなった。シスコンである。

「…………で、お前のなんだけど……………なんだこれ。」

「お前の成長を願って。」

「これ俺に回ってくるよう仕向けたのかお前？　つか俺は絶対成長せんぞコラ。」

そして雅がもらった物。それは龍二が吟味して買ってきた、上質な紙を使った高級ハリセン。ツツコミマスター目指して、いざ夢に突き進め。そういう意味合いが込められた代物である。

「んなわけあるかい。」

見事なツツコミである。

「じゃ最後にエル。お前にもプレゼントだ。」

『……………何だこれは。』

「砥石。」

『お前はあれか？　私を某狩猟ゲームの武器として見てるのか？』

「うっん、包丁。」

『お前なんか呪われる。』

とゆーわけで、エルのクリスマスプレゼントは砥石となりました。

「さて、では最後。」

「……これ終わったら帰れよ。」

プレゼント交換も終わり、パーティ最後のイベント。雅は何かちょっとげんなりしている。

「最後と言ったら……。」

「最後と言ったら？」

涼子がメチャクチャキラキラ目を輝かせ、アルスが期待に満ちた顔で聞く。

「最後つつつたら……。」

ゴソゴソと龍二がコタツの中を漁る。

「クリスマスケーキだろ。」

「どっから出してんだ。」

ドドンとテーブルの上に置いたのは、ブッシュドノエルと言われている大きい丸太型のケーキ。ベースはチョコクリーム。上には砂糖

菓子のサンタや雪だるまやら。

因みに雅のツツコミは総無視。

「わはー！ おつきー！」

「え、これリュウジさん手作りですか!？」

「うんにゃ、買ってきた。」

ズコーっとこける龍二と涼子以外。

「だあってめんどいもんよケーキ焼くの。」

「……つかこれどこの？」

「駅前のケーキ屋。」

「マジ!？」

さすがの雅も度肝を抜かれた。

そのこのケーキ屋は人気雑誌のランキング一位に輝く、超有名店。当然、客足は絶えず、クリスマス等の時期になると予約しない限り絶対買えないと言われている。おまけに値段が高い。

「お前、もしかして予約してたのか？」

「アホか。あんなケーキワンホールで干なんぼする奴なんか買ってもらえっか。」

「……じゃ何で。」

「店長脅した。」

「うん聞いた俺が間違っていた。」

あの龍二が見栄はって高級ケーキをかうような性質じゃないことは理解していたがまさか脅すとは思ってなかった雅であった。



「まあいいや。とりあえず切り分けるから皿出せ皿。」

「「はい」「」

「は、はい。」

輝かんばかりに無邪気な笑顔をしながら皿を差し出すクルルと涼子、そしておすおすという風に差し出したのはアルス。

「サクランボ乗ってる奴にしてね。」

「私はどれでもいいです。」

「……俺も。」

図々しく注文するフィフィと、謙虚な雅とスティルであった。

パーティの醍醐味の一つであるケーキを、皆おいしくいただきました。

「「かりやあああああい!!???」」

「誰だ、二人のケーキにカラシ入れた奴。」

「百パーセント間違いなく明らかに圧倒的にお前だ龍二。」

アルスとクルル以外。

〔夜中〕

「んにゃ……みゆ。」

「スー……。」

「クピー……。」

夜中、雅の家リビングにて。いろいろ騒いでさすがに疲れた三人娘は、そのままリビングでコロリと横になってすぐに寝息をたて始めた……ので、しょうがないからリビングに布団をしいてそこに寝かせてあげ、龍二達は一泊することとなった。

深夜だからか、リビングには三人それぞれの寝息のみしか音がせず、とても静かだった。

【カチャ】

「……………うしうし。寝とる寝とる。」

そんな中、リビングの扉を開けて様子を見てから小声で呟く影がつ。

『リュウジ、起こすなよ?』

「当たり前だつーの。」

ランプのわずかな明かりに照らされ、龍二の顔が明らかになった。後腰にはエル。

因みに、肩には白い袋が担がれている。

「え〜と〜……………」

アルスの枕元にしゃがみ込み、袋を漁る。

「……………あつたあつた。ほれ。」

そして、寝てるアルスの顔の横に赤い紙に包まれた四角い箱を一つ置いた。

「そんでほれ。」

今度はクルルの横に、同色の紙だが細長い箱を置く。

「よいしょ。」

最後、フィフィの顔……………じゃなくて体の横に、フィフィの体分ある箱を置いた。

「……うし。」

三人置いたのを確認し、満足気に頷く龍二。

三人のことだから、起きたら大騒ぎするだろう。何て言っただけで一番欲しがってたのが箱の中に入っているのだから。

『…にしても、今さら思うのもなんだが貴様どうやって三人の欲しい物を？』

「ん、こないだ夜中に三人が欲しい物を語り合ってたのを偶然聞いた。」

『……何ともまあ、タイミングがいいな。』

「まあな。」

一人と一本はそんなことを話しながら、リビングを後にするべく扉を開いた。

「あ、そうそう。」

そして扉を閉める瞬間、ふと思い出したように言って顔だけリビングに出した。

「三人とも、メリクリ。」

略したら台無しな言葉を、聞こえていないであろう三人に向けて言

つてから静かに扉を閉じた。

メリー・クリスマス。

第五十二話　メリクリ（後書き）

どうも。何で今年ギリギリでこんな話載せたかったのかというと、

載せたかったんです。どうしても。

まあそんなわけで！！

第一百五十三の話 今年一年、ありがとう(前書き)

ギリギリ更新できました！

第一百五十三の話 今年一年、ありがとう

十二月三十一日……そう、年末である。

町は買い物客で賑わい、正月用にいろいろ買い揃えようとしている。

しかし、何と言っても一番ベタなイベントが待ち構えていた。

そう、それは年末の大掃除。

立つ鳥後を濁さず、というが如く、家中隅々まできれいにして新年を気持ちよく迎えようというめんどうくさい教えが世の中にはある。メンドくさいので、作者は二十八日に全て終わらせました。まあ作者の事情はゴミ箱にポイしよう。

そしてここ、龍二郎でも、今まさに騒動が始まるうとしていた……。

〈龍二視点〉

「おーしお前ら整れーっ!」

「ふぁーい……」

「シャキッとせんかーい!!」



「ふあ〜い…。」

「ばんごー!!」

「い〜ち。」

「に〜い。」

「さ〜ん。」

「……。」

「おはよーございます!!!」

朝の八時。昨夜何かアルスとクルルが喧嘩してたらしく、おかげで寝不足の三人は寝ぼけ眼のまま整列、テンション高い俺はそんな三人に向けて三本指を立てて氣を集中、龍糸貫を放とうとした瞬間目が冴えたのか元氣よく挨拶。

何故にこんなテンション高いのかと言うと、ズバリ、年末の大掃除だ。

いつもは一人で全てやるんだが、せつかく人数増えたんだ。有効活用しねえとな。

「さて、ではこれより昨日言った年末の大掃除を始めたいと思います!!」

そして今の俺らの格好は、頭に白い頭巾を巻いていかにも掃除ムードである。

「で、まずはそれぞれ役割分担していくぞ。」

「はい。」

返事はよし。

「じゃアルス。お前は風呂掃除と便所掃除。」  
「は、はい！」

手渡したのは、柄付タワシ。本来なら手掴みなんだが、うちにはこれしかないからご愛嬌。

「次、クルルは窓拭きと和室の掃除。」  
「はい！」

クルルにはバケツと雑巾を渡す。

「フィフィはアルスかクルルのアシスタント。」  
「任せなさい！」

体が小さい分、こういう役割に回すしかない。

「で、俺は台所とリビングを。」

最後、俺はスポンジを握る。

「終わったら俺に報告。また、何かあったら呼ぶように。わかったか？」

「「「イエッサー！！」「」」

意外な返事に俺ビックリ。

「じゃ、解散！」

いぎ、それぞれの役割の場所へ！

まあそんなかつこいいこと言い終わって、さてさつさと掃除掃除。台所なんて軽く五分もかからんだろうから、早く終わらせてあいつらの様子を見に行くでしょう。

「フッフフーン」

まずはシンクの汚れを洗剤の付いたスポンジで力強く擦り、汚れを落としていく。若干汚れで白くなっていたシンクは、見る見る綺麗となっていく。

「リュウジ〜？」

「？ どうしたファイファイ？」

シンクを洗ってたら、ファイファイがスイ〜っと飛んできた。

「ちょっとアルスがわかんないところあるって。」

「アルスが？ ……わかった。」

あいつ風呂掃除結構やってるからわからないことって早々ないと思うんだがな？

まあそんなことは胸に秘めて風呂場へ。そこでアルスは、こっちに背を向けながら腕組んで頭傾けていた。

「おいアルスどした？」

「あ、リュウジさん……実はここの洗い方がわからなくて。」

「どこ？」

指差されたのは、排水溝……何で？

「普通にこれ、蓋取って髪の毛取って洗えばいいじゃないの。」

「え、取れるんですかこの網？」

「考えつけよこれくらい。」

「す、すいません……。」

申し訳なさそうに顔を赤くして謝る。ま、しゃーねえなこんなところ、滅多に洗わねえし。

「またわかんなくなったら呼べよ？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

「ごめんねー。」

とりあえず風呂場は再びアルスとフィフィに任せ、リビングに戻る。う……としたが。

「………そっぴゃクルルの奴はどうしてんだろーな？」

『窓拭きしてると思うが。』

言い忘れてたが、エル俺の腰。

「……どれ。」

様子を見るため、ドアをちょっと開けてクルルの様子を見てみた。

「え〜っと、これを窓の吹きつけて磨けばいいんだよね？」

手にしたスプレー缶を顔の前に寄せて確認する。

【プシュー】

「ぶっ!？」

あ、うっかりトリガー押して自分の顔に吹きつけやがった。

「びええええん!! リユウクー〜ん!!!!」

『……………助けないのか?』

「自業自得だから無視する。」

目には入っていないようだしな。

「ううう……………負けないもん。」

何にだ。というツツコミは飲み込んでおいた。

とりあえず、気を取り直してスプレー缶を窓に向け、さつきみたいにトリガーを引いてシュツシュと吹きつけていく。洗剤はメレンゲのように泡立ちながら、窓からゆっくりとすべり落ちていく。

「……………。」

それをじっと眺めていたクルルは、おもむろに舌を出して泡を

「チエストー。」

「ぴゃあ!？」

舐めようとした瞬間、俺のスライディンググキックが華麗に決まって阻止できた。

「何しとんねん。」

「だ、だって……おいしそうだったから。」

「食ったら腹壊すぞ。そんでまずいぞ。」

『食ったのか貴様。』

うん。でも腹壊してない。普通の奴が食ったら多分腹壊す。

「とにかくもう変なことすんなよ?」

「はい…。」

拗ねた顔のまま洗剤の上をゴシゴシと擦っていき、窓を磨いていくクルル。

「んじゃ俺も仕事に入るか。」

『ああ。』

俺はエルと一緒に台所に入って掃除に続きを始めた。

〜数分後〜

「…………お水替えてこようつと。」

床磨きをしていたクルルが、汚れた水を交換しようとして重いバケツを持って立ち上がった。

「んしょ、んしょ…………。」

一生懸命バケツを持って洗面所へ向かうクルル。

…………。

何か不安。

「わひゃあああ!?!」

【バシャーーン!!】

…………。

『…………コケたな。』

「コケたな。」

不安の中。

…わかりきってるが、一旦ガスコンロの周りを拭くのを中断してクルルがいるであろう廊下を覗き込んでみた。

「えううう……どうしよおおお……。」

水が廊下に広がって見事な水浸しとなっている中、クルルが半泣きのまま座り込んでいた。

ん〜、助けてやってもいいが、この状況をクルルがどういう行動を取るのか……見ててやってもいいだろう。

「……………」

とりあえず泣くのをやめて、ゆっくりと立ち上がって洗面所へ歩いていく。しばらくすると、緑色の雑巾を手に戻ってきた。

なるほど、まずは拭くわけだ。当然だよな。

「……………よしよ。」

膝について雑巾で水をかき集めていき、手前へ寄せていく。そしてクルル自身も少しづつ後ろへ下がっていき、水の被害を拡大させつつやがて洗面所のところまで行き、アルスは今トイレを掃除しているため誰もいない風呂場へ水を持っていき、丁寧に水を風呂場のタイルの上に流していった。

「よし……！」

やり遂げた顔で汗を拭うクルルの顔は、まさに爽やかだった。



「あ、そうだバケツの水……………ん、持ち上げて入れるのめんどくさい……………」

少し考えた後、洗面所から顔を出して周囲を見回す。俺は咄嗟にリビングに戻り、隠れた。

「…………リユウくん、今掃除中のはずだから聞こえてないよね。」

いえ、丸聞こえです。

「よし……………」

そしてバケツを玄関に持っていき、玄関前に置いてあるお中元でもらったダンボールの蓋を開けた。

「そーれ、キレイなお水ー」

中から取り出したのは、ミネラルウォーターの一リットルペットボトル。その蓋を開けて逆さまにして、バケツに一気に注ぎ込んでいく。

「フフーン　　らつくちくん」

……………。

「く〜ルル〜？」



「まったく……お前は余計な問題無駄に増やしやがって。」  
「うう……ごめんなさ〜い……。」

大掃除も昼過ぎに無事に終わり、その後はおせち作ったり（クルルつまみ食いしようとしたのでチョップかました）して今は夜。今年残されたわずかな時間をまったり過ごそうと、俺らはおコタに入つて年越しカウントダウンテレビを見ていた。

そして目の前には、年越しには欠かせない年越しラーメンが置かれてある。何？ 蕎麦ちゃうんかと？ なんだよ好きなもん食って年越しの何が悪い。

「……まあいいか。今年も無事に年越せそうだし。」

『そういう時に限って何かが起こるんじゃないのか？』

「うんダメレ？」

『スマン……。』

ラーメンを啜りながら横目でジロリとエルを睨んで黙らせた。たまには何も起こらないでいいじゃん。

「……あの、リュウジさん。」

「？ 何だ？」

ふと正面にいるアルスが話しかけてきた。因みにおコタに入っているながら正気を保っていられるのは目の前にあるラーメン食うのに夢中だから。食い物あつたら平気てアアタ。

「今年が終わるっていうのは、一年過ぎるっていうことですよね？」

「ん？ ……まあそうだな。」

それは間違いないが、だから何だ？

「……………今思っただけですけど……………」

ボクらが出会ってから、一年過ぎようとしてるんですよね？」

……………あそうか。

「そっぴやお前ら来たのって結構前だったよな？」

「はい……………何だか、この家でお世話になって一年過ぎるって思うと妙に切なくて……………」

「そうだね……………」

「……………そうね……………思えば、一年いろいろあったわよね。」

「……………」

一年……………そっぴや、今年一年は今までと何かが違う。

去年の今だと、一人で学校行って一人でメシ食って寝て、クリスマスとか年末とかではたまに雅達と集まったり、そっぴじゃない時は一人で大掃除して一人で年越して……………一人ばっかだったな。

だがまあ、別に寂しいとかそんなん思ったことはない。そんな時はそんな時で、自分なりに楽しもうといういろいろしたからな。

……………だが、こっぴやって我が家で、それも雅達以外で、クリスマスや

年末を過ごす、ということとはなかった。

つか考えてみりゃ、こいつらがこの世界に来てからおもしろくない日、なんて物自体が存在しなかったなあ。

.....。

「.....アルス。」

「はい？」

「クルル。」

「ふにゃ？」

「ファイファイ。」

「へ？」

「エル。」

『何だ。』

今までと違う毎日を送れるようになったのは、他でもないこいつらのおかげ.....なら、今年が終わる前に、今の気持ちを口に出して言おう。

「今年一年、あんがとな。」

感謝、という言葉で。

「「「「「」」」」」」  
「……？ あ？ どしたん？」

何か全員硬直した。

「……あの、リュウジさん？」  
「大丈夫？ 風邪じゃないよね？」  
「病院行く？」  
『ついにイカれたか？』  
「そうかそうかそんなにお前らは死にたいというのならばご要望  
にお応えして」  
「「「マジすんません！！！！」」」」

この野郎ども、せつかく人が感謝してんだから素直に受け取っつけ。

「……ま、いいか。」

それより……。

< さあ今年一年も後残り三十秒をきりました！！ >  
「……あの、リュウジさん。」  
「リュウくん。」  
「リュウジ。」

『リュウジ。』  
「ん？」

テレビの中でカウントダウンが始まると、何かアルスが言いにくそうにもじもじし始めた。

「えっと、ボクから伝えたいことが……。」  
「ん、何だ？」

「……ボク、この一年でリュウジさんに出会えてよかったです。」  
「私も、この世界来てよかった。リュウくんに会えたもん。」  
「まあ、いろいろあったけど悪くないわね。アンタとの生活。」  
『私は……拾ってくれたのは感謝してやろう。だ、だが別に会えてよかったってわけではないんだからな!!』

……

フッ。

「お前ら。」

<五秒前!!-->

テレビの中の女性レポーターが興奮した様子でカウンターのポリユームを上げた。

< 四！ 三！ 二！ 一！！ >

「今年もよろしくな。」

寒い夜、新たな一年が始まる。

そんな中、俺らの家はいつものように暖かった。

今年も、よい一年をすごせますように。

またこいつらと、楽しく暮らせますように。



第百五十三の話 今年一年、ありがとう（後書き）

考えてみれば、この小説ができて長いですね……それが、こんな長いこと続いているなんて、何だか信じられません。

これもひとえに、皆さんの応援のおかげでここまで来ました！  
また来年も、勇者以上魔王以上をよろしく願います！！

では、皆さん！ よいお年を！！

第一百五十四の話 皆で初詣じゃ (前書き)

今年最初の話は初詣です。え？ 遅い？

## 第一百五十四の話 皆で初詣じゃ

（ライター視点）

新年、明けましておめでとございます。元旦、お正月です。

「ん、うまい。」

「おいしいー」

コタツで重箱に入ったおせち料理に舌鼓を打ち、龍二達は正月を満喫していた。

「うん、やっぱり正月はおせちだな。」

「結構いけるわね。この数の子っていうの。」

「プチプチしておいしいです。」

「私クロマメ好きー」

『食えん。』

龍二手製のおせち料理に大満足のアルス達も超ご機嫌である。

リビングは、まったりとした雰囲気満たされていた。

「うーし、正月はいつもより倍にのんびりするぞー。」

「つまり楽しもつってことだね！」

「醤油しょうゆのこと。」

『それはいろいろとまずいだろつ。』

「よくテレビ見てるなお前。」

和やかに食事は進んだ。

「……………だあかあらあああ……………」

「……………」

「何で我が家でやってんだよ!!???」

言い忘れ。現在地、楠田邸。つまり雅の家。クリスマス同様、ちゃつかり龍二達は雅の家のコタツに居座っていた。ぶっちゃけた話不法侵入真っ只中である。

「あ、そうだった。」

いっけねー、と後頭部をかきながら、全員コタツから出て雅の前で正座する。

「……………」

「あ、こちらこそおめでとついでいます。で誤魔化そうとすんじゃ

ねえよ。」

残念。龍二の『新年の挨拶で適当に誤魔化しちまえ作戦』失敗。

「いつからいた？」

「話すよ」

「三秒で済ませろ。」

前回よりも雅は素早く、かつ的確に龍二の言い分を遮った。

「え〜っと、リュウジが雅の家の屋根に乗って一部を」

「よしそっから先は大体理解できたとゆーわけで警察行けそしてできれば屋根直してから死んでください。」

前回よりきついツッコミが大炸裂した。

「ちょっと！ 私まだ説明中でしょ!？」

「だからそっから先がわかるんだっつーの。」

「じゃあ違ってたら？」

「百歩譲ってそれはない。」

「そ、そうとは限らないでしょ!？」

「そうとしか言えないんだっての。」

「…ホントに違ってたら？」

「ハッキリ言っって違うなんてありえない。」

「……………」

「……………」

「…………リュウジ、言っっちゃっていい？」

「いいぞ。」

「いいんかい。」

「屋根壊しました。」

「テメエ妖精コノヤロウ。」

「わ、私じゃないわよリュウジよー!!」

「罪を認めるフィフィ。」

「こおんのクソリュウジー……!!」

さて、誰が何を言ったのでしょうか。

「あら龍ちゃん達じゃないの。明けましておめでとう」

「おお涼子さん。明けましておめでとうさん。」

「あ、おめでとーございます。」

「おめでとー!!」

「おめでと。」

『うむ、おめでとー。』

リビングに入ってきた涼子は龍二達の存在を難なく受け入れ、新年の挨拶を交わした。

「あれ、皆どうして」

『明けましておめでとーございます。』

「へ？ え？ あ、はあ、お、おめでとーございます……?」

続いてステイルも入ってきて、早速雅が疑問に思ったことを口走ろうとしたので龍二達は即挨拶。川のように流されたステイルは訳もわからず挨拶を返して誤魔化された。

「……で？ 今日は何なんだ。」

もう何かいろいろ諦めた雅は、毎度の如く髪を掻きながら聞いた。ハゲるよ。

「うるさい。」

「誰に言ってるんだ？」

「……いや、何でもねえ。それより用件言え。」

神たぐしにツッコんでますますストレス溜まる雅でした。

「うむ、今日はだな。」

【スポ】

「行こうぜ。」

「どこにだ。」

龍二達は今度は門松（を模した帽子）を被って主語を省略しつつ爽やかな笑みを浮かべて親指を立てて雅の鋭いツッコミが炸裂した。

「つか何で門松頭に被ってたんだ。」

「え？ ショウガツってこれを被るんじゃないんですか？」

「誰から教わったお前ら。」

「フフフ、俺だ。」

「バカじゃねえの？」

純粋なアルス達に間違った知識を教え込んだ龍二（含み笑い付き）をバツサリと切った。物理的には無理だから言葉で。

「で？ どこ行ってくて？」

「決まってるんだろ？ 初詣だ。」

「……ああ、なるほど。」

「ボクらハツモウデってよくわからないんですけど、何事も経験だつて言われて半ば強制的に……。」

「……ドンマイだなお前ら。」

初詣。年が明けてから神社に参拝し、一年の平安と無事を祈る行事。年が明けてから朝や昼に行く人も多いが、中には夜の十二時、ちょうど年が明けてから初詣をする人も多い。

「あらちようどいいじゃない。私達も初詣行こうとしてたのよ。」

「私も興味ありますから。ハツモウデ。」

「よし決まり。じゃ行こうや。」

「待てっつの。」

何だかトントン拍子に話が決まっていき、一人置いてかれる寂しさを覚える雅。

「んだよ文句あんのか？」

「いや、せめて準備くらいさせろよ。姉さんが着物着たいって言うてるし。」

「キモノ？」

着物にアルス達が反応した。

「キモノてなあに？」

「ん、着る物。」

「まんまやんけ。」

最近関西弁ツッコミのキレが増してきてる気がしないでもない。



「じゃあ皆も見る？ 着物。」

「え、いいんですか？」

「ええ あ、何なら私のお古があるけど、着てみる？」

「着たーい！」

「…どんなのかわからないけどね。」

ご機嫌な涼子に連れられて、アルス達はリビングを出る。

「…着物ねえ。」

「？ 何だ？」

取り残された男性陣は、龍二の呟きに反応した。

「いやさ、俺毎年見てんだよね。香苗達の。」

「うん。」

「それが何か？」

「綺麗すぎて目が痛くなるから嫌いなんだが。」

「……………」

全世界で着物を愛する方々に謝れ、と思った雅であった。

さて、所変わってここは天分町で唯一の神社、『あまかわ天川神社』。想像通り、多くの人でこった返していた。

「うひゃあ、やっぱスツゲエなあ。」

「すごいですね……人だらけです。」

「わひゃ〜……びっくり。」

「シブヤほどじゃないけど、すごいわねこれ。」

『…また私はこんな羽目に……。』

龍二達は神社の入り口にある鳥居の前に立ち、アルス達は辺り一面、人、人、人だらけのこの光景に圧倒されていた。エルは渋谷の時と同じようにイン・ザ・スポーツバッグ。

「毎年これくらい集まるのよ？」

「あんま人ごみは好きじゃないけどな。しょうがないし。」

「にしてもホントすごいですね。」

スタイルは除いて、楠田姉弟はもう慣れっことでも言うのが如く平然としていた。

「じゃあよ、ここで久しぶりに一発『龍爆陣』使ってもいいか？」

「絶対するな。マジでするな。」

意味もなく全周囲破壊技を繰り出そうとした龍二を雅は表情を変えないまま全力で止めた。

「まあまあ、半分冗談だ。」  
「半分やる気だったんかい。」  
「さてそれより。」

相変わらずのスルーの方向に龍二は持っていった。

「香苗達がもう来てるはずだが…。」  
「あれ？ 呼んでおいたのか？」  
「おうよ。新年の挨拶ついでに。」  
「……そこら辺は抜かりねえのな。」  
「気ニシナイ。」

今年初の名言。

「リュウちゃん。」  
「っと、噂もすれば。」

振り返れば、手を振りつつ駆け寄ってくるお馴染み女性メンバーズの方々とプラスアルファ達。

「やつほ、お待たせ！」  
「ホント待った。死ね。」  
「え、新年早々毒！？」  
「ど、ドンマイですカナエさん。」  
「そりゃあんだだけ時間かければな。」  
「そこは黙っておこうよカルマくん。」  
「……。」

一着の香苗に挨拶の代わりに爽やかに毒を浴びせてショックを受けさせた龍二。香苗の後ろについてきた双子sも相変わらずである。

「すまない、遅れた。」

「ごめんごめん。」

「……。」

香苗達に続いて、花鈴、久美、リリアンも到着。全員集合した。

「まったく遅えつてのオメエら。」

「ごめんって。準備に時間かかっちゃってね？」

若干怒ってる龍二を花鈴は苦笑しながらなだめた。

「……ま、いいか。とにかく、明けましておめでとつなお前ら。」

怒りを静めて、微笑しながら新年の挨拶をする龍二。

「うん、よろしくねリュウちゃん」

「よろしくな。」

「よろしく龍二。」

「皆よろしくー!」

「……よろしく。」

「魔王様、よろしくお願ひします!」

「よろしくお願ひします。それとうちのバカなケルマがすいません。」

「え、サラリと毒?」

花鈴達も新年の挨拶を返した。

「あ、龍二……と、ところで、さ。」  
「あ？」

突然、花鈴が顔を赤らめてもじもじし始めた。

「え、えっと……その……。」  
「んだよキシヨク悪い。はよ言え。」  
「……キシヨク悪いって……ま、まあいいわ。」

いつものことだが、ちよっとショックを受けた花鈴であった。

「こ、これ……どうよっ。」  
「どれよ。」  
「……こ、これ……！」  
「どれだっつの。主語言え主語。」  
「……き、着物……どう？」

顔を赤らめて少し顔を逸らしながら小声で言った。

そんな花鈴の着物は、色鮮やかな赤色の生地に白い花模様が縫い付けられた何とも綺麗な物。いつものポニーテールには、ゴムではなく金色の髪飾りが付けられている。

「ん、ああ着物か。」

それを見て感想を言おうとした龍二。

「り、龍二！ あ、あたしのはど、どどどどどだ!？」  
「リュウちゃん、どう? どう?」

が、花鈴を左右から挟む形で香苗達も感想を求めた。

香苗のは白い生地に薄いピンクの花が模様となっている着物。久美のは青い生地に金魚が縫い付けられた着物。二人とも花鈴と同じような髪飾りをつけている。因みに香苗の双子の妹も姉と同様の着物で、見た目からは全く区別がつかない。

「……………」

で、黙ったまま三人の若干後ろで言いそびれた感丸出しのリリアンの着物は、花鈴と同じ赤だが模様が金色の波を縫い付けた物であった。

「うわ……………」  
「……………」

龍二の背後にいる男性陣、雅とステイルは、そんな彼女達の美しさに見惚れ、しばし硬直していた。通りかかった男性達も思わず振り向いたり立ち止まらずをえないくらい。

そんな彼女達に感想を求められた龍二は、

「あ、いんじゃないね？」

若干目を逸らして軽く言った。

「……………そ、そう？　なら、いいけど。」

意外にも毒ではなく、素直な感想を聞いて少し反応が遅れた花鈴は照れを隠すつもりで顔を赤くしながらそっぽ向いた。香苗に至っては「リュウちゃん大好き！」と言いながら龍二に飛びついて殴られ、久美は「え、えっと……………」と花鈴同様顔を赤くして軽く慌てふためいていた。

因みに龍二が目を逸らした理由は照れたわけではなく、目がチカチカするという理由だからである。感想はそれを誤魔化すために言ったのであり、それに気付いたのはスポーツバッグの中に入っているエルだけであった。

『……………我が主ながら、何て鈍い奴だ……………。』

と、小声で言ったと言わなかったとか。

「……………皆さん、綺麗ですね。」

「ホント、キレイだなあ……………。」





「ま、とりあえずお披露目会はこんくらいにして行こうや。」

龍二が先頭に立ち、鳥居をくぐって神社に入った。皆もその後が続く。

ここの神社の敷地は、龍二の家がすっぽり入るほど広い。当然、それだけ広ければ人が大勢入り、広さ関係なく人いっぱいになる。その上、広さもあってか人が多すぎる。

ゆえに、迷子になりやすいので……、

「お前ら、服の裾持っとけよ。」

「はい！」

「……ああ、シブヤのトラウマが……。」

一番危なっかしいアルス達に細心の注意を払う龍二と、

「皆、ちゃんと手繋いでてね？」

「うん！」

「……。」

「ま、魔王さまと手を！」

「……。」

幼稚園の先生のような香苗の手を繋ぐ斉藤姉妹と、その斉藤姉妹に繋がるように手を繋ぐロウ兄弟。因みにケルマが世迷い事を口走ったため、カルマが手に力を入れて砕いた。

「並んでる時は大人しくな？」

振り返った龍二の目に、カルマによって砕かれながらもまだ力強く

握り締められて絶叫を上げようにも痛みで上げれないケルマの顔が入って一瞬でブツ!! と吹き出した。

「? リユウジさん?」

「……わり、何でもねえ。」

止めることなく、龍二は笑いを堪えて正面に向き直った。

とりあえず、ケルマの手の犠牲以外は何事もなく列は進み、龍二達の番が来た。

「じゃ、願うか。」

「えっと……どんなことでもいいんですよね?」

「ま、初詣だから何でもいんじゃない?」

「わかりました。」

「いっぱい願っちゃおー!」

「一個だけにしときなさい。」

テンション高いクルルをフィフィが嗜める。

「ほれ。」

【チャリンチャリン】

龍二とアルスとクルルとフィフィ（ポケットから）は一斉に五円玉を投げ込み、天井に吊るされた鈴を鳴らす。

「よー!」

【パンパン！】

「その掛け声いらねえ。」

雅のツッコミも冴える。

（これからもリュウジさん達と一緒にいられますように。）

アルスはごく普通の願い事。

（皆と仲良くすごせますように。）

クルルも普通。

（後、リュウちゃんとデート）

でもなかった。

（とりあえず、アルスの恋愛成就ってとこかな？）

何も思い浮かばなかったファイファイはアルスの応援。

（私は何もない。今のままでいい。）

エルはスポーツバッグの中で何の夢もない願い事。

（世界の全てをラーメンに。）

龍二は龍二でいろいろと物騒なことを願っていた。

「じゃあ次は私達ね」

「ああ。」

「これを投げ込めばいいんですね？」

次は楠田姉弟達が願う番である。

(今年も全員、健康でいられますように。)

雅はベタな願い事。

(後、龍二の奴がもうちょいどころかもっと大人しくなりますように。)

も一つはベタじゃなかった。

(料理うまくなりますように。)

涼子は神様に試練を与えた。

(涼子さんの料理がうまくなりますように。)

スタイルによって便乗効果。

「じゃ願いますか。」

続いて花鈴。

(どうか、どうか龍二がアタシに………あ、アタシに………す、少しだけ振り向いてくれますように！)

若干へっぴり腰ながら強気な願い事であった。

「はい。」

「ありがとう、お姉ちゃん。」

「………ありがとう。」

「か、カルマ？ 手が使えないから代わりに投げてくださいませんか？」

「無事な手を使えバカ。」

カルマの毒が神様の前で炸裂しつつ、香苗達の番。

(リュウちゃんと幸せになれますように。)

花鈴と違って積極的だ。

(今年も楽しく暮らせますようにー！)

美紀は可愛げのある願い事。

(……………楽しくなりますように。)

何に？ というツッコミが聞こえてきそうな美香の願い事。

(魔王様！！)

ただ頭の中で名前を呼んだだけのケルマ。

(とりあえず隣のバカがもうちょっと黙りますように。)

ここでも毒なカルマ。

「あたし達か。」

「……………そうね。」

久美とリリアンの番。因みにエリザさんは仕事の都合で来れなかったそう。

(神様神様……………龍二に勝つためにも、見守っててください。)

神様に対してまで他力本願ではないところが久美らしい。

(……………／／／／／／／／)

実は着物を着て龍二に見られて恥ずかしいと思っているリリアンは

願い事どころじゃなかった。

「さあて、おみくじだ。」

何事もなくお参りが終わり、龍二達はおみくじ売り場に集まった。

「？ おみくじって何ですか？」

「今年の運勢を占うの。大吉から大凶まであって、大吉が一番よくて、大凶が一番最悪なの。」

「へえ。ギャンブルね。」

香苗の説明に、フィフィが何かいろいろ合ってるようで違つことを言った。

「とりあえず一回百円だな。」

とゆーわけで、各々百円でおみくじを購入することに。

「えつとボクは……小吉？」

「私中吉ー。あれ？ これって私の勝ち？」

「勝ち負け決めるもんじゃないでしょ。私は末吉ね。」

『私はいらん。』

「で、龍二は何？」

キヤイキヤイはしゃいでいたアルス達だったが、

「ん、これ。」

龍二に見せられたくじを見て、止まった。

「だ、大吉……。」

「さすがリユウくん……。」

「まあ大吉は大吉でも、内容を見ないとな。」

そう言ってから、書かれてある内容を読み上げた。

「『待ち人、多分来る』。」

「『うわ、何その適当な感じ丸出し？』」

「『商売、多分儲かる』。」

「『何で多分なの？』」

「『病気、ありえねえ』。」

「『タメ口ですか！？』」

「『『恋愛』』。」

途端、アルス達だけじゃなく花鈴、香苗、久美、リリアンの耳がでつかなくなった（幻覚です）。

「『アンタ鈍いからとりあえず鋭くなってください。じゃないと一生結婚できません。まずは周りの気持ちに答えましょう』？』」

やたら長い上に的確なアドバイスである。



「まあ今んとこ結婚なんて興味ねえし、別にいいか。」

とゆうわけで、このアドバイスは意味なしとなった。

「……何て言うか、あいつらしいな。」

「ですね。」

「雅、ステイル、何だった？」

傍ら、こちらは楠田姉弟達。

「えっと、私は…中吉ですね。」

「やった！大吉！」

「……。」

はしゃぐ涼子の隣で雅は硬直した。

「……ハリセン？」

紙にはただそう書かれてあるだけだった。

「どーゆうー意味だこれ？ え、今年もツツコミだ！……」。これ書いた奴死ね。」

くじに文句を言う雅であった。

「……と、とりあえず……。」

龍一の気持ちを垣間見た花鈴は、ちょっと落ち込みながらもくじを開く。

「え〜……………凶!? ………………じゃない、え、何これ?」

『凶吉』

「どっちよ!?!」

『合体させてみました。つまり人生いいこともあるし悪いこともある。まあ頑張れ。』

「こんなもってもらしい説明いらないわよ!?!」

「じ、じゃあ皆見てみよっか?」

香苗も香苗で何かいろいろガツカリ。

「あ、私吉。ん〜普通かな?」

「わーい、大吉〜!」

「……………大吉。」

「ん、僕は未吉か。」

「よし、僕は……………」

最後、ケルマがくじを開く。

「…え、大凶？」

最も最悪な運勢が出た。

「お前らしいな。」

「う、うるさいよカルマ！ ふん！ 大凶だか大根だか何だか知らないけど、全然恐くなんかないさ！！」

言った瞬間、背後から太ったおばさんが体勢を崩してケルマにそのでかい腹をぶち当て、弾き飛ばされたケルマはまだ見ぬ明日に向かってヘッドスライディング。こうしてケルマは防寒用の焚き火に突っ込んだ。

「……まあいいか。」

それを見て少し呆然としたカルマだが、悲鳴を背後に見なかったことにした。と同時に、『くじびき恐れ。』と、幼いながらに体感したのだそう。

「…全く、龍二の奴は…。」

「…彼らしい。」

「…そう言われたら何も言えないだろう。」

呆れる久美に、リアンはもっともなことを言ってなだめた。

「まあいいか……リリアン、出たか？」

「……出たけど、久美は？」

「あたしは未吉だ。まあまあといったところか……リリアンはどうだ？」

「……大吉。」

「なぬ！？」

素っ頓狂な声を上げた久美。

「え、えと……何て書いてある？」

「……『待ち人、来たる』。」

「く、来るのか……それで？」

「……『恋愛』」

「……』ヤツ。」

「そこで恥ずかしがるか！？ 何だ、何が書いてあった！？」

「……………／／／／／」

「無言で隠すなああああ！！！！」

そこに何が書かれてあったのかは、神とリリアンのみを知る。

「あ……やっぱ人ごみは苦手だな。」

「疲れましたあ……。」

「おダンゴ、おいしかったあ。」

「アンタは食えりや何でもいんでしょ。」  
『私はずっとこのまんまだったがな。』

神社の入り口に集まり、未だに絶えない参拝者の波から逃れた龍二達は疲れた体をほぐすかのように伸びをした。クルルは口に出店で買った団子の串を啜えている。危ないから捨てなさい。

「何か初詣すると今年も頑張れちゃう気がするよね」

「そういえば、そうですね。」

「まあ、そう言われりゃそうだな。」

充実した涼子に、ステイルと雅が賛同する。

「さ、てと。そんじゃこれからどうするの?」

花鈴は若干乱れた髪を整えながら今後の方針を聞いた。

「ああ、雅ん家行くぞ。おせちあるから。」

「やつぱ俺ん家かい。」

龍二の即答にうなだれる雅。脳裏にはドンチャン騒ぎして家中を散らかす龍二達の姿が浮かんだ。

「いいじゃないの。毎年恒例なんだから。」

「……まあ、姉さんが言うんじゃしょうがないな。でもお前ら、ちゃんと片付け手伝えよ?」

『ラジャー!』

気だるげな雅に元気いっぱい返事する龍二達。

「うし、じゃ雅ん家行くぞー。」

「毎年これが楽しみなのよね、久美ちゃん？」

「そうだな。」

「へえ、楽しそうね。」

雅の家で行う今年初めてのイベントに、新参者のアルス、クルル、フィフィ、エル、ステイル、ロウ兄弟（ケルマ頭に包帯）、リリアン、花鈴は内心わくわくしながら龍二達についていった。

やはり、皆で新年をすごすのは楽しい……全員の気持ちは一緒だった。

「あれ？」

「？ リユウジさん？ どうしたんですか？」

が、龍二はふと立ち止まった。

「いや、さあ……」

誰か忘れてね？」

『……………』

全員、沈黙した。

く一方その頃

「チクシヨウ……何で俺だけ……俺だけバイトなんだよおおおおお  
おおおおおおおおお……」  
「うるさい！！ お客様の迷惑だろうが……」  
「す、すみません。」

年中無休の洋食レストランの厨房の裏で、皿洗いをしていた凶田、  
じゃない恭田は大絶叫。店長にこっぴどく叱られた。

第一百五十四の話 皆で初詣じゃ（後書き）

クリスマス同様遅すぎてすいません。

それというのも、昨日までちよいと親戚中回って帰ってくるのはいつつも夜。疲れた体のままちよつとずつ書き進め、その後はチャット。いやチャットする暇あるなら書けつてな感じですが、スルーの方向でお願いします。

とりあえず、ようやく今年最初の更新ができたので遅ればせながら……

皆さん、明けましておめでとつございます。今年もよろしくお願ひします。 byコロコロ



第百五十五の話 モチろん餅つき（駄洒落）（前書き）

サブタイトルにツッコミ入れないでくださいませませ。

第一百五十五の話 モチろん餅つき（駄洒落）

（雅視点）

作者の世間では正月の雰囲気が大分薄れていつている中、俺らの世間ではまだ一月二日。そんな昼の出来事。

「とゆーわけで、餅つきやんぞ。」  
「待てや。」

我が家に集まったのは、ご存知いつものメンバーとプラスアルファ達。そしてどっから持ってきたのか杵と臼を引っさげて龍二がまた突拍子もないこと口走りやがった。

「何がとゆーわけかどうしてそうなったのか、五百字以内で述べてみる。」

「昨日餅つきするって言ったろ？」

「聞いてない。」

「あれだ、お前がウーロン茶飲んで酔って裸踊りした後に頭に赤い配管工のオッサンの敵の人食い植物に頭を齧られてそのままコサックダンスしている時に言ったんよ。」

「ウーロン茶で酔ったっていつ時点ですでにそれ大嘘だろ。」

「バレたか。」

「テメエなめてんのかこの野郎。」

今年もこんなこと繰り返さなきゃいけないえと思うと、先が思いやられる。

「ほらほら、遊んでないで餅つきするわよ?」

「おう。」

「……遊んでなんかないやい。」

「ま、マサさん……キャラが。」

いいんだい。もう何だっでいいんだい。子役にだっで何だっでなっでやるんだい。

「ねね、リュウくん。モチっでおいしいの?」

「ああ。醤油付けたらもうめちゃんこウメエぞ。」

今時めちゃんこっで言っ奴いるか?

「わはー! 楽しみー!」

……はあ。もうどっででもなれ。

「よし、もち米炊けたぞ。」

龍二が未だ蒸気が立ち昇っている蒸籠せいろうを釜戸かまど(龍二自作)から降ろし、臼に入れる。

因みに、最初につくのは龍二で、出来上がった餅に粉をまぶしたり、雑煮などにする役割は花鈴、エリザさん(この日は仕事休み)、香

苗の三人。残った俺らは身の回りの手伝いや見学。

……っーか、何だろう。この何とも言い難い不安は。

「ふん、ふん。」

まず、臼に入った餅を杵でコネていき、米粒を潰して形を整える。

「っし、じゃ始めるか。」

コネ終わり、杵を片手で高速回転させて気合を入れる龍二。危ないからやめろ。

「……おい龍二。先言っておくけどな。」

「？」

まあ、大丈夫だろうけど念押しに。

「楽しようとして気功術とかそんなん使っつなよ？」

「アホか。そんなんで餅がつけるか。」

そりゃそうだけど、言われると何かムカつく。

「リュウくん、頑張ってー！」

「ファイトです、リュウジさん。」

「リュウジ、ファイトー。」

遠くからはアルス達が龍二の応援。いや応援いらねえだろ。

「そんじゃ、トップバッター龍二、いきます。」



『!!!!!!!!!!!!!!!!?????????』

明らか餅つきではあり得ない盛大な爆音が町中、つーか東京中に響き渡り、衝撃波が周囲に伝わる。そして臼を中心に地面に亀裂が入っていき、それはやがて家の塀を越え、遙か向こうにまで伸びていく。その亀裂の上に建っていた家々は崩れ、やがて姿を消した。

『……………。』

明らかな異常現象を目の当たりにし、俺らは揃って硬直。そしてその災厄の原因となった本人はというと、

【ヒュウウウウウウ……………】

「…おーい…。」

自らが作り出した亀裂、もとい崖の底へと餅もろとも落ちていった。

「よーし仕切り直すぞー。」

五分後、何事もなかったかのように龍二が新しい杵と臼と餅を用意し、気合を入れなおす。

……いや、正直言いたくないんだけどな……あの亀裂の壁を駆け上がってきた、その後亀裂を閉じ、被害の合った家を全て戻した。五分で。

省略し過ぎ？ どうやって事態を収めたのか描写しろ？ しろってのか？ あれを？

んなもん龍二だからってことでいいじゃないの。

とりあえず先ほどのことは無かったことにしようということとで全員意見が一致、とゆーわけで改めて餅をつくことにした。だから読者の皆さん、こっから下が今回の話のスタートというわけにしようという？ 頼むから。

「んじゃ今度は手加減しないとな。」

言うな。





「によええ、しゅじい…。」  
「……………」

見学していた俺らは全員呆然と、杵を下ろして一息入れてる龍二を見つめていた。

「出来たぞ。」

「あ、ああ……………」

…………とりあえず、龍二がついた餅を取るために臼の中を覗き込んだ。臼の中は、未だホカホカと温かい湯気を立ち昇らせて、同時にうまそうな香りが鼻をくすぐる。見た目も美しく、透き通った黒いスープにこんがり焼けたチャーシュー、そして金の如く輝く麺……………つて、

「何で餅がラーメンになつてんだよ!?!」  
「知らん。」

ちよつと待て、これはあれか？ 龍二だから成せる技なのか？ それともただすり替えたのか？ すり替えただけなのかあああああああああ!?!

「まあまあ、そう錯乱するな。」

「するわ!?!」

「ジョークだったの。ほら、ここにちゃんど餅があったから。」

そう言っって草むらからズイッと出したのは、出来たての餅が入った

白。

「……お前、すり替えたのか？」

「イエス。」

「……………」

誰かこいつ殺してください。

「おーし、餅出来たぞー。つーわけで、そっち頼んだ。」

「了解！」

「任せなさい！」

出来上がった餅を持ち上げ、龍二はエリザさん達がいるテーブルの上へと運んだ。

「じゃいただきます。」

「やっぱり食うんかい。」

白ラーメンはもの見事に龍二の腹の中に入っていった。二分で早すぎるっつーの。

「では、続きましてー。」

で、食べ終わったら即あらかじめ炊いておいたもち米を蒸籠から白へと移す。

「お前らもやってみつか？」

「え、いいんですか？」

「何事も経験だ。」

見学していたアルス達を呼び、もっともらしいこと言った。お前まずまず保護者に見えてきたぞ。

「じゃまず誰からする？」

「私したーい！」

「…私…。」

「えっと、じゃボク後からでいいです。」

一番やる気満々なのは、クルルとリリアン。アルスとか他の連中は控え目。

「僕は魔王様のおつ」

言いかけたケルマの口にカルマの拳が突入、何かいろいろ折れた音をたててケルマは吹っ飛んだ。

「ん〜…じゃジャンケンして勝った方な。」

龍二が無難な提案をした。いつの時代もジャンケンか。

「うーし、負けないよ！」

「…それは、こっちのセリフ。」

…意外とリリアンで熱いんだな。

「最初」

「っからー!!！」

「待てコラ。」



「？……何してるの？」

「ん？ ああ、餅が臼に付かないように時々ひっくり返さないといけねえんだよ。」

傍らには、水が入ったボウルがあった。手水だな。

つか龍二、お前手水無しでやってたろうが。あ、もしかして左手で音速を超える速さでひっくり返してた？ いや予想だよ？ 予想。でも何かこいつならやりかねん。

「……でも、危ない……。」

「心配せんでも大丈夫だったの。ほら、早くつかんと餅冷めるぞ。」

まあ、正直よほどのことがない限り龍二に杵が当たることはないだろうな。つか杵当たってくらいであいつは死なん。

「…じゃあ、いきます。」

「あいよ。」

「……ん。」

【ダン！】

龍二ほどじゃないけど、かなり強い力が餅に打ち付けられる。

「よ。」

で、振り上げた瞬間龍二が手に水を付けて餅をひっくり返し、パンと叩く。

「ん。」

【ダン！】  
「よ。」  
【パン！】  
「ん。」  
【ダン！】  
「よ。」  
【パン！】  
「ん。」  
【ダン！】  
「よ。」  
【パン！】

……………こいつら、意気ピツタシな上に速え……………リリアンも初心者とは思えないくらい寸分違わずついてるし、龍二もリリアンのタ  
イミングをうまいこと計って餅をひっくり返して叩いてるし。

「…ところで、龍二。」  
【ダン！】  
「ん？」  
【パン！】  
「今度暇？」  
【ダン！】  
「何で？」  
【パン！】  
「……………何でもない。」  
【ダン！】  
「あ、そ。」  
【パン！】

ゆとりがあるから何か会話しちゃってるし。

「うし、出来た。」

出来上がったらしく、龍二が餅をパンと叩いて終了。

「リリアン、初めてのわりには手際よかったぞ。」

「……………ありがとう……………」

思つきし顔逸らしてるからわかりにくいけど、あれ絶対真っ赤だな。

「うし、じゃ次。」

で、さつさとテーブル持つって次のもち米を臼に入れた龍二。もち米どんだけあんの？

「はい！ 私私ー！」

「はいはいクルルな。はしゃぐな。」

元氣一杯に返事したのはクルル。

「はい杵。」

「うんー！」

で、龍二は杵をクルルに渡す

「！ うわ、うあわわわああああ……………！？」

……………ヤバイ、何か持った瞬間重みでフラつき始めたぞ。





「ん……重いよ……。」

「お前普段剣振り回してんだからそんなくらい軽いだろ。」

「だって、私の剣は魔力を媒介として」

「んな豆知識いらんわい。」

新しい杵をフラつきながら持つクルルを見て、俺は魔王ってひよつとしたら誰でもなれんじゃねえの？ って思い始めてきた。

「しゃあねえ……おい、誰か一緒に持ってやれ。」

「あ、じゃあボクが……。」

「よし任せた。」

おずおずと手を挙げたアルスを即任命。お前正直誰でもいいって思ってるだろ龍二。

「二人一緒に杵持てよ。」

「は、はい。」

「よいしょっと。」

左右挟む形で杵を持つ二人。ほら、幼稚園の餅つき大会でよく見る共同作業みたいなもん。いやあいつら幼稚園児じゃないけどな。

「いくよアルス？」

「あ、うん……。」

「……せーの……！」

クルルの掛け声を合図に二人一緒に杵を持ち上げて、



「ほら、今度は気をつけるよ。」  
「はい。」

…とりあえず杵を持ち直して、今度は慎重に持ち上げていく二人。

「……いつせーのー、」  
「でー!!」

そして勢いよく振り下ろす！

【スッポーン】

あ、杵の先抜けた。

「アツパラパー……!!?!?!?!」

あ、今度は当たるまいと離れて傍観していた恭田の股間に杵の先が  
つていったそおおお……。……。

「えええ!?! な、何ですか!?!」

「あら、ごめんなさい。それ修理中だったわ。」

「早く言えよな涼子さん。相変わらずドジだな。」

「テヘ　ゴメーン」

「オウ、ノオオオオオオ……。……。」

……何かもういろいろとヤバイ恭田が地面をのたうちまわってる中、何か和やかな雰囲気か……なんで？

「しょうがない。杵修理してから続きだ続き。」

……もうほっておこう。

「うし、これで全部だな。」

大方つき終わり、龍二は最後の餅をテーブルに置く。

「ほい皆ご苦労さん。」

「け、結構しんどかったです……。」

「楽しかったー！」

「……よかった……。」

一番満喫してたのは、龍二と異世界女性組だった。いや俺らもそれなりに楽しんでたんだけどな？ 一名除いて。

「皆ー。お雑煮できたわよー。」

「焼餅もあるわよー。」

「おお、待ってましたってか。」

テーブルの上の鍋と餅が乗っている七輪の前で、エプロン姿が映えるエリザさんと花鈴と香苗が呼んだんで全員集合。

「はい龍二くん。」  
「サンキュ。いただくわ。」

餅とカツオの香りが漂う出汁を注ぎ入れた我が家の黒いお椀と、香ばしい香り漂う焼餅が乗った皿を順番に配っていくエリザさん。俺ももらってテーブルに座ってさて、いただきますか。

「……おお、うまい。」

「おいしー！」

「……おいしいですね、これ。」

「ふむ、さすがは和風大好き主婦のエリザさんだ。ちょうどいい味付け。」

「やだもつ、龍二くんったら。おかわりまだあるわよ？」

「あ、私もらいます。」

「ステイルはええな。」

「和食気に入ってたんでしょアンタ。」

「……おいし……。」

「うまい！ カルマも食べてみてよ！」

「食ってるっつーの。それよりお前、さっき口殴ったけどどうなんだよ？」

「え、治ったよ？」

「……もうちょい強く殴っておくべきだったか。」

……ホント、寒い冬にこの暖かい雑煮はありがてえ……餅を口に啜えて伸ばしながら、しみじみそう思った。

こうして、皆で雑煮と焼餅を楽しんでから餅つき大会は幕を閉じた。

その晩、我が家の晩ごはんは餅だった（龍二の野郎が作り過ぎたんだよチクシヨー）。

第百五十五の話 モチろん餅つき（駄洒落）（後書き）

餅つき……そう、餅つき！！ 小さい頃、爺ちゃんの前で、近所の人たちを集めて餅つき大会をしたものです。臼に入った餅を父と一緒に杵を持ってペツタンペツタンとついたあの感覚……そして出来たての餅に醤油をつけたり雑煮にしたり、硬くなってからオーブントースターで焼餅にしたり……懐かしいなあ。

とゆるわけで、餅つきの話でした。チャンチャン。

第一百五十六の話 どーゆー一日？（前書き）

久しぶりの珠とのグダグダ会話シリーズ。今回はちょっと違います。



第一百五十六の話 どーゆー一日？

（龍二視点）

『……………』

……………。

『……………ん。』

……………。

『りゅ……………ん。』

……………。

「龍二さん。」

……………？

「……………ん？」

バサリ、と布団を退けてベッドから起き上がる。だが今は朝じゃない。つーか逆。超真夜中で部屋は真っ暗け。

今さっき誰かが呼んだ気がするが誰もいない。つか夢か今の？

「あ、起きました？」

「ああ？」

と思っただら、さっきの声が出た。真横から。つーか今寝ぼけてんだから話しかけんな。

「……………」

寝ぼけ眼のまま、声の方を目をこらしてよく見てみた。徐々に輪郭が露わになってくる。

「……………」

何か白いワンピース着た黒髪ロングの二十歳くらいの小顔の姉ちゃんが、正座していた。

頭に生やした白い猫耳ピコピコさせながら。ケツに生えた白い尻尾フリフリさせながら。

「……………誰やねんお前。」

「あれ、気付きませんか？」

「えーととりあえず凶器になるものはつと。」

「ストップまずは寝ぼけてるんですから眠気を覚ましましょう。」

「おおこんなところに龍刃が。」

「ストップやっぱりまずは落ち着きましょう。」

「さて、三枚に下ろしてやつからそこ動くな不法侵入トンチキが。」

「普通に不法侵入の方がマシですねーってだから待ってください話を聞いてください。」

「はあ？ 最近耳が遠くてのお。」

「年寄りですね。」

「さあ殺そう。」

「そんな『京都へ行こう』みたいなノリで物騒なこと言わないでおくんまし。」

「つか誰やねんお前。」

「それ最初に言いましたよね？ 答えようとしたら何か殺しにかかってきましたから言おうに言えませんでした。」

「……………まあ、三枚に下ろすのは話聞いてからでもいいか。」

「で、まず単刀直入に聞くけどお前誰だ。」

「フフ、当てて御覧なさいな。」

「うんわかってるけどお前の口から言え。」

「何故ですか？」

「気ニシナイつつか単純に答えるのメンドイのと問題形式で質問を質問で返したお前がムカつくから。」

「ひどいですね。」

「昔っから。さ、名前言え。」

「はいはい、わかりましたよー。」

伸ばすな腹立つ。

「私の名前は……時に愛らしく、時にイタズラっ子、そして時に情報収集！ そう！ 誰が隠そう、私の名前は前名ポチヨムキン、現名」

「珠だろ。」

「……………答えちゃイヤン。」

「キシヨイ。」

「ベリーシヨック。」

不法侵入トンキチ、もとい猫であるはずの珠は何故か人型になっていた。

「フーか何なんだその格好は。」

「ええ、スツポンポンはまずいかなあって思いまして近所の家からちよるまかしてきました。」

「そついうこと聞いてねえべ。」

「気ニシニヤイ。」

「そこは猫ん時と変わらんのかな。」

「あなたと被りますから。」

「それより、俺が聞きたいのは何でお前人んなってんだ？」

「フッフ、聞きたいですか？」

「ああ。」

「教え」

「てあげない　とか抜かしたら舌抜いて口んに五寸釘ブツ刺すぞ。」

「リアルに上げつないですね。」

「リアルにそうだな。」

「わかりました。リアルにされたくないのと言います。」

「リアルに言えよ？」

「ええ、リアルに。」

「リアルにな。」

「リアルリアル。」

「リアルー。」

「……これ何だかクセになっちゃいそうですね。」

「今年の流行語大賞はこれだ……じゃない、話せ。」

「はいはい。それは昼間のことです。」

「うんうん。」

「私はいつもの如く家に侵入しました。」

「うんうん。」

「テーブルの上の焼き魚を啜えました。」

「うんうん。」

「バレました。」

「うんうん。」

「逃げました。」

「うんうん。」

「そこでこうなっちゃったんです。」

「わかった。何がどうしてそうなったんか全く理解不能だっというのがわかった。」

「案外頭固いですね。」

「テメエもなこの【ズキーン】猫が。」

「やはり口論であなたに勝てる自信がありませんね。」

「そうか。」

「ええ。」

「まあお前が人になったのはどうでもいいや。」

「どうしてもよくないと思われませう。」

「それで、どうしてこんな真夜中に俺ん部屋で座つとる。」

「華麗に無視ですね。まあここに来た理由は一つです。」

「何だ。」

「さすがにこんな姿で夜中ウロウロしてたら変なおじさんとかに声かけられて結果あーれーみたいになっちゃっ気がしたんでここに来ました。わかりました?」

「さっぱりわからん。」

「わかりやすく言っただつもりだったので。」

「つか“あーれー”って何よ?」

「それを言っただらいろいろおしまいですよ?」

「何が?」

「世界が。」

「そうか、じゃ別に喋んなくていいや。」

「はい。とゆーわけで布団貸してください。」

「何がとゆーわけ?」

「寒いからです。」

「そこら辺で寝とけ。」



「こんなか弱い美女にワンピース一枚着たまま冷たい床の上で寝ろ  
というんですか？」

「とりあえずバカじゃねーの？ と言いたいところだがイエス。」

「ホントSですねえ。」

「できればそのまま凍死してくれ。」

「断ります。」

「さよか。」

「とゆーより人間てホントもろいですね。猫だった時は毛が暖かか  
つたのに。」

「普段毛むくじやらだもんなお前。」

「まあアナタは人間の常識超えていますから人間の範疇に入りません  
けど。」

「よく言われる。」

「だからベッド貸してください。」

「突拍子無く言つものやめい。」

「いいじゃないですか。とりあえず貸してください。」

「無理無理。」

「わかりました、こちらにも手があります。」

「何だ？」

「今ここで襲われるーって叫んで近所をたたき起こして、アナタを犯罪者にします。」

「そうか、ご自由にどうぞ。」

「あれー？ 止めないんですか？」

「今眠いから何をする気も起こらん。」

「叫びますよ？」

「その前に俺はお前を殺す。」

「そつち系の犯罪者になっちゃいますが？」

「精神的に殺すってことでいいじゃん。」

「その前にあなたを社会的に抹殺することも可能ですよ？」

「別にいいや。」

「白い目で見られますよ？」

「そんな時や連中の目抉り出せばいいじゃん。」

「そうですか。アナタならやりかねないのでやっぱ黙っときます。」

「わかりやいい。つーわけで、俺寝る。おやすみ。」

「おやすみなさい。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…モソモソ。」

「何しとん。」

「添い寝です。」

「邪魔。」

「無理です。もう布団の魔力に取り憑かれました。」

「叩き出すぞ?」

「まあまあ。女の子と添い寝だなんてそんなじゃそこらのラブコメで

「もおいそれとできませんよ?」

「寝苦しいだけだろが狭いわうざいわ死ね。」

「あなたはホントラブコメには向いてない主人公ですね。」

「……とりあえずどけ。」

「今日だけでいいですから。」

「……しゃーないな。今回だけだぜ?」

「はいはい。」

「はいは一回。」

「イエスイエース。」

「イエスも一回。」

「そんなこんなで夜は更けていく……………」。

『とゆー夢を見たんですよ。』

「へえ、そりやまた変わった夢だな。」

ある晴れた昼下がりに、久しぶりに珠が家に遊びに来たから膝に乗せてくつろいでいると、珠が変わった夢を見たと言っんで聞いてみた。何で俺視点なのかがようわからん。

『でもあれですね。』

「？ 何だ？」

『たまには夢オチというのも悪くないですよね。』

「うむ、そうだな。」

とりあえず緑茶をズズーっと啜った。うまい。

くオマケく

因みに俺が見た夢は。

『フッフ、来たな。ここが貴様の墓場だ！！ ウツキー！！』

世界の命運を賭け、俺はサバイバルバケツラーメン早食いバトルをした。相手がジャンプして鼻からラーメンを食べている隙に俺は食べながらブレーンバスターをかまして勝った。

因みに相手は猿だった。

第一百五十六の話 どーゆー一日？（後書き）

ね？ 違うでしょ？

文体が。

## 第百五十七の話 雅のツッコミ日和（前書き）

最近雅の出番が多いと思いつつ、今回は雅視点。サブタイからわかるとおり、雅がいろいろとあつて疲れます。ついでに俺はFFディシディアにハマっているいると大変。



第一百五十七の話 雅のツッコミ日和

（雅視点）

「んっふっふ」

「……ふう。」

「はあ……。」

あー、どもです。雅です。只今疲労中です。

「一杯買ったね、雅」

「ああ、買ったな姉さん。」

「ええ、買いましたねリョウコさん。」

疲労の原因は今手元に山のように持たされた紙袋やらの数々。そう、俺とステイルは姉さんの買い物に付き合わされていた。

いや、今日給料日だっというからさ、久しぶりに買い物したいって言い出して。そりゃ久しぶりに姉さんと出かけるんだから、たまにはいいなって思って三人で町に出た……

わけなんだけど、失敗だった。家で英語の宿題の続きやるときやよかった。女の買い物ってのはホント恐ろしいな。渋谷の件含めて。

「？ 二人ともフラフラよ？ 大丈夫？」

「……ああ、大丈夫。」

「そう?」

ホントはしんどいです。この自分の身長を超えるかのような紙袋の山を持つのはしんどいです。手伝わせようと電話したけど用事ならまだしもメンドクせえの一言で断った龍二の野郎が憎たらしいですチキシヨウ。

おまけにさっきは俺とステイルに向かってケバい女とかがナンパしてくるし、姉さんだってチャラチャラした男が言い寄ってくるし……いや、俺はいいとしてテメエら姉さんに近寄んなぶっ殺すぞ。

まあ、それも合わせてすんげえしんどい疲れたダリイ。

「……リヨウコさん、そろそろ帰りませんか?」

「うん、そうね。二人ともしんどそうだし。」

ステイルのナイスな提案に姉さんが頷いて、俺の心は喜びに満ち溢れた。

「あ、じゃついでに最後、映画観て行こうか?」

一気に絶望に変わった。

「え、エイガって何ですか?」

「でっかい画面に壮大な物語が映し出されるの。おもしろいわよー?」

姉さん、それあながち間違っちゃいないけどその説明はねえんじやねえか?

……まあ、映画なら途中で寝れるし、休憩にもなるし……それにスタイルは映画初めてらしいし、別に反対しなくてもいいな。

「じゃあ、映画館行くか。」

「そうね。」

「つーわけで、俺らはこの町で数少ない映画館に入ることにした。

映画館の名前は、『明日のシアター』<sup>あした</sup>。明らかこれ駄洒落入ってるだろ。しかも何もおもしろくねえし。

でもまあ、結構でかい映画館だから客足は途絶えず、おまけに綺麗だから人気がある。

「で？ 姉さん何観たいんだ？」

「これ。前々から観たかったの。」

そう言っつて掲示板に貼られた、今話題のハリウッドスター男女二人が神妙な面持ちで寄り添っている映画のポスターを指差す。

『風と共に猿』<sup>さる</sup>

ポスターとは裏腹にシリアスのクソもねえ。

「これ、三枚お願いします。」

「つてもう購入してるし……。」

「ほら雅、学生証出して。学割なんだから有効に活用しないと。」

「……ああ。」

渋々学生証を出して、姉さんが金を払ってチケットをもらつた。そこにはでかく『風と共に猿』と書かれてあつた。タイトル見ただけで憂鬱になる映画なんて初めてだ。

「つか、どつかで聞いたぞこのタイトル。まずくね？」

「雅、早く行こう？」

「……はいはい。」

姉さんとステイルの後を追ひ、俺らは上映されるシアター目指してエレベーターに乗った。

「へえ、結構話題作なだけあつて混んでるね。」

「話題作か。話題作なのかコレ。」

そんなの全く知らないぞ俺。テレビでも見たことねえし、学校でもそんな噂聞いたこともねえ。なのに何だこの人数。ほとんど満席じやねえかよ。

「……もしかして俺、世間の情報とかに疎いのか？ テレビ見る時間少ないとか。」

「……エイガつて、すごいんですね。」

「そうだな。」

……ステイルの初めて観る映画がこんな人気があるっていうのはいいことなんだろうが、いかんせん、俺は正直な話タイトルから期待できないから複雑だ。

「さ、ポップコーン食べよ。」

「ああ……。」

……ポップコーンをパクつく姉さんを見ててつくづく思う。時々この人の感性が龍二並に訳わからん。

因みに俺らの席は、劇場の若干後ろで画面のと真ん中に位置する場所に座っている。配置的には、右から姉さん、俺、ステイル……まあどうだっていいんだけどなそんなこと。

「ところでリョウコさん。このエイガはどういう話なんですか？」

俺を挟んでステイルが姉さんに聞いた。

「えっとね、この映画は中世ヨーロッパが舞台で、貧しい男性と貴族の女性が互いに恋に落ちるんだけど身分の違いで一緒になりたくてもなれない二人の純愛ラブストーリーなの。」

いきなりベタな内容だな。

「二人を邪魔するのは、ヒロインの親だけじゃなくて、主人公に恋焦がれる酒場の主人、マフィア、自衛隊で、二人はそんな困難を乗り越えていくの。」

はいおかしいとこ早速発見。何で中世ヨーロッパなのに自衛隊が出てきてんのかな？ んでマフィアとか物騒すぎんだろ。どこがどうして純愛なんだそれが。

「へえ……………おもしろそうですね。」

スタイル、おかしいと思え。自衛隊はおかしいと思ってくれ。

「でもやっぱ一番の見せ場は、予告でやってたマフィアのボスが怪獣に変身してヒロインを攫って、それを主人公が変身して助け出すところよ。」

それを聞いた途端、俺の中で純愛ラブストーリーが百万光年離れていく錯覚を覚えた。ジャンル変える。すぐ変える。ウル ラマンみたいなのそっち系に今すぐ変える。

「……………ジャンルが違っのでは？」

「気ニシナイよ。」

スタイルのごもつともな意見を姉さんは龍二の名ゼリフと共にスルーしやがった。

【ブーーーーー】

「あ、始まる。」

ブザーが鳴り響き、騒がしかった映画館が静寂に包まれる。俺らも大人しく座りなおし、暗くなっていく館内で始まるのを待った。

『映画予告。』

あ、まずは映画予告か。

『ジョンソン監督、最新作!!』

……。

『全ての力を注ぎ込んだ、まさに力作!!』

……。

『アカデミー賞、候補外!!』

……？

『全米、第六十四位!!』

……。

『全世界が鼻で笑った!!』

……。

『タイトル未定!!』

……。

『乞おつご期待!!』

「できるか!!」

そんな宣伝だと見る気一気に失せるわ！ 何が狙いなんだこいつ？

「コラ雅、立っちやダメよ。座って。」

「あ、ああ……ごめん。」

咄嗟のこととはいえ、さすがに迷惑だな……。



『その世界に、一人の男がいた。』

予告で、イケメンの日系の俳優が荒れた大地を歩いていた。

『その男には、秘密があった。』

誰にも言えない、秘密が。

その秘密を知った者は、誰一人として無事ではすまない。

その秘密が知られたら、彼も命を狙われて無事ではすまない。

ゆえに、彼はバレないように孤独を選んだ。

ゆえに、いつでも一人だった。』

……。

『しかし、彼が一人の女性を愛した時、その秘密のベールは徐々に脱がされていく。』

……。

『彼は、彼女を信じれるか。』

彼は、世界を敵に回せるか。

それとも彼は……

秘密がばれ……

破滅するのか……。』

……。

『あかしまんたろう明石万太郎監督最新作。』

<この男、実は世界破壊するほどすんげえ力もった超能力者>

あなたは、秘密を解き明かすことができるか。』

「もうバレバレじゃ……!」

すでにタイトルでネタバレになったとるっちゅーねん!! 俺の期待返せコラ!!

「雅!」

「……………じめん。」

姉さんに窘められ、再び着席。

『今夜……………。』

【リン、ロン、ラン、ロン、リン、ロン、ラン、ロン】

薄暗い部屋の中、一人の男が部屋の隅で携帯の液晶画面を見つめる。

……………つか、このどことなく不安にさせる着信音って……………。

『あなたに最大の恐怖が、

【リン、ロン、ラン、ロン、リン、ロン、ラン、ロン……………】

訪れる。』

【ピッ】

<着信ナシ>

「ナシかい!!!!!!」

孤独でかわいそ過ぎて確かに恐れけどさ!?! なんだよコレあの映画のバクリかコラ!?!

「雅!」

「……ごめん。」

また着席した。

『遂に!?!』

お?

『皆様のしつ要望にお応えして!?!』

……。

『あの作品の、待望の続編!!』

……。

『全世界の子供達に送る、最高傑作!!』

……。

『時は近未来、ある平和な都市に起こった、惨劇……』

グオオオオオオオ!!!!

うわああ!? 来るなあああ!!!!

きゃああああ!!!!

た、助けてくれ!! 助けて!!

【グジュ! グチャ!!】

ぐああああ!!!!

ああああああああ!!!!

だ、だずげで……誰が……。

ぎゃああああああ!!!!

【ブチュバチュ!!】

いやあああああああああ！！！！！

世界は、終焉の時を迎える……。

<Z・B・P2>  
ソニー バイオレゾスック

Coming Soon!!」

「エグいわ！！！」

『注：当作品は十八歳以上の方のみご覧いただけます。』

「じゃ何で子供達に捧げる!?!」

これ観てんのか!?! 子供達よこんな血なまぐさいの観てんのかあ  
あああああ!?!?!?

「雅。」

「……悪い。」

着席した。

『この映画は、実話を元にして描かれた物語です。』

あ、ドキュメンタリーとかか？

『それは、肌寒い冬の出来事でした。』

！？ な、何だアレは！？

鳥だ！

飛行機だ！！

いや違う！ あれは……！！

翼が生えたツチノコだ！！！！

<ツチノコが空を飛んだよ>

Coming Soon!!..!!

「超ありえねえ！！！！」

そいつ明らかうそつきだろ！！ ほら監督の名前だつて『宇祖<sup>うそ</sup>月<sup>づき</sup>音<sup>ね</sup>』ってなってるってかそのまんまかよ本名！？ 名は体を現すつてこつうことかオイ！？

「雅。」

「……………」

着席。

『あの感動作、再び…………』

……………。

『彼は全てを失った。』

自分のプライドも打ち砕かれ、

大切な妻をも奪われた。』

……………。



『しかし、彼は諦めなかった。

愛する者を取り返すため、

粉々になったプライドを取り戻すため、

そして、復讐するため。

彼は、リングという名の戦場に、再び立ち上がる。』

……これはボクシング映画か？

『果たして、彼は再びボスになれるのか。』

……は？

<モンキー ザ ファイナル>』

「猿かよ！……！」

パクリだろ！？ これ明らかパクリだろおおおお！……？……？

「雅。」

「……………」

着席。

『世界は二つに分けられていた。』

もう絶対期待しねえ。

『一つは、人間が住む世界。もう一つは、妖精が住む世界。互いに交じり合うことなく、そして互いに知ることなく、世界は存在していた。』

しかし、一人の人間の男が世界を知った時、破滅の時は訪れる。』

……………」。

『少年は、男の野望を食い止めることができるのか！？ 結末は…  
…破滅か、それとも……………。』

「ダブルワールド　～世界の意思～」

あれ、何だまとも

『Not Coming Soon!』

「じゃねえ!!--!」

何で否定してんだよ!?　じゃ予告すんなコラ!!--!

「雅。」

「.....」

座った。

『今度の主役は、何と彼ら!!--?』

?

『疾風迅雷、駿足のSYUN!!』

守るべき者のために、ヒーローのISSEI!!

キレたら恐い、鬼のKOBASI!!

そしてリーダー、不死身のKYOUTA!!』

.....。

『今ここに！ 正義の影薄達が世界のために立ち上が

【ここで映画の注意事項をお知らせします。映画をご鑑賞の際、喋ったり、タバコを吸ったり、前の席を蹴ったりしないでください。ケータイの電源もOFFにしておくようお願いします。また、上映中にカメラで撮影をしている不審な人物を見かけたら、係員の者にお知らせください。皆様が快適な空間で映画を楽しめるよう、スタッフ一同はお客様のために尽くします。では、引き続き予告をどうぞ。】

近日後悔!!!!』

「.....。」

予告中に何か注意事項が流れたけど.....。

「……まあいいか。」

俺の呟きの答えるように、劇場の人達全員が頷いたような気がした。

『最新作!!』

監督誰だよ。

『あの名作が夢の共演!!』

?

『それは、些細な爆発事故から始まった。』

些細な爆発事故なんてこの世にはない。

『彼らは次元の狭間に落ち、そして異世界に迷い込んだ。』

そこで出会ったのは、不思議な外見を持つ少年達。

そんな彼らを巻き込み、青年は少年達の学校でいろいろ壊したりいろいろしてかしたりいろいろハチャメチャ暴れだす！」

……何か龍二みてえだな。

『監督：コロコロ。協力：めろん先生。』

！？

『＜勇魔ゆうま以上日和ひより＞

本気と書いてマジでComing Soon!!..!』

「マジな宣伝すなあああああ!!..!!」

今までで一番盛大であろうツッコミが映画館内で炸裂し、

「お客様、静かにお願いします。」  
「アイスイマセン。」

係りの人に怒られた。

「おもしろかったね、映画！」

「え、ええ……そうですね。」

「……………」

で、映画が終わって外が夕焼けで赤く染まった頃、映画館の前で未だ興奮冷めやらぬ感じでテンションアップアップな姉さんと、げんなりしている俺とステイル。

げんなりしてる理由は、バカ丸出しな予告でのツッコミによって無駄に疲労感がMAXに到達、よって映画の始まりから終わりまで頭の中が夢の世界ヘレッツラ・ゴーしたために内容なんざわかるはずもなかった。ステイルも面白い物の疲れがあったために俺が寝たすぐ後に熟睡してしまったださうだ。

で、最初っから寝る気だったにも関わらずツッコミのせいでまだ疲れが全然取れていない俺らはこんなローテンションなわけなんだけど……はしゃぐ姉さんを見てると、何か腹立つわあああ……。

「いやあもおホントすごかったよ……。」

ああそうですか、いすごかつたんですかい。

「エリザベスがボビーを助けようとビルから飛び降りたのはホントビックリしたね。」

え、ヒロインが助けるの？

「やっぱりエリザベス役のジョナサンは顔もいいし、何してもかっこよかったなあ。」

エリザベス男かよ!?

「ねね、雅達はどう思った？」

……………。

「そうだな、やっぱりジョナサンはかっちょいいとおもつよおれは。」

「そうですね、わたしははじめてでしたがこれほどしょうげきをつけたことはありません。」

「でしょでしょ!?!? やっぱり見に来てよかったね。」

ハイテンションな姉さんは俺ら二人の超棒読みにまったく気付いていなかった。

「…なあ、姉さんもう帰ろうぜ。疲れた。」

「私もです…。」

「そう? じゃあ帰ろっか。」

超ご機嫌な姉さんは先を歩き、俺ら二人はよっこらせつと大量の荷



物を持ち上げた。

「……ステイル。」

「……何でしょうか？」

俺はものっそ小さい声でステイルを呼んだ。

「……俺、今だけ龍二のあのマイペースさがものすごい羨ましくなってきたぞ。」

「……奇遇ですね、私もです。」

「「……」。

俺らは心の中で静かに涙を流した。

「……帰って寝る。」

「寝ましよう。」

今夜の晩飯はカップラーメンにしよう、と決意を固めて、俺らは帰路についた。

くその頃く

「くしょん！」

和室で寝そべりながら龍二はクシヤミをした。

第五十七話 雅のツッコミ日和（後書き）

どうもコロコロです。今回はこんなになりました。

で、ですね。まあ本編でもやってたように、マジでやります。勇魔以上日和。明日にでも第一話だけ載せますので。言っておきますが、文句は受け付けません。

では、これにて。FFディシディアサイコー！ ジェクトサイコー！ と叫ぶコロコロでした。

第百五十八の話 <特別編>必殺技特集part2(前書き)

今回のお話は、作者の脳内にある物を詰め込んだ奴なので、興味ない方は頑張って読んでみてください(！?)。

第一百五十八の話 <特別編>必殺技特集 part 2

ライター視点

最近ほんのりあたたかくなってきたけれど世間はいろいろと寒い今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？ 私ライターはいろいろと疲れていて大変。

ア「あ、どうもです。アルスです。こんばんわ。」

さて、アルスはクロス作品でいろいろとツツコミをやっているようですが、

ア「そんな他人事みたいに言わないでください!!」

さて、皆様にお聞きしたいことがあります。

ア（無視ですか!?!）

皆様は覚えていますでしょうか？ ……第九十二の話、<特別編>必殺技特集 part 1を。

ア「け、結構昔ですね…。」

で、俺は最近気付きました……。

忘れてたと!!!!

ア「ダメでしょそれ!？」

そう、俺の頭の中はつねに晩御飯のことで頭が一杯一杯でした!!

ア「アナタホントにこの小説の作者さんですか!？」

とゆーわけなので、せっかくpart1があるのにpart2が無いのは不自然なので、クロス小説の休憩がてら、ここで上げていきまーす。

まずは龍二から始まり、続いてアルス、クルルという順番に。ではここに原稿があるので読み上げていきまーす。

えー、卵六個入り1パック十円………うっそマジで!? めっさ安いやん!?!?!???

ア「それチラシです。」

あ、間違えた。こっちこっち。失礼しました。

く龍二く

りゅうせんとんが  
龍閃転牙

武器：素手

龍閃弾に回転加えたバージョン。いわゆるコークスクリューブローに気を込めたようなもの。当然、威力は倍に跳ね上がる。

龍牙一閃 りゅうがいつせん 武器：一刀 太刀

文字通り、音さえ超える速さで切り抜ける単純にして強力な技。さらに、一閃だけではなく二刀を使つての『二閃』、一閃と見せかけて切り抜けて時間差で何億もの斬撃が相手に叩き込まれて徹底的に切り刻む『無閃』など、バリエーションは豊富。

炎龍雷牙 えんりゅうらいが 武器：二刀

炎を纏つた龍刃と、雷を纏つたエルによつてXの字に相手を切り裂く技。

魔龍斬華 まりゅうざんげ 武器：二刀

姿を消し、一瞬で相手を切り刻む技。

龍閃弾脚・衝破 しょうは 武器：全武器可能

空中で縦回転しながら龍閃弾脚の踵落としバージョンを放ち、三日月型の衝撃波を放つ遠距離技。

轟龍閃弾 こうりゅうせんたん 武器：素手

相手を徹底的にボコにする連続攻撃。最後の一撃で顔面を殴るとすると、最小の力だと相手の首が360°に回転、最強だととりあえず何周するかわかりません。とりあえずエグイ技だということは確か。

龍ノ息吹りゅうのいきぶき 武器：槍

槍の中に眠る力を仲間に流し込み、筋力、気力、活力を大幅にUPさせる補助系技。どのくらいUPするのかというと、少しの力を生後一ヶ月の赤ん坊に流し込むとその子はハイハイ通り越して歩き出し、しまいには岩一つを持ち上げてしまうほど。なので使用はほどほどにしましょう。じゃないとお母さんが卒倒してお父さんが精神病院に担ぎ込まれる羽目になるから。

龍破虚空閃りゅうはくうせん 武器：太刀

その場で自身の体を竜巻の如く高速回転させることによって相手を浮き上がらせ、自身も浮き上がって最後の一撃に思いっきり地面に叩きつける。

連空龍牙れんくうりゅうが 武器：一刀

切り上げと同時に自身も飛び上がり、様々な型の蹴りを叩き込んでから炎を纏った龍刃を真下に向けて相手を串刺しにしつつ着地する。

激烈龍閃弹幕げきれつりゅうせんだんまく 武器：素手

読んで字の如く、百烈龍閃弾を遙かに凌ぐ気弾と拳による嵐、嵐、嵐！ 最後は特大の龍閃弾を放って相手をBOM！ ゲームになったら爽快感抜群になること間違いなし！

双龍破そうりゅうは 武器：二刀

交差させた二刀の中央部分から青いビームを放つ。



龍鱗淨滅斬 りゅうりんじよめつざん 武器：素手、二刀、槍、太刀

四種類の武器と拳を使つての怒涛の連撃。龍閃弾を放つて相手を吹っ飛ばすと同時に敵の足元を爆破させて宙に打ち上げ、そこから魔龍斬華を叩き込み、さらに槍の連続攻撃からさらに宙へ打ち上げ、炎と雷を纏つた太刀を手に追つて相手を一気に遙か上空から地上に叩きつける。落下による摩擦熱と地面に叩きつけられることによつて追加ダメージ。

一刀龍断 いっとうりゆうたん 武器：太刀

大上段に振りかぶつた太刀を、重さに任せて振り下ろして相手を真っ二つにする。同時に衝撃波を発生させるため、遠くの敵も切り倒せる。

百花龍乱 ひゃっかくりゅうらん 武器：太刀

氣を込めた太刀を大きく振り上げ、風を纏わせてから一気に切り下ろすと同時に氣で生成された桜の花びらを舞い散らせながら竜巻を発生させて相手を母なる大地に帰す。こう言つてるとかつこいいが、相手は血も肉も残さないで息絶えるので案外残酷極まりない。

画龍点睛 がりゅうてんせい 武器：二刀、太刀

龍刃とエルによる二連撃を加えた後、体を軸にして高速回転して相手と一緒に飛び上がり、最後に太刀へと持ち替えて斜め上へと打ち上げる。追撃に双龍破を放つて貫くことも可。

無影楓龍塵 武器：槍

風を味方につけ、コンマ一秒の速さで相手を切り刻んだのちに破裂させるえげつない技。

突攻龍閃 武器：槍

槍を腰だめに構えて、神速の速さで相手を貫くシンプルイズベストを形にした技。

龍糸貫・極 武器：素手

両手で指鉄砲の形を作り、指先から蒼い極太レーザーをぶっ放す、龍糸貫の最上級技。ただ、反動が強い上に溜めに十秒ほどかかるので実用性は薄い。威力は折り紙つき。ただ、作者的に思ったのはこれも龍糸貫じゃなくて龍木貫じゃね？ なのだが、語呂悪いので気ニシナイことにした。

龍糸貫・I 武器：素手？

二本の龍糸貫を発射する、いわゆる応用技。ただそれだけ……なのだが、これ指からじゃなくて両目から撃つという明らかウケ狙いの技なのである。改めて言おう。人間やめるテメエ。

無龍 武器：???

足元に異空間の穴を作り出し、そこへ潜って相手の死角から飛び出して攻撃する技。

死龍 武器：???

武器を相手の頭上に放り投げ、そこから無数のエネルギー弾を雨あられと降らせて最後に特大の奴を落として爆発させる。

崩龍 武器：??

周囲を薙ぎ払って、地面を大きく抉ってからマグマを召喚して相手を灼熱地獄の中へ放り込む。

幻龍 武器：??

自身が無数にいるかのような幻影を見せ、いわゆる分身術を使って相手を惑わしてからタコ殴りにする。

魔龍閃 武器：??

漆黒の軌道を描きながら相手の首を刎ねる、シンプルながら極悪な技。掠れば闇に体を蝕まれて、体の全神経が麻痺する。

暴龍 武器：??

氣と魔力を込めた武器を振り回し、真空刃によって無差別に辺りを八つ裂きにする恐ろしい技。

消龍 武器：??

武器を振り、前方に異次元空間の裂け目を作り出して相手を飲み込む。一撃死技だが、相手によっては避けられることもあるため、あくまでフェイントとして用いることが多い。

滅龍 武器：??

相手の頭上から武器を叩きつけ、さらに足元から漆黒の炎を吹き上げらせて灰さえ残さないほど相手を消滅させる。

冥龍 武器：??

上空に漆黒の異空間への入り口を開き、そこから無数の漆黒の雷を周囲に落とす。雷は辺りを破壊しつつ踊るように跳ね回り、最後に武器に全て集まった後に薙ぎ払いのちによる周囲の一刀両断、最後に大爆発を起こして無へと帰す。最強技の一つだが、これの強化版があるのだが詳細は不明。

あい、これが龍二の技の一部です。

ア「え、多すぎじゃありません!？」

うん、そう思っただけだよ？ 何か頭の中に湧いて湧いて湧いて消えないの。

ア「ふええええええ……………？ あれ？ あの、リュウジさんの技の『無龍』から武器名が伏せてありますけど？」

ああ、これね。実はこれ、二重共鳴のもう一つの型なんよ。

ア「まだあるんですかあれ!？」

うん。あ、二重共鳴のことがわからない方に簡単な説明します。

### 二重共鳴にじゅうきゅうめい

龍二の氣とエルの魔力を同調させることにより、龍刃とエルが共鳴し合って合体し、様々な武器へと変化を遂げる、汎用性抜群の技。クロスオーバー第二弾、『黒鬼の野望』にて初めて実践されたのだが、失敗すれば武器が砕け散るといふリスクが高い技であったため、普段実用されることはなかった。とゆうより、一発芸に取ったときにかつた龍二であったが、緊急事態だったために急遽発動せざるをえなかった。因みに一回成功すればもう失敗はない。

はい説明終わり。

ア「……ところでこれ、何個まで変化するんですか？」

考え付く限り無数。

ア「ちよつと!？」

では次行きましょう!。

ア「無視ですか!？」

黙りなさい。今からお前の技紹介すつけど、黙らなかつたら紹介しねえぞ？

ア「……………」。

くアルスく

リステイル・オム 武器：剣、魔法

ご存知、アルスの最強技の一つ。聖剣に神の力を宿すことにより何十倍にも巨大化させて、光の刃で相手を両断する。アルスはまだ勇者としては幼いので、制御が利かないこともしばしば。

ポルトランサー 武器：剣、魔法

剣に光の力を宿らせ、槍の如く相手を突き刺して燃やし尽くす。

アシエン・グランダスト 武器：剣、魔法

掲げた剣に神の力を宿し、周囲の邪悪の浄化する広範囲技。

ホーリーエンド 武器：剣

華麗な剣捌きで相手を徹底的に切りつけた後、強烈な踏み込み突きで相手を吹き飛ばす。

ルーンボム 武器：魔法

掲げた左手に光球を出現させ、相手に投げつける。光球は相手にく

つつき、数秒後に爆発する、いわゆる時限爆弾。

セイバーフラッシュ 武器：素手、剣

相手の懐に入り込み、アッパを食らわさせて吹っ飛ばした後に高く掲げた剣から聖なる光を放出して相手を浄化する。

シャルクウ・フレン 武器：魔法

祈りを捧げるかのように手を合わせて、自分に光を纏わせてから光の弾を周囲に射出して悪しき者に制裁を加える技。

光の加護 武器：魔法

自分、もしくは仲間に関自分の生命エネルギーを変換して防御膜を張り、敵の攻撃をガードする補助系魔法。

神々の慈悲 武器：魔法

これも補助系魔法。神の力を借りて仲間の傷を一瞬で癒す。普通の魔法との違いは、一人一人ではなくて一度に全員の傷を癒すことができること。

制裁の光 武器：魔法

聖なる光の魔方陣を上空に展開させ、その中央に光り輝く門を開いて対象全てを吸い込む一撃死重視技。一通り吸い込んだ門は、まるで飢えが満たされたかのように閉じて溶けるように消えていく。その門の中に入った者を待つのは、安息の地か、それとも永遠の罰か……それは誰も知らない。

ライトケージ 武器：素手、魔法、剣  
剣を収め、拳に光の力を込めてから相手にワンツーパンチを繰り出して吹き飛ばし、すかさず魔方陣を展開して相手の動きを止める。  
最後に剣に魔法をかけ、対象の周囲に無数の剣を出現させて一気に貫く。

アルス斬り 武器：剣

最近習得した技。剣の腹の部分で相手の頭を殴りつける。主にボケたクルルに使用する、いわゆるツッコミ専用技。龍二には絶対使えない。使ったら恐らくいろんな意味でこの世から去らなければなりません。比喻じゃなくて。マジで。

あい、意外と技が多いアルスでしたー。

ア「意外とは余計です！」

何かかつちよいい技が多いから、最後にこれからアルスが使うウケ狙い技を入れてみました。

ア「できれば使いたくなーい！ーい！ーい！ーい！」



さて、お次はクルルだ！！

くクルル

ガレス・シエバンツァ 武器：剣、魔法

闇の扉を開き、そこから漆黒の炎を吐き出して対象を無へと還すクルルの最強技の一つ。アルス同様、クルルもまだ幼いので制御できないことがあるが、そこら辺は愛の力で何とでもなる。ごめん、言つてて吐き気してきた。by 作者

ダーク・プリズン 武器：魔法、剣

闇の世界から召喚した鳥籠で相手を閉じ込め、魔力を込めた剣で鳥籠ごと真つ二つにする。

ダークネスショット 武器：魔法

掌に作った魔法弾を投げつける、シンプルな技。溜めによって威力が異なる。

ダークネスショット (アルファ) 武器：魔法

前方にゆっくりと相手を追尾する球を発生させ、相手を捕まえると大爆発を起こす技。複数生成可能。

ダークネスショット (ベータ) 武器：魔法  
相手の頭上から闇の弾丸が降り注ぐ技。ランダムに撃つから回避は可能だが、雨の如く降ってくるので傘が必要(意味ねえよ)。

ダークネスショット (ガンマ) 武器：魔法  
しばらく進むと五つに分かれる矢型のエネルギー弾を撃つ技。分かれた弾は相手を追尾する。

ダークネスショット (デルタ) 武器：魔法  
前方に闇の防御壁を張り、相手の攻撃が当たったと同時に足元から闇の光線が閃き、貫く。

ダークネスショット (イプシロン) 武器：剣、魔法  
剣で前方の足元を真一文字に切り、そこから闇の衝撃破を壁のように発生させて相手を攻める。

ダークネスショット (ゼータ) 武器：魔法  
自分の周囲から闇のエネルギー弾を無差別に発射し、相手を滅する技。ただ、この弾はホーミング性能を持っているため味方には当たらない。

ダークネスショット (オメガ) 武器：魔法  
重ねた掌から、極太のレーザーを発射して軌道上の敵を殲滅するダ

ークネスショット最上級の技。

ヘッセン・オウ・エント  
終焉乃樂園 武器：剣、魔法

魔力を宿した剣を相手の体五箇所突き刺し、魔力を流し込んだら詠唱に突入。闇の魔方陣が展開され、冥府の闇へと相手を誘う一撃死重視の技。恐ろしい技だが、成功確立は低い。

クルルパンチ 武器：素手

珠との闘争の果てに習得した、クルルの必殺技。腕をクルクル回転させるかのようにポコポコと殴りつけ、相手をひるませる。ただひるませる。ひるませてひるませて、最後は珠のネコパンチによって吹っ飛ばされて終わる。所詮ネコ以下か。

あい、何かダークネスショットってこんなにバリエーション多かったです。ただーって我ながらビックリしたクルルの技でしたー。

ア「……ほとんどがダークネスショットですね。」

うむ、意外と他のクロス小説を執筆している方々も使用することが多いこのダークネスショット。せっかくだし、もつとバリエーション増やしたらおもしろいんじゃないか？ と思ってこんなになりました。まあほとんどはゲームから得ただけなんですけどね。

ア「……じゃボクのは？」

うん、お前のも一部はそう。あ、でも龍二のはどうか？ 多分少なからずゲーム混じってるかもしれない……ま、いいや。

とゆーわけで、いかがだったでしょうか？ 今回の必殺技特集は、前回のに比べてポリリウムUPでお送りしたつもりです。

ア「つもりですか!？」

今回は part 2 でしたが、いつか part 3 もご要望があればやってみたいと思います。当然、要望がなくなつたつてやりませう。

ア「あつてもなくても一緒なんですか!？」

フッフ、この特集は俺の頭の中にある必殺技メーカーがぶつ壊れな  
い限り終わりはないのです。そう、パソコンが壊れようとケータイ  
が壊れようと!

ア「壊れて書けない時点で終わつてませんか!？」

これらの技は、いずれ本編でも出します。そうですねえ……う  
ん、次の大長編に出します。

ア「え……またやるんですか？」

そう、やるよ。





第百五十八の話 <特別編>必殺技特集part2(後書き)

他の人の必殺技見たいんなら感想に書いてみてもいいですよ。part3でやる可能性がありますから。

多分、二年後に。

ア「おっそおおお!？」

第一百五十九の話 この小話はライターがお送りします(前書き)

短っ!?



第百五十九の話 この小話はライターがお送りします

ライター視点

皆さん、二話続けてこんばんは。ライターです。ちょっと人には言えないところから中継でお送りしております。

今回のお話は、普段龍二達がそれぞれ何をしているのか、チョコッとだけ覗いてみようかと思えます。皆さんが見てきた彼らの生活の中で、もしかしたら意外な発見があるかもしれません。

まあこういうお話は前々からやってみたくは思っていたのですが、どんな奴がいいかなって思い続けてはや半年。いやはや、優柔不断とは恐ろしいものですな。

とゆーわけなので、小話感覚でお送りしたいと思っております。では皆様、ごゆるりと彼らの私生活をご覧くださいませ。

「ねえママ見てー。あの黒い人ゴミ捨て場にあるゴミ袋の中に入れて何か言ってるよー?」

「しっ! よしおちゃん見てはダメよ。」

「龍二の場合」

さて、まず最初は皆様ご存知、龍二くんの普段は見れない姿を観察したいと思います。因みに場所は裏山です。あと私の体が若干臭うのは「愛嬌」。

「99993回……99994回……。」

おや？ 裏山の開けた場所で何かしてますね？

「99995回……99996回……。」

おおっと、これは珍しい。今の彼はタンクトップ一枚に普段着のジーンズという格好をしています。このクソ寒い日にバカみたいですね。

「99997回……99998回……。」

そして今しているのは、左手小指一本だけを支えにしてバランスよく逆立ちしたまま腕立て伏せをしております。彼の足の上には巨大な岩三個と小さなソボ百個、そして珠ちゃんがグッスリ眠っております。今の龍二の顔は真剣そのものといった表情をしております。しかし汗はかいておりません。

「9999回……10000回……つと。」

ノルマ達成したのか、小指だけで軽く飛び上がってから華麗に着地、上空に跳ね上げた岩三個ツボ百個、そして珠ちゃんは差し出した右手の上にトントントン、と落ちてきました。

「うし、こんなもんだろ。」

ドスン、と足の上に置いていた尋常じゃないくらいの重さの荷物を地面に降ろして、額を拭いました。だから汗かいてないでしょアンタ。

『……今さらなんだが、貴様ホント化け物だな。』

おっと、今気付きました。彼から離れた位置に立てかけてある鞆に収まったエルがいました。

「そうか？ 軽いもんだろこんなもん。」

それを軽いというアナタは化け物通り越して何になるんでしょうね？

「さ、ノルマは終わりだ。ラーメン屋行こうぜ。」

『……そうだな。』

そして龍二はエルの隣に無造作に置いてあったジャケットを羽織ってエルを手に山を降りる道へと歩き出しました。頭の上には未だ熟睡中の珠ちゃんがいます。

『……しかし貴様が修行、というよりこのような筋肉トレーニングをするとは珍しいな。何かあるのか？』

と、唐突にエルが尋ねて、

「いや、何か気分。」

あっけらかんと答えました。

『……そうか。』

人生の大半を気分ですごしている龍二に、エルはただそう言うしかありませんでしたとさ。

とりあえず下山した一人と一本と一匹は、帰り道に行きつけのラーメン屋の暖簾のれんを潜りました。私も後に続いていざ入店。

「オツチャン、醤油。」

「あいよ！」

暖簾を潜ってすぐに注文、お客さんが少なかつたお店のオツチャンは待つてましたとばかりに天辺ハゲを輝かせながらテキパキと働き始めました。

「へい醤油お待ち！」

十分もしないうちに、龍二の前に醤油ラーメンが入った丼がドンと置かれました。

「おかわり。」

「あいよ!!」

そして数秒もしないうちにおかわりを注文する龍二がいました。

「へい醤油お待ち!」

十分もしないうちに、龍二の前に醤油ラーメンが入った丼がドンと置かれました。

「おかわり。」

「あいよ!!」

そして数秒もしないうちにおかわりを注文する龍二がいました。

「へい醤油お待ち!」

十分もしないうちに、龍二の前に醤油ラーメンが入った丼がドンと置かれました。

「おかわり。」

「あいよ!!」

そして数秒もしないうちにおかわりを注文する龍二がいました。

「へい醤油お待ち!」

十分もしないうちに以下略。

こういうことがあるため、このラーメン屋は売り上げを徐々に伸ばしていつているので潰れることはありません。オツチャン、アಂತも案外タフですねえ。

「あいよ、味噌お待ち！」

あ、来た来た。いったただつきまーす。

くアルスく

ラーメンを食べてお腹いっぱいになったところで、お風呂に入ってきました。え、素颜見られてないかと？ 大丈夫です、ちゃんと覆面したまま入りましたから。え、頭洗ったのかと？ ええ、ちゃんあんと洗いましたよそれがナニカ？

さて、ところ変わってここは龍二の家。この時間帯ならば、居候であるアルス達がいるはず。とゆーわけで、まずはアルスから覗いて見ましょう。

「ふんふん……………」

ベランダの縁側に座りながら、何かの本を読んでいるアルス。眉間

に皺を寄せながら一生懸命読んでいます。健気ですね。

「……………よおし…！」

ふと何を思いついたのか、本を閉じてスタッと立ち上がりました。  
何をするつもりなのでしょう？

「んしょんしょ……………」

……………。

「むん…！……………ん…、ん…！」

……………。

「んむむむむ……………！…！」

……………。

「……………ふぁ…！……………ふう……………」

……………。

さっからこの娘は何してんすか。

「……………これでどうかなあ？」

……………あ、なるほどね。何したいか何となくわかった。

……まあ、とりあえず………ほい。

【ピラ】

「？ あれ？」

あることを書いた一枚の紙をアルスの足元掛けて投げつけてみました。

「??？」

おもむろに拾い上げて、その内容を読む。

『とりあえずマッサージをしてもいきなり大きくはなりません。』

「……………！！??？」

自分がやっていた行動見られていたのがわかった洗濯板なアルスは、紙を隠して顔を真っ赤にしたまま周囲を見回したのでとりあえず逃走開始。

くクルルく

さて、今頃アルスは自分のしていたことを後悔しながら恥ずかしが



って悶絶しているでしょうと思いつつ、公園に来てみました。おそらくクルルは公園で遊んでいることでしょう。

お、いましたいました。あんなところで何か叫んでますね。

「さあタマちゃん！ 今日こそは私が勝つにゃー！」

「みゃー。」

.....

今再び始まる、魔王VS珠。すでに周囲では観客（主に子供達）が集まっています。

【カーン！】

「とりゃー！！！」

いきなりどこからかゴングが鳴り響きましたそして先制攻撃はなんとクルル！ 何ということでしょう、相手は猫なのにおもつきし蹴り放っています！ しかも飛び蹴りです！

「みー！」

「みぎゃー！？」

おおっとお！？ 何とも猫らしい身のこなしでクルルのキックを避けました珠ちゃん！ クルルは見事にケツから地面にダイブ！ 見てて滑稽です！

「むむむ…よくもやったなー！！！」



ああ!!???

「みやあああああ!!!!」

いきなし珠ちゃんがライオンの如く雄叫びを上げました！確かにライオンは猫科だけれどアンタは普通の猫でしょうが！！しかしこれはコメディーだから何の問題もない！！そう片付けるしかないんです！！

『みやあああああ!!!!!!』

「!!!!???」

こ、これは何という事でしょう!? 珠ちゃんの叫びを聞きつけて数十匹にも及ぶ猫の大群がどこからともなく現れました!! クール選手、予想外の出来事が起こってタジタジだあああああ!!!!

「みやみやみやあああああ!!!!」

『ミヤツサーー!!!!!!』

猫の大群が珠ちゃんの命令に従ってありえない鳴き声を上げたー!!!! これは人間でいうところの『イエッサー!!!!』なのかああああ!!??? つか珠ちゃんアンタ実はリーダーだったのねええええ!!!!???

「え、ちょ、待つて待つてそれ反則アイヤああああああああ!!!!!!!!」

さすがのクール選手もこの異様な光景に圧倒されてしまったようで、容赦なく飛び掛ってきた猫の大群によって押し倒されてしまいました!! 叫び方がなんかチャイニーズです!!

【カンカンカンカン！】  
ゴングが鳴りました！ 勝者は援軍がいた珠ちゃん！ そして敗者は援軍がいなかったクルル！ おめでとございますー！！ 賞品は優越感ですー！！

「みゃー！」

「たあああすうううけええええてええええー！！！！！」

……さて、未だ猫に襲われているクルルの悲鳴はほっといて、次行きましようか。

く　　く　　く  
フイ　　フイ

先ほどの実況で軽く疲れた私は、近くの川原の土手に移動しました。ここはいいですね、風がそよそよ、お花も揺れて和みます。そして川の近くでは子供達が駆けっこをしたり、犬の散歩をしている人がいたり、この空間は平和です。

いやあにしても、ホントここら辺に咲いてる花は綺麗ですな。

「ちゅーちゅー。」

あ、あの白い花とか超かわいいですね。小さいです。

「ちゅーちゅー。」

何かこう、周りが緑の中一本だけ白い花が咲いてるのを見ると、その花の美しさがさらに際立ちますよねー。孤高な感じで。

「ちゅーちゅー。」

小さいと侮げでますます見惚れちゃいますよねー。応援したくなっちゃいます。

「ちゅーちゅー。」

そんでもって……………

その花の上に掌サイズの妖精がストローで蜜吸ってたらどう思いますか？ まず写真撮ります？ 私の場合はまず何してん？ とツッコみますね。しかし今回の私は傍観者です。ゆえにツッコみません。

「……………ふう、おいしかった」

花の蜜を吸っていたフィフィは喉越し爽やか！ という感じに口を拭きました。ビールじゃありません。

「……………ふぁ……………」

っと、小さく欠伸しましたよ妖精さん。傍から見たら可愛らしいですね。

「…………ふゆ…………。」

あらま、かんわいい声出しながら花びらの上で横になっちゃいましたよこの娘。

「…………クピー…………。」

拳句の果てに寝ましたよこの娘。

……………あ、とゆうより寝ちゃったら終わりじゃないですか。

「ヴァー！ ヴァー！」

おお、ナイスタイミングにカラスが三羽上空からやってきましたわ。明らか餌をいただきにきましたね。

って、餌って花の上で寝てるフィフィちゃいますのん？

「ヴァー！！！」

あ、ビンゴです。フィフィ目掛けて飛んできました。うん、これはヤベエですね。

とゆうわけで、ここは私ライターが助けてあげようと思います。では、久々にダークネス

「みゃー……!」

「カー!?!」

つて、あらま。

「みゃみゃみゃみゃ……!」

「カー……!?!?!」

おお。

「みゃー……!……!」

「カー……チャー……ン……!……!」

待てカラス。

「みゃ!」

「カ、カア……!……!」

おお、スゲエ。どっからともなく珠ちゃんが現れてカラス撃退したよ。つかアンタ神出鬼没ね。

「みゃみゃ。」

フラフラとボロボロになりながら飛び去っていったカラスを尻目に、珠ちゃんは何も知らずに眠りこけているフィフィの方へと向き直りました。

「……………」

そしてトットトと優雅にお花の下へ歩いてきました。さて、彼女は何をするつもりなのでしょう？

「……………ニヤ。」

おや？ 花びらに前足を置きましたよ？

「ニヤ~~~~……………」

おやおや？ 今度はグイ~~~~と手前に引き始めましたよ？ お花の茎は折れずにいい感じに曲がってますよ？ つかファイファイ乗ったまんまですよ？

「……………ん……………」

おやおやおや？ さすがのファイファイも目覚めましたよ？

「ニヤ~!」

おやおやおやおや？ パツと離しましたよ？

「ぴゃああああああああああああああ……………」

おんやおや~~~~さながら投石機の要領でファイファイちゃんが吹っ飛ん



でいつちやいましたね。あれ結構遠くまで飛んでいつちやいましたね。そりゃあの子小さい分軽いから風に吹かれてどこまでも飛んでいくんでしょね。

「ニヤニヤン」

そして加害者珠ちゃんはどこか満足気に鳴きながら立ち去っていき  
ました。

……結局彼女は何がしたかったんでしょね？

さて、皆様いかがだったでしょうか？ 今回は彼らの小さなお話を  
語らせていただきました。

……え、他の人のも出せ？ 無茶言っちゃいけねえですぜえ旦那あ  
く！そこはお楽しみって奴でっしゃろ？

……え、もしかしてネタ切れじゃないかと？ …… H A H A H A H  
A H A、なぐにを言ってるんですかそんなわけナイジヤナイデスカ。  
ま、ともかくこれにて私ライターは一旦帰るとします。他のキャラ  
達の小話はいずれかならず書かせてもらいましょう。

では皆様、シーユー！！

「ねえママ見てー。あの黒い人またさっきのゴミ袋に入り込もうと  
してるよー?」

「……………あ、もしもし警察ですか? 近所のゴミ捨て場に怪し  
い人がいるんです。」

第百五十九の話 この小話はライターがお送りします(後書き)

今回は小話というわけで、とりあえず龍二達は載せました。小話を載せるきっかけとなったのは、最近忙しすぎてポロポロ、おまけにスランプ、しまいには明日から教習所へGOなわけですね。

まあ、とりあえずそんな状態なのですが……そうですね、次回から長編やつちやおつかなく。

え、それ前回言った？ つかわからないって言ってたくせに早速やるんかい？

……気まぐれ作者でごめりんこ

(、、(=)(、3、(・； ボツスウ！

………て、てなわけで………また………次回………グペ。

第六十の話 赤い過去（前書き）

今回、多分グロい表現あるかもです。読む前にご注意を。

第一百六十の話 赤い過去

〔龍二視点〕

暗い。

暗い。

暗すぎる。

何も見えない。

辺り一面漆黒の闇だ。

上も下もわからない。

進もうにも体が動かない。

地に足を付けてる感触もなければ、浮いてる感じでもない。

ただそこにいるだけ……真っ暗闇の中、そこにいるだけ。

あれ？ そっぴや前にもこんなんあつたよつな気がするな。

いつだっけ？

いつ……………。

ふと、前を見てみた。

あ、目の前の黒が徐々に消えていく。

しばらくすると、一つの光景が見えて……

見えて……。

……。

あれ？

何でだ？

何で今頃？

どうして今頃になって？





『チガウ』

『オマエガ、ゼンブ』

『ウバッタ。』

「違うー！ー！！」

『！？』

………って、あれ？

『り、リュウジどうした？ 大丈夫か？』

「……………」

周りを見回すと、電気が消えて真っ暗になった自分の部屋がおぼろげながら見えてきた。音という音はせず、唯一聞こえるのは時計の針の音。

そんでもって、自分のパジャマを見れば汗で全身びっしょりで気持ち悪い。

「……………スマン、何でもない。」

机に立てかけてあるエルの気遣いに軽く答える。時計を見てみれば夜中の12時21分だった。なんちゅう中途半端な時間に起きたんだ俺あ。

『そ、そうか……しかし、随分うなされていたぞ？ 貴様にしては珍しく。』

「っせえな。俺だっつうなされる時ぐらいあるっちゅーねん。」

『いや全く想像つかないぞ。』

ムカつとしたが、今は着替えなおすのが吉。とゆーわけで、ベッドから出てタンスから新しいパジャマを取り出す。

「わり、着替えてくるわ。」

『あ、ああ……。』

若干気落ちしたように返事するエルを置いて、部屋を出た。

「……………」

ドアを閉めて、何となく力が抜けた俺はドアにもたれてズルズルと滑り落ちていった。

「……………」

ドアの前で座り込んだまま、電気が点いていない廊下の天井を仰ぎ見る。

「……………夢か……………」

ただ、何となく……………無意識のうちに口から出た。

「……………もう、見なくなっただと思って何年振りだな……………見たかなかったけど。」

誰に言うでもなく、ただただ一人ごちる。

ホント、夢に出なくなったと思って安心してたら……急に出てくんだもんな、あの夢。そらうなされるわ。

「……………フウ。」

汗でだんだん体が冷たくなってきた頃、ため息ついたらまま立ち上がった。

「ま、忘れんなくてことだな。そういうことだろ。」

自己完結して、着替えるべく一階へと降りることにした。

それでも嫌な気分は拭いきれなかったけど。

同時刻、夜の公園。

「や、やめて……。」

人気がまったく言っていないほどない、公園に設置されてあるトイレの裏側……。そこから、女性の涙声が聞こえてくる。

同時に、下卑た笑い声も聞こえてきた。

「おおおお、嫌がっちゃつてさあ？」

「そそるねえ？ ……へへッ。」

女子高生と思われる制服を着た女性が、三人ほどのカジュアルな服装を着込んだ男達に壁に押さえつけられていた。逃れようともがくが、男達は揃って大柄であるゆえに、か細い女性がかなうはずもなかった。

「大体、こおんな時間にこおんな人気のないとこ通ろうとしたお前が悪いんじゃないか？ ……なあ？」

「ま、そういうこつた。怨むんなら自分を怨めよな？」

そう言った一人の男が、ビデオカメラを取り出す。

「さ、楽しむとしようか？」

「おー、待ってました。」

「ひっ…！」

ニヤニヤと笑いながら撮影の準備を始める男と、一人はポケットに忍ばせていたナイフを取り出して女性の制服をゆっくりと切り裂き始めた。



「何だテメエはつてか!?　そうです、私が、変な男です!!」  
「……………」

某ベテラン芸人の真似事をしておちよくる青年に、男たちは呆気に取られた。

「……………おいテメエ、ざけてんのか?」

「いやいや、俺はいつも大真面目やで?　それより、その女の子放してやったらどうでつか?　嫌がってますやん。」

「は?　テメエには関係ねえだろ?　俺らはこれから楽しむんだからよお?」

明らか目の前の青年に楽しみを邪魔されたと言わんばかりに鬱陶しげな顔を隠そうともせず、男たちは睨みつける。

「ほほお、奇遇ですな。俺のこれからお楽しみのところなんですよ。」

「あ、そう。じゃあ……………」

睨みも気にせずケタケタ笑う青年に、ナイフを持った男がその刃先を突きつける。

「悪いんだけどさ、これサツにちくられるとまずいんだよね?　だからさあ、運が悪いと思って……………なあ?」

ツツとナイフを首筋に当てて、ニヤリと笑う男に青年は硬直

「ああ、心配せんでもダイジョブでっせ?」

「あ?」

もせずに、相変わらず笑い続けた。男は笑顔から一転させて眉をし

かめる。

「俺、今からここで楽しむんですわ。」

「はぁ？」

わけのわからないことを口走る青年に、男はイライラしながら声を上げた。

「おい、いい加減そんな奴やっちまえよ。」

さっさと楽しみたいビデオカメラを持った男は、うんざりしたように振り返った。

【ズシュ！】

「……………あ？」

が、その顔は一瞬にして凍りついた。

「今から俺も楽しむんですわ……………」

殺戮を

男の背中からは青年の血に塗れた腕が突き出されており、男の腕からナイフがこぼれ落ちていった。



〈龍二視点〉

「ふああああ……。」

「あれ、リュウジさんおはようございます……遅かったですね？」

「ああ、おはよう。ちよいとな。」

朝、といつても11時ジャスト。着替えてから一階に降りてみればすでに起床していたアルスらがテレビの前でのんびんだりとくつろいでいた。しばくぞ。

「珍しいわね、アンタが私らよりも遅く起きるなんて。」

「俺だつてたまにゃあ昼近くまで寝るっつーの。」

……夜中に起きてから再びあの夢を見ることは無くなったが……今でも嫌な感じは残ってやがるな。クソ。

「リュウくん、昨日疲れてたの？」

「うむ、さすがに幼稚園児達とヨサコイ踊り続けていたから疲れた。」

「ヨサコイ？」

適当に誤魔化した。

「ま、とりあえずお前らメシまだだろ？ 朝昼兼用になっちまうが、それでもいいか？」

「いいよー!!」

「あ、ボクもそれでいいです。」

「ま、しゃーないわね。」

フィフィのほつぺを軽くつねった。

「うにゃああああ!! にゃにするにゃああああ!!!!」

「いや、態度がムカついたから。」

パチン！ と放したら「あう!？」と叫んでヒラヒラ落ちていった。

「さあて、何作るかなつと。」

台所へ入ろうと背を向けた。

『えー、引き続きニュースをお伝えします。今日未明、渋谷区にある公園で、男性三人の惨殺死体が発見されました。』

ふとテレビからアナウンサーの声が聞こえた。

「惨殺死体？ ふええ、いやだなああ。」

「それ、魔王が言うセリフですか？ かくいうボクもいやですけど

……。」

「アンタらねえ。」

ファイファイ、いつの間にか復活。

『現場には遺体のそばで女子高生と見られる女性が意識不明の状態で見えましたが、外傷はなく、命にも別状はない、とのことですよ。今後警察は女性の意識が戻りしだい』

クルルとアルスのげんなりする声と、ファイファイの呆れた声。そしてアナウンサーの声が聞こえる中、俺はいつものことと楽観しつつまな板を出した。

別に、殺人事件なんてそう珍しい世の中じゃない。だからといって犯人を許せるほど俺は腐っちゃいねえが、俺から犯人を探し当てようとやる気はなかった。少なくともそういう気になる奴は正義感に満ち溢れてる奴ぐらいだ。つーかそんな奴なんて全国探しても一握りしかないだろう。いるとも限らない。

『え？ ……はい、わかりました。』

失礼します。先ほど新たに情報が入りました。被害者の一人が持っていたとされるビデオカメラの中に、犯人と思われる映像が写されていたということがわかりました。』

「ほえ？ 犯人写っちゃってるの？」

「何だ、じゃあ事件解決じゃないの。呆気ないわね。」

「そう簡単にいくんでしょうか…？」

……犯人ねえ……。

『では、映像をどうぞ。』

【ま……………くれ……………】

「？ あんまりよく聞こえないね。」  
「カメラが壊れてたんだろ？」

おまけに画像もジャリジャリが多くてほとんど見えないときた。こ  
ら証拠にもならんわ。

【な……………ゆる……………も……………ないからさ……………てくれよお！】

命乞いか……………ものすごい涙声だな。

【……………？】

って、犯人らしき奴が何か喋ってるみたいだけど全然聞こえねえじ  
ゃん



「……全然わかんなかったね？」

「とゆーより、顔なんて写ってないに等しいじゃないの。」

……。

「でも、声だけは聞こえましたよね？ それなら何とかなるんじゃない？」

【ダン……！】

「！？ り、リュウジさん！？」

気付いたら、俺はテレビを壊さんとばかりに掴みかかっていた。

「……。」

背後でアルスらが何か言ってるが、そんなこと、どうでもいい。

「……嘘だ……。」

あれは……あの声は……。

「嘘だろ………オイ………」

何であいつが。

「なあ………。」

何であいつの声が。

「嘘だって……誰か、言ってくれよ。」



第百六十の話 赤い過去（後書き）

今回の話のメインキャラは………わかりますよね？ 大体？

第百六十一の話 最悪な再会（前書き）

今回の話は、龍二のキャラが崩壊します。

## 第六十一話 最悪な再会

（ライター視点）

場所は渋谷、スクランブル交差点。

「おいアンタ邪魔だよ！ さつさとどけよ！」

「ボーっと突っ立ってんじゃねえよバカ野郎！！」

その交差点を通ろうとしているドライバー達が、口々に罵り、やかましくクラクションを鳴らしまくる。

ただ、その標的は前にいる車などではなく、ちょうど交差点のど真ん中に気だるげに突っ立っている、髪が白い青年に向けた物だった。

「……………」

青年はというと、ガラの悪いドライバー達ががり立てるのを見て、怖気づくこともなくただため息を吐く。

「……………たく、怒鳴るだけかい。何か行動せえや。」

その言い方からは、明らか軽蔑が含まれていた。

「……………お？」

が、すぐに意外そうな顔をする。前方で高級そうなフェラーリに乗りながら怒鳴り散らしていた若くて派手な服装のドライバーが、車から下りて怒りを露わに青年に近づいてきた。

「何や、やろう思えばできるやん。」

若干満足したように青年が頷くが、その間にもドライバーが近づいてくる。

「オイ、テメエ。邪魔だつて言つてんのが聞こえねえのかよ？」

とつとつ目の前にまで接近してきたドライバーが、明らか怒気を込めた声で凄んだ。

「え？ 聞こえてますよ？」

「……ならどけよ。邪魔なんだよテメエ。」

明らかおちよくつたような口調で言う青年に、ドライバーは口元をヒクつかせた。

「いやいやあ、それはちょっと無理な話ですねん。俺ここで用事あるんですわ。」

「……………」

おどけたように言う青年に、ドライバーはだんだん怒りで顔が歪んでいった。

「……………つぎけてんじゃねえぞテメエ……！」

胸倉を掴み上げ、殴りかかるドライバー……だが、

【バシ】

青年はそれをいとも容易く受け止める。

「……俺の用事なんですがねえ。」

受け止められるとは思ってもなかったドライバーが戸惑う中、青年はニッコリと笑った。

「ここですっちょ騒ぎ起こして、あいつ気付かせてやることなんですわ。」

とゆーわけで、ほなサイナラ」

渋谷の交差点は、一瞬にして大混乱に陥った。

くアルス視点く

「リュウジ……さん？」

いきなりテレビに掴みかかったリュウジさんを見て、ボクらは突然のことで驚いて硬直してしまった。

目は見開かれて、その顔には信じられない物を見たかのような恐れや混乱が入り混じったかのようなだった。

「……………何で……………何でなんだよ……………」

しばらくして、リュウジさんはテレビを掴んだまま膝を着いた……………  
……普通の、リュウジさんからは想像もできない……………。

「り、リュウくん？ ……一体どしたの？」

魔王が声をかけても、リュウジさんは反応もせずテレビから目を離さない。

「……………リュウジ、一体どうしたって」  
『り、臨時ニュースです！！』

ファイファイが言いかけたところを、いきなりテレビから切羽詰ったよ

うな声が上がった。けれど画面はリュウジさんが覆っていて見えな  
い。

『先ほどの情報によりますと、渋谷の交差点で爆発事故があった模  
様です！ 上空から長谷川さんが中継でお送りいたします！』

【げ、現場上空の長谷川です！！ ご覧ください、交差点から立ち  
昇るこの黒煙を！！ まるで悪夢を見ているかのような景色です！  
！ これは、テロ組織の犯行なのでしょうが！？ ああ！ また爆  
発が！！】

画面は見えないけれど、けたたましい音と男性の慌てたような声と、  
何かが爆発したような音がテレビから聞こえてきた。テロって何で  
しよう？

って、シブヤって言えば、前にリュウジさん達と一緒に買い物しに  
行った場所じゃあ？

【ああ、あれは！？ あんなところに人がいます！！ 爆発地点の  
すぐ近くに……………え、え？】

？

【な、何だ……………そんな、パトカーを……………素手で！？】

……パトカー？

【バン！ー！ー！】

「！？ リュウジさん！？」

「リュウくん！？」

「ちょ！？」

突然、ボクらでさえも気付かないほどの速さでリュウジさんがリビングから出て行ってしまった……何で？

「！ み、皆！ テレビ見てテレビー！」

「？」

フィフィがボクらにテレビを見るように促す。

画面には、髪が真っ白な人がクルマを片手で持ち上げていた。



（?????視点）

……はあ、弱っち。

「こんなもんかあ？ もうちょっと骨ある奴おらんのかいな？」

紙くずのように手にしていたパトカーをポイと投げ捨てて、唾をぺつと……見回せば、火が立ち昇る建物やら割れたアスファルトやら。そんでもってものは動くことのない人間達。全員、俺のこと邪魔だとか抜かしてた口先だけのよわっちい連中。

脆いもんやなあ、人間で。ちよつと捻ればすぐ千切れて、ちよつと引つ張ればすぐ取れる。出来損ないのプラモみたいや。

「……ま、こんだけ騒ぎやあいつも気付くかもしれんなあ。」

そもそもそれが目的やし。

『貴様、そこを動くな!!』

? あん?

「……………おお?」

ほほお〜……………見回してみれば、さっきの倍の警察とパトカー、さらにはS A Tに自衛隊の戦車やらがおるわおるわ。しかも前後挟み撃ちでときましたかい。たかが俺一人で、大袈裟な奴らやな〜。

『大人しく降伏しろ!! さもないと撃つぞ!!』

……………つーか叫んどる刑事さん。アンタビビつとんのやる? せやから拡声器から聞こえる声そんな震えてんねやる? 大体銃向けとつたら勝てる思たんかこのビビリマンどもが。

「……………はあ、しゃあないの。」

いい加減疲れてきたわ俺……………ついでやし、この火も消したるか。別に意図的に点いたわけちゃうし。アスファルトに埋まってたガス管が破裂しただけやし。

「……………溺れてまえ。」

自分の氣を、大氣中にある水素と融合させる。やがて俺の眼前に大小さまざまな水玉が数十個浮かび始めた。やがて水玉は徐々に増えていき……………最終的には、砲弾ほどの大きさの水球ができあがった。

「ほな、さいなら。」



「うわ、な何だ!?!」  
「地震!?!」

【ドン!?!?!】

慌てる連中の足元から地下に溜まっとった水分を膨張させて爆発させた水柱を発生させてパトカー、戦車もろとも空の彼方へと吹っ飛ばした。

しばらくしてたら、人も車も、戦車もドサドサ落ちてきよった。当然、全員無事じゃすんどらん。

「……………ザツコいなあホンマ……………」

見てて呆れるわホント……………頑丈言われてる戦車でさえ、俺一人の力で大破やで?

「ひ、ひいいいい……………」

「? おろろ?」

何や、警察一人無事なんかい? 他の連中吹っ飛んで仏ほとけなってもうたってのに。

「……………ま、ええわ。」

どうせこいつも、今からお仲間んとこ逝くし。

「ま、運が悪かったと思うて……」

ツカツカ歩み寄って、すっかり腰抜けてもった警察の目の前で立ち止まる。這<sup>ほうほう</sup>這<sup>てい</sup>の体で逃げ出そうとしとるけど、全然進んでへんやん。

「ほな、」

そんな腰抜けに、俺は手刀を振り上げて、

「さいなら。」

容赦なく振り下ろす。

【ブゴーン……！……！】

「……………」

が、あと数センチで獲物の頭をかち割ろうとしたところで、ストップした。

「……………はあ。しゃーないわな。」

腕を降ろし、ちよいと空を仰ぎ見る。

「元々の目的、忘れたらあかんし。」

その為に、俺はここに戻ってきたんだし。

「正味な話、殺戮なんて単なる暇つぶしや。」

その為に、俺はこんな体になったんやし。

「とりあえずウォーミングアップはこれくらいにしとこか。」

その為に、俺は

「今からが本番やし……。」

オマエに会いに来たんやし。

「そやろ？ 親友。」

（龍二視点）

「……………」

あの殺人事件が写されていたという画像を見た瞬間、俺の頭の中は真っ白になった。

ただ、気付いた時はテレビに掴みかかっていた。

ただ、テレビに映った白髪頭を見た瞬間、気付いた時は家を飛び出していた。

ただ、何も考えず、その場に行くことのみにか頭になかった。

ただ、気付いた時には全速力で渋谷まで走っていつていた。

ただ、通行の邪魔をしていた瓦礫や戦車を全てぶっ飛ばしていた。

ただ、俺は



「龍一。」

確かめたかった。

「……………」

そいつが本物なのか。

「やっと来たか……………まったく、どんだけ暴れさせりゃいいんじゃないかって話やな。」

そいつが殺しなんかするはずないと。

「……………」

そいつ、

「ま、何にせよよろしく会えたんや。思い出話に花咲かせよつちな  
いか？」

じつは、

「……………」

死んだはずだと。

「な？ 龍二？」  
「……………」  
「虎次とらじ。」

（アルス視点）

「え……リュウジさん!？」

リュウジさんが飛び出してしばらく呆然としていたら、テレビの中から爆音がして振り返ってみると、さっき飛び出したばかりのリュウジさんが白髪頭の人と対峙していた。飛び出して三分もかかってないのに……まあこれだけならいつものこと、って片付けられるんです。

けれど……なんだろう……

遠くからでも、リュウジさんの顔から恐れや混乱が見え隠れしているのがわかる。

「リュウ……くん……?」

「あいつ……どうしちゃったのよ?」

魔王もファイファイも、リュウジさんの様子を見て明らか戸惑っている。普段あんな顔しないリュウジさんを見たら、誰だって驚きます。

でも、驚くよりまず……この体を蝕むような、底知れぬ不安は何なんだろう?」

「……………」

【ガタ】

不安に押しつぶされそうになったボクは、勢いよく立ち上がった。

「アルス？」

「ごめん、ボクリュウジさん追いかける!!」

「わ、私も!!」

魔王も立ち上がって、ボクらは出かける準備を始めた。

あの白髪の人……明らかリュウジさんと関係がある。じゃなかったら、リュウジさんがあんな顔するわけない。

あんな顔をするリュウジさんを……放っておけるわけがない!

「ちょ、待ちなさいよアンタ達!」

「待てないよフィィイ!! 早く行かないと……!!」

「アンタ達行き方わかんないでしょ?」

「……………」

あ。



カリンさんが家の中にズカズカと入ってきて（多分合鍵使用）、それに続いてマサさん、カナエさん達も……。

「あ、アルス…龍二は!?」

「……………」。

……………。

!!!!!!

「カリンさん!!!」

「うひゃ!?!」

思わず花鈴さんの肩をガシッと掴む（身長が花鈴さんの方が高いからボク背伸びする形だけれど）。

「お願いですシブヤまでの行き方教えてください今のリュウジさんなんだかいつものリュウジさんじゃないんです何だかボクすっごい不安なんです今にも胸が張り裂けそうなくらいなんですですからお願いです無理だと承知なんですけど連れてってくださいお願いします!!!」





稲神 虎次……俺の、親友だった男。

「？ 何や黙りこんで。嬉しゅないんかい？」

「……俺が素直に嬉しがると思うか？」

「……あ、せやったつけ？」

ポンと掌を叩く虎次……だが、俺は笑えない。

「……………なあ。」

「ん？ 何や？」

蚊の羽音にも満たない小さな声だったが、虎次は聞き取った。昔っから耳はよかつたんだよなこいつ。

「一つ、聞いてもいいか？」

「ああええで？ 俺のスリーサイズは」

「マジメに答える。」

自分でも無意識のうちに殺気を飛ばし、氣を放出させて周囲に風を発生させる。それに対し、虎次は全く動揺もしないで笑みは消さず、かつ目は真剣そのもので俺を見つめていた。

「……………単刀直入に聞く。」

お前何で生きてる。」

「……………。」

案の定、無言……そう、こいつは五年前に……死んだ、はず。

「……………へえ？」

聞いたら、虎次が蔑むような目で俺を見つめてきた。

「何で生きてるか……………ねえ？ よく言っわ。」

お前が殺したくせ。」

「！！」

……………あ……………。

「全く、とんでもない奴やで。お前があそこでいらんことせんかったら、俺は今まで通り生きてこれたのに。」

……………違ウ……………。

「あゝあゝ、俺の人生短かったなあ。誰かさんのせいだ。」

……ヤメロ……。

「死後の世界ってとんでもないとこやったでえ？ 寒いし暗いし体動かへんし。」

……言ウナ……。

「まあ、今はこうして体動かすことできるけどな？ でもそこまで行く過程が」

「言つなああああああ……！！！！！！」

絶叫し、拳を振り上げ、ただ我武者羅に虎次に突進していく。もはや周りなんて何も見えない。ただ何も考えず、自分でも何で殴りかかっていったのかわからずに。

「……何や、おまえらしくもない。」

【バァン！！！！】

神速で放たれた突きは、いとも容易く掌で受け止められた。周囲に

衝撃波が迸り、地面を割り、鉄筋のビルを吹き飛ばす。

「ただ闇雲に攻撃するなんて、いつものおまえちゃうで？ どうしたん？」

「うらああ！！」

「おおっとい。」

上段回し蹴りを虎次の頭にかまそうとしたが、難なくかわされた。

だがそんなのどうでもいい……どうでもいい！！

「違うー！！ 違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！！！！！！」

「何がちゃうねん。主語言えっちゅーねん。」

ただ突く、蹴る、突く、蹴る、突く……様々な型を駆使して、ただただ攻撃の手をやめない。

子供の喧嘩と、同じだった。

「……しゃーないな。じゃ反撃させてもらつとしますかい。」

足刀蹴りを捌かれ、即座に虎次は突きの体勢に入る。

「むすこ……」

俺に負けず劣らずの正拳突きが、俺に迫ってくる。

「がつつつ！！！！」

普段の俺なら避けられたらう突きは、見事に腹部に命中して吹っ飛ばされた。

「ぐううううう……！！！」

吹っ飛ばされても、足を踏ん張って地面を削りつつブレーキをかける。止まった時は、虎次との距離は相当離されていた。

「……………くは……………！」

腹部に走る激痛に、思わず膝をつく。

龍鉄風をかけておいて、この威力……今まで受けてきた中で、こんなにまでの痛みを感じたのは初めてだ……クソ！

「何や、終わりがい。しょーもな。」

「……………。」

ちよっと動けば、激痛が走って体がフラつく……………だが！

「破つ！！！！」

負けたわけじゃねえ!!

「!?!?」

地面を思い切りぶん殴りアスファルトを削る縦一直線の衝撃波を虎次目掛けて飛ばす。

「ほいな。」

が、その衝撃波はいとも容易く避けられる。

「しょぼいで? そんなんで勝てるんでも」

避けて油断したところを、拳に氣を溜めながら急接近。衝撃波はあくまでフェイント。

とにかく……今は……

「おおおおおお……!?!」

殴る!!!

「『龍閃弾』……!?!」

十八番である龍閃弾を、衝撃波によって巻き起こった土煙の中にいる虎次の顔面を狙って放つ。

「……………へっ。」

だが奴は、

「……………はあああああああああ……………！」

視界がゼロのまますでに突きの体勢に入っていて、

「逝けや……！」 『虎砲拳』……………！」

氣を溜めていた。

【ズン！！！！！】



第六十一話 最悪な再会（後書き）

毎日教習所に明け暮れているため、更新は遅れがちです。ごめんなさい。

さあ、急いで返信しなければ！ 今から教習だ！！

第六十二話 龍の躑躅い（前書き）

更新遅くなりました。待っててください………いてくださ  
ったらいんですが………ともかく、遅れてすみませんでし  
た。

## 第六十二話 龍の躊躇い

（虎次視点）

俺の虎砲拳、そして龍二の龍閃弾がぶつかり合い、とんでもねえ衝撃波が渋谷中に広がる

……ことはなく、俺が予め張っておいた結界のおかげでこの一帯だけを破壊するだけに留まった。無かつたら渋谷なんて軽く吹っ飛んでいたやろうな。強靱な結界やったけど、さすが俺と龍二や。ヒビ入っとなで。

「……………」  
「……………」

で、互いに拳が正面衝突したまま硬直する俺ら。

「……………チィ！」  
「ふん！」

大体三十秒くらいそのままでおったけど、二人同時に距離を離れた。

「あゝいて。加減知らんのかいお前は。」  
「……………」

右手がちよつと痛むけど、フーフーしたら治る程度。あいつも同じくらいの痛みを感じてはいるらしいが、そんな素振りを見せずにただ右手をダラリと下げてるだけ。タフやねえ相変わらず。

……だが。

「……お前おかしいで？ 普段のお前やったら俺なんて一捻りやる？」

そう、こいつと俺とでは差があったはずや……あいつの方が、上のはず。

「……。」

「……オイ、黙つたらんで何か言えや。」

「……。」

じつと俺を睨みつけているだけで、口を開こうとしない。正直、イラつく。

「……チツ。シカトかい。」

ええ度胸やないか……俺にとってシカトがどれだけ嫌なもんか、十分わかっとするはずやねんけどねえ？

「……まあええわ。」

もう加減せえへんで？」

自らの氣を高め、大気中の水素をさながら磁石のように吸い寄せていく。龍二が『火』なら、俺は『水』。対極する属性で、明らかこつちが優位。

優位、やけど……相手が相手だけに、油断はでけへん。

「……はああああああ……」

濃縮した水素を周囲に集め、水を形成していく……さらに氣を高め、それらの水を

「おらあー!!」

【キーン】

氷に変化させる。

「さて。発射準備完了。」

俺の体の周りに浮かぶ氷をフワフワ浮かせたまま、右人差し指をチヨンと上へ向ける。

「ほな龍二。」

そして指をクルリと回して、

「悪いけど。」

ピツと対象りゅうじに向けた。

「逝ひよつてくれや。『氷虎華弾』。」

氷が一斉に弾丸を超える速度で、龍二目掛けて飛んでいく。

「!!」

腕をクロスさせた龍二はそれをガードしようとして試みたらしい。が、  
無駄や。

【ザザザザザザザザザザザザ!!】

「ぐううううう……!!」

氷弾は龍二の肌を掠めて切り、またはぶち当たって痣を作っていく。

俺は次々と氷弾を作り出して顔をしかめる龍二に容赦なく撃つていった。

「ほれほれどうしたあ？ 避けなかったらいくらお前でも死んでまうでえ？」

「……………！！！」

撃ちながら挑発。それでも龍二はずーっとガードしたまま動こうとしない。

……………。

「……………まあええわ。これで終わりや。」

いろいろ気になる点が多いが、そろそろ終わらしたるか。

「むんんんんんんん！！！！！」

氷弾の嵐を一旦止め、全身の力を込めて持ち上げるかのように腕をゆっくりと上へ上げていく。

すると地面から水が浮き上がっていき、少しずつ集まっていき、やがて徐々に集まってくる数が増えていって、そして……

「うくび〜？」

俺の身長の倍くらいあるバカでつかい氷の砲弾の出来上がりや。

「『氷虎華砲』！……！」

両手を突き出し、目の前にある氷砲弾をすでにポロポロの龍二に向けて射出する。

「……！ がつつつ……！」

大きさに似合わない猛スピードで飛んでくる氷砲弾を龍二は受け止めもせずにもろに顔面にぶち当たり、大きく仰け反りながら吹っ飛ばされた。

「ついでに。」

そして、俺は突き出した掌に力を入れ、

「『砕』。」「

咄くと同時に拳を作った。

それを合図に、氷砲弾は一瞬で砕け散ってさながらショットガンの要領で無数の破片が吹っ飛んだ龍二に追い討ちをかける。

「……！……！」

もはや言葉にできないくらいダメージを受けたらしい龍二はそのまま前方に聳え立つビルに突っ込んでビルを積み木のお城のように



崩壊させ、さらにビルを破壊し……計六つものビルをさながら怪獣大戦争の如くぶつ壊していった。

「……………呆気ないなあ。」

土煙をあげる瓦礫と化したビルを見つめ、ポリポリと後頭部を搔く。さっきの警察と自衛隊の連中よりかはマシやけど、俺からしてみたらあいつはザコ同然やった。

ゆえに、全然楽しいないわ。失望した。危機感なんてまるで感じんかったし。

「……………。」

何より……。

「お前らしくないやんけ。アホ。」

あいつにかかれば、あの氷虎華弾だって龍鉄風で防げたはずやし、何より全弾弾くか避けるかするやろ……砲弾やって簡単に碎けれたはずなのに。

何やねん……お情けのつもりかい。

「……………フン。」

……とにかく、とつととドドメさしたるかあ……と。

つーわけで、元ビルだった瓦礫をドンドン蹴り飛ばして乗り越えて（つーかビルふっ飛ばしすぎてものっそ遠いがな）、大体五分くらいかけてようやく最後のビルがあった場所に辿りついた

……が……。

「……あいつどこ行ってん？」

龍二が倒れているであろう場所を確認してみたら、そこにはただ石ころが転がっただけで何にもなかった。

「……………」

念のために周囲も調べてみたが……おらんわ。気配も感じへんし。

あの怪我で動けたか……やっぱさすが龍二やな。前言撤回。改めてあいつの凄さを見直したわ。

「そらそうでないとなあ？ おもろないもんな？」

クツクツと静かに笑って、とりあえずその場を後にすべく背を向けた。

「……………にしても。」

空を仰げば、雲一つない、快晴の青空。建造物から立ち昇る黒煙は除いて、めっさ気持ちいい空や。

俺は、こういう空が好きやったんや。

「……………はあ。」

昔はな。

「正味な話……………こんな形で会いとうなかつたわ。」

ポツリと漏れ出す俺の本音……………その眩きは誰にも届くこともなく、消えていった。

〈アルス視点〉

「な……………あ……………」

花鈴さん達のおかげで、どうにかシブヤの近くまでは来れた……けど、途中の駅で緊急事態につき通行禁止、となった時、焦った。

急がないといけないのに！……けど、安全を守るためには、仕方ないことだと思う。けど今はそんなこと気にしてなんかいられない。だから、咄嗟にステイルが通行止めしている人達を、睡眠魔法を使って昏倒させてくれたのは正直強引すぎる気もしたけど、この際しようになかった。

デンシヤも使えず、必死になって走って、ようやく目的地であるシブヤに辿り着いて、

「なん……なのよ、これ。」

「うそ……。」

目の前にある荒れ果てた光景を見て……ただ立ち尽くすしかなかった。

以前、皆で買い物に来た時の面影なんて全くない。ビルに亀裂が走って、道路は割れ、車がひっくり返って炎を吹き出している。何よりもつらいのは、そこかしこに倒れている傷だらけの人達。

おそらく、もう生きてない。

「……………うっ!」  
「カナエさん!?!」

隣のカナエさんが、死体やら何やらが混ざったツンとする臭いによつて吐き気を催したらしく、膝についてケルマの介抱を受けていた。

「……………ひどい……………」

「ええ……………これはいくら何でも、ひどすぎます。」

幾多の戦いを潜り抜けてきたリリアンとスティルも、この光景にただ圧倒されるばかりだった。

「……………リユウくん。」

「……………。」

でも、ボクは……………

「リユウくん……!」

「リユウジさん……!」

リユウジさんのことで、頭が一杯だった。

「お、おいお前ら……。」

「龍二、どこだ……!」

「つて久美まで!?!」

「影薄、喋ってないでお前も探せ……!」

「わ、わあつたよ……………つてこんな時ぐらい名前で呼んでくれません

かねえ!?!」

リュウジさんがテレビを見ている時の顔……あんな顔、普通のリュウジさんは絶対にしない。

「リュウクーーン!?!」

「リュウジサーン!?!」

「二人とも、先走りすぎちゃダメよ!」

絶対、しないのに……。

「リュウジさん!! リュウジサーン!?!」

リュウジさん……!?!

「みゆ!?!」

「? クルル?」

突然、魔王が何かに気付いたかのようにある方向へ素早く顔を向けた。

「……………」  
「く、クルルちゃん？ どうしたの？」

復活したカナエさんが口元をハンカチで拭いながら立ち上がった。

「……………」  
「匂う。」

「……………」  
「へ？」

は、はい？

「こっちー!!」

「えー!? ちよ、魔王待ってよ!?!」

匂うって何!? って言う前に魔王が駆け出したから、ボクらは追う羽目になった。

「クルルちゃんちよっと速いって!?!」

「魔王様プリーズウエイター!!」

「黙れ。」

後ろからカナエさん達が追いかけてきてるけど、魔王は止まる気はさらさらないらしく、徐々に速度を上げていく。

「ま、魔王! 待ってよ!」

「こっちこっちー!!」

呼び止めようにも、魔王は荒れ果てたアスファルトの道をタッタッと走って皆を引率していく。

「ん！」

「わっ！？」

「ぷひゃ！？」

いきなり急ブレーキをかけて停止した魔王の背中に止めれずに当たるボクとボクの背中に当たるフィィイ。

「いったた……魔王、一体何」

「しっ！」

「？」

文句を言おうとしたら、カルマがボクの口を封じた。

「クンクン……クンクン……。」

「……あの、あれ……。」

「魔王様は鼻が利くから、ああやって捜してるんだ。」

犬ですか。とゆーよりこんなところで新事実ですか。

「……………こつちー！！」

ひとしきり匂いを嗅いだ後、魔王はまた駆け出してボクらはその後を追う。

「……あいつは犬か。」

「マサさん、それボクも思いました。」

追いかけている間にマサさんとボク。

けれど、今回ばかりは魔王の……嗅覚？ をアテにするしかない。



「フンフン……フンフン……。」  
「……クルル、まだ着かないの？」

匂いを嗅ぎながら走る魔王に、フィフィがその後ろを飛びながら聞いて、

「!?!」  
「ぶえ!?!」

また急に魔王が立ち止まってフィフィが肩にぶつかった。

「リュウくん!?!」  
「ちょ、急に立ち止まらないで……って、へ?」

鼻を抑えるフィフィを尻目に、魔王がある場所一点へと駆け出した。

その場所というのは……。

「? ここは……カフェ?」

大きな窓ガラスは砕け散り、中にあるテーブルやイスはひっくり返り、ガラスや石が床に散らばったせいで以前はおしゃれな雰囲気を醸し出していただろうと思われる店は無残にも荒れ果てていた。外壁にもヒビが入って、今にも崩れそう。

でも、ここからは何の気配も感じられないんだけど……。

「ちょっとクルル！ 待ちなさいよアンタ！」

ファイファイが魔王を追って店の中へと入っていったのを見て、ボクらも慌てて追う。中に入ってみれば、外で見るよりも悲惨な状況で、床に割れたカップやコーヒートかの液体が流れ出ていた。

でも、そんなのはどうでもよかった。

「……………これは……………は……………」

入り口から店の奥へと、大小さまざまな赤い点がポツポツと続いていた。踏むと、それはまだ湿っていて、靴を擦ると跡が線を引いた。

「これ……………まさか、血？」

「……………。」

横でカリンさんが呆然と呟いたけど、ボクの耳のは入らなかった。

まさか、これは……………そんな考えを、必死で振り払った。

そんなこと、あり得ないから。あり得るはずがないから。

けれど……………。

「魔王様、どこ行っただんですかー！？」

ケルマの声で思考を中断すると共に、ボクは魔王の後を追うべく店の奥へと走り出す。血も魔王が走っていった方角と同じ箇所に着いている。

だから……………余計なことを考えてしまう。考えてはいけないことを考えてしまう。

そんなの……………ヤダ！

「魔王！」

奥の開いていた扉の中に飛び込むと、魔王とフィフィが背を向けて立っていた。

ただ、硬直したように動かないで立っていた。

「？ 魔王、どうしたの？」

訝しげに思って、魔王の肩を叩こうと手を上げた。

「……………リュウ、くん？」

手が、止まった。

「…え？」

魔王の肩越しから、その視線を辿る。

ダンボールや食器が乱雑に散らばる部屋にある、大きな棚。その棚にもたれかかるようにして、リュウジさんは座り込んでいた。

「ねえ……ウソでしょ、リュウジ?」

体中を、真っ赤に染めながら。

第百六十二の話 龍の躡踏い（後書き）

感想の返信はもう少しだけお待ちください。

第百六十三の話 龍一と虎次 <前編> (前書き)

今回から、前編、中編、後編という風に分けて、龍一の過去の話を書いています。

〔龍二視点〕

「おい待てよ。」

「あ？」

朝、中学に向かう途中いきなり呼び止められた。声からして明らかに友好的ではないと取れる。

声が出た方を見ると、いかにも私達は不良です！と公言しているかのように髪を染めたり制服を着崩したり（まあ俺もそうだけどさ）した同世代の男子五人が、ニヤニヤ笑いながら歩み寄ってきた。

面識もなければ見かけたこともない。となれば、大体こういう奴らがすることと言えば……。

「ちよつとこつち来いよ。」

強引に肩をくまれ、方向転換して人気のない路地へと連行された。そしていきなり俺を壁に追い込んで、五人で周りを囲んで逃げ道をなくした。

「なあ、ちよつと俺ら金欠なんだけどさあ？ 金貸してくんね？」

ほら来た。カツ上げ。

「もちろん、断らねえよな？」

そう言つて、さらに距離を詰めてくる五人。

…っーか。

「顔近い。ウザイ。キモイ。臭い。シね。大体何で俺が会つて間もないクソなテムエら何ぞやに金貸さないとなんねえんだよアホか。脳味噌にウジ沸いたオメエらなんて自動販売機の下に落ちてる小銭でも探しとけ生ゴミ以下ども。」

言いたいことバシバシ言つてやった。すると言われた五人は予想外の返答に呆気にとられていたが、しだいに何を言われたのか理解していったらしくだんだん顔が赤くなつていった。今頃反応すんのかよ。ホントバカだなこいつら。揃いも揃つて。

「…んだとコラア!？」

正面の奴が俺の胸倉を掴み上げて、右腕を振り上げてきた。それに對し、俺は軽く左腕を横へと薙いだ。

「………!!??」「………」

その風圧により、五人は紙切れ同然に吹っ飛ばされて背中を塀にぶつけた。ぶつかった箇所から横へとヒビが入つていき、塀全体を崩壊させてやった。全員口から言葉にならない呻き声を上げつつ胃液を吐き出しつつ塀の残骸の中へと埋もれていく。

「…たく、この程度で飛ぶなつての。このクズどもが。」



悪態をついてから唾をぺつと吐き捨て、不良連中と破壊した塀をそのままにその場を後にする。腕時計を見れば、終業式までは後五分もなかった。

「……………チツ。かつたりい。」

だが、俺は慌てることも焦ることもなく、仏頂面のまま足を進める。

中学時代。小学校のころに転校して、転校先の小学校を卒業して、義務教育によりそのまま地元の中へ行くこととなり、今では中学一年生。それも今日までで、今度からは中学二年生として過ごすこととなる……………

けれど、この頃の俺は自分でもわかるくらいピリピリしていた……………  
通行人も、まるで俺が不良だとも言わんばかりに道を空けることも多かった。

別に親子関係とかが悪いわけじゃねえ。親父もお袋も、俺にとって  
は大事な家族だ。邪険にすることはない。

小学校に転入してからの数ヶ月は、とくにこれといって何事もなく、友人もそれなりにできていたために不満なんてなかった。ただ、転入する前からケンカが周囲が引くくらい強いことは、自分でもよくわからなかった。

そりゃジジイのところまで修行はしたさ。従弟と一緒に都市を半壊させてしまつて以来は力をできる限りセーブして大騒ぎするような真似は無くなつた。なのに、軽く腕を振るだけで相手を吹っ飛ばす俺の力を見て恐れる連中が後を絶たなかつた。

それでも、別にいいと思つた。強くて何が悪い？ 自分を、大事な物、人を守る力があつて何が悪い？ 最初は怖かつた力だが、小学校五年生辺りからそう思うようになっていた。そんな考えが、中学一年になるまでの間はずっと続いていた。

けど、俺は聞いた。聞いてしまつた。

真夜中、トイレで起きた俺はリビングの手前まで来て、ドアの隙間から光が漏れているのを見て訝しげに思つた。すでに親父達は寝たはずだ。

「……誰かいんのか？」

一人小声で呟き、ドアの隙間から中を覗き見る。

「……それ、本当なのあなた？」

「ああ……。」

案の定、リビングのソファに俺の親父とお袋が向かい合わせで座っているのを確認できた。

( 親父にお袋？ 何してんだこんな時間に……。 )

親父が背中を向けて話しているから、表情は見えない。だが、親父と正反対の位置にいるお袋が深刻な顔をしているのを見て、親父もおそらく同じような顔をしているんだろうということは確信できた。

「君がお風呂に入ってる間に、父さんから電話があった。話し方からして嘘じゃないし、第一嘘をつけるような話じゃない。」

親父の言う“父さん”というのは、ジジイのことだ。放浪の旅をしていると言っていたが、時たま電話してきて、俺と一緒によく学校やジジイの土産話とかで盛り上がったもんだ。親父やお袋が電話にでた時は、ジジイは速攻で俺と代わるよう要求すると親父達は話していた。

が、話しを聞く限り、今回は珍しく親父に用がある電話のようだった。

「そう………そうなの。」

親父の話を聞いていたお袋は、力なくソファにもたれかかった。

「………あの子が………龍二が……。」

( ……俺の話か……？ )

ボソリと呟いたお袋の声を、俺は聞き逃さなかった。

「……正直、僕も耳を疑ったよ……父さんから聞いた時は、何度も

聞きなおした。でも、今までのことから考えてみても、真実だ。」

「……………」

顔は見えなくても、親父の声からは悲痛な感情が読み取れた。

それから、沈黙が五分……十分間は続いた。

「……………あなた……………これから、私達どうすればいいの？」

最初に沈黙を破ったのは、お袋。その目からは、薄っすらと涙が流れていた。

「……………どうもしないさ。」

「え？」

「僕らは、龍二の親だ。自分達の最愛の息子を、そんなことで手放してなるものか。」

……………そんなこと？ ……何の話なんだよ。気になるだろ。

「……………けれど、私達はもうすぐ……………」

「ああ……………わかってるよ。」

二人は、一週間後に外国へと飛ばなければならぬ。俺や周囲には海外旅行という事で通っているらしいが、実際には情勢が不安定な国へとボランティア活動のために赴かなければならぬ。そのこともあって、心配はかけたくないから旅行ということにしたんだろうけど、生憎俺はその事実を知っていた。二人はそんなこと夢にも思わんだらうけど。

「それでも、予定を変更することはできない。だからこのことは秘密にしておかないとならない。」

「ええ……………わかってるわ。」

……………何なんだよ。何を黙ってようつてんだよ。

「私達だけの秘密にしておきましょう。」

けど、俺はこの話を聞かなきゃよかったと後悔することになる。

「あの子が、」

俺が、

「“神子”<sup>かみこ</sup>だということとは。」

「ああ……………。」

普通の……人間じゃないという話を。

“神子”<sup>かみこ</sup>という話は知っている。以前転校する前、ジジイの家に遊びに行った時にジジイの書庫の目立たない端っこの箱の中にあつた文書の中に書いてあつた。

代々、俺らの一族は一人の女と“人ならざる者”とやらが結婚してからが始まりだとか。そして千年に一度、その“人ならざる者”の魂が生まれ出た赤子の肉体に宿るらしい。それが“神子”。

“神子”は、文書によれば魂の力によって赤ん坊の頃から岩一個を持ち上げられることができる、という。まさに鬼以上の化け物の力だつた。

その本を読み終えた時……少なからず、自分はもしかしたらつて思えた。もしそうだったら、自分は特別な存在みたいですよいいことだと思つた。

けど、すぐに思い直した。“神子”はれっきとした人間だが、その体内に宿る力は全生物を遙かに超越している“人間であつて人間とは違う生物”。

……俺は、親父とお袋と、ダチ達と同じ人間でいたかつた。人間で

あることを否定されるのは、何よりキツイことだった。

過去、花鈴をいじめてた奴が花鈴に『この人の形をしたゴミ女！』とか抜かした次の日、俺は影でそいつをボコにした。血が出ても、泣いて許しを乞うても、許そうとはしなかった。

大事なダチをゴミ扱いするような奴を、俺は許すことはできなかった。それは自分に対しても同じこと。

だから、俺は自分が普通に強いだけの人間だ、と思い続けた。本の内容を完全に忘れ去ることはできなかったが、それでも別に気にしなくなっていた。

けど、その思いも……親父とお袋の話で、潰えた。

家では親父達に心配をかけまいと普段通りにすごし、けれど外では近寄りがたい空気を纏って生活していた。正直、窮屈な他ならない。

いつも自由きままに、のんびりと暮らす……俺の理想のライフスタイルは、崩れていた。直そうにも、正直何もかもがダルく感じた。

もうどうでもいいや……そんな気持ちで、俺は生活していた。

かと言って、髪を染めたわけでも、派手になっただけでもない。普段は学ランの前のボタンは全部外して全開にしていることと、花鈴にもらった大切なヘッドフォンをつねに首にかけていることくらいし

かせず、このスタイルを崩すつもりは全然なかった。

けど生活態度は変わった。これまでよりも、ケンカが多くなった。イライラして、ちよっとしたことですぐにキレるようになった。絡んでくる奴らも、ほとんどを病院送りに近いところまで痛めつけてやった。

それでも大きな騒ぎを起こすまいとしたのは、親父達に迷惑はかけたくなかったから。こんな気持ちにさせた親父達が憎いと思いつつも、心の底から憎めずに、いつそ大暴れすればどれだけスッキリするんだろうとか、そんなこともできず………そんな思いがぶつかり合い、同時に俺のストレスもどんどん溜まっていった。

どれだけイライラを解消しようとしても、何も変わらない。胸の中に気持ち悪いモヤモヤや、虚しさだけが募る悪循環………気分は最悪だった。

唯一の救いは、花鈴にもらったヘッドフォンで音楽を聴くことが、俺の癒やしだったこと……これが無かったら、俺はすでに暴れまわっていたかもしれぬ。それほどまでに、俺は追い込まれていた。

いや、自分で自分を追い込んでいた……とでも言うか。

そんな気持ちのまま、俺は新たな学生生活を同級生達とすごすこととなる。正味な話、エンジヨイとかそんなんする暇なんざねえ。毎日授業なんか適当に聞き流すだけでダルいったらありやしねえ。教



師には日頃の行いが悪いことでマークされてるし、友人とメシを一緒に食うこともなければ、駄弁ることもねえ。

俺は、完全に孤立していた……………少なくとも、今は。

「……………あゝクソ、マジかったりい。」

いつも歩く通学路を、俺は顔を顰めながら道をノロノロ歩く。俺以外にも同じ学校の制服を着ている奴らがいたが、皆大急ぎで学校へ走っていった。後ちよいでチャイムが鳴るからだろうが、ここから急いで行っただってもう間に合わんだろう。時間的に。

……………まあ、まだ間に合う！ て思いながら頑張るのは賞賛してやるか。うん。

そんな感じに思いつつ、俺は普段通りに学校へと続く道を歩いていく。そして、これからも変わらない毎日を送ることとなる。そう思っていた。

だが、それが変わることは思ってもいなかった。少なくとも、この時まで……………。

「……………ヤベエ、マジかったりい。正真正銘マジでかったりい。もうヤベエかったりい。」

大事なことなので三回言わせてもらうが、ホントにかかったりい。学

校行くのが何かもうすんごい嫌になってきた。まあこんな気持ち珍しいことじゃないけど。主に嫌な先公とかム力つくグループとか相手にすんのは面倒くさいの他ならないから当然の如くサボる。

が、今回はそんなんじゃない。何か気分的にサボりたい。寝たい。凄まじく寝たい。

「……公園行くかな。」

通学路の途中には丁字路の右側の先に行けば、小さな寂れた公園がある。そこには、滑り台とブランコ、鉄棒くらいしかない、いかにもって感じの公園だ。遊具は所々錆付いていたりで相当ボロっちいが、それでも時々ま近所の子供達はここで遊んでいるのをよく見かける。この時間帯だと、親子連れがいるかもしれん。まあいてもいなくてもどうだっていいがな。

まそんなところだが、日当たりもいいし、木製のベンチは何気に寝心地いいから昼寝するにはもってこいの場所だ。仮に他の生徒とかが俺を目撃しても別に構うことないだろう。つか時間帯的に昼寝っつーのはおかしいか。まあ別にいいけど。

つーわけで、公園行きは決定した。丁字路に差し掛かり、本来なら左の学校がある方へ歩くところを公園がある右へと進路を変えた。寝るために。全ては寝るために。寝るために俺は歩く。寝るためにというワードは重要だ。

「ったく、大体何でこんな朝っぱらから学校行かにやらねえんだよクソボケ。毎日昼からにしろってんだボケ。」

つと、こんな風にむちゃくちゃな愚痴を言いながら歩いて二分もし

ない場所にある公園へと歩く。

ここにあるベンチの中で、入り口から入って三つあるベンチのうち真ん中がこの時間帯一番日当たりがよくて気持ちいいんだよな。利用客がいないことを願う。

「オラオラア！」

「舐めんじゃねえぞテメエ！」

.....。

利用客つつーか、目障りなバカ四人が俺のお気に入りのベンチのまん前で何かしてた。

「ゲホツ！ ..... ず、ずいません。謝るがらもう許じて.....。」

「うるっせんだよオラ！」

「グエ！」

よく見れば、一人の学ラン来た男子生徒がうずくまりながら、金髪とか茶髪とかのケバい格好した四人組みの男に蹴られまくっていた。いわゆるリンチ。倒れてる奴、さっき腹蹴られたから横向きになりながら咳き込んでる。

「テメエ、俺ら昨日一万もってこいって言ったよな？ 誰が千円持ってこいっつった？ あ？ 言ってみるよオイ？」

「グ..... だ、だって昨日、千円もってこいって..... 確かに言って.....」

…。」

「は？ じゃあお前は俺らが悪いって言うてんのかコラア！！」  
「ゲホ！！」

あつちや〜……理不尽だねえ。ようは苛められっ子がアイツあ。

「げ、げほ……はあ……はあ……！！」

あ……何か目が合った。あれはどう見ても助けってくれって言うてる目だ。ベタだね何か。

ったく、かつたるいつつってんによお……メンドいなあ。もう他所行くか。

「お前ら何してんねや！！」

体を反転させようとした時、反対側の入り口から（この公園は出入り口が二つ、対称に位置している）誰かが駆け寄ってきた。

「ああ？」

四人一斉に声が出た方へ、睨み効かせながら振り返る。

……っーか、

(髪白いなオイ。)

そう、それがそいつの見た目第一印象。髪が病的なまでに白い。太陽に反射してキラキラ光っていてメチャクチャ目立つ。

まあ別に髪が白いとか、そいつが俺より年下に見えるくらいの目えパツチリした幼い顔立ちとか、学校の制服が俺とこの学校の服だとか、そんなんはどうでもいい。それよりも、こいつは明らか今の状況を止めようと不良に向かって牙を向いている。その一切迷いのない姿勢を見て、ああこいつは熱血漢だなあ、と俺は傍観していた。

「んだよお前？」

不良のうち一人が、白髪の野郎に向かって侮蔑の目をしながら睨む。

「お前らなんぞやに名乗る名前なんか無いわボケ!!」

うわ、クセエ。今時ねえぞそんなセリフ。

「は？ 何言ってるのコイツ？ 正義の味方ごっこ？」

「ヒヤハハ、それ超ウケるー！」

ゲラゲラと笑いながら、明らか野郎をおちよくっている。

「そんなんちゃうわい。ただ目の前で悪いことしてる奴がおったら

止めるのは当然やる？」

だが、そんな不良どもの反応なんてお構いなしに野郎は平然と言つてのけた。その目に一切の怯えはない。

……ただ、今時いるかいないか微妙な性格だなあコイツ。正義感が満ち溢れてるっていうか……。

「……おいコラ。お前調子乗ってんじゃねえぞオイ？」

あ、不良どもキレた。

怒った不良どもは、リンチをやめて威嚇しながら野郎を取り囲んでいく。

で、俺はその間に……、

(オイ、こっち来い。)

「……へ？」

手招きのジェスチャーをして、倒れてる男子生徒を誘導する。何のことが一瞬わからなかったらしく、キョトンとしたがすぐに理解して躓きながらこっちに駆け寄ってきた。

「あ、テメエ待て！！」

が、それに気付いた不良のうち一人が追おうと体をこっちに向けようとする。

「オラア!!」

「ゲフ!?」

その隙に、野郎のヤクザキックがその不良の腹にモロにめり込んだ。蹴り方は大雑把だが、あの蹴りは常人じゃ見切れんな。

「こ、コイツ!!」

蹴り飛ばされた仲間を見た不良二人が一齐に野郎を取り押さえようと飛び掛る。

「ホツ!」

「?!?」

だが、野郎はその場で軽くジャンプして連中の攻撃を華麗に避けた。

「でやあ!!」

「グビツ!?」

空中で足を広げ、いわゆる開脚ダブルキックを左右にいる不良の喉元に叩き込んで吹っ飛ばした。さっきのヤクザキックを受けた奴含めて、三人とも離れた位置で泡を吹いて気絶した。

「ヘッ! どんなもんじゃい。」

野郎は右の親指で鼻を擦り、不敵に笑った。

「……………ふむ。」

で、俺はというとボロボロになった男子生徒を公園外に逃がしてから野郎を顎に手を添えながら見つめていた。

今の動きの流れ、そして蹴り……一切無駄のない戦い方。うん、こりゃケン力慣れとかそんななん通り越してるねコイツ。格闘技を極めたって感じた。んでもって……………

あ。

「おらあ！！」

「がっ！？」

三人倒して油断してる隙に、コツソリ背後に回っていた最後の一人がどっから持ってきたかわからない鉄パイプを、野郎の背中に叩きつけた。あれは痛いだろうな。

「ぐう……………！」

野郎は乾いた土の上に倒れこみ、激痛に顔を顰める。それに構わず、不良は野郎の背中に右足を乗せた。

「この野郎……………ぶっ殺してやる！！！」

追撃をしようと、鉄パイプを思いっきり振り上げ、野郎の頭目掛けて思いっきり叩きつける





心の中で言っておこう。ヤベエ、軽くのつもりがやりすぎた。メン  
ゴメンゴ。

「クッ…。」

「？ ああ、アンタ大丈夫？」

忘れる二秒前だったが、足元で呻きながら立ち上がるうとした野郎  
を助け起こす…。…こともせず、ただ傍観する俺。

「…心配すんならせめて助けろや。」

「断る。」

「オイ。」

速攻。

「…まあええわ。助けてもらたし。」

体の土を払いながら立ち上がった野郎は、右手を差し出す。

「サンキューな。飯ができたわ。」

「いらねえ。」

「なっ!？」

俺は握手のつもりで差し出された右手を無視して脇を通り過ぎた。

「別に礼言われたいから助けたわけじゃねえ。気分的なもんだ。」

どっこいせつと。とオッサンみたく言いながら、ベンチに横たわる

俺。で、野郎はそんな俺をじつと見つめていた。

「……でも、俺はそれだと気が済まんわ。」

「知るかつての。お前の問題たるがそれ。」

人の気分はまだ付き合う気はサラサラないわい。

「……俺今から寝るから。邪魔すんなよ。」

「は？ お前、今日学校やる。見たとこ学校同じみたいやし、行かんでええんかい。」

「そらお前だつて同じだろうが。」

「へ？ ……………。」

言ってから、俺は公園にあるでかい時計を指差す。

只今の時刻、9時ジャスト。

「なああああああん！！？？」

「ああ、カレーに付けて食うパン？」

「そのナンちゃつわアホオ！！！」

会って間もないのにアホ呼ばわりされたよ俺。

「ああああああ大遅刻や……皆勤賞が……はあ。」

ガックシと肩を落とし、絶望に打ちひしがれる野郎。可愛いそうだ

から声をかけてあげよう。

「記録は破れるもんだ。落ち込むな。」

「余計落ち込ませんや!!!」

ツッコミつめえな。

「……………はあ。もうええわ。」

そして何かあきらめた感じにベンチの隣の木にもたれかかった。

「何だ、行かねえのか？」

「ああ。記録は破れたし、行く気なくしたわ。もうこうなったらサボったんねん。」

「あ、そ。」

「……………」

「……………」

……………それで会話は終了、沈黙が流れた。

「……………なあ。」

「あ？」

ふと、野郎が声をかけてきた。俺は寝そべりながら応える。

「何や。寝てなかったんかい。」

「寝てなかったんだからありがたく思え。」

「何その理不尽な感謝!？」

「いいから用件言え用件。俺あ寝たいんだ。」

つっても落ち着いて寝れんが。原因？　すぐそこにいるわい。

「…お前、何でさつき俺助けたんや？」

「だから気分だったの。」

「ウソ言つなや。ホンマは見捨てておけんかったんやろ俺のこと？」

「ウソじゃねえよ。」

しつけえなこいつ。

「……ホンマに気分か？」

「ああ。今回はたまたま気が向いたから助けただけ。お前が助かったんも運だよ運。俺の気分がそんな気分だったから。だから別に礼はいらん。」

「……それ、何かいろいろおかしくないか？」

「俺の考え方なんだからいんだよそれで。」

大体、今までだってそうだ。偶然、子供が風船が木に引っ掛かって泣いてた時は助けたけど、もし面倒だ、と思つたら助けなかつたし。子供がいじめられてた時は、んなもん自分で何とかしろよ面倒くせえ、と思つて素通りしたし。

俺の人生、ほとんどが気分だ。自己中とか言われるだろうが、別にいい。

「ま、ともかくそんなわけだから。第一、俺あ飯とかそんなん嫌いなんだよ。」

「………お前、変わつとるな。」

「そうか？　これが俺の普通だから。」

ちよいと目を開けたら、木にもたれながら何かニヤニヤしてる野郎……っておい、キモイわ。

「んだよ？」

「……うし。」

「？」

何？ 牛？

「俺、お前のこと気に入ったわ！」

「……は？」

訳のわからないことを言い出したんで、俺はムクッと起き上がった。

「何言い出すんだオメエは？」

「？ 気に入った言うたんやけど？」

「まんまじゃん。」

おお、俺にもツッコミできた。

「……で？ 気に入ったから何だ。ダチになれってか？」

そっぽ向きながら適当に言ってみた。

「うん。」

あっけらかんとし過ぎた答えが返ってきてガクリと落ちそうになった。

「今から、お前は俺のダチや！」

「はああ？」

体勢を立て直して野郎を見る。そこには子供が楽しい物を見つけたかのような、活き活きとした表情をした顔があった。

「……わっけわかんねえっつもの。」

アホくさ、と思いながら、俺はベンチから立ち上がった。

「あれ、寝えへんの？」

「……眠気覚めた。どっかその辺ブラブラしに行く。」

今の俺はこんなハイテンションにや付いてけねえっつもの。寧ろダルいわ。

「じゃ。追っかけてくんなよ。」

「あ、ちよい待てや！」

歩き出そうとしたら、いきなり呼び止めやがったよコイツ。追っかけてくんな言っただじゃん。バカか。

「んだよまだ何かあんのか？」

若干声を荒げ、イライラを隠そうともせず顔だけチラリと振り返

った。

「せっかくダチになったんやから、お互い名前ぐらい言っとっや。」

……ダチ確定かい。何てまあ勝手なやつちや。

「……勝手に決めんなっての。」

「ええやんけ。せめて名前言ってこっや？ な？」

「……………」

……チツ。

「……荒木 龍二だ。」

別に名前言ってもどっつてことならねえし、フルネームだけ教えてやった。クラスとか言ったら何かこいつ付きまたってきそっつで言うのをやめた。

「ほほお、ええ名前やな。」

「うっせ。当たり前だ。」

親からもらった名前だから当然だろうが。

「……じゃ、俺の名前やな。」

……正味、聞いたところでどうしようもねえし。



「俺は虎次！ 稲神 虎次や！ よろしゅうな相棒！！」  
「ダチから相棒んなつとるやんけ。」

俺のツッコミが冴え渡る。

これが、俺と不思議な雰囲気を纏った野郎、虎次との最初のコンタクトだった。

第六十三の話 龍二と虎次 <前編> (後書き)

次回、中編。龍二と虎次の交流。

第六十四の話 龍二と虎次 <中編>

〔龍二視点〕

「おい龍二やーい！」

「…………ウゼエ…………。」

教室で窓の外を眺めつつ、ゆったりとした空間を楽しもうとした時に飛んだ邪魔くれ者が乱入してきやがった…………はあ。

「なあなあなあなあ聞いてくれ聞いてくれ！ 実は今日なあ。」

「そらよかったな。わかったから帰れ。」

「まだ何も言うてへんがな!？」

「頭の中で何言っただのか大体想像できた。」

「ほお？ なら言うてみい。」

「僕は今日パンツ履かずに登校してきました”。」

「そうそう実は先日雨でパンツ干しっぱなしにしたから履く奴が無かって〜んってアホかちゃんと履いとるわ!! ああ、そのお嬢さん方引かんといてえな!？ うそや、こいつのうそや!!」

「満足したなら帰れ。」

「そんなダチをむげに追い返したらあかんてえ！」

…………… ホントうぜえ。マジでうぜえ。地球がひっくり返るよりうぜえ。

大体、何でこんなことになったのやら…………。

始まりは、あいつと出会った次の日。その日は学校へ行く気分だったから登校した。

「ちーっす。」

で、俺は本来なら前日に開けていたであろう、二年生になって初めての教室の扉を開けた。

「！ 荒木、お前また遅刻か！」

……言い忘れてたが、授業開始時刻はとっくの昔に過ぎていた。今はちょうど朝のHR中のように。

「あーはいはい遅刻ですよ。どうもすみません。」

「何だその態度は！？ それが教師に対する礼儀か！」

「そうですが何か？」

この怒鳴り散らしてるテカ頭が、これから俺らの教室の担任を務める先公：一年の時もこいつだった。大したこととしてねえのに頭こなしに説教めいたこと抜かし、それっぽいことを適当に並べ立てて自分が一番偉いと思っているアホな大人。何故わかるか？ こいつの顔が物語っとるわ。

おまけに学年一という言葉に固執して、遅刻とか欠席とかにはとにかくうるさい。現に今がそうだ。確かに遅刻は取り締まるのは当たり前だが、こないだなんて一分遅れただけで怒鳴られてる奴を見たことがある。こう怒鳴ってばっかの奴だが、不良な奴に対しては無視が絡まれた場合は御託並べた後逃走するとんだ腰抜け野郎。

まあそんなわけだから、慕う奴なんて誰一人いやしねえ。当然だろうな。

「……何度も同じことを言わせるな！！ お前が遅刻することで皆に迷惑がかかっているというのがわからんのか！？」

嘘つけ。アンタが迷惑なだけだろが。チラって見てみれば、こいつが目え離れた際にお喋りしてたり、手紙回したりして、やりたい放題やってる奴が大勢おるし。そっちに気い回せやオッサン。

「聞いているのか！？ 大体、お前は一年の頃からずっとそうだ！  
！ 服装といい態度といい！！ まったくお前の親はどういう教育をし」

「黙れや。」

「……………！」

人の両親の悪口抜かすこのクソハゲに、軽く怒りを込めて睨みつける。それだけでこのオッサンは竦みあがった。

「……………わ、わかった。これからは気を付けるように。」

「ああ…で？ 席はどこだ。」

手下げカバンを肩にかけるようにブラ下げつつ、先公が指差した方向へ向かって歩き出す。俺が横を通っただけで、喋っていた連中は次

々に黙り込んでいき俺から目を逸らした。別にこっちから見ることもねえのに逸らす意味ねえだろバカどもが。

で、指定された席は……一番後ろの窓際か。いいね、ベストポジションだ。

「ふう。」

俺はイスに座り、カバンを机の上に置いて窓際に肘を置いて外を眺めることにした。

「……………で、ではHRに戻るぞ。」

ビビっていた先公はようやく自我を取り戻したらしく、HRを進めていく。皆も喋るのはやめて（つっても一部の連中だけで他は小声で話している）先公の話に耳を傾け始めた。

そんな中、俺は話しも聞かずにずっと窓の外を眺めていた。先公はもちろん、周りの連中もそんなこと気にも留めない。一年と大して変わらない風景。

けどそれがいい。話しかけられたら鬱陶しいだけだ。寧ろ誰も関わらないで欲しいところだ。ましてや今、小声で話しているお喋りな連中とは関わりたくない。俺はこうやって、静かに窓の外を眺める方が性に合ってる。

「……………ふう。」

ふと、先公の話を適当に聞き流しているとあいつを思い出した。

(……………なあにが俺のダチだ……………くっだらねえ。)

ただボコられそうになったところを気分で止めてやっただけだ。そんで気に入ってダチ？　アホくせえんだよったく。

……………つか、考えてみりゃあいつと俺、同じ学校なんだよな……………っー  
ことはここに來ているってことになるな。

「……………。」

よし、昼休みに早退するか。幸い、クラスは教えてねえからすぐには見つけられねえだろうし、早いとこ逃げちまった方がいい。あいつとは関わりたくねえ。

「……………以上だ。これで朝のHRを終わりにする。」  
「起立！」

日直が号令をかけ、それに合わせて全員立ち上がる。喋っていたのも立ち上がったが、俺は立ち上がらなかった。習慣でも、あのハゲに頭を下げるのは勘弁だ。

「礼！」

そして、全員適当に頭を下げる。ふと、教卓を見てみた。ハゲが俺を横目でジロっと恨みがましく睨みつけていたザマーミロ。

そんでまあ、適当に授業を聞き流し、昼休み……んまったく話聞いてねえから、時間が進むのが嫌に早いと感じた。いや、省略したって感じ？ まどっちゃでもいいか別に。早く終わるに越したことねえし。

「さ、てと。」

カバンを持ってイスから立ち上がる。大体俺が何するのか、周りの奴らのほとんどがわかっているらしい。一年の時と同じ奴らが半分以上いるからな、慣れた奴らばっかだ。まあだからってどうもすることねえけど。全員俺が何しようが、まったく気にも留めずにそれぞれ談笑したり弁当広げたりして、昼休みを満喫しようとしている。

俺は普段なら購買とかに行つて適当に屋上か他に静かなところでメシ食つて寝る……だが、今日ばかりは何か嫌な予感がする。とゆーわけで、早退することにする。

「先生。今日調子悪いんで帰りまーす。」

【ガラッ！】

「マイフレンドはっけーん……！！！」





たらあかんでえ!!!」

「誰が! いつ!!! テメエの相棒になったこのクソツタレ!!!  
死ね!!! 一年で366回死ね!!!」

「俺が! 昨日!!! ダチやって言ったのが始まりやないかいつて  
かそれ毎日死んだるやないかあ!!!」

「律儀に答えてんじゃねえよボケナス!!! つか何で教室わかった  
!?!」

「生徒会に依頼して調べてせもろたんじゃい悪いかあ!!!」

「逆ギレかコノヤロウとりあえず毎年毎日二十四時間眠つとれ!!!  
!!!」

「それすなわち永眠しとれつてことやんけ!!!」

「理解力あつて助かるとゆーわけでそうしとけバカ!!!」

そんなことを言い合いながら、俺らは町内どころか東京都を何十周も走つて一日を費やしてしまった。

で、今に至るわけだが……今気付いたが、周りの奴らは俺らのやり取りを見て唾然とし、虎次は肩に手え回しているくつちやべるし、俺はうんざりしてるし……いやホント、マジでウザイ。どうしようもないくらいウザイ。

「……ふう。」

「あれ? くないしたんため息なんか吐いて? 悩みでもあるんか  
? 乗つたるか? 相談。」

……ピキッ。

「今現在進行形で悩んだんのじゃボケえ！！！」  
「グポオン！！！」

風を切る右ストレートは見事野郎バカの頬を捉え、キリモミ回転しながら吹っ飛んでいった。

「…ふう。やれやれ。」

教室の隅に横たわるバカを無視して、ようやく手に入れた一時の平和を噛みしめることにした。

「も〜龍二ひどいやんだちにそんなんしたら」

……復活しやがったよこの野郎。

「チツ。もっと強くしとくべきだったか。」  
「ちよい待って今の眩きに殺意こもってなかったか？」  
「込めてましたが何か？」  
「うひゃあ爽やかに言われたわ〜……って何でやねん!？」  
「ムカつくからだ。」  
「ツツコミに答えんでもええねん!!！」  
「シネ。」  
「ポプウン!？」

もっかい殴った。

「……………」

翌朝、注意しつつ廊下を早歩きで教室へと向かう。途中でハゲが何か怒鳴り散らしているのを見かけたが、当然無視。今の俺にとって重要なのは、あのバカに会わないようにすることだ。少しでもあいつとの接触を避けたい。いやマジで避けたい。マジで。

「龍一」

…………マジでって言うてんだからわかれよ神様よお。殴んぞマジで。

「だから来んなっつもの!!!」

「朝パラ!!!!」

タツタカタと走り寄ってきた虎次の顔面に上段回し蹴りをかますと某有名番組を叫びながら吹っ飛んでいった。その隙にダッシュ!

「だから待ってーなー!!」

「だから復活早えんだよテメエ!!」

すぐ後ろから心底楽しんでるとしか思えない笑顔で虎次がおっかけて来て、こいつ首の骨へし折ったるかとか物騒なこと思ってしまったよ俺。

「そんな照れんでもええがなあ龍一」

「照れとらんわアホンだら!!! 底なし沼に沈めバカ!!!!」

「俺泳げへんの知つとるやるー?」

「今初めて知つたわボケナス!! つかむしろ好都合だ是非沈んでくれ頼むから!!」

「断る!!」

「ボコつたるかワレエ!!??」

「やれるもんならやってみい!!」

「じゃあ!!!!」

右足でブレーキをかけ、

「やったらあああ!!!!」

振り向き様に右フックを後ろを走ってきたバカにかましてやった。チツ、今度は避けられたか。

「うおつたあい!!??」

何か変な叫び声上げながらマトックスの有名シーンの如く体を逸らして回避しやがった。

「おおおおおお………つと! い、いきなりすなや!!」

呻き声を上げた後に逸らした体を一気に元に戻すなり、文句言ってきた。

「知るかバカ。やれるもんならやってみろつったのはテメエだろうが。」

拳をボキボキと鳴らし、威嚇する俺。ついでに言つと俺の目がマジ。超マジ。

「え……いや、あの、その……ちょっと待ってもうちよい穏便に」  
さつきと打って変わって両手を肩までの高さまで上げて、俺の怒りを静めようと冷や汗かきながら引き攣った笑いを浮かべるバカだがんなもん関係ねえ。

ちゅーわけで。

「オラアー!!」

「のわあああ!!?!?!?!」

自慢の右拳をおもつきし力を込めて振り下ろし、野郎はバックステップで回避した。

【ドカァン!!】

で、振り下ろした拳は廊下の硬い床を粉々に粉碎、小クレーターを作ってしまった。弁償はしない。

「ってちよい待て弁償せえや!! いやそれより死ぬやるあんなん食らったら!!」

「隠蔽すりゃいんだよそんなの。つかコロス気でしたが何か?」

「悪っ!!? おま、超悪すぎ!!? そんなんで主人公やってええんかい!?!」

「俺は別に困らんからいい。困んのはこんなことさせた創造主。」  
「悪魔やアンタ!!」

よく言われるよ悪魔とか黒龍ブラックドラゴンとか。いやそんならどうだってええわい。

「そ・れ・よ・り・もおおお」

ゆうつくりとクレーターから拳を離して立ち上がり、目をギラつかせながらニタリと笑った。

「……………さ、授業授業」

そんな俺を見たバカは180。回れ右してギクシャクしながら退却しようとしていた。

「大人しくボコられるおおおおお！！！！！！」

「iiiiiiiiやああああああん！！！！！！」

今度は俺がバカを追い回す展開となり、怒涛の鬼ごっこが始まった。

これにより、俺らの教室があるA号館はほぼ半壊。幸いケガ人は一人だけで、全校生徒と教職員は俺らが暴れだすと同時に校舎が揺れ始めて全員避難していて無事だった。ケガ人は当然、あの白髪のバカである（でも結局10分後には復活した）。

校舎が半壊した翌日、俺はのんびり気ままに近くの川沿いを歩いていた。暖かい日差しが降り注ぎ、川の水面が反射してキラキラと光っている。

あ？ 授業？ そんなん決まってるーが。サボタージュしたんだよ。当然だろ。昨日クラスの校舎が半壊したから代わりにA号館にある予備の教室を借りることになったから授業があるわけよ。でもダリイから行かない。サボること自体に罪悪感なんて全くねえし。つてかさ、考えてみたら最初<sup>ハナ</sup>っから学校行かなかつたらあいつに会わなくて済むわけだし……何で初めからこうしなかつたんだろつかねえ俺？ 今さらながらこれほどいいアイデアはない。まさか俺が学校サボってるなんて思いもしないだろうし、学校抜け出してまで追っかけてこないだろう。

「…………ふう。」

にしても、会って三日も経っていないが……ものっそい疲れたわあいつの相手すんの。いやマジで。今までの人生で一番苦労したかもしない。あいつのテンションにや付いていけんわ。

ともかく。今は英気を養わないといけんから……久々に！

「うほおっといー！」

土手の芝生の上で！ 昼寝でもぶっこくとするか……！

「…………あ ああああ……………」

ゴロリと柔らかい芝の上で横になり、まるでゾンビの如く声を出し



ながら息を吐き出していく。昼寝する時のこの感じが、俺はたまらなく好きだ。

太陽光線をさんと浴び、爽やかな風が体を撫でていき、耳にはその風によって花や草が擦れる涼やかな音が入ってきて眠気を誘っていく……これぞ昼寝の醍醐味。こうやってると、束の間とはいえず、日頃悩んでいることが忘れられる……俺のことも。ウザい先公のことも。嫌なこと、不愉快なことは、眠気と共に消えていく。

……………けれど。

「……………」

あいつの顔だけが消えんのは何故だ？ 何で一番嫌だと思ってる野郎の顔を忘れられんのだ俺は？ いやいやおかしいおかしいこれはちよつとどころかかなりおかしいってオイ。

ああ、そうだ。あまりによく出没するから脳裏に焼きついて離れなくなっちまったのか。うっわあはた迷惑なことって。

「……………ウザ。」

誰もいないのにポツリと呟いてしまった…。

「……………あゝもゝクソ！ 寝て忘れたる！！」

半ばヤケクソ気味になりつつ寝返りをうって右を向いた。



って突っ込んだ後に埋めました。

で、また次の日。今日は学校に出ている。

前にも言ったが、こないだ校舎を半壊させたことにより、工事の人達が急ピッチで修理を行うことが決定したのでA号館はただいま灰色のシートで覆い隠されていて立ち入り禁止状態に。面倒起こしてごーめんまことにすいませーん。

「いやあ昨日は大変やったなあ」

「……………もつと深く埋めりやよかったか。」

「え？ 何か言った？」

「なーんも。」

……………あとついでにこの鬱陶しい奴の頭ん中も工事してやってくんねえか工事のオツチャン兄ちゃん達よ。さっから前やら横やらをチヨロチヨロしやがってウゼエ。おかげで昼寝しようにも邪魔だからおちおち昼寝もできやしねえ。

「んもお相変わらずつれへんやつちなあお前は」

「ええい楽しそうに言っつな気色悪いわボケナス。」

元の教室が直るまでの間借りることになったB号館にある仮教室の窓へ顔をそっぽ向け（教室が変わっても席は同じ）、横に立って話

しかけるバカを視界に入れないようにした。

「つかお前。もうちょいで授業始まるってのにいつまでいる気だ。」  
「チャイム鳴り終わってからや。」

鳴ってからじゃねえのかよ遅すぎだろそれ。

「ええねんええねん、授業なんて遅刻してナンボのもんじゃい。」  
「心読むな。」  
「声出てたで？」

……………チツ。

「……………いや、つか授業出るよ。先公にバレたら終わりだが。」  
「先公にバレてナンボじゃい。」  
「……………まあ、そこら辺は認めてやる。」  
「お？ 珍しく意見合ったな？ さてはとうとう友情に!？」  
「……………チツ。」  
「舌打ちせんといてよお！」

ウゼエ。マジでウゼエ。

しっかしこの学校の先公どもは能無しか。一人でも有能な奴いねえのかよ。こいつしょっぴいてくれる奴とかよお。

「ナハハ、無理やってこの学校の連中じゃ」  
「思考読むなボケナス……………」  
「まあまあええやんけええやんけえ 今日こそは一緒におろつやあ」

..... チツ、ホントにウゼエ。

「.....何回言わせんだよ。ウゼエつつってんだろ？ そろそろキレ  
つぞ？」

「こないだキレたやん。第一、本心からウザイとか思ってへんやろ  
？」

.....。

「.....。」

「あれ？ どしたん急に難しい顔して？ お腹でも痛いんか？」

.....。

「なあなあ、何黙りこくつとんの？ 考え事か？ 悩みやったら乗  
つたるで？」

.....。

「...おい、どしたんやホンマ？ 何かあったんか」

「黙れ。」

自分でもわかるくらいの冷たい、感情のこもってない声で、一言言い放った。その声のヤバさには、さすがの野郎も口を閉ざしてキョトンとした。

「……へ？」

その声のヤバさには、さすがの野郎も口を閉ざしてキョトンとした。

「お前さ、いい加減気付けよ。前々からウゼエって言ってんのに何だ？ しつこくしつこく付きまといやがって。」

野郎が黙ったのを見て、チャンスとばかりに次々と冷たい言葉を投げつけていく。

「拳句、ダチ？ よしみ？ ざけんな。お前とダチになった覚えなんてこれっぽっちもねえっての。勝手にダチにされて、こっちゃんい迷惑だ。オマケにベタバタしてきやがって。ウゼエ他ねえっての。」

止まらない。今まで溜め込んでいた鬱憤が、まるで破裂した水風船の中にあつた水の如く飛び出していくかのように、止まらない。

「俺はな、お前みたいな性格した野郎が大ッ嫌いなんだよ。そんな奴にくつつかれて虫唾が走るわ。」

一人が好きだった俺の生活を、こいつは全部壊していった。壊されてしまった。それは、許せない罪も同然だ。

「だからな、」

ゆえに、

「もう付きまとうじゃねえ。邪魔だ。」

こいつを殺してしまう前に、突き放す。

「……………」  
「……………」

言いたいことを、全て言い切った。怒りで熱くなってた体が、急速に冷めていく。気付けば、教室は俺の声によって全員がこっちを唾然としたまま見つめており、教室のドアを開けた状態で固まっている先公までもが何も言えずに突っ立っていた。気付かないうちに、すでにチャイムは鳴っていた。

だが、周りのことはどうでもよかった。

「……………」

今、目の前にいるこいつ……さっきまでのテンションはどこかへ行き、打ちのめされたような顔になり、口元が震えていた。顔色も蒼白となっていた。

「……………ハハ。」

やがて、長い沈黙を破つてようやく喋りだした。

「…そっか……俺、ホンマに鬱陶しいことしてたんやな。」

顔は笑ってはいる。だが、声に覇気もなく、笑顔もぎこちない。

「悪かったな……勝手に、ダチやあ言うて。そやな。そういうのが嫌な奴やっておるわな。うん、そうやそうや……。」

俺に向かって言っている、はずなのに、まるで自分に言い聞かせるように話す。

「……………わかった……………お前が嫌なら、もう、俺話しかけるのやめるわ。」

「……………」

ああ、そつだ。もう話しかけるな。

「ほな、授業行くわ……………ゴメンな、ホント。」



わかったらさっさと行け。視界の邪魔。

「……………ホンマ……………ごめん。」

何回も謝るなっつーの鬱陶しい。

「……………。」

教室中にいる皆が見守る中、野郎はトボトボと俺らの教室のドアを開けて出て行った。

「……………チツ。」

イスにもたれ、舌打ちをする。

「……………なんだよ。」

『……………』

キレている俺がジロリと周囲を一瞥するやいなや、全員一斉に顔を前に向けた。

「……………つたく。」

イスにもたれつつ、視線を窓の外へと移す。空は快晴に対し、俺の

胸の中は穏やかじゃなかった。

ホントに腹正しい。鬱陶しい。イライラする。ここまでムカついたのは初めてだった。

あいつのあの顔を見て痛む自分に。

あいつが謝るのに対して、言おうとしていたことを言わなかった自分に。

あいつを一瞬でも呼び止めようと手をピクッと動かしてしまった自分に。

……あんな嘘偽りの言葉を並べ立てられた自分に。

翌日。

「……………」

朝っぱらから周囲を警戒しつつ……………」

「……………って、もうその必要はねえか。」

警戒するのをやめ、普段通りに歩く。何事もなく教室に辿り着き、イスにドサッと座った。

「ふう……………」

教室に着いて一息つき、ふと窓の外に目をやった。そこには未だ登校している後輩、同級生、先輩連中の数々。

その中に、白髪頭は無かった。

「……………」

って何探してんだか俺は……………」

結局、昼休みも、他の授業も、あいつは現れなかった。

ここから通じることが、……日曜日には、……

毎朝で終わる。

学校休みまで出席。その後は無断で早退。

この日もサボリ。

この日はサボリ。

そう、いつも通り。いつも通りの道を歩き、いつも通りの道路を横切り、いつも通りの廊下を通り、いつも通りのイスに座り、いつも通りの芝生で昼寝し、いつも通りの街でブラブラする。

でも……一つだけ、『いつも通り』が欠けていると、近々思いつようになってきていた。

あいつが話しかけに来なくなって数日後。今日は珍しく全部の授業出席しようと思った。理由は……

【ザアアアアアアアア……】

……あいにくの大雨です。

「ちえ。ついてねーや。」

よりもよって苦手科目のある金曜日にこの雨。これじゃ昼寝もできんし。遊びにも行けん。家に閉じこもってたらカビ生えてきそうな勢いだし。

はあ、あ、ついてね。これだから雨は嫌いだ。憂鬱だ。

「……………」

ギリと音をたてながらイスにもたれ、両手を頭の後ろで組んで雨が打ち付ける窓の外をボンヤリと眺めた。

「……………」

バシャバシャと音をたてて、雨が窓を、地面を、ありとあらゆる物を濡らしていく。

「……………」

オマケに湿気てるし。

「……………」

……………。

「……………暇だ。」

暇過ぎるわホント……いやマジで。

………そういや、こんな日でもあいつ、ヘラヘラしてたっけなあ。  
まあ、鬱陶しかったが見てて退屈はせんかったし………。

っておい、ちょい待てや俺の頭脳よ。何ちゃっかりあいつ認めるような発言しちやってんの？ 表出るやコラ。

「………ああ、もうクソ！」

机の角に数回頭をぶつけて思考を消し、机の角が粉々に砕け散った頃に我に返って音をたてながらイスから立ち上がった。授業開始まで後数分しかないが、十分な時間がある。

なもんで、教室から出て……え〜っと、確か……。

「………2 - 4、2 - 4つと……。」

教室を次々と通り過ぎ、目的地の教室を探し出す。

「………ああ、ここだここ。」

しばらく歩くと、2 - 4と記された札が掲げられた教室を発見した。

早速こつそり入り口の影から中を覗き込んでみる。

「……………」。

じつと中を眺め回していき、お目当ての人物を……………あれ？

「いねえのか？」

もう一度よく見てみる。が、やっぱりいない。目立ちそうなんだが……………。

「……………休みか。」

……………ひょっとして、俺が突っぱねた日からずっと休んでんのか？ それとただ単に今日はサボり……………引きこもってるのかか？

「……………ん……………」。

ドアから覗き見るのをやめ、眉間に指を当てた。

……………てちょっと待て俺。

「……………俺、何やってんだ？」

何故ゆえにあいつを探す？ 何でわざわざ鬱陶しいあいつを探しにあいつのクラスを訪ねた？ アホか俺あ。



「……戻るか。」

軽く自己嫌悪に陥った俺は、半ばイライラしながら踵を返して元来た道に戻ることにした。

「なあなあ、聞いたか？」

「あ？ 何をだよ。」

戻る途中、二人の男子が廊下で会話しているのを耳にした。いやそんなんどうでもいいし。他人の話を盗み聞きする趣味はねえし。だから普通に通り過ぎようとした。

「あの稲神なんだけどさあ。」

「稲神？ ……ああ、あの2 - 4の白髪頭の奴か。」

思わず足を止めた。

「あいつ鬱陶しいよなあ。よく喋るし、変に正義感あるし。おまけによく喋るし。」

「な。ホントうるせえし。こないだなんて夜のコンビニで立ち話してたら、通りかかったあいつが怒鳴り散らしゃがってよ。」

「マジかよ。時代遅れのオッサンかよアイツ。」

……他の奴でもそんな印象だったんかいあの野郎。

「しかもさ、あいつ髪のこと担任に言われて問題起こしたろ？ それ以来、担任からクラスの連中にまで無視されるようになってさあ。」

「ホントマジ鬱陶しいよなあ。あいつの怒鳴り声、隣の俺らの教室まで響いてたぜ？」

やかましいのは折り紙付き……って奴か。

「おかげで友達一人もいねえしアイツ。」

「いつつ教室で一人だけポツンと座ってるよなあ。」

……………ん？

「で、こないだなんてあれだろ？ 2-1の荒木にベタバタして、とうとう本人怒らしちまってさあ。」

「ヒヤハハ、恋人みてえだなそれ。キモイよなあホント。」

「まあそれ以来、あいつ学校来ねえけど。」

「別に来なくていいだろ？ あんな奴。」

「言えてる!」

来てない？ 学校に？

「あ、それで話戻すけどよ……青中の貞和良いひだきいるだろ？」

「ああ、あの貞和良？」

それなら俺も聞いたことがある。隣町の青山中学にいる、学校の生

徒を取り仕切っているといっても過言じゃないとされている、札付きの悪だとか。近隣の高校でさえもあいつに被害を受けてるって話だ。まあ、この学校も隣町というだけに被害ゼロとは言いにくいが。

「その貞和良なただけだよ……今日、偶然見ちまったんだけど、女子にナンパしてた時にあの稲神がしゃしゃり出てっさ。」

「え、マジかよ？」

「マジマジ。それで、数人に喧嘩売った拳句に殴られてさ、どっかに連れてかれちゃったんだぜ？」

……………。

「げ……それ、ヤバくねえ？ 何せあの貞和良だろ？」

「うん、俺もヤバいつて思ったよ。でもよ、俺が稲神なんかの為にあんな不良の怨み買うような真似できるか？ 聞いた話だと、貞和良の奴つて一時通報されてさ、電話した人を執拗に探し回って最終的には病院送りにしちゃったとか言うじゃん。」

「うわ、マジ上げつねえな……そりゃ電話しなかったのが正解だな。」

「

「まあ、稲神一人いなくなっただけでどっつてことねえよなあ？」

「だよなあ。アハハハハ！」

……………。

……………フン。

「……………自業自得、だな。」

変な正義感出してっからそうなるんだ。いいクスリになるだろうし。とゆーより、俺に言われたくらいで学校休んでんじゃねえっつの。つたくへラへラしてたくせに、意外とナイーブな野郎だ。アホかアイツ。

「……………。」

しかも、いろんな奴に煙たがられてんじゃねえの。まああの性格だし？ ベタバタされたらそら鬱陶しいし。皆の気持ちもわからんでもねえな。

「……………。」

どっち道、俺にや関係ない話だ。あいつとは何も関係ねえし。何ならもういっそ入院してくれた方が楽だ。毎日会わなくて済む。

「……………。」

もうあのムカつくへラへラ顔なんて見たくねえ。もうあの無駄に明るい性格なんか見たくねえ。もうあの鬱陶しい減らず口なんか聞き

たくもねえ。これで清々する。

「なあ。」

「「？」」

なのに。

「！！ あ、荒木！？」

「ゲツ…！」

もう見たくもねえのに、

「お前、それどこ見た？」

もう聞きたくもねえのに、

「な、何だよ？ お前、あいつんどこ行く気が？」

「一番鬱陶しい顔してたお前が何だ」

「俺の質問を質問で返すな。お前は答えりゃいんだよ。」

もう会いたくもねえのに、

「ヒッ！ ……………え、駅前のコンビニで…………。」

何で、

「そうか…………サンキューな。」

俺は走り出してんだ？

第百六十四の話 龍二と虎次 <中編> (後書き)

この度は、更新が遅れてまことに申し訳ありませんでした。大スランプに陥ってしまい、また、諸事情によって更新ができずに、話の構成はまとまっているにもかかわらずに書く気が起きませんでした。何度も書き直しちゃ消して書き直しちゃ消しての繰り返しで、ようやく書けました。

中途半端に更新を怠ってしまったことを反省しております。本当にごめんなさい。

それと、第百六十の話に書かれてあったグロ描写は、消去することになりました。この小説はR指定ではありませんので、ああいう描写は控えた方がいいと判断した次第です。読んでくださっていた方々、すいません。

それでは、後半の執筆を頑張ります。読者の皆様に見捨てられないよう、何とか頑張っていきますので、よろしく願います。

第百六十五の話 龍二と虎次 <後編> (前書き)

長らく更新怠っていてすいませんでした。



第六十五の話 龍二と虎次 <後編>

〔龍二視点〕

「はっ、はっ、はっ……。」

土砂降りの雨の中を、俺は傘もささずに突っ走る。びしょぬれの地面に足を付けるたびに水が跳ね、ズボンを水で濡らす。

（何故走る？）

「はっ、はっ、はっ……ぶわっ！ クソ！」

横の道路を走る軽トラが水溜りを通って水飛沫をあげ、俺の体をずぶ濡れにしゃがった。

（何故探す？）

「はあ、はあ……ここか。」

体が水浸しになりながらも、さっきの男子が教えてくれたコンビニの前に到着。雨のおかげで、周囲に人はいない。

(何故必死になる?)

「……クソ、考えてみりやずつとここに留まってるわきゃねえか。」  
走り出す前に気付くべきだった。雨とは言え、ここはコンビニの前つまり公衆の面前。貞和良って奴がバカでもない限り、獲物を袋叩きにするならこんなところではしないはず。もっと人通りがない場所へ連行するだろう。あの男子に、どっちの方角へ行っただか聞いておくべきだった。

(何故悩む?)

「ああもあ！ どうすりゃいんだよクソが!!」

イライラして濡れた頭をワシヤワシヤと掻き篦り、水飛沫を飛ばす。闇雲に探し回ったって時間の無駄かもしれないが、行動しないよりはマシかもしれん。面倒だが、ここはやっぱり探し回るしかないか。

(何故そんなメンドくさいことをする?)

でもあまり時間はかけらんねえし……どうすりゃいいよチクシヨウめ!

(何故? 何故? 何故あんな奴のために動く? 鬱陶しいんだろ

？ 嫌なんだろ？じゃあほっとけばいいじゃないか。大体そんな気分でもねえし。俺は気分で動く人間だろ？ そもそも嫌いな奴を助けるために走るなんてバカげてね？ なのに何で俺は走ってた？ 戻れよ。学校に。そしていつも通りの生活をしろよ。」

……………。

【ガァン！！】

「永久に黙れ！！！」

シャッターの閉まっている店に頭を思い切りぶつけ、脳内で好き放題にくつちやべるナンかを強引に黙らせてやった。テメエが喋ると頭痛いわボケ。

「……………うし。」

頭の中で喋ってる奴が沈黙したのを確認してから、大きく凹んだ、を通り越してバラバラに吹っ飛んだシャッターと店の外壁を尻目に、俺は再び走り出した。ゴメン、店主。不可抗力なんだ。許せ。

ってこんなんやってる場合じゃねえ。落ち着け俺。ピークールピークール……………。

「……………え〜と……………」

コンビニの入り口の前に立ち、屋根で雨を凌ぎつつ考える。まずは、客観的に考えてみよう。

俺なら、いやしないけどもしもだが、コンビニの前で獲物の腹を殴って気絶させた後、どこで痛めつける？ ……当然、こんな公衆の面前でやるわけない。警察が来たらアウト。ドボンだ。そうになると、やっぱり人気のない場所へ行くしかなくなる……だが、いくらこの雨とは言えここは人通りが多い。工夫すりゃバレなくもないが、引きずっていくのは目立つからそう遠くまでは行けないはず。だとしたらここら辺で人通りが少なく目立たない場所つつたら………

あ。

「あそこか！！！」

ふと頭ん中で閃いて、コンビニの入り口から走り出す。ここからそう離れていない、大体100メートルくらい先に暗い路地裏がある。その先には………。

薄暗い路地裏を駆け抜け、そこから少しした場所。その前で俺は立ち止まった。

「ここだ……」

目の前にあるのは、数年前に会社が倒産したのがきつかけで廃墟となった三階建てのビル。外壁のコンクリはボロボロで、ところどころビビが入っている。以前は綺麗なビルだったんだろうが、今じゃ見る影もない。唯一あつた会社の名残は、その壁に掲げられた看板文字が掠れて読み取り不可能だが、なんとか会社っていうのはわかる。

そんなわけだから、ここに寄り付くのは街のチンピラか、はたまた性質の悪い幽霊か……おかげで一般人なんてまったく近づこうなんてしないし、第一こんな小さいビル、目立つわけもない。オマケに薄っ気味わりいし。

だが、ここの特殊なところ……それは防音加工が施されているってこと。前の会社がどういう仕事してたのか知らないが、都合いいことにこのビルの中から聞こえる音は外にはほとんど漏れない。ただ、若干老朽化してるから前より性能は落ちてるだろうけど、それでも十分防音してくれるらしい。

ま、そんなとこだから……人を集団リンチにかけるには、もってこの場所ってわけだ。

「えーと、何階だろうなあ？」

建物の入り口にある階段に足を乗せ、上へ上がっていく。見れば、階段の所々に空き缶やスナック菓子の空き袋……こちら辺を根城にしてる連中が捨ててったんだろう。掃除する人はもういないが、せめて自分達が集まる場所くらいは掃除しとけよな……つってもそん

なん気にする人間なんていないだろうし。

まあそんならどうだっていい。一階は窓ん中をチラリと覗いてみたが人の影すらなかったので除外。てことは二階か三階、だな。

「…………ふう。きつたねえ場所だ…………。」

愚痴を言いつつ、二階の踊り場を通過して一つのドアの前に立つ。ドアも汚れがひどく、ボロボロ。まあ使えんこともないみたいだが。

ま、とりあえず突入してみますかーってなわけでドアノブを掴んで、

『シューット!!』

【ゴッ!】

『ゲブツ! ……ゲエエ。』

『うわきったね〜。こいつ吐きやがったぞ?』

『テメエ吐いてんじゃねえぞコラァ!!』

『ゲツ! ゲエツ!!』

……………

ここか。

「……………」

中から聞こえる呻き声……苦しみで声がかくぐもっているが、多分アイツだ。他に聞こえる声を聞く限り、百パーリンチにかけられるのがよくわかる。

当然だろう。下手な正義感を出してるからこうなるんだ。ただ普通に素通りするか、警察にでも連絡すりゃいい話を、逆に突っ込んでくから返り討ちにあってボコボコにされんだ。これを機会に覚えておけてんだ。

けど。

「……………」

こみ上げてくる……この、怒りは……何だっただコノヤロー。

【グシャ！】

掴んでいたドアノブを思わず握りつぶしてしまい、その残骸を脇に投げ捨てた。

「……どっどい……。」

一歩下がって、右足を大きく振り上げて、

「せつっ！…！」

思いっきり直蹴りを放ち、ドアを真つ二つに破壊した。

立ち昇る埃が煙の如く舞い、その中を俺はゆっくりと入っていく。少しずつ埃が落ち着いてくると、情景が明らかになってきた。

紺色のブレザーに赤いネクタイ、そしてチエツクのズボンという、いかにも坊ちゃん学校ですと豪語してるような制服着た男が五人。おそらく、連中が青山中学、通称青中の生徒達だろう。全員手に鉄パイプや金属バットを持っている。

そして、連中の輪の中心に、アイツは倒れていた。制服はボロボロになり、埃まみれ。白髪の一部からは血が滲み出て赤く染まっている。顔はうつ伏せに倒れているからわからないが、あいつの周囲に所々点々と血が散っているのを見る限り、まともな状態じゃないことは確かだろう。

「あ？ 何だお前？」



俺が扉を蹴破ったことにより、面食らっていた五人の中の鉄パイプを持った一人が落ち着きを取り戻したようで俺を睨みつける。他の四人に比べて、目が異様なほど吊り上っていて、厳つい顔に髪も角切りにしている、なかなかの迫力を持っていた。

おそらく、こいつだな。噂の貞和良ってえのは。

「おい、返事しろよ……何無視してくれちゃってんのお前？」

ちよつと返答しなかっただけで眉間に血管浮かせたよコイツ……バカみたいに喧嘩っ早いのな。

「なあ、アンタ。」

「ああ？」

だからそんな凄むなって……むっさ苦しい。

「そいつ、生憎だけど返してくんない？ いろいろ用があつてさあ。」

俺は床に倒れ伏しているバカを指差し、一応頼んでみる。

「……………は？ お前バカか？ ギヤハハハハハ！」

頼んでみただけなのに、バカ呼ばわりされた。つられて他の四人も笑い出す。てか笑い方汚ねえ。

「悪いけど。こいつ、俺らに喧嘩売ってきたからさあ。返すわけにもいかねえんだよな。」

ニヤニヤと笑いながら、鉄パイプで白髪をつつつく。

イラッ。

「喧嘩売ってきた？ 俺が聞いた話だと、アンタらがコンビニの前で女子に迷惑かけてたのを、そいつが止めてきただけだろ？ なら非はお前らにあんじゃねえの。」

さつき考えていたことと全然違うことをペラペラと述べると、貞和良は笑うのをやめてギロリと再び睨みつける。

「あ？ 何お前？ 前中の生徒の分際で俺ら青中に楯突くつてのかわ？」

ここで判明、俺らの中学の名前。前中つてのは『私立前川中学校』の略で、俺らを通つてるところだ。もっとも、それ今関係ねえけど。

「そんな楯突くとか突かないとか関係ねえつて。ともかく、アンタらの言い分はわかったからそいつを返してくれ。」

半ば懇願するかのように催促する。自分でも、どうしてこんなことが言えたのが……さっぱりわからない。

「オイオイ、何かこいつ必死だぞ？」

「マジで？ もしかしてこれってあつゝい、青春、て奴？」

「ギャハハハハ！ それマジで受ける！」

そんな俺を見て、また笑い出す。まるで、自分達が頂点にいるかのように嘲り、笑う。

イラッ。

「まあともかくあれだな。返して欲しけりゃさ、お前が落とし前つけてくれよ。」

「……………どういう意味だ。」

知ってるけどあえて聞く。

「……………とりあえず、金出せよ。とりあえず万札希望だな。」

笑顔を崩さないまま、馴れなれしく俺の肩に手を回す貞和良。やはり金か。

「……………悪いけど、金なんて無い。」

つかそもそも払う気なんて全くない。

「へえ……………」

だが、それでも怒るところか下卑た笑いは止めずに肩に手を回したまま、手にした鉄パイプの先端で俺の頬を突っついてきた。

イラッ。

「じゃあこいつは返してやれねえなあ……。」

鉄パイプを俺の顔から離し、

「おらよつと!!」

【ドスッ!】

俺の腹に拳をめり込ませ、前かがみになった俺の背中に鉄パイプを振り下ろし、床に叩きつけた。

「へっ! こいつもやっぱザコだぜ!」

倒れた俺に容赦なく何度も踏みつけ、黒い制服に白い靴跡を次々と付けていく。

「おっしゃ、じゃ次はこいつも袋にしちまおうぜ!」

「ヒヤハー! サンドバッグ二号ってかあ!？」

さらに傍観していた四人も貞和良に混じり、俺を蹴る、蹴る、蹴る、時には手にした得物で殴る……それが延々と続いた。時間はわからない。

「……………」

「オラオラア！ 気絶すんじゃないやねえぞ！」

「おいおいあんまやる過ぎんなよ？ 死んじまうぞコイツ？」

「別に死んだつてどうもならないだろ？ やるからには徹底的にや  
つちまおうぜ！」

「や……………」

「シュート！」

「おーっと決めました貞和良選手！ 見事なシュートです！」

「目指せワールドカップ！ なあんちゃってギャハハハハ！！！」

「……………」

「よーっしや次は何するよ？」

「じゃ野球やるーぜ。ちょうどバットもあるし。」

「ボールは安物だけだなあ。ヒヤハハハ！」

「やめろや……………」

突然響き渡った怒声に、俺をボコボコにしていた五人は面食らった顔のまま飛び上がった。

「……………やめろや……………お前ら。」

怒声の主は、床に倒れていた白髪頭……………想像通り、頭からは血が流れ出て左目が開けられないようで、顔中にも痣ができていた。

そいつが震える腕で体を支えつつ、ゆっくりと立ち上がって倒れないように両の足で踏ん張った……………フラフラだが。

「そいつは……………何も関係ないやろが……………離せや。」

ボロボロの体で、足を引きずりながら歩み寄る。精一杯、唯一開ける右目で連中を睨みつけ、威勢を張る。

そこに迫力なんてものはない。さながらボロボロに傷ついた猫が最後の抵抗をするかのように牙を剥く。いわゆる虚勢って奴だ。

「アチヨーー!!」

「グウツ!!」

当然、貞和良がふざけた感じに飛び蹴りを白髪の胸に叩き込む。俺からしてみたらヘナチヨコキツクだが、今のボロボロになった奴にはたまらない一撃だったのだろう。後ろに二歩下がってそのまま仰向けに倒れこんだ。背中をモロに食らったらしく、倒れた瞬間に苦しげに息を吐き出すくぐもった声が聞こえた。

「おいおい、ザコが何生意気言っちゃってんの？」  
「！！！」

嘲笑し、貞和良が白髪頭をグリグリと踏み付ける。白髪は声にならない悲鳴をあげ、苦痛に顔を歪めた。

「調子乗ってんじゃねえよ。このカスが。」

ペツと唾を白髪に吐きつけ、足をどけた。

「おらぁー！！！」

【ドン！】

「！！！！！」

とどめに、貞和良が爪先で白髪の腹を蹴り飛ばす。

「ガア……ゲホッ！」

今までで一番効いたらしく、白髪は腹を抑えたままつずくまった。

イラッ。

「いやぁ今日は実に快調ですねぇ貞和良さん？」

「ええ、実は今日いい物を手に入れてましてねえ。」

「ほほお、それは一体なんでしょう？」

「薄汚れたサンドバッグを二つほど。」

「アハハハハハハ！！！！」

ブチリ。

「テメエら……。」

『？』

五人が大口開けて笑ってる中、俺はゆっくりと立ち上がった。瞬間、連中の顔から笑いが消え、信じられない物を見るような目になる。

「調子乗るのも大概にしるよ……オイ。」

「ああ？」

低い声で言う俺の言葉が癩に障ったらしく、取り囲んでいた一人が俺の胸倉を掴む。

「テメエ、何バカなことやってん」



言い終える前には、そいつは吹っ飛んでいた。

顔面が陥没し、表情がわからなくなった。そいつは、コンクリートの壁に背中を打ちつけられてからそのままズルズルと壁からずり落ちていき、もたれる形のまま気絶した。

「……へ？」

一人が素っ頓狂な声を出した。が、もう次の瞬間には俺のアップパーが顎に炸裂し、天井にぶつかって落ちてきて気絶した。顎はアルミ缶を押し潰したかのようにひしゃげ、天井にぶつかったことにより鼻が折れ、血が流れ出ている。

「そいつ！」

「「ゲブツ!!??」」

背後にいる二人が反応する前に回し蹴りを腰にかまし、二人揃って体が“く”の字という愉快な姿のまま壁まで吹っ飛んでいつてめり込んだ。

「な、な、な……。」

貞和良<sup>ザコ</sup>が後退りながら俺を凝視する。さっきまでボコボコにしていた奴が、一瞬で取り巻きをフツ飛ばしたのだから当然か。

ともかく、形勢逆転。今はこいつがザコ。

「オイ。」

体に付いた埃を叩き落としつつ、ギロリと貞和良を睨みつけた。

堪忍袋の尾が切れた俺の目は、恐らくえらいことになってるんだろう。睨んだ瞬間、貞和良は怯えたネズミのように縮こまった。さつきとはえらい違いだ。

そんな状態の奴だが、もう勘弁しねえ。

「だれがザコだ？　だあれがサンドバッグだコラ。ああ？」

ポケットに手を入れ、ズンズンとゆっくりと、威圧しながら歩み寄る。それにつられて、貞和良は後退っていき、持っていた鉄パイプも手の震えによって落とした。

「て……テメエ、な、何者なにものだよ……！？」

金魚の如くパクパクさせながらもかろうじて言葉を紡ぎだした貞和良が問うが、どうでもいい。

「こっちが聞いてんだよ。誰がザコなんだサンドバッグなんだってよお？」

今にも俺の血管がはち切れそうだというのに、こんのクソザコ、質問を質問で返しやがって。イライラUPUPだコンニャロウめ。

「ひ、ひいい……！」

燃え上がらんばかりに怒りのボルテージが上がった俺の顔は、おそらくどえらいことになってるんだろ。貞和良の足の震えがさらに激しくなり、おぼつかない足でさらに一步後ろへ下がった。

【カン】

「？ ……！！」

が、その足が落ちていいる何かに当たり、足元を見てはっとしたかと思つと、急に顔を上げてニヤついた。何だ？

「……ならよお。」

「？」

貞和良が不敵な笑みを浮かべつつ、しゃがみ込んで柱の影で見えないが何かを拾い上げた。

「これならどうだ？」

「……！」

拾い上げたそれは、恐らくここでたむろしていた不良どもが残していった酒瓶。それを、

【バシッ！】

割った。

そして、割れたことによつて先端が鋭く尖つて凶器となつた酒瓶を、倒れている白髪に突きつける。

「動くな。少しでも変なマネしてみる？　これをこいつの頭にブツ刺す。」

「……………」

ジロリと意地汚い目で睨みつつ、口元を吊り上げて笑う。このクズ野郎、追い詰められて人質取りやがった。

貞和良の野郎は、噂だと平気で人をナイフで突き刺せる残虐性を持つてると聞く。俺が今、ここであいつに接近したら、あいつは躊躇いなく白髪に凶器を突き刺すだろう。

つってもまあ、あいつが白髪なんかを人質に取つたところで別にどうってことないけどな。殴れば終わりだし、白髪が傷つこうが何だろうがどうだっていい。

「……………チッ。」

そう思つてんのに……………何故か動けない。いや、動いたらいけない。

「へへっ、やっと大人しくなったか。」

勝ち誇った顔を浮かべながら、グツタリしている白髪を強引に立ち上げらせ、ジリジリと俺が壊した扉へと近づいていく。力のない白髪はおぼつかない足取りで貞和良の野郎に連行されていく。

俺はただ、それを見ているだけ……何もできずに。

「……………」

だが。

「……………フッ。」

「!?!? テメエ、何笑ってんだコラ!」

思わず微笑を浮かべてしまい、貞和良を逆上させてしまった。

「いやね、ちょっと言わせてもらいことがあってよ。」

「ああ!?!?」

現時点で自らの勝利を確信している貞和良は、威嚇も込めて俺を睨む。

「今お前が捕まえてるそいつだけだよお？」

回復力は並じゃねえんだわ。」

「は？ 何言つて」

「ドゥセイヤアアア！！」

「ぐぼおあ！？」

問い返す直前、貞和良は前のめりにつんのめった。

理由。密かに回復していた白髪が、貞和良の腹部にエルボーを食らわしたから。つまりさっきまでののは演技。

「ぐえええ………て、テメエ！」

「チャンスや相棒！！！！」

うづくまった貞和良から距離を取り、満面の笑みで叫ぶ白髪。それに反論することなく、俺は拳を腰だめに構える。



振り上げた拳を下ろし、グツと握り締めてガッツポーズを取った。

「おお……見事なもんやなあ。」

そして隣で手を頭上にかざして空いた天井を眺める白髪。

【ドサツ】

「!? 虎次!!!」

が、次の瞬間バツタリ倒れ、俺はポーズをやめて抱え上げた。

「へへへ……いやあやっぱ、小一時間ほど殴られ蹴られ続けられたらキツツイか……。」

「……アホか。自分を過信し過ぎだったの。」

倒れながらも笑うバカに、俺は呆れてため息も出なかった。

「……ちゅーかお前。さっきの叫びはいろいろまずいんちゃうか？」

「あ？ 何がだよ。」

「いや、何てーか……あれや。某RPGに出てくる巨漢のセリフ兼理不尽技のパクリやろあれ。」

「ああ、ババトス？」

「言ったらあかんて。」

「いんだよ別に皆言ってることだしよ。」





笑いながら、ドサリと虎次の隣で同じように大の字になって寝そべった。天井から降り注いでくる雨が顔を濡らそうが、今の俺らにとっては恵みの雨の如く心地よさを感じた。

昼寝してる時とは違う、安らぎ。モヤモヤした気分を、全部吹っ飛ばすくらい、心地いい。

「アハハハハハハ、ハハハ、ハア……！」

「ハハハハハハハハハハハ、ハハ……ハア！」

ひとしきり笑い終えた俺らは、笑い疲れによって肩で息をする。それでも笑顔は消えず、揃って天井から見える曇り空を見上げた。

「……こんなに笑おうたのは久々やで。」

「へっ。俺も。」

ポツリと呟く虎次と俺。すでに雨によって、天井から下の床が円状に濡れて黒く染まっていた。だが元々濡れていた俺にとっちやどうでもいい話だ。

「……なあ。」

「あ？」

しばらく間を置いてから呼び、首だけこちらへと向けてきた。

「ようやく、俺の名前呼んだかこのツンツン野郎め……。」

「……はっ！ 呼びたい気分だったから呼んだんだよバア力。」

「素直やないなあ……さては俺に惚れたなあ？」

「それは無い。」

「はは、こつちこそ願ひ下げじゃボケエ。」  
「……………へっ。」

再び、空を見上げる。少しづつ雲が白くなっていくのがわかる。もう少いで、晴れるだろう。

とりあえず、今はこつちしていよう……………小雨になってきた中、二人で大の字になりながら。

〜翌日〜

今日もまた、鬱陶しい学校だ。やってらんねえってのに……………。

「……………ま、いいか。」

まあそんなこと思いながらも、上機嫌のままいつもの通学路をのんびりと歩く。チラホラと慌てて走っていくクラスメイトや先輩や後輩達。ようはもう遅刻ギリギリってな時間だ。

何故ゆえこんな上機嫌かというのはだなあ……………。

「まつさか、延期になるとはねえ……。」

そ。親父とお袋が日本を発つのが三年先送りになったわけだ。

訳を聞いてみたら、どうもあっちの方、つまり目的地の国の空港でテロがあったらしく、しばらくの間航空便がお休みみたいな感じになっちまったってわけで。それに乗る予定だった親父達も、止む終えず出発を延期せざるをえなかったんだと。

こう考えると不謹慎なのかもしれんが、正直な話が嬉しいもんだ。親父らの前では言わんがな。うん、絶対。恥ずいじゃん。

まあそんなわけだから、だ。今日はサボる予定だったが登校してやるっつーことで。感謝しろ、先公どもが。

あ。

「よーマイフレン」

「どすこーい。」

「ふげお!!!」

背後から気配を感じたので回し蹴りを適当にやってみたら案の定全力疾走してきた白髪頭の即頭部に命中、キリモミ回転して吹っ飛んだ。

「な、何さらすんじゃおんどりゃあ!？」

が、すぐに復活してツカツカと歩み寄ってきた。ウザす。

「いや、何か体勝手にさ。ウザい奴には反応するようになってんだよ俺の足。」

「どんだけ脳の命令無視する足なん!？ いやっーかウザいってなんやねん!！」

「ウザい。またはウザりたい。こまごまとしていて鬱陶しい。煩わしい。面倒くさい。」

「わあ丁寧! って説明してくれ言うてんのとちゃうわ!！」

「チツ。やっぱウザい。」

「え、何その露骨な嫌悪感を顕わにした顔!？ 昨日の友情ストリーは何やったんや!？」

「え何それ？ オラ知らねえ。」

「白々しい! 白々しいよママン!！」

「いいから早く行けやボケナス。」

「いたあん!! ケツ蹴るのやめてえなあ目覚めるやんかあ!!」

あ、すみませんすみませんごめんなさい調子乗ってましたメリケンサックはさすがにヤバえぼし!！」

朝っぱらからウザい奴を地面に叩き伏せてやって何食わぬ顔でその場を後にした俺でした。

……まあウザい奴だが、こないだのようなイライラは無いな。うん。

時は進み……昼休み。授業が終わってすぐにお袋の弁当を開いて食う俺。

「いやぁ腹減ったなあ　俺もうお腹トラペコ」

「……ああそうだな。ついでになんだトラペコで。」

いつもと違うのは目の前にコノヤロウがいること。

「と思ったんやけど。」

「?」

「……放課後コンビニで何か買って食べるわ……。」

髪だけじゃなくて全身白くなって燃え尽きたバカ。

「忘れたのかよ弁当。このバカが。購買行け購買。」

「お金もない。生きる希望もない。」

ならそのまま息絶えてください。

「……はあ。しゃあねえな半分やるよ。」

情けだと思いつつ、弁当を差し出す。

「おお！ マジかいな！ やっぱ持つべきもんは友達やなあ！！」

「復活早えよテメエ。とりあえずツケでいいから一個千円な？」

「金取るんや！？ あかんで中学生が売買なんかしたら！！ しっかも高い！！！」

「じゃやらねえ。」

「んなこと言わんといて頼むからあゝ！ せやからこの哀れな子羊をお助けおくんまましいゝ！！！」

「いいから早食え！！！」

「はゝい」

つたく調子狂うわあ。

「おお、見事なおにぎりが四つも！ 中身何？」

「全部昆布だ。」

「……………」

「んな嫌な顔すんなら食うんじゃねえ。」

「いや一応感謝しとるよ？ うん。」

「コロスよ？」

「うんまい昆布やねー！！！」

二つの昆布にぎりを両手に持ってバクバク食べるバカ虎次。お前は裸の 将か。

「……………」

「？ ん？」

で、そんな時に周囲から視線を感じてチラリと見てみた。クラス中の人間全員が一斉に目を俺らから逸らした。何故だ。

「な、なあ。あの二人どうしちゃったんだ？」

「いやとゆうーよりあの龍二がどうしちゃまったんだって話だよ。昨日あんなだけ悪態ついてたくせに。」

「しかも顔がなんか活き活きしてない？」

「しかもよ？ しかもあの龍二が他人に弁当を分けるなんて…。」

「ま、まさかこれは…！」

「何？ 何か知ってるの秋子!？」

「これは俗に言う…び、BL!？」

「ま、まさかそんな…BL!？」

「スゲエ！ BL初めて見た！」

「も、燃える!!!! ぐはあああ!!!!」

「きゃー!!!!!! 秋子!？ 秋子

「てか何かデジャブを感じる…。」

「!!!!!!」

……………なんか口々に囁き合ってたけど。

「おい虎次。BLして何だ？」

「何や？ お前そんなんも知らなかったんかいな。」

指についたゴハン粒を食べてく虎次の顔はものっそい得意気な顔をしていた。

「ええかよく聞け？ BLちゅのはなあ…………。」

「うんうん。」



気が付いてなかったけど、この時クラス中の人間が耳をでかくしていた（イメージ）。

「ホップとかで作られた酒、すなわちビールのことや!!!」

「え、マジ？」

「つかそれ以外思いつかん!!!」

「まあその考えが妥当か。でもよ、何で皆してビールのこと話してたんだ？」

「そやそや。酒は二十歳になってからやってのに。」

「だよなあ……って、あれ？」

見れば、クラス全員がイスの上から転がり落ちていた。

次の日。今日も何事もなく授業を終えた。

……嘘です。何事もなかったわけじゃない。休み時間にわざわざこつちまで来て騒ぎにくる虎次バカの相手をするのにちよこつとばかり苦勞した。へばりついてくるから蹴り飛ばしたり、やかましいから張り倒したり、注意しにきた先公の頭に『ハゲ万歳!』と書かれた札を貼り付けたりってこれは俺も止めなかったおもしろかったから。

「さて、帰るとすつか。」

カバンを持ち、他の生徒達より一足早く帰ろうとした。

「やほー。マイフレンド。」

「……………つたく。」

が、予想通りっちゃあ予想通り、教室の入り口から虎次がひょっこり現れた。

「おいおい、何嫌そうな顔を……………まあいつものことやけどな。」

もうその点は諦めたようで、やれやれといった感じに歩み寄ってきた。

「今日一日でお前がしたことを思い返してみろ。」

「え？……………ああ、ゴリラの母ちゃん？」

「どんな頭してるか確認したいんで割ってもいいか？」

「嘘ですホンマごめんなさい堪忍して。」

高速の土下座を俺の目の前で披露する虎次。つか人の机の上でするな乗るな。

「……………ふん。まあいい。とっとと帰っぞ。」

土下座してる虎次をほっぽって手提げカバンを肩に担ぐようにして歩き出す俺。

「……………なぬー!？」

【ガッシャァン!ー!】

机の上に乗っていた虎次が背後で驚愕の声と一緒にけたたましい音をたてて周囲の罪無き生徒達が巻き込まれて吹っ飛んだ。

「……………」

それを無視して教室の出口へ。

「待って—————!!!!!!」

「うるっさい。」

「げほお!!--」

が、すぐに復活したバカが飛び掛ってきたんで裏拳かまして沈めた。でもすぐに復活して再び急接近してきたって顔が近いわボケ。

「な、なあちよつと! さっきの言葉つてもしやもしやもしや!」

「もやし。」

「もやしもやしもやしもやしもやし……………って何言わせんねん!!」

「勝手に引つ掛かったただけだろが。バカが。ボケが。カスが。ついでに顔近いんじゃないこのナスビが。」

「引つ掛かっただけで俺の存在そんななるんかい!! そして何故にナスビ!? ナスビに謝らんかい!! いやそんなどうでもええねん!」

連続ツッコミしてきたがどうでもよくない。俺は帰りたい。眠い。とりあえずいつでも出て行けるようにドアに手をかけてはいるが、この野郎はおそらく帰す気ない。

「おま、お前それもしゃ『一緒に帰ろうぜブラザー!!』』という意味かい!!」

「お前と兄弟になった覚えなんてない。まだカタツムリと兄弟になった方がマシだ。」

「俺カタツムリに負けた!?!」

「で? 帰るのか帰らないのか。」

「帰る帰る帰るぜブラザー!!」

「やっぱ一人で帰る。」

「冗談やー! マ ケルジョーダン! せやから置いてかんといてー!!」

ネタ古。

「あー今日も疲れたわあ。」

「……………ああ。」

夕焼けによつて赤く染まる道を、二人横に並んで歩く。虎次は頭の後ろに手を組んで、俺は右手に持ったカバンを肩に担ぐようにして隣で虎次は開放感に満たされた顔をしながら喋り続けるが、俺は対照的に口数も少ないまま歩く。

「……………て、おゝい龍二よ。せめて何か喋ろうや。」

「わりいな。話すことなんてないんでね。」

普段一人で帰ってる俺にとって、こうやって二人で帰るとするのは本当に久々だった。

小学校の頃、転校する前は、花鈴と一緒に帰ってはいたが、転校してからは、友人はいたものの帰り道が違うということとで常に一人だった。

別にそれがどうということはない。会話を合わせるなんてめんどくさい。だから一人で帰る方が帰って何しようか考えるのに集中できるし、何より気楽だ。花鈴と一緒に帰っていた時は、何故か自然と会話が弾んだが、それ以外の奴らとは会話が弾むどころか、向こうが一方的に話しかけてくるばかりだった。

今がまさにそれなんだが、何故俺はこいつと一緒に帰ろうとする気になったのか……全くもって、わからない。

「やれやれ、つれないやつぢゃなあ。」

「大きなお世話だ。」

苦笑する虎次に素っ気無く返す俺。

そして、そうこうしてるうちに分かれ道に来た。正面の道と右の道に分かれている。

正面に行けば、こいつと初めて出会った公園に。右へ行けば、俺の家が続く道。

「じゃ、俺こっちだから。ばいび。」

歩いてまだ五分も経ってないところで、俺は虎次に別れを告げて自分の家へ向かうために右の道へと

「ちよい待ち。」

……………行けなかった。

「んだよ何か用でもあんのかよ。しょーもねえのだったらぶっ飛ばして埋める。」

「まあまあ落ち着きなされ龍さんや。」

ジジイが俺は。どうでもいいけどニコニコ笑ったまま襟首掴むな。服伸びる。

「お前さ、家帰っても何もすることないやろ？」

「勝手に決め付けるな。忙しいんだよ俺あ。」

「帰って寝る気やったやろ？ さっき小声でねみいつて呟いottaで？ 忙しい人間がそんな口にするとは思えへんけどな？」

……………。」

コノヤロウ。

「……………んだよ。用事が無けりゃ何するってんだ？ どっか寄ろうぜとかそんなんじゃないだろうな？」

「ピンポーン」

ええい、付けるな鬱陶しい。

「あのなあ……俺はゲーセンとかならまだしも、カラオケとかそんなんは行かない派なの。行くなら一人で」

「俺ん家来いや！」

「行け……って、は？」

人が話してるのを遮って何かすつとぼけたこと言い出した。俺は思わず開いた口が塞がらない感じに。

「だからあ、俺の家で遊ぼうZE!!!」

語尾強調すんな。

「……………バカじゃねえか？ 何が悲しゅうてテメエの家で遊ばなきゃいけないだよ。」

精一杯嫌な顔をしながら言う。

「ええやんけ〜ダチの家で遊ぶのに何も遠慮なんていらんやろ？」

けど効果なし。ケラケラ笑いながら肩に手を回してポンポン叩く虎次。ウザ。

「……………つたく。」

ため息を吐きつつ呆れる。つっても、こいつのことだ。俺がこのまま帰ろうとしたらず〜と引つ付いてくるだろう。離れたとしても

絶対復活して叩き落してまた復活してまた叩き落しての無限ループ。  
結果、完全に日が沈む。俺、疲労感MAX。答え、

「行くよ行きますよ……ったく。」

行くしかねえじゃねえかコノヤロー。

「おお、そんなに来たいか？ 来たいんか？ よっしゃーついてこ

いやー この道真っ直ぐ行けばすぐやからあ」

「……………」

首絞めたるかこのクソバカ野郎、と思いつつも一つの道をテンションMAXのまま歩く虎次の後ろを俺はついてくことにした。

「ここや。」

「ふうん、普通の家だな。」

着いた場所は、見た目は普通の木造の一軒屋。二階とかそんなんはなく、どこか懐かしい雰囲気を出している。そんな感じの家。

しいて言えばサ エさんの家って感じ。

「わっかかりやすい例えやな。」

「読むな思考を。」



「ワリワリ。」

全く悪びれもせずさっきのようにケラケラ笑う虎次。こいつの笑い方なんか憎めん。なのに腹立つ。何だこの矛盾。

「まあとりあえず汚きったないとこやけど入って入って。」

「ホント汚きたなえな。」

「正直な感想をありがとうございますどうぞいますド畜生。」

自分から言っておいて怒られるという理不尽な扱いを受けつつも、スライド式のドアがある今時珍しい玄関にお邪魔させてもらう。玄関に入ってすぐ右には長方形の下駄箱。その上にピンク色の花。正面には奥まった場所に襖。

説明のしようがないくらい意外と普通だった。

「人の家勝手に想像せんといってくれませんか？」

「チツ、やっぱ声に出てたか。」

「え、確信犯？」

イエス。

「まあいいや。お邪魔しまーす。」

「邪魔するんやったら帰ってー。」

「よっしゃ。」

「待て待て待て待て待て待て待てホンマに帰んなやあってゆーか何気にガツツポーズすんなや！！」

帰っていいって言われたのに襟首掴まれた。だからさ、伸びるっつーのこの野郎。

「まったく、関西のジョークがわかってへんなお前は。」

「そら関東出身だかな。吉 新喜劇のことなんかまるで知らねえよ。」

「そらそうやるうけど……ん!? 今お前明らか矛盾したこと言わへんかった?」

「何してんだお前の家だろうが。さつさと入れよ。」

「は、はめられた!!」

「頭が空っぽなだけだろうがお前が。」

「!!!!!!」

ガーンという効果音が似合うような感じに頭を抱えて膝を着いた虎次<sup>カ</sup>を無視して、さつさと家に入っていく俺。ここまで来たんならせめてジュースの一杯くらいもらわねえと割に合わん。

「で? どこ行けばいいんだ?」

振り返ってどの部屋に行けばいいか聞いた。

「……………」

でもまあだショック受けてて聞いても無駄だった。ついでに時間の無駄だった。

「……………まあいいや。適当に入っちまえ。」

というわけで、玄関から一番近い襖に手をかけた。

「……! ちょい待ち!!」



「オイ、何だこれ。何で食われてんだ俺あ。」

そう言いつつ頭を齧っているなんかを指差す。

あれだ。ゲームとかに出てくる人食い植物。マンイーターだっけか？ うん、ド派手な柄が付いた真っ赤な花びらの真ん中に唾液で鈍く光る鋭い牙ついてて、大きさは俺より若干でかい奴。それが俺の頭思いつきり食らいついてんの。歯あ立ててんの。

「す、すまんすまんちょっと待って……ていうかお前、な、何で平然としてられんの？」

俺の頭からマンイーター（飯）を取り外そうと手を伸ばしかけた虎次だったが、疑問に思っただけで恐る恐る問いかけてきた。

「ん？ ああ、これか。ちょっとした技でな、『龍鉄風』りゅうてつふう つー奴今は鍛錬途中だから岩石程度しか防げんが、そのうちミサイルぐらいは防げるようになる。」

「……………は、はあ……………ようわからへんけど、すごいな。」

きょとんとした顔すんな。まあ無理もねえと思うが。

「まともかく、だ。これさっさとどけてく」【ガブガブガブ】

「って食われとる食われとる食われとる！ それでも平然とすな！

「！

目の前が真っ暗けっけになりました。

「やれやれ、ひどい目にあつた。」

「……全然慌てとる様子無かつたけどな。」

『ギシヤ。』

顔半分まで食われてるところを虎次によつて救助され、ハンカチを使つて顔中にベツタリついた唾液を拭き取る俺。それを見て俺の前に茶の入つた湯飲みを置きながら苦笑いする虎次。そしてその手に両手で収まるサイズの植木鉢を持ち、そこから生えてるでかいマンイーター（仮）がウネウネと体操している。千切つたるかテメエ。

「つか何だその変な生き物は。つーより植物は。」

指差した先にはさつき俺に噛み付いたマンイーター（仮）。つかこれ、いちいち（仮）付けにやダメなのか？ あ、ダメ？ そうかいそうかい。

「ああ、こいつな。」

そう言いつつ虎次は、ニコニコ笑つたままマンイーター（仮）の花びらを犬の如く撫でる。それに応えるかのように、マンイーター（仮）は『ギシヤアアア』と気持ちいいんかようわからん鳴き声を上げた。多分、気持ちいいんだらう。猫で言うところの喉鳴らして『ゴロゴロ』いつてる感じが。すまん無理がある。

「小学三年の頃に外国に家族旅行へ行つた時に、道端に咲いてた珍しい花があつてな？ あんまりに可愛くて、思わず植木鉢に入れて持って帰ってきてしもつたんや。」

これを可愛いと思うこいつの頭をいっぺんかち割って覗いてみた方がいいと思う。

「……空港にや引つ掛からなかったのか？」

「そこはつまりこと……な？」

「なるほど。」

“つまりこと”、という意味がよくわかっている俺はあえて聞かなかった。

「いや最初はな、つぶらな瞳でニコニコ顔の超可愛い花やってんけどな？ あ、ミニフラって言うらしいねんけど、しばらく世話したらこんななってもてな？」

ミニフラ超すげえ。

「成長した今はマンイーターって呼称するらしいで？」

『マンイーター（仮）』は改めて『マンイーター』となりました。

「因みにこの子の名前はマンちゃんや。」

ネーミングセンスねー。

「でなでな、世話してるうちに愛着湧いてもうてな？ もう超くあわいいんやコレがまたー！」

くあわいくねー。

「で、この子がきつかけで今食虫植物コレクションにしてるんや。」  
趣味わりー。

「で、この子のえさは主に牛肉とか。出費が多くて結構大変なのが唯一の悩みなんや。」

肉食植物すげー。

「あ、安心しい。こいつ人は食わへんように躰とるから。」

初っ端に噛みつかれたから信用できねー。

「まあ好きな奴ほど噛みたくなるっていうやろ？ お前、懐かれたんやで」

嬉しくねー。

『ギシヤッ。』

【パクッ】

「おお、ホンマ懐かれてるなあお前。マンちゃんが二回も頭噛むなんて俺以外おらへんで？」

マジ嬉しくねー。

「……とれ。」

「無理無理 無理矢理剥がそうしたら俺まで噛みつかれるから。」

ウゼー。

「……………はあ。」

俺もつなんか色々諦めた。いや諦めないとダメだ。うん。

「……………で?」

マンイーターもといマンちゃんを引っぺがしてから虎次に聞く。

「ん?」

聞かれた本人は首を傾げた。いや可愛くないからマジで。学校でそれ見ていた一部の女子どもが鼻血ブーやってたけど腹立つただけだから俺からしてみりゃ。

いやそんなんどうでもいい。

「なあんで俺呼んだんだよこの家に。まさかこれ見せびらかしにきただけじゃねえだろうな?」

それだけで呼んだっていうんだったらぶっ飛ばしてや

「うん。」

……………る……………



は？

「……………あんだと？」

「いやだから、うんって言ったんやけど？ そのまんまの意味で。」

……………。

『うん』 『その通りです』。肯定しているという意味。

……………。

「そこ動くな顔面整形してやる。」

「ちよちよちよ！？ 待つて待つて待つてそんな物騒な整形手術いらんわ！！」

振り上げた拳を上げて、最近ようやくコントロールがついてきた『龍閃弾』を放とうとしたら全力で抗議。仕方なく拳を下ろした。ちえ。

「んな静かに怒らんといてえな……………まあ怒るとは思ってたけどもな。」

「思っつつたんかい。」

思わず関西弁でツッコんでしまった。俺は基本ボケなのに。ボケなのに。ボケなのに！

「まあ、ともかく……今日はちょっと話したいことあってな。」  
「あ？」

「テメエ、くだらねえ話だったら蹴り飛ばすぞ。と言いかけたが、すぐさま口を噤んだ。」

こいつの目が、いつになく真剣そのものだったから……だ。さすがの俺も真剣な話をしようとする奴に横槍入れるなんてことはしない内容にもよるが。

「この家に誰もおらへんやろ？」

「？ ああ、そうだな。もうそろそろ誰か帰ってきてもいい時間だが。」

時計を見ればもう六時を過ぎていた。季節が季節だからまだ明るい光、お袋か誰か帰ってきてきてもいいと思う。

「あれか？ お前んとこって共働き？」

「死んだ。」

……………へ？

「死んだ。オカンもオトンも。五年前に交通事故で。ダンプと正面衝突や。」

……………。

「すまん。」

「いやいや、謝ることないって。」

本人は笑ってはいるが、俺は不謹慎な言い方をしたと後悔して頭を下げる。

お袋達が、外国へ飛ぶのが延期になったのを心から喜んでいた俺。まだしばらく共に暮らせると安堵していた俺。相手の家庭事情も知らず、勝手なことを言った俺。

だが虎次は……一緒に暮らす家族がいない。浮かれていた自分が恥ずかしくなった。

「別に同情なんていらへんで？ そらまあ、最初は悲しかったけどな？ 今はこの通りや。」

ケラケラと笑う虎次。その顔からは確かに悲しみなんて微塵も見られない。

「それというのも、全部こいつのおかげや。」

視線を隣にいるマンイーターに移し、愛おしそうに撫でる。マンイーターも嬉しそうに揺れていた。

「両親が死んだのはこいつを連れて帰ってきてからだな。寂しさは全部こいつが紛らわしてくれたんや。こいつがおらんかったら、今頃俺は引きこもりか、最悪は……まあ、言わないでもわかるやろ？」

苦笑しながらまた視線を俺に戻す。最悪は……の後は、まあ、うん。

言わないでおこうな。

「俺にとってはこいつが唯一の家族やったんや。俺の唯一の癒やし  
がこいつや……でもな。」

ふと、虎次の顔が暗くなったのを、俺は見逃さなかった。

「やっぱ、それでも寂しさはあったな。何より、同年代の奴らと一緒に遊びたかってん。幸い、親戚が仕送りでお金送ってくれるから学校には行けたんやけど……。」

ふう、と、虎次の口から憂鬱なため息が漏れる。

「ほら、俺の趣味がこれやろ？ せやから友達つちゅーもんがおらんくてなあ……一度家に招いたこともあってんで？ でもこの子見たら血相変えて逃げ出してもてな？ それっきりや。」

そう言いながら、モニターの花びらを撫でた。

「結局、噂は噂を呼んで、俺の家は化け物屋敷だの人を生贄にしてるだの、遠まわしなイジメも発生してもうてな……小学校はずっとその生活や。」

……一般人だと、その反応が当たり前だろう……

でもされた本人にしてみたら、それはツライものだったんだろつな。そんなことないのに、あらぬこと囁かれて……そう、虎次コイツの顔が物語ってる。

「せやからな、中学校でなら！ って意気込んだったんやけど……一年の時は、性格がウザイって言われてもってな。またイジメ発生や。暴力的やのうて、全員シカト。結局、どうすることもできひんかった。」

自嘲気味に笑う虎次。対し、俺は黙って聞いていた。

「もう諦めとつたわそんな時は。どんだけ人助けしても、どんだけ鍛えても。なんにも変わりやしなかつたんや。」

それで、こないだ偶然公園でチンピラがリンチしてるのを見てな。条件反射……言うんかな？ うん。勢いで飛び出してもうたんや。結局不意打ちされたけど。」

さっきの暗い表情から一転し、照れたように笑って頭を掻く。

……つかそれは……。

「またボコボコにされんのかなあ、とか思ったりもしたんやで？ 慣れたもんやけど、やっぱり痛いのも嫌やん？ 覚悟したわ。」

そこで、どっかの誰かさんが正義の味方の如くご登場や。」

なんかデジャブだ。

「そいつ曰く、助けたのは気分だと。人助けすんのに気分もヘツタクレもないっちゅー俺の考え方とはまったく逆の思考の持ち主で、

最初は随分変わった奴やなって。そう思ったんやけどさ。

まあ、なんやろうなあ……捻くれてるようには見えてんけど、目が澄んだるつちゅーんか……うん、とにかく、悪い奴にはないような、そんな感じの目えしとったんや。」

……。

「あんまり珍しくってな。このご時勢、ここまで真っ直ぐな目をしてる奴を見たのは初めてなもんで。で、すっかり気に入ってもうてさ……今に至るわけや。ハハハ。」

随分と身勝手な理由で俺に近寄ってきたこいつは、照れ笑いを浮かべた。

……だがまあ、こいつの性格はおおよそは把握していたから別にどうってことない。一つだけ疑問に思うことがある。

「……一つ、聞いていいか？」  
「ん？」

「それ話すために俺をここに呼んだってわけか？」  
「そうや。」

呆気らかんと答えた虎次。口調はおどけているが、目だけは真剣なままだった。

「……そのわけは何だよ。」

そんな虎次を見て、俺は若干怒った口調になる。ただ、本気でキレているわけじゃない。ただ気になっただけ。それが怒ったような感じになってしまったが、虎次は怯えもせず、ただテヘへと笑うだけ。

「あ……うん。まあ、お前にとっては、大したことじゃないかもしれへんけど……」

ダチヤから。知ってもらいたかったん。」

……。

「いや、勝手なのはわかってんんで？ お前にとっては迷惑やろうけど……俺、どうしてもこのこと話したかったんや。今まで家に呼んだ連中は全員、俺の家の中見ただけで逃げ出したし、畏怖とかそんな目で見てるばっかしやったからさ……。」

……

そうか……そういうこと、か。

「あ、スマンなホント。無駄な時間取らせてもつて。じゃあ「オイ。」「……？」

苦笑を浮かべながら立ち上がるうとした虎次を、俺は抑揚のない声で遮った。

「お前はさ、俺がそんなことで軽蔑するようなせつまい人間だと思つてたのかよ？」

「！い、いやちゃうちやう！ そんなん思つてへんよ！！」

静かに言った俺に慌てて手をワタワタと激しく振り、虎次は必死に弁明した。

「……俺は先にそつだと判断するような奴が嫌いだな。お前は俺がお前のことを軽蔑するかもと思つてたつてことだろ？ それを話すつてこたあさ。」

「う……。」

凶星だつたらしく、後ずさる虎次。

「まったく……いつつもテメエからへばり付いてくるクセに、そんな風に思っていたなんてな……はあ。」

「……………」

すっかり意気消沈してしまつた虎次は、正座して肩を震わせながら俯く。かろつじて見える顔は、怯えた小動物のようだった。

「……言わせてもらつけどな。」

「！」

一言区切つた俺の言葉にビクリと肩を震わせ、次の言葉を待つ。



「そんなことで俺はお前のごと軽蔑しねえよ。」

「……………へ？」

さつきまで震えていた虎次が顔を上げ、キョトンとした表情を俺に向けた。

「さつきも言ったけど。俺は先にそうなんだーって判断する奴が嫌いなんだよ。趣味がわりいどころでその人自身を判断するわけねえだろうが。」

つつても、ぱつと見で判断してしまうのが人間だ。

「俺はお前の性格が嫌でもわかつちまったからな。二年になってから。しょっちゅう引っ付いてくるウザったい奴だとは思ってたけど。」

だから、その人を知ろうという考えに至るには、意外と長い時間がかかる。

「まあ、最初の頃は心底ウザいとは思っていたさ。」

けれども、意図せずにそいつの性格を知ることもある。

「でもな、」

それが不幸か、それとも幸か。

「今日初めて、お前のこと知れたぜ。俺。」

少なくとも、俺は、

「教えてくれてあんがとよ。」

後者だと思う。

「……龍……。」

俺は、どこかで一人でいるのを恐れていたのかもしれない。

俺は、どこかで誰かと共につるむのに憧れていたのかもしれない。

俺は、どこかで一緒に笑い合える奴が欲しかったのかもしれない。

結局、俺は弱い自分からずっと逃げてきた。

「ま、とりあえず、だ。」

「？」

でも、こいつは弱い自分とずっと戦ってきた。

だから、

「これ、外せ。」

「あ、またマンちゃん噛み付いてる！？ ええシーン台無し！！」

こいつに負けないように、立ち向かってみよう。

「おい、唾液垂れてきてるぞコラ。燃やしていいかコレ？」

「うおおおおお！…… ストップストップ！…… 頼むから待って  
くれええええ！……！」

弱い自分に……今度は、逃げずに。

「あーもういい。燃やす。」

「ちょおおお!!! そのマッチ棒しまえ、って今時マッチ!?  
ライターじゃないんかい!!!??」

「いっしょ一緒に。」

第百六十五の話 龍二と虎次 <後編> (後書き)

次回、互いに認め合った二人に襲い掛かる、あまりにも残酷な運命。

第百六十六の話 始まりの罪（前書き）

遅くなりました。言い訳しません。ええしません。

## 第百六十六の話 始まりの罪

俺と虎次は、あれから何も変わらず接していた。

いや……ちょっと変わった。

最初の頃と打って変わって、あいつとつれんのはどこか落ち着く。初めは鬱陶しい存在でしかなかったあいつと、ただそこら辺をブラブラするだけで充実感を得ることができた。

前の、転校したての頃に比べれば明らかに大きな変化とも言えるだろう。何をしても、どうしようとも、何も変わらない、モヤモヤした気持ちを抱えていたあの頃……。それが今となつては、遠い昔の話のようだった。

俺の中にあつた空白が、満たされていく。空虚な心が、埋まってい

表に出すことはしない。けれど、俺は今、こいつに感謝している。昔と同じ頃に戻れるきっかけを作ってくれた、こいつに。

堂々と“友”と呼べる、こいつに。

それから、数ヶ月後…… 8月の中旬。

「っちなあクソ……。」

風が全く吹かない、夏真っ盛りの日。和室の縁側の柱にもたれかかりつつ、片手にラムネアイスバーを舐めながらギラつく太陽を睨み付ける。

「あの太陽……ぶっ壊してやろうか……。」

「よしなさい龍ちゃん。太陽さんも頑張ってるのよ?」

そう言いながら冷たい麦茶の入ったコップとガラスポットをお盆に乗せて持ってきたお袋が、能天気になんかと言いやがった。太陽さんてなんだ太陽さんて。さん付けるな。

「ホラ、太陽って英語でSun<sup>サン</sup>って言うでしょ? 結構つまいこと言ったと思わない?」

「うまかねえよ。つかそれだとサンさんになっちまうだろうが。さん二個も付いたら鬱陶しいっつの。そして思考読むな。」

「ウフフ、龍ちゃんは細かいのね」  
「張り倒したるかコラ。」

思わずドメスティックバイオレンスに走りそうになっただが、まあ暑さのせいだっことで抑えこんだ。いい子だな俺。



「つたく、これだから夏は嫌いなんだよなあ……つたく、あちい。」  
首にかけた白いタオルで、顔の汗を拭う。しょっちゅう目に入ってきて視界の邪魔んなるから嫌だホント。

「……………ウフフ。」

「……………んだよイキナリ笑いだしやがって……………」

そんな俺を見て何が可笑しいのか、麦茶をコップに注ぎながら微笑むお袋をジロリと睨む。

「いやだってね？ 最近の龍ちゃん、随分変わったなあって。」

「は？」

何言ってるんだこのオカン。

「前より笑うようになったし、学校もサボらなくなったし。何かいいことあった？」

「いや別にねえよ……………ってちよと待て。お袋、まさか俺がサボってたこと知ってたのかよ。」

「ええ。アナタの行動なんて、お母さんお見通しよ？」

「……………はあ。」

ダラ〜と柱からずり落ちてほとんど寝てる体勢になってしまった俺。まさか気付かれてたとは……………やっぱ親にや敵わないってわけだ。

「大丈夫よ大丈夫！ 私も大学時代はサボって単位落としまくってたから」

「アಂತかもかよ。」

ムクつと起き上がって張り手ツッコミしてしまった。俺は本来ボケ役なのに。

「まあまあ、過ぎたことは水に流しましょう?」

「……はいはい。」

呆れて何も言うことなくなったんで、お袋が入れた麦茶を啜った。

【ピンポーン】

が、いきなりインターホンが鳴った。

「あ、はいはい。」

お袋がのほほんと返事して立ち上がり、インターフォンを手にした。

「はいどちらさまでしょう?」

『おいマイフレ〜!! 遊ぶでー!!』

……………インターフォン越しで声が丸聞こえてどんだけデケエ声で呼んでんだあいつは。後マイフレって何だ。略か? マイフレンドを略しやがったのかコラ。

「龍ちゃん、虎ちゃんよ?」

「わあってるっつ。声だけ聞いただけでも。」

朗らかに笑うお袋に、俺は正直複雑。いつの間にかあいつの呼び名“虎ちゃん”なってるし。ホントいつの間にかだよコラ。

…まあ、考えたってしゃーねえか。

「おーい何してんねやー!? 早く来ーい!!!」

「ああああわあつたわあつた。急かすんじゃねえよつたく。」

暑いからそこら辺に脱ぎ捨てておいた黒のパーカーを羽織って立ち上がると、横で小さな笑い声が聞こえた。

「……何笑ってんだよお袋。」

ジロリとクスクス笑うお袋を睨む俺。

「いや、だつてねえ? ホント、今のあなた楽しそうよ? 花鈴ち

やんと一緒にいた時以来ね、そんな顔。」

「……………フン、付き合ってるんねえよあんな野郎。」

笑いながら「いつてらっしやいね〜。」と見送るお袋は放っておいて、まあだ叫んでるクソやかましい野郎の下へ急ぐことにした。

「遅いわ!!!」

「声でかいわ。」

家から出たの第一声がでえんだよやかましいんだようるせえんだ

よテメエ。

「…んで？ 今日はどこ行く気だ？ またゲーセンじゃねえだろうな？」

鬱陶しさを隠さずに言う俺。昨日も一昨日も商店街にあるゲーセンでしこたま遊んだおかげで、俺の財布が少し寂しくなってきたからやめておきたいのが本音である。

「うん！！」

本音無視しやがったこのボケナス。

「……わりいんだが、金がない。他行くぞ。」

「金ならあるで！！」

「だあら俺がねえんだよバカ。」

「貸したげるがな！ 利子つきで！！」

「死ぬ。いっぺん東京タワーの天辺から垂直落下して死ぬ。」

前々から思っていたが、こいつ結構金にがめつい。つか借金してまでゲーセンなんざ行きたかないわ。

「え。でも俺、一日一回はゲーセン行かへんと落ち着かへん。」

「どーでもいい。ホントどーでもいい。テレフォンショッピングで商品を大袈裟に解説するのと同じくらいどーでもいい。」

「いやそれどうでもよくないやろ？ 意外と言ってることがホントやったりするし。」

真に受けるなこのアンポンタンが。

「え〜……じゃもうあれや。適当にブラッこ。」

「ゲーセン以外に何か無いのか teme はよ。」

「ない！……！」

即答すな。

「そもそもゲーセンの無い世の中なんか無くなってしまえばええと  
さえ思うとる！……！」

ゲーセン依存症患者発見。

「……お前はダメ人間だということが今わかった。」

「失敬な！ 俺は純粋にゲーセンを愛するってコラ最後まで聞けや

あ……！」

虎次は無視して、俺はさっさと歩き出す。そして追ってきた虎次が  
強引に肩に手を回した。

「あつついつつの。離れるポケナスが。」

「気にすんな気にすんな」

輝かしいばかりに笑う虎次の横で、俺は今、相当嫌そうな顔をして  
る……と思う。内心は別にどうとも思っていない。むしろ慣れていた。

「いやあにしても今日はホンマあつついよなー。」

「引っ付いてるからじゃね？」

「今日の最高気温35度やて。地球温暖化が進んどる証拠やな。こ  
のままやと地球滅びるで。」

「お前が滅びる。」

「南極とか氷が解けて水位が上昇しとるんやて。ペンギン達かわい

「そうやんな？」

「俺の怒りメーターが現在進行形で上昇している。」

「いやあにしても今日はホンマあつついよな。」

「さっき言った。」

「……素っ気ない返事ばかりで俺寂しいやん。」

「だからどうしたこのドアホが。」

こんなしょーもない会話を繰り返して歩く俺ら。素っ気なく返す俺だが、虎次は嫌な顔一つせず笑い続ける。普段の俺なら速攻で殴り飛ばしているだろう。これもやはり、慣れっという奴なのかな。

「いやはや、慣れとは恐ろしい。」

「なあなあ、ホンマにゲーセン行かへんの？」

「しつこいのは慣れねえ。」

「行かねえ。そもそもテメエ、こないだみたくまあた雑魚どもに絡まれるだろが。」

こないだ貞和良ザコとその他をボコボコにして以来、他の雑魚どもがどこで聞きつけたのか俺らを見るやいなや速攻で殴りかかってくるようになり、それを俺と虎次が適当に返り討ちにするというのにも慣れてきてしまった。こないだのゲーセンでもそうだ。シューティングゲームで遊んでる俺らの背後から思い切り殴りかかってきた連中を、俺はシューティングゲームの銃で殴り飛ばしてやったし。因みにその時壊れた銃は返り討ちにしてやった連中が弁償することになったのはまあいいとして。

「平気やって平気。」

相変わらずケラケラ笑う虎次。

「何てつたつて……。」

と、続けて回した肩をバンバン叩く。

「こつちには普通の人間とはちやう、心強いダチがおるさかい。挑んでくる連中なんてかわいいもんやって！」

「……………」

普通の人間じゃない……この言葉は、俺にとってはまさに言葉のナイフ。周囲はその事実を知らないから、こついった陰口を叩かれる心配はない。だが、お袋と親父の会話を盗み聞きしたあの日から、その言葉は俺にとっての重石となっていた。

自分を勝手に抑えつけていた、きっかけの言葉。

「……また挑んできたら今度はお前を盾にしてやる。」

「ええ！？　そ、それだけは堪忍してや！？」

「断る。」

だが、その言葉は今も重石でも何でも無い。言われても何も不快に感じない。抑圧されてたはずなのに、今では何とも思っちゃいない。

その理由は、こいつにある。こいつが自分の身の上を、話してしま

うと今まで仲良くしてきた連中が離れてしまふと恐れていた話を俺にしてくれた次の日。俺は、同じように自分の出生を話した。

その時は、本気で恐かった。

例え相手がこいつでも、俺のことを奇異の目で見るのではないかとそれがたまらなく恐ろしかった。

だから話すのを躊躇い、その日のうちに話せなかった。

俺は、人間であつて、普通の人間じゃない……。

別に普通やおても化け物でも、お前はお前やる？

でも。そんなあいつはあつげらかんと、何にも考えていない顔をしながら言い放った。

明らかバカとしか思えない顔。明らか間抜けな人間が発するとしか思えない発言。

たった一言。それだけ。

それだけで、俺の中にあつた重石は消えた。



わかっていたつもりだった。こいつが、そんなことにこだわる人間ではないことを。  
それでも、心のどこかでまだ信じきれていなかった。こいつのことを。

こいつは、救いようのない大バカだというのがようやくわかった。

俺は、そんな大バカと出会えたことに感謝していた。

「……オイ、虎次。」

「？ 何や？」

ふと、歩きながら呼ぶ。それに応えて、虎次は首をかしげた。

「……………」

「……オイ、どしたー？ どしたんやー？」

掌を俺の前でヒラヒラさせながら続きを催促する虎次。俺は、言うべき言葉を言おうとした。

が、ヒラヒラが鬱陶しいのでやめにして、

「……ゲーセン、ぜってー行かねーぞ。」

「ガーーーーン!? 何でやあああああ!?!?!?」

横で絶叫するクソやかましい奴はポイしておいて、俺はさっさと歩き出した。

まあいい。こんなん今言わなくてもいいかと。いつでも言えるかと。

それが、永遠に言えなくなるなんて、微塵に思っていなかった。

「おい、待ってーなー！」  
「待たん。」

俺は虎次<sup>バカ</sup>を放って、さっさと歩く。そしておもむろに横断歩道の白線に足を付けた。

「あ、龍一！」  
「？ あ？」

が、急に切羽つまったように呼ぶから歩きながら振り返る。

「どしたよ。」  
「……今信号点滅中やで？」

指差す方を見れば、確かに歩行者専用の歩く人型マークが青く点滅しているのがわかる。もう数秒もすれば赤になるだろう。だが、今んとこ車は来てないし、別に危険視することもない。

「気にすんなよ。さっさと渡っちまおうぜ。」

「いやいや、危ないって。こういうのはな、安心やって思った時が一番危険」

【パアアアアアアアア!!!】

「!?!?!」

突然、虎次の言葉を遮るかのように鋭い音が辺りに響き、思わず身を竦める。だが、横から何か近づいてくるのを感じた。

見れば、巨大なトラックが猛スピードで接近してきていた。明らかに制限速度を越している。

一瞬、冷静になった頭でトラックの運転席を見てみた。ベタにうつらうつらと舟を漕いでるのが見える。

俺は、何が起こってるのかわからずに愚か者のように立ち尽くした。

「危ない龍!!!!!!」

突然、横から声が聞こえ、その後に衝撃を感じて俺は弾き飛ばされる。  
トラックからの衝撃じゃない、強くない衝撃。突き飛ばされたのだと、遅れて判断した。

【ドン】

何かがぶつかる音がした。

「……………は？」

音は、電柱とか、そんな物体にぶつかった時のような音じゃなかった。

もっと違う、何か。電柱に衝突するより、鈍い音。

「……………は？」

突き飛ばされた時に打った頭を抑え、上半身のみ起こす。体は痛まない。元々頑丈だから、大したことはない。

「……………は？」

突っ込んできたトラックのバンパーはひしゃげ、フロントガラスにもヒビが入っていた。相当強い衝撃だったというのを物語っている。それほどまでにスピードを出していたから当然だ。

「……………は？」

トラックから離れた位置に広がる、赤い何か。夥しい量の、何か。

「……………は？」

その中に倒れている、誰か。体中が真っ赤に染まった、誰か。

「……………虎、次？」

立ち上がり、力の入らない足で歩み寄る。

ひどい姿だった。真っ白な髪は真っ赤に染まり、顔中からも血で染まっている。服も、ズボンも。Gパンは赤黒く変色していた。

「虎次……………？」

ピクリとも動かない。胸が上下していない。息をしている音が聞こえない。

そこだけ時間が停止してるかのような、異様な空間の中に虎次が取り残されているかのような、そんな錯覚を覚える。

「虎次……？」

手で、虎次の肩を揺さぶろうと触れる。その時、俺の手は異様なほどに真っ白だった。

【又チヤ】

触れた瞬間、粘着性のある液体が俺の掌にへばり付く。生暖かった。それが何なのか、俺は知っている。だから、認めたくないかのよう  
に、恐る恐る自らの掌を見た。

真っ赤だった。

「……あ。」

全てが赤くなった。

「ああ……。」

死んでいた。

「ああああ……。」

死んでいた？

「ああああ……。」

違う。

「ああああああ……。」

死んでいたんじゃない。

「あああああああ……。」

そうじゃなくテ。

「あああああああ……。」

安全ダト思っテいた俺ガ。

「あああああああ……！」

コロシタ。





て、あいつの死。

忘れられるはずがない。明るく、楽しかった生活から、一気にどん底に突き落とされたあの日。

あの後、俺はどうなったか全く覚えていない。お袋と親父が慰めてくれていたとか、そんな程度の記憶しかない。ただ、その内容は覚えていない。

それから俺は、雅と出会って、恭田と出会って、香苗と出会って、久美と出会って………雅と会う、その前の記憶が一切無くなっていた。

唯一、残っていた物は………罪悪感と後悔と悲しみ。

俺が殺したようなもんだ。あの時、俺の不注意のせいで、あいつは俺を庇って死んだ。

トラックに撥ねられた程度で怪我するほど、柔な体じゃないと自負していたから、それもあって油断していた。

その時の俺は、まだ咄嗟の判断ができず………結果、ああなってしまった。

……俺が、あの時止まっていれば。待っていれば。何にもならなかった。あいつは死ななかった。

けど、結局死んだ。何をどうしようが、もう元通りにならない。死んだ人間は生き返らない。

だから……俺は一生、この罪を背負っていかないとならない。

なのに、あいつは俺の前に現れた。生きて。それも変な力を行使して。

性格も、違和感があった。狂っていた。何かが狂っていた。

だからわかっていた。もう、昔のあいつじゃないことは。

あいつは……殺しを、楽しんでいた。

だから……俺は……。

「リュウジさん……リュウジさん……！」

……暗闇に思考を捕らわれていた俺は、突然聞こえてきた声に意識を再び蘇らせた。

(……………アルス……………?)

こうやって呼ぶ奴は、アルスしかない……………薄っすらと、目を開けてみた。

場所はどこだかわからない。虎次との戦いで、何も考えず、体の傷を癒やすために適当な場所を選んだからだろう。ただ、食い物の匂いとか、埃っぽい匂いとかする。おそらく、飲食店の倉庫だろう。

それよりも一番驚いたのは(表面には出さなかったが)、目の前でポロポロと涙を流すアルスとクルルとファイファイ。そして、その後ろで信じられないといった顔をしている雅達。アルスは必死に俺の名を呼び、クルルは俺のジャケットにしがみついて号泣し、ファイファイは耳元で「起きなさいコラ!」とか涙声で喚いていた。正直耳痛いからやめんかい。

「リュウジさん……………嘘、ですよ……………こんなの……………こんなの……………!」  
「リュウくん起きでよおお!! 死んじゃ、死んじゃヤダアアア!」

必死に呼びかけるアルスに、号泣しながら揺さぶるクルル。やめれ。服ビロンビロンになるからやめれ。後ものっそい涙と鼻水でビチャビチャだし。

だが目を開けてるのに気付いていないらしく、未だに呼びかけ、揺さぶり続ける。このタイミングでどう起きろっての? 何か気まずいぞコレ。

「龍……二……オイ、嘘だろ？　嘘だろオイ？」  
「リュウちゃん……？」

覚醒した雅と香苗が、呆然と呟く。まだ信じれていない様子。いや生きてるけど。

「龍二……そんな……龍二……。」  
「……………」

久美はヘナヘナと座り込み、リアンはまだ覚醒しきれていないのか呆然としている。

「龍二いいいいい！！！！！！」  
「リュウジ……………」  
「嘘……………」

恭田は号泣し、カルマケルマの双子も揃って呆然としていた。

「龍二？　ちよつと、これ冗談よね？　冗談に決まってるでしょ？  
ねえ？」

「か、カリンさん、落ち着いてください！」

唯一かろうじて冷静だったらしいスタイルが、混乱してる花鈴を落ち着かせようとしていた。

……超起きづらい。マジで。何か、きっかけが欲しい。マジで。起きれないし。



## 第百六十六の話 始まりの罪（後書き）

遅くなっているながら、次の話の構成ができてくるにもかかわらずまだ一話の前半も書けていないので、また更新遅れる可能性があります。こんな不甲斐ない作者ですが、なにとぞ、なにとぞ見守ってくださいませえええ!!! 生暖かくても冷たくてもぬるくても結構ですので!!!!!!

第一百六十七の話 罪深き籠（前書き）

すいませんでしたあああああ！！！！！OTZ



## 第六十七の話 罪深き籠

（ライター視点）

どんな事件でも、時間はかならず経つものである。

破壊活動が終わった後の夕日に染まる渋谷は、かつて人々が夜でも賑わっていた程の栄華を失い、すでに避難が完了した今、不気味な静寂に包まれていた。

ほとんどのビルは半壊し、中には崩壊し、瓦礫はアスファルトに散らばり、水道管から水が噴出して霧を作り、電柱は倒れ、店は崩れ、そして道端に倒れ伏すかつて人だった物……。

普段ならば美しい夕日も、それらを照らすと一転してある意味恐ろしささえも感じさせた。

「……………」

そんな中、原型を保っているものの壁面に備え付けられているスクリーンが右斜めから大きく切りつけられたかのように抉れ、さらに窓のほとんども吹き飛んでいつ崩れてもおかしくない程のダメージを受けた109の屋上にて。唯一無傷だった貯水タンクの陰にうずくまり、震えている少年がいた。

手で頭を覆い隠し、歯をカチカチと打ち震わせて、目も焦点が合っていない。体の震えは小刻みというレベルを超えており、誰から見ても痙攣してるかのような凄まじいものだった。

「……何で……。」

しばらくし、震える声でポツリと呟いた。

「何で……なんでこないなことになつとんねん……！」

この惨劇を作り、多くの人々を殺め、さらにはかつての親友をも傷つけたことにより、少年 稲神 虎次は、変貌した渋谷を109の上から眺めている途端に恐怖で体が震え出し、しばらく貯水タンクから動けないでいた。

そんな彼の恐怖を和らげる人間は、ここにはいない。

『何を怯えている。』

が、声が聞こえた。それも恐怖を和らげるような声ではなく、寧ろどこまでも深い闇から聞こえるような、逆に恐怖を倍増させるような、暗く低い声。

声を聞いた瞬間、虎次はビクリと体を震わし蹲りながらわずかに背後を振り返る。そして、そんな惨めな状態の虎次の背後で、突如火柱が噴き出るかのように現れた。

しかし、その火柱は普通の物とは違い、影で構成されてるかのよう  
に漆黒の闇の色をしていた。どこまでも深い、闇の色……それが二  
メートルの高さまで燃え上がり、どこかへ誘うかのように揺らめい

ている。

火柱は、蠟燭の火のように揺らめき続ける。人の姿は為していない。だが、圧倒的な存在感と、深い闇が迫り来るような圧迫感がそこにある。

『聞こえないのか？ 何を怯えている、と聞いている。』

火柱から再び声が聞こえ、虎次は目の焦点が合わないまま火柱を見つめた。いまだ震えは止まっていない。

「う……嘘や……俺、こんなしてない……こんな、こんな……。」

訴えるように言い、自らが行ったことを否定し続ける。さながら、殺人事件を起こした、往生際の悪い容疑者のよう。

『何を言っている。これをしたのは他でもない、お前だ。』

そして、火柱はその罪を追求する刑事のよう。虎次の恐怖に塗れた訴えを、バツサリと切り捨て、肯定する。

『人々を殺め、建物を壊し、そしてお前自身が友を傷つけた……それはお前の意思だ。私が与えてやった、その特別な力でお前は行使したのだ。それは嘘偽りない事実だろう。』

「ち、違う！ 俺は、こんな望んでへん！！」

虎次は立ち上がり、火柱に怒鳴りつける。それでも震えは止まらず、僅かながら生氣を取り戻した目で睨みつけるのが精一杯だった。

『笑わせるな。お前が望んだのだろうか？ 蘇りたいと。私に泣き継つたのはお前だ。』

「あ、あれは……！」

火柱は嘲るように言い放ち、虎次は口籠った。火柱はさらに続ける。

『いい加減、受け入れる。その身に宿す闇に、お前は全てを委ね、結果この惨劇を招いたのだと。狂気に任せて、破壊し尽くしたのだと。そしてそれがお前の力だ。何者の力でもない。』

「ち、違うー！」

首を振り、火柱から放たれる言葉から否定し、逃れようとするかのように貯水タンクに背をつける虎次。

『だから違うと』

「違う違う違う違う違う違う、違うー！ー！ー！」

それ以上聞きたくない、という意味を表すかのように虎次は耳を塞ぎ、再び蹲った。また体が震えだし、啜り泣き始める。

火柱はしばらくその場で揺らめき続けた。目は無くとも泣き続ける虎次をじっと見つめているかのように。

『……………まだ魂が不安定か……………手間をかけさせる……………。』

小さく毒づき、火柱の揺れが僅かに大きくなる。

『いいだろう……………お前がそこまで自らの行いを否定するというのなら……………。』

ついに火柱はゆっくりと、かつ滑らかに虎次に向かって移動を始めた。気配を感じ、蹲りながら泣き続けていた虎次ははっと顔を上げ

た。

「な、何を……。」

嫌な予感が、虎次の体を駆け巡る。恐怖が、絶望が、自らの体を脳の命令を遮断して縛りつける。

『その体の中にある力を……、』

火柱と虎次の距離は、一メートルにも満たない位置までできていた。虎次の顔は、涙と鼻水でグシャグシャのまま蒼白になっていく。

『私自らが……、』

「や、やめ……。」

すでに距離はちょうど一歩分になり、虎次は意思とは関係なく条件反射で足を使って後退り始める。だが、ちょうど自分の後ろは貯水タンクで遮られていて、下がろうにも下がれなくなっていた。

『増幅させてやり……、』

「やめて、くれ……！」

火柱はもう虎次の目と鼻の先。逃れられない運命に、虎次は最後の足掻きに声を絞り出す。

そして、

『恐怖を、狂気に……お前の力に変えてやる。』



「「ヤだー!!」」  
「あらま。」

ギューっと俺の体を左右から締め付けるように抱き締めながら嗚咽を漏らし続けるアルスとクルルに離れるよう言ってみたら即答だったよあーもー。

何でも『心配かけさせた罰!!』というわけなので、あの後起きたら花鈴と久美と香苗とリリアンが俺を叩きまくってきた。お返しに蹴った。俺にも責任あるからあえて叩かれまくったんだがさすがに腹立ったんでハイ。

そして入れ替わるようにしてアルスとクルルがこうなったわけで。正直泣き続けられると鬱陶しいんだが、仕方ないじゃん。こうも思いつきりしがみついてミーミー泣かれると罪悪感がこう、ねえ？普段なら蹴り飛ばしてるところだが、どうもそんな気が起こらんのよ。わかる？　っーかわかれ。

「……………それで？　何でお前はそうまでなっってここに来たんだよ？」

…さて、脳内でわけのわからない言い訳はやめてっつと。

「ああ、まあ……………カっとなっってやったみたいな。」  
「非行少年のようなノリで言うんじゃないやねえ。」

こんな状況というのに、雅のツッコミはキレがある。誤魔化し失敗。

で、今の状況なんだが、さっき俺が目覚めた喫茶店の倉庫から出てボロボロの店の中にある一番原型を留めている大きなテーブルにイスを寄せて、囲むように座っている。店自体ボロボロだが、これでも被害はマシなほうで、崩壊することはないだろう。

最も、こんな崩壊寸前の街からさっさと退散するのが吉なんだろうけどな……。

「ねえリュウジ、早く逃げようよ？　ここも安全じゃないんだよ？」

フィフィが俺の服の裾を引っ張って急かす。確かに、この店も崩れる心配はないとはいえ、危険なことには違いない。

だが、俺は否定してかぶりを振った。

「わり、それ無理。」

「何だよ！？　アンタがボロボロになるなんて尋常じゃないわよ！」

フィフィが切羽つまった表情で詰め寄る。その顔は小さい体ながら迫力があつた。

「……あゝ……いろいろあるからな俺にも。」

言いよどんで、後頭部を掻きながら適当な言葉で誤魔化す。そのボキャブラリーの無さに自己嫌悪を覚える。

でもな、しょうがねえんだよホントに。

「ホント悪い、俺まだやることあるからさ……お前らが先に渋谷から出る。」

「ちよ、何言ってるんだよ！？　お前はどつすんだ！」

「だからやることあるつつつたろ？　それ終わったら俺もお前らの後追っから。」



激昂する雅を論して、俺はヒラヒラと手を振った。

すでに体は回復してるし、今は一刻も早くこいつらを街の外へ出さないといけない。元々、雅達は死体とかそんな見慣れていない。聞けば、香苗はすでに吐いたという。精神的にやっぱつらいものがあるのは間違いない。

ここにいてたら、こいつらは発狂する。それだけは絶対に阻止しないとイケない。

「……………それで……………君は……………龍二は、どうするつもりだ？」

いつの間にか復活していた久美が、立ち上がって俺を睨んでくる。

花鈴達も同様。

その非難めいた鋭い視線が俺を突き刺してきて……………俺は、思わずそつと目を逸らした。

「だあと言っただろう。俺はやることやっただらさつさとこんなところから」

「バカ言わないでよ！ アンタあんだだけ怪我しといてアタシらだけ逃げるなんてできるわけないでしょ!？」

「こんなの怪我のうちに入りやしねえよバカ。」

花鈴が声を荒げるが、俺はスルーした。

「で、でもリュウちゃん……………!」

「……………オイ。」

尚言いすぎる雅達には俺は怒気を含ませて睨みをきかせて見る。その瞬間、全員竦みあがった。

「お前らわかってんのか？　ここにいたら死ぬかもしれないぞ？　こないだの化け物が俺らの町襲った時には連中が弱かったおかげで被害が少なくてすんだものの、今回はわけが違う。相手は街一つ吹っ飛ばせる力持ってんだ。そんなのにお前らが対処できると思ってるのか。」

「そ、それは……。」

花鈴が言い返そうとしているが、何を言えいいかわからない様子だった。それに構わず、俺は続ける。

「正直、俺はお前らを見ながら戦う自信はない。相手は見境がない。お前らにも攻撃してくる可能性だってあんだ……だからさっさと逃げろ。これがお前らに今できることだ。」

「でもそれだとお前が……！」

「お前らなら俺がどんな人間か知ってるだろうが。大丈夫に決まってるんだろ。」

雅の言い分を遮り、俺は断言する。

今の言葉に嘘偽りはない。今のあいつは、俺が知ってるあいつじゃない。こんな破壊活動をする奴じゃなかった。だがあいつは現に、渋谷の姿を変えた。無関係の人間をも巻き込んで。

だから、こいつらも巻き込まれるとなったら俺は……。

「……何で……ですか……。」

「あ？」

ふと、腰にずっとしがみついていたアルスからかろうじて聞き取れる程度の声が聞こえた…心なしか、服を握る手も震えている。

「何で……何でそんなこと言っんですか…！」

俯きながらも、さっきと違ってはつきりと言うアルス。声も震えて、今にも泣き出しそうな、そんな感じの声だった。

「ボクらは……皆、リュウジさんが心配でここに来たのに……なんでそんなこと言っんですか……！」

「……………！」

アルスが涙声で語り、反対側にしがみついているクルルもアルスと同じくらい……いや、それ以上の力で、俺の服を握り締めて、服に皺を作った。

「……さっき言ったらうが。ここにいたらお前らは」

「そんなの関係ないです…！」

俺の話を遮って叫んだアルスは顔を上げた。顔もクシャクシャで、泣き腫らした目をしていた……それでも、今まで見たことないくらい真っ直ぐに。今の俺には痛いくらい、しつかりと俺を見た。

「いつものリュウジさんだったら、皆を追い返そうとしないで守り抜こうとしたはずですよ！ 今までだって、ずっとずっと！なのに、一人だけ背負い込もうとして皆を追い返すだなんて、そんなのリュウジさんじゃない！リュウジさんらしくないですよ…！」

「……………。」

叫ぶアルスに、俺はずっと無言を貫く。その一言一言が鋭利な刃物

のように、胸に突き刺さるような錯覚を覚えたが、顔に出さずに済んだ。

「……………スマン。」

「……………謝る……………意味がわかんないよ、リュウくん……………！」

小声で謝った俺に、クルルが顔を上げず、泣くのを耐えるように震えながら言った……………すでに泣いてるようだけど。

「……………ホントに、スマン……………。」

もう一度謝りながら、二人の頭をいつものように撫でる。それで少し収まったのか、アルスとクルルの震えが止まる。

でも、いつまでもこうしてはいられないことは痛いほどわかっていった。

そつと二人を押しつけてイスから立ち上がり、俺はテーブルに立てかけてあった大きめのスポーツバッグ……………エルと龍刃が入っている……………を手に取った。クルルがもしもの場合にと持ってきてくれたことに感謝しよう。

「……………ホントに行くの……………？」

「おつよ。」

リアンが静かに聞いてきて、答えながら俺はバッグから二刀を引っ張り出し、龍刃を左に、エルを右にとそれぞれ両腰に差す。

「……………一つだけ、聞かせて欲しい。」

「……………なんだ。」

二刀の具合を確かめっていると、リリアンからまた声上がる。

同時に、非難めいたものではない……縋るような視線を感じた。

「……………あなたにとって……………今の私達は……………邪魔なの……？」

「……………。」

その質問に、俺は答えるのをわずかに躊躇った。正直に答えると、俺は確実に皆を傷つける……………危険を顧みず、ここまで駆けつけてきてくれた奴らを、俺は突き放すことになる。でも、嘘を付くこともできん……………だから、

「ああ。超邪魔。」

俺は、正直に、簡潔に……………そう答えた。

「……………。」

言った瞬間、気まずい空気が流れ始めた。正直、居づらい。だからさっさと俺は店を出ることにした。

が。

「どどどどえらいこつちゃあああ!!!」

「やかましいバカ。」

シリアスぶち壊しつつ、念のためということで見張りを勤めていたケルマとカルマが舞い戻ってきて雰囲気ぶち壊した本人であるケルマに俺とカルマが同時に毒がました。

「た、大変、大変、大変です！ えらいこつたっスー!!!」

「ええい落ち着けバカケルマ。口調変わつとる。」

人が覚悟決めて行こうとした瞬間にこんのアホはあああああ……。

「…で、何があつたカルマ。」

「じ、実は…。」

「閉じ込められました…。」

「……は？」

カルマが口を開く前に、同じく見張りをしていたスタイルがしてやられたという風に顔を顰めて店に入りつつ重々しい口調で言った。

つか今何つった。閉じ込められたなあ？

「…どついうこつた。」

「……そのままの意味です。この街全体に結界が張られました……  
それもとびきり強力な物です。これを破壊するのは私でも不可能で  
しょう。」

「それも禍々しい、気持ち悪い力です……。」

魔力を感じ取れるカルマとケルマ、そしてアルス、クルル、ファイフ  
イ、リリアンは若干顔色を悪くした。

何だこの展開。何なんだよ一体……。

「……この力……まさか……！」

<おーい、聞こえるかぁマイフレ！。 >

「……！」

「え、誰!？」

リリアンが言いかけた途端、街中に響き渡る暢気な声。いきなりの  
ことで戸惑う雅達。

俺は、その声を聞いた瞬間、体の奥底から湧き出る力を感じつつ咳  
いた。

「……………虎次……………」

間違いようがない。変わらない、のんびりとした関西弁。かつては鬱陶しく感じつつも、どこか心地よさを感じさせる声。

それが今では、狂気を滲ませているのを確かに感じた。

< 渋谷におることはわかっとなねんで！。俺にかかれば、お前の位置なんて丸わかりなんやで！。 >

拡声器を使っているような声を、俺は黙って聞いていた。皆も少し順応してきたのか、その声を聞いている。

< まあせつかくの会えたんや。ここは一つ、ゲームをしようやないか。 >

「……………ゲーム？」

< ルールは超単純。何のナゾ解きもいらん、簡単な奴や。今俺は、渋谷の109の前におる。お前の位置からしたら結構離れとるけど、道は単純なもんやろ？ まあとりあえず俺がおる位置まで来ること！ これがルールや。な？ 簡単過ぎて笑い出るやろ？ >

…確かに、簡単だ。ここから109までは一本道。走っていけばなんてことない。

が、これだけでゲームになるはずがない。

< 当然、ただ走ってゴール！！ なわけないで？ わかっとるやろ



うけどな。ま、どんなんかはスタートしてからのお・た・の・し・  
みって奴や。ただし、一人で来ること！ ルールは破ったあかんで  
ー？>

.....。

<くんじゃ精々頑張つてやー！ 俺んとこ来るまでに死んだら失望す  
るでー？ ..... お前なら大丈夫やろうけどなあ..... ヒヤハハハ  
ハハ！.....>

ひとしきり喋つた後、話すことも無くなつたらしく、それきり声が  
聞こえることはなかった。

.....ヤロウ。

「上等だバカ虎次.....今ぶん殴りに行つてやらあ！」  
「リュウくん！..」

煮えくり返る怒りを感じながら店から飛び出し、金属同士が擦れ合  
う涼やかな音をたてながらエルと龍刃を引き抜いた。

「.....お前らはそこにいろ。結界の中にいる以上、元を断たないと  
解除されねえだろうしな。」

「そんな、ボク達も行きます！」

【シュッ！】

店から出ようとするアルス達を、エルを突き出して止めた。

「なっ……。」

「聞いただろ。あいつは俺一人に来るように言った……それに。」

エルを下ろして、一呼吸置いてから言い放つ。

「お前らは……邪魔だ。」

そして、皆が反論する前に……俺は駆け出した。

湧き出る怒りと、胸の奥に突き刺さる痛みを感じながら……。

109へ。虎次あいつがいる場所目指して。

第六十七話 罪深き籠（後書き）

すいませんでしたあああああああ！！！！OTZ（再び）

気付けばもう2010になって……PCが壊れ、書き連ねていたデータが消えて以来、書いては消し書いては消しの無限ループ。どうにか抜け出して更新できました！！おそらくもう見る気なくした人もいるでしょう。

それでも待つてましたー！ っていう人がいてくれればこれほど嬉しいことありません。こんなダメ作者に生……生いらないか。暖かい視線を！ お慈悲をー！ー！！

……では、感想の返信を書きに行きます。

第六十八話 奮戦（1）（前書き）

まず最初にお礼を申し上げます。

こんなサボリーマンな作者にたくさん感想を送ってくださって、  
本当にありがとうございます！

で、ここからしばらく戦闘パートです。

第六十八の話 奮戦（1）

（ライター視点）

喫茶店から飛び出してから、龍二は休まず走り続ける。所どころ道を塞ぐように瓦礫が落ちているが、そんなの関係ないとばかりに弾き飛ばし、そして速度は乗用車並に速く、しかしそれ以上は出さない。道の途中でトラップがある可能性を考慮し、警戒しているためである。

それでも、龍二の胸の中を渦巻く怒りは収まることを知らないせいで、自然と速度は上がる。

（くそ、くそ、くそ、くそ……！！）

龍二は心中で己自身を呪う。

最初に虎次が襲い掛かってきた時点で冷静になっていればと。アルス達に心配をかけさせてしまったこと。駆けつけてきたアルス達をもっと早く帰させなかったこと。

自分達の争いに、皆を巻き込んでしまったことを深く後悔していた。

（どんなに強大な力を持っていたところで使うべき場所で使わなかったら、結局は宝の持ち腐れじゃねえか……クソツタレが！！！！）

何度も、自身の心の中で毒づき、怒りを溜め込む。そうして徐々に走る足を速めていき、

『！！ 止まれリユウジ！！！！』

「！？」

【ズウン！！】

左手に持つエルから声が上がリ、龍二は我に返って足を止めて急停止した瞬間、目の前に鉄骨が落ちてきてアスファルトにめり込んだ。後一步踏み込んでいけば下敷きになっていたことは間違いない。見上げると、ビルの上に設置してある工事に使うクレーンの先の鎖が干切れているのが見えた。そこから落ちてきた物だろう。

『落ち着け！ 今冷静さを欠いてはいくら貴様でも！』

「んなこと言われんでもなあ……………！？」

龍二がエルに反論しようとした瞬間、頭上から殺気を感じ取って咄嗟に後ろへ飛び退いた。

【ストツ】

間髪いれず、龍二がいた場所に軽い音をたてて何か突き刺さる。

「……………氷？」

それは、ツララのように先端を鋭く尖らせた氷だった。突き刺さった場所は硬いアスファルトのはずだが、そんなことは全く関係ないとばかりに深々とめり込み、氷の半分ほどまで埋まっているのがその鋭さを物語っている。

『ギギヤアアアアアア！！！』

そして、それが合図であるかのように地面に影が差し、重たい音をたてて何かが落ちてきた。

「……………こいつ。」

龍二はそいつ（…………）を見て目を細める。目の前に降り立ったのは、いつかアランが町に放った、見た者に嫌悪感を抱かせるようなカエルの化け物…………だが、以前の敵は体が緑色だったのに対し、目の前にいるこいつは皮膚が青く、鉤爪は消えて、代わりに人間の手のような形になっており、その手には錆だらけの鉈が握られていた。さらには、その体には逞しい筋肉が付加され、見た目からして怪力なのは明らかだった。

『こいつはあの時の……………！』

エルが絶句しているに対し、龍二は声を上げることもなくカエルの化け物を見据える。だが、化け物はそんな龍二に気付いていないかのように無謀にも鉈を振り上げて襲い掛かる。

鉦はサビサビで一見すると使い物にならないかに見えるが、化け物の腕の筋肉と相まって殺傷能力は十分ある。一般人ならばその凶悪な風貌を見て恐れおののいて逃げる間もなく立ちすくみ、無防備な頭にその一撃を受けることになるだろう。

だが、それは一般人の話。

【ガアン！】

龍二が左手のエルを振り上げると鉦が弾き飛ばされ、化け物は体勢を崩す。いかに化け物が怪力であろうと、その力は龍二に比べると雲泥の差であった。

「はっ！」

そして胴体がガラ空きになった化け物に、龍二はすかさず体を捻って右手に持つ龍刃を振るって切り裂く。硬い皮膚をしているであろう化け物の体は、まるでバターを切るかのようにスツパリと龍刃の刃が通り抜ける。

『ガアアアアアアアツ！！！！』

断末魔の叫びを上げ、化け物は地面に倒れ付す。そしてしばらく悶絶していたが、数秒待たずして大人しくなり、痙攣を起こしてから動きを完全に止めた。

【バシヤア！】

『なっ……………！！？』

「……………。」



が、化け物の死体はそのまま残ることもなく、一瞬にして透明な液体になってアスファルトの中へ吸い込まれた。唯一残ったのは、鉄で出来ている鉞だけ。

『……まさか、これは……。』

「……………」

エルが何かに気付き、龍二は化け物が消えた跡を見つめて動かない。だが、ゆっくりと緩慢な動きで二刀を構え始め、神経を研ぎ澄ませる。

「……………つまり、ゲームってのは……………」

言うが早く、先ほどの氷の矢が龍二に再び襲い掛かる。違うのは、一本だけでなく二本、三本……否、無数の矢が全て龍二に狙いを定めて飛んでくる。

「……………このことかあっ……………！」

【ブオンッ！！】

体を回転させて二刀を振り回し、そこから発生する剣圧が突風となつて襲い掛かってくる氷の矢を全て吹き飛ばした。

『グアアアアアアッ！！』

『ギッ！ ギイイイイ……………！』

間髪入れず、先ほどと同じカエルの化け物が頭上から鉈を振り上げて龍二に迫る。その数、僅か五匹のみ。だが一匹辺りのその戦力は、屈強な男性数十人分の力を持っている。

「つらあつー!!」

龍二は慌てず、迫る来る化け物を見ることなく右足に力を入れ、鋭い上段後ろ回し蹴りを繰り出して一番接近していた化け物の腹を蹴りつけて吹き飛ばし、続いて迫ってきた化け物には蹴りの回転の勢いを利用した龍刃の横薙ぎで両断し、水へと還す。一匹仕留めると、地面に降り立った二匹が龍二と対峙し、鉈を振り上げて龍二を威嚇する。だが、それははつきり言って無駄な行動であるとしか言いようがなく、龍二は化け物目掛けて駆け出し、龍刃とエルを持つ手を交差させる。

「消えろっつー!!」

二匹の間を一瞬で駆け抜けけると同時に二刀を同時に逆袈裟に振り上げる。交差した刃が轟っ！と音をたてて風が舞い、地面から埃が巻き起こる。

そして一拍置いて、化け物の体がそれぞれ斜めにズレていき……別れた上半分が地面に落ちる前に水へと戻り、その姿を消した。

『龍牙二閃』という、二刀を使った技。シンプルながらも、気合を込めたその刃にはどのような物質さえも泣き別れとなることは必須。

「『ライトニングアロー』!!」

【ビッ！】

二匹を屠って一息つくこともなく、龍二はエルを振ってエルの魔法

を唱え、一筋の雷を前方目掛けて飛ばす。その先には、最初に蹴り飛ばした化け物が立ち上がるうとしていたが、それより早く龍二の雷がその身に突き刺さって放電を始める。その一撃は一瞬で黒こげにする威力でありながら、水で構成されている化け物にしてみれば黒こげというレベルではすまない。水は電気をよく通すと言われるように、化け物は声を上げることもなくその身を破裂させ、砕け散っていった。

「……………うざってえ……………!!」

忌々しげに毒づき、二刀を血払いするかのようには振る。敵の気配は感じず、ここで敵が現れることはおそろくない。

だが休憩することもなく、龍二は再び振り返ってその先を睨み付けた。

『……………この化け物ども……………おそろく、前回と同じか。』

エルは突然のことで驚いていたが、そこは元々戦士であったおかげですぐに冷静になることができ、状況を分析した。龍二はそれに返事することも相槌を打つこともしなかった。

「んなもん、関係ねえ……………邪魔すんなら、ぶっ飛ばせばいい。」

『……………。。』

何の感情も込めず、龍二はただそう呟く。だが、エルはそれを聞いて黙り込んだ。

『……………リュウジ。』

「……………あ?」

少しして、エルはどこか躊躇いがちに龍二に声をかける。それに返答した龍二の口調は、不機嫌を体現しているかのようにぶっきらぼうだった。

『……いや、やはりなんでもない……。』

「……何でもないのに呼ぶんじゃねえよバカタレ。」

結局言えずに口ごもったエルに龍二は悪態をつき、先を急ぐために再び走り出した。

冷静でいるかのように見えて内心自身に対して怒りを抱いている龍二は、ただ先へ進むことしか考えていなかった。

一方、アルス達がいる喫茶店前。

『ゲゲアア!!』

「くっ!!」

頭上から振り下ろされてきた鉈をアルスはバックステップしてかる

うじてかわす。だが、化け物はさらに一步踏み込んできて横薙ぎを放ってきて咄嗟に剣を逆さに構えて防いだ。

「な、何で……！」

防いだ腕に痺れを感じつつ、アルスは呻く。さらに力を入れようとする化け物に、アルスはこれ以上やらせまいと刃を流すようにさばいて化け物の体勢を崩し、蹴り飛ばして強引に距離を離れた。

「何で、こんなところに『アクアゲロツグ』が……！」

アルスは化け物改め、目の前で蹴りによる痛みによって怒り始めたアクアゲロツグにまだ混乱している頭を落ち着かせようとする。

先ほどまで、龍二に邪魔と言われて呆然としてしていると、突然周囲の空気が変わってアルス達は身構えたが、空間を割るかのよう何十匹も現れたカエルの化け物、アクアゲロツグを見て戸惑う。だがそんなこと関係ないとばかりに、アクアゲロツグの大群がアルス達に襲いかかり、アルス、クルル、リリアン、ステイル、ロウ兄弟といった戦える者達はそれぞれ分散されてしまい、アルスは咄嗟に非戦闘員である雅達を喫茶店の奥へ避難させ、そして現在に至る。

だが、目の前に現れたのがアルス達が以前元の世界で戦い、何度も倒したことのあるモンスターであることに強い衝撃を受け、それが完全に抜け切らないまま数十匹のアクアゲロツグと対峙する羽目になってしまったのは迂闊だったとアルスは内心毒づいた。

さらに、アルスの背後には雅達が避難している喫茶店の入り口があるため、迂闊のその場から動けないという、思わしくない事態へと陥っている。防衛と迎撃、両方を一人でこなすのに、一対多は正直きついものがあった。



怪力によってアルスが立っていた場所には小規模のクレーターができあがり、破片が周辺に飛び散った。あと少し、回避するのが遅れていたら飛び散っていたのは自身の肉片だったと思うと、アルスはぞっとした。

「そんな……知性が上がってる……？」

同時に、アルスはアクアゲロググに対して違和感を覚えていた。連中は確かに知性はあるが、それでも人間には遠く及ばず、頭の中は飢えた獣と大して変わらない。統率力も皆無で、それぞれがバラバラに動き、時には獲物を取り合って互いに殺しあうこともある。

だが、このアクアゲロググが先ほどしたのは陽動作戦という、統率力がない連中がすることはありえないものだった。ならば、今相手をしているのはアクアゲロググではなく別のモンスターか。

あるいは、誰かが裏で操っているか。

『グガアアアア！！！』

だが、アルスは思考を中断せざるを得なかった。先ほど上から攻撃してきたアクアゲロググは、喫茶店の中にいる雅達の匂いを嗅ぎつけたらしく、視線を店内へ向けた。

「っ！ させない！！」

アルスは咄嗟に剣を回転させ、逆手に持ち変えて思い切り腕を後ろに引き、投げる体勢に入る。

「はあっ!!」

【ヒュガッ!】

『ガッ!!』

アルスが呼気と共に剣を投げ、風を切る音とがしたかと思えば、剣はアクアゲロググの脇腹に深々と突き刺さり、アクアゲロググの巨体を吹き飛ばした。

「戻れ!!」

アルスが右手を突き出して叫ぶと、突き刺さっていた聖剣は一瞬光ってから消え、主の手の中へと戻る。

奇襲が失敗したと判断した他の敵は、六匹はアルス目掛けて、他は店へと突撃を開始する。

「でやああああああ!!」

だが、それをアルスは許すことはない。迫ってきた一匹を袈裟切りで切り捨て、回転してもう一匹に同じ軌道の斬撃を与えて倒す。右から鉈を振り下ろしてきた敵には、魔力で作り出した盾を展開させて弾き飛ばし、カウンターとしてガラ空きのその腹に剣を突き刺す。

「はあっ!!」

そして、敵を突き刺したまま勢いよく剣を横へと振るって敵の腹を搔っ捌き、その勢いのまま体を回転させて背後にいた敵二匹を両断した。

そして左手を掲げ、掌に魔力を込めて拳大の白い光球を作り出した。



「『ルーンボム』!!」

そしてそれを店に迫る敵の先頭目掛けて投げつけた。光球は緩やかな放物線を描き、目標に見事に命中してアクアゲロッグの頭部にくっつく。

『グアア!?!』

突然頭に何かがついて驚いたアクアゲロッグは立ち止まり、取りにかかる。だが光球は瞬間接着剤のようにびったり張り付き、取れる気配はない。やがて光球は眩い光を発し、そして、

【ズガアアアアーン!!!】

さながら閃光弾の如く光を放射しながら炸裂し、後続もろとも吹き飛ばした。

『ルーンボム』は、いわゆるアルス式の時限爆弾のような物。聖なる力を爆弾に変え、敵を一網打尽にする。

「……この技、ボクとしてはあんまり使いたくなかったですけどもっとな!!」

複雑な表情を浮かべつつも、背後からの攻撃を避けて隙だらけになった敵の頭部を切り落とす。アクアゲロッグはそのまま水へと戻り、溶けていった。

残り五匹にまで減り、アルスは店の前で剣を構えなおして息を整える。

「……お前達が、どうしてここにいるのかはボクは知らない……。」「アルスは前方で警戒しつつ雄たけびを上げるアクアゲロググ達に向けて語りかける。当然、彼らには言語能力がない上、人語を理解することはできないから答えることはない。」

「……でも、今はそんなこと関係ない……。」「

それでもアルスは語る口を止めず、剣を握る手に力を込めた。

「今ボクができることは……マサさん達を守ること。」「

例え、ボクの剣が折れても。

例え、ボクの体が傷だらけになっても。

例え、ボクの手足が動かなくなっても。

「だからボクは、倒れない。」「

例え、あの人に邪魔だと言われても。

「お前達を倒し、マサさん達を守り抜いて、リュウジさんのところへ行く。」

絶対に

「……通さない……!!」

膝だけは、着かない……!!

「はあああああああ……!!」

剣を脇に引き寄せつつ、アルスはアクアゲロググが固まってる場所目掛けて駆け出す。目は真っ直ぐ前方を見、剣に力を注ぎ、刃が白い光を放ちだす。アルスの体から漏れ出す力に恐れをなしたのか、敵は全員怯えて足が硬直したままになっていた。

「たあっ……!!」

【ゴォッ……!!】

完全無防備になっている敵目掛けてアルスは剣を横へと斬り払い、白い衝撃波を飛ばす。それだけで敵は致命傷を食らうが、アルスはさらに手首を返して逆袈裟に切り上げる。

「でやああああああああああああああああああ！！！！」  
【ザザザザザザザザザザザッ！！】

一撃一撃に聖なる力が込められた剣戟を、アルスは情け容赦なく繰り出し続ける。敵は無残にも切り刻まれ、白い剣閃の檻に閉じ込められているかのような光景を作り出した。

「『ホーリー』……！！」

最後、剣を引いて高速回転させつつ力を溜め込む。

「『エンド』ッッ！！！！」

【ズドゥッッッ！！！！】

強烈な踏み込み突きが白く輝く衝撃波を生み、五匹いたアクアゲロツグの体は剣舞『ホーリーエンド』によって粉々に砕け散り、聖なる光の熱によって構成されていた水は蒸発して消え去ったのだった。

「はあっ、はあっ、はあっ……くっ！！」

魔力と剣による激しい舞を繰り広げた後、アルスを襲うのは予想以上の疲労だった。剣を地面に突き立てて支えにし、もたれて乱れた呼吸を整えることに専念する。

「ふう……やっぱり、この技の、常時、使用には……鍛錬が必要、ですね……。」

苦笑混じりに呟き、若干落ち着いていたのか剣を引き抜いて立ち上がった。

た。自身の周りから敵の気配が消えたのは確認できたが、他のメンバー達が戦ってる以上安心できない。かといってここから離れると中に避難している雅達に危険が及ぶ。仕方なく、アルスはしばしの休息を取ることにした。

「……………皆、大丈夫かな……………」

アルスは剣を鞘に収めながら言い、疲労の完全回復のために店の入り口の横に座り込んだ。

「……………大丈夫、ですよね……………リュウジさん……………」

ポツリと、小さく呟いて……………アルスは、胸によぎる不安を拭おうと何度も心中で自問自答し続けた。

第六十八話 奮戦（1）（後書き）

次はクルルとリリアンの戦闘。

第六十九の話 奮戦(2) (前書き)

投稿していきなり土下座します。マジでごめんなさい。

## 第六十九の話 奮戦（2）

（ライター視点）

アルスが雅達がいる喫茶店を防衛しているその頃。

「でやあああああ！！」

『グエツ！？』

喫茶店から僅かに離れた道路の上で、クルルが複数のアクアゲロツグ相手に剣を振るっていた。

アクアゲロツグの媒介が水であるために、アスファルトは水浸しになってクルルの周囲を黒く染め上げる。剣で切った瞬間、肉を裂く感触はすれでも、血が飛び散るといったショッキングな光景がないため、精神的にまだ幼いクルルは戦いに集中できていた。

だが、クルルの体の至るところに切り傷ができ、そこから僅かばかりに血が流れ出ている。クルルの服は切られた箇所から徐々に赤く染まっていき、傷の痛みによって戦い続けてきたせいで溜まっていた疲労がさらに上乘せされていく。

「はあ、はあ、はあ……」

愛用の暗黒剣を正眼に構え、息を整えながら強い意志を宿した目で前方でたむろするアクアゲロツグ達を見やる。敵もクルルの実力が確かな物だと判断すると、警戒して無闇に突っ込んでくるのをやめた。



一対多にも関わらず、クルルはすでに数え切れない程のアクアゲロツグを撃退している。だがその分、クルルはすでに疲れきっていた。

（早く…リユウくんのところに行きたいのに…！）

クルルは構えを崩さず、焦る。アルス達がいるであろう喫茶店からそんなに距離はないとはいえ、今いる場所では喫茶店は見えない。喫茶店はクルルがいる場所から行って角を曲がった位置にある。つまり、建物によって喫茶店は死角になっている。ここからでは様子が見えないのだ。

ならば、前方にいるアクアゲロツグ達を薙ぎ倒して、喫茶店の所まで行けばいいというのなら簡単ではある。

だが、

（こんな時に…足が…）

心の中で呟いた瞬間、右足がズキリと痛んだ。

喫茶店にいた時、突然のアクアゲロツグ達の奇襲により、咄嗟の対応が遅れたクルルは足に攻撃が掠ってしまった。掠ったといっても、掠り傷としては深い。攻撃として放たれた氷の矢は大きく、その先端がクルルの右足の肉を大きく抉ったのだ。

それでも喫茶店から敵を離すため、痛む足に負担をかけすぎないよう浮遊魔法を使って一部のアクアゲロツグ達を誘導し、痛みによって集中力が切れてしまってそう離れてないこの位置に誘い込んだのだ。

右足の負傷により、素早い動きや回避は困難。クルルにとってはアクアゲロツグは雑魚中の雑魚。レベルが違いすぎるのに、行動が制限されて今のような状態に至っている。

それでも、多くのアクアゲロツグ相手に剣と魔力弾で応戦し、最初にいた半分以上の敵を水へと還したその実力は、幼いながらも強大な魔王としての実力を兼ね添えたクルルだからこそできること。

しかし、それもそろそろ限界だった。痛む足を引きずりながらの戦闘は、クルルの体力をさらに消耗させる。疲労困憊、満身創痍：ここまで耐えれたのもある意味奇跡である。

「私の……!!」

それでも、

「邪魔しないでっ!!!!」

クルルは、膝を着こうとはしない。

【ボウツ!】

突き出した右の掌から、漆黒の弾丸が飛び出す。クルルの十八番、『ダークネスショット』は、寸分変わらず狙いを定めたアクアゲロツグの腹部に命中した。

『ギイアアアアアアア!!!!!!』

耳をつんざくような甲高い断末魔が空間に響き渡り、仰向けに倒れこむ。他のアクアゲロツグは仲間の死に目もくれず、各々の得物を

手にクルルに迫ろうと構える。

ゆえに気付かない。倒れたアクアゲログの腹部から紫色の炎が噴出していることに。

【バァアンツ!!】

突如、アクアゲログが紫色の炎を撒き散らすように破裂し、周りに集まっていた仲間を巻き添えにした。先ほど放ったダークネスショットは、命中したら炸裂するように仕組んだいわば応用技だ。

一つの技を応用し、いくつものバリエーションを編み出していく…身体能力が高くないクルルではあるが、そういった点では戦いに関してはプロであると言える。

「よし、もう一つ!」

破裂によって多くのアクアゲログが吹き飛び、さらに戦力を奪うことに成功したクルルは、もう一つ同じ技を繰り出そうと右の掌の中で暗黒弾を形成する。

『グアアアアアアツ!!』

「っ!」

と、背後から殺気と甲高い声が聞こえ、クルルは反射的に身を捻りつつ振り返り、同時に手にした暗黒弾を投げつける。

暗黒弾が飛んでいった先には、今まさにクルルに飛びかかろうとし

ていた一匹のアクアゲログ。そいつは、クルルの放った暗黒弾によつて悲鳴を上げる間もなく吹き飛ばされた。力を溜め込む時間がなかったために破裂することはなかったが、殺傷力は十分だった。

「くっ…！」

無茶な体勢で魔法を使ったのでいらぬ力を浪費してしまったクルルは顔を顰め、体が傾きかけて持ち直そうとした。

『ガアアアアアッ！！！！』

「な…！？」

頭上からアクアゲログの声が聞こえ、クルルは顔を上げる。ビルに隠れていたであろうアクアゲログ二匹が、クルル目掛けて鉞を手に降ってくる。

咄嗟に横へ転がって回避しようとするが、痛む足が動かない。先ほどの動きで負担をかけすぎたようで、もはや歩くことすらできそうもなかった。

（やられる……！）

迫るアクアゲログの攻撃に備え、剣を持ち上げてクルルは防御の構えを取る。アクアゲログは怪力な上、今の体力で二匹同時攻撃を受けられるか正直耐え切れるかどうかわからない。頭上に剣を掲げ、来るであろう衝撃にクルルは備えた。

【ズンッ！】

『ギイイイツ！！？？』

だが、来るはずだった衝撃は来ず、代わりにアクアゲロググ達が苦悶の声を上げながら体を上下泣き別れにし、空中で水へと分解される光景が目に入った。

「……………へ？」

突然の展開に、クルルはアクアゲロググだった水を頭からもろに被りながら素っ頓狂な声を上げた。

そして、ザリツと砂利を擦る音が背後から聞こえ、クルルは敵だと思って剣を構えながら振り返った。

「…油断、しすぎ。」

「え…リリアン！？」

だがそこにいたのは敵ではなく、いつもの私服を身に包んだリリアンが悠然と立っていた。クルルは驚くも、味方だと判断して剣の切っ先を下ろした。

『グガアアアア！！』

「っ！ リリアン後ろ！！」

瞬間、こちらへ歩いてくるリリアンの背後からアクアゲロググが掴みかかるうと両腕を広げているのが見えたクルルは叫ぶ。

【ズンッ！】

『ギッ……！？』

リリアンに触れる寸前、突然アクアゲロググはその動きを止めた。

原因は、いきなり降ってきた巨大な戦斧の刃がその頭にめり込んだから。

「ん。」

後ろを見ないで、ちょうど顔の横に落ちてきた斧の柄を掴んで上へ軽く振り上げる。それだけで頭に突き刺さっていた斧の刃はアクアゲロググから抜け、哀れにも頭蓋を真っ二つにされたアクアゲロググはゆっくりと倒れていき、地面に落ちる寸前に水になり、アスファルトへと染み込んでいった。

「……後ろが……何？」

「……………何でもないよー？」

事も無げにアクアゲロググを始末して身の丈ほどもある三枚刃の、中心に拳大程の蒼い宝玉が埋め込まれた戦斧を肩に担ぎ上げたりリアンに、唾然としていたクルルはなんか龍二に対するような恐怖を



「……まあ、今回はお前に同意してやる。くたばれ、下等モンスターが。」

そしてその隣でケルマがレイピア状の剣を振りかざして次々とアクアゲロググを屠っていく、その後ろカルマが両手から作り出した鎖鎌のような武器でアクアゲロググを縛り上げていく。身動き取れないアクアゲロググのその無防備な状態をつき、ケルマが剣で突き刺していく。

普段はともかく、戦闘に関しては息がピッタリなロウ兄弟。双子ゆえの連携プレーを見せ付けていた。

「……皆に関しては、心配いらない……。」

「そ、そうだね。」

相変わらず無表情なリリアンに、クルルは三人の戦いっぷりを見て問題ないようなので安心しながら頷いた。

「喫茶店の方は……さっきアルスが全部片付けてた……ひとまずここを突破して合流する。」

「わかってる！」

斧を肩から下ろして斧の槍のように鋭利な先端を硬いアスファルトに突き刺して言うリリアンに、クルルは痛む足を抑えて立ち上がるうとする。

が、それはリリアンの左手が肩に乗せられたことで止められた。

「はえ……？」



「座ってる。」

突然のリリアンの制止にクルルは疑問符を浮かべるも、リリアンは前を見据えたまま言う。

言わないなや、突然空から落ちてきた大きな水玉が六つ、二人の前方で水しぶきを上げる。そしてその水しぶきは周囲に飛び散らず、まるで花が時間を巻き戻しているかのように蕾へと戻っていくかのように内側へと収束していき、それは一つの水柱になると…

『ギシャアアアアアアア！！！』

さながら水の卵というべきだろうか、水柱がはじけ飛ぶとそこからアクアゲロッグが現れ、咆哮を上げる。それは一体だけでなく、降ってきた水玉、合計六体が水柱から現れ、二人の前に立つ。

「ま、まだ出てくるの…！？」

先ほどまで散々戦ってきたのに、また数が増えたことで衝撃を受けるクルル。だが、リリアンは驚くこともせず、相変わらずの無表情のまま斧を手に前へ進む。

「あなたはそこで休憩を…あの程度なら私一人で十分。」  
「で、でも！」

一人じゃ危険だよ！…そう言いかけるクルルに、リリアンは少しだけ振り返った。

「今の体力は……龍二のために取っとく。」

そう言うリリアンの顔は、先ほどと変わらない無表情……しかし、その瞳にはこの戦いに勝つ自信に満ち溢れていた。その姿は歴戦の戦士と呼ぶに相応しい凛々しさがある。

一瞬、呆けた顔になるクルル。しかし、リリアンの言っている言葉を理解したクルルは、怪我で戦えない己の不甲斐なさを嘆いて歯を食いしばりつつも、戦いの邪魔にならないよう足を引きずってリリアンから離れる。

そんなクルルを横目で見たリリアンは、スッと目を閉じ、思う。

（優しい子……以前までは恐ろしい敵だったはずなのに……。）

前の世界では、リリアンの一族は魔族こそが真の悪であるという認識が根強かった。当のリリアンは、ある出来事ゆえにその認識が間違っていることを知っていたが、それでも彼女が行ってきたとされる数々の悪行は許せる物ではなかった。

数々の人間の村や街を手下に襲わせ、未曾有の恐怖に陥れてきた存在であるはずの魔王。慈悲もなく、ただ自身が思うがままに力を振るい続けてきたとされる魔王。

そんな魔王が、人のために涙を流し、必死になっている。人間となんら変わらない、精神的にもまだ幼い少女が魔王などと、誰が信じられるだろうか。

その悪行が本当は彼女の本意ではないことを、リリアンはこの世界で知った。それだけで罪を許されるということとはならないが、リリアンは今の彼女に少しも憎しみや怒りなどの感情を抱くことはなかった。

最も、ライバル意識はあるが。

（例え同じ屋根の下でなくても……この気持ちは負ける気はしない。）

仲間の勇者と宿敵であるはずの魔王に抱くこの敵対心。無表情、無感情であったはずの自分がここまで一人の人間に執着するのは以前の自分では考えられなかっただろうが、今はその気持ちのおかげでこうして自身の心を奮い立たすことができる。

ゆえに今、

『ガアアアアッ！！』

「邪魔。」

躊躇うことなく、前に進むことができる。

【ズシャア…】

斧を無造作に振るうだけで、飛び掛ってきたアクアゲロググを斜めに両断する。残り五匹となったアクアゲロググはリリアンの力に戸惑い、たたらを踏む。

その間にリリアンは、斧を地面に突き刺してスカートの右のポケットを漁る。その中から出てきたのは、黒いゴムの髪留め。

「私に牙を向くなら、覚悟するがいい…。」

目を閉じたまま口に髪留めを咥え、両手で長い後ろ髪を一本に纏めていく。

「私を倒したいというなら、かかってくるがいい…。」

右手で髪留めを口から離し、纏めた髪に通す。ゴムを捻り、幾重にも巻いてしっかりと固定する。俗に言うポニーテールへと髪型を変えた。

そして、

「私の進む先を邪魔するというのは…。」

カッと開いた目は、普段の半開きの落ち着いた目が一変、前の世界

で御馴染みの刃のように鋭い目へと変貌……否、戻った。

「後悔するがいい。己の愚行を……！」

戦闘体勢を整えたりリアンは、斧を肩に担ぎ、アクアゲロググ達を睨む。歴戦の戦士としての気迫に、本能的恐怖を覚えるアクアゲロググ。

そして沸き起こる、自己防衛本能。アクアゲロググのうち一匹が、リアンの持つ斧より小さい斧、鉞を手に襲い掛かる。

リアンは慌てることなく、斧の柄を両手で握る。

「行こう……“ガルファス”。」

リアンが自身の武器にして相棒である斧、“ガルファス”に囁きかける。それに応えるかのように、ガルファスの蒼い宝玉が光った。振り下ろされる鉞の刃。リアンはそれを横へ最小限の動きで移動して避け、ガルファスを持つ腕に力を込める。

「やっ！」

下から左上へと振り上げ、無防備になったアクアゲロググを切り裂く。続けざまに二匹リアンに襲い掛かってきたが、一番手前に迫ってきたアクアゲロググの腹に膝蹴りを叩き込んで怯ませた隙にその醜い顔を左手で掴む。

細腕からは想像できないほどの力で掴まれた顔は、ミシミシと音をたてる。呻くアクアゲロツグを、リリアンは何の造作もなく迫ってきていたもう一匹目掛けて投げつける。凄まじい衝撃を受けた二匹は地面に倒れこみ、慌てて起き上がろうとするも二匹が互いに邪魔をして動けない。

「ふん！」

【ドシャツ！】

そんな二匹にリリアンは慈悲もなくガルファスを振り下ろし、二匹を両断して絶命させる。

敵に対する情けはない。そんなものは一族に生まれた時点でとうに捨てている。

「残り二匹……！」

ガルファスを振るい、残された二匹を肉薄する。リリアンの戦闘能力に一匹は戸惑い、突撃するか迷っている。

だが、もう一匹は違う。大きな口をリリアンに向けて開けると、腹を大きく凹ませる。悪寒が走り、リリアンはガルファスを逆さにして掲げる。

【バシャン！】

アクアゲロツグの口から凄まじい勢いで発射される水鉄砲。その威力は鉛球を射出する拳銃と同等であり、ガルファスの刃の側面を盾にしたリリアンにもその衝撃は伝わってきた。

だがリリアンはこの程度どうということはない。もう一度発射しようとするアクアゲロッグに、リリアンはガルファスを振りかぶる。

「させない…！」

【ブーン！】

振るわれたガルファスはリリアンの手から離れ、高速回転しつつアクアゲロッグへと迫る。

ここで一つ、この技はクルルを救出する時に使用した物と同じであることを補足しておく。

水鉄砲を発射しようとしたアクアゲロッグは中断して慌てて避けようとすることも、それはもう遅い。回転する凶刃は、外すことなくアクアゲロッグの胸を薙ぎ、真っ二つにする。

ガルファスはアクアゲロッグを両断した後に上昇し、空中で弧を描きつつリリアンの下へ戻ろう再び下降を始めた。

『ウグウアアアアアアアア！！！』

だが、リリアンの背後にいつの間にか回っていたアクアゲロッグが大口を開けてその頭を噛み砕こうとする。

だがリリアンはそれも予測済みであるかのように身を翻し、右足をアクアゲロッグへ向けての膝を曲げる。

「ぶっ！」

膝を曲げてバネのように勢いをつけてアクアゲログの腹に強烈な後ろ回し蹴りを叩き込み、怯ませてから今度は体をアクアゲログへ向けて両膝を曲げて体の体勢を低くした。

同時に、リリアンは自身の力を右膝に集中させ、右膝が赤く輝く。

「っしやあー!!」

【ズドヴツ!】

気合一発、飛び上がりつつの右膝蹴りがまるで爆発したかのような凄まじい音をたてながら、アクアゲログの顔面に炸裂した。

リリアンの格闘技、『アクセルボム』。リリアンの闘気が込められたその膝蹴りはシンプルながら強力な技であり、いかなるものでも吹き飛ばすことができるが、その分隙が大きいためにカウンター用の技となっている。

そんな強力な技をもろに受けて無事でいられるはずがない。アクアゲログは顔面にもろに受けて脳震盪を起こし、宙をエビ反り状のまま回転して舞う。人間ならば首が折れて絶命するところだが、並の人間より頑丈な体のために死なずにすんだ。

だが、それを逃すほどリリアンは甘くない。先ほど投げたガルファスがブーメランのように持ち主の下へ飛んできたのを見計らい、リリアンは右手を頭上へ掲げてその柄を受け止めた。

「飛べ…。」

深く腰を落としたリリアンは、大きく右へ振りかぶったガルファスにありつたけの力を溜めていき、その一見すると華奢にも見える腕



を内に眠っていた鍛え抜かれた筋肉によって膨らみます。

「『アトミック』…！」

アクアゲロググがちょうどリリアンの頭の位置まで落ちてきた所で力を解放させ、

「『スラッシュ』ッ…！」

【ズオッ！】

風さえも刃と化す強力な薙ぎ払いを放ち、アクアゲロググを両断するどころかバラバラにして吹き飛ばした。血ではなく水が舞い散り、空中で水へ分解されたアクアゲロググはリリアンから20メートルほど離れた位置へ落ち、アスファルトへ吸い込まれて消えていった。

「……私は……、」

ブウンと斧を振るい、その勢いのまま肩に柄を乗せたリリアンは咳く。

「あなた達程度では止められない。」

もはや返答することもない敵に、リリアンは感情を込めずに言い放った。

「……ほえ……。」

リリアンから離れた位置で、クルルは建物の壁に背をつけながら座り込んでリリアンの豪快な戦い方をポカーンと大口を開けて見ていた。斧の巨大さからすればその戦闘がどんなものかは想像できたが、ここまですごいとは思ってなかった。

この世界に来る前に一度戦ったが、あの時は接近を許さないように魔力弾で牽制しまくっていたからその戦い方を見ることはなかったが、今こうして初めて彼女の戦いっぷりを見た。まず接近されたら勝てる見込みがないかもしれない。

以前は敵として対峙していただけに、一瞬震えた。

そんなクルルの心境を知ってか知らずか、リリアンは斧を担いだままクルルへと走り寄ってきた。何故走っているのか。それはクルルが怪我をしているからだろう。

「……終わった……。」

「……あ、うん……お疲れ、リリアン。」

勝利報告をしにきたリリアンに、クルルは一応労いの言葉をかける。つっても全然疲れてる様子はないから意味ないけど。

だが何にせよ、目の前の問題は解決できた。これから喫茶店で雅達の無事を確認してから、龍二の下へ急がねばならない。時間の猶予はあまりないのだ。

「そうだ、早くリュウくんのもとに行かなきゃ……！」

壁に手をついて立ち上がるうとするクルル。足に痛みが走るが、今は痛みでどうこう言ってる暇はない。

「~~~~~っ！」

目に涙を浮かべて顔を顰め、意地と根性で立とうとするクルル。

「……手。」

そんなクルルを見てられなかったリリアンは、左手をクルルに差し伸べた。

「あ、ありがとう。」

クルルは素直にリリアンの左手を掴んで引っ張り上げてもらった。足に痛みが走るも、浮遊魔法を使って体を浮き上がらせることにより、地面から足を離して負担を減らす。

魔力の消費があるが、痛みを軽減するには今はこれしかない。

「ひとまず喫茶店へ……アルス達が心配。」

「そうだね。」

リリアンの提案に同意し、クルルは浮遊魔法で浮いたまま前進しようとする。だが、先ほどの戦闘の疲労のせいで、うまく制御できずに真っ直ぐ進むことができない。

「……うわわ……！」

「……………」

必死にコントロールしようとするクルルに、リリアンはフウとため息をつく。

（龍二も大変……。）

毎日こんな感じだとすれば、龍二の気苦労、推して知るべしである。まあ本人は割と楽しんでる節はあるが。

しかしリリアンはその危なっかしさに見てられず、また世話を焼くことになった。

「……私が引つ張るから……。」

「あう……何から何までありがと、リリアン。」

「【フルフル】」

首を横に振って気にしていないことを表明するリリアンの手に捕まり、大人しく率先されるクルル。これからまた一仕事があるというのに、先が思いやられる。

（龍二、本当に大変……だけど。）

クルルの手を引きながら、リリアンはガルファスを握る手に力を入れた。

（本当、あなたも世話をかける……。）

背後から、戦闘を終えたステイルとロウ兄弟の声が聞こえる中、一人で戦っているであろう龍二にリアンはため息をつき、決意した。

たまには自分達からも注意してやろう、と。

第六十九の話 奮戦（２）（後書き）

こちらではお久しぶりです、コロコロです。皆さん、まずはじめに私から一つ言わせてください。

まえがきでも言いましたが遅れてしまつてごめんなさい。

言い訳があるとすれば、大学のレポートや勉強など、色々忙しい中ちよこちよこ書いていつて今の状態。文体大分変わったなあつと自覚してます。

で、まあ言い訳するなというのであればはつきりと言います。

書くパワーが切れてました。ネタ切れとかそんなんじゃない。

で、今回書く意欲が久々にわいたんでレッツゴー！ して今もちよつとやばい。せめて、せめて今回のシリアス長編終わらせてからガス欠になりたいと思うのですが……ともかく、これからも頑張ります。更新遅すぎて読むのやめた方もいらっしやるでしょうけれど、何卒これからもよろしくお願いします。

…なんか堅いな……よし、脳味噌柔らかくするために、シリアス続きだしちよつと昔話でも載せるか。



そして私は何を書いているのでしょっ？



第一百七十の話 怒れる籠（前書き）

あとがきにお知らせ…もとい、宣言があります。お手数ですが、そちらもどろつかお目通し願います。

## 第七十の話 怒れる籠

（ライター視点）

夕日で赤く染まる渋谷。大勢の人々が働き、遊ぶ街。乱雑に並んだビル群が地上を見下ろすかのように聳え立ち、人の営みを見続けていた街。

その街は今、結界によって人の気配を感じることができないゴーストタウンへと変貌していた。

その原因を作り出した人物が一人、渋谷の中心地でもある109のスクランブル交差点の真ん中に立っていた。

夕日の光が、彼の影を伸ばす。彼、稲神虎次は目の前に聳え立つポロボロの109を見上げ、目を閉じていた。

「……命って、脆いなあ」

目を閉じたまま顔を若干上へ上げ、小さく呟く。

「刺され、斬られるだけじゃなく、殴っても死ぬし、落ちても死ぬし、潰されても死ぬ。時として精神的な何かに押しつぶされて死ぬ」

誰に言ってるのかもわからないまま、虎次はただ語る。

「考えてみりゃ、俺らの周りだって仰山死んでるわな？ 蟻とか羽虫とか……ただ軽く叩いたり踏んだりしただけで死ぬやんな」

何の感情も読み取れない声で。

「…人間も似たようなもんやなあ」

やがて顔を下ろし、顔を若干後ろへ向ける。

「日常の裏にはかならず死が潜んでる………そう言った人ってホンマ偉大やと思うわ」

ザリツ………砂利を擦る音が、虎次の背後から聞こえてきた。

「お前もそう思っつやる？ ……なあ、龍二」

体を向けず、顔も少し後ろへ向けている程度のまま、自分の遙か後ろに立つ者……龍二に話しかけた。

「……………」

話しかけられた龍二は、ただ無言のまま虎次の背中を見つめる。

龍二の姿は、服が所々破れてその箇所から肌が覗き見えていたり汚れが目立っているが、怪我らしい怪我は見当たらず、出血もしていない。

顔にも疲労は見え、目はしっかりと虎次を見据えている。その目に映るのは、怒りとも悲しみともつかない、睨んでいるわけでもな

い。ただ、じつと見つめているだけ。

「おいおい、懐かしい親友との再会やつちゅうのに何やその顔？  
もうちょい嬉しそうにしたらどないや？」

虎次は体を龍二に向け、にこやかに言う。

旧知の仲である者に対して向けるような顔に、敵意は感じられない。  
だが、場所が場所だけに、その顔はひどく不釣合いにも見える。

そもそも、この惨劇を生み出した人物がする表情とは思えない。

「……………」

龍二はなおも、表情を変えようとしない。鞘に収められた武器にも  
手を伸ばさず、構えも取らず、ただそこに立って虎次を見つめてい  
る。呼吸するために動いている胸以外、体全体の動きが止まってい  
た。

「…何や、だんまりかい。おもんないやつちやなあお前」

やれやれという風に肩を竦める虎次。呆れを含んだ物言いに、よう  
やく龍二は動きを見せた。

「…虎次」

「んあ？」

小さく。本当に小さく龍二は名前を呼ぶ。僅かに俯き、表情は見せ

ずに口だけしか見えない。

「…お前なんでこんなことしてんだ」

龍二は問う。何故こんな惨劇を作り出したのかということ。

何故彼が生きていて、何故何の力もなかったはずの彼が謎の力を使うのか、謎は尽きない。考えたところで全くわからない。

それでも、龍二はただ一つだけ知りたかった。龍二の知る虎次は、決してこのような状況を好むような性格ではないのだ。

一時、龍二はこいつは虎次の姿を真似た偽者だという憶測を立てた。それが一番しつくり来る。

だが、虎次の話し方、笑い方…過去に見てきた、虎次の雰囲気と合致している。時が経っていたとしても、全く変わらない虎次の動き、姿形。偽者でもここまでうまく真似ることができるとは思えない。

確証はない。だが龍二は彼が本物だと、なんとなくわかった。

だからわからない。人一倍、人助けに情熱を持っていた虎次が、人に危害を加えるような性格になっていることが。

「ん？　こんなこと？」

龍二の問いかけに、虎次は首を傾げる。中学時代、わからない時にいつもしていた仕草。

それが何故か、虎次が別世界の人間と思わせる。虎次は虎次だが、龍二の知っている虎次とは違うと思わせる…そんな仕草だった。

「ええと……ああ、なんでこんなんしたんかって話か？」  
「……………」

おどけるように言う虎次だが、龍二は全く表情を崩そうとしなかった。

「ん、そつやなあ。まあこんなんした理由を一言で言うとしたら」  
ポリポリと頭を掻きながら、虎次は言った。

「なんかムカついたから？」

「……………は？」

あまりにも呆気らかんとした答えに、龍二はここに来て初めて表情が崩れた。

そこに表れたのは、困惑。ここまでの惨劇を繰り広げておいて、その理由はただ単に腹が立ったから。

最初は言ってる意味がわからなかったが、徐々に頭が状況に追いついてきた。同時に、腹の底から不快な物がこみ上げてくるのを感じる。

「……………ムカついたから、だ？」

「うん、そつや」

改めて聞いても、虎次は無邪気に笑いながら返した。

本気で何も考えていない、あっさりとした態度。大勢の命を奪って  
おいて、多くの建物を破壊しておいて…………。

「…一応聞いておくけどよ…」

俯き、虎次に聞こえるか聞こえないかのような声で龍二は言う。

「…その、ム力つく理由つてのは…?」

「んー、どう言うたらいいんやるな?」

鼻を指で擦り、虎次は尚も笑顔のまま答えた。

「言い表しにくいんやけどさあ、ほら、世の中ってなんか悪い奴が  
得していい奴だけ損をする、とかいう、なんか腐ってるやん? 政  
治家とか? 腹立つやんああ言うの。そんで綺麗事抜かして自分は  
関係ないとか言い逃れするとか。それで苦しむのって弱い人らばっ  
かしやん」

そこで区切り、虎次はニツと笑う。イタズラ小僧のように、無邪気  
に。

「だからさ、いつそのこと俺が裁いたろうかなあって、さ?」

アハハと笑う虎次。言っていることは、正義感が強い理想家のような物。現実に憂いて、世を変えていこうとするのが夢だと言う子供のように。それは、中学時代に虎次が言っていた夢物語によく似ている。

ただ、龍二にとって正直ム力つく理由はそれではなかった。

本当の虎次なら、もっと他の方法でそれを実現するはずだった。無関係の人間を殺すこともしなかった。破壊を撒き散らすこともしなかった。

無闇に命を奪うとかいう、そんな綺麗事を言うつもりはない。

「<sup>キ</sup>……」

「んあ？」

龍二はただ、イラつく。虎次らしくないその言葉が。

龍二はただ、イラつく。虎次らしくないその考え方が。

龍二はただ、イラつく。虎次らしくないその“目”が。

だから、

【ズドンッ！】



殴る。

「…っけんなコラ」

一瞬。

龍二は、先ほどまで虎次がいた位置に、右の拳を突き出した状態で立っていた。突き出した拳からは、空気の摩擦によつて焦げ臭い煙が立ち上り、その拳の先には、崩壊して土煙が沸き起こっている、かつて何かを売っていたであろう店。

「裁いたろうかなあだあ？　おいおいおい、お笑い好きにも程があるだろうがお前」

口の端を歪め、龍二は笑う。虎次の笑い方とは打って変わり、相手を挑発するかのような不敵な笑い方。

「悪いけど、それ笑えねえぞデメエ…」

ゆっくりと、砂利の音をたてながら歩みを進めていく龍二。固く握られた拳は下ろされ、笑みは崩さないまま。

「俺を笑わせたいんならなあ…」

足を止め、虎次が埋まっているであろう店から少し離れた位置で立ち止まった龍二。



一部を崩壊させた。

「お返しやでえっと」

龍二が先ほどまで立っていた場所。そこには虎次は拳を突き出したままニコニコ笑いながら立っていた。

さっきの龍二との立場が逆転し、虎次は龍二が吹き飛んだビルの入り口を見る。

「悪いんやけどなあ。今の俺の言葉はマジメのマジメの、大マジメや」

【ガラッ…】

土煙に覆われたビルの入り口から、ゆっくりと影が起き上がる。瓦礫を押しつけ、影、龍二は、先ほどの攻撃のダメージなどなかったかのように、しっかりとした足取りで虎次がいる場所まで歩み寄る。

「俺はな、生まれ変わったんや。そんでこの新しい体で、この腐った世界を変えてやるんや」

俯いて表情がよく見えない龍二を見つめながら、虎次は語るのをやめない。互いの距離まで、あと数メートルある。

「…龍二。親友やったお前とはできれば戦いたくないねん。殺し合いないでしたくないんや。だからさ、前みたいに俺と組もうや。一緒に世界を変え」

【ズンツツ           !】

「……………ようとは……………思わへんようやな」

「……………当たり前だこの腐れ野郎」

虎次が言い切る前に龍二は瞬時に接近し、虎次の顔面に右拳を叩きつけようとした。が、それを虎次は左手で拳を包み込むように受け止めた。

その衝撃によつて、二人の周囲にあつた塵やゴミが吹き飛び、綺麗に清掃されたかのようになつた。

「テメエはぶつ飛ばす。そつから動くんじゃねえぞ」

「いやいやいや、それはさすがに…」

凄む龍二に、虎次は笑いながら右足を後ろへズラし、

「無理やるつっ!」

風を切るかのような鋭い蹴り上げが、龍二の顎を狙う。すんでのところ、龍二は飛び退いて距離を離し、髪の毛が僅かに切れるだけで済んだ。

お返しにと、龍二は右足で直蹴りを虎次目掛けて放つ。だが虎次はそれを右手でいなし、体を半回転させて左裏拳を繰り出す。蹴りを

いなされ、体勢を崩しかけていた龍二だったが、咄嗟に左腕を上げて直撃を防いだ。

パンツという音と共に鈍い痛みが腕を走り、龍二は顔を歪める。だが間髪いれず、姿勢を低くして踏み込みと同時に虎次の左脇腹に強烈な突きを叩き込んだ。

「づつ…！」

脇腹にモロに入った虎次は顔を苦痛に歪め、咄嗟に距離を離そうとする。だが、龍二は逃がさない。

「おらぁっ！」

「…！」

低い姿勢から、跳ね上げるように振り上げた左足の蹴りが虎次の腹を捉える。鈍い音がし、爪先が虎次の腹にめり込む。

痛みに呻く暇を与えまいと、続けざまに龍二は両手を組んで隙だらけになった虎次の後頭部に思い切り振り下ろした。

【ドゴンッ！！】

大砲の砲弾が命中したかのような音。虎次は顔面からアスファルトに叩きつけられ、アスファルトは粉々に碎け散って小規模なクレーターが完成された。

「トドメッ！」

龍二は右足を振り上げ、頭上の位置まで持っていく。そして勢いを

つけた踵落としを虎次の頭があるクレーターの中央に振り下ろそうとした。

【ガツ】

「なっ…!?!」

「そおりやあ!?!」

が、その踵落としは虎次の手が龍二のから空きの左足首を掴んだことで中断させられ、埋っていた虎次が立ち上がると同時に龍二の体も浮き上がる。

「よっど!?!」

【ドオン!】

足首を掴んだまま、虎次は自身の背後のアスファルトに龍二をハンマーのように豪快に叩きつけ、アスファルトを砕いた。

「ぐっ…!」

顔からアスファルトに叩きつけられて呻く龍二。だが虎次は容赦なく、再び龍二を掴んだまま振り上げる。

「もいつちよお！」

【ドオン！】

「がつつ！！！！」

同じ箇所叩きつけられた龍二は、体のダメージを軽減する暇もなく、またもアスファルトの中に顔を埋められる。体全体に襲い掛かる、尋常ではない痛み。頭部の皮膚が裂け、アスファルトに血が飛び散った。

「三度めやあああつ！！！」

またも虎次は龍二を振り上げ、先ほどの攻撃よりさらに強い叩きつけをお見舞いしようと力を込め、三度振り下ろした。

が、地面に直撃する寸前、龍二は両手を地面に着け、体を捻った。

「んなあつ！？」

「ふんっ！！！！」

足首をしっかり掴んだままだった虎次は、腕を軸にして独楽のように回転して虎次をぶん回した。

凄まじい遠心力に逆らえず、虎次は龍二から手を離して吹き飛ばされる。アスファルトの地面に何度も体をぶつけながらバウンドし、最終的に電柱に背中を打ちつけてようやく停止した。

虎次を受けた電柱は根元からバッキリ折れ、ゆっくりと電線を引き

ながら倒れていった。

「あつたたたた……相変わらず無茶苦茶な動きしよるのお前は」  
「………ダメエこそ、やけに強くなつてんじゃねえか………つう」

後頭部を擦りながら立ち上がる虎次と、仰向けの状態から腕をバネにして飛び上がって立つ龍二。立った瞬間、出血した頭を抑える。

双方とも互角。ダメージも同じ。先ほどより瓦礫が散らばり、さらに荒れて地形が変化した周囲。その真ん中に立つ、龍二と虎次。

「………ちよつと痛いけど、まあ別に大丈夫やな……仕切りなおしや」  
「………今度は速攻だ」

龍二は両手を交差させ、腰に収まった龍刃とエルスの柄を握る。

『……リユウジ……大丈夫なのか？』  
「大丈夫に決まつてんだろ。黙つてろ」

エルスが不安げに声をかけるも、龍二は素っ気無く返す。今までにここまで龍二が感情的になり、ボロボロになるまで痛めつけられたところを見たことがなかったエルスは、言いよつた無いらしい不安を感じていた。

だが、マスターであるリユウジが大丈夫と言っているのだ。今は歯痒くとも従うしかなかった。

「へえ、それがお前の武器か……ほんなら」

虎次は感心したかのように呟いた後、右手を前方の虚空に伸ばす。



やがて虚空が歪み、そこから白い冷気が漏れ出てくる。歪んだ空間に手を思い切り肩辺りまで突っ込み、そうしてゆっくりと手を引いていく。

まず現れたのは、虎次の腕に巻きついた灰色の無骨な鎖。幾重にも巻かれた鎖の次は、手に握られた青白い柄。柄頭のリングには、腕に巻かれた鎖が繋がれている。

そして、虎次が最後に勢いよく引き抜くと、頭一つ分大きいであろう、切っ先鋭い片刃の大剣が姿を現した。

「俺は、こいつを使うでえ？」

「……………」

自分よりも巨大な武器を軽々と持ち上げる虎次を見て、龍二は表情こそ変えていないものの、内心ではかなり驚いていた。

先ほどの戦いもそうだ。虎次にあんなアスファルトを砕く力なんてものはない。そもそも、この渋谷を壊滅状態に追いやったということと自体がありえないはず。

極めつけは、目の前で何も無い空間から剣を抜き取りだしたその術……………どう考えても異常だった。

だが、今はそんなのは関係ない。

(ぶっ倒して、事情を話してもらっしかないか…)

「すううう……………はああ……………」

目を閉じて息を大きく吸い、そして大きく息を吐いて深呼吸をし、龍二は龍刃とエルを同時に鞘から金属音をたてながら引き抜いた。



## 第一百七十の話 怒れる籠（後書き）

謝罪する前に、これより私コロコロは宣言いたします。

今年中に！ この長編を終わらせると！！！！

… もっと早く宣言しときゃよかったと後悔しました。

そもそも下書きもキチンと書かずにいたせいで、こんな長期間放置という形となってしまうたんですね。ハイ。だからこれ以上長期連載停止という体たらくにならないよう、今年中に絶対終わらせませす。卒論あつても終わらせませす。そして元のコメディ―と二次に集中します。

では皆様、今回もまた長期の連載停止、申し訳ありませんでした。ではこれにて。

## 第七十一話 血に沈む（前書き）

長らく更新しなかったせい、文章が変化しています。ご了承ください。

## 第七十一話 血に沈む

（ライター視点）

「うおおおおおおおおお！！！！」

叫び、両手の剣を振りかざしながら虎次に切りかかる龍二。虎次はそれを迎え撃つため、大剣を右へ大きく振りかぶる。

「どりやあああああ！！！！！」

龍二が自らの得物の射程内に入ったのを見計らい、虎次は振りかぶった大剣を豪快に振るう。だが、龍二は大剣の刃が体に触れる寸前に飛び上がり、自分が立っていた場所を通り過ぎた大剣の刃を軽く踏んでさらに跳躍し、虎次の背後へ飛ぶ。

「ぬうん！」

「つと！」

虎次の頭上を通り過ぎる瞬間、体を回転させて虎次のがら空きになった背中に龍刃を叩き込もうとするも、虎次は大剣を振り上げ、大剣を背中に背負うようにしてその刃を弾く。攻撃に失敗した龍二は着地し、体を捻って二刀を振るう。

「はあああつ！！！」

呼気と共に薙ぎ払われる二刀。それを払う虎次だったが、龍二の猛攻は止まらない。龍刃を薙ぎ、エルで突く。ありとあらゆる攻撃を

繰り出し、虎次を攻める。それら全てを大剣で防ぐが、虎次は反撃  
することができない。

否、龍二自身が虎次の反撃を許さない。

二人の間で繰り広げられる剣戟。二人を中心に広がっていく破壊。  
互いの剣が振るわれるたび、アスファルトは抉られ、ビルは瓦礫へ  
と変貌する。衝撃波がぶつかり、瓦礫がはるか彼方へと吹き飛ばさ  
れていく。

「うらあっ！！！」

研ぎ澄まされた龍刃の刃が、虎次の頭部を叩き割らんと大上段から  
振り下ろされる。大剣を振り上げ、刃同士をぶつけることで虎次は  
防いだ。

ぶつかった刃から火花が飛び散ったその瞬間、爆音のような衝撃が  
空間を走り、渋谷中の建物の損傷を免れたガラスが割れ、砕け散っ  
た。

「こおんのお……………！」

衝撃によって一瞬だけ硬直した龍二を見逃さなかった虎次は、龍二  
の腹に蹴りを入れ、龍二を吹き飛ばして鏢迫り状態から抜け出た。

「お返しじゃあ！！！」

大剣を大きく振り上げ、柄から手を離す。柄頭に繋がれた鎖を揺ら  
し、大剣は宙へと舞い上がっていく。

【ガギィッ】

やがて大剣が2mの高さまで飛び上がった頃、鎖の限界が訪れ、たゆんでいた鎖の連結部分が伸び、直線状に張った。

「おんどりやあああああ！！！！！」  
「……………！！！」

そのまま振り下ろし、一本の棒となった鎖と重量のある大剣が風を切りつつ龍二へと迫る。直撃すれば確実に死に至らしめるであろう凶刃を龍二は受けようとはせず、横へ飛んで回避する。

【ズオオオオンッ！】

獲物を逃した大剣と鎖は、アスファルトを砕き、土煙を巻き上げてナイフのような鋭利な破片を周辺へ撒き散らす。直撃こそしなかったものの、砕け散ったアスファルトの欠片が龍二へと襲い掛かった。

「チィッ…！！」

腕で顔を覆い、急所を庇う龍二。咄嗟に張った龍鉄風では完全には防ぎきれず、腕は切り刻まれ、服も破れるも、幸い大きなダメージにはならなかった。

「そおらよつとおい！！！！！！」

続けざまに、虎次は鎖で繋がれた腕を右へと振るう。張っていた鎖は腕の動きと連動し湾曲になり、煙の中に隠れていた大剣が再び龍二を追う。

「やるっ！」

【ガインッ！】

エルを振るい、大剣を頭上へ弾き飛ばした龍二だったが、想像以上の衝撃によってエルを持った左手が痺れ、思わずエルを手放しそうになる。それをどうにか堪え、第三波の攻撃が来ないうちに再び虎次に迫る。

直後、背中に鋭い痛みが走った。

「つつっ！！！！」

焼け付くかのような、しかし次の瞬間には想像を絶する冷たさが龍二の背中から全身へと回る。足がもつれ、前に倒れ込むものの、咄嗟に受身を取って転倒を防いだ。

膝を着いた龍二の頭上を、白い物体……：虎次の得物である大剣が、風を切って鎖と共に持ち主の下へ戻っていく。鎖は、まるで意思があるかのように蛇のような変則的な動きをしつつ、虎次の腕に再び巻かれていった。



(クソツ、油断した：！)

虎次の持つ大剣に付けられた鎖によって、さながら鞭のように変幻自在に動き回る特性を垣間見た龍二は、背中の痛みを気合で和らげ、立ち上がる。

背中がどのような状態になっているかまでは確認できないが、龍鉄風のおかげで背中の傷は痕にはならないだろう。しかし、大きなダメージを受けたことには変わりなく、大幅に体力を削られてしまった。

「フツフフ、どやこの攻撃！ 見切れんやる！！」

得意げに笑う虎次。息を整え、龍二は構えた。

「…抜かせボケ虎次が。剣投げつけただけでいい気になってんじゃねえ」

フン、と鼻で笑い、皮肉を投げつける。それでも笑顔を崩そうとしない虎次は、大剣を肩に担いだ。

「さすが龍二。背中ばっさりいかれても平気か」

「あつたりめえだ。俺を誰だと思ってんだ」

「…それもそうやな」

龍二の強気な言葉を受け、虎次は小さく頷いて納得した。が、言っている龍二本人は、先ほどの傷によるダメージが大きいせいで若干苦しそくに息を吐き、顔を顰める。

「でもやっぱキツイみたいやな」

「…やかましい」

見抜かれ、さつきとは違う意味で顔を歪める龍二。  
身体が頑丈を通りこして無敵といっても過言ではない龍二の身体を、  
龍鉄風込みで傷つけた虎次の大剣。どうやって取り出したのかとい  
うのがわかっているだけに、ただの剣でないことは明らかではある  
が、龍鉄風があまり意味がないとなると、もう少し慎重になるべき  
だろう。

「んじゃ、もっかい行かせてもらおうと……」

肩に担ぎ上げた大剣を持ち上げた虎次は、

「しますかねえつと！！！」

自らの体を右に回転させ、遠心力を乗せた大剣を投げつけた。  
ブオン、と凶悪な音をたて、虎次の腕から伸びた鎖がしなり、その  
鎖に繋がれた凶悪な刃が猛スピードで龍二に迫る。

「ふっ！」

それを龍二は弾くということはず、膝を曲げて身を低くしたこと  
で避ける。だが、大剣は逃した獲物を逃がすまいと、今度は虎次の  
頭上から龍二の頭を狙う。

「ほっ！」

その叩きつけも、右へと転がることで回避し、アスファルトに叩き

込まれた大剣の衝撃波も耐えることで凌いだ。

「まだまだあ!!!」

腕を引き、再び薙ぎ払わんと虎次は右腕の筋肉を膨らませる。

【ガチッ】

「…あり？」

が、腕を引くと同時に鎖が伸びきり、そのまま動かなくなった。振るわれるはずだった大剣が接着剤で固定されてしまったかのように硬直してしまい、腕を引いても鎖はピンと張るばかり。

「…そう何度もなあ…」

「げっ…！」

動かなくなった原因がわかった瞬間、虎次は焦って呻く。

虎次の腕に繋がれた鎖の先、アスファルトに埋もれた大剣の柄を、龍二が踏みつけてしっかりと固定していた。かなりの力を加えられているためか、大剣はさらに地面に埋っけていき、何度引いてもビクともしない。

「同じ手が…」

大剣を踏んだまま、龍二は両手に持った剣を交差させ、頭上に掲げ、体も大きく逸らす。

「通じるか………よっ……！」

【ゴウツ！】

体を元に戻す勢いと豪腕による交差された斬撃が、大地を削りながら音速で虎次に迫る。恐ろしいスピードで襲い掛かるその攻撃に、虎次は逃れようとするも鎖は龍二が握っているような状態で動けない。

「しまっ……おっっ……！」

防御する間もなく、虎次の胸を龍一の斬撃がX字に切り裂き、血が飛び散る。

負傷した虎次に、龍二は追撃を与える。

「そのまま動くな……！」

エルの切っ先を持ち上げ、虎次に向ける。エルのコアに雷を溜めていくと、刃が放電を始めた。

「『レールガン』……！！！」

龍二とエルの声が重なり、細身の刃から白光が溢れ、極太の光線となって放たれた。勢いが強すぎたためか、エルの刀身が大砲を撃つた時のように跳ね上がる。

「だあああああつ！！！？？」

放電する光線に飲み込まれた虎次の絶叫は、着弾による爆発の轟音によって掻き消された。

立ち上る黒煙と、降り注ぐ瓦礫やその破片、そして周囲の建築物が吹き飛ばされたおかげで先ほどよりも広くなった交差点。エルに込められたエネルギーの膨大さが伝わってくる光景であった。

『やったか…？』

「……………」

爆風によって乱れた髪と服を整えることもなく、光線の着弾地点から立ち上る黒煙を注意深く見つめる龍二とエル。今の魔法は自らの魔力を一点に集中させたものであり、エルの中ではかなり高い威力を誇っており、大抵の敵は跡形も無く消えうせる程。

「……………いんや」

だが、龍二は首を横に振る。

「まだみてえだ」

「あいたたた…えげつない技使うなあ」

黒煙が晴れ、爆発によってできたクレーター。その中央に、虎次は立っていた。

さすがに完全無傷とはいかず、服のところどころが焦げ、頭からは血が流れ出ている。しかし、しっかり足で立っているのを見る限り、致命傷ではない様子だった。

「なっ……………バカな、直撃だったはず…！」

「…さつきからさんざん殺り合ってたんだ。この程度でぶっ倒れるとは思えんな」

エルの姿が人であったならば、開いた口が塞がらないといった表情をしているであろう。驚愕に満ちた声を上げるエルに、龍二はいたって冷静に分析していた。

(……………なら、もう一回ぶつけるだけだ…)

エルの切っ先を虎次に向け、再び『レールガン』を放つために充電させる。すぐさま刃が放電を始め、龍二の周りに風が巻き始めた。

「いやいや、さっすが龍二や。今のは危なかったでえ。熱かったし痛かったし、マジで勘弁して欲しいわ」

「いっそそのままぶっ飛んでくれたらよかったんだが……………性格変わっても頑丈さは変わんねえか」

相も変わらず笑う虎次に、龍二は皮肉を投げつける。その間でも、しっかりと足で大剣を押さえつけ、身動きをとれなくさせるのを忘れてはいない。

「まあ頑丈なんが俺の取り得みたいなものやからなあ……………それよりも」

笑顔のまま、虎次は鎖を手繰り寄せていく。その鎖の先にある大剣は龍二が踏みつけているせいで戻ってこず、先ほどと同じように弦のように張るだけ。

「俺の剣、ずーっと踏みつけといてええんかなあ？」

「…なに？」

虎次が取ろうとしている行動が読めず、龍二は警戒する。確かに今、虎次の大剣を押さえつけているおかげで、繋がれている虎次は身動きが取れないでいる。だからこうして遠距離で仕留めんとしている。

が、一瞬嫌な予感を龍二は感じた。

『…っ！ リユウジ、逃げるー！』

エルも不吉な予感を感じ、叫ぶ。そして虎次は、鎖を握った手を大きく振り上げた。

「遅いわ…こんのお…」

「やべっ！」

咄嗟に大剣から足を離し、龍二はその場から飛び退いたと同時に、虎次は渾身の力を込めて鎖を振り下ろす！

「まぬけえー！！」

鎖を持った手で、アスファルトを殴りつける虎次。殴りつけたアスファルトは砕け、小さなクレーターができる。

【ギィン…ッ】

瞬間、龍二が立っていた地点、正確には虎次の大剣が埋もれた地点  
一帯が一瞬で白く変色する。アスファルト、瓦礫、車、電柱、そし  
てビル。全ての物体に霜が張り付き、気温が一気に下がった。

「ふん！！」

【ボゴンッ】

鎖を引くと、埋もれていた大剣がアスファルトから飛び出し、虎次  
の下へと帰っていく。鎖が腕に巻かれ、戻ってきた大剣の柄を受け  
止めた虎次は、大剣の刃をアスファルトに突き刺した。

「ふうん、避けるとはなあ…お見事」

腕を組み、先ほどとは違うニヤツとした笑みを浮かべる虎次。その  
視線の先には、氷結攻撃を避けるために、範囲外まで下がった龍二  
が膝を着いていた。

『危なかったな龍二』

「ああ……………油断していた」

立ち上がり、危機から逃れたことでひとまず安堵のため息をつく龍  
二。

ふと、渋谷がこうなる直前に虎次が水を操る力を使って街を破壊し  
ていたのを思い出す。先ほどの攻撃は、恐らく地中にあった水分を  
あの大剣を媒介にして一瞬で凍らせたのだろうと思われる。



だが、やはり疑念は拭えない。

(何であんな攻撃をあいづが…?)

先ほどエルを通して感じた魔力。強大で、それでいて禍々しい力。恐らく、こうして虎次が目の前にいることと何か関係しているものだろうが。

『油断するなりユウジ。あいつは想像以上だ』

「…ああ、わあって」

る、と龍二が言いかけた。

「じゃそろそろ本気で行くでー？」

「…！」

背後から聞こえてきた馴染みのある声に、龍二は身を捻って龍刃を突き出した。

【ズドッ！！】

「ぐあっ…！」

(速え…！)

出鱈目に突き出した龍刃は迫っていた虎次の頬をかすっただけに留

まり、結果として懐に潜り込んだ虎次の拳を脇腹に受ける羽目となった龍二は、無理矢理身を捻ってバランスの悪い姿勢で振り向いたために踏ん張ることができず、吹き飛ばされる。

野球選手の投げたボールのように飛ばされた龍二に、標識のように地面に突き刺さった虎次の大剣が迫る。大剣が当たる直前、またもや瞬間移動したかのように姿を現した虎次は、大剣の柄を握った。

「どっこいしょー!!」

【ガイーンッ!!】

「……………っ!!」

引き抜くと同時に音速を超える速度で振り上げられた大剣を、龍二は何とか龍刃とエルを交差させて防ぎ、今度は上空へと舞い上がっていく。

「トドメのお…!!」

それを逃さず、虎次は大剣を龍二目掛けて投げつける。が、大剣本体は龍二に命中することはなく、大剣が龍二の周りを回り、柄に繋がれた鎖が龍二の体に巻き付いていく。

「投げ飛ばしじやあああああっ!!」

【ズウウンッ!!】

「がはっ！」

縛られた状態で、凍りついたビルの二階の壁に背中から叩きつけられる龍二。凍り付いて飴細工のように脆くなつた壁を突き破り、そのままビルの中へ土煙を巻き上げながら激突する。建物だけでなく中までも凍り付いていたらしく、軽く触れただけでコンクリートの壁や仕事用のデスクといった備品が次々と破壊されていく。

ビルの壁にめり込んだ龍二から鎖が解け、大剣と一緒に外にいる虎次の下へと戻っていく。

『リュウジ、しっかりしろ！ リュウジッ！！！』

「言われんでも、しっかりするっての………あんま耳元で叫ぶな工ル」

壁から抜け出し、龍刃を床に刺して杖代わりにして立ち上がった龍二だが、脇腹を抑えて苦悶に顔を歪める。

(…龍鉄風を纏っていてこの様か…)

脇腹から走る激痛に、龍二は自嘲する。

正直、今の虎次の力を甘く見ていた。あの距離から自分の背後に移動するとは思わず、それでいて完全防備のはずの龍鉄風が全く意味を成していない。

つまり、“本気”を出さねば確実に死ぬ。

『リユウジ、貴様まだ…』

「……少し黙っているエル」

『しかし、このままでは…！』

龍二の気持ちを悟ったエルは、突っぱねる龍二に食い下がる。エルが言い終える前に、龍二はエルを振り上げた。

『リユウジ…？』

「…すまん」

龍二はエルを割れた窓目掛け、投げ飛ばした。

【ドゴオオオツ…！】

『リユウジイイイイツ…！！』

エルがビルの窓から飛び出した直後、龍二の足元の床が割れ、そこから虎次が大剣を突き出したまま飛び上がった。凶刃が自身の体を貫く寸前、龍刃で防御体勢を取り、刃同士がぶつかって火花が散った。

「ぐっ…！」

「まだ終わらんでえ龍二！ もっともっと楽しもうやないかあああ  
！！！」

虎次の大剣は、龍刃ごと龍二を突き上げ、天井目掛けて飛ばす。六階建てであったビルの天井、床を次々と突き抜け、勢いが衰えることなく飛んでいく龍二。ついには、ビルの屋上さえも突破し、遙か上空にまで飛ばされた。

「ちいつ…！」

舌打ちし、口から血の混じった唾を吐き捨てる。上昇が止まり、重力に従って渋谷全体が見渡せるまでの高度から落下し始める。だが、飛び上がってきたビルから粉塵が舞ったかと思うと、何かがそこから飛び出してきた。

その正体は、さながらロケットの如き勢いで迫りくる虎次。

「どらっしやあああああ！！！！」

龍二の眼前まで来た虎次は、大剣を薙ぐ。その斬撃を弾くと、落下していた体が僅かばかり浮き上がった。

「舐めんなあああああっ！！！！」

仕返しにと、龍刃を袈裟懸けに振るい、虎次は逆袈裟で迎え撃つ。宙に浮いているせいで、回避行動が取れずに防御を取るしかない攻防。ギリギリ当たる寸前を防ぎ、弾き、そして返す刀で切りつける。二人の持つ刃がぶつかる度に散る火花と、防ぎきれずに掠り、火花と同じように飛び散る血液。すでに二人の服はズタズタに切り裂かれ、そこから見えるのは肌色ではなく血による赤。銀色の剣閃が、相手の命を刈り取らんと何度も閃く。

「うおおおおおおおっ！！！」  
「らあああああああっ！！！」

獣のような雄叫びを上げる二人と、振るわれる刃の攻防によって途切れることのない金属音。その間にも落下は続いており、眼下の渋谷の街が徐々に近づいてくる。

そして、二人が飛び出したビルに落ちる寸前、龍二と虎次は同時に剣を突き出した。

【ズウウウウ…ン】

轟音。周囲を揺らがす程の強い衝撃。虎次の氷結によって脆くなっていたビルは、その衝撃が全体に走ったことで耐え切れずに、一部の壁がガラス細工のように砕け散っていく。ついには完全に倒壊していき、ビルは瓦礫となって煙の中へと消えていった。

二人がビルに落下し、数分が経過した。風が止まっているせいでいまだ煙は完全には晴れず、倒壊したビルから動く気配がない。音一つさえしなくなっていた。

が、次の瞬間には煙から影が飛び出し、戦いによってボロボロになったアスファルトの上に落ち、転がっていく。ようやく止まった時、それはうつ伏せのままピクリとも動かなくなった。

ポロポロになった衣服から流れ出てくる血と頭部からの血によって、少しずつ血溜まりが広がっていく中、ビルの瓦礫から崩れる音がし、ゆったりとした動作で立ち上がった影が煙から出てきた。

「なんや、もう終わりかいな？ 案外呆気なかったなあ」

服も体もポロポロの状態であるはずなのに、疲れた表情を見せない  
虎次。

拍子抜けしたかのような言葉の後、空から降ってきた日本刀が、倒れた龍二の脇の横に落ち、突き刺さった。

## 第一百七十一の話 血に沈む（後書き）

龍二、ズタボロ状態。先の読めない展開というのは、実は結構考えるの難しいんですね。今回でそれがよくわかりました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7837c/>

---

勇者以上魔王以上

2011年10月1日07時56分発行